神宮司廳藏版

兵事部一

古事類苑

古事類苑刊行會

古事類苑

兵事部第一册目錄

古事類苑

兵事部一

兵法

古事類苑

兵事部一

兵法

兵法トハ、戰鬪ニ關スル諸般ノ法ヲ云フ、後世專ラ劍術ノ事ニノミ云フハ誤レリ、天智天皇ノ十年ニ、達率谷那晉首、木素貴子、憶禮福留、答㶱春初等ガ兵法ニ閑ヘルヲ以テ、之ニ位階ヲ授ケ給ヒシ事アリ、持統天皇ノ朝ニハ陣法博士ノ稱アリ、後世ノ謂ユル軍學者ニシテ、兵法ニ熟達セルモノナリ、淳仁天皇ノ朝ニハ吉備眞備アリ、亦兵法ニ精通セリ、降リテ源義家ハ、大江匡房ニ就キテ兵法ヲ學ビ、源義經楠木正成ノ如キモ亦兵法ニ通ゼシカバ、後世之ヲ祖述シテ、義經流、楠流等ノ兵法ト稱フルモノアリ、而シテ德川氏ノ初世、兵法ヲ以テ名アリシハ、小幡景憲ニシテ、武田信玄、山本晴幸等ノ兵法ヲ傳ヘテ其徒ニ授ク、是ヲ甲州流ト爲ス、景憲ノ門人ニ北條氏長アリ、是ヲ北條流ト云ヒ、氏長ノ門人ニ山鹿高祐アリ、是ヲ山鹿流ト云フ、又長沼宗敬アリ、甲州流ノ兵法ヲ以テ當時ノ眞傳ニアラズト爲シ、內外古今ノ兵法ヲ參酌シテ、別ニ一家ヲ成セリ、是ヲ長沼流ト云フ、其他越後流、信州流、香西流等ノ兵法アリ、蓋此時兵學甚盛ニシテ、軍學者又ハ儒者等ノ、書ヲ著シテ兵ヲ說クモノ多ク、中ニ就キテ香西成資ノ兵術文稿、長沼宗敬ノ兵要錄、荻生徂徠ノ鈐錄等ハ大ニ世ニ行ハレタリ、其他林子平ハ海國兵談ヲ著シテ、盛ニ海防ノ事ヲ說キ、鈴木春山ハ三兵活法ヲ著シテ、大ニ西洋ノ兵制ヲ論ジタリ、

名稱

〔下學集 態藝 下〕兵法(ヘイハウ)

〔吾妻鏡 四〕元曆二年二月十六日庚午、關東軍兵、爲追討平氏、赴讃岐國、廷尉義經、爲先陣、今日酉剋解纜、大藏卿泰經朝臣、稱可見彼行粧、自昨日到廷尉旅館、而卿諫云、泰經雖不知兵。法。、推量之處、爲大將軍者、未必競一陣歟、先可被遣次將哉者、廷尉云、殊有存念、於一陣欲棄命云云、則以進發、尤可謂精兵歟、

〔武家名目抄 術藝 五〕兵法　按、兵法といふは、武道といふにおなじことにて、吾妻鏡などにみえたる、皆玄かなり、さるを後世刀劒の一術をさして兵法といふは、この本文〇太平記などをあしう心得ていひなれ來れるにや、

〔太平記 二十九〕將軍上洛事附阿保秋山河原軍事
是ハ清和源氏ノ後胤ニ秋山新藏人光政ト申者ニテ候、〇中略幼稚ノ昔ヨリ長年ノ今ニ至マデ、兵。法。ヲ翫ビ嗜ム事隙ナシ、但黃石公子房ニ授シ所ハ、天下ノ爲ニシテ匹夫ノ勇ニ非ザレバ、吾未學、鞍馬ノ奧僧正ガ谷ニテ、愛宕、高雄ノ天狗共ガ、九郎判官義經ニ授シ所ノ兵法ニ於テハ、光政是ヲ不殘傳得タル所ナリ、〇下略

〔甲陽軍鑑 十五品第四十一〕夫軍。法。(ぐんぽう)は兵法(へいはう)也、其いはれは、陣なき時、武士かけむかひの勝負をば、斬合或はしあひと申、此勝負にうたがひなく勝ことをよく習學て、是をよく手に熟して、じかうして後勝負を決て、度々の勝利を得て我名をとつて、人にも是をおしゆるを能兵法仁と名付、就中國持給ふ大將の、自國他國をあらそひ、せりあひ合戰、又は城せめなど、いふ勝負をば、これ軍。陣。(ぐんぢん)と申す、其軍陣にをひて、よは敵、少敵、大敵、強敵、破敵、隨敵、もろ〳〵の敵うちあはせ、武略、智略、計策をよくして、定て能勝利をうる事を能軍法と云、然るに武略のもとは自國諸の城取をよくかまへ、陣取をよく取しき備をよくたてまふくる事、大形は先是武略のもとなり、さて智略はよき大將有

てみだる、敵を眞にあてがひ、大將なくてみだる、敵を味方も亂てあてがひ、大將ありて眞なる敵は味方みだれて億意眞にあてがひ、大將なくて眞なるをば、位をもつてこれをつめ、敵をそそりたて、はたらく敵を見合、はんとをうち、かまりをもつてころし隨へ、或は敵の内に歸伏の侍をまねぎ、或は味方に謀ある勇士を近付、敵國へさしつかひ、其行を能き、とりて其敵を全亡す事、是先大形智略のもとなり、又計策は出家、町人、百姓などの才覺あるものを、常に恩をあたへて後、敵國へつかひ、敵の大將才智なくして好事を過し、萬民までもうとむ所を聞つくろひ、敵國をさだ、せ其國をせめ、又は敵の内に邪欲の者をき、きはめ、引物色々をもつて其敵をしたがふる事、大形是計策の元也、右の武略、智略、計策三ッの作法其すべを知て、是を謀て勝利をうることわざを指て能軍法と申す、

〔鈴林日知錄一〕軍法　本邦の軍法は、日本記三巻によるに、神武天皇日向國より起り給ひし時に權與す、されば皇代の簡素なりし頃より、既に其警を忽にせざりしは想ひ知るべし、故に曩昔遣唐留學の制行はれし頃、其徒の携へ歸りし兵書も傳來多かりしことは、藤原佐世が日本見在書目錄に、著錄するを見て知るべし、當時縉紳の徒、經世をもて己が任とせしもの少からざりしなれば、志ある人おの〳〵書寫儲藏せしなるべし、延喜天曆の盛時を經て後は、風俗日々に降り、朝廷の政事も或は是を婦女子に委ぬるに至りたれば、兵書等は、是を高閣に束ねしも宜にして、後世に及ては傳ることを聞かず、其寥々として僅に存するものは、韜略二三家に過ぎずして、梁武帝軍勝のごとき、長享の頃までは、傳はりし證あれど、其後は讀むものなく、遂に亡佚せしと知らる、○中略本朝の著述にては、軍防令等の外、させる兵書あることを聞かず、其たま〳〵一二種存するも、亦後世の僞作にして、信ずるにたらざるは固りなり、保元平治の後は、武辨の士自ら其身に試み心に得る所あるにより、遠く紙上に求る暇あらざりし故にや、兵書講究等のことは、絶て聞ざ

る所なり、軍器とても、其頃は、弓刀鎗等に過ざりしが、世隔り蠻夷より砲器渡り來るに及ては、軍陣の備もまた一變せり、初め傳ふる所の器は、小僞なる所、謂鳥銃種が島なるものにして、其後漸く大砲傳來せしことは別にいふべし、今太平盛時干戈用なしといへども、もし海寇防禦の擧あらんには、彼は固より大砲をもて施すべければ、我も亦其備をなし當るべき器械をもて禦ぐにあらざれば、勝を取る事あるべからず、さりとて、本邦古來の軍法を棄て、一途に蠻夷の術に泥むは、たゞに國體を失ふのみにあらず、益なくして損あるべし、たゞひとへに古今彼此の宜きを斟酌し、報國赤心の四字を守り、諸人をの〳〵力の及ぶ所を盡さば、などか辱めを得るには至るまじきなり、

〔安齋隨筆前編十一〕軍法兵法　軍法と云ハ、軍中にて諸の士卒を治る法度法式の定め也、兵法と云ハ、兵士の組合せやう、鳴り物の相圖の定、坐作進退の法式也、後代甲州流、謙信流など﹅いふを軍法と云ハ誤也、軍術とも云べし、又劒術の事を兵法と云も誤也、劒術とも刀術とも云べし、兵法と云べからず、

〔集義外書九脫論六〕問、善戰者は重き罪人なりといへり、然ば今の軍法者は非なるか、云、是又いふにたらず、〇中略信玄、景虎は坂東の名將也、毛利元就は、兩將よりも大にすぐれたり、大勇にして寬仁なり、軍法は義經、正成の遺風あり、其跡大にして、近代の及所にあらず、故に人丟らず、〇中略問、或は唐の諸葛孔明流、源義經、楠正成流など﹅いひ傳るはいかゞ、云、孔明流とて、立たる軍法はなし、名をかりたるばかり也、其流ありとても、跡のみ也、今の時處位には不合、義經流、正成流といふは、猶以名將の上手をせし其跡をいへり、今の人の位にはかなはず、なま兵法大疵の本となるべし、

〔豫章記〕通信〇中略貞應二年癸未五月十九日逝去、〇中略舍弟河野五郎通經ト號ス、源九郎大夫判官義經ノ烏帽子子トシテ、經ノ字ヲ被出、武藝ノ器量勝レタル故ニ、甲胄五郎ト被稱、義經兵書一流相

傳、本ヨリ家ノ兵法ヲモ存知ノ上、義經流傳授セラル、

〔玉露證話十四〕軍法兵道之次第

一楠正成の軍法師傳は何方よりと新田義貞問ひし時、判官義經よりと答へらる、正成の座興聞もなれずと義貞申されければ、左にあらず、義經の軍法を考ふるに、尼崎より八嶋へ難風に出船して、八嶋にての軍の始終言語に不及、是を以て事々に心を付、工夫いたし、萬事に付て心を通じ軍法とすと云へり、義貞曰尤也、然しながら貴殿の軍法中々義經は不及と答ふ、正成曰、義經は八嶋合戰の時は廿四五と存ず、我は今四拾に至ての軍法なり、義經年重りなば如何樣の手立にも及ばんか、然れば吾不及事決して也と答ゑしとかや、

〔集義和書義論之四十一〕問、義經正成軍法いづれかまさり侍るや、　云、正成も義經にならふといへり、是心を義經に取て、時處位に應せし人也、楠の時と今とは、世中の時勢大にかはれり、正成の上手をはたらきし跡を似せて、將の器量もなく、勝負の利もゑらずば、大負をすべし、　問、甲州流、越後流、信州流など、申侍るは如何、　云、三家の中にて將のすぐれたるは景虎なり、功者は信州、甲州に有と見えたり、ゑかれども近代の軍法は、せり合の手行なり、小事を知にはよかるべし、義經、正成、義貞の後は、實の合戰はなし、武道の衰ろへたる故なり、

〔同志茶話六〕近世兵法の辯論をなすもの多しといへども、其理至當ならず、是兵法の本意にうときゆへ也、集義和書の説をあげて、童蒙のためにいさゝか辨をなす、〇中略

按るに、〇中略正成公の義經公に習とは、太平記評判の說也、評判は僞書にして、信用にたらず、義經公今古無之名將にして、平家を亡し、天皇の宸襟をやすめ奉り、父祖の耻を清め給ふ、後世是を稱美せざるはなし、正成公猶更稱美し給ふならん、其兵法を學び給ふの說疑ふべし、〇中略義經公人數をも調たまはず、逃を追討て勝利を得給ふ、後世法として學ぶべきことな

し、正成公は古今無雙の良將といへども、是も又六波羅の無制の敵に對し籠城のみし、二重屛囊人形のごとき謀計にて、後代手本とすべき戰法なし、而公共に神速奇謀を主とし、機變の術を專にし給へば、後世法として學ぶべき跡なし、然に上手の跡を似せて、將の器量もなく、勝負の利も不知ば大負をすべしとは、戰法にくらき謂なるべし、

〔武藝小傳兵法一〕兵術文稿曰、○中略今世稱楠氏兵法者、近世好事者之所爲擬作、而未嘗出于正成之意也、正成始賜後醍醐帝密詔、在于正慶元年、統兵五年、而至于建武三年、戰死于攝州湊川、斯比年四海大亂、公卿迄士庶、咸在于患難之中、而不安寢食、正成日夜盡心、而欲定暴亂、何遑作兵書、而遺後世乎、是以可知之也、慶安有楠正雪者、承應有石橋源右衛門某者、此二子假正成之名、偷信玄之法、附會而爲書、求信於人、其紆曲之意既甚矣、故正雪馴正成之密策、而企叛逆、其隱謀發覺、而黨類棄市、石橋亦稱正成之奇謀、而論作亂、其徒咸戮市、是正成之罪人也、

〔鈴林日知錄一〕軍法　抑武田氏の軍法、信玄みづから製するにあらず、其源は、大江維時に出で、其孫匡房が時、八幡太郎義家、及び新羅三郎義光に傳へ、遂に相繼て、武田家の家法とはなりしとぞ、○中略然して信玄みづから其身に試る所をまじへて、大に其道を明かにして、是を馬場美濃守信房に傳ふ、信房是を早川彌惣左衛門幸豐に授け、幸豐是を小幡勘兵衛景憲に傳へ、景憲是を北條安房守氏長に授け、氏長是を山鹿甚五左衛門高祐に傳へて、其敎ます〳〵世に行はれしなり、氏長は又おのづから發明する所ありて、嘗て其學を大猷院殿○徳川家光に授け奉りしかば、是より世擧りて北條流といへるなり、たゞ慨むべきは、其徒の弊、ひとへに甲陽軍鑑の類を金科玉條とし、韜略以下武備志の類に至ては、捨て高閣に束ね、何ぞ其偏見固陋の甚きや、此弊既に寬永以前に生じ、台德院殿○徳川秀忠嘗て是を辨じ給ふ、○中略寬永の頃は、戰國を去る事遠からず、旗下諸士の内にも、戰場に臨みし輩もありしなるべければ、年若きものなど其口授を受たるにより、強て書籍

に據らざりしなるべし、時代漸く移り、二百有餘年の今に及ては、書籍にあらざれば其則る所を得べからず、然して武田氏の軍法は神祖も棄給はざるところなれば、苟も鈐林に生るゝ者、其數にたより其宜きを斟酌し、彼の偏見固陋の弊なきやう心がくべきなり、

〔貞丈雜記十二武藝〕一大猷院樣〇德川家光の御代、甲州武田家の浪人の子小幡勘兵衛景憲といふ者、甲陽軍鑑と名付て、武田信玄軍功の事を書て、高坂彈正が記たる書也と云ひ、それに末書結要品と云二篇を作り、是も高坂の書也と云て、甲州流軍術の指南をはじめて、世にはやりけり、山鹿流、北條流、香西流なども、皆小幡が弟子の立たる流なり、城取の傳授とて、砂をもり並て教る事あり、それより後に謙信流、楠流、橘流是も橘流なり、張良流、樊噲流、其外何流彼流出來たり、軍者と云其軍者の說、戰場を踏て見ざる者共にて、疊の上の料簡にて作りたる事多し、甲冑其外武器の類、利方と云事を專として、古代の制作を改る事多し、皆疊の上の料簡也、信用しがたき事ども也、

〔大和事始五兵備〕武田流軍術九　甲州流兵學の起は、小幡勘兵衛より始る、〇中略高坂彈正が書を集めて、甲州の士數人井伊兵部に從て佐和山にありしに、信玄の事を尋聞、甲州流の兵術を建立して、人の師となる、

〔武藝小傳一兵法〕小幡勘兵衛景憲　小幡勘兵衛平景憲者、甲州武田家人也、〇中略四月〇慶長二十年十八日、東照宮著二條城、同十九日依定行勝重言上、景憲奉仕麾下、東照宮被尋大城城中之事於景憲、景憲委細言上、五月六日、景憲在旗本、進而乘倒逃敵、阿部左馬助一騎來此所、而勵戰功、翌七日、大坂城陷、天下歸一、景憲領采邑千五百石、爲御使番列、景憲招甲州先方士早川彌三左衛門幸豐、廣瀨美濃守景房、辻彌兵衛盛昌、小宮山八左衛門昌久、三科肥前守形幸、辻甚內盛次等、問武田家之兵法、補甲陽軍鑑之闕文、大興起甲州武田兵法、故世人尊之爲宗師、又習軍配於岡本半助宣就、赤澤太郎右衛門、益田民部秀成、又甲州北郡有岡本實貞入道者、元來武田家人、而知兵法之奧儀、故景憲又招之聞

其物語、後述作若干書、授之門人、且領采邑五百石於村上庄次郎、五百石於杉山八藏、景憲自領五百石、寛文三癸卯年二月廿五日卒、享年九十有二、院號倍甘、法名無角道牛、凡列侯諸士之學其法者、大率至于二千餘人、雖自古談兵者多、而如景憲者未聞之、噫景憲者兵家之鳳乎、杉山入道寛文元辛丑年五月三日死、號法受院道心日實、

〔駿河土產〕權現樣〇德川家康所々之御合戰に何流と有御軍法御用不被遊候事

一權現樣には、御年若く被成御座候節々、數度の御陣に御立被遊候大場小場におゐて御合戰御せり合等に御出合被遊候得共、何流の御軍法を御用被遊候と申義無之候、其時々の樣子にゟ御見合次第御下知被遊、いつとても御勝利被遊候と也、〇中略然る處、三州岡崎城主石川伯耆守別心被致、御家を出奔有之、太閤〇豐臣秀吉江隨身に付、〇中略御軍立の摸樣なども委細敵方江相知れ申に付、此已後豐臣家との御一戰は、萬事被遊にくき御事に成可申候、あぶの目の拔たるとはケ樣之事かと有之、人々くやみつぶやき候處、權現樣には伯耆守欠落の義を何とも思召れざる御樣體にて、一段と御機嫌宜被遊御座候を以、御家中諸人不審をたて申候と也、然る處其頃甲州之御郡代鳥居彥右衛門尉方江被仰遣候は、信玄時代被申出たる軍法等之書付、其外信玄被用候武器兵具之類、何によらず國中江相觸取集、濱松の御城內江爲持著越候樣にと被仰出、其奉行には成瀨吉左衛門、岡部次郎右衛門兩人被仰付、總元〆括之儀は井伊直政並榊原康政、本多忠勝、此三人立合吟味被仰付、幷御家江被召出候御直參之甲州衆之儀は不及申、井伊兵部江御附人に被成置たる面々江も、信玄時代の事とさへ有之候得ば、何事によらず申上候樣にとの義にて、悉く御取集め被遊、御吟味之上に而、御家諸色の義を信玄流に被遊かへさせられ、其年の霜月上旬の比に至り、御家の御軍法萬事之儀、自今已後は武田流に被遊候間、左樣に相心得候樣にと、御旗本中は不及申、家中末々の者迄承知仕候樣御觸有之候と也、〇中略一切之軍法を信玄流に御改被替候との

嚀有之、巳後とても、秀吉卿石川伯耆守江之懸意におゐては何の替りたる樣子も無之候得共、秀吉卿の旗本にては、諸人石川伯耆守を古暦とあだ名を付て唱候と也、

〔寛永小説〕大猷院樣（○徳川家光）上意に、信玄謙信流とて、兵法の大道に隔ては有べからず、又別に兵法有て能事あらば、權現樣（○徳川家康）御家に御殘し可被成事なるに、何の御書物等も無之を以、御考被遊候得ば、道は人の勤候所に有之候と也、

〔武術流祖錄兵學〕越後流　澤崎主水　越後人也、習兵法加治龍爪齋景明、最爲精妙、承應元壬辰年、來東武、大鳴門人許多也、加治龍爪齋ハ越後加治城主、加治遠江守景英之孫、而對馬守景治之子也、遠江守景英ハ仕不識院謙信、學兵法宇佐美駿河守、得奧旨、其子景治、其子景明繼其傳、

〔同志茶話六〕案るに、（○中略）越後流とは、謙信流の事なるべし、越後流兵者曰、謙信公御家に正哉吾勝尊の兵法有、吾勝傳といふ、（いづれの家より謙信家へ傳之來りしにや、たしかならずと）謙信公其傳に依て、宇佐美、加治と心を合て兵書を述作し、永祿年中上京の時、是を朝家へ獻じ奉る、朝家ことに叡感有て、我國武家の龜鑑と成べき書也と勅定なりしと、相傳する所則是也といへり、潛かに案るに、（○中略）神代に神兵有といへども、法とすべき事なし、神武帝不順者を平給ふにぞ、後世法とすべき事略見えたれば、我國の兵法は、神武におこるといふべし、吾勝尊の兵法といふ事、甚だ笑ふべし、（○中略）又謙信上京の時、軍書を朝家へ獻じ給ふと云事、甚僞事たるべし、先祖より傳へ給ひし歌書など獻じたまひし事は有べし、謙信公は中興無雙の良將、清潔なる大將にして、中々兵書を述作し給ふ人にあらず、其上亂世に何の隙有て著述し給はんや、わらふべきの甚しき也、想ふに吾勝尊の軍法と云は、朝廷を欺き奉る也、又朝廷より叡感の勅ありといふは、後世を欺けるなり、欺妄の沙汰は、謙信公に於てはなき人なれば、決て後世我國の事跡古傳にうとき者の擬作なる事疑べきにあらず、高坂が甲陽軍鑑のごとき、文盲なる假名書にして、學智有人はおかしくおもふべけれど、兵法はす

ぐれたればこそ、東照君にも甲州家法を御用ひ、國々嶋々まで甲州の家法に不依はなし、朝家へ奉りしといふ傳もなけれど、日本武道中興の大祖とは武田家たるべし、朝家は歌をのみ讀給ふて、歌道は專ら公家の業といへば、歌の善惡を正さんにこそ公家の判談を受べし、兵法の可否を正さんには、名將名士の批判をこそ受べき事なるに、公家の稱美有兵書也とて自讀し、愚人をあざむく事、おそらくは武道にくらき人の言なるべし、想ふに、近世甲家の兵書世に多く打ちりたれば、求集て私言をくはへ、僞事をつくりて謙信流と云なるべし、

〔武邊叢書五〕佐栐十兵衛覺書論　謙信流之兵法と申義は、古昔無之候、依之謙信之御孫定勝卿ハ小畑勘兵衛尉景憲を師範と被成、兵學御修行候、其剋も被仰候、越後には慥成記錄少も殘不申候、甲陽軍鑑世上に廣り候故、謙信之武備も信玄にひとしく成候とて、軍法ハ甲州流御聞被成候との義、勸兵衛記錄にも殘り、其外世上に無隱事御座候、謙信之實事少も殘り申候は、佐栐一人と相見へ申候、此義は御存之前に而可有御座候得共、乍序由來御物語申候、御一覽之後、早々御返成可被下候、以上、

〔窓の須佐美二〕茂久源右衛門景久とて謙信流の兵術を敎る人あり、剛直にして理義を深く好めり、一生浪人して貧窮なりしが、人々尊みて當時に名高くありし、

〔武術流祖錄兵學〕謙信三德流　栗田因幡寬政　祖父刑部大輔寬安、刑部ハ普光寺永壽還俗ノ名ト云字佐美民部少輔越後流ノ學兵法、究其妙、民部少輔ハ駿河守之子也、寬安之子大膳某繼其傳、其子寬政繼父祖傳脈、悟其旨、寬永年中仕水戶威公、高其名、稱謙信三德流、正保四丁亥年八月廿日死、七十有一歲、

〔同志茶話六〕案るに、○中略信州流といへるは、小笠原流の事なるが、小笠原軍術、もつはら雲氣煙氣等の怪異を記し、浮屠安浮を正とし、多くは附會信用に不足、近世甲家の兵書を取交て師家を立るやからあり、

〔當流軍法功者書〕下略六孫王經基　攝津守滿仲　小笠原大膳修理大夫親世　小笠原左京大夫成隆　小笠原圖議幸雄　小笠原左近將監則正　小笠原宮內大輔氏隆　三澤朝臣南花小笠原昨雲勝三

〔武術流祖錄兵學〕氏隆流　上泉流　岡本半助宣就　上州小幡家ノ人也、始仕武田、後仕井伊直孝、爲重臣、習小笠原家訓閲集於上泉常陸介秀胤、能達軍配、名偏華夷、上泉秀胤父武藏守信綱ノ繼傳、信綱ハ學小笠原宮內大輔氏隆、爲精妙云、世推稱氏隆流、又曰上泉流、

〔玉露證話十四〕軍法兵道之次第
一北條流ハ、北條新藏氏長鈞命にて勘兵衞弟子と成、故に傳受を殘せり、山鹿甚五左衞門事は北條氏長に尋聞て、己れが文學の智を以て一流を興して、山鹿流を立たり、
一北條安房守氏長流は、士鑑要法を以てす、
一山鹿甚五左衞門流は、雄鑑全書等を以てす、

〔武藝小傳一兵法〕北條安房守氏長　北條安房守平氏長者、其先遠州人也、中略慶長十四己酉年生、母遠山盛六女、四歲之時父繁廣卒、六歲而始拜東照宮、元和二丙辰年、奉拜台德大君、寬永十五戊寅年五月八日、爲御步行頭、同十六己卯年、轉采地、賜下總國中田川崎上泉幷武州義輪、後轉足輕大將、明曆元甲午年六月爲大目附役、叙從五位下、任安房守、寬文十庚戌年五月廿九日卒、享年六十有二、號趙州院栢陽西意、氏長自幼好讀兵書、從小幡景憲習武田家兵法、遂得奧秘、凡遊景憲之門者若干、無出氏長之右者、後述作師鑑抄、雄鑑抄、列侯諸士欲從氏長得其眞傳者甚多、可謂盛也、後又撰士鑑用法、遂推曰北條流、氏長用功於武田兵法、而弘其傳、其功赫然顯世也、

〔武術流祖錄兵學〕山鹿流　山鹿甚五左衞門義矩　從北條氏長得兵法奧秘、義矩改而高祐仕淺野采女正長友、領采邑千石、後致仕居赤穗城下、學兵法者若干、得宗者多シ、後來江戶大鳴、撰神武雄備

集武經全書、貞享十二乙丑年九月廿六日歿、稱山鹿流、布施源兵衛守之傑出タリ、仕明石侍從松平信之、高祐之男藤助高之、繼父傳仕松浦家、門人多云、

〔先哲叢談後編 二〕山鹿素行、名高祐、一名義矩、字子敬、號因山、又號素行子、通稱甚五左衛門、陸奥人、○中略十六、從北條氏長（通稱新藏、後叙從五位下、任安房守）學韜略、氏長小幡景憲（通稱勘兵衛）高足之弟子也、從學之五年、諸弟子無出於其上者、二十二、景憲愛素行專志旁通、講習不怠、使氏長悉傳受秘訣、自是而後、從學者甚衆矣、三十五、其所起草四書句讀、七書諺解、武教全書等成、四十五、被配流於播州赤穗、五十五、遇赦歸于江戸、後十年而歿焉、

〔名家略傳 一〕長沼澹齋　美成○山崎云、今世に長沼流と稱する兵法は、澹齋翁より出たり、佐枝、宮川の二派ありて、その術を學ぶもの世にあまねし、○中略予曾て云、兵法をもて門戸を張るものいと多しといへども、辨說をもて活機を論ずるは、えうなきわざにこそあれ、流義の巧拙にかゝはらず、師術の精練なるぞ肝要なる、されば古戰軍書に心をつけて熟讀するにはしかじ、

〔宕陰存稿 十〕澹齋長沼先生傳　先生諱宗敬、字外記、號澹齋、○中略沈研經術、旁學甲州兵法、既而曰、世所傳武田氏兵法者、多小幡景憲輩所割裂彌縫、非當時眞傳也、吾爲武門冑、不可以不正焉、於是鑽極古今韜鈐、問有身經戎陣者、必往質之、至銃馬曲藝築城制、靡弗窮究、○中略一時聲譽高海內、諸侯爭請爲師、然先生不欲以兵家自名、又不喜奔馳侯門、其應請以二三家爲限、必先說經、然後及武、備前國主芳烈公（松平新太郎光政）請看其著書、乃抽出師篇呈覽、公深嘉之、嘆曰、俾予尙壯乎、將從斯人而游也、今老矣、靡及也夫、乃令其臣日置伊右衛門從學、○中略學徒後先數百千人、其尤著者、佐枝尹重、宮川尙古、○中略二氏門徒甚盛、故先生之學分爲兩派、○中略逮寬政時、會津國主松平侯革新國政、其戎制多取長沼氏成規、於是乎先生之道益得所施用云、

〔兵法一家言 七撿騷上〕又甲州流ノ兵法ハ、謀略、計策ヲ論ズルコトハ甚精詳ニシテ、軍陣ノ節制ヲ說ク

コト頗疎漏ナリ、所謂謀略、計策ヲ廻ラスコトハ、其人ニ在ルコトニテ、學テ得ベキノ業ニ非ズ、北。條。流。山。鹿。流。等ハ、皆甲州ノ餘音ナリ、又越。後。流。ト稱スルハ、兵法專ラ軍律ト制度ヲ論ジテ、絶テ謀略ノ事ヲ說コト無シ、且其行軍ノ心得ヲ敎ルコト質直ニシテ簡要ナリ、故ニ初心ノ學ナドテ益アル兵法ハ越後流ニ如ハ無シ、然レドモ泰平ノ世ト成テ、增補シタル書ニハ、牽强附會ノ妄說多シ、芟柞淘汰シテ、其異ヲ揀選ズンバアル、ベカラザルナリ、又長。沼。流。ノ兵書ハ、文章仕立ニテ、諸事大概備リ頗立派ニテ善ナルコトハ善ナレドモ、昇平ニ爲テ出來タル兵法ナルヲ以テ、虚文多クシテ、實武少シ、然レドモ今ノ世ニ至テ、此法最モ行ハル、愚老〇佐藤信淵常ニ恐クハ、万一此後人數ヲ押出スベキノ擧アラバ、上下財用ニ困窮シテ、生民飢寒ノ厄ニ罹ランコトヲ、故ニ予ハ少シニテモ、華美奢侈ナル兵法ハ取ザルナリ、

〔武術流祖錄兵學〕佐。久。間。流。　佐久間立齋德　始稱₂莊左衛門₁、自₂弱年₁學₂諸家兵法₁、後布施源兵衛守之₂隨ユ究₁山鹿流奥旨₁、享保年中仕₂水戸成公₁、後良公ノ命ニヨッテ稱₂佐久間流₁、門中澤丈右衛門豊忠、戸祭主馬勝全傑出タリ、

〔大友興廢記十二〕戸次鑑連石宗に軍配相傳契約の事附石宗氣の講談の事幷諸葛孔明が事

天正六年戊寅の夏、〇中略戸次道雪の子息鑑連陣所の隣家に、軍配者石宗宿したり、兼而軍配望のよし云通し置たれば、鑑連幸と思ひ、參會有て種々物がたりの後、〇中略自今以後切々參會を遂べく候、軍配殘りなく御相傳希所なりと所望有ければ、石宗やすき事に候、師弟の契約の上は、それがし存候通り、毛頭殘すまじく候、〇中略鑑連おもしろき御物がたり、まことにかたじけなき次第に存候、それがし相傳の初には、氣一卷うけたまはり候はんと申されける、石宗、氣の義は臼杵におゐて相傳申すべし、扨氣は煙氣雲氣さまざまの事御座候へども、天地陰陽和合の一理をかんようとす、覆て外なきは天の道、載て踏る事なきは地の德なり、かくのごとく天地聖德を以て呂

兵法家

律の二氣を見わけ、吉凶を伺ふ秘傳をのべられける、

〔羅山文集四十九序〕兵法傳授序〔之、岡田太郎右衛門請、寛永十三年作、〕兵術之授受、古今有所由也、延喜帝御宇、從三位中納言大江朝臣維時有所傳、而子孫相承相敎、所謂式部大輔重光、式部大輔匡衡、式部大輔擧周、信濃守成衡、權中納言大宰帥匡房、世世以爲家傳、匡房者爲延久承保寛治三朝侍讀、此時陸奥守源義家、就匡房而學之、遂相倶登鳩嶺、受其秘術、大振武名、遂平奥狄、其法垂于後世、學習者秘而不洩、故不可妄傳也、亦不可不傳也、方今感尊師之志、依稽古之勞、此術之秘訣口授、不遺其一、悉皆傳授焉、他日有同志嗜好如足下之於余者、宜以盟約被相授之、古云、有其備者易、其具、然則有志之士、何可忘武備乎、

〔鹽尻十四〕我國今日軍法者と云者多し、四五十年前の軍者は、大概兵器の製を敎へ、軍立の人賦を説し、其後は源平の戰、太平記の軍物語などして、少しく己が見にて評を付、愚俗を敎へける、一變して楠流、甲州流、越後流なんど、門派を立て互に勝劣を論じ、再變して或は孫吳が書に依りて説をなし、或は聖賢の語を假り、軍法は平生の受用なりとのゝしる、其身は官奴のごとく權威にへつらひ、專名利を釣るなかだちになすのみ、

〔日本書紀二十七天智〕十年正月、是月、〇中略以大山下授達率谷那晉首〔閑兵法〕木素貴子〔閑兵法〕憶禮福留〔閑兵法〕答㶱春初〔閑兵法〕

〔日本書紀三十持統〕七年十二月丙子、遣陣法博士等敎習諸國、

〔日本書紀通證三十五持統〕令無此目、今所謂軍學者也、

〔續日本紀三十三光仁〕寶龜六年十月壬戌、前右大臣正二位勳二等吉備朝臣眞備薨、〇中略八年〇天平寶字仲滿謀反、大臣計其必走、分兵遮之、指麾部分、甚有籌略、賊遂陷謀中、旬日悉平、以功授從三位勳二等、爲參議中衛大將、

〔傍廂後篇〕軍學の始　この公〇吉備眞備軍學の始なり、靈龜二年唐國にわたり、經史をよみうかべ、軍術を學び、諸藝を得て歸朝し給へり、

〇按ズルニ、吉備眞備ノ事ハ、術ホ陣法篇八陣條ニアリ、

〔續武將感狀記〕或曰、古之名將、義經、正成ト幷稱ス、今木曾義仲ヲ稽ルニ、兵ヲ用ル事義經ニ劣ラジ、人品ノ善カラザルニ隱レテ、許多ノ勇略十分顯レザルガ如シ、義仲二歲ニシテ齋藤別當眞盛母ニ懷セ、信濃國安曇郡木曾ニ赴テ、木曾ノ魁長中三權頭兼遠ニ養立ラル、七八歲ノ比ヨリ保元平治ニ源氏ノ一類亡テ、平家世ヲ擅ニスル事ヲ聞テ、一タビ平家ヲ夷滅シテ宿讐ヲ復ント思フ心切ニシテ、馬ヲ馳弓ヲ射ニモ此事ヲ不忘、是幼稚ノ時ヨリ大志アル事ヲ觀ツベシ、橫田河原ノ戰ニ越後ノ住人城太郎資永ガ兵、四萬餘ヲ三千許ニテ擊破シタリ、是力ヲ協心ヲ一ニシ進退分合能整タルニ由テナリ、是法令ノ嚴明ナル事ヲ見ツベシ、賴朝武田五郎信光ガ讒ヲ信ジ、義仲ヲ討ントテ大軍ヲ發シテ、上野信濃ノ境、笙吹ノ坂ヲ踰ラレケルニ、東西謀ヲ協テ平家ヲ可討ノ處ニ、外仇ヲ置テ內訌ヲ起バ彼隨テ我弊ニノラン、一門ノ亡ヲ俟、他人ノ嘲ヲ求ル基ナリトテ、兵ヲ罷テ和解セラレタルハ、忿怒ニ惹レズ怨憤ニ遷ラズ、是深慮ト遠圖アル事ヲ觀ツベシ、砥並山ノ戰ハ身方ヲ七手ニ分タルモ、法アル歛ヲ會釋テ日ヲ費タルモ謀アリ、倶梨伽羅ノ谷ニ追落シテ、輙ク平家ノ六將軍十萬ノ師ノ鋒ヲ挫タルハ、古今ノ一快當時絕無希有ノ神策ヲ運シ奇功ヲ立タリ、是先勝テ後戰ノ兵術ニ徹スル事ヲ觀ツベシ、由此論之ニ、其將ノ及ブ處ニアラズ、其頑僻桀驁身死後斷ニ至ル惜哉、

〔駿臺雜話下〕楠正成　世に楠家の遺書とてされ〳〵流布するものあれど、おほくは後人の僞作と見え侍る、〇中略世の佝論する人、推尊て諸葛孔明に比するは、兩人いづれも兵略をつとめ、興復を謀り、父子國事に死するも同じければなり、それはさる事なれども、〇中略孔明をもて擬せば、恐

らくは其倫にあらじ、其兵を用るも、孔明は正大にして奇計をもちいず、節制の兵といふべし、翁〇室鳩巣かねて論ずらく、正成が敵を料り兵を用るは韓信に似たり、〇中略韓信は囊沙背水敵を破り、正成は釣屏木偶敵を塵にするを見給へ、両人の兵を用ること一轍に出ざるかは、何れも摧堅拉鋭といへど、韓信が材は敏速に長じてよく攻、いまだその守るをきかず、正成が材は持重にたへてよく守る、いまだその攻るを見ず、〇中略河内の人の語りしとて、或人翁にいひしは、金剛山のあたりに南北の明神と號する祠あり、その中座を正成とす、左右は孫子呉子なり、正成常に、われ天下に武功を立る事は孫呉のかげなりといひしによりて、是を祔祭するとぞ、是にて今に正成が遺愛の民にある事をえるべし、但正成かくのごとく絶倫の材をもて、聖賢の道を學びずして孫呉が術をのみ崇びしは、遺恨といふべし、

〔梅花無盡藏七雜文〕武州江戸城祭太田二千石春苑道灌禪定門文（明應二癸丑以前一十一年、武藏而作此祭文、今記之、）

維時文明龍集丙午秋之孟念有六日、太田二千石春苑道灌、入相陽糟屋之府第匠作君之幕、俄系白刃之厄、形骸隕墜、魂魄飛沉矣、公共厥爺自得道眞老人、積汗馬之勞、幹楨于國家、至妖骨爺存而息没、塞所哀鍾也、同仲秋十日、伏値二七日之忌齋、漆桶萬里、謹具香華灯燭、不腆之儀、敢昭告亡靈、厥詞曰、嗚吁哀哉、上天所賦、若人爲英、藹然和氣、如花就葉、八州草木、悉服威名、倭歌三昧、文武兼幷、誦孫呉術、胷數萬兵、揮羽扇戰、護帝旗征、深屯敵地、剪棘除荊、履俎步險、歃血共盟、長橋虹臥、不屑修營、重城鑿柝、誅暴屠鯨、關塞不鎖、女織男耕、鄭有子產、齊亦晏嬰、天乎天也、白刃俄生、時乎時也、黄葉暗驚、五十五載、露栖槿莖、託蟻宮夢、謝蝸角爭、比斯亡極、海淺岱輕、棄忠泥土、泥節濁清、雖無所訴、天鑒惟明、見機合違、胡爲請纓、陀羅尼雨、妄想洗聲、非來非去、湛然圓成、孫支百世、松秀柏萌、祭具不腆、獨爐續檠、野菓清酌、默告丹誠、嗚呼哀哉、來饗、

〔梅花無盡藏六雜文〕靜勝軒銘詩幷序（武州江戸城太田春苑道灌號靜勝軒、其南掛洛詩板、其東掛此詩板、〇中略、）

且夫靜勝二字見于尉繚子之秘策也、其詞云、兵以靜勝、國以專勝矣、施子美(施氏、子美名、兵書尉繚子、)註之解曰、兵法欲肅也、肅則兵得其利、將權欲一也、一則國得其利、肅々之馬、悠悠之旗、此則兵之靜也、劉祐攻海鹽也、寂若無人、楊素將隋也、馭戎嚴整、各以靜而勝也、

〔甲陽軍鑑二品第七〕小笠原源與齋軍配奇特有之事

甲州に小笠原源與齋とて軍配者有之、○中略又永祿四年に河中嶋合戰之時討死せし山本勘介は、信長(○長恐玄誤)公旗本に足輕大將の中五人すぐられたる名人と云、是も軍配鍛錬の者也、此山本勘介入道道鬼が軍配は宮商角徵羽の五つより分て見る雲氣煙氣、其外ゐぎ、さごすだ、來り樣、行やう、右之外も口傳あれども、勘介流は縮て是は一段短し、但小笠原源與齋がごとく奇特は無之、○下略

〔望海每談下〕富田小右衞門某入道覺心は、加賀利長卿出頭士大將淺井左馬介某與力富田某二男なり、若年より左馬介近習に仕へ、壯年にして生國を出て江府に至り、太田攝津守資次右筆たり、太平記流の軍學を嗜む、(或稱楠流)後年土屋民部少輔利直に仕ふ、渠が軍學世に鳴るを以て、大小名來會の時必呼出され、談話時を移し、其上近世諸家勝敗善惡を問はる、○中略軍學弟子數多あり、就中松井孫太夫某、(豫州宇和島伊達家士)北條安兵衞以三、(下谷組御徒)息小右衞門某蘊奧を極めり、德川家御代々武略甲越戰爭等、又覺心語り傳ふる所を引古說尤多し、北條以三弟の中橫田幸右衞門布政(後入道號幸山)傳へ得る所、古戰話一隅のみ、蓋太平記流軍學淺井三右衞門成儀と相傳、成儀始は大猷院樣御徒衆なり、○中略或時母語て曰、土藏の梁上に半葛籠あり、是古き書記どもなり、我父攝津守より持傳ふ、父は老衰我は女子なるゆゑ口授一言もなし、仍ていたづらに納置なりと云ふ、成儀見て往々自得す、世に云太平記流の軍學は、成儀を以て權輿とす、

〔明良洪範十一〕山鹿某(○高祐)ト云士ハ、軍學諸流ヲ兼學シテ一統ヲ起シ、武ヲ講ズル所、經學ヨリ論

ヲ立テ、孫子、呉子、三略ノ旨ヲ、今日ノ和法ニ用ヒ、古ヘノ軍學者ナドノ及ブ所ニ非ズ、誠ニ當代ノ武備ハ此人ニ在リトテ、世擧ツテ稱セリ、或人備前新太郎少將光政ヘ、其山鹿某ヲ推擧セシニ、光政曰、軍法兵學ハ、舊家ニハ夫々其家ノ軍法アリ、武田家ニ山本勘助ノ軍法、上杉家ニ宇佐美駿河守ノ軍法有ガ如シ、吾池田家ニモ軍法アリテ、信長代ヨリ數十度ノ戰場ニ、一度モオクレヲ取シ事ナシ、サレバ吾家ニ於テハ抱ルニ及ズ、今太平ノ代ナレバ軍學ナドイヘド、亂世ニ生レシ者、軍學ハ皆自己ノ鍛錬也、加藤清正、小西行長ナド、朝鮮マデモ切ナビケタルニテ知ルベシ、又古今未曾有ト云レシ豐臣太閤ガ、軍學セシト云事ヲ聞ズ、又神君○徳川家康ニ軍學ノ師ト云者ナケレド、カクテ天下ヲ平治シ給フ、今太平ノ代ニ立身シテ大名ト成リシ人、先祖ヨリノ軍法ナク、自身ニ立シ法令ニテ心元ナク思フ人コソ、軍師ヲ抱ヘテ法令ヲ定ムベシ、吾家ニハ先祖ヨリノ軍法有テ、亂世ヲ過ギ治世ニ居テ、國家ヨク治リ有レバ、軍學ハ家ニ傳ハル所ニテ足ル也、新タニ師ヲ抱ヘルニ及ズ、且亂世ニハ武ヲ以テシ、治世ニハ文ヲ以テストテ、治世ニ國家ヲ治ルハ、仁義ノ道コソ肝要ナレ、故ニ熊澤五郎八ヲ召抱ヘタリト申サレケルト也、其後山鹿ヲ津輕越中守信政カヽヘ度思ヒシカド、家老神保三右衛門シヒテ差留ケルト也、

〔赤穗四十七士傳 一〕大石良雄、○中略少時嘗從山鹿氏學兵法及擧事、悉用其法、算無遺策、

〔續武將感狀記〕油井正雪ハ、駿府足洗口ノ町人、紺屋牛左衛門ガ子也、軍法ヲ學テ江戸ニ居ヲト、門弟多シ、國主郡主席ヲ同シテ、軍書ヲ講談スルニ、其體拔群ノ者ト見ヘケルトゾ、後凶賊ノ魁長トナル、慶安四年凶徒伏誅ニ先テ、正雪ハ駿府ニ來リ、札ノ辻ノ四角梅屋ガ宅ニアリ、江戸ヨリ嚴命ノ下ル其機ヲ察シテ、捕縛セラレズ、板布ノ釘ヲ放チ、スノコノ繩ヲ切、細引ヲ襖、疊ヲ戸口ニ立カケ置テ、輕易ニ人ノ不入備ヲ成シ、徒黨ノ帳ヲヤキ捨テ、同伴八九人自殺シタリ、其比駿府住居ノ醫道元司ガ、モノガタリヲ以テコレヲ記ス、

〔油井根元記〕油井正雪出生之事附、幼稚發明之事

抑油井正雪ハ、駿州油井ノ紺屋ノ子也、○中略十四ノ年ニ至リ、楠正成コソ並ナキ勇士ト思ヒ、聞傳シ儘ニ、菊水ノ旗幷一卷ノ書ヲ作リテ、淺間山ノ松ガ子堀テ石ノ唐櫃ニ納テ密ニ埋ケリ、後ニ思ヘバ深キ方便也、○中略東武ニアリテ普ク大名衆旗本衆ヘ出入、兵法ノ師ト仰ガレケル、或時門弟ヲ集メ夢物語ヲシタリ、去夜楠正成ニ夢中ノ對面致テ、幻ノゴトク枕ニ立テ申サレケルハ、正雪ハマサシキ我類葉也、汝ガ生國駿州淺間山ノ松ガ子ヲ堀テ見ヨト語ト見テ夢ハ覺ト云、其座ニ有シ門弟ノ人々○中略彼地ニ至、松ガ根ヲ堀テミレバ、夢物語ニ露タガハズ、○中略一說ハ、正雪東武ニ徘徊シタル時、楠不傳ト云シ兵法ノ師アリ、彼ハ正シキ正成ガ末葉ニテ、菊水ノ旗一旒、正成秘藏仕タル中脇指相傳セシガ、油井ガ行跡只者ナラズ、末々サルモノ成ベシト目利シテ、是ヲユヅリケリ、去ニ依テ正雪ハ正成類葉ト人々イヒハヤシタリ、正雪ノ正ハ、正成ノ正ヲ書シトナリ、兩說分明ナラヌ事ニイヒケルガ、上ノ御沙汰ニハ不傳ヨリ相續シタリト決定仕ケルヨシ、

〔窓の須佐美三〕佐久間立齋とて、郡山魚平が子成るよし、郡山亡びし後流落し、兵術を敎授して暮しぬ、孫子流とて止戈辨論などいふ書を著し、陽明學と見えて執齋○論三と睦じく、心學の圖書など作り、われ○丹波國笹山侯臣松崎兎臣も一面識なり、後水戶の學校に往、義公山苗の料にて送りしとぞ、

〔同志茶話六〕問、軍法は學ぶべきか、○中略曰、成ほど學ぶべき事なれ共、心術の本がたゝねば、ひすらこふ成てゐるし、今時の軍法者といふ者は、あゝひすらこいもの、誠意の工夫積たる人には、數萬の人思付筈也、思付ばいか樣にも遣はるゝ筈也、いかほど軍法習とも、心が靜ならねば役に不立、人數も中々つかはれず、○中略太閤なども終に軍法は習はぬ人也、太閤流といふ事もなし、佐藤直方夜話　按るに、○中略いか程思ひ付たりとても、法がなければ人數は遣はれず、わづか二三十人の足輕にても、常に法を敎へざれば、混亂して用に立難し、○中略然るに法のいらぬとはいかな

る事ぞや、想ふに軍法は只奇計ばかりと思ひ、萬世不易の法ある事を知らず、太平記評判の類を兵法と心得給ふ故なるべし、〇中略軍法を習へばひすらこふ成てあしゝといふ事、心得ぬ事也、軍法を習はずとも、ひすらこき者あるべし、軍法に依て志のあしくなるといふ事有べからず、〇中略

直方の辨、さて〱心得ぬ事也、

〔本朝武林原始八兵事〕兵法宗旨曰、近世以兵法名其家者多、然皆不可較彀於甲陽法者遠矣、其業甲法者、亦未必盡善也、所謂善者、能知古法而不拘其法、能精書傳而不泥其蹟、一貫於胸中爲己之有者、未聞其人也、名世者猶然矣、況求書於市鄽以辯給欺衆人者、與守師家之私箭不嘗受古法者乎、夫兵法者、指萬世不易之體而言、如彼臨機應變戰術謀計、皆兵之術而不得之謂法、今談兵者、既不知古法、則見術爲法、或評故戰記舊計、爲不易之法、其妄甚矣、欲學兵者就有法而可也、〇中略　近世兵家者流、談古戰而作木偶人列之飾之、云川中嶋戰場如此、戸石三增者如斯、操其木偶人殆類傀儡師、又謂戸石者、村上何以失利、何以取後、可加工夫、而以是爲兵法之傳、或取集一騎前事爲兵法之奥、自言信玄流亦無違之、外之而立何師、聞者不察、卻爲信然、嗚呼武道之頽敗至此、可悲哉、

〔奥州後三年記上〕義家〇源の朝臣、先年宇治殿〇藤原頼通へ參じて、貞任を攻ん事など申けるを、江帥匡房卿たち聞て、器量はよき武士の、合戰の道をえらぬよとひとりごち給ひけるを、義家の郎等聞て、わが主ほどの兵を、けやけき事いふおきなかなと思ひつゝ、義家に此由をかたる、義家是を聞て、さる事もあるらんとて、江帥の出られけるところによりて、ことさら會尺しつゝ、その後彼卿にあひて文をよみけり、

〔本朝武林原始八兵事〕武田家陣法　我國の兵法は、神武天皇女軍男軍に權輿すといへども、中葉武田公に至りて、其法全く備る、近世小幡景憲是を興起して、諸州甲家法に不德はなし、然れば、武田公を日本兵法大祖と稱するべし、甲越戰爭記曰、日本正統記とて、事物の本基を記たる記あり、今

は泥たる歟、兵法正統曰、昔八幡太郎義家奥州を征伐して有功矣、帝叡感有餘矣、於是義家奏して曰、江家の兵法を傳て我家の法とし、永く帝都の守護を成ん事を乞ふ、帝即大江匡房に詔して、是をして義家に傳しむ、匡房辭する事を不得して、石清水の廣前に於て、家傳の兵法を義家に傳しむ、于時承暦二年戊午三月十二日也、新羅三郎も同く是を請て其家に傳ふ、故に武田世々武名を不墜、晴信に至て猶其法を紀し是を詳にすと、

〔甲陽軍鑑十五品第四十三〕信玄公十六歳より五十三迄の間に軍法工夫仕たる衆

一荻原常陸守是は譜代衆也 相圖の小旗、相圖の物見がくのどう、 一原加賀守同 方向の陣取 一原美濃守 足輕りうごのり、二のかけ備たゝむ事、 一横田備中 備組結ぶ事 一多田淡路 夜軍あつくうつてうすく出る事、ひかへ時までいつさくなり、 一加藤駿河 信玄公の弓矢の指南申たる武士也 一小幡山城 櫓西樓に敵の剋、敵の城へ取懸たる時、出る出ざるを見合事、敵のはたらきやうにて味方にあやふき事見合儀、 一山本勘介 城取或は敵をまはす事 一米倉丹後守甲州衆也 城をせむるに竹たばの事 一馬場美濃守同 押太鼓の九字を表する也、同合戰にときのこゑ、さき手、旗本、別各の事、 一山縣三郎兵衛同 敵大物見の中に大將ありとみる、同川こすべき事みしる儀、是遠州濱松にての事、 一内藤修理正同 かくし勢の事、將棊頭人數立の事、 一高坂彈正 篝ひきやくの事、備みの手なりの事、 一旗本大陣取は原隼人あひてに被成、信玄公御工夫なり、同五人組にして三萬七千五百と組あはせなさる、、縦ば卅七萬五千迄もなるべき也、又大軍、小軍、大旗、是は馬場美濃御挨拶人にて、是も信玄公御工夫なり、此外も信玄公御工夫多けれども、みな家老衆の分別とある上意は、御遠慮おゝくして如此、

〔西山遺聞下〕恭伯世子へ被仰進候御傳言之事

一軍法は、大將御存知無之候而者不叶儀、萬一御用御承御出馬の時、士卒の被召仕様、滿足御存知

不被成候而者不罷成儀、一騎前の御働は、匹夫の勇とて御用に不立儀、今時の軍者人をだましたぶらかすやうなる儀、猶以無用の至、幸栗田七兵衛御近習に罷在、謙信流の軍法覺候て罷在事に候間、軍學一通は、七兵衛へ御聞被成可然思召候事、

一軍學の根本は、七書より外は無之候、大殿樣御若年の時より、七書を御覽被成、大要御心得被成御座候、三略六韜、其外何も軍學の道理を說述候書にて候得共、就中孫子吳子を專要と致事に候、然れども孫子吳子、軍法は巧なりと云へども、行跡は不足學、たとへば上州筋夜討强盜の類、それ〳〵の法有之、續松のふり樣、別而夜討の大切とする事也、强盜の中にも頭立たる老功の者に、續松をふらする事也、ふり樣惡敷時は働不宜、此故に續松の役を干要として、防者の方よりも、續松ふりを目掛て、早く討取樣に致事也、是等は武士の心得に罷成事にて、夜討强盜の所爲にも能事のなきにはあらず、然ども夜討强盜は大なる惡事なり、孫子吳子も如此にて、可取所を取、可捨所を捨候樣にと御心得可被成候事、○中略

右十件、江戶へ交代之御暇に西山へ參候節、大殿樣○德川光圀より若殿樣○綱條へ被仰進候御傳言なり、

元祿十三年辰八月六日　安積覺兵衛謹記

〔先哲叢談　六〕物茂卿、名雙松、有所避以字行、荻生氏、小字總右衛門、○中略少時精習兵學、故其就仕途也、亦以兵學、不必以儒、晚復專談武、與熊本藪震庵初相見、時徂徠首謂曰、陣法行伍、此不可不究也、子西海人、必習水軍、水軍其以何爲策上邪、遂歛刴談戰法、不及他事云、松宮觀山學論曰、近日儒士之談武、徂徠物子一人而已耳、亦唯博覽之餘力、臆斷自負焉、雖以不世豪傑之資、然未遇明師、牢執法制、不問軍路、與孔子好謀之言乖戾焉、其所著孫子解及鈐錄、雖涉獵殆盡、而未見事術磨練之功、遂以七書爲空理、崇後世戚南塘鄭芝龍、爲備也、拘區々小技、未知有建鎭國之規模、盡戰勢之地形、所謂帷中決千

兵書

里之勝草廬定三分之謀之術也、不亦惜乎、

〔訓蒙淺語〕我等○大田敎も○中略右五部の書○孫子、呉子、司馬法、六韜、三略、を、直解開宗徂徠先生の國字解などに据り、又我が流義の考證を加へて、一家の兵學を建立せしかど、追々老年に及びて、無益なること心付きたり、名將は不讀兵書といへば、青表紙にて極めたる兵學は實事には覺束なし、趙括の兵法は大敗軍の基なり、俗に火燧兵法、白田水練と云ふは卽ち此事なり、

〔律疏職制〕凡玄象器物、天文圖書、讖書兵書、○中略私家不得有、違者徒一年、私習亦同、(中略)兵書、謂大公六韜、黃石公三略之類、

〔令義解二僧尼〕凡僧尼○中略習讀兵書、謂雖不成業、亦是若書之而不習讀、及書餘業書者、亦入下條也、○中略並依法律、付官司科罪、謂不論重輕、皆先還俗、

〔日本國見在書目錄〕兵家私略之二百四十二卷目錄

司馬法三卷齊相司馬穰苴撰　孫子兵法二卷吳將孫武撰　孫子兵法書一巨詡撰　孫子兵書三魏武解　孫子兵書一魏祖略解　六陣兵法圖一　八陣書一　陣法一　孫子兵法八　陣圖二　陣圖一　續孫子兵法二魏武帝撰　太公六韜六周文王師姜望撰　太公陰錄符一卷　黃石公三略記三下邳神人撰、成氏撰、　黃帝用兵勝敵法一　黃帝陰符一　黃帝蚩尤兵法一　兵林玉府三　兵林正府一　大公明金遺用兵要記一　太公謀世六　甲法一　武林一王略撰　梁武帝勅抄要用兵法一　慮敗一　出軍禁忌法一　兵書要八魏徵撰　六軍鏡三　安國兵法三　軍誡三李定遠撰　軍令五　齊兵法二　簡日法一　練習令一　兵書對敵權變逆順法武王代殷法一　河上公兵法一　帝王秘錄十　金壇秘決二卷　孝子寶決一　眞人水鏡十　軍勝十　黃帝太一　天目經三李淳風注　魏武帝兵書十三　兵書要三　兵書接要三魏武帝撰　瑞祥兵法二　雲氣兵法一　遁甲兵法一　投壺經二　象戲經一　投壺經二張柬之撰　伎經一卷　彈棊法一　樗蒱經一　王張一　壺中秘兵法一　兵書論要一魏武帝撰　兵書要略

同撰　梁武帝兵法二　金海卅七　隋籍一(一一本作、吉)撰

〔義經記二〕鬼一法眼の事

爰に代々の御門の御たから、天下にひざうせられたる十六巻の書あり、○中略一條堀河に陰陽師の法師に、鬼一法眼とて文武二道の達者あり、天下の御きたうして有けるが、是を給りて秘藏してぞ持たりける、御ざうし○源義經是を聞給て、○中略誠か御坊は異朝の書を政門が傳し六たう兵法と云文、天上より給りて秘藏して持給ふとな、其文私ならぬものぞ、御坊持たればとてよみ知ずば、をしへ傳べき事も有まじ、りをまげてそれがしに其文見せ給へ、一日の中によみて、御邊にもしらせをしへてかへさんぞと仰有ければ、法眼はがみをして申けるは、洛中に是程の狼藉者を、たれがはからひとして門より内へ入けるぞと云、御ざうし思召けるは、にくいやつかな、望をかくる六たうこそ見せざらめ、あまつさへむら言葉を云こそふしぎなれ、いつのように帶したる太刀ぞ、しやつ切てくればやと思召けるが、よし〳〵しかじか一字をもよまず共、法眼は師なり、義經は弟子なり、それを背たらば、けんらう地神の恐れもこそあれ、法眼をたすけてこそ、六たう兵法の有所をも知んずれと思召なをし、法眼を助てこそいられけるは、つぎたるくびかなと見えし、其まゝ人しれず法眼がもとにて明し暮し給ける、○中略御ざうし、人にしのぶ程げに心ぐるしき物はなし、いつまでかくて有べきならねば、法眼にかくとしらせばやとぞの給ひける、姫君○法眼女は御袂にすがりかなしみ給へ共、我は六たうに望有、さらばそれを見せ給ひ候はんにやとの給ければ、あす聞て父にうしなはれん事力なしと思ひけれども、かうじゆをぐして父の秘藏しける寶藏に入て、ぢうぢうの卷物の中に、かねまきしたるからびつに入たる六たう兵法一卷の書を取出して奉る、御ざうし悦給ひて、ひきひろげて御覽じて、ひるは終日書給ふ、夜はよもすがら是をふくし給ひ、七月上旬のころより是をよみ初て、十一月十日比になりければ、十六卷を

一字も殘ず覺させ給ふ、

〔玉露證話十四〕軍法兵道之次第

一八幡太郎大江の匡房に傳受の三略の法を以て、軍法射禮數男子に可ㇾ傳機非ずとて、紀州熊野山江其壹卷を納むゆへに絶ず、是も三略を以て種として、鬼一は其頃源氏支流の者にて、軍法者なり、多田滿仲の末男出家して伊豫國に居、伊豫の阿闍梨といふ、其子孫鬼一にて、渠も豫州より出て、熊野まで學修行す、六條判官爲義の聟は、熊野別當にて、友切丸〔源氏重代尤寳とする也〕をもゆづる故に、其由緒にて義經の手へ友切丸渡りしかば、此時義家の軍書も義經の手に入ると聞へたり、其上鬼一が法傳と合て義經の軍術とせり、鬼一が傳來書面計にて考へ出さるゝ處は鬼一によませて、義經も又其文義を釋すと云、旗を上たる義經は、鬼一も源氏なれば何とぞ源氏の旗を上させんと義經に不ㇾ殘傳授す、丹海が高弟にて、恨有を以て義經書を盜出すと軍法の奧義迄に知ずと云ふらしたり、亦平家へ憚心も有て也、義經沒落の時、吉野へ入て此一卷を納む、故に又傳給たり、楠正成泉州の產れにて、軍學の求有ㇾ之、紀州和州も尋求、吉野にて義經の書を傳へて軍法の祖とせしと也、故に義經の傳と云なるべし、

〔玉海〕元曆二年〔○文治元年〕六月三日甲寅、今旦大外記賴業參來、余傳二受三略一、是又依二夢想一也、

〔慶長日件錄〕慶長九年四月十一日、秀賴へ可ㇾ進二用意三略一、染二禿筆一出來之間、表紙自書ㇾ之、　十六日、巳剋市正令二同途一、御城へ登、有二晉秀賴樣御對面一、御手取二熨斗鮑一給ㇾ之、予秀賴樣へ進物、御太刀一腰、三略疎本、一字不ㇾ缺ㇾ點也、黃紙書之進之、則有二御披見一、御祝著之由也、

〔沙彌洞然長狀〕兵書七書之事、六韜三略第一第二之卷候之哉、連々能被二御覽一儀理、以二御相傳一御武略等入魂深廣之御思惟、不ㇾ可ㇾ有ㇾ疑、摩利支尊天感心候歟、

〔七書四〕夫兵書古今雖ㇾ多、諸家說凡以二七書一爲二樞機一、孫子以二兵書一見二於闔廬一、闔廬知二孫子能用ㇾ兵爲一ㇾ將、破

彊楚、是孫子力也、吳起學書於曾子、事魯君、後事魏文侯、擊秦拔五城、所以吳起爲將也、穰苴、齊景公時、文能附衆、武能威敵、景公聞爲將、尉繚以天官時日決勝而已、三略、老人授子房書也、是漢代平均基乎、太公以文武龍虎豹犬傳於文王、輿起周代八百餘歲者乎、太宗問李靖、靖對曰、先仁義後權譎、可謂文武兼並也、前大將軍家康公、以文安人、以武威衆、天下萬民咸歸服、雖周漢不能過、忽隨公鈞命記七書於梓、以講直正之畢矣、予爲令知太平於後人、跋其後也、

慶長十一龍集丙午初秋念又一日

紫陽閑室元佶叟書焉

〔羅山文集五十五題跋〕孫○子○諺○解跋

孫武子兵法十三篇、謹奉鈞命、而因施氏之講義、作倭字之諺訓、唯恐筆墨之有限、欲寫奇正之無窮、誠不耐惣縮屏營之至、雖聞俎豆之事、然好謀而成、既辯旗物之用、而中吉無咎、聖人有文事則有武備、其如此、鈞命之趣其在茲乎、

寬永三年丙寅五月日

三○略○諺○解○跋

三略雖出自黃石、而元是太公兵法也、子房初受黃石之教、已報其仇、終從赤松之遊、而保其身、子房之力、以此書居多、高帝之雄略於是復居多、其後光武以柔道治天下、故答臧宮馬武、則據黃石之記、亦以此也、二帝者千歲之明主也、其政治多出於此書、則何容易哉、今謹奉台命、作三略倭字諺訓、以欽進呈、臣不敏、雖不及此書賢智之慮、庶周漢之功業復視於今日、豈不大幸乎、然則負薪之言、廊廟之謀、有所少留意也、寬永三年丙寅六月日、

吳○子○司○馬○法○尉○繚○子○六○韜○太○宗○問○對○諺○解○跋

兵有奇正、吳子本于此、然正中自有奇、則隨時而用之、是所以亞於孫子也、司馬法者、周大司馬之遺制、而穰苴之軍法加于其中、頗存王者之餘風者歟、尉繚子者古之善說兵者也、六韜世俗傳稱、以爲太公

授文武之書、併太宗衞公所問對之言、共列武經七書之中、方今越智姓稲葉氏正則、既寫孫子三略諺解、而懇求五部倭字抄、不能峻拒、遂塞其請、時慶安己丑年也、

〔松屋叢話 一〕余(小山田與清)がもたりし孫子集註二本、孫子本義一本、孫子講意一本は、いづれもまたなき珍書なるに、たしなめることありて賣たりき、集註は、流布の刊本または唐本などにくらぶれば、まされるふし〳〵おほし、本義と講意とは世にたえてなかりけり、今は林氏の藏本になれりしとぞ、また三略直解一本、六韜直解二本ともに四百年ばかりもむかしに寫しけんと見ゆるをもてり、三略のかたは、曲瀨氏の藏本なる加藤清正の朝鮮分捕本を、清水德がかり得て示たりしにつゆたがふふしなし、六韜のかたは、所せきまで書入ありて、そが中には今つたはらぬ書名なども見ゆ、試に流布の本に校合するに、いと〳〵こと也、こは萬曆に張居正、翁鴻業等が刪補の手を歷ずして、洪武の劉寅が眞面目を存したるなるべし、また活字板の三略抄といへるをも一本秘もたるに、その名しりたる人なかりけり、

〔半陶藁 三〕軍勝跋

兵也者平也、平不平之器、莫兵之如焉、黄帝湯武以降無世不亂、無亂不治、無治不以兵、然則不可無兵、苟有兵則可無其書哉、有書而不傳者學者之罪也、是軍勝之所以起于今日也、初我國求兵書於中華、得梁武所撰軍勝十卷、實至寶也、而我國治日長而亂日淺、家學者少而途說者多、故此書雖不厄秦火、而無發晉壁、惜哉、細川源府君(政元)幕下、有嶋眞貞清者、問其官則軍門校尉也、尋其諸則八田判官之華胄也、不墜先緒、講武爲勤、平日慨念此書之不行於世、遂傭能書者謄寫一本、价於人請余題其後、嗚乎兵之於余、夏虫之氷也、何以應命乎、而有可言者、楊文公談苑載我國書籍、有五經、文選、史記、漢書等、而無兵書之名、余竊疑之、近來聞南遊者說曰、中華不敢以兵書與我、蓋渠以爲我君知用兵之道、爲中華大患也、余於是爬著痒處、按大元至元大德間、渠遣阿剌罕范文虎輩、以十萬人征我、而渠喪今師而

遼、阿塔海、復以十萬人來、而民勞寢兵、竟通書於我、稱曰、蒙古皇帝奉書日本國王、末云、不宜白、其辭懇懇欵欵、自抑之意溢於簡冊、由是觀之、中華之雌伏于我者、不翅一日也、南遊者言亦有謂耳、兵書之名不聞於前、兵書之來不見於後、唯此一書中流之楲也、失之可乎、公之用心可謂至矣、抑我國有兵尚矣、昔天照太神、疑弟素盞嗚有惡心起兵詰問、帶十握九握〇九握二字一本无八握之劍、背負靫、臂著鞆、手捉弓箭、親迎防禦、是我國用兵之權輿也、自爾兒童走卒有血氣勇者、胸運甲兵、有仁氣勇者、籌成帷幄、皆所生知也、區區韜略七書功無所施也、雖然無書則已、有書而不傳者學者之罪也、則繼絕存亡、捨公其誰可嘉矣、頃者吾征夷大將軍〇足利義尙治兵於國、而欲罪於江東、是所謂平不平之秋也、源府君特奉嚴命、爲之先鋒、公屬其麾下、忠肝義膽、擊強摧枯、翹足以待矣、今也軍勝之有書、霧針夜斗一編足而已、祝々、滿堂華公讀出師表發省、生滿堂爲死諸葛所瞞可咲、余讀勝書、與梁武對談於千百年之後、無許多亂做、而九年之弓、聊然之箭、皆吾家之事也、公講武之間、幸一至此焉、

長享初元仲秋日　竺乾猛將五十八代孫桃源叟書

〔鈴林日知錄 一〕按するに、軍勝唐宋以後、藝文志に著錄せざれば、漢土に亡佚する已に久し、本邦却て此頃まで傳はりしに、今存せざるは惜むべし、

〔當流軍法功者書 下〕吾黨之小子馳高遠、不知所適從、故採取於群書要語、思釋於舊聞嘉言、而捷徑於其旨、淺近於其詞、以輯錄之爲書、名曰功者書、即功者取拔闕之義、令二三子知遠邇高卑之道也、別亦作侍用集附其後、兩書合喙、而後武道之大綱略備乎、後君子幸正之、　于時元和三年仲春日、小笠原昨雲勝三跋、

〔武藝小傳 一兵法〕岡本半助石上宣就者、上州小幡家之人、而仕武田家、習小笠原家訓閱集於上泉常陸介藤原秀胤、而能知軍配、此小笠原宮內少輔源氏陸、自大膳大夫額氏武勇入道傳授之書、而上泉武藏守信綱授與於秀胤之秘本也、宣就嘗有武名、且善文筆、今猶得其筆跡者、以爲家珍、仕井伊侍從直

孝、爲重臣、令名徧於華夷、

古傳曰、醍醐帝の時、大江維時入唐して、六韜、三略、軍勝圖四十二條を得て歸朝す、甚秘而人に傳へず、和字の書を作て訓閱集と號し、世に傳ふ、其書すべて百二十卷あり、　叉曰訓閱集に二本有、一本は大江維時傳來の書にして、小笠原家に相傳なり、一本は吉備大臣の書にして、鞍馬寺に有、後白川帝の御時、鬼一法眼其書を得たり、源義經鬼一が女に通じて、潛其書を寫さる、鞍馬法師祐賴より濟尊、明範、性慶、隆慶、光慶、光祐、性祐、了尊、戒圓、玄宓、賢智、了呼、慶海、能尊、重宥、通代、慶義、延宥に至りて、彼書を傳受すと也、

〔豐薩軍記　二〕田北相摸守鎭周最後酒宴之事

軍配者石宗此般大友宗麟ヲ樣々諫ムト云ドモ用キラレズ、當陣ニ於テモ田北鎭周ヲ諫言スレドモ聞入ザレバ、大友ノ家運傾廢ノ時到ルニヤト思ヒ居タリケル處ニ、十一日〔○天正六年十一月〕暮方味方ノ陣東ノ手先ヨリ氣立テ、敵城ノ内ヘタナビキ入ル、石宗是ヲ見テ野心ノ者ヤ出來ラント云ケルガ、果シテ星野蒲地二心出來レリ、又曉天卯ノ下刻血河ノ氣ト云雲立テ、味方ノ上ニタナビキタリ、石宗是ヲ見テ味方川ニテ亡ブベキ表ナリト勘ヘ、鎭周ヘ使ヲ馳テ、只今雲氣ノ立候コソ血河ノ氣トテ、味方川ニテ敗亡スベキ凶兆ニテ候、此氣ノ替ルマデ合戰ヲ待ルベシト云ケレバ、田北曰ク、某ハ元來匹夫ニテ雲ノ上ノ軍ハ仕ルマジク候、雲ハ兎モアレ角モアレト思付ナキ返事ナリケレバ、石宗今ハ力及バヌ處ナリ、鎭周カク軍法ヲ破ルコト不忠トヤ云ン、迷心トヤ云ン、是天命ナリトテ軍法秘傳ノ數卷ヲ燒捨打立ケルガ、終ニ討死ヲゾ遂ニケル、

〔老翁物語　下〕雲州御陣御出張〔○毛利元就〕之刻、御具足櫃之上に、錦之嚢に入たる一卷之書、一夜之間に在之、被成御拜見候處に、軍陣軍法之秘書與言等、數十ケ條御座候、常々御拜見之恐を被成御愼、口二三ケ條平人にも御よませ被成、おくをば明ざる樣に御封たゝめ被成、錦之袋に被成納被置せ

候、是又いづれ之佛神へ被籠置候哉不存候、〇中略兵書等被成御稽古共見へ不申候へ共、被仰出程之御調略、被遊候程之御武略、七章八巻の書にも少も不違之由候、諸法ハ心が所作と申ごとく、日夜の御工夫不被成御油断故、御一心之御悟ひらけ申候歟、

〔病間長語三〕世に兵法九字と云ふことあり、一字ごとに一印ありて、山伏或は眞言宗の文盲なる僧徒などが、佛説と會て授ることなり、劒を學ぶ武士どもが、劒に附て有がたき法と思うて、沍寒の節に水に浴し、不自由な思をして、七日別火など稱して自炊き、何にも知らぬ修驗者などに屈てこれを受るもの多し、その原を尋ぬるに、抱朴子より出て、道家山に入るときの呪文にして、山中の毒虫猛獸を避る厭と有りて劒にあづかることはなし、臨兵闘者と云ふ字ある故に、附會したるなるべし、去歳羽生に遊びしとき、西福寺尊秀阿闍梨にこのことを問ければ、これは決して佛説になきことにて、その内外獅子など云ふ印は、昔の法師武者など云ひしもの丶杜撰したるならんと語られき、

〔大和事始五武備〕武田流軍術九　高坂彈正が作りし書は、甲陽軍鑑十九冊、同末書上下、結要品、龍虎豹の三品是也、

〔鈐林日知錄一〕武田氏軍學書籍　神祖天正十三年、武田氏軍法等の書籍を搜り求め給ひし御事、駿河土產に見ゆれど、何たる書籍なりしにや、傳る事を聞かず、今其軍政を見るべきは、軍陽軍鑑をもて最第一とす、此書或は高坂彈正昌信が著述といひ、〇中略或は山本勘助昌幸が子、出奔せしもの丶記す所といふ、〇中略其載る所固より疑ふべけれども、其出る寬永以前なれば、全く造り物語にもあらざるべし、故に信玄が軍法を窮めんとせば、姑く此書により、是に加ふるに、當時の文書等を參考せんには、思ひ半に過ぬべし、末書數十種、其目錄、甲陽軍法書籍系傳に詳なれどもここに略す、

〔玉露證話十四〕軍法兵道之次第

一甲陽軍鑑の世上に板本に出たるも右の趣なり、左かるに景憲軍法傳授の門弟に、稻垣攝津守重種兵道に志し深く、甲陽軍鑑を達て懇望して寫す、自身計にて寫す事成がたく、心安く召仕ふ小性の内ものを書物有、彼に神文をさせ寫取度由申されける所、左からば其通りにて、右甲陽軍鑑を全部寫取り玉ふ、左かるに右小性年月過て浪人の後、京都に有ける時に是を板行に起して、大分金銀を取ける、此事執兵衞聞出し、稻垣殿江先年貸し申たる甲陽軍鑑世上に板行に出る由物語有しに、重種驚き、右小性を呼戻し切腹を申付、甲陽軍鑑も公義へ達し絶板可致と有しに、景憲も内々板行して世上に廣めんと思はれけれども、大分の物入故もだし玉へば、其儘に指置れ候やうにと被申ければ、夫ゟ廣まりたり、

〔武齋小傳兵法一〕小幡景憲甲陽の傳を蒐輯する時、貞實〇岡本を招いて聞くことあり、故に貞則〇岡本も又思釋して、其人にまみへんことをねがふ、已にまみへて、悉其傳を全うす、此時にあたつて、兵法を傳ふる者甚多して甚あやまる、或は義家義經正成の傳と稱し、或中興良將の名をかりて、百流千派、天下に繁頻す、甲州の兵法といへ共、正を得る者すくなし、貞則憂て、更本末始終を正し、其次第節目を分て、書一篇を作て甲武と號す、條理粲然として、能甲陽の傳を全うす、世の兵を談ずるものと年をおなじうしてかたるべからず、貞則獨り其宗を得たる者歟、

〔玉露證話十四〕軍法兵道之次第

一楠正成兵傳は、太平記理盡抄にて傳ふ、法印日應より傳ふ、法印は景要法寺館中也、太平記を好んで、古來ゟ有來十卷抄を以て講談す、然れども、かの理盡抄有所は、名和長年正成の軍法を傳へて、正成討死前に太平記を以て其軍々の其場其事に付て尋謀聞、是を理盡抄と號して名和家に傳ふ、長年が子孫落魄して、舊國なれば伯州に潜居すと聞及び、〇中略

一日應は其日より伯州へ毎日々々尋ね捜すといへども、名和の子孫なし、名和正三と云へる老人有の由を申せども、覺し人なし、早十九日に及びければ、もはや立歸らんと思ひけるが、今一日尋て見んと、早朝ゟ出て畔を傳ひ野中を尋行て、向の幽なる村へ志す、先に歩む人有、行向て物言はんと面を見合すに、由有氣なる隱人なれば、思はずも足下は名和正三ならずやと尋ければ、彼老人、如何なれば斯近付ならぬ人の我名をよぶぞやと答へければ、始よりの始終を語て、理盡抄の傳受を求む、老人聞て、其せつなる志を聞て己が茅屋に同道す、荒はてたる小屋に唯一人住せり、彼途中にて逢ひたる時、大成皮籠を後に負へり、扨一月餘も止て有増の太平記を傳ふ、然るに正三はからずも病に臥、終に死に趣むけり、其内幸と心を盡して看病す、其心を感じて彼籠の中に有所の理盡抄を日應に附屬す、夫ゆへに骸を取納て跡念頃にいとなみ、其後京都に歸りて、太平記一部を發明して傳來の師と成、此事門弟中に限らず普く聞傳へ、寺澤志摩守廣高招請之傳授を得て、理盡抄を寫得て家法とす、松平加賀守利常入道にも深く信じて、國本に招かれ傳を受らる故、長臣本多阿波守、横山大膳、前田出雲、淺野左馬助四人法印の弟子と成、此人々の近臣小性も又二人づゝ弟子と成、此内本多安房守が近臣大橋新之丞、秀才にして大橋禪可と號す、前田出雲が臣小原宗惠是も傳を得て、後退き筑前守殿師と成、(黒田筑前守事か、)(名字なし、)

一稻葉美濃守正則入道泰翁盛威職の頭大橋禪可事を聞及、(○中略)種々饗應して二年餘り逗留させ、理盡抄の傳を得給ふ、右之通故正保四(丁亥)年に寺澤兵庫頭沒收の節、彼理盡抄を老中より寺澤の家老今井縫殿助方迄仰遣され、今井大坂に出て居合さず、同臣酒井無右衞門を招て、此書を大切にして江戸へ參り、松平伊豆守殿江可相渡とて、今井方ゟ無右衞門に申越ければ、急江戸江下り、直に伊豆守殿江持參申案内す、豆州直に罷出請取給ふと也、是より寺澤家の理盡

抄は御文庫に納りたり、前々諸大名に限らず、此道を好む者みな〳〵傳手々々に縁を求め、才覺し寫に、加賀家寺澤兩家へ日應より傳授に付、加賀本寺澤本とて寫本二通を證據とす、榊原家には、其節懇望して寫取所持なり、是は彼式部大輔忠次とて博識廣才の人にて、世に文才の名あり、夫々以後當時理盡抄板本に出しかども、夫には不ㇾ捨、土用干にも殊の外大切也と自分に取扱ひ給ふ、寺澤家沒收之節、七八の卷の要文之所取落し紛失す、是を拾ひ得て由井正雪が手に入、正雪此七八の兩卷を以て理を極て、先後をさとして推して通達し、注の主意とす、由井本是なり、寺澤沒收より餘ほど經て、彼家の祐筆盜寫しける本を板行に仕出し、是よりして理盡抄板に出たり、

〔楠家傳七卷書七〕軍用秘術聽書　問、軍之肝要ハ何レヲ本ト仕候哉、曰、第一仁義、第二謀也、此外ノ軍法有ト云ハ非ㇾ眞實、此二法ヲ以テ戰者ハ必ズ無ㇾ不ㇾ勝、〇下略文

右此一卷者、某處ニテ任ㇾ存寄、伺ヒ書留申候、此理ニテ數多合戰ノ利ヲ得申候故、書上申候、此度御相傳之御卷物之外、何カハ軍用之深法可ㇾ有ㇾ御座ㇾ候ヘドモ、是ハ微臣尺寸之志ニ依テ、君父ヘ書上仕處ニ、被ㇾ爲ㇾ正御免被ㇾ成候ニ付テ進上仕候、此度某儀御名乘之正之字御免被ㇾ成、正俊ト被ㇾ下候事、生生世世ノ御厚恩、何事カ如ㇾ此、弓箭之面目、此時ニ逢ㇾ本意ㇾ候事、世上ニ存殘事無ㇾ御座ㇾ候、其上此度ハ君モ御十死之御合戰ト被ㇾ思召ㇾ候故、某儀御命ニ先立討死可ㇾ仕ト相定申候上ハ、已後ノ小忠ニモ罷成候ベカシト奉ㇾ存候故、文言之不ㇾ禮ヲ不ㇾ改書上申候、是非軍法御得道被ㇾ遊一度可ㇾ被ㇾ顯ㇾ御名於天下ㇾ候、君父常々被ㇾ仰出ㇾ候ハ、侍ハ私ニ命ヲ不ㇾ可ㇾ捨ヲ第一之忠功トスト被ㇾ仰候、若此度討死無ㇾ御免ㇾ候バ、命ヲ全ク仕リ君ヲ可ㇾ奉ㇾ守護ㇾ候、御相傳之御卷物、御命ト齊ク可ㇾ爲ㇾ御秘藏ㇾ候、仍恐惶謹而言上、

建武三年五月九日　恩地左近丞正俊判

和田民部丞殿御奏上

〔楠兵記二〕軍敎之卷　夫學ㇾ兵之法、悟ㇾ心性ㇾ憐ㇾ愍諸民ㇾ上、學ㇾ謀計ㇾ中、習ㇾ戰術ㇾ下矣、故古之善治ㇾ兵者、其將

先能備德義、才智秀於萬人、勇猶先于千人、所以善諸民親諸兵一和、盡於謀計之神通、戰術之奇妙、是卽名於將之三德、古聖之所謂智仁勇是也、〇中略夫兵無有恒形、只因敵轉化、豈泥奇正轉變之形、祗備吾謀、不令敵知於攻處、故敵疑怖、而必其禦守所多、守所多則其備處兵寡、吾能以謀分敵、其向忽處戰、故與我戰兵些而勝、安而莫危、以大勝小、是天地之常道也、一陣破則殘黨不全、吾乘其費討彼、不移時、流矢之如疾、大風之如發、不容于間髮、是予〇楠正成軍法大敎卷也、

〇按ズルニ、楠家傳七卷書、楠兵記等ノ書ノ、後世由井正雪ノ徒ノ僞作ニ成リシ事ハ、流派條引ク武藝小傳、及ビ兵法家條引ク駿臺雜話等ニ在リ、

〔武藝小傳兵法一〕小早川式部能久

小早川式部大江能久者、〇中略自少年好兵書、遊小幡景憲之門、得其宗、有香西成資者、繼其傳、香西者讚州之人也、越筑州仕黑田家、述作兵術文稿、行于世、

〔自娛集七〕兵要錄序

宮川忍齋來自鄰邦、眎余以其先師長沼氏〇澹齋之所著兵要錄、余繙閱之、其書本乎中華古昔之兵法、參乎本邦近世之軍術、立法制事也、精確而不苟、考古應今也、簡約而不遺、分類折門、董爲若干卷、是兵家之機要、信可一以該萬也、且其敎學之術、泝聖學之末流、而不貴權變之巧、與世之好用詐僞功利覇術者、豈可同日而語耶、蓋用兵若用水火、然能用之則爲福、不能用之則爲禍、故術不可不愼、此書平時則可以爲預備之則、行師則可以爲制勝之計、守約施博、命之謂兵要、不亦宜乎、〇下略

〔宕陰存稿十〕澹齋長沼先生傳

鑽極古今韜鈐、聞有身經戎陣者、必往質之、至銃馬曲藝築城制、旂茀窮究、原諸三代師律意、參諸孫吳七子、下稽明將兪戚之法、量時宜、驗實效、網羅參伍、明辨精選、著兵要錄二十二卷、以建一家言、大要射取刀槍、原之本邦、節制紀律、取之漢土、大小火器法、則參用西洋、嘗語門人曰、吾錄三分書也、二分在口

訣、五分則在學者自得焉耳、後來有善用之者、不必株守我法也、而其最所深悟者、風后握奇、武侯八陣也、述握奇八陣集解、以糾公孫弘、獨孤及輩之失、補李靖、趙本學等所未備、自以千載不傳之秘、於今發焉、〇中略享保中有人進兵要錄於有德大君〇德川吉宗者、大君賜寵嘉賞、稱爲無雙兵書、〇中略鹽谷世弘曰、或問濃齋先生曰、握奇書果風后所作乎、先生曰、不必論作者眞僞、吾取其陣法之蘊括乎此耳、必欲觀聖人之兵、大易師卦盡之矣、觀乎斯言、其所詣蓋超然遠矣、世或以先生生在偃武後、貶其書以爲几上空談、殊不知思之通也必神而智之至者、變來即應、古之名將、有少年就戎者、有脫逢掖被介冑者、彼豈經事閱陣而後能乎、且江帥〇大江匡房身未曾汗馬、而其門下乃有源奥州、〇義家明倫大猷稱一代良將、而其師趙本學、眇然山澤癯儒耳、學之不可以已也、先生之道、大行乎世、庸詎知百載之後涉其流遡其源者、不有奥州大猷其人出焉乎哉、

〔名家略傳 一〕長沼澹齋　その著すところ、兵要錄二十二卷、握奇集解一卷、猶この餘著述いと多かり、〇中略美成〇山崎云、〇中略兵要錄に攻城ありて守城なきは、澹齋の卓見といふべし、その己をもて人におよぼし、攻るの法によりて防ぎ守りなば、何のかたきことかあらん、去かれどもその流に兵要錄補貫、兵要續錄等の書ありて守城を說けり、後進の益また少からず、〇中略佐枝政之進〇尹重　長沼澹齋の門人となり、兜鍪の學に心を潛めつとめて怠らず、〇中略著すところ握奇集解或問三卷、再辨一卷、單騎器械制二卷、孫子管蠡七卷あり、

〔本朝武林原始〇八兵事〕兵家原始跋　近世雖言兵道者較多、而造其道之蘊奥、尋其器之淵源、辨其事之故實者、蓋未之有也、吾夏氏繁高先生、嘗得長乎甲家師律、乃繼堀貞則之統、而能究其到底、且博讀歷世史傳、遍考兵家舊式、蓋於所謂蘊奥淵源故實莫所不盡也、故平日談論、及所著之諸篇、皆以有益于論後進也、於今此篇之著述也、亦可見焉耳、余自少從學先生、恩敎有餘、今將使人知其才之雄偉而非常、於是不揣謭陋、謾敍俚言、以加其尾云、

享保甲辰閏四月日　　武田兵學者流門人參州源姓松平康鼎中孺拜書

〔海國兵談序一〕予友林子平者、慷慨之士也、性恬澹寡欲、心存大義、其親族略多縉紳、子平蔑視不爲家、酷好跋涉、凡邦域內、經歷殆徧、其自處、常如在兵革間、藍樓糲食、草行露宿、陶々而自適云、嘗憤然發志、困學有年、著書滿架、皆言當世之策、此編名曰海國兵談、其意以爲我國海國也、要在備於海寇、故以目焉、其論說確實激切、如目視其人、傍採海外奇策、古今來未嘗見聞者出之、足以觀我國防禦之大方、其所志可謂偉矣、〇中略

天明丙午夏五月念六　　仙臺工藤球卿撰

〔泰平年表大御所〕寬政四年五月十六日、林子平松平陸奧守家臣林嘉膳同居弟、著述海國兵談及三國通覽の事に依而、蟄居被仰付、

〔兵法一家言首序說〕我家世脩兵學、自曾祖父元庵翁以來、聚藏本邦諸兵家之書者頗多、至一百七十五家、然於其中最名於世者、不過甲越長沼之三家者流也、其他徂徠鈴鐘、及我先大人之弟子林子平海國兵談等、亦人之所稱、然而精究其論說之所主張、則各有己所欲之一僻而所發也、故其所論固一己之言志、而非可合他人之心也、其所以不合者、以法之不盡與術之不備也、愚老熟按、至接戰用大炮之法、與水軍船戰之術、則諸兵家無有論者也、此亦無他、船軍皇國古來所稱、而大炮之入於世也、喪亂既平、斯偉器絕無用之故爾矣、然及至近年、遠西夷狄魯齋亞、諳厄利亞之二豎、貪欲無厭、蠶食鄰傍諸國、所謂得隴望蜀、乘連勝之勢、出數多之水軍、大炮獵船、遥航大洋、所至爲寇、狡然有混同宇內之意者、非一朝一夕之故也、今夫世界之事體既如斯、然則雖皇國神武銳烈、調練水軍之規律、精究大炮之用法、豫不可不嚴防海之備也、因採索炮術家之傳書、所謂稻留、井上、中村、藤岡、津田、三木、佐々木、武衛、荻野、中島、無極、渡邊、大衎、駒杵等諸流、各有家傳秘方而自尊大、然而諸家亦一僻之所得而非盡善者也、〇中略宜哉我父祖之所睥睨也、就予亦發持病之一僻、筆記諸兵家之說合予之心者與予心之所欲言、而

講兵書

綴一部之兵書、題名兵法一家言、何者武有虛華有實用、此論也痛除虛華而載可實用者、且雖紀他家之言而皆斷以予心之所欲、而或其主意之異于他家之意者亦有之、蓋天地之生活物也、犬吠馬嘶、鳥啼牛鳴、各皆殊異其心而不同其鳴也、雖云人類惡能得個々同其心而一其言哉、故此書亦筆記予心之所欲而雖示之世人、而世人亦惡能得個々皆與予同心而一其言哉、故予之著此書也、譬如春禽之囀于花、秋蟲之鳴於草者、曾女思宗國之愚慨、感時關事之所爲、慨焉發于言者而已矣、故至其合世人之心而可所用與、不合而不所用、則予焉與之哉、予焉與之哉、

天保癸巳之歲六月甲申日　處士　椿園　佐藤信淵撰

〔宕陰存稿四〕校刻三兵活法序

三兵活法、荷蘭人原撰、而鈴木春山所譯、春山三河人、學孔孟道、兼習郭宗文、少年好演刀法、尤以備夷爲念、及壯知夷防專在火術、於是肆力於洋書、然廢我舊習以從彼者、春山亦不爲也、予嘗謂春山、今之談兵者、恰如酣漢、不僻於舊制、則僻於西洋、猶如醉漢之不左跌便右顚也、誰居當今之世、能不左右顚者、春山曰然、觀世而不觀於世、制兵而不制於兵、雖不能及、而吾則有志焉、夫不左右顚者、非胸有孫吳之略者不能也、胸有孫吳之略、而後可取彼長以輔我長也、如此然後三兵之爲活法者信矣、屬者江戶中井乾齋將校刻是編、以序見請、迺題篇首曰、讀茲書者、有春山之志則可、無春山之志、則無益而有害矣、安政三年孟夏上浣宕陰鹽谷世弘序、

〔信玄全集末書上卷之十九雜記〕軍法相傳之定之事

一向志之不定、而雜學人、不可妄讀事、

一其人眞實無稽古於兵法之志、不可妄談事、

一講釋、一日不可過十箇條、付師傳之外、私之見解不可說事、

〔甲陽軍鑑四品第十二〕利根過たる大將の事○中略

談兵法

七十ヶ年以前に、伊豆の宗雲三略をきかんとあり、物知の僧をよび、夫主將法、務擥英雄之心とある所迄き、、はや合點したるぞ、をけと有しを、よきことゝ思召なさるべし、それはあしき儀也、宗雲公などは、定而一佛一社の化身にて候べし、〇下略

〔日本教育史資料十二 學士小傳〕舊松山藩　定喬公 崇源公七代孫

公松山へ被爲入候節、御小納戸の者より相伺候は、御先代樣には、中村勘兵衛軍學講釋申上候節は、勘兵衛義、格式筆頭故御繼上下被爲召、大月正藏儒學講義申上候節は、大小性の事故、御袴御著用、味酒社人神道申上候節も是又御袴計にて御座候、如何可仕哉と申上ければ、御意に、いや左樣には致まじ、格式に寄事にあらず、大月が講ずる處は、先王の道なれば麻上下著用可致、神道の儀は我國の道なれば、是又上下著用可致、中村が軍學の儀は袴著用致べし、其故は、此方不德小身なれ共一城の主たり、信玄は大國軍慮におゐて秀でたれば、其兵道可學なれども同じく諸侯たり、然れば以來右の通著用可致との御事なりしとなり、垂憲錄

〔訓蒙淺語〕徂徠先生は戚繼光南塘の武備志信向にて、鈐錄を著して頻りに兵事を說かれたり、〇中略我等〇大田錦も先年同藩の士衆の類にて、孫子呉子、司馬法、六韜、三略を講釋せしことあり、

〔吾妻鏡六〕文治二年八月十五日己丑、二品〇源賴朝御參詣鶴岡宮、而老僧一人徘徊鳥居邊、恠之以景季令問名字給之處、佐藤兵衛尉憲淸法師也、今號西行云云、〇中略二品爲召彼人、早速還御、則招引營中及御芳談、此間就歌道幷弓馬事、條々有被尋仰事、西行申云、弓馬事者、在俗之當初、憖雖傳家風、保延三年八月遁世之時、秀鄕朝臣以來九代嫡家相承兵法燒失、依爲罪業因、其事曾以不殘留心底、皆忘却了、詠歌者、對花月動感之折節、僅作卅一字許也、全不知奧旨、然者是彼無所欲報申云云、然而恩問不等閑之間、於弓馬事者、具以申之、卽令俊兼記置其詞給、縡被專終夜云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年八月十日壬戌、熊谷二郎直實法師自京都參向、〇中略奉談兵法用意干戈故實

等、身今雖法體、心猶兼眞俗、聞者莫不感歎、

〔駿河土產　三〕權現樣〇德川家康或時御軍法御噺之事

或時上意被遊候は、今時の人頭をもする者共は、軍法だてをして、床机に腰をかけ、采幣を以て人數をさしつかひ、手をもよごさず、口先の下知計にて軍に勝ものと心得たるは、大成違なり、一手の將たるものが、味方諸人のぼんのくぼ計見て居て合戰に勝たるゝものにてはなしと被仰候となり、

〔鈴林日知錄　五〕軍物語　古人戰爭の世に生れてすら、稍暇あれば朋友相會して先輩武功の物語をなし、互にはげみて工夫を積み、或は子弟の爲に武功老練の士を招で語らしむ、されば人々おのづから、武邊に怠らずして柔弱の風なかりしなり、さて其語るさまは、後世の軍談などゝは異にして、合戰の手だて、士卒の遣ひ樣、或は一騎前の働、凡て其身に切要なるを主とせしなるべし、前橋酒井家舊藏聞書云、竹中半兵衞云、人皆合戰ノ咄ヲ聞ニ可聞要ヲ聞ズ、入ラザル事ヲ多ク聞覺タガルユヘ、重テ功ニナラザルナリ、語ルモノモ又然リ、善キ物語モ用ニ立ザル事多シ、爰ニテ何某ガ手柄ヲナシ功ヲ立シナド云一本鑓、匹夫ノ手柄咄ニテ事終リ、人ノ習ニナル事ナシ、其事ノ縮リオサマリ、心ノ付ケ所ヲ肝要トスルトコロナルベキト也、止此武功雜記六卷云、平野遠州物語ニ曰、當代武邊咄ヲ被聞候體ハ、誰ハソコニテ討死仕候、誰ハソコニテ首取候、或ハ負ノ勝ノナドトバカリノ事ナリ、コレハ惡キ聞樣ナリ、其軍ハ何トシテ負タリ、何トシテ勝タリト、其勝負ノ所以ヲ尋聞ヲコソ、武邊物語ト申ト、止此按ずるに、其頃といへども、是を聞く者或は其本旨を失ふにより、竹中平野の二氏は、專ら其實用に益あらんことを敎へしなり、前橋酒井家舊藏聞書云、齋藤道三子息龍興ヲ側ニ置テ軍物語ヲ致サレケルニ、龍興物語ノ半ニ立レケルヲ道三被申ケルハ、龍興ハ我家ヲ失テ、他人ノ門ニ馬ヲ繫クベキモノ也、軍物語ノ内ニ居ナガラ小用ヲ致シタラバ、

雜載

龍興ハ軍物語ニ聞トレテ居尿ヲシタリトイハヾ、後代マデノ面目ナルニトテ歎カレシト也、（竹中半兵衛重治が其子における、また是に同じき話あり、兵用拾話巻下云、竹中半兵衛重治ハ濃州菩提寺ノ城主ナリ、秀吉ノ軍事行ナリ、武者咄ノ砌、幼少ノ子息左京坐ヲ立テ何方ヘカ行タ、少時シテ歸ル、半兵衛以ノ外叱リ、何ユヘ軍物語ノ半ニ罷立候トナリ、子息用所達シニ罷立候トナリ、半兵衛猶怒リ、小便ニ立タタメ何トテ坐敷ニテ致サヌゾ、竹中ガ子ガ武邊咄ニ聞入、坐敷ヲヨゴシタリト云フハ、吾家ノ面目ナリト云ハレシトカヤ、）大平將士美談云、佐々成政若年の頃、千田吟風と云學士客分になり居たり、色々古の名將の咄を申出して、成政を教訓しける時、其事は疑はしきぞ虚説なるべしと成政難じられければ、吟風虚説にても侍るやらんといひ、暫くありて御前には猿樂を御好候か、彼の平の友盛幽靈になりて名乘出られたる事實にてあるべきか、又釣狐の狂言何ぞ虚にあるまじきや、然るに此藝を家とするものは六ヶ敷傳授などいへり、成べきだけは虚妄にても名將の昔物語を御好被遊候に、古將の言行には御疑起りて、無益の御遊び事をば御疑なされぬは、御工夫の足らざるなりといへり、成政赤面して詞なし、

〔兵要錄一兵訣〕兵要　荀卿論兵曰、要在附民、夫仁人之兵、上下一心、三軍同力、臣之於君也、下之於上、若子弟之事父兄、若手臂之扞頭目而覆胸腹也、故兵要在於附民、蓋賢主明將之御下也、以誠感誠、故上下之情合矣、感恩服義之至、必欲爲國以死報焉、若茲而後、束伍可齊、號令可施、攻戰可敎、賞罰可行、凡進退應接隨將之心、而約束不忒、是爲上下一心、三軍同力也、若士卒不親附、則操練而不習、申令而不服、罰則怨、賞則貪、軍失期、戰乖節、何以獲勝矣、是爲愛民無實心、而士卒不親附也、書曰、如保赤子、眞能以保赤子之心愛民、誰不敢親附哉、上者愛下、下者親上、故上下一心也、心一而氣齊、氣齊而力同、力同則以十可擊百、以千可擊萬、況三軍之衆同力、天下誰有敢當者、故曰國君好仁天下無敵、夫民之歸仁德者、如水之就下也、不招而倈臣、不攻而賓服矣、

〔兵要錄二兵訣〕兵害　夫兵之利害、所其關係者甚偉也、故孫子曰、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也、凡不得已而用之者義也、義兵者利于民、故國人悅之、天下援之、係茲軍和而國强、榮傳于子

孫、兵之利莫大於斯矣、好而用兵者貪也、貪兵者害于民、故國人苦之、天下疾之、餘茲武黷而國危、災極於子孫、兵之害、莫大於斯矣、此理勢之自然而義利之辨不可不察者也、夫兵之有利害於國者、譬如水火之有利害於人也、水火之於人、一日不可無矣、然至失其用、則爲害不可勝言也、兵之利害亦如此、故春秋傳曰、兵猶火也、弗戢將自焚也、蓋用兵之道、或國逆賊起、或隣國來寇、則擧兵弭暴亂、以除民之憂也、逆賊伏寇退、則戢兵嚴備、以爲國之衞、是用兵之節度也、兵有節度、則利於國者不可勝言也、無節度、則害於國者、亦不可勝言也、故論兵之利者、先可論兵之害也、若不論其害、而唯看其利者、流而爲貪兵、兵貪則攻無過之城、殺無辜之人、奪人之土地、加己之强大、謂之賊也、賊兵一旦雖以力服人、人心離、鬼神殘、而終不見其利矣、

〔駿臺雜話下〕兵は詭道　當代兵家者流と號する人、多くはかの兵律を傳るのみにて、兵法のもとは、敵を料り勝ことを制するの謀にありといふ事を知らず、其中ことに理にくらき人は、兵に荷擔して、國家を治るの道も是に外ならずといふめる、先年人のいひしは、ある兵家の說とて、孫子の兵者詭道也とあるを、兵は詭るも道なりとよむべし、兵は詭道なりとはよむべからずとぞ、翁きゝて一笑を發しき、是は兵を詭道といふを嫌て、兵はもと正道なれども、時としてはいつはるも道なりといふにやあらん、詭字は詐僞の二字と倭訓同じけれども、字義に差別あり、たゞ眞手になく常格をたかへたる道を詭道とはいふなり、されば孫子も、能而示之不能、用而示之不用といはずや、よくしてよくすとみせ、用て用ると見せては、いかで敵を料り勝ことを制すべき、よりて兵は、眞手になく常法に引ちがへて行ふ道なりといふべし、すぐに詐僞の道とはいふべからず、然共此筋を今日の常に出せば、詭遇して獲禽の心になりて、やがて詐僞に陷るべし、そこを孫武さすがの明者にて、慥に見つけし程に、十三篇の初におゐて、兵は詭道なりとはいひしぞかし、詭道なれば常道にあらず、常道にあらずして、いかで國家を治るの道とすべき、況や當代の兵家

に相傳るは、皆兵の末事なるをや、或は城どり、或は軍のそなへ、又は古戰の跡を僉議する迄にて、孫子の書をよむ人稀なり、たま〳〵よむ人ありても、文字にくらき故に、詭道二字の義にさへ通せず、何とて孫子のふかき意を得べきや、さるによりて、其說を聞に多くは臆見に出て、相違したる事也、無知妄作といふべし、

〔甲陽軍鑑十五品第四十三〕信玄公御旗　一其疾如風、一其靜如林、一侵掠如火、一不動如山、是は黑地に金を以て此四ッの語を書給ふ、旗は四方也、〇中略御旗の內には、軍師〇孫子の旗を肝要なり、口傳、

〔船田後記〕古之可能用兵者四也、上以德勝、次以義勝、其次以智勝、又其次以勇勝、未有離斯四而克戰者、〇中略廿七日〇明應五年五月諸軍請戰、僧都〇持是院公性警曰、兵家之用在先觀虛實之勢、實則避之、虛則攻之、賊勢猶勁不可攻、攻必殘吾軍也、密圍嚴守、使弓馬之勁無所施、餱糧之資無所通、則二三日間彼自困竊、姑待衆心離叛、互有間隙、就行天誅、此兵家之上策也、

〔奥羽永慶軍記二十三〕九戶合戰事

氏郷〇蒲生大ニ怒テ、此城イカニ要害ヨケレバ迚、數萬ノ軍勢攻アグンデ徒ニ日ヲ送リナバ、奥方ノ者共ニ、上方武士ノ癖トシテ、口兵法ハ上手ナレ共、手詰ノ勝負ハ叶ハズシテ遠巻シタルナドト嘲ラレンハ必定ナリ、

古事類苑

兵事部二

陣法

古事類苑

兵事部二

陣法

戰ニ臨ミテ陣ヲ布クニ法アリ、之ヲ陣法ト云フ、天武天皇ノ十二年ニ、諸國ニ詔シテ陣法ヲ習ハシメ給ヒ、持統天皇ノ七年ニモ、陣法博士ヲ諸國ニ遣シテ、陣法ヲ敎ヘシメ給ヒ、淳仁天皇ノ天平寳字四年ニハ、朝廷ヨリ人ヲ大宰府ニ遣シテ、大宰大貳吉備眞備ニ就キテ諸葛亮ノ八陣、孫子ノ九地結營ノ法ヲ學バシメ、其明年亦諸國ノ兵士ヲシテ弓馬ヲ操練シ、兼テ五行ノ陣法ヲ調習セシム、又淸和天皇ノ貞觀十二年ニハ、隱岐國ノ申請ニ由リテ、陣法式ヲ賜ヒシ事アリ、陽成天皇元慶三年、出羽權守藤原保則ノ奏言ニハ、桓武天皇ノ延暦中ニ、出羽國ニ陣圖ヲ下サレシ事見ユ、以テ當時陣法敎習ノ盛ナリシコト知ルベシ、降リテ後土御門天皇ノ應仁以後ハ、群雄割據、互ニ攻伐ヲ事トセシカバ、甲州武田氏ノ如キハ、鋒矢、方圓、衡扼等ノ陣法ヲ創作シテ、之ニ魚鱗、鶴翼、長蛇、偃月、雁行等ノ陣法ヲ加ヘ、諸葛亮ノ八陣ニ擬シテ、之ヲ八陣ト稱シ、其他ノ諸將モ、多クハ此等ノ陣法ヲ用キタリ、又我邦邊境ノ徒、蝴蝶陣ヲ張リテ支那ノ沿岸ヲ侵略シ、彼ヲシテ畏怖セシメシ事屢〻アリ、

陣立

〔運步色葉集〕地 陣起(ヂンタチ) 又陣立

〔兵法神武雄備集〕二十三 陣様 座備軍法之事

一備九段之事　私に云、備九段と云は、第一陽の先、第二陰の先、第三に右脇陽、第四に右脇陰、第五

に左脇陽、第六に左脇陰、第七後備、第八に小荷駄奉行、第九に旗本也、備の數々其品多しといへども、定りて大がい九ツの外ならず、備法をほしといふとも、其數を九ツにきわむる子細は、九は陽の數にして、八方に中央を加て其數九ツと極まれり、陽の數也、其上八方に中央をうゆるときは、其數九ツにきわまるが故に如此、兵法曰、陣數有九、中心兩令握之、四面八方皆取準焉云云、

又七段備と云は　一先、二にて先備、三に脇備、四に旗本、五に後備、六に小荷駄奉行、七に遊軍と云云、

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕戰場にて備立同賦の事

一御旗本　一前備　一小荷駄奉行備　一脇備　一後備　一先衆　一二の先衆　敵を引懸合戰には・一先衆の内よりあひしらひ是非三手計　一遊軍、いかほども、口傳有、　一小荷駄奉行備、本大將ほどの人に尤也、たゞし味方地は先、敵地にてはあと、のく時は又先へも合戰なきには、大形の奉行もくるしからず、口傳有、　一小荷駄しるしの事　一廣き所にて鶴　一あまりに横ひろからざる處にては魚　一備大だゝいの事　一山へかゝりては蛇　一遊軍、な車にも可然、但所によりて也、　一一手別手、別手一手、　口傳有、

〔兵法雄鑑十九出軍〕備押作法

一　一二の先衆いか程も

二　足輕大將、我が馬印を先にもたせ、同心足輕をつれておすべし、馬乘同心わ、五人の間に一騎づゝ乘べし、自身の得道具を馬のきはに引付て可乘也、

三　長柄奉行、惣長柄の先に乘ておすべし、

四　惣旗奉行、惣はたさしをつれて、旗の先に乘ておすべし、

五　持筒持弓の足輕大將同心足輕、其儀式の作法は、御先足輕に同じ、

六　御持鑓率行二騎、御持鑓の左右の先に乘ておすべし、

七　御旗率行二騎、御旗の跡先に乘て可押、

八　御使武者、我々の得道具を馬の左右に引付て可乘、又右の內にて半分御大將の御跡に差續て乘、是は御跡への御用の爲なり、

九　武者率行二騎、是は當番は右に乘、備の下知をなす、非番わ左に乘て、敵近付ば物見に出で可備の樣子を見計也、

十　步行の士、御大將の御前を可步、目付橫目の士は六率行にまじはり、一二騎ほど可押、其次に御步行頭は御跡に乘也、其次に御中間頭、御小人頭、御褒美の道具をかつがせ可押、

十一　御小人、御中間、御馬の跡を可步、右の內にて處に替御馬の先にて押大鼓を打、貝を吹也、是御小人の役也、打樣は武者率行是を下知す、御先御跡のは御旗本を守てうつなり、但口傳有、

十二　しまり足輕大將おすべし、行列御先足輕におなじ、

十三　後陣の隨兵御脇一二、御後しまりの備いかほども打續ておすべし、

十四　小荷駄率行備、先當番、跡非番なり、小荷駄を中にしておすべし、當番は先に押て、小荷駄を守護し、非番は御陣ばらいをして出る故に、小荷駄の跡を押と云也、

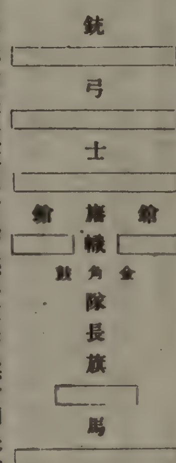
十五　小荷駄敵地へすゝむ時わ跡、退ときは先へ押なり、各口傳、

〔兵要錄十七陣營〕陣法

一隊行列之制　第一銃手、以或伍列、或鋸齒之法布于前、　第二弓手單列有口占　第三甲士單列、次長鎗手、次隊長、前置旛幟金鼓角、甲長居于左右、而進止隊兵、　第四陸旗、去戰隊而列于後、　第五隊兵戰馬、駐于旗後、　或長鎗列甲士之前、亦隨便利、　古者分旛幟於前後、相照而成用、近世共列隊長

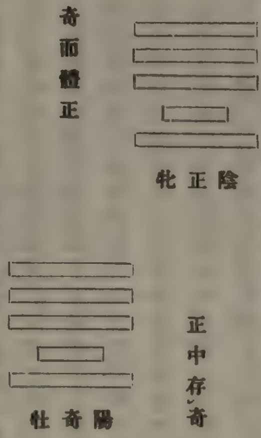
之馬前、各有便利、當隨時宜而定焉、有口占

一隊行列之圖



單隊合隊布列之法　兵家先陰後陽、故以右爲先、以左爲後、合則未有奇之名、分則有奇正、　單合各奇正備、動靜屈伸之利、有口占　竝列重列共不便、有口占

單隊合隊之圖



左右先鋒　前衛　右廂　左廂　中軍　後衛　遊擊　輜重隊有口占　已上九軍、有布置聯屬之格、輜重隨軍、在戰地則相地形駐馱馬、有口占　殿後整軍、而視勝負於終、有口占　四面八向無前後、處位實隊成變化、一動一靜有體用、

對疊陣之法假設三分之制　一正兩奇、兩正一奇、三正三奇、　三而三之、或五而三之、或十而五之、隨宜而裁制焉、　分布聯隊、共有對疊之術、　附、對疊陣之辨、

分陳之法　爲致人之形者、分之而專也、從人之形者、陳體支解矣、　有形分而情合者、有軍分而勢屬者、有陰分而陽接者、有陽分而陰合者、　有害於西而利於東者、　已上因利分之、裁之於己、而不受制

於人、故能致人、若徒分陣、則其相去雖不甚遠、常失應援矣、(有口占)

衆寡布列之格　衆者貴分布、寡者貴連接、或變其常制者、別有奇略也、　分合有得失、斜直有損益、廣狹有利害、險易有據去、隨題生變奇、已上其詳有口占、

坐陣之法(有傳有辨)　陣形之辨　方圓陣　牝牡陣　三才陣　四獸陣　五行陣　八卦陣　洪範陣

鋭陣(所謂衝陣也)　一字陣　雁行陣　偃月陣　金龍陣(或名常蛇陣)　衝軛陣　魚鱗陣　鶴翼陣　已上有辨有傳、其口訣、

陣形起於方圓、三圍爲圓、四圍爲方、凡山川斥澤、樹林蓊薈、名之天衝天拒、慮不及乖所之、則曲直鋭斜、都不外于方圓矣、　陣形本無形、八陣唯取方位、而不執乎形、若執方圓布列之形、而膠固不通者、不足與語陣法也、天衝天拒謂之天陣、地生形謂之地陣、妙機存於己謂之人陣、天地制於己者、以天地助法、識兵者貴棄己而隨天地者、未能制陣矣、

〔兵法雄鑑(三十軍戰)〕一二郡を持士大將先可知五ヶ條之事

一　其人數割能可仕事　其人數わりよく可仕と云は、たとへば千騎の人數ならば、五十騎づゝに手分し、廿備に定、其軍法を正敷して弓矢を可取と云也、

二　他國へ働入敵と戰んとおもはゞ、先我內にて二心なき侍をえらび、一兩人留主居に申付、二十備の內二三頭足輕どもに指添預置、城を險にとりて諸士の人質をこめて、手がたく弓矢をとるべき事、　兵法曰、夫守者不失險者也、守法、城一丈十人守之、工食不與焉、出者不守、守者不出、一而當十、十當百、百當千、千而當萬、故爲城郭者、非特費於民聚土壤也、

三　千不足の備は、旗本と云事もなく、其大將、武者奉行のごとくにして、必我旗本を陽の備にして、無二の備に作り可相戰也、

四　つよく弓矢をとるべしと云へばとて、無理にかゝつて敵をきりくづせとにわあらず、よく

遠く慮して、すこしもけがなく、弓矢をとるべしといへる事也、　義經公歌云

大將の武略もなくてけなげなば嵐の前にうつろへるはな

五　純剛強にして無理成働せば、おほからぬ人數をうたせ、終にわ其家をうしなふべしと遠慮あるべき事、

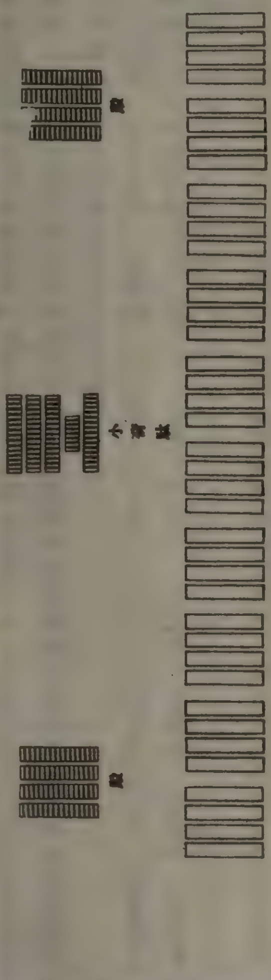
陣法圖式

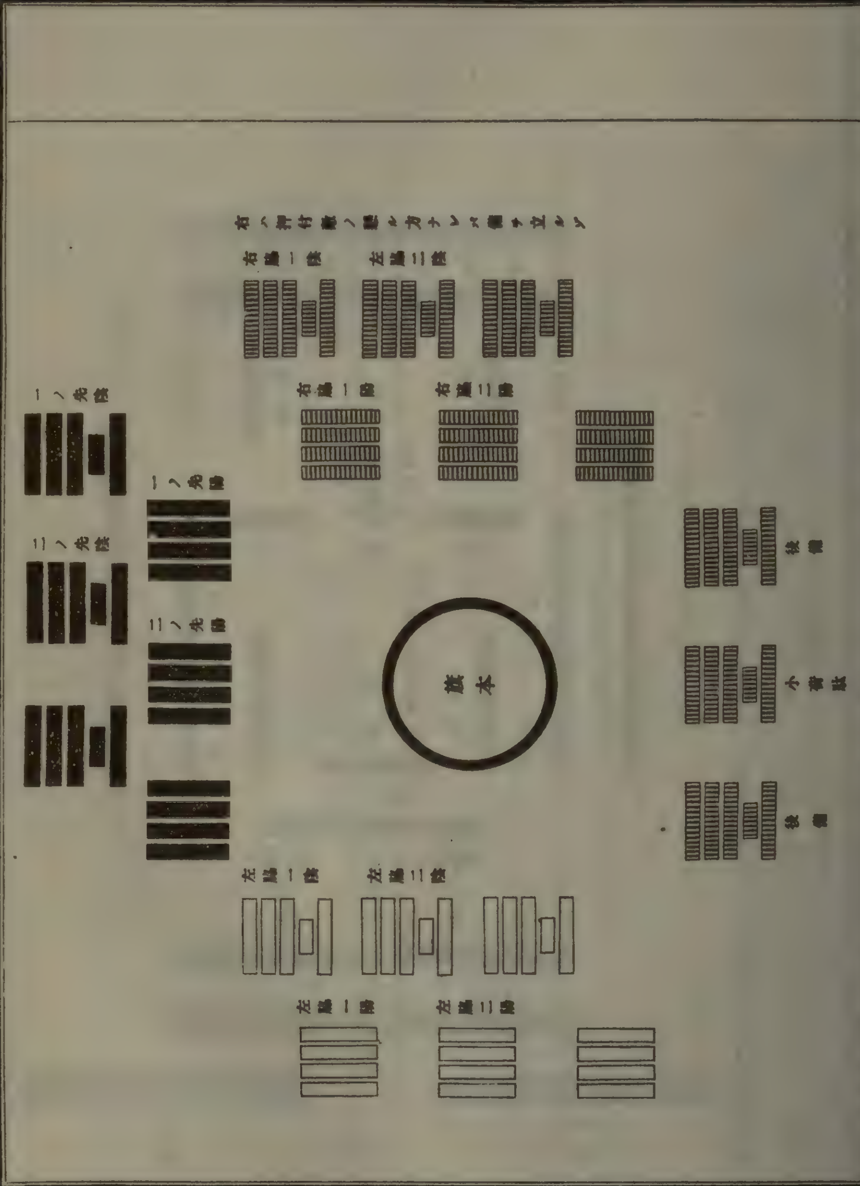
〔三代實錄 清和 十八〕貞觀十二年八月十日庚寅、寫鼓吹司陣法式一通、賜隱岐國宰申請也、

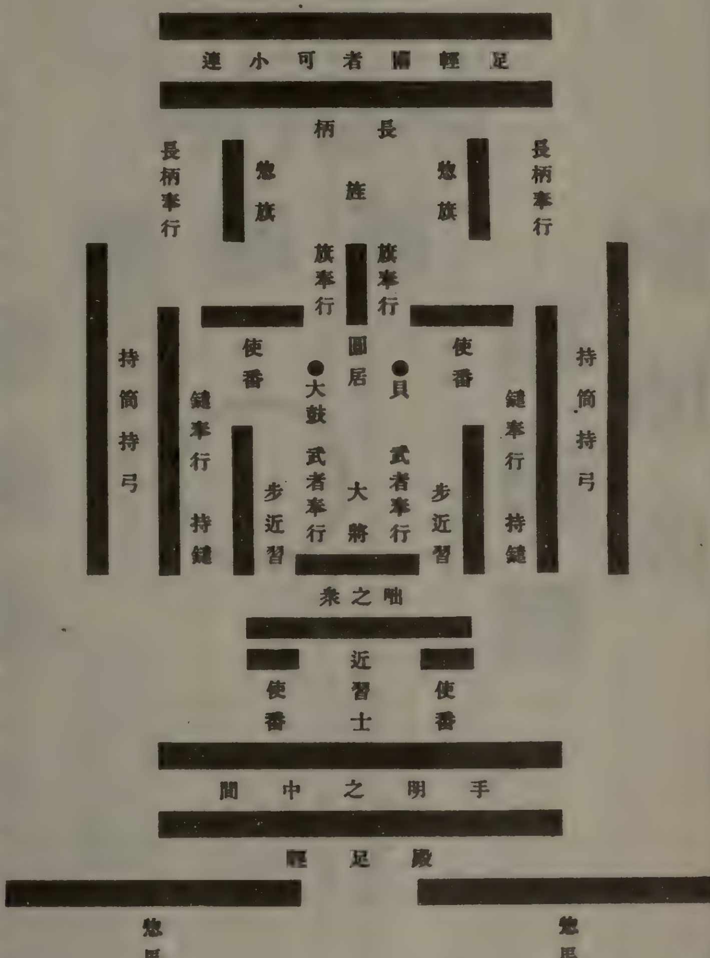
〔三代實錄 陽成 三十五〕元慶三年三月二日壬辰、正五位下守右中辨兼行出羽權守藤原朝臣保則飛驛奏言曰、○中略案去延曆年中被下當道陣圖、以一萬三千六百人爲一軍、分作三軍、輜重八百人、擔夫二千人、○下略

〔兵法雄鑑 座備 二十八〕方圓八陣座備　兵法曰、陣數有九、中心零者大將握之、四面八向皆取準焉、陣間容陣、隊間容隊、以前爲後、以後爲前、進無速奔、退無遽走、四頭八尾、觸處爲首、敵衝其中、兩頭皆救、數起於五、而終於八云々、

方圓座備圖、是は[illegible]作法也、樣子は時に可隨、口傳深し、




右脇一隊
左脇二隊
旗本



私に云、右の繪圖は二萬五千の人數積り也、其人數割は、二萬五千の內、五千は國の堺目の留守居に殘し、殘り二萬の內、三千旗本とし、壹萬七千を五百づゝの備、三十四備に作、奇正の備をわけ、陰陽を組て、如繪圖六手づゝ四方にくばり、合二十四備一萬二千を働備と定、殘り十備の人數五千

を遊軍とす、都合二萬五千也、但是は方圓の作法ばかりを云もの也、樣子は敵により、所によりて
かはるべし、口傳、

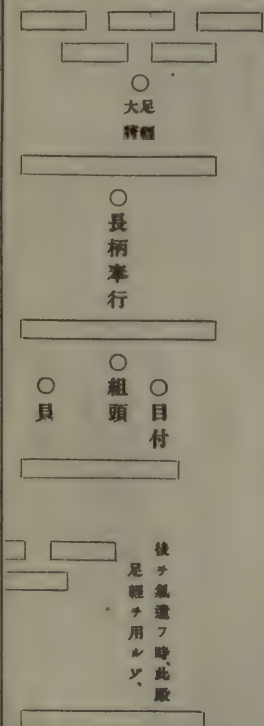
方圓軍法九ヶ條之事

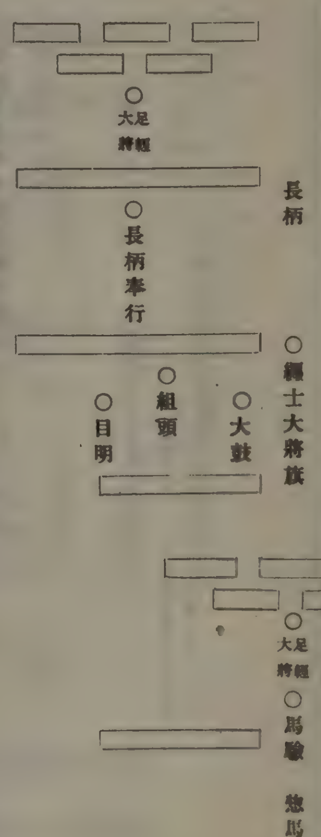
一、手分、手配、手組、結解、五ッの作法之事、　二、備陰陽の事、　三、一二陰陽の事、　先を陰とす、陰にして陽の心あり、二を陽とす、陽にして陰の心あり、兵法曰、左爲陽、右爲陰云々、亦云、陰謂陰二其機、陽謂隱其勢云々、古語云、前備猶深後備輕、又云、前備猶輕後備深、　四、備間積之事、　一と二との間五町ばかり、二と旗本との間十町ばかり、脇は旗本につく、横は一二に順ず、但所により人數によるべし、口傳深し、　五、跡の二手は見物のごとし、　六、しまり、小荷駄奉行備は備未なきものと可存事、　七、遊軍勢之事、　八、三ッの合戰まで可持事、　九、其をいるをかねてより定、勝をみかたに可殘事、

五行の座備之事

一　五行座備と云は、五十騎六十騎ばかり、一備に用る時の備を可立作法の事也、方圓座備の時も、先脇後の諸手は皆五行の座備を可用也、口傳深し、

五行座備之圖　略〇中





五行座備作法五ヶ條之事

一、武者奉行と云事なし、其大將、武者奉行のごとくにして合戰可ㇾ仕事、

二、備五重に立るは、一に足輕、二長柄、三武者奉行、四旗、五惣馬也、まとひ、貝、太鼓は、大將の前に備べし、いづれも如二繪圖一、

三、馬上みなおり立て繪圖のごとく五重に備、者頭、物奉行、足輕大將、馬上にて乘めぐり備の下知を仕べし、

四、足輕けだいありとも、二にわけ、陰陽を定、五人に一人づゝの警固の侍を指添、小つらなりに連て、弓を射、鐵砲をはなすとも、かたみにはなして、矢づかひ、藥込の間を、まつたくすべし、

五、小連につらなる時のけいごは、足輕大將の與力侍なるべし、

〔續日本紀淳仁二十三〕天平寶字四年十一月丙申、遣二授刀舍人春日部三關、中衞舍人土師宿禰關成等六人於太宰府、就二大貳吉備朝臣眞備一、令レ習二諸葛亮八陣、孫子九地、及結營向背一、

〔大和事始武備五〕八陳七　按ずるに、吉備公は、元正天皇養老元年に入唐し、聖武天皇天平七年に歸朝せらる、又孝謙天皇天平勝寶四年に入唐し、同六年に歸朝せらる、かく二度まで入唐し、文

武の學を究來りし人也、されば此時始て八陣を我國に傳へ來られし故、此人に就て學ばしめ給ひじなるべし、軍學者流に云傳ふるは、仲哀天皇豐浦宮に下りおはしましける時、異國より履陶公といへる兵の道をゑれるもの來り、天皇に異國の兵術を授奉る、則黃帝の八陣也、天皇これを皇后に傳へ給ひ、皇后此術を用て、筑紫を征し新羅を伐給ふ、其後應神帝年長じ給ひて、皇后此兵術を授給ふ、かくて應神帝八陣の軍法を御母后より傳ゑり給て、御在位の間、兵術に御心を用給ふ、崩じ給ふ時に臨で、此書もし殘て世間に傳はらば、却て兵を好もの出來て、亂の基と成べしとおぼしめし、燒て是を呑給ひ、吾死後必軍神とならんと宣ふ、是によりて後世應神帝を軍神と稱し奉る、崩御の後御廟を八幡宮と云、八陣には八の幡ある故八幡と云也、是日本に八陣傳來の始也と云、(訓閱集に此說をのせたり)其說理あるに似たりといへども、古代の書に見ゑざれば據としがたし、

〔蜀書五諸葛亮傳〕亮性長於巧思、損益連弩木牛流馬、皆出其意、推演兵法、作八陣圖、咸得其要云、

〔孫子九地〕孫子曰、用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圮地、有圍地、有死地、諸侯自戰其地者、爲散地、(士卒戀土、道近易散、)入人之地而不深者、爲輕地、(士卒皆輕返也、)我得亦利、彼得亦利者、爲爭地、(可以少勝衆、弱擊強、)我可以往、彼可以來者、爲交地、(道正相交錯也、)諸侯之地三屬、(我與敵相當、而旁有他國也、)先至而得天下之衆者、爲衢地、(先至得其國助、)入人之地深、背城邑多者、爲重地、(難返之地、)山林險阻沮澤、凡難行之道者、爲圮地、(少固也、)所由入者隘、所從歸者迂、彼寡可以擊吾之衆者、爲圍地、疾戰則存、不疾戰則亡者、爲死地、(前有高山、後有大水、進則不得、退則有礙、)是故散地則無戰、輕地則無止、爭地則無攻、(不當攻、當先至爲利、)交地則無絕、(相及屬也、)衢地則合交、(結諸侯也、)重地則掠、(蓄積糧食、)圮地則行、(無稽留也、)圍地則謀、(發奇謀也、)死地則戰、(殊死戰也、)

〔信玄全集末書上卷之一軍法〕八陣之事

戊亥　角

一　天陣

乾地　正

一天神十六、外方內圓、四爲風揚、其形象天、爲陣之主、爲兵之先、善用三軍、其形不偏、一備押陣取物見備場手組手分合戰場ト備頸帳認場陣替、

二天陣之中、一風、二變蛇、三虎、爲鄕風、故是天陣之內也、四天也、

三天陽而動、旗二本動靜早有、

四諸卒勝負之動者、頭奉行下知、以金角鼓懸待有早靜進退之事、但早靜也、靜早也、

未申　角

二　地陣

坤　正

一地陣十二、其形正方、雲生四角、冲敵難當其體莫測、動用無窮、獨立不可配之於陽、

二地陣之中、一雲、二變鳥、三爲鄕龍雲、是地陣之內也、四地也、

三地陰而不動、旗一本武田家之馬印上之麾黃色也、正地陣備之魂魄也、旗三本五本、或ハ八本也、

若天地者本乎旗號、

一天地十六、或ハ十二者、廿八宿也、

辰巳　角

三　風陣

巽地　正

一風無正形、附之於天、變而爲蛇、其意漸玄、風能鼓物、萬物撓焉、蛇能爲繞、三軍懼焉、

二風附於天、此是諸士卒旛指物也、故奇兵也、

三風附於天、故居四維、有圓、天居兩端、變而成蛇、如此則天陣風陣蛇陣虎陣在是、

四虎陣既兌巽上下而風爲鄕　風雲者本乎旗名、

丑寅　角

四　雲陣

艮地　正

一雲附於地、始則無形、變爲翔鳥、其狀乃成鳥、能突擊、雲能晦冥千變萬化、金革之聲、

二雲附於地、居四角、有方地居中間、變而成鳥、是諸士卒麾指物正兵也、故正奇者爰而一手二手也、

地雲鳥龍四陣、是具合而八陣也、

三龍陣既震艮上中而雲爲鄕

東　卯方

五　龍陣

震木地　奇

一天地後衝龍變、其中有手有足、有背有胸、潜則不測、動則無窮、陣形赫然、象名爲龍、

二龍虎鳥蛇者、本乎隊伍之別、故龍虎鳥蛇之諸人、以天地之旌旗懸待、表裏也、以風雲之麾指物而進退之爲動者也、

三爲鄕飛龍雲、龍靜而早、

四風雲兩陣之中、龍虎鳥蛇之四具トモニ六備也、

五天地蛇虎之四備也、風蛇虎之三者天陣具、故以正變而成奇、奇變而成正、

酉　酉方

六　虎陣

兌金地　奇

一天地前衝變爲虎翼、伏虎將搏盛其威力、淮陰用之、變化無極、垓下之會魯公莫測、

南　午方

七[三] 鳥陣

離火地　奇

一鷙鳥將搏必先翱翔、鷙凌霄漢、飛禽伏藏、審之而下、必有摧傷、一夫突擊、三軍莫當、

二鳥始雲變、爲鳥翔而突擊、雲能晦冥、諸卒千變萬化、金角鼓爲大要、

三雲鳥龍蛇四備也、而雲附於天、變而成鳥、龍震艮爲鄰、艮雲陣也、故龍虎鳥蛇風雲應之指物、而忠功之心操走廻也、

北　子方

八[四] 蛇陣

坎水地　奇

一風爲蛇、蟠附於天、成形勢能圍繞、性能屈伸、四奇之中與虎爲鄰、後變常山、首尾相因、

〔唐太宗李衛公問對上〕太宗曰、天地風雲龍虎鳥蛇、斯八陣何義也、靖曰、傳之者誤也、古人秘藏此法、故詭設八名耳、八陣本一也、分爲八焉、若天地者本乎旗號、風雲者本乎旛名、龍虎鳥蛇者本乎隊伍之別、後世誤傳、詭設物象、何止八而已乎、太宗曰、數起於五、而終於八、則非設象、寔古制也、卿試陳之、靖曰、臣按、黃帝始立丘井之法、因以制丘、故井分四道、八家處之、其形井字、開方九焉、五爲陣法、四爲閑地、此所謂數起於五也、虛其中、大將居之、環其四面、諸部連繞、此所謂終於八也、及乎變化制敵、則紛々紜々、鬪亂而法不亂、渾々沌々、形圓而勢不散、此所謂散而成八、復而爲一者也、

〔三將軍解三〕諸葛孔明之八陣之法者、本井田、或曰、本八卦、合爲一、分而爲八、名之以天地風雲龍虎鳥

蛇、或曰、天地風雲四者正、而龍虎鳥蛇四者奇也、或曰、天地風雲四者本旌旗之名、龍虎鳥蛇之四者本地名、皆以無實、爲欺敵號其名、地有高卑曲直廣隘方圓、軍有衆寡強弱、因地以設備、因人以制勝矣、豈求其名、周太公望、齊管仲、蜀孔明、皆以八陣、唐李衛公用六花陣、本八陣、誠以古今不易之陣法也、

八陣未分之圖○中略

風陣 左角	鳥陣 先鋒	地陣 右角
龍陣 左爪	大將	虎陣 右爪
雲陣 左牙	蛇陣 後陣	天陣 右牙

前門

先鋒は先備なり

右皆井の字の形なるは、井田より起るの理なり、井げたの形也、大將陣は中央也、圖八形八方は、八家の民作りて家をたもつ、中は君に奉る、これ年貢の田なり、君座なるによつて、陣座にても中に大將おはします、中を加へて九軍なり、

〔甲陽軍鑑品第二十七九下〕山本勘介圖々之例引事

一天文十六年丁未二月二日に、晴信公山本勘介をめして、軍法備の立樣を申せとあれば、勘介○中略我等不案内にて候へば、承及たる三略とやらんに伍と申儀と、さては軍林寶鑑と申物の本に御座候げに候間、是をもつて御工夫あそばし、諸葛孔明八陣の圖を、御屋形樣御手前にて諸人の合點仕る樣に和げなされ御尤にて候、からの軍法、一魚鱗、二に鶴翼、三に長蛇、四に偃月、五に鋒矢、六に方向、七に衡軛、八に井雁行、是よきと申ても、日本にては皆合點仕らず候、其儀晴信公御分別次第になされ、諸人の是をよく存ずる樣になさるべきと山本勘介申上る、

〔甲陽軍鑑十四品第四十下〕唐國諸葛孔明八陣圖

●魚鱗　●鶴翼　●長蛇　●偃月　●鋒矢　●方圓○　●衡軛　●井雁行　●春向北　●秋ハ向南也○□△是を以て相をとる、有口傳、

右をよく信玄公傳受ありて、其後工夫を被成、新軍法其外諸法度の仕置をあそばし給ふ事、皆是信玄公と合て四大將○北條氏康、武田信玄、上杉謙信、織田信長、何も取合故也、さるにつき軍法は先當代四大將よりはじまる、むかしはありといへども、氏康公四代目の御時分からして、追々取失たるとみえ候、軍法の儀は信玄公、謙信公兩君なれ共、是も三分二は信玄公より濫觴する、○中略いやしくも信玄公分別才覺の眞似をもつて工夫思案して唐國諸葛孔明陣をとりしき、備へまうけ、城をかまへらるゝ儀、尋て是をならひ、陣取を大小二にして、其外人數備、三つのかまへ、かずのはたらきやうを仕り、我子孫計りにあらず、諸人なりといふ共、扶桑戰國の中において、數萬の衆を將て軍をやるに、うたがひをさだめさせまゐらせんがための信玄が軍法如此と宣ふ也、

〔軍法侍用集十二〕八陣習之事

一水前に流るを魚鱗と云るべし、前の丸きは鶴翼、前のとがりたるは鋒矢、山前に有は長蛇、山後にあるは方圓、山をひがしにうけたるは偃月、水を東にうけたるを衡軛、山西に當たるを井雁行と知べし、

〔大友興廢記十二〕伊東三位入道義久と合戰之事

三位○伊東義祐内の侍伊東權守とて、大剛一の鍵口あり、三位殿を諫ていはく、○中略此度の敵魚鱗の陣をとらば、味方は彎月の陣をはるべし、方圓をとらば、此方よりは雁行をとるべし、鶴翼をとらば、長蛇をとるべし、鋒箭をとらば衡扼を取べし、軍法の義は、兼々ならしをかるゝといへども、今彌念を入、今日は軍の議定を被成、明日早天に御人數を出されん事御尤に存候、

魚鱗

〔別所長治記〕山城守三宅治忠兩人、軍評定ノ爲行秀吉ノ館ケルニ、秀吉ノ曰ク、長治西國ノ可有案内者ト宣フニ付、信長公ノ爲代官下向ス、各ノ軍立ノ次第、不日ニ擒敵スル謀計モヤアルト被問ケレバ、三宅申テ曰ク、西國發向ノ先手、別所家に被仰付、我等存ズル旨ハ、今度ノ御合戰ハ、一國一城ノ小ゼリ合トハ各別也、輝元ハ大身ナリ、萬死一生ノ合戰五度モ十度モナクテハ叶マジキカ、御手間トラレ候ハント存ル、就其先手陣ノ張ヤウ、當家代々定メ置所ハ、〈略〉〇中味方東ニ陣ヲ張時、敵西ニ陣取ラバ、味方鋒矢形三角ニ陣ヲ張也、西ヨリ東ヲ金剋木ト剋ス、依之味方三角形ニ陣ヲ張事三離火也、火剋金ト西ヲ剋ス、同閑西ニ陣ヲ、取時、敵東ニ陣ヲ張時、尤金剋木ト剋ストイヘドモ、春王分タルニ依テ其恐アリ、味方必彎月陣ヲ張、半月形ハ金也、重而金剋木ト剋ス、二金剋木、味方南ニ陣取時、敵北ニ陣ヲ張時ハ、北ヨリ南ヲ水剋火ト剋ス、此時味方衡軛ニ陣ヲ張、衡軛ハ四方、四方ハ土也、土剋水ト剋ス、味方北ニ陣ヲ張ル時、敵南ニ陣取、水剋火不及論、敵若衡軛陣ヲ張バ、味方方圓圖形魚鱗ノ陣ヲ張ナリ、圓形ハ木、衡軛ハ土ナレバ、木剋土ト剋ス、魚鱗方圓ハ水陣ナリ、是又北方ニ王ス、味方彎月陣モ宜シ、金ノ陣ナリ、衡軛ヨリ土生金ト生ジ四季共ニ順之、此外陣形ニ樣々ノ事アリ、

〔保元物語二〕白川殿攻落事

敵魚鱗ニ懸破ントスレバ、味方鶴翼ニ連テ射シラマカス、

〔鈴錄八陣法〕魚鱗ノ備ト云ハ、車輪陣ヲ、古ノ博士ガ、キヨリント讀傳タルヨリ、魚字ヲ付替タル歟、又魚麗陣ヲ誤リタルナリ、鶴翼ハ虎翼陣ノ唱誤ナリ、車輪虎翼ナヘ、モト表緒李筌ガ杜撰ナレバ、マシテ是ヲ誤リタルハ、論ニ不及コトナリ、

〔漢書七十列傳〕陳湯、字子公、〈略〉〇中望見單于城上、〈略〉〇中出百餘騎往來馳城下、步兵百餘人、夾門魚鱗陳、〈師古曰、言其相接次、形若魚鱗、〉講習用兵、

〔帝範序〕夕對魚鱗之陣、朝臨鶴翼之圍、（前漢陳湯傳曰、步兵百餘人、夾門魚鱗陣、師古曰、言其相接次、形若魚鱗、莊子徐無鬼曰、君亦必無盛鶴列於麗譙之間、注曰、鶴列、陳兵也、麗譙、高樓也、魚鱗鶴翼、皆陳兵之形勢也、）

〔源平盛衰記三十五〕粟津合戰事
木曾義仲ハ、魚鱗ノ戰トテ、魚ノ鱗ヲナラベタルガ如シ、サキハ細ク、中フクラニコソ立タリケレ、

〔太平記六〕楠出張天王寺事
楠（正成）思程敵ノ人馬ヲ疲ラカシテ、二千騎ヲ三手ニ分テ、（中略）一手ハ西門ノ石ノ鳥居ヨリ、魚鱗懸ニ懸出ツ、

〔應永記〕同キ年（應永六年）十月十三日、大内左京權大夫義弘入道和泉ノ堺ノ浦ニ著キ、（中略）聽テ集材木、以數百人之番匠盡種々之功、勢樓四十八、箭櫓一千七百、東西南北合テ十六丈ノ魚鱗鶴翼ノ陣取ナレバ、諸葛亮ガ呉國ヲ討取ントテ、江ニヨリテ天地風雲飛龍翔鳥虎翼蛇蟠ノ八陣ヲ造シモ不過之トゾ見ヘケル、

〔加越闘諍記一〕加賀能登越中三ケ國ノ一揆越前エ亂入ノ事
大將（朝倉敎景）則諸卒ニ向テ下知シケルハ、（中略）水ノサカマク處ハ大石アリト心得、馬ヲ打ノケ渡ベシ、向ノ岸近クナラバ、轡ヲ雙テ魚鱗ニツクツテ相向ベシト、諸卒ヲハゲマシケレバ、（下略）

鶴翼

〔源平盛衰記二十九〕平家落上所々軍事
畠山（重忠）ハ軍構ゾシタリケル、鶴翼ノ軍トテ、鶴ノ羽ヲヒロゲタルガ如クニ、勢ヲマバラニ立廣テ、小勢ヲ中ニ取籠ル支度也、

〔太平記六〕楠出張天王寺事
楠（正成）思程敵ノ人馬ヲ疲ラカシテ、二千騎ヲ三手ニ分テ、（中略）一手ハ住吉ノ松蔭ヨリ懸出テ、鶴翼ニ立テ開合ス、

長蛇

〔梅松論下〕正月三○建武年十六日、○中略義貞大將として、三條河原の東の岸に、西に向ひてひかへたり、御方○足利尊氏ノ軍は大勢にて鶴翼のかこみをなし、數千騎の軍兵旗を虛空に飜し、時の聲天地をおどろかし、互に射矢は雨のごとし、

〔陸奥話記〕以九月五○康平年五日、率精兵八千餘人、動地襲來、○中略於是將軍○源頼義置陣、如常山蛇勢、士卒奮呼、聲動天地、兩陣相對、交鋒大戰、

〔鈐錄六〕行軍　長蛇ノ陣ト云ハ、常山ノ蛇勢ト云コト孫子ニアリ、ソレヲ略シテ常蛇トモ云、常ト長ト字音同ジキユヱ、唐音ニテ何レモヂヤンナリ長蛇トモカク、是ハ首ハ尾ヲ救ヒ、中ハ首尾ヲ救ヒ、首尾ハ中ヲ救フコトヲ云テ、是ゾ長蛇ト云備ノ形ハモトナキコトナリ、○中略而ルニ長蛇ト云名ニ泥テ、蛇ノ屈曲シテ〜〜如此行マチヲスルハ、兒戲ノルイ腹ノ皮ナルコトナリ、

〔碧山日錄〕應仁二年正月十日辛未、晚往木幡、與趙關語、及出師之事、趙曰、鶴翼之設、將軍必在其後、故士卒不勇鋭、則其師敗矣、魚鱗之作、將軍必在其先、故將軍失籌策、則其師潰矣、只恒山蛇勢之體、得其利多也、恒山戒曰、常山、其蛇名曰率然、一身而兩頭、擊其頭則一頭至、擊其中則兩頭皆至、蜀武侯以此爲可也、

〔甲陽軍鑑品第三十五〕十一上 十月十二○永祿年八日には、信玄公かねて御定のごとく、小幡は志田澤上の山を組傳ひにぬまへをし通る、其跡につき、山縣おさへ候へば、山縣につぎ七頭も組づたひに押す、小荷駄奉行內藤は、能小荷駄をすぐり、みませ坂の道の脇を上る、信玄公は御旗本組共に十六備を高き山へあげ、みませ到下を左にみて備なされ候、○中略北條家の衆競か、つて武田勢をくひとむる、○中略一戰をいそぎ度思召候へども、山縣を始、ゆうぐんの八備を、にろねより志田澤の道へおりてをし歸りちやうじやの首尾あふ事、おそき子細は、八がしらの人數五千あまりなるをもつてかくのごとし、

偃月

彎月

〔豊薩軍記七〕堅田合戰之事
薩州ヨリ土持次郎九郎親信、親色治右衛門親秀其勢二千餘人ニテ、先陣ハ城村、後陣ハ汐月邊ニ扣ヘ川ニ添テ長蛇ノ陣ヲトル、

〔飛驒國治亂記〕牛丸治親方小勢トイヘドモ、兼テ期シタル事ナレバ、長蛇ノ備ニテ切マクル、

〔武備志三百三十一〕寇術　倭夷慣爲蝴蝶陣、臨陣以揮扇爲號、一人揮扇衆皆舞刀而起、向空揮霍、我兵倉皇、仰首則從下砍來、又爲長蛇陣、前耀百脚旗、以次魚貫而行、最强爲鋒、最强爲殿、中皆勇怯相參、

〔奥羽永慶軍記一〕佐竹白川城ヲ攻落ス事
佐竹義久、八百餘人將棊頭ニソナヘ、二陣、三陣、偃月ノゴトク陣ヲ張テ待懸ル、

〔川中島五度合戰次第〕弘治二年八月廿二日に、景虎川中島え出張、先年の陣所ゟ進て川を越、鶴翼に陣を取被申候、先年兩度の大合戰の時の陣跡には、村上義清、高梨政頼を陣取せ、圓月の陣形二行に張申候、

〔信玄全集末書上卷之十三異本備變〕彎月ノ備之事
左右ニ相向テ、ソノ形初三ノ月ノ曲リテ彎々タルガゴトシ、故ニ彎月ト云、敵ノ備ホコヤナル時ハ、味方此備ヲ用ヒ、乙矢ヲトムル備右ニアルベシ、左ハ射向、右ハヲシ付ナレバナリ、口傳、

〔鈐錄九陣法〕彎月ハ鋒矢ノウラナリ、敵少勢此方多勢ナル時、備ヲ一面ニ立置キ、但シ一面ナレドモ實ハ三備ニ分置テ、敵突カヽルト中ノ備ワザト引テ、左右ノ備左右ノ端ヨリ懸テ敵ヲ挾打時ハ、彎月ノ形ニナルナリ、○中略偃月ト云ハ別ナリ、〔⌒〕如此ノ形ヲ云ナリ、

〔大友興廢記七〕原田親種と臼杵新助と合戰の事附原田捨鑓切火繩の事幷楠政成の事
新助今一軍とおもひ、七度目には備をかへ、少高き處へ引あがり、鳥雲の陣をとる、○中略原田見て、

鋒矢

方圓
方向

先の軍に手負死人出來て、無勢なりと心得ながら、よき軍法者なれば、魚はあみを以て亡すと云義にまかせ、彎月に備突てかゝる、

〔鎌倉大草紙〕應永廿二年十月四日、未明より佐介の口々へ御勢を被差向、〇中略 二千餘騎鳥居の前より東に向、鋒矢形に張陣、

〔鈐錄陣法九〕鋒矢ト云ハ、少勢ニテ多勢ニ向ヒ打破ントスル備ナリ、足輕ヘ如此タチ、射立打立シテ、跡ニ武者ヲ一如此立テヽ、足輕競相ヲ見テ兩ヘサツト開ク時、武者急ニ突カヽリ、或ハ馬ヲ入ルヽナリ、急ニ進ム勢ヲ顯ン爲ニ一如此ニ圖シタルモノナリ、

〔應仁記三〕但州合戰之事

應仁二年戊子三月廿日〇中略 太田垣土佐守、父子京都之留守ニ同名新兵衞尉在ケルガ、〇中略 夜久野ノ賀茂山ニ打立テ遙ニ見レバ、大將ト見エテ旗二流究竟ノ勢ドモ魚鱗ニ連リ、廣キ野中ニ見エケレバ、味方ハ小勢也、如何ト思惟スル處ヲ、太田垣新兵衞、行木山城守ツヾケヤ者ドモトテ鋒矢ヲアヲハシ、切崎ヲソロヘテ、打テカヽリケレバ、〇下略

〔大友興廢記八〕宗麟公御出馬の事同軍の事

先陣戸次道雪是を見て、軍功者なれば所柄に應じて四季五行相尅をそむいて、味方三頭七千二百餘二手にわけて、田原親廣臼杵鑑速一組になりならべて鋒矢の陣をとり、味方より手を出さず、敵の行を見よと下知せらるゝ、

〔信玄全集末書上卷之八陣取上〕方圓陣取ノ事

方圓ノ陣取ト云ハ、黃帝所立ノ陣法也、兵法ノ秘極ニシテ、軍法ヲ定ルニ大キニヨシ、備ヲ立、陣屋ヲカクルノ作法ナリ、タトヘバ敵國フカクハタラキ入テ陣取共、夜合戰ノヲソレナク、或ハ備ニ用テハタラク時ハ、八方ニ敵ヲウケテモ不意ヲウタルヽコトナシ、此故ニ八方面共名付、必此作

法ヲ用テ、敵ニヨリ所ニ隨テ取ナリ、陣ノ圖左ニ記之、方圓小陣取ノ圖又ハ小營也トシ二百五十騎四備ヲ一陣取ノ營法ウシロヲ爲前、前爲後ノ圖、雜兵四千計ノ積也、私云和漢ノ字書ニ本書ノ方㒺ノ字ナキヲ以、方圓トカキアヤマルカ、㒺ノ字ハ信玄ノ工夫、甲州鄕談ナリ、

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕陣取の事

方㒺、是ハ敵國深く働時、夜合戰にあはざる陣取也、もとより軍法に大によし、但信玄公宣ふは、十ケ國迄は此陣取然るべし、又二十ケ國より上には、旗本定りて多勢たるべきとて、魚鱗の陣取と名付て一つあそばしをかる、それは信玄公御工夫なり、○中略大軍にて此陣取になさる、共、御旗本計の事、先衆はいづれも方㒺の陣取よかるべく候、陣取に付たり、一つ本がゝり、一つすてがかり、一つあひことば夜々にかはる事、一つあんじきあり、侍大將衆かりてのどう有、

〔鈐錄八陣法〕和軍ニ云ヘル方㒺ト云ハ、方圓陣ノ圓字ヲ、抄物ガキニ㒺トカキタルヨリシテ、展轉書寫ノ誤ヲ不知文盲ナリ、

雁行

〔川中島五度合戰次第〕同年天文二十三年八月○中略武田晴信も同十五日河中島を通、貝津の城へ入、十六日人數を押出し、東向に雁行陣取也、

〔加越鬪諍記二〕敷地菅生口合戰幷敵敗軍事

宗滴○朝倉淺是ヲ御覽ジテ、○中略味方ハ山ノ頂ニ一面ニ立、常蛇雁行ニ備、猛勢ニ見ユルヤウニ可計ト云付、遣シケレドモ猶覺束ナシトテ大對ツヾイテ出ラレケル、

〔大友興廢記十七〕なすみ松合戰の事

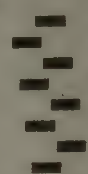
先陣秋月治部少輔、三千餘の勢を具して、古所の城より四里なすみ松と云處迄押出し、雁行の陣をはる、

衡軛

〔鈐錄九陣法〕衡枙ト云ハ、一備ヅヽ働入ル形ナリ、雁行ト大抵同事ナリ、

〔信玄全集末書上卷之十三吳本備鑒〕衡軛ノ備ノ事附クリ引　宿城ナドヘ働入、放火ナド用時用、

衡桅ノ圖



龍陣

〔勝闘記五〕八陣之圖

龍之陣ノ事、此陣ハ山ヲ前ニ當テ、後ニ河ノ流ヲ當テ可ㇾ取、○下略

〔勝闘記七〕埜龍破ㇾ軍行之事

敵五手ニ行テ向ニ、御方ノ勢三手若ハ二手ニ在トモ、五手ニ可ㇾ翼也、鋒劒ヲ打合則五手ヲ一手ニ圖メテ、敵五手ノ手サキヘ切テ可ㇾ懸、是龍陣也、口傳在ㇾ之、

〔大友興廢記十七〕長尾口合戰の事幷千部か峰軍の事

秋月高橋兩手六千餘を二段に備、○中略伊東外記介此等を侍大將として押出し、川を前にあて、龍陣をはる、

虎韜

〔太平記十〕鎌倉兵火事付長崎父子武勇事

長崎三郎左衛門入道思元、子息勘解由左衛門爲基二人ハ、○中略一所ニ打寄テ、魚鱗ニ連テハ懸破リ、虎韜ニ別テハ追靡ケ、七八度ガ程ゾ揉ダリケル、

○按ズルニ、虎韜ハ六韜ノ一ナリ、

〔鎌倉管領九代記八上〕武州河越城沒落附上杉左近太夫朝成被ㇾ生捕

敵○北條また虎韜にあつまりて碎かんとすれば、上杉方雁行に連なつて相當る、

〔明德記中〕十二月晦日○明德二年、中略、山名播磨守滿幸、出雲、伯耆、隱岐、丹後四ケ國ノ勢一千二百餘騎、皆雀ノ森ニ魚鱗ニ進、虎轉ニ開テ、一足モ退ゾカズ、一千ノ中ニ萬卒ノ死ヲ輕クセヨト進メテ辯タリ、

周淵

車掛

〔勝國記五〕八陣之圖

周淵之陣ノ事、敵ノ城ヲ東ニ置テ、西ニ陣ヲ取ハ大吉也、前ニ水流レ、後ニ山ヲ當テ取ベシ、山水ナケレドモ、陣ノ前後ニ路有ハ周淵也、

〔大友興廢記十七〕長尾口合戰の事并千部が鋒軍の事

豐後勢も川につゐて周淵の陣を取、

〔兵法神武雄備集二十四變陣〕車がゝりの事三ヶ條

一車がゝりといふは、我備をたて、切々まわりていくめぐりめに、敵のはた本と、我はたもと、打合するとつもりてかゝるをいふ也、但人數により、地形による、口傳、　私に云、車がゝりといふは、車輪のめぐりて行ごとくあたらずと云備なく、敵方へかゝる行を車がゝりと云也、然ども常に此備を可用にあらず、大敵に逢て無二の防戰をとぐるとき、人數をはかりまわり行、みかたの備いくめぐりめにかならず敵とうち合、我はたもと、敵のはたもと戰といふ事をかんがえてすゝむべし、但人數により、地形によるといふは、味方大軍成か、地形障多き時は、人數を廻す事自由ならず、故に車掛をなすべからざるといふ也、古人云、雜兵壹萬五千計より上の人數にては、車がゝりいたすべからずと云、　又云、北越の輝虎、信州におゐて武田信玄と相戰とき、車がゝりをなしたりと云々、世に河中嶋合戰と號す、此法を守べしと云々、

二車掛を留る備の事　傳曰、彎月の備を鋒矢を右にいたすべし、　私に曰、車がゝりは、かゝり來る敵、皆右より來るが故に、備は陰に開て彎月を立、右に陽にとぢて鋒矢をいたすべしと云心也、彎月鋒矢の圖は前に記之、

三車がゝりには、いづれの備をも疊て可押行之事、　私に云、疊といふは押行備に用ゆる事也、車がゝりはいづれも押行備なるがゆへなり、口傳あるべし、

〔甲陽軍鑑品第三十二十下〕九月〇永祿四年十日、明ぼのに信玄公廣瀨の渡りをこし、八千餘の人數にて備をたて、先衆の一左右を待給ふ處に、日出て霧悉消ければ、輝虎一萬三千の人數にて、いかにも近近と備たり、謙信强敵の故、對々の人數にてさへあやうき合戰なるに、まして信玄公は八千、輝虎は一萬三千也、勝と云共討死あまた可在之と、武田の各存ずるは理也、信玄公信州先方浦野と云弓矢功者の侍を召物見にこし給ふ、浦野見て歸、御前に畏り、輝虎はのき候と申上る、信玄公積のよき大將故被仰は、謙信程の者がよひより川をこし、そこにおひて夜をあかす程にてむなしく引とるべきか、但のきやうはいかんととひ給ふ、浦野申は謙信我味方の備をまはりてたてきり、いく度も如此候て、さい川の方へおもむき候と申上る、信玄公聞召、さすが浦野共おぼえぬ事を申物哉、それは車がゝりとて、いくまはりめに旗本と敵の旗本とうちあはせて、一戰する時の軍法是なり、謙信は今日を限と見えたりと有て備を立なをし給ふ、〇中略永祿四年辛酉九月十日信州川中嶋合戰とは是也、

五行陣

〔續日本紀二十三淳仁〕天平寶字五年十一月丁酉、以從四位下藤原惠美朝臣朝狩爲東海道節度使、〇中略調習五行之陣、

〔唐太宗李衛公問對中〕太宗曰、五行陳如何、靖曰、本因五方色立此名、方圓曲直銳、實因地形使然、凡軍不素習、此五者安可以臨敵乎、兵詭道也、故强名五行焉、文之以術數相生相尅之義、其實兵形、象水因地制流、此其旨也、

鳥雲陣

〔太平記三十一〕笛吹峠軍事

夫レ小勢ヲ以テ大敵ニ戰フハ、鳥雲ノ陣ニシクハナシ、鳥雲ノ陣ト申ハ、先後ニ山ヲアテ、左右ニ水ヲ境フテ、敵ヲ平野ニ見下シ、我勢ノ程ヲ敵ニ不見シテ、虎賁狼卒替ル々々射手ヲ進メテ戰フ者也、此陣幸ニ鳥雲ニ當レリ、待テ戰ハヾ利アルベカリシヲ、武藏守若武者ナレバ、每度廣ミニ懸

出テ、大勢ニ取卷レケル間、百度戰ヒ千度懸破ルトイヘ共、敵目ニ餘ル程ノ大勢ナレバ、新田上杉遂ニ打負テ、笛吹峠ヘゾ引上リケル、

〔鈴錄九陣法〕鳥雲ノ備ト云ハ、六韜ニ出タルコトナリ、鳥ノ聚散スル如ク、雲ノ變化スル如クナル陣法ナリ、是ハ山中ノ備ナリ、強チニ備ノ形ニ定マルコトモナシ、細ニ分レテ、五人、十人、二十、三十、四十、五十ヅヽ、幾ツニモ分レテ、方々處々ニ聚散往來シテ、分合自在ナル樣ニスル陣法ナリ、

〔六韜五豹韜〕鳥雲澤兵

太公曰、○中略凡用兵之大要、當敵臨戰、必置衝陣、便兵所處、然後以車騎分爲鳥雲之陣、此用兵之奇也、所謂鳥雲者、鳥散而雲合、變化無極者也、

〔相州兵亂記二〕高見原合戰之事

長享二戊申年六月八日、山内殿上杉民部大輔顯定、同兵庫頭憲房、須賀原ヘ出陣ス、東八ケ國ノ勢ドモ、我モ々々ト馳集テ雲霞ノ如、甲冑ノ光耀テ明殘ル夜ノ星ノ如シ、鳥雲ノ陣ヲ堅メケル、

〔籾井家日記二〕栗田口合戰事

籾井越中敎業ハ、大將ヨリノ仰ニ候、某老人役ニ指南センズルゾ、○中略山谷ノ陣ハ鳥雲ノ法ニヨルト申事ハ、氷上家六ノ卷ノ御傳ニテ候、判官殿三草山ノ義モ同然ト承リ候、平林殿、渡邊殿、細野殿ハ御心得アルベキカ、業光ニシメシ申處ニテ候、

〔奧羽永慶軍記二十二〕舘内坂合戰事

寄手ノ大軍ハ、中野修理○直信ヲ案内者トシテ、○中略南ノ山ノ尾崎ニ、先手ノ多少ヲ敵ニ見セジト、左ノ松森ノ中ニ扣ヘテ、鳥雲ニ陣ヲ張ル所ニ、○下略

〔關八州古戰錄十四〕常州手配山合戰ノ事

常州ノ小田天庵○中略一千餘騎驅出、鬼怒川ヲ前ニ當テ待カケタリ、于時寄手○佐竹義重ノ軍ノ魁首是

ヲ見テ、凡山上ニ備ル敵ハ、鳥雲陣ヲ本トシ、進退分合偏ニ變ヲ要ス、卒忽ニカヽリ怪我スルナトテ、但敵ノ陣氣ヲ望ニ、今季秋ナルニ旌旗悉ク陰ニ傾ク、高氣絶、塵埃立昇レリ、是則實變虚ヲ發スルナリ、敵ノ敗北疑無シ、〈下略〇〉

背水陣

〔太平記十九〕青野原軍事附嚢沙背水事

大將軍ニハ、高越後守師泰、同播磨守師冬、細川刑部大輔頼春、〈中略〇〉六日〈〇延元三年正月〉ノ早旦ニ、近江ト美濃トノ境ナル黒地河ニ著ニケリ、奥勢モ垂井赤坂ニ著スト聞ヘケレバ、コヽニテ相マツベシトテ、前ニハ關ノ藤川ヲ隔、後ニハ黒地川ヲアテヽ、其際ニ陣ヲゾ取タリケル、抑古ヨリ今ニ至マデ、勇士猛將ノ陣ヲ取テ敵ヲ待ニハ、後ハ山ニヨリ、前ハ水ヲ境フ事ニテコソアルニ、今大河ヲ後ニ當テ陣ヲ取ラレケル事ハ、又一ノ兵法ナルベシ、

四堆陣

〔明德記上〕御所樣〈〇足利義滿〉ニハ、十二月〈〇明德二年〉廿五日ノ夜御合戰ノ御評定アルベシトテ、諸大名ヲゾ召サレケル、〈中略〇〉加樣ニ諸軍勢ハ皆ヒタ甲ニテ、一勢々々打出、内野ニ陣ヲゾ取タリケル、陣ヲ四方ヘ取ヒロゲテ、態ト内野ノ中ヲ廣クアケテ、若敵一方ヲ責破テ裏ヘ切テ入ラバ、諸方ノ陣ヨリ眞中ニオツ取籠テ、一人モモラサズ打トノ巧ナリ、張子房ガ秘セシ四堆ノ陣トハ是ナルベシ、

表裏陣

〔籾井家日記五〕丹波家出二張攝州表一事附攝州靑野合戰事

雅樂殿須知殿下知シテ、運ヲキハメタル必死ノ敵ヲ討取ル陣ヲ作ラレ、雅樂殿ト須知殿ト、兩方ヨリ表裏ノ陣ヲ立ラレテ、一段々々ヅヽ進ミテ勝負ノ候、

器水陣

〔陰德太平記二十二〕毛利元就誅二井上一黨一事

晴久〈〇尼子〉重テ〈中略〇〉大内左京大夫義興ハ、器水ノ陣、器水ノ備ト云事ヲ吾一代ニ工夫シテ、專ラ被レ用タルトカヤ、先年大内太郎山口ヲ流牢シテ、某ヲ頼ミ寄居セラレシニ因テ、此法ヲ傳授シヌ、總

雜陣

ジテ古來ノ兵道ニ、孔明ガ八陣ノ圖、李衛公ガ六華、其外衝陣鳥雲ノ陣、魚鱗鶴翼ナド、其數不爲鮮、サレ共其蘊奧ニ至テハ皆一揆ニシテ、萬法ノ歸元ガ如シ、義興モ、水ノ方圓ニ隨フ道理ヲ以テ、處ニ因敵ニ因テ陣法ヲ立ラル、サル故器水ノ陣、其形有テ其形無、諸家ノ軍法唯古來傳ヘ來所ノ陣取備立ノ圖ノミヲ專用トスルハ、如誤認定盤星、又ハ空シク文字ノ糟糠ヲ食テ如不知如來正法輪、サレ共文字不離陣ノ理ワリナレバ、六花八陣ヲ離テハ、水上ニ畫スルガ如シ、義興被用ノ器水亦古法ノ外ニ不出シテ、還テ其理ノ勝ル事、出於藍其青キ事ノ勝レルガ如シ、吾家ノ軍法モ亦代代傳來スル所有、中ニモ祖父經久專ラ工夫ヲ被費所アリ、今天下無雙ト承ル元就ノ軍法、存知ニテ候ハンニ、少々物語候ヘト宜ヘバ、豐後守〇井上有景サン候、毛利家ノ軍法、彼家ニ歷代傳來仕候所、大江廣元源二位〇頼朝ノ後見トシテ天下ノ政柄ヲ司リ給、平家追罰ノ比、頼朝伊豆ノ目代八牧ノ判官兼隆ヲ討給テヨリ、所々ノ合戰軍法等ヲ聞及見及所ヲ記置給、其後範頼義經木曾ノ義仲ヲ初メ、一ノ谷八嶋ノ合戰、奉平退治等ノ軍政ノ事ハ、廣元密策ヲ肝膽ノ間ヨリ出サレシ事ナレバ、能存知ノ事ニ候故、錄サレタル書數十卷有之候、其外伊豫守頼義、八幡太郎義家、奧羽十二年ノ合戰ノ軍法等、頼朝卿ノ秘シ置レタリシヲ、廣元被傳受テ傳來仕リ候、又毛利少輔太郎元春新田義貞ノ幕下ニ屬セラレ、義貞、楠正成ガ僉議シテ定メシ軍法ヲモ被相傳テ、其書等于今家ノ珍寶トシテ、元就是ヲ相續セラレヌ、然バ元就ノ軍法ハ、頼義、義家、頼朝、義經等ノ源家嫡々ノ正脈ニテ候、是ヲ本トシテ元就廣覽多識ノ智ヲ以テ按排工夫ヲ被付、追加ノ條々多ク候、法ハ上古ノ名將統道ノ正法、人ハ當今ノ良將ノ所用ナレバ、何レカ愚ノ候ベキ〇中略ト、傍ニ人無ガ若ニ演說ス、

〔兵法神武雄備集二十四變陣〕變陣十ケ條之事

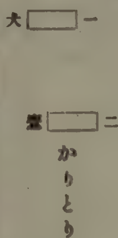
一一。向。二。裏。の。備。の事　私に云、一向二裏の備といふは、陰中陽の備をいふへし、縱ば敵と戰を持時、一向は敵に向て戰を持、一分はひそかに敵の後陣のうらへ相向、是を一は向て二は裏をな

すの備といふ也、言心は敵むかえる備を捨て、まわる人衆のかたへ備を向はしめんとせば、其備うき立べし、しからば前より懸て可討之、敵若あとへ向る人衆不構して前をつゝしまば、追れる人衆跡より合戦を始べし、合戦仕掛がたき時は、所を放火し民屋を亂暴して是を引取、是味方の勝也、縱ば對陣の所へ二裏をなすのみにあらず、或敵の地或敵の陣屋へ、ひそかに備をまわすは、是皆二裏と云の謀略也、何の備も奇正循環の斷は可有といへども、中にも一向二裏の備には、以奇爲正、以正爲奇の手段なき時は、備は一向二裏たりと云共、勝を得る事堅かるべし、委は戰法之卷に出之、

兵法云、以一術爲正以一術爲奇と云是也、



二狩鳥の備の事　私に曰、これはたとへば、鷹をもつて野原に狩をなすときに、先犬をいれてとりをたゝしめ、鳥のたちやうを見、合圖をかんがえて後、鷹を放ときはあたらずといふ事なし、此法をうつして備に用ひたる故を以、狩鳥の備といふなり、この備は一軍を出して敵を試の備とし、二軍を以て其圖を考、やうすを見計て則相進て勝をまつたくなす、これ狩鳥のそなへ也、猶圖に委出之、



三鼎足の備の事　私に曰、俗にかなわ立といふそなへ是なり、これは中軍をひだりにそなへ、前軍を中にそなへしめ、後軍をみぎに備ふる、其形鼎足の三足三所にあるがごとし、これは大軍

にも小勢にも用之てそのとく多し、いふこゝろは一軍破るゝときは、敵をたふ〱と引うけて、左右よりさしはさんで討之、不勝といふ事なし、備間備のつもりに口傳品多し、可受傳授なり、



かなわ

四両翼の備の事　私に云、両翼といふは三軍を三にわかち、一軍を出して敵にむかはしめ、二軍をわかち左右にそなへ、其所の形粧にしたがい、山林溪澗の人衆をかくすべき所を撰て、左右に二軍をかくし置、敵と一軍を戦しめて敵の備紛亂の時、相圖約束を定て一同に備を出して、奇正をもつて討之、不勝といふ事不可有、鳥の風にむかつて翅をのぶるときは、千里を瞬息の間に飛行自由するがごとし、故に是を両翼の備といふなり、大軍を受て討之の備、または小勢の剛敵を以、さしはさみうつの備に用之て其徳多し、委細は口傳をうくべし、



五對中懸の備の事　私に云、對中掛といふは、敵味方互に相備て、敵は味方かゝり來の亂れなんとするを待、味方は敵のかゝるを待て、敵味方相對したる時に、潜に相圖定て、遊兵後軍の内より二三手ばかり、敵により所に依て左右より備をすゝましめ、敵の前備のかたへ出すべし、敵動かずと云事なし、動ときは前より直に戦をはじめ、勝を一時に決べし、不勝といふ事なし、是は大軍に計限らず、たとへ小勢に備たるといふとも、敵味方對の備成時は、此備を用べし、法替といへども心根は一理也、委は繪圖に出せり、

六網鳥の備の事　私に云、鳥をとるべきが爲に、林木にかけよりて網を張、其不意にかゝるを待、

是をかたどりて備るの陣法也、いふ心は鳥の通べき道に網をはり切て、後ちに鳥のとぎるべき丘隅の地に、人居有ごとくいたし、かの道へおとし入て網にかゝるがごとく、敵の備ふべき地の便有とする、山林に見せ勢見せ、旗の謀略をなし、敵の通ふべきみち、思ひがけなき所に、野伏に兵を置て敵の不意を討、皆是網鳥の備といふ也、何にも此心持なくんば不可有と云へり、

七鳥雲の備の事　私に云、是は山戰に出すが故爰には略之、

八まわし備、同廻し備をとむる備の事、　右同じく山戰にいだせり、

九陰の備の事　私に云、是は寡戰出之、

十無二の備の事　右同寡戰出之

〔兵法一家言 七接戰〕本邦諸名家ノ戰法、大概右ニ説タルガ如シ、又我家ニ奥羽兩國偏土ニテ、小拵合シタル戰法有リ、卽山形、最上、會津、葦名、米澤、伊達、南部、武田、下國、秋田、及予先祖、仙北、小野寺、佐藤等ノ、時々小拵合シタル仕方ナリ、其仕方凡八法アリ、一曰兩懸、二曰手詰懸、三曰玉碎、四曰指矢懸、五曰乘崩、六曰獨輪車、七曰駒倒、八曰長柄倒、是ナリ、此小拵合仕方モ心得置ベシ、且又時ニ因テハ此諸法モ亦用ル所モ有ベキナリ、　兩懸ノ戰法ハ、持楯ヲ先手前一面ニ押並ベ、其陰ニ弓鐵炮ヲ一人隔ニ組合テ備ヘ、楯隙間ヨリ鐵炮ヲ少シ打掛ナガラ、足ヲ早テ疾進ミ、敵間十四五間迄ニ押詰テ、乃チ楯ヲ捨テ鐵炮ヲ一齊ニ打放シ、弓ハ矢繼早ニ兩三矢ヅヽ射掛テ、敵ノ披靡所ヲ足輕ノ後ニ備タル武士等、各々得道具ヲ打振リ急太鼓ノ調子ニ從ヒ、驀地瞎ニ敵中ニ打入テ當ヲ幸ニ切倒ス、弓鐵炮足輕モ持タル武器ヲ「ワワソク」ニ掛ケ、刀ヲ抜テ諸士ニ繼ギ、喊號テ切込ヲ法トス、此ヲ兩懸ト云フハ、弓鐵炮ノ兩掛ノ義ナルベシ、手詰懸ノ戰法ハ、兩懸ノ如ク持楯ヲ陣前一面ニ押並ベ、其陰ニ力量強ク勇壯ナル者ヲ撰ビ、二十五人ヲ一組トシテ各々大太刀、大長刀、大鳶口、大身鎗、長棒ノ類ヲ持セ、小勢ナラバ五組ト六組、大勢ナラバ二十組モ三十組モ用ヒ、疾進テ敵間一町許

ニ詰タル時ヨリ、大鼓ノ調子ヲ早シ、弓鐵炮ヲバ放コト無ク、敵間五六間マデニ楯ヲ押詰サセテ、頭付ノ急太鼓ヲ相圖トシテ、楯陰ヨリ右壯士喊々聲ヲ揚テ敵中ニ割入リ、縱横無碍ニ敵兵ヲ打倒シ、二之手ノ人數モ此ニ繼ギ、大ニ鯨波ヲ作テ頻ニ皆勇進テ、一擧ニ敵ヲ打崩ス、此ヲ手詰懸ト云フコトハ、弓鐵炮ヲ事トセズシテ、初ヨリ手詰ノ勝負ヲ專トスルガ故ナリ、此戰法ハ味方ニ彈藥モ矢種モ盡タル時ハ、別シテ便利ナル法ナリ、玉碎ノ戰法ハ、此モ同持楯ヲ前一面ニ立並ベ、其立並ベタル楯陰ニ、松木ニテ製タル五貫目彈ノ木銃ヲ、數十挺並備ヘ、其大筒ノ間毎ニ十匁彈銃ヲ四五挺ヅヽ、組交テ、太鼓ノ調子ヲ早シ、敵間二町程ヨリ小筒ヲ四度路ニ打鳴シ、足ヲ疾シテ持楯ヲ押進セ、敵間十四五間ニ詰タル時ニ相圖ノ貝ヲ吹出セバ、楯持ハ楯ヲ捨テ左右ニ開セ、卽彼大炮ニ煉玉ヲ裝タルヲ順々ニ打放シ、其震動ニ魂消タル所ヲ、十匁彈ノ鐵炮ヲ連打テ敵ヲ披靡セ、烟下ヨリ諸士モ足輕モ、無二無三ニ鋒先ヲ齊テ敵中ニ亂入リ、縱横ニ切廻リ、雌雄ヲ一擧ニ爭フ働キナリ、抑此戰法ニ大筒ヲ用ルコトハ、味方小勢ニテ強敵ヲ受タル時ノ用ナリ、其煉玉ノ輕ヲ裝タル譯ハ、木筒銃ニテ重彈ヲ打ベカラザルヲ以ナリ、且此法大筒ヲ用フト雖ドモ、四五町以內ニテ敵ノ備ヲ打碎ニ用ニ過ザルノミ、指矢懸ノ戰法ハ、敵方ニテ先手ニ鐵炮ヲ夥ク備ヘ、味方ヲ一擧ニ打スクメントスル所ニ、弓ヲ以テ此ヲ射スクメル業ナリ、其法ハ精兵ノ射手ヲ撰ビ、小勢ナラバ數十人、大勢ナラバ數百人、射手多バ愈宜シ、矢種ヲ惜マズ指矢ニ射掛テ、敵兵ヲ射スクメ、鐵炮打共ニ面ヲ揚ルコト能ハザル樣ニシ、且左右ヨリ橫ヲ入レテ手早ク此ヲ打破ベキ仕方ナリ、所謂此指矢懸ハ射術家第一ノ働ニテ、鐵炮打ハ面ヲ振向コトモ能ハザル者ナリ、然レドモ矢種ノ多費ル者ナルヲ以テ、平日能心掛テ矢種數多貯フベシ、數矢ヲ早ク製スル法ハ、小荷駄篇ニ說タリ、合考テ手支セザル工夫怠ルコト勿レ、乘崩ノ戰法ハ、甚勇壯ナル者ナリ、若敵方ニテ弓鐵炮ヲ夥ク備ヘ、嚴ク打掛ケ勢ニ乘テ競來ルトキニ、味方飛道具不足、且小人數ナルトキハ、尋常ノ如キ

軍シテハ敗亡スルコト必定ナリ、故ニ右樣危險ニ迫タル時ハ、此戰法ニ如ハ無シ、其法先強馬ヲバ前ニ立テ、強壯ナル武士五六十騎ヨリ二三百アレバ愈宜シ、國ノ大事是時ナリト覺悟ヲ極メ、必死ニ成テ前後ヲ顧ミズ、一圖ニ敵中ニ乘込テ縱横ニ乘廻シ、蹄ニ掛テ乘崩シ、步兵足輕等モ此ニ繼ギ、得道具ヲ執テ亂入リ、當ヲ幸ニ打倒スベシ、抑此乘崩ニハ馬ノ入樣三等有、先五十騎ニテモ百騎ニテモ、一隊ニ爲テ乘込ヲ一口入ト云ヒ、二隊ニ分レテ敵陣ノ兩端ヨリ乘込ヲバ、二口入ト云フ、又二隊ニ分レテ一隊ハ敵ノ正面ヨリ乘込ミ、一隊ハ脇ニ廻テ横合ヨリ乘込ヲ廻入ト云フ、右何レモ乘込ニハ敵人數ノ厚處ヲ目當ニシテ、驀地暗ニ乘廻スヲ法トス、若敵ノ人數薄方ニ乘込トキハ、鐵炮ノ挾ト爲テ打ルヽコト多者ナリ、昔永祿慶長ノ頃ヨリ、清ノ大祖奴兒哈赤ナルモノ、數々明國ノ北境ヲ犯シ、戰每ニ右乘崩ノ戰法ヲ用テ、明國ノ大兵ヲ打破リ、遂ニ明ノ天下ヲ奪取リ、漢土ノ總主ト爲ルニ至レリ、由是此ヲ觀レバ乘崩モ亦可畏ノ戰法ナリ、○獨輪車ノ戰法ハ、先獨輪車ヲ製スベシ、其法圓三尺程ナル杉丸太ヲ長三間ニ切リ、根方ヨリ一間ト二間トノ間、長一間幅四寸程ノ穴ヲ穿貫テ、其穴ニ五尺六寸ノ片輪車ヲ入レ、丸太ノ眞中、但前後九尺ヅヽノ所ニ軸ヲ刺シ、根方卽チ前端ニ數多竹鎗ヲ著テ、人ノ頭面ヲ突ベカラシメ、又丸太前方六尺ノ間ト、車後ノ方六尺ノ間トニ各二ツ、都合四ツノ穴ヲ横ニ穿貫テ、此ニ四本棒ヲ貫通シ、以テ獨輪車ノ押棒ト爲シ、且其押棒ノ前面ニ楯一枚ヅヽ綴付テ、敵ノ矢玉ヲ悉防樣ニシ、八人ニテ此車ヲ推シムベシ、其略圖ヲ左ニ載ス、○圖略右獨輪車ヲ數多造置テ、一車ヲ強壯ナル車夫八人ヅヽニテ推シメ、敵ニ因リ備ニ應ジ、三十車モ五十車モ、陣前ニ並テ推出シ、敵弓鐵炮ハ楯堅固ニシテ畏ルヽニ足ザレバ、敵間十四五間ニ詰ル迄ハ、平調ノ太鼓ニテ進ミ、相圖ノ貝ヲ吹鳴シ、急太鼓ノ音ニ從ヒ、喊々聲ヲ揚テ無二無三ニ敵陣中ニ押込テ、人馬ヲ撰ズ押倒ベシ、此ニ繼テ諸士モ足輕モ、得道具ヲ執テ一齊ニ喊キ叫デ切込トキハ、一際手痛戰法ナリ、但此車ノ用法ハ、平日能操練セザレバ、事ニ臨テ

精妙ヲ働キ難シ、且合戰之場處ヲ兼テ撰ザルコトヲ得ズ、此車ハ堀切多キ細路、其他山坂ノ險阻ナル處ニハ決シテ此ヲ用ベカラズ、平坦ノ野戰ニ於テハ信ニ無敵ノ軍器ト稱スベシ、駒倒ノ戰法ハ、馬軍ヲ打破仕方ナリ、其法强壯多力ナル軍事ヲ撰、二十五人ヲ一組トシ幾組モ揃ヘ、斬馬刀ヲ人毎ニ執テ打倒スコトヲ働業ナリ、所謂斬馬刀トハ六尺棒ノ先ニ丈夫ナル太刀ヲ著タル者ナリ、此戰法ハ敵方ニ馬多トキハ、馬入スマジキ者ニ非ザルヲ以テ、兼テ此備ヲ調置ベシ、若馬入スル樣子ナラバ、早此備ヲ場先ニ出向シテ、力ニ任セ勇ヲ奮ヒテ馬足ヲ薙倒ベシ、敵馬ヲ備中マデ乘込ルヽニ至テハ、必味方ニ崩色ノ附者ナリ、宜ク神速ニスベシ、又此戰法ハ、敵弓鐵炮ヲ夥ク備ヘ競進テ押掛來ルトキニ、此方ヨリモ出向テ手痛此ヲ打挫ニ用フ、其時ハ此斬馬刀ノ棒ヲ持楯ノ穴ニ刺貫テ、各々ニ此ヲ擔ギ、大鼓ノ調子ヲ平常ヨリ早テ疾進セ、敵間五六間ニ押詰頭付ノ急大鼓ヲ相圖トシテ、楯ヲバ投捨テ無二無三ニ敵中ニ飛込ミ、右往左往ニ薙倒ス、此亦一種ノ戰法ナリ、昔宋劉錡ガ順昌ノ戰ニ、大斧ヲ用ヒ馬ヲ斫シメテ、金兀朮ガ强兵ヲ打破リ、千古有名ノ大勝利ヲ成セリ、予熟按ズルニ當時此駒倒ノ戰法ヲ用ルコトヲ知ラバ其捷愈大ナルベシ、長柄倒ノ戰法ハ、指矢懸ニ似タル者ナリ、然レドモ指矢懸ハ其專主トスル所ハ指矢ノミ、此戰法ハ鐵炮ヲモ弓ヲモ用ヒ、其專主トスル所ハ手詰ノ太刀打ナリ、若敵方古法ノ如ク、鐵炮、弓、長柄、武者ト四段ニ備テ接戰ニ及ビ、鐵炮拵合既ニ究テ弓拵合ト爲リ、弓亦既ニ究リタルトキニ、敵人長柄ノ鎗ヲ夥ク備テ一時ニ味方ヲ打挫ント競進テ押來バ、味方ハ長柄備ヲ設ズシテ、鐵炮ト弓ヲ左右ニ備ヘ、新手ヲ以テ手痛此ヲ打立テ射立テ、散々ニ打披靡頭付ノ急太鼓ヲ相圖ニ、味方諸士得道具ヲ打振、敵陣中ニ飛込テ縱横無碍ニ切廻リ、勇ヲ奮テ勵ミ戰ハヾ一際劇キ掛口ナルベシ、右樣手詰ノ勝負ト爲テヽ、長柄ノ鎗ハ頗ル不勝手ナルモノナリ、右八般ノ戰法ハ、我祖萬福院殿信亮翁工夫セラレタル所ナリ、我信亮翁ハ出羽國雄勝郡深堀大戶澤兩楯ノ主ニテ、兵學ニ達シ、奥羽二州ニ門人甚

敎習陣法

ダ多カリシト云フ、故ニ奥州諸家ノ挊合ニ、往々右八般中ノ戰法ヲ用タル記事見ユ、然レドモ皆偏部ノ小挊合ノミニテ、些モ中國西國等ノ軍ニ、此戰法ヲ用タル傳ノ有ルコトヲ聞ザルナリ、

〔毛利家記二〕一隆景、都ヨリ釜山へ打入セ給シ時、全羅道ノ中筋ヲ通ラセ給フ、〇中略全州トテ古都御座候ニ、近方ノ朝鮮人五六萬程群居、通路切ナド仕由申ニ依テ、其所ニ日高ニ陣ヲナシ給ヒ、峯ニ城ノ如普請手堅サセ給ヒ、井上彌兵衞、國弘孫兵衞、南市右衞門、小坂總右衞門、國貞甚左衞門、此五人ノ者ドモニ、谷ノ道へ木ヲ切倒シテ置セ候へ〇中略ト仰ニテ、五人ノ者ドモ如仰仕シ、〇中略然處ニ夜ノ內ニ朝鮮人三萬程、峯々ニ立渡ヨセ懸べキ體ニ見へシニ、〇中略味方ノ勢ヲワケサセ給ヒ、兩口ヨリ勢ヲ出シ、鐵炮ニテ打サセ給フ、敵ヲ程近ク引付テ打シニ依テ、アダ矢ハ稀也、異國人ドモ不叶シテ谷へヲリ下テ道ヲ迯ントセシニ、右ニ倒シ置タル木ニ支ヘラレ、是ヲ引ノケ引ノケ通ラントセシ處ヲ、透マモナク打テ懸リ、ヒタ討ニ萬餘打取給ヘバ、殘少ニ成テヤウヤウ迯シト也、角シ給テ無恙至釜山出サセ給テケリ、ウカウカトシテ陣取給ヒタラバ、危コトナリシニ、良將ノ慮リ不淺事也、假初ニモ敵近ク有テ難處アラン所ニテ、心得有べキ事ゾト沙汰セシト也、

〇按ズルニ、武家名目抄ニハ、日高ヲ陣ノ名ト爲シタリ、今姑ク此ニ據レリ、

〔太平記三十二〕山名右衞門佐爲敵事

宰相中將義詮朝臣、敵大勢ナレバトテ、一軍モセデイカヾ聞迯ヲバスべキトテ、主上ヲバ先山門ノ東坂本へ行幸ナシ進セテ、仁木、細河、土岐、佐々木三千餘騎ヲ一處ニ集メ、鹿谷ヲ後ニ當テ、敵ヲ洛川ノ西ニ相待タル、此陣ノ樣、前ニ川有テ、後ニ大山峙タレバ、引場ノ思ハナケレ共、韓信ガ兵書ヲ媥シテ、背水陣ヲ張シニ違ヘリ、殊更土岐佐々木ノ兵、近江ト美濃トヲ後ニ於テ戰ハンニ、引テ暫氣ヲ休メバヤト思ハヌ事ヤ有べキト、未戰前ニ、敵ニ心ヲゾハカラレケル、

〔日本書紀二十九天武〕十二年十一月丁亥、詔諸國習陣法、

〔日本書紀持統三十〕七年十二月丙子、遣陣法博士等、敎習諸國、

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕一三ヶ條之合戰備定之事

第一に、味方備能くして、敵のたつるを見て是をいたす、口傳あり、 第二に、敵勝て味方をうつ、二三より是に勝、ちいさき共數を以て、敵一ッに九ッ迄と思へども五ッ六ッまでによし、口傳おほし、 第三に、敵よく備を立てがたくば、是味方九ッ迄にして、むかつて又橫をもちゆる、せめては六ッまでにする、口傳おほし、

○按ズルニ、全集ニ引ク所ニハ、此他ニ、國持大將四十より內の合戰は勝樣にして、四十歲をこえばまけぬ樣にと相心得べき事ノ一條アリ、

〔兵法雄鑑二十六三戰〕三ヶ條合戰備定之事

私云、備と云は敵にむかひ戰場において人數をたつる計を備と云にあらず、常々その作法正鋪して、萬何事にても其時に當つて、滯る所なき樣にするを云也、

一味方備能して敵の立るを見て可擊也、兵法曰、兵者國之大事、死生之地、存亡之道、不可不察也、故經之以五事、校之以計、而索其情云々、味方備能して敵の立を見て是を討と云也、口傳深し、是一說也、兵法曰、先處戰地而待敵者佚、後處戰地而趨戰者勞云々、先戰地と云は是也、口傳深し、又一說也、

二敵勝て味方を擊二三より是に勝べし、兵法曰、凡敵人强盛未能必取、須常早詞厚禮以驕其志、候其有釁可乘一擧破之云々、此心也、口傳深し、是一說也、又云、凡戰者以正合、以奇勝云々、太宗曰、朕破宋老生、初交鋒義師少却、朕親以鐵騎自南原馳下、橫突之、老生兵斷後大潰、遂擒之云々、二三より勝之と云、かくのごとくの儀也、是又一說也、口傳深し、

三敵備能してかたくば、味方も備よくして向て又橫可用、武王問太公曰、予欲立功有三疑、恐力不

能攻強、離親、散衆、爲之奈何、太公曰、因之愼謀用財、夫攻強必養之使強、益之使張、太強必折、太剛必缺、攻強以強、離親以親、散衆以衆、凡謀之道、周密爲寶、設之以事、玩之以利、爭心必起、欲離其親、因其所愛與其寵人、與之所欲、示之所利、因以疎之、無使得志、彼貪利甚喜、遺疑乃止、凡攻之道、必先塞其明而後攻其強、毀其大除民之害、淫之以色、啗之以利、養之以味、娛之以樂、既離其親、必使遠民、勿使知謀、扶而納之、莫覺其意、然後可成、敵備かたくして掛て撃事かなひがたき時は、先我備を正敷して向て戰陣し、又別軍をもつて其左右へ働べし、かくのごとくなるを向て又横を用ると云、是一說也、兵法曰、知己有未可勝之理、則我且固守待敵、有可勝之理、則出兵以攻之、無有不勝、

〔兵法雄鑑二十七 五戰〕五ヶ條合戰備定之事

一陰敵　陰の敵と云は、まち備にして掛り來らざるを陰の敵と云也、必むりにかゝつて合戰を始事なかれ、しかれどもかゝらずして不叶時わ、かならず能知略武略を以て敵の備をみだし是を撃べし、其そなへは陽中の陰を可用なり、

二陽敵　陽の敵と云は、敵よりかゝつて味方をうつを云也、かくのごとくの敵をば味方備九つまでにして陰に備、てきのかゝりて來る備みだりなる處を見て撃べし、備九つまでと云は、方圓八陣座備也、口傳深し、

三敵味方たがひに備て不相戰事あり、是を對陣と云也、對する敵には陽中の陰の格を用て、左右にはたらき、或は一向二裏の備をもつて其表を撃、其裏に出て可撃之事、

四敵利に乘じて味方を撃事あり、敵勝と云共、一度戰へば備みだる、其みだれたる處を別軍を以て撃之、かくのごとくなるを二の勝と云、敵利に乘じて味方を撃事あらば、陰陽或は天人地の備を用て、二三より是にかつべし、口傳深し、変にて陰陽、天人地と云は、奇正一二三の備の事也、

五味方勝て敵をうつに、敵二三の備をもつて、見かたの備みだれたる處をうたんとす、是をうた

れざる様にするを、後軍を持と云、後軍を持には、必殿遊軍の備有て、見物のごとく成べき事、殿と云は、しまりの備、不動備を殘すを云、遊兵は數の外也、各口傳深し、

〔童子亦物語〕陣取ニ、跡ヲ先キ、先ヲ跡ニ取事モ有、先年高麗陣ノ時、眞鍋五郎右衛門ノ陣取ニ、旗本ヲ行道ノ先ニ取、先手ノ備ヲ跡ニ立ル、是人々如何ト云、時ニ北西ノ方ニ山有、下ニ小川有、其ノ川ノ端ニ先手ノ備ヲ立ル也、旗本ハ、東南ノ方平地ノ栗林在之、是ニ本陣ヲ取ル、戸田民部少此陣取不審ヲ成ス時、眞鍋ガ云ク、先ニハ敵ナシ、味方モ少々行ロル諸ノ山エ夜中ニ敵來、矢ノ一ツモ射掛候而ハト思、如此取ト云、其時皆尤ト云、陣取モ法ニアラズトモ、地行ニヨリ見計テヨワキヲカコイ、破ヲカンガエルコト利ノ專一也、眞鍋其時二十五歲、度々陣取モイタサレ、善惡明ラカ也仁ト云、

古事類苑

兵事部三

軍令 軍律併入

○軍律　一一三

古事類苑

兵事部三

軍令 軍律併入

軍令ハ、軍中ノ教令ニシテ、士卒ヲ戒メ衆心ヲ約束スル所以ナリ、而シテ大將軍特ニ之ヲ發スルコトヲ得、故ニ文武天皇ノ大寶令及ビ清和天皇ノ貞觀儀式等ニ、大將出テ征スル時ハ必ズ節刀ヲ給ヒ、大毅以下軍令ニ從ハザル者ヲ處分セシム、後世武門ニ在リテハ、必ズシモ然ラズシテ、主將ニ代リテ軍令ヲ發スルコトアリ、其軍令モ、時ニ由リテ自ラ異ナリ、出陣ニ臨ミ、先ヅ麾下ノ兵ニ告知シテ準備セシムルアリ、之ヲ陣觸ト云フ、又出陣ニ際シテ發スルアリ、喧嘩、口論、放火、遊興、押賣、押買等ノ事ヲ戒ム、又戰場ニ在リテ發スルアリ、攻守ノ方略、交戰ノ用意ヲ示シ、又指揮ヲ待タズシテ前進スルコトヲ禁ズ、而シテ武人ノ此禁ヲ犯シテ法ニ問ハレシモノ最多シ、

軍律ハ、古ヨリ軍法ト稱ス、軍令ヲ犯スモノヲ處斷スル法ナリ、抑、律ニ擅興ノ目アリ、今ハ亡ビテ傳ハラズ、僅ニ政事要略、令集解等ノ諸書ニ於テ尚ホ其中ノ數條ヲ見ルコトヲ得ルノミ、今此等ノ書及ビ律ノ殘篇ニ據レバ、軍機ヲ稽廢シ、軍興ヲ闕乏シ、擅ニ兵ヲ發シ、軍中ニテ相盜シ、軍籍ニ在リテ亡名スルモノハ、何レモ軍律ニ依リテ笞杖徒斬等ノ刑ニ處セラレタリ、

〔令義解 五軍防〕凡閫外之事、將軍制之、欲有所指麾、乃立其教令、是爲軍令、

〔甲陽軍鑑 品第二十九下 八〕村上義清越後長尾景虎被頼事并上田原同年信州海野たいら合戰等之事
景虎家中の侍大將をめしよせ、當〇天文十六年十月八日に信州へ出、武田晴信と弓矢を始申べく候間、陣ぶれ仕り候へ、始て晴信とはだへをあはするなれば、人數多して六ヶ布候、八千よりうへはかたく無用と陣ぶれ。なり、

〔奥羽永慶軍記 九〕二本松合戰事
正宗〇伊達 武林ノ家ノ孝行ハ、敵ヲ討ニシクハナシ、急ニ二本松へ押寄テ、父ノ弔ヒ合戰セントテ、俄ニ陣ブレスレバ、伊達旗下一家郎等我劣ラジト其用意ヲゾシタリケル、

天皇親督軍令

〔日本書紀 三 神武〕戊午年四月甲辰、皇師勒兵、歩趣龍田、〇中略 天皇〇中略 令軍中曰、且停勿復進、乃引軍還、
〔日本書紀 九 神功〕九年〇仲哀 二月、足仲彦天皇、崩於筑紫橿日宮、時皇后傷天皇不從神教而早崩、以爲知所祟之神、欲求財寶國、　九月己卯、爰卜吉日、而臨發有日、時皇后親執斧鉞、令三軍曰、金鼓無節、旌旗錯亂、則士卒不整、貪財多欲、懷私內顧、必爲敵所虜、其敵少而勿輕、敵強而無屈、則姧暴勿聽、自服勿殺、遂戰勝者必有賞、背走者自有罪、

將軍軍令

〔令義解 五 軍防〕凡大將出征、臨軍對寇、大毅以下、不從軍令、(謂凡閫外之事、將軍制之、故有所稱號、乃立其軍令、是爲軍令、其自非大將、而諸將軍以下者、不得復出令也、)及有稽違闕乏軍事、(謂依律征人稽留、乏軍興等是也、)死罪以下、並聽大將斟酌專決、還日具狀申太政官、若未臨寇賊、不用此令、

〔儀式 十〕賜將軍節刀儀
侍從一人、執節刀侍殿上、大臣宣命、詔久、某賊乎征撥治鎭(蝦夷)人止爲毛天奈(ママ)、姓名乎任賜布、使下乃有犯軍法者、(副將軍有犯死刑、禁身奏之、不在殺限、)隨法(罰)行止爲毛天奈、勅書幷節刀賜止宣、將軍稱唯、

〔日本書紀 十九 欽明〕二十三年七月、是月遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、〇中略 紀男麻呂宿禰、取勝旋師、入百濟營、令軍中曰、夫勝不忘敗、安心〇心、書紀集解

作必、慮危、古之善教也、今處疆畔、豺狼交接、而可輕忽不思變難哉、況復平安之世、刀劒不離於身、蓋君子之武備、不集〇此下、書紀解有可字、以已、宜深警戒、務崇此令、士卒皆委心而服事焉、

〔日本書紀天武二十八〕元年六月己丑、天皇往和蠶、命高市皇子號令軍衆、　七月壬子、將軍吹〇大伴貝令軍中曰、其發兵之元、意非殺百姓、是爲元凶、故莫妄殺、

〔續日本紀元明四〕和銅二年三月壬戌、以左大辨正四位下巨勢朝臣麻呂、爲陸奥鎭東將軍、〇中略因授節刀并軍令、

〔續日本紀桓武三十九〕延暦七年十二月庚辰、征東大將軍紀朝臣古佐美辭見、詔召昇殿上、賜節刀、因賜勅書曰、夫擇日拜將、良由綸言、推轂分閫、專任將軍、如聞承前別將等、不愼軍令、逗〇考證云、一本作逗、闕猶多、尋其所由、方在輕法、宜副將軍有犯死罪、禁身奏上、軍監以下、依法斬決、坂東安危、在此一擧、將軍宜勉之、

〔甲陽軍鑑品第四十五十三〕於陣所制札

一火事は、其陣之内にて鬮をとらせ成敗之事、

一牛馬取はなし候者、夫馬は見出し候者とる、乘馬は過錢三百疋上樣御厩衆とる事、

一喧嘩は兩方共に成敗、但し穿鑿の沙汰有て、道理非を分、坂をこさすべき事、

一不淨これあらば、繩を張、其陣の近き所より過錢五十文、是も新衆とる事、

一高聲こうた大酒無用之事

右之札は武者奉行よりかきいだすにより、加藤駿河守かねて是をたつる、駿河守死去の後、大剛の衆も、皆侍大將足輕大將なる故、御旗奉行より是を立る、

〔參州岡崎領古文書〕條目

一各衣裝自永祿十年丁卯十月始之、一切可爲布衣紙子紬平絹加賀絹染、若有望ば赦嶋物之事、及日暮出仕之輩者、依存分可著革袴之事、

一一雙紋之袴、肩衣不着之、可爲木綿袴之事、　附停止狂紋之事

一袷之儀は可爲木綿平絹、但依望可着片色之事、

一縱雖爲勅使將軍之御使、幷他國之使者、對面之砌、如法可着衣裝、縱令如此之時節は可新調衣之事、

一於于武具は分量之外可結構之事

一馬武者具足甲之儀者、不及書載、手蓋頬當脛當其外諸道具可着之事、　附射手幷自身放鐵炮人之類當は可爲隨意之事

一立物不可有二樣之事　附非一衆而同類之立物禁制之事

一於分國同紋之小驗、一向停止之事、

一各物具衆非談合而不可入他備、況於人衆者、不能書載之事、

一既及一戰砌、非大途之用所、他備不可越使者分事、

一物主幷老者病者之外、不可乘馬之事、　附依物主存分、右之外之人ニ候共、可加乘馬之事、

一向後及一戰者、大略可爲步兵之條、武具等以利、身躰相當之支度之事、

一物主之外、一切閉口之事、　附一手五騎三騎宛、以奉行可下知、

一兵糧、武具、着替衣裝之外、無用之荷物禁制之事、

一各閑分捕可捕頸、不討合專分捕者、忽可行死罪之事、

一大小人高名者、對寄親主人、不相裁而退備場、而不可持參頸於旗本之事、

一大細共不可背下知之事　附縱雖爲無類之忠信、不可戰功、

一武具之內、別而弓、鑓、鐵炮等之用意肝要之事、

一調騎等之儀者、如先法可爲二汁三菜、但他國之客來之砌者、二汁五菜之事、

一朝夕出仕之指刀、除空䩮外見如何候、向後可有其用捨候、陣刀之儀者著武具之上、拔指自由候樣、任隨身可拵之事、　附熨斗付之刀脇差各可嗜之事

一働之時就敵物頭見屆者、縱雖程隔可著甲之事、

一小旗腰指等持小者條、更不及分別、向後自陣屋自身可指小旗、然時者各如隨身可拵之事、

一持道具之外、三間柄之鑓各支度之事、　附隨所帶之分量可有鑓數之事

一鐵炮鑓爲持候人、無油斷倅者小者等鍛錬尤候、近日一向無其趣、隣國之覺不可然之事、

一同心被官之弓、一月ニ一度宛令請待、振舞之上稽古之事、

付條々

右條々不可有違犯候、據別近習之內、每事背下知輩、一兩輩候間、如此顯條目候、向後於背法輩者、不撰人不肖、不論親疎、依科之輕重、或召放知行、或可行死罪候、於此儀者聊不可有虛說者也、仍如件、

永祿十年丁卯　拾月十三日　　　信玄

各江

〔兵要錄七雜兵三上〕禁令戒將吏凡二十三條

一將吏承受到軍令、合行告諭衆人知者、不得妄有增減言語文字、或增減而誤事、或事不審實、致有錯誤者、皆坐法、

一審承受軍期、約號令、及關報賊情事宜文字、不許漏泄令衆人知之、如漏泄致賊變生者、軍法不貸、

一偏裨已下、將長吏士、各有差等、勿犯禮節、凡軍無禮、則上下之名實不正、故施令承受俱無信、乖戾生於斯、而事不成矣、諸將何不思國家之大事、臨大事致身竭忠者、豈欲我軍之崩壞乎、相凌無禮者、軍法有所歸、

一凡將長不相和協、傾陷妒忌、因而誤事者、軍法處之、商議兵機、務在平允、卽時決定、違與執拗者處治、

一凡將長於攻守之利害、計略之所及、具事申稟主將、如遣伏而不申、與他人商議利害者、軍法有所歸、

一軍中非大將領副將下輒出號令、及改易者重治、若號令未便、須合改易者、先申大將、如事當機速、不及先申、其改易實便者不坐、

一不服差使、及御下不均平者、罪有所歸、

一前後左右、配定隊部、不許私自轉換、

一入他境不受令、而擅刈禾麥、燒民屋、殺老幼、虜婦女、掠財畜、伐林木者、罪及隊長、

一前軍主將、不以有無事機、並須日一發報於中軍、或事非文字可傳者、卽差親信馳報、

一隨軍發糧運、須主將密定行期、關報官司不得漏泄、

一凡軍中除敎閱外、將領不得以無要緊事勞擾軍士、務令休息、卽用一人、如勞自己一般、

一探得賊中事機者、合速馳報于中軍、不取大將之節度、而擅發兵者罪之、若事機急切、而馳報不及者、主將商議、與發兵、卽飛報于中軍、

一臨兵有聞自家軍中變動、或聞賊中消息來報者、不拘晝夜、卽時引報主將、不得時刻遲滯、報事實者、厚酬之、或貪賞或挾讐、詐報者罰之、雖事不實、無詐者勿罪之、

一不受大將之命、通信於敵者、軍法重處、若敵中有親故、贈遺書信、則領赴主將、驗認給付、

一諸將圍邑攻城、不許無令而解圍旋軍、

一凡軍中不得採風言、及受匿名論人是非者、恐賊人謀害良善、

一先鋒戰勝、賊軍奔敗、主將除許追獲之外、諸陣不得輒動、若非令而擅逐赴者、殺盡得亦不準、

一得生口、無問逆順、皆不得輒殺、以招來者、漸以誘開賊情、亦不可縱逸、防爲間諜、

一凡敵中有人來降、卽直引見主將、餘人不得輒問賊中事宜、若自陳軍中利害者、禁而不可使言、恐惑衆聽、亦不可縱逸、防爲間諜、

一敵求和、則益戒軍中、況賊勢未窮蹙、輒請和者乎、如守備懈、而爲賊所襲者、軍法有所歸、

一臨軍相報宿讎者、不忠之罪重處、

一凡賞罰軍中要柄、如該賞者、卽與將領有不共戴天之恨、只要錄賞、患難亦須扶持、如犯軍令、便是親子姪、亦要依法施行、決不許報施恩讎、有此者以其所報之罪坐之、

〔兵要錄七 練兵三上〕禁令（戒士本凡二十五條）

一軍中最禁爭鬭、前有賊、合捨生取義、然一朝之怒忘其義、却牽人爭鬭、一人不忍、則二人共死去、而欠箇隊伍之人員、不忠孰大於斯、是非勇士之義也、若人罵辱我、或索我爭鬭、務涵忍、好好避他、勿俱爭、應過賊血戰立功、賞賜超等第、其先索爭鬭者、若有頭功則準贖、無功則犯禁之罪重處、若與爭競相傷者、不問事之理非共斬、親子兄弟連坐、

一凡軍中要緊第一件、只是不許喧嘩說話、凡遇動止進退、自有旗幟金鼓、豈用喧譁號呼、肅肅靜靜、唯主將號令是聽、（主將不必大將軍、但在一隊則隊長、在一隊則旗總便是主將、以上類此、）若無令許說話、但開口者、著實重處、夜間尤是切禁、

一軍出則配定隊伍、次第而行、後隊不得攙過前隊、入敵地、不得妄踐蹈田苗、

一入他境、不許姦犯婦女、殺害老少、毀折墳墓、燒毀民屋、殺六畜、掠財物、擅伐林木、妄割稼穡、

一士衆有聞自家變動、及賊軍消息者、不拘晝夜、卽時報主吏、事實者、重酬其忠義、唯不得漏泄令衆人知之、若報而漏于他者、與聞而不告者、皆有罪、或誣讎詐報者罪之、雖事不實、無詐者不坐、

一若敵中有親故贈書、則卽時報主將、主將容而後覆、若隱匿而私覆者、軍法重處、

一行營城寨、得賊射書、卽時封送主吏、達主將、如輒開讀者斬之、或得而棄者同罪、

一訛言誑惑軍衆、及妄說陰陽卜筮鬼神災祥、論彼我之利害、而搖動衆心者罪之、因此誤事者斬、

一軍士不得輒議敵軍事宜、

一軍中除習武藝爲戲外、餘博戲及酗酒喧呼並皆禁斷、

一營中禁放馬、誤放之者、馬主用銀贖、馬丁罪之、

一不許將帶婦人及異色入軍中、主吏知而相容者同罪、

一凡營幕作食、事已訖、未昏以前須滅火、除火線及應得存火外、餘並不許輒留、

一軍中有火、除救火人外、餘人皆嚴備、若輒離本職掌部隊處者、坐罪、

一營中夜遇有失火、放馬、酗酒、爭鬪、衆人驚動者、以不曉其事故也、卽今約失火吹螺、放馬打鉦、酗酒擊鼓、爭鬪擊柝、雖有號呼奔走者、營中肅肅靜靜、唯可聽金鼓螺柝之相通、四音無相通者、爲虛動、切禁馳僕撿認、若遇有賊襲我營寨、則探候夜候營擧烽炬以告警急、營營以火相照應、各營各隊守信地、而勿亂動、惟主將之號令是聽、違者斬、

一凡斥候探候者、將之耳目也、能覘察賊情形以復命者、爲中用、若遇賊馬、則好好避他、遇賊追逐、則唯務逃而勿爭雌雄、見利勿赴、違者獲賊首來亦不準、軍法重處、

一戰士乘馬、強惡不可制、鈍弱不堪入戰者、不許備軍役、

一殺賊只是萬人一心、不許獨先進、不許獨後退、如臨陣敢有一人非令而先進、卽斬賊首得賊馬而還、亦以違令軍法從事、

一鬪戰最禁戀傷、陳上血戰之時、雖遇有父子戰傷、勿守顧、只管向前殺了賊、賊軍奔敗、便當收理、若守顧而不行向前殺賊、致軍大敗、賊馬追來、就守之扶之、向何處去也、自己命不保、如何救人、違者軍法從事、

一臨戰遇有將領中銃中箭死傷、親兵五六名、除收理其所死傷將領外、他不許呻吟守顧、副使進隊兵、只管向前死戰、當爲主將報仇、若失將畏縮擾亂、而引賊致敗者、一隊吏士共坐罪、

一戰勝賊軍奔敗時、將領審知賊勢敗散、乃許使騎兵遠逐之、若無令而擅逐赴者、獲賊首來、亦不準、

一騎兵逐賊、到所豫指定之晝地、則一切駐馬可旋軍、設使見賊馬顚倒、不許輙過、

一兩人殺倒一賊、可共讓其功、這箇勇義廉潔、不可勝賞、若互相爭貪者、非勇士之事、因降其功等、若一人獲首級、他人爭奪者軍法重處、切禁被奪者俱執爭首級、應從到于其營寨具事訴主吏、主吏敲而不決者、同罪、

一大捷追獲、不許截鼻、犯禁者、軍法有所歸、

一凡諸士之從僕、犯軍令者、不戒之罪及主、

〔扶桑略記二十二字多〕寛平六年九月五日、對馬島司、言新羅賊徒船四十五艘到着之由、○中略同十七日記曰、同日卯時、守文室善友、召集郡司士卒等仰云、汝等若箭立背者、以軍法將科罪、立額者、可被賞之由言上者、

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事

大介○三浦義明ハ敵ヨスルナラバ暇アルマジ、先靜ナル時ヨク〳〵兵粮ツカフベシトテ、酒肴椀飯舁居テ是ヲ勸ム、サテ下知シケルコトハ、弓シタヽカニ射者ハ、家ノ子モ侍モ舍人草刈ニ至マデ汰置、弓ハ一人シテ二張三張、矢ハ四腰五腰モ用意セヨ、弓エ射ザラン者ハ、七八人モ十人モ又四五人モ徒黨シテ、好々ノ杖共ヲ支度セヨ、木戸ヲ三重ニコシラフベシ、敵ハ軍ノ法ナレバ、定テ追手搦手二手ニワケテ寄ベシ、追手ノ方ニハ道ヲ造レ、廣サ七八尺ニ不可過、道廣クレバ、大勢クツバミヲ並テ押寄レバ、城ノ中ニ隙ナクシテ防エズ、馬二匹バカリ通ル程ニ造レ、道ノ片方ハ沼ナレバ、見角スルニ及バズ、片方ニハ大堀ヲホレ、道ヲバ三重ニ堀切テ、一ノ堀ニハ橋ヲ廣クワタセ、中堀ニハ細橋ヲ渡セ、二ノ堀ニハ逆茂木ヲ引、堀ゴトニ掻楯ヲ構ヘ、櫓ヲカケ、弓ヨク〳〵射者共ハ甲ヲ著ザレ、腹卷腹當、筒丸ナドヲ著テ、矢倉ニ上テ、敵ノ冑ノ甸板ヲ差詰テ射ヨ、又歩走ノ者共ハ、角キハリヲコシラヘ置、杖打ノ奴原ハ、西ノ方ノ小竹ノ中ニ籠リ居ヨ、小竹ノ中ヨリ造道ヘ向テ細

道ヲ造レ、敵一ノ橋ヲ打渡テ二ノ橋マデ寄ルナラバ、角キハリヲ以テ馬ノ太腹ヲ射ヨ、射ラレテ臥ルナラバ、冑武者左右ノ堀ト沼トヘハチ落サレテ、ヲキン〳〵トセン處ヲ、小竹ノ中ヨリ杖打ノ奴原ツト出テ、杖ノ前ソロヘテ、ヲコシモ立ズ能者ヲバ打殺セ、駈武者共ヲバ、死ヌル程ニ打成シテ、生マ殺ニシテ鼓行セヨ、其コソ軍ノ目醒ナレ、各不覺スナトゾ下知シタル、

〔太平記十七〕山門攻事附日吉神託事

西坂ノ大將高豊前守〇師重是ヲ聞テ、諸軍勢ニ向テ法ヲ出シケルハ、山門ヲ攻落スベキ諸方ノ相圖明日ニアリ、此合戰ニ一足モ退タラン者ハ、縱先々拔群ノ忠アリト云共、罪ニ處シテ本領ヲ沒收シ、其身ヲ可追出、一太刀モ敵ニ打違ヘテ陣ヲ破リ、分捕ヲモシタランズル者ヲバ、凡下ナラバ侍ニナシ、御家人ナラバ直ニ恩賞ヲ可申與、サレバトテ獨高名セントテ拔懸スベカラズ、又傍輩ノ忠ヲ猜テ、危キ處ヲ見放ツベカラズ、互ニ力ヲ合セ、共ニ志ヲ一ニシテ、斬共射共不用、乘越乘越進ベシ、敵引退カバ、立歸ザルサキニ責立テ山上ニ攻上リ、堂舍佛閣ニ火ヲ懸ケ、一宇モ不殘燒拂ヒ、三千ノ衆徒ノ頸ヲ一々ニ大講堂ノ庭ニ斬懸テ、將軍ノ御感ニ預リ給ヘカシト諸人ヲ勵シテ下知シケル、

〔明德記上〕十二月二〇明德二年晦日卯刻ニ二條大宮ヘ押寄テ、山名上總介小林ノ上野守、今日ノ軍ノ先懸シテ討死スルト聲々ニ叫呼デ、時ヲ同トゾ上タリケル、大內ノ左京大夫義弘是ヲ聞キ、一番勢此責口ヘ寄タリケリ、〇中略敵若馬ニテ近付キ懸寄バ、馬ヲ切テハネオトサセヨ、敵馬ヨリ落タラバ、取テ押ヘテ差コロセ、若又敵モ下立テ切テカヽラバ、兵共サシウツブキテ弓向ノ袖ヲユリカケテ、敵ニキラセテクヾリ入、組デ勝負ヲ決スベシ、敵ハ引トモ追ベカラズ、敵手痛ク切懸トモ、一足モ退事ナカレト、大聲ヲ上テ下知シツヽ、我身モ眞前ニ下立タリ、

〔關八州古戰錄一〕北條氏康河越後詰附夜軍ノ事

頃ハ天文十五年卯月廿日、宵闇ノ月漸々山ノ端へ差登ルニ、空曇テ物ノ色定カナラズ、氏康八千餘ヲ四隊ニ分チ、一備ハ遊軍トシテ多米大膳亮ニ預シメ、戰ヒ終ルノ砌マデモ見物シテ相守リ備ヲ亂スベカラズト也、三備ヲバ戰兵トシテ、一隊ハ先登ニ進ミ、亂レ入、驅散シ驅拔ベシ、其時ニ二ノ備相進ミテ、亂ル、敵ヲ切卷リ驅通リテ、先備ト一ツニナリ、三ノ備懸ルヲ見バ、件ノ先勢大返シニ取テ返シ、一同ニ驅入、八方ニ鬨ヲ上、十方ニ名乘テ、縱横無碍ニ切崩スベシ、總ジテ夜軍ノ習ラヒナレバ、軍ヲシタ、カスル事ナカレ、敵ノ首ハ、武主ノ外討捨ニシテ取ベカラズ、味方ノ相印白ケレバ、縱ヒ敵ゾト見受タリ共、白モノヲ着タルヲバ開ラキ避テ討事ナカレ、若又敵ヲ切付鎗付タリ共、味方ヨリ揚螺吹バ、渠ヲ捨テ引擧、速ニ一所ニ集ルベシト、法令ヲ嚴密ニ下知シ、白紙ヲ裁テ胴肩衣トシ、鎧ノ上ニ是ヲ量、重キ甲冑鎧ヲ停止シ相詞ヲ定テ、松明ヲ手々ニ持、柏原ニ扣タル兩上杉ノ陣へ子ノ剋計ニ押寄、噇ト喚ピテ蒐入タリ、

〔總見記七〕五畿內退治所々合戰御仕置事

同日〇永祿十一年十月二日信長ハ芥川ノ城ニ在陣シテ、五畿內所々ノ御仕置被二仰付一、〇中略御逗留中十餘日ノ內、諸國ノ集勢共毎日亂妨シテ、國中迷惑申ス由聞召シ及バレ、郎柴田、蜂屋、森、坂井ニ被二仰付一制札ヲ立テ狼藉ノ者ヲバ罰セラレケリ、

禁制

一當手之軍勢亂妨狼藉事

一猥山林竹木伐採事

一押買押賣幷追立夫事

右條々於二于違背一者、速可レ被レ處二嚴科一者也、仍如レ件、

永祿十一年十月十二日

〔豐薩軍記 四〕島津家久肥前表出張ノ事

大將中務少輔家久、軍令ヲ出シテ曰ク、龍造寺〇隆信ハ去ル良將ナレバ、尋常ノ如キ軍ニテハ勝事更ニアルベカラズ、明日ノ合戰ニ、如何ニ敵ヨリカクルトモ、味方ノ矢炮ヲ放ツベカラズ、早討ト云ン時ツルベ放シニ同時ニ打テ、折ヨクバ二放シモ放ツベシ、放ツト均シク弓鐵炮ヲ打捨、太刀ヲ拔テ切テカヽルベシ、玉藥モ多ク持事無用ナリ、三放ハ打セヌドモ、千ニ一ツモ用アル時ノ爲ナレバ、三放マデハ持セヨトテ、其餘ハ悉ク船中ニ殘サシム、諸軍心ヲ一ツニシ、吾ガ馬驗ヲ目ガケ、一足ニテモ其ヨリ先ニ進ンデ相働ケ、敵ト鎗ヲ合セン時、左右ニ心ヲ移スベカラズ、敵ヲ切伏セタリトテモ、首ヲ取事アルベカラズ、弱ル敵ハ打捨テ、自餘ノ敵ニ切掛レ、必ズ組討スルコトナカレ、下知ヲ背ク者アラバ、打捨ニ致スベシトテ、法令嚴重ニ云聞セ、船ノ櫓及ビ楫等ヲ皆盡ク取放タセテ、遙ノ山ヘト運セラル、是韓信ガ嚢砂背水ノ謀ニ同ジク、諸軍ニ必死ヲ示サルヽ處ナリ、

〔關八州古戰錄 十五〕大神君御上京附秀吉公小田原攻陣觸ノ事

秀吉公酒井宮内大輔家次ヲ招カレ、駿遠參ノ諸士ヘモ來年〇天正十九年三月小田原表出陣ノ用意ヲ先達テ觸知シムベキ旨命ゼラレヌ、其後秀吉公幕下ノ諸將ヘ陣觸アリ、所謂五畿內ハ半役、中國四國ハ四人役、北國ハ六人半役、相坂ノ關ヨリ東ノ方尾州マデハ六人役、駿遠參甲信ノ五ケ國ハ七人役ト定メラレ、來年三月朔日秀吉公京都ヲ出馬アルベキ旨回文ヲ回サル、

〔豐臣太閤御事書〕覺

一殿下陣用意不可有由斷候、來年正二月比可爲進發事、

一高麗都者二日落去候、然間彌急度被成御渡海、此度大明國迄蔑不殘被仰付、大唐之關白職可被成御渡候事、

一人數三万可召連候、兵庫より船にて可被相越候、馬計陸地可被差越事、

一三國中御敵對可申者雖無之、外聞實儀候間、武具之嗜專一候、下々迄も其通可被申聞事、
一召具候者共、人持之内へ三万石、馬廻之内へ貳万石可借遣候、金子も似合々々可被借遣事、
一京都爲御城米被裹置候八木者、不可有手付候、其外卅万石最前被進之候、八木陣用意ニ召遣、不足候者、大閤御藏米、入次第可被召仕事、
一のし付刀脇指千腰可有用意候、餘大ニ候へバ、さし候物遠路令迷惑候間、刀七兩、脇指三兩あまりにて可申付事、
一のしづけの長刀卅えだ、熨斗付の鑓廿本、此外ハ無用之事、
一長柄鑓ハゑを金ニ可仕候、毛のなげざやハ無用ニ候、大坂ニ樫柄之枯候て置候可有之候間、用所候ハヾ可召寄候事、
一金子手前在之分拂底ニて事欠候者、聚樂ニ在之銀子壹万枚大坂へ遣し、大坂之金子千枚可召寄候、但五百枚用所候ハヾ、銀子五千枚替ニ可遣之候、いか程にても可爲十分一候事、
一段子、金襴、唐織物類用所候ハヾ、以註文可被申候、いかほども可被遣之事、
一具足のおい五六丁可持之候、餘多ハ無用候事、
一御馬ども只今高麗へ半分被曳候、名護屋ニ鞍道具共ニ被殘置候間、自其方數多曳候儀無用候、廣島にも十疋被置候條、從被所可被引替候、能々可飼置之旨可申聞由、西尾被仰遣候事、
一名護屋、高麗、所々御兵粮澤山ニ有之事候間、不及用意候、路次中之覺悟計可被仕事、
一小者若黨以下、下々迄も可召置候、此方へ小者ども被爲雇候之間、俄にハ不可有之候條、前廉其用意肝要候事、
一丹波中納言〇羽柴秀俊此方へ可召寄候條、令用意一左右可相待候、八月以前たるべく候、借米等之儀山口かたへ被仰遣候、八月以前ニ被召寄、高麗か名護屋之御留守可被仰付事、

一高麗爲御留守居、宮部中務卿法印可被召寄候、令用意可相待旨被仰出候事、

一大唐都へ叡慮〇後陽成うつし可申候、可有其御用意候、明後年可爲行幸候、然者都廻之國十ヶ國可進上之候、其內にて諸公家衆何も知行可被仰付候、下ノ衆可爲十增倍候、其上之衆ハ可依仁躰事、

一大唐關白右如被仰候、秀次江可被爲讓候、然者都之廻百ヶ國可被成御渡候、日本關白ハ大和中納言、〇羽柴秀保備前宰相兩人之內、覺悟次第可被仰出事、

一日本帝位之儀、若宮〇後陽成皇子良仁親王八條殿〇秀吉猶子智仁親王何にても可被相究事、

一高麗之儀者、岐阜宰相〇羽柴秀勝歟、不然者備前宰相可被置候、然者丹波中納言ハ九州ニ可被置候事、

一晨旦國江叡慮被爲成候路次例式、行幸之可爲儀式候、御泊々ニ今度御出陣道路御座所可然候、人足傳馬ハ國限ニ可申付事、

一高麗國、大明までも御手間不入被仰付候、上下迷惑之儀少も無之候間、下々逃走事も有まじく候條、諸國へ遣候奉行共召返、陣用意可申付事、

一平安城并聚樂御留守之儀、追而可被仰出事、

一民部卿法印、小出播磨守、石川伊賀守以下令用意、御左右次第可致參陣旨可被申聞事、

右條々被仰含西尾豐後守候之條、可被得其意候也、

天正貳十　五月十八日　　秀吉朱印

關白殿

〔利常夜話〕大坂御陣之節、御陣觸有之時、何も早々用意仕候へ、三日の內に御立可被成と被仰出、相觸申候へば、奥村快心事御前へ罷出申上候は、御出陣の御日限を、今少し御差延被遊可然奉存候、

代主將行軍令

大坂迄は餘程の里數にて御座候へば、家中用意も仕兼可申と申上候へば、其方申所尤に候得共、一度申觸候事を申違へ候ては、此度の陣中に我等が下知をば聞かぬ筈に候間、其儘に置れ候へと御意に候、快心も御な　る義と申候、扨三日に御出陣にて、御道中は成程靜に御越被成候故、御跡より孰れも追付申候、其上松川に一兩日御逗留有之候へば、不殘驅付申候、

〔大塔物語〕應永七年庚辰九月廿四日、於信州更科郡布施鄕合戰次第事、〇中略長國〇坂西恐譜代生弓矢家、盡續其業、穴賢今日師者長國承奉行、軍可下知仕云、長秀〇小笠原呵良々々哈尤々謂間、諸軍勢聞之、那不恥折臂噬言、各成一騎當千之思、我先進、又長國進出、敵猛勢、御方者小勢也、魚鱗鶴翼之行遺迹在之、但走者不見地倒、欺敵者必亡云、若敵鎭返懸煩者、見理可懸、敵利鬼懸者、身方鎭返、手綱與手綱押取組可待掛、身勢手傷切、一勢剪頽者、治定勝師、爲大勢痛、一陣破殘黨不全、龍吟雲起、虎嘯風立、長國被下知、各吾不劣聲亘製、

〔籾井家日記二〕粟田口合戰事

籾井越中敎業ハ、大將〇氷上宗長ヨリノ仰ニ候、某老人役ニ指南センズルゾ、彌次郎殿ノ千三百餘キハ、向山ノ出先ノ峠ニ陣ヲ召レ、三ツニ御分候テ、本陣ヲバ海道ヲ受テ、敵ヲ橫合ニ待カケラレ候ベシ、一手ハ東ノ方へ向候テ高ミニ備へ候テ、蜂屋ガ陣ヲ待玉フベシ、一手ハ只今モ來ル瀧川明智ラガ勢ノ山ニ上ランヲ討立ラレ候へ、飛道具ノ働ヲ專一ト心得アルベク候、平林殿、渡邊殿、物集滅殿ノ五百餘キハ、東ノ峠へ出ラレ候テ、三處ニ陣ヲハラレ、スヂカウテ敵ヲ橫合ニ受ラレ候へ、後陣ニハ同名小六左衞門業光ヲ、五百餘キニテ三段ニ置候、陣ハ丈夫ニ候ゾ、但シ敵ハ皆必死ノ兵ドモニテ、大將ドモヽ最後ヲ旨トスルニ、然モ大軍ニテ候ゾ、勝負ハ海道ノ先陣衆ニ讓ラレ、位ヲ見ラレ候へ、此邊ニハ蜂屋、永岡、一色等ガ伏ノ色モミへ申候、其カタハシカリ出シ候テ、一人モ殘サズ一所ニカヽゲテ討テ捨サセ申ベク候、

〔謙信記〕一天文十六年丁未、景虎十八歲、○中略令ヲ下シテ云、當月○十月十八日九日十日、此三日ノ中信州海野平ニ可出陣、家中ノ將士、其用意可在ト相觸ラル、此時戰兵八千、雜兵此ニ應ズ、今度始テ軍令ヲ出サル條ニ云、

推行于他國、則雖山野之一宿、不可不陣者也、故ニ荷糧負鍋而可專要軍食之不乏、幷熟食之設、雖趣歸陣、上下共不可絕之事、　入敵地之中、非下令則不可妄放火亂妨、於何地亦可待下令、採薪芻牧亦同前之事、　行逢嶮難之地、則暫止立前後之備、令作道而後可推行也、於船渡與橋者不可亂列妄渡之事、　此外之法令者、皆如常定可相守者也、

〔總見記〕二十二信長公爲武田誅伐諸方御手分事

二月○天正十年九日、大臣家○織田信長信州甲州ニ至テ御動座有ベキ由御書出シ是ヲ觸ラル、

條々

一信長出馬ニ付テ、大和ノ人數出張ノ儀、筒井召連罷立候條、內々其用意然ルベク候、但シ高野手前雖少シ相殘シ、吉野口警固スベキノ旨可申付候事、

一河內連判烏帽子形高野雜賀表ヘ向置候事、

一泉州一國紀州ヘ押向候事

一三好山城守四國ヘ出陣スベキ事

一攝津國勝三郎留主居候テ、兩人子ドモ人數ニテ可出陣事、

一中川瀨兵衞計可出陣事

一多田可出陣事

兵粮ツヾキ候樣ニアテガヒ肝要ニ候、但人數多候樣ニ戒、力次第可抽粉骨者也、

二月九日　御朱印

〔川角太閤記〕一御家城姫地へは、八日〇天正十年六月の四ッの頭に御歸城候、〇中略

一風呂御入被成候て、あがり屋に御腰を被掛、御伽に入申候小姓衆に仰出の樣子は、年より共またはは物頭々々江觸可申もの也、明日可打立覺悟也、てんしゆにて一番がい立と食を燒せよ、二番がいには人夫以下を可出者なり、三番がいたつならば、いなみ野におゐて人數を立させ可有御覽と計に小姓衆うけ給、ふれ申と相聞え申候事、

〔豐藩軍記九〕秀吉公西國御出陣用意之事

天正十五年正月中旬ヨリ、上方ノ諸軍段々ニ出勢ス、諸軍ニ出サルヽ掟ノ條、

一兵粮幷ニ馬ノ飼料、九州ノ地ヘ令參着ノ日ヨリ可被下行ノ事、

一出勢ノ日次、二月十日ヨリ無相違出立、泊々ノ不差合樣、宿奉行次第可守於其旨事、

一喧嘩口論ハ、雙方共ニ其罪遁間敷事、

一追立夫、押買、諸事狼藉等有間敷事、

一奉公人、先主ニ暇ヲ不乞別ニ主取候ヲ、先主見付候而、理不盡ニ誅戮仕候者、還而可為越度、見付次第當主人ニ相斷、其上ニテ可申付、又屆有之後其者ヲ逃シ候者、當主人可為越度事、

一城責ノ事、相定ル攻手ノ外不可出合事、

一戰場先陣後陣ハ、軍奉行ノ下知ニ任セ、私ノ働キ有間敷事、

右軍法ヲ背キ、自由ノ驅引於有之者、可被處嚴科者也、依テ如件、

天正十五年正月十一日

〔太閤記十三〕就高麗陣掟條々

一人數おし之事、六里を一日之行程とす、乍去在所之遠近、六里之内外奉行計ひ次第たるべきなり、卽宿奉行定之條、前後諍論なく、よろづ順路に可有之事、

一旅宿屋賃は出し申まじく候、薪秣等之代は、宿主と相對し出し可申候事、
一津々浦々番等に有之者、屋賃之義出し可申候、鐵炮之者などの義其主人出し可申候事、
一とまり〳〵にて、扶持方馬之飼令下行之事、
一をしがひ、狼藉、追立夫、其外萬非義有まじき事、
一泊々宿々におゐて、理不盡之儀仕出すものあらば、當座にとがめかゝり、口論に及まじく候、其主人之假名實名能々記し付、其上を以可相理之事、
一何方におゐても、いたづら者一揆之徒黨がましき様子あらば、ひそかに告知すべし、一廉御褒美可被行之事、
一一里々々にはやみち二人づゝをき候て、名護屋と大坂との用所早速相叶やうに可有之、
右條々堅可相守此旨、若違背之儀あらば、奉行人迄告知せ可申者也、

〔家忠日記追加十一〕天正十八年二月、此月大神君〇徳川家康相州御進發ノ軍令ヲ下シ玉フ、
一無下知而、先手を指越物見に遣儀、可爲曲事事、
一先手を差越令高名といふとも、背軍法之上者、妻子以下悉可成敗事、
一無子細他之備へ相交輩於有之者、武具馬具共ニ可取之、若主人及異儀者、共に以可爲曲事、但用所於有之者、うちよけて可通事、
一人數押時脇道すべからざるよし、兼而堅可申付、若猥に通るにおゐては、其主人可爲曲事事、
一諸事奉行人之指圖を令違背者、可爲曲事事、
一人數押時に、旗、鐵炮、弓、鑓、次第を定、奉行人を相添可押、猥に押は可爲曲事事、
一持鑓者軍役之外たる間、長柄を差置持する事堅停止、但長柄之外令持者、主人之馬廻に可爲一丁事、

一小荷駄押事、衆而可相觸催條、軍勢不相交樣に堅可申付、若みだりに軍勢に相交者可成敗事、

一無下知而男女不可亂取、若取之陣屋に隱置ば、急度其者主可改之、自然從他所相聞、其者闕落せば、主人之知行可沒取事、附敵地之家、無下知先手者不可放火事、

一諸商買押買狼藉堅令停止、若於違背之族者、則可成敗事、

一無下知而於令陣拂者、可爲曲事事、

右之條々於違背者、日本國中大小神祇照あれ、無用捨可令成敗者也、仍如件、

天正十八年二月日

〔氏鄉記下〕九戸謀叛事附根曾利穴田井城攻落事

氏鄉會津へ下向有テ、九戸出陣ノ用意ヲセラレケルニ、〇中略弓鐵炮ノ大將烏井四郎左衛門、上坂源之丞ヲ軍奉行トシテ家中へ法度ノ趣ヲ觸サセラル、其掟ノ次第、

法度條々

一備々ノ者共、他ノ備へ一切不可交事、

一武者押之間ニ、道通ノ家へ一切ハイル間敷事、

一用所不申付者、上下ニ不依不可脇道事、

一宿取遣間敷事、附宿奉行次第ニ可請取事、

一武者押之間ニ馬上下々鑓持等ニ至迄、不可高聲高雜談事、

一鳥類畜類走リ出ト云共、高聲ヲシ一切ニ不可追廻事、

一武者押之間ニ、高笑上下共ニスベカラザル事、

一喧嘩口論仕ル者、雙方理非ニ不立入可爲曲事ノ事、

一與々ヲ外シ思ヒ思ヒニ陣取候事、可爲曲事事、

一於野陣者、一夜ノ陣タリト云トモ柵ヲ可振事、

一武者押ノ早サ太鼓次第タルベシ、留太鼓ヲ能聞候而、田ノ中川ノ中、橋ノ上タリト云トモ、可踏止事、

一先手何レノ備手ニ相ト云トモ、勝負ニ不依、無下知以前ニ助候事可爲曲事事、

一城攻合戰足輕等ニ至迄、下知不申付以前ニ武篇ヲ取結ビ候ハヾ、堅ク可申付事、

一馬取放シ候者可爲曲事事

一火ヲ出ス者可成敗、捕ヘ外シ候ハヾ解死人ヲ可引付リ不可陣拂事、

一羽織猩々皮ノ外ハ、指物指候ハヌ者可爲曲事、附鎗印一手々々思ヒ〳〵ノ事、

一前立物同ジ如ク可被揃事

以上

七月〇天正十九年十三日　氏郷判

鳥居四郎左衛門殿

上坂源之丞殿

〔老談一言記　二〕一關ヶ原御陣の時、東照宮樣本多忠勝へ下され候御定書、忠勝家臣梶金平に被預、于今彼家に所持也、御文言にいはく、

軍法之事

一喧嘩口論堅令停止畢、若違背之輩においては、不論理非、雙方可令成敗、其上或は傍輩、或は知音之好みを以令荷擔者、本人より爲曲事の間、急度可令成敗、若令用捨者、縱雖後日相聞、其主人可爲曲事事、

一味方の地におゐて放火亂妨狼藉仕においては、可加成敗事、附於敵地男女亂取すべからざる

事、

一味方の地、作毛を取ちらし、田畠の中に陣取儀堅停止之事、

一先手へ斷らずして物見を出儀、かたく令停止事、

一先手を差越雖令高名、背軍法の上は可成敗事、

一子細なくして他の備相交輩有之ば、武具馬具共可取之、しかるに其主人及異議ば共に可為曲事事、但於有用所は、其備へ相ことわり可通事、

一人數押の時、わき道すべからざる由可申付、若みだりに通るに付ては可加成敗事、

一諸事奉行人の指圖を違背せしめば、可令成敗事、

一時の使としていかやうの人を雖指遣、不可違背、若右之旨をそむくにおゐては可為曲事事、

一持鎗は軍役の外たるの間、長柄を差置もたせ候事堅停止候、但長柄の外もたしめば、主人馬廻りに可為壹本事、

一於陣所馬を取はなす儀、可為曲事事、

一小荷駄押之儀は兼て可相觸之條、軍勢に不相交樣にかたく可申付、若みだりに可相交ば可成敗事、

一諸商賣押買狼藉かたく令停止畢、若於違犯之族は可令成敗事、

一於陣中人返候事、一切令停止事、

一無下知而於陣拂仕者、可為曲事事、

右之條々於違犯之輩者、無用捨可加成敗者也、

慶長五年七月七日　御朱印

〔武邊叢書　五〕大坂御陣之時御觸書

今度御陣に付而、八木大豆ぬかわら薪雜事以下、在々へ申觸、道通へ持出うりかいいたし、諸人ことかけ候はぬ様に可申付事、

一御陣衆宿賃之儀、人一人に付而錢三文、馬一匹付而錢六文、但陣衆自分之薪をたき候はゞ、宿賃有間敷候事、

一代物よりひきの儀、此以前御法度のごとく可申付候、事之外よりへよし取沙汰候、可有其心得候事、

一在々へ申觸、道とをり馬を出し、駄賃馬御陣衆ことかけ候はぬ様に可申付、陣衆馬無之候とて、おゐとをし候とも、前々より御定る所にてつき、其よりとをし申間敷候、たとへ馬草臥候とも、御さだめ所まで御荷物つかへ候はぬやうに、駄賃付可申候、駄賃錢前々より御さだめのごとくたるべく候、以上、

十月十八日　　酒備後判　安對馬判　土大炊判　酒雅樂判

藤枝庄屋年寄中

〔德川禁令考四軍令〕行軍法令

條々

一今度毛利大膳爲征伐進發に付、旗本幷諸軍勢萬事相愼、不作法之儀無之樣、下々に至迄入念可申事、

一喧嘩口論堅令停止之、若違背之輩有之においては、理非を論せず雙方成敗すべし、或は親類縁者之因を存し、或は傍輩知音之好に依り、荷擔之族是あるにおいては、其科本人より重かるべき之旨、急度是を申付べく、自然用捨せしむるにおいては、後日相聞ゆるといへども、其主人重科たるべき事、

軍令使

一軍中相討堅禁制たるべし、若止事を得ず相討する時は、慥成證人を立可ㇾ申事、

一先手を差越し、假令高名せしむるといへども、軍法に背く上は、重科に行ふべき事、

　但先手江相斷ずして、物見に出べからざる事、

一子細なくして他之備へ相交る輩有ㇾ之者、武具馬具共是を取べし、若其主人異儀に及バヾ、曲事たるべき事、

一人數押之時、不ㇾ可㆓脇道㆒之旨堅申付べく、若猥に通る輩は曲事たるべき事、

一地形又者敵之機江應じ、時宜之押可ㇾ有ㇾ之間、此旨兼而可㆓心得㆒事、

一降人生捕者、猥に殺べからざる事、

一諸事奉行之申旨、不ㇾ可㆓違背㆒事、

一時之使として如何樣之もの差遣といへども、違背すべからざる事、

一持鑓持筒者可ㇾ爲㆓軍役之外㆒、長柄さし置持すべからざる事、

　但長柄之外持すにおいては、主人馬廻壹本たるべき事、

一軍中において、馬を取或は竹木切取事堅停止、附押買狼藉すべからず、若違背之族有ㇾ之においては可ㇾ爲㆓曲事㆒事、

一小荷駄押ハ、右之方ニ付可㆓相通㆒、軍勢ニ交はらざる樣、兼日より堅可㆓申付㆒事、

一船渡之儀、他之備ニ相交はらず一手越たるべき事、

右之條々堅可㆓相守㆒、此旨、此外載㆓下知狀㆒者也、

　慶應元乙丑年五月四日　黑印

〔公武榮枯物語　四〕泰時軍を止事

武藏守〇北條泰時軍の樣をきつと見て、いつ勝負有べし共覺ねば、たゞやめよとて安藤兵衞尉をつ

守軍令

かはさる、安藤橘爪にいたりて、皆々軍をやめられ候へ、大將よりの仰ぞとよばゝれ共、川浪打物の音にまぎれて聞入る者なし、かさねて三郎兵衞盛綱をつかはし、手をたゝきおめいて、いくさやめ給へと制すれ共聞入ず、何とてやめぬぞとて、尾藤左近將監景綱をつかはさる、景綱小具足に太刀帶て、白母衣をかけて、ふとくたくましき馬にのり、橋際にて、いかに人々軍止給へ、大將の命を背て軍し給ふ人あらば、誰々と交名をしるし申せとて某罷向て候と、あらゝかに制しければ、實も侍所司承るものゝ申まゝ、人々なりをしづめ聽聞して、其日の合戰はやみにけり、

〔陰德太平記五〕毛利元就夜討之事

陶ノ道麒○中略何ノ疑シキ事有テカ同士打ヲバスルヤ、心ヲ定メ目ヲ明テ踏鎮メヨ者共トテ、亂レ立タル諸陣ヘ軍使ヲ以テ下知シケルニゾ、○下略

〔豐薩軍記四〕森嶽合戰幷吉田清内軍使之事

大將隆信○龍造寺遙ニ是ヲ見テ、先手ハ何ユヘ遲滯シケルゾ、急ギ見テ來ルベシトテ、使番吉田清内ヲ指遣ハサル、吉田先手ニ馳行テ、何故ニ進ミ兼ケルゾ、急テ攻蒐ラルベシト、大將ノ仰ナリト云渡ス、軍監勝屋勝一軒是ヲ聞キ、此所切所ニシテ左右ハ皆深田ナレバ、味方ノ進退自由ナラズ、的ニナツテ多ク討レ候ヘバ、急ニ蒐ラン樣モナシ、但討死セヨトノ仰ナルカト云ケレバ、申ニヤ及ビ候ト云捨テ馳歸ル、

〔武功雜記上〕何國島津陣ノ時歟ニテノ合戰カ場所ハ不知、太閤○豐臣秀吉尾藤甚右衞門ニ被仰付ハ、今日ノシンガリ大事ナル間、敵慕トモ必合戰致間敷ノ由被仰付引取處ニ、如案敵慕來ルヲ、遙ニ山隔テ山ノ上ヨリ太閤御覽有テ、何トテ尾藤ハ合戰ヲ不致ヤト、大腰ヌケヤト身ヲモミテ御立腹也、然處ニ無程尾藤參、如前被仰御シカリ被成、尾藤申上ハ、最前必合戰致間敷ノ由御下知ニ依テ不戰由申上、其時太閤被仰ハ、合戰致サヾルヤウトノ御下知ハ大法ニテ候、可討圖ニ當リタル敵ヲ不討ハ、眼

犯軍令

不明致ヤウ也、佐久間備前同大膳ナドハ、仕間敷時モ合戰イタス者ナルト被仰、御褒美ノ御言葉也、

〔家忠日記追加 六〕天正八年十二月五日、夜ニ入、高天神の城外石川伯耆守數正が陣營失火す、然りといへども、陣中の制法堅きに依て、聊も物忩ならず、

〔武邊叢書 九〕諸士軍談

一五月〇元和元年 六日、大和口寄手加賀の手正宗、上總殿、尾張殿、紀伊殿、大和五人衆也、五人衆は堀丹後、松倉豐後、別所孫治、市橋下總、桑山修理也、六日には御軍法守り過し、何もぬるき也、中山勘解由は御使番に而、本多美濃守手にいたりけるが、なぜにかゝらぬといへば、御軍法をそむくと也、勘解由、扨々其方は中務の子にては有まじ、何軍法の入所かと也、別所孫治は馬を乘廻し、やれかゝれかゝれ、ケ樣の時懸らぬと云事あるものか、敵のあらきにかゝりてこそ士にてはあれ、筑紫合戰の時、尾藤甚右衛門かゝるべきに、軍法を守過しかゝらざりし未練とて、太閤後御勘當被成候は、ケ樣の時にこそあれ、こう申す孫治は、馬は一疋我は一人、やたけに思ひても役に立ぬと申し、乘廻り〳〵味方をすゝめ申候得共、かゝらざりしと也、

〔太平記 六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

去程ニ赤坂ノ城へ向ヒケル大將阿曾彈正少弼、後陣ノ勢ヲ待調ヘンガ爲ニ、天王寺ニ兩日逗留有テ、同二月二日午剋ニ可有矢合、於拔懸之輩者、可爲罪科之由ヲゾ被觸ケル、爰ニ武藏國ノ住人ニ人見四郎入道恩阿ト云者アリ、此恩阿、本間九郎資貞ニ向テ〇中略明日ノ合戰ニ先懸シテ一番ニ討死シテ、其名ヲ末代ニ遺サント存ズル也ト語リケレバ、本間九郎心中ニハゲニモト思ナガラ、枝葉ノ事ヲ宣者哉、是程ナル打圍ノ軍ニ、ソヾロナル先懸シテ討死シタリトモ、差テ高名トモ云レマジ、サレバ只某ハ人ナミニ可振舞也ト云ケレバ、人見ヨニモ無興氣ニテ本堂ノ方ヘ行ケ

ルヲ、本間怪ミ思テ人ヲ付テ見セケレバ、矢立ヲ取出シテ、石ノ鳥居ニ何事トハ不レ知一筆書付テ、己ガ宿ヘゾ歸リケル、本間九郎サレバコソ此者ハ一定明日先懸セラレヌト、心ユルシ無リケレバ、マダ宵ヨリ打立テ唯一騎東條ヲ指テ向ケリ、石川河原ニテ夜ヲ明スニ、朝霞ノ晴間ヨリ南ノ方ヲ見ケレバ、紺唐綾威ノ鎧ニ白母衣懸テ、鹿毛ナル馬ニ乘タル武者一騎、赤坂ノ城ヘゾ向ヒケル、何者ヤラント馬打寄セテ是ヲ見レバ、人見四郎入道ナリケリ、人見本間ヲ見付テ云ケルハ、昨夜宣シ事ヲ實ト思ナバ、孫程ノ人ニ被二出抜一マジト打笑テゾ頻ニ馬ヲ早メケル、○中略既ニ先懸ノ兵共ヌケ〳〵ニ赤坂ノ城ヘ向ヒ討死スル由披露有ケレバ、大將則天王寺ヲ打立テ馳向ヒケルガ、上宮太子ノ御前ニテ馬ヨリ下リ、石ノ鳥居ヲ見給ヘバ、左ノ柱ニ、

花サカヌ老木ノ櫻朽ヌトモ其名ハ苔ノ下ニ隱レジ、ト一首ノ歌ヲ書テ、其次ニ武藏國ノ住人人見四郎恩阿、生年七十三、正慶二年二月二日、赤坂ノ城ヘ向テ武恩ヲ報ゼン爲ニ討死仕畢ヌトゾ書タリケル、又右ノ柱ヲ見レバ、

マテシバシ子ヲ思フ闇ニ迷ラン六ノ街ノ道シルベセン、ト書テ、相模國ノ住人本間九郎資貞嫡子源內兵衞資忠、生年十八歲、正慶二年仲春二日、父ガ死骸ヲ枕ニシテ、同戰場ニ命ヲ止メ畢ヌトゾ書タリケル、

〔安西軍策 三〕富田城下於二三箇所一合戰事

元就朝臣總軍士ニ下知シテ、拔ガケセン輩ニハ所領宛行マジキ旨、堅制セラレケレドモ、先陣ニ進兵ニハ、先於二小森口一木原兵部少輔、香川少輔五郎、粟屋彥右衞門、南方宮內、兒玉四郎兵衞ナド五百餘騎眞先ニ進ケル處ニ、○中略鹽谷口ヘハ元春元長押寄ラル、此口モ拔懸シテ、笠間刑部少輔香川兵部、二宮右京亮、朝枝市允、細迫源右衞門、山本ノ何ガシナド、五百計ニテ鹽谷ヘ押寄、山上ヲ吃ト見レバ敵三四千計ニテ備タリ、

〔豐薩軍記 十〕山梅峠合戰之事

兩將○進肥前守、後藤遠江守、是等ニ下知シテ曰、峠ヨリ七分下茂ミノ中ニ隱レ居テ、自餘ノ敵ニハ、目ヲ掛ベカラズ、惟家久○島津ト見ルナラバ、二十挺ノ鐵炮ヲツルベ放シニ一度ニ討チ、必ズ仕損ズル事ナカレ、○中略愛ニ肥前守ガ手ニ、蘆鴈俣之助トテ大力ノ勇士アリ、○中略空穗ヨリ矢一筋取出シ、○中略天晴中書○家久ガ胸板ヲモ通シツベウ覺ユルト獨言シテ、二三度スビキセシ程ニ、誤テ取放シ、其矢飛テ中務ノ先キニ打タル兵ノ鞍ノ沙手ノ迯レニハツシト立ツ、○中略島津家久此ヲ見テ、此邊ニ伏兵アルト覺ユルゾ、卒爾ニ進ム事ナカレト、峠ニ馬ヲ控ヘシメ、所々ヘ勢ヲゾ配ラレケル、○中略進後藤岡ノ城ニ歸リテ、蘆鴈俣之助ガ軍令ヲ背シ趣キ、○中略悉ク申タリシカバ、親次○志賀曰ク、是天ノ家久ヲ助給フ故ナルベシ、○中略天運ニ叶ヒタル島津ガ鉾ニ逢テ、今度ノ戰ハ十分ノ勝利ナリトテ、滿足斜メナラズ、

〔續武家閑談 二〕翌年○天正六年三月九日、田中の城を御攻有、一昨七日懸川にいたらせ給ふ時、大須賀小吉御軍法を背き、御旗本より先手を越て、勝頼旗本へ乘懸、遂二高名一、其段達二上聞一、以之外怒らせ給ひて、向後見懲の爲に御成敗可レ被レ成處、本多忠勝宿所へかけ入、權現樣○德川家康御自身忠勝門前迄成せられ、只今不レ出レ之候はゞ、平八共に御成敗可レ被レ成由被レ仰、酒井忠次長子小五郎出て御侘申上候得共、無二御承引一、右の小吉は、於二牧野半右衞門宅一切腹、其時廿一、殊に大須賀五郎左衞門甥なれば、旁以て可レ有二御免許一哉と諸人推量に違ふ、御深慮難レ計と云々、○小吉を世に彌吉と記すに非也

〔氏鄕記 中〕氏鄕松島拜領事

天正十二年六月十三日、岡本下野守ガ手ヨリ松島ヲ請取、氏鄕入部セラレケル、其頃未勢州ノ内秀吉公ヘ屬セザル敵多カリケリ、然間軍法ニテ路次ノ行儀立留ルベカラズ、馬ノ沓等打替ベカラズナド樣々法度アリシニ、福滿次郎兵衞ハ武勇ノ者ナリシカバ、氏鄕寵愛セラレシガ、其日立

犯軍令逃亡

留テ馬ノ沓ヲ打セケリ、去バ其時ノ横目外池甚五左衛門種村慮齋ニ下知シテ是ヲ討セラル、〇中略去共其子共ヲバ扶持シ給ヒシトカヤ、

〔關八州古戰錄十六〕蒲生飛驒守氏鄕出陣事

蒲生飛驒守氏鄕ハ、〇中略殿下〇豐臣秀吉ノ命ヲ蒙リ、一隊ノ部將トシテ三月〇天正十八年二日居城ヲ首途シ、關東ヘ向ハレタリ、夫ニ付テ發軍ノ以前ニ家中領內ノ勢汰シ、前驅後騎ノ手分シテ、部伍ノ內試ヲセラレケルニ、蒲生家重代ノ武器鯰尾ノ兜甃ヲ近臣ニ持セテ、文ハ此場所ニ備ヘ居ルベシト兼テ含メラレシニ、氏鄕乘回シテ見分ノ折柄、此士私用有テ件ノ處ニ居ザリケリ、初度ハ氏鄕モ知ヌ顏ニテ過ラレシガ、二度目ノ打回リニモ見エザリケル故、主命ヲ蔑如ニシ、法令ヲ違犯セリトテ大ニ怒リ、其席ヘ呼出シテ、卽時ニ太刀ヲ拔切捨ニセラレタリ、是ヲ見テ諸卒舌ヲ揮シ、小田原及ビ奧州ノ陣中マデモ、衆皆嚴密ニ軍法ヲ守テ、下知ニ背ク者ナカリシトゾ、

〔藩翰譜八上鍋島〕伊豆守信綱、同月〇元和五年二月廿八日を以て寄手一同に城〇肥前國島原城攻むべき由を下知す、かゝる所に、同き廿七日の朝勝茂が先陣既に城を攻め破つて打入る程に、諸手の軍勢我れ劣らじと攻め入て、二三の城を攻破る、明る廿八日城は難なく落してけり、勝茂が兵討るゝ者百六十人、手負ふ者六百八十三人、勝茂父子が功莫大なりと申せども、既に軍法を背きし上は、罪蒙て暫くが程は籠居せり、

〔藩翰譜四中大久保〕慶長五年の秋、東西一時に軍起る、〇中略眞田安房守昌幸上方に心合せて、信州上田の城に立籠る、〇中略七日〇八月御勢又稻荊らんと、愛かしこに打出しを、城中の兵城戸押開て打て出づ、〇中略大番の人々を先として御方も多勢馳加り、追ひつ返しつ火出るまでぞ戰うたる、敵は恢へず引返す、透間もあらせず追詰て、大久保牧野が兵二人、城の堞に飛のぼり、味方つゞけ城はおちぬと呼はつたり、〇中略註かゝる所に本多正信、御方の人々軍すと聞て、御下知なからんに軍す

犯軍令不罰

る條甚だ奇怪なりと怒て、御使を馳せて御方を制して引返す、同じき九日御陣を小諸の城に移さる、佐渡守、中納言殿(〇徳川秀忠)に申て、拔がけして城攻めたる輩、軍法に任せて速に誅せらるべしとて、まづ忠隣(〇大久保)康成(〇榊原)が兵既に城に乘たる上は、首を刎べしと下知す、牧野が嫡子新二郎忠成(時に十八歳)此由を聞て、彼郎等を具して逐電す、父右馬允康成罪蒙る、(牧野が傳に詳なり)忠隣が嫡子新十郎忠常も、彼の城に登りし兵杉浦ぐして失せんとす、杉浦聞て御情の程死しても如何で忘るべき、たゞし我が命の惜きとて君を失ひ參らせんは望む所に候はず、命は義に依て輕しとこそ承れといひもあへず、みづから首掻落して死ぬ、

〔太平記十六〕小山田太郎高家刈青麥事

義貞(〇新田)西國ノ打手ヲ承テ播磨ニ下着シ給時、兵多シテ粮乏、若軍ニ法ヲ置ズバ、諸卒ノ狼藉不可絕トテ、一粒ヲモ刈採、民屋ノ一ヲモ追捕シタランズルモノヲバ、速可被誅之由ヲ大札ニ書テ、道ノ辻々ニゾ被立ケル、依之農民耕作ヲ棄ズ、商人賣買ヲ快シケル處ニ、此高家敵陣ノ近隣ニ行テ、青麥ヲ打刈セテ乘鞍ニ負セテゾ歸ケル、時ノ侍所長濱六郎左衛門尉是ヲ見、直ニ高家ヲ召寄、無力法ノ下ナレバ是ヲ誅セントス、義貞是ヲ聞給テ、推量スルニ此者青麥ニ替身ト思ンヤ、此所敵陣ナレバト思誤ケルカ、然ズバ兵粮ニ術盡テ、法ノ重ヲ忘タルカノ間也、何樣彼役所ヲ見ヨトテ、使者ヲ遣シテ被點檢ケレバ、馬物具爽ニ有テ、食物ノ類ハ一粒モ無リケリ、使者歸テ此由ヲ申ケレバ、義貞大ニ恥タル氣色ニテ、高家ガ犯法事ハ、戰ノ爲ニ罪ヲ忘タルベシ、何樣士卒先ジテ疲タルハ大將ノ恥也、勇士ヲバ不可失、法ヲバ勿亂事トテ、田ノ主ニハ小袖二重與テ、高家ニハ兵粮十石相副テ色代シテゾ歸サレケル、高家此情ヲ感ジテ忠義彌染心ケレバ、此時大將ノ替命忽ニ打死ヲバシタル也、

〔陰德太平記二十〕安藝國頭崎城明退事幷西條槌山落城之事

九月〇天文二十一年二八日、義隆〇大内弔合戰ノ爲、陶〇晴賢追討セントテ、〇中略同十一日彼地へ着陣セシカバ、隆元〇毛利諸軍士拔蒐於有之ハ、縱出群ノ働有トモ盡ク罪科ニ可處ト、堅ク軍令ヲ被出ケル間、吉田勢ハ此旨ヲ守テ、進ム者一人モナシ、サレ共吉川勢新庄ノ早雄ノ若者共拔々ニカケ付、槌山ノ切岸ヘセリ上、矢軍移時ケレバ、〇中略同夜元春ヨリ、宮庄次郎五郎ヲ以テ、隆元ヘ、今日手ノ者共軍法ヲ破リ候、然故手負九十六人、中ニモ綿貫兵庫助討死仕候、其魁首粟屋二宮ニ歸シ候間、可刎頸ニテ候ヘ共、退イテ愚案ヲ運スニ、今度ハ義隆卿弔合戰陶誅罰初度ノ出陣ニテ候ヘバ、一戰仕テモ不苦所乎、〇中略只可然バ蒙御赦免候バヤト、兩度ニ及テ斷リ給ケレ共、已來軍法嚴重ノ爲、見懲ニ候トテ無許容、斯ヲ武永四郎兵衞ヲ以テ元就ヘ軍ノ樣體被注進ケレバ、卽對面有テ、二宮粟屋ガ鎗ノ樣體、其外諸卒ノ働前後委細ニ聞給、御氣色快然トシテ、扨汝ハ其場ヘハ不趣ヤト問給、武永、サン候、私式モ鎗脇ノ弓仕候シガ、軍法破候ツルトテ、兩將御機嫌不宜候ト申ケレバ、元就莞爾ト打笑給ヒ、軍法破タル事ハ不調法也ト雖、今度ハ陶征伐ノタメ初テ若キ者共ノ出陣セシ事ナレバ、一合戰ハ無テ不叶所也、粟屋二宮ガ疵ハ、淺手也ヤ深手也ヤナド悉シク問給ヒ、武永ニモ杯賜リ、賞祿行ハレテケリ、サテ元春ヘモ、今度ハ合戰無テ不叶所ニ、御手ノ衆無比類働仕ノ由、神妙ニ候、功ノ輕重ヲ糺シ、勸賞被行候ベシト返答シ給ニゾ、各案堵ノ思ヲ成タリケル、

〔白石秘書〕今川義元、戰場にて何某とかやをめして、先手の樣子を見て急ぎ罷歸れとのたまひしに、先手はや戰の半なるに行合て、のがれがたくやありけん、鑓をいれて首一ッ取て歸り、見參に入てかくといひしかば義元大に怒り、樣子を見はからひ急ぎ歸れといひしに、その身のはたらき我には忠の所すこしもなし、軍法にまかせて乾度とはからふべしとあるに、彼使の者ゝほたれし顏にて、つゝしみて前にさぶらふ人に向ひて、小聲にて申けるは、

かるかやに身にしむ色はなけれども見てすてがたき露の下をれ、とありければ、〇中略義元ゝ

ばらく打案じて氣色やわらぎ、届かざる仕形なれども、急なるにのぞみて奇特に家隆の歌を思ひ出せし事、名譽なりとてゆるされてけり、昔人はかくやさしき事のありける也、

〔北條五代記三〕軍法昔にかはる事

郎從の其中にをいて、器量をはかつて物がしらをえらぶ、論語に云、一人につぶさなる事を求る事なしと云々、故にそれ〲にえたる所の才知のをよぶ所を分明し、旗、弓、鐵炮、鑓の物がしらを一人づゝ申付る時に、皆それ〲の奉行の下知を守る、其一人の物頭他出に至ては、殘る所の役人進退成がたし、これによつて軍法を定をく、むかしはか樣の法度もなかりし、軍陣にをいて、若一人なり共法度をそむく者有て軍中をぬきんでゝ、たとひ比類なき高名をあらはすといふ共、たちまち罪科にをこなはる、故に大小名共に法度を用ひて、それ〲の役をつとむるをもつて弓法の本意とす、

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕軍場にての樣子三ヶ條は　侍大將馬ぞへの者持三色は、うちかひ、又は馬のいきあひ、水入慌腰に指也、軍場にてとはつく人きらひ申候、備へなり候てあしきなり、歌にいはく、　軍兵は物いはずして大將の下知聞時ぞいくさにはかつ　軍兵は團扇とりぬる人の只詞を聞てとにもかくにも

軍法に背き一二人にても出る者あらば、必ず御成敗可ㇾ有候、味方負の本也、義經公の歌に云く、懸引に獨計を顧みなば、只闇の夜の飛礫なるべし、右六人耳聞は、諸奉公人の内にて奇麗ずきか、人あひ能者か、作法しりたる者か、うちはものか、出者か、慇懃者か、亂舞仕る人か、武藝する人か、物かく人か、算竿よき人か、此人柄を屋形の御存知ありて、それ〲に物を被ㇾ仰付ㇾべきためなり、但し傍輩の足本を見る事公人は、いたつて主君の御用にもたゝざるものなり、

〔北條五代記四〕北條氏政東西南北と戰ひの事

軍は勝てまくる事あり、負てかつ事有、引まじき所を引、かけべき所をかけざるは、大將の不覺、是みな武略智謀のなす所也、軍法兵略も、後代に至ていよ〳〵嚴重なりと云り、北條の侍に大石平次兵衞と云者一首を詠ず、

　樊噲をあざむく武者をあつめても下知につかずば餓鬼にをとれり、とよみけるを、氏政聞及び給ひ、かれは一方の大將すべき者也と御感有て、あしがるを百人あづけ給ひければ、いよ〳〵此法度を諸侍信じき、

〔一話一言二十一〕本朝武家根元抄

一古へ相馬の將門は、大音にして千八百の兵に及びしも、言語分明ならず、賴義義家は、ものいひはあきらかにして小音なりき、義朝は音聲はよくして吃ぬ、小松の重盛は大音にして、しかも言語分明也き、されども千騎の兵にはかゝらざりき、賴朝は千人にかゝりて明也、義經は小音にして、舌の根もとおらず、是良將の一失也としるしおけり、千人にまじる聲は世にまれなり、太鼓貝の聲をかりてかけひきを自在にせしむる、まことに軍謀の寶器なり、

〔鹽尻三十三〕一島津家の軍令に、勝軍の時はさのみ心を賦るに及ばず、少か軍の際へ衆の取〻など安かに能沙汰し置れしを、西國方の他家は、負ケ用意するなど嘲りしが、關ケ原の役に敗軍せし折から、諸將見苦敷事有しが、島津家の陣のみいとよく取はらひ、しかも是にあたりて捨かまりといふもの東兵も追ざりしとかや、是皆日頃の心がけなりしと古き人語りし、

〔武功雜記下〕一冬ノ大坂御陣ニ、極月四日霧フカクシテサキ分明ナラズ、加賀ノ手ト播部〇井伊直孝手ト、イツトナク堀際へ仕寄タルヲ、法ニ背キタルトテ台德院樣〇德川秀忠御イカリ、播部ヲイカヽ可被仰付ヤトノ事ナリ、本多佐渡守承リ、トカク大御所樣〇德川家康ヘウカガヒ可申トテマイル、源君〇家康今朝ハ嘸々將軍ノ機嫌能アルベシ、ワカキ兵部〇直孝ガ堀際ヘ仕寄テ、味方ノ氣ヲイサマ

シメ、敵ヘ威ヲ示タリ、奇特々々トノ御意ナリ、佐渡守イカニモサヤウニ候トウケガヒ歸リ、台德院樣ヘ申上ル、台德院樣御思慮トハ違タルトオボシメシテ大御所樣ヘ御越、其時播部陣場ヲ御通リ、播部ヲ御ニラミナサレ候、播部何トヤラン氣味アシキヨシヲ家來孕石備前ニカタル、備前其樣ナル不合點ナル大將ハ、此方ヨリモニラミカヘシタルガヨキト云、サテ台德院樣、權現樣ヘ御對面ノ時、以ノ外播部事ヲ御威ユヘ、御歸ノ時ハ播部ヘ御念比御意ナリ、此事ヲ播部、又孕石ニカタル、孕石御合點サヘマイリタラバ其筈ジヤモノヲト云、

○

〔令義解 七 公式〕凡受事、一日受、二日付畢、〇中略 其事速、(謂軍機及急速之類也、)及見送囚、隨至即付、〇中略 即軍機急速、(謂軍機急速也、)與事有促限者、皆當日出了、〇中略

凡奉詔勅、及事經奏聞、雖已施行、(謂文書行下、其事未行也、)驗理灼然不便者、所在官司隨事執奏、若軍機要速、不可停廢者、且行且奏、

〔律疏 職制〕凡稽緩詔書者、一日笞廿、(謂(中略)軍機急速、事有促限者、皆當日出了、此外仍停者、是爲稽緩、)

〔令義解 七 公式〕凡驛使至京奏機密事者、(謂軍機及密事也、)不得令共人語、

〔律疏 職制〕凡驛使稽程者、一日笞卅、二日加一等、罪止徒一年、〇略 注 若軍機要速者、加三等、(謂是征討掩襲、報告外境消息、及告賊之類、)有所廢闕者、違一日徒三年、一日加一等、(謂由稽遲廢闕、略掩襲告報之類、)以故陷敗戶口軍人城戍者加役流、(謂由驛使稽遲、陷敗戶口軍人等一人以上、及陷城戍者、)

凡驛使無故以書寄人行之、及受寄者杖一百、(謂有軍機要速、或追徵報告、如此之類、遣專使乘驛賚送文書者、無故、謂非身患及父母喪者、以所賚文書、別寄他人、送之、及受寄文書者、各杖一百、〇中略)即爲軍事警急而稽留者、以驛使爲首、行者爲從、(軍機警急、謂報告征討掩襲救援、及境外消息之類、而稽留者、罪在驛使、故以驛使爲首、行者爲從、有所廢闕者、從前條、)

〔律疏 衞禁〕凡關津度人、無故留難者、一日、主司笞廿、一日加一等、罪止杖一百、(謂(中略)若軍機急速、而留難不度、致稽廢者、自從所

論、重

〔政事要略八十一糺彈雜事〕擅興律云、擅發兵、廿人以上、杖一百、其寇賊卒來、欲有攻襲、即反叛若賊有內應、急須兵者、得便調發、

〔令集解三十三公式〕擅興律云、雖非所屬、比國郡司、得調發給與、

〔法曹至要抄中禁制〕擅興律云、擅發兵、二十人以上、杖一百、五十人徒一年、五十人加一等、若有逃亡盜賊、權差人夫、足以追捕、及公私田獵者、不用此律、

〔唐律疏議十六擅興〕諸擅發兵、十人以上、徒一年、百人徒一年半、百人加一等、千人絞、（謂無警急、又不先言上、而輒發兵者、雖即言上、而不待報、猶為擅、文書施行即坐、）給與者、隨所給人數、減擅發一等、（亦謂不先言上、不待報者、告令發遣即坐、）其寇賊卒來、欲有攻襲、即城屯反叛、若賊有內應、急須兵者、須便調發、雖非所屬、比部官司、亦須調發給與、並即言上、（各謂急須兵、不容得先言上者、）若不即調發、及不即給與者、準所須人數、並與擅發罪同、其不即言上者、亦準所發人數、減罪一等、若有逃亡盜賊、權差人夫、足以追捕者、不用此律、

〔續日本紀十聖武〕天平二年九月庚辰、詔曰、○中略造陸多捕禽獸者、先朝禁斷、擅發兵馬人衆者當今不聽、而諸國仍作法擅發人兵、殺害猪鹿、計無頭數、非直多害生命、實亦違犯章程、宜頒諸道並須禁斷、

〔令集解十八考課〕擅興律乏軍興者斬、註云、故失等者、

〔唐律疏議十六擅興〕諸乏軍興者斬、故失等、（謂臨軍征討、有所調發、而稽廢者、）

〔續日本紀三十九桓武〕延暦七年三月辛亥、下勅曰、調發東海、東山、坂東諸國步騎五萬二千八百餘人、限來年三月、會於陸奧國多賀城、其點兵者、先盡前般入軍、經戰敍勳者、及常陸國神賤、然後簡點餘人堪弓馬者、仍勅、比年國司等、無心奉公、每事闕怠、屢沮成謀、苟曰司存、豈應如此、若有更然、必以乏軍興從事矣、

〔令集解九戶〕捕亡律云、若有軍名而亡、於他處附貫課役如法、唯無軍名、即依逃亡自首之例、減罪二等坐

之、仍勒還本所、

〔唐律疏議捕亡二十八〕諸丁夫雜匠在役、及工樂雜戸亡者、太常音聲人亦同、一日笞三十、十日加一等、罪止徒三年、主司不覺亡者、一人笞二十、五人加一等、罪止杖一百、故縱者各與同罪、○中略註卽人有課役、全逃亡者亦如之、若有軍名而亡者加一等、○中略

疏議曰、○中略問曰、有軍名而亡、於他處附貫課役如法、唯無軍名、合當何罪、

答曰、逃亡之罪多據闕課、無課之輩、責其浮遊、亦既編戸見在、課役如法、準式仍徵賦役、附處復有課輸、於官課役無違、唯免軍名、合罪依例、逃亡自首、減罪二等坐之、仍勒還本所、

〔令義解軍防五〕凡衞士向京、防人至津之間、皆令國司親自部領、○中略其往還在路不得前後零疊使侵犯百姓及損害田苗斫伐桑漆之類、若有違者、國郡錄狀申官、統領之人依法科罪、謂路次之國、注犯申官、官隨科罪也、軍行亦准此、

〔續日本紀桓武三十七〕延曆二年四月辛酉、勅曰、如聞比年坂東八國、運穀鎭所、而將吏等以稻相換、其穀代者輕物送京、苟得無耻、又濫役鎭兵、多營私田、因玆鎭兵疲弊、不任干戈、稽之憲典、深合罪罰、而會恩蕩、且從寬免、自今以後、不得更然、如有違犯、以軍法罪之、宜加捉搦、勿令侵漁之徒、肆其濁濫、

〔續日本紀桓武四十〕延曆八年九月戊午、詔曰、陸奧國荒備流蝦夷等乎討治爾任賜志、○中略鎭守副將軍從五位下池田朝臣眞枚、外從五位下安倍猨島臣墨繩等、愚頑畏拙之氏進退失度、軍期乎毛闕怠利、今法乎撿爾、墨繩者斬刑爾當里、眞枚者解官取冠倍久在、然墨繩者久歷邊戍氏、仕奉留勞在爾縁氏奈斬刑乎波免賜氏官冠乎未乃取賜比、眞枚者日上乃湊之氏溺軍乎扶拯閇留勞爾縁氏奈取冠罪波免賜氏官乎未乃解賜比、又有小功人乎波、隨其重輕氏治賜比、有小罪人乎波不勘賜、免賜久止宣御命乎衆聞食止宣、

〔三代實錄陽成三十三〕元慶二年六月十六日庚辰、勅符陸奧國曰、得出羽國奏、俘逆虜縱逸、横暴日甚、彼國

軍士二千人、顧望避敵、亡皈本國者、料勢制勝、自有其方、而今各重身軀、无意掠戰、極貪醜類、力屈凶威、豈曰王者之師、自貽敗軍之耻、宜更選定國司主典已上精強了事者、令領彼亡皈二千兵、早入出羽、○中略若重亡皈者、以軍法從事、

古事類苑

兵事部四

軍略 軍議 併入

古事類苑

兵事部四

軍略　軍議 併入

軍略ハ軍ニ臨ミ、機ニ乘ジテ、一擧以テ勝ヲ制スルノ計ヲ畫策スルヲ云フ、神武天皇ノ時、既ニ倒語ノ計アリ、後世ニ至テハ、強ヲ示シ、弱ヲ示シ、自城ヲ燒キ、棄人ヲ用キ、火牛又ハ牝馬ヲ放ツ等ノ計アリ、而シテ軍略ノ事タル、兵事部中ニ關聯セルモノ多シ、故ニ各篇ヲ參照スベシ、

軍議ハ將ニ戰ハントスル時、將帥相會シテ、其方略ヲ評議スルヲ云フ、軍議ニ似テ非ナルモノヲ叡山ノ三塔僉議ト爲ス、事ハ僧兵篇ニ見エタリ、

用倒語

〔日本書紀 三神武〕辛酉年、○中略初天皇草創天基之日也、大伴氏之遠祖道臣命、帥大來目部、奉承密策、能以諷歌倒語、掃蕩妖氣、倒語之用、始起乎玆、

〔日本書紀通證 八神武〕謂權顚倒其言、而欺彼敵、喩我卒、此軍中之用也、

〔書紀集解 三神武〕按、神世朴直、無有隱謀誘言、故此謂起乎玆、武内宿禰以誘言誅忍熊王、是用倒語之遺也、

伏兵

〔兵法雄鑑 五十覆兵〕一覆兵之事　覆兵と云は、人數千、二千、或二百、三百計も、林木、村里、山陰抔にかくし置て、其不意に出、其油斷を打を大かまりと云也、是覆兵也、村かまり、里かまり、捨かまり、いづれも同じ儀也、

一伏兵之事　伏兵と云は、人數五人、十人、廿人計程、深野、かやわら、むぎばたけなどの內にかくれふして、敵の使、或は物見武者なとの來るを待を、伏かまりと云、　ふくかまり、ふしかまり、草かまり、草をふするなど、云、皆同じ儀也、伏兵也、　口傳、兵法曰、覆則其人衆、伏則其人寡云々、

伏兵の有無をしる五ヶ條之事

一伏兵の地を知事　兵法云、軍、旁有險阻、潢井、蒹葭、林木、翳薈者、必謹覆索之、此伏姦之所也云々、口傳、　二かれにむかふ時、無故して鳥獸駭事、　兵法曰、鳥起者伏也、獸駭者覆也云々、口傳、　三草木の氣色常ならざる事　四野虫不鳴事　五人馬の足あとを見る事

山林、村里、險阻、林木、其伏うたがはしきの時、かまりの有無をさぐる謀功五ヶ條之事、

一かまり場をはなれ行事　二先をし行て、亦引取躰をなす事　三時の聲の事　四鐵炮井火矢之事　五覆兵伏兵の本意をしる事

覆兵の有無を知べき五ヶ條之事

一敵國へ働入に、敵出むかふ時、切所を隔て戰事抔有時、敵の人數出て防之に、其人數積よりもすくなき事あらば心可付事、　二其切所を遠くしざつて備をたて、不及ふりをなすてきあらば心付べき事、　三故なくして引取敵に覆あり、心付べき事、　四敵の小勢にてふかく働敵に伏在可心付事、　五俄にして不働無響に伏有、心付べき事、

〔日本書紀十一仁德〕四十一年二月、譽田天皇○應神崩、○中略大山守皇子每恨先帝廢之非立、而重有是怨、則謀之曰、我殺太子、○菟道稚郎子遂登帝位、爰大鷦鷯尊○仁德預聞其謀、密告太子、備兵令守、時太子設兵待之、大山守皇子不知其備兵、獨領數百兵士、夜半發而行之、會明詣菟道、將渡河、時太子服布袍、取檝櫓、密接度子、以載大山守皇子而濟、至于河中、誂度子、蹈船而傾、於是大山守皇子墮河而沒、更浮流之、○中略然伏兵多起不得著岸、遂沈而死焉、

〔奥州後三年記上〕將軍〔源義家〕のいくさ、すでに金澤の柵にいたりぬ、雲霞のごとくして野山をかくせり、一行の斜雁雲上をわたるあり、雁陣忽にやぶれて四方にちりてとぶ、將軍遙にこれをみて怪み驚きて、兵をして野邊をふましむ、あんのごとく草むらの中より三十餘騎のつはものを尋ねえたり、是かくしをけるなり、將軍のつはもの是を射るに、數を盡して得られぬ、義家の朝臣先年宇治殿へ參じて、貞任をせめん事など申けるを、江帥匡房卿たち聞て、器量はよき武士の、合戰の道をしらぬよと、ひとりごち給ひけるを、義家の郎等聞て、わが主ほどの兵をけやけき事いふをきなかなと思ひつゝ、よし家に此由をかたる、義家これを聞て、さる事もあるらんとて、江帥の出られけるところによりて、殊更會尺しつゝ、その後彼卿にあひて文をよみけり、義家われ文の道をうかゞはずば、爰にて武衡がためにやぶられなましとぞいひける、兵野に伏時は、雁つらをやぶると云事侍るとかや、

〔淺井三代記八〕江南佐々木美濃國齋藤を加勢に頼む事附軍評定の事

定頼〔佐々木〕聞給ひて、汝〔進藤山城守〕が言處も尤もなり、併このころ淺井が軍立を見るに、智略を第一にして、先勢を以て敵をいさめ、隱勢を以て敵の氣をうばひ、二段三段の備を以て敵を討、〔中略〕此者討んには智謀第一なるべし、先年我等が祖父、錚が坂合戰の砌、汝等の親共軍法の術を得て、敵勢州の國司一萬四千の勢にて、當國へ亂れ入んとせしを、味方一萬の勢を三手に分、一手は敵をあしらひ、一手は隱人數可有と覺ゆる方に、陣を取て軍をせず、一手は横鑓なり、勢州勢一萬四千六段に立、兩脇山の峯、谷底に人數を隱置、味方勝に乘なば、一方のふせ人數を出し可討とのたくみなり、重て又おしかけなば、少敗北のやうに見せて、又一方の伏人數を出し可討との儀也、かゝる處に、蒲生、目賀多左脇の遊軍となりて、谷峯に目かけ、味方の軍をするを見てかまはず居る、右脇には伊庭、三ッ井遊軍となりて居る、兩先手は進藤後藤なり、敵案の如く、一萬四千を八千騎計に

見せ、敵味方間近くなりければ、驅つ返しつ相戰ふ、敵つよくして兩藤の兵次の備へさつと引、勢州勢續てしたひくる、味方三千騎計喚叫て切てかゝる、國司勢三町計引退く、味方の若者共追討にてかゝれば、國司兼てたくみし事なれば、右脇に隱し置し兵共三千騎計、谷底より鬨をあげ一度につきかゝる、味方氣をとられ四方へさつと敗北す、伊庭三ッ井思ふ圖に不違とて、三千騎計の者共眞中に引包み、火花をちらして相戰ふ、國司勢術は相違せり、度を失ひて見えし處を味方透間なくつきかゝれば、勢州勢も半時計、死もおしまず防ぎけるが、はや引色になれば、左脇のふせ勢、今はかなはじとや思ひけむ、喚叫て切て出る、蒲生、目賀多請取たりといふまゝに、三千計に渡し合せ、一足も不引防ぎけり、義綱時分は今ぞかゝれ〳〵と軍配を取、旗本を崩し切てかゝらせ給ふ、國司が備三段まで追立る、味方猶も氣を得て勇みいさんで切てかゝれば、總敗軍にぞなりにける、味方追討に首五六百討取、思ふまゝに討勝しなり、此度亮政討取らんにも、如斯味方の人數手分々々を可相極、〇中略と宣ひければ、〇中略各支度を申ふれけり、

〔關八州古戰錄 四〕景虎關東在陣付篭澤采女正景次忠節之事

景虎〇上杉僅二三騎ニテ、自身物見ニ出、東道六七里モ進ミ行テ、見分セラルヽ事毎度ナレバ、桐生ノ城兵能見及ビ、此度ハ鐵炮ヲ以テ打落サント相議シ、撰ミ打ノ手達三人、切所ノ物陰ニ出テ伏居タリ、案ノ如ク景虎鐵ノ半首ヲ被リ、連錢葦毛ノ馬ニ乘テ、〇中略主從五騎ニテ徐々ト打出、〇中略景虎馬ヲ扣テ有ル所ニ、彼者逸散ニ驅參リテ平伏セリ、是ヲ見レバ、越後譜代ノ家人篭澤采女正景次ナリ、時ニ采女正申ケルハ、〇中略今度城兵等相談シテ、シカ〳〵ノ術ヲ設クルニヨリ、某コソ景虎ノ目明ナリトテ、彼手達ドモニ差添タリ、〇中略ト鐙ノ袖ヲ濕シケレバ、景虎モ感涙ヲ流シ、同勢ヲ差向テ、早速三人ノ伏兵ヲ討取リ、危キ際ヲ遁レラレケリ、〇下略

〔老翁物語 上〕石見銀山やまぶきの城へ、藝州より刺賀山城守、高畠源四郎兩人を城番に被置せ候、

〇中略元就公〇中略山吹へ兵粮御入候通路之儀番替りに被仰付、吉川衆番手之時人數十八人相すぐり先手に被遣候、井上又左衞門、二宮杢之助、物頭に參り候、〇中略雲州衆三百人程部府と申所に待伏仕居申所へ、此方之衆眞中へ行懸り候、井上又左衞門伏の者を見付、ふせぞと杢之助に申候へば、心得たるぞ、よく仕れと申合せ、十八人壹所により候て、伏之中へ山縣四郎右衞門矢入仕、名乘懸伏之者おき候、此方より散々に射付追立、杢之助鑓にて一人つきふせ討取切立候間、ふせの者相退候、追付頸四つ討取候、名譽の合戰也、井上豐後其節雲州に罷居候て、右ふせの人數に相加り罷出、其後此方へ罷成候て、樣子慥に物語辻合申候、

〔糀井家日記二〕粟田口合戰事

此合戰伏。落。ノ次第ハ、左右ト中トノ陣ノリ入ヤウニモ、伏。探。シ。伏落シノ作法ニモ、諸式ノ御謀ノ次第ニハ、色々ノ面白キコトモ、御大事ドモアルゲニ候ヘドモ、ヲレハ心得申サズ候ユヘ、ザット書記シ申候、〇下略

〔大友興廢記二十〕朽網赤岩合戰之事

島津中書豐後國府内迄打入し砌、〇中略後は因尾の通路をかへて、南郡朽網と云所を往來す、然を同國岡の城主志賀太郎親次是を討取らんために、大森大炊助後藤遠江守中尾伊豆守兩三人を侍大將として、千三百餘人を朽網赤岩表へ押出す、三人の侍大將評定して、一。の。ふ。せ。は中尾伊豆守、二。の。ふ。せ。は後藤遠江守、三。の。ふ。せ。は大森大炊助に相定め、所々詰り〳〵切所に五百三百づゝ伏置て、ひそかに待居たり、

〔續武將感狀記〕信雄秀吉和議調ヒタリトイヘドモ、信雄ハ愈勢ヲ失ナヒ、秀吉ハ益威ヲ逞フシテ、伊賀全州、南伊勢五郡ハ秀吉取之、於是秀吉蒲生飛彈守ヲ伊勢松坂十二萬石ニ封ズ、信雄ノ舊臣、木造城主木造左衞門佐ハ武名ヲ人ニシラレタル者ナリ、木造ノ城地モ氏鄕ノ領分タリ、城ヲ避

示強

ル事遲々スルヲ怒テ氏鄕攻之、木造ノ城ヨリコナタニ鬱林アリ、土田又助ト云者、此鬱林伏兵アルベシト申ス、氏鄕聞テ我モコレヲ察シヌ、サレドモ何條事ノアランヤト云處ニ、伏兵起テ擊テカカル處ヲ、氏鄕切崩テ追拂ハル、其ノ鬱林廣カラズ、伏兵アリトモ一二百ニハ過グベカラズ、氏鄕コレヲ見テ、事トモセラレザルモ、用兵ノ理ニ論キガ故ナラン、

〔常山紀談十六〕越後の一揆三條の城に寄る時、道に伏兵したり、溝口伯耆守宣勝兵を出して、三條に趣くに、世間太兵衞先陣せしが、小川の脇に新しき糞の有を見て、此邊に兵を伏置たるならんとて搜しければ、伏兵駭きて逃けるを追かけて、百餘人討取たり、

〔甲陽軍鑑品第四十二十五〕人數多勢無勢出立之事

一大軍、少旗、少軍、大旗、　口傳有

〔太平記三十四〕龍泉寺軍事

龍泉ノ城ニハ、和田楠等相謀テ、初ハ大和河内ノ兵千餘人ヲ籠置タリケルガ、寄手敢テ是ヲバ責ン共セザリケル間、角テハ徒ニ勢ヲ置テモ何カセン、打散シテコソ野軍ニセメトテ、龍泉ノ勢ヲバ皆呼下テ、サシモナキ野伏共、百人計見セ勢ニ殘シ置、此ノ木ノ梢彼コノ弓鞘ノハヅレニ、旗計ヲ結付、尙モ大勢ノ籠リタル體ヲ見セタリケル、津々山ノ寄手是ヲ見テ、アナヲビタヾシ、四方手ヲ立タル如クナル山ニ、此大勢ノ籠リタランズルヲバ、何ナル鬼神共イヘ、可責落者ニ非ズト、口口ニ云恐テ、責ント云人ハ一人モナシ、只徒ニ旗計ヲ見上テ、百五十餘日過ニケリ、

〔養輪軍記上〕信玄（中略）夫より信州弔川と申所に出張を築き、尾張守（小幡信貞）を被入置、永祿四年二月二日、上野國を責取らんと、一萬五千五百餘人を引率し、甲府を打立、余須の峠を被通、上州南牧の島本に到著被致けり、爰にて尾張守に信玄對面被致、被相尋候は、足下の相智圖書之助は、道の人にて有けるやと、信貞へ被尋ければ、抑器量骨柄大方成生付に候得共、物驚き抔致生付に候と

申ければ、信玄被聞召、扨は術のあれば迚、修理之助に下知をいたし、小荷駄馬に灯燈二ツ宛付させ、口付の者にも松明壹本ツヽ爲持、旗本には棹の先に結付火を燈し、旗本ゟ指上候得ば、能き所受取の小荷駄馬、松明に火を付て、高き所へ追登るべしとまめし合、軍手分して松井田、安中、簑輪、三ケ城へ向、後詰させじとの甲軍の謀、先旗本さきぞなへ數千の軍兵を進めさせ、國峯の城江押寄せ、相圖の灯燈指上ければ、內藤修理之助是を見て、小荷駄馬の挑燈松明燈火高き所へ追登せ、鯨波天地をひゞかしけり、修理之助（〇修理之助、恐圖書之誤、）大きに駭、敵大勢なれば叶はじとや思ひけん、城を開いて落行けるを、臆病物と笑けり、甲軍追付翌日迄亂崩せり、

〔陰德太平記十二〕大內勢後詰附宮崎合戰之事

元就（〇毛利）井上河內守ニ、少輔次郎（〇元就男元春）相具シテ歸候ヘト宣ケレバ、元春大ニ腹立シ給ヒ、哀レ長者ニモ劣リ候マジキモノヲ、コハ御情無仰事哉ト、ヨニ恨メシゲニ見ヤリ、淚ヲ波羅々々ト流シ給ヘバ、井上河內守是ヲ見テ、少輔次郎殿ハ、獅子奮晛ノ眼ヲ具シ、龍駒千里ノ威ヲ抱キ給タリ、哀元就ノ御子哉、助（ヲコヅケ）及給ナバ、斗南一人ノ大剛將ニテ御坐シ候ベシト大ニ感ジテ、城內ヘ倡ヒ歸リケル所ニ、元春汝ハ吾ヲヤルマジキカトテ、太刀ヲ拔給ヘバ、其後ハ敢テ止メ申者モ無リケル故、頓テ士卒ヲ引ツレ、父元就ニ追就給、此度ハ是非ニ附テ、御赦サレヲ蒙リ、御供可仕候ト宣ケレバ、元就汝ハ未稚キ身ノ大不敵者也ト宣ヒナガラ、ヨニモ嬉シ氣ニ御覽有テ、是迄來リタレバ、今ハ相具スベキ也トゾ宣ケル、斯テ元就ハ、城中ノ勢ヲ盡シテ、打出給ヘ共、纔三千ニハ不過、サルニ仍テ、謀ノ爲ニ、城中ノ女房兒童水汲薪剪下部迄モ、皆堀際迄打出サセ、竹ノ末棒ノ末ニ、箔紙、或ハ金銀ノ扇ナド結付持セラレケルガ、遠目ニハ、唯大勢手毎ニ鎗提ゲタル樣ニゾ見エニケル、

〔太平記六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事

隅田、高橋ヲ兩六波羅ノ軍奉行トシテ、四十八箇所ノ篝、幷ニ在京人、畿內近國ノ勢ヲ合セテ、天王

寺ヘ被指向、其勢都合五千餘騎、同（〇元弘二年五月）二十日、京都ヲ立テ、尼崎、神崎、柱松ノ邊ニ陣ヲ取テ、遠篝ヲ燒テ、其夜ヲ過シト待明ス、楠是ヲ聞テ、二千餘騎ヲ三手ニ分ケ、宗トノ勢ヲバ、住吉天王寺ニ隱テ、僅三百騎許ヲ渡部ノ橋ノ南ニ磬サセ、大篝二三箇所ニ燒セテ相向ヘリ、是ハ態ト敵ニ橋ヲ渡サセテ、水ノ深ミニ追ハメ、雌雄ヲ一時ニ決センガ爲也、去程ニ明レバ五月二十一日ニ六波羅ノ勢五千餘騎、所々ノ陣ヲ一ニ合セ、渡部ノ橋マデ打莅デ、河向ニ引ヘタル敵ノ勢ヲ見渡セバ、僅ニ二三百騎ニハ不過、剩ヤセタル馬ニ縄手綱懸タル體ノ武者共也、隅田、高橋是ヲ見テ、サレバコソ和泉河内ノ勢ノ分際、サコソ有ラメト思フニ合セテ、ハカバカシキ敵ハ一人モ無リケリ、此奴原ヲ一々ニ召捕テ、六條河原ニ切懸テ、六波羅殿ノ御感ニ預ラント云儘ニ、隅田、高橋人交モセズ、橋ヨリ下ヲ一文字ニゾ渡ケル、五千餘騎ノ兵共是ヲ見テ、我先ニト馬ヲ進メテ、或ハ橋ノ上ヲ歩マセ、或ハ河瀨ヲ渡シテ、向ノ岸ニ懸驟ル、楠勢是ヲ見テ、遠矢少々射捨テ、一戰モセズ、天王寺ノ方ヘ引退ク、六波羅ノ勢是ヲ見テ勝ニ乘リ、人馬ノ息ヲモ不繼セ、天王寺ノ北ノ在家マデ、揉ニ揉テゾ追タリケル、楠思程敵ノ人馬ヲ疲ラカシテ、二千騎ヲ三手ニ分テ、一手ハ天王寺ノ東ヨリ、敵ヲ弓手ニ請テ懸出ヅ、一手ハ西門ノ石ノ鳥居ヨリ魚鱗懸ニ懸出ヅ、一手ハ住吉ノ松陰ヨリ懸出テ、鶴翼ニ立テ開合ス、六波羅ノ勢ヲ見合スレバ、對揚スベキ迄モナキ大勢ナリケレ共、陣ノ張樣シドロニテ、却テ小勢ニ圍レヌベクゾ見ヘタリケル、隅田、高橋是ヲ見テ、敵後ロニ大勢ヲ隱シテタバカリケルゾ、此邊ハ馬ノ足立惡シテ叶ハジ、廣ミヘ敵ヲ帶キ出シ、勢ノ分際ヲ見計フテ懸合懸合勝負ヲ決セヨト下知シケレバ、五千餘騎ノ兵共、敵ニ後ロヲ被切ヌ先ニト、渡部ノ橋ヲ指テ引退ク、楠ガ勢是ニ利ヲ得テ、三方ヨリ勝時ヲ作テ追懸ル、橋近ク成ケレバ、隅田、高橋是ヲ見テ、敵ハ大勢ニテハ無リケルゾ、此ニテ不返合、大河後ロニ在テ惡カリヌベシ、返セヤ兵共ト、馬ノ足ヲ立直立直下知シケレドモ、大勢ノ引立タル事ナレバ、一返シモ不返、只我先ニト橋ノ危ヲモ不云、馳

集リケル間、人馬共ニ被推落テ水ニ溺ルヽ者不知數、或淵瀬ヲモ不知渡シ懸テ死ヌル者モ有リ、或ハ岸ヨリ馬ヲ馳倒テ、其儘被討者モ有、只馬物具ヲ脱捨テ、逃延ントスル者ハ有レ共、返合セテ戰ハントスル者ハ無リケリ、而レバ五千餘騎ノ兵共殘少ナニ被打成テ、這々京ヘゾ上リケル、

〔藤葉榮衰記上〕爲氏公須賀川江寄給事

爾程ニ和田勢雲霞ノ如ク新町坂ニ馳向、一同ニ凱歌ヲ作リケレバ、天地響テ夥シ、寄手ノ兵諍進デ謀ヲモ不知喚叫ンデ攻掛ル、兼テ方便事ナレバ矢軍些トスル眞似シテ、暫モ不支防兼タル體ニテ引ケレバ、和田勢勝ニ乘テ逃ルヲ追事甚ダ急也、僞テ引グ體ヲ敵ニ推セラレジト、鑓長刀弓矢ヲ取捨テ馬ヲ乘棄、我レ先ニト逃入ル、是ヲ方便トモ不知、和田ノ兵勇進ンデ二ツトモナキ木戸ヨリ作リ並タル新町南町ノ内ヘ逃入リ、或ハ捨テ置タル武具器財雜具ヲ濫妨セント爭奪合フ、其際ニ寄手ニ紛レ木戸ノ外ニ置タル者共、同時ニ兩町ノ入口ノ木戸ヨリ家々ニ附火ケレバ、火燃出テ烟滿チ炎四方ニ盛也、和田勢ドモ屛上ヲ越テ屋上ニ登リ火ヲ遁ントスレバ、取附べキ便モナク橋モナシ、烟ニ目暗デ膽迷テ何クヲ其方トモ不覺、人ニハ馬、馬ニハ人重リテ接合、周章匍リ兵杖ヲモ心掛ズ、後ヨリ味方ノ大勢接立ラレ、道場町ノ狹所三ノ丸東大手ニ鏃ヲ揃テ待居タル敵ノ中ヘ走リ入リ、徒ラニ討ルモアリ、若モ助ルカト水堀ノ中飛入、或ハ猛火ノ中ヘ走倒レ、或ハ人馬重リ蹈殺サレ、一時ノ籌策ニ被破テ、戰ヲ不致以前ニ、死人彌ガ上ニ重リ臥ス事不可勝計、

〔淺井三代記三〕淺井智略を以て今濱の城を責取事

亮政(淺井○)重て申けるは、先我等の手立を聞たまへと、手立の始終を語りける、亮政のいはく、大野木我等六百餘騎にて、今濱よりはるか此方にて明方に鬨を可揚、今濱勢宮川に敵あるとは不思寄、物見を出し小勢なりとあなどり討て可出なり、其時矢軍して跡なる勢へ引取べし、敵勝に乘

追て可來、そこにてしばらくさゝへ、又さつと引べし、敵いよ〳〵責來らば、其にて火出る程戰ふべし、其時は治部大輔〇上坂泰貞かけ出、たゝかひなん、治部大輔乘出すとひとしく、宮川左次兵衛筧助左衛門町屋に火をはなち、火の手を見ば三方一度に関をあぐべし、然らば今濱勢途をうしなふて騒動すべし、其時にをしよせ〳〵戰はゞ、大半治部大輔も可討取と思ひ切て宣ひければ、三田村もしゐてとゞむる事もならず、いづれも其儀に一同して、首途の酒を出せとて、時移るほど酒宴してぞあそばれける、かくて伊部清兵衛、淺井新次郎、同新助、大橋善次郎、永正十三年九月廿一日の丑の刻、上坂を立て宮川村中久保村八幡森にしのび居る、新三郎亮政大野木土佐守二人は、あけぼの晤き早天に、今濱丑寅の方へ近々と忍びより、関を噇とあぐれば、城中以の外騒動して、新三郎が此中軍に勝にのり、又上坂の城を乘取様に、出抜べきとのたくみなるべしとて、大將を初め上を下へと返しつゝとやせんかくやあらんとありければ、中にも上坂修理亮走廻て下知すれば、城中少はしづまりけり、先物見を出し敵の様子を見せんとて、上坂八郎右衛門を被出ければ、昨夜より雨氣はれやらず、朝霧深くして敵の様子も見へ分ざれば、八郎右衛門物なれたる者にて、近々と懸出し様體見分て、城中に歸り申けるは、敵はわづか千騎には不可過といふ、治部大輔兵庫頭は是を聞、追散せ兵共と下知すれば、我先にと進みけり、上坂修理は是を見て大音あげて下知しけるは、城中猥にかけ出給ふべからず、小敵なりとてあなどり、付入に城をとられ給ふなと、懸廻て下知すれど、城の可落前兆か、うわうさわうにしづまらねば、先修理亮五百ばかりにて討出、備を立んとせし處を、淺井射手を出し、はや軍をはじめける、今濱勢も射手を出し、さんざんに射たりけるが、淺井が勢射立られ、色めく所を爰こそ戰ふべき所なれ、時節をぬかすなと、修理亮黑煙をたてゝ戰へば、淺井勢次の備へさつと引、競をぬかさじと追かけ〳〵戰ふたり、治部大輔時分はよきと心得て、備を崩して切てかゝる、大野木淺井勢は井溝を間にして、火花を

佯退

散して防ぎけり、か丶りける處に、宮川覓今濱の侍町に火を放つ、火の手を見るとひとしく、夜の內より隱し置たる大橋善次郎、今濱の町屋へ踏込、四方八方かけ廻り、敵のむかふを幸にて、働きける、○中略伊部淸兵衞八幡の森より橫鑓に突かかれば、今濱勢不思寄方より敵切て出れば、戰かねてぞゐたりける、○中略かくて善次郎は信濃守を討取、そのいきほひに城中の燒る煙の中へ打入て見てあれど、裏手より海上へ舟に取乘、みなちり／＼に落行、敵一人もなければ、我人數を引つれ旗本さして引とれば、亮政も思ふま丶、今濱は破却して、上坂の城へぞ引取ける、

〔奧羽永慶軍記〕二佐竹白川城ヲ攻落ス事

佐竹ニハ和田ト再ビ牒シ合セシ事ナレバ、日限三十餘日延引シテ、大勢ヲ卒シ白川表ニ押ヨセ屯ヲ張テ扣ヘタリ、○中略元來大將ノ義親○白川血氣盛ンノ若武者ナレバ、今度ハ佐竹方ノ大將ヲ討トラント云フマ丶ニ、和田ト一所ニ切テ出ヅ、是ヲ見テ佐竹義久八百餘人將棊頭ニソナヘ、二陣三陣偃月ノゴトクニ陣ヲ張テ待懸ル、白川勢千餘人無二無三ニ突テカ丶ルニ、相圖ノゴトク、佐竹勢ハ一戰ニモ及バズ崩レタリ、義親麾ヲ振テ遁スナト追カケタリ、和田眞先ヲ驅テ、大長刀ヲ差上テ喚キ叫ンデ驅ニケリ、佐竹勢元來相圖ノ事ナレバ、三方ヨリ押包ミ、一人モ洩サジト攻タリケリ、白川ノ後陣ハ遮ラレ城中ニ追入ラル、和田ハ智略ノ軍ナレバ、大將義親ト引組生捕ニゾ仕タリケル、白川勢ハ謀ラレシロヲ、シヤト、佐竹勢ニ驅入々々殘少ナニ討死ス、義ヲモ恥ヲモ顧ザル奴原ハ右往左往ニ逃行ケル、

〔平治物語〕二待賢門軍附信賴落事

去程ニ六波羅ノ皇居ニハ、公卿僉議有テ淸盛ヲ被召ケリ、紺ノ直垂ニ黑絲威ノ腹卷ニ、左右ノコテヲ差テ、折烏帽子引立テ、大床ニ畏ル、頭中將實國ヲ以テ被仰下ケルハ、王事モロキ事ナケレバ、逆臣滅ビン事無疑、但適新造ノ內裏也、若回祿アラバ、朝家ノ御大事タルベシ、官軍僞テ引退カバ、

凶徒定テ進ミ出ムカ、然ラバ官軍ヲ入替ヘテ、內裏ヲ守護セサセ、火災ナキ樣ニ思慮アルベシト被仰下ケレバ、淸盛畏テ朝敵タル上ハ、逆徒ノ誅戮ハ掌ノ內ニ候間、不可廻時剋、然レバ定テ狼藉出來センカ、火失ナカランノ條コソ難儀ノ勅定ニテ候ヘ、乍去范蠡ガ吳國ヲ覆シ、張良ガ項羽ヲ亡ボセシモ、皆是智謀ノ致ス處ナレバ、涯分武略ヲ廻シテ、金闕無爲ナル樣ニ成敗可仕ト奏シテ被出ケリ、○中略平家ハ任勅定テ皆六波羅ヘ引返ス、源氏ハ謀トモ不知ケルニヤ、內裏ヲバ打捨テ追懸追懸責戰、其間ニ官軍ヲ入替テ、門々ヲ堅防ケレバ、源氏內裏ヘハ入得ズシテ、ソヾロニ六波羅迄ゾ被寄ケル、

佯降

〔古事記中仲哀〕於是息長帶日賣命、○神功皇后於倭還上之時、因疑人心一具喪船、御子○應神載其喪船、先令言漏之御子既崩、如此上幸之時、香坂王忍熊王聞而、思將待取進出於斗賀野爲字氣比獵也、爾香坂王騰坐歷木而是大怒猪出、堀其歷木、卽咋食其香坂王、其弟忍熊王、不畏其態、興軍待向之時、赴喪船、將攻空船、爾自其喪船下軍相戰、此時忍熊王、以難波吉師部之祖、伊佐比宿禰爲將軍、太子御方者、以丸邇臣之祖、難波根子建振熊命、爲將軍、故追退到山代之時、還立、各不退、相戰、爾建振熊命權而、令云息長帶日賣命者既崩故、無可更戰、卽絕弓絃、欺陽歸服、於是其將軍既信詐、弭弓藏兵、爾自頂髮中、採出設弦、一名云宇佐由豆留更張追擊、故逃退逢坂、對立亦戰、爾追迫敗、出沙沙那美、悉斬其軍、於是其忍熊王、與伊佐比宿禰、共被追迫、乘船浮海、歌曰、伊奢阿藝、布流玖麻賀、伊多弖淤波受波、邇本杼理能阿布美能守美邇、迦豆岐勢那和、卽入海、共死也、

〔日本書紀九神功〕爰伐新羅之明年春二月、皇后領群卿及百寮、移于穴門豐浦宮、卽收天皇之喪、從海路、以向京、時麛坂王、忍熊王、聞天皇崩、亦皇后西征、幷皇子新生、而密謀之曰、今皇后有子、群臣皆從焉、必共議之立幼主、吾等何以兄從弟乎、乃佯爲天皇作陵、詣播磨、興山陵於赤石、仍編船絚于淡路島、運其島石而造之、則每人令取兵、而待皇后、於是犬上君祖倉見別與吉師祖五十狹茅宿禰、共隸于麛坂王、

因以爲將軍、令興東國兵、時麛坂王、忍熊王、共出菟餓野、而祈狩之曰、(祈狩此云氣比餓利)若有成事、必獲良獸也、二王各居假庪、赤猪忽出之登假庪、咋麛坂王而殺焉、軍士悉慄也、忍熊王謂倉見別曰、是事大怪也、於此不可待敵、則引軍更返屯於住吉、時皇后聞忍熊王起師以待之、命武內宿禰、懷皇子、横出南海泊于紀伊水門、皇后之船、直指難波、〇中略忍熊王復引軍退到菟道、而軍之、皇后南詣紀伊國、會太子於日高、以議及群臣、遂欲攻忍熊王、〇中略三月庚子、命武內宿禰、和珥臣祖武振熊、率數萬衆、令擊忍熊王、爰武內宿禰等、選精兵從山背出之、至菟道以屯河北、忍熊王出營欲戰、〇中略時武內宿禰、令三軍悉令椎結、因以號令曰、各儲弦藏于髮中、且佩木刀、既而擧皇后之命、誘忍熊王、曰、吾勿貪天下、唯懷幼王從君王者也、豈有距戰耶、願共絕弦捨兵、與連和焉、然則君王登天業、以安席高枕、專制萬機、則顯令軍中、悉斷弦解刀投於河水、忍熊王信其誘言、悉令軍衆、解兵投河水而斷弦、爰武內宿禰、令三軍出儲弦(ウサユヅル)更張以佩眞刀、度河進之、忍熊王知被欺、謂倉見別、五十狹茅宿禰曰、吾既被欺、今無儲兵、豈可得戰乎、曳兵稍退、武內宿禰出精兵而追之、適遇于逢坂(アフサカ)以破、故號其處曰逢坂也、軍衆走之、及于狹々浪(ササナミ)栗林(ノクルス)而多斬、〇中略忍熊王逃無所入、則喚五十狹茅宿禰、〇中略則共沈瀨田(セタ)濟而死之、

〔日本書紀 二十二 推古〕八年二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍、闕名並則將萬餘衆、爲任那擊新羅、於是直指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、攻五城而拔、於是新羅王惶之、擧白旗到于將軍之麾下而立、割多多羅、素奈羅、弗知鬼、委陀、南迦羅、阿羅羅等六城以請服、時將軍共議曰、新羅知罪服之、强擊不可、則奏上、爰天皇更遣難波吉師神於新羅、復遣難波吉士木蓮子於任那、並檢挍事狀、爰新羅任那二國王、遣使貢調、仍奏表之曰、天上有神、地有天皇、除是二神、何亦有畏乎、自今以後、不有相攻、且不乾船柁、每歲必朝、則遣使以召還將軍、將軍等至自新羅、卽新羅又侵任那、

〔源平盛衰記 三十三〕木曾備中下向附齊明被討幷兼康討倉光事

去六月、〇壽永二年北陸道ノ合戰ニ虜レタリシ平泉寺長吏齊明ヲバ、六條河原ニテ頸ヲ切ル、妹尾太

郎兼康ハ、木ヲ樵草ヲ刈マデコソナケレ共、二心ナク木曾ニ仕ハレケリ、是ハ如何ニモシテ再故郷ニ歸、今一度舊主ヲ見奉リ、平家ノ御方ニ成テ合戰ヲ遂ントノ計也、咲中偸ニ銳剣入刀ト云ヘリ、木曾ハ是ヲモ知ズシテ、齊明ト同時ニ切ベカリケレ共、西國ノ道シルベトテ宥シ具シ給ケリ、

〔太平記十六〕新田左中將被責赤松事

赤松入道圓心、小寺藤兵衞尉ヲ以テ、新田殿ヘ被申ケルハ、圓心不肖ノ身ヲ以テ、元弘ノ初メ大敵ニ當リ、逆徒ヲ責却ケ候シ事、恐ハ第一ノ忠節トコソ存候シニ、恩賞ノ地降參不儀ノ者ヨリモ猶賤ク候シ間、一旦ノ恨ニ依テ、多日ノ大功ヲ捨候キ、乍去兵部卿親王〔○護良〕ノ御恩生々世々難忘存候ヘバ、全ク御敵ニ屬シ候事、本意トハ不存候、所詮當國ノ守護職ヲダニ、綸旨ニ御辭狀ヲ副テ下シ給リ候ハヾ、如元御方ニ參テ、忠節ヲ可致ニテ候ト申タリケレバ、義貞是ヲ聞給テ、此事ナラバ子細アラジト被仰テ、頓テ京都ヘ飛脚ヲ立、守護職補任ノ綸旨ヲゾ申成サレケル、其使節往反ノ間已ニ十餘日ヲ過ケル間ニ、圓心城ヲ拵ヘスマシテ、當國ノ守護國司ヲバ將軍ヨリ給テ候間、手ノ裏ヲ返ス樣ナル綸旨ヲバ、何カハ仕候ベキト、嘲哢シテコソ返サレケレ、

〔梅松論下〕建武三年正月十一日午剋に、將軍〔○足利尊氏〕都に責入給ひて、洞院殿公賢公の御所に御座有しに、降參の輩注すに暇あらず、かゝりける所に、結城太田大夫判官親光が振廻、誠に忠臣の儀をあらはしければ、みる人は申に不及、聞傳ける族までも讃ぬ者こそなかりけれ、十日の夜山門へ臨幸の時追付奉て、馬より下り冑をぬぎ、御輿の前に畏申けるは、今度官軍鎌倉近く責下て泰平を致すべき所に、さもあらずして、天下如此成行事は、併大友左近將監が佐野にをいて、心替りせし故也、迚も一度は君の御爲に命を奉るべし、御暇を給て僞て降參して、大友と打違て死を以て忠を致すべしとて、思ひ切て下賀茂より打歸りけれども、龍顏を拜し奉らむ事も今を限りと存ければ、不覺の淚鎧の袖をぞぬらしける、君も遙に御覽じ送て、頼母敷も哀にも思召されけれ

ば、御衣の御袖をしぼり給ひける、さる程に東寺の南大門に、大友が手勢二百餘騎にて打出たり、親光が一族益戸下野守家人一兩輩召具て、殘る勢をば九條邊にとゞめ置て、大友に付て降參のよしを僞て云ければ、大友子細に不ㇾ及とて、樋口東洞院の小河を隔て、うちつれて行けるに、大友申けるは、將軍の御陣近く成候はゞ、法にて候御具足を預り申さんと云ければ、親光我等御方に參は、頓て一方をも仰蒙て、忠節を致すべきに、戰場にをいて具足を進む事、面目なしといへども、御邊を賴來るうへは、耻辱にならぬやうにはからひ給へとて、帶たる太刀を指上て、河を西へかけ渡す、其時子細なく大友御對面の後可ㇾ進のよし云て、太刀をうけとらんとする所に、さはなくて、馳並で拔打に切間大友すきをあらせずむずとくむで、親光は其場にて討る、同親類一所にて十餘人引組々々討死す、

〔松平記一〕一織田殿より松平三左衛門に、岡崎を何とぞ責落し支配有べしと被仰付、御加勢有、近日責らるべしと談合有處に、此事岡崎に聞えしかば、廣忠ひそかに寛三郎を呼で、上和田へたばかり行て三左衛門を切て參り候へ、是非共賴むと被ㇾ仰、寛承り御請申、上和田へ參、降參申度と申、三左衛門殿岡崎衆をあまた引付、最早何とぞ寛兄弟の中を引付候はんと、常に被ㇾ仰候時分、平三郎參候間、大に悅なされ、近く召し、近日岡崎を責候はんまゝ、寛案内を賴由被仰付、御懇情有て御近所へ寄せ給ふ、誠に運のきはめ也、其夜寛御近邊の座敷に臥り候へば、案内はくはしく見置ければ、廣忠より被ㇾ下候脇指にて、三左衛門殿わきつぼを二脇指突てにげ出る、弟寛平十郎參り、兄とつれて、早々岡崎へにげ來る、

〔筑紫軍記十一〕田原八幡之神職討家久兵事

鎭綱〇加來元來無二ノ大友方ナリケルニ依テ、去年〇天正八年中書家久猛勢ヲ率シ來テ、攻崩サントスルニ、巧ミケル處ニ、刑部少輔態ト降參シ、僞テ軍用ノ事ナド委ク沙汰シ、二心ナキ體ニ見セケレバ、家

自焼城

久モ打解テ諸方ノ案内者ニ定ラレケル、然ニ今家久歸國ニ附テ、密ニ大友家ヘ内通シ、明旦家久歸國ス、某シ殿ヲ請受テ討之ベシト云遣シ、家久ニ殿ヲ請ケレバ、其旨ニ任セ急度相勤ベキノ由命ゼラレ、明レバ三月〇天正九年十二日、横雲シラム霞ノ内ヨリ、先陣人數ヲ繰出セバ、次第々々ニ打テ通リケル、扨殿ハ加來刑部少輔鎮綱、究竟ノ武者先後ニ立テ、邊ヲ拂テ打テ過ケルガ、豐後堺ニ嶮キ山アリ、此ニテ二陣ヲ坂半ニ下シ、俄ニ弓鐵炮ヲ放懸拔連テ蒐リケレバ、家久ノ兵大キニ驚キ、一返モ不返シテ逃走ケル、然レ共鎮綱小勢ナリケレバ、次テ追事モ叶ハズ、

〔奥羽永慶軍記二十〕箭田野義正降政宗事

箭田野ハ、〇中略同〇天正十八年暮ツカタ、大里ヲ浪人シ米澤ニ至リ、政宗〇伊達ノ許ニ降ス、モシ政宗承引セラレズンバ、討レン事治定ナリト思ヒ定テゾ來リケル、〇中略政宗彼ガ心底計リガタク思ヒ給ヒシカドモ、叶ハザル時ハ首ヲ刎ラレントイフ、箭田野ガ志ヲ感ジ、本領ノ半地ヲ給ハリ、諸浪人ノ座上ニ定ラレテ置レケリ、同十九年ノ春ニ至リテ、箭田野心ヤ替リケン、米澤ヲ逐電シ、佐竹ニゾ參リケル、去年政宗ニ降參ノ事ハ謀也トハ、其時ニコソ知ラレケリ、イカニモシテ伊達家ヲ滅サント、諸所ノ案内ヲモ見ンガ爲ナリ、又ハ身ヲ捨テモ近付レナバ、一太刀恨ミントノ志ナリシカドモ、政宗名譽ノ大將ニテ、箭田野ヲ近付給ハネバ、是非ナク佐竹家ニ來リヌ、

〔太平記三〕赤坂城軍事

楠此城ヲ構タル事、暫時事ナリケレバ、ハカバカシク兵粮ナンド用意モセザレバ、合戰始テ城ヲ被圍タル事僅ニ廿日餘リニ、城中兵粮盡テ、今四五日食ヲ殘セリ、懸ケレバ正成諸卒ニ向テ云ケルハ、此間數箇度合戰ニ打勝テ、敵ヲ亡ス事數ヲ不知トイヘドモ、敵大勢ナレバ、敢テ物ノ數トモセズ、城中既食盡テ助ノ兵ナシ、元來天下士卒ニ先立テ、草創功ヲ志トスル上ハ、節ニ當リ義ニ臨デハ、命ヲ可惜ニ非ズ、雖然事ニ臨デ恐、謀ヲ好デ成ハ、勇士ノスル所也、サレバ暫此城ヲ落テ、正成自害

僞約

シタル體ヲ、敵ニ知セント思也、其故ハ正成自害シタリト見及バヾ、東國勢定テ悅ヲ成テ可二下向一、下ラバ正成打テ出、又上ラバ深山ニ引入、四五度ガ程東國勢ヲ惱シタランニ、ナドカ退屈セザラン、是身ヲ全シテ敵ヲ亡ス計略也、面々如何計ヒ給ト云ケレバ、諸人皆可レ然トゾ同ジケル、サラバトテ城中ニ大ナル穴ヲ二丈許掘テ、此間堀中ニ多討レテ臥タル死人ヲ、二三十人穴中ニ取入テ、其上ニ炭薪ヲ積テ、雨風吹灑夜ヲゾ待タリケル、正成ガ運ヤ天命ニ叶ケン、吹風俄ニ沙ヲ擧テ、降雨更ニ篠ヲ衝ガ如、夜色窈溟トシテ、氈城皆帷幕ヲ低、是ゾ待所夜ナリケレバ、城中ニ人ヲ一人殘留テ、我等落延ン事、四五町ニモ成ヌラント思ハンズル時、城ニ火ヲ懸ヨト云置テ、皆物具ヲ脫、寄手ニ紛テ、五人三人別々ニナリ、敵ノ役所前、軍勢枕上ヲ越テ、閑々ト落ケリ、○中略廿餘町落延テ跡ヲ顧ケレバ、約束ニ不レ違、早城役所共ニ火ヲ懸タリ、寄手軍勢火ニ驚テ、スハヤ城ハ落ケルゾトテ、勝時ヲ作テ、アヤスナ漏スナト騷動ス、燒靜テ後城中ヲミレバ、大ナル穴中ニ炭ヲ積デ、燒死タル死體多、皆是ヲ見テ、アナ哀ヤ正成ハヤ自害ヲシテケリ、敵ナガラモ弓矢取テ、尋常ニ死タル者哉ト、譽ヌ人コソ無リケレ、

〔續武將感狀記〕秀吉、中川瀨兵衛淸秀、佐久間玄蕃允盛政ト戰ヒテ、敗死スルコトヲ聞テ、長濱ヨリ志津嶽ニ至テ、日已ニ暮ヌ、盛政ガ陣ト其間二里ヲ隔テ、芟舍スル處ニ、盛政使者ヲ以、早々軍ヲ進メラルヽ事、素ヨリ我待所ナリ、明日未明ニ可レ遂二合戰一候トゾ云遣ケル、秀吉此ヨリ可二申達一ノ處ニ、明日ノ合戰心得候ヌトノ返答ナリ、盛政コレヲ聞テ、秀吉不案內ニテ、人馬行程ヲ急テ疲勞セン、今夜一夜擊シテ追拂ハント、相議シケレドモ、秀吉使者ヲ返シテ、盛政我レヲ怠ラセ、夜擊ニセントノ心中ナラン、漢ニテハ張子房、倭ニテハ楠正成ナドナラバ、欺カレモセン、カヽル譎計ニ墜ツベキヤ、一笑スルニ耐タリトテ、正路邪徑ニ夥ク燎ヲ燒セ、山野晝ノ如クナレバ、盛政ガ詭策行ハレズ、

佯退斂兵

〔源平盛衰記二十七〕信濃横田川原軍事

兩陣軍ニシ疲テ、暫ク互ニ休ミ居タリ、木曾〇源義仲ハ謀ヲゾ構タル、信濃源氏ニ井上九郎光基ト云者ヲ招テ、加樣ノ馳合ノ軍ハ勢ニヨル事ナレバ、御方ノ勢ハ少ナシ、如何ニモ軍兵數盡ヌト覺ユ、サレバ敵ヲ謀落サン爲ニ、御邊赤旗赤符付テ、城太郎ガ陣ニ向ヒ給ヘ、サアラバ敵御方ニ勢付タリトテ、荒手ノ武者ヲ指向テ、軍セヨトテ休ミ居ベシ、其間ニ白旗白符取替テ蒐給ハン處ニ、義仲河ヲ渡シテ、北南ヨリ指挾テ蒐立バ、ナドカ追落サヾルベキト云ケレバ、可然トテ井上九郎光基ハ、星名黨ヲ相具シテ、三百餘騎赤旗俄ニ作出シ、赤符ヲ白符ノ上ニ付隱シテ、木曾ガ陣ヲ引下テ、靜々ト筑摩河ヲ打渡シテ、城太郎〇資永ガ陣ニ向フ、案ノ如ク城太郎ハ、御方ニ勢付タリ、餘勢ハ定テ後馳ニゾ來ルラントテ、使ヲ立テ云ケルハ、只今被參人ハ誰人ゾ、返々神妙御方ノ兵軍ニ疲クリ、河ヲ渡シテ敵ノ陣ニ向給ヘト云ケレバ、光基馬ノ鼻ヲ引返ス樣ニシテ赤符カナグリ捨テ、白旗颯ト差擧テ、又馬ノ鼻ヲ引向テ、信濃國住人、井上九郎光基ト名乘テヲメキテ蒐ル處ニ、木曾討モラサレタル勢一千五百餘騎ニテ、河ヲサト渡シテ、音ヲ合テ北ヨリ南ヨリ、揉ニ揉デゾ攻タリケル、城太郎ガ兵ハ軍ニ疲テ有ケルニ、只今ノ勢ヲ憑テ物具クツロゲテ休マントスル處ニ、俄ニ上下ヨリ責ケレバ、甲冑ヲ捨テ逃モアリ、親子ヲ知ラデ落モアリ、山ニ追籠ラレ水ニ責入ラレ、此コニテハ打殺サレ、彼コニテハ被切殺、落ヌ討レヌセシ程ニ、城太郎資永ハ、僅ニ三百餘騎ニテ越後ノ國府ニ引退テゾ息突居タル、當國住人等モ悉ク木曾ニ從付ケレバ、資永國中ニ安堵セズシテ出羽國ニ越テ、金澤ト云所ニ有ト聞エケレバ、木曾ハ關山ヲ固テ、暫ク越後ノ國府ニヤスラヒケリ、

〔太平記二十六〕楠正行最期事

和田新發意如何シテ紛レタリケン、師直ガ兵ノ中ニ交リテ、武藏守ニ差違テ死ント近付ケルヲ、

此程河内ヨリ降參シタリケル、湯淺本宮太郎左衞門ト云ケル者是ヲ見知テ、和田ガ後へ立廻リ、諸膝切テ倒ル所ヲ、走寄テ頸ヲ掻ントスルニ、和田新發意朱ヲ洒ギタル如クナル大ノ眼ヲ見開テ、湯淺本宮ヲ、チヤウド睨ム、其眼終ニ塞ズシテ、湯淺ニ首ヲゾ取ラレケル、大剛ノ者ニ睨マレテ、湯淺膽シテヤ有ケン、其日ヨリ病付テ、身心惱亂シケルガ、仰ゲバ和田ガ怒タル顏天ニ見へ、俯ケバ新發意ガ睨メル眼地ニ見ヘテ、怨靈五體ヲ責シカバ、軍散シテ七日ト申ニ、湯淺アガキ死ニゾ死ニケル、

（頭注）擬援兵入敵城

〔太平記 六〕楠出張天王寺事附隅田髙橋幷宇都宮事

同二年（○元弘）四月三日、楠五百餘騎ヲ率シテ、俄ニ湯淺ガ城へ押寄テ、息ヲモ不繼責戰フ、城中ニ兵粮ノ用意乏シカリケルニヤ、湯淺ガ所領、紀伊國阿瀨河ヨリ、人夫五六百人ニ兵粮ヲ持セテ、夜中ニ城へ入ントスル由、楠風聞テ、兵ヲ道ノ切所へ差遣シ、悉是ヲ奪取テ、其俵ニ物具ヲ入替テ馬ニ負セ、人夫ニ持セテ、兵ヲ二三百人、兵士ノ様ニ出立セテ、城中へ入ントス、楠ガ勢是ヲ追散サントスル眞似ヲシテ、追ツ返ツ同士軍ヲゾシタリケル、湯淺入道是ヲ見テ、我兵粮入ルヽ兵共ガ、楠ガ勢ト戰フゾト心得テ、城中ヨリ打テ出テ、ソヾロナル敵ノ兵共ヲ、城中へゾ引入ケル、楠ガ勢ドモ、思ノ儘ニ城中ニ入スマシテ、俵ノ中ヨリ物具共取出シ、ヒシヒシト堅メテ、則時ノ聲ヲゾ揚タリケル、城ノ外ノ勢、同時ニ木戸ヲ破リ屛ヲ越テ責入ケル間、湯淺入道内外ノ敵ニ取籠ラレテ、可戰様モ無リケレバ、忽ニ首ヲ伸テ降人ニ出ヅ、

〔淺井三代記 三〕淺井新三郎智略を以て上坂の城乘取事

亮政（○淺井）被申けるは、明後日はことごとく支度して、日暮なば五つ時分に上坂の城近く、堀部村へ忍のび入、それより物見をば彼城内へ入、樣子を見はからひ、時分を告來るにをいては、我等百騎の勢をつれ、上坂村搦構内の藪の内へ忍のび入、合詞を以て我手前へ馳來るやうに、侍共に申

付置なり、御邊達兩人は新次郎を召つれられ、殘る百三十騎の勢にて、堀部村は上坂村より間六七町ならではこれなければ、其堀部村に火をかけ鬨を噇とあげらるべし、其時城中驚き取ものも取あへず、我先にとかけ出べし、敵合遠きと思ひ給はゞ、又鬨をあげ給へ、其時兵庫頭も討て出べきなり、其後兩人の人々は、百騎の人數を打つれ、敵の中へまぎれ入、追手の門を心がけ、隨分はやく可被來、新次郎は殘る三十騎の勢にて、四五町次なる垣籠村へ行、又四方より火を放ち鬨を作り給ひ、それより何方へなりとも敵むかば、さる方へにげのがるべし、自然首尾もよきならば、からめての門を心ざし可被馳來、我等は上坂の勢城中を出といふより心がけ、八分程出るを見ば、敵の歸足の樣にして城中へかけ入、門を圍みたるやつばら、番所々々の者共一々に切捨、やがて門をかため、手あて〳〵を申付、敵歸るものならば、射立切立さんざんに可防、貴殿達も隨分はやく城中へかけ入たまひ、共に防ぎ給ふべし、若兵庫頭が勢懸出ぬ物ならば、上坂の城へ押寄、侍共の家々町屋不殘放火して、其上にて樣子見はからひ、無二に切て入べし、敵こはくしてかなはずば、丁野村へ各一所に取籠り、在所をかためて可防、敵猛勢にて責來らば、花々敷一働し、此程の眠を覺させ、其上にも我々に見つくものこれなくば、腹かき切て可果ぞ、各も覺悟し給へとありければ、秀元爲利是を聞、さて〳〵亮政の手立は、異國の張良韓信、我朝にては義經正成も、御邊の術にはいかでか過べき、如此の術ならば、江北は廿日の內には切取べし、其いきほひを以て江南へ亂れ入、六角殿を追立、天下に旗を可立程の器量なりと稱美すれば、亮政大によろこびて、さあらば明後日の暮に丁野村へ二人の衆も御出あれと、堅く契約いたし置、秀元爲利二人の人々は我居住へ歸、其用意をぞしたりける、去程に永正十三年子の八月廿三日の戌の刻に、二百三十騎の勢を引具し、丁野村を立て上坂の城近くしのびより、堀部村の森に居たりしが、しのびの者をつかはし、上坂の樣體を見せけるに、折ふし城中に酒宴の音したりければ、此者時分は今なるべ

しとおもひ立歸り、此旨かくと申せば、合圖のごとく亮政は百騎の勢をつれ、追手の搦構の弓手馬手の藪陰、田中に人數をかくし置、折しも稻葉をおとづるゝ秋風、物さはがしく吹ければ、思ふまゝにぞ忍のびよる、敵政秀元爲利三人の人々は、堀部村にみだれ入、家々に火をかけ、鬨の聲をぞあげたりける、上坂の城には酒宴なかばの事なるに、是はいかなる事やらん、何樣謀叛人出來て夜討するかとて、上を下へとかへしつゝ、騷動することおびたゞし、泰信申されけるは、入道泰貞齋殿の申をかれし事の候へば、淺井新三郎にて有べし、此者人數をよく持とも五十か六十ならではあるまじ、急ぎ懸むかひ忍やつ生捕にせよとありければ、はやりをの若者ども、我先にとかけむかふ、兵庫頭もはやりきつたる若者なれば、進みにすゝんで出給ふ、城中には大將討出給へば、誰可殘といふ者なくて、皆追々に馳出、千五百騎の兵一人も不殘兵庫頭に馳付けり、○中略上坂入道淸眼子息信濃守ばかり、城より外にあつて住たりし、兵庫頭懸向ふを聞、若き大將一人夜中に取放事心許なく思ひ、追續き打て出る、新三郎は思圖に、敵を出しぬき、百騎の勢を引率して、城内へ懸込ば、番所々々の者ども、味方歸とおもへども、寄手兵仗して、門番の者五六人、矢場になぎすてければ、こはいかなる事ぞとて、あなたこなたと防げども、百騎の者ども四方八方へかけ廻り、追つめ〱戰へば、皆ちり〲に落にけり、

〔土佐軍記三〕西内智謀附狄青事

角テ安喜修理亮ハ元親ヲ討滅サント、大軍ヲ發セシニ、毎度ノ軍ニ利ナフシテ、○中略夜半ニ紛テ間道ヨリ忍出、同郡○安喜野根ト云處ヘ楯籠ル、○中略元親是ヲ聞テ、○中略所詮向城ヲ取テ寛々ト城中ノ屈伸ヲ考ミバ、イカナル奇功モ有ベシト思ヒ、ヤガテ城ノ山下ニ陣城ヲ作リ、香曾我部親泰ニ守之、時々ニ足輕ヲ出シ矢軍ノミニテ日ヲ送リ、又ハ忍々ニ斥候ヲ出シテ虛實ヲ探ルニ、城中ハ難所ヲ賴デ、強チニ用心ノ體モナシ、サリトテ寄手ヨリ切テ入ベキ方便モナケレバ、軍ヲ止テ

設虛壁

爲事モナク明シ暮シケル間、○中略文月中比ニモナリシカバ、城中ノ者共モ勇氣倖ケ退屈ノ心生ジテ、今ハ用心モ緩マリ、寄手ノ陣中モ何トナク油斷シテ、與アル遊ヲ初ルゾヤ、我々モ一興ヲ催シテ、此程ノ憂ヲ慰ント、若キ者共打ツレ〳〵城下ニ出テ躍ヲナス、初ノホドハ無用ノ事也ト制セシ人モ、後ニハ共ニ老若男女打交、夜毎ニ躍ヲ催シケリ、カヽル處ニ、寄手ノ番衆ノ内ニ西内喜兵衛ト云シ者、今年十八歲、其爲ㇾ人深智卓量ニシテ謀超ㇾ人タリ、○中略或時密ニ合番ノ者ドモニ申シケルハ、加樣ニ連月對城シテハ、イツカ功ヲナス事ノ有ベキ、其將ㇾ寡攻ㇾ衆ハ不意ヲ討ニ不ㇾ如、サレバ此比味方ノ陣々ニ種々ノ遊興ヲナシ、徒然ヲ忘ルヲ見テ、城中ニモ浦山敷思フニヤ、城下ニ躍ヲ催シ、毎夜男女打交テ群集ヲナス、是幸ノ時節ナレバ、其城兵ニ紛テ躍ノ中ニ行、密ニ城へ付入シテ、首尾ヨクバ火ノ手ヲ上ン、其時各短兵急ニ攻入玉へ、必ズ大功ヲ可ㇾ爲ゾト云バ、傍輩共聞ㇾ之、○中略只犬死ヲスベキニ無用也トゾ止ケル、西内○中略己ガ陣處ニ立カヘリ、物馴タル兵少々引ツレ、躍ル者體ニナリ、ヤウ〳〵城下へ至リミレバ、是ゾ城番ノ者共ト覺テ、長キ刀ヲ横エ、頬髭シテ餘念ナク躍居テ、更ニ尤ル者モナケレバ、夫ヨリ城門ノ邊ニ行テ樣體ヲ窺ケルニ、總門ヲ押開用心ノ侍一人モナシ、○中略役所々々ニ走散テ暫時ニ火ヲゾ掛タリケル、早ツヾキタル頃ナルニ、折シモ山風ハゲシウシテ、城中一遍ニ燃上ル、城下ニ有シ人々大ニ驚キ、是ハ香曾我部城中ノ油斷ヲ窺ヒ、山道ヨリ大勢ヲ忍ビ入、乗トリタルト覺ゾ、此所ニ長居シテ敵ニ取籠ラレテハ叶マジ、先阿波ノ方へ立越、重テ方術ヲ廻サント、安喜野根ヲ始トシテ、我先ニト落行ケリ、

〔太平記 三〕赤坂城軍事

彼赤坂城ト申ハ、東一方コソ山田畔、重々ニ高、少難所ノ樣ナレ、三方ハ皆平地ニ續キタルヲ、堀一重ニ屛一重塗タレバ、如何ナル鬼神ガ籠タリ共、何程事カ可ㇾ有ト、寄手皆是ヲ侮、又寄ルト均、堀中切岸下マデ攻付テ、逆木ヲ引ノケテ打テ入ントシケレドモ、城中ニハ音モセズ、是ハ如何樣昨日

作藁人

如手負ヲ多ク射出テ漂フ處ヘ、後攻勢ヲ出シテ、揉合ンズルヨト心得テ、寄手十萬餘騎ヲ分テ、後山ヘ指向テ、殘二十萬騎稻麻竹葦如、城ヲ取卷テゾ責タリケル、掛ケレドモ城中ヨリハ、矢一筋ヲモ不射出、更人有トモ見ヘザリケレバ、寄手彌氣ニ乘テ、四方屛ニ手ヲ懸、同時ニ上越ントシケル處ヲ、本ヨリ屛ヲ二重ニ塗テ、外屛ヲバ切テ落樣ニ拵タリケレバ、城中ヨリ四方屛釣繩ヲ、一度ニ切テ落タリケル間、屛ニ取付タル寄手千餘人、壓ニ被打タル樣ニテ、目計ハタラク處ヲ、大木大石ヲナゲ懸ナゲ懸打ケル間、寄手又今日軍ニモ、七百餘人被討ケリ、

〔太平記七〕千劒破城軍事

長崎四郎左衞門尉、此有樣ヲ見テ、此城ヲ力責ニスル事ハ、人ノ討ルヽ計ニテ、其功成難シ、唯取卷テ食責ニセヨト下知シテ、軍ヲ被止ケレバ、○中略是ニコソ城中ノ兵ハ、中々被惱タル心地シテ、心ヲ遣方モ無リケル、少シ程經テ後、正成イデサラバ、又寄手ヲタバカリテ、居眠サマサントテ、芥ヲ以テ人長ニ人形ヲ二三十作テ、甲冑ヲキセ、兵仗ヲ持セテ、夜中ニ城ノ麓ニ立置キ、前ニ疊楯ヲツキ雙ベ、其後ロニスグリタル兵、五百人ヲ交ヘテ、夜ノホノボノト明ケル霧ノ下ヨリ、同時ニ時ヲドツト作ル、四方ノ寄手時ノ聲ヲ聞テ、スハヤ城ノ中ヨリ打出タルハ、是コソ敵ノ運ノ盡ル處ノ死狂ヨトテ、我先ニトゾ攻合セケル、城ノ兵兼テ巧タル事ナレバ、矢軍チトスル樣ニシテ、大勢相近ヅケテ、人形計ヲ木カグレニ殘シ置テ、兵ハ皆次第次第ニ城ノ上ヘ引上ル、寄手人形ヲ實ノ兵ゾト心得テ、是ヲ打ント相集ル、正成所存ノ如ク、敵ヲタバカリ寄セテ、大石ヲ四五十、一度ニハツト發ス、一所ニ集リタル敵三百餘人、矢庭ニ被打殺、半死半生ノ者五百餘人ニ及リ、

〔藤葉榮衰記上〕翌日合戰之事

既ニ城中○須賀川城ニテハ兼テヨリ大手搦手ノ門ノ向ヲ深ク掘リ、少モ障ラバ崩ルヽ樣ニ、兩方ノ橋ノ本ヲ假ニ石垣ニ築、石ノ崩ラヌ樣ニ留木ヲ立、其木動クカ横木ノ留ヲ少モ蹈下バ、石垣一度

ニ崩レ打殺サント統クリ拘橋ヲ渡シ簀ヲ掛ケ、上ニ薦ヲ敷少砂散シ平ラゲ、橋ノ兩方ニハ蘆萱ヲ以テ、高サ六七尺ニ駒寄ヲ仕タリケル、堀ノ底ニハ竹ニテ刃簇ヲ削リ油ヲ塗リタテ、其間々ニ鑓刀ヲ相交テ明間モナク醍ト立雙、塵芥ヲ散シ見ヘヌ樣ニ是ヲ隱シケリ、此橋ヨリ間ヲ隔テ擂楯ヲ立、其陰ニ藁人形ニ鎧冑ヲ著セ、弓鑓太刀長刀持セ立置キ、能兵ノ數十人計相交リ待居タリケル處ヘ、寄手ノ兵謀ヲバ不知、眞ノ人ゾト心得、時ヲ作リ攻掛リ討ントス、交リ居タル眞ノ兵ドモ是ヲ遠矢ニ射テ、敵ヲ防グ樣ニシテ皆逃ルヲ見テ、彌ニ乘テ是ヲ討ント、擂楯際マデ攻タリケル、眞ノ兵ドモハ一人モ不殘逃籠ケリ、楯ノ陰ニ兵袖ヲ連テ並居タリトハ見エナガラ、時ノ聲モナシ、眞ノ兵ナラネバ、敵攻入トモ防事ナシ、寄手是ヲ見テ城中方勢盡キ果テ無シ、暫クモ時ヲ不可捨ゾ、攻ヨセ兵ト勇ミ留ツテ楯ヲ進メ、時ノ聲ヲ作掛テ攻掛ル、城中ノ兵猶モ僞テ敵ヲ皆帶キ入テ、昔シ天津兒屋根命ヨリ傳給テ、先祖ヨリ代々實子一人ナラデ相傳ナキ、千金莫傳ノ火箭ヲ一度ニ四五十射掛テ、又櫓ノ上ヨリ續テ射ケル火箭ドモ敵ニ當リ、立置タル藁人形小旗指物擂楯左右ノ蘆萱ノ屛垣ニ火燃附テ、煙天地ニ滿チ、風烈ク猛火盛ンナリケレバ、色々ノ指物小旗好好ノケタウ出デ立チ、裝束ニ火燃附不動ノ火炎ノ如ニテ踊廻リ倒伏シ騷ギ、周章此火ヲ遁ント敵ノ中ヘ逃入討レケレドモ、人ニ人重テ先ノ難儀ヲモ不知押合、跡ヨリ人數大勢連綿ケレバ、先手ノ兵是ヲ怪シムト云ヘドモ、大勢ニ被押自ラ拘橋ノ上ニ人舉テ、接合押倒ケル處ヘ、續松ヲ誘ヘテ兩方ニ火ヲ附テ櫓ノ上ヨリ際限ナク投ゲ懸ケレバ、駒寄橋桁ニ火燃附、橋ノ拘綱燃切レ、一度ニ百ト蹈落シ、立置タル鑓刀簇ニ被貫死スルモアリ、若モ助ルカト堀ノ中ヘ飛入リ死モアリ、手足ヲ打折半死半生ナルモアリ、堀ノ中炎盛ンナリケレバ、此內ヲ登リ出テ苦患ヲ遁ント、石垣ノ留木ニ取附キ、我モ吾モト横木ニ上ケレバ、留木ヲ蹈下引倒ヌレバ、石垣一度ニ崩不殘打殺ケリ、

裝死欺敵

〔太平記十五〕將軍都落事附藥師丸歸京事

楠判官山門ヘ歸テ、翌ノ朝〇建武三年正月廿八日律僧ヲ二三十人作リ立テ、京ヘ下シ、此彼ノ戰場ニシテ、尸骸ヲゾ求サセケル、京勢怪テ事ノ由ヲ問ケレバ、此僧共悲歎ノ泪ヲ押ヘテ、昨日ノ合戰ニ、新田左兵衞督殿、北畠源中納言殿、楠判官已下、宗トノ人々七人迄、被レ討サセ給ヒ候程ニ、供養ノ爲ニ、其尸體ヲ求候也トゾ答ヘケル、將軍ヲ始奉テ、高上杉ノ人々是ヲ聞テ、アナ不思議ヤ宗徒ノ敵共ガ、皆一度ニ被レ討タリケル、サテハ勝軍ヲバシナガラ、官軍京ヲバ引タリケル、何クニカ其首共ノ有ラン、取テ獄門ニ懸、大路ヲ渡セトテ、敵御方ノ尸骸共ノ中ヲ求サセケレ共、是コソトヲボシキ首モ無リケリ、〇中略同日〇正月廿八日夜半許ニ、楠判官下部共ニ燒松ヲ二三千燃シ連サセテ、小原鞍馬ノ方ヘゾ下シケル、京中ノ勢共是ヲ見テ、スハヤ山門ノ敵共コソ、大將ヲ被レ討テ、今夜方々ヘ落行ゲニ候ヘト申ケレバ、將軍モゲニモトヤ思ヒ給ヒケン、サラバ落サヌ樣ニ、方々ヘ勢ヲ差向ヨトテ、鞍馬路ヘハ三千餘騎、小原口ヘ五千餘騎勢多ヘ一萬餘騎、宇治ヘ三千餘騎、嵯峨仁和寺ノ方迄、洩サヌ樣ニ堅メヨトテ千騎二千騎差分テ、勢ヲ不レ被レ置方モ無リケリ、サテコソ京中ノ大勢、大半減ジテ、殘ル兵モ徒ニ用心スルハ無リケレ、去程ニ官軍宵ヨリ西坂ヲヲリ下テ、八瀨、藪里、鷺森、降松ニ陣ヲ取ル、諸大將ハ皆一手ニ成テ、二十九日卯剋ニ、二條河原ヘ押寄テ、在々所々ニ火ヲカケ、三所ニ時ヲゾ揚タリケル、京中ノ勢ハ大勢ナリシ時ダニモ叶ハデ引シ軍也、増テ勢ヲバ大略方々ヘ分チ被レ遣ヌ、敵可レ寄トハ夢ニモ知ヌ事ナレバ、俄ニ周章フタメキテ、或ハ丹波路ヲ指テ引モアリ、或ハ山崎ヲ志テ逃ルモアリ、心ニ發ラヌ出家シテ、禪律ノ僧ニ成モアリ、官軍ハサマデ遠ク追ザリケルヲ、跡ニ引御方ヲ追懸ル敵ゾト心得テ、久我畷桂河邊ニハ、自害ヲシタル者モ數ヲ不レ知アリケリ、

不戰疲敵

〔太平記六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事

宇都宮〇中略、公綱、六波羅ヨリ直ニ七月〇元弘二年十九日、午剋ニ都ヲ出テ、天王寺ヘゾ下リケル、〇中略去程ニ河內國住人、和田孫三郎此由ヲ聞テ、楠ガ前ニ來テ云ケルハ、先日ノ合戰ニ負腹ヲ立テ、京ヨリ宇都宮ヲ向候ナル、今夜既ニ柱松ニ著テ候ガ、其勢僅ニ六七百騎ニハ過ジト聞ヘ候、先ニ隅田、高橋ガ五千餘騎ニテ向テ候シヲダニ、我等僅ノ小勢ニテ追散シテ候シゾカシ、其上今度ハ御方勝ニ乘テ大勢也、敵ハ機ヲ失テ小勢也、宇都宮縱ヒ武勇ノ達人ナリトモ、何程ノ事カ候ベキ、今夜逆寄ニシテ打散シテ捨候バヤト云ケルヲ、楠暫思案シテ云ケルハ、合戰ノ勝負、必シモ大勢小勢ニ不依、只士卒ノ志ヲ一ニスルトセザルト也、サレバ大敵ヲ見テハ欺キ、小勢ヲ見テハ畏レヨト申事是ナリ、先思案スルニ、先度ノ軍ニ大勢打負テ引退ク跡ヘ、宇都宮一人小勢ニテ相向フ志、一人モ生テ歸ラント思者ヨモ候ハジ、其上宇都宮ハ坂東一ノ弓矢取也、紀清兩黨ノ兵、元來戰場ニ臨テ命ヲ棄ル事、塵芥ヨリモ尙輕クス、其兵七百餘騎、志ヲ一ニシテ戰ヲ決セバ、當手ノ兵、縱退ク心ナク共、大半ハ必討ルベシ、天下ノ事、全今般ノ戰ニ不可依、行末遙ノ合戰ニ、多カラヌ御方、初度ノ軍ニ被討ナバ、後日ノ戰ニ誰カ力ヲ可合、良將ハ不戰シテ勝ト申事候ヘバ、正成ニ於テハ、明日、態ト此陣ヲ去テ引退キ、敵ニ一面目在樣ニ思ハセ、四五日ヲ經テ後、方々ノ峯ニ篝ヲ燒テ、一蒸蒸程ナラバ、坂東武者ノ習、無程機疲テ、イヤ〱長居シテハ惡カリナント、一面目有時、去來ヤ引返サント云ヌ者ハ候ハジ、サレバ懸ルモ引モ折ニヨルトハ、加樣ノ事ヲ申也、夜已ニ曉天ニ及ベリ、敵定テ今ハ近附ラン、去來サセ給ヘトテ、楠天王寺ヲ立ケレバ、和田、湯淺モ諸共ニ打連テゾ引タリケル、夜明ケレバ、宇都宮七百餘騎ノ勢ニテ、天王寺ヘ押寄セ、古宇都ノ在家ニ火ヲ懸ケ、時ノ聲ヲ揚タレ共、敵ナケレバ不出合、〇中略頓テ京都ヘ早馬ヲ立テ、天王寺ノ敵ヲバ、卽時ニ追落シ候ヌト申タリケレバ、兩六波羅ヲ始トシテ、御內外樣ノ諸軍勢ニ至マデ、宇都宮ガ今度ノ振舞拔群也ト、譽ヌ人モ無リケリ、宇都宮天王寺ノ敵ヲ、輙ク追散シタル心地ニテ、一面目ハ有體ナレ共、聽テ續

用火牛

テ、敵ノ陣ヘ責入ン事モ無勢ナレバ不叶、又誠ノ軍一度モ不爲シテ、引返ン事モサスガナレバ、進退谷タル處ニ、四五日ヲ經テ後、和田、楠、和泉河内ノ野伏共ヲ四五千人驅集テ、可然兵二三百騎差副、天王寺邊ニ遠篝火ヲゾ燒セケル、スハヤ敵コソ打出タレト騷動シテ、深行儘ニ是ヲ見レバ、秋篠ヤ外山ノ里、生駒ノ嶽ニ見ユル火ハ、晴タル夜ノ星ヨリモ數ク、藻鹽草志城津ノ浦、住吉難波ノ里ニ燒篝ハ、漁舟ニ燃ス居去火ノ波ヲ燒カト怪シマル、總テ大和河内紀伊國ニアリトアル所ノ、山々浦々ニ篝ヲ燒ヌ所ハ無リケリ、其勢幾萬騎アラント推量レテヲビタヾシ、如此スル事兩三夜ニ及ビ、次第ニ相近付ケバ、彌東西南北、四維上下ニ充滿シテ、闇夜ニ晝ヲ易タリ、宇都宮是ヲ見テ、敵寄來ラバ、一軍シテ雌雄ヲ一時ニ決セント志シテ、馬ノ鞍ヲモ不息、鎧ノ上帶ヲモ不解、待懸タレ共、軍ハ無シテ、敵ノ取廻ス勢ヒニ勇氣疲レ、武力怠テ、哀レ引退カバヤト思フ心著ケリ、斯ル處ニ紀淸兩黨ノ輩モ、我等ガ僅ノ小勢ニテ此大勢ニ當ラン事ハ、始終如何ト覺候、先日當所ノ敵ヲ無事故追落シテ候ツルヲ、一面目ニシテ御上洛候ヘカシト申セバ、諸人皆此議ニ同ジ、七月二十七日夜半許ニ、宇都宮天王寺ヲ引テ上洛スレバ、翌日早旦ニ、楠頓テ入替リタリ、

〔源平盛衰記二十九〕礪並山合戰事

木曾ハ礪並山黑坂ノ北ノ麓、埴生社八幡林ヨリ松永柳原ヲ後ニシテ、黑坂口ニ南ニ向テ陣ヲ取、平家ハ倶梨伽羅ガ峠、猿馬場、塔ノ橋ヨリ始テ、是モ黑坂口ニ進ミ下テ、北ニ向テ陣ヲ取、○中略木曾ハ追手ニ寄セケルガ、牛四五百匹取集テ、角ニ續松結附テ、夜ノ深ルヲゾ相待ケル、去程ニ樋口次郎、林富樫ヲ打具シテ、中山ヲ打上、葎原ヘ押寄タリ、根井小彌太二千餘騎、今井四郎二千餘騎、小室太郎三千餘騎、巴女一千餘騎、五手ガ一手ニ寄合セ、二萬餘騎、北黑坂南黑坂引廻シ、時ヲ作太鼓ヲ打、法螺ヲ吹、木本萱本ヲ打ハタメキ、蟇目鏑ヲ射上テ、トヾメキ懸タレバ、山彥答テ幾千萬ノ勢共覺エザリケルニ、木曾スハヤ搦手ハ廻シケル、時ヲ合セヨトテ、四五百頭ノ牛ノ角ニ松明ヲ燃シ

テ、平家ノ陣ヘ追入、胡頽子(グミ)、木原、柳原、上野邊ニ扣ヘタル軍兵三萬餘騎、閧ヲ合喚叫、黑坂表ヘ押寄ル、前後四萬餘騎ガ閧、山モ崩岩モ摧ラント夥シ、道ハ狹シ山ハ高シ、我先々々ト進、兵ハ多シ、馬人共ニ壓ニ押レテ、矢ヲハゲ弓ヲ引ニ及バズ、打物ハ鞘ハヅシ兼タリ、追手ハ搦手ニ押合セント責上、搦手ハ追手ト一ニナラント喚叫ブ、平家ハ兩方ノ中ニ被二取籠一タリ、軍ハ明日ゾアランズラント取延テ思ケル上、如法夜半ノ事ナルニ、俄ニ時ヲ造懸タレバ、コハ如何ガセントト東西ヲ失ヒ、周章騷、弓取物ハ矢ヲトラズ、矢ヲバ負共弓ヲ忘、冑ヲ著テ甲ヲキズ、太刀一ニハ二人三人取附、弓一張ニハ四五人ツカミ付ケリ、馬ニハ逆ニ乘テ後ヘアガヽセ、或ハ長刀ヲ逆ニ突テ、身足ヲ突切テ、立アガラザル者モ有ケレバ、蹈殺サレ蹴殺サルヽ類多シ、主ノ馬ヲ取テハ主ヲ忘レ、親ノ物具ヲ著テハ親ヲ顧ズ、唯我先々々ニト諍ヘ共、西ハ搦手也、東ハ追手也、北ハ岩石高シテ上ルベキ樣ナシ、南ハ深キ谷也、下スベキ便ナシ、闇サハクラシ案内ハ不レ知、如何ガスベキト方角ヲ失ヘリ、此山ハ左右ハ極テ惡所也、後ハ加賀御方也、三方ハ心安思ヒツルニ、後陣ヨリ敵ノヨセケル危シサヨト思ケレバ、只云事トテハ、打破テ加賀國ヘ引ケヤ者共々々ト呼リケレ共、搦手雲霞ノ如クナリ、追手上ガ上ニ責重ケレバ、先陣後陣ニ押アマサレテ、道ヨリ南ノ谷ヘ下ル、

〔史記列傳八十二〕田單乃收二城中一得二千餘牛一、爲二絳繒衣一、畫以二五綵龍文一、束二兵刃於其角一、而灌レ脂束二葦於尾一、燒二其端一、鑿二城數十穴一、夜縱レ牛、壯士五千人隨二其後一、牛尾熱、怒而奔二燕軍一、燕軍夜大驚、牛尾炬火光明炫燿、燕軍視レ之皆龍文、所レ觸盡死傷、五千人因銜レ枚擊レ之、而城中鼓譟從レ之、老弱皆擊二銅器一爲レ聲、聲動二天地一、燕軍大駭敗走、

〔承久記上〕式部丞朝時ハ、五月晦越後國府中ニ著テ勢汰アリ、枝七郎ガ武者、加地入道父子三人、大胡太郎左衞門尉、小出四郎左衞門尉、五十嵐黨ヲ具シテゾ向ケル、越中越後ノ界ニ蒲原ト云所アリ、一方ハ岸高クシテ、人馬更ニ難レ通、一方ハ荒磯ニテ、風烈キ時ハ、船路心ニ任セズ、岸ニ添タル同

放牝馬

ゾ、道間ヲ傳フテトメユケバ、馬ノ鼻五騎十騎雙ベテ通ルニ不能、僅ニ一騎計通ル道也、市降淨土ト云所ニ逆茂木ヲ引テ、宮崎左衞門堅メタリ、上ノ山ニハ石弓張立テ、敵ヨセバ弛シカケント用意シタリ、人々如何スベキトテ、各區ノ議ヲ申シケル所ニ、式部丞ノ謀ニ、濱ニイクラモ有ケル牛ヲトラヘテ、角先ニ續松ヲ結付テ、七八十匹追ツヾケタリ、牛續松ニ恐レテ、走リ突トヲリケルヲ、上ノ山ヨリ是ヲ見テ、アハヤ敵ノ寄ルハトテ、石弓ノ有限ハヅシ懸タレバ、多ノ兵被討テ死ヌ、去程ニ石弓ノ所ハ無事故打過テ、夜モ明ボノニ成リケルニ、逆茂木近押寄テ見レバ、折節海面ナギタリケレバ、賊木尻吹ノ早雄ノ若者共汀ニ添テ、馬强ナル者ハ、海ヲ渡シテ向ケリ、又足輕共手々ニ逆茂木取ノケサセテ、通ル人モアリ、

〔四國軍記〕九丹生山夜討附淡河彈正奇策事

彈正淡河○普請ノタメニ城ヲ出、頗ル油斷ノ由ヲ秀吉ニ訴ル者アリ、秀吉大ニ悅ビ、舍弟小一郞秀長五百餘騎二手ニ分テ押寄、巳ニ掛入ントシケレドモ、堀切鐵菱ニ支ヘラレ少シ漂フ處ヲ、淡河一族五十八人素肌ニテ切テカヽル、彈正驅塞リ、各ハ物ニ狂フカ、數千人ノ敵ノ中ヘ、僅ニ四五十人切テ入、何ノ功ヲカナスベキ、我一ノ手立アリトテ、近邊ノ在鄕ヘ人ヲ走シ、陰馬一匹引テ來ン者ニハ、錢三百文宛アタフベシト觸ケレバ、時ノ間ニ陰馬五六十匹引來ル、諸侍彼馬ノ口ヲ引、道ノ廣ミヘ押出ス、小一郞見之、アレ程ノ小勢ニテ掛來ルハ、死狂ト覺タリ、馬强ラン人々十方ヨリ馬ヲ入アテ倒ヨトテ、究竟ノ驅武者馬上ニ鎗ヲ提ゲ打入ル處ニ、彼陰馬五六十匹タヽキ立、鬨ヲ上一度ニ敵陣ヘ追込ケレバ、數千ノ乘馬陰馬ヲ見テハネマハリ、左右ニ立躍狂ヒケレバ、十方黑烟立テ上ヲ下ヘト返シケル間、馬上ニ一人モタマリエズ、皆ハネ落レ踏倒レ散亂シタル處ヲ、彈正思フ圖ニ敵ヲサハガセ、時分ハ能ゾ切崩ト、一族若黨五十八人聲ヲ上テ打テ入、三百餘騎散々ニ切立レテ引退、

〔源平盛衰記 四十三〕湛増同意源氏附平家志度道場詣并成直降人事

判官(○源義經)伊勢三郎義盛ヲ召テ、河野四郎追討ノタメニ、成良(○田口)ガ嫡子傳内左衞門尉成直三千餘騎ニテ伊豫ヘ越タリ、召捕テ進ヨト下知ス、依命起座、義盛ハ究竟ノ山賊海賊古盗人ノ謀賢キ男也、先下﨟男ヲ一人出シ立テ、次第歴巾蓑笠ニ旅籠持テ、傳内左衞門ニ伺過テ云ベキ樣委敎テ、一日路ヲ先立テ伊豫國ヘ越、義盛ハ三千騎ヲ從ヘントテ、十七騎ノ勢ヲ具シテ一日路サガリテ向ケリ、(○中略)成直(○中略)道ニ夫男ニ會、傳内左衞門尉己ハ何所ヨリイヅクヘ通ル者ゾト問、屋島ヨリ伊豫ヘ罷者ニテ候ト答、偖屋島ニハ何事カアルト問、夫男答云樣ハ、(○中略)其外ノ事ハ不知ト申テ過ヌ、傳内左衞門此言ヲ聞ヨリ心弱ク思テ、一所ニテ何トモ成ベカリケル者ヲ、無由伊豫ヘ越テケリ、父降人ニ參給ケル事ハ、成直ヲ今一度見モシ見エン爲歟、但下﨟ノ說不足信用、實否ヲ聞ントテ馬ヲ打テ行程ニ、讃岐國三木郡琴造ノ宮ト云所ニテ、伊勢三郎ト傳内左衞門ト行會タリ、義盛鐙蹈張弓杖ツキ、アレハ傳内左衞門尉ト見ハ僻目歟、是ハ源氏ノ郎等ニ伊勢三郎義盛ト云者也、平家ハ屋島ノ軍ニ負テ、内裏以下人々ノ家々皆燒ヌ、大臣殿父子小松殿ノ公達、恥アルハ大底被虜給ヌ、汝ガ父民部大輔ハ頸ヲ延テ降人ニ參ス、櫻間大夫勝浦ニテ虜ル、此二人義盛預、汝ガ父ハ降人ナレバ頸ヲバ可繼、櫻間大夫ハ死罪難遁、種々歎申間、御恩ニ申カヘントト存、能登殿コソ由々敷振舞給タリシカ、判官殿乳母子佐藤三郎兵衞鎌田藤次ヲ始トシテ、多クノ郎等討レヌ、結句舟ニ乘海ニ入給ヌ、實ノ大將軍ト覺キ、抑汝源氏ニ可奉隨カ、猶意趣アルカ、民部大輔ノ降人ニ參ル事、今一度汝ヲ見ントノ恩愛ノ情ト存、父ヲモ見故郷ニカヘラント思バ、義盛ニツケ、命ヲバ可申請、角云ヲソムキ給ハヾ通シ侍ルマジト云、弓取直シ矢束ヲ解、成直ハ夫男ガ詞、義盛口上無相違ト思ケレバ、父左樣ニ參ケル上ハ、成直以テ同事トテ、弓ヲ弛シ甲ヲ脫テ義盛ニ從、伊勢三郎申ケルハ、降人トシテ軍兵ヲ引率ス、不審可相貽ト云、成直郎等ニ暇ヲタビ、其ヨリ散々ニ返ス、義

盛謀澄シテ判官ノ許ヘ將向、十七騎ノ勢ニテ三千餘騎ヲ從ヘル事、古今無類、判官ハ參上神妙也、成直己ガ頸ヲモ繼テ、父ヲモ見ント思ハヾ、狀ヲ父ガ許ヘ音信ヨト宣フ、成直畏テ狀ヲ遣ス、源平ノ合戰勝劣雲泥也、後勘有恐、前降源家早仕同心之思、必遂面謁之志ト、阿波民部成良ハ、平家ノ軍如何ニモ叶ベクモ不見ケレバ、心ヲ源氏ニ懸タリケルニ、成直虜レヌト聞ケレバ、判官ニ通ジテ阿波國ヘ渡ヌ、彼國住人等成良ガ命ヲ守テ、皆隨屬源氏、此三箇年ノ間ハ平家ニ忠ヲ盡シテ、度々軍ニモ、父子共ニ忠ヲ致シケルニ忽ニ心替シヌ、平家運盡トハイヒナガラ無慙ナリ、

〔校合雜記八〕一大坂退治の後、或人權現樣御前にて申けるは、大坂大扱ひの意趣、滅亡の次第、更に凡慮の及ぶ所にあらず、古より名將多けれ共、ケ樣の謀は承りたる事も侍らずと申ければ、是は我智謀に非ず、太閤の敎へ玉ひし事也、相州小田原の扱ひの趣は、信玄の家風を傳へ、我等秀吉に差圖申たり、秀吉大坂の城を取立玉ひし時、此城は力攻などには中々思ひもよらず、扱ひを掛て二度目ならでは落されまじきなりと語られし事、我に敎られたるにてはなき歟、此物語を將たる者聞ざるはなかりしかども、心をつけざるに依て、聊思ひあたらずと宣り、抑關白秀吉初僅の松下加兵衛が宅に、身をよせられしが、日本は申すに及ばず、朝鮮迄責伏られし事又類ひなし、大坂の城成就の上にて、秀吉諸大將の志を聞んとて、此城の責やう如何有べきやとあれば、各口を閉て默然たる時、秀吉の云く、地の利堅固にして思儘に築たる城なれば、力攻にして落る利はすくなし、一度扱ひを掛て堀を埋、虎口を破りなどせずしては、輙く落がたき城也と語られしは、大なる誤に聞へ侍れども、必ず趣向落着の所あらんといふ者あれば、尤も誤り玉ふ處にあらん、未來の工夫ましての事なるべし、

○

〔保元物語一〕新院御所門々堅附軍評定事

左府(頼長)即合戰ノ趣計ヒ申セト宣ヒケレバ、畏テ爲朝久ク鎭西ニ居住仕テ、九國ノ者共從ヘ候ニ付テ、大小ノ合戰數ヲ不知、中ニモ折角ノ合戰廿餘箇度也、或敵ニ被圍テ強陣ヲ破リ、或ハ城ヲ責テ敵ヲ亡スニモ、皆得利事夜討ニシク事侍ラズ、然バ只今高松殿ニ押寄、三方ニ火ヲ懸、一方ニテ支候ハンニ、火ヲ遁ン者ハ矢ヲ不可免、矢ヲ恐レン者ハ、火ヲ不可遁、主上(後白河)ノ御方心ニク、モ候ハズ、但兄ニテ候義朝ナドコソ懸出スラメ、夫モ眞中サシテ射通シ候ナン、增テ清盛ナドガヘロヘロ矢、何程ノ事カ候ベキ、鎧ノ袖ニテ拂、蹴散テ捨ナン、行幸他所ヘナラバ、被御敎ヲ蒙テ、御供ノ者少々射ンズル程ナラバ、定テ駕輿丁モ御輿ヲ捨テ、逃去候ハンズラン、其時爲朝參向ヒ行幸ヲ此御所ヘ成シ奉リ、君(崇德)ヲ御位ニ卽ケ進セン事、掌ヲ返ス如クニ候ベシ、主上ヲ迎ヘ進セン事、爲朝矢二三放サンズル許ニテ、未天ノ明ザラン前ニ、勝負ヲ決セン條、何ノ疑カ候ベキト、憚所モナク申タリケレバ、左府爲朝ガ申樣以外ノ荒儀也、歲ノ若キガ致ス所カ、夜討ナド云事、汝等ガ同士軍十騎二十騎ノ私事也、流石主上上皇ノ御國爭ニ、源平數ヲ盡テ兩方ニ有テ勝負ヲ決センニ、無下ニ不可然、其上南都ノ衆徒ヲ被召事有、興福寺ノ信實玄實等、吉野十津河ノ指矢三町、遠矢八町ト云者共ヲ、召具シテ、千餘騎ニテ參ルガ、今夜ハ宇治ニ著、富家殿ノ見參ニ入、曉是ヘ參ベシ、彼等ヲ待調テ合戰ヲバ可致、又明日院司公卿殿上人ヲ催サンニ、不參者共ヲバ死罪ニ可行、首ヲ刎事兩三人ニ及バヾ、殘ハナドカ可不參ト被仰ケレバ、爲朝上ニハ承伏申テ、御前ヲ罷立テツブヤキケルハ、和漢ノ先蹤、朝廷ノ禮節ニハ似モ似ヌ事ナレバ、合戰ノ道ヲバ、武士ニコソ可被任ニ、道ニモアラヌ御計ヒ如何アラン、義朝ハ武略ノ奥義ヲ極タル者ナレバ、定今夜寄ントゾ仕候覽、明日迄モ延バコソ吉野法師モ奈良大衆モ入ベケレ、只今押寄テ風上ニ火ヲ懸タランニハ、戰トモ爭利有ンヤ、敵勝ニ乘程ナラバ、誰カ一人安穩ナルベキ、口惜キ事カナトゾ申ケル、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十九日壬寅、十五日京都飛脚下著、申云、昨日(十四日)幕下幷黃門(實氏)仰二

位法印尊長、被召籠弓場殿、十五日午剋遣官軍、被誅伊賀廷尉、則勅察使光親卿、被下右京兆○北條泰時追討宣旨於五畿七道之由云云、關東分宣旨御使、今日同到著云云、○中略相州○北條時房武州○北條義時前大官令禪門○大江廣元前武州○足利義氏以下群集、二品○平政子招家人等於簾下、以秋田城介景盛示含曰、皆一心而可奉、是最期詞也、故右大將軍征罰朝敵、草創關東以降、云官位云俸祿、其恩既高於山岳、深於溟渤、報謝之志淺乎、而今依逆臣之讒、被下非義綸旨、惜名之族早討取秀康、胤義等、可全三代將軍遺跡、但欲參院中者、只今可申切者、群參之士悉應命、且溺涙申返報不委、只輕命思酬恩、寔是忠臣見國危、此謂歟、武家背天氣之起、依舞女龜菊申狀、可停止攝津國長江、倉橋兩庄地頭職之由、二箇度被下宣旨之處、右京兆不諾申、是幕下將軍募勳功賞定補之輩、無指雜怠而難改由申之、乃逆鱗甚故也云云、晩鐘之程、於右京兆館、相州、武州、前大膳大夫入道、駿河前司、城介入道等凝評議、意見區分、所詮固關足柄筥根兩方道路、可相待之由云云、大官令覺阿云、群議之趣一旦可然、但東士不一揆者、守關渉日之條、還可爲敗北之因歟、任運於天道、早可被發遣軍兵於京都者、右京兆以兩議申二品之處、二品云、不上洛者、更難敗官軍歟、相待安保刑部丞實光以下、武藏國勢、速可參洛者、就之爲令上洛、今日遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、武藏、安房、上總、常陸、信濃、上野、下野、陸奧、出羽等國々飛脚、京兆奉書可相具一族等之由、所仰家々長也、其狀書樣、自京都可襲坂東之由、有其聞之際、相模權守、武藏守、相具御勢所打立也、以式部丞向北國、此趣早相觸一家人々可向者也、　廿一日甲辰、今日天下重事等、重評議、離住所向官軍、無左右上洛如何、可有思惟歟之由、有異議之故也、前大膳大夫入道云、上洛定後依隔日、已又異儀出來、令待武藏國軍勢之條、猶僻案也、於累日時者、雖武藏國衆漸案定可有變心也、只今夜中武州雖一身被揚鞭者、東士悉可如雲之從龍者、京兆殊甘心、但大夫屬入道善信爲宿老、此程老病危急之際籠居、二品招之示合善信云、關東安否此時至極訖、擬廻群議者、凡慮所覃、而發遣軍兵於京都事、尤庶幾之處、經日數之條頗可謂懈緩、大將軍一人者先可進發歟者、京兆云、兩議一揆、何非冥助

乎、且可進發之由、示付武州、今夜門出、宿于藤澤左衛門尉清近稻瀨河宅云云、

〔梅松論〕下建武三年○中略漸五月五日の夕、備後の柄に御著有、當津に御逗留有けるに、諸國の御方同心に申けるは、御歸洛いそがるべき趣共なり、仍御合戰評定まち／＼なり、一儀に云、兩將は御舟にて、四國中國の大將國人等陸地を發向すべき、一儀には兩將皆陸地を御むかひあるべき歟、一儀には兩將皆御舟にて御進發有べきか、各大儀に依ていまだ落居せざる所に、太宰少貳賴尙進申けるは、兩將御船にて御進發の義、更に愚意の及ざる處也、天下の是非は今度の御手合によるべきか、すでに敵播磨備前兩城を圍むよし其告あり、是等を退治して、大半は落居あるべきか、然に船軍計にては、山陰の退治落居ゐがたし、幸に兩將御坐の上は、將軍は御船、頭殿は陸地を御發向有べし、賴尙陸地の先陣を承て、亡父妙惠が遺言に任て、百ケ日の追善合戰して、佛事に仕べし、賴尙生前の訴訟、たゞ此事なりと頻に申ける間、此儀可然とて、將軍は御舟、下御所○足利直義は陸地を御發向治定して、則御手合あり、

〔太平記〕十六正成下向兵庫事

尊氏卿直義朝臣、大勢ヲ率シテ上洛ノ間、要害ノ地ニ於テ防ギ戰ハン爲ニ、兵庫ニ引退ヌル由、義貞朝臣早馬ヲ進テ、內裏ニ奏聞アリケレバ、主上大ニ御騷有テ、楠判官正成ヲ被召テ、急兵庫へ罷下、義貞ニ力ヲ合セテ合戰ヲ可致ト被仰ケレバ、正成畏テ奏シケルハ、尊氏卿已ニ筑紫九國ノ勢ヲ率シテ、上洛候ナレバ、定テ勢ハ雲霞ノ如ニゾ候覽、御方ノ疲レタル小勢ヲ以テ、敵機ニ乘タル大勢ニ懸合テ、尋常ノ如クニ合戰ヲ致候ハヾ、御方決定打負候ヌト覺へ候ナレバ、新田殿ヲモ只京都へ召候テ、如前山門へ臨幸成候べシ、正成モ河內へ罷下候テ、畿內ノ勢ヲ以テ河尻ヲ差塞、兩方ヨリ京都ヲ攻テ、兵粮ヲツカラカシ候程ナラバ、敵ハ次第ニ疲テ落下、御方ハ日々ニ隨テ馳集候ベシ、其時ニ當テ新田殿ハ山門ヨリ推寄ラレ、正成ハ搦手ニテ攻上候ハヾ、朝敵ヲ一戰ニ滅ス

事有ヌト覺候、新田殿モ定テ此料簡候共、路次ニテ一軍モセザランハ、無下ニ無云甲斐人ノ思ハンズル所ヲ耻テ、兵庫ニ支ラレタリト覺候、合戰ハ兎テモ角テモ始終ノ勝コソ簡要ニテ候ヘ、能遠慮ヲ被廻テ、公議ヲ可被定ニテ候ト申ケレバ、誠ニ軍旅ノ事ハ兵ニ讓ラレヨト、諸卿僉議有ケルニ、重テ坊門宰相淸忠申サレケルハ、正成ガ申所モ、其謂有トイヘドモ、征罰ノ爲ニ差下サレタル節度使、イマダ戰ヲ成ザル前ニ、帝都ヲ捨テ、一年ノ內ニ、二度マデ山門ヘ臨幸ナラン事、且ハ帝位ノ輕キニ似、又ハ官軍ノ道ヲ失處也、縱尊氏筑紫勢ヲ率シテ上洛ストモ、去年東八箇國ヲ從ヘテ上シ時ノ勢ニハヨモ過ジ、凡戰ノ始ヨリ、敵軍敗北ノ時ニ至迄、御方小勢也トイヘ共、每度大敵ヲ不攻靡云事ナシ、是全ク武略ノ勝タル所ニハ非ズ、只聖運ノ天ニ叶ヘル故也、然レバ只戰ヲ帝都ノ外ニ決シテ、敵ヲ鈇鉞ノ下ニ滅サン事、何ノ子細カ可有ナレバ、只時ヲ替ヘズ、楠罷下ルベシトゾ被仰出ケル、正成此上ハサノミ異議ヲ申ニ不及トテ、五月〇建武三年十六日ニ都ヲ立テ、五百餘騎ニテ兵庫ヘゾ下リケル、

〔大塔物語〕村上滿信者、九月〇應永七年三日屯兵專旗打立、〇中略長秀〇小笠原未諮寺家〇善光寺軍內談也、長秀云晃者、暫憑寺家、京都立使者、可申成他國勢歟、雖爲小勢先可致一合戰歟云、飯田入道進出、不及合戰而注進太不思寄、頓馳驟決雌雄、免萬死逢一生、其時注進社面白云々、皆々同此儀、〇下略

〔陰德太平記七十九〕隆景卿行狀事

林吉兵衞入道梅林、內藤河內守二人吉川侍從ヘ參リ、隆景卿逝去ノ事ヲ歎キ申シ淚ヲ流シ、暫ハ顏ヲモ不擡、廣家朝臣モ亦泣沈ミ給ケリ、良有テ林、內藤申ケルハ、元春御存生ノ時、隆景ト互ノ軍評定直談セサセ不給時ハ、兩人ヲ使トシ給シ事ハ御存知ニ候、サルニ信長ト和睦破レテ後、元春、隆景、御兄弟ノ御所存不合ノ事時節候キ、元春ヨリ軍議ニ付テ如此申候ヘト被仰間、隆景ヘ參、今度ノ合戰元春ニハ云々ノ御思惟ニ候ト申セバ、隆景聞召、總ジテ元春若武者カ、又ハ五百三百ノ

侍大將ナドノ云ン樣ニ、動レバ不叶バ討死スル迄ヨ、此ヲバ不去、彼所へ推入ントノミ宜ヘリ、大敵ノ秀吉ニ鋒ヲ爭ンヲ、左樣ニ短慮ニ勇一途ヲ專ニシテハ大敗ニ及ナンズ、尼子勝久ナドヲコソ左ノ如クハ心得ベケレト宜ヲ承候テハ、誠ニ此仰道理的當也、此事ハ元春ノ誤ヲセ給タリト覺悟仕テ、其由元春ヘ申セバ、元春又御心ニ不應、隆景武道ニ不心得モ承ル物哉、何條勝久如ノ小敵ト一同ノ看ヲバ作ベキ、勝久等ノ小敵ニハ先自不負工夫シテ能身ヲ縮リテ戰ヲナセバ、渠小敵ナルガ故、次第ニ威衰ヘテ終ニ敗北スル也、小敵ヲバ可恐也、サテ信長ヲ敵トシ、秀吉ト矛楯ニ及ヲヤ、彼ハ大敵強敵、殊ニ秀吉ハ大勇ニシテ智亦兼備スルノ良將也、天性大膽ニシテ敵ニ弱氣付ト見テハ、只一時ニ攻破リ、其足ヲ不止五箇國モ三箇國モ直ニ押入樣ナル弓取也、サル故ニ父元就、陶晴賢ヲ於嚴島討亡シ、ザテ一兩年ヲ置テ後、山口ヘ入給タルヲ聞、元就ノ弓矢モ古風也、吾ナラマシカバ、陶ヲ討テ其勢ニ乘、直ニ山口ヘ攻入ベシ、然ラバ大內義長ハ、其年ニ可亡ニ、遠慮過タル弓矢ノ取樣也ト批判セラル、斯ル大不敵ノ將ナレバ、味方少モ弱氣ヲ見セバ、威ニ任セ大軍ヲ以卽時ニ押泯ルベシ、如此大將ノ而モ大軍ナルヲバ、五勇ヲ專トシテ、重ニ懸リ彼ガ機ヲ奪ヒ動セバ、十死一生ノ戰ヲ決セン躰ヲ示シテコソ宜シカルベケレ、夫ヲ小敵ト一般ノ思ヲ造、危キ戰ヲ愼ミ、身ヲ大事トノミ心得タランハ、敵ニ威ヲ奪ハレ、味方ノ氣後レテ終ニ刃ニ不血シテ大敗スル物也、大敵ヲ見テハ不恐、勇ミタルガ好也、元就、尼子ヲ攻ント欲シテ雲州ヘ押入給シ時ハ、戰ヲ後ニシテ謀ヲ先ニシ、陣城ヲ築テ身ノ全キ行ヲ成給、陶如ノ大敵ニハ、彼二万餘ニ吾三千ヲ以テ對陣シ、風雨ニ嚴島ニ渡テ、千死一生ノ戰ヲ挑ミ給ヘリ、是龜鑑ニ非ヤ、秀吉如ノ敵ヲ勝久ナドニ對スル樣ニ心得テ、殆シ〳〵ト愼ナバ、終ニ不戰シテ大ニ敗亡スベシ、依敵轉化スト云シハ如何ニト宜ヲ承テハ、愚ナガラ是亦究竟ノ道理哉ト存候キ、元春ヘ參テ仰ヲ承レバ當然ノ理也ト存ジ、隆景ヘ參テ仰ヲ承レバ至當セリト存ズ、何レノ御所存〳〵ツトシテ不愚候キ、カヽル明將、

今ハ二人ナガラ亡ナラセ給事ノ歎カシサヨ、

〔明良洪範 六〕關ケ原御著陣前ニ、諸將岐阜ノ城ヲ責ント云時、井伊兵部少輔直政進ミ出テ、岐阜攻ノ事ハ、何程ノ事カ有ン、一時ニ乘取ベシト申サルケル時、加藤嘉明イヤ〳〵左樣ニハ成ル間敷、根子屋ヲ取切候ハヾ、大イナル働ナルベシ、本城迄ハ思モヨラズト云、井伊直政上方衆ニハ、色々御分別モ候ハンガ、關東ノ軍ハ手ヌルキ事ハ致サズ、一時乘リ然ベシト云、加藤嘉明コレヲ聞テ、アザ笑テ、御身ハ三河、關東ニテ小ゼリ合計仕付テ、大軍ニ出會タル事モナク、其大言片腹痛シト云、井伊直政大イニ怒リ、刀ニ手ヲ掛テ、先年長久手野ニテ、手並ノ程ハ知ツラン、我ヲ赤鬼ト稱シテ恐タルヲ、忘レタルカト罵リケル、此時細川黑田本多ナド中ヘ入、雙方ヲ宥メ、大事ノ前ノ小事也、殊ニ井伊ハ内府公心腹ノ老臣也、夫ト口論ハ御無用也トテ鎭メケル、其後加藤嘉明申ケルハ、岐阜ハ城狹クシテ大軍籠リシ故、根子屋迄堅固也、マヅ根子屋ヲ攻テ、根子屋ノ敵ヲ城ヘ追入レ、構ヲ拵ヘ一トムシ蒸テ扱ヒヲ入テ城ヲ取ベシ、サスレバ、人數ヲ損ゼズシテ城ヲ取也、然ルヲ直政匹夫ノ勇ニ誇リ、ヒタ攻ニセント云ハ、論ズルニ足ズト云、諸將コレヲ聞テ嘉明ガ了簡ヲ感ジケル、

古事類苑

兵事部五

將帥

古事類苑

兵事部五

將帥

將帥ハ軍ノ首將ナリ、故ニ又主將ト云ヒ、軍將ト云ヒ、大將若シクハ元帥トモ云ヘリ、太古天孫降臨ノ時、經津主、健甕槌ノ二神ヲ遣シテ、不順ノ者ヲ平ゲシム、是レ實ニ本邦將帥ヲ任ズルノ權輿ニシテ、崇神天皇ノ朝ニ、新ニ四道將軍ヲ命ゼシハ、蓋シ將軍ノ稱ノ國史ニ見エタル始ナルベシ、大寶ノ制、兵士一萬人以上、五千人以上、三千人以上ヲ以テ各一軍ト爲ス、三軍ヲ總ブル毎ニ大將軍一人ヲ置ク、大將軍ノ下ニ將軍二人、副將軍四人、軍監四人、軍曹十人、錄事八人、大毅十八人、少毅三十六人、主帳十八人、校尉九十人、旅帥百八十人、隊正三百六十人アリ、總計七百三十一人、是ヲ三軍(一萬千人)ニ於ケル隊正以上ノ概數ト爲ス、而シテ副將軍以上、是ヲ將帥ト云ヒ、校尉以下隊正以上、是ヲ主帥ト稱ス、凡ソ大將出征スレバ皆節刀ヲ授ク、大毅以下軍ニ臨ミ寇ニ對シ、令ニ從ハザルモノアレバ、死罪以下、法ニ依テ斬決セシム、而シテ大將發遣ノ日ハ、勅使ヲ遣シテ慰勞セシメ、其家京ニ在レバ月毎ニ存問シ、若シ疫疾有レバ醫藥ヲ給フ、凱旋ノ日、復タ勅使ヲシテ郊勞セシム、延暦延喜ノ間、稍之ヲ損益スル所アリト雖モ、大要此ノ如キニ過ギズ、武家兵權ヲ握ルニ及テハ、其制大ニ異ナルモノアリ、當時首將ヲ呼ビテ仍ホ私ニ大將軍ト稱スルモノアリト雖モ、其多クハ之ヲ總大將ト云ヒ、裨將ヲ脇大將、若シクハ副大將ト云ヘリ、又軍大將アリ、武者大將アリ、侍ニ將タルモノ、之ヲ侍大將ト

云ヒ、卒ヲ率キルモノ、之ヲ足輕大將ト云フ、旗大將、長柄大將、弓大將、鐵砲大將、船大將等ハ、各其掌ル所ニ由リテ名ヅクルモノニシテ、而シテ大將ノ下ニ小將アリ、頭アリ、頭ニ大小アリ、組ニ組頭アリ、陣ニ陣頭アリ、又旗頭、采配頭、足輕頭等ノ別アリ、多クハ戰國騷亂ノ間ニ出デテ、其職制ノ如キ、固ヨリ之ヲ詳ニシ難キモノアリ、

此篇ハ軍團、兵卒、鎭兵、大宰府兵等ノ諸篇ニ關聯スルモノ尠カラズ、又征西將軍、征東將軍、鎭東將軍、征夷將軍、征狄將軍、及ビ鎭守府將軍ノ如キハ、官位部將軍篇、鎭守府篇等ニ載セタレバ、宜シク參看スベシ、

名所

〔伊呂波字類抄〕志疊字將。帥。

〔令義解〕五軍防將帥者、副將軍以上也、

〔令義解〕五軍防凡軍營門、恒須嚴整呵叱出入、若有勅使、皆先通軍。將。整備軍容、然後受勅、

〔源平盛衰記〕三十五粟津合戰事

義仲、兼平馬ヲ打並テ宣ケルハ、川原ノ合戰ニ、高梨、仁科、根井モ討レヌ、身モ已ニ疵ヲ被、心疲力盡テ、進退歩ヲ失、爲敵被得事、名將ノ耻也、軍敗レ自害スルハ、猛將之法也ト申ケレバ、兼平申ケルハ、勇士ハ、不食不飢、被疵不屈、軍將ハ通難求勝、去死決辱、就中平氏西海ニ在ス、軍將北州ニ入給ハ、天下三ニ分レテ、海內發亂セン歟、先急テ越前國府マデ遁給ヘ、

〔甲陽軍鑑〕品第四十二利根過たる大將の事附北條家上杉家幷川中島合戰物語之事

七十ケ年以前に、伊豆の宗雲三略をきかんとあり、物知の僧をよび、夫主將。法。務攬英雄之心とあ る所まできゝ、はや合點したるぞ、をけと有りしを、〇下略

〔三略〕上略上夫主將之法、務攬英雄之心、賞祿有功、通志於衆、故與衆同好、靡不成、與衆同惡、靡不傾、

〔日本書紀〕神武三戊午年六月、是時大伴氏之遠祖日臣命、帥大來目督將。元。戎。蹈山啓行、

〔後漢書七十五呂布傳〕其督將高順諫止、○中略注曰、將軍威名宜播遠近、所畏何求不得、而自行求賂、萬一不剋、豈不損邪、布不從、

〔唐書百四十一列傳〕盧從史、○中略少好騎射、遊澤潞間、節度使李長榮署爲督將、

〔書言字考節用集四人倫〕大將ダイシヤウ又云元帥ゲン

〔職原抄下〕外武官○中略大將謂之元帥、

〔春秋左氏傳七僖公〕二十七年冬、楚子及諸侯圍宋、宋公孫固如晉告急、○中略於是乎蒐于被廬、作三軍、謀元帥、中軍帥

〔唐書六本紀〕代宗睿文孝武皇帝、○中略初名俶、封廣平郡王、安祿山反、○中略至德二載九月、以廣平郡王爲天下兵馬元帥、率朔方、安西、回紇、南蠻、大食等兵二十萬以進討、　寶應元年四月甲戌、奉節郡王适、爲天下兵馬元帥、郭子儀罷副元帥、

〔杜詩集注五〕觀兵　妖氛擁白馬、元帥待彤戈、（中略）元帥、謂廣平王俶、待彤戈、謂待天子賜以彤戈、而後往征也、

〔日本書紀十四雄略〕八年、新羅王、○中略伏請救於日本府行軍元帥イクサノキミタチ等、

〔空華日工集四〕嘉慶元年八月十日、瑞泉心岩田相陽府瑞泉禪寺、以至德丁卯年、本府元帥源君、○足利義滿遙奉大丞相鈞旨、特陞以爲十刹之列、

〔元亨釋書十七王臣〕副元帥平時頼者、家世將種、初右將軍源頼朝、文治之間領天下兵馬之權、時頼之祖○北條時政爲其元佐、而屬姻婭、爾來世主兵權、皇考、王父、皆居副帥之任、

〔碧山日錄〕長祿四年○寬正元年四月九日乙卯、是日撰道元禪師之行實、○中略寶治元年丁未、關東副元帥平時頼刱迎、至治所受菩薩戒、

〔令義解五軍防〕主帥者、隊正以上、校尉以下也、

〔令義解五宮衞〕凡車駕有所臨幸、若夜行、部隊主帥、謂五十人爲隊、即五十人以上長、是爲主帥也、各相辨識、

〔唐律疏議 衛禁七〕諸闌入太廟門、及山陵兆域門者、徒二年、○中略主帥又減一等、主帥、謂親監當者、

疏議曰、主帥、謂領兵宿衛大廟、山陵、太社三所者、

〔唐律疏議 擅興十六〕諸揀點衛士、征人亦同、取捨不平者、一人杖七十、三人加一等、罪止徒三年、○注略若軍名皆定、而差遣不平、減二等、即應差主帥、而差衛士者加一等、

〔唐律疏議 名例六〕疏議曰、○中略問曰、假有主帥、於所部衛士家盜物、得同於監臨內取財以否、答曰、主帥於所部衛士、統攝一身、既非取受之財盜、乃律文不攝、止同常盜、不是監臨、

〔唐律釋文 六〕主帥 謂主領衛士之長、爲主帥、

〔令義解 衣服六〕朝服　主帥、謂門部使部、其隊正等者、依衛士例也、 皂縵頭巾、皂緌、○下略

〔律疏 衛禁〕凡宿衛者、兵仗不得遠身、違者笞五十、若輙離職掌加一等、○疏略別處宿者又加一等、主司各加二等、○中略

凡於宮門外若宮城門守衛、以非應守衛人、冒名自代、若代之者徒一年、京城門減二等、守衛謂兵衛其在諸處守當又減一等、○疏略餘犯應坐者各減宿衛罪三等、○疏略主帥以上加守衛罪二等、

〔唐律疏議 衛禁八〕諸宿衛者、兵仗不得遠身、違者杖六十、若輙離職掌加一等、別處宿者、又加一等、主帥以上、各加二等、　疏議曰、○中略稱主帥以上、謂隊副以上、至大將軍以下、

○按ズルニ、律疏ヲ唐律疏議ニ對校スルニ、前條主司ノ二字ヲ主帥以上ノ四字ニ作リテ、而シテ後條主帥以上加守衛罪二等ノ十字ナシ、

〔兵要錄 練兵六〕編隊 編隊爲陣　合編數隊爲一陣、諸隊長之中選其人使統主諸隊、謂之陣將、或號部將、俗謂一[illegible]之大將、一手之大將者是也、　對諸隊長則俗謂之旗頭、所謂旗頭也、　指其所屬之諸隊謂之旗下、所謂部下也、　唯祿秩相並而不得稱旗下者、共營則謂之相備、其取陣將進止同于諸隊、　素屬三五隊將者、陳將之列也、

編陣 編陣爲一軍　合諸陳爲一軍、將于一軍人號之軍將、俗所謂一軍之大將者是也、　隊長、陳將、各取軍將節度也、凡禁

暴亂討逆賊壓敵國以一軍之力故軍將殊選其人　素管領一州已上之將者軍將之列也

軍將中選其人爲偏裨是號左右將軍輔佐大將軍統領諸軍範賴義經之於賴朝公直義師直之於尊氏公是皆偏將軍之例也

總偏裨冠諸軍謂之大將軍異朝如韓衛鄧關之輩爲其任也本朝神武天皇東征之日物部氏祖道臣命爲軍帥崇神御宇命四道將軍遣四方景行御宇以日本武尊爲大將軍東征蝦夷爾來鎭撫四夷征不服之輩皆得將軍之任源羽林朝〇頼辭官就國之後有勅任征夷大將軍兼知天下之事覇業實權與于茲矣足利氏覇諸侯兼相將又爲天下之上將經十有餘代而失鹿之後尊王輔國之盟主必有上將軍之宜其間有據國跨州恃其強大而自稱大將者非元帥之例也

〔兵要錄三將略〕將德　夫將者民之司命社稷安危存亡之主也故兵法曰將者國之輔也輔周則國必强輔隙則國必弱蓋文能附衆不戰而服人者將之德也修寇戰寇守之宜作一勞永逸之計戰必勝攻必取者將之材也材德兼備而後足以爲國之輔矣　南塘戚子曰有將材而無將心其將也無將心斯無將德將德應而用其才此世之所以有驕將有逆臣有矜怠之行有盈滿之禍有怏怏之色不能立功全名衛國保家爲始終完器也　百戰百勝是不謂良將勇冠三軍是不謂良將智察機微是不謂良將唯仁德懷百姓誠忠感鬼神加之以材智勇謀則當獲稱良將矣故吳子曰其威德仁勇必足以率下安衆怖敵決疑施令而下不敢犯所在而寇不敢敵得之國强去之國亡是謂良將孫武事將德曰智信仁勇嚴也凡達人情察機微應變轉禍者智也敎令正賞刑公而誠能感衆者信也知饑渴同勞苦問病撫傷愛士卒如嬰兒者仁也察機則發見利則鬪雖危不懼雖窮不變雖敗不挫者勇也軍政整齊號令如一不怒而自有威可望而不可近者嚴也將能備此五德乃足以爲將矣　將有智則任使得人而三軍定故上下不亂將有信則人心觀感而不疑故下不變其操將有仁則士卒親附百姓悅服故民要以死報恩將有勇則氣呑敵三軍强故所觸必敗所當必潰將嚴則士卒畏將而不畏敵故三軍重而不爲敵所

勳、未有如斯而不立功衛國、安民揚名、益封戸保子孫者矣、若無此德則反之、

〔甲陽軍鑑 品第四十一 十五〕よき軍法と云此元を尋に、大將の、さいはいを能とり給ふ事肝要なり、よきさいはいの其もとはよき法度なり、よき法度の其元は五ッあり、

一大將の、人をよく目利して、其奉公人得物を見しりて、諸役を被仰付事、

一侍の事は申に及ばず、大小上下共に武士たらん者の手柄、上中下をよくわけて、又無手柄をも上中下をよく分て、鏡にて物のみゆる様に、大將の私なくなさるゝ事、

一右の兵手柄のうへ恩をあたへ給ふ事、手柄上中下のごとく被下、同言葉の情も其手柄に隨て大將のなさるべく候事、

一大將、慈悲をなさるべき儀肝要なり、

一大將の、いかり給ふ事餘になければ、奉公人油斷ある物なり、油斷あれば自然に分別ある人も背、上下共に費なり、又其嗔にも奉公人、科の上中下によつてあそばし、又ゆるす事もあるべき事、是法度のもとなり、

〔當流軍法功者書 上〕大將タル人心持之事 付心ヲ付事

大將タル人、組頭ナドスル人ハ、憐愍フカク言ヲヨクカクカクベシ、賴朝ノ軍歌曰、

大將ハ人ニ言ヲヨクカケテ目ヲクバリツヽ掛引ヲセヨトアリ、シゼン大將ムタイノ事ヲ言トキハ、士卒吾身ノ不逃コトヲ慮テ、大將ヲイザナイ大敵ノ圍ヘ向フ、如此トキハ大將必無故討死ヲスルナリ、大將討レバ其一組ハ敗軍スルナリ、總ジテ大將タル人ハ、士卒ヲヨク使手立アルヲ大勇ト云、自身ノハタラキニ十倍スルナリ、

〔當流軍法功者書 下〕大將タル人日比嗜之事

大將タル人ハ、事々ニ不定ナル事有ベカラズ、カリソメニモ言ノ胡亂ナル事アレバ、人必輕シム

ル者ナリ、故曰、君子愼言ト云リ、人ヲ制スル者ハ、理非明カニ事ヲツヽシムベシ、摠ジテ信心モナク大欲ヲ先トスル者ハ、取弓箭一旦利アリトイヘドモ、永代世ヲ治ルコトナリガタカルベシ、

〔兵要錄四 將略〕將禮　三略曰、夫將帥者、必與士卒同滋味、共安危、敵乃可加、故兵有全勝、軍讖曰、軍井未達、將不言渴、軍幕未辨、將不言倦、軍灶未炊、將不言飢、冬不服裘、夏不操扇、雨不張蓋、是謂將禮、與之安、與之危、故其衆可合而不可離、可用而不可廢、以其恩素蓄、謀素合也、

將戒　自懈而勵下者、下不肯服焉、怒則怨謗起矣、素書所謂令與心乖者廢者是也、　懸令犯一件於躬、則不行於下、坐則以爲苛虐也、　將驕則衆傲之、故群下貧而武備不給、　將貪則下好貨利、而靡廉恥之俗、國竊盜多、　將多怒則怨讎起矣、責過而言不遜則多讟、　將遴嗇則士卒難立功、且恩賜無敍、則下貪而風俗亂矣、　將重色則下好淫、百殃生於斯、出細則將絕淫志、否則士卒生內顧之情、而三軍之銳氣脫却也、　嘉阿諛逢迎、忌諫爭直語、則佞奸進而賢良退、不待外患、內亂已極矣、　以譎詐御下、則下亦欺上、謂之自取焉、故狡智小黠者、君子之所惡也、　勸誘專于利而以義不制、則其弊必至于犯上篡國、　不師古、專任于私智、則事皆因自己之偏僻而作爲來、故不平易正直矣、且拘々於古而不涉于今、則乖時俗、廢時務、故不利於民也、　信讒好佞、則啓間諜之行、而賢良智能爲所斥矣、所以覆軍亡國也、凡間到於外者易拒、生於心者難除焉、　將不習武藝、則無緣倡人、但不要執一技而廢他技也、恃勇不學兵法、於士尚不善之、况於將哉、未有不習法術、不曉利害、而輙能開合變化、運用無窮者、或雖學之、徒弄舊套而不活轉變通者、無益於實戰也、故敏智者自然師其意、不泥其迹、乃能百戰百勝矣、不義而好鬭者、不久而亡、軍所到毒于民者失衆望、臨于敵不戒者必取敗、恃衆而懈者被襲、見利而貪者陷賊計中、　夫功名有分、唯自盡實而勿需于外、凡名不及實者安、實不及名者危、况管多方做虛套、專事粉飾、而實事不繼者乎、一旦敗露、鬼神譏之矣、　素書云、念舊惡而棄新功者凶、夫夷齊不念舊惡、所以怨希也、漢高封雍齒、所以功臣喜也、昨有非今改之、何不容之、讎雖叛今已服、何不撫之、朝雖走夕

有功、何不賞之、夫棄之者、非寬大之量也、何以得御衆哉、　凡謀欲謹愼周密圓活也、臨事而不可輕忽、輕忽則悔隨之、勝敗已決、而無益于悔焉、凡事欲不洩、事先洩則害已成矣、事之易洩者、出於將吏之輕薄也、將吏所以輕薄者、從主將之不厚重來、可不愼哉、　謀及於芻蕘、乃良策罔攸伏也、好問而察邇言、則嘉言靡所遺也、此驅天下之智以成己用矣、智計莫大於斯、故自古創業之君、成功之將、靡不取于人以用焉、自恃其智而示明于下者闇也、雖有智士不獲諫焉、自恃其材而專任自己者孤也、雖有英材不得輔焉、乃闇且孤、何以安社稷矣、故自古亡國之主、失軍之將、莫不拒諫任自己者也、

〔兵法雄鑑 四十三 用思〕大將五用　一老將は若きを用事　二若將は用老事　三盛將は老若共に用る事　四爲古用新事　五爲新用古事

大將五思　一看江河則須不流思事　二看火則須不可燒家思事　三使人者須看出其能思事　四取國者必亡國思不成事　五用兵者須不負終勝思事

〔兵要錄 三將略〕愛士　戚子曰、十萬之衆、非一人可當、必賴士卒誓同生死、奮勇衝鋒、兵法、愛之如嬰兒、故可與之赴深溪、古人吮士疽、殺妾以饗、投醪共味、此何等作爲、如今將領不惟不推恩、而且虐使之、不可枚擧、誰與共性命哉、夫士卒最易感動、死生雖大有因一言一縷之恩、而甘死不辭者、惟我眞能愛士、自然觀感、固不必其人人愛千金之惠、再生之德、而後謂之愛、而後得其感耳、　愛推赤心、則一點眞誠、深入士卒之肺肝、而不能自已矣、故將感士卒最易、士卒感將最難、因一言一縷之恩、而舍生取義、是士卒之非易感激哉、野戰衝鋒、攻城先登、蹈白刃、冒矢石、萬死中幸得一生、其功出于衆、而後將嘉之、是將之非難感動哉、然爲其難之士多、而行其易之將罕也、是何故哉、士者有朋友責善、同僚糾事、長吏執法、故自得操心守身愼事、且知臨事竭力之當爲、聽委靡罷軟之當恥、所以間有盡分之輩也、諸將者本生於富貴之中、傚富貴之事、自不知士卒之甘苦勞逸、且諸將之會、非禮事則燕饗、故無由得朋友之責矣、其常侍側者、豎兒禿髮、而適入武帳者、上司諫官也、此所謂一日暴之、十日寒之者、而不違于感其德矣、唯

庶其德、所以不得推保赤子之誠也、

〔兵要錄 四 將略〕勵士　夫施號令而人樂聞、興師旅而人樂戰、接兵刃而人樂死者、操練素熟、感激素積、以氣性活潑也、凡所以致活潑之術不一端、而要唯在以實心行之也、　一曰、共勞苦、夫將與士卒共寒暑勞苦饑飽、則下感激而爲所用矣、故三軍之衆、聞鼓聲則喜、聞金聲則怒、野戰白刃已接、士爭先赴、攻城矢石繁下、士爭先登、此豈人之情、然如此者爲將能通士卒甘苦之情、身先之而率下感人深也、　二曰、正賞刑、夫賞刑者所以勸懲衆也、或分乎貴賤、或私於親疎、則賞刑不行於下矣、孔明所以能令賢愚僉忘其身者、勸戒明而賞不遺遠、罰不阿近、爵不可以無功取、刑不可以貴勢免也、勸戒明、則士卒進死爲榮、退生爲辱矣、　三曰、祭陳亡、夫士卒奉命忘身、而致死於社稷、豈人主之所忘哉、故國建報忠寺、葬死于事者、將臨而自祭之、涕泣悲其死、每歲以仲秋使人祭、以報戰死之忠矣、故人感其追慕之厚、而陳亡爲榮矣、　四曰、賞遺子、夫賞有功、而不賞戰死、則士以爲死無益、所以懈而不振也、隨功之輕重忠之淺深、而賞祿于遺子、記父之功、以與之於書、且遣使於其家、勞其父母妻子、以節賜以肴菓、而著不忘於心、故士感兩手握著之恩、不斁死于戰陳矣、　五曰、饗戰士、凡擧有功、而進饗之、則無功者自知激勵也、饗上功者、飾餚席、設重器、具滋味、喫飯已、卽將臨于席、自飮賜酒盞、以功爲差、飮酒已、卽將手賜茶、饗次功者、席飾重器、美味差減、喫飯已、卽將臨于席、士飮酒已、卽手賜茶、饗無功者、餚席無飾、用漆器、少兼味、喫飯已、卽將臨于席、士飮酒已、不令啜茶、每歲以節設此饗禮、是魏武侯之所以勵士也、然彼同日而燕饗、分上下行、忽辱無功士、起爲人素殘忍、故能爲之、蓋將以實心待、則士自知激勵、以憤怒辱、則士憾而中心叛、今行之者、其前後以功爲差、而不同日、是不欲立辱士、唯要其激勵而已、　六曰、勵死戰、夫兵之情、窮則闘、陷則振、故兵法曰、衆陷於害、然後能爲勝敗、項羽與秦軍戰、既渡河沈船破甑、持三日糧、示以必死、無不一當百、遂虜秦將、此所以振作士之術也、　七曰、託鬼神、凡不得已則以詭譎神奇愚士卒、如田單稱神師、而破燕師、殺騎劫、狄青擲百錢、而奪崐崘、敗智高、本朝楠正成爲征北條氏、傾衆心於讖文、平

信長欲襲今川氏、援兵機於神奇、是知或衆寡不敵、或三軍不振、所以姑託鬼神而勵士衆也、

兵紀　正以處心、廉以律己、忠以事君、謙以尙德、虛以容諫、寬以待下、敬以處事、力以率下、信以統武、約以懸令、律以出師、斷以定策、權以措勝、勇以決戰、整以制敗、公以行賞、謙以忘勞、此將官修德用兵之綱紀也、

將軍

〔伊呂波字類抄　志疊字〕將軍

〔運步色葉集　志〕將軍（唐名大樹、幕府、柳營、）

〔職原抄　下〕外武官　將帥之職、古今重之、所以分閫外之權也、（中略）○本朝將帥之任、起於神代也、其初天照大神、欲降天孫於豐葦原中國之時、遣經津主神（又云、齋主神、香取神是也、健雷神、鹿島神是也、）令平諸不順者云云、大物主神帥八十萬神昇天、天神勅曰、宜領八十萬神、永爲皇孫奉護、乃使還降之云云、一書曰、事代主神、八萬四千鬼類大神將也云云、又云、大伴連遠祖天忍日命、帥來目部遠祖天櫰津大來目、背負天磐靫、臂著稜威高鞆、手提天梔弓天羽羽矢、及副持八目鳴鏑、又帶頭槌劒、而立天孫之前云云、神代之制粗可見矣、至于人代神武天皇東征之日、物部氏祖道臣命爲軍帥、（古稱武士云物部起於此云云）崇神天皇十年、命四道將軍遣四方云云、將軍之號正起於此歟、其後景行天皇四十年、以皇子日本武尊爲大將軍、以武日命武彥命爲左右將軍、東征蝦夷云云、爾來征行之日、命將軍不可勝計、

〔武家名目抄　職名二上〕將軍　按、將軍ノ職掌ハ、已ニ神代ニ權輿ストイヘドモ、幽玄ノ世ノ事ナレバ今妄ニ論ジガタシ、（神代將軍ノ任ニアタレルハ、武甕雷命コレ其人ナリ、）人王ニ至リテ道臣命始テ其任ニアタレリ、然レドモモトヨリ將軍ノ號アルコトナシ、其名目ノ國史ニ見エシハ、崇神紀ナル四道ノ將軍ヲ始トス、古事記ニモ此事ハ見エナガラ、將軍トイヒシコトナキヲ思ヘバ、當時イマダ此名稱ナカリシヲ、全ク異朝ノ書ニ習ヒ潤色シテカヽレシ物ト見ヘタリ、（日本紀ノ體裁、ナベテシカナレバナリ、）垂仁紀ナル將軍モ此例タルコト推テシルベシ、古事記ニハ仲哀ノ記ニ始メテ將軍ノ稱見エタレド、

コレ又ウケガタシ神功皇后三韓ヲ威服シ玉ヒ、彼國朝貢ヲ致スニ及ビテ、或ハ經典ヲ奉リ、或ハ博士ヲ獻ゼリコレヨリ皇朝ノ制ヤウヤク異朝ニ效フモノアリ、サレバ雄略紀、欽明紀等ニ見エタル大將軍ハ既ニ其稱アリシナリ、(略)○注大寶ヨリ以後ハ各職掌ヲ冠ラシメテ、或ハ征東將軍ト稱シ、或ハ征狄征隼人ナドイフ類、必ズ稱號ヲ加ヘラレケレバ、ヒトヘニ將軍、大將軍トノミイフコトハ絶タリ、(略)○注然ルニ征東征隼人ノ類ハ、皆是臨時ノ任ニシテ、ヒトリ鎭守將軍ノミ、永續ノ職トナレルガ故ニ、弘仁中其職員ヲ定メラレシヨリ、夷狄追捕ノコト等、大概鎭守府ノ任トナレリ、サレバ其比ヨリ後、常ニ將軍トノミ稱スレバ鎭守將軍ヲイフコトニテ有シヲ、建久以來、征夷使連綿シテ鎭守ノ任ヲ廢セラレシカバ、其後打任セテ將軍ト稱スルハ、征夷使ヲイフコトヽナレリ、

〔令義解 五 軍防〕凡將帥出征、兵滿一万人以上、(謂一萬二千人以下、何者、滿三千人、得一軍號故也、)將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、(謂軍曹者、大主典也、錄事者、少主典也、)五千人以上、(謂九千人以下也、)減副將軍軍監各一人、錄事二人、三千人以上、(謂四千人以下也、)減軍曹二人、各爲一軍、

〔日本書紀 五 崇神〕十年九月甲午、以大彦命遣北陸、武渟川別遣東海、吉備津彦遣西道、丹波道主命遣丹波、因以詔之曰、若有不受敎者、乃擧兵伐之、既而共授印綬爲將軍、

〔古事記 中 仲哀〕此時忍熊王、以難波吉師部之祖、伊佐比宿禰爲將軍、太子(○應神)御方者、以丸邇臣之祖、難波根子建振熊命爲將軍、故追退到山代之時、還立各不退相戰、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年六月己丑、大伴連吹負、率數十騎劇來、則熊毛及諸直等、共與連和、軍士亦從、乃擧高市皇子之命、喚穗積臣百足於小墾田兵庫、爰百足、乘馬緩來、逮于飛鳥寺西槻下、有人曰、下馬也、時百足下馬遲之、便取襟以引墮、射中一箭、因拔刀斬而殺之、乃禁穗積臣五百枝、物部首日向、俄而赦之、置軍中、且喚高坂王、稚狹王、而令從軍焉、既而遣大伴連安麻呂、坂上直老、位味君宿那麻呂等、於不

破宮、令奏事狀、天皇大喜之、因乃令吹負拜將軍、

〔續日本紀 八 元正〕五年十二月辛丑、太政官奏、授刀寮及五衞府別設鉦鼓各一面、便作將軍之號令、以爲兵士之耳目、節進退動靜、奏可之、

大將軍

〔運歩色葉集 多〕大將軍

〔武家名目抄 職名二上〕大將軍、副將軍、　按、大將ノ稱ハ始メテ雄略紀ニ見エ、副將ハ欽明紀ニ出タリ、往古ハ官軍出テ征スルコトアレバ、必大將軍副將軍ヲ任ゼラレテ、節刀軍令等ヲ給ハスル式アリシニ、中古以來ハ其式モ大カタ略儀ニ從ヒ、モシ事アル時ハ、武士ノ其器ニ堪タル者ニ命ジテ征伐ヲ致サシム、是ヲ呼テ征罰使、追討使ナド稱スルコト常ノナラヒトナリヌ、然リシヨリ後、大將軍、副將軍ノ職ヲ授クルコトハ、オノヅカラ絶テ、ヒトヘニ一軍ノ首將ヲヨビテ大將軍ト稱シ、次將ヲ副將軍トイフコト、ナレリ、○中略サレバ大將軍、副將軍トイヘルモ皆俗言ニトナヘシ稱呼ニテ、全ク其職ニ任ゼラレシニアラズトイヘドモ、是亦朝廷ノ命ニ出タル將帥ニシテ、其名稱モ同キガ故ニコヽニ贅セズ、（鎌倉右大將家ヨリアナタニモ、武家ノ輩、私ニ大將、副將ナドトナヘシコトアリ、コレハ公家ニテ將軍拜任ノコト廢絶セシ故ナリ、殊サラ右大將家以來ハ、朝廷ノ命令ヲ待ズシテ、大將、副將ナドイヘルコト常ノナラヒトナレリ、）又公卿補任ニ、大伴旅人、和銅二年正月六日爲大將軍ト見エ、續日本紀ニ、和銅七年五月丁亥朔、大納言兼大將軍正三位大伴宿禰安麻呂薨トアレド、此二卿出征討罰ノ事所見ナシ、オモフニ大伴氏ハ道臣命ヨリ世々武功名譽ノ家ナレバ、事ナキ時モ兼テ此職ニ補セラレシニモ有ベシ、

〔令義解 五 軍防〕凡將帥出征、○中略毎惣三軍大將軍一人、（謂一万人以上、及五千人以上、并三千人以上、各爲一軍、故云三軍、其三軍官員、大將軍一人、將軍二人、副將軍四人、軍監四人、軍曹十人、錄事八人、）

〔日本書紀 十四 雄略〕九年三月、天皇欲親伐新羅、○中略勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、（談、此云箇陀利、）小鹿火宿禰等曰、○中略以汝四卿拜爲大將、宜以王師薄伐、天罰龔行、於是紀小弓宿禰使大伴室屋大連憂

陳於天皇曰、臣雖拙弱敬奉勅矣、〇中略五月、〇中略天皇勅大連曰、大將軍紀小弓宿禰、龍驤虎視、旁眺八維、掩討逆節、折衝四海、然則身勞萬里、命墜三韓、宜致哀矜、宛視喪者、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月丁亥、廣嗣遂起兵反、勅以從四位上大野朝臣東人爲大將軍、從五位上紀朝臣飯麻呂爲副將軍、軍監、軍曹各四人、徵發東海、東山、山陰、山陽、南海五道軍一萬七千人、委東人等、持節討之、

〔平家物語五〕ふじ川の事

去程に右兵衞の佐殿、〇源賴朝むほんのよし、しきりに風聞有しかば、ふくはらには、公卿せんぎ有て、今一日もせいのつかぬさきに、いそぎ討手を下さるべしとて、大將軍には、小松の權のすけ少將これもり、ふく將軍には、さつまの守忠度、侍大將には、かづさの守たゞきよをさきとして、つがふ其勢三万よき、九月十八日に、新都を立て、明日十九日には、きうとにつき、やがて同じき廿日の日、東國へこそおもむかれけれ、

〔楠木合戰注文〕正慶二年分　河内道　大將軍遠江彈正少弼殿治時大平　軍奉行長崎四郎左衞〇衞下恐脫門字尉高眞　大和道　大將軍陸奥右馬助殿　軍奉行工藤二郎右衞門尉高景　但此外出羽入道爲使節向之　紀伊手　大將軍名越遠江入道殿　軍奉行安東藤内左衞門入道圓光

〔籾井家日記一〕丹波國ハ、無類ノ堅固ノ國ニテ、昔ヨリ代々名ヲ得シ弓取大剛ノ者ドモノ子孫旗頭トシテ守護シ、弓矢ノ花モ實モ備リタル處ナレバ、ヨキ大將軍ヲ仰ギ奉リテ、一族ニテ畿内、南海、北陸ヲ一統シ、天下ニ旗ヲ立べキ時節ト、七頭七組ノ大將衆ヲ初メ、工夫淺カラズ候、

〔海東諸國記〕長門州〇中略光久、丁亥年、〇我應仁元年稱壽藺護送遣使來朝、書稱長門州文司浦大將軍源光久、

〔海東諸國記〕備後州〇中略政良、戊子年、〇我應仁二年遣使來朝、書稱備後州高崎城大將軍源朝臣政良、

副將軍

左將軍右將軍

以宗貞國請接待、○下略

〔日本書紀二十二推古〕八年二月、新羅與任那相攻、天皇欲救任那、是歲、命境部臣爲大將軍、以穗積臣爲副將軍、並闕名則將萬餘衆、爲任那擊新羅、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年七月、是月遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、遂到任那、以薦集部首登弭、遣於百濟、約束軍計、

〔日本書紀二十一崇峻〕四年十一月○十一月原作十二月、今據日本書紀曆考改、壬午、差紀男麻呂宿禰、巨勢臣比良夫、狹臣、○狹臣、集解據前紀作膳臣賀拕夫、大伴囓連、葛城烏奈良臣爲大將軍、率氏氏臣連爲裨將部隊、領二萬餘軍出居筑紫、遣吉士金於新羅、遣吉士木蓮子於任那、問任那事、

〔吾妻鏡四〕元曆二年二月十六日庚午、關東軍兵、爲追討平氏、赴讚岐國、廷尉義經爲先陣、今日酉剋解纜、大藏卿泰經朝臣、○中略諫云、泰經雖不知兵法、推量之處、賈爲大將軍者、未必競一陣歟、先可被遣次將哉者、

〔續日本紀五元明〕和銅三年正月壬子朔、天皇御大極殿受朝、隼人蝦夷等亦在列、左將軍正五位上大伴宿禰旅人、副將軍從五位下穗積朝臣老、右將軍正五位下佐伯宿禰石湯、副將軍從五位下小野朝臣馬養等、於皇城門外朱雀路東西、分頭陣列騎兵、引隼人蝦夷等而進、

〔武家名目抄職名二上〕左將軍、右將軍、　按、左右將軍ハ外藩使人ノ警衞ヲツカサドル職ニテ、卽騎兵將軍ノコトナリ、慶雲ニ新羅入朝ノ時ハ、一人ヲ補セラレテ騎兵大將軍ト稱セシヲ、和銅二年ニ二人トナサレシヨリ、左右將軍ノ號ハイデキシナリ、但コレハ奈良朝ニ御セシ間ノコトニテ、平安京ニ遷御アリシ後ハ、又此將軍ヲ任セラルヽコトハ斷絕セリ、

〔太平記十四〕矢矧鷺坂手超河原鬪事

吉良左兵衞佐、土岐彈正少弼賴遠、佐々木佐渡判官入道、彼是其勢六千餘騎、上ノ瀨ヲ打渡テ、義貞

ノ左將軍堀口、桃井、山名、里見ノ人々ニ打テ懸ル、○中略二番ニハ高武藏守師直、越後守師泰、二萬餘騎ニテ、橋ヨリ下ノ瀨ヲ渡シテ、義貞ノ右將軍大島、額田、籠澤、岩松ガ勢ニ打懸ル、官軍七千餘騎喚イテ眞中ニ懸入テ、東西南北ヘ懸散シ、半時計ゾ揉合ヒケル、

前將軍
後將軍
中將軍

〔武家名目抄 職名二上〕前將軍、中將軍、後將軍、　按、前將軍、後將軍トハ、ナホ先陣大將、後陣大將トイフガゴトシ、中將軍トハ中軍ノ將ト云意ナリ、續紀ニ前軍別將トノセラレシハ、征東大使ニムカヘテ、別ノ字ヲ加ヘラレシモノト見エタリ、南禪寺舊記ニ、貞治三年十二月足利義詮當寺ノ寺領安堵ノ公文ヲ載タリ、其署名權大納言御判トアリテ中將軍ト傳書セリ、思フニコノ三字ハ、當時寺僧ノ注加スル所ニシテ、後世ノ加筆ニハアルベカラズ、サテイカナレバ中將軍トシルセシヤトイフニ、等持院殿將軍在職ノ間ハ、義詮世子トシテ久シク參議左近中將タリ、依テ殿下ノ將士、私ニ稱シテ中將軍ト申セシナルベシ、此時義詮既ニ征夷將軍ニ任セラルトイヘドモ、俗間尚モトノトナヘニナラヒ、中將軍トモイヒケル故ニ、寺僧モ俗諺ニナゾミテ、此三字ヲ注加セシト見エタリ、コノ一事、本文ナル中將軍トハ同義ニアラザレドモ、其稱同事ナルヲ以テ爰ニ注シテ其考證ニ備フ、

〔日本書紀 二十七天智〕皇祖母尊○齊明卽天皇位、七年七月丁巳崩、皇太子○天智素服稱制、是月○中略皇太子遷居于長津宮、稍聽水表之軍政、八月遣前將軍大華下阿曇比邏夫連、小華下河邊百枝臣等、後將軍大華下阿倍引田比邏夫臣、大山上物部連熊、大山上守君大石等、救於百濟、仍送兵仗五穀、二年三月、遣前將軍上毛野君稚子、間人連大蓋、中將軍巨勢神前臣譯語、三輪君根麻呂、後將軍阿倍引田臣比邏夫、大宅臣鎌柄、率二萬七千人打新羅、

上將軍

〔武家名目抄 職名二上〕上將軍　按、上將軍トイフ稱ハ、古代ニ見ル所ナケレバ、建武帝皇子尊良親王ニ此號ヲ授ケ給ヒシヲ、ソノ起源トイフベシ、吾妻鏡ニ、建長五年十一月廿五日建長寺供養也、此作善旨趣、上祈皇帝萬歲、將軍家及重臣千秋、天下太平、下訪三代上將、二位家、並御一門過去數輩沒後御云々ト見エタレド、コレハ三代將軍トイフベキヲ、筆者ノ作意ニテ、三代上將ト記セシモノナレバ、事實ニハ取難シ、思フニ此比ノナラヒ、一軍ノ首將ナレバ官位高下ノシナヲイハズ、世ニ大將軍ト呼ナラハシケレバ、ソレニマガヘジトテ、上將軍ト稱セラレシト見エタリ、是元ヨリ朝廷ノ命ズル所トイヘドモ、征夷使、征東使等ノゴトク、補任ノ宣旨下サレシニハアラデ、一旦シカ稱セラレシノミナルベシ、又恒良

騎兵大將軍

親王ヲ上將軍ト稱セシハ、全ク天子ノ命令ヨリ出タルニアラザレドモ、コレハタ官軍ノ稱セル所ナレバ、必シモ私ノ稱呼トハイフベカラズ、

〔太平記八〕主上自令ㇾ修ニ金輪法ㇾ事附千種殿京合戰事

第六ノ若宮ハ、元弘ノ亂ノ始、武家ニ被ㇾ囚サセ給テ、但馬國ヘ被ㇾ流サセ給ヒタリシヲ、其國ノ守護大田三郎左衛門尉取立奉テ、近國ノ勢ヲ相催シ、則丹波ノ篠村ヘ參會ス、大將頭中將不ㇾ斜悅テ、卽錦ノ御旗ヲ立テ、此宮ヲ上將軍ト仰ギ奉テ、軍勢催促ノ令旨ヲ被ㇾ成下ケリ、〇中略四月八日ノ卯剋ニ、六波羅ヘゾ被ㇾ寄ケル、〇中略寄手ノ大將ハ誰ゾト問ニ、前帝第六ノ若宮、副將軍ハ千種頭中將忠顯ノ朝臣ト聞ヘケレバ、サテハ軍ノ成敗心ニクカラズ、〇中略弓馬ノ道ヲ守ル武家ノ輩ト、風月ノ才ヲ事トスル朝廷ノ臣ト、戰ヲ決センニ、武家不ㇾ勝ト云事不ㇾ可ㇾ有ト、各勇ミ進テ、七千餘騎大宮面ニ打寄テ、寄手遲シトゾ待懸タル、

〔神皇正統記後醍醐〕高氏のぞむ所達せずして、謀叛をおこすよしきこえしが、建武二年乙亥十一月十日あまりにや、義貞を追討すべきよし奏狀を奉る、すなはちうちのぼりければ、京中騷動す、追討のため中務卿尊良親王を上將軍として、さるべき人々もあまたつかはさる、武家には義貞の朝臣をはじめて、おほくの兵を下されしに、十二月に官軍引しりぞきぬ、

〔保曆間記〕尊氏上洛セズ、其時サレバコソ謀反ノ志有ル由重テ讒シ申ニ依テ討手ヲ被ㇾ下ケリ、上將ハ中務卿親王主上一宮、公卿殿上人其數、武士ニハ義貞ヲ大將軍トシテ、サルベキ侍、在京武士、西國畿內ノ勢數万騎發向ス、

〔武家名目抄職名二上〕騎兵大將軍　按、騎兵大將軍ハ、天子ノ行幸、モシクハ外蕃ノ使人入朝ノ時ニ、騎兵ヲ率テコレガ警衛ヲナスモノナリ、モトヨリ臨時ノ職ニシテ、常ニオカル丶ツカサニアラズ、コノ將軍ハ節刀ヲ給ハル職ニハアラザリシナリ、

前騎兵大將軍　後騎兵大將軍

〔續日本紀 三文武〕慶雲二年十一月己丑、徵發諸國騎兵、爲迎新羅使也、以正五位上紀朝臣古麻呂爲騎兵大將軍、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十月丙子、任次第司、〇中略正五位下藤原朝臣仲麻呂爲前騎兵大將軍、正五位下紀朝臣麻呂爲後騎兵大將軍、徵發騎兵、東西史部、秦忌寸等總四百人、　壬午、行幸伊勢國、十二月丙辰、解騎兵司、令還入京、

兵庫將軍

〔續日本紀 五元明〕和銅四年九月丙子、勅、頃聞、諸國役民勞於造都、奔亡猶多、雖禁不止、今宮垣未成、防守不備、宜權立軍營禁守兵庫、因以從四位下石上朝臣豐庭、從五位下紀朝臣男人、粟田朝臣必登等爲將軍、

〔武家名目抄 職名二上〕撿挍兵庫將軍　按、兵庫將軍ハ兵庫ヲ撿挍シ、不虞ヲ守ルノ職タルコト續紀ニ見エタルガ如シ、モトコレ臨時ニ設ケラル、モノニテ、平日聯綿ノ職ニアラザルガ故ニ、國史ニ於テ見ル所多カラズ、常ニハヒトリ兵庫寮ノ所司コレヲツカサドレバナリ、神護景雲ニ、將軍、副將軍、及軍監、軍曹マデヲ設置レテ、兵庫將軍ノ官員備ハレリ、思フニ當時道鏡內寵ヲ得テ、國柄ヲ掌握シ、政務ヲ恣ニセシ時ナレバ、京師變ヲ生ゼン事ヲ恐レ、是等ノ官職ヲ設ケテ、己ガ爲ニ備ヘシモノナルベシ、然ルニ幾程ナク帝崩御アリ、道鏡貶謫セラレテ、令外ノ官ハ大概停廢セラレケレバ、其時ニ此將軍モ停メラレシト見ユ、ソレヨリ後ハ人コレヲ置ル、事ナク、兵庫寮ノ所司ノミ兵庫ノ事ヲ統領セシナリ、

〔續日本紀 二十八稱德〕神護景雲二年十一月己亥、是日以正三位弓削御淨朝臣清人爲撿挍兵庫將軍、從四位下藤原朝臣雄田麻呂爲副將軍、

軍監　軍曹　錄事

〔伊呂波字類抄 久疊字〕軍監　軍曹

〔下學集 上官位〕軍監（グンケン）將軍亞相

大毅 少毅 校尉 旅帥 隊正 主帳

大將

〔令義解五軍防〕凡將帥出征、兵滿二一万人以上、○中略將軍一人、副將軍二人、軍監二人、軍曹四人、錄事四人、謂軍曹者、大主典也、錄事者、少主典也、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月丁亥、廣嗣○藤原遂起兵反、勅以從四位上大野朝臣東人爲大將軍、○中略軍監、軍曹各四人、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月辛未、行幸紀伊國、○中略正四位下藤原朝臣繩麻呂爲御前騎兵將軍、○中略從三位百濟王敬福爲御後騎兵將軍、○中略各軍監三人、軍曹三人、

〔續日本紀二十九稱德〕神護景雲二年十一月己亥、是日以正三位弓削御淨朝臣清人爲檢校兵庫將軍、○中略從五位下紀朝臣船守、從五位下池田朝臣眞枚、並爲軍監、六位軍監二人、軍曹四人、

〔伊呂波字類抄久疊字〕軍毅キ イクサノモロチシ タケシ

〔令義解五軍防〕凡軍團、大毅領二一千人、少毅副領、謂凡兵滿二一千人一者、大毅一人、少毅二人、六百人以上者、大毅一人、少毅一人、五百人以下者、唯置二毅一人一也、校尉二百人、旅帥一百人、隊正五十人、

〔延喜式二十八兵部〕凡軍團置、毅者兵士滿二千人、大毅一人、少毅二人、六百人以上、大少毅各一人、五百人巳下、毅一人、其主帳者、大團二人、以外一人、

〔伊呂波字類抄太疊字〕大將

〔書言字考節用集四人倫〕大將ダイシヤウ

〔武家名目抄職名三〕大將　按、イニシヘノ大將軍ハ、皆朝廷ノヨサシ給フ所ニテ、節刀軍令等ヲ授ケラルヽノ式アリ、○中略中古ニ至リテ將軍ヲ任ズル事中絶セシヨリ、但鎭守府將軍ハ、常ニ置ルヽ職ナレバ此例ニアラズ、タヾ一軍ノ首將タル人ヲサシテ、大將軍トモ大將トモイヒ、ソレニツゲルモノヲ副將軍トモヨベルナラヒトナレリ、後ニハ公私混雜シテ、私ノ戰ニモコノ名目ヲヨベルコトヽナリテヨリ、盜大將軍宇治拾遺物語ニ見ユ海賊大將海東諸國記ニ見エタレド、異邦ノ書ナレバトラズ、ナドイヘル名サヘイデキシ

カラニ、其人ガラモ定メナク、一隊ノ部將ヲバシカイフナラヒトナリヌ、

〔多武峯略記上〕炎上三箇度　第二度

天仁元戊子年九月十一日、淨土院諸坊幷院內堂舍少々燒失、○中略右根元者、○中略興福寺衆徒蜂起、可燒拂多武峯由下知了、郎三軒三大夫守延爲大將、自峯打入令燒失、

○按ズルニ、是ヨリ先將帥ヲ大將ト稱セシコトハ、大將軍條ニ引ク所ノ雄略紀、及ビ職掌條ニ收ムル所ノ軍防令等ニアリ、宜シク參看スベシ、

〔保元物語一〕新院被召爲義事附鵜丸事

其比、六條判官爲義ト申ハ、○中略內裏ヨリ被召ケレ共、如何思ケン參ザリシカバ、增テ上皇ノ召ニモ不順シテ有シガ、餘リニ白河殿ヨリ度々被召ケレバ、可參由申ナガラ未參、依孝長卿六條堀河家ニ行向テ、院宣ノ趣ヲ宣ケレバ、忽ニ變改シテ申ケルハ、爲義○中略今度ノ大將軍痛存ズル子細多ク侍リ、○中略枉テ今度ノ大將ヲバ、餘人ニ被仰付候ヘ、○中略爲義ガ子共ノ中ニハ、義朝コソ坂東生立ノ者ニテ、合戰ニ調練仕、其道賢候上、付順處ノ兵共、皆可然者共ニテ候ヘ共、夫ハ內裏ヘ被召テ參候フ、其外ノ奴原ハ、勢ナド候ハヌ上、大將ナド可被仰付者トモ覺候ハズ、

〔源平盛衰記二十八〕八牧夜討事

時政ハ夜討ノ大將給テ、嫡子宗時ニ先係サセ、弟ノ小四郎義時、佐々木太郎兄弟四人、土肥、土屋、岡崎、佐奈田與一、懷島、平權頭等ヲ始トシテ、家子モ郎等モ濯汰タル者ノ手ニ立ベキ兵八十五騎ニテ、八牧ガ館ヘゾ寄ケル、

〔太平記一〕去程ニ明レバ、元德元年九月十九日卯刻ニ、軍勢雲霞如ニ、六波羅ヘ馳參、小串三郎左衛門尉範行、山本九郎時綱、御紋旗ヲ給リ、討手大將ヲ承テ、六條河原ヘ打出、三千餘騎ヲ二手ニ分テ、多治見ガ宿所錦小路高倉、土岐十郎ガ宿所、三條堀河ヘ寄ケルガ、○下略

總大將

〔太平記 二十二〕義助豫州下向事

去程ニ四國ノ通路開ヌトテ、脇屋刑部卿義助ハ、曆應三年四月一日勅命ヲ蒙テ、四國西國ノ大將ヲ奉テ、下向トゾ聞ヘシ、

〔太平記 三十三〕崇德院御事

今將軍〈足利尊氏〉ノ逝去ニ力ヲ得テ、菊池如何樣都ヘ責上リヌト覺ル、是天下ノ一大事也、急テ討手ノ大將ヲ下サデハ叶マジトテ、故細川陸奥守顯氏子息式部大夫繁氏ヲ伊豫守ニナシテ、九國ノ大將ニゾ下サレケル、

〔太平記 三十六〕山名伊豆守落美作城事附菊池軍事

中國ノ大將細川右馬頭賴之〈之原作旨、據一本改〉讃岐國ノ守護ヲ相論シテ、四國ニヲハスルニ觸送テ、其勢ヲ呼越シ、備前、備中、備後、當國四箇國ノ勢ヲ以テ、倉懸ノ城ノ後攻ヲセヨトテ、事ノ子細ヲ牒送スルニ、〈○下略〉

〔花營三代記〕永和四年十一月五日夜、紀伊國大將細川兵部大輔使者到來、去二日凶徒打取之間、合戰大將引籠移云々、　十二月十三日夜、紀伊大將細川兵部大輔業秀退歸淡路國之由有其聞之、

〔武蔭叢話 十二〕堀丹後守武勇之事

關ケ原御陣之時、越後國ヲバ、〈○中略〉堀丹後守直寄、〈○中略〉一揆共備ヘ亂ケル處ヘ、丹後守驅付忽ニ切崩シ、首三百餘級討取タリ、一揆の大將柿崎、齋藤、丸田、長尾、萬貫寺、庄瀨、加地、竹股等、妻有庄、小千屋田川ヘ引取、五千餘ニテ扣ヘタリ、

〔武家名目抄 職名 三〕總大將　按、總大將ノ稱ハ、上古ニハキコエズ、〈○中略〉中頃ヨリ一軍一隊ノ首長ヲ、世ニ大將トモ大將軍トモイフ習ヒトナリシ故ニ、コレニ別ンタメニ總軍ノ首帥ヲ總大將トモ、總大將軍トモイヒシナリ、

副大將

〔太平記十四〕矢矧鷺坂手超河原鬪事

三番ニ仁木、細川、今河、石堂一萬餘騎下ノ瀬ヲ渡テ、官軍ノ總大將新田義貞ニ打テ懸リタリ、

〔太平記十六〕兵庫海陸寄手事

義貞朝臣モ、〇中略和田ノ御崎ノ小松原ニ打出テ、閑ニ手分ヲゾシ給ヒケル、一方ニハ脇屋右衞門佐義助ヲ大將トシテ、末々ノ一族二十三人、其勢五千餘騎、經島ニゾ扣ヘタル、一方ニハ大館左馬助氏明ヲ大將トシテ、相順フ一族十六人、其勢三千餘騎ニテ、燈爐堂ノ南ノ濱ニ扣ヲル、一方ニハ楠判官正成、態ト他ノ勢ヲ不交シテ、七百餘騎湊川ノ西ノ宿ニ扣ヘテ、陸路ノ敵ニ相向フ、左中將義貞ハ、總大將ニテヲハスレバ、諸將ノ命ヲ司テ、其勢二萬五千餘騎、和田御崎ニ帷幕ヲ引セテ磬ヘラル、

〔萬松院殿穴太記〕六月十〇天文十八年十一日の早天に、宗三入道は、ゑなみの城を立出て、晴元の近習、外様の大名小名を催し、其勢三千餘騎、おのれは總大將として、三軍の下知を司る、

〔應仁私記武家名目抄職名三所引〕去程被成下治罰御敎書、上者下給御旗、御所勢總大將軍細川右京大夫勝元、同六郎勝之、於細川一族悉令一揆、

〔武家名目抄職名三〕副大將又稱副將 按、副大將トイヒ、副將トイフ、卽古ノ副將軍ノ流ナリ、但〇中略私ニ稱セルモノニテ、朝廷ノ授ケ玉フ所ニアラス、

〇按ズルニ、副將軍ヲ副將、裨將若シクハ次將トモ稱スルコトハ、副將軍條ニ引ク所ノ欽明紀、崇峻紀及ビ吾妻鏡等ニアリ、參看スベシ、

〔梅松論下〕建武三年〇延元元年五月廿五日、兵庫の合戰の事御談合の御使、夜の中に往復度々に及ぶ、當所にをいて御手分有、大手へ下、御所副大將は越後守師泰、大友三浦介、赤松、播磨、美作、備前三ケ國の總軍勢なり、

〔松隣夜話 上〕永祿四年、武州松山ノ城主北條安房板橋ト云處ニ臨野口越シ、若侍餘多引率シ逗留シタリケル透ヲ伺ヒ、太田三樂三千餘騎ニテ取詰、間宮高梨ヲ魁首トシ、西北ヲバ明ケオキ、東南ヨリ無理無體ニ乘入、松山ノ副將北條玄庵子息雅樂佐笠原新五郎ヲ始メ、城中ノ兵士千二百各渡リ合、持口ヲ堅メ防戰ス、

〔豐臣秀吉譜 上〕天正十三年三月、秀吉帥レ師到二紀州一、爲レ滅二根來寺一也、以二大和大納言秀長、羽柴中納言秀次一爲二副將一、

脇大將

〔武家名目抄 職名 三〕脇大將　按、脇大將トイヘルハ、一門ニモアレ、家人ニモアレ、威權アル人ノ首將ニ並ビテ、軍務ヲ攝スル者ヲイヘリ、其所職大カタハ副將ニ似タレド、副將ハ臨時ニ定ムルガ多ク、脇大將ハ常ニ其人ガラニヨリテヨベル稱ナレバ、ワヅカノ差別ナキニアラズ、サレド古クヨリ聞ヘザレバ、全ク俗間ノトナヘヨリ起レル名ナルコトシルベシ、

〔天正事錄〕明智〇光秀ハ正立寺ノ城ヘ逃入ル、〇中略又脇大將ニ成テ取持タル齋藤內藏介生捕、則京都ヲ車ニ乘テ引、明智日向ガ頸ト一所ニ粟田口ニ磔ニ被二掛置一也、

〔見聞雜錄 武家名目抄職名三所引〕信玄方ハ手負討死越後方ヨリ五千餘騎少シ、然共典厩信繁、大將ワキ、諸角豐後、山本勘介、三枝新十郎、初鹿源五郎是等ヲ始トシテ備々ノ物頭三十一人討死ナリ、

〔甲陽軍鑑 十下 品第三十二〕永祿四辛酉年八月、〇中略同二十四日ニ川中島ヘ御着あり、〇中略二十九日、〇中略信玄公〇中略明日の合戰備を定よと被二仰付一、〇中略御旗本組は、一飯富三郎兵衛、中。左は、一典厩〇武田信繁　一穴山殿　右。は　一內藤修理　一諸角豐後〇下略

先手大將

〔中國治亂記〕爰ニ尼子下野守申ケルハ、晴久ノ御發向ノ時分、違テイサメ申セバ臆病者ト皆々笑ヒ玉ヒ、カヤウノ強敵ニ逢テ一合戰アラレ候ヘト、數度申ケレドモ各不レ進、然レバ臆病者ノ下野一手柄可レ仕、御見物アレトテ切テ出テ、敵ヲ切崩シ、シカモ先手ノ大將深野、宮川兩人ヲ討テ其首

ヲトリ、猶北ル敵ヲ追掛テ晴ナル打死也、

〔奥羽永慶軍記 二十三〕九戸合戰事

先手ノ大將蒲生忠三郎下知シテ、卒爾ニ城(九戸城)ヲ攻ベカラズ、只遠攻ニセラレ候ラヘト、陣々ニ觸ラレケリ、

軍大將

〔武家名目抄 職名三〕軍大將　按、軍大將ハ其身ノ分限ニハカヽハラズ、其日ノ合戰ヲバ、悉ク主將ヨリユルサレテ進退スルモノヲイフト見エタリ、モトヨリ臨時ノ所職ニシテ、常ニ置ルヽモノニハアラズ、然レドモ多クミエザレバ詳ニ考ガタシ、

〔河越記〕爰にまたたけきが中にやさしきあり、その日のいくさ大將せし難波田があやなくうしろをみせ、松山さしていぬるを、勝にいさめる兵、駒かけよせ、一首はかくぞきこえける、

あしからじよかれとてこそたゝかはめ何か難波のうらくづれ行、と誹諧體によみかけしに、難波田もさすがによしある武士にて、くつはみいさゝか引返し、古今集の歌をもて一首の贈答いそがはしく、

君をおきてあだし心をわれもたば末のまつ山なみもこえなん、我作がほにもてなし、駒のあしはやめけるがごとくに成ぬ、

〔矢島十二頭記 下〕一慶長五年八月廿五日、酒田の城主志田修理殿より淺野權之丞、軍大將として九月十日に由理へ遣し候て、由理中城主を責潰し可申候、

武者大將

〔武家名目抄 職名三〕武者大將　按、武者大將ハ、スベテノ武者ヲ指揮スルユヱニ、軍中ニ在テハコトナル重職ナリ、サレド事ニ臨ミテ定メラルヽ所司ナレバ、中古以來ノ侍大將ナドノゴトク、常ニ設置ルヽ、職掌ハアラデ、事果ヌレバ其任ヲトカレシト見エタリ、

〔信長記 一上〕三河國小豆坂合戰之事

侍大將

駿河國今川義元、遠三兩國ヲ攻伏シカバ、イザ尾張國ヲモ打隨ヘントテ、隣國ノ兵ヲ驅催シ、其勢四萬餘騎、天文壬寅八月十日、三川國生田原ヘ打出、勢ヲ引分、由原ノ某ト云者ヲ、足輕大將トシテ三州小豆坂ヘ推寄ル處ニ、織田備後守殿、僅四千餘騎ノ勢ヲ率シ、同國安城ヘ出向ヒ、舍弟孫三郎殿ヲ武者大將トシテ、敵ノ陣ヘ推向シカバ、小豆坂ヘ取上リ、時ヲ咄トゾ上タリケル、

〔奧羽永慶軍記三〕和賀山北境藤倉合戰ノ事

奧州和賀ノ領主多田薩摩守義忠山北ト相戰フ事度々ナレ共、山北ハ大勢也、和賀ハ小勢ナリ、和賀勢利ヲ失ハズトイフ事ナシ、此鬱憤ヲ散ゼントテ大勢ヲ催シ寄來ルト聞ユ、山北ヨリハ兼テ和賀押ヘトシテ、小田島丈黑澤長門守南鄕雄勝川ヲ切廻シ、藤倉ガ城ニ楯籠リシガ、此由ヲ聞、横手ニ飛檄ヲ以テ加勢ヲ乞フ、遠江守景道是ヲ聞テ、旗本ノ武者大將、足輕大將ヲ始、急ニ催シ指向ラル、

〔武家名目抄職名三〕侍大將　按、侍大將トハ、其身侍ニシテ一軍ノ將トナリ、軍士ヲ指揮スルモノヲイヘルナリ、（侍トハ、六位ノ人ノ諸家ニ祗候スルモノヲイフ、五位ニ敍セラルトイヘドモ、其筋ノ人ハ猶侍ト稱スルコトナリ、○中略）平家物語、太平記、伯耆卷、寶篋院殿將軍宣下記等ニ見エタルハコレナリ、サレドコレハ平日ニ定メ置ルヽモノニアラズ、事アルニ臨ミテ侍ノ中ヨリサルベキモノヲ撰ビテ其職ニ從ハセシナリ、室町殿ノ末ニ至リテハ、名義ヤヽミダレテ、家々ノ定同ジカラズ、果ニハ侍大將、足輕大將ト並ベヨバルヽコトヽナリテ、侍一組ヲ預リ指揮スルモノヽ稱トナレリ、後世ノ番頭ハ大カタコノ職掌ニカナヘリ、

〔平家物語四〕はしかつせんの事

大將軍には、左兵衞のかみ知盛、とう中將しげひら、さつまの守忠度、侍大將には、かづさの守忠きよ、其子かづさの太郎判官たゞつな、ひだの守かげ家、其子ひだの太郎判官かげたか、高橋判官なかつな、かはちの判官ひでくに、むさしの三郎左衞門有國、越中の次郎兵衞もりつぎ、かづさの五

郎兵衞忠みつ、惡七兵衞景清を先として、都合其勢二万八千よき、小はた山打こへて、うち橋のつめにぞをしよせたる、

〔長門本平家物語十七〕元暦元年三月二日、本三位中將重衡、土肥の次郎さね平がもとより、九郎義つねのもとへわたす、三位中將を土肥の次郎が守護しける事は、梶原は大手蒲の冠者の侍大將なり、九郎申されけるは、義經が上の山よりおとさずば、東西の木戸口やぶれがたし、いけどりも死とりも、よし經がげんざんに入てこそともかくもはからふべきに、もの、ようにもかなひ給はぬ蒲どの、げんざんに入こそ心えね、三位中將これへわたし給へ、給はらずば參りて給らんとのたまひければ、土肥梶原にいひあはせて、どひが元へわたしければ、その後あづかりにけり、

〔源平盛衰記三十六〕源氏勢汰事

關東ノ評定ニハ、梶原平三ハ、侍大將軍ニテ、九郎義經ニ付、土肥次郎ハ、侍大將軍ニテ、蒲ノ冠者ニ相從ベシト被定タリケルニ、實平ハ範賴ヲ捨テ、九郎義經ニ付、景時ハ義經ヲ離テ、五百餘騎ヲ引分テ、蒲冠者ニ屬ニケリ、

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

相摸入道（○北條高時）大ニ驚テ、サラバヤガテ討手ヲ差上セヨトテ、一門他家宗徒人々、六十三人迄ゾ被催ケル、大將軍ニハ、大佛陸奧守貞直、同遠江守、普恩寺相摸守、鹽田越前守、櫻田三河守、赤橋尾張守、江馬越前守、絲田左馬頭、印具兵庫助、佐介上總介、名越右馬助、金澤右馬助、遠江左近大夫將監治時、足利治部大輔高氏、侍大將ニハ、長崎四郎左衞門尉、相從侍ニハ、三浦介入道、武田甲斐次郎左衞門尉、椎名孫八入道、結城上野入道、小山出羽入道、氏家美作守、佐竹上總入道、長沼四郎左衞門入道、土屋安藝權守、那須加賀權守、梶原上野太郎左衞門尉、岩城次郎入道、佐野安房彌太郎、木村次郎左

衛門尉、相馬右衛門次郎、南部三郎次郎、毛利丹後前司、那波左近大夫將監、一宮善民部大夫、土肥佐渡前司、宇都宮安藝前司、同肥後權守、葛西三郎兵衛尉、寒河彌四郎、上野七郎三郎、大内山城前司、長井治部少輔、同備前太郎、同因幡民部大輔入道、筑後前司、下總入道、山城左衛門大夫、宇都宮美濃入道、岩崎彈正左衛門尉高久、同孫三郎、同舍三郎、伊達入道、田村刑部大輔入道、入江蒲原一族、横山猪俣兩黨、此外武藏相摸伊豆駿河上野五箇國軍勢、都合二十萬七千六百餘騎、九月廿日鎌倉ヲ立テ、同晦日、前陣已美濃尾張兩國ニ著バ、後陣ハ猶未高志二村峠ニ支タリ、

〔太平記八〕主上自令修金輪法給事附千種殿京合戰事

千種殿ハ本陣峯ノ堂ニ歸テ、御方ノ手負打死ヲ被註ニ七千人ニ餘レリ、其内ニ宗ト憑タル大田金持ノ一族以下數百人被討畢、仍一方ノ侍大將トモ可成者トヤ被思ケン、小島備後三郎高德ヲ呼寄テ、敗軍ノ士力疲テ再ビ難戰、都近キ陣ハ惡カリヌト覺レバ、少シ境ヲ阻テ陣ヲ取、重テ近國ノ勢ヲ集テ、又京都ヲ責バヤト思フハ、如何ニ計フゾト宣ヘバ、〇下略

〔寶篋院殿將軍宣下記〕延文三戊戌年十二月十八日之午剋、爲勅使以日野時光、征夷大將軍宣旨也、〇中略

一同月廿一日、自巳剋禁裏御門共爲警固參仕侍大將以上十二人也、大將一人隨兵三百騎宛、其外精兵之射手五十騎宛、大將一人、都合三百五十騎にて一門を警固也、侍大將之事、

佐々木備前守高久　山名伊豆守時氏　土岐伊豫守直氏　安東信濃守高泰
二階堂但馬守秀則　長澤遠江守利正　長尾彈正大忠景元　鳥山若狹守光武
曾我美濃守氏助　小串但馬守詮衛　佐々木尾張守高信　土岐右馬頭氏光

以上十二人

〔甲陽軍鑑品第二十四九上〕信州鹽尻合戰の事

足輕大將

一或時晴信公、山本勘介をめし、弓矢の取沙汰、諸國の事、又は國をきり取、よく治むる事をとひ給ふ、勘介承て申上る、〇中略總別一國をも持、主のなき侍大將と定め、一郡許もちて、あなたこなたへ旗をかたぶけて、頼て世をすごす侍をば侍大將と申す、此人一國をもつ大將へ、隨身いたし申せば、與力と定め、又一國もとる大將の、三ヶ國をも持大將と緣などを組て、無事有て加勢あるは、小身の方を旗下と定て申たるが、物の噂はやく聞へてよく御座候、

〔別所長治記〕別所小三郎長治ハ、村上源氏具平親王廿六代ノ孫赤松入道圓心が末葉也、領二播州東八郡一、在二三木ノ城一、得二武將譽一、其門葉繁昌ニシテ風俗異二于他一、同姓ノ侍大將山城守、舍弟孫右衞門兩人執權政道明レ之、

〔常山紀談八〕新納武藏守忠元は、島津家の士大將也、勇名をもて指を折る時第一なりとて、大指武藏と稱しけり、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕武田法性院信玄公御代總人數之事

足輕大將衆

一横田十郎兵衞　騎馬三拾騎　足輕百人
一原與左衞門　騎馬拾騎　足輕五拾人
一市川梅印　騎馬拾騎　足輕五拾人
一城伊庵　騎馬拾騎　足輕拾人
一多田治部右衞門　足輕拾人
一遠山右馬介　騎馬拾騎　足輕三拾人
一今井九兵衞　足輕拾人
一江間右馬丞　足輕拾人
一關甚五兵衞　足輕拾人
一小幡又兵衞　騎馬三騎　足輕拾人
一大熊備前守　騎馬三拾騎　足輕七拾五人
一三枝新三郎　騎馬三騎　足輕拾人
一長坂長閑　騎馬四拾騎　足輕四拾五人
一下曾根　騎馬二拾騎　足輕五拾人
一曾根內匠　騎馬拾五騎　足輕三拾人
一曾根七郎兵衞　足輕七拾人

一武藤喜兵衛　騎馬拾五騎　足輕三拾人
一三枝勘解由左衛門　騎馬三拾騎　足輕七拾人
一あ　ん　ま　足輕五拾人　一小幡彌左衛門　騎馬拾二騎　足輕六拾五人

〔甲陽軍鑑品第二十五九下〕晴信公山本勘介問答幷信州戸石合戰之事
一天文十四年六月廿四日に、晴信公山本勘介を召て、諸國弓矢の批判をき〻給ひて後、問給ふ、〇中略扱人數をくみ、そなへをたて、陣取敷、其仕樣は如何と尋給ふ、勘介畏直て、頭を地につけ申上る、〇中略十年以前に、信虎樣駿河へ牢人なされ、今に駿府に御座候、信虎樣、義元公へ度々御雜談に、甲州御家中弓矢功者の衆、〇中略侍大將に六人、足輕大將には、横田備中、原美濃、小幡山城、多田三八、四人、此十人は弓矢をとりてくらからず、子細は、〇中略横田備中は敵とせり合の時、敵はたらくべき樣子をいかにもはやくさとり、敵の軍場をとりて、敵に手をうしなはせて、筒勢を引つけて、せり合に、度々の勝をとる、足輕なる故、自然筒勢遲き時は、あやうき働の足輕と存知、同心をちとおほく預候と仰らる〻、原美濃は十人の足輕を、百人の樣につかひ、敵にかさをかけ、己が同心どもに、敵をとりこにするごとくに思はせ、た〻きまはして、味方に氣をつけ、いさみか〻つて勝負をはじめ、去かも敵中へまつさきに乘こみかちだつては鑓をあはせ、大勢の敵をつきちらし、馬上にてきつておとし、度々のあら勝負を去て、數ヶ所の手を負、〇中略小幡山城は足輕あつかふ事、縱ば、ばんつみに入て、かづきて一人づ〻出し、能時分に皆取出し、をのれが同心共に一人も殘らず手柄をさせ、又袋に入たるごとくにをしまとひ、つれて行、のくことも少もあぶなげなく候により、是には足輕少あづけて候、多田三八は無類なる夜がけ上手にて候間、夜がけさい〳〵なき物なり、其上夜懸の足輕は一入足手強盛なる者をすぐり候故、是には猶以足輕すくなく預けて候と、信虎公御物語の由承及候、

足輕頭

〔中村一氏記〕一慶長五年九月十四日、午剋ニ城ヨリ軍瀨川越苅田ツカマツリ敵ドモマイリ候、彼竹田五郎兵衞見候テ、番所ノヤチノ軒ニ手ヲカケ飛アガリ申候ヲ、足輕大將共怒リ申候ヘバ、ユリヲ取飛下リ、カリ田仕候者二三人ヤリニテツラヌキ、詰候テ飛マハリ候所ヲ、敵ニ父子御座候テ、鐵炮ニテウチコロシ申候、〇中略

一右ノ樣子若キ衆見申候テサクヲヤブリ、何モ出申候ヲ先手大將野一色賴母、藪内匠トメニマイラレ、軍瀨川越申マジキトシ申サレ候ヘドモ聞申サズ、コシ候ヘバ敵立向合戰ハジメ申候、成合平左衞門一番ヤリ、此人ハ泉州岸和田ヲモテ一番ヤリヲツカマツリ覺ヲトリ申候故、又一番ヤリヲツカマツリ、此度ハ討死仕候、此首石田治部少輔内猪尾甚大夫取申候、是ヲ云立ニツカマツリ、黑田筑前殿ニテ千石ニ足輕二十人アヅカリ申候、〇中略服邊小膳千五百石足輕二十高屋九兵衞千石弓二

十此乘フリヨク候ヘドモ總クヅレノキ申候、

〔武藝小傳一兵法〕北條安房守氏長

寬永十五戊寅年五月八日、爲御步行頭、同十六己卯年轉采地、〇中略後轉足輕大將、明曆元甲午年六月爲大目附役、

〔常山紀談四〕天正二年勝賴兵を出して、菅沼新八郎定盈が新にかまへたる城を攻んとす、〇中略定盈兵を出して敵の樣を見せしむ、山縣が軍競來る由告けるに、定盈厠にゆきてうたひをうたひて出ず、足輕の頭山口五郎作ㄡひて諫ければ、厠より出、手を洗けるが、又湯をもて口すゝぎたる體常のごとし、

〔一柳家記〕同廿二日〇慶長五年八月(中略)其日午之剋、岐岨川河田之渡眞先ニ馳渡、〇中略三番ニ藤野久左衞門乘上候得者、爪川ト名乘馳向、鑓ヲ合セ、是モ堤之内ヘヲビキ入、大勢取包、四方ヨリ突懸候故、久左衞門數ケ所深手ヲ負、既ニ危有之候處、我〇山内對馬預之足。輕。之。小。頭。小牧長九郎ト云者走來、刀ヲ

持ヲ敵十八ナギ倒、大勢之中江走入討死仕候間、久左衛門ハ堤ヲ乘越引退申候、〇中略
慶長五年九月上旬、長松之城ハ江州佐和山ト濃州大柿ト通路ニテ肝要之所故、〇中略右城ヨリ三町程大柿ノ方ニ張番三ケ所構、足輕頭一人、足輕十人計ヅヽ出置候、

旗大將

〔家忠日記追加十四〕慶長五年七月十八日、木下周防守鐵炮足輕頭〇中略之秋田助左衛門旗大將〇十萬餘騎、伏見之城を圍む、

〔細川幽齋覺書〕昇大將をも致す程の人は、他の手に合候を浦山しく思ひ、何かと致し候はで昇はやくたいあるまじく候、たとひ諸人はいかほど手に合ひ候とも、昇さへたをさず候へば、手に逢候人の手柄も同前と、いかにもをとなしく、不存しては、ならざる役にて候、名將衆にも、左樣のもの無之候に付、昇大將はなき物と御申候事、

旗奉行

〔甲陽軍鑑十五品第四十三〕信玄公御旗〇中略此六本の御旗奉行一人、總旗奉行一人、それによりて二人也、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕武田法性院信玄公御代總人數之事〇中略

御旗奉行　一岩手右衛門佐父子

〔大友記〕石松源五郎立花ノ城ニ參ラル、事附戸次道雪御老中へ申遣ル口上書之事〇中略殊ニ御進發ノ御首途ノ領ハ、御前驅、御旗奉行、御鎗奉行、其外御共御人數、格護衆モ、其役々筋目相定、〇下略

〔松浦法印征韓日記抄〕城兵鎭信の旗一流塀越しに奪んとするを、旗持浦川紺右衛門、小頭土肥彌右衛門是を取れじと引合けるを、旗奉行西清右衛門所存ありて、旗を敵に渡すべしと下知す、敵旗を奪ひ取、城中を持ち歩行く、果して清右衛門所存の如く、諸勢是を見て、鎭信こそは一番に城中に乘入たれと、先陣後陣進來、其勢に乘じて西清右衛門一番に乘込めば、〇下略

〔老士物語〕先伏見ゟ御旗本へ押さする時、旗奉行廣瀨左馬助、孕石備前兩人昇を張立ずして押を見て、掃部伊〇井以之外怒て、何とて昇を不張立ぞと、數度使を差越ども、兩人我等次第に被成よとて、昇を伏て、終に伏見の御旗本迄張立ず、左有て伏見より淀繩手にかゝりて押時、伏見の主計殿橋と云有、其橋より昇を張立ると也、御旗奉行兩人の下心は、宇治邊ゟ昇を立て、御旗本江向て押は、敵の見聞不可然、其上、士たる者の中に批評せんには、今度先衆と定られたる者が、旗を立て、逆に本陣に向て押事、不吟味也と云べし其故再三の使に、我等に任せられよと承引せざる事、心ばせ不淺勇士なり、誠に右兩人は甲州衆にて、廣瀨は美濃が子、孕石は主水が子なり、何れも勝れたる勇士なれば、甲州の家風を違へず、大坂にて掃部危かりしとき、兩人とも旗一本ツヽ持、地に突立、其旗竿に取付、終に其手をはなさず、討死せしとなり、旗奉行は右兩人を手本にすべし、

〔士談會稿續編坤〕景勝旗奉行梅津宗琳といふものゝふとくたくましき馬に乘、錦の直垂を著、若黨共餘多召連、景勝の毗の字の旗五六本押立、下知して罷在候、旗の者共よぢり足をして、前江出兼候ニ付、宗琳馬より下り、旗之者の手を引とらへ、いまだ竹たばをも不付、城外ぎしりと仕候場へどうよと引すへ、若黨どもの杖に付たる木刀を地江ゆりこみ、其木に旗棹をシツカト結付候故、旗之手丈夫に立ならび候、其時宗琳甲を脱、上杉景勝内梅津宗琳陣場たしかに請取候と名乘候、堀尾が頭分之者共ははや引拂、侍分少々居殘り、右之樣子を見て、感候計也、然る處に、城中ゟ鐵炮を打出し候、旗之者共左右江打倒され候得共、景勝の旗は少しも不動、キツト押立てあり、さすが景勝の旗奉行なりと、城中にても、城外にても、諸人譽申候、

〔武功雜記上〕松田作兵衛ト申旗奉行打死仕候付、當座ノ替ニ、總右衛門田〇餘ニ旗奉行被申付候、尤白鷹ニテ旗ノ支配仕候、本丸ヘ旗ヲ入候刻、兩方ニ株ヲ打テ、旗ヲ結付、其上ニ風ツヨク有之候ヘバ、兩手ニテ旗竿ヲトラヘ手ヂカク敵ノ來候モカマワズシテ、自分ノ預リ事ヲ大切ニ守リ居候

由、

〔兼貞齋筆記〕扨又旗奉行ハ、大將ノ床机替リヲモ相勤候者故、道德氣量ヲ撰ミ、一備ノ主ニテ、一備ノ敗軍ト申候ヘバ、旗奉行自身ニ旗ヲ持、是非守返、勝利ヲ得ルト申位ノ氣量無テハ、其仁トハ難申、

〔水野勝成記〕櫻の間江拙者のぼり壹本一番に立申候、のぼり奉行神谷久右衞門と申候者召連罷越候、

長柄大將

〔見聞雜錄武家名目抄軍陣七ノ二所引〕鑓より勝負の序なれば、一番鑓二番鑓の名を呼に非哉、然者士大將に次ぐは、長柄大將也、〇中略謙信代より規式の盃をば、士大將の次へ呼出すは、若くとも長柄大將ぞかし、

鑓奉行

〔見聞雜錄武家名目抄職名二十四下所引〕安西平左衞門は、信玄の御代より御家一番の長柄大將鑓の名人、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕武田法性院信玄公御代總人數之事

御鑓奉行安西平左衞門、騎馬十騎、足輕五人、今福新右衞門、騎馬十騎、足輕十人、かす野市右衞門、騎馬十五騎、足輕十人、

弓大將

〔軍法極秘傳書諸奉行二〕弓大將の事

近年は弓の役を鐵炮より仕廻により、弓はよく〳〵鐵炮のならぬ所をふせぐなり、弓より第一近きもの、夜軍しつはらひ、又鑓前の武者に力をあはする事專なり、

弓大將目利の事

鐵炮こと〴〵く打拂、其後弓をいさする自然なり、鐵炮くすりこみにまのぬけたるを時とし、射さする事尤なり、又鐵炮をひらかせ、脇よりも名乘かけ、さしつめ〳〵射さする時、敵追かけてくるものなり、是敵をおびくの手立なれば、鐵炮に、つよく横あひをうちたてさす、敵色めく時は、味

方合戰をよじむるなり、弓より鐵炮にも下知をし、軍をも道びく也、右弓大將の才覺也、

〔氏鄕記 中〕小田原軍事

去程ニ、案ノ如ク子刻計ニ、城中ヨリ悉續松ヲ出シ、究竟ノ兵共ヲ勝リ、岩槻十郞ヲ武者大將トシテ、大勢噇ト打テ出ケレバ、味方ノ先陣已ニ押破ラレ、悉ク敗軍シテ、弓鐵炮ノ者ドモ多ク逃タリケリ、其中ニ鐵炮ノ者ドモ三四人程取テ返シ、鐵炮ヲ討タルコソ攻テノ事ナレ、夜ノ事ニテハアリ、火繩ノ光稻妻ノ如クニテ無隱ゾ見エシ、去ドモ鐵炮大將蒲生源左衞門、門屋助右衞門、寺村半左衞門、森民部丞、弓大將蒲生忠右衞門、梅原彌左衞門等ハ、踏留テ戰シトゾ聞エシ、

〔軍法極秘傳書 二諸奉行〕鐵炮大將の事

火繩消ての鐵炮は、棒よりもおとりなり、火のきえぬたしなみ第一なり、內々雨びなわこしらへ持やうに、足輕どもにいび付る事專なり、又雨ふりの用意には、なめし皮にて四五寸四方にきんちやくをし、跡さきをあけ、糸を付て持べし、雨ふりまだ火を隱したき事もあるべし、此袋の中へ、火繩の火口をさし入、とかくきえぬやうに尤なり、

同鐵炮大將の事

鐵炮大將は、敵あひを見さだめ、遠近二町のうちをうたすべし、遠き時は、玉役もすくなく、玉藥のついへといひ、ことに足輕草臥はて、目もくらむものなり、又鐵炮うちやうの事、はらうち、はさめうち、まはしうち、かさねうち、ひらきうち五樣也、敵廻しうちにする時は、味方は、はさめうち、とかく敵と打樣をちがゆる事尤なり、

〔末森記〕利家卿〇前田、中略、同〇天正十二年八月二十二日ニ、村井又兵衞ヲ大將トシテ、高畠九藏、原田又右衞門兩人ヲ差添、其外鐵炮大將四人、都合千五百餘ノ人數ニテ、二三日普請シテ柵ヲ付マワシ候時分、〇下略

〔川角太閤記〕五 内藏助殿〇佐々成政 方の鐵砲大將野々村を始として、はや物頭二三人討死なり、

船大將

〔太閤記〕二 因幡國取鳥落城之事
海上をみれば、松井猪介、荒木勘十郎、船大將として番船其數をしらず、

〇船大將ノ事ハ、水軍篇ニ詳ナリ、

番大將

〔毛利元就記〕尼子終に不相叶して元就へ降參す、〇中略 さて富田月山の城には、天野隆重を番大將に籠置、伯州南條城には、杉原盛重を番大將に籠置、

〇按ズルニ、番大將ハ城番ナリ、

小將

〔松原自休手錄〕下 秀賴卿ハ東行ノ青木侍女大藏卿二位ノ局モ不還來、得多落方便後悔ス、右古新ノ小將、吾雖生武門、未曾知弓箭之術、敵於襲來ル二士卒ト共死、一戰之中ニ可決勝負云々、

頭

〔甲陽軍鑑〕十五 品第四十二 御大將、其下侍大將、足輕大將、近寄の頭迄不存して不叶事、

一あひづの物見の事、口傳あり、　一あひづの小旗、口傳、　一物見四方に心付、口傳あり、　敵味方ともに働時、持小旗備後之事、口傳有、　一計策文の認やう、一字の事、七佛の事、口傳あり、

〔甲陽軍鑑〕十五 品第四十二 備之事
一くり引の仕樣、口傳有、　一備たゝむ事、口傳有、　一城まきほぐしやうの事、一頭へ五頭也、口傳有、　一組事、口傳有、

〔奧州後三年記〕上 昔賴義、貞任をせめし時、武則一家をふるひて當國へ越來て、桑原郡督の園にして諸陣の押領使をさだめて軍をとゝのへし時、この秀武は三陣の頭にさだめたりし人なり、

〔參考太平記〕十六 本間孫四郎遠矢事
西源院本云、尊氏、御方ニ誰カ此矢射返スベキ者ヤアル、東頭四十餘頭、九國三十餘頭、其外中國、四國、北國ノ輩、大略殘少クコソ相隨ラメ、此内ニ此矢射ル程ノ者、ナドカ無ルベキ、射返シ候ヘト仰

大頭小頭　組頭組衆

ヲレケレバ、皆カタ津ヲ吞チ晉モセズ、

〔矢島十二頭記上〕一出。羽。國。由。理。中。大。將。十。二。頭。とは、矢島殿、仁賀保殿、赤宇津殿、潟保殿、打越殿、下村殿、玉米殿、石澤殿、瀧澤殿、杏澤殿、子吉殿、鮎川殿、是を十二頭と申候、此內仁賀保殿は大身なり、是も小笠原なり、矢島殿御一家也、矢島殿と鮎川殿とも御緣類也、仁賀保殿、先祖信濃國より初て御下り被成候を、大和守殿と申候、御嫡男をも後大和守殿と申候、是を則小和州殿と申候、

〔甲陽軍鑑十一上品第三十五〕十月〇永祿十二年八日には、信玄公、かねて御定のごとく、小幡は、ゑた澤上の山を岨傳に沼へをし通る、其跡につき、山縣おさへ候へば、山縣につき、七。頭。も順に押、〇中略信玄公は、御旗本組共に、十六備を高き山へあげ、みませ到下を左に見て、備なされ候、〇中略一戰をいそぎ度思召候へども、山縣を始、ゆうぐんの八備を、にろねよりゑた澤の道へおりて、をし歸り、ちやうじやの、首尾あふ事、おそき子細は、八。か。し。ら。の人數、五千あまりなるをもつて、かくのごとし、

〔信玄全集末書十三〕先手旗本後備小荷駄迄總備ノ事

一一ノ先七手ナリ、但一手ニハ、六手、七手、十手ニモ、一二ノ手ヲ爲二分合一、一手ハ六十二騎、五十騎、四十騎、卅五騎、卅騎ノ一手ニモ大。頭。小。頭。ハ有レ之、左ノ端ノ先手ノ大將ハ老功ヲ用、序デ、中、扨ハ右ノ先手ナリ、〇中略九、旗本組二十四手左右ニ備頭兩士大將アリ、但此內大近習六手ナリ、此一備ハ五十騎ツヽ也、五十騎ヲ廿五騎ツヽ二ツニ分、朝番ハ合戰ノ時モ一ノ先勝負ヲスル、夕番ハ二ノハタラキ、是一手別手、別手一手、大。頭。一騎、小。頭。二騎、鎗奉行二騎、武者奉行一騎、皆是昵近ノ士也、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕西面遠州三州江之御先　一山縣三郎兵衞　手前三百騎、甲州信濃同心共に、

此組。衆。　一朝比奈駿河守　一逍遙軒聟松尾　一大熊　一山縣聟相木　一奥平美作守　一菅

沼新三郞　一長篠　一三浦右馬助　一三浦兵部　一孕石主水　一きところ道壽　今九百八

十騎、但組衆は遠陣の時は半役也、關東御陣の時は、駿河三州の衆、信長家康を押へられ候、〇中略

組頭にても組子にてもなき人數持

一跡部大炊助　騎馬三百騎　一原隼人佐　百廿騎　一仁科殿　百騎○下略

陣頭

〔關八州古戰錄十四〕北條美濃守氏規兼₌帶館林城₋事

是歲戊子ノ八月、北條左衛門佐氏忠、同左衛門大夫氏勝、丸田十郎氏房ヲ陣頭トシ、二萬餘騎、館林ヘ押詰、凡一旬餘攻ケレド、城兵堅固ニシテ、陷ルベキ體モ見ヘズ、

采配頭

〔關八州古戰錄六〕長尾謙忠伏誅附北城丹後守長國事

北城丹後守長國ガ關東ノ摠横目トシテ、那波ノ城ニ在リシヲ、當城代ニ補シテ、謙忠ガ組子同心マデモ殘ラズ附與セラレヌ、渠ハ越後古志郡櫪尾ノ城代北城安藝守長朝ガ男ニテ、初彌五郎ト號ス、大剛ノ者ニテ、輝虎死去ノ後モ、三郎景虎ノ采配頭ト成テ、越後府內ノ城ニ楯籠テ、喜平次景勝ト挑合ヒ、一年餘リ勝負ヲ爭ヒシモ、偏ニ丹後守ガ勇武ノ支ユル所以ナリ、

旗頭

〔太平記十九〕追₌奥勢跡₋道々合戰事

淸ノ黨旗頭、芳賀兵衛入道禪可モ、元來將軍方ニ志有ケレバ、紀淸兩黨ガ國司○源顯家陸奥守ニ屬シテ上洛シツル時ハ、虛病シテ國ニ留タリケルガ、淸ノ黨千餘騎ヲ卒シテ馳加ル、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

白旗一揆ノ衆ニハ、縣下野守ヲ旗頭トシテ、其勢五千餘騎飯盛山ニ打上テ、南ノ尾崎ニ扣ヘタリ、大旗一揆ノ衆ニハ、河津高橋二人ヲ旗頭トシ、其勢三千餘騎、秋篠ヤ外山ノ峯ニ打上テ、東ノ尾崎ニ扣ヘタリ、

〔應仁略記〕五月○應仁元年廿六日、細川より山名方へ押寄たり、上は山名方前、下は一條村雲の橋前後、兩三ヶ所の合戰也、與力々々の大名二つに分れ、家々の分國より上り集まる軍勢、たがひの旗頭、花を折たる見物、代は早時剋到來と見えたり、

〔蘆名家記〕高田閒合戰

一天正十三年ヨリ同十五年迄、伊達正宗卿仙道ヲ攻玉フ、大森ノ城ヲ始トシテ、城數八ケ所責落シ押領シ玉フ、然レドモ二本松右京亮吉次、仙道旗頭トシテ城ヲ堅ク守リ候故、此城ハ落城セズ、〇下略

〔家忠日記追加十一〕天正十八年五月十九日、寄手の軍勢岩附の城を圍む、〇中略鳥居元忠、平岩親吉、本多忠政、各一所に集り、進て士卒を指揮して勇を勵す、本多忠勝が兵三宅理兵衞、鈴木九左衞門、各旗頭忠勝が旗を本城に抛入る、

〔貞丈雜記二人品〕軍者と云者、古は大將の外に軍者といふ者別にはなかりし也、武田信玄の家臣山本勘助より軍者といふ事始る歟、何流彼流の軍法と云事も近代の事也、

〔兵法新論九選人任役〕一軍鑑一人軍師ト云、副將、副帥、其器軍法軍略ヲ主ドルベキ時ハ、是ヲ兼ヌルコトアリ、番頭又大番頭ノ身分タリ、一陣ノ軍鑑ハ、者頭身分ノ人ナリ、此ハ中軍ノ大將ノ傍ニ在テ、大將軍トトモニ軍機ヲ謀ル役ナレバ、智謀衆ニ越ヘ、和漢ノ兵書ニ通ジ、天文地理ヨリ城壁ヲ築ノ利害、奇正變化ニ達シテ、神算アル老功ノ者ヲ選ブベシ、大將軍ノ側ヲ離レズシテ、金、鼓、角、旌旗ノ權ヲ主ドル也、中軍ノ外ニモ一陣ニ一人ヅヽアリテ、陳將ト謀ヲ共ニスル也、

〔陰德太平記二十六〕陶一一ト聞テ、此其理有トテ、頓テ大和伊豆守、三浦越中守、羽仁越前守、同將監、町野、問田、平井、青景、其外陶ノ家ノ子、又豐筑ノ加勢ノ歩將共ヲ召出シ、弘中ガ申所ノ一儀取捨如何ニト僉議アリ、〇中略然所ニ平井入道ハ軍鑑者ニテ有ケレバ進ミ出テ、面々ノ御所存其儀至極ニ候、乍去此二三日城中朝夕ノ炊烟ヲ以テ、勝敗ノ氣ヲ考ヘ候ニ、全ク城ノ可落氣ニ非、又明日ハ十死日、明後日ハ絕命日ニテ、兩日共ニ大惡日ニテ候、來月朔日コソ大吉日ニテ候ヘバ、城乘ヲ被命テ宜候ナンズ、其間ハ軍士五千七千宛、長濱、杉ノ浦ニ張番ノ者共ヲ被差出、大本、有ノ浦ノ間ニ

モ千二千宛打廻々々シテ、夜ハ終夜本篝火、捨篝火、燒續ケ、外聞、物見無油斷バ、何ノ敵ノ恐レカ候ベキ、揔ジテ軍ヲ急ニスルハ謀ノ過リヲ生ズル事ニテ候、假令急ニ打テ宜候共、惡日ニ城ヲ攻ンハ、士卒ノミ討レテ勝利ハ無ルベシ、吉日ニ戰ハレバ、手負死人無シテ城ヲ陷ル事可易候、只明日明後日ノ大惡日ヲバ被除候テ、來月朔日ノ大吉日ニ、城乘ト被決定宜ク候ナンズト申ケレバ、〇下略

〔豐薩軍記二〕田北相摸守鎮周最後酒宴之事
軍配者石宗、此般大友宗麟ヲ樣々諫ムト云ドモ用キラレズ、〇下略

〔關難間記下〕慶長二十年五月、〇中略去ル七日ノ一戰、兵大夫〇增田長盛ハ河州須奈表ニテ、藤堂高虎ガ軍師磯野平三郎ト組テ討レヌ、

〔甲陽軍鑑十品第三十二〕一永祿四辛酉年八月十六日に、信州川中島より飛脚參りて申上る、輝虎出てかいづの向西條山に陣取候て、是非かいづの城を攻おとし申べしとあり、其勢一萬三千計なりと申上るより、信玄公、同月十八日に甲府を御立なされ、同廿四日に川中島へ御著あり、〇中略信玄公仰らるゝは、我家の足輕大將、弓矢功者の者ども、小幡山城、此六月病死、原美濃も當夏、わりが嶽城において、十三ヶ所の手負、いまだ疵直らず候故召つれず候とありて、山本勘介を召、馬場民部助と兩人談合にて、明日の合戰備を定よと被仰付、山本勘介申は、貳萬の御人數を、一萬二千、謙信の陣どり、西條山へ仕懸、明日卯刻に合戰を始、越後勢負候ても、勝候ても、川を越退申べく候間、そこにて御旗本組二の備衆をもつて、跡先より押はさみ、討取樣になさるべく候と、山本勘介申上る故、〇下略

〔松隣夜話上〕去程ニ武田勢、謙信公ノサゲスミニ少モ違ハズ二手ニ分ケ、〇中略一手ハ高坂、飯富、馬場、小山田、眞田、甘利、小幡、蘆田等、宗徒ノ侍大將組合テ、都合一萬一千餘騎、西條山へ掛ル、夜巳ニ曉

天ニ及ビ、信玄ノ物見浦野ト云老功ノ者馳廻リ見テ歸リ、信玄ヘ謙信ノ陣ハ頓テ是ニ候、但人數既ニ起リ、旗本ノ一組、味方ノ備ノ中ニ置テ、押廻々々サイ川ノ方ヘ赴テミヘ候ト申、信玄扨ハ手ニ逢タリト覺タリ、夫ハ車掛リトテ、遠近ニ依テ幾度目ニ旗本ト旗本ト巡リ合ト云次第アリ、山本道鬼〇勘介備ヲ立替、一方便仕レト有、但信玄内ノ侍足輕大將ニ及マデ人數ヲ返スコト手ヲ返スヨリ早シ、玆ニ因テ越後勢未ダ掛リ來ラザル一町餘引取備ヲ立ル、

〔羅山文集四十二碑銘〕竹中丹州府君碑銘

府君、姓源、氏竹中、諱重門、字以敬、濃州不破郡磐手邑人也、祖曰遠江守、父曰重治、所謂竹中半兵衞尉是也、〇中略秀吉修覇業、重治軍謀密策、知無不爲、秀吉美之、毎事問重治、所言多稱其旨、重治讀武經七書、其機變應時、言則屢中、不幸早卒于播州三木城、歳三十六、秀吉甚哀惜焉、後或臨陣有疑事、必曰、設使半兵衞在、我無憂也、其思慕之如此、

〔太閤記十八〕竹中半兵衞尉

此竹中は濃州菩提の城主にして、安藤伊賀守が聟なり、十四五歳の比より、武略の智人にかはり、何事も平人の及べき行ひもおほくはなく、眼ざしなども一癖有て、度量は江海にひとしく、のどめる心がらに見え、さとかりし事、おこがましき事打交へつゝ、きはめていふべき所もなかりしなり、去かく〳〵物をもいはざりしが、たま〳〵いへば理にあたれり、小信にも屈せず、小利にも溺れず、正に歸し、よろづの緩急も理にたがふ事なく、傑出の地位、二十ばかりの比より、漸く見えそめし也、〇中略又三州長篠合戰のとき、勝負何共未知れざりし折節、勝頼右備を秀吉卿の對陣し有ける左の方へ二町餘に移そなへしを、秀吉の臣谷大膳是をみて、此備も武田が勢に去たがひうつし候べしと下知しける處に、竹中いや〳〵、あの備は本の陣へ歸るべき勢也、たゞそのまゝ備をかため然るべしといひしか共、大膳はいなびおもひ、秀吉へ申、敵のむかふに去たがひ、味方の

勢をも備をなをし然るべく候はんやといひしを、半兵衛達てあしかりなんといひつゝ、諍論せしを、秀吉聞給ふて、何をあらそひ候ぞや、我勢はわれ次第たるべしとて、大膳さしづの所へ勢をうつし候ひぬ、圡かるに半兵衛手勢千ばかりは動せず、いよ〳〵備をかたくし有ける所に、半時もいまだ過ざるに勝賴そなへを元の陣に歸し〻かば、秀吉の勢も又もとの陣にかへし來りし也、半兵衛なみ〳〵の存分ならば、扨も右往左往なる躰とて圡た〳〵圡かるべきに、還て笑止なるやうにいひしかば、大膳事外いたみ面目なきよしいひしなり、其比半兵衛ふるまひおさ〳〵しき事かなと感じけり、すべて素性をのが長を舒卷せんと思ふ心もなく、他の短を求めあらはさんともせず、いかにも大やうに有て、大形は信長公に似たる事も有しと諷しき、

〔黑田家譜四〕秀吉公、初より孝高の才智を知て兄弟の約を成し、かたはらに置て其謀を用ひ、或は代官として敵を討しめ、終に天下を草創し給ふ事、○下略

目付

〔兵法新論九選人任役〕一目付物頭身分者之ヲ勤ム、中軍ノ使番ハ、番頭ノ身分ニモ命ズ、　此ハ中軍ト外ノ陣ト同ジカラズ、中軍ニハ或ハ四人或ハ六人アリ、內三人ハ大目付君ノ邊近侍目付也コレヲ勤ム、君ノ傍ヲ離レズ、外三人ハ本陣ノ先手大纏ノ後ニアリテ、先手々々ノ陣々ノ樣子ヲ見、又軍士ノ隊々ノ不齊ヲ制ス、一人ハ陣後ニアリテ、後軍ノ樣子ヲ見、軍士ノ不齊ヲ制ス、凡テ事變ルコトアレバ君ニ告ルヲ主ドル、君ノ傍ニ在者ハ軍鑑ヲ助ケテ、金鼓貝及五方旗ノ相圖ノ指揮ヲナシ、君ヨリ先手及後軍之將ヘ使スルヲ兼勤ムルコトモアル也、ソレ如此重キ役目ヲナスユヘ、君ニ忠ニ、寡言沈靜ニシテ嚴正ナル者ニ命ズベシ、

○按ズルニ、目付ノ事ハ、官位部織田豐臣二氏職員篇及ビ德川氏職員目付篇等ニ詳ナリ、

軍使

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年十月壬戌、大將軍東人等言、逆賊藤原廣嗣率衆一万許騎到板櫃河、廣嗣親自率隼人軍爲前鋒、卽編木爲船、將渡河、于時佐伯宿禰常人、安倍朝臣虫麻呂發弩射之、廣嗣衆却

到河西、常人等率軍士六千餘人陣于河東、卽令隼人等呼云、隨逆人廣嗣拒捍官軍者、非直滅其身、罪及妻子親族者、則廣嗣所率隼人幷兵等不敢發箭、于時常人等呼廣嗣十度而猶不答、良久廣嗣乘馬出來云、承勅使到來、其勅使者爲誰、常人等答云、勅使衞門督佐伯大夫、式部少輔安倍大夫、今在此間者、廣嗣云、而今知勅使、卽下馬兩段再拜、申云、廣嗣不敢捍朝命、但請朝廷亂人二人耳、廣嗣敢捍朝廷者、天神地祇罰殺、常人等云、爲賜勅符喚太宰典已上、何故發兵押來、廣嗣不能辨答、乘馬却還、

〔續武將感狀記〕秀吉公、信長公ノ使トシテ、荒木攝津守村重ガ居城有岡ニ至レリ、荒木是ヲ饗應ス、酒數獻ニ及ビテ自カラ肴ヲ取ニ立タル時、河原林越後守治冬、筑州ヲ殺サンコトヲ勸メ謀ル、荒木制シテ卽コレヲ語ル、秀吉公壯士ナリトテ呼ビ出シ、獻酬ニ及ビテ腰間ノ短刀ヲ引出物ニ賜ハル、荒木指替モナク如何ト云、秀吉公吾一箇ノ刃ヲ以信長公ニ仕ル者ニアラズ、信長公ノ吾ニ於ル又如此トテ、強テ治冬ニ與ヘラル、其凜然タル大勇ニヲサレテ指ス人モナシ、〇中略日城ヲ片手ニ握ルノ一基ナランン、

〔播州佐用軍記上〕寄手總勢上月表ノ山々エ取登之事

秀吉卿ハ今日上表ノ山々ヘ軍使ヲ遣、城計ノ形像ヲ見セラル、軍使歸申ケルハ、先城ノ大手ト覺シキハ東向、前ニ堀有、橋ヲ渡シ、門櫓、高矢倉有、

〔兵法新論九選人任役〕一使番（是モ物頭身分ノ役也、表日付ニテ派ルコトアリ、又表使ヨリ派ルモ有、）　此ハ一陣ニ二人ヅヽアリテ、他陣ヘ使ヲ勤メ、又敵陣ヘノ使者ニモ行コトアリ、又其陣ノ將ヨリ陣中ノ頭令ヘノ命令ヲ傳フル等ノコトヲ主ドル役ナレバ、沈勇敏捷ニシテ粗暴ノコトナク、辨舌分明ニシテ能君ノ意ヲ通ジ、先陣ヘ使ニ行時ハ士衆ヲ勵シ、敵ニ使者ニ行時ハ謙遜ヲ本トシテ、敵心ヲ怒ラシメズ、又我威武ヲ落サズ、然レドモ時アリテハ、孔明ノ吳ニ使シテ、吳ノ將令官人ヲ、一寸不爛ノ舌頭ヲ以テ屈服セシメタル如キ計ラヒモナスベキ程ノ者ヲ命ズベシ、若敵ヘ使者ニ行テ、機變ノ作略ヲナスベ

右筆

キ人ナキ時ハ、大將、副將、軍鑑ヨリ、其人ヲ選デヤルコトモアルベシ、

〔伊豫古蹟志外傳 上職官〕河野氏興、功臣〈支〉封者數百家、股肱之者八人、謂之寄合衆、卽散將也、○中略又有行季十八人、在軍中則常斥候、而預察地理、窺虛實、知多寡、辨利害、探伏奸、明四目、達四聰、通命令、平之日、掌聘使于鄰國、皆書森字於標、以爲旗章、謂之十八森、或呼曰使番、

○按ズルニ、使番ハ卽チ軍使ナリ、官位部織田豐臣二氏職員篇ノ使番條、及ビ德川氏職員編ノ使番篇ニ詳ナレバ、宜シク參看スベシ、

〔武家名目抄 職名附錄十四上〕右筆 又執筆　按、筆執といへるは右筆の訓なり、

〔梅園奇賞〕拓殖鄉長解　申常地賣買墾田立券事 ○中略

天平勝寶元年十月廿一日　鄉長桃尾臣井麻呂 ○中略　筆取壬生淨足

〔源平盛衰記 二十八〕八牧夜討事

爰ニ八牧ヲ憑テ、筆執シテ有ケル古山法師ニ、某ノ注記ト云ケルガ、萌黃糸威ノ腹卷ニ、三尺二寸ノ太刀ヲ拔テ、飛テ係リケレバ、景廉走違テ、長刀ヲシタヽカニ打懸タリ、○下略

〔源平盛衰記 二十九〕三箇馬場願書事

木曾○義仲ハ、物書ニ大夫房覺明ヲ招テ、軍兵ノ中ニシテ云、軍ハ謀ト云ナガラ、平家ハ聞體大勢也、佛神ノ擁護ニ非ンバ、輙ク靡シ難シ、幸ニ今北國第一ノ靈峯、効驗無雙ノ明神ノ御籠近ク參タリ、白山妙理權現ニ願書ヲ進セバヤトヽ有ケレバ、軍兵モ覺明モ然ルベシトテ、覺明ハ箭立取出シテ旨趣ヲ顯ス、○下略

〔源平盛衰記 三十〕木曾山門牒狀事

大夫房進出テ申ケルハ、覺明當初京都ニ在シ時、山法師ノ心根ハ能聞及キ、平家タトヒ所領ヲヨセ、財寶ヲ拋ケ、山門ヲ語フ共、三千衆徒一同ニ平家ヲ引思事ヨモ候ハジ、源氏ニ志思フ大衆モナ

陣僧

ドカナカルベキ、先牒狀ヲ遣テ試侍ベシ、事ノ體ハ聞エナント申、可然トテ覺明則書札ヲ書、

〔吾妻鏡十五〕建久六年十月十三日乙丑、故木曾左馬頭義仲朝臣右筆、有大夫房覺明者、元是南都學侶也、義仲朝臣誅罰之後、歸本名、號信救得業、當時住筥根山之由、就聞食及之、山中之外、不可出于鎌倉中幷近國之旨、今日被遣御書於別當之許云云、

〔伊豫古蹟志外傳上戰國官〕河野氏興、功臣受封者數百家、〇中略又有侍史謂之祐筆、凡三人、君命之籍咸掌焉、軍中之傷死、及有獲、亦主錄之、

〇按ズルニ、右筆ノ事ハ、官位部鎌倉職員以下ノ各編ニ收載セリ、宜シク參看スベシ、

〔足利季世記四三好記〕岩山卜山ノ事

其年暮テ、明レバ天文三年ニ成ル、〇中略湯川民部少輔ト云モノヽ子ニ、業阿彌ト云法師アリ、粉川〇紀伊國ノ邊ニ有ケルガ、直光〇湯川ガモトニ來リテ、扨モ我等ガ怨敵卜山ヲ此時打取事安カルベシ、卜山ヲ打トラバ、一門一味シテ本領ニ安堵セント思フ也ト云ケレバ、湯川悅ビ、イロ〱謀事ヲ廻ラシ、カノ法師ヲ陣僧ニ作リ、廻狀ヲ書テカノ陣ニ送リケル、然レドモカノ業阿彌運ヤヨワカリケン、大將ノト山ヲ見知ラザリケレバ、陣中エ入テ見レバ、ト山十德ノ衣ノ中ニヨロヒキテ、遊ノワキニ立給フ、遊佐河內守ハ大將ニテ、シヤウギニ腰ヲカケ、寄手ヲ下知シテ居タリシヲト山ト思ヒ、カノ狀ヲサヽゲ、河內ヨリノ御使ト申ス、遊佐此狀ヲ開テ讀ケル處ヲ、カノ僧太刀ヲヌイテ丁トキル、二太刀ツヾケテ切ケレドモ、薄手ニテ死ザリケル、此ヲ見テ、ト山カノ僧ノ後ヨリ一太刀ニ切伏給ヘバ、此僧死ナガラ猶遊佐ヲ白眼デ、眼更ニ不閉ケル、

〔今昔物語二十五〕源賴義朝臣罰安陪貞任等語十三

藤原茂賴ハ守ノ親キ者也、軍破レテ後、數日守ノ行所ヲ不知、既ニ敵ノ爲ニ被討ニケリト思テ、泣々吾レ彼ノ骸骨ヲ求メテ葬セム、但シ軍ノ中ニハ僧ニ非ズバ難入ト云テ、忽ニ髮ヲ剃テ僧

軍醫

ト成テ、戰ノ庭ヲ指テ行ク、道ニ守ニ値ヌレバ、且ハ喜ビ且ハ悲ムデ守ト共ニ返ヌ、

〔中國治亂記〕天文廿年八月中旬、豐後國大友義鎭ハ御甥ナレバ、繼目御代替リ御使者アリ、御陣僧ト聞エシ、此僧ヘ御馳走ノタメニ、八月廿七日山口ノ館ニテ御能アリ、

〔加越闘諍記〕四義景地藏山ヘ陣替之事

同夜(〇元龜四年八月十日、中略、)敵(〇織田信長ノ兵)ヨリ、陣僧ヲ使トシテ指越、玉泉坊(〇平泉寺僧、朝倉義景ノ部將、)ニ向テ云ケルハ、只早速降參有テ除玉ヒ、恩賞ノ儀ハ、以後望次第ニ可被出トト申ケルホドニ、(〇下略)

〔川角太閤記〕一四日(〇天正十年六月)に城主(〇高松城主淸水忠高)切腹被仕候やいなや、御手前(〇豐臣秀吉)の大知坊と申陣僧を、毛利殿陣(〇中略)へ被仰遣、(〇中略)於御同心ハ、御陣僧一人此使に御添被成可給候者也と被仰遣候所に、毛利家も、(〇中略)安國寺を御使に被添、筑前守殿(〇秀吉)筆本見候へとて被進候、(〇中略)御言葉には、手前にてをさめ置候拙者陣僧を、貴僧被召連候へ、毛利家の筆本見可申ためにに候とて、則御手前の御陣僧安國寺に被添、毛利家へ被遣候事、

〔兵法雄鑑〕二人用捨つね〴〵恩をあたへて、戰場へも必可被召連者七人之事、

一醫者。　二馬醫。　三大工金堀細工之者　四猿樂　五出家　六水練　七文者

〔兵要錄〕六練兵一隊積算(〇中略)

一醫役一名、僕共三人、

〔伊豫古蹟志外傳〕上戰國官河野氏與功臣受封者數百家、(〇中略)又有醫師、凡五人掌凡疾病、金瘡、針治、目疾、口疾、獸療焉、

〔加藤家傳淸正公行狀〕奇天正二十年正月五日、秀吉公朝鮮國征伐ノ陣觸アリ、(〇中略)秀吉公軍中ニ可用藥幷藥法ヲ傳ヘテ、淸正之レヲ諸軍ニ與ヘ陣中ノ要用トス、(淸正藥法ヲ所ノ醫三淸ニ敎テ調合セサセ、士卒ドモニ笠ノ下ニ入レテ用之、曰ツテ太閤ノ笠ノ下ト號ス、專水土ノ傷、其外一切ニ用、此法傳來ス、)

職掌

〔令義解 五軍防〕凡大將出征、臨軍對寇、大毅以下不從軍令、謂凡閫外之事、將軍制之、欲有所指麾、乃立其教令、是爲軍令、其自非大將、而諸將軍以下者、不得復出令也、及有稽違闕乏軍事、謂得依律、征人稽留、及乏軍興等是也、死罪以下並聽大將斟酌專決、還日具狀申太政官、若未臨寇賊、不用此令、

凡軍將征討、須交代者、舊將不得出迎、當嚴兵守備、所代者到、發詔書勘合符、乃以從事、○中略

凡征行、大將以下、有遭父母喪者、皆待征還、然後告發、謂大將以下者、戰士以上也、征還者、諸軍罷還之時也、言大將軍奉還節刀、及戰士以上將行官物返納本司之後、然乃告喪、故令其發哀、其自餘公使者、依假寧令、於所聞之處、舉哭盡哀也、

凡士卒病患、及在陣被傷、皆遣醫療、軍監以下親自臨視、

凡大將出征、克捷以後、謂克者勝也、捷者獲也、諸軍未散之前、卽須對衆詳定勳功、幷錄軍行以來、有所克捷、及諸費用、謂軍資之用度也、軍人兵馬甲仗、見在損失、大將以下連署、謂將軍府、具錄行軍以來行狀、以爲書記、仍大將以下連署、卽申勳之日、更依此書、以爲勳狀、是下條所謂勳簿者也、軍還之日、軍監以下、錄事以上、各赴本司勾勘、謂軍監以下、各赴兵庫馬寮等司、以初交物、對勘返納也、訖、然後放還、

〔續日本紀 十三聖武〕天平十二年十一月丙戌、是日、大將軍東人等言、進士无位安倍朝臣黑麿、以今月二十三日丙子、捕獲賊廣嗣於松浦郡値嘉嶋長野村、詔報、今覽十月二十九日奏、知捕得逆賊廣嗣、其罪顯露、不在可疑、宜依法處決、然後奏聞、○中略戊子、大將軍東人等言、以今月一日、於肥前國松浦郡斬廣嗣、綱手已訖、菅成以下、從人已上、及僧二人者、禁止身、置太宰府、其歷名如別、

〔續日本紀 三十九桓武〕延曆七年十二月庚辰、征東大將軍紀朝臣古佐美辭見、詔召昇殿上、賜節刀、因賜勅書曰、夫擇日拜將、良由綸言、推轂分閫、專任將軍、如聞承前別將等不愼軍令、逗闕猶多、尋其所由、方在輕法、宜副將軍有犯死罪、禁身奏上、軍監以下依法斬決、坂東安危在此一擧、將軍宜勉之、因賜御被二領、采帛三十疋、綿三百屯、

〔江談抄 二雜事〕元方爲大將軍事

又被命云、○大江匡房天慶征討使之時、朝議以堪其事、欲以元方爲大將軍、元方聞之云、大將軍所言、一事

賜節刀

以上、國家無不被用、若被拜大將軍者、必請貞信公子息一人、爲副將軍云々、因茲寢此議云々、

〔令義解 一 職員〕軍團

大毅一人、（掌檢校兵士、充備戎具、謂充備兵士之戎具也、調習弓馬、簡閱陣列、謂檢閱軍行之陣列也、事、）少毅二人、（掌同大毅、）

主帳一人、校尉五人、旅帥十人、隊正廿人、

〔武家名目抄 職名 二上〕持節大將軍　按、節ハ符節ナリ、○中略上古ニハソレト定マレル器モナケレバ、節トイフ名ノナカリシハ元ヨリサルイハレナレド、景行帝ノ御宇、皇子日本武尊ニ命ジテ東夷ヲ征セシメ玉ヒシ時、比々羅木之八尋矛ヲ授ケ給ヒシヲ、節ヲ授ケラレシ濫觴トモイフベシ、（崇神帝四道ノ將軍ヲ遣ハサレシ時、授印綬爲將軍トイフコト日本紀ニ見エタレド、コレハ例ノ筆者ノ作意ニテ、實ニ印綬ヲサヅケラレシコトアリトハ見エズ、又當時將軍トイフ名稱モナカリシ由ハ、(中略)將軍ノ條下ニノベタリ、合セ見ルベシ、）サテ令ニイフ所ノ節刀ヲ造リ出サレシハ、何レノ時ニヤ詳ナラザレドモ、思フニ文武帝ノ朝ニハ制度ヲモ改定アリテ、何事モ異朝ニナラヒシ御代ナレバ、節刀モ此時ニ作ラセ給ヒシナルベシ、（中右記裏書ニ引タル藏人信經記ニ、節刀ノ飾ハモト百濟國ヨリ奉レルヨシ見エタルハウケ難シ、）

〔延喜式 四十五 左右近衛〕小儀（謂、(中略)將軍賜節刀、）

〔令義解 五 軍防〕凡大將出征、皆授節刀、（謂凡節者、以旄牛尾爲之、使者所擁也、今以刀代之、故曰節刀、雖名實相異、其所用者一也、）辭訖、不得反宿於家、（謂宿猶止也、凡大將軍授節而出、不得更復反入於家、其至歸時、亦同、如將軍以下有故者、准受勅使、得宿於家也、）

〔儀式 十〕賜將軍節刀儀

其日大臣侍殿上、喚舍人、舍人共稱唯、少納言代入自承明門、（近衛開門如常、）就版、大臣宣喚征其賊大將軍姓名、少納言稱唯退出而喚之、將軍稱唯、入自同門就版、大臣宣參來、將軍稱唯昇殿、先是侍從一人執節刀侍殿上、大臣宣命詔（久、）某賊（平）征撥治鎭（邊岐）人（止）爲（天奈毛）姓名（乎）任賜（布、）使下（乃）有犯軍法者、（副將軍有犯死刑、禁身奏、不在殺限、）之、隨法（爾）行（止）爲（天奈毛）勅書幷節刀賜（止）宣、將軍稱唯、大臣以勅書授之、將軍進受、差退而侍、執節刀、侍從授節刀、捧持退出、侍從一人持御衾、內藏寮持御衣及采帛幷綿等、相續賜之、（御衾自閤門出、將軍後、自）

餘自拔門出而賜之、將軍以節刀授副將軍、自賜御衾及采帛拜舞、

〔西宮記臨時五〕賜節刀 南殿懸御簾

預定其人、大臣候御前、召其人御前、仰遣大將軍由、大臣著陣、令書召名、將軍一人、副使一人、軍監一人、軍曹四人奏、給兵部云々

天皇御南殿、近仗陣階下立、內侍出、內辨昇、開門闈司著 內辨召舍人二、少納言參、內辨仰云、某々召セ、詞在內裏式、稱唯出、將軍入立版、著位袍、弓箭靴、大臣云、古万宇 將軍稱唯、經左仗南方參上、登自東階二ノ間軒廊、立簀子內辨後 參議一人執節刀、立將軍右方、著靴登自東階 內辨以宣命乍居宣制、大裏式文、將軍以宣命入懷云々、參議授節刀下、退將軍取節刀出、右肩置節刀、左手持弓、降自南階、直出承明門、四位侍從一人、五位一人授祿、二人出自長樂門、授將軍、內裏式云、侍從一人持御被、內藏寮持御衣及綵帛、出給之、件祿盛筥置陣小庭之胡床、

〔北山抄四拾遺雜抄〕賜將軍節刀事 進儀見內裏式并天慶式、依懸御簾無勅大臣之詞、上卿直仰云々、賜入唐使節刀儀同之、

大臣奏勅書、次就內侍所、令出節刀、上卿及內侍署出文、著陣座、仰辨官進彼所、令內豎昇之、置上卿座下、左右將監各一人相從也、天皇御南殿、近衛引陣、內裏式大臣參上、後可引陣、而前例先引之、內侍召人、大臣取勅書、參議取節刀上殿、立大臣後簀子敷、次開承明門、次召舍人、少納言參入、大臣仰召征夷將軍某、天慶例、征東大將軍以音仰之、或云、東平打大軍乃君止可仰云々、將軍就版、大臣宣、將軍來、稱唯參上、立簀子、大臣起座宣制、其詞見內裏式、將軍稱唯、大臣復座、授勅書於將軍、跪受之、立本所、參議進跪授節刀、將軍相跪受之、下自南階退出、侍從取御衣等、入楊筥、出自承明門給之、承和賜遣唐使節刀之日、左少將就內侍所請衣被、令持侍從、出自閤門給之、大使祿一領、令持四位內藏頭代、副使被一條、令持五位助代云々、而天慶不用少將、○中略 勅詞可勘合式文、

今詔久、坂東凶賊乎伐掃治鎮支人止爲天奈毛、忠文朝臣乎麻氣賜不、副使以下有犯軍法者、隨法行止爲天奈毛勅書、又節刀賜久止宣、

〔續日本紀四元明〕和銅二年三月壬戌、陸奥越後二國蝦夷、野心難馴、屢害良民、於是遣使徵發遠江駿河

甲斐、信濃、上野、越前、越中等國、以左大辨正四位下巨勢朝臣麻呂爲陸奥鎭東將軍、民部大輔正五位下佐伯宿禰石湯爲征越後蝦夷將軍、内藏頭從五位下紀朝臣諸人爲副將軍、出自兩道征伐、因授節刀幷軍令、

〔續日本紀 三十九 桓武〕延暦七年十二月庚辰、征東大將軍紀朝臣古佐美辭見、詔召昇殿上賜節刀、

〔日本紀略 桓武〕延暦十三年正月乙亥朔、賜征夷大將軍大伴弟麻呂節刀、　廿年二月丙午、征夷大將軍坂上田村麻呂賜節刀、

〔日本紀略 二 朱雀〕天慶三年二月八日甲辰、天皇御南殿、發遣征東大將軍參議右衞門督藤原朝臣忠文、賜節刀、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年四月十日戊寅、源九郎〇義經使者自京都參著、去月廿七日有除目、武衞〇賴朝叙正四位下給之由申之、是義仲追罰賞也、持參彼聞書、此事藤原秀郷朝臣、天慶三年三月九日、自六位昇從下四位也、武衞御本位者從下五位也、被准彼例、亦依忠文宇治民部卿之例、可有征夷將軍宣下歟之由有其沙汰、而越階事者、彼時准據可然、於軍事者賜節刀、被任軍監軍曹之時、被行除目歟、被載今度除目之條、似始置其官、無左右難被宣下之由、依有諸卿群議、先叙位云云、

不賜節刀

〔百練抄 八 高倉〕治承四年九月廿二日、右近權少將平維盛朝臣、爲追討關東賊徒發向、承平天慶之例幽玄之間、今度就嘉承例所被行也、不給節刀、賜驛鈴、

〔源平盛衰記 二十三〕朝敵追討例附驛路鈴事

同〇治承四年九月廿二日ニ、追討使官符ヲ帶シテ福原ノ新都ヲ立、大將軍三人ノ内權亮少將維盛朝臣ハ、平將軍ヨリ九代、正盛ヨリ五代、大相國ノ嫡孫、重盛ノ一男ナレバ、平家嫡々ノ正統也、今凶徒ノ逆亂ヲ成ニ依テ、大將軍ニ被選タリ、〇中略抑朝敵追討ノタメニ、外土ヘ向フ先例ヲ尋ニ大將軍先參内シテ節刀ヲ給ルニ、宸儀ハ南殿ニ出御シ、近衞司ハ階下ニ陣ヲ引、内辨外辨ノ公卿參列シテ、

中儀ノ節會ヲ被行、大將軍、副將軍、各禮儀ヲ正シクシテ是ヲ給ル、サレドモ承平天慶之前蹤、年久シテ難准トテ、今度ハ堀川院御宇嘉承二年十二月ニ因幡守平正盛ガ、前對馬守源義親ヲ追討ノ爲ニ、出雲國ヘ發向セシ例トゾ聞エシ、鈴バカリヲ給テ、革袋ニ入テ、人ノ頸ニ懸タリケルトカヤ、

〔儀式 十〕將軍進節刀儀

其日大臣侍殿上、喚舍人、舍人共稱唯、少納言代入自承明門、(近衞開門如常)就版、大臣宣、喚征某賊大將軍姓名、少納言稱唯、退出喚之、將軍稱唯、捧節刀就版、奏云、征某賊大將軍姓名奏(久)、賜(志)節刀進(止)奏、勅大臣曰、令進、大臣稱唯宣進(禮)、將軍稱唯、進置殿上席、(掃部寮預敷之)退出、其節刀令收兵庫、

〔西宮記 臨時 五〕進儀　見代々記文、仍不記

近仗陣階下、内侍出、内辨昇、開門、(闈司者)内辨召舍人、少納言參、内辨仰云、使參入、奏云々、内辨云、進(禮)、使稱唯、昇自南階、置机上、(掃部寮)退出、内辨召内豎、令召少納言、收之、

〔北山抄 四 拾遺雜抄 下〕進節刀儀 (天慶)

近仗服中儀、陣列階下、皇帝御紫宸殿、内侍臨檻召人、大臣昇殿著座、左右近衞開承明門、大臣喚舍人二聲、稱唯、少納言代入就版、大臣宣、召征東大將軍(某)姓(某)朝臣、少納言稱唯、退出喚之、大將軍稱唯、捧節刀入就版、奏云、征東大將軍(某)姓(某)申(久)、賜(シ)節刀進(止)奏、勅大臣、令進(與)、大臣稱唯宣進(禮)、將軍稱唯、昇從南階、跪置殿上机上、(掃部寮當階東第一間立机)退出、大臣喚内豎二聲、内豎稱唯、參入當殿巽角立、大臣宣召少納言、内豎稱唯、出喚之、少納言從日花門參入、(立所同内豎)大臣宣賜節刀(禮)、少納言稱唯、昇從東階、跪執節刀、捧持下殿、候廊下、大臣著宜陽殿西廂座、少納言進向納櫃退出、(件櫃在大臣座下)辨官近衞將監等共就内侍所納之、如初出儀、○中略

件式、天慶三年、取於儀式内裏儀式等所被作也、○中略 此日依垂御簾無勅大臣之詞、大臣直仰、但密密御簾中覽此儀、依此度式文、就内侍所令納節刀、出日有仰、就被所也、

待遇

〔續日本紀 桓武四十〕延曆八年九月丁未、持節征東大將軍紀朝臣古佐美、自陸奧進節刀、

〔日本紀略 桓武五〕延曆十四年正月戊戌、征夷大將軍大伴弟麿朝見、進節刀、　廿年十月丁巳、征夷大將軍坂上田村麿、召進節刀、

〔日本紀略 朱雀二〕天慶三年五月十五日庚辰、征東大將軍參議右衞門督藤原朝臣忠文入洛、返上節刀、

〔令義解 軍防五〕凡大將出征、○中略其家在京者、每月一遣內舍人存問、若有疾病者、(謂大將之父母妻子等有疾病也)給醫藥、凱旋之日、奏遣使郊勞、(謂凱旋者、凱樂也、軍歸之時、獻功之樂也、奏遣者、中務所奏遣者也、郊勞者、邑外曰郊、賓至迎勞之於郊、是也、)

〔令義解 軍防五〕凡有所征討、計行人滿三千以上、兵馬發日、侍從充使、宣勅慰勞、(謂慰勞者、慰安也、勞問也、)發遣、其防人滿一千以上、發日遣內舍人發遣、

〔令義解 職員一〕中務省

卿一人、掌侍從獻替、○中略宣旨(謂侍從之宣命也、案軍防令、有所征討、發日侍從充使、宣勅慰勞、是也、)勞問、(謂勞者、郊勞也、依軍防令、凱旋之日、奏遣使郊勞、是也、問者、存問也、依公式令、五位以上致仕、身在畿內、令內舍人一人巡問、奏聞安不、是也、)

〔唐六典 中書九〕中書舍人、掌侍奉進奏參議表章、○中略凡將帥有功、及有大賓客、皆使以勞問之、○中略通事舍人、掌朝見引納、及辭謝者於殿廷通奏、○中略凡軍旅之出、則受命慰勞而遣之、既行則每月存問將士之家、以視其疾苦、凱旋則郊迎之、皆復命、

〔續日本紀 元正九〕神龜元年十一月辛未、遣內舍人於近江國、慰勞持節大使藤原朝臣宇合、　乙酉、征夷持節大使正四位上藤原朝臣宇合、鎭狄將軍從五位上小野朝臣牛養等來歸、

〔續日本紀 淳仁二十五〕天平寶字八年九月甲寅、是日、討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂等凱旋獻捷、詔曰、○中略仕奉狀尓隨天、冠位阿氣賜治賜久止宣、○中略　乙卯、授從五位下藤原朝臣藏下麻呂從三位、

〔日本紀略 桓武五〕延曆二十年十月丁巳、征夷大將軍坂上田村麻呂召進節刀、　十一月乙丑、詔曰云々、陸奧國乃蝦夷等歷代涉時天侵亂邊境、殺略百姓、是以從四位坂上田村麻呂大宿禰等乎遣天、伐平

播治之年流開云々、田村麻呂授従三位、已下授位、

〔太平記十六〕正成下向兵庫事

正成重テ申ケルハ、衆愚之愕々タルハ、不如一賢之唯々ト申候ヘバ、道ヲ不知人ノ譏ヲバ、必シモ御心ニ懸ラルマジキニテ候、只可戰所ヲ見テ進ミ、叶フマジキ時ヲ知テ退クヲコソ、良將トハ申候ナレ、

〔武蔭叢話六〕蒲生氏鄉三階笠馬印之事

小田原陣之砌、蒲生氏鄉三階笠ノ馬印ヲ願被申、秀吉公聞召、是ハ大剛ノ名將佐々陸奥守ガ馬印也、氏鄉ニハ有如何、但此度ノ手柄次第ト宜ヲ、〇下略

〔當流軍法功者書下〕分別アル大將之事

分別有大將ハ、大敵ヲ見テ不欺、小敵ニ向テ不侮、敵ノ手立ヲ能ツモリ、味方ノ人數ヲモ能セイシテ、危コトヲナスコト無、萬事ニ敬ヲ加ル、是ヲ大將ノ分別アルトセン、又敵ヲ恐レ、敵ノ手立モ何トモハカリガタク、大事ト計心得、味方ノ手立ヲソナワルハ、是ヲ愚知ノ大將ト云ナリ、

〔當流軍法功者書下〕覺アル大將之事付功者ノ大將之事

覺有トハ、自身ノ動(ハタラキ)ヲバ言ガタシ、人ヲ能制スルヲ覺ノ大將ト云ベシ、又云、一度ヲクレアルヲ功者ノ大將ト云ベシ、惣テ軍ニハ勝モノナリトバカリ心得タルハ、手立ウトキ物ナリ、具在侍用集、

強大將之事

強大將ト云ハ、武略アリテ、人數クヨハミナキヤウニ下知スルナリ、尤軍ニ勝トキモ、サノミ不悅、負トキモヲドロカズ、又云、ムタイノ下知ヲシテ、味方ノ人數ヲヲシマズ、自身ノ動(ハタラキ)、羽武者ノゴトクシテ、シカモ武略モナキ大將ハ、軍スコシメデニナル時、ヲドロク物ナリ、是ヲバ未練ノ大將ト云ベキナリ、

〔豆相記〕於此武州天神山城守藤田右衛門佐、同忍城守成田長康、上州廐橋城守小幡三河守等、東八州之勇將、率歸氏康、

〔太平記九〕山崎攻事附久我畷合戰事

範家近々トチラヒ寄テ引ツメテ丁ト射ル、其矢思フ矢坪ヲ不違、尾張守ガ冑ノ眞甲ノハヅレ、眉間ノ眞中ニ當テ、腦ヲ碎骨ヲ破テ頸ノ骨ノハヅレヘ、矢サキ白ク射出シタリケル間、サシモノ猛將ナレ共、此矢一筋ニ弱テ、馬ヨリ眞倒ニドウト落、

〔武蔭叢話五〕北條丹後守事

彌五郎杉〇上ハ畠山義則ノ弟ナルヲ、五歳ヨリ謙信貰之爲姪聟、上杉定眞ノ養子トス、定眞ハ謙信ノ姉聟也、此彌五郎ハ大剛ノ大將ニテ、度々ノ場數アル故ニ、愛宕山ヲモチテ景虎方ヘ取ラレズ、天正六年三月ヨリ翌年二月マデ取合、越後國成二動亂不止、

〔當流軍法功者書上〕其家ノ大將見知樣事

其家ノ大將ノメサルベキ具足ノ毛色、甲ノ立物ヲ常ニ能尋可知、物頭ナドスル人ヨク見知タルガヨキナリ、武者出立テハ常ノ妻ト替モノナリ、他家ノ大將ヲ知コトハ、首捕タル時ノタメナリ、

古事類苑

兵事部六

兵卒

古事類苑

兵事部六

兵卒

兵卒ハ武器ヲ執リテ戰鬪ニ從フ者ノ稱ニテ、ツハモノト云フ、兵、兵士、軍丁、軍兵等ノ字ヲモ用キル、軍士ヲイクサト訓ズルモ亦兵士ヲ云フナリ、凡ソ兵士ヲ取ルノ法ハ、日本書紀持統天皇ノ三年ノ條ニ、一國ヲ四分シテ、其一ヲ點ズトアルヲ以テ、書冊ニ見エシ始トス、大寶ニ至リテハ、一國ノ正丁ニ就キテ、其三分ノ一ヲ取ル制ニシテ、戸内ニ就キテ言フトキハ、多丁ト少丁トヲ通ジテ、其數ニ滿タシムルナリ、而シテ隊正以上ハ此數ノ内ヨリ取リテ、烽子、事力ノ類ハ此外ニアリ、其兵士ヲ簡點スルニハ、計帳ヲ徵スル時ニ於テスルコトニテ、成丁ニシテ役ニ就キ、六十歳ニシテ免ルヽナリ、又五位以上ノ子孫、及ビ內八位ノ嫡子、若シクハ賤民ハ此役ニ預ラズ、當時兵ヲ別チテ騎兵步兵ノ二種トス、天武天皇ノ十三年、始テ此制ヲ設ケテ各、試練スル所アリシガ、是ニ至リテ弓馬ニ便ナル者ヲ騎兵隊ト爲シ、其餘ヲ步兵隊ト爲ス、足利幕府ノ末葉、鐵砲ノ渡來シテヨリハ銃卒、砲兵アリ、

足輕ハモト疾足ノ稱ニシテ、中世ニハ山賊、野伏ノ如キ者ヲモ用キシガ、後ニハ步兵ノ一種トナリ、足輕大將、足輕頭アリテ以テ其一隊ヲ統領セリ、足輕ノ鐵砲ヲ執リテ戰ニ從フヲ鐵砲足輕ト云ヒ、弓ヲ執リテ從フヲ弓足輕ト云フ、雜兵ト云フモ亦步兵ヲ云フナリ、

凡ソ後世兵制ノ亂ルヽニ從ヒ、武人ハ一時市人ヲ以テ兵ト爲シ、以テ軍役ニ從ハシメシコ

トアリ、德川幕府ニ至リテハ、後水尾天皇ノ元和二年始テ五百石ヨリ一萬石ニ至ルマデノ軍役ノ制ヲ定メ、次テ寬永十年ニハ千石ヨリ十萬石ニ至ルマデノ制ヲ定メ、更ニ慶安二年其制ヲ擴張セリ、降リテ文久ヨリ明治維新ニ至ル際ニハ、西洋ノ兵制ヲ參酌シテ大ニ更改スル所アリ、其諸藩ノ制モ亦大同小異ナルベシ、

名稱

〔書言字考節用集 四人倫〕兵士（ヘイシ）出津 兵卒（ヘイソツ）

〔伊呂波字類抄 都人倫〕兵（ツハモノ）横兵、軍兵、歩兵、周禮注云、五人爲レ伍、兩二十五人爲レ卒、百人爲レ旅、五百人爲レ軍、二萬二千五百人爲レ兵、 戎 同レ兵也

〔倭名類聚抄 五官名〕職員令云、〇中略 兵庫寮 豆波毛乃々久良乃官

〔古事記傳 二十〕兵は和名抄に、兵庫寮豆（ツ）波（ハ）毛（モ）乃（ノ）乃（ノ）久（ク）良（ラ）乃（ノ）官（ツカサ）とあれば、都（ツ）波（ハ）毛（モ）能（ノ）と訓べし、刀鉾の屬の總名なり、書紀に鋒刃、兵器、兵仗、兵革など、皆然訓り、漢國にても兵ノ字は、もと械也とも、戎器也とも注して、其義なるを轉して、其兵を執人を多く兵と云る、其を誤て都波毛能と訓るから、後世には唯勇士の稱の如くなりて、剛者の意と心得て、刃鉾の屬の名なることを知ずなりぬ、皇國にては、古へ其ノ人を指て都波毛能と云ることは無りき、書紀などに人を云る兵ノ字、又卒などを然訓るは誤なり、又其をイクサビトなどと訓る、これぞ宜しき、〇下略

〔書言字考節用集 四人倫〕兵（ツハモノ）七書直解、兵者戎器也、以二人執一レ兵亦曰レ兵、 戎 上義同 戲 同上 甲士、兵士、甲兵、並同、

〔倭訓栞 前編十五都〕つはもの　和名抄に兵をよめり、強者の義也、よて兵器をもしかいへり、戎も同じ、

〔令義解 五軍防〕軍防令第十七 謂、軍者軍士也、防者防人也、

〔古事記 上神代〕爾伊邪那岐命取二黑御鬘一投棄、乃生二蒲子一、〇中略 且後者、於二其八雷神一副二千五百之黃泉軍一令レ追、

〔古事記傳 六〕黃泉軍は豫（ヨ）母（モ）都（ツ）伊（イ）久（ク）佐（サ）と訓べし、伊（イ）久（ク）佐（サ）とは軍士（イクサビト）を云稱なり、書紀神武卷に女軍（メイクサ）男軍（ヲイクサ）、萬葉二 三十四丁 に御軍士（ミイクサ）乎安（ヲア）騰（ト）毛（モ）比（ヒ）賜（タマヒ）、六 二十五丁 に千萬乃軍（チヨロヅノイクサ）、廿 二十七丁 に須（ス）米（メ）良（ラ）美（ミ）久（ク）佐（サ）皇御軍（スメラミイクサ）なり などある、皆然り、凡て戰を伊（イ）久（ク）佐（サ）と云ることは、古書には見えず、いと後のことなり、軍ノ字師ノ字など書も、其

人衆を云故なり、然るに伊久佐は射合箭と云ことなりと、師のいはれつるはいかゞ、戦字などを伊久佐と訓る例もなきにや、

〔倭訓栞前編三伊〕いくさ　軍をよめり、伍々相屬するの制によりて訓ず、五くさるの義なりといへり、○中略萬葉集に軍士をよめり、抄に戦ふ時をいくさと心得たれど、戦ふ時はいふに及ばず、戦はぬ時も、つはものをいくさといふなりと見えたり、されば神代紀に兵をよめり、

〔日本書紀神武三〕戊午九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巓、瞻望城中、時國見岳上則有八十梟帥、梟帥此云多稽屢、又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置焃炭、

〔古事記中垂仁〕選聚軍士之中、力士輕捷、

〔日本書紀雄略十四〕二十三年四月、百濟文斤王薨、天皇以昆支王五子中、第二末多王、幼年聰明、勅喚內裏、親撫頭面、誡勅慇懃、使王其國、仍賜兵器、幷遣筑紫國軍士五百人、衞送於國、是爲東城王、

〔萬葉集二挽歌〕高市皇子尊城上殯宮之時、柿本朝臣人麿作歌一首幷短歌、挂文、忌之伎鳴、○中略鳥之鳴、吾妻乃國之、御軍士乎、喚賜而、千磐破、人乎和爲跡、不奉仕、國乎治跡、皇子、隨任賜者、大御身爾、大刀取帶之、大御手爾、弓取持之、御軍士乎、安騰毛比賜、○下略

〔萬葉集六雜歌〕四年○天平壬申　藤原宇合卿遣西海道節度使之時、高橋連蟲麿作歌一首幷短歌、○中略千萬乃、軍奈利友、言擧不爲、取而可來、男常曾念、

右檢補任文、八月十七日任東山山陰西海節度使、

〔萬葉集二十〕阿良例布理、可志麻能可美乎、伊能利都々、須米良美久佐爾、和例波伎爾之乎、

右二首○一首略　那賀郡上丁大舍人部千文

〔續日本紀二十淳仁五〕天平寶字八年九月壬子、軍士石村村主石楯、斬押勝○藤原惠美傳首京師、

〔續日本紀三十光仁四〕寶龜七年二月甲子、陸奧國言、取來四月上旬、發軍士二萬人、當伐山海二道賊、於是勅出羽國、發軍士四千人、道自雄勝而伐其西邊、

〔類聚國史 百九十 風俗〕延暦十一年七月戊寅、勅、今聞夷爾散南公阿破蘇、遠慕王化、情望入朝、言其忠款、深有可嘉、宜路次之國、擇壯健軍士三百騎、迎接國堺、專示威勢、

〔三代實錄 三十七 陽成〕元慶四年三月十一日甲子、勅、出羽國軍士白丁神服連貞氏等十一人特預出身、先是去年十月六日、彼國司言、貞氏等便習弓馬、堪爲軍士、勤從警戒、不顧私產、請不經勘籍預於出身、從之、

〔本朝文粹 二 意見封事〕意見十二箇條　善相公 〇三善清行

臣去寛平五年 〇字多 任備中介、彼國下道郡有邇磨鄕、爰見彼國風土記、皇極天皇六年大唐將軍蘇定方率新羅軍伐百濟、百濟遣使乞救、天皇行幸筑紫、將出救兵、時天智天皇爲皇太子攝政、從行路宿下道郡、見一鄕戶邑甚盛、天皇下詔試徵此鄕軍士、卽得勝兵二萬人、天皇大悅、名此邑曰二萬鄕、後改曰邇磨、其後天皇崩於筑紫行宮、終不遣此軍、然則二萬兵士彌可蕃息、〇中略 清行問邇磨鄕戶口、當今幾行、公利答曰、無有一人、

〔扶桑略記 二十五 朱雀〕天慶三年十一月廿一日、純友追討記云、〇中略 十二月 〇天慶二年 二十六日壬戌、〇中略 賊徒到大宰府、更所儲軍士出壁防戰、爲賊被敗、

〔陸奧話記〕先是官軍所射之矢、立柵面樓頭、猶如蓑毛、飛焰隨風着矢羽、樓櫓屋舍一時火起、城中男女數千人、同音悲泣、賊徒潰亂、或投身於碧潭、或刎首於白刃、官軍渡水攻戰、是時賊中敢死者數百人、被甲振刃突圍而出、必死莫生心、官軍多傷死者、武則告軍士曰、開圍可出賊衆、軍士開圍、賊徒忽有赴外心、不戰而走、官軍橫擊悉殺之、

〔吾妻鏡 二〕養和元年九月三日丙子、越後守資永 號城四郞 任勅命、駈催當國軍士等、擬攻木曾冠者義仲之處、今朝頓滅、是蒙天譴歟、

〔建武以來追加〕一諸國守護人事 建武五後七廿九御沙汰 本行諏方大進房圓忠

右被補守護之本意、爲治國安民也、爲人有德者任之、爲國無益者可改之處、或募勳功之賞、或稱譜第之職、押妨寺社本所領、管領所々地頭職、預置軍士、充行家人之條、甚不可然、固守貞永式目、大犯三箇條之外、不可相綺、〇中略

建武五年後七月廿九日　御判

〔日本書紀 三十持統〕四年九月丁酉、大唐學問僧智宗義德淨願、軍。丁。筑紫國上陽咩郡大伴部博麻、從新羅送使大奈末金高訓等、還至筑紫、

〔日本風土記 四器皆〕軍卒（和多ト　目首）

〔源平盛衰記 二十三〕源氏隅田河原取陣事

兵衞佐賴朝ハ、平家ノ軍。兵。東國ヘ下向ノ由聞給テ、武藏ト下總トノ境ナル、隅田川原ニ陣ヲ取テ、國々ノ兵ヲ被召ケリ、

〔將門記〕以二月〇承平八年二十九日、追著於信濃國少縣郡國分寺之邊、便帶千阿川、彼此合戰間、無有勝負、厥內彼方上。兵。他田眞樹中矢而死、此方上兵文室好立中矢生也、

〔大日本史 兵志一〕初神武既平天下、使來目部居畝傍山西、及垂仁時、興屯倉於其地、是後國縣益設屯倉、置部曲、使其耕屯田、峙糧食、部曲號爲品部、其類最衆、號百八十部、而物部靫負部類、爲朝廷衞兵、若弓削、矢作、鍛冶諸部、掌造兵械、凡其諸部、皆以臣連伴造國造領之、以世其職、而其最貴盛者、曰大臣大連、皆以神明之冑、出將入相、世輔皇室、其所領品部廣大、盈於國中、每有征伐、臣連二造、各帥其部曲、而統屬焉、蓋上世兵制、槪略如此、當時天子英武、將帥皆勇健、習練武略、士卒善戰、輕生忘死、故戰勝攻取、所向有功、自欽明後、世道不能無隆替、而兵勢不衰、海外諸蕃、執琛在庭、猶無異昔日焉、然及崇峻推古間、臣連仗握兵之重、爭權勢構內難、竟至强臣僭亂、時主不能制矣、

〔日本書紀 三十持統〕三年閏八月庚申、詔諸國司曰、〇中略其兵士者、每於一國四分、而點其一、令習武事、

〔續日本紀 十一聖武〕天平四年八月壬辰、勅、○中略四道○東海東山山陰西海兵士者、依令差點、滿四分之一、

〔續日本紀 十六聖武〕天平十八年十二月丁巳、京畿內、及諸國兵士、依舊點差、

〔令義解 五軍防〕凡兵士簡點之次、皆令比近團割、謂、團者聚也、割者分也、假令軍團在海上高市兩郡、者、以葛城人配高市團、以山邊人配海上團之類也、不得隔越、其應點入軍者、謂點爲兵士也、同戶之內、每三丁取一丁、謂此爲多丁之戶立文、若戶內少丁者、亦須通取他戶、卽一國之丁、總爲三分、取其一分之義、其爲分之法、除烽子事力等之類、以所殘丁、總爲三分、但除正以上者、須於二分內取之、

〔白氏長慶集 三〕新豐折臂翁　戒邊功也

新豐老翁八十八、頭鬢眉鬚皆似雪、玄孫扶向店前行、左臂憑肩右臂折、問翁臂折來幾年、兼問致折何因緣、翁云貫屬新豐縣、生逢聖代無征戰、慣聽梨園歌管聲、不識旗槍與弓箭、無何天寶大徵兵、戶有三丁點一丁、點得驅將何處去、五月萬里雲南行、聞道雲南有瀘水、椒花落時瘴煙起、大軍徒涉水如湯、未過十人二三死、村南村北哭聲哀、兒別爺娘夫別妻、皆云前後征蠻者、千萬人行無一迴、是時翁年二十四、兵部牒中有名字、夜深不敢使人知、偸將大石鎚折臂、張弓簸旗俱不堪、從玆始免征雲南、骨碎筋傷非不苦、且圖揀退歸鄉土、此臂折來六十年、一肢雖廢一身全、至今風雨陰寒夜、直到天明痛不眠、痛不眠終不悔、且喜老身今獨在、不然當時瀘水頭、身死魂飛骨不收、應作雲南望鄉鬼、萬人塚上哭呦呦、○注略老人言、君聽取、君不聞開元宰相宋開府、不賞邊功防黷武、○注略又不聞天寶宰相楊國忠、欲求恩幸立邊功、邊功未立生人怨、請問新豐折臂翁、

〔東大寺正倉院文書 二十五〕大寶貳年十一月御野國山方郡戶籍

三井田里戶數伍拾戶○中略

正丁壹佰伍拾參之中　兵士參拾貳　遺壹佰貳拾壹○中略　少丁肆拾壹之中　兵士參　遺參拾捌

〔令義解 五軍防〕凡非因簡點次者、謂、計帳之時也、不得輒取人入軍、及放人出軍、其詐冒入軍、謂、依律、冒人相冒入軍者也、被認

入賤（謂賤詐冒入軍、乃被認同還入本色、其雜戶、陵戶、品部之類、亦同也、）及有蔭、（謂五位以上子孫、及內八位嫡子也、）合出軍者、勘當有實、皆申兵部、聽出軍、（謂不待簡點之次、京國官司錄狀申兵部也、）在軍者、年滿六十免軍役、（謂此因簡點次、乃免其軍役、其校尉以下、年六十以上、及身弱若長病者、亦皆因簡點次、令放出之、）雖未滿六十、身弱長病、不堪軍役者、亦聽簡出、

〔禮記（王制）〕凡養老、〇中略五十不從力政、六十不與服戎、

〔唐六典（五兵部）〕凡兵士隷衞各有其名、〇中略總名爲衞士、皆取六品已下子孫及白丁無職役者點充、凡三年一簡點、成丁而入、六十而免、量其遠邇以定番第、

〔令義解（三賦役）〕凡除名未敍人、免役輸庸、願役身者聽之、其應收庸者、亦不在雜徭及點防之限、（謂除名之人、輸庸之外、不得更亦點兵士及衞士也、）

〔唐律疏議（三名例）〕疏議曰、若犯除名者、謂出身以來、官爵悉除、課役從本色者、無蔭同庶人、有蔭從蔭例、故云各從本色、又依令、除名未敍人免役輸庸、並不在雜徭及點防之限、

〔續日本紀（三十六光仁）〕寶龜十一年三月辛巳、太政官奏偁、〇中略又奏偁、濟世興化、寔佇九功、討罪威邊、亦資七德、文武之道、廢一不可、但今諸國兵士略多羸弱、徒免身庸、不歸天府、國司軍毅自恣駈役、曾未貫習弓馬、唯給採薪草、縱使以此赴戰、謂之棄矣、臣等以爲、除三關邊要之外、隨國大小以爲額、仍點殷富百姓才堪弓馬者、每其當番、專習武藝、爲有徵發、庶幾免稽廢、其羸弱之徒、勸皆令赴農、此設守備省不急之道也、臣等商量所定具狀如左、伏聽天裁者、奏可之、每國減省各有差、

〔續日本紀（三十七桓武）〕延暦二年六月辛亥、勅曰、夷虜亂常、爲梗未已、追則鳥散、捨則蟻結、事須練兵敎卒備其寇掠、今聞坂東諸國、屬有軍役、每多尩弱、全不堪戰、卽有雜色之輩、浮宕之類、或便弓馬、或堪戰陣、每有徵發、未嘗差點、同曰皇民、豈合如此、宜仰坂東八國、簡取所有散位子、郡子弟、及浮宕等類、身堪軍士者、隨國大小、一千已下、五百已上、專習用兵之道、並備身裝、卽入色之人、便考當國白丁、免徭、仍勅堪事國司一人專知勾當、如有非常、便卽押領奔赴、不失事機、

〔經濟錄七〕武備　日本ハ昔ヨリ唐ノ風ニ傚テ農兵ヲ分ル法ナレドモ、古ノ武士ト云ハ當代ノ武士ノ如クニハ非ズ、常ニ田舍ニ住テ農業ヲ務メ、今ノ世ノ有得ナル百姓ノ如クナリ、鎌。倉。ノ時。ノ三浦、千葉等ノ輩ヲ今ノ世ノ諸侯ノ如クナラント思フハ非也、其世ニ是ヲ大名ト稱セシハ、在所ニ名田ト云コト有テ、名田ヲ持タル者ノ中ニテ、家富ミ僮僕ヲ多ク蓄フ者ヲ大名ト稱セリ、今ノ世ニ國郡ヲ領スル諸侯ヲ大名ト云ハ俗ノ誤也、鎌倉ノ末ニ及ビ、元。亨。建。武。ノ。間。ニ武家ト稱シ、新田足利ナドノ一族モ皆彼大名ノ類也、サレバ其世ニハ百姓ナド云者皆武ヲ務トス、故ニ軍ノ出ルニ及ンデ、兵數甚多カリキ、近世戰。國。トナリショリ當。代。ニ至テ、武家ハ武家、農人ハ農人ト分レテ、農兵ハ一向ニ軍賦ニ入ラズ、僅ニ唯人夫ヲ出スノミナル故ニ、今ノ世ニハ兵ノ出ル數甚少シ、其子細ハ今ノ武士百石ヨリ五百石迄ノ祿ヲ受ル者ハ甲乙ナク、其身一人一匹ノ馬ニ乘リ、鎗一枝ヲ持出ルノミナリ、縱ヒ一二人ノ若黨ト云者ヲ具ス迚モ、是ヲ什伍ニ入レザレバ、唯雜兵ニ列スルノミナリ、千石餘ノ祿ヲ賜ル者モ、漸ニ騎馬ノ士一人ヲモ具セバ善キ士ナルベシ、此數ヲ以テ算フレバ、當時ノ武家ノ祿ニテ、出ス處ノ人數ノ多少悉知ラルヽナリ、今ノ風ニテハ、昔ノ如クノ人數ハ決シテ出ザルコト知ルベシ、若シ昔ノ如ク人數ヲ出サントナラバ、百姓ヨリ取ベシ、試ミニ今世ノ田祿ノ制ヲ以テ、兵賦ヲ出スベキ數ヲ計ルニ、東國西國田地ノ肥瘠ニ因テ、農夫ノ人馬ヲ蓄フ處、其多少不同ナレドモ、大抵薄田ノ處ニテ云ヘバ、田一町ヨリ米十石ヲ收ム、此四石ヲ十苞トナシ年貢ニ納ム、餘六石ハ農夫ノ所得ナリ、是ヲ高十石ノ百姓ト云、十石ノ百姓ハ牛一頭カ馬一匹ヲ蓄フ、東國ニテハ馬ヲ蓄ヒ、西國ハ牛ヲカフ、三四十石ノ百姓ハ家僕三四人ヲ蓄フ、五十石程ノ百姓ハ甲冑ヲ著、馬ニ乘、槍ヲ持テ出ルコト難カラズ、百石以上ニ至テハ家僕ノ內ニ又甲冑ヲ著テ行列ニ入、軍事ニ從フベキ程ノ者一二人モアリ、然レバ地方百石ノ祿ヲ受ル士ハ、己ガ下ニ二騎ノ兵ヲ具スベシ、其身ヲ加テ三騎ナリ、如此ナレバ百石　祿ニテ騎兵三人出スベシ、

五百石ニテ十五人、千石ニテ三十人、萬石ニテ三百人也、薄田ノ處ヨリ出ス處如此、若シ沃土ナレバ此數ニ止マラズ、二十石三十石ノ百姓モ一騎ノ役ヲ受ベシ、又豪富ノ民ハ、一家ヨリ十騎二十騎ヲモ出スベキ者アランサレバ古法ノ如ク、兵ヲ農ヨリ出ザレバ、今世ニモ兵ノ出ルコト、國家ノ定ノ軍役ニ幾十倍ト云コトヲ知ラズ、今此法ヲ制セズシテ、農ヨリ兵ヲ出サシメズ、兵ト云ハ常ノ武士ナル故ニ、百石ニテモ騎士一人、三百石、五百石ニテモ騎士一人也、如此ナレバ厚祿ノ士迚モ軍役ニハ何ノ益モナシ、タヾ若黨仲間抔ヲ多ク召連ル迄也、殊ニ當代ノ軍法ニ、若黨仲間ノ輩ヲバ行伍ニ入レズ、雜兵ト號シテ、後ニ立ルノミナレバ、畢竟用ニ立タズ、是ヲ多クスルコト無益也、凡兵賦ハ異國ノ、法ハ姑ク措キ、日本ノ古風ヲ尋ルニ、今ノ世ノ如クニハ非ズ、天地生々ノ理ニテ、人馬トモ昔ヨリ多クナルベキニ、兵ノ數ハ古ヨリ減ズルニト怪ムベキニテ、實ハ謂レアルコトナリ、武備ヲ修ンニハ是ヲ考ヘズバ有ベカラズ、

〔東武實錄〕軍役之定

一五百石　鐵炮一挺　鎗三本但持鎗とも

一千　石　鐵炮二挺　弓一張　鎗五本但持鎗とも

一二千石　鐵炮三挺　弓二張　鎗五本但持鎗とも

一三千石　鐵炮五挺　弓三張　旗一本　鎗拾五本但持鎗共ニ騎馬四騎

一四千石　鐵炮六挺　弓四張　旗一本　鎗廿五本但持鎗共ニ騎馬五騎

一五千石　鐵炮十挺　弓五張　旗二本　鎗廿五本但持鎗共ニ騎馬七騎

一壹萬石　鐵炮廿挺　弓十張　旗三本　鎗五十本但持鎗共ニ騎馬十四騎

元和二年辰六月

〔御軍役人數積〕一貳百石　五人侍一人　小荷駄一人　甲冑持一人　鎗持一人　馬口一人

一貳百五十石　六人　侍一人　甲冑持一人　馬口一人　草履取一人　鎗持一人　小荷駄一人

一三百石　七人　侍一人　甲冑持一人　馬口一人　草履取一人　鎗持一人　挾箱持一人　小荷駄一人

一四百石　九人　侍二人　甲冑持一人　馬口一人　草履取一人　鎗持一人　挾箱持一人　小荷駄一人

千石ゟ久數計出候時ハ、弓一張、鐵炮一挺、鑓一本充差出候、出馬之節ハ、五百石以上、自分之弓も為持可申事、

一五百石　拾一人　侍二人　甲冑持一人　鐵炮一人　草履取一人　挾箱持一人　馬口一人　鎗持一人　小荷駄二人

一六百石　拾三人　侍三人　甲冑持一人　鐵炮一人　鑓持一人　馬口二人　挾箱持一人　建弓一人　草履取一人　小荷駄二人

一七百石　拾五人　侍四人　甲冑持一人　鐵炮一人　鎗持二人　馬口二人　挾箱持一人　建弓一人　草履取一人　小荷駄二人

一八百石　拾七人　侍四人　甲冑持一人　鐵炮一人　鎗持二人　馬口二人　挾箱持一人　建弓一人　草履取一人　小荷駄二人

一九百石　拾九人　侍五人　甲冑持二人　鐵炮一人　鑓持二人　馬口二人　建弓一人　草履取一人　香箱一人　小荷駄二人　挾箱持一人

一千石　貳拾一人　弓一張　鐵炮一挺　下同　鑓二本　〇内譯略

一千百石　貳拾三人　弓一張　鐵炮一挺　鎗三本

一千貳百石　貳拾五人　右同斷

一千三百石　貳拾七人　右同斷　右同斷之外、鎗一人、挾箱一人增、

一千四百石　二拾八人　右同斷　右同斷之外、侍一人、鎗一人、挾箱一人增、

一千五百石　三拾人　弓一張　鐵炮一挺　鎗三本

一千六百石　三拾一人　右同斷　右同斷之外、侍一人增、

一千七百石　三拾三人　弓一張　鐵炮二挺　鎗四本　右同斷之外、鎗一人、小荷駄二人增、

一千八百石　三拾五人　右同斷　右同斷之外、乘替馬口付二人增、

一千九百石　三拾六人　右同斷　右同斷之外、香箱一人增、

一貳千石　三拾八人　弓一張　鑓五本　鐵炮二挺
一三千石　五拾六人　馬上二騎　鐵炮三挺　弓二張　鑓五本
一四千石　七拾九人　馬上三騎　鐵炮三挺　弓二張　鑓五本
一五千石　百貳人　馬上五騎　鑓十本、旗二本　弓三張　鐵炮五挺
一六千石　百貳拾七人　馬上五騎　鑓十本　旗二本　弓五張　鐵炮十挺
一七千石　百五拾貳人　馬上六騎　鑓十本　旗二本　弓十張　鐵炮十五挺
一八千石　百七拾一人　馬上七騎　鑓二十本　弓十張　旗二本　鐵炮十五挺
一九千石　百九拾三人　馬上八騎　鑓二十本　弓十張　旗二本　鐵炮十五挺
一一萬石　貳百三拾五人　馬上十騎　旗三本　弓十張　具柄持鑓とし〇中略　鐵炮廿挺　鑓三十本
一二萬石　四百十五人　馬上十二騎　鑓五十本　旗五本　弓廿張　鐵炮五十挺
一三萬石　六百十人　馬上三十五騎　鑓七十本　旗五本　弓廿張　鐵炮八十挺
一四萬石　七百七十人　馬上四十五騎　鑓七十本　旗八本　弓三十張　鐵炮百廿挺
一五萬石　千五人　馬上七十騎　鑓八十本　旗十本　弓三十張　鐵炮百五十挺
一六萬石　千貳百拾人　馬上九十騎　鑓九十本　旗十本　弓三十張　鐵炮百七十挺
一七萬石　千四百六十三人　馬上百十騎　鑓百本　旗十五本　弓五十張　鐵炮貳百挺
一八萬石　千六百七十人　馬上百三十騎　鑓百十本　旗十五本　弓五十張　鐵炮貳百五十挺
一九萬石　千九百二十五人　馬上百五十騎　鑓百三十本　旗貳十本　弓六十張　鐵炮三百挺
一拾萬石　二千百五十五人　馬上百七十騎　鑓百五十本　旗貳十本　弓六十張　鐵炮三百五十挺

右軍役如定、旗弓鐵炮甲冑馬具、諸色人數積相嗜、若軍役於不足之族有之者、急度可爲曲事、軍役之外者、嗜次第召連可爲忠節もの也、

慶安二己丑年十月

○按ズルニ、是ヨリ先寛永十年二月、千石ヨリ十萬石マデノ制ヲ定メシコトアレドモ、今之ヲ略ス、蓋シ後世軍役ノ増減ハ、此慶安ノ制ヲ準的トスルモノナリ、

〔御書付留 十二〕十二月〇文久二年四日和泉守殿〇老中水野忠精御直之、格片山與八郎を以四通御勘定奉行江御渡

一高萬石以下百俵迄、兵賦可差出候事、　但知行取之分は、五百石一人、千石三人、三千石十人之割合を以、兵賦可差出候、御藏米取、幷御足高之分、兵賦は差出に不及、金納に可致候、知行取之分も五百石以下幷端高は、金納之積、右割合、高百俵より五百俵以下迄、百俵に付、金二兩之積り、高五百俵より千俵以下迄、百俵に付、金二兩二分之積、　高千俵ゟ以上は、金三兩之積り、　但石取も、俵取之ものと同樣に相心得、現米取之向は俵に直し、金納之積り、尤知行取端高金納之分は、本文割合同斷に可差出候、

一兵賦は銃隊に組立、陣營に被差置候事、〇中略

一銘々可成丈知行所之内に而、丈高之強壯之者相ゑらみ、主人々々に於て、兵賦被撰候儀は、年來之御恩澤を報ひ候ためと相心得、正實に相勤可申旨篤と申諭、浮薄之弊無之樣爲心得候上、可差出候事、　但正實に相勤、格別に御用立候ものに有之候はゞ、品に寄御取立に可相成候間、右之心得を以、差はまり相勤候樣可致候事、

一名目之儀は歩兵組と可相唱候、身分之儀は、勤中小揚之者之次たるべく候、尤銃隊江一同に御用相成候もの共に付、平生共脇差のみ相帶候樣可申付置候事、　但勤に付、諸道具衣服等は御貸渡、脇差之儀も同樣相心得、用意爲致候に不及候、

一給料之儀は、主人々々に而程能爲取可遣候、尤壹ヶ年金拾兩を限りといたし、右より多きは不

相成候事、

一勤中食料は被下候事

一金納之分、知行取は頭支配一纒にいたし、毎年三月十一月、両度に御勘定所江可相納候、御藏米取は、三季御米渡之節、其渡高に應じ引落書替、奉行請取印書相添、御切米一同可相渡筈に候、

一來正月中旬迄に、無相違兵賦呼寄置、名前年齢生國等巨細に認、頭支配江差出可申候、引渡等之儀は別段達に而可有之候、

右之通心得たるべく候

十二月

同日　同斷

一此度御軍制御改正被仰出候に付而は、慶安度之御趣意に基き、御軍役人數等用意可致旨、改而可被仰出之處、昇平之流弊に而、平生之冗費も不少、非常之艱難行屆向も有之哉に被思召候に付、以後非常之節は、慶安度之人數割大凡半減之積相心得、右人數之内ゟ別紙之通、御軍役之兵賦可被差出旨被仰出候、委細之儀は、講武所奉行、御軍制掛御目付可被談候、

右之通、萬石以下之面々江可被相觸候、

十二月

同日　同斷

今度兵賦之儀、別紙之通被仰出候得共、上下疲弊之折柄に付、格別之譯を以、三千石以下五百石迄之ものは、當分之内、觸面半減之兵賦可被差出旨被仰出候、尤右高之者、若兵賦差出候儀差支候事は、金納に而も不苦候間、兵賦金納共半減之積、可相心得候、且又五百石以下之ものは、追而御沙汰有之候迄、兵賦金不及差出候事、　但金納割合方は御藏米取同様たるべき事、

十二月

(嘉永明治年間錄十二)文久三年二月廿六日、諸士家祿ニ依テ騎隊歩隊ヲ命ズ、

先達て被仰出候通り、御軍制御改正に付、御番方の向、歩騎兵二隊の御組立、劒槍二術を以て、御馬前御守衛被仰付候に付ては、五百石以上の分騎隊、五百石以下の分は歩隊に御定相成候、尤も五百石以上千石以下の者にても、知行所痩地の者、且御藏米取の者も從來困窮等無據次第にて、事實馬飼置候儀差支候者有之候はゞ、當分の内、歩隊へ御組入可相成候間、得其意、平常藝術調練等修行致し候樣、世話可被致候、委細の儀は、陸軍奉行御軍制掛り御目付へ可被爲談候、

(御書付留十五)同斷○慶應二年八月八日、老中松平周防守康直、　大目付江

今般御軍役人數割等、別紙之通、御改正被仰出候間、其旨可相心得候、尤兵賦之儀は、右之外たるべき事、　但割合之儀は、追而達に而可有之候、

右之趣、萬石以下之面々江可被相觸候、

別紙 御軍役人數割

六百石、銃手三人、　七百石、同四人、　八百石ゟ九百石迄、同五人、　千石、同六人、　千百五拾石ゟ千九百石餘迄、百五拾石に付、銃手壹人增之積り、

二千石、同十四人、　貳千百四拾石ゟ貳千九百石餘迄、百四拾石に付、銃手壹人增之積り、

三千石、同二十四人、　貳千石以上は、百貳十五石に付、銃手壹人增之積り、尤指令役等之役々は、右之内に而可差出事、

一五千石以上は、指令役其他之役々、右人數之外に而可差出事、

一六百石以下三百石迄、大砲隊に組立、尤人數差出に不及、爲御軍役金、六百石以下五百石迄、百石に付金五兩、五百石以下四百石迄、同斷金四兩、四百石以下三百石迄、同斷金三兩之割合を以、年

在役年勤

年可相納候、

一三百石以下百石迄、百石に付金三兩之割合を以、御軍役金可差出、尤年々に不及、二大隊以上之兵出張之年而巳可差出候、

一百石以下之ものは、御軍役被成御免候、

一右御軍役之儀は、都而本高に而可相勤、尤御藏米取も同斷、現米取之ものは俵に直し同斷たるべく候、

一御足高有之面々之御足高本高合三百俵以上之者は、御足高之分百俵に付、金五兩之割合を以、年々相納、同斷三百俵以下之ものは、前書本高同樣に可相心得事

一御軍役金納方之儀は、兵賦金納方之振合に可相心得候事、

〔東大寺正倉院文書二十四〕御野國加毛郡半布里大寶貳年戸籍

五保上政戸秦人石寸戸口十八(略○中)　嫡子久々志(年廿兵士)

五保中政戸縣主族身津戸口廿六(略○中)　嫡子身麻呂(年十九兵士)

〔續修東大寺正倉院文書四〕御野國味蜂間郡春部里大寶二年戸籍

佐保上政戸春部小鳥戸口卅五(略○中)　戸主弟余(年卅七兵士)

〔東大寺正倉院文書二十九〕因幡國戸籍

戸主海部牛麻呂戸(略○中)　弟海部得安年廿七　正丁兵士(略○中)

戸主伊福部古麻呂戸(略○中)

男伊福部有床年卅二　正丁新兵士(略○中)

男神部赤麻呂年廿七　正丁兵士解

男神部黑麻呂年廿三　正丁新兵士

発兵士

〔東大寺正倉院文書四十三〕豐後國戸籍斷簡
戸主山部牛年伍拾參歳〇中略　川內漢部佐美年肆拾參歲　兵士　寄口

〔源平盛衰記三十七〕平家開城戸口幷源平侍合戰事
平家追討ノ軍兵、今度上洛ノ時、鎌倉殿ノ侍所ニテ評定アリ、十五六ハ少シ、十七以上ハ可上洛ト被定タリケルニ、小次郎直家〇熊谷直實子ハ十六也、有ノ儘ニ申テハ御免アラジ、十七ト名乘テ、父ガ伴セント思ケレバ、鎌倉ニテ其定ニ申、〇中略一谷ニテハ實正ニ任セテ、十六歲トゾ名乘ケル、〇中略

〔御書付留十二〕十二月二〇文久二年四日　和泉守殿御直之格片山與八郎を以四通御勘定奉行江御渡
一兵賦は銃隊に組立、陣營に被差置候事、
一兵賦之年齡は、十七歲ゟ四十五歲迄、御用可相成候間、壯健之者相撰可差出候、尤壹人五ヶ年季と相定、右年限相立候はゞ交代之者差出可申候、併人々之見込、又は當人共存寄に而、繼年季申立候儀は不苦候事、

〔令義解一職員〕兵部省
卿一人掌、〇中略差發兵士、謂差遣衞士防人、及征討也、依軍防令、差兵廿人以上、皆須契勅、卽此書勅、總發之國、幷人數、申官、官卽奏聞、下契勅、但差衞士防人者、皆直下符於國、更不申官也、〇中略事、

〔令義解五軍防〕凡差兵廿人以上者、須契勅、謂有關國須契、餘國皆待勅符、始合差發、

〔令集解三十一公式〕勅旨云云〇中略軍防令、須契勅、勅同、始合差發者、飛驛式勅是也、

〔令集解三十四公式〕其三關國各給關契、〇中略新令同答、軍防令云、諸國國別有契者、不依令條、別生文也、

〔唐律疏議十六擅興〕疏議曰、依令、差兵十人以上、並須銅魚勅書勘同、始合差發、若急須兵處、準程不得奏聞者、聽便差發、卽須言上、若無警急、又不先言上、輒擅發、十人以上、九十九人以下、徒一年、滿百人、徒

一年半、百人加一等、七百人以上、流三千里、千人絞、

〔羽倉考 一〕兵士ヲ差ニ輕重アリ、衛士防人等ヲ差スコトハ、恒例ノ事ニテ輕キ故ニ、大勢ヲ差ス事ナレドモ、兵部省ヨリ其差トコロノ國司ヘ符ヲ下スナリ、征討スル所アリテ差コトハ、臨時ノ事ニテ重キ故ニ、二十人以上ニ及ベバ、勅符關契等ヲ、其差ストコロノ國司ヘ下スナリ、十九人以下ヲ差スハ、苟且ノ追捕ノ爲ナルベシ、是ハ事小ナルガ故ニ、衛士防人ヲ差ニ准ジテ、兵部省ヨリ符ヲ下スベシ、

〔朝野群載 二十 內記〕勅符　出羽國

應早速討賊夷事

重得奏狀、具知凶類滋蔓、殺略良民、發兵以來、望有成効、而今官軍致敗、賊徒作氣、用兵之道、豈若此乎、今勅上野下野等國、各發兵二千、亦重勅陸奧、責以後救、宜合三國兵、一時禽滅、○中略

元慶二年四月廿八日　都良香作

〔扶桑略記 二十九 後冷泉〕天喜五年九月二日、鎭守府將軍源賴義與俘囚阿倍賴時合戰之間、賴時流矢所中還鳥海柵死了、但餘黨未服、仍重進國解、請賜官符、徵發諸國兵士、兼納兵粮、悉誅餘黨、　十二月、鎭守府將軍賴義言上、諸國兵粮兵士雖有徵發之名、无到來之實、當國人民悉赴他國、不從兵役、先移送出羽國之處、守源兼長敢无糺越之心、非蒙裁許、者何遂討擊、　同月廿五日、陸奧守藤原良經遷任兵部大輔、源賴義更補陸奧守、有重任宣旨、又止源兼長任、以源政賴爲出羽守、相共令擊貞任等、其後諸國軍兵兵粮、頻雖賜官符、不到彼國、政賴亦乍蒙不次恩賞、全無征伐之心、然間貞任等恣劫略人民、

〔山槐記〕治承四年十二月十日戊子、未剋參新院、○中略右中辨兼光朝臣奉新院仰、召兵亂米於諸國、返事且至來之由申、大理能登 平宰相朝盛知行國 但馬 修理大夫經盛 領狀、紀伊佐渡 已上兩國、平中納言賴盛知行國、 力不及之由申、又藏人左衛門權佐光長同奉院宣、上達部受領皆悉可獻兵士於內裏之由被催之、來十三日可合見參

騎兵

云々、

〔日本書紀 二十九天武〕十三年閏四月丙戌、詔曰、○中略凡政要者軍事也、是以文武官諸人、務習用兵及乘馬、則馬兵、幷當身裝束之物、務具儲足、其有馬者爲騎士、無馬者爲歩卒、並當試練、以勿障於聚會、若忤詔旨有不便馬兵、亦裝束有闕者、親王以下逮于諸臣、並罰之、大山位以下者、可罰罰之、可杖杖之、其務習以能得業者、若雖死罪則減二等、唯恃己才以故犯者、不在赦例、

〔令義解 五軍防〕凡兵士各爲隊伍、○中略便弓馬者、註謂弓者歩射也、馬者騎射也、爲騎兵隊、餘爲歩兵隊、主帥以上當色統領不得參雜、謂主帥者、隊正以上、校尉以下也、當色者、歩騎各有二色別也、不得參雜者、一隊之內、不得歩騎混雜也、

〔唐六典 五兵部〕凡差衞士征戍鎭防亦有團伍、其善弓馬者爲越騎團、餘爲歩兵團、

〔儀式 一賀茂祭儀〕○中略時刻齋王駕輿而出、其前駈次第也、山城國歩兵左右各十人、著皂緌黃衣白布帶、滿屐巾、執杖、騎兵左右各十人、著皂緌退紅染衣白布帶、横刀弓箭、熊皮行縢、

〔江家次第 六四月〕路頭次第○賀茂祭還立儀　歩兵左右各卅人　騎兵左右各六十人、○下略

〔儀式 二春日祭儀〕○中略齋女駕輿參社、其行列也、○中略歩兵左右各十人在道兩邊、○註略騎兵左右各廿人次之、

〔三代實錄 十五清和〕貞觀十年閏十二月廿五日甲寅、勅令大和國差充騎兵四十人、執杖士二十人、備春日齋女社參之威儀、每至春祭、在前差課國郡司各二人、相共祗承、立爲恒例、

〔台記〕保延二年十一月八日壬申、卯初出佐保田、依夜前大殿○藤原忠實御消息、自歸路道間、令使者告大將殿還御之由、是卽春日祭、所々使參過路頭、爲不穩便、大衆少々路頭見物、歸路之儀如昨、寺主信實子所勤前驅也、相具騎兵七八輩也、皆在御後、敢不見近邊也、

〔日本書紀 三十持統〕六年三月辛未、天皇不從諫、遂幸伊勢、壬午、賜所過神郡、及伊賀、伊勢、志摩國造等冠位、幷免今年調役、復免供奉騎士、諸司荷丁、造行宮丁今年調役、　甲午、詔免近江、美濃、尾張、參河、遠江等

國、供奉騎士戶、及諸國荷丁、造行宮丁今年調役、

〔續日本紀 一 文武〕三年正月癸未、幸難波宮、　二月戊申、詔免從駕諸國騎兵等今年調役、

〔續日本紀 二 文武〕大寶元年九月丁亥、天皇〈○持統〉幸紀伊國、　十月己未、免從駕諸國騎士當年調庸、及擔夫田租、　二年十月甲辰、太上天皇〈○持統〉幸參河國、　十一月戊子、車駕至自參河、免從駕騎士調、

〔續日本紀 十三 聖武〕天平十二年十月壬午、行幸伊勢國、　十一月甲辰、詔陪從文武官、幷騎兵及子弟等、賜爵人一級、但騎兵父者、雖不在陪從、賜爵二級、　十二月丙辰、解騎兵司、令還入京、

〔續日本紀 二十六 稱德〕天平神護元年十月辛未、行幸紀伊國、　庚辰、詔曰、〈○中略〉國司、國造、郡領、及供奉人等、賜爵幷物有差、〈○中略〉騎兵出雲大目正六位上坂上忌寸子老、外從五位下、名草郡大領正七位上紀直國栖等五人、賜爵人四級、自餘五十三人各有差、

〔續日本紀 三十 稱德〕寶龜元年八月癸巳、天皇崩于西宮寢殿、　乙未、差近江國兵二百騎、守衞朝庭、以從三位藤原朝臣宿奈麻呂、爲騎兵司、從五位上阿倍朝臣淨成爲次官、判官主典各二人、

〔續日本紀 四 元明〕和銅二年十月戊申、薩摩隼人、郡司已下一百八十八人入朝、徵諸國騎兵五百人、以備威儀也、

〔續日本紀 六 元明〕和銅七年十一月乙未、新羅國遣重阿飡金元静等二十餘人朝貢、差發畿內七道騎兵合九百九十人、爲擬入朝儀衞也、　十二月己卯、新羅使入京、遣從六位下布勢朝臣人〈○日本紀略、人上有臣字〉正七位上大野朝臣東人、率騎兵一百七十迎於三橋、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜十年四月庚子、唐客入京、將軍等率騎兵二百、蝦夷二十人、迎接於京城門外三橋、

〔續日本紀 三十五 光仁〕寶龜九年十二月丁亥、仰左右京、差發六位已下子孫、堪騎兵者八百人、爲唐客入朝也、

〔小右記〕寬仁三年六月廿日乙巳、頭辨經通示送云、〇中略丹波國百姓立公門訴訟、而國司以騎馬兵追捕百姓、來左衞門陣放呼言云々、

〔陸奧話記〕武則曰、官軍之怒猶如水火、其鋒不可當、用兵之機不過此時、則以騎兵圍要害、

〔常山紀談十〕朝鮮を伐るゝ時、關東の諸將も兵を出さる、伊達政宗は遠國たる故に、騎兵三十騎、鐵砲百挺、鎗百本と軍配を定められけるに、千計の士卒を引具し、天正十九年正月九日岩出山を打立、二月十三日京に著、

〔太閤記七〕根來寺兵火幷千石堀之事

秀吉仰けるは、千石堀にて勞せし勢は休息せよとて、新手六萬騎をさしつかはし、此きほひを以て根來寺を攻破候へ、明日にも成ならば、支度を期すべきぞと、貴玄なひの騎兵あまた相添られし也、

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保二年より三年にいたり、長崎ちかき海上にあやしき舟見えしことありしが、〇中略小倉福岡萩の口々に、悉く目付騎馬の士卒を出して守らせ置、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年十二月九日、將軍馬前警衞ノタメ歩騎刀槍ノ隊伍ヲ編成ス、

兵部少輔殿〇若年寄稻葉正巳御渡　奧向寄合諸御番衆等、總て御旗本の面々は、分限に應じ、歩騎二隊に相立て、御馬前守衞に相成り、銘々所長に寄り、刀槍二兵に相分り、右兩兵を以て隊伍編立致し、亂雜不相成樣、御陣制相立候御趣意に付、銘々所長の術彌無懈怠可致修行候、尤歩騎共刀隊は馬銃相携へ、槍隊は拳銃相用可申積りに付、此又可被心得候、

〔嘉永明治年間錄十三下〕官軍徐ニ賊徒ヲ追フ

先達て賊徒共、水戶館山を立拂の跡より、追討の諸侯總督田沼玄蕃頭〇意尊竝新發田勢、忍勢、館林勢、川越勢、安中勢、岡部勢、其外御旗下騎兵步兵隊共數を知らずと云、

〔嘉永明治年間錄十六〕是月、○慶應三年四月某氏京地ノ景況ヲ報ズルノ書、

前文略、御當地新說申上候、○中略去る十五日牧方關門より注進到來、異人共京地へ今日罷越候趣、大坂より風聞申唱候間、御取計方伺に出申候處、直樣一同呼出にて、騎兵撒兵大砲步兵隊、淀伏見兩所へ相固め、差止めに相成、二條御城外廻り御警固の步兵不ㇾ殘出張に付、地役人一兩人づゝ、勤番仕罷在候、翌十六日越前家へ早注進到來、敦賀湊へ異人共上陸仕候趣に付、早速夕方より騎兵ども五騎步兵一大隊出立罷越申候、○中略

四月廿九日　　宮崎鑄藏

〔運步色葉集婦〕步兵

〔書言字考節用集四人倫〕步卒楚辭註、徒行爲ㇾ步、　步兵ホヘイ

〔今昔物語二十五〕平維茂罸藤原諸任語第五

我○維茂ハ紺ノ襖ニ欵冬ノ衣ヲ着テ、夏毛ノ行縢ヲ履、綾藺笠ヲ着テ、征箭卅許、上指雁胯二亦指タル胡籙ヲ負テ、手太キ弓ノ革所々卷タルヲ持テ、打出ノ太刀帶テ、腹葦毛ナル馬ノ長七寸許ニテ、打ハヘ長キガ極タル一物ノ進退ナルニ乘テ、軍ノ員ヲ計フレバ、馬ノ兵七十餘人、步兵卅餘人、合テ百餘人ゾ集レル、

〔水左記〕康平六年二月十六日戊子、早朝參ㇾ殿下、○藤原賴通前鎭守府將軍源賴義朝臣所ㇾ進、俘囚貞任重任經淸等首幷降人交名解文、右大辨令ㇾ進ㇾ覽之、○中略抑件俘囚首、本所隨ㇾ騎兵二人一人傔仗季俊、一人軍曹、步兵二十餘人許也、各被ㇾ介ㇾ冑殊耀ㇾ武威、

〔中右記〕寬治八年○嘉保元年三月八日己卯、今日陸奧守源義綱朝臣隨身降人幷以入洛、必可ㇾ見物者、○中略中時許入洛、先頭二散位平師妙、同男師季、高剌ㇾ長戟末ㇾ付ㇾ赤小幡ㇾ注ㇾ其姓名、左右捧ㇾ長劍、步兵卅人許相挾、

〔太平記十六〕備中福山合戰事

大江田式部大輔〇氏經是ヲ見給テ、サノミ精力ノ盡ヌサキニ、イザヤ打出テ左馬頭〇足利直義ガ陣一散シ懸散サントテ、城中〇山名ニハ徒立ナル兵五百餘人ヲ留テ、馬強ナル兵千餘騎引卒シ、木戸ヲ開カセ、逆木ヲ引ノケテ、北ノ尾ノ殊ニ嶮キ方ヨリ、喚テゾ懸出ラレケル、

〔甲陽軍鑑九下品第二十八〕村上義清越後長尾景虎被頼事并上田原同年信州海野だいら合戰等之事

一村上義清申さるゝ、〇中略武篇の者共を二百騎すぐり、能馬をえらびてのせ、かち者のいかにも事にあひつけたる、年ざかりの男をえり出し、二百人、手ごろの鑓をもたせ、我等下知の時、この鑓を馬乘二百騎に渡、其者共は馬一疋に一人づゝつきそひ候へと申含、さて又歩者百人すぐつて、百人に長みの鑓を百本もたせ、我等馬の廻りにつれ、〇下略

〔嘉永明治年間錄十二〕文久三年四月八日、歩兵卒其地頭ニ對シ分外ノ扶助ヲ乞フトモ許可スベカラザルノ旨ヲ達ス、

各々方幷御組々差出候兵賦の儀に付、當正月中、御觸達通り、百姓共の難儀不相成樣、世話可被致は勿論に候へ共、近頃右の者の內、地頭屋敷へ罷越、御定給金の外ねだりケ間敷儀、申出候者も有之哉の旨、其筋より申聞候趣も有之、一体歩兵奉行へ被引渡候上は、右年季中其筋進退に任せ候儀に付、向後右樣の儀申出候もの有之候共、不取上、其段歩兵屯所へ御達し可被成候、此段御達申候、以上、

御軍制掛り御目付

文久三年七月十一日、歩兵屯所ヲ江戸四所ニ置ク、幷歩兵羽織ノ標ヲ定ム、

圈中一印、西丸下御役屋敷安藤跡、當二月より御開場、兵賦五千人、圈中二印、辰の口酒井添屋敷より若年寄屋敷迄、當二月より御開場、兵賦五千人、圈中三印、小川町土屋跡、當五月より御開場、兵賦五千人、圈中四印、三番町原、當二月より普請始り、七月十五日御開場、兵賦五千人、右四ヶ所

撤兵

二萬人、日々食事賄ひ、麹町八丁目呉服屋渡世伊勢屋八兵衞、日本橋釘店金物渡世伊勢屋平兵衞、右兩人請負元じめ下方二十人餘有之、右兩人は外國交易最早より、外國方小買物御用達と云、兵賦へ公邊より御渡し品々、細美羽織一、紺木綿筒袖一　同シヤモ袴一足　異鍮作脇差一本、右脇差は柳原請負地山田屋善兵衞、本所龜澤町山田屋金兵衞、兩人請負、一本に付、代金五兩宛の納と云、尤も內金三兩二分手取、一兩二分は掛り役の者へ散り金と云、

〔嘉永明治年間錄十三下〕市川三左衞門等武田伊賀ノ黨ト水戶ニ戰フ

同〇元治元年八月十四日、天狗連筑波の屯勢不殘引拂ひ、水戶を差て罷下り候由、依之八州廻り石井勘之丞人數五十人率連、筑波町へ繰込、夫より宇都宮勢、壬生勢、步兵隊追々繰込候由、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十一月十三日、步兵砲發シテ新吉原町ヲ騷ガス、

卷說、今十三日步兵多人數、淺草邊へ徘徊し、市店へ立入、酒食を貪り、横行するに付、食物店は追追閉戶したり、夫より新吉原へ越し、彌酒食店へ立入り、不法有し故、何者か計策を用ゐ、僞て其店より引出し、喧嘩を仕懸け、多人數にて吉原土手所々に於て、步兵を十餘人打殺したりしに、其步兵の內より逃歸りたる者有て、右一件屯所へ注進したるに、步兵五百人鐵砲を携へ、吉原町へ押入砲發したるに付、一同恐怖逃去り手向ふ者なかりし、其後散々打毀し引取し由、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年九月廿日、御持小筒組ノ頭ヲ改テ撤兵頭ト唱フ、

御持小筒組起立の儀は、文久二戌十二月、小普請組より百人被仰付、元治元子六月、野州騷動の節、諸向より御入人六小隊則二百四十人餘に相成り、猶當寅〇慶應二年七月八日、元御賄方同六尺、同新組御臺所小間使等、凡三百人餘、其外諸向より追々御入人にて、神田橋外騎兵屯所構內、撤兵當番所へ相詰、夫より元御持御先手等の持場所、西丸御玄關前御門、同中仕切御門、御裏門、坂下御門、蓮池御門、下梅林御門、平川口御門等、右八ヶ所へ撤兵四大隊を以て、日々交代、此外一大

隊京都詰、但一小隊四十人、一大隊四百人、右之外三小隊大坂詰、二百人餘橫濱傳習へ相越す、西丸下生兵千二百人餘、老幼病兵千人餘、右役々下役並に取締等までにて、凡六百人、總人數五千人と云、

十二月晦日、御坊主壯年ノ者ヲ減ズ、

御坊主壯年の者は、撒兵組へ御入人となり、追々蓄髮す、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年六月、陸軍所ニ於テ撒兵士官學校ヲ設立、

壹岐守殿〇小笠原長行、老中、渡書付　於陸軍所撒兵士官學校御取立に付、年齡十四歲より十九歲迄の者は、寄留傳習請度志願の者は、名前取調、撒兵傳習掛へ可被差出候、

右之通、組支配有之面々へ可被達候事、

大坂在陣與力同心ニ撒兵ヲ命ズ

大坂御武具奉行同組同心三十四人、見習五人、　大坂御定番組假抱入れ、與力三人、同心二百人、同假抱入同心八人、　大坂元御船手與力無足見習一人　大坂水主同心四十五人、同見習五人、

右何れも撒兵并勤方等被仰付、御武具奉行は差圖役頭取改役兼勤被仰付候、

右之外、堺奉行御廢に付、與力同心撒兵被仰付、隊伍編制の儀は、大坂在住の撒兵等合併の積被仰渡候事、

十月、佛國ヨリ撒兵敎師ヲ召ニ就キ、諸士傳習スベキノ達、

美濃守殿〇稻葉正邦、老中、渡書付　此度御目見以上、當主子弟厄介に至迄、十五歲より三十五歲迄の者は、吟味の上、佛蘭西國より御雇相成候敎師より、三兵傳習可被仰付候間、志願の者は、來る廿日迄に、明細短冊陸軍所へ差出候樣可被致候、委細の儀は陸軍奉行並可被承合候、

右之通、萬石以下の面々へ可被達候、

桙取

〔嘉永明治年間錄　十七下〕慶應四年五月廿三日、官軍賊徒ト武州飯能ニ戰フ、
廿三日〇中略天明を待ち、各藩兩道より、伏兵探索相進候處、野田村外より賊兵猶又狙擊候へ共、
衝突進擊、平原曠野に出、撒兵を布術し、野砲小銃を以て、路次の林藪賊の伏兵を進擊し、〇下略

〔續修東大寺正倉院文書　四〕御野國味蜂間郡春部里大寶二年戶籍
伍保中政戶國造族與利戶口十九〇註略　下々戶主與利年卌四、兵士、桙取、〇中略歩
上政戶國造族稻麻呂戶口十九〇中略　戶主甥大石年卌五、兵士、桙取、〇中略歩
上政戶都布江安倍戶口廿二〇中略　寄人督江部鹽年卌三、兵士、桙取、〇中略歩
中政戶漢人意比止戶口廿〇中略　戶主同黨安倍年卌七、兵士、歩桙取、

〔東大寺正倉院文書　二十二〕御野國味蜂間郡春部里大寶貳年戶籍
中政戶務從七位下國造族馬手戶口十九〇中略　妾子金年卌、兵士、歩桙取、

〔續修東大寺正倉院文書　三〕御野國加毛郡半布里大寶二年戶籍
上政戶縣造吉事戶口卌四〇中略　嫡子知依年廿八、兵士、歩桙取、〇中略
中政戶秦人多都戶口廿四〇中略　嫡子小依年卅、兵士、歩桙取、〇下略

鎗持

〔參考太平記　三十〕細川賴春討死事
天正本云、〇中略讃岐守〇細川賴春鞍壺ニ乘直リテ鐙ヲ踏直シ給ヒケル時、〇中略鎗持數多走寄、馬ノ太腹刺テ刎落サセ、

〔甲陽軍鑑　十九品第五十二〕三年前、信玄公御他界の節、ケ樣あるべきと高坂彈正存候て、〇中略鑓持のはおりまで段子にして、內々支度仕り、

〔信長公記　首〕其時上總介殿〇信長御手前には、織田勝左衞門、織田造酒丞、森三左衞門、御鑓持の御中間衆四十許在之、

〔家中竹馬記〕鑓をもたする事、御出仕などの御供には、無爲の時は見えず、但持すまじき法もあるべからず、應仁の頃よりは、多分持なり、一本たるべし、是等皆馬上の跡なり、

〔雜兵物語〕數鑓擔　助内左衞門　後生大事に、大鳥毛の鞘、二かい鳥毛のさやを、になつた鑓擔がある、

〔立花家之記〕大學○萩原は、鎭久○北條の道具持の持たる小鑓を奪取、

〔雜兵物語〕鑓擔小頭　長柄源内左衞門　總じて御持鑓かつぎは、江戸廻りでは、御道具の者とて、高給取て、奴子はすれど、物前では預りものだ、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕武田法性院信玄公御代總人數之事

御道具衆三十五人は、御中間頭衆に劣ざる者をなされ候、心は剛强にても、御心安者にて無之ばなされず、御譜代の中間小人の中にて、すぐり出し如此、

〔北越軍記七中〕甘糟備後守淸長ハ、元ハ上杉普代ニモ非ズ、越後ノ上田ヨリ出、長柄ノ者ナリ、

〔奧羽永慶軍記一〕佐竹勢働二白川一事

宇留野兼ヲ其軍慮ヤ定メケン、尻狩○尻狩二字、一本作二殿字一ノ備三組ニシテ、弓ノ者、長柄ノ者、足輕等無二油斷一フセギケレバ、○下略

〔駿河土產〕絹類を始め、其外甲州より出候諸色の儀は、右御長柄の者共、中買を仕、○下略

〔奧羽永慶軍記二十七〕小野寺湯澤城返攻事附岩崎合戰事

横手方ニハ、兼テ名ヲ得シ長柄組十八人、一陣ニ進ミ、○下略

〔延喜式四十五左右近衞〕凡十八日○正月賭射、射手官人近衞總十人、必備二將監一、當日錄二交名一奏聞、

〔下學集下態藝〕射手イテ

〔運步色葉集伊〕射手イテ

弩手

弩師

〔倭訓栞 前編 伊 三〕いて　延喜式に射手と書り、西土にて弓手といへる是なり、

〔太平記 八〕山徒寄京都事

山門已ニ來二十八日(元弘三年三月)六波羅ヘ可寄ト定ケレバ、末寺末社ノ輩ハ不及申、所緣ニ隨テ近國ノ兵馳集ル事雲霞ノ如ク也、〇中略 兩六波羅是ヲ聞テ、思ニ山徒縱雖大勢、騎馬ノ兵一人モ不可有、此方ニハ馬上ノ射手ヲ撰ヘテ、三條河原ニ待受サセテ、懸開懸合セ、弓手妻手ニ著テ、追物射ニ射タランズルニ、山徒心ハ雖武、歩立ニ力疲レ、重鎧ニ肩ヲ被引、片時ガ間ニ疲ルベシ、

〔太平記 八〕四月三日合戰事附妻鹿孫三郎勇力事

厚東加賀守、加治源太左衛門尉、隅田、高橋、糟谷、土屋、小笠原ニ、七千餘騎ヲ相副テ、西七條口ヘ被向、自餘ノ兵千餘騎ヲバ惡手ノ爲ニ殘シテ、末六波羅ニ並居タリ、其日ノ巳刻ヨリ、三方ナガラ同時ニ軍始テ、入替入替責戰フ、寄手ハ騎馬ノ兵少シテ、歩立射手多ケレバ、小路々々ヲ塞ギ、鏃ヲ調テ散々ニ射ル、

〔太平記 二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

大將武藏守師直ハ、二十餘町引殿テ、將軍ノ御旗下ニ輪違ノ旗打立テ、前後左右ニ騎馬ノ兵二萬餘騎、馬回ニ徒立ノ射手五百人、四方十餘町ヲ相支テ如稻麻ノ打圍フタリ、

〔令義解 五 軍防〕凡軍團、毎一隊、定強壯者二人、分宛弩手、均分入番、(謂總計隊別之弩手、均分入番也、)

〔令義解 五 軍防〕凡弩手、赴敎習、(謂兵士習弩者也、)及征行、不須科其弓箭、(謂兵士隨身弓箭也、言習弩之士、不備隨身弓箭、其餘物、自依上條備也、)

〔延喜式 十八 式部〕凡內外諸司主典已上、及諸國史生博士醫師陰陽師弩師。補任帳、毎年正月一日、七月一日、進太政官、

〔續日本紀 二十 淳仁〕天平寶字六年四月辛未、始置太宰府弩師、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應延陸奧國史生幷弩師歷事

右按察使正四位下藤原朝臣緒嗣奏偁、謹檢案內、太政官去大同二年十一月二日符偁、初位已上長上官遷代、皆以六考爲限、又同年十一月廿三日符偁、史生不改此例者、而此國去京眇遠、公廨數少、任國殊營防戍、歸家既乏路粮、臣請此一國、改史生歷、六年爲限者、右大臣宣、奉勅、准西海道諸國、五年爲限、弩師准此、

大同五年三月一日

〔日本後紀 嵯峨 二十二〕弘仁三年四月己丑、定鎭守官員、○中略醫師弩師、各一員也、　十一月庚午、制、出羽國史生、幷弩師歷、同國司、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應太宰府省史生置弩師事

右得府解偁、去延曆十六年、此府弩師、永從停廢、不虞之備、不可不備、望請除史生一員、永置弩師一員者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁五年五月廿一日 ○又見職員令集解

太政官符

弩師歷任五年爲限事

右太政官今月十一日下陸奧出羽兩國符偁、中納言兼右近衞大將從三位行陸奧出羽按察使勳三等巨勢朝臣野足奏狀偁、謹檢案內、依太政官去弘仁三年十一月十五日符、兩國弩師、歷任五年爲限、而據去年七月十七日論奏、四年爲限、唯西海一道、五年如常、愚臣商量、邊要之設、東西是同、伏望兩國弩師、皆准西海道、五年相替、庶令忘遠路之疲、專邊守之勤者、右大臣宣、奉勅依請、

弘仁七年正月十二日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應補弩師事

右得陸奥國解偁、弓馬戰鬪、夷狄所長、平民數十、不敵其一、但至于弩戰、雖有万方之獷賊、不當一箭之機發、尤是威狄之至要者也、今在庫中弩、機牙差誤、若有警急、何忽調備、望請准鎭守府、置件弩師、其公廨准一分給、更不加擧、謹請官裁者、權中納言從三位兼行左兵衞督藤原朝臣良房宣、奉勅依請、

承和四年二月八日〇又見續日本後紀

太政官符

應廢史生一員置弩師事

右得太宰府解偁、壹岐島解偁、此島所設器仗之中、有弩百脚、而無人機調、難備非常、今新羅商人、往來不絕、警固之事、不可以暫忘、望請廢史生一員、將置弩師、仍請府裁者、府加覆審、所申有理、謹請官裁者、

右大臣宣、奉勅依請、

承和五年七月廿五日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應補鎭守府弩師事

右檢案內、件弩師、寶龜以來、式部補任、始自大同、二省互補、今被中納言兼左近衞大將從三位行民部卿淸原眞人夏野宣偁、奉勅文武之職、執掌各異、鎭守之官、須兵部補、

天長五年正月廿三日

〔續日本後紀 十九 仁明〕嘉祥二年二月庚戌、太宰府言、對馬島司解偁、此島居海中、地近新羅、若有機急者、何以備不虞、望請停史生一員、置弩師一員、依請許之、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一人補弩師事
右得隱岐國解偁、被太政官去貞觀九年五月廿六日符偁、新羅凶醜、不顧恩義、早懷毒心、常爲咒咀、迺者兆卦之繇、數告兵革、卜筮之識、不可不愼、右大臣宣、奉勅彼國、地在邊要、堺近新羅、警備之謀、當異他國、宜早下知殊令警護者、此國素無弩具、又無其師、望請省史生任弩師、少大之賊、應機討滅、謹請官裁者、中納言兼左近衞大將從三位行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、
貞觀十一年三月七日〇又見三代實錄

太政官符
應停史生一人任弩師者
右得長門國解偁、此國素置軍團、調習兵戎、而有弩機無其師、若有不虞、何得適用、望請停史生置弩師、謹請官裁者、大納言正三位兼行皇太子傅藤原朝臣氏宗宣、奉勅依請、
貞觀十一年十一月廿九日〇三代實錄作十二月二日
〔類聚三代格五〕太政官符
應以權史生鴈高松雄遷補弩師事
右得出雲國解偁、謹案太政官去二月十二日下當道符偁、得太宰府解偁、大鳥集于兵庫樓上、訪之卜筮、當有隣國兵事者、如聞新羅商船、時々到著、假令託事商賈、來爲侵暴、若无其備、恐同慢藏、右大臣宣、奉勅、居安慮危、有國所先、愼微防萌、安民急務、宜仰緣海國、勤修武衞、屢加察俾愼斥候、又作俟弩調習、以備機急、兼有堪爲師者、點定言上者、今件松雄、昔備宿衞、能習兵弩、見其才略、良堪爲師、望請遷補弩師、令傳其術、秩限六年、俸准一分、謹請官裁者、從三位守大納言兼左近衞大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅、宜依請補之、但史生一人、待闕停止、永補弩師、
貞觀十二年五月十九日〇又見三代實錄

〔類聚三代格 五〕太政官符

應減史生一員置弩師事

右得因幡國解偁、被太政官去二月十二日符偁、有堪弩師者、擇定言上者、因搜求部內、黃文眞泉、元直宿衞、能習弩術、望請補之弩師、勤備武衞者、從三位守大納言兼左近衞大將行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅宜減史生一人依請補之、

貞觀十二年七月十九日

〔三代實錄 十八 淸和〕貞觀十二年八月廿八日戊申、先是對馬島言、境近新羅、動恣侵掠、既無其師、弩機何用、絕域孤島、誰救警急、適者有聞、彼國寇賊、擧翎習戰、若不豫備、恐難應卒、望請置弩師一員、勅太宰府簡擇其人補任置之、立爲恒例、

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一員置弩師事

右得伯耆國解偁、太政官去年二月十二日符偁、堪弩師者、擇定言上者、謹依符旨、歷試其術、高市金守、誠堪爲師、望請以件金守補任弩師者、從三位守大納言兼左近衞大將陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、奉勅依請、但停史生一員永置弩師、

貞觀十三年八月十六日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一員補弩師事

右得石見國解偁、被太政官去二月七日符偁、津守稻淵、去正月廿二日任彼國弩師者、國依符旨任用已畢、而今件弩師、是新置之職、至于俸料未知據行、望請准出雲伯耆等國例、停史生一人充給其公廨、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

貞觀十七年十一月十三日

太政官符

應諸國弩師秩限一准史生事

右得式部省解偁、檢案內、弩師之興、始自邊要、陸奧出羽太宰府、及壹岐對馬、皆准史生限五年、伯耆隱岐二國、亦准史生限四年、而因幡出雲長門等國、偏依國解、徒限六年、伏尋物情、陸奧出羽之在絕遠、尙限五年、因幡出雲之居中國、何得六年、求之物情、竊所不安、望請件等弩師、一准史生、以爲秩限、望請官裁者、正三位行中納言兼右近衛大將皇太后宮大夫藤原朝臣良世宣、奉勅依請、

元慶二年二月三日

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年六月七日辛未、出羽國守藤原朝臣興世、飛驛奏言、○中略賊出不意、四方攻圍、官軍力戰、賊勢轉盛、○中略權弩師神服直雄、幷戰而死、

〔類聚三代格五〕太政官符

應停史生一人置弩師事

右得太宰府解偁、肥前國解偁、凡器仗之威、以弩爲本、防衛之要、莫不由斯、望請停史生一員、任弩師者、府加覆審、理誠可然、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衛大將陸奧出羽按察使源朝臣多宜、奉勅依請、

元慶三年二月五日

〔類聚三代格五〕太政官符

應置弩師一員事

右得佐渡國解偁、此國、本夷狄之地、人心强暴、動忘禮義、常好殺傷、望請准出雲隱岐等國、置弩師一員、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅依請、

元慶四年八月七日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應省史生一員置弩師事

右得越後國解偁、此國、東有夷狄之危、北伺海外之賊、防敵之兵、弩是爲勝、望請省史生員、永置件師、教習其道、以備不虞、謹請官裁者、從二位行大納言兼左近衞大將源朝臣多宣、奉勅依請、

元慶四年八月十三日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一員置弩師事

右得能登國解偁、此國、獨出北海、東西不隣、若有非常、誰備防禦、望請准越後佐渡等國、被置件職者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平六年八月廿一日

太政官符

應停史生一員加置弩師事

右得太宰府解偁、謹檢案內、格條偁、去弘仁五年五月廿一日、除史生一人、置弩師一人、若有病故、誰補其闕、望請重減史生、加置弩師、謹請官裁者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奧出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平六年九月十三日

〔類聚三代格 五〕太政官符

應停史生一員置弩師事

右得越前國解偁、此國、西帶大海、遠向異方、戎器之具、不可暫緩、望請被給弩師、備之不虞、謹請官裁者、

大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平七年七月廿日

〔類聚三代格五〕太政官符

應停史生一員補弩師事

右得伊豫國解偁、夫兵器之要、莫先於弩、而所有之弩、機牙差誤、望請廢史生一員、置弩師者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平七年十一月二日

〔類聚三代格五〕太政官符

應省史生一員置弩師事

右得越中國解偁、此國有弩無師、不習機發、若有不虞、卒爾何爲、望請省史生員、置弩師者、大納言正三位兼行左近衞大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣、奉勅依請、

寛平七年十二月九日

太政官符

應停史生一員置弩師事

右得太政府解偁、肥後國解偁、此國地接海崖、防備隣賊、雖有弩機、無師講習、望請省史生置弩師者、府依解状、謹請官裁者、左大臣宣、奉勅依請、

昌泰二年四月五日

〔本朝文粹二意見封事〕意見十二箇條　善相公清行

一請停以贖勞人補任諸國撿非違使及弩師事○中略

緣邊諸國、各置弩師者、爲防寇賊之來犯也、臣伏見、本朝戎器、强弩爲神、其爲用也、短於逐撃、長於守禦、

銃卒

古語相傳云、此器神功皇后奇巧妙思別所製作也、故大唐雖有弩名、曾不知此器之勁利也、臣伏見陸奥出羽兩國、動有蝦夷之亂、太宰管內九國、常有新羅之警、自餘北陸山陰南海三道、濱海之國、亦皆可備隣寇者也、而今件弩師、皆充年給、許令齎貢、唯論價直之高下、不問才伎之長短、故所充任者、未知軍器之有弩、況曉機弦之所用乎、假令天下太平、四方無虞、猶宜安不忘危、日愼一日、況萬分之一、若有隣寇挑死者、空懷此器、孰人施用乎、伏望令六衞府宿衞等練習弩射之術、試其才伎、隨其功勞、充任件國弩師、然則人才適名、城戍易守、○中略

延喜十四年四月廿八日從四位上行式部大輔臣三善朝臣清行上封事

〔洞堂軍記〕關加治田軍之事

永祿八年八月廿五日、關隼人加治田表へ出陣有べきのよし風聞有ければ、信長公加勢として齋藤新五郎、五百餘騎にて馳加り、弓鐵砲之者ども都合一千餘騎にて二手にわけ、西大手口へは齋藤新五郎、佐藤右近右衞門兩大將にて堅めらる、

〔川角太閤記二〕明る十四日、彌平次安土の城より坂本の城へかけ入るべきために打登所を、瀬田より山岡殿被出向、瀬田の橋中程に燒草をかけ候處に、日の程五ッの頭に瀬田まで彌平次登り、橋を隔て互の鐵砲軍きびしく罷成候所に、彌平次下知していわく、○中略さて、ものほしざほの先に、弓鐵砲の者どもの著たる對のはをりなど取あつめ、さほ先に堅ゆひつけ、彼羽をりに水をふくませもみたつ所を、二間も上も有さほどもなれば、さしのぞき〳〵水をつけ打ければ、○下略

〔渡邊勘兵衞覺書〕七、阿波一の宮へ被押寄候時、本丸より切建候て、尾筋に出丸二ッ有之候、勘兵衞ハ鐵炮の者にまじり指出、本丸と出丸の間へ横目に割込取堅候に付、出丸二ッは其時に至て自燒仕、本丸へつぼませ申候、○下略

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年七月二日、銃隊編成ノ旨ヲ三番頭等ニ達ス、

阿部伊勢守殿渡書付　近來異船度々渡來に付ては、御備向別て嚴重に無之候ては難相成、然る所、外夷防禦の儀は、銃陣專務の儀に付、與力同心幷御徒等、西洋銃陣修行可致旨被仰出候、右に付御筒等も追々張立被仰付候間、出來次第御貸渡可有之候條、此節より以其心得、專ら調練精出候樣世話可被致、尤も弓組の儀も、銃隊を相兼修行候樣可被致候、右之通、三番頭、百人組頭、御持頭、火消役、御先手、御徒頭幷八王子千人頭へ相達、其段御鐵砲方へも相達候間、可被得其意候、尤も向々へも爲心得可被達置候、

〔嘉永明治年間錄九〕萬延元年正月十七日、築地講武所ヲ小川町ニ移ス、

同廿八日、和泉守殿〇老中水野忠精より講武所奉行へ渡書付、　騎銃隊並に西洋太鼓打方稽古御差止相成候間、可被得其意候事、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年五月十日、筒袖陣股引稽古ノ外用ルヲ禁ズ、

周防守殿〇老中松平康直渡書付　西洋銃隊調練の儀は、外の利器を採り、御國文武備、一際御嚴整に可被遊御趣意を以て、先年中より厚く御世話も有之事に付、右御趣意相心得、勉勵可致は勿論に候得共、近來習練の道實理を失ひ、虛飾に流れ、兎角新奇を好み、自己の工風等取交、遊戲同樣の擧動致し、又は從來の御制度も不顧、外國人に齊き服を著用候向も有之哉に相聞え、漸々士風を破り、且一躰の御趣意にも相振れ、以外の事に候、以來形容に不拘、眞實と致修行、筒袖陣股引の類、異樣の仕立幷に華美の品一切相止め、都て陣服類稽古の外、平常猥に著用候儀は不相成候、若し心得違の者有之候はゞ、急度御沙汰可有之候條、其旨可心得候、右之趣、向々へ不洩樣可被相觸候、

五月、西洋服幷ニ練兵ニ横笛ヲ用ルヲ禁ズ、

周防守殿口達覺　西洋銃調練の儀に付、此度仰出され候趣、形容虛飾に不拘、眞實に致修行、御

實備相立候樣可被遊旨の御趣意候、畢竟近頃逐々虚薄に流れ、著服等專ら洋風を摸し、異樣の冠り物、華美の筒袖陣股引等相用ゐ、修練に實理を失ひ、漸々士風を破り、一躰の御趣意にも悖り、以の外の事に候、以來胴服、陣羽織等、洋製に不致樣急度心附け、筒袖、陣羽織、陣股引等、稽古の外平常著用不致、且練兵に横笛相用候儀可致無用候、萬一此上心得違の者有之ば、急度御沙汰可有之に付、厚く相心得、組支配へも急度可申渡候、　レキションと相唱候筒袖の羽織不苦候事、　ダンブクロは、袴腰有之分不苦候事、　胴服の儀、ボタン一ツ懸けは不苦候事、　頭巾の儀は、是迄の通り仕立にて不苦候事、右何れも地合木綿羅沙呉絽の內、勝手次第、尤も色は黑計りに限り候事、　英國仕立羽織一切不相成候事、　沓の儀は、場所の外著用致間敷候事、　士幷に、大皷打は羽織一切著用不相成候事、　小袴の儀は不苦、尤も黑紺にて印付、外は一切不相成候事、

此令命有て四五日過たる頃、佐野侯堀田藩銃隊の行列を見るに、大皷幷に横笛を用る事は前の如き故、不審しけるに、其後或說を聞に、是迄薩州藩は調練横笛を用ざるに、何故か令命出し翌日より、銃隊行列へ横笛を交へ、芝邊より西ノ久保邊縱横周旋せり、是に依て無據萬石以上は横笛可相用旨、萬石以上へ計り達しに成事と云ふ、此故に堀田藩横笛を用ゐし事なるべし、併し不日にして一統横笛用る者なし、　西洋服の事は、此後十一月に至り、御旗本の面々、都て銃隊御編制相成候とて、向後筒袖羽織陣股引の儀、戎服と相定候間、出火の節登城服も、來卯正月より、右戎服著用可致、尤も當時所持のものは、此節より相用ゐ可申旨の達あり、然れば當五月十日、令命の趣前々の御制度も不顧、外國人に齊き服を著用候向も有之哉に相聞え、以の外の事故、向後筒袖陣股引の類、異樣の品不可用、若し心得違のもの有之に於ては、急度御沙汰可有之旨との御達はいかゞ、所謂擧世混濁而我獨清、衆人皆醉而我獨醒、

砲兵

爲レ之語一予是迄疑たるに、是に於て發明せり、

〔御書付留 十五〕寅○慶應二年十一月五日、美濃守殿○老中稻葉正邦御渡、　大目付江

此度御旗本之面々、都而銃隊に御編制相成候に付、戎服之儀も、向後筒袖羽織陣股引と御定、可レ被レ得二其意一候、就而者出火之節、登城著服之儀も、來卯正月ゟ右戎服著用可レ被レ致候、　但布衣以上、黑羅沙紋白、布衣以下黑羅紗黑呉郎服連之內、紋黃、御目見以下、何品に而も黑キ色紋黃相用、いづれも紋所は脊江壹ッ相付可レ申候、

右之通相心得、用意有レ之面々は、此節ゟ著用不レ苦候、

右之趣、萬石以下の面々江不レ洩樣可レ被レ達候、

寅十一月廿日御同人御渡　大目付江

筒袖羽織陣股引之儀、戎服と相達置候處、以來そぎ袖羽織細袴と相唱、海陸兩軍役々之平服と相心得、其餘之向々に而も、出火等非常之節は、右服著用可レ被レ致候、○中略

右之趣、萬石以下之面々江不レ洩樣可レ被レ達候、

十二月十九日御同人○老中河內守井上正直御渡　大目付江○中略

當八月中被二仰出一候、御軍役銃卒之儀、三千石以下之面々、兼而被二仰出一高之銃卒差出し、組合相立、來正月十一日ゟ稽古爲レ致、非常之節出張差支無レ之樣可レ被レ致候、　但金納相願候ものは、銃卒壹人に付、金五拾兩之積を以、年々可二相納一候、尤來廿八日迄に、御軍制掛江可レ被レ承候、

右之趣、三千石以下之面々江早々可レ被レ達候、

〔嘉永明治年間錄 十五〕慶應二年六月十五日、井伊掃部頭敗軍ノ屆、

私總軍昨十四日曉、榊原式部大輔、總軍陸軍奉行竹中丹後守○重固等、兼て打合候通、岩國へ討入候積り、討手分配、木俣土佐二番手戸塚左大夫、三番手河合主水大井村へ早天繰詰、軍目付朝倉

藤十郎も出張、敷陣を整へ、勢列の上、從天朝被仰出候趣申聞せ、使番竹原七郎兵衛、曾根佐十郎差添ひ、小瀬川渡越候處、賊勢防禦、脇村幷に八幡村より大小砲打掛候に付、直に大砲隊相進め、八幡山臺場を始め、樹間屯在の場處目的に、大小砲嚴敷防擊、○中略

慶應二年七月十五日、濱田城援兵ノ爲ニ、講武所奉行遠藤但馬守○胤城石州ニ發ス、

伯耆守殿○松平宗秀渡書付　遠藤但馬守へ　其方幷に銃隊大砲隊とも、今般石州へ亂入の長州人追々跋扈、濱田表へ襲來て攻戰候に付、石州濱田爲應援被遣候に付、早々出立、同地へ罷越可被抽忠勤候事、

〔書言字考節用集四人倫〕足輕アシガル本朝俗、帶干戈弓及步卒曰足輕、今按古史所謂健兒是矣、

〔倭訓栞中編一安〕あしがる　足輕とかける、西土の書に輕足驃騎の語あり、古へは斥候の侍をいふにや、衣川百首に、　矢をも射ずにぐるを耻とおもふなよかろく歸りていふは足輕

樵談治要に昔より天下のみだるゝ事は侍れど、あしがるといふ事は舊記などにもしるさゞる名目也、平家のかぶろといふ事をこそめづらしき例しにし侍れと見えたれば、後土御門院の比より此名起れるにや、明德三年の軍令にも見えたり、

〔樵談治要〕一足がるといふ者長く停止せらるべき事

昔より天下の亂るゝことは侍れど、足がるといふことは、舊記などにもしるさゞる名目也、平家のかぶろといふ事をこそ、めづらしきためしに申侍れ、此たびはじめて出來れる足がるは、超過したる惡黨也、其故は洛中洛外の諸社諸寺、五山十刹、公家門跡の滅亡は、かれらが所行也、かたきのたて籠たらん所にをきては力なし、さもなき所々を打やぶり、或は火をかけて財寶をみさぐる事は、ひとへにひる强盜といふべし、かゝるためしは先代未聞のこと也、是はしかしながら武藝のすたるゝ所にかゝる事は出來れり、名有侍のたゝかふべき所を、かれらにぬきゝせたるゆ

へなるべし、されば隨分の人の、足輕の一矢に命をおとして、當座の耻辱のみならず、末代までの瑕瑾を殘せるたぐひも有とぞ聞えし、いづれも主のなきものは有べからず、向後もかゝることあらば、その〳〵主々にかけられて糺明あるべし、又土民商人たらば、在地におほせ付られて、罪科有べき制禁ををかれば、千に一もやむ事や侍べき、さもこそ下剋上の世ならめ、外國の聞えも耻づべき事成べし、

〔貞丈雜記四役名〕一足輕の事、○中略是に據りて按ずるに、古の足輕といふ者は、軍陣の爲に諸方の惡黨をめしかゝへ置て、はたらかせたる事と見たり、強剛にてあらけなく、はしり廻りはたらく故、足輕とは名付たる成べし、何れも山賊夜盗の類成るべし、

〔安齋隨筆前編七〕一足輕○中略 按、樵談治要に見えたり、足輕も合戰ある時は雇はれ、雜兵になる事を渡世にする者どもと見ゆ、常には山賊野伏などするあふれものなるべし、上代にはなかりしものなり、

〔兵家受用集五〕問云、足。輕。ノ掛ヤウニ種々アリト申ス如何、答云、足輕ト云者ハ、備諸兵ノ先ヘ進ム者ナレバ、恐怖ノ心多シ、故ニ第一ニハ、彼ヲ物疑ナキヤウニ其氣ヲ奪ヒ、能ク勢ヒヲ含マセテ、次ニ地形ノ得失ヲ辨ヘ知テ、懸引ヲ不令成バ、必ズ過チアルベシ、此故ニ其理ヲ察シ、下々ニ氣ヲツカヒ、其變ヲナス事ハ、足輕大將ノ第一也、足輕ト云者ハ、象棊ノ駒ニタトヘレバ、歩兵ノ如シ、其歩兵ノ遣ヒ樣、時ニ應ジテ一涯ニ定ムベカラズ、唯能ク向ノ誤リト、怠リアル處トヲ知テ、其油斷アル處ヘ突キ掛レバ、先ノ煩トナリテ敗レ安シ、足輕ヲツカウ事モ亦然リ、敵ノ怠ル處ト誤リアル處ヲ察シテ、其虚ニ乘テ討ツ時ハ、必ズ大ニ益アリ、此利ヲ不辨バ、縱如何樣ノ術ナリトモ、徒ラ事タルベシ、雖然象棊モイマダ不指合時ハ、其々ノ馬ノ立處アリテ、吾ガ得方ヨリ駒ヲ遣ヒ初ム、其ノ如クニ足輕モ、未ダ敵ニ不合前ニ定レル法制アリテ、悉ク是ヲ知シメ置ナリ、其法ナクシテ足

輕ヲ遣フ時ハ、目モ不ㇾ盤盤ヲ以テ、象棊ヲ指ガ如シ、故ニ足輕ノ法ヲ能ク習フベシ、古今足輕ヲツカウ法三品アリ、鐵炮弓長柄ノ三種也、是何モ夫々ノ道具ノ用ル利ヲ考ヘ知ルベシ、先ヅ鐵炮ヲツカウ人ハ、兩陣相對シテ打スル時ハ、何樣ニ打シメテ、如何程ノ損益アラント、敵ヲ愚ニ不ㇾ思シテ、一切ノ變化ヲ察シ、鐵炮ノ利アラン事ヲ考ヘアルベシ、唯無法ニシテ、吾一人進ムト云トモ、其足輕進マザレバ、足輕ノ大將ニハアラズ、タトヘ一旦進ムト云トモ、怖レ心ガアリテ打鐵炮ハ、皆越矢ト成テ、アダ矢多カルベシ、其上事急ノ時ハ、一放シ放ストイヘドモ、敵押來ルヲ見テハ、必ズ逃崩ルベシ、弓長柄ハ、鐵炮トハ異ナリトイヘドモ、利益ノ心ハ違フベカラズ、故ニ足輕ヲ遣フ法ハ、三種トモニ同事也、能其足輕大將一人ノ下知ニ依テ、其組下ノ足輕自由ニ掛引サセ、其形チ圓ケレドモ、長ク成事安ク、長クシテ圓ニ變ジ、方ニシテ曲ニ變ジ、其形チ自在ヲナスコト飛鳥ノ空ニ遊ビ、魚ノ水ニヲドルガ如シ、雖ㇾ然此法ヲ兼テ不ㇾ備シテ不ㇾ可ㇾ叶、凡ソ足輕ト云者ハ、百姓町人ノ類ヨリ出テ、中ヨリ下ノ者多シ、故ニ義ヲ思フ事薄シ、依ㇾ之敵合近クシナイブセキ時ハ、オクレ心出來安クシテ、何ト下知スレドモ進ミ難シ、此故ニ其氣ヲ察シテ、是ヲ遣フ事功者アルベシ、タトヘバ網代團ヲ組ガ如シ、竹ヲヘギテ一本ニテハ何ノ用ニ立ザレドモ、總ヲ組合セヌレバ、弱キ竹モ強キ力ヲ得ル也、又總ヲ組合セタリトモ、中ニ心ヲ入テ柄ト用ヒザレバ其力ヲ體ナシ、足輕モ又此心也、何ノ義モナキ者ドモナレドモ、總ヲ組合テ一ニナシ、夫レニ小頭大頭ヲ定メ、相圖符約ヲ備ヘヌレバ、總樣ノ他力ニ依テ、能キ武士同前ノ働ヲナス者ナリ、是足輕ヲ用ル第一ノ心得也、

此理ニ依テ左ノ組合ヲ見、了簡アルベシ、

〔甲陽軍鑑品第四十二十五〕足輕は

一矢一玉二合預くる事、其口傳多し、

一五より初、廿五ひとくみなり、大ぞなへもこれよりする、口傳有、

〔出陣荷物貫定〕足輕一人ニ付

一革具足	壹貫目	壹兩	一著物	三百廿目	壹ツ	一帷子	百五十目	壹ツ
一羽織	百三十目	壹ツ	一鎌	七十五匁	壹挺	一ナタ	八十目	壹挺
一柿紙	四百目	貳枚	一糸立莚	四百五十目	貳枚	一細引	四百目	貳筋
一鋸	七十目	壹挺	一合羽	三百九十目	壹ツ	一鼻紙		貳束
一火繩	五十目	五筋	一火燧	八匁	壹通	一付木	十匁	五把
一椀道具	廿五匁	壹通	一水筒	百卅目	壹ツ	一水吸	三匁	壹ツ
一飯ヅト	十匁	壹ツ	一手拭	九匁	壹ツ	一三尺手拭	十三匁	壹筋
一菅笠	四十五匁	壹ツ	一腰籠離	貳十目	壹ツ	一脚半	廿五匁	壹ツ
一股引	六十五匁	壹ツ	一藁鞋	六十八匁	貳足			

合四貫貳百貳拾六匁　内五百四拾八匁自持　三貫八百八拾八匁馬荷

〔源平盛衰記 十三〕高倉宮信連戰事

五月〇治承四年十四日ノ夜ノ曙ニ、官人三人向タリ、源大夫判官兼綱ハ存ル旨アリト覺テ、遙カノ門外ニヒカヘタリ、光長〇出羽判官兼成〇博士判官兩人ハ、馬ニ乘ナガラ門内ニ打入テ申ケルハ、君〇高倉宮以仁王代ヲ亂サセ給ベキ謀叛ノ聞アルニ依テ、可奉迎取由蒙別當ノ宣罷向ヘリ、光長、兼成、兼綱〇源氏是ニ侍リ、速ニ御出有ベキト高聲ニ申ケレバ、信連〇長谷部立出テ、當時ハ忍ノ御所ニ入セ給テ、此御所ハ御留守也、此子細ヲ傳奏仕ベキト申ケレバ、博士判官コハイカニ、此御所ナラデハ、何所ニ渡ラセ給ベキゾ、虚言ゾ、足ガルドモ亂入テ、サガシ奉レト下知ス、下知ニ隨ヒテ下郎等亂入テ狼藉不斜、

〔源平盛衰記 十四〕三井寺僉議附淨見原天皇事

去程ニ三位入道被申ケルハ、山門ハ變改、南都ハ未參、小勢ニテ合戰ユヽシキ大事也、平家ヲ夜討ニセンハヨカリナン、サラバ老僧共、童部、法師原一二千人、如意峯ニ指遣テ、續松手々ニ用意シテ、足輕二三百人、法勝寺ノ北サマヨリ三條河原祇園ノ邊マデスルリト遣テ、在家ニ火ヲ放チナバ、六波羅ノ早雄ノ武者共、軍兵ニ招レテ馳來バ、引退引退アヒシラヒ、矢少々射サセテ、岩坂櫻本ニ引籠テ戰ハン、(○下略)

〔源平盛衰記三十七〕景高景時入城幷景時秀句事

眞鍋五郎ハ櫓ヨリ下リ、河原兄弟二人(○太郎高直、次郎盛直、)ガ首ヲ手鋒ニ貫キ、城戶(○一谷)ノ上ニ昇リ高ク捧テ、源氏ノ殿原コレヲ見ヨ、進ム敵ヲバ角コソ取、ツヾケ〳〵ト招キタリ、梶原コレヲ聞、口惜キ人共也、ツヾク者ガナケレバコソ、兄弟二人ハ討レタレトテ、五百餘騎ニテ押寄ツヽ、足輕四五十、人ニ腹卷著セ、手楯ツカセテ、曳聲出シテ逆茂木ヲ引除、(○中略)櫓ヨリハ逆母木ヲ引セジト、矢衾ヲ作テコレヲ射ル、寄手ハコレヲ引セントト指詰指詰矢倉ヲ射ル、(○中略)蒐リケレ共、足輕共一ツ二ツト引程ニ、逆母木ヲバ遂ニ皆引除ニケリ、

〔太平記七〕吉野城軍事

爰ニ此山(○吉野)ノ案內者トテ、一方へ被向タリケル、吉野ノ執行岩菊丸、己ガ手ノ者ヲ呼寄テ申ケルハ、(○中略)城ノ後ノ山、金峯山ニハ、嶮ヲ憑テ敵サマデ勢ヲ置タル事アラジト覺ルゾ、物馴タランズル足輕ノ兵百五十人、スグツテ、步立ニナシ、夜ニ紛レテ、金峯山ヨリ忍入、愛染寶塔ノ上ニテ、夜ノホノボノト明ハテン時、時ノ聲ヲ揚ヨ、

〔碧山日錄〕應仁二年六月十五日癸卯、客云、東陣(○細川勝元)有精銳之徒三百餘人、號足輕、不擐甲不取戈、只持一劒突入敵軍、時々有俘馘之作、八日之夜伺隙燒宗全之兵櫓六七間、勝元賞其徒云、　七月廿八日丙戌、東陣疾足之徒、屯清水寺云、　八月二日己丑、西陣疾足之徒、燒汁谷之民屋、逮夜而火與禪

禪院、十三日庚子、以事赴於木幡、東陣疾足之卒、於南坂爲剽奪、故枉路於伏見、問明藏主於永明、相接而談、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕武田法性院信玄公御代總人數之事

一大小總ならして、主共に五人づれにして、四萬五千六百五十人、御旗本足輕八百八十四人、總御家中の足輕五千四百八十〻人歟、足輕二口、合六千三百七十三人、右總合五萬二千二拾三人、五人づれの積也、

一又大小總ならして、主共に四人づれにして、三萬六千四百八十四人　足輕二口合六千三百七十三人　總合四萬二千八百五十七人、是は上下四人づれの積也、

一又大小總ならして、主共に三人づれにして、二萬七千三百六十三人、足輕二口合六千三百七十三人　總合三萬三千七百三十六人

右之內を拔出し、御旗本の總人數二千九百卅五人、但廿人衆頭、御小人頭二十騎をば、主共に三人積也、足輕大將衆又は奧近寄衆三十五人は、隨分歷々の身上なる故、三十人二十人召連候へ共、是をも押籠十人づれに積如此也、此內弓、鑓、鐵砲、小荷駄足輕八百八十四人、以上雜兵合三千積也、此外にて候、

〔信長公記首〕七月〇弘治五年十二日、清洲より岩倉へは三十町に不可過、此表節所たるに依て、三里上岩倉の後へまはり、足場の能方より浮野と云所に御人數被備、足輕かけられ候へば、三千計うきうきと罷出相支候、

〔常山紀談三〕淺井備前守長政、玉淵川をかぎりて、齋藤龍興と軍す、〇中略長政、大垣の邊所々に火をかけさせければ、龍興敵勝に乘て大垣を攻るならん、いざたすけよとて、岐阜を出しかば、長政やがて引返す時、足輕の物になれたるを三十人、榑井の土民の家にかくしたり、龍興榑井に入て士

鐵砲足輕

卒も疲しがば、兵粮つかふておこたりける時、かくしたる足輕ども、所々に火をかけて燒たつる、長政思ひもよらぬ所へおしよせて、散々にうち破り、やがて南宮山に登りて敵をまつ、龍興二度まで敗北し、口をしく思て、四面をとり卷てあまさずうたんとおし寄たり、

〔信長公記〕九　五月〇天正四年七日御馬を被寄、一萬五千計の御敵に纔三千計にて被打向、〇中略信長者先手の足輕に打まじらせられ懸廻り、爰かしこと被成御下知、〇下略

〔駿河土產〕大坂落城の後、權現樣に者御持旗御長柄等、住吉江立ならべ可申旨上意之事、權現樣茶臼山の上江御登り被遊候節、谷合より鐵炮打出し、御供中さわぎ候に付、小十人衆三人其所江馳附、鐵炮打出候者を被捕候處、金笠かむりたる足輕壹人召捕江、茶臼山江引來る、本多上野介其場に居合せ、其者に被申候者、誰が家來ニ而、唯今之鐵炮を、何とて放し候ぞと被尋候得者、私儀は本多上野介足輕にて御座候、上樣とは存不申、敵と存候而放しかけ候と申候を、上野介被聞、言語同斷不屆成奴めかなと被申候を、權現樣被爲聽、小十人衆の方江御向被成、放してやれはなせ〳〵と上意に付、追放に被致候、〇下略

〔雜兵物語〕鐵炮足輕　　夕日入右衞門

今日は川越が有べいぞ、胴亂を首につけべい、壹六はおかしいやつだ、具足を著て口藥入の付樣をしらないで、常に鐵炮をはじく時の樣に笠を引かぶつて、後緒を首へ引懸べい〳〵とすれど、緒が短くて掛られない所で、緒を引切て首に引掛た、胸いたにくゝり付る事をしらないでおかしいやつだ、あれでは鐵炮打とはいはれない、又早合の藥は玉をぶち出すべい爲計でもない、此長陣に野にも山にもふさるべいに、大勢の中にはまむしのとげにもぶん當るものが有べい時は、早速其はゝさゝれるか踏かした所へ、胴藥一匁計のせて火をつければ、毒氣早くつんのく物だ、それも、おそければきかないものだぞ、

弓足輕

〔甲陽軍鑑 九下品第二十八〕村上義清越後長尾景虎被頼事并上田原同年信州海野だいら合戰等之事」

一村上義清申さるゝ、〇中略殊更足輕二百人に、よき射手を揃、つよき弓、よきねをきむしたるよき矢を、一人に五手わたし、百五十張、殘る五十人の足輕には、永正七年に始て渡る鐵炮をもたせ、玉藥一人に、みはなしづゝあてがひ、いづれも某はなせと申時仕れ、はなしあげてから弓鐵炮をすて、かたなをぬき、むりにきつてかゝり、鐵炮は弓の衆のあひだにたち、矢五ッはなしてからうちはじめよと、五人に一人づゝ指引の役者をつけ、其役者をもかちだゝせ、〇下略

〔洞堂軍記〕兼山加治田軍之事

東がわには、大將玄蕃〇齋藤を先として、〇中略其外弓鐵炮足輕一騎は廿人立、自らの供五人づゝ相添、雜兵百六十騎にて藪蔭に忍び、敵よせたらば横に掛破らんとのはかりごと也、

〔雜兵物語 上〕弓〇足〇輕〇　小川淺右衛門

きのふ弦をはりかへた時、ちつくり弦に折めをつけたが、一放ちはじきたれば其まゝうつきれた、弦は随分念を入た弦だが、折めがちつくりとついたれば、二放ちともはじかれずうつきれた、ぬり弦よりがひにはひとみへた、替の弦が拂底だに、折めのつかないやうに、そろ／＼弦をはりかへべい、又此弓はほこづまりて六尺あるが、一尺一尺に藤を卷、間竿に用ゆるための弓だんべい、若間竿の入べい時は、此弓を以て弦を下にして竿をうつべい、まてよ尺藤作りの弓とやらんは、此弓の事だんべいぞ、

〔太平記 八〕摩耶合戰事附酒部瀬河合戰事

赤松入道〇圓心是ヲ見テ、態敵ヲ難所ニ帶キ寄ン爲ニ、足輕ノ射手一二百人ヲ麓ヘ下シテ、遠矢少少射サセテ城ヘ引上リケルヲ、寄手〇佐々木判官時信、常陸前司時知等、勝ニ乘テ五千餘騎、サシモ嶮キ南ノ坂ヲ人馬ニ息モ繼セズ、揉ニ揉テゾ擧タリケル、

〔書言字考節用集 四人倫〕白歯者(シラハモノ) 本朝俗呼雜兵云白歯者、今云若黨是矣、　雜兵(ザフヒヤウ) 又云雜卒(アラハモノ)

〔倭訓栞 中編一阿〕あをばもの　古へ雜兵を稱していふは白歯者の義といへり、武將も昔しは歯を染し、よて平家物語に平忠度の事を、内かぶと見入たれば、かねぐろ也と書、萬松院穴太記に、將軍源義晴の事を、御歯黑もまゐらずと書り、一說に、六樹の末々の步卒といふ意にて、青葉者の義也ともいへり、又甲冑をきざるすはだ者を、青葉者といふともいへり、

〔看聞日記〕應永廿五年四月廿四日、抑聞熊野神輿奉振、紀伊國田那邊ニ發向、守護畠山右衞門督入道於此所防戰、○中略守護勢打負、○中略其外雜兵不知數云々、

〔看聞日記〕永享四年十一月廿七日、抑大和へ兩大將今朝進發、○中略雜兵等二千人許出立之體言語道斷、見物也云々、

〔信長公記 三〕元龜元年九月廿三日、野田福島御引拂、○中略路次者中島より江口通御越也、○中略信長公川口川江の上下懸まはし御覽じ馬を打入、川を可渡の旨御下知の間、悉乘入候之處、思の外川淺く候て、かち渡りに雜兵無難打越候、

〔信長公記 八〕天正三年五月廿一日、日出より寅卯の方へ向て、未剋迄入替入替相戰、諸卒をうたせ次第次第に無人に成て、何れも武田四郎旗元へ馳集、難叶存知候歟、鳳來寺さして噇と致廢軍、○中略中にも馬場美濃守手前の働無比類、此外宗徒の侍、雜兵一萬計討死候、

〔參考平治物語 三〕牛若奥州下向事

京師本云、○中略上野國松井田ト云處ニ、ケブノ亭ニ一夜宿セラレタリケルニ、主ノ男ヲ見テ、奴ガ眼ザシ頰魂、所存一ツハ有ラン、彼等ヲ語ヒテ平家ヲ滅サン時、旗サシニセバヤト思ヒテ、○下略

〔五武器談 上太平記〕旗差は、旗を持て馬に騎る侍也、

〔平家物語 九〕一二のかけの事

はたさしは、きちんの直垂に、小ざくらを黄にかへしたる鎧著て、きかはらげなる馬にぞ乘たりける、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元曆元年八月八日甲子、參河守範頼爲平家追討使赴西海、午剋進發、旗差旗差之一人、弓袋一人相並前行、

〔竹崎五郎繪詞〕さきをし候て、かうこんをいたし、はたさしのむま、おなじきのりむまをいころされ、

〔太平記三十二〕鎌倉合戰事

三千餘騎二手ニ分テ、鶴岳へ旗指少々差遣テ、大御堂ノ上ヨリ、眞先ニゾ押寄タル、

〔梅松論下〕細川の人々、中御門を東へむかふ所に、河原口にて、錦の旗さしたる大勢に懸合て、追散し、旗指討取て、旗をうばひ取、〇下略

〔明德記中〕上總介〇赤松義則ノ旗差モ、大勢ノ中ニ懸入テ、旗ヲバ竿ニ取添テ、散々ニ切テ廻リケルガ、奧州〇山名氏淸ノ旗差ニ馳合テ、是非ナクムズト引組デ、差違テ、二人ノ者同枕ニ死ニケリ、

〔成氏年中行事〕一公方樣御發向事、〇中略御旗差御幡ヲ奉請取、大御門ヨリマカリ出、馬ニ乘、其間ハ御旗ヲバ被官人ニモタセ、馬ニ乘テ後、御ハタヲサシ、

〔播州佐用軍記下〕臘月十四日合戰之事

早瀨ガ旗ト、宇喜田ガ馬印ノ逢テ別ル丶事、七八度也ケレバ、旗指モ馬ヲ馳倒シ、歩行ニ成リ、旗馬印ノ地ニ仆ル事、度々ニ及ビケレ共、終ニ是ヲ捨ザリキ、

〔豐鑑二〕秀次年いまだ若ければとて、木下勘解由、同助左衞門尉二人をそへられたり、旗を取て地にさし、旗さしをばおとして、貳人ともに討死しける、

〔了俊大草紙〕一御旗差の役事、錦御旗をば無官の事に差すべからず、凡何の御旗をも、侍の中甲の者を撰ばれて、勤させらる丶なり、〇中略一番に御文の御旗を差られ、二番に白旗、三番に錦の御旗

官兵

を御身邊に差らるゝなり、

〔高忠軍陣聞書〕公方樣御出、一番の御盃は、勢州へ給、二度目御幡指、

〔了俊大草紙〕一錦の御旗差には、御旗副と號て、好兵或七騎或三騎などを副らるゝ也、

〔伊達成實記(下)〕ノボリ指ノ衣裳、具足下ニムリヤウノジユバン、具足ハ黑糸、前後ニ金ノ星、

〔黑田家譜(附錄)〕黑田家旗幟

角助幟の前也、よけよと詞をかけしか共、淸正の幟持、無理に通りけるを、角助笛卷の棒にて、彼幟持が足をまたゝかなぐりたをしける、

〔文德實錄(一)〕嘉祥三年五月壬辰、追贈流人橘朝臣逸勢正五位下、詔下遠江國、歸葬本鄕、(○中略)承和九年、連染伴健岑謀反事、掠拷不服、減死配流伊豆國、初逸勢之赴配所也、有一女悲泣步從、官兵監送者、叱之令去、女晝止夜行、遂得相從、

〔一代要記(鳥羽)〕保安四年癸卯七月十八日、衆徒舁日吉七社神輿入洛、官兵奉防之間、奉寄河原邊、忠盛朝臣於越前國搦取神人之故也、

〔百練抄(八高倉)〕承安三年十一月四日、爲防南都大衆參洛、遣官兵令曳宇治橋、

〔吾妻鏡(一)〕治承四年五月廿六日丁丑、卯剋、宮(○高倉宮以仁王)令赴南都御、三井寺無勢之間、依令恃奈良御也、三位入道(○源賴政)一族幷寺衆徒等候御共、仍左衞門督知盛朝臣、權亮少將維盛朝臣已下、入道相國(○平淸盛)子孫率二萬騎官兵、追競於宇治邊合戰、(○中略)　廿七日戊寅、官兵等燒拂宇治御室戶、是三井寺衆徒依構城郭也、(○中略)　六月廿七日戊申、三浦次郞義澄(義明二男)千葉六郞大夫胤賴(常胤六男)等、參向北條、日來祗候京都、去月中旬之比、欲下向之剋、依宇治縣合戰等事、爲官兵被抑留之間、于今遲引、爲散數月恐鬱參入之由申之、日來依番役所在京也、

〔吾妻鏡(六)〕文治二年三月十三日辛卯、關東御分國國乃貢、日者依朝敵征伐事頗懈緩、然者被免以前

分、自今年可合期沙汰之由所被申京都也、

諸國濟物事、治承四年亂以後至于文治元年、世間不落居、先朝敵追討沙汰之外、暫不及他事候之間、諸國之士民、各結官兵之陣、空忘農業之勤、就中關東之武士、爲討手敵人數度合戰、都鄙之往反于今無其隙候、〇中略

三月十三日　賴朝

進上　帥中納言殿〇經房

〔百練抄十二順德〕承久三年五月十五日戊戌、未剋自一院遣官兵被討大夫尉光季、是陸奧守義時朝臣背勅命亂天下政、可被追討之由有議、依爲緣者先被誅光季云々、

〔六波羅御下知〕戚神院領丹波國波波伯部保下司氏澄代良盛、與雜掌親圓相論下司職名田畠、幷刃傷狼藉等事、

如二月十三日不記年號越後禪門狀者、丹波國波々伯部保下司盛經折紙如此、於官兵幷大番者、任先例可令勤仕云々、如寬喜四年二月十九日、守護代眞異部左衞門尉施行者、官兵幷大番役者、任先例勤仕之由、御教書十五日所下給也云々、

莊園兵士

〔碧山日錄〕寬正三年十月廿一日、德政之盜復起、自城外鼓躁而攻洛、官兵禦之、

〔高野春秋十〕十月〇元弘三年十四日、驅催諸莊兵士數十輩、遣志富田、相賀之兩莊、追出根來寺押領之下司等、是依寺務道意僧正之下知也、

藩兵

〔經濟錄七〕武備　日本ノ武士風ニシテ上代ハ如何ナリケン考難シ、中古以來ハ武士タル者ハ皆農夫也、今ノ世ノ鄕士ト云者ノ如シ、常ニ鄕里ニ住シテ農ヲ業トシ、富ル者ハ弓馬武藝ヲ心懸、山野ニ遊テハ鳥獸ヲ逐ヒ、川澤ニ入テハ魚鼈ヲ捕リ、或ハ馬ヲ馳、或ハ水ヲ游ギ、險阻ヲ涉リ、勞苦ニ慣テ、筋骨モ堅固ニ、行步モ壯也、貧者ハ平日身ヲ耕作ニ苦シメ、寒暑ヲ冒シ勤勞スル故ニ、如何ナ

ル難澁モ能ク忍ブ、是世ノ風也、〇中略或ハ語ルヲ聞ニ、薩摩ノ國内ニ外城ト云者四十八所アリテ、一城ニ武夫ノ數少キハ二三百、多キハ七八百アリ、是ヲ均クシテ一城ニ五百計リ也、四十八所ヲ計算スレバ二萬餘ノ武士也、皆鄕士ニテ、常ニハ農ヲ業トスト云、又土佐ノ國ニハ長曾我部ガ係類三百人、皆鄕士ニテ今ニアリ、俗ニ是ヲ一領具足ト云、箇樣ノ類コソ古ノ武士ノ餘風ナルベケレ、當代ニハ八王子ノ千人衆バカリハ、田舍ニ住テ農ヲ事トシ、軍役ノ時ニハ長槍ヲ提テ出ルナレバ、古ノ兵ヲ農ニ寓スルニ依レリ、千人衆ハ少ノ藏俸ヲ給レドモ、田土ニ在テ耕作ヲ事トスル故ニ、生產匱シカラズ、父母妻子ヲモ優ニ養フ、都下ニ仕フ同心中間ノ類ハ、藏俸ノ外ニ何モ產業ナク、且繁華ノ地ニ居テ、衣食奉養奢侈ヲ成シ、四時ニ隨テ安逸ヲ常トスル故ニ貧窮ヲ苦ミ、父母妻子ヲモ養ヒカヌル者甚多シ、此類ノ輩ハ手足モヤハラカニ、勞事ニモ堪ズ、武夫ノ本意ヲ失テ、軍事ノ用ニ立ベシトモ思ハレズ、然レドモ今ノ世ニ國家ヲ經營シ、武ヲ以守ラントナラバ、旗本ノ諸士以下ヲ悉ク廿里ノ内ノ田野ニ居シメテ、衞士衞卒ハ三旬五旬ナド日數ヲ定テ、東土ニ勤番セシメ、其餘暇ニハ在所ニテ農業ヲ務メ、弓馬武藝ヲ習ヒ、射獵釣漁ニ遊樂シ、鄕士ノ風ヲ學ババ、三五年ノ内ニハ筋骨固ク、行履モ嚴ニナリ、公家ノ如ク婦女ノ如クナル風儀失テ、眞ノ武士ト成ルベシ、左モアラバ縱ヒ武ヲ習フコト粗略ナリトモ、今ノ武藝ヲ盡シタル士ヨリモ勝ル處有ベシ、是武道ヲ古ニ復ス術也、又今ノ武夫ノ貧窮ヲ救フ道モ之ニ勝ルコトアルベカラズ、

〔有德院殿御實紀附錄三〕享保二年より三年にいたり、長崎ちかき海上にあやしき舟見えしことありしが、いかにも海賊の樣して、名をば八幡といふよしつげ來れり、よりて豐前小倉の城主小笠原右近將監忠雄に、はやく人數を出し追擊べしと命を下され、筑前長門の人數も忠雄が下知に應ずべしと仰下さる、〇中略二月十五日の夜丑刻、若松の海岸に屯せし三國の兵卒の中より、炮術に精しきものをえらむで小舟にのせ、其數六十艘ばかり、夜更て白島近くこぎよせ、沖にかゝ

りたる賊船の側近くよりて、俄に數百の鐵炮をつるべ放ちけるに、事不意におこりしかば、賊ども碇とりあぐるいとまもなく、周章ふためくを、先舟ばたにありし賊五六人、時の間に打倒す、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十二月、京都萌變ニ就テ早飛脚江戶ニ到著ス、

一去九日晝頃、京都守護職所司代幷星野備後守始め、不ㇾ殘御役御免、薩州土州藩兵一萬五千人にて京都相固め、御所へは關東の者一人も立入事不ㇾ相成候由、爲ㇾ後詰長州兵士五大隊出張の由、右に付公方樣卽刻殿中詰合、御役人武役の向始め、其儘致ㇾ御供二條御城へ還御可ㇾ爲ㇾ遊候處、何故か暫時御差止相成候趣の由、○中略

十二月十四日夕七時

柳營ニ於テ閣老京師萌變ノ趣ヲ演達ス

美濃守殿○稻葉正邦、老中、壹岐守殿○小笠原長行、老中、兵部少輔殿演達之覺

去る十日十一日、仕立早飛脚到來、京師の萌變不ㇾ容易、○中略早速兵隊不ㇾ爲ㇾ登候ては、旦夕に迫候間、夫々見込の趣、無ㇾ腹臟ㇾ可ㇾ申上ㇾ候、

右は萬石以上以下御役人總出仕被ㇾ仰渡ㇾ

〔嘉永明治年間錄十七下〕慶應四年五月十五日、官軍擊テ上野屯集ノ徒ヲ平定ス、

上野山內屯集の賊追討として、未明より各藩の兵隊大下馬に相揃ひ、各隊繰出す、山兵忽ち敗走し、上野山內悉く灰燼となり、夕七ツ半時凱陣す、

廿三日、官軍賊徒ト武州飯能ニ戰フ、

廿二日、賊兵八王子道逃遮斷の爲、筑前兵隊直竹へ相備、秩父道逃遮斷の爲川越兵隊秩父路へ相備、日光道逃遮斷の爲、筑前兵隊鹿山へ相備へ、筑前筑後は賊窟橫擊として、双柳より進み、備前佐土原大村は野田より正面へ相進候樣軍配成る、

〔陸奧話記〕于時頼時聟散位藤原朝臣經清、平永衡等、皆叛與、以私兵從將軍、悉軍漸進、將到衣川之間、永衡被銀冑、有人說將軍曰、○中略客曰、公露赤心欲事將軍、必覓公、不若讒口未開之前、叛走從于安大夫、獨爲忠功之時、噬臍何逮焉、經清曰善、則構流言驚軍中、○中略於是經清等屬大軍擾亂之間、將私兵八百餘人走于頼時矣、

〔今昔物語二十五〕平維茂罸藤原諸任語第五

其ノ國○陸奧ニ平維茂ト云者有ケリ、○中略亦其時ニ藤原諸任ト云者有ケリ、○中略此ノ二人墓无キ田畠ノ事ヲ諍テ、○中略共ニ愁ノ憤リ不止シテ、互ニ不安ラ思テ有ル程ニ、○中略各ノ軍ヲ儲テ可合戰議ニ成ヌ、其後ハ牒ヲ通ハシテ、日ヲ定テ其野ニテ合ハムト契ル、維茂ガ方ニハ兵三千人許リ有リ、諸任ガ方ニハ千餘人有ケレバ、軍ノ員モコヨナク劣タリ、而レバ此ノ戰ヒ止メテムト、諸任云テ常陸國様へ赴ニケレバ、維茂此ヲ聞テ然レバコソ、我ニ手向ハシテムヤナド息啳テ、日來有ケル程ニ、集タリケル兵共モ暫コソ養ケレ、遂ニ久ク成ヌレバ、各要事有ナド云テ、皆本國ニ返リヌ、

〔百錬抄五鳥羽〕寬治五年六月十二日、給宣旨於五畿七道、停止前陸奧守義家隨兵入京、幷諸國百姓以田畠公驗、好寄義家朝臣事、件由緒、藤原實清與清原則清、相論河內國領所之間、義家朝臣與舍弟義綱互權、兩方爭威之間、欲企攻伐、天下之騷動莫大於此、

〔神皇正統記後鳥羽〕鳥羽院の御代にや、諸國の武士の源平の家に屬することをとゞむべしといふ制符たび〳〵ありき、源平ひさしく武をとりてつかへしかども、ことあるときは宣旨をたまはりて、諸國のつはものをめしぐしけるに、近代となりてやがてかたをいるゝやからおほくなりしによりて、こゝの制符はくだされき、はたして今までの亂世の基なればいひがひなきのことになりにけり、

〔讀史餘論　二〕外戚の權を專らにせしより、執柄の職をもて、我家の物となして、自らこれを其子弟に讓るに至れり、されば朝廷にあらゆる卿相、皆々其門葉にあらずといふ事なし、ことごとく皆その譜第をもて其官其職をしりしかば、かの將帥の職も又その譜第をもて任せしほどに、つゐにいはゆる世官世族となる、されば又それに屬せし兵も、又譜第の屬兵となりしかば、鳥羽の比ほひ、源平に屬すべからずと、頻りに、制符を下されしなり、源平兩氏又兵權を解むとおもひ給はゞ、これを解べき道塞なからざらむや、（後漢光武の功臣の兵權をとかれし、宋の大祖の杯酒の間に、兵權を解れしの類のごときなり、）其よりて來る所を、きわめずして、たゞにこれを制せられしは、兩氏憤をふくむの媒にあらずや、○中略これを論ずるに、天下終に武家の世となれる事は、そのよる所、藤氏外戚の權を專らにせしによれりとぞ見へたる、

〔古事談　一　王道后宮〕六條修理大夫顯季卿、與刑部丞義光相論所領、○中略不日書避文、取具劵契與義光了、義光有喜悅之色、○中略一兩年之後、匠作自鳥羽殿入夜退出、無共人、綫雜色兩三人也、自作道之程帶甲冑之武士等五六騎許、在車之前後不堪怖畏之情、以雜色令尋問之處、武士等云、入夜無御共人御退出、仍自刑部丞殿爲御送所以進也云々、

〔平家物語　二〕ほうくわの事
其後大臣○平重盛ゑゆめの判官もり國を召て、重盛こそけさよりべつして、天下の大事を聞出したんなれ、我を我と思はんずる者共は、ものゝぐしていそぎ參れと、もよほせとの給へば、はせまはつてひろうす、おぼろげにてはさはぎ給はぬ人の、かやうのひろうの有は、誠に別のゑさいの有にこそとて、我もく と馳參る、淀、はづかし、うぢ、おかのや、ひの、くわんゑゆじ、だいご、おぐるす、梅津、かつら、大原、ゑづ原、せれうの里に、あふれゐたる兵共、或は鎧きて、いまだ甲をきぬも有、或は矢おふていまだ弓をもたぬも有、かた鐙ふむやふまずにて、あはてさはいではせ參る、小松殿にさ

農兵

はぐ事有と聞えしかば、西八條に、す千ぎ有ける兵共、入道〔〇平清盛〕にはかう共申も入ず、さやめきつれて、皆小松殿へぞはせたりける、〔〇中略〕小松殿には盛國承はつて、ちやくたう付たりけり、はせ參じたる侍共、一萬よきとぞ去るしける、

〔碧山日錄〕寛正三年十月廿五日、盜燒㆓京城㆒、四邊鳴㆓鐘鼓㆒、吹㆓筒角㆒、大騷動、細川之兵守㆓城北門㆒、山名一色土岐之兵、備㆓南路之盜㆒、京極赤松之兵、禦㆓東道㆒、而大退㆓盜寇㆒、掠㆓邊境㆒、不㆑獲㆑入㆑城也、

〔制度通七十二〕兵制並ニ本朝軍團ノ事

兵制ノコト、古ヘハ軍兵ヲ百姓ノ内ニ寓シテ、民ノ外ニワケテ武士ヲ養フコトナシ、コレヲ農兵ト云、

〔嘉永明治年間錄十三下〕水府ノ浪士常州鹿島根本寺ニ屯集ス

今茲元治元四月に至り、天狗連の者共、同國小栗村にて隊伍を整へ、近鄕近國を橫行し、攘夷鎖港を名として、富有の者へ金策を申付、諸人是が爲に難儀いふ計りなし、是より先故源烈公農兵引立の爲め、領內所々へ文武敎導館立置れたる所、彼の天狗連の者共、其稽古場を屯所となし、〔〇下略〕

〔元治記事六〕乍㆑恐以㆓書取㆒奉㆓申上㆒候

一松平大炊頭殿儀、當〔〇元治元年〕八月十日朝片倉宿出立いたし、水戸中納言樣御名代之趣を以、水戸表へ入城可㆑致皆相巧、武田岡田三木等之者、鄕士之兵ども貳千人餘召れ、大炊頭殿前後警衛いたし、水戸下町邊〔江〕相向繰込候處、水戸諸生方下町七軒町邊〻大砲打懸幷に小筒等澤山に打かけ候に付、農兵ども四百人餘打殺され候に付、大炊頭殿義始め武田岡田三木等之もの、漸々水戸臺町藥王院〔江〕逃込候故、〔〇下略〕

〔御書付留十五〕寅〔〇慶應二年〕十一月十四日御同人御渡　御勘定奉行　關東郡代〔江〕

覺

諸國御代官所、農兵御取建相成候間、得其意、取建方仕法等、早々取調可被相伺候事、

〔嘉永明治年間錄十三下〕賊徒信州路ニ到ルニ就キ、諸藩出陣ノ景況、某氏書翰ノ拔抄、

上田藩より書狀の寫、○中略人數の外、領分中獵師共百五十人、鹽尻組農兵の者共百十五人、獵師幷農兵の者共は、十八日より追々繰出し申候、百十五人農兵の者共、何れも村役人割番、其外庄屋或は身元相應の者にて、兼て非番の節、城內外へ固め可致者にて、戰場へは不罷出候者共故、一統帶刀にて鐵砲持參、丸堀足輕稽古場へ爲相詰、御預り浪人圍の內へ二十人宛差出し、番士の外に相固めさせ申候、

市兵

〔鹽尻三十二〕筒井氏はもと浮屠氏にして、興福寺に供すべきものなりしを、中世亂に乘じ武を習ひ、大名となり、戰闘を事とし、貫々どもを都而我令に隨がはしむる樣にせし、當時本願寺光佐と同じく、驕り我儘になりし故也、筒井が驕奢にして無道也しを、南都の商人恨腹立て叛せし中にも、椿井町の揚や主殿、藤屋兵衞尉、鴈金屋民部等、殊に富商なりしかば、一揆の將となり、興福寺六萬の衆徒二千餘人、其外浪人及び法師町人百姓等、都合壹萬餘の勢を以て、筒井氏と戰ひし事有、此時南都の民家多く燒亡しける、町人の合戰は、此等歟始めなるべき、

〔信長公記首〕一清洲の並三十町隔おり津の鄕に正眼寺とて會下寺有、可然構之地也、上郡岩倉より取出に可仕之由風說在之、依之清洲之町人共かり出し、正眼寺之藪を切拂候はん之由にて、御人數被出候へば、町人共かずへ見申候へば、馬上八十三騎ならでは無御座候と申候、御敵方より人數を出し、たん原野に三千計備候、其時信長かけまはし、町人共に竹やりをもたせ、御後をくろめさせられ候て、足輕を出しあひしらひ給ふ、

野兵

〔運步色葉集乃〕野伏フシ

〔帝王編年記〕十三仁明 承和五年戊午、天皇十二月、〇中略 令行御佛名、而僧一口不足之處、一人僧臥内野芝上、相尋處、僧云、可被行御佛名之由傳承、爲聽聞欲參、待日暮暫臥、是也、芝上、卽召此僧畢、號野臥是也、

〔拾遺和歌集〕九雜下 健守法師、佛名ののぶしにてまかりいでゝ、侍けるとし、いひつかはしける、

源經房朝臣

山ならぬすみかあまたにきく人は野ぶしにとくも成にけるかな

返し　健守法師

やまぶしものぶしもかくて心みつ今はとねりの閨ぞゆかしき

〔居龍工隨筆〕野ぶし、山伏とも、出家を云なり、出家は野にふし、山にふすが本意なるが故なり、源氏に、山伏の身には松風をのみ聞なれてと、鞍馬の僧都のいはれしなり、近世根來組などいへるも、もと山伏なれば、野武士を云し、野伏といへるかもしらず、

〔倭訓栞〕前編二十二乃 のぶし　野伏の義、山伏といふに意同じ、〇中略 主なき兵をいふも義同じ、

〔梅松論〕上 かゝる處に、守山邊より野伏ども山野に走ちりて敗軍を追詰けるほどに、討取れ疵を蒙る者數をしらず、其夜〇元弘三年五月八日 は近江國觀音寺を一夜の皇居とす、

〔太平記〕七 千劒破城軍事

去程ニ吉野、戸津河、宇多、內郡ノ野伏共、大塔宮ノ命ヲ含テ相集事、七千餘人、此ノ峯彼ノ谷ニ立隠ヲ、千劒破寄手共ノ往來ノ路ヲ差塞グ、依之諸國ノ兵ノ兵粮忽ニ盡テ、人馬共ニ疲レケレバ、轉漕ニ怺兼テ、百騎二百騎引テ歸ル處ヲ、案內者ノ野伏共所々ノツマリツマリニ待受テ、討留ケル間、日々夜々ニ討ルヽ者數ヲ知ズ、

〔祇園執行日記〕天文元年八月十二日、下京上京ノ日蓮宗、野伏共、ウチマハリ心々セイツカイシ、野

伏ヤガテ引候、

〔豐鑑高松一〕明知光秀軍破ぬるを見て、○中略坂本のたちへぞ落行ける、常に人通ふ道はをのづからとがむることもやと、道を替て、伏見の北の方、大龜谷に掛り、山中にて物具をばぬぎ捨、勸修寺を過、小栗栖を通りしに、野伏どものこゑして、夜更馬の音するは、如何樣にも落人にこそあらめ、いざ物具とらんといふもあり、よしなしといふもありけり、水無月○天正十年六月十三日、月はたけのぼりぬれど、いたうくもりてくらかりけり、里の中道の細きを出行に、垣ごしにつきける鑓、明知光秀が脇にあたりぬ、されどさらぬ體にて掛通りて、三町計ゆき、里のはづれにて、馬よりころび落けり、隨ひし者立より、こはいかにといふに、里の中の野伏のこゑにて、つき出せし鑓あたりぬ、其にていはゞ野伏も猶ふたひ來べきと思ひ、さらぬ樣にて是まで過ぬ、今は行べき樣にもあらず、首を切て顏を深くかくすべしとて絕入けり、

〔歷代鎭西要略七〕永祿四年七月十八日、親賢鑑連將精兵三千、向宇佐宮、擊破大宮司野。兵。、

〔當流軍法功者書上〕武邊八樣之事

武邊ハ第一運、第二心、第三大將、第四道具、第五力、第六論、第七盜、第八害ヲ可取、

〔當流軍法功者書上〕武邊ヲ心掛武士之事

武邊ヲ心掛ル武士ハ、城郡ノ案內ヲシリ、他國ノ大將、物頭ノ姿ヲ繪圖ニシテ持ナリ、是事大將モ羽武者モ同、

〔雲州消息中末〕請兵士一人事

右兵士事、謹以奉候畢、可令參勤之由、申含靑侍一人畢、定令參勤侍歟、指非精。兵。、重代名物也、頗可謂一人當千歟、奈良坂素奇佐之所也、尤可有御用意也、以此旨可然之樣可令披露之狀如件、

即時　平

〔倭訓栞前編由三十五〕ゆみ〇中略　武士を弓執といひ、よく射者をさして精兵といひならはせり、

〔今昔物語二十八〕豐後講師謀從鎭西上語第十五

今昔豐後ノ講師口口ト云フ僧有ケリ、講師ニ成テ國ニ下テ有ケルニ、任畢ニケレバ亦任ヲモ延ベムト思、可然キ財共船ニ取リツンデ京ヘ上ケルニ、相知レル者共ノ云ケル樣、近來海ニハ海賊多カナリ、其ニ可然兵士モ不具テ、物ヲバ多船ニ取リツンデ上リ給フハ、糸心幼キ事也、尙可然カラム者共ヲ語ヒテ、具シテ將御セト、〇下略

〔朝野群載太宰府二十〕擊破刀伊國賊徒狀

太宰府解　申請官裁事

言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀

右件賊船五十餘艘來著對馬島、劫略之由、彼島去月廿八日解狀、今月七日到來、卽載在狀、言上先了、〇中略同十三日賊徒至肥前國松浦郡、攻劫村閭、爰彼國前介源知率郡內兵士合戰、中矢者數十人、生得者一人、賊船不能進攻、遂以歸却、〇中略

寬仁三年四月十六日　　正六位上行大典上毛野朝臣師善〇以下署名略

〔奧州後三年記上〕眞衡淸原おほきにいかりて、たちまちに諸郡の兵を催して秀武吉彥をせめんとす、兵雲霞のごとく集れり、日來をだやかに目出たかりつる六郡奧たちまちにさはぎのゝしる、

〔百練抄後嵯峨十五〕寬元元年六月十四日己未、祇園御靈會也、於三條京極兵士家前、武士與宮仕法師有鬪諍事、神民等企狼藉、武士訴申之間、解其職、給六波羅云々、

〔十訓抄三〕伏見修理大夫俊綱の家にて、人々水上月と云事をよみて講じけり、時に田舍より上たる兵士、中門の邊にて聞けるが、靑侍をよびて、今夜の題をこそ仕りて候へと云侍れば、與有事なり、いかゞといへば、

水や空空や水共見え分ずかよひて澄る秋のよの月、侍來て此由を申、人々驚ほめて詠吟して
はちあへりけり、

古事類苑

兵事部七

健兒

鎭兵

大宰府兵

僧兵

女兵

古事類苑

兵事部七

健兒

健兒ハチカラビトト云ヒ、又コンニト云フ、後ニコンデイト云フ、日本書紀皇極天皇元年ノ條ニ見エタルヲ始トス、聖武天皇ノ天平十年ニハ、諸國ノ健兒ヲ停メシコトアリ、淳仁天皇ノ天平寶字六年ニハ、伊勢、近江、美濃、越前四ヶ國ノ郡司ノ子弟、及ビ百姓ノ年二十以上四十以下ニテ、弓馬ニ練習セル者ヲ以テ之ニ充ツ、後ニハ勳位アル者ヲ用キ、或ハ白丁ヲ用キシコトアリ、

凡ソ健兒ハ、延喜民部式ニハ、諸國ノ健兒ノ徭役ヲ免シ、畿内ハ特ニ課役ヲ免ス、其食糧ハ畿内ハ乘田ノ地子ヲ用キ、餘國ハ國營ノ健兒田ヲ以テ之ニ充テタリ、而シテ其掌ル所ハ兵士ニ同ジク、其人員ハ延暦十一年ノ格ニハ、諸國ヲ通ジテ三千百五十五人ト爲シ、延喜兵部式ニハ三千九百六十四人ト爲セリ、

名稱

〔伊呂波字類抄 古 人倫〕健兒 コンニ 諸國健兒

〔倭訓栞 前編 古 九〕こんでい　健兒の轉音也、日本紀にはちからびとゝ訓せり、唐六典に天下諸軍有二健兒一と見ゆ、日本にも其製を用ゐられたり、平家物語にこんでいわらはといへり、今時武家の足輕の類也とぞ、

〔新猿樂記〕四郎君受領郎等刺史執鞭之圖也、〇中略是以凡廳目代、若濟所案主健兒所、〇中略不レ望自所ニ

懸頂、○下略

〔貞丈雜記 家作十四〕健兒所と云は、中間の居る所也、下學集に見えたり、健兒の字、日本紀卷廿四皇極天皇元年六月の紀に見えたり、チカラビトとよむ也、又杜詩一集の注に、健兒隨時の軍卒也とあり、

〔下學集 家屋上〕健兒所中間之所居也

〔運歩色葉集 古〕健兒所中間所居

始見

〔日本書紀 皇極二十四〕元年七月乙亥、饗百濟使人大佐平智積等於朝、○註略乃命健兒、相撲於翹岐前、○翹岐百濟人

〔大日本史 職官三〕按、日本書紀、皇極帝元年、健兒始見、然當時恐未立爲職名也、

〔續日本紀考證 五〕按、唐六典、天下諸軍有健兒、皆定其籍之多少、與其番之上下、每季上中書門下、皇朝因之、諸道置健兒、未詳其始、

〔唐六典 兵部五〕天下諸軍有健兒、

舊健兒在軍、皆有年限、更來往、頗爲勞弊、開元二十五年勅、以爲天下無虞、宜與人休息、自今已後、諸軍鎭量閑劇利害、置兵防健兒、於諸色征行人內及客戶中召募、取丁壯情願充健兒、長住邊軍者、每年加常例給賜、兼給永年優復、其家口情願同去者聽、至軍州各給田地屋宅、人賴其利、中外獲安、是後州郡之間、永無徵發之役矣、

皆定其籍之多少、與其番之上下、

簡點

〔續日本紀 淳仁二十四〕天平寶字六年二月辛酉、簡點伊勢、近江、美濃、越前等四國郡司子弟、及百姓年四十已下、二十已上、練習弓馬者、以爲健兒、其有死闕及老病者、卽以與替、仍准天平六年四月二十一日勅、除其身田租、及雜傜之半、其歷名等第、每年附朝集使、送武部省、

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡〔年號及國郡不詳〕

戸大友但波史族吉備麻呂年卌五　正丁　健兒。

○按ズルニ、下ニ載スル所ノ天平二年六月ノ計帳ニ、吉備麻呂ヲ以テ歳四十ト爲ス、此ニ據リテ之ヲ推セバ、是神龜二年ノ帳タルヲ知ル、

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

古市郷〔○近江國滋賀郡〕

戸主大友但波史〔○史下恐脱族字〕吉備麻呂戸手實合口

合差科戸主大友但波史吉備麿年卌九　正丁　健兒

〔續修東大寺正倉院文書九〕天平二年六月帳

戸主大友但波史族吉備末呂年卌　正丁　健兒

〔續修東大寺正倉院文書九〕天平三年六月手實

戸主大友但波史族吉備麻呂年卌一　正丁　健兒

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

戸主大友但波史族吉備麿年卌二　正丁　健兒

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

合差科戸主大友但波史族吉備麻呂年卌三　正丁　健兒

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

合差科戸主大友但波史族吉備麻呂年卌四　正丁　健兒

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應勳位人差健兒事〔除太宰陸奧出羽佐渡等府國也〕

右得美濃國解偁、被太政官去六月十一日符偁、外散位者、便令直國、駈使雜事、量事閑繁、令申其數、餘令續勞物送京庫者、而有勳位人、身雖強壯、或乏家資、無由續勞、望請、停差白丁、差勳位人、結番上下、以預考帳、請官裁者、被大納言從三位神王宣偁、奉勅依請、諸國亦准此行之、

延暦十六年十一月廿九日〈○廿九日、下文作十七日、〉

太政官符

應預考勳位健兒事

右撿案内、太政官去延暦十六年十一月十七日下諸國符偁、得美濃國解偁、太政官同年六月十一日符偁、外散位者、便令直國、駈使雜事、量事閑繁、令申其數、餘令續勞物送京庫者、而有勳位人、身雖強壯、或乏家資、無由續勞、望請、停差白丁、差勳位人、結番上下、以預考帳者、大納言從三位神王宣、奉勅依請、諸國亦宜准此、式部兵部等省、相共通計、滿前件數、

延暦十九年二月廿三日

用白丁

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿三年九月癸巳、丹波國言、依格差勳位衞護府庫、而白丁之衞、唯卅日、勳位所直、百卅日、有位白丁、勞逸不均者、制、宜以白丁爲健兒、

〔日本後紀 二十 嵯峨〕弘仁元年九月甲辰、播磨國言、據格可以勳位人差點口兒、而國内勳位、或死或逃、見在之徒、口口老疾、不堪防守、伏望差白丁補其闕、口之、

行試

〔三代實錄 十三 清和〕貞觀八年十一月十七日戊午、勅曰、〈○中略〉如聞所差健兒、統領、選士等、苟預人流、曾無才器、徒稱爪牙之備、不異蟷螂之衞、況復不教之民、何禦非常之敵、亦夫十歩之中必有芳草、百城之内寧乏精兵、宜令同國府〈○能登、因幡、伯耆、出雲、石見、隱岐、長門、大宰府〉等、勤加試練、必得其人、〈○又見類聚三代格、享祿本〉

職掌

〔政事要略 五十九 交替雜事〕弘兵格云、應免調健兒事、右得大和國解偁、依太政官去延暦十一年六月十四日符、差件人等、令守衞國庫、以五人爲一番、卽分卅人作廿四番、一人所直六十箇日、而依延暦十四年

閏七月十五日勅書、減省雜徭、卅日爲限、緣此分五人爲兩番、人數減少、不足分衞、更簡點之加一倍者、恐傜丁闕少、不堪其員、望請准承前兵士免調者、被大納言從三位神王宣、奉勅依請、山城、河內、攝津、和泉亦准此、

延曆十六年八月十六日

〔文德實錄九〕天安元年四月庚寅、始置近江國相坂、大石、龍花等三所之關剗、分配國司健兒等鎭守之、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月廿六日甲戌、先是出羽國司言、太政官去年六月十六日下國符偁、彼國解偁、兵士鎭兵總一千六百五十人、鎭兵六百五十人、〇中略而承前國吏、以健兒爲戍兵士鎭兵、无置一人、〇下略

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀上

是月拔穗使、〇中略上道向都、其行列健兒四人各執白木、左右列立、後健兒亦同

〔延喜式五神祇〕凡遣鑄錢司舊錢、路次國差加勇幹健兒遞送、若致亡失者、令當國司塡納、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年四月甲寅、免諸道健兒、儲士、選士、田租幷雜傜之半、

〔延喜式二十二民部〕凡諸國健兒、皆免傜役、唯志摩、駿河、武藏、飛驒、上野、下野、佐渡、播磨、長門、阿波、讃岐等國免傜、畿內免課役、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

一應給健兒馬子事

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣解偁、天平五年十一月十四日勅符偁、兵士三百人、以爲健兒者、自爾已來、以中男二人宛健兒一人馬子、雖有國例、未見格式、然不虞之支擬、唯在健兒、養之之道、不可不優、請依舊給之者、被右大臣宣偁、奉勅依請、

大同五年五月十一日

〔延喜式民部二十二〕凡諸國健兒、略〇中其食料用桑田、〇桑田恐乘田誤地子、餘以國營健兒田充之、出羽國出擧給之、隱伎國以國造田三町地子充之、

〔延喜式主稅二十六〕諸國出擧正稅公廨雜稻　出羽國略〇中健兒糧料五萬八千四百十二束、

〔延喜式主稅二十六〕凡勘租帳者、皆據當年帳、略〇中健兒田、略〇中並爲不輸租田、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一應給健兒百人糧事

年中料稻一萬一千三百卅八束、人別日三把二分、

右得征夷將軍參議從三位左衞門督兼陸奧出羽按察使勳四等文室朝臣綿麻呂解偁、出羽國司解偁、依民部省延暦廿年六月廿九日符旨、准射田數、割置乘田、以其地子可給糧料、而依無射田不得宛行、望請、用申官乘稻三萬七千五百束之內、每年出擧、以其息利准陸奧國健兒、永給件糧者、使加覆勘、所申有實者、依請、

以前被右大臣宣偁、奉勅如件、

弘仁五年正月十五日

諸國健兒

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應差健兒事

大和國卅人　河內國卅人　和泉國廿人　攝津國卅人　山背國卅人　伊賀國卅人　伊勢國百人　尾張國五十人　參河國卅人　遠江國六十人　駿河國五十人　伊豆國卅人　甲斐國卅人　相摸國百人　武藏國百五人　安房國卅人　上總國一百人　下總國一百五十人　常陸國二百人　近江國二百人　美濃國一百人　信濃國一百人　上野國一百人　下野國一百人　若狹國卅人　越前國一百人　能登國五十人　越中國五十人　越後國一百

人　丹波國五十人　丹後國卅人　但馬國五十人　因幡國五十人　伯耆國五十人　出雲國一百人　石見國卅人　隱岐國卅人　播磨國一百人　美作國五十人　備前國五十人　備中國五十人　備後國五十人　安藝國卅人　周防國卅人　長門國五十人　紀伊國卅人　淡路國卅人　阿波國卅人　讃岐國五十人　伊豫國五十人　土左國卅人

以前被右大臣宣偁、奉勅、今諸國兵士、除邊要地之外、皆從停廢、其兵庫鈴藏、及國府等類、宜差健兒以宛守衛、宜簡差郡司子弟、作番令守、

延暦十一年六月十四日

〔延喜式二十兵部〕諸國健兒

山城國卅人　大和國七十人　河内國卅人　和泉國廿人　攝津國卅人　伊賀國卅人　伊勢國一百人　志摩國卅人　尾張國五十人　參河國五十人　遠江國六十人　駿河國五十人　伊豆國卅人　甲斐國五十人　相摸國一百人　武藏國一百五十人　安房國卅人　上總國一百人　下總國一百五十人　常陸國二百人　近江國二百人　美濃國一百人　飛驒國卅人　信濃國一百人　上野國一百人　下野國一百人　陸奧國三百廿四人　出羽國一百人　若狹國卅人　越前國一百人　加賀國五十人　能登國五十人　越中國五十人　越後國一百人　佐渡國卅人　丹波國五十人　丹後國卅人　但馬國五十人　因幡國五十人　伯耆國五十人　出雲國一百人　石見國卅人　隱岐國卅人　播磨國一百人　美作國五十人　備前國五十人　備中國五十人　備後國五十人　安藝國卅人　周防國五十人　長門國五十人　紀伊國六十人　淡路國卅人　阿波國卅人　讃岐國一百人　伊豫國五十人　土佐國卅人

停健兒

〔續日本紀十三聖武〕天平十年五月庚午、停東海、東山、山陰、山陽、西海等道諸國健兒、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

儲士

應ㇾ令㆓兵士帶㆒ㇾ仗事

右得㆓左右京職解㆒偁、太政官去延曆廿年四月廿七日下㆓兩職㆒符偁、奉ㇾ勅、如ㇾ聞左右兩京、掌殊㆓諸國㆒、何者行幸則先駈、尋常則衞ㇾ城、加以差科多ㇾ處、何堪ㇾ濟ㇾ事、宜左右京停㆓止健兒㆒、□ㇾ置㆓兵士㆒者、今兵士健兒、其號各異、所ㇾ掌是同也、職員令云、京職掌㆓兵士器仗㆒、軍防令云、兵士各爲㆓隊伍㆒、便㆓弓馬㆒者、爲㆓騎兵隊㆒、餘爲㆓歩兵隊㆒者、望請□□□條□帶ㇾ仗者、依ㇾ請、

弘仁十年十一月五日

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國天平六年計會帳

天平五年七月　十三日移節度使符壹道（差點儲士并國司郡司等應會集状○中略）

十月　一同日（○二十一日）進上公文貳拾陸巻肆紙（中略）儲士歷名簿一巻（○中略）

一六日進送兵器帳伍巻（中略）儲士歷名帳一巻○

右件公文巻軸附驛申送

〔續修東大寺正倉院文書九〕計帳斷簡

戸主廣末呂年卅六（○中略）

弟吉備麻呂年卅四　正丁　儲人。　上脣　黒子

○按ズルニ、此文書其首ヲ失シタレド、本書載スル所ノ天平二年六月ノ計帳ニ見エタル、近江國志何郡大友但波史族吉備麻呂ノ年齡ヲ推シテ、神龜元年ノ計帳タルヲ知ル、而シテ吉備麻呂ハ本書三十五歲以下ノ帳ニハ、皆健兒トアレバ、儲人ハ健兒ノ豫備ナルガ如シ、又次ニ載セタル續日本紀天平六年四月甲寅ノ條ニハ、健兒ノ下ニ儲士ヲ列ネタリ、儲士ト儲人トハ同一ナルベシ、

〔續日本紀十一聖武〕天平六年四月甲寅、免㆓諸道健兒。儲士。選士、田租幷雜徭之半㆒、

鎭兵

鎭兵ハ、防人ノ如ク諸國兵士ノ中ヨリ徵發シテ、陸奧出羽ノ兩國ニ差遣スル者ナリ、而シテ妻子ヲ伴フヲ得レドモ、日粮一升六合ヲ給セラルヽニ過ギズ、而シテ桓武天皇ノ延暦二十四年ニハ、相模國ヨリ差遣スル鎭兵ハ、徭丁少ナキノ故ヲ以テ、一分ハ勳位ノ者ヲ用キ、一分ハ白丁ヲ用キタリ、

健士ハ有勳者ノ武藝ヲ能クスル者ヨリ取リ、調庸雜徭ヲ免ゼラルヽ制ナリシガ、仁明天皇ノ承和十年ニハ白丁ヨリ取リテ、之ヲシテ城隍ノ修理ニ從ハシメタリ、

始見

〔續日本紀 九 聖武〕神龜元年二月乙卯、陸奧國鎭守軍卒等、願除己本籍、便貫比部、率父母妻子共同生業、許之、

鎭兵額數

〔三代實錄 三十六 陽成〕元慶三年六月廿六日乙酉、正五位下守右中辨兼行出羽權守藤原朝臣保則飛驛奏言、○中略 配當國例兵一千六百五十七人、○中略 鎭兵六百五十人、秋田城司正六位上行左衞門少尉兼權掾清原眞人令望、右近衞將曹從七位下兼行權大目茨田連貞額、正六位上行權大目春海連奧雄、○中略 鎭兵四百五十人加兵士三百五十人、雄勝城司從五位下行權掾文室眞人有房、正七位上行權掾藤原朝臣有式、正六位上行權大目他戶首千與本、從六位下行少目豐岡宿禰繼雄、○中略 鎭兵二百人加兵士二百五十人、○中略 望更賜天使檢察其事、謹以申聞、

〔延喜式 二十八 兵部〕凡鎭兵、陸奧國五百人、出羽國六百五十人、

用勳位人用白丁

〔日本後紀 十二 桓武〕延暦廿四年二月乙巳、相摸國言、頃年差鎭兵三百五十人、戍陸奧出羽兩國、而今徭丁乏少、勳位多數、伏請中分鎭兵、一分差勳位、一分差白丁、許之、

職掌

〔續日本紀 二十九 稱德〕神護景雲三年正月己亥、陸奧國言、他國鎭兵、今見在戍者三千餘人、就中二千五百

人、被官符解却已訖、其所遺五百餘人、伏乞暫留鎮所、以守諸塞、又被天平寶字三〇三作二年符、差浮浪一千人、以配桃生柵戸、本是情抱規避、萍漂蓬轉、將至城下復逃亡、如國司所見者、募比國三丁已上戸二百烟、安置城郭、永爲邊戍、其安堵以後、稍省鎮兵、官議奏曰、夫懷土重遷、俗人常情、今從無罪之民、配邊城之戍、則物情不穩、逃亡無已、若有進趨之人、自願就二城之沃壤、求三農之利益、伏乞不論當國他國、任便安置、法外給復、令人樂遷以爲邊守、奏可、

〔續日本紀光仁三十三〕寶龜六年十月癸酉、出羽國言、蝦夷餘燼、猶未平殄、三年之間、請鎮兵九百九十六人、且鎮要害、且遷國府、勅差相摸、武藏、上野、下野四國兵士發遣、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年閏十二月辛丑、征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言、今官軍一擧寇賊無遺、事須悉廢鎮兵、永安百姓、而城柵等所納器仗軍粮、其數不少、迄于遷納、不可廢衛、伏望置一千人、充其守衛、其志波城、近于河濱、屢被水害、須去其處遷立便地、伏望置二千人、暫充守衛、遷其城訖、則留千人、永爲鎮戍、自餘悉從解却、〇中略其鎮兵者、以次差點、輪轉復免者、並許之、

〔續日本紀淳仁二十一〕天平寶字二年十二月丙午、徵發坂東騎兵、鎮兵、役夫及夷俘等、造桃生城小勝柵、五道俱入、並就功役、

待遇

〔續日本紀聖武十〕天平元年九月辛丑、陸奥鎮守將軍從四位下大野朝臣東人等言、在鎮兵人勤功可錄、請授官位、勸其後人、勅宜一列三十人各進二級、二列七十四人各一級、三列九十六人各給常布、

〔日本後紀嵯峨二十一〕弘仁二年七月乙未、出羽國鎮兵賜復三年、以在邊戍家業絶亡也、

〔類聚國史百五十九田地〕嵯峨天皇弘仁三年七月癸酉、陸奥國言、屯田元二百町、伏望定一百町、爲鎮守儲者、許之、

〔延喜式二十六主税〕凡五畿內伊賀等國地子混合正税、其陸奥充儲糒幷鎮兵粮、

〔類聚國史八十四政理〕大同五年五月辛亥、東山道觀察使正四位下兼陸奥出羽按察使藤原朝臣緒嗣言、云云、國以民爲本、民以食爲命、而鎮兵三千八百人、一年粮料五十餘萬束、因此百姓疲弊、倉庫空虛、如無蓄積、何防非常、加以往年每有征伐、必仰軍粮於坂東國、伏請、以坂東官稻充陸奥公廨、以陸奥公廨留收官庫、然則公私得所、實愜便宜、並許之、

〔日本紀略桓武〕延曆廿一年正月庚午、越後國米一萬六百斛、佐渡國鹽一百廿斛、每年運送出羽國雄勝城、爲鎮兵粮、

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月廿六日甲戌、先是出羽國司言、太政官去年六月十六日下國符偁、彼國解偁、兵士鎮兵總一千六百五十人、鎮兵六百五十人、每人充日粮一升六合、或二城雄勝○秋田兵士一千人、每人充日粮八合、分結六番、直於國府、而承前國吏、以健兒爲戍、兵士鎮兵无置一人、仍令諸郡進勇敢者、但鎮兵者、舊有長上之料、无煩調練、兵士者、唯給番上之粮、有妨敎習、由是兵士千人、給長上之粮、配戍一府二城、以備非常、請三箇年將蒙許聽、勅聽二箇年、而今年十二月滿限、始自明年復舊、望請重被許二箇年、勅聽一年、

禁私役鎮兵

〔續日本紀三十七桓武〕延曆二年四月辛酉、勅曰、如聞比年坂東八國、運穀鎮所、而將吏等、以稻相換、其穀代者輕物送京、苟得無耻、又濫役鎮兵、多營私田、因茲鎮兵疲弊、不任干戈、稽之憲典、深合罪罰、而會恩蕩且從寬免、自今以後不得更然、如有違犯、以軍法罪之、宜加捉搦、勿令浸漁之徒、肆其濁濫、

停鎮兵

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符○中略

一停止鎮兵事

合壹仟人膽澤城五百人　德丹城五百人

右得管諸郡司解偁、百姓苦役、無過鎮兵、當戍之年、妻子共赴、絶隣在遠、無所乞貸、身迫公役、不遑耕作、盡賣衣物、僅資妻子、歸鄉之日、裸身露頂、道程僻遠、復無路粮、望其舊居、應无所處、因斯規留奥地、長絶

健士

歸情、山川迂遠、無由撿括、輿地未充、熟郡先竭、職此之由、若停鎮兵、加兵士、民無弊苦、兵得强練者、臣等議量、良有道理、何者番上之役、兵士六十日、調庸半輸、以旬相替、無妨家業、健士九十日、各食公粮、夫婦免租、課役全脱、兼預考例、一日爲番、無長戍之憂、此民之安也、今見定課丁、三萬三千二百九十人、勳七等以下五千六十四人、就中簡點丁壯家業稍可者、令馬兵具備□□□□□□□□□□□兵士、勳彼鎮兵、論其强弱、猶婦女與丈夫、此兵之强也、前番後更、往來相代之間、兵常一倍、隊伍既定、戎具復備、縱有機急、應聲可致、此兵之威也、今停鎮兵、徵兵士、相折用度、年中所剩、四千一百餘束、此用之足也、安民足用、强兵威敵、臣等管見、不敢不奏、○中略以前奉勅、陸奧國司奏狀如前、具任所請、遂勤兵權、不可簡略、

弘仁六年八月廿三日

〔續日本紀 二十九稱德〕神護景雲二年九月壬辰、陸奧國言、兵士之設、機要是待、對敵臨難、不惜生命、習戰奮勇、必爭先鋒、而比年諸國發入鎮兵、路間逃亡、○中略今撿舊例、前守從三位百濟王敬福之時、停止他國鎮兵、點加當國兵士、望請依此舊例、點加兵士四千人、以停他國鎮兵二千五百人、○中略許之、

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

一分番令守城塞事○中略

健士二千人 勳八等已上千五百人 勳九等已上五百人

右分結四番、一月爲番、唯屢經戰場、被蒙勳叙、若同白丁、何以勵後、伏請在戍之間、特免□□□□□□□□□誘士心、

一停止鎮兵事○中略

番上之役、兵士六十日、調庸半輸、以旬相替、無妨家業、健士九十日、各食公粮、夫婦免租、課役全脱、兼預考例、一日爲番、無長戍之憂、此民之安也、○中略

一分配番上兵士一千五百人（兵士一千人 健士五百人）

膽澤城七百人（兵士四百人 健士三百人）　玉造塞三百人（兵士百人 健士二百人）　多賀城五百人（並兵士）

右城塞等、四道集衢、制敵喉領、儻允臣等所議、伏望依件分配、

以前奉勅、陸奥國司奏狀如前、具任所請、遂勤兵權、不可簡略、

弘仁六年八月廿三日

〔續日本後紀十三仁明〕承和十年四月壬戌、陸奥鎮守將軍從五位下御春朝臣濱主言、健士元勳位人也、既脫調庸、亦无課役、承前之例、撰其武藝、特號健士、給粮免租、結番直戍、而勳位悉盡、無人充行、仍任格旨、差行白丁、全給公粮、兼免調庸、人同役異也、請射下健士、准兵士下兵、同令役修理城隍、許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應給七團軍毅主帳卅五人粮米事

國府廿人　鎮守府十五人

右得陸奥國解偁、件軍毅等不顧私業、晝夜勤戍、邊要之備、啻在伊人、方今健士兵士等、全食官粮、結番直任、至于軍□□團□□苦粮食、望請□□□□□□人粮准太宰府統領、以正稅被宛給、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緒宣、奉勅、宜正任□□□依請、

元慶〇下闕

大宰府兵

大宰府ノ兵ハ從來軍團ノ兵士ヲ使役セルヲ、淳和天皇ノ天長三年ニ之ヲ廢シテ、更ニ選士、衞卒、及ビ統領ヲ置ク、蓋シ選士ハ是ヨリ先聖武天皇ノ天平六年ノ史ニ見エタリ、而シテ統

統領選士

領ハ選士ヲ統帥スル者ニテ、陸奥國ノ軍毅ニ準ジテ職田ヲ給セラレ、傔丁ヲ賜ヒ、在戍ノ時ハ日粮二升ヲ給セラル、選士ハ卽チ兵士ニテ、在番ノ時ハ日粮一升五合、鹽二勺ヲ給ヒ、調庸ヲ免ゼラレ、傔丁ヲ賜フ、衞卒ハ雜役ニ從フ者ニテ、一年ヲ以テ交替シ、調庸ヲ免シ、粮、鹽、資丁ヲ給フコト、一ニ仕丁ニ同ジト云フ、

〔伊呂波字類抄 止官職〕統領 在大宰府

〔續日本紀 十一聖武〕天平六年四月甲寅、免諸道健兒、儲士、選士、田租幷雜徭之半、

〔延喜式 二十八兵部〕凡太宰府統領者、待府銓擬補之、其遭喪復任者、亦依府解、

〔延喜式 二十二民部〕凡太宰府幷九國二島選士資丁、賜傔丁一人、

〔享祿本類聚三代格 十八〕太政官符

應廢兵士置選士衞卒事

選士一千七百卅人 分爲四番、番別役卅日、年役□□十日、

府四百人 先依官符置

九國二島、一千三百卅人、

右得太宰府奏狀偁、兵士名備防禦、實是役夫、其窮困之體、令人憂煩、麾下嚴勅、禁制他役、時代既久、曾无遵行、其故何者、兵士之賤、无異奴僕、一人被點、一戶隨亡、軍毅主帳、校尉旅帥、各爲虎狼、更相徵索、唯求苟不合、乘勢生疵、當有違闕、責庸倍多、唯利惟視、無憚憲章、因斯强士耻名、懦夫規責、無告之人、猶不得免、裸身蓬頭、知用鎌鉾、弱臂瘦肩、何任彎弓、無粮而來、尋卽逃去、寬其窮困、競習生常、依法爲罪、追捕滿獄、由役求食、甘之山野、他役難禁、率斯之漸也、臣等商量、解却兵士、停廢軍毅、更擇富饒遊手之兒、名曰選士、免庸兼賜中男三人、在番時給日粮一升五合、鹽二勺、護府之兵往還□□□□供承之勞、劇於在國調庸並免、賜傔丁二人、此間民俗、甚遠弓馬、但豐後國大野直入兩郡、出騎獵之兒、於兵爲要、向府之程、單行五日、別須給傔丁四人、均平勞逸、假令氣體强壯、衣冠鮮整、雖暴惡之吏、不能關負擔之役、然則田園歸來、招之夫、城府來弓馬之士、

選士統領卅二人　府八人番別二人　六國各四人番別一人　三國二島各二人番別更上

右同前奏狀偁、隊伍之整、必資領帥、今商量依件置之、號曰統領、准陸奧國軍毅、各賜職田二町幷傔丁三人、在戍之時、給日粮二升、護府之兵、往還多苦、用傔之數、一倍給之、選叙把笏、一同軍毅、〇中略以前正二位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅依奏廢置、唯統領者准軍毅、府銓擬其人言上、即令兵部省補任、

天長三年十一月三日

〔三代實錄十六清和〕貞觀十一年十二月五日戊子、先是太宰府言上、往者新羅海賊侵掠之日、差遣統領選士等擬令追討、人皆懦弱、憚不肯行、於是調發俘囚、御以膽略、特張意氣、一以當千、今大鳥示其怪異、龜筮告以兵寇、鴻臚館幷津厨等、離居別處、无備禦侮、若有非常、難以應猝、夷俘分居諸國、常事遊獵、徒免課役、多費官粮、請配置處分、以備不虞、分爲二番、番別百人、毎月相替、交相駈役、其粮料者、諸國所擧夷俘料利稻之內、毎國令運輸、以給其用、至是勅曰、俘夷之性、本異平民、馴御之方、何用恒典、忽離舊居、新移他土、衣食无續、心事反常、則野心易驚、遂致猜疑、宜簡監典有謀略者、令其勾當幷統領選士幹事者以爲其長、勉加綏誘、能練武衞、設有諸國粮運闕如、即須府司廻撥支濟、又以百人爲一番、居業難給、轉餉多煩、宜五十人爲一番、　廿八日辛亥、遣從五位上守右近衞少將兼行太宰權少貳坂上大宿禰瀧守於太宰府鎭護警固、〇中略　是日瀧守奏言、所以置選士設甲冑者、本爲備警急護不虞也、謹撿、博多是隣國輻輳之津、警固武衞之要、而與鴻臚相去二驛、若兵出不意、倉卒難備、請移置統領一人、選士四十人、甲冑四十具於鴻臚、又謹撿、承前選士百人、毎月番上、今以尋常之員、備不意之禦、恐機急之事、實難支濟、請例番之外、更加他番、統領二人、選士百人、詔並從之、〇又見亨祿本類聚三代格

〔三代實錄十八清和〕貞觀十二年六月七日戊子、勅太宰府、置對馬島選士五十人、

〔類聚三代格十五〕太政官符

衞卒

合二條

一請加射田事

右管內諸國所有射田、每郡一町、兵士選士其數稍多、請更加一町、總置二町、一町以賜步射之上手、一町以賜騎射之勝者、庶以勸武藝、〇中略

以前得太宰府解偁、管內諸國乘田多數、望請置上件田、賞以勸人者、右大臣宣、奉勅宜依請、

天應元年三月八日

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應廢兵士置選士衞卒事〇中略

衞卒二百人

右同前〇大宰府奏狀偁、此府者、九國二島之所輻湊、夷民往來、盜賊無時、追捕拷掠可有其備、加以兵馬廿匹、飼丁草丁、貢上染物所作紙所、大野城修理等、舊例皆以兵士宛、今商量置此二百人宛件雜役、以年相替、免調庸及給粮鹽資丁、一同仕丁、

以前正二位行中納言兼右近衞大將春宮大夫良岑朝臣安世宣、奉勅依奏廢置、〇中略

天長三年十一月三日

〔延喜式二十六主稅〕諸國出擧正稅公廨雜稻

筑前國〇中略衞卒料二萬二千四百束、隨日數有增減、下皆同之、〇中略筑後國〇中略衞卒料一萬八千一百五束〇中略肥前國〇中略衞卒料一萬八千一百五束〇中略肥後國〇中略衞卒料三萬五千七百九十五束〇中略豐前國〇中略衞卒料一萬七千五百五十四束〇中略豐後國〇中略衞卒料一萬六千四百七十二束

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應大野城衞卒糧米依舊納城庫事 條々内
右參議權帥從三位在原朝臣行平起請偁、被太政官貞觀十二年二月廿三日符偁、參議從四位上行大貳藤原朝臣冬緒起請偁、除五使料之外、庸米幷雜米、總納稅庫、每月下行、若非有判行、輙以下用、監當之官、准法科罪者、官符之旨、固有宜然、但至于件城、城邊人居、或屋舍頹毀、或人跡斷絕、仍問城司等申云、此城衞卒卅人、糧米每月廿四斛、元來納城庫、爾時城庫□□□等、遂往還之便、求賣買之利、從納稅庫以來、人乘無到、賣買失術、百姓逃散、總而由此者、夫守城在人、聚人在食、望請件糧米、特納城庫者、
右大臣宣、奉勅依請、
貞觀十八年三月十三日

僧兵

僧兵ハ、法師武者ト稱シ、袈裟ヲ以テ頭ヲ裹ミ、甲冑ヲ著ケ、兵仗ヲ帶シ、其戎裝殆ド他ノ兵士ニ異ナラズ、宇多天皇ノ寛平六年ニ、對馬ノ島分寺上座僧面均ヲシテ軍事ニ從ハシメシ事アリ、其後、村上天皇ノ康保三年ニ、僧慈惠天台ノ座主トナリテ、僧徒ノ修學ニ堪ヘザルモノヲ擇ビ、佛法擁護ノ爲メニ武藝ヲ練習セシメシカバ、僧兵此ヨリ漸ク盛ナリ、時ニ近畿ノ寺院中、或ハ他ノ兵士ヲ置キテ、寺門ヲ護衞セシムルモノ無キニアラザリシカドモ、多クハ僧兵ヲ蓄ヘテ不虞ニ備ヘ、殊ニ延曆、園城、興福等ノ諸大寺ニ在テハ、僧兵ノ勢力一山ヲ左右シ、總テ僧兵會議ニ由リテ事ヲ決シ、其意ニ滿タザル事アレバ、官兵ニサヘ抗スルニ至レリ、是ヨリ先キ文武天皇ノ大寶令ニハ、僧徒ノ兵書ヲ讀ムコトヲ禁ジ、降テ一條天皇ノ永延二年ニハ、僧綱等ノ從者ノ短兵ヲ插ムコトヲ禁ジ、鳥羽天皇ノ永久二年ニハ、叡山ノ僧徒ノ兵仗

ヲ帶スルコトヲ禁ジ給ヘリ、然ルニ此等ノ禁令ハ行ハレザルノミナラズ、後白河天皇ノ保元以後ハ、天皇及ビ上皇皇親等ノ、屢僧兵ヲ召募シ、其威力ヲ借リテ以テ事ヲ成サントト謀リ給ヒシ事アリ、後世武家ノ政令衰フルニ及ビテハ、地方ノ寺院亦皆僧兵ヲ蓄ヘ、所在兵器ヲ弄シテ、互ニ鬪爭劫掠ヲ事トシ、殊ニ高野、根來、石山等ノ僧兵ハ最強盛ナリシガ、終ニ織田氏、豐臣氏等ノ爲メニ敗衂シ、僧兵是ニ於テ漸ク其跡ヲ絶チタリ、其他僧侶ニシテ諸侯タルモノアリ、是ヲ法師大名ト云フ、又僧侶ニシテ武將ニ從ヒ、常ニ軍中ニ在リテ、使命、書記等ノ事ニ任ズルモノアリ、是ヲ陣僧ト云フ、共ニ僧兵中ニ列ス、而シテ武人ノ剃髮入道シタルモノハ、總テ此編ニ載セズ、又延暦園城等ノ僧兵ノ如キハ、釋教部ノ各寺篇ノ下ニ收メタルモノアリ、參看スベシ、

名稱

〔平家物語　八〕ほうぢうじ合戰の事

河内の日下たうに、かゞばうと云法師むまや有、月げなる馬の口のこはきにぞ乘たりける、

〔承久軍物語　四〕その次に、くろかはおどしのよろひきたる法しむしや、舟ばりにつ立あがり、さんざんにいける所を、(○下略)

〔太平記　二十五〕住吉合戰事

楠ガ勢ノ中ヨリ、(○中略)法師武者ノ長七尺餘モ有ラント覺タルガ、阿間了願ト名乘テ、(○中略)少シモ不擬議懸出タリ、

禁令

〔令義解　二僧尼〕凡僧尼(○中略)習讀兵書、(謂雖不成業亦是、若蓄之而不習讀、及蓄餘兵書者、亦入下條也、○中略)並依法律付官司科罪、

〔朝野群載　十六佛事〕太政官符　治部省

應停止僧綱凡僧乖違法式多率弟子童子事(○中略)

右撿案内、(○中略)近年之間、賓僧之輩不愼憲法、所率之從類、各二三十人、以多爲樂、以少爲耻、志乖禪定、

旨涉放逸、其尤甚者、好著奇服、間插短兵、恐輝威武、動致鬭亂、非唯忘皇憲之嚴重、還亦致佛法之澆醨、仍可加禁遏之狀、下知左右衞職左右近衞府左右撿非違使先了、左大臣宣、奉勅宜加炯誡、依件定行者、省宜承知依宜行之、不得違越、符到奉行、

正四位下行右大辨藤原朝臣　正五位下行左大史兼備中權介大春日朝臣

永延二年（○中略、政事要略七十、二年、作三年、）六月二日

〔中右記〕永久二年七月六日、山上帶兵仗輩、依院宣可行罪過之由、下知座主許了、

〔朝野群載三文筆〕延曆寺起請（○中略）

一可停止招集凶徒營求兵器事

右始祖大師初占此山、釋尊遺敎、繁昌斯地以降、止觀窓中敎授匪懈、秘密壇上、修練無休、而頃年暴惡之輩、自然相交、麗弓箭於松扉之月、蓄戈鋋於蘿洞之雲、勇敢之凶徒、遮道理、往還之諸人抱怖畏、又報敵之者、間有其聞、夫僧侶之行、全守戒律、以精進爲甲冑、以柔和爲衣裳、何好驍勇、遺蔑佛法、就中春秋二季傳戒之時、裹頭蔽顏、插刀横劒、集會之場自及濫吹、仍須師主之輩各加敎督制止、追放其身、是拔蘂莠養稼苗、修正性、改惡行之義也、（○中略）

天承元年二月十三日　　作者式部大輔藤原敦光朝臣

〔新編式目追加佛舍〕僧徒行狀條

一僧徒裹頭橫行鎌倉中事

可令停止之由、可被仰保々奉行人、（○中略）

一僧徒兵仗禁制事、度々被下綸旨畢、而動違亂之輩出來云々、尤可有御制止之由、申入所々貫主別當殿後、猶爲自由濫吹者、任法可令致沙汰之狀、依仰執達如件、

延應元年四月十三日　　前武藏守判　修理權大夫判

初見

相模守殿　越後守殿

一被止鎌倉中僧徒從類太刀腰刀等事 仁治三三三

右僧徒之所從、常致鬪亂、多及殺害云々、武士之郎從、猶以不及如此之狼藉、何況於僧徒之所從等哉、是則好而召仕武勇不調之輩、專不加禁遏之故也、於自今以後者、僧徒兒共侍、中間、童部、力者法師、横雄劍、差腰刀、一向可停止之、若背此制止、及刃傷殺害者、宜被處主人於過怠、堅存此旨、不可違犯之由、可被相觸供僧等旨所候也、仍執達如件、

仁治三年三月三日　　　前武藏守泰時

大御堂執行御房　若宮別當御房　大夫法眼御房　以上三ヶ所各別書下之

追仰、件帶劒刀者、仰村小舍人、隨見令拔取之、可施入大佛之由、被仰下畢、同可被仰聞其旨也、

〔扶桑略記〕二十二　寬平六年九月五日、對馬島司言新羅賊徒四十五艘到著之由、○中略　同十七日記曰、同日卯時、守文室善友召集郡司士卒等、○中略　卽島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下今主爲押領使、百人軍各結廿番、遮絕賊移要害道、

僧兵例

〔山家要記淺略〕衆徒武門事

慈惠大師御治山之時、被御釋云、無文則無親上之禮、無武則無威下之德、故文武相兼治天下、文、爰以拔愚鈍無才之僧侶、成武門一行之衆徒、文、是依缺依法不具正法故也、夫以像法上古者、世擧崇法專信、澆薄下機者、人而疎信褊法、然者於此高峯、特無佛法燈油之供料者、何有久住不退之止住、仍如本四天衆擁護天帝釋、武門之衆徒以自力鎭施入田薗之違亂、以勇猛誡邪儀張行之諸宗、致正法之擁護可全修學之禪徒、文、可思之、

〔今昔物語〕三十一　祇園成比叡山末寺語第二十四

今昔、○中略　祇園ノ別當ニテ良算ト云フ僧有ケリ、○中略　座主○天台座主慈惠　今ニ於テハ、祇園天台山ノ末

寺也、早ク別當良算ヲ可追却也ト云テ追セケルニ、良算敢テ事ト不爲ズシテ、□□ノ公正、平ノ致頼ト云フ兵ノ郎等共ヲ屋寄セテ、楯ヲ儲ケ軍ヲ調テ待ケル間ニ、座主此ヲ聞テ、彌ヨ嗔テ、西塔ノ平南房ト云フ所ニ住ケル睿荷ト云ケル僧ハ、極タル武藝第一ノ者也、亦彼ノ致頼ガ弟ニ入禪ト云フ僧有ケリ、極タル兵也、此ノ二人ヲ祇園ニ遣テ良算ヲ令追ルニ、此ノ二人彼ノ所ニ行テ、良算ガ儲タル軍共ニ向テ云ク、汝等濫ニ箭ヲ放テ惡事ヲ致サバ、後ノ爲ニ惡カリナムト誘ケルニ、良算ガ屋タル致頼ガ郎等共、入禪ヲ見テ、早ウ山ノ禪師殿ノ御スルニコソ有ケレト云テ、後ノ山ニ逃去ニケリ、心ニ任セテ良算ヲ追却シテケリ、

〔小右記〕寛仁三年六月廿九日甲寅、太宰注進成勳功者、〇中略

壹岐講師常覺

賊徒三襲、毎度擊返、後不堪數百之衆、一身逃脫、身雖非在俗、其忠不可隱、

〔源平盛衰記十四〕三井寺僉議附淨見原天皇事

去程ニ三位入道〇源頼政被申ケルハ、山門ハ變改、南都ハ未參、小勢ニテ合戰ユヽシキ大事也、平家ヲ夜討ニセンハヨカリナン、〇中略乘圓坊阿闍梨慶秀ハ、下腹卷ニ衣裝束、長絹袈裟ニテ頭ヲ裹、打刀前垂ニ指、進出テ云ケルハ、軍ニ勝コト勢ニハ依ラズ、〇中略異計ヲ廻サントテ、徒ニ時日ヲ隔ナラバ、敵ニ上手ヲ討レテ後悔無益也、自餘ハ不知、慶秀ガ弟子共ハ、急ギ先陣仕テ、儻ニ太政入道〇平清盛ノ首ヲ取テ、親王〇以仁王ノ御代ニ成進セヨトテヒシメキケリ、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最後事

寺法師ハ、筒井ノ淨妙明春ト云者アリ、自門他門ニ被免タル惡僧也、橋ノ手ニゾ向ケル、明春今日ハ事ヲ好テゾ裝束シタル、シカマノ褐ノ直垂ニ、紺ノ頭巾ニ黑糸威ノ大荒目ノ鎧ノ一枚交ナルヲ、草摺長ニユリ下シ、三枚甲ノ緒ヲ強クシメテ、黑ヌリノ太刀ノ三尺五寸アルニ、熊ツバ入テ、

熊皮ノ尻鞘ヲサス、同毛色ノツラヌキヲゾ帯タリケル、黒塗ノ箙ニ、塗篦ニ黒ツ羽ヲ以テハギタル矢ヲ、廿四差タルヲ頭ダカニ負ナシツヽ、七モチリナルマユミノシメ塗ニヌリタルニ、塗ブル懸テ眞中ヲ取、鳥黒ノ馬ノ七寸ニハヅミタル、黒鞍置テ、熊皮ノ泥障指テゾ乗タリケル、同宿廿人同毛色ニ眞黒ニゾ出立タル、三尺五寸ノ長刀量ニ持セテ具足セリ、明春云ケルハ、殿原暫軍止メ給ヘ、其故ハ、敵ノ楯ニ我箭ヲ射立テ、我楯ニ敵ノ箭ヲノミ射立ラレテ、勝負有ベキトモ不見、橋ノ上ノ軍ハ、明春命ヲ捨テゾ事行ベキ、續カント思人ハ連ヤト云儘ニ、馬ヨリ飛下テツラヌキ脱捨、橋桁ノ上ニ擧リテ申ケルハ、者ソノ者ニアラザレバ、音ニハヨモ聞給ハジ、園城寺ニハ隠レナシ筒井浄妙明春トテ、一人當千ノ兵ナリ、手ナミ見給ヘトテ散々ニ射ケレバ、敵十二騎射殺シテ十一人ニ手負セテ、一ハ殘シテ箙ニアリ、箭種盡ケレバ、弓ヲバカシコニ投捨ヌ、彼ハイカニト見處ニ、箙モ解テ打ステ、量ニ持セタル長刀取、左ノ脇ニカイ挟ミテ、射向ノ袖ヲユリ合セ、シコロヲ傾、橋桁ノ上ヲ走渡ル、橋桁ハ僅ニ七八寸ノ廣サ也、川深シテ底見エザレバ、普通ノ者ハ渡ベキニアラザレ共、走渡リケル有様、浄妙ガ心ニハ一條二條ノ大路ト。コソ振舞ケル、廿人ノ堂衆等モ續ザリケル、其中ニ十七ニナル一來法師計コソ、少モ劣ラズ連ケレ、明春元ヨリ好所也ケレバ、今日ヲ限ト四方四角振舞テ飛廻リケレバ、面ヲ向ル者ナカリケリ、電光ノ如ニヒラメキケリ、立所ニ敵九騎討捕テ、十人ト申ケルニ、甲ノ鉢ニシタヽカニ打當テ、長刀コラヘズシテ折ケレバ、河ヘカラト投入テ、太刀拔テ戰ケリ、太刀ニテ七騎討捕テ、六騎ニ手負セテ休居タリ、平家ノ方ヨリ、惡キ法師ノ振舞哉、サノミ一人ニ多者討レタルコソ安カラネトテ、シコロヲ傾テ、ナガヘヲ指出タル兵アリ、明春是ヲ見テ、面白シ、東門五色ノ熟瓜ゾヤトテ、甲ノ鉢ヲ打破テ、喉笛マデ打サカント打タリケルニ、太刀モコラヘズシテ目貫穴ノモトヨリ折ニケリ、太刀ハ折タレ共、甲モ頭モ打破レテ眞逆ニ川中ヘゾ落ニケル、憑處ハ腰刀計也、腰刀ヲ拔持テ、ハネテ係リテ戰ケリ、死狂トゾ見エタ

リケル、見之淨妙討スナ者共トテ、後中院但馬、金剛院六天狗、鬼土佐、佐渡、備中、備後、能登、加賀、小藏尊月、尊養、慈行、樂住、金拳玄永等、命ヲ不惜戰ケリ、橋桁ハセバシ、ソバヨリ通ニモ非ズ、明春ニ並タリケル一來、今ハ暫ク休給ヘ淨妙房、一來進テ合戰セントテ云ケレバ、尤然ベシトテ、行桁ノ上ニ、チト平ミタル處ヲ、無禮ニ候トテ、一來法師兎バ子ニゾ越タリケル、敵モ御方モ是ヲ見テ、ハ子タリハ子タリアツハ子タリ、越タリ〳〵ヨツ越タリト、譽ヌ者コソナカリケレ、此一來法師ハ、普通ノ人ヨリ長ヒキク、勢チイサシ、肝神ノ太キ事、萬人ニ勝レタリ、サレバコソ甲冑ヲヨロヒ、弓矢兵杖ヲ帶シナガラ、身ノ惜事ヲモ顧ミズ、アレ程狹キ行桁ヲ走渡、大ノ法師ヲカケズハ子越タリケメ、太刀ノカゲ天ニモ在地ニモアリ、雷ナドノヒラメクガ如シ、切落シ切伏ラル丶者、其數ヲ不知、上下萬人目ヲ澄テゾ侍ケル、明春一來師弟子二人ニ討ル丶モノ、八十三人也、誠ニ一人當千ノ兵也、○下略

〔源平盛衰記 二十四〕南都合戰同燒失附胡徳樂河南浦樂事

坂四郎永覺ト云ケル惡僧ハ、長七尺計ナル法師ノ、骨太ニ逞ガ、心モ剛ニ身モ輕シ、打物取テハ鬼神ニモ劣ラジト云ケリ、強弓ノ矢繼早ク、隙間カズヘノ手タリ也、十五大寺、七大寺ニハ並者ナキ恐シキ者也ケルガ、褐直垂ニ、萠黄ノ腹卷ニ袖付テ、三尺ノ長刀ノ氷ノ如クナルヲ持テ、同宿十二人左右ノ脇ニ立テ、手階ノ門ヨリ打出テ、引詰引詰射ケル矢ニ、多ク寄武者討レケリ、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年○文治元年二月廿一日乙亥、義經主既渡阿波國、熊野別當湛增爲合力源氏同渡之由、今日風聞洛中云云、　三月九日壬辰、參河守○源範賴自西海被獻状云、○中略熊野別當湛增、依廷尉○源義經引級、承追討使、去比渡讚岐國、今又可入九國之由有其聞、四國事者義經奉之、九州事者範賴奉之處、更又被抽如然之輩、匪嘗失身之面目、已似無他之勇士、人之所思、尤爲耻云云、

〔吾妻鏡 五〕文治元年十月九日戊午、可誅伊豫守義經之事、日來被凝群議、而今被遣土佐房昌俊、此追

討事、人々多以有辭退氣之處、昌俊進而申領狀之間、殊蒙御感仰、已及進發之期、參御前、老母幷嬰兒等、有下野國、可令加憐愍御之由申之、二品殊被諾仰、仍賜下野國中泉庄云云、昌俊相具八十三騎軍勢、三上彌六家季、(昌俊弟)錦織三郎、門眞太郎、藍澤二郎以下云云、行程可爲九箇日之由被定云云、　十七日丙寅、土佐房昌俊、先日依含關東嚴命、相具水尾谷十郎已下六十餘騎軍士、襲伊豫大夫判官義經六條室町亭、于時豫州方壯士等、逍遙西河邊之間、所殘留之家人雖不幾、相具左藤四郎兵衞尉忠信等、自開門戶、懸出責戰、行家傳聞此事、自後面來加、相共防戰、仍小時昌俊退散、豫州家人等、走散求之、豫州則馳參仙洞、奏無爲之由云云、

〔吾妻鏡　五〕文治元年十一月三日壬午、前備前守行家、(櫻威甲)伊豫守義經、(赤地錦直垂、萌黃威甲、)等赴西海、(○中略)佐藤四郎兵衞尉忠信、伊勢三郎能盛、片岡八郎弘經、辨慶法師已下、彼此之勢、二百騎歟云云、　六日乙酉、行家、義經、於大物濱乘船之剋、疾風俄起、而逆浪覆船之間、慮外止渡海之儀、伴類分散相從豫州之輩、纔四人、所謂伊豆右衞門尉、堀彌太郎、武藏坊辨慶、幷妾女(字靜)一人也、

〔義經記　八〕ころも川合戰の事

辨慶其日のしやうぞくには、黑革おどしの鎧のすそかな物ひら〳〵打たるに、黃なる蝶を三つ二つ打たりけるをきて、大長刀の眞中にぎり、うちいたの上にたちける、はやせや殿ばらたち、あづまのかたのやつ原に物見せん、若かりし時は、叡山にて、よしあるかたには詩歌管絃のかたにもゆるされ、武勇のみちには惡僧の名をとりき、一手まふてあづまのかたの賤き奴原にみせんとて、鈴木兄弟にはやさせて、うれしや瀧の水、なるはたきの水、日はてるともたえずとふたり、あづまの奴原がよろひ甲を、くびもろともに衣川に切ながしつるかなとぞまふたりける、

〔安齋叢書　七〕辨慶七道具考　俗に辨慶の像を畫しに、辨慶七ッ道具と名付て、まさかり、鋸、槌、鎌、くま手の類を脊に負たる形を畫けり、(○中略)按ずるに義經記に、むさし房は、わざと弓矢をば持

ざりけり、四尺貳寸有けるつかまやうぞくの太刀はいて、岩とをしといふ刀をさし、ゐのめほりたるまさかり、ないがま、くまでを舟にからりひしりと取入て、身をはなさず持けるものは、いちゐの木のばうの一丈二尺有けるに、くろがねふせて上にひるまきしたるに、石づきしたるを、わきにばさみて、小舟のへさきに飛のると見えたり、此物語によりて、色々の物を脊に負しさまに書けるなるべし、

〔承久軍物語〕四六月（承久三年）十二日、海道の大將さがみのかみ時房、せたのはしちかくおしよせ、野路にぢんをとりたまふ、はやりをの兵ども、河ばたにをしよせみれば、橋いた二けん引おとし、かいだてかきて、山田次郎を大將として、山法し少々ぢんをとりたり、（中略）山法しらはかちだちのたつしやなり、そのうへ大だち、なぎなたをもてまげうちければ、ぶしは心こそがうなれども、小太刀にてふせぎたゝかふほどに、九人が中六人は、かいだてのきはにきりふせらる、（○中略）京がたより、なら法しとこのかくしん、えんおん、二人出きたり、よ人ははう〳〵渡りけるはしげたを、おどりはねなぎなたうちふつて、きよくをふるまうてたゝかひければ、東ごくせいにくき法しのふるまひかなとて、さしつめ引つめさん〴〵にいるほどに、えんおんがあしの大ゆびをはしげたにいつけたりければ、はたらくべきようなかりけり、あとにつゞいたるかくまんこのよしをみるよりも、たちをぬいて、いつけたりけるゆびをふつときりすて、かたにかけてぞのきにける、

〔吾妻鏡〕二十五承久三年六月十六日己巳、謀叛衆於所々生虜之中、清水寺住侶敬月法師、雖非指勇士、從于範茂卿向宇治之間、雖有、獻一首詠歌於武州、（○北條泰時）仍感懷之餘、減死罪可處遠流之由、下知長沼五郎宗政云云、

勅ナレバ身ヲバ捨テキ武士ノヤソ宇治河ノ瀬ニハタヽチド

〔日吉社幷叡山行幸記〕應長二年〇正和元年同月〇八廿二日、閑院は退出す、多武峯をば、八方の大衆いくさを發してほり堅つべきやうに責ければども、度々の戰ひかなはざりければ、八幡に金阿彌といふ大力の有けるを語らひ、やう／＼にやしなひたて、かなさいばう、よき、まさかり、太刀、かたな、弓箭に至るまで、世に勝れたるありさま作り持せて、くさずりながなる大鎧に、小具足すきまなくとりつけて歩みいでたるありさま、實に鬼神といふとも、かなふべからずぞ見えける、大衆どもは國中の群民ども驅催て、此たびはさりともと思ひてよせかく、

〔太平記八〕山徒寄京都事

東塔ノ南谷善智房ノ同宿ニ、豪鑒豪仙トテ三塔名譽ノ惡僧アリ、御方ノ大勢ニ被引立テ、不心北白河ヲ指テ引ケルガ、豪鑒豪仙ヲ呼留テ、軍ノ習トシテ勝時モアリ、負時モアリ、時ノ運ニヨル事ナレバ、耻ニテ不耻、雖然今日ノ合戰ノ體、山門ノ耻辱、天下ノ嘲哢タルベシ、イザヤ御邊相共ニ返シ合テ打死シ、二人ガ命ヲ捨テ三塔ノ耻ヲ雪メント云ケレバ、豪仙云ニヤ及ブ、尤モ庶幾スル所也ト云テ、二人踏留テ法勝寺ノ北ノ門ニ立並ビ、太音聲ヲ揚テ名乘ケルハ、是程ニ引立タル大勢ノ中ヨリ、只二人返シ合スルヲ以テ、三塔一ノ剛者トハ可知、其名ヲバ定テ聞及ヌラン、東塔ノ南谷善智房ノ同宿ニ、豪鑒豪仙トテ一山ニ名ヲ知ラレタル者共也、我ト思ハン武士共、ヨレヤ打物シテ自餘ノ輩ニ見物セサセント云儘ニ、四尺餘ノ大長刀水車ニ廻シテ、跳懸々々、火ヲ散シテゾ切タリケル、

〔太平記十五〕正月〇建武二年廿七日合戰事

妙觀院ノ因幡竪者全村トテ、三塔名譽ノ惡僧アリ、鎧ノ上ニ大荒目ノ鎧ヲ重テ、備前長刀ノシノギサガリニ菖蒲形ナルヲ脇ニ挾ミ、箙ノ太サハ尋常ノ人ノ蟇目ガラニスル程ナル三年竹ヲモギツケニ押削テ長船打ノ鏃ノ五分鑿程ナルヲ、筈本迄中子ヲ打徹ニシテチヂスゲ、沓卷ノ上ヲ

琴ノ絲ヲ以テチタ卷ニ卷テ、三十六差タルヲ森ノ如ニ負成シ、態弓ヲバ不持、是ハ手衛ニセンガ爲ナリケリ、切岸ノ面ニ二王立ニ立テ名乘ケルハ、先年三井寺ノ合戰ノ張本ニ被召テ、越後國へ被流タリシ妙觀院高因幡全村ト云ハ我事也、城中ノ人々此矢一ツ進セ候ハン、被遊テ御覽候へト云儘ニ、上差一筋抽出テ、柄ノ小間ヲ手突ニゾ突タリケル、○中略是ヨリシテゾ、全村ヲ手突因幡トハ名付ケル、

〔荒山合戰記〕能登國石動山衆徒蜂起附同所荒山合戰之事

般若院○快存ハ大剛ノ惡僧ニテ、度々ノ合戰ニ名ヲ顯シタル兵ナレバ、其頃ノ俗異名ヲ付テ、今辨慶トゾ申ケル、誠ニ諸人ニ勝レ色黑ク、長ハ六尺三寸、骨太頰車荒テ、力モ强カリケルガ、指物ニハ鍬、鎌、熊手、鋸、槌、鉞、鳶嘴等ノ七ツ物取付、武具モ亦上ヨリ下マデ眞黑ニ出立タレバ、牛驚程ナルガ、大長刀ヲ水車ニ廻小躍シ走掛、左右拂前後ヲ薙テ巡タルニ、面ニ進ンダル兵ドモ、忽七八人薙倒シ、佐久間○盛政ガ軍兵辟易シテ、後足蹈テ不得進、般若院ハ敵ヲ坂下へ追下、小高所ニ立蹲坐歌謠ヲ掛敵ヲ待居タリ、

能州石動山軍附石動山燒失事

石動山ノ衆徒共ハ、○中略利家○前田ノ軍兵共安々ト山マデ攻上リ鐵炮ヲ放シ時ヲ作バ、○中略若大衆ノ氣早ナルハ、武具著暇ノナカリシカバ、徒肌ノマヽニテ褊衫ノ袖ヲ結ンデ肩ニ掛、散々ニ斬合タリ、○中略阿彌陀院ノ律師後覺、圓滿院ノ天狗坊松月坊忠格、大宮坊ノ飛彈、金藏院ノ中將以下、究竟ノ若大衆三十餘人、武具ノ上ニ白衣ヲ著シタスキ掛、一樣ニ長刀ヲ持テ、○中略卷ツ被卷ツ曳聲ヲ出シテ戰タリ、

〔奧羽永慶軍記三十三〕柳田落城事

圓通寺ハ城○柳田中ニ在テ出ズ、軍兵ドモ亂レ入バ、物影ニ隱レ居テ、大將ヲ討ントノ志ナルベシ、

惡僧兵

サレドモ大將タル者ハイマダ城中ヘ入ラズ、物頭等ニ、或ハ與力或ハ足輕ナンド八方ヲ打破押入レバ、忍ビガタクヤ思ヒケン、表ニ踊リ出ニケリ、圓通寺ガ武者色ハ、赤皮ノ具足ノ上ニ金襴ノ袈裟ヲ卷付、兜ノ上ヲバ白布ヲ以押包ミ、三尺五寸ノ太刀ヲ帶、一丈計ノ穗短キ手鑓ヲ持シガ、色ハアク迄黑ク、六尺餘リノ大ノ法師、古ノ辨慶トイフトモ、爭カ是ニ勝ルベキ、偏ニ怒ル氣色ニテ、大音上テ、カチテ音ニモ聞ツラン、柳田圓通寺トハ我事ナルゾ、首取テ高名セヨトイフマヽニ、込入敵ニ走リ向テ、先ニ進ミシ武者一人突貫シガ、如何シタリケン、其鑓中ヨリ折レケレバ、敵ニ投カケ、大手ヲヒロゲカケ合セ、敵ノ持タル鐵炮ヲ奪ヒ取テ、向フ敵二人打殺シヌ、サレドモ大勢ニ取込ラレ、籠手ノ透間腰甲ノハヅレ七八ケ所迄突レケルガ、夫ニテモ弱ラズ、大男ヲ一人引寄脇ニ挾ミ、前ナル川ニ飛入テ、終ニ水底ニテ死ニケリ、惜カナ生年三十八ヲ一期トシテ、尸ハ河水ニ漂フトイヘドモ、其名ハ永ク留テ九泉ノ先ニカヾヤキヌ、是ヲ名付テ其所ヲ圓通寺淵トゾ呼ニケル、

〔扶桑略記 二十八 後朱雀〕長曆三年二月十八日、慈覺門徒、爲座主愁、僧綱有職、幷山上老少、滿山僧徒三千餘人、集會祇陀林寺、自其引率參向關白左相府〈藤原頼通〉高倉第、然閉門不通、仍僧徒於其門下成濫吹事、加制止間、僧兩三輩中矢走反、其中惡僧、爲首定清〈世號出雲少院〉、搦大僧都敎圓爲質、同車向西坂下、爰出雲少院於隨願寺免怨僧都敎圓、公家即遣檢非違使追捕定清、下獄考訊之處、有陳申事、

〔山槐記〕永曆二年四月七日己酉、今朝上皇幸園城寺別院平等院、〈中略〉傳聞、山僧著甲冑、皆降東坂下、成陣、若戒壇事爲一定者、欲發向云々、

〔太平記 十七〕江州軍事

同〈延元元年九月〉二十三日、三塔ノ衆徒ノ中ヨリ、五百坊ノ惡僧ヲ勝テ、二萬餘人兵船ヲ連テ推渡ル、小笠原ガ勢共、重テ寄ル山門ノ大勢ニ聞懼シテ、大半落失ケレバ、勢纔三百騎ニモ不足ケリ、

〔松平記　四〕同年〇元龜元年九月十二日、信長比叡山に押寄て、三院の衆徒幷日吉山王神輿まで不殘皆燒たて、三千の衆徒一々に首を切給ふ、尤山門法師の惡逆は普通にすぐれたれども、かく亡し給ふ事前代未聞の事也、

〔扶桑略記　三十白河〕承曆五年〇永保元年六月五日庚申、殊有宣旨、恒例神事不可闕怠、官使相具比叡祭使等如例、重被催之處、三井寺大衆中不得心者、年少下﨟不學之輩、背宣旨追却官使、打止祭使等了、因玆有違勅罪、大衆長發等各注其名、共蒙追捕宣旨已了、爰武藝之徒皆遁隱山野、勢德之人悉以怖悚朝威、尊卑不和、合戰無力之間、九日甲子、叡山僧徒數千人、或著甲冑、引率戰士、冷句三井寺、燒亡寺塔僧房等、佛像經卷悉爲灰燼、

〔本朝世紀〕康治元年三月十七日庚戌、去日園城寺惡僧數十、帶兵仗著甲冑、偸登天台山、纔燒拂東塔南谷彌勒堂邊僧房五六宇、是雪先年之耻也、山僧等出逢、或追反或殺戮、其中故織部正大江通景男僧一人、爲山僧生獲、被斬首云々、翌日山僧等又向園城寺、燒滅所殘大津在家小倉徽妙寺等、合戰之間殞命者尤多、

〔台記〕康治元年三月十六日己酉、今夜三井寺法師五六十人、叡山燒丈六堂及五六房、山衆徒逆擊、梟三井寺法師兩三人首云々、去々年山燒三井寺、今散其怨、以區々之寺向廣大之山、可謂重義、孟政豫讓之輩也、明日山燒大津、

〔扶桑略記　二十九後冷泉〕永承四年十二月廿八日、山階寺大衆向大和守源賴親館、前加賀守源賴房合戰之間、興福寺僧侶等、中矢死者、粗有其數、

〔吾妻鏡　二〕治承五年〇養和元年正月廿一日戊辰、熊野山惡僧等、去五日以後、亂入伊勢志摩兩國、合戰及度々、至于十九日、浦七箇所皆悉追捕民屋、平家々人、爲彼或捨要害之地逃亡、或誅伐、又被疵之間、彌乘勝、今日燒拂二見浦人家、攻到于固瀨河邊之處、平氏一族關出羽守信忠相具姪伊藤次已下軍兵、

相逢于船江邊防戰、惡僧張本戒光(字大八郎房)中信忠之箭、仍衆徒引退于二見浦、擒取下女(齡十三四)幷小童(十四五者)等以上三十餘人、令同船、指熊野浦解纜云云、尋此濫觴、南海道者、當時平相國禪門(○淸盛)虜掠之地也、而彼山依事新闢東繁榮、爲亡平氏方人有此企云云、

〔源平盛衰記十三〕熊野新宮軍事

平家ノ新ノ師ニ、本宮大江法眼コレヲ聞、新宮十郎義盛コソ、高倉宮令旨ヲ給リ東國ニ下リ、白旗白弓袋ニナリカヘリ、平家ヲ亡サントスルナルガ、那智新宮大衆等、源氏ノ方人セントテ用意有ケレ、イザヤ推寄滅サントテ、大江法眼大將軍トシテ、三千餘騎船ニ乘テ、新宮ノ渚ヘオシヨセケリ、新宮那智ノ大衆此事ヲ聞テ、那智ノ執行、正寺司、權寺司、羅睺羅法橋、高坊ノ法眼等同心シテ、大衆二千餘人新宮ノ渚ニ陣ヲトル、

〔武功雜記上〕秀吉公高野ヲセム、高野降參仕候時ニ、秀吉公ヨリ高野ヘケ條書被遣候、其趣ハ、空海之法ヲ守リ僧體ト成モノヽ、甲冑ヲタクワヘ候テ不苦トノ掟有シ哉、左候ハヾ武勇ヲフルマフニ於テハ、秀吉六十餘州ノ人數ヲツクシテセムベシ、若左ナク候ハヾ、秀吉モ合力取立可申トノ事、依之高野歸伏ス、

〔紀伊國名所圖繪二編六下那賀郡〕根來山

建武以來二百餘年、世間靜かならず、軍卒の猥藉濫妨甚しかりければ、行人の徒甲冑をちやくし兵仗を操りて、山寺を守護す、學侶は專ら道を修して、世に達することなけれども、行人非學のともがらは、我執甚しく、後には却て他の地を奪ひ人の境を侵す、其魁三四人、所謂專識、岩室、阿伽井、杉の坊等なり、各百千衆を率て、威稜軍將のごとく、大坂(○豐臣秀吉)の命に從はざるに依て、天正十三年三月廿一日、堂社佛閣作坊等すべて二千七百餘宇、一時に灰燼となりぬ

〔天正記三〕紀州御發向の事

ねごろ寺は、かくばん上人ゑゆつせして、でんばうゐんこんりうせしよりこのかた、もつはらりんごくりんがうと同心して弓矢をとる事は、六百年よりこのかた寺家安たいにして、とみにあき、をのれをほしいまゝにす、がうてきにむかひ、せう敵に其趣をかんずるに、あたかもせいあんのうみをかたらふがごとし、かるがゆへに一こくにはきやくの折ふし、ゑゆぎやうじやあるが、一首の狂歌云、

にあはざるねごろばうしのうでだてにあはれゆみやのはぢをかくはん

〔常山紀談二十三〕紀伊國根來谷の法師は、むかしより武勇を好む定まりたる法ありて、第一の功名には感狀に玳瑁の槍三本、銅錢三十貫、其次感狀に槍二本、銅錢二十貫、其次には感狀に槍一本、銅錢十貫文、根來の內に大澤仁右衛門といふ者一番槍を合す、感狀に槍銅錢をも[illegible]うけ得しが、大坂にて秀賴に從ひ、城落て後九鬼の家にありしが、大坂籠城の人禁錮せられしを、土井利勝ひそかにやしなひ置れけり、

〔紀伊國續風土記那賀郡二十九〕根來寺〇中略足利氏の中世、天下大に亂れ、各處の掠奪を事とす、大伽藍の地、及領內廣き者、常に兵仗を帶びて防禦を事とす、僧徒の兵仗を執る事、防禦に起るといへども、後は戰爭を事として、掠奪を專とするに至る、〇中略天正十二年小牧長久手の役、東照神君〇德川家康井上主計頭を當國に遣はされ、根來寺總分幷に雜賀の士を招き給ふ、根來寺命に應じて軍を出す、右の由緒あるを以て、根來破却の後、東照神君根來の僧軍二百人を擇ばせられ、內百人を幕下に召して俸米を賜ひ、殘り百人は後命あるべきとの事なりしに、元和の封初南龍公〇德川賴宣其由緒によらせられ、百人を召して廩米八石づゝを賜ふ、これを根來同心といふ、皆院號坊號を名乘り、總髮にて世々相續せり、根來寺これより僧軍なし、

〔瀨田問答〕根來組與力同心ノ來由イカヾ　答〇中略先達根來由緒御尋ノ處、不分明故不申進候處、

荒増承糺候處、左之通御座候、　根來組同心衆家筋ハ、紀州根來山法恩寺ノ衆徒ニテ、三河御陣ノ節軍功ヲ顯ハシ神君御當地へ御歸陣ノ砌御供致シ、夫ヨリ中ノ御門勤番被仰付、出家ニテハ如何敷候故、總髮ニ被成候由、右同心衆右法恩寺開山上人ノ懸物所持致居候由、根來同心山本又三郎方ヨリ此趣申來候ナリ、

〔淺井三代記十六〕淺井大坂顯如上人を賴一揆を催す事

去程に淺井備前守長政、大坂へ以使札被申けるは、我等領分北三郡の道場本へ被仰付、一揆を被催候はゞ、忝可存旨深くたのみて越れければ、顯如上人幸と思召、則顯如より御書を給はりければ、長政よろこぶ事はかぎりなし、斯而越前と一揆と一圖にしめ合せ可責とて、其日限をしめられ、長澤の福田寺へ被顯如の御書を相渡す、それよりして三郡の一向坊主我櫃方共にふれければ、我も〳〵と進みたりしが、堀次郎が楯籠りたる本江の城を可責とて、箕浦の誓願寺四千二百人先懸にて押寄、新庄の金光寺二千餘人、榎の乘願寺千五百人、上坂順慶寺五百餘人、ゆすきむらの清勤寺木之本新敬坊いまだ又右衛門の時、此人々都合八千七百餘人後備にひかへたり、尊照寺の稱名寺二千餘人、唐川長照寺増田眞宗寺、此三人は三番にひかへたり、長澤の福田寺四千五百餘人、坤村の福照寺三千二百餘人は同勢なり、

〔吾妻鏡二十一〕建暦三年○建保元年五月三日癸卯、義盛○和田重擬襲御所、○中略凡自昨日至此晝、攻戰不已、軍士等各盡兵略云云、御方兵○中略日光山別當法眼辨覺俗名大方余一引率弟子同宿等、於町大路與中山太郎行重相戰、小時行重逃奔云云、

〔飛州千光寺記〕信玄振猛威、永祿七年甲子七月十八日、發向當國、到千光寺、○中略一山大衆鳥越峰攜城郭楯籠、頓相觸圖中乞後攻勢所、皆捨棄己館、無一騎加勢、籠城之大衆等、結忍辱慈悲衣袖懸肩、提惡魔降伏劒戟、走莵向敵、身命不惜防戰、中寶光院玄海、普門院亮輝、吉祥院專順、說法院果海、不動院

亮延、逆花坊、是等射出弓鐵炮楯物具不怺、寄手山下支、而不得近付、雖送數日、既城中矢種玉藥盡、助兵不馳加、楯籠衆徒、或手負或討死、武士彌勢重、晝夜旦暮被攻詰、終衆徒悉敗立、則亂入而懸火、

〔豐薩軍記十〕○彥山來由并僧徒誓詞之事

茲ニ彥山ト申ケルハ、九州第一ノ大山ニテ、○中略山中ノ僧坊三千八百坊アリ、○中略衆徒中年ヲ逐テ亂世ニウツル習ヒナルニヤ、驕慢熾盛ノ身ト成テ、惡黨人ヲ驅促シ、動スレバ妨往還、惱萬民、隣境ノ財產等ヲ奪取リ、狼藉非分ノ事ノミニシテ、頗ル我意ヲ働キケルガ、○下略

〔豐薩軍記十一〕肥前肥後國士降參之事

筑後國高良大明神ト申奉ルハ、○中略近年ハ九州ノ擾亂ニ付テ神主社僧モ皆武事ニ携リ、山內ノ要害ヲタノミテ、我意ヲ立臂ヲ張ル、秀吉公聞召、富田左近將監、奧山佐渡守ヲ遣サレ、既ニ破却ニ及ブ處ニ、山法師罪ヲ謝シ御赦免ヲ願フニ依テ、許容マシ〳〵、同十一日○天正十五年四月高良山ニ御陣ヲ移サル、

〔奧羽永慶軍記四〕羽黑ト秋田確執小野寺入和事

羽黑ノ衆徒相集テ別當ヲ進メ、敵ヨセ來ラザレバトテ間チカキ所ニユル〳〵トシテ有ベカラズ、此上ハ秋田ヘ逆寄ニシテ、一戰ニ勝負ヲ決シ候ハントイヘバ、又一方ヨリ、秋田ヲ山ノ手ニ入候ハヾ、五千町ノ地ヲ山ノ知行トシテ、其外ノ地ヲバ今度ノ加勢ニ軍功ヲ盡サレタル武家ヘ參ラセ候ハンナド區々ノ僉議ナリシガ、別當モ衆徒ニ進メラレ、止事ヲ得ズシテ湯殿、月山、羽黑三山ノ寺院ニ名ヲ得シ惡僧衆徒客僧千餘人起立テ、忽忍辱ノ衣ヲ脫、甲冑ヲ帶シ、降魔降伏ノ妻トナレバ、庄內、藤島、大山、大梵字ノ武士ドモ一味シテ、其勢雲霞ノ如ク、海陸二手ニ分レテ秋田ニゾ寄ニケル、○中略羽黑ノ先手壽明院、經堂院、金剛坊、大日坊、不動坊、智覺坊、觀音坊ノ衆徒等三百人、鑓長刀ヲ以命ヲ惜マズ突合ヒタル、中ニモ若王寺ノ船ヨリ、主ハシラズ其丈六尺餘ノ山伏、黑

專僧兵

皮ノ具足ノ上ニ袈裟カケテ、兜ヲバ著ズ、頭巾カブリ鉢卷シ、熊手ヲ以男鹿日積寺ガ船ニ引カケ乘移リ、散々ニ突テ廻レバ、此船中ハ殘リ少ナニ討レタリ、

〔荒山合戰記〕能州石動山軍附石動山燒失事

石動山天平寺ト申ハ、〇中人王三十九代天智ソ勅願所也、佛法修行ノ業ヲコソ專ラトスベキ事ナルニ、延暦寺根來寺等ノ大衆等ガ、佛法ノ奧儀深理ヲ忘却シ、武藝ヲ業ト心得タルヲ、天平寺ノ小法師原モ美敷事ニ思ヒ、任俠ヲ家業トシテ、山ヲモ身ヲモ滅シケル惡業ノ程コソ拙ケレ、

〔保元物語 一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

左府〇藤原頼長爲朝ガ申樣以外ノ荒儀也、〇中略主上〇後白河上皇〇崇德ノ御國爭ヒニ、源平數ヲ盡テ兩方ニ有テ、勝負ヲ決センニ無下ニ不可然、其上南都ノ衆徒ヲ被召事有、興福寺ノ信實、玄實等、吉野十津河ノ指矢三町、遠矢八町ト云者共ヲ召具シテ、千餘騎ニテ參ルガ、今夜ハ宇治ニ著、富家殿〇頼長父ノ見參ニ入、曉是ヘ參ベシ、彼等ヲ待調テ合戰ヲバ可致、忠實

〔保元物語 二〕關白殿歸復本官事附武士被行官賞事

斯ル處ニ宇治ノ大相國〇藤原忠實ハ、新院〇崇德打負給フト聞ヘケレバ、橋ヲ引セ、左府〇忠實子頼長ノ公達三人相具シ給テ、南都ヘ落、禪定院ノ僧都尋範、東北院ノ律師千覺、興福寺ノ上座信實、同權寺主玄實、彼等ガ兄加賀冠者源頼憲ニ仰テ、寺中ノ惡僧幷ニ國民等ヲ相カタラヒテ、官軍ヲ防ベシ、忠アランモノニハ、不次ノ賞ヲ可行ト披露セラル、

〔平家物語 八〕つゞみはんぐわんの事

ともやす、返事におよばず、いそぎ歸り參て、よしなかをこの者にて候、はやく追討せさせ給へ、只今朝てきと成候なんずと申ければ、法皇やがて思召立せ給ひけり、さらばしかるべきぶしにも仰付られずして、山のざす寺のちやうりにおほせられて、山三井寺の惡僧共をぞ召れける、公卿

殿上人の召れける勢と云は、向へつぶてゐんぢ、云かひなきつぢくわん玄やばら、扨はこつじき法師ばら也、

〔承久軍物語〕二こんどの御むほんに、山々寺々のそう法しどもをもめされけり、先くまの法しには、たなべ(田部)の法ゐん、十まんほつけう、わう(王)ほつけう、まんこう(萬劫)せんじぞまゐりける、山法しには、はりまの玄ゆしや、こたか(小鷹)のちしやうばう、たんごばうぞまゐりける、きよ水法しには、ぎ(義)やう月ばう、きしやうばうなどぞ參りたり、なら法しをめされければ、おの／＼せんぎして申けるは、むかし平家のあくぎやくによつてこのてらをやきはらひ、あとかたもなかりしを、かまくらのこう大將(源賴朝)けし、ちからをはげまし、たうごくの玄ゆご人をとゞめて、とう大、こうぶくの兩寺を、さいこうし、くやうの日は上らくしてみづからしゆごをくはへ、ずいぶん心ざしふか〻りしかば、もし源平の中にあらそひ出來ば、いくたびも玄らはたのかた人せんこそ本意なれども、これはまた一天の君(後鳥羽)の仰なるを、わうどに住ながらいかでか玄たがひ奉らせでもあるべきなれば、わか大衆少々參らせんとて、がく(學生)しやうには、とこのかく(覺心)しん、だうしゆには、えん(圓音)をん法し、これらをはじめとして、ことをこのむあくそう共あまた參らせけり、

〔太平記〕八山徒寄京都事

京都ニ合戰始リテ、官軍動スレバ利ヲ失フ由其聞エ有シカバ、大塔宮(護良親王)ヨリ牒使ヲ被立テ、山門ノ衆徒ヲゾ被語ケル、是ニ依三月(元弘三年)二十六日一山ノ衆徒大講堂ノ庭ニ會合シテ、(中略)今四海方亂、一人不安、武臣積惡之餘、果天將下誅、其先兆非無賢愚共所世知也、王事毋盬、釋門假使雖爲出塵之徒、此時奈何無盡報國之忠、早翻武家合體之前非、宜專朝廷扶危之忠膽矣ト僉議シケレバ、三千一同ニ尤々ト同ジテ、院々谷々へ歸リ、則武家追討ノ企ノ外無他事、山門已ニ來廿八日六波羅へ可寄ト定ケレバ、末寺末社ノ輩ハ不及申、所緣ニ隨テ近國ノ兵馳集ル事雲霞ノ如ク也、

廿七日大宮ノ前ニテ著到ヲ付ケルニ、十萬六千餘騎ト注セリ、

〔豐薩軍記〕四 隆信最後井鴨打新九郎忠死之事

永祿十一年戊辰六月、隆信〇龍造寺筑後ヲ攻ントシテ加勢ヲ高山衆徒中ニ乞フ、衆徒異口同舌ニ演テ曰ク、抑我山ト云ヘルハ、十方檀信助成ノ力ナルニ依リ、天下安全諸檀繁榮長久ノ祈禱トシテ、年々四百八十ノ講席ヲ勤メ行ヒ候ナレバ、援兵ノ儀恩免ニ預リ度由申シケルヲ、隆信大ニ怒テ、我催促ニ從ハザル輩ハ豈是敵ニアラズヤトテ、多勢ヲ率シ押寄セ、山ノ麓ニ陣ヲ取ル、衆徒ハ我山此時ニ到テ亡ン事ヲ哀ミ嗟キ、命ヲ鴻毛ヨリモ輕クシテ防ギ戰ヒタリシカバ、容易ク攻亡ボシ難シトテ、歸陣ヲナシケルガ、〇下略

〔加越闘諍記〕四 義景一乘ノ谷立退玉フ事

元龜四年八月十六日巳刻ニ館ヲ御出アリ、〇中略 先平泉寺〇越前ノ大衆ノ意ヲ御覽可有トテ一通ヲツカハシ玉フ、

態以一札令啓達候、仍於江州北表及合戰候處ニ、不慮之外當方令敗北之條、至此郡聚士卒、重而可勵一戰、然者貴寺有一統廻籌策、被抽忠功者宜依恩賞望者也、誠惶謹言、

元龜四年八月十七日　朝倉左衛門督

平泉寺衆徒中

如此書狀ヲ認、黃金幷名筆ノ繪讃ヲ相添ツカハサレケル、然バ則一山ノ大衆馳集テ、此條イカヾ有ベキト色々僉議ス、老僧進出テ云ケルハ、義景エ同心スベキコト尤以本意也、數年國主ノ恩賞ヲ忘レ、別心スルコト天ノ照覽モ難量、然義景ヘ同心スルモノナラバ、明日ニモ信長押寄、當寺忽ニ可被破却ト云テ思案半バニ、若大衆ドモ申ケルハ、義景是ホドマデ運盡果玉ヒケル間ニ、〇中略 各打立テ、義景ノ御陣處ノ近邊ヲ放火シテ、信長エ同心ノ驗ヲ見セ玉ヘト、無情コソ申ケル、大欲

寺兵

深キ一山ノ惡僧ドモ、此儀尤可ㇾ然トテ、使者ノ未ㇾ歸ニ、大衆打立テ燒立、閧ノ聲ヲ上馳廻、

〔扶桑略記 三十白河〕承曆五年〇永保元年四月廿八日、辰剋叡山大衆引ㇾ率數千軍兵、來ㇾ向於三井寺、爰三井寺大衆且率ㇾ數千隨兵、各張ㇾ其陣、防征欲ㇾ戰、漸及ㇾ晩景、山上大衆引ㇾ楯逃去、八月六日、差ㇾ遣官使ㇾ奉ㇾ幣於日吉社、被ㇾ告ㇾ天台兩門徒闘諍之狀、先ㇾ是山僧等、爲ㇾ防ㇾ護ㇾ社頭近邊塞ㇾ路堀ㇾ地、于ㇾ時奉幣使、臨ㇾ夜不ㇾ知ㇾ案內、竊以行向、爰警固僧等、誤欲ㇾ寺。兵。來向、妄以征襲、射ㇾ矢如ㇾ雨、奉勅侍臣、僅得ㇾ免ㇾ害、怱劇歸參、時人哄ㇾ之、

〔本朝世紀 近衞〕久安二年四月廿五日甲子、今日金峯山僧徒等、率ㇾ五百餘人軍兵、向ㇾ大和國宇智郡、欲ㇾ搦ㇾ捕師任入道、〇下略

〔古今著聞集 二釋教〕永萬元年六月八日とらのとき、蓮花王院の兵士がゆめに、〇下略

〔最勝光院所領散狀〕最勝光院注進寺領庄園年貢近年所濟出物等散狀事

一播磨國桑原庄　六月兵士十人　一攝津國山邊庄　三月兵士五人　一堺庄　九月兵士七人

一筑前國三原庄　七月兵士十人　一越前國志比庄　五月兵士七人　一出雲國大野庄　十二月兵士十人

一近江國湯次庄　正二兩月兵士十三人、內正月十人、二月三人、　一檜物庄　四月兵士十人

一遠江國原田庄　八月兵士十人　一信濃國鹽田庄　十一月兵士十人　一常陸國成田庄　閏月兵士三人

正中二年三月日公文左衞門少尉大江朝臣〇節略

〔信長公記 十三〕抑大坂ハ、凡日本一之境地也、〇中略隣國之門家馳集、加賀國より城作を召寄、方八町に相搆、眞中に高き地形有、爰に一派水上之御堂をこう〳〵と建立し、〇中略こう津、丸山、ひろ芝、正山を始として、端城五十一ヶ所申付栖籠、構之內にて、五萬石致ㇾ所務、任ㇾ運于天道、五ヶ年之間雖ㇾ相守、時節身方者日々ニ衰、調儀調略不ㇾ相叶、信長御威光盛にして、諸國七道御無事也、此上者云ㇾ勅命與ㇾ云ㇾ不ㇾ違ㇾ于御道理、退城可ㇾ仕と肯申候、爰大坂立初て以來、四十九年之春秋を送る事、昨日之如ㇾ夢、

僧兵會議

世間之相、事相を觀ずるに、生死之去來、有爲轉變之作法者、電光如朝露、唯一聲稱念之利劍、此功德を以て無爲涅槃の部に至らんにはしかじ、雖然今故鄕離散之思、上下已沈淚、○下略

〔源平盛衰記四〕頼政歌事

抑豪雲ト云ハ、二品中務親王具平七代ノ孫、民部大輔憲政ガ子也ケリ、訴訟ノ事有テ、後白河法皇ノ御所ニ參ス、折節法皇南殿ニ出御有テ御座、イカナル僧ゾト御尋アリ、山僧攝津竪者豪雲ト申者ニテ侍ト奏シタリ、法皇被仰下ケルハ、實ヤ和僧ハ山門ノ僉議者ト聞召、己ガ山門講堂ノ庭ニテ僉議スルラン樣ニ只今申セ、訴訟アラバ直ニ可被裁許ト、豪雲蒙勅定、頭ヲ地ニ傾、畏ヲ奏シケルハ、山門ノ僉議ト申事ハ、異ナル樣ニ侍、歌詠ズル音ニモアラズ、經論ヲ說音ニモ非、又指向言談スル體ヲモハナレタリ、先王ノ舞ヲ舞ナルニハ、面摸ノ下ニテ鼻ヲニカムル事ニ侍也、三塔ノ僉議ト申事ハ、大講堂ノ庭ニ三千人ノ衆徒會合シテ、破タル袈裟ニテ頭ヲ裹入堂杖トテ三尺計ナル杖ヲ面々ニ突、道芝ノ露打拂、小石一ツヽ持、其石ニ尻懸居並ルニ、弟子ニモ同宿ニモ聞シラレヌ樣ニモテナシ、鼻ヲ押ヘ聲ヲ替テ、滿山ノ大衆立廻ラレヨヤト申テ、訴訟ノ趣ヲ僉議仕ルニ、可然ヲバ尤々ト同ズ、不可然ヲバ、此條無謂ト申、假令勅定ナレバトテ、ヒタ頭直面ニテハ爭カ僉議仕ベキト申上ケレバ、法皇先興ニ入ラセ給、早々罷歸テ、山門ニテ僉議スルラン樣ニ出立テ、急參テ僉議仕レト被仰下、豪雲宿坊ニ歸、同宿共ニハ袈裟ニテ裹頭、童部ニハ直垂ノ袖ニテ頭裹セテ、三十餘人引具シテ、御前ノ雨打ノ石ニ尻係テ並居タリ、豪雲己ガ鼻ヲ押テ、大衆立廻ラレヨヤト云テ、我訴訟ノ趣ヲ、事ノ始ヨリ終マデ、一時ガ程コソ申タレ、同宿共兼テ存知ノ事ナレバ、尤々ト訴訟其謂アリ、道理顯然也、早可被經奏聞、聖代明持之政化、爭カ無御裁許哉ト申タリケレバ、法皇御興有テ、則被仰付タリケルトカヤ、

〔源平盛衰記三十〕覺明語山門事

法師大名

木曾〔義仲〇〕幸明ヲ召テ、見參シテ宜ヒケルハ、山門ノ衆徒平家ノ語ヒヲ得テ源氏ヲ背ク由、其聞エアルニ依テ、子細ヲ注シテ案内ヲ通ジ畢ヌ、未是非ノ左右ナシ、衆徒ノ事深ク御房ヲ憑申、速ニ登山シテ、當家同心ノ秘計ヲ廻シ給ヘ、大衆ノ同心子細ナクバ、此河原ニ遠火ヲ燒ベシ、山上又遠火ヲ合セヨ、其ヲ以驗トシテ、天台山ニ攀上テ、同心ニ平家ヲ攻ベシト語フ、幸明思ケルハ、我身當時衾ノ宣旨ヲ蒙レリ、當今平家ノ御外戚也、源氏ニ忠ヲ盡テ平家ヲ追落ナバ、自身ノ難モ遁ナントト思ヒテ、仰承候ヌ、心中疎略存知候ハズ、秘計仕ベキトテ、急ギ忍登テ、同時ノ大惡僧ニ慈雲坊法橋寛覺、三上阿闍梨珍慶ト云者ヲ相語テ、大衆ヲ起シ、大講堂ノ庭ニ三。塔。會。合。シテ僉議アリ、木曾ガ書狀此砌ニ披露アリ、衆徒ハ書狀披覽ノ後、木曾義仲申狀何體タルベキゾヤト云處ニ、大衆僉議シテ云、〇中略爭カ平家懸念之志ヲ失テ、義仲卒爾ノ語ニ隨ベキヤト云大衆モ有ケリ、此儀不可然ト云衆徒モアリ、又大衆僉議シテ云、〇中略我山獨リ宿運ノ傾ク平家ニ同心シテ、運命ノ開クル源氏ヲ背ベキヤ、就中書札ノ如クバ、道理此旨ヲ顯ス、今ニ於テハ須ク平家安穩ノ祈ヲ改テ、源氏最屓ノ思ニ仕セラルベキ哉ト僉議シタリケレバ、滿山ノ大衆モ尤々ト同ジケレバ、サラバ返狀有ベシトテ下遣ス、

〔碧山日錄〕寛正二年三月廿日辛酉、叡山之一衆、相聚議事、謂之三。塔。會。合。是日有之、著甲胄執干戈會聚者二萬餘人云、

〔太平記二〕主上臨幸依非實事山門變儀事

上林房阿闍梨豪譽ハ、元來武家ヘ心ヲ寄シカバ、大塔宮ノ執事安居院ノ中納言法印澄俊ヲ生捕テ、六波羅ヘ是ヲ出ス、護正院僧都猷全ハ、御門徒ノ中大名ニテ、八王子ノ一ノ木戸ヲ堅タリシカバ、角テハ叶ジトヤ思ケン、同宿手ノ者引ツレテ、六波羅ヘ降參ス、

〔加越闘諍記五〕波多野玉泉坊生害之事

波多野玉泉坊ハ三千石知行シ、飛鳥井寶光院ハ八千石知行ス、凡日本一番ノ法師大名ト沙汰シケルガ、是ニモ猶不飽足シテ、玉泉坊密々ニ信長エ訴訟シテ、一山ノ總務ノ一行朱印ヲ取テ、社領神物ヲ進退シ、諸院諸坊ニ黃金ヲ懸テ、信長方ヘツカハスノ由ニテ取ニケル、寺衆內々鬱憤ヲサシハサム處ニ、略〇下

〔大和軍記〕大和國侍之事

筒井順慶先祖ハ、近衞の家ゟ出候人の由、順慶親ハ順興ト申候、順慶一度ハ南都の出家にて被居候、然共器量の人にて、還俗被致武威を振ひ、國中半分過討ちたがへ、添下郡筒井と云所に平城を築、居城被仕候、自分の領知ハ只今の知行高六萬石程の事に候得共、甥或ハ妹聟姪聟多く、一門廣き故に、自分手廣く成被申、大和大半手に入申され候、

〔落穗譜十二上筒井〕伊賀守藤原定次は、大和の國の守護、筒井陽舜房順慶が世嗣也、初め應仁の亂の後、畿內悉く戰ひ起るに及んで、筒井が家、南都興福寺の寺門に於て有勢の者なりしかば、弓矢取ては當國に名を顯しけり、

十市家の事記に、十市、箸尾、筒井、越智を、大和の四家と云て、昔より當國にありて南都を守りぬと見えたり、また大和記には、元は近衞殿下の家より、南都を守らせ給ふ人なりといふ、

多門院日記、仕丁記、幷に大和記等を按ずるに、文明八年筒井順永入道死す、次に順賢、次に順仙、榮舜房順昭が世に當りて國中悉く打從ふ

次に順昭、順昭天文十九年に至りて死す、

其子順政跡を繼ぐ、永祿七年三月死す、順慶生年十六歲、六郎と申せし時、その父順政を失ふ(六郎が名は藤政、一說に藤勝と云ひしとも云ふ也、)國人心變りして松永彈正少弼久秀に組する者多し、明れば八年十一月、六郎筒井の城を捨て、布施の城に入る、久秀その身は大和河內の境なる志貴城に在って、この年

十二月多門の城を攻め取り、國中を隨へんとす、

久秀また三好と戰ふに因りて、大佛殿の燒けしは、十年十月十日の事なり、

元龜二年八月、辰市の戰に、順慶終に松永を打破り首を獲ること五百、久秀が一族郎從多く討れ手負ふ者又五百餘、三年五月順慶織田殿の御方に參る、此年三月、松永父子三好左京大夫義繼と心を合せ、志貴多門等の城に立籠る、同年十二月、右衛門佐久通、久秀子が多門城を去て降を乞ひぬ、四年四月、久秀又織田殿に參る、信長頓て兵分ちて多門城を守らせ、當國を鎭められしかば、筒井松永又戰ふに及ばず、此年則ち天正と改元す天正二年三月、順慶國人等引具し、上洛して信長に見參し、同き年七月人質を參らせ、三年二月、織田殿の養女を迎へて息定次の室とす、此年五月、信長三河國に向ひ、武田四郎と戰ふべしと聞えて加勢參らす、鐵炮の者共五十人と云ふ五年七月、信長番兵を停めて、多門の城を壞り捨てらる、此年八月、久秀大坂の城を攻て天王寺に陣取りしが、忽ち心變りして信貴城に引籠る、信長使して仰せらるゝ旨あれど猶從はず、さらばとて右衛門佐が質として參らせし幼なき子供二人が首切て、子息城介信忠、討手の大將軍として松永が城に發向あり、順慶同じく相隨ふ、○中略十月十日の曉諸手の寄手一同に攻め寄す、城中の兵散々に防ぎ戰ひしに、城中忽ち火起つて、筒井が軍勢二千人、此處彼處に切り廻る、松永内外のかたきを防ぎかねて、終に腹切つて死してけり、

大和記に出づ、織田家譜には松永が使者道を踏み損んじて、佐久間右衛門尉信盛が陣に入りしを、信盛かくと信忠に申ければ、信忠の謀にて信盛が勢を城中に忍び入れしとあり、いぶかし、

六年八月、信長の仰として郡山の城一つを止て、國中の城々皆壞り捨つ、同き十一月、大和國悉く筒井に宛て行はる、順慶頓て入部して郡山辰市等が首を刎ぬ、是は松永に心を合せて順慶に叛

僧戒

きし者共なり、九年九月、伊賀國の戰に從ひ、十年三月、國中の軍勢引具して信濃の國に向ふ、武田亡びて又四國の地に向ふべしとて本國に歸り、六月二日既に打立に及び、織田殿父子京にて明智日向守光秀が爲に失せ給ひぬと聞て、順慶、大安寺、辰市、東九條、法華寺の邊に陣取り、井戸一勢を引分けて光秀が加勢とす、（四日の事也）井戸、攝津播磨の多勢攻め上ると聞て引て歸る、（十日の事也）光秀筒井が心變りしやと思ひて、使して申ける旨あり、（藤田傳吾を使とす、其使來れるは十一日の事也、）順慶返答にも及ばず、一紙の起請文書て裏切すべきよし、羽柴筑前守秀吉の許に云ひ送り、（村田、今井、其使たり、）自ら七千人を率ゐて、宇治道を經て京に入らんとす、（十四日先陣打立ち、順慶十五日に打立つ、）山崎の戰既に事終りぬるに及んで、三七殿の御陣にぞ參りける、秀吉順慶が味方せしさま、言甲斐なしと思ひしかど、筒井元より有勢の者にして、近江、伊賀、伊勢、尾張等の戰に、常に味方にありて、其功も亦少なからねば、本領を安堵せし事、織田殿の時に變らず、天正十二年五月、長島の戰に、忽に身煩ふこと出で來て本國に歸り、幾程なくて死す、年三十六歲とぞ聞えける、猶子の四郎定次家を繼ぐ、

〔慶長見聞書　二〕一敵方安國寺慧瓊西堂ハ、本より禪僧にて、十二萬石の身代なれども、人數はよの廿萬石の衆より人數持也、馬印は天蓋をたてらる、、出家に似合敷由申候、

〔玉露叢話　四〕安國寺惠瓊長老ハ、武田孫八が兄なりと云、大膳太夫義統が子にして、安國寺は兄なれども、下戚の子にして出家せしが、一說に、安國寺ハ元來藝州沼田郡金山城主武田刑部少輔信重が末子、童名竹若丸、後愼藏主、東福寺の住侶、紫衣の僧たり、拾二萬石の知行に替へ還俗し、謀叛し、後其首を梟せらる、

〔空華日工集　〕應安二年十月三日、是日余在石屏、義田東谷諸公來話、話及叢林之弊、余曰、今時兄弟不依老宿、是以往々失節、不成器者有之、可愼矣、且蓄兵器自防、是乃非自防、而卽自賊自傷也、古人有兵、是凶器之戒、可不思之乎、　三年二月五日、彌首座來自福山、余乃欵々說話云、凡今時佛子、不依敎

旨、但恐人情、戒律不持、僧儀不修、僧服之上擐甲、與彼正道門邪徒同科、自今以後、吾禪宗有何面目、余生年四十六、未嘗佛子著鎧手刃之儀、〇下略

〔西山遺聞下〕僧に帶刀を命じ給ひし事

公〇德川光圀ある時、諸寺の僧を召されてのたまひけるは、各にも知行を與へおくものなり、世は定めなきことなれば、萬一變あるときはいかゞあらんやとありければ、皆々御國恩にあづかる身なれば、萬一の時は、御馬のさきにて打死仕るべきなりと答へ奉る、公しからば平日帶劍せずんば、急に使ふ事なるべからず、各もこれよりは帶劍すべしとあり、其時石神長松寺始に命に應ず、栗崎佛性寺も常に帶せりと云、蘭山は、我輩聲聞形なり、聲聞の僧帶劍の事、昔よりこれをきかずと云、公しからば不動の劍を持たるはいかゞとのたまへば、山が云、不動は明王形なり、聲聞にあらずと云、公悅びたまはず、其座しらけてみえけるに、山席上に熟柹のあるをみて、自ら立て、彼柹をたまはらんやとて、とりて食したり、それにて少しつり合ひよかりしとなり、原浮休談之由、黒澤雉書寺眞龍かたれり、

〔甲陽軍鑑十品第三十二〕川中嶋合戰の樣體を、後に謙信家老衆とせんさく被仕申さるゝは、信玄と大方見つれ共、信玄計ごと有人にて、法師武者を大勢仕立おかれ候ときく、若只の侍と組、いけどられては如何と思ひ、馬よりおりて信玄と手を取あはせ組ふせざる事口惜と申され候也、

〔松隣夜話上〕黒キ鎧ニ香染頭巾シ、念珠ヲ手ニカケタル法師武者三人一所ニ立、侍十人計リ打カコミタル有リ、謙信ミツケ給フト等ク馬ヲ馳寄セ、先達ノカセ者ドモ切拂ヒ、三人ガ中信玄トミユルヲ重ウチニ三刀切玉フ、後ニ尋レバ、其武者信玄ニテ坐シケルト也、

〔奥羽永慶軍記一〕盛滿逢二一揆一事

金上遠江守盛滿人數三百餘人、白川ヲ立テ會津ニ歸陣セントスルニ仙道ヨリ一揆起テ路次ヲ

遁リ、其勢千餘人、弓鐵炮ヲ備ヘ待懸タリ、爰ニ比日根來法師ト稱スル雲龍白傳トイヒケル兩僧、會津ニ來リ暫逗留ス、兩僧共ニ諸國修行シテ、十餘年數十度ノ合戰ニ一度モ不覺ヲ取ラズ、但心ノ留ル家モナク、東國迄來ルナド、語リケル、誠ニ諸國ニテ一戰ゴトニ手柄ヲセザル所モナカリケルニヤ、爰カシコノ諸將ノ感狀數十通所持セリ、實ヤ武功ニ長ゼル法師ナルベシトオモハザル者モナシ、此度盛滿同道シテ來リケルガ、敵ノ備ヲ見テ、盛滿ニ向テ申ケルハ、〇中略彼樣ノ野伏類ハ、何國モ同ジ事ニ候ゾ、爰ヲバ我ニ御任セ候ヘトイフ、盛滿思ヒケルハ、サシモ我朝ニカクレナキ根來寺ノ軍法ナレバ、愚ナル事モアルマジト思ヒ、今日ノ一戰ヲバ兩僧ニ任セ候ト、其下知ニ隨ヒシ事盛滿ガ愚ナリ、〇中略其比上方浪人ガ曰、近年根來ノ衆徒ニ剛ノ者有トテ、諸國ニモテハヤス故、贋法師ドモ出テ、一戰ノ際ニ成テ逐電セシ事、其類多シ、實ニ根來寺ノ衆徒來ルトモ、百ガ百ナガラ軍上手ニモ有ベカラズ、剛ノ者ニモアルベカラズ、彌此兩僧ハ贋僧ナルベシ、諸將ノ書狀ハ、誠ノ根來修行者持タルヲ、盜テ來ルナルベシトゾ語リケル、盛滿聞テ、此贋僧共マヽ置カバ、又行先ニ經廻リテ諸家ヲタブラカスベシ、只討捨ヨトイフマヽニ、尾熊百助、高木伊兵衛ヲ以テ討セケリ、

〔陰德太平記 三十五〕三好義賢圍河州飯盛高屋城事〇中略

根來ノ衆徒共、集會シテ議シケルハ、畠山〇高政ハ當寺數代ノ檀越也、今此時不見續バ、已來何ノ面目有テ相見エンヤトテ、血氣勇猛ノ惡僧達、近鄕ノ一揆原共驅催シ、二千計ニテ、同〇永祿三年十月高屋ノ城後詰トシテ打出タリ、三好〇義賢勢是ヲ見テ、根來勢ニ足ヲ休スナ、下付合戰シテ追タテヨトテ、吾先ニト打出タリ、根來勢馳合セ、散々ニ戰ケレド、大將ハ長袖也、與力スル者ハ一揆ノ集勢ナレバ、諸陣一同ノ思ヲ不成、軍制混亂シテ一戰ニ打負、紀州ヲサシテ引ニケリ、

〔足利季世記 四三好記〕法華亂之事

三好一家繁昌ノ折ヲ得テ、カノ檀那法華宗アマリニヲゴリ、大勢ヲ引率シテ他宗ノ寺ヲ燒キ、其外度々大軍ヲ催シナドシテ、カヤウニ狼藉ドモアレバ、天台ノ宗ヲバ權實雜亂トソシリテ、ナイガシロニスルヨシ聞エケレバ、山門ノ衆徒、今度三好滅亡ナリ、ヨキ時分ナリト一同ニ撿義會合シテ、京ノ法華宗ヲ退治ノ爲ニ、末寺末山ヲ催シ、三千餘人、天文五年丙申閏七月二十六日ヨリ攻カヽリ、二十箇寺不ㇾ殘火ヲ放ツ、法華宗モ檀徒ヲカタラヒ、爰ヲ先途ト防ギケレドモ不ㇾ叶シテ、所所ニテ一千餘人打死ス、寺々モ同廿七日マデニ皆燒失ケリ、

〔妙法寺記〕享祿五壬辰、此年ムケカラ宗ト云者天下ニハビコリテ、諸宗ヲ責申候、殊更法花宗ヲ一向ニ可ㇾ失談合ヲ被ㇾ申候、去間ムケカラ宗ハ廿萬、法花宗ハ五百計御座候、何レモ經文ニ身ヲマカセ候而、弓矢ヲ取被ㇾ申候、去間法花宗切勝候而、ムケカラ宗散々ニ責失ヒ被ㇾ申候、是ハ京ニテノコトニ候、此コトガ天下ヘ聞ヘ候而、ムケカラ宗ヲ責失コト無ㇾ限、

〔落穗雜談一言集〕〔大久保四〕永祿六年の秋の比より、不思議の大變出來て、國中以の外に騷動す、縱令ば當國〇三河佐崎といふ所に上宮寺といふ寺あり、彼等の僧侶德川殿〇家康に叛き參らせ、野寺針崎の寺々に牒じ合せ、門徒の鄕人等驅催し、吉良義昭を大將におし立て、東條の城に移し入て、國中の一揆等所々に蜂起す、

〔武德編年集成四十七〕慶長五年九月十三日、神君〇德川家康ハ岐阜ノ燒跡ニ著御、〇中略或曰、黑田長政思惟シテ、神君ヲ諫テ曰、一向宗ノ僧侶檀越ヲシテ畿內ニ蜂起セシメバ、兇徒敗亡センカ、神君ハ兼テ是ヲ欲シ玉フト云ヘドモ、足下ノ謀最モ可ナリ、且忠心ノ篤キ歎ブベシ、然レドモ予武威ヲ以テ天下ヲ平治セントス、鼪鼠ノ如キ石田等ヲ誅スルニ及デ、僧徒ノ力ヲ假ンヤト宜フ、長政慙伏シ退ク、

女兵

女兵ハ、神武天皇ノ時男軍女軍ノ稱アリ、崇神天皇ノ朝、武埴安彥ノ妻吾田媛ノ一軍ニ將タリシアリ、後世木曾義仲ノ妾巴、城資盛ノ姑母板額ノ如キハ、其著名ナルモノナリ、又古ハ征行ニ婦女ヲ從ヘタリ、景行天皇ノ朝日本武尊ノ東征ニ、弟橘媛ノ從ヒシガ如キ、雄略天皇及ビ欽明天皇ノ朝、紀小弓及ビ紀男麻呂、河邊瓊缶、調伊企儺等ノ新羅ヲ征セシ時、各妻妾ヲ從ヘシガ如キ是ナリ、其後文武天皇ノ大寶令ニ之ヲ禁ゼリ、

初見

〔日本書紀 三神武〕戊午年九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之嶺、瞻望域中、時國見丘上則有八十梟帥、〇註略 又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置焃炭、其女坂、男坂、墨坂之號、由此而起也、　十有一月己巳、皇師大擧將攻磯城彥、〇中略 乃使弟磯城開示利害、而兄磯城等猶守愚謀、不肯承伏、時椎根津彥計之曰、今者宜先遣我女軍、出自忍坂道、虜見之必盡鋭而赴、吾則驅馳勁卒、直指墨坂、取菟田川水、以灌其炭火、儵忽之間出其不意、則破之必也、天皇善其策、乃出女軍以臨之、虜謂大兵已至、畢力相待、〇中略 果以男軍越墨坂、從後夾擊破之、斬其梟帥兄磯城等、

〔釋日本紀 九述義〕女軍（メイクサ）

〔日本書紀通證 八神武〕女軍 女手軍也、後世謂之娜手、〇中略 男軍 男手軍也、後世謂之追手、

女兵例

〔日本書紀 五崇神〕十年九月、武埴安彥與妻吾田媛謀反逆、興師忽至、各分道、而夫從山背、婦從大坂、共入欲襲帝京、時天皇遣五十狹芹彥命、擊吾田媛之師、卽遮於大坂、皆大破之、殺吾田媛、悉斬其軍卒、

〔日本書紀 二十三舒明〕九年、是歲蝦夷叛以不朝、卽拜大仁上毛野君形名、爲將軍令討、還爲蝦夷見敗、而走入壘、遂爲賊所圍、軍衆悉漏、城空之、將軍迷不知所如、時日暮、踰垣欲逃、爰方名君妻歎曰、慷哉、爲蝦夷將見殺、謂夫曰、汝祖等渡蒼海、跨萬里、平水表政、以威武傳於後葉、今汝頓屈先祖之名、必爲後世見嗤、

乃酌酒強之飲夫、而親佩夫之劍、張十弓、令女人數十人俾鳴弦、既而夫更起之、取伏仗而進之、蝦夷以爲軍衆猶多、而稍引退之、於是散卒更聚、亦振旅焉、擊蝦夷大敗、以悉虜、

〔源平盛衰記 三十五〕巴關東下向事

畠山ハ九郎義經ト院御所ニ候ケルガ、木曾漏ヤシヌラン覺束ナシトテ、三條川原ノ西ノ端マデ打出タリ、○中略木曾モ引返々々、弓箭ニ成、打物ニ成、追ツ返ツ返ツ追ツ半時計戰ケル、其中ニ木曾方ヨリ、萠黃糸威ノ鎧ニ、射殘シタリケル鷹羽征矢負テ、滋藤ノ弓眞中取、蘆毛馬ノ太逞キニ、少キ巴摺タル鞍置テ乘タリケル武者、一陣ニ進テ戰ケルガ、射モ强切モ强、馳合々々責ケルニ、指モ名ダカキ畠山、川原ヘ颯ト引テ出、畠山半澤六郎ヲ招テ、如何ニ成清、重忠十七ノ年小坪ノ軍ニ會初テ、度々ノ戰ニ合タレドモ、是程軍立ノケハシキ事ニ不合、木曾ノ内ニハ、今井、樋口、楯、根井、此等コソ四天王ト聞シニ、是ハ今井樋口ニモナシ、サテ何ナル者ヤラント問ケレバ、成清アレハ木曾ノ御乳母ニ中三權頭ガ娘巴ト云女也、ツヨ弓ノ手ダリ、荒馬乘ノ上手、乳母子ナガラ妾ニゾ、内ニハ童ヲ仕フ樣ニモテナシ、軍ニハ一方ノ大將軍シテ更ニ不覺ノ名ヲ不取、今井、樋口ト兄弟ニテ怖シキ者ニテ候ト申、畠山サテハイカヾ有ベキ、女ニ追立ラレタルモ云甲斐ナシ、又責寄テ女ト軍センモ程ニ、不覺シテハ永代ノ疵、多者共ノ中ニ巴女ニ合ケルコソ不祥ナレ、但木曾ノ妾トイヘバ懷キゾ、重忠今日ノ得分ニ巴ニ組ンデ虜ニセン、返セ者共トテ取テ返シ、木曾ヲ中ニ取籠テ散々ニ蒐、畠山ハ巴ニ目ヲゾ懸タリケル、進ミ退キ廻合ン〳〵ト廻ケレバ、木曾巴ヲ組セジト蒐阻蒐阻テ、二廻三廻ガ程廻ケル處ニ、畠山巴强チニ近ク廻合、是ハ得タル便宜ト思、馬ヲ早メテ馳寄テ、巴女ガ弓手ノ鎧ノ袖ニ取付タリ、巴叶ジトヤ思ケン、乘タル馬ハ春風トテ信濃第一ノ强馬也、一鞭アテ丶アヲリタレバ、鎧ノ袖フツト引切テ二段計ゾ延ニケル、畠山是ハ女ニハ非、鬼神ノ振舞ニコソ、加樣ノ者ニ矢一ツヲモ射籠ラレテ、永代ノ耻ヲ不可殘、引ニ過タル事ナシトテ、河原ヲ西

へ引退キ、院御所ヘゾ歸參ケル、○中略巴ハ都ヲ出ケル時ハ、紺村紅ニ千鳥ノ鎧直垂ヲ著タリケルガ、關寺合戰ニハ、紫隔子ヲ織付タル直垂ニ菊閉滋クシテ、萠黄糸威ノ腹卷ニ袖付テ、五枚甲ノ緒ヲシメ、三尺五寸ノ太刀ニ、廿四差タル眞羽ノ矢ノ射殘シタルヲ負、重藤ノ弓ニセキ弦カケ、連錢葦毛ノ馬ニ金覆輪ノ鞍置テゾ乘タリケル、七騎ガ先陣ニ進テ打ケルガ、何トカ思ケン、甲ヲ脫、長ニ餘ル黑髮ヲ後ヘサト打越テ、額ニ天冠ヲ當テ、白打出ノ笠ヲキテ、眉目モ形モ優ナリケリ、歲廿八トカヤ、爰ニ遠江國住人、內田三郎家吉ト名乘テ、三十五騎ノ勢ニテ巴女ニ行逢タリ、內田敵ヲ見テ、天晴武者ノ形氣哉、但女カ童カ𥨊(ヲボツカ)ナシトゾ問ケル、郞等能々見テ女也ト答、內田聞敢ズ、去事アルラン、木曾殿ニハ葵、巴トテ二人ノ女將軍アリ、葵ハ去年ノ春礪並山ノ合戰ニ討レヌ、巴ハ未在トキク、是ハ強弓精兵、アキマヲ數ル上手、岩ヲ疊金ヲ延タル城成共、巴ガ向ニハ不レ落ト云事ナシ、去辯者ト聞召テ、鎌倉殿彼女相構テ虜ニシテ進スベキ由仰ヲ蒙タリ、巴ハ荒馬乘ノ大力、尋常ノ者ニ非ズト聞、如何ガスベキト思煩ケルガ、郞等共ニ云樣ハ、女強トイフトモ百人ガ力ニヨモ過ジ、家吉ハ六十人ガ力アリ、殿原三十餘人、既ニ百人ニアマレリ、殿原左右ヨリ寄テ左右ノ手ヲ引張レ、家吉中ヨリ寄テ、ナドカ巴ヲ取ザラント云ケルガ、內田又思返ス樣、マテ〱暫、槿花ノ朝ニ咲テ夕ベニ萎ダニモ、己ガ盛ハ有物ヲ、八十九十ニテ死ナン命モ二十三十ニテ亡ン命モ同事、女程ノ者ニ組トテ兎角計ゴトヲ出シケルヨト、殊ニ後陣ニ引ヘタル甲斐ノ一條ノ思ハン事コソ耻シケレ、殿原一人モ綺ベカラズ、家吉一人打向テ巴女ガ頸トラント云ケレバ、三十餘騎ノ郞等ハ、日本第一ニ聞エタル怖シキ者ニ組ムマジキ事ヲ悅、尤々ト云ケレバ、內田只一人駒ヲ早メテ進ム處ニ、巴是ヲ見先敵ヲ讃タリケリ、天晴武者ノ貌哉、東國ニハ小山、宇都宮歟、千葉、足利カ、三浦、鎌倉カ、𥨊ナ誰人ゾ、角問ハ木曾殿ノ乳母子ニ、中三權頭兼遠ガ娘ニ巴ト云女也、主ノ遺ノ惜ケレバ、向後ヲ見ントテ御伴ニ侍ルト云、鎌倉殿ノ仰ヲ蒙リ、勢多手ノ先陣ニ進ルハ、遠江國住人內

田三郎家吉ト名乘進ケリ、巴ハ一陣進ムニハ剛者、大將軍ニ非ズトモ、物具毛ノ面白キニ、押並デ組、シヤ首ネヂ切テ軍神ニ祭ラント思ケルコソ遲カリケレ、手綱カイグリ歩セ出ヌ、去共內田ガ弓ヲ引ザレバ、女モ矢ヲバ不射ケリ、互ニ情ヲ立タレバ、內田太刀ヲ拔ザレバ女モ太刀ニ手ヲ懸ズ、主ハ急タリ、馬ハ早リタリ、巴內田馬ノ頭ヲ押並、鐙ト〳〵蹴合スルカトスル程ニ寄合、互ニ音ヲ揚、鐙ノ袖ヲ引違タリ、ヤヲラトゾ組ダリケル、聞ル沛艾ノ名馬ナレ共、大力ガ組合タレバ、二匹ノ馬ハ中ニ留テ働カズ、內田勝負ヲ人ニ見セント思ケルニヤ、弓矢ヲ後ヘ指廻シ、女ガ黑髮三匝ニカラマヘテ、腰刀ヲ拔出シ、中ニテ首ヲカヽントス、女是ヲ見テ、汝ハ內田三郎左衛門トコソ名乘ツレ、正ナキ今ノ振舞哉、內田ニハアラズ、其手ノ郞等カト問ケレバ、內田我身コソ大將ヨ、郞等ニハ非、行跡何ニト申セバ、女答テ云、女ニ組程ノ男ガ、中ニテ刀ヲ拔目ニ見スル樣ヤハ有べキ、軍ハ敵ニ依振舞べシ、故實モ知ヌ內田哉トテ、拳ヲ握リ刀持タル臂ノカヽリヲシタヽカニ打、餘ニ强被打テ把ル刀ヲ被打落、ヤヲレ家吉ヨ、日本一ト聞タル木曾ノ山里ニ住タル者也、我ヲ軍ノ師ト憑メトテ、弓手ノ肘ヲ指出シ、甲ノ眞顏取詰テ、鞍ノ前輪ニ攻付ツヽ、內甲ニ手ヲ入テ、七寸五分ノ腰刀ヲ拔出シ引アフノケテ首ヲ搔、刀ハ究竟ノ刀也、水ヲ搔ヨリモ尙安シ、馬ニ乘直リ、一障泥アフリタレバ、身質ハ下ヘ落ニケル、

〔吾妻鏡十七〕正治三年〇建仁元年五月十四日癸亥、佐々木三郎兵衛尉盛綱入道使者參著、捧一報狀、義盛持參御所、〇中略其狀云、日來城小太郎資盛欲奉謀朝憲、構城郭於越後國鳥坂、近國之際存忠直之輩憖雖來襲、還悉以敗北、爰西念可發向之由奉嚴命、〇中略有資盛之姨母、今號之坂額御前、雖爲女姓之身、百發百中之藝、殆越父兄也、人擧謂奇特、此合戰之日、殊施兵略、如童形令上髮、著腹卷、居矢倉上射襲致之輩、中者莫不死、西念郞從又多以爲之被誅、于時信濃國住人藤澤四郞淸親、廻城後山、自高所能見之發矢、其矢射通件女左右股、卽倒之處、淸親郞等生虜、疵及平癒者可召進之、姨母被疵之後

資盛敗北、○下略

〔豐薩軍記〕八 鶴崎城合戰之事

鶴崎ノ城主吉岡甚橘統増ハ、宗麟○大友ノ命ニ從ヒ臼杵丹生島ニ籠城シテ、鶴崎城ニハ統増ノ祖父吉岡參河守入道宗勸ガ後室妙麟尼丹生小次郎正俊ガ女ト云ケル者守禦シ居タリケルガ、心飽マデ剛ニシテ板額、巴ガ跡ヲ追ヒ智謀軍術逞シク、類ヒ少ナル老尼ナリ、○中略既ニ薩州ノ大軍發向スル由聞ヘシカバ、其來鋭ヲ防ントテ、妙麟兼テ軍慮ヲ廻シ、一城ノ砦ヲ構ヘケルニモ自ラ出テ繩張シ、外郭二三ノ丸ヲ見計ラヒケル、俄ノ事ニテアル間、塀ノ裏ヲバ板或ハ疊ナドヲ以テ圍セ、堀ヲ藥研堀ニシテ、菱ヲ植ヘ柵ヲ振リ、柵ノ外ニハ諸所ニ陷穴ヲ拵ヘ、其上ヲ平地ト成テ、城中ヨリ打出ン時ノ目驗ノ杭或ハ篠ヲ捨置ケル、智慮ノ程コソ淺カラネ、○中略妙麟其日ノ裝束ニハ鎖鉢卷ヲ無手トシテ、著込ノ上ヘ羽織ヲ著、長刀携ヘタリシカバ、相從フ侍女ニ至ルマデ、皆括袴ニ鉢卷シ、太刀ヲ佩タル其有樣、偏ヘニ勇士ニコトナラズ、

〔豐薩軍記〕七 高尾城合戰事

但馬守○阿南ニ男子ナク、只一人ノ娘ヲモテリ、○中略早ヤ十七歲ニナリケル、タラチ子ノ寵愛淺カラザリシ故、此度ノ籠城ニモ、トモニ籠城シタリケルガ、父痛手ヲ負テ、早ヤ浮世ノコトモ賴ミスクナク覺エケルニゾ、○中略白練ノ鉢卷シ、括袴ヲ著、父ガ帶セシ太刀ヲ佩ビ、敵ノ群リ居タル場ヘカケ出タリケル其有樣、誠ニ思切タル體ニゾ見エタリケル、其容貌ノ美麗ニシテ優ニタヘナルヨソオイ、華蘂夫人ノ花ノ面欺ク程ノ姿ナル故、イカナル島ノ夷ナリトモ、心マヨワデアルベキ、我生捕ント馳向フ、元來思定シコトナリケレバ、ナジカハ少モ臆スベキ、先ニ進ム兵ノ高股ヲ切テ落シ、續テカヽルヲ眞向二ツニ打割バ、二人ハアヘナク果ニケリ、其後十餘間ヲリ下リ戰ヒケルヲ、尙生捕ントセシカドモ、兩三人切伏テ、小高キ處ニカケ登リ、太刀ノ鋒ヲ呀テ眞倒ニ落貫レ

テゾ失セニケル、剛ナル女ノ有サマヤト、見人聞人其志ヲ語リ傳ヘテ皆哀感ヲ催セリ、

〔備中兵亂記〕常山城亡落女軍之事

高德村〇三女房ハ修理進元親村〇三ノ妹ニテ、日頃男子ニ越タル勇力アリ、我女性ノ身ナリトモ、ソモ武士ノ妻ヤ子ガ最期ニ、敵一騎モ不討シテ閑々ト自害センコト返々モ可口惜、況ヤ三好修理太夫從弟反逆ノ一族ト云ヒ、女人ノ身成トモ一軍セデハ叶マジト、鎧取テ著、上帶領太刀ヲ帶キ、長ナル黑髮解テ颯ト亂シ、三枚甲ノ緒ヲシメ、紅ノ落衣取テ著、裳ヲ引上テ腰ニテ結、白柄ノ長刀小腰ニ挾テ廣庭ニ躍出ケレバ、〇中略累年芳恩ノ家僕ドモ是ヲ見テ、八十三騎死ヲ一擧ニ蒐出タリ、寄手此形勢ヲ見テ、敵唯今妻子ヲ先立テ降人ニ出ヌト思ガ中ニ、小早川ノ魁浦兵部丞宗勝七百餘騎ノ正中ニ喚テ蒐ル、宗勝屹ト見テ、敵女人ノ裝束シテ寄來コソ怪シケレ、是處女ノ如クシ脫兎ノ功ヲ作シテ謀フ孫子ガ秘スル處、處ハ是實ト云ルモ斯ル謀ゴトヲヤ可謂、欺テ不覺バシトルナ面々ト、陣ヲ固テ扣ヘシカバ、敢テ敗ルコト不能、サレドモ宗徒ノ勇士一場ニ死ヲ輕ンジ突立ツレバ、寄手足ヲ亂シ、疵ヲ被リ死ヲ致ス者百餘騎、周章騷グ氣ニ乘テ、高德女房腰ヨリ銀ノ再拜ヲ拔出シ、眞前ニ進テ蒐敗レヨ者ドモト大勢ニ割テ入ル、宗勝ガ兵流石武勇ヲ嗜バ女人ニ向フ者ハナシ勇騎互ニ鎗ヲ合ル處ヘ、女性傍ヨリ突潛テホカト衝バ手負者若干多シ、暫ク戰フ其間ニ、寄手ノ大勢馳寄々々攻討バ、高德女房浦兵部丞ガ馬前ニ蒐留リ、大音ニテ詈リケルハ、如何ニ宗勝、御邊ハ西國ニヲ勇士ノ名ヲ得給フト聞、吾女人ノ身ト云ドモ一勝負仕ラン、其所引給フナ浦殿ト喚叫、長刀ヲ水車ニ廻シテ蒐寄セタリ、兵部丞四五間計跡ズサリニ退キ、イヤ〳〵御邊ハ鬼ニテモアレ女也、武士ノ相手ニハ難成ト身ヲ迯バ、傍ナル兵五十餘騎計ニテ蒐ル、長刀取伸七騎薙伏セ薄手負テ、又大音ニテ女ノ首取レトバシスナ人々ト呼リ、腰ヨリ三尺七寸ノ太刀ヲ拔出シ、是ハ我家什代國平ガ作タル太刀ナリ、一度先父家親ニ參セ、家親秘藏他ニ異ナリト云

ヘドモ、什代ノ由ヲ聞及テ返シ置レシ太刀ナレバ、父家親ニ副タテマツルト思、身不放持來レリ、死後ハ宗勝ヘ進スルナリ、後世弔ヒテ給ヘヨト云捨テ城中ニ蒐入ル、其形勢唯是刀八毘沙門吉見城ヲ守禦シ給フ時、吉祥天女諸共修羅ヲ責討給フモ此ヤト見ル人舌ヲ不巻ト云コトナシ、

〔陰德太平記三十三〕福屋隆兼殺重富黨附重富妻戰死事

重富ガ女房、生年四十三歲、下ニハ紅ノ小袖著テ、白綾ノ衣ノ裙高ク取、赤手巾ニテ帽額シ、白柄ノ大眉尖刀莖短ニ輕々ト提ゲ、重富民部大輔兼雄ガ女房也、女也共大丈夫ニモ勝ベキゾ、慢テ誤チスナ敵ノ殿原達トテ、水車ニ廻シテ切テ驅ルヲ、女ナレバ討取ンハ詮ナシ、生捕ニセントスル所ヲ、手下ニ三人薙伏セ、薄手重手負セタルハ不知數、猶モ敵ニ逢ントト、右ヘ旋リ左ヘ翔、傍ヲ拂テ見エタルハ、昔ニ聞山吹、巴、靜ナドガ擧動モ斯コソト、諸人目ヲ驚シ、會釋兼テゾ居タリケル、〇中略民部大輔、今ハ是迄也トテ腹掻切テ伏タルヲ見テ、女房モ小僧ト云子ヲ抱キ、猛火ノ中ヘ飛入テ燒死ケル有樣ハ、燒野ノ雉子ノ子ヲ思ヒニ身ヲ焦スランモ是ニヤ齊シカルベキト、見ル人袖ヲゾ沾シケル、

〔令義解五軍防〕凡征行者、皆不得將婦女自隨、謂家女及婢亦不可得隨也

〔日本書紀七景行〕四十年七月戊戌、天皇持斧鉞以授日本武尊曰、朕聞其東夷也、識性暴強、凌犯爲宗、〇中略願深謀遠慮、探姦伺變、示之以威、懷之以德、不煩兵甲、自令臣順、〇中略於是日本武尊、乃受斧鉞、以再拜、〇中略十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略進相摸欲往上總、望海高言曰、是小海耳、可立跳渡、乃至于海中、暴風忽起、王船漂蕩、而不可渡、時有從王之妾、曰弟橘媛、穗積氏忍山宿禰之女也、啓王曰、今風起浪泌、王船欲沒、是必海神心也、願以妾之身、贖王之命、而入海、言訖乃披瀾入之、暴風卽止、船得著岸、

〔日本書紀十四雄略〕九年三月、天皇欲親伐新羅、神戒天皇曰、無往也、天皇由是不果行、勅紀小弓宿禰、蘇我韓子宿禰、大伴談連、〇註略小鹿火宿禰等曰、〇中略以汝四卿拜爲大將、宜以王師薄伐天罰龔行、於是紀

小弓宿禰、使大伴室屋大連憂陳於天皇曰、臣雖拙弱敬事勅矣、但今臣婦命過之際、莫能視養臣者、公冀將此事具陳天皇、於是大伴室屋大連具爲陳之、天皇聞悲頹歎、以吉備上道采女大海賜於紀小弓宿禰、爲隨身視養、遂推轂以遣焉、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年七月、是月遣大將軍紀男麻呂宿禰、將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、遂到任那、以薦集部首登弭遣於百濟、約束軍計、登弭仍宿妻家、落印書弓箭於路、新羅具知軍計、卒起大兵、○中略於是河邊臣遂引兵退、急營於野、於是士卒盡相欺蔑、莫有遵承、鬪將自就營中、悉生虜河邊臣瓊缶等及其隨婦、于時父子夫婦不能相恤、鬪將問河邊臣曰、汝命與婦孰與尤愛、答曰、何愛一女以取禍乎、如何不過命也、遂許爲妾、鬪將遂於露地姧其婦女、婦女後還、河邊臣欲就談之、婦人甚以慚恨而不隨曰、昔君輕賣妾身、今何面目以相遇、遂不肯言、是婦人者坂本臣女、曰甘美媛、同時所虜調吉士伊企儺、爲人勇烈、終不降服、○中略其妻大葉子亦並見禽、

〔日本書紀二十二推古〕十一年四月壬申朔、更以來目皇子之兄當麻皇子、爲征新羅將軍、　七月癸卯、當麻皇子自難波發船、　丙午、當麻皇子到播磨、時從妻舍人姬王薨於赤石、仍葬于赤石檜笠岡上、乃當麻皇子返之、遂不征討、

〔太平記三十八〕九州探題下向事附李將軍陣中禁女事

筑紫ニハ小貳大友以下ノ將軍方ノ勢ドモ、菊池ニ追スヘラレテ、已ニ又九州宮方ノ一統ニ成ヌト見ヘケレバ、探題ヲ下シテ、小貳大友ニ力ヲ合セデハ叶マジトテ、尾張大夫入道ノ子息、左京大夫氏經ヲ九州ノ探題ニ成テゾ被下ケル、左京大夫先兵庫ニ下テ、四國中國ノ勢ヲ催シケレドモ、付順フ勢モ無リケレバ、サリトテハ道ヨリ非可引返トテ、僅ニ二百四五十騎ノ勢ニテ、已ニ纜ヲ解ケルニ、左京大夫ノ屋形船ヲ始トシテ、士卒ノ小舟共ニ至マデ、傾城ヲ十人二十人ノセヌ舟ハ無リケリ、礒ニ立雙テ是ヲ見物シヤル者ドモノ中ニ、些コザカシゲナル遁世者ノ有ケルガ、傍ヘ

ノ人々ニ向テ申ケルハ、筑紫九箇國ノ大敵ヲ亡サントテ、討手ノ大將ヲ承ル程ノ人ノ、是程物ヲ知ラデハ、何トシテカ大功ヲ成ルベキ、夫大敵ニ向テ、陣ヲ張リ戰ヲ決セントスル時、兵氣ト云事アリ、此兵氣敵ノ上ニ覆テ立時ハ、戰必勝事ヲ得、若陣中ニ女多ク交テアル時ハ陰氣陽氣ヲ消ス故ニ、兵氣曾不立上、兵氣立ザレバ、縱大勢ナリトイヘドモ、勝事ヲ不得トイヘリ、サレバ昔覇陵ノ李將軍ト云ケル大將、敵國ニ赴テ陣ヲ張リ旅ヲ調ヘテ、單于ト戰ヲ決セントシケルニ、敵僅二三萬餘騎、御方ハ是ニ十倍セリ、兵氣定テ敵ノ上ニ覆ラント思テ、李將軍先高山ノ上ニ打上リ、兩方ノ陣ヲ見ルニ、御方ノ陣ニアガラントスル兵氣陰ノ氣ニ押レテ、立ントスレ共不立得、李將軍倩是ヲ案ズルニ、何樣是ハ我方ノ陣ニ女交テ隱レ居タレバコソ、加樣ニハ有ラント推シテ、陣中ヲサガスニ、果シテ陣中ニ女隱レテ三千餘人交リ居タリ、サレバコソ是故ニ兵氣ハ不上ケリトテ、悉此女ヲ捕ヘテ、或ハ水ニ沈メ或ハ追失テ、後又高キ山ニ打上テ、御方ノ陣ヲ見ルニ、兵氣盛ニ立テ、敵ノ上ニ覆ヘリ、其後兵ヲ進メテ、鬪ヲ決スルニ、敵四方ニ逃散テ、勝事ヲ一時ニ得シカバ、李將軍ト云レテ、武功天下ニ聞ヘタリ、智アル大將ハ、加樣ニコソアルニ、大敵ノ國ニ臨ム人ノ、兵ヲバ次ニシテ、先女ヲ先立給フ事、不被心得ト難ジ申ケルガ、果シテ無幾程高崎ノ城ニモ不怺、淺猿キ體ニテ上洛シ給ヒシガ、面目ナクヤ被思ケン、尼崎ニテ出家シテ、諸國流浪ノ世捨人ト成ニケリ、

○按ズルニ、木曾義仲ノ妾巴ガ軍ニ從ヒシ事ハ、女兵例ノ條ニアリ、

古事類苑

兵事部八

斥候

間諜

古事類苑

兵事部八

斥候

斥候ハ物見ナリ、對陣ニ臨ミ敵兵ノ動靜多少ヲ測度シ、道路ノ險易等ヲ視察シ、之ヲ報ズルモノナリ、其人數ノ多少ニ由リテ大物見、中物見、小物見ノ名アリ、其人ヲ擧グレバ物見足輕ノ名アリ、遠ク出ヅルヲ遠物見ト云ヒ、極メテ密ニスルヲ忍物見ト云フ、而シテ遠物見ニハ又遠目、又ハ遠見ノ名アリ、忍物見ハ又芝見、カマリ物見ト云フ、物聞モ又忍物見ナリ、敵ノ密謀ヲ偵知スルヲ以テ名ク、又聞織、遠聞、耳聞ト云フ、

〔運歩色葉集毛〕物見

〔書言字考節用集四人倫〕斥候　伍候　檐猴　軍監

〔令義解一職員〕大國　守一人〈○中略〉其陸奥出羽越後等國、兼知饗給、〈○中略〉征討、斥候、〈謂斥逐也、言候逐於非常也、〉

〔令集解六職員〕釋云、斥音齒亦反、左傳斥山澤之險、杜預曰、斥候也、逐也、朱云、征討斥候此亦爲外賊歟何、穴云、斥候也、但宮衞令駈斥斥逐也、

〔釋日本紀十五述義〕私記曰、案調連淡海、安斗宿禰智德等日記云、石次〈○章那公氏〉見兵起〈○所謂壬申亂也〉乃逃還之、既而天皇〈○天武〉問唐人等曰、汝國數戰國也、必知戰術、今如何矣、一人進奏言、厥唐國先遣者視者、以令視地形險平及消息、方出師或夜襲或晝擊、但不知深術、

〔令集解六職員〕伴云、擅興律主將守城條云、若連接寇賊被遣斥候、不覺賊來者、徒二年、

〔律疏 衞禁〕凡緣邊之城戍、有外姦內入、謂來不滿百人者、內姦外出、而候望者不覺、徒一年半、主司徒一年、謂出入之路、關於候望者、謂國境緣邊皆有城戍、式遏寇盜、預備不虞、其有外姦內入、謂蕃人爲姦、或作間諜之類、註云、謂來不滿百人者、此謂小小姦寇抄掠者、若滿百人、自依擅興律、逢接寇賊、被逢斥候、不覺賊來、徒二年、內姦外出者、謂國內人爲姦、兩出向化外、或託海之時幽險之中、候望之人、不覺有姦出入、合徒一年半、雖非候望者、但是城戍主司不覺、得徒一年、謂內外姦人出入之路、關於候望者、目所堪見爲關、謂在候望之內、其有姦人入出、力所不敵者、傳告比近城戍國郡、若不速告、及告而稽留、不即共捕、致失姦寇者、罪亦如之、謂其有姦人入出、所經城戍、皆卽捕之、若力所不敵者、卽須傳告比近城戍國郡、令共捕逐、若不速告、及告而稽留、不卽共捕、致失姦寇者、並徒一年、故云罪亦如之、

〔北條五代記 八〕物見の武者はまれ有事

聞しは昔、或老士物語せられしは、われ小田原北條家に有て、數度の軍にあひたり、然ば敵味方對陣の時に至て、物見にさゝるゝ人は、先もつて馬に鍛錬し、其所の案內をしり、功者を專とす、物見の武者境目へ乘出し、其日の氣色を見合せ、さかひをこえ、高き所へ乘上、敵の軍旗をはかり、急ぎ歸陣す、されば大將軍出馬し對陣をはる時は、敵もみかたも先手の役として、夜に入ば足輕共境目へ行、草に臥て敵をうかゞひ、あかつきには歸る、是を草共、忍び共名付たり、夜の草畫迄殘る事有、是を知ず物見の武者さかひ目を過る時、彼草おこつて歸路を取きりうたんとす、其節に至ては馬達者を力とし、野へも山へも乘上はせ過る事、兼て案の內になくては叶がたし、陣取の事、たとひ敵遠く、水つかひよく共、大山の麓くぼみの地、大河のはた、森の陰うしろの節所をきらひ魚鱗鶴翼に陣をはる、かやうの義は武者奉行下知すといへども、猶も物見の了簡による事也、一夜の陣にも壁壘を專とす、是すなはち勝べきには戰ひ、勝まじきにはたゝかはざるのてだて也、

〔西島氏記〕物見役、使番ハ、一備ニモ人數多無テハ叶ハヌモノニ候、戰場ニテノ勝負ハ、此二役ガ功者ニナケレバ、軍ハナラザルモノニテ候、則古主武田信玄ノ御歌ニ、

軍には物見無くては大將の石をいだいて淵に入るなり

〔無名雜話(二十四中所引武家名目抄)〕物見ニ行テ歸、主人ヘ御返事申ニ、タトヘバ敵進色ナリ、或ハ不進色ナリト云、主人如何ト云、答曰、敵備シラケタルトカ、又ハ二ノ手不續ト云カ、先手進トモ二ノ手不進ト云カ、御返事條ハ順之可申上也、其時大將敵味方ノ間何程アラント問或ハ先手ト先手ノ間十五町トカ、廿町トカアラント云、シラケタルニテモ、不續ニテモナシ、又問五七町モ有之ト云、是又シラケタルニテモアランカ、何モ心付ベキ事共ナリ、

〔細川幽齋覺書〕一敵味方人數を立合候時、眞中を傍示と申候なり、敵陣の備の前に惡敷所など候はゞ物見に參候時、傍示をこし參り、敵陣の様子をよく見、頓て歸り可申候、そこを手延に致し候得ば、敵方よりも物見を出すものにて候、敵出候ていそぎ歸り候事は見ぐるしく候間、左様の所は成程手ばやに仕り可申候事、〇中略

一敵陣へ物見に參候に、其城の邊に森林など有之て、鳥など心安く居候はゞ、其邊に人數無之と心得べし、然ども大木ならば少し心持替るべし、又其城の塀櫓の上に、しよへん氣遣なき體にて鳥居候はゞ、塀裏に人なきと存、近く乘寄見頓て歸り可申事、

一敵陣へ夜物見に參候時は、我可參と存る道筋にはかまひ不申、參る間敷と存る道筋に、鐵砲二ツ三ツ打せ、火繩の火敵方よりみゆる様に、竹にはさみ置候得ば、敵方より其火のみえ候道筋へせんに鐵砲打せ候故、其間に委敷見候て歸る物にて候事、

一田地に水を取候時、川をせき置事、其せきどより餘り候水の音常にはいつも瀨のなる様に鳴り候が、しせん嵐など強く吹候得ば、一度に落る水音、人馬の渡る様に聞え候、敵味方川をへだてて陣を取候時、とぎ(外聞)、などに參り、何心なく聞候得ば、右餘水の落候音敵の人數渡す様に聞える物にて候、左様の所にては、成程心をしづめ念を入、色々に心を付聞可申候事、〇中略

一敵陣へ物見に參る時、何とも可參手立無之時は、商人にまぎれ參る物にて、御陣等にて無之候

はゞ、敵味方人數を立合候中にも、酒賣商人などは參り候、自然此方へ左樣の者參り候ば、少も油斷仕る間敷候事、

〔軍中斥候書〕一軍中ニテ斥候ニ出ル時、味方陣ヲ一町モ乘出テ、馬ヲ輪ニ乘テ、心中ニ軍神ノ神名ヲ唱ヘ、一騎出ハ馬ヲ千鳥掛ニ乘リ、三騎出ル時ハ緊ギニ乘ル也、口傳、

一物見武者心掛ノ事、人ヲ見ベキト心掛ベカラズ、我ヲ人ヨリ見ル事ヲ心ニ掛ベシ、人ヲ而已見ントスレバ、心ハ先ニアリテ手前虛也、若シ足本ニ野臥ナド有カ、敵不意ニ出ル時、其品アシキ事アル故ニ、自身ヲ能納メ往ケバ、心手前ニアリ、然レバ先自ラ見ユベシ、是物見ノ敎ナリ、

一敵方ヨリ物見多ク出テ、先ノ物見ヲ見合テ導スルハ、其跡ニ敵ノ大將アリト知ルベシ、○中略

一山野ニ鳥獸立サワガバ、横矢ノ伏アリト知ルベシ、

一敵城ノ上ニ鳶鳥集ラバ、落テ人ナシト知ルベシ、

一敵ノ旗ヲ森林ニ立ルトモ、其脇ニ鳥獸アリテ靜ニ見ヘバ、是レ敵ノ謀ニシテ人ナキト知ルベシ、

一夜中敵城ヲ廻リ見ル時、堀ノ水ニ心ヲ付見ベシ、水動カバアヤシムベシ、

一敵城ノ堀ノ淺深ヲ見ルニハ、夜中ヒソカニ乘往キ、繩ニ石ヲ付テ竿ノ先ヘ付テ堀ヘ入、淺深ヲ知ル也、夜中ノ斥候ハ黑キガヨシ、忍轡ヲ用ユ、

一夜中ノ火事ハ、火先陣屋ヘ移レバ、近火ニ見ユル物也、能考ヘ注意スベシ、

一月夜ニ物見ニ出ル時、敵味方ノ柵ヲ人カト見誤ル事アリ、陣屋ヲ燒トキ敵ヨリ燒時ハ內ヨリ燒ユヘ、烟先厚次第ニ燒廣ガルモノ也、外ヨリ燒時ハ片ハシヨリ燒ニヨリ、烟ノ先薄キ也、一槪ニ覺ベカラズ、

一敵城ノ食ノ時、二時ノ烟ニ心ヲ付、虛實ヲ考ヘ可察ナリ、雞犬不時ニ啼サワグ音セバ、兵糧ノ乏

キト知ルベシ、

一旗ヲ多クスル敵ハ兵少ナシ

一急ニ川ヲ渡リ來ル敵ハ、腰ヨリ下ニカイトル體アリ、

一川端へ押來ル敵先へ物見ヲ出シ、其物見川ノ瀬ノ渡ルベキ處ヲ見立ルハ、其處ヲ一同ニ渡ルト知ルベシ、

一深田ヲ見ル事、深田ト云物ハ常ノ田ヨリモアゼ少キ物也、近クヨリテ見ル時ハ、鎗ニテモ竹ニテモ立見ベシ、若、ヤリモ竹モナクバ、アゼニ登、ユリヲドレバ四方動ク者也、

一總ジテ田ノ足入ヲ見ル事、其地形四方ヨリモ窪キ處ノ田ハ、水ナクトモ深キモノナリ、水アリテ地形ノ高キ處ノ田ハ、サノミ足入淺キモノナリ、

一物見ニ出ル時、相圖ヲ定テ往モノナリ、少キ五色ノ旗ヲ懷中シ、事ヲ告ルニ策へ括付テ、味方へ知ラスルナリ、

一相圖ノ仕樣、遠クハ驗ニ狼烟、近クハ馬ノ乘樣又五色ノ旗也、

一敵ノ忍ニ逢トモ退クベカラズ、味方ト思ハセタバカル謀スベシ、

一敵城ヨリ夜討出ル時ハ、必ズ其方ヨリ鐵炮打ザル者也、

一高ミノ城ハ遠クヨリ見ヘテ、近クハ寄程却テ見ヘヌ也、○下略

(海國兵談三)物見　物見は軍の肝要なるものにして、勝敗の係ル所なれば、可重の第一也、まづ物見に大中小の三段あり、大物見とは本大將の直に物見する事なり、中物見とは侍大將番頭などの爲所なり、小物見とは一二騎出て物見するを云也、中物見以上ハ直に取合に成事あり、覺悟あるべし、覺悟とは兵器を備る事なり、義貞足羽合戰の大物見など、事を率爾に爲たるより大變を引出せり、可愼々々、扨物見より直に取合に成たる時ハ、其事を本陣江知する役定め有べし、小物

大物見

見に出たる時、敵より勝負を望ム者あらば、主用にて物見に出たる故、まづ立歸て言上シ、卽時に馳來て勝負すべしト云て、互に名乘合、且鎧指物等相互に見覺て立別ルべし、扨實に立歸て勝負を決する事は、時宜の見合に因べし、不二立歸一とも大なる恥辱にもあらざる也、大將の下知次第なるべし、○中略漢山(カラ)、和蘭(オランダ)等の軍事は、大小悉く物見を用る也、然ル故に倉忽の破レを取たる事なし、日本の軍事は物見の事甚粗にして、入用の時に許、物見を用ル也、此故に戰を善する大將も、足本より不意の動亂を受たる事多し、武田が本陣江上杉に仕懸られ、今川が旗本江織田氏に切込レたる事など、皆物見に粗キ故ト知べし、

〔高麗陣日記附錄〕清正家軍言　大物見トハ千騎ニ百騎程出ルヲ云フ

〔武家名目抄職名三十四中〕大物見　按、大物見は多く兵士をひきゐて、斥候をなすものなるが故に、大の字をもそへたるなり、例の物見といふは五騎七騎にて、敵に見知られざるをむねとすることなれど、これは敵陣近く進みて其擧動を察し、或は敵地に入て斥候をなすなれば、人數なくてはあやうかるべきが故に、軍士をそへらるゝなるべし、又首將たる人みづから大物見に出ることもあれど、大かたは物見功者なる輩に、士をそへて遣はすが常のならひなり、

〔甲陽軍鑑品九第二十七下〕板垣、淺利兩侍大將に、旗本よりけいごには、足輕大將に原美濃を指添、村上方へ働あり、○中略板垣家中の侍を六十騎、歩者一人もそへず、大物見をこし、如何にも敵陣近く參り見て、歸るべしと下知せらる、

〔松隣夜話上〕永祿五年○中略矢倉ニアリケル侍、小田ガ役所ニ來リ、刀根川ノ方ヨリ馬煙夥ク見エ、ドヨミテ次第ニ相近キ候、○中略若又謙信誤テ奥筋ヘ手使被申トモ、兩將斯テマシマセバ、爭カ一戰不有、去ニテモ又味方ニテハ可有トモ不覺、大物見ヲ掛ヨトテ、小田小四郎、與力同心五十騎ヲ連レ、自ラ物見ニ出、七八町西ニ當ル丸山峠ヘ乘上ケル處ニ、太田三樂先將澀谷ガ一手三百計ニ

テ寄來ケルニ、喩キ山ノ嶺ヲツラ突程ニ行逢タリ、

〔關八州古戰錄三〕上杉景虎武州忍城攻ノ事

景虎大物見トシテ、騎馬少々召連、大手佐間口ヨリ下、忍口マデ乘廻シ、巡見セラレケル、

〔東遷基業四〕武田勝頼所々戰附奥平父子歸參大賀彌四郎謀叛の事

天龍川大に水漲りて涉る事不叶、勝頼見付の府より進んで、川上に陣を取、濱松將士鳥居元忠、大久保忠世、其弟忠佐、成瀨正一、內藤正成、柴田康忠、榊原康政等三十騎計大物見に出けるに、甲軍板垣某が部兵五騎（板垣名闕未知誰）河を渡らむとしけるを、濱松の大物見河に入て逆擊んとしけるゆへ、敵渡る事なくして歸りけり、それより大物見の兵は勝頼の陣に向ひてうかゞひける、

〔奥羽永慶軍記十五〕佐竹與伊達安積合戰事附岩城石川扱事

會津長沼ノ城主新國上總介申ケルハ、此番手ハ伊達安房守、片倉小十郎トナレバ、此兩人ガ軍慮ニテ、平田左京コソ伊達方ニ內通アリトイハセンタメ、矢文モ射ルニ是アルベシト申ケル、義重宣ヒケルハ、御邊大物見ニ出テ、番手ノ次第ヲモ窺フベシト宣ヘバ、畏道畏リ候トテ、馬上五騎、足輕步者百餘人打連、郡山ノ南ヨリ、北ノ取出ノ要害、窪田ノ矢羅井ノ中ヲ、敵陣近ク打テ通ル、

〔會津陣物語四〕本莊出羽守與政宗宮代合戰事

同七日、（慶長六年二月、中略、）折節宇佐美民部、小瀨美作ハ、五十騎ニテ大物見ニ出ケルガ、是ヲ見テ森ヲカタドリ、備ヲ立テ、鐵砲ヲ打懸タリ、

〔高麗陣日記附錄〕淸正家軍言　中物見トハ千騎ニ五十騎程出ルヲ云フ

〔武功雜記二〕一權現樣天龍河ニテ御合戰ノ刻、中物見四十人御カケ候時、島田意伯モ隨一也、イラフノ退口ニテ、敵イヅレドモ馬ヲ先ヘ遣シ候テ退候時、其馬ドモノ待居候所ニテ、權現樣意伯ガ馬ハアソコニイルハト御意被遊候、能御覽オボヘ被遊候事ニテ候ト、意伯物語ノ由、

小物見

〔高麗陣日記附錄〕清正家軍言　小物見ト ハ 一騎ヨリ四五騎程出ルヲ云フ

〔武家名目抄職名三十四中〕小物見　按、小物見といへるは、大物見にむかへてよべる稱にはあらず、例の物見番の薄祿なるものをいへるにて、職掌も異なる事なかりしなり、此職何れの家にもありしなるべけれど、所見多からざるは、なべての物見番の內に加へてありし故なるべし、

〔淸正記一〕虎之助十五歲の時、母公〇秀吉母へ被申上けるは、我御蔭を以成人仕り、歲は十五といへども、せいも高し、前髮おとし奉公も勤可申と被申ければ、おとなしく申たるものかなと、藤吉殿へこま〳〵と御語あれば、〇中略右之首尾秀吉公具に聞え、常々彼者は常の若者の樣にもなく、物の役に立べきとおもひしに、能も仕たりと被仰、二百石の加恩有て、木村大膳の小物見の役に被仰付、朝暮勤仕被申なり、

物見足輕

〔室町殿日記二〕細川典厩の要害へ敵よする事

四月〇天文十三年廿六日戌の剋ばかりに、和州の四手井有富兵庫頭兩旗にて、二千四五百の備へを以て、今里上手の原に出張し、物見の足輕を度々出しけり、城中にも足輕を出し、是を會釋しけるが、翌日未明に、三百ばかり大手の門におし寄、鬨をどつと上る、

〔武家名目抄職名三十四中〕物見足輕　按、物見足輕といふは、今の世にいふ足輕同心に限れる稱にはあらず、たとへば徒士にもあれ、足輕同心中間小者の類にもあれ、騎馬せざるもの物見役に差るゝものをいへり、今の徒目附、中間目附、小人目附などのたぐひ、大かた其しなに當れり、職掌は例の物見番に異なることなかるべけれど、事の大小時の便宜に從ひて、或は騎馬の物見を遣し、或は步立の者を用ゐ、又は騎馬步立共に遣はさるゝやうの差等はありしとみゆ、

〔會津陣物語二〕一揆勢圍越後國三條城事附溝口宣勝村上義明後卷之事

有坂齋宮介、竹俣伊豆守八千ニテ、半道此方ニ待ウケタリケレバ、堀雅樂介大ニ愰リ、五里隔テ高山要害ニ陣ヲトリ、本庄ノ村上周防守ト柴田ノ溝口伯耆守ト兩所ヘ加勢ヲ乞タリケルヲ、有坂齋宮介下知シテ、物見足輕ヲ出シ置キ、雅樂介使ノ者二人マデ生捕、其首ヲ切テ獄門ニカケタリケル、

〔矢島十二頭記中〕一永祿三年、瀧澤へ五郎殿押懸候節、此方中惡百三段の市場の百姓共の運送迄を妨るよし度々に及び、五郎殿無念に思召、天正二年六月中旬、瀧澤へ押寄られ、上條に一日逗留被成候、然ば遠目之者、〇遠目之者、奧羽永慶軍記作遠斥候、歸來て五郎殿へ申は、仁賀保勢後詰として、横岡山城、菊地五郎大夫兩人大將として、大勢押懸來由申故、〇下略

〔武家名目抄職名三十四中〕遠物見又稱遠見番、遠目、　按、遠物見は遠所の消息をうかゞふ物見番なり、其なかに遠所へ潛行して、敵地の嶮易敵兵の居動を伺ふもあり、又こなたに有ながら、かなたの動靜を察するもあり、何れも遠物見なり、其人の名は例の物見に、輕重あるに准じて推はかるべし、但家々の規格によりて、なべての物見番の内にて、此事をうけ給はるもあり、又は二職に別置れし家もありしとみゆ、或はこれを遠見番、遠目などさま〴〵にとなへのかはれるは、家々のならはしにて、名稱のことなるもあり、又一家にて二名なにとなへたるもありしなるべし、

〔見聞雜錄武家名目抄職名三十四中所引〕元龜三年極月廿二日夜明より四方晴、當多中之快晴暖氣、六具之武者ハ汗出ル位也、武田信玄御機嫌不斜、〇中略今日濱松表御合戰との仰渡しの處へ、遠物見より注進、家康濱松之城兵を拂て、被出向と申沙汰仕候、定て此味方ケ原に於て防戰と相見え候との披露也、

〔新田老談記上〕武藏國寄居ノ城ニハ、北條安房守ヲ指置シカド、無心許事多シトテ、三百餘騎ノ加

忍物見

勢ヲ遣シ、櫻澤八幡宮ノ前ニ新關ヲスヘ、山ノ上ニハ遠見ノ番ヲ催シ、用心嚴ク見ヘタリ、

〔新田老談記　中〕新田、足利ノ強力若侍ヲ交テ、少モ心ヲ不レ免、遠見加番ヲシテ、前後左右ヲ取卷テ、近邊ノ鄕人迄ヒシメキケリ、

〔太閤記　十八〕織田酒造丞

酒造丞此表に在て、かくのごとく之事有しなど云れん事、ひとへに耻辱なるべしと、總軍中恙なきやうに心をくばり、夜をしも更に閑にせず、或は他の夜番他の遠見などにも、自分の步士を相添、總軍をおのれひとりのおもにのやうに勞せしなり、是をかさ有勇士といひし也、

〔播州佐用軍記　上〕寄手總勢上月表ノ山々エ取登之事

城ハ遙ニ見上ル山城ニテ、要害ノ地ナレバ、是ヲ事トモセズ、遠物見ヲ置、寄手ノ怠リヲ見テハ打出、或鐵炮ヲ打、或遠矢ヲ射カケル間、寄手ハ日々ニ手負死人多ケレバ、竹把ノ陰ニ隱レ、ハカ〳〵敷イクサハ無リケリ、

〔奥羽永慶軍記　十五〕阿子島高玉落城事

明レバ五日、〇天正十七年八月、中略、辰ノ一天ヨリ軍始リ、未ノ剋ニ落城ス、西一方ヲ態ト不レ圍明置テ、落ル者アルカト、遠目付ヲ置ケレドモ、一人モ落ル者コソ無リケレ、

〔甲陽軍鑑　十五品第四十二〕味方夜軍分別

味方夜軍をせんに、〇中略時を合こと肝要也、伏かまりに風の大事口傳、かまりの物見は、かきもの聞と云、

〔武家名目抄　職名三十四中〕忍物見又稱芝見、カマリ物見、　按、忍物見は人にさとられざるを專要とし、野にも伏し山にもいり、或は柴原叢のうちに隱れ居て、敵地の消息を窺得べき職掌なり、この所役は、例の物見よりは左なくだりて、大かた徒立のもの、うけ給はる事と見ゆ、いはゆる物見足輕の類なり

これ潜行をむねとするが故なり、家々のならはしにて、或はかまり物見、又芝見とも、草とも稱せり、かまりはかゞまりにて、事の便宜に隨ひ、或は人居の傍、又は叢の中にも、かゞまり伏さしむるよりのとなへにして、芝といひ、草といふも、共に芝原草原にかゞまり隱るゝ意よりよびならへるなり、

〔見聞雜錄〕三十四中所引武家名目抄職名武井夕庵信長の御本陣に有しが、梶川が先陣未だ注進なき内、誰やらん宇治川の先陣して、川を渡し候と申ければ、信長究て梶川彌三郎成べしと宣故、各是は如何して御存に哉と驚しが、信長御意に、夜前忍之物見を出し、川筋を見せし所、彌三郎は宵より松の下に馬を繫ぎ置、五幣を以觀念し、川へ流せしと聞、是水神を祭る成べし、左程に心がけ候上は、其名は不及聞、彌三郎と思と御意の所へ、只今宇治川の先陣は梶川彌三郎と注進せしと也、

〔奧羽永慶軍記〕八政宗攻大内備前守事

大内備前守に、其夜小濱ニ歸レバ、政宗モ三十餘町引取、野陣ヲゾセラレケル、白石若狹守ハ、敵若夜討ニ寄ルカト芝見ヲ附テ用心スレドモ、更ニ夜討モ無リケリ、

〔川角太閤記〕一それより日向守殿陣取、正龍寺近き、其間一里程へだて御陣取被成候、それより物見御出し被成、方々に付被置候、先手ハ鐵炮頭中村孫平次、堀尾茂介、其外四五人なり、暫ありてしのびのもの四五人被召寄候、此あたりの在々所々の百姓ばら、小屋あかりと見え悉く明屋に成るなり、是より南地へまハり、京のかたより、日向守陣へハ人の往來かぎり有間敷也、日向守者の樣ニ紛入、それより夜に入り、在々の明屋へしのび入り、敵陣の物音を夜の七ッ時分まではよくきけよ、夜討を入れなば、海道筋へ軍兵押出すべし、すハ夜討よと心得自然入り來る樣ニ、ちひさき家に火をかけ燒き上げよ、必家ごみに火をかくべからず、ちひさき家一ッにても、火は是へ見ゆるなり、是ハ相圖ののろしと聞え申事、

忍目付

物聞

〔奥羽永慶軍記六〕船越北野合戰之事

則賴〈○淺利〉ハ船越ノ在家ヲ燒働ク、涌本名譽ノ兵ニテ、爰カシコニ目付ヲ忍バセ置ケレバ、敵船越ニ來ラザル以前ニ、手勢ニ船越ノ在家人ヲ合セテ千餘人、三方ニ待カケテ、淺利ガ勢ヲ中ニ取込、

〔武家名目抄〈職名三十四上〉〕忍目付　按、忍目付ハ常に定置る丶一職の名にあらず、なべての目付にもあれ、歩、中間、小人の目付、又ハ近臣忍組等の者にもあれ、主家の命をうけて他方に潜行し、其地の形勢を探り得て、反告をなすものをいへり、〈忍組ハ伊賀者、甲賀者の類をいふ、〉近臣にても此役にさ丶る丶ことハ、主人より直に命せらる丶に、便あればなるべし、もとより人にさとり得られざるをむねとするが故に、商賈のさまにまねび、虛無僧、放下の形をもかりなどして、他國に赴くならひなり、されば人にも知られたる、なべての目付職たる者の、これを役するハ少く、大かたハ徒立の輩うけ給はりしと見えたり、後の世かくし目付、又ハ隱密などいふもの皆此流なり、

〔蒲生氏鄕記〕內々氏鄕被ㇾ存ハ木造足長ニ出ヨカシ、討果トテ方々ニ物。聞。ヲ置、指出候バ鐵炮ヲ打候ヘ、ソレ次第ニ松ガ島ヨリ掛付可ㇾ討捕、

〔武家名目抄〈職名三十四下〉〕物聞〈又稱二聞役、耳聞、外聞、聞物次、〉　按、物聞の所職、又其人がらハ諸家各規格有て、必同異なしといふにハあらざれども、大概其要務とする所ハ、他の國郡にも潜行して、爰の消息、かしこの風說を聞とり、又ハ我主家の門族家臣等が行狀の善惡をも伺ひ去りて、主將に告申べき職掌なり、されば其つかさどる所は、目附使番などの如く、うけばりたる要職にあらざるが故に、人品など撰ばる丶ものにあらず、然れども大事をも聞いづべき所役なるをもて、主人の意にかなへる、心賢き人を用ひらる丶ならひなりしとみゆ、元より物の心を伺知れる者なれば、陣中にて軍議にもあづかり、勝敗の理をも辨ずることありといへども、是その本務にあらず、在々所々にかくれ行て事實を察知し、密告を致すを以て其專務とす、今に至りても其

道風なるものありといふ、此職號家々にておなじからず、或は聞物役又ハ耳聞、聞次、聞次は召次取次などの次なるを、本文にひける太閤記に聞續と書るは、その稱へのおなじきを以て、かり用ひたるなり、などさま〴〵なるハ、正しく國々の俗諺に從へる故なるべし、

〔武家名目抄職名三十四下〕遠聞又稱外聞　按、遠聞といひ外聞といふ、何れも物聞の事にして、物見に遠物見といふがある類なり、但物聞とのみいひてハ、家にある時にても、時機を窺ふ意あり、遠聞又外聞といへバ、をのづから他方にかゝはれる名稱と成て、物聞役の一端をいへるがごとし、されど家々のよびならはしにて、物聞の事を、ひたすら遠聞外聞など、となへ來りし家風もありしとみゆ、これそのつかさどる所、大かた他方を窺ふを專務とする故なるべし、

〔太閤記五〕北伊勢表進發附柳瀨合戰之事

秀吉も桑名より五六里引退きて、瀧川○益一は弓矢取ての明將なり、今日の狼藉さぞ無念に有べし、小勢にて鬱憤を散ずる事は、夜討に志くはなし、其心得をなし候へとて、軍中其制尤きびしく、夜盜の功者を遠聞に出し、終夜大かゞりを山の如くつみ上たかせしかば、痛はしや一益夜討の支度もむなしく成、かへつていかなるてだてもやあらんかと、不審く思はれ、取出の城々へ用心油斷有べからず、めづらしき敵のてだてあらばつげ知らすべしといひやり、還て自分の用心に勢す、

〔太閤記八〕熊本之城佐々後攻之事

佐々宿老共に向て、數度勝利は得つれども、とりかこみし勢を目前に置しよな、心ながき佐々かなと、世のそしりはのがるまじ、いざ切て出、一合戰せんと思ふはいかゞ有べきと評しければ、をのをのうけたまはり、敵退散ほど有まじく覺候、今少まち合せ御覽候へ、自然いさゝかにても利を失ひ給ふ事あれば、大利を得し軍の氣脫、度々の勇功徒になる事もやと、おしかへしいさめと

めし所に、閑。績。二十人のひとゝりさし出、それがしは御指圖よろしく奉存候といひしかば、松原を呼て、只今兩度の勢力悦入なり、かさねて無心之所望に候へども、一揆原に取かこまれ、目前に置所にては有まじき條、つゐて出候へと也、○中略 或云、閑績之役は萬損益を見及聞及次第告侍る也、我商量の善惡多は此ものにあらんとて、物の理に且さときもの、武之備且知つる者をかねて廿人えらび、前後にめしつれ侍るに因て、指出切て出候へといひしなり、

〔太閤記 九〕池田勝入父子討死之事

かくて九日一○天正十二年四月三州おもて發向有べしとの催し、八日の未明より廻文あり、篠木より小牧山に至て、注進申上者あつて、信雄卿も家康卿も其あらましを知給へり、○中略 本田豐後守に仰て、遠聞の步士十人ばかり、龍泉寺おもてへ出し、兩さして勢のゆく事有か聞て告しらせよと、戌之剋に出し置給ふ、痛はしや勝入○池田也はかやうのこしらへをゆめにもしらず、亥之剋より打立勢をおし行に、遠。聞。の。も。の。立歸り、はや多勢兩をさして打候よし申上しかば、兩卿も其用意急にして、丑の剋に出たまふ、遠聞の者又來て、多勢ひきもちぎらず打候ひし、能々其御意得ましませと告申ければ、心やすくおもひ候へとて打笑せつゝ、程なく猪腰原の辰巳の山に着陣して、夜の明るをぞ待にける、

〔陰德太平記 二十七〕毛利元就嚴島渡海付同所合戰事

如何ナル事ニカ有ケン、水海月夥ク光リケル間、陶入道其外陣々ヨリ出タル外。聞。ノ者共、是直事ニ非、海ニマス神ノ祟ニヤ、○中略ト恐レ惴キ、皆陣中ニ入ケル故、○下略

〔武林雜話 四〕山名禪高ハ久敷知音なれば、潛に異見被仕候は、○中略 内府公ひとへならぬ知惠にて候間、無心元樣にて出入仕候衆の内に、御横目耳。聞。も可有之かと存候、總別貴老は六つかしき相手と被思召候や、常に御間宜からず候、旁以大事の儀に存候、

物見番

〔常山紀談十六〕慶長六年四月略○中政宗○伊達は國見峠を踰、信夫郡より瀨の上の川を涉り、五千の兵にて梁川の城を押へ、松川をさして押寄る。物聞ども斯と告れば、略○下

〔兼貞齋筆記〕一物見使番ハ世ノ常ニ心得候ヘハ勤ラヌ役義ニテ、合戰ノ全體ヲ引スベ、功者ニナケレバ、合戰ハ難成由、先ヅ大物見、中物見、小物見ト三段アッテ、中ニモ大中ノ物見ハ、弓矢六奉行ノ内ヨリ勤ル役故、殊ニヨリ士二三騎輕卒五六十人、殊ニヨリテハ一備程モ可押出、夫ヨリ重キニ至テハ大將モ出ベキ事ノ由、此義ハ事長ク相成候故、段々御不審ニ依テ恐ナガラ御請可仕事、

〔武家名目抄職名三十四中〕物見番頭　物見番　按、物見番の職ハ凡戰陣に臨める時、敵の形勢を望察して、其旨を首將に報じ、或ハ戰場の險阻要害等をもうかゞふこと皆其專務なり、依て其役者を稱して物見といへり、物見また斥候ともかけり、本文引ところの太平記以下の諸書斥候とあるは、みなものみとよめり、此職常に設けをかるゝもあり、又臨時に命せらるゝもあり、何れも軍法の工夫に長せる者を用ふることと聞ゆ、慶長元和の頃ハ、大かた使番目付等の輩、この事をうけ給はるならひとなれり、もと此兩職は其任に堪たる者を用ふればなるべし、或ハ敵地の消息を察すべき爲に、國界に要害を搆へて、軍士を結番して、守衞せしむるをも物見番といふ、これ亦敵の動靜をはかり得て、其旨を報ずべきつかさなればなり、又陣法に斥候備といふあり、これハ常にいへる遊軍の類なれば、首將の隊伍をはなれ、別に一隊をなして、或ハ軍に先立て進み、或ハ傍近の地に陣して、敵軍の形勢をのぞみ、其狀に玄たがひ接戰をなすものなり、

〔松原自休手錄上〕同○元龜三年信長ノ加勢雖爲大軍、旗色スミヤカニシテ有敗軍氣云々、小山田ト馬場打ツレテ信玄ヘ演之、信玄今日ノ物見番ヲ問フニ、諸賀入道來ル、上原兩人ヲ遣、二人乘返テ如右申ス、

〔新田老談記上〕越後謙信公略○中佐野桐生ノ道筋山ノ内御見物ノタメ、鹿田山ノ峰ニテ御辨當被

成廣澤境野ノ原ヲ御通リ、足利八幡ヲ御通リ也、二千餘騎ノ人數跡先ニ押テ行、細道無案内故ニ、左右ノ山ノ腰田畑ヲフミ、狼藉無限、其砌茶臼山寄居物見ノ番頭ニハ、金井田左衞門ト云者在番シテ居タリケルガ、謙信公ノ御通リヲ聞テ、南沼ノ邊へ出向テ、遠見シテ居タリケルガ、〇下略

〔家忠日記追加十〕天正十三年閏八月三日、寄手の軍勢、丸子の城に兵を發して、筑摩川を渡て、八重原に陣す、〇中略夫ゟ後ハ敵味方戰を止て、互に城を守り陣を整て數日を經る、寄手の軍勢、物見の番を定て、交々に是を守、

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔、〇中略其二曰初修京師、置畿内國司、郡司、關塞、斥候、防人、驛馬、傳馬、及造鈴契、定山河、

〔日本書紀二十八天武〕元年五月、或有人奏曰、自近江京至于倭京、處處置候、

〔續日本紀三十六光仁〕寶龜十一年五月己卯、勅曰、狂賊亂常、侵擾邊境、烽燧多虞、斥候失守、今遣征東使幷鎭狄將軍、分道征討、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事

楠帶刀正行、舍弟正時、和田新兵衞高家、舍弟新發意賢秀、究竟ノ兵三千餘騎ヲ率シテ、霞隱レヨリ師直ニ四條繩手へ押寄セ、先斥候ノ敵ヲ懸散サバ、大將師直ニ寄合テ、勝負ヲ決セザランヤト、少モ擬議セズ進ダリ、

〔太平記三十四〕吉野御廟神靈事附諸國軍勢還京都事

南方ノ皇居ハ、金剛山ノ奧觀心寺ト云深山ナレバ、左右ナク敵ノ可近所ナラネ共、斥候ノ御警固ニ憑思召レタル龍泉赤坂モ責落サレ、又昨日一昨日マデ御方セシ兵共、今日ハ多ク御敵ト成ヌト聞エシ、

〔淺井三代記一〕鳥井本合戰の事

十七日、〇永正七年三月、中略、佐々木勢小野村大堀村に著ければ、進藤山城守ハ、進藤小兵衞と云し者を物見に遣し、敵の様體見するに、立歸て申けるは、寄手は一働して、鳥井本村の町屋一軒も不殘放火して、山のつまり〳〵峯々谷々に陣取しは、正しく人數二三萬騎も可有かと覺え候と申ければ、進藤大きに怒て、汝龜相なる者かな、人數多とも五千にハ不可過、重てたしなむべしとぞ申ける、

〔大友記〕元就文司之城責事付立石原合戰事

小早川〇隆景ハ、主水正〇奴留湯跡ニ入替リ、文司ノ城ニイタリシガ、是ヲ聞立石原オモテヘ來陣ヲトル、伯耆守、〇戸次小早川、吉川人數ノ程、軍ノ色ヲ具ニ見テマキリ候ヘトテ、物見ヲ遣ス、急ギ行ムカヒ心ニ見テ歸リ申セバ、敵ノ人數ハ三萬アマリト見申、一備ノ様ニ候ヘドモ、今手數ヲワクルト見エ、旗小ジルシ動搖シ、備ノ内ヲ馬上馳マハリ候ト申ス、

〔相州兵亂記四〕景虎小田原ヘ寄來事

永祿四年三月、〇中略上杉景虎大磯ニ付ケバ、先陣太田美濃守、本城左衞門大夫以下、國府津前河酒匂ニ付、此日小田原ノ物見一兩人、一色ノ穢多村ヘ行、ツヾリタルモノヲ著テ、穢多ドモニマジハリ、敵ノモヤウヲ見ルニ、景虎ハ白布ニテカシラヲツヽミ、甲ヲヌギ、郎等ニモタセ、黒馬ニ乘リ諸手ニ乘込々々手分ヲシテ陣ヲトラシム、其體中々申モヲコガマシク見エニケル、是ハ自勇力ノ人ニ勝レ、武謀ノカシコキヲ、人ニ見セント謀ケルトゾ見エシ、マコトニ血氣ノ勇將ナリ、

〔武功雜記十七〕甲州ニテハ他國モノヽ來ルヲヨロコブ、内ニモ、殊ニ三河モノヲ滿足ス、勘介〇山本兵法ハツカフ、口才モノナレバ、山縣カヽヘ置テ、心ヤスクツカフ、サレドモ甲州モノニシカト勘介ヲシリタル者ナシ、河中島合戰ノ時、山縣ヨリ勘介ヲ斥候ニツカハシ、歸テ山縣ニモノイフ體ヲ信玄御覽、アレハ何モノゾトアリシニ、アレハ山本勘介トテ、三河モノナリ、口才ナルモノトテ、山縣扶持シオキタリト申タルト云、此外沙汰ノアルモノニテナシ、

〔江濃記〕道三最後之事

永祿七年三月上旬、〇中略淺井勢江內ヲバ不出、弓鐵炮ヲ放シカク、美濃勢江ギハマデ乘懸々々放カケテ責ケレドモ、淺井方ニハ一人モ不出合、永井甚丞淺井衆ヲグシタリ、マヅ此勢ヲ出シ、川ヘ追ハメ討取給ヘト云ヘバ、牧村、野村モ實モトヤ思ヒケン、叫ビ叫テ押懸リケリ、淺井ガ物見ノ者馳歸リ、敵ハ備ヲ崩テカヽルト告ケル、磯野此由聞テ、味方討セ叶間敷、我等ハ懸リ候間、御備ヲ近近ト寄ラレ候ヘト申遣、

〔松隣夜話〕中小田原衆〇北條勢武田衆ト薩埵山ニ於テ、迫リ合有ケル時、跡部大炊助同心從者一人連物見ニ出デ、福嶋殿〇正則ノ備近ク乘掛ケルヲ、此八助〇和田渡リ合ヒ、一人ニテ二人ヲ射捕ル、

〔奧羽永慶軍記〕一大崎國分論地合戰ノ事

大崎義宣、郎等ノ千枝隼人ト、葛岡主税ヲ物見ニ出ス、兩人立歸レバ、義宣敵方ノ先手誰ナルゾ、人數ハイカホドカ有リシト問フ、千枝申ケルハ、敵ノ先手ハ國分左京ニテ候フベシ、人數ハ七百人有リ候ベシト申、又葛岡ニ尋給ヘバ、先手ハ左京ニテ候フベシ、人數ハ七百三十人程モ可有之也ト申ケリ、義宣忽怒テ、汝左樣ノ不覺者ト知ラズ、今日物見ニ出シタリ、以後ハ物見ノ役叶フマジ、兩人ノ見樣相違ナシトイヘドモ、葛岡七百三十人ホドヽハ何事ゾ、モシアノ先手七百三十人アラバ、葛岡自然トイヒ當テ不實ノ正也、千枝ガ見樣七百人トイヒシハ、七百ノ上有リテモ内有リテモ相違ナシ、葛岡ガ申樣ニテハ、七百二十人モ四十人モアラバ大ニ相違也、イヒ當テ不實ト宜ヘバ、葛岡謹デ申ケルハ、千枝ガ七百人ト申セシハ、申限リタル申ヤウ也、私ハ三十程モ可有之歟ト申候トイフ、義宣重ネテ汝ハ年ニモ似ヌ愚者也、汝神通ヲ得テモ云バ七百三十人有リ、或ハ何十何人有リトイハザルゾ、七百三十人程ト云フハ、見積リニ究レリ、千枝ガ七百人トイヒシハ、六百有リテモ、八百有リテモ、大違ヒニアラズ、汝ガ見樣ハ十人違フテモ大違ヒ也トイヒケレバ、面

目ナゲニ座敷ヲ立テ、我陣屋ニゾ入リニケル、

〔常山紀談三〕信長、淺井長政をうつ時、長政が木造の陣、俄にさわぐ體の見えしかば、猪子兵助を物見にやられけるが、又金松彌五左衛門をも出されけり、猪子馬に白あわかませて馳歸り、敵は引退候といひもはてぬに、金松乘歸り、敵おしよせ候といひすて、又先陣にゆいて鎗を合せたり、信長後に二人を呼て、汝等見し所はいかにと問るゝに、猪子敵は荷つけたる馬を遙に遠く引のけ候ほどに、引退くと見て候と申、金松承り、見る處は猪子に同じく候、されども軍を志候長政、ゆゑなくして空しく退べきや、おしよせて戰はん爲と存じ候ひきと申せしかば、信長大にほめられけり、

〔播州佐用軍記上〕秀吉公與宇喜多合戰之事

兼テ國中并國境每ニ、物見ノ輕騎ノ侍諜士餘多出置レ、國ニ逆心ノ者アルカ、他國ヨリ後詰有バ告來ト附置ケルニ、略〇下

〔別所長治記〕或時山城守、三宅治忠兩人軍評定ノ爲、行秀吉ノ館ケルニ、秀吉ノ曰ク、長治西國ノ可有案内者ト宜フニ付、信長公ノ爲代官下向ス、各ノ軍立ノ次第、不日ニ擒敵スル謀計モヤアルト被問ケレバ、三宅申テ曰ク、略〇中サテ陣ヲ取固ムル事ハ、略〇中川端ニ陣ヲ張時ハ、雨降洪水出ント、前廉ヨリ覺悟シ、山野林古屋敷ニハ必有伏兵ト心得、風ノ順逆可知事肝要ナリ、其上遠候、中候、陣中ノ候トテ三段アリ、遠候ハ敵國發向ノ時、三日先立テ輕步ノ遊士ヲ遠候ニ放遣、敵國ヘ可入地形、切所、險易、幷敵欲ルカ出向ント、敵ノ虛實空隙ヲ能々窺ミセシム、コレヲ遠物見ト云、捴テ常ニ諸國遊士ノ間諜ヲ放遣、敵ノ虛實ヲ見セテ、國ノ政ヲ可知事肝要ナリ、是興軍最初ノ謀也、中候ハ發向之剋、一日先立テ輕騎ヲ三人放遣、道路ノ險易、山林、川澤、水草ノ便宜ヲ能々見セシム、陣中ノ候トハ斥候番ノ者三人充三番ニシテ、其內老功ノ武者一人、若壯利才ノ武者二人合三人充ナリ、

如此ノ事憚入候ヘドモ、備ノ次第依御尋申候也ト云々、○下略

〔末森記〕天正十二年九月十一日、○中略神保安藝守山取シテ、加州勢ノ押ヘトシテ待カケタレバ、利家卿津幡城マデハ出ラレタレドモ、後巻中々ナルベカラザルニ相究リタル由、神保ヨリ付置目付ノ者歸リ申ニ付テ、ゲニモサゾアラント、少由斷シテ居タル處ヲ、利家卿先手ノ彦三、又兵衛所ヘ御出アツテ、三人被成御談合、見計ハレ濱バタヲ一騎討ニ馬ノ舌ヲマカセ懸通、此時川端ヘ斥候ヲ出シ、神保人數ヲ出スヤ否ヲ見セシム、歸テ告テ曰、敵コソ備テ待候ト云々、次ニ富田越後ニ被仰、勘六○篠原ヲ物見ニ遣ス、歸テ申云、敵一人モ出ズ、川杭澤山ニシテ如人ト云々、利家川杭トハ何ヲ見當ニ仕候ヤト、越後申スハ、武者ナラバ並ソロヒ申マジク候、其上指物モ有ベシ、並能ソロヒ申候、川中マデ馬ヲノリ入、心靜ニ見屆申候ト云ニ、諸人尤饒成見樣ト感之ズ、

〔蒲生氏郷記〕氏郷此ヲサヱニ居ル事ヲ無念ニ被存、岩酌ニ近ヨリ見渡シテ如何思ハレケン、物見二人被指越、吉田兵助、周防長丞ナリ、岩酌麓在々ニ人有之カ、又ハイツ麓ノ者共退候カト能見ヨト有之、二人麓ヲ見マハルニ人一人モナシ、食ナド給タルアト有ニ、食ツブ大形干テアリ、ケ樣ノトホリ見屆、其由申ヲ聞テ、又布施次郎右衛門、土田久介二人ツカハシ、猶以能見ヨトノ儀ニテ被指越、二人歸リ別ニ見トムルシルシモナシ、右之通リニ食ツブヨリ外イツ退タルト云シルシ無之ト申、又蒲生四郎兵衛ニ見テ歸レト被申付、四郎兵衛見テ申樣ハ、岩酌ノ麓ノ者ハ十日先ニ退タルト云、申樣ハイカニト尋ラルヽニ、雨十日先ニ降タリ、其後不降道々ニ足跡ナシ、雨後迄居タラバ足跡可有ト云、能見タリト被申タルナリ、

〔續武將感狀記〕後藤又兵衛基次ガ父新左衛門ハ、播州別所氏ノ家臣也、基次若年ヨリ黑田孝高及ビ長政ニ仕ヘテ度々ノ武功アリ、朝鮮ノ役ニ基次、母里多兵衛、黑田三左衛門、三人一日替ニ黑田長政ノ先鋒タリ、蔚山ニテ諸大將明日敵陣ニカヽラント相約ス、長政物見ノ爲早朝基次ヲ遣ス、

川ヲ渡テ敵陣近ク行ントセシガ、河上ヨリ日本ノ馬ノ沓流レ來ルヲ見テ、味方ノ大將巳ニ川ヲ越タル人アリ、敵近ク往ニ不及ト、早々歸リテ急打立給ヘトス、メケリ、又朝鮮ニテ長政ノ先手山ノ鼻ヲ廻テ隔タル所ニテ、鬨ノ聲ノ類ナルヲ、基次味方打負ヌト申ス、長政何ヲ以テ是ヲ知ト問ヒケレバ、鬨ノ聲次第ニ近ク聞ユルハ、是負テ退ナリト答フ、ハタシテ基次ガ言ノ如シ、同役ニ敵陣見エザル處、武者ボコリノ立ヲ見テ、敵ハ引モノナラン、ホコリ白ミテ見ユ、進ム敵ノ武者ボコリハ、此方ヘカヽリテ黑シ、引敵ノ武者ボコリハ先ヘカヽリテ白シ、薄ト濃トニ依リテ黑白ニ替ルト云シガ、其言又不違、長政筑前全國拜領、入部ノ後、基次ニ采地一萬六千石ヲ與テ、嘉摩郡小限ノ城ヲ預ケラル、

〔慶長見聞書二〕一十四日年〇慶長五九月の晝頃、家康公より忍の衆小西助右衛門、西尾伊兵衛と申者を、竊に被遣、松尾山に、秀秋早〇小川幷脇坂朽木など居陣して、御合戰初り候時分裏切可仕と堅申上候間、能見候て樣子を可申上候由、被仰付被遣候間、兩人見て歸候而、金吾殿を初而諸軍皆裏切可仕體に見え申候、額母數候由申、諸人に語り候へば、御意には左樣の事を高聲に語り申さぬ者にて候、竊に申上る者なり、若金吾たばかりに申、裏切不仕候へば、味方弱るものなり、己等は江州者なれども、軍場の忍の故實不存候哉と御叱り被成候、諸人承り仰尤と奉感、

〔武功雜記二〕關ケ原ニテ先手ノ斥候ニ、渥美源吾ツカハサル、源五郎時ニ歸テ、今日ノ御合戰ハ必定御勝ト申上ル時ニ、ワカキ衆源五ヘ申サルヽハ、吾等ドモサヘ先手ミエガタキホドノ深霧ニ、何ヲ見切テ必勝ト申上ラルヽヤ、源五イヤ左樣ニテ無之、今日若萬一御敗軍候ハヾ、一人モ生テ歸ルモノアルベカラズ、誰アリテ目利ノ相違ヲトガメンヤ、御敗軍タラバ目利ハ相違ナリト云云、

〔小早川式部物語下〕或云、筑前牢人毛屋源兵衛と云者來て語て曰、我父毛屋主水關ケ原の軍の時、黑

田筑前守に供す、家康公の御陣屋は赤坂也、御宿陣の家居二階にて、假初のゆいはしにて上る如くなる座敷也、上方勢の押來る由告給へり、諸大將衆より手毎の物見可ㇾ越由仰有けるに、或大將の物見の歸來て申けるは、上方勢の押來る事雲霞のごとく、凡十萬計も可ㇾ有と申、家康公被ㇾ聞召、其方の者を一人やりて見せられよと有ければ、拙者の方に心得たるもの御坐候間、可ㇾ差越と有て、毛屋武藏と呼で、上方勢之趣能見積て參れと有しかば、承り候て、則馬を乘出て見積り歸る、直に是へ參りて申上よと有、二階の端迄上て申けるは、此度の軍必定御勝利たるべし、上方勢大形一萬七八千も可ㇾ有と申上る、初見て來りたる者、二階の下より云く、何とて左樣にうろたへたる事をば申上るぞと云、毛屋主水云、夫は積を知らで唯目にて見たる計を申也、上方勢何れも高き山に上て陣取る、平地へ押來る敵は、兩先手にて一萬七八千ならではなし、御合戰於ㇾ被ㇾ遊は、山之上の上方勢いかでおろし合すべき、然る時は軍に逢人數は、一萬七八千ならではなし、軍味方の御勝利うたがひなしと申上ければ、家康公被ㇾ聞召、能申上たり、武功の者なりと仰成て、折ふし御前に有つる饅頭を、御手自毛屋主水に被ㇾ下、冥加至極也と、其頃沙汰せしと也、或曰、關ヶ原の軍は九月十五日也、前日十四日に筑前中納言殿陣備にさわぐ、此由權現樣之御陣へ聞えて、面々手毎の物見を出されけるに、古主筑前守手よりは毛屋主水を被ㇾ出しに、歸る事遲しとて、後藤又兵衛又跡より來るに、毛屋主水歸るとて道にて行合たり、後藤先は如何有ぞと云ければ、毛屋いはく、合戰は有まじ、唯陣替也と云、後藤云、其見付は如何にと云ければ、毛屋曰く、日を見給へはや八ツ時也、今人數を押出し合戰せば日七ツにさがるべし、何とさわぐ共、陣替の外他事なしと云捨てかへる、後藤行て見れば後陣替成し、古主筑前守能見たりと褒美せしと語る、

〔元寛日記〕元和元年五月七日、家康公茶臼山へ有ㇾ御出馬、本多上野介正純進ㇾ御前、然ル處ニ路次ノ小屋ヨリ出火、供奉ノ輩不審ニ思處ニ、誰トハ不ㇾ知鐵炮ヲ放ツ、御旗本ノ輩大ニ驚、騷動シテ崩ル、

此折節城ノ方ヨリ、大軍羣リ來ル、兵士等猶驚騷グ、家康公敵歟味方歟ト有二御尋一、見知人無レ之、御步士頭植村新六進出、某見テ可二罷歸一由申テ出ル時、舍弟主膳ニ何ヤラン耳語テ後馳レ馬、暫有テ主膳御前ニ出、見候此人數ハ味方ニテ候ト申ス、家康公聞召、汝乍レ居何トシテ知二敵味方一哉ト、主膳答申シテ曰、唯今新六馳向候砌、某ニ申置候ハ、敵合餘リ近ケレバ、馳歸申サバ、縡及二遲滯一、御謀不レ可レ成、御敵成バ馬ヲ馳入ベシ、是ヲ以テ敵也ト可二申上一、味方成バ轡ヲ歸サン、味方也ト心得テ、早速可二申上一ト申置候ガ、馬ヲ歸シ候ハ、味方ニ紛無レ之ト申上ル、家康公、植村ガ斥候、有レ勇有レ智有レ忠ト、甚有二御感一、崩タル軍兵ドモ頓テ靜謐ス、

〔武將感狀記 一〕同〇大阪冬陣ニ松平武藏守利隆ハ神崎ニ軍シ、弟左衞門督忠繼ハ尼崎ニ軍ス、忠繼人衆推出シ、矢野兵庫、佐分利九之丞ヲ物見トシテ、蜆江ノ地形ヲ覘ハシム、二士歸テ兩方沼ニテ前狹ク末廣シ、身方ノ爲ニハ利鮮ク、敵ノ爲ニハ便アリト白ス、又由井伊豆、丸山豐後、渡瀨淡路ヲ差遣ハス、三士ハ却テ身方ノ利アラント云、忠繼、矢野、佐分利ガ言ト相齟齬スルヲ以テ、其故ヲ問ハルヽニ、三士君公人衆ヲ推出サセ給フハ、合戰ヲ望マセラルヽニ非ヤ、身方大軍ナルヲ見テ、敵地ノ利ナキ時ハ、必怖テ出ベカラズ、君公合戰ヲ挑マルヽトモ得ベケンヤ、敵地ノ利ヲ怙テ出ス處ヲ、身方ハ大軍ナリ、長々ト出サセテ後急ニ擊レ之、勝事掌ノ内ニ候、如シ人衆ヲ向ラレナバ、早キヲ善トス、利隆公ノ備續候ハヾ、敵見ヲチシテ、未レ戰サキニ引返シ候ント申セバ、忠繼汝等ガ云所尤ナリトテ、卽チ蜆江ニ向ヒ、神崎ヲ涉リ造作モナク敵ヲ追拂ハル、

〔武隱叢話 八〕家康公御賢察之事

或時家康公召二久世三四郎、坂部三十郎一、御先手ヘ被レ遣二物見一、坂部ハ勇ンデ立二御前一乘出ス、久世ハ變レ色、何トヤラン立振不レ宜、御前ノ御小性衆笑フ體也、家康公上意ニ三十郎ハ生付タル剛ノ者ニテ、敵ヲ不レ思何共、三四郎ハ嗜勵デ勤二武邊一故、生テ不レ可レ歸ト勵ム心ナレバ、每レ物大事ニスル也、唯今見

ヨ、三十郎ヨリ三四郎ハ二町モ三町モ深働テ、能見屆テ可ㇾ罷歸、ソレ故死ヲ究ル心ニテ掛ㇾ大事ㇾ故有ㇾ猶豫ノ氣色ㇾ三四郎ハ仁義ノ勇者ト云者也ト宣フ、果シテ三十郎ヨリ四町程奥ヘ騎入、能見屆テ歸シト、高野山ニテ内藤言之助入道物語也、

〔太平記二十二〕畑六郎左衛門事

畑六郎左衛門ト申ハ、武藏國ノ住人ニテ有ケルガ、○中略謀巧ニシテ人ヲ眤、氣健ニシテ心不ㇾ撓シカバ、戰場ニ臨ムゴトニ敵ヲ靡ケ、堅ニ當ル事、樊噲周勃ガ不ㇾ得道ヲモ得タリ、サレバ物ハ以ㇾ類聚ル習ヒナレバ、彼ガ甥ニ所大夫房快舜トテ、少シモ不ㇾ劣惡僧アリ、又中間ニ悪八郎トテ、缺脣ナル大力アリ、又犬獅子ト名ヲ付タル、不思議ノ犬一匹有ケリ、此三人ノ者共、闇ニダニナレバ、或帽子甲ニ鎖ヲ著テ、足輕ニ出立時モアリ、或ハ大鎧ニ七物持時モアリ、樣々質ヲ替テ、敵ノ向城ニ忍入、先件ノ犬ヲ先立テ、城ノ用心ノ樣ヲ伺フニ、敵ノ用心密(キビシク)テ難ㇾ伺隙時ハ、此犬一吠吠走出、敵ノ寢入、夜廻モ止時ハ、走出テ主ニ向テ尾ヲ振テ告ケル間、三人共ニ此犬ヲ案内者ニテ、屏ヲノリ越、城ノ中ヘ打入テ、叫喚テ縱横無礙ニ切テ廻リケル間、數千ノ敵軍、驚騷テ、城ヲ被ㇾ落ヌハ無リケリ、○中略此犬城中ニ忍入テ、機嫌ヲ計ケル間、三十七箇所ニ城ヲ搆ヘ分テ、逆木ヲ引、屏ヲ塗タル向城共、毎夜一二被ㇾ打落、物具ヲ捨テ馬ヲ失ヒ、耻ヲカク事多ケレバ、敵ノ強キヲバ不ㇾ顧、御方ニ笑レン事ヲ耻テ、偸ニ兵粮ヲ入レ、忍々酒肴ヲ送テ、可ㇾ然バ我城ヲ夜討ニナセソト、畑ヲ語ハヌ者ゾ無リケル、

〔東遷基業七〕上田城攻之事

凡そ敵國に働くには郷導、間諜、かき物聞、忍すつは、遠近の斥候、試の足輕等を以て、敵の模樣を伺ふ事は、尋常不ㇾ珍事なるに、寄手の諸將敵を飽まで侮りけん、此手だてもなく、武田家の者も曾根下野を始として、多く在といへども、其思慮やなかりけん、○下略

〔武功雜記二〕玉虫二郎口細川越中守參會シテ、物見ニ出タルモノヽ功無功ハ何トシテミエ候ヤ、

玉虫何トミル法ハ不レ存候ト云、越州イヤ〳〵何トゾ見樣アルベシト、玉虫コタヘハ、御手前ノ扈從衆被レ致二給仕一候ニ、何ノ御目利ハナクトモ、功者無功者ハシルベシ、其ト同理ト云、越州殊外感悦ス、

名稱

間諜

間諜ハ又間者、諜者、忍者ノ名アリ、戰時平時ヲ言ハズ、敵地ニ入リテ其情狀ヲ伺察スルナリ、其術頗ル廣シ、其人ニ於ケル或ハ刺客ヲ使ヒ、或ハ盲人ヲ用キ、或ハ僧ヲ遣シ、或ハ敵ノ親密ノ人ヲ用キタリ、其事タル或ハ直ニ敵ヲ刺スアリ、城ヲ燒クアリ、敵ノ謀略ヲ探リテ報ズルアリ、其地ノ險易、其家ノ向背ヲ圖畫シ、攻襲ニ便スルアリ、或ハ流言ヲ放チテ、敵ノ上下ヲシテ互ニ相疑ハシムルアリ、或ハ徐ニ說キテ降服セシムル、アリ、或ハ敵ノ間ヲ用キテ、反テ諜セシムルアリ、或ハ敵ノ間者ヲ誑キテ、吾ガ虛妄ノ消息ヲ傳ヘシムル、アリ、要スルニ間諜ハ多ク死ヲ以テ、自ラ期スルモノニテ、往々敵ノ捕獲殺害ニ遇フコトアリ、足利氏ノ末ニハ伊賀ノ人、甲賀ノ人ハ、間諜ノ術ニ巧ナルモノ多クシテ、忍ノ上手ト稱セラレ、又透波、亂波モ忍ノ上手ノ一群ノ名ニシテ、輕捷ヲ以テ功ヲ成シヽカバ、或ハ之ヲ夜襲ニ用キ、或ハ深叢ノ裏ニ伏シテ、敵ノ糧道ヲ絕タシメシ等ノ事アリ、故ニ又草ノ稱アリ、

〔日本書紀 二十二 推古〕九年九月戊子、新羅之間諜者迦摩多到二對馬一、

〔類聚名義抄 七 門〕間諜ウカミス、伺見、

○按ズルニ、日本書紀孝德天皇紀ニハ、斥候ヲウカミト訓ゼリ、斥候篇ニ引ケリ、

〔塵添壒囊抄 二〕候事

高キ所ニ人ヲノボセテ、遠事ヲ見スルヲバ、ウカミト云フ、候見トカキタリ、ウカヾヒミルナリ、

〔倭訓栞前編四宇〕うかみ　日本紀に間諜をよみ、又候もよみたり、

〔倭名類聚鈔十道路具〕逌邏　唐韻云、逌邏(上丑郷反)漢語抄云、逌邏、(知毛利)

〔箋注倭名類聚抄三道路具〕唐韻云、逌、邏候也、又云、邏、游兵也、此恐有脱文、按逌又作偵、並俗調字、見漢書淮南王傳、説文詷、知處告言之、後漢書南匈奴傳、爲郡縣偵羅耳目、注偵羅、猶今言探候偵羅也、按玄應音義引韻略云、邏謂循行非違也、故漢語抄訓知毛利、知毛利、是道守之義、謂守道路者、萬葉集笠朝臣金村娘子所誂作歌云、道守之將問答乎云々、神代紀云、泉守道者、皆是、蓋山守野守之類也、

〔倭訓栞前編十五知〕ちもり　倭名抄に逌邏を訓せり、字書に、逌通作偵、探伺也、杜が左傳注、諜者曰游偵、謂之細作、又謂之間諜、晉書宜遠偵邏とあり、字書に、邏巡也、游兵也と見ゆ、日本紀に守道者をちもりびとゝよめり、

〔書言字考節用集四人倫〕諜者(シノビノモノ)　諜(同)　遊偵(同)　間諜(同)　細作(同)

〔武家名目抄職名三十四下〕忍者(又稱間者、諜者)　按、忍者はいはゆる間諜なり、故に或は間者といひ、又諜者とよぶ、さて其役する所は、他邦に潜行して敵の形勢を察し、或は假に敵中に隨從して間隙を伺ひ、其餘敵城に入て火を放ち、又刺客となりて人を殺すなどやうの事、大かたこの忍がいたす所なり、物聞、忍目付などいふも、多くはこれが所役の一端なるべし、もとより正しき職掌にあらざれば、其人の definitions 定まれることもなし、庶士の列なるもあり、足輕同心又は亂波、透波程の者もありしとみゆ、京師に近き所にては伊賀國、又は江州甲賀の地は地侍多き所なりければ、應仁以後には各黨をたてゝ、日夜戰爭を事とし、竊賊強盜をもなせしより、をのづから間諜の術に長ずるもの、多くいできしかば、大名諸家彼地侍をやしなひ置て、忍の役に從がはしむる事の常となりてより、伊賀者甲賀者とよばるゝもの、諸國にひろごりぬ、これ鐵炮組に

は多く根來者を用ゐるたぐひなり、

〔孫子用間〕孫子曰、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、内外騷動、怠於道路、不得操事者七十萬家、相守數年以爭一日之勝、而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也、非人之將也、非主之佐也、非勝之主也、故明君賢將所以動而勝人成功出於衆者先知也、先知者不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度、必取於人知敵之情者也、故用間有五、有因間、有內間、有反間、有死間、有生間、五間俱起、莫知其道、是謂神紀、人君之寶也、因間者因其鄕人而用之、內間者因其官人而用之、反間者因其敵間而用之、死間者爲誑事於外、令吾間知之而傳於敵間也、生間者反報也、故三軍之事莫親於間、賞莫厚於間、事莫密於間、非聖智不能用間、非仁義不能使間、非微妙不能得間之實、微哉微哉、無所不用間也、間事未發而先聞者、間與所告者皆死、凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將左右謁者門者舍人之姓名、令吾間必索知之、必索敵間之來間我者、因而利之、導而舍之、故反間可得而用也、因是而知之、故鄕間內間可得而使也、因是而知之、故死間爲誑事可使告敵、因是而知之、故生間可使如期、五間之事主必知之、知之必在於反間、故反間不可不厚也、昔殷之興也、伊摯在夏、周之興也、呂牙在殷、故明君賢相能以上智爲間者、必成大功、此兵之要、三軍所恃而動也、

〔細川幽齋覺書〕一對陣の時忍びに參候はゞ、敵方の指物幕何にても道具を取り歸り候へば、かひがひしく見ゆるものにて候、或は先にも何やう成印を仕り置候と、申上候物にて候事、〇中略一くりはしごとて金にてかぎを拵へ、夫に細引を二筋付候也、是は忍びに參り候時の持道具にて候、自然岸か石垣抔越る時、取付もの無之候へば、上になげかけ、二筋の細引をはしごのごとくに付、木を結付候て上る事も候也、又細引計もとらへ、付上る事も有べし、其の段は勝手次第、かやうにしても、當代の高石垣などにはならざる事に候へ共、自然たりにもなる所口傳あり、

間諜者

〔照雲寺殿筆記〕たき野が城之事

新九郎〇小川いひけるは、敵をせめにきた者が、寄せ場の能所計よせんといふやうや有べき、何程のぬまたふけ田なればとて、よするによられぬ事や有べき、乍去伊賀の者は忍び夜打の上手なれば、陣場の用意心持可有事ぞ、

〔陰德太平記三十二〕播磨守盛重繼杉原家事

佐田彦四郎、同甚五郎同小鼠トテ兄弟三人勝レテ、忍ノ上手盗賊ノ張本也ケリ、故杉原ガ足輕等皆佐田ニ從テ忍ヲ習ケリ、彼佐田ハ人ノ眼ヲ味マシ心ヲ惑ス事、狐狸ノ化タルニモ猶勝レリ、爐中ニ薪多ク切クベテ、數人團欒トシテ並居目ヲ澄シテ守リ居ケルニ、ソコニ有ケル薪一本ヅヽ盗取ケルニ、滿座更ニ知事ナシ、或時入江大藏ト云者、佐田ニ向御邊ハ忍ノ上手也ト云共、今宵吾刀取コトヲ得ジト云ケレバ、佐田若盗ミ取タランニハ、可賜ヤト問、入江云ニヤ及ブ、汝ニ可與、若吾早ク聞付ナバ力量ニ任セ撮テント云ケリ、〇中略サテ入江宿所ニ歸、四面内外ノ戸ヲ鎖カタメ、少モ不目寐居タリケリ、佐田入江ガ宿處ヘ忍入テ見レバ、戸牖堅ク閉タリ、サレ共戸ヲ明壁ヲ切破ル事ハ、忍ノ第一ニ習トスル事ナレバ、無難明テ忍入、内ノ樣體ヲ伺見ルニ、入江少モ眞眠デ居タリ、佐田懷中ヨリ疊紙取出シ、水府ニ畜ヘ置タル水ニ浸シ、入江ガ寐タル上ヨリ水一滴二滴頭ノ上ニ落シタリ、入江雨ノ降タルニヤ、板間ヨリ漏ノ洩ケルハト思、頭ヲ擡ゲヽル隙ニ、枕ニシタル刀脇刺ソロリト取テ出タリ、

〔淺井三代記十〕同士討の事

川那部式部合圖の時刻もすぎゆけば、ことの外せき、しのびの者にむかひ、何としたる事なるぞ、今宵は火上る事なるまじきか、若なるまじくばとく歸るべし、重て可賴と申けるに、しのびの者只今火の手可揚と申て、太尾の本丸より二町計此方番矢倉これ有るを、それに火をかけんとす、

田那部是は本丸より程はるかに隔たり、これにかくるとも味方乘込事は難成かるべし、城近く火をかけよといふ、忍の者重て申けるは、去のびの作法にて、手前に火をかけ其首尾を以て、本丸に火をかけ申筈にて候と申ければ、さあらば汝に任すると申、仍て件の番所に火を放つ、

〔四國軍記七〕久武內藏助討死事

元親〇長曾我部城〇本山ノ體ヲ能々見テ、〇中略要害堅固ノ地ナレバ、等閑ノ軍シテハ御テ味方ノ破ヲ仕出スベシ、一命ダニ捨バ、ナドカ一方ヲ攻ヤブラデ有ベキヤト、竹內虎之助同彌藤次トテ、力量剛ニシテ謀事多ク、間忍ハ顯ニ銑デハ則倏トシテ九霄ノ霞印ニ翔リ、退テハ則忽トシテ三寸ノ草影ニ隱、嶮岨ヲワタリ城中ニ入テ敵ヲ拉事、宛モ隱形ノ術ヲ得タル忍ノ達人有ケルヲ呼寄、件ノ意趣ヲ語テ、偏ニ頼ト云ケレバ、兩人聞テ如仰此城ヲ本道ヨリ攻入ン事ハ、孫呉ガ妙ヲ得タリトモ叶マジ、我々先達テ當郡ノ地理ヲ考見ニ、此城ニツヾキタル後ノ山ハ、雲ニ聳谷深シテ、屏風ヲ立タルガ如ク、岩峻シテ異ニ蜀ノ摩天嶺トモ云ツベシ、去ナガラ我々一命ヲ棄テ忍ビ入バ、三日ノ內ニハ城中ヘ入ベシ、サモアラバ相圖ノ火ノ手ヲ上ン、其時一番ニ攻入玉ヘト約諾シ、足輕ノ中ヨリ究竟ノ兵八十人撰出シ、腰ニ干飯ヲ付サセ熊手細引忍ノ具ドモ持セテ、山ヲ超谷ヲ渡リ、後ノ秘門ヨリ忍ビ入、城兵早ク是ヲ聞付、ヲツトリ込テ討ントセシカドモ、勝リ切タル逞卒、含凌雲機一擧ニ幷吞ノ功ヲ顯ント、勇ル者共ナレバ、城兵散々ニ切立ラレテ敗走シ、二ノ丸ヘト引退ク、間忍ノ兵所々ニ馳散テ、本丸ヲ始メ數ケ所ノ役所々々ニ火ヲ懸テ、八方ヱ雄関ヲゾ上ニケル、內藏助兼テ相圖ノ事ナレバ、スハ城中ニ火ノ手ノ見ルハ、必定味方ノ者共ガ忍ビ入タルゾ、時ヲ移ナ攻上レト、喊聲ヲ嚾ト上、一騎打ノ細道ヲ我先ニト攻上ル、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月戊申、大將軍東人等言、〇中略又間諜申云、廣嗣於遠珂郡家造軍營儲兵弩、而擧烽火徵發國內兵矣、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆〈山木判官前廷尉〉者伊豆國流人也、依父和泉守信兼之訴、配于當國山木郷、漸歷年序之後、假平相國禪閤之權、耀威於郡郷、是本自依爲平家一流氏族也、然間且爲國敵、且令插意趣給之故、先試可被誅兼隆也、而件居所爲要害之地、前途後路共以可令煩人馬之間、令圖繪彼地形、爲得其意、兼日密々被遣邦通、邦通者洛陽放遊客也、有因縁盛長依擧申、候武衞、而求事之次、向兼隆之館、酒宴郢曲之際、兼隆入興、數日逗留之間、如思至山川村里、悉以令圖繪訖、今日歸參、武衞招北條殿於閑所、置彼繪圖於中、軍士之可競赴之道路、可有進退用意之所々皆以令指南給、凡見其圖之體、正如莅其境云云、

〔太平記二十〕八幡炎上事

師直此由ヲ聞テ、此城ヲ責カヽリナガラ、落サデ引返シナバ、南方ノ敵ニ利ヲ得ラレツベシ、サナ又京都ヲ開バ、北國ノ敵ニ隙ヲ伺レツベシ、彼此如何ガセント、進退谷テ覺エケレバ、或夜ノ雨風ノ紛レニ、逸物ノ忍ヲ八幡山ヘ入レテ、神殿ニ火ヲゾ懸タリケル、

〔太平記二十四〕三宅荻野謀叛事

如何シテ聞エタリケン、時ノ所司代都筑入道二百餘騎ニテ、夜討ノ手引セントテ、究竟ノ忍ビ共ガ隱レ居タル、四條壬生ノ宿ヘ未明ニ押寄ル、

〔太平記三十六〕山名伊豆守落美作城事附菊池軍事

菊池ガ家ノ子城越前守ハ謀アル者也ケレバ、山伏禪僧遁世者ナンドヲ、忍々ニ松浦ガ陣ヘ遣シテ、其陣ノ人々ノ中ニタレガシハ、御方ヘ内通ノ事アリ、何ガシハ後矢射テ降參スベキ由ヲ申候ゾ、野心ノ者共ニ心ヲ置〈ヲカ〉デ、犬死シ給フナナンド、樣々ニゾ申遣レケル、是ヲ聞テ去事ヤ可有ト乍思、今時ノ人ノ心又アルマジキ事ニテモナシト、互ニ心置合テ危ブマヌ人モ無リケリ、其後少シ程經テ八月〈○康安元年〉六日ノ曉、城越前守千餘騎ノ勢ニテ、飯守山ニ押寄、楯ノ板ヲ敲テ時ヲドツト

作ル、松浦黨元來大勢也、城ヨカリケレバ、此敵ニ可レ被レ落樣ハ無リケルヲ、城中ニ敵ノ內通ノ者多シト、敵ノ謀ヲ告タリシヲ誠ト心得テ、御方ニ討ルナ、目ヲ賦レト云程コソ有ケレ、我先ニト落ケル間、寄手勝ニ乘テ追懸々々是ヲ討、夜明タリセバ、一人モ助ルベシトハ不レ見ケリ、

〔里見代々記〕義成公ニハ、安西勝峯ヲ先手ニテ、明金迄押給フ所ニ、丹波〇眞里谷家臣ニ佐久間藤內ト云者、出張シテ居タリ、安西是ヲ見テ、彼ハ定テ海陸ノ關守ト覺ヘタリ、軍神ノ血祭リニ、只矢軍セヨ、刀汚スナモノ共ト下知スレバ、大勢ノ軍兵共、指取引詰、サンヾヽニ射ル、敵防戰其際ニ、忍者ヲ遣ハシテ、案內ヲ伺ヒ見ルニ、鋸山ニ少々防勢ヲ隱置、其外ニハ人モ見ヘズ候ト申、

〔妙善寺合戰記〕毛利家より、備中松山の城主三村紀伊守家親に被二申付一、作州へ出勢して、美作を靜むべきよし、紀伊守一萬餘の人數にて出勢して、宇喜多を討果し、作州を取靜めんとするよし備前へ聞へける、宇喜多直家思はれけるは、今所々取合最中に、三村は大敵なり、たやすく取ひしぎがたきあひだ、謀を以討て取んと思はれ、遠藤喜三郎といふ侍にひそかに申けるは、其方は三村家親備中成羽に在陣ありし時、其方成羽に有て能見知たり、此度三村へひそかに忍び入、討取手立は有まじきや、一重に賴み入由申されければ、遠藤心易く請合、則喜三郎弟修理と唯二人、作州へ忍び行、三村は作州穗村興禪寺と云寺にたむろして被レ居けるを、遠藤兄弟忍入、頃は八月十八日の夜、宵の内に三村は家臣を集物語して被レ居ける、障子紙を破り、ひそかに鐵炮にて、三村家親を討殺し、無レ恙退出して、兄弟ともに備前へ歸る、〇中略三村家親に子二人あり、兄は備中小田郡猿掛山の城主庄の元祐と申ける、是は庄の家へ養子に行けるとぞ、弟は則主計の家を繼て、三村修理亮元親と申ける、二人の子どもは皆備中に有ける、父家親宇喜多が爲に討れけるよしを聞て、いかにもして親の敵なれば、備前へ亂入、宇喜多を討果して、遺恨を散せんとたくみけれども、備前へたやすく攻入て、結句負を仕出しなば、悔とも甲斐なしと時節を伺ひ、一門廣き三村家、備前

へ忍びの侍を付置て、宇喜多が隙をぞ伺ひける、然處に上道郡津田村山に妙善寺とて、宇喜多出城有ければ、有時備中より四五百人忍びて勢を出し、夜に紛れてこの妙善寺の城を不意に乘取、備中より人數口百人籠置堅持ける、

〔淺井三代記　六〕千田磯野大嵩の城夜込に乘取事

六月〇永正十五年七日の夜半許の事なるに、雜兵三百皆步立になり山田口へ相まはり、大嵩の城の搦手、鷲の石といふ所に、から堀の切岸に足がたを打、忍びあがり、城の埓近く寄けれども、とがむる者も更になく、靜り切て音もせず、只夜廻りの城中を廻る計聞えければ、頓て鬨を噇とあぐる、城中には是を聞、騷動する事限りなし、其間に五人の者共、〇磯野源三郎爲員、同源十郎、千田帶刀有信、同彌九郎、淺見新八郎使定、埓に手をかけ乘越、城中の小屋に火をはなちければ、折節北風烈しくて、四方に燒廻る、城中の兵共、太刀帶者は甲を忘れ、弓取る者は矢をはがず、上を下へと返しける、

〔關八州古戰錄　一〕上杉憲政武州川越城責之事

此陣中、〇足利晴氏陣南方武、總、常、野ノ國、總小田原ヲ差テ南方ト稱ス、ヨリ相州ノ風間小太郎ガ指南ヲ得タル二曲輪猪助ト云忍ビノ骨張ヲ密ニ柏原へ差越、執合ノ首尾、敵方ノ配立、巨細ニ注進ナサシメケル、月ヲ重テ後露顯シテ扇ガ谷ノ手ノ者共、彼ガ居所へ押寄擒ニセント仕タリケルヲ、猪助辛フジテ逃レ出、飛ガ如ニ翔リ行ヲ、追手ノ中ヨリ太田犬之助ト云步行立ノ達者、逃サジト跡ヲ慕ヒ、關東道五六里ホド追欠タリ、猪助ハ兼テヨリ物聞ノ本意ナル條、手柄高名無用成リ、唯身命ヲ全フシテ事ヲ遂ルヲ宗トスベシ、氏康ノ下知ヲ請シ身ナレバ、イカニモシテ逃延ント逸足ヲ出シケレ共、今ハハヤ精疲レテ既ニ咬留ラルベカリシニ、海邊ノ側ニ、農家ニ馬ノ繋レテ草喰フテ有シヲ見付、天ノ與ヘト太刀引拔、繩切テヒタリト打乘リ、打捨策打テ跡ヲモ見ズ小田原へ馳歸リ、漸ニ命ヲ繼タリケリ、此日何者ノ仕業ニヤ、扇ガ谷ノ陣ノ前ニ落首ヲ書テ立タリケル、

驅出サレ逃タル猪助比與モノ能モ太田ガ犬之助カナ

〔越後軍記 四〕景虎越中國境迄發軍之事附不戰歸陣之事

景虎〇上杉、中略、同年〇天文十七年十月五日、近習ノ者七人ニ聞者役ヲ云附、三人ハ甲州ヘ遣シ、四人ハ越中、能登、加賀ニ往ム、聞者役ハ忍ノ者、或ハ目附、横目ト云ヘル類ナリ、依之國主ノ政道群臣ノ行跡、庶民ノ風俗ニ至マデ、日々ニ注進セシカバ、國々ノ善惡ヲ具知玉ヘリ、

〔常山紀談 一〕北條早雲、盲人は無用の物とて、小田原領分のめくら法師をからめて、海にふしづけに沈んとせられしかば、盲人皆四方に逃ちりける、其中を潜に間に用ゐられしとぞ、

〔中國治亂記〕陶尾張守入道ハ、安藝ノ境周防ノ岩國ト申處ニ在陣アリ、其頃陶ガ領分ノ中ヨリ座頭一人安藝ニ來リテ、久シク在國シテ、其頃カノ座頭毛利方ノ軍ノ方々謀ナド聞及事、悉陶方ヘ通ジケル、元就ハ嚴嶋ノ城普請モ弱々トシテ、何トゾ陶ガ自身此嶋ヘ渡海アリテ被責ヨカシ、敵ヲ則クヒ留、元就後詰シテ、陶ヲ可討取ト念願アリケレバ、謀ニ或時彼周防ヨリ來ル座頭ノ聞所ニテ、元就ガ老臣ドモ、ヒソカニサヽヤギシハ、若陶殿今時ナド嚴嶋ノ城ヲ責ラレバ、卽時ニ落ベシ、哀城普請丈夫ニ無之内ニ、陶出勢ナキヤウニ存計也、是コソ當方ノ一難儀タル由、元就被仰ト座當ノ聞カ不聞ヤウニ、態小聲ニ語リケレバ、彼座當此由ヲ陶殿ヘ通ジケル、

〔四國軍記 二〕永濱城夜討付元國病死事

或時本山此城〇永濱ニ門ヲ建ベシトテ、工匠ヲ撰ミケルニ、岡豊ノ城下ニ一人ノ大工有テ、技能尤精ク、恰モ倕般ガ妙ヲ得タレバ、彼ヲ雇テ此門ヲ建サスベシト、岡豊ヘ使者ヲ以テ、シカ〴〵ノ由ヲゾ申遣シケル、去バ宮内少輔〇長曾我部元國ハ、〇中略、腹心ニ謀ヲ廻シ、工匠ヲ呼ヨセ、密ニ申ケルハ、汝永濱ニ行テ門ヲ建ルナラバ、外ヨリ大勢ヲ以テ推時ハ、貫木迦ルヽヤウニ拵ユベシ、此事仕負セバ過分ノ褒美ヲトラスベシ、搆テ人ニ悟ルヽナト、能々云含ケレバ、工匠子細候ハジト領掌シ、永

濱ヘ立越、材木ヲ撰ミ新ヲ初メ、不日ニ門ヲ建テ、貫木外ヨリ推時ハ、放ルヽヤウニゾ拵ケル、角テ宮内少輔ハ、翌年ノ春家老共ヲ呼集メ、〇中略永濱ノ城ヲ即時ニ乘トルベシ、〇中略密ニ用意セヨヤトテ、究竟ノ精兵五百餘騎、艜舟三百餘艘ニ取乘セ、弘治二年六月初、永濱ノ城ヘト押渡ル、程ナク船岸ニツケバ、混々トヲリ立テ城戸際マデ馳上リ、城門ヲ押ケレバ、貫木ハ地ニ落テ、扉ハ左右ヘ開ケル、元ヨリ不意ニ出シ計事ナレバ、城中曾テ知ル者ナシ、思ノ儘ニ込入、手々ニ松明振立々々、連々ト立雙タル役所々々ニ、一時ニ火ヲゾ懸タリケル〇又見二土佐軍記一

〔總見記十五〕信長公三州長篠御出馬事附鳥居强右衞門忠死事

保々祖父山中山ノ取出ニハ、繩無理助、井伊彌四右衞門、五味與三兵衞等牢人組ノ面々、皆兵庫助支配シテ、其外寄手雲霞ノゴトシ、瀧川大野川長走トイフ所ロニ、鳴子網ヲコシラヘ張リ、忍ノモノヲアラタメ、城中出入ヲ禁制ス、

〔陰德太平記五十三〕浦上宗景并宇喜田直家事

宗景ガ家臣ニ作州大庭郡久世ノ多田山ノ城主沼本新右衞門景直トテ、智深ク勇勝レタル士アリ、直家謂ク枝葉枯ル時ハ、其根仆ル、景直ヲ亡サバ、宗景ガ一臂ヲ斷ガ如ニシテ、遂ニ其身泯滅ノ端ト可成ト工夫シテ、景直反心ヲ懷ク由、間者ヲ以云傳フ、サレバ國家ノ亡泯ハ在亡人、宗景ガ家系ノ斷絕スベキ先表ニヤ、此由ヲ聞ヤ否ヤ、讒舌虛浮ノ是非ヲモ不糺、大ニ怒リ已ニ景直ヲ誅セント擬ス、景直モセン方ナク國ヲ去テ、九州ニ流離シ、夫ヨリ又四國ニ寄偶ノ緣ヲ求ム、直家渠ガ才智勇猛ヲバ兼テ能知ツ、頓テ招キ寄テ交リヲ堅クシ、播州野中ノ城ヲゾ預ケヽル、

〔籾井家日記三〕丹波家評定事

御評定ノ次第ニハ、〇中略サテ當家ニテハ、櫛田殿、伊田殿、歸國ノ後、宗徒ノ人々ヲ召サレ候テ、種々評議ノ次第ドモ候、別所ヨリモ御下知ノ手合ヲ受候トテ、使者衆度々ニ参ラレテ候、又方々ノ國

國ヘ入ヲカレテ候、大忍小忍ノ衆モ歸リ候テ、世上ノ密事ドモヲ注進ノ衆モ候、

〔籾井家日記 四〕丹波家所々遣忍者事

凡ソハ安土、岐阜、京、攝州、越前、越後、甲州、小田原、播州、丹波、但馬、大和、山城、江州ノ邊ハ入ヲカヌ處モナク、其外輕キ忍ノ侍モ大分ニテ候、此外籾井越中、赤井次郎左衞門、須知主水ノ手ヨリモ、功者ノ歷々ヲ入置レテ候ナリ、總別氷上家御軍法ノ次第ハ、勇知ノ間者ト申スヲ大事ニナサレ、忍ノ功者ヲ入レテ、敵方ノ腹ノ内ヲ分明ニサグリ知テ、武略ヲ當ラル丶ヲ肝要ト申候、神變ノ忍ビト申ストテ、狐狼野干ノ學ビスルコトモ、不思議ノ放下モナク候ヘドモ、名大將ガヨク間ト云者ヲ用候ヘバ、神變ノ妙アルト申候、大事ノ相傳ノ赴キト承リ候、去ニコソ諸國居候フ、敵ノ心ヲ悟ルニテ候ヘドモ、誰シルモノモナク候、旗頭衆ノ内ヨリモ、御許シナク候テハ、忍衆ヲ出スコトハ禁制ニテ、中々ナリ申サズ候、忍ビ衆ヲバ腕働ノ高名ヨリ、弓矢ノ意知ヲモ高上ノ事ニ御定メ候、

〔豐薩軍記 三〕薩州勢肥後出張幷相良連歌法師ノ事

去年〇天正五年春ヨリ相良義陽、島津ノ幕下ト成ニケル、此義陽ト云ケルハ、肥後ノ國ニテ數郡ヲ領シ、一族廣クサカンニテ、日來島津ト武ヲ輝シ、威ヲ逞シテ雌雄ヲ爭ヒタリケルガ、奈何ナル故ニ心ヲ變ジテ、島津ニ降ヲナシケルゾト、委ク是ヲ尋ルニ、其比義陽ガ許ニ、京方ヨリ來レルトテ、連歌法師ノ有ケルガ、萬事ニウトカラズ、弓箭ノ道ヲモ手馴ヌ者トモ見エズ、義陽面白キ者ト思ヒ、常ニ近付語ラセケリ、此年月島津ト鉾楯ナリケル間ニ、義陽種々謀ヲ廻ラスト云ヘドモ、敵方一度モ行ニ乘ラズ、却テ此方ヲ惱シケレバ、義陽奈何トモ爲方ナクテ苦ミケルガ、件ノ法師島津ガ間者ニテ、行ヲ密ニ通ジケルトハ、後ニゾ思ヒ知ラレケル、彼者常ニ義陽ニ向テ語リケルハ、熟々當時ノ體ヲ以テ往末ヲハカリ勘ルニ、國悉ク大友ヲ背シ事、諸士ヨリ是ヲナスニアラズ、唯天ノ致セル處ナリ、〇中略島津ハ數代武勇ノ譽レ高ク、姓氏モ卑カラズ、近年マデハ小身ナリシガ、何ト

ナク向所シタガヒナツイテ、薩隅二州ヲ治メ取リ、剰ヘ高城ニ於テ大友ノ大軍ヲ追ナビカシ、日州ヲモ掌握ノ内ニ歸セシメ、勇名九州ニアマネク、遠國マデモ其名ヲ稱スト承リ候、今又肥州ニ働クヲ、餘所ナガラ家風ヲ窺見候ニ、政法正シク賞罰理ニ當リヌレバ、人愼ムベキ樣モナク、慈悲深キニ依テ、士卒恩下ニ命ヲ輕ゼン事ヲ思フナレバ、此人コソ九國ノ管領トモ成ランズラン、敵スル人爭カ其鋒ニ當ル事ヲ得ン、與力ノ輩ハ末憑シカランナド、、餘所ノ樣ニ沙汰シタリケルヲ、義陽ハジメノ程ハ、心ニウケガハザリケレドモ、毎度ノ軍ニ利ナカリケレバ、彼レガ辭モ然ナリト思ヒアタリテ、始メ隆信ヘ誓詞ヲ遣ハシタリケルヲモ打棄テ、終ニ島津ニ降リニケル、

〔荒山合戰記〕能州石動山軍付石動山燒失事

前田利家ハ、伊賀ノ偸組トテ、五十餘人扶持シ置シガ、彼輩ヲ招テ、今敵軍ヌル體ヲ見ルニ、物ノ用ニモ可立程ノ者ハ、打出テ合戰スルト覺エタレバ、坊々院々ニ墓々シキ人ハ有マジキゾ、汝等忍入テ院々坊々ニ火ヲ放テ燒立、少々老法師小法師原中ニ敵對スル者ヲバ、斬テモ捨ヨ、去程ナラバ一人モ不殘逃失ナン、衆徒等坊中ノ火ヲ見バ、敵早攻入タルハトテ、途ヲ失ヒ敗軍スルコト疑ナシト下知シケレバ、畏候トテ、院々坊々ヘ忍入テ窺ヒミルニ、案ノ如ク手ニ可立人ハナシ、小法師原ノ少々殘タルヲ追散シ、十餘ケ所ニ火ヲ掛タリ、

〔常山紀談八〕秀吉島津を討んとおもふ事年久し、天正十三年仙石權兵衞を商人の體にして、九州に間者とし、山々浦々の地理悉く繪に書て、起臥に見兵を分ち、攻入べき道々を計られけり、

〔難波戰記一〕大坂騷動之事

京都ノ守護板倉伊賀守勝重相計テ、家人朝比奈兵右衞門正成（又曰義次）ヲ間者トシテ入置、（○大坂城中ヘ）冬（○慶長十九年）陣ハ伊東丹後守長實ガ手ニ屬シテ、毎日城中ノ評ヲ京都ニ注進ス、夏（○元和元年）陣ニモ又樋口淡路守雅豐ニ付テ、城兵ノ計略ヲ勝重ニ告タリケル、

〔難波戰記 一〕茨木城加勢之事

大坂勢〇豐臣家ナリ、中略、偸(シノビ)ヲ洛中ニ入置テ京師ヲ放火シ、京上リスル東國勢等ノ居ヲ安ンゼザル樣ニ相計レトテ、究竟ノ諜者數十人京都ニ遣シケル處ニ、板倉兼テ此事ヲ察シケルガ、洛中洛外ニ相觸、一人ナリトモ他ヨリ來ル輩ヲバ、潜テ奉行所ニ達セバ、其品ニ隨テ恩賞以下沙汰スベシト定ケレバ、此彼ヨリ搜シ出シテ引テ來リケルヲ、棟梁三人ヲ板倉閑所ニ招キ寄テ、汝等是ヨリ後ハ味方ニ屬シ、大坂ノ竊盜ヲ尋求ムベシトテ、妻子ヲ質トシテ金銀ヲ與フ、其內一人大坂ニ返シ遣シ、汝城中ノ計策ヲ我ニ告知スベシトテ、金銀ヲ與ヘ大坂ノ城ニ放チ入、城ノ樣體ヲ窺ヒ聞ケレバ、夏冬兩度ノ合戰ニ、洛中無爲ナル事、偏ニ板倉ガ智謀ヨリ出ケルトゾ聞ヘシ、

〔難波戰記 二〕南條中務少輔被誅事

同十六日〇慶長十九年十一月大坂城中ニ雜說有テ、南條中務少輔忠成逆心ヲ企テ、關東方ヘ內通スル由風聞ス、秀賴公驚キ玉ヒ、七組ノ內堀田圖書助勝善、中島式部少輔氏重、青木民部少輔一治三人、幷ニ三組ノ輩ドモ、南條ガ持口南ノ方ニ行テ、南條ヲ擒ニシ、是非ナク組トモニ切腹サセケリ、此南條ガ〇中略不慮ノ雜說ニ依テ、死罪ニ行レケレバ、皆人眉ヲ顰メ、敵ハ既ニ南都邊マデ寄來ル、然レバ合戰近ニアリ、一人モ大切ナル折節、味方ニ屬スル者ハ少ナク、適々集ル輩モ心ヲ變ジ回忠ヲ致サバ、行末墓々シキ事有ベカラズ、若又虛說ニ依テ忽ニ誅セラレバ、誰身ノ上カ虛名ヲ蒙リ誅セラルベキカ計難シト私語、互ニ心ヲ隔アヘリ、是モ偏ニ家康公ノ御智謀ヨリ出ル處ナリト聞ヘシ、其故ハ去ル比大坂ヘ軍兵ヲ集ラルヽ由、板倉方ヨリ注進致シケレバ、潜ニ仰遣サレケルハ、伊賀甲賀ノ輩、究竟ノ竊盜ノ上手ヲ六七人、浪人ニ作リ立、大坂城中ニ入置、敵ノ方便ヲ板倉方ヘ告サセ、或ハ城中ノ誰々ハ敵方ヘ心ヲ通ジ、某ハ修理長門內藏助ニ恨ヲ含ナドヽ、密々ニ雜說ヲ云シメ、敵ニ疑ヲ付侍スベシ、但シ其人ノ氣象ヲ撰ビ、妻子ヲ取テ人質トセズンバ、味方ノ術ハ却

テ敵ノ謀ト成ベシ、能々計フベシト下知シ玉フニ依テ、板倉仰ノ如ク城中へ間ヲ入置、種々ノ雜說ヲ謂セケル故ニ、槇嶋玄蕃、南條中務以下ノ輩、不慮ノ難ニ逢者數多有シトゾ聞エシ、

〔藤堂高虎傳記〕高虎公へ秀頼卿御自筆の御狀を、吉川瀨兵衞と申者、權現樣〇徳川家康の御本陣へ持參仕、高虎公逆心の由を申、右御狀を差上申候、權現樣右の狀上覽被遊、箇樣の武略唐にも日本にも度々有之事候、敵方の內一騎當千の臣下を主人に疑はせ、內輪破裂をさせ、利を得たること數多有之候、高虎をも其如く妨候はんとの淺墓なる、謀にて、高虎公二心有之とは、毛頭不被思召候、高虎公逆心必定候はゞ、此狀を高虎へこそ持參すべく候處、直に權現樣へ差上候事、右の智略不可紛旨、高虎へ御懇に上意被成、秀頼卿の御狀幷使吉川瀨兵衞を高虎へ被下、手足二十の指を切り、額に秀頼と云ふ字を燒印當て、城中へ追込候へと被仰付、右の使高虎公天王寺へ御引寄にて、上意の趣藤堂主膳に被仰付候、指十二三切申候へば、殊之外弱り申に付、二十迄は切不申候、燒印を當て大坂黑門前へ昇せ參り、右之趣城中へ呼はり申候へば、城中にて左樣の者無之と申候、黑門前へ捨置罷歸り申候、夜に入りて城中へ取込申たる由に御座候、附たり吉川瀨兵衞母、禁牢の訴訟ありて、使に望み參候也、

捕間諜

〔日本書紀二十二推古〕九年九月戊子、新羅之間諜者迦摩多到對馬、則捕以貢之、流于上野、

〔見聞雜錄武家名目抄職名三十四下所引〕長閑すはやと目を配り、傍に乘たる皆谷源八、坂北丹下に密語て、あの犬こそ紛れ物、左右より取來よ、長閑見る目は違じと云より早く、源八、丹下、馬乘寄ると、此犬動くと見えしが、むつくと起、被りし犬皮取て捨、小太刀を拔て切結、〇中略百人組の頭寺井定右衞門、高崎軍平、乘掛て組合、忍の者力强、寺井を取て押へ、膝の下へ引敷、軍平と挑合ふ、係る所へ御旗本押來、此段を見て申上る、信玄公御手を打せ給、御中間頭原大隅、石坂勘兵衞兩人、急ぎ紛れ者を召取て連來れと、組どもに押掛て、無難召取引立來る、

〔籾井家日記 六〕丹波家別所忍者捕荒木村重忍事

一氷上ノ間者藤井寺善次郎光近、渡々呂木ノ高大寺ニ忍ブ處ニ、別所殿ノ忍ビ衆生田八郎兵衞長範ニ逢候、生田ガ不審ナル者ヲ見テ候ト云ブ故、藤井寺イカヾトテ、生田ト一同シテ忍ビ見ルニ、茶賣百姓ニテ候、ソレヲ捕ヘテ穿鑿色々トハタリ候ヘバ、白狀シテ候、荒木村重ガ忍ノ士小字津權左衞門ト名唱リテ候、

〔關八州古戰錄 十五〕正木大膳亮時茂攻萬喜城事

正木〇中略此度ノ夜討ニハ一稜功ヲモ顯ハサント、逞兵ヲ勝テ押寄セシニ、思ノ外ナル不覺ノ翔、正木モ臍ヲ咬メドモ甲斐ナシ、是併敵方ニ內通ノ者有シニヨリ、逆寄ニセラレタラン、味方ノ雜卒等ヲ一々ニ穿鑿セヨトテ、有司ニ含メテ吟味シタリケレバ、萬喜ヨリノ忍ノ者三人搜シ出シタリ、時茂大キニ喜ビ、其中ニテ一人耳鼻ト髮髻ヲ剔ギ、高手小手ニ禁シメ、桔梗ノ紋ヲ書タル紙小旗ヲ捺セテ、傍ニ萬喜ヨリノ忍ノ者三人搦捕ルニ付テ、其內一人ハ賴春入道名代トシテ、如此行フ者ナリト書テ、夜陰ノマギレニ萬喜ノ城ノ大手ヘ遣シ、欄ノ木ニ縛リ付テ捨置キケル、殘ル二人ノ透ハ、妻子マデモ召捕リ、重テ敵ヨリ紛レ來レル忍ノ者ノ目明シニスベシトテ、一命ヲ助ケテ、根小屋ノ城內ヘ押込テ指置ケレバ、夫ヨリ後ハ萬喜ヨリ透ノ術ハセザリケリ

〔元寬日記〕元和元年四月廿八日、板倉伊賀守勝重、大坂忍者數十人ヲ洛中ニシテ生捕、令拷問之處、白狀曰、將軍家去十八日御出陣之由也、於其跡洛外洛中令放火爲也、其棟梁ハ古田織部重勝ガ茶道宗喜ト云法師也ト云々、古田父子六人逼塞ス、撿使ハ鳥居土佐守成次也、

〔太平記 三十四〕平石城軍事

爰ニ結城ガ若黨ニ物部次郎郡司トテ世ニ勝タル兵四人アリ、兼テヨリ敵若夜討ニ入タラバ、我等四人ハ敵ノ引返サンズルニ紛レテ、赤坂ノ城ヘ入、和田楠ニ打違ヘテ死ルカ、不然バ城ニ火ヲ

懸テ燒落スカト、約束シタリケルガ、少モ不違、引テ歸ル敵ニ紛レテ、四人共ニ赤坂ノ城ヘゾ入タリケル、夫夜討强盜ヲシテ歸ル時、立勝リ居勝リト云事アリ、是ハ約束ノ聲ヲ出シテ、諸人同時ニ颯ト立、颯ト居、角テ敵ノ紛レ居タルヲ、エリ出サン爲ノ謀也、和田ガ兵赤坂ノ城ニ歸テ後、四方ヨリ續松ヲ出シ、件ノ立勝リ居勝リヲシケルニ、紛レ入四人ノ兵共、敢テ加樣ノ事ニ馴ヌ者共ナリケレバ、無紛ユリ出サレテ、大勢ノ中ニ取籠ラレ、四人共ニ討死シテ名ヲ留メケルコソ哀ナレ、

〔家忠日記增補〕永祿三年五月廿三日、士卒を勵し、進て刈屋の城を攻擊、岡部が察するに違ず、信近怠て城中微勢也、夜に入岡部が與力の兵、伊賀の忍の士、海路を廻て、竊かに熊村の堀を涉り、城中に入、火を放て鬨を發す、城兵驚き騷ぐ、信近是を拒ぐといへ共、寄手の猛勢攻入の間、信近遂に戰死す、信近が臣玄蕃允、城下に在、是を聞て城中に馳入、伊賀の國の住人、服部黨の忍の士三十餘人を擊て、信近が首を奪返して、岡部が兵を郭外に追出す、

〔一柳家記〕城(長松城)ヨリ三町程大柿之方ニ、張番三ヶ所搆、足輕頭一人足輕十人計ツヽ出置候、然所從敵方勢タル百姓之體ニ似セ、八人面々文籠之樣成器ニ餅ヲ入賣來候處、八人共搦捕、長松エ引越斬候而、右張番所ニ獄門ニ懸申候、(○中略)又從大柿忍之者二人來候處、搦捕問候得者、前無之旗見申候、加勢人申カト存見屆候樣ニトノ儀也、則時ニ右二人モ斬捨候、

透波

〔甲陽軍鑑九上品第二十二〕信濃の國よりかゝへ置給ふすつぱ、七十人の內より、卅人足手すぐやかなる者えらび出し、妻子を人質にとり、甘利備前に十人、飯富兵部に十人、板垣信形に十人、右三十人の人質を三所にあづけ、さて其すつぱ卅人を、村上方へ十人、賴茂方へ十人、小笠原方へ十人指越、樣子を見候て、二人づゝ罷歸、此方より出むかひ候侍に申わたし、すつぱ共は又敵地へ罷越候へと、晴信公すつぱ共に直に仰付られ指越給ふ、扨甲州信州境目まで、右人質預たる板垣、甘利、飯富三人の侍大將のうちにて、慥に心安き侍を一手より二三騎づゝ出して、すつぱの信州より注進

の一左右を聞、はや馬にて甲府へ參り申上べきと仰含らる、

〔武家名目抄〕職名三十四下　透波（又稱亂波、突波）　按、透波或は亂波といふ、これは常に忍を役するものの名稱にして、一種の賤人なり、たゞ忍とのみよべる中には、庶士の内より役せらるゝもあれど、透波とよばるゝ種類は、大かた野武士、强盜などの内よりよび出されて、扶持せらるゝものなり、されば間者、かまり、夜討などには、殊に便あるが故に、戰國のならひ、大名諸家何れもこれを養置しとみゆ、透波よみてすつぱとし、亂波これをらつぱと云、さて其名義は當時の諺に、動靜とゝのはず首尾符合せざる者を、すつぱといひ、事の騷がしく穩ならぬを、らつぱといひしより起れるなるべし、（今俗にとつぱ、すつぱ、又らつぱなどいふ詞のあるは、この遺言なり、）さるはこの間諜に役せられ、又夜討强盜のふるまひをなすものは、人をあざむくが常なれば、をのづから起居正しからず、狐疑の形狀をあらはし、言辭も首尾せざる事多かる故に、かく名づけられしとみゆ、（すつぱ業とは、眞實ならぬといひ、すつぱぬきとは、猥に刀劍などぬく事をいへるを思ふべし、）透波、亂波一種のものゝとなへなるは勿論なれど、わけていはゞ關東にては大かた亂波と稱し、甲斐より以西の國々は透波とよびしとみえたり、（中略）（いにしへ撿非違使廳にて放免といふをつかはれ、平清盛國柄をとりし時禿を用ひ、今の世目明などいふがあるは、いづれもこの透波の類なり、）

〔太閤記〕一　秀吉輕二一命一於二敵國一成二要害之主一事

同廿四日（〇永祿九年九月、中略、）秀吉も常とは相かはり、聊かふきもし給はで、尤なりと同じ堅く制し給ひけり、其比の人々は、高きもいやしきも、左樣の行能意得たる事なれば、柵際をかため、鐵炮をさへ打あはず、玄づまりかへつて有ければ、敵案に相違し、時を擧て引たりけり、彼す。つ。ぱの功者共、評議しけるは、今日の返禮に今夜一一てぎは夜討をし、敵の機をおらでは、不レ叶所也、（〇下略）

〔關八州古戰錄〕八　甲州勢小田原亂入付相州三增峠合戰事

北條家モ調錬ノ透波ヲ兼テ寄手（〇甲州勢）ノ陣へ入置シナレバ、此歸路ヲ聞定メ、サラバ途中ニ待伏

突破

シテ討走ヲシムベシトヲ、〇下略

〔甲陽軍鑑品第三十九十二〕家康は味方が原合戰にまけて、其夜又夜合戰に出べき支度を專仕たるに、家老の酒井左衞門尉、石川伯耆兩人すつぱをいだし見せつれば、〇下略

〔甲陽軍鑑品第四十二十五〕味方夜軍をせんに

一あつくうつて、うすく出る、口傳有、

一輪難をよく見る、是に付而すつぱの入所也、但それはまへの事、口傳、

〔見聞雜錄三十四下所引武家名目抄職名〕秀吉曰、御前にて僞可₂申上₁哉、私抱之スッパ之中近江醒井之者、異名を韋駄天と名付召仕、常は走りの一平と仲間に而申候、走りと申名、欠落めいて不₂宜故、イダ天と改、早道忍之名人故、外之者より五人前多充行差置候、〇中略美濃より召抱置候透波之名譽之者、變化之六平、龍馬の小八と申者、御直參之透波に被₂召出₁可₂被₂下候₁乍₂去當分拙者海津在城之間は、御預け可₂被₂下候、高坂彈正ヶ樣に申所、慥成踏へ所有之故也、川中島合戰之年より、信州透波之分は、越後まで見知可₂有とて、美濃へ抱に遣し、其透波は變化六平、龍馬小八と云、美濃近江の透波二千人之内に而、早道之一番と、忍之名人と、兩人召抱宛行、常之透波五人前宛くれ、兩人之母妻子迄、海津城へ引取て、人質取堅め置、越後へ入置しを、彈正家來も存知たる者、漸心腹の者四五人之外知者なし、依₂之謙信之起居動靜、月々に定て六度宛往來して告₂之、急變之用事には、別而龍馬小八往來して知らする故、彈正は越後之內へ燒働するにも、謙信之虛實を窺ける、

〔見聞雜錄三十四下所引武家名目抄職名〕先年信州わたり突破の內、次郞坊と云る坊主の突破有しが、不思議の藝を覺、手裏劒を打に、太刀にても何にても投打に見當五十間を不₂逃、其上身の輕き事天狗と云とも不₂可₂及、

亂波草

〔藤葉榮衰記 中〕田村兵岩瀨郡南横田松山館籠事
岩瀨衆僉議有ケルハ、今泉ヨリ夜ノ紛ニ松山ヘ兵粮入テ、兵ノ飢助ル者ヤ可入、所々ニクサヲ伏討トテ鮮者ドモヲ夜毎ニ詰、所々ニ無油斷輪番ニ、クサヲ伏テ待ケレバ、如案白米ヲ負テ忍ビ通ル者共ヲ、所々ニテ討殺シケレバ、其後ハ米一粒モ入事ナシ、

〔北條五代記 六〕百姓氣なげをはたらく事
聞しは昔、元龜二年の秋、北條氏政と佐竹義重ひたちの國において對陣のみぎり、岩井といふ味方の在所に、家四五十有て朝夕の煙を立る、此里佐竹の陣所へちかし、敵此所へ夜討すべしと、味方の足輕二三百人、毎夜草に臥て敵をうかゞふ所に、あんのごとく佐竹がたより多勢をもて、此里へ夜討し、引返す時に至て味方の草おこつて、跡をしたひのがさじと追かくる、

〔北條五代記 五〕昔矢軍の事
天正七年の秋、武田勝頼伊豆の國に向て進發し、うき嶋が原三枚橋に陣す、北條氏直も出馬し、伊豆の國はつねが原三嶋にはたを立、對陣を張て、さかひをへだていどみたゝかふ、日も暮れば先手の者敵陣へ夜討をもよはす、其比は其國々の案内をよくしり、心横道なるくせ者おほかりし、此名を亂波と名付、國大名衆ふちし給へり、夜討の時はかれらを先立れば、知らぬ所へ行に、灯を取て夜る行がごとく道に迷はず、足輕共五十も百も二百も三百も伴ひ、敵國へ忍び入て、或時は夜討分捕高名し、或時はさかひ目へ行、藪原草村の中にかくれゐて、毎夜敵をうかゞひ、何事にもあはざれば、曉がた敵にしらせず歸りぬ、是をかまり共、しのび共、くさとも名付たり、過し夜はしのびに行、今朝はくさより歸りたるなどゝいひし、其くさ忍びと云正字をしらず、或文に竊盗は夜るのぬすむ人忍びが上手と注せり、又竊盗の二字をしのびとよむ故の名なるか、扨又くさと云字を察するに、此等の士卒夜中に境目へ行、晝も草に臥て敵をはかる、是を草ニ臥ともいひつれ

ば、下略して草と名付たるにや、然ば草と云字を書べき歟、今の時代さたなき言葉なれば記し侍る、

〔北條五代記八〕北條家の軍に貝太鼓を用る事

駿河陣にてある日せりあひ軍に、敵も味方も二百程づゝ出あひ、かけつ返しつ首を取つとられつ入亂れたゝかふ、敵がたに草臥たる故、わざとよわみを見せ退く、みかたは草あるを志らず、かつに乘てすゝみ、五十間程敵地へおしこむ時、すでに草はちのごとくおこつて、跡を取切討んとす、味方はむかふかたきに目をかけ是を志らず、

〔奥羽永慶軍記十七〕佐竹北條合戰ノ事

道無〇眞壁申ケルハ、〇中略此方ヨリ取懸、平場ノ一戰ニ千ニ一モ勝利有ベシトモ不存候、タヾ當手ノ陣ヲ堅固ニ守リ、時々亂波ヲ以、敵陣ヲ夜モ驚シ、草ヲ臥テ兵粮運送ノ道ヲ斷、日數ヲ送リ給ハバ、敵國ヲ隔シ長陣難叶覺候、

〔北條五代記九〕關東の亂波智略の事

見しは昔關東諸國みだれ、弓箭をとつてやむ事なし、然ば其比らつぱと云くせ者おほく有し、是らの者盜人にて、又盜人にもあらざる心かしこく、けなげにて横道なる者どもなり、或文に亂波と志るせり、但正字おぼつかなし、俗にはらつぱといふ、され共此者を國大名衆扶持し給ひぬ、是はいかなる子細ぞといへば、此亂波我國に有盜人をよく穿鑿し尋出して首を切、おのれは他國へ忍び入、山賊海賊夜討强盜して、物取事が上手なり、才智有て謀計調略をめぐらす事凡慮に及ばず、〇中略北條左京太夫平氏直は、關八州に威をふるひ、隣國皆敵たるによて、たゝかひやんことなし、武田四郎源勝頼同太郎信勝父子、天正九年の秋、信濃甲斐駿河三ヶ國の勢をもよほし、駿河三枚ばしへ打出、黄瀨川の難所をへだて、諸勢は浮嶋が原に陣どる、氏直も關八州の軍兵を卒し、

伊豆のはつねが原三嶋に陣をはる、氏直亂波二百人扶持し給ふ中に一の惡者有、かれが名を風魔と云、たとへば西天竺九十六人の中、一のくせ者を外道といへるがごとし、此風魔が同類の中四頭あり、山海の兩賊强竊の二盜是なり、山海の兩賊は山川に達し、强盜はかたき所を押破て入、竊盜はほそる盜人と名付忍びが上手、此四盜ら夜討をもて第一とす、此二百人の徒黨四手に分て、雨の降夜もふらぬ夜も、風の吹よも吹ぬよも、黃瀨川の大河を物ともせず打渡て、勝賴の陣場へ夜々に忍び入て人を生捕、つなぎ馬の綱を切、はだせにて乘、かたはらへ夜討して分捕亂捕し、あまつさへ爰かしこへ火をかけ、四方八方へ味方にまなんで紛れ入て、鬨音をあぐれば總陣さわぎ動搖し、○中略半死半生にたゝかひ夜明て首を實撿すれば、皆同士軍して被官が主をうち、子が親の首を取、あまりの面目なさに髻をきり、さまをかへ高野の嶺にのぼる人こそおほかりけれ、扨又其外にもとゆひ切十人計、かたはらにかくれこぞり居たりしが、かくても生がひ有べからず、腹をきらんといふ所に、一人すゝみて云けるは、○中略風魔を見出し、むずとくんでさしちがへ、今生の本望を遂し、會稽の恥辱すゝぎ、亡君亡親へ黃泉のうつたへにせんと、かれらが來る道筋に十人、心ざしを一ッにして、草にふしてぞ待にける、風魔例の夜討して散々に成てにぐる時、十人の者共其中へまぎれ入、行末は二百人みな一所に集たり、然ば夜討强盜して歸る時、立すぐり居すぐりといふ事あり、明松をともし約束の聲を出し、諸人同時にさつと立颯と居る、是は敵まぎれ入たるをえり出さんための謀なり、然に件の立すぐり居すぐりを志ける所に、紛れ入たる十人の者あへて此儀を志らず、えり出されみなうたれけるこそふびんなれ、夜々の事なれば、勝賴の諸勢是にくたびれ、夜明ければよろひをぬぎすて、晝ね志ける所に、なま才覺なるものいひけるは、いかにや人々兵野にふせば、とぶ鴈つらをみだすといへる、兵書の言葉を志り給はずや、爰の山陰かしこの野邊に鴈の飛みだるゝをば見給はぬか、風魔が忍び亂波が草に臥たるよ

とよびめぐれば、すはや心得たり、のがすなうちとれとて、總陣さわぎ動亂しける、馳向て是を見るに人一人もなし、くるればば馬にくらおきひかへ弓に矢をはげ、鐵砲に火なはをはさみ干戈を枕とし、甲冑をきとねとし、秋三月長夜を明しかね、うらめしの風魔が忍びや、あらつらのらつばが夜討やといひし事、天正十八寅の年まで有つるが、今は國をさまり日出度御代なれば、風魔がうはさ亂波が名さへ、關東にうせはてたり、

僧被

〔眞源大照禪師龍山和尚行狀〕師諱德見、本名利見、總州香取人也、○中略時一山寧國師自南朝來、觀光本國、正席圓覺、爐鞴甚熱、師往參之、○中略有南遊之志、歸白寂菴、○中略時師方二十二歲、遂去附商船、抵四明、當乎此時、高麗江南大理等諸國、皆爲蒙古所一統、獨吾日本不服、故將不許容交關、爲翔其拙分之直、不惟禁止商客上岸、乃至雲遊衲子、亦不得入城門、或有犯者、例以細作人坐罪、師嘗曰、古人爲法亡軀、今正是時至也、乃敢於夜半、就寢之頃登雉堞、以投身城中、偶墜豪富家庭之中、守衛捕而縛之、待旦家主鞫問、因何至此、師求紙筆書曰、我在日本、遠聞天童和尚道風、故來求出生死道也、家主夫婦偕素欽佛法、拜東岩和尚、得授衣盂、時岩主天童、以爲吾師道風遠被外國、甚喜乃白官、以自首免罪、携至大白、具陳前事、東岩亦喜其志於道之大至、而收錄之、改上字爲德、令歸堂、

古事類苑

兵事部九

隊伍上

古事類苑

兵事部九

隊伍上

隊伍トハ兵卒ノ組立ニシテ、其編成ノ見ルベキモノハ、令及ビ其義解ニ其制ヲ載セテ、五人ヲ一伍ト爲シ、十人ヲ一火ト爲シ、五十人ヲ一隊ト爲シ、諸隊ヲ合セテ以テ軍ヲ成スナリ、世ニ傳フル所ノ甲斐ノ武田氏ノ陣法ノ如キモ亦大ニ此ニ似タリ、要スルニ部伍ヲシテ亂レズ、齊整ニ歸セシメンコトヲ欲スルナリ、

隊伍ニハ本陣アリ、先陣アリ、後本陣アリ、陣ハ後ニ旗本ト稱ス、大將ニ親屬スル軍兵ナリ、先陣ハ本陣ノ前ニ在ルヲ云フ、又單身衆ニ先チテ進ムヲモ先陣ト稱セリ、即チ先登ナリ、先登ノ事ハ、戰鬪篇ニ在レバ宜シク參看スベシ、後陣ハ本陣ノ後ニ在ルヲ云フ、或ハ先陣ヨリ以下、其次第ニ從ヒテ、一陣、二陣、三陣等ノ稱アリ、又先鋒アリ、殿アリ、先鋒ハ進軍ノ時、諸隊ノ第一位ニ在ルモノヲ云ヒテ殿(シンガリ)ハ退軍ノ時ニ、軍隊ノ最後ニ在リテ、敵ノ追撃ニ備フルモノヲ云フ由リテ又尻拂(シツハラヒ)トモ云ヘリ、

隊伍ハ手ヲ以テ稱スルアリ、一番手、二番手ノ如シ、備ヲ以テ稱スルアリ、一番備、二番備ノ如シ、組ヲ以テ稱スルアリ、佐藤組、山縣組ノ如シ、衆ヲ以テ稱スルアリ、大和衆、河内衆ノ如シ、皆隊伍ヲ云フナリ、又高家ト云ヒ、黨ト云フアリ、又一揆ト云フアリ、而シテ一揆ノ稱ハ、後世ハ多ク無賴ノ徒ノ群ヲ結ビ暴ヲ行フヲ云フナリ、

編成

此篇ハ將帥兵卒ノ二篇ト關聯スルモノ多シ、宜シク參看スベシ、

〔令義解 五 軍防〕凡兵士各爲隊伍、謂、五十人爲隊、五人爲伍也、

〔令抄 軍防〕隊伍　古記云、左氏傳分爲二隊、杜預曰、隊部也、周禮鄭玄注曰、伍衆之名也、名爲隊伍、謂以五十人爲一隊、以五人爲伍、即以一隊人五伍列立耳、疏云、如伍字者、以五人爲一列、而爲一鋒耳、

隊伍

一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一五十人爲隊
一一一一一一一一一一
一一一一一一一一一一步射騎射亦同
一一一一一一一一一一

〔段注說文解字 十四下 阜〕隊從高隊也、隊墜正俗字、古書多作隊、今則墜行而隊廢矣、大徐以墜附土部非、許意釋詁隊落也、釋文从墜、以隊附見、僞矣、左傳曰、以成一隊、杜注百人爲隊、蓋古語一隊猶言一堆、物墜於地則聚、因之名隊爲行列之稱、後人以墜入至韵、以隊入隊韵、而莫測其原委矣、

〔玉篇 下 阜〕隊 徒對切、部也、百人也、又池類切、從高隊也、失也、

〔段注說文解字 八上 人〕伍相參伍也、參三也、伍五也、周禮曰、五人爲伍、凡言參伍者、皆謂錯綜以求之、易繫辭曰、參伍以變、荀卿曰、窺敵制變、欲伍以參、韓非曰、省同異之言、以知朋黨之分、偶參伍之驗、以責陳言之實、又曰參之以比物、伍之以合參、史記曰、必參而伍之、漢書曰、參伍其價、以類相準、此皆引伸之義也、

〔玉篇 上 人〕伍 吳魯切、行伍、說文曰、相參伍也、

〔春秋左氏傳 九 文公〕十六年秋八月、〇中略庸人帥群蠻以叛楚、〇中略庸人曰、楚不足與戰矣、遂不設備、楚子乘馹、會師于臨品、臨品庸地名、馹傳車也、分爲二隊、隊部也、兩道攻之、子越自石溪、子貝自仞、以伐庸、子越鬬椒也、石溪仞入庸道、秦人巴人從楚師、群蠻從楚子盟、蠻見楚強故、遂滅庸、

〔春秋左氏傳 二 桓公〕五年秋、〇中略原繁高渠彌以中軍奉公、爲魚麗之陳、先偏後伍、伍承彌縫、司馬法車戰二十五乘爲偏、以車居前、以伍次之、承偏之隙而彌縫闕漏也、五人爲伍、此蓋魚麗陣法、

〔周禮註疏 十一 地官〕乃會萬民之卒伍而用之、五人爲伍、五伍爲兩、四兩爲卒、五卒爲旅、五旅爲師、五師爲

軍、以起軍旅、以作田役、以比追胥、以令貢賦、

〔周禮註疏二十八夏官〕凡制軍、萬有二千五百人爲軍、王六軍、大國三軍、次國二軍、小國一軍、軍將皆命卿、二千有五百人爲師、師帥皆中大夫、五百人爲旅、旅帥皆下大夫、百人爲卒、卒長皆上士、二十五人爲兩、兩司馬皆中士、五人爲伍、伍皆有長、

〔唐書五十兵志〕士以三百人爲團、團有校尉、五十人爲隊、隊有正、

〔八幡愚童訓上〕文永十一年十一月廿日、蒙古自船下乘馬擧旗責カヽル、〇中略日本馬共驚躍刎狂程ニ馬ヲコソ刷(アツカヒ)シカ、向ント云事ヲ忘、蒙古矢短云トモ、矢根ニ毒ヲ塗タレバ、チトモ當所毒氣ニマク、數萬人矢崎ヲ調テ如雨降射ケル上ニ、鉾長柄物具アキマヲ指シテ不弛、一面立雙テ寄者アレバ、中ニシテ引退、兩方端ヲマハシ合テ、取籠テ皆殺ケル、〇中略冑輕馬能乘、力強命不惜、強盛勇猛自在無窮馳引ヲ、大將軍高所居上、可引所逃鼓ヲウチ、可懸扣責鼓、隨夫寄引、逃時飛鐵炮暗クナシ、鳴高ケレバ迷心失肝、目クレ耳塞テ、忙然トシテ東西ヲ不知、日本軍如相互名乘合、高名不覺ハ思一人宛勝負處、此合戰ハ、大勢一度寄合テ、足手動處我モ〳〵ト取付押殺生捕ケリ、是故ニ懸入程日本人、一人トシテ漏者コソナカリケレ、誠哉不敎民ヲモテ戰之謂棄アル本文今思知ラレケル、

〔本朝武林原始八兵事〕武田家陣法　堀貞則曰、昔は鎧、大袖、直垂、大口を著し、梨子打に白綾の鉢卷などし、箙を負弓持て、士卒の眞先に進出て名乘かけ、自身太刀打などし給ふ將多し、軍も馬働き、吹ながし旗一本馬上にてさし、金鼓なく、高名のせんさく今とちがひ拔懸多し、長刀はあれ共大方弓を專一にする故、急にのぞんでは大略弓を納て太刀打也、元弘より明應の比まで百五六十年の間昔の風にて、それより此方は合戰の風もかはり諸事委く成たり、故に兵法は古法になづむべからず、古老の傳にも、合戰は天文の比より百六七十年已來、甲、信、參、尾、越、相の諸將の跡を可追とあり、

〔北條五代記〕三軍法昔にかはる事

見しはむかし、兵書は唐國より渡り、我朝にをいて是を學び給ひぬ、孫子呉子七書など、云て多し、されば保元の頃ほひまでは、軍法も定まらずと知られたり、其時節の大將軍は、馬上に弓を帶し、武藝をもつはらにあらはせり、〇中略今の時代の大將は、戰場に出ては團をとり、軍兵を下知し、萬人に勝事を專とす、たとへば一萬騎持たる大人あり、皆下知する事あたはず、此一萬人それぞれにつとむる所の役あり、故に主人、其内にをいて數度合戰にあひ、武功をつみ、名をえたる者をえらんで、武者奉行に定め、團をあづくる、此大將法をよくしる、法は軍法曲制をいふ、是大將のをこなふ道なり、軍陣にをいて、人數を立る次第、旗、金鼓、武具等、兵糧運送までも事かゝざるやうにするたぐひを法とはいへり、兵を出さんには、此五つの事をよく定てかならず勝べしと云々、孫子が云、軍は謀を第一とす、まなばずんば有べからずと云り、

〔甲陽軍鑑〕十五品第四十二足輕は

一五より初、廿五ひとくみなり、大そなへもこれよりする、口傳有、

〔甲陽軍鑑〕十五品第四十三信玄公十六歲より五拾三迄の間に軍法工夫仕たる衆

一旗本大陣取は、原隼人あひてに被成、信玄公御工夫なり、同五人組にして三萬千〇千據下文、萬恐作七千、五百と組あはせなさるゝ、縱ば卅七萬五千迄もなるべき也、

〔經濟錄〕七武備　武備ノ要ハ卒伍ヲ定ムルニアリ、異國ノ軍法ニ五人ヲ伍トシ、十人ヲ什トス、五伍ヲ兩トイフ、兩ハ二十五人也、四兩ヲ卒トイフ、卒ハ百人也、伍卒ヲ旅トイフ、旅ハ五百人也、伍旅ヲ師トイフ、師ハ二千五百人ナリ、伍師ヲ軍ト云、軍ハ一萬二千五百人也、伍什兩卒ニ皆長有、伍ハ今ノ代ニ云五人組也、伍ト什ト兩トノ長ハ今世ニ云組頭也、則同輩ノ中ニテ年ノ長ゼル者ヲ立ル意也、卒以上ノ長ハ今ノ世物頭ト云ガ如シ、尙書ニ千夫ノ長、百夫ノ長ト云者有是也、旅ヨリ以

上ニハ將士有、古ハ寓兵於農ト云テ、農ト兵トヲ二ニ分ケズ、兵ハ農ヨリ出ル故ニ卒伍ヲ立ルコト鄰伍ト同法也、鄰伍ノ法ハ前ノ食貨ノ篇ニ見ヘタリ、卒伍ハ軍陣ニ差カヽリ遽ニ組ミ立ル事ニハ非ズ、平日ニ定メ置也、井田ノ法ニ五家ヲ鄰トスルハ、東西南北ノ家ニ中央ノ家ヲ加テ五家ト數フル也、然レドモ必東西南北中央ト定マレルニ非ズ、士民ノ家ニハ堅ニモ斜ニモ並ビ一樣成ズ、唯家數五ツヲ合シテ是ヲ組テ鄰伍トスル也、鄰ハ生ルヽヨリ死スル處一處ニ有テ、平日親ク相語リ、晝夜トナク互ヒニ往來シ、飮食聚會シテ相狎ルコト、遠ク阻ル親戚ヨリモ睦シキ者也、此鄰伍ヨリ軍伍ヲ出ス故ニ、軍中ニテモ相離ルヽコト無、脊ヨリ其姿ヲ見テモ誰某ト云コトヲ識シ、若ハ闇夜ニ聲ヲ聞テモ其人ヲ知ル、戰ニ臨テモ危キ處ヲ互ヒニ相救テ、五人ノ内ニテ敗ヲ取ラヌ樣ニ相助クルハ、平生ノ親ミモアルニ因テ、外ニシ難キ意ヲ生ズルモ人情也、若五人ノ中ニ一人戰死スルヲ見テ救ハザルハ四人皆斬刑ニ處ス、一人敵ニ降レバ四人皆同罪也、如此定ムル上ハ五人ノ中ニ一人モ不勇不忠ナル者アレバ、五人皆罪ヲ蒙ル故、互ヒニ勉勵シテ敗ヲ不取樣ニ心懸ル也、〇中略今吾國ニハ士ニ伍法ナシ、卒徒ニ伍アレドモ、五人ヲ一ツニ組タルノミニテ、行伍ノ法ヲ平日ニ定置カズ、行列ヲ立ルコトアレバ、事ニ臨テ有司俄ニ其次第ヲ行テ、某ガ次ニ某ト云コトヲ指テ、一人ヅヽクリ出ス、其體殊ニ勞煩ナリ、常ノ事ハ是ニテモ辨ズベキガ、大衆ヲ動カスコト能ハズ、況ヤ軍陣ニ臨テ何ヲ以テカ能擾亂ナカランヤ、是伍法ナキ故也、然レバ武備ノ要ハ卒伍ニアリト知ルベシ、卒ト云ハ今ノ足輕也、徒ハ中間ノ事也、

〔令義解五軍防〕凡兵士、十人爲一火、火別宛六駄馬、（謂以官馬宛駄也、所以知者、廐牧令、牧馬應堪乘用者、付軍團、當團兵士内、家富堪養者宛也、）養令肥壯、差行日、聽將宛駄、若有死失、仍卽立替、（謂以理死者、以官馬替也、非理死失者、死失之家輸私馬替也、）

〔舊唐書四十三職官〕凡差衞士征戍鎭防亦有團伍、〇中略火十人有六駄馬、

〔唐書五十兵志〕士以三百人爲團、〇中略十人爲火、火有長、火備六駄馬、〇中略十三年〇開元始以彍騎分隷十

二衡、〇中略十人爲火、五火爲團、皆有首長、

〔令義解五軍防〕凡行軍謂行軍之所、綠事以上也、敍勳定簿、每隊以先鋒者爲第一、謂文云、每隊、卽知有百隊者、亦有百先鋒、鋒者、兵端也、其次爲第二、謂假令陣列之法、一隊十楯、五楯列前、五楯列後、楯別配兵五人、卽以前列廿五人爲先鋒、後列廿五人爲次鋒之類、凡未戰之前、預定先次鋒、故申簿之日、亦據之爲次也、

〔令抄軍衞〕行軍

	先鋒	次鋒
一隊	楯五人	楯五人
	楯五人	楯五人
	楯五人	楯五人
	楯五人	楯五人
	楯五人	楯五人

〔扶桑略記二十二字多〕寛平六年九月五日、對馬島司言上新羅賊徒船四十五艘到著之由、太宰府、同九日進上飛驛使、同十七日記曰、同日卯時、守文室善友召集郡司士卒等仰云、汝等若箭立背者、以軍法將科罪、立額者可被賞之由言上者、仰訖卽率列郡司士卒、以前守田村高良令反問、卽島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下今主爲押領使、百人軍各結廿番、遣絕賊移要害道、豐圓春竹率弱軍四十人度賊前、凶賊見之各鋭兵而來、向守善友前、善友立楯令調弩、亦令亂聲、

〔戸川記上〕一天正十年には、東北國は凡靜謐に成て、信長公在洛なり、秀安〇戸川その頃病氣を患ひ、幸ひ東國治りぬれば、關東草津の溫泉へ爲療用立越、逗留する處に、〇中略慶長二年八月六日死、〇中略秀安秩祿二萬五千石、外に預五十人組凡合六萬石、人數三千の先手備にて直家〇宇喜多第一の長臣也、

〔家忠日記追加九〕天正十二年四月十日、大神君〇德川家康の兵一万八千餘騎、其陣を十六隊に分て、酒

井左衛門尉忠次、井伊萬千代直政、松平主殿助家忠等を先鋒として、二重堀の前ゟ東野に至て軍を出す、〇中略大神君御味方の軍勢を引退べきの旨を命せらるゝに依て、十六隊の陣、其席を亂さず、軍を小牧山に收む、

〔常山紀談七〕天正十四年正月、秀吉、織田源五郎長益、羽柴下總守勝雅、天野佐左衛門三人を使として、東照宮に和平を乞れけり、〇中略九月廿日濱松を御首途有けるに定りければ、人々廿日は四ケの惡日とて、千人出て一人も不歸と申傳へ候、一日御延引然るべからんと申す、東照宮、千人行てこそ大事もあらめ、〇中略去ども秀吉不意に謀をなすならば、京都に火をかけ東寺に栖籠るべし、其時素より立置たる汝〇井伊直政が組一萬を五百づゝ二十に分ち、外に酒井榊原が今度京に上る供の外、留置たる兵一萬、是も二十に分ち、佐屋の渡を越、千種を押上るべし、若大津にて支るならば、武田四郎が長篠にて懸りし如く切てかゝらば、上方武者一支もすべからず、〇中略と仰られ、御出馬有、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年六月、此月、〇中略長防討手敗軍ノ風說書、

防州大島は、凡七里程の場所にて、松平隱岐守勢陸軍方にて、六月九日乘取候處、敵方折々取戻さんと攻來候よし、彌十五日十六日、敵方六大隊程にて嚴重攻立候事故、河野伊豫守より戶田肥後守手防戰難儀、繰引に相成、終に被取戾、步兵差圖役頭取松平友之丞、外差圖役八人、步兵十人致討死候由、殘念の事に候、尤も東勢二大隊故、難守段當地へ注進に付、講武所大砲八座、小砲半大隊出張に相成り、引續き同一大隊遠藤但馬守兵出張に相成候得共、間に合不申由、

十五日井伊掃部頭敗軍ノ屆

私總軍、昨十四日曉、榊原式部大輔總軍陸軍奉行竹中丹後守等兼て打合候通、岩國へ討入候積り、討手分配、〇中略二三番隊の儀は、賊勢分配後、途を遮候に付、勇味村へ分配、山村へ地理に寄り列戰

後襲を防候へ共、三方より被取圍、死地に陷り苦戰の處、兼て約し置候、陸軍方新湊へも不相掛、應援も無之候に付、無餘儀四時頃小方宿邊迄、三隊引纒め、玖波宿へ引揚申候、

九月廿日、大砲組ノ頭ヲ改テ歩兵組ノ頭ト唱フ、　御持小筒組ノ頭ヲ撒兵頭ト唱フ

御持小筒組起立の儀は、文久二戌十二月、小普請組より百人被仰付、元治元子六月、野州騷動の節、諸向より御入人、六小隊卽二百四十人餘に相成り、猶當寅七月八日、元御賄方、同六尺、同新組御臺所、小間使等凡三百人餘、其諸向より追々御入人にて、神田橋外騎兵屯所構內撒兵當番所へ相詰、夫より元御持御先手等の持場所、西丸御玄關前御門、同中仕切御門、御裏門、坂下御門、蓮池御門下梅林御門、平川口御門等、右八ヶ所へ撒兵四大隊を以て日々交代、此外一大隊京都詰、但一小隊四十人、一大隊四百人、右之外三小隊大坂詰、二百人餘、橫濱傳習へ相越す、西丸下生兵千二百人餘、老幼病兵千人餘、右役々下役幷に取締等までにて、凡六百人、總人數五千人と云、

〔嘉永明治年間錄十七〕野州今市宿戰爭ノ旨土州藩ヨリ屆書〇慶應四年五月

會藩幷江戶脫走の兵、去月廿九日頃より、大桑小百高畑高百邊へ繰出し、今市の北、毘沙門山に旗を建、夜分は所々に篝を焚、追々當驛に相迫候に付、嚴に備て相待居候處、當月六日、賊終に毘沙門山栗窗山等に兵を出し、從芹沼大谷川を渡り、朝五ッ時頃、東の方杉林の中より發砲、追々宇都宮壬生兩街道より來に付、不取敢三小隊を以て當り、遊軍二小隊兩道に出、助の砲隊亦左の方よりこれに應じ、且山上の賊より發砲候に付、大砲三四發打懸候處、忽散亂仕候、然るに兩道の戰勝敗未決、此日別に弊藩人數從宇都宮二小隊計、當驛到著の筈に付、夾擊可仕と存、相待候へ共、存外に遲刻に付、人數三十人計、間道より賊の背に出、不意に襲夾擊仕候處、遂に敗走、折柄宮城より人數參會、賊兵八方へ散亂仕候に付、諸隊一里計追擊仕、七ッ時頃、今市へ引取申候、

土州　板垣退助

○按ズルニ、當時ノ制未ダ中隊ヲ置カズ、

〔嘉永明治年間錄十七〕房人加藤林三郎、野州今市宿戰爭ノ狀ヲ白ス、○慶應四年五月

總督會津○會田中藏人、江戸大鳥敬助、　高德二七聯隊出張、隊長は原平太夫、

〔里見九代記三〕三略傳書乾卷　一弓ハ鐵砲ノ二カ一組、時ノ宜シキニ任スベシ、

〔安齋隨筆前編十一〕一弓鐵炮組合　山中氏云、甲州流の軍術に、鐵炮脇に弓を組合せたり、是は玉込の間には、矢を放す爲なりと云、是心得がたし、鐵炮の物間一町計也、矢は一町射わたしたりとも、遠ければ鎧を貫く事はなし、然れば玉込の間の防にはならず、　貞丈云、右の說理也、信ずべし、鐵炮足輕の配りやうにて、玉込の間すきをあらせず、矢をもつて玉込の間を防ぐとは、壘の上の了簡なるべし、

〔東照宮御實紀附錄十六〕土井大炊頭利勝も、將軍家の供奉して駿府へまかりしを、度々御病床近くめし出て仰事どもありし內に、近頃軍伍の次第は鐵炮をもて先とし、次に弓、次に鎗隊、次に騎馬なり、これは定制とすべからず、この後は弓銃を首とし、騎馬是につぎ、鎗隊またこれにつぎ、あるは右備とし、あるは左備とし、機に應じて定むべし、鐵には別に奉行人を立置てその指揮に從はしむべし、わがなからん後は、將軍家忠○秀へこの旨申上よと仰せ置れしとて、神さらせ玉ひし後、利勝なく〱聞え上しとなり、

〔嘉永明治年間錄十〕文久二年十二月九日、將軍馬前守衞ノタメ歩騎刀槍ノ隊伍ヲ編成ス、

兵部少輔殿○若年寄稻葉正巳御渡　奧向寄合諸御番衆等、總て御旗本の面々は、分限に應じ、歩騎二隊に相立て、御馬前守衞に相成り、銘々所長に寄り、刀槍二兵に相分り、右兩兵を以て隊伍編立致し、亂雜不㆑相成樣、御陣制相立候御趣意に付、銘々所長の術、彌無㆓懈怠㆒可㆑致㆓修行㆒候、尤歩騎共刀隊は馬銃相携へ、槍隊は拳銃相用可㆑申積りに付、此又可㆑被㆓心得㆒候、

〔嘉永明治年間錄十三下〕水藩幷ニ浪士隊伍ヲ小栗村ニ整フ

大將　田丸稻右衛門　補翼　齋藤佐次右衛門　總裁　藤田小四郎　監察　田中源藏〇以下十一人略

遊軍總轄　山田一郎〇以下三人略　總隊長　片岡爲之丞　沼田準次郎　隊長　須藤敬之進〇以下四人略

伍長　田村露一郎〇以下五人略　使番　檜山三之助〇以下九人略　調練奉行　山田一郎〇以下四人略

書記頭取　服部本英〇以下七人略　小荷駄奉行　長谷川勝七〇以下三人略　右之外姓名百人

餘略之

本陣

〔參考保元物語一〕京師本、杉原本、鎌倉本並云、高松殿ニハ、南殿ニ出御、公卿僉議アリ、〇中略信西宣旨ヲ奉リテ、義朝ヲ召、〇中略朝敵ト成者ハ天譴ヲ蒙ルモノ也、速ニ其輩ヲ誅シテ宸襟ヲ休メ奉リ、公ノ忠ヲ抽テ、勳功ノ賞ニ誇ルベシトゾ仰ケル、下野守〇源義朝畏承テ罷出、義朝本陣ニ歸物具ス、其日ハ家ニ傳ル八龍ヲ著タリ、

〔太平記十四〕矢矧鷺坂手超河原鬪事

案ニ不違、吉良左兵衛佐、土岐彈正少弼賴遠、佐々木佐渡判官入道、彼此其勢六千餘騎、上ノ瀨ヲ打渡テ、義貞ノ左將軍堀口、桃井、山名、里見ノ人々ニ打テ懸ル、官軍五千餘騎、相懸リニ懸テ、互ニ命ヲ不惜火ヲ散テ責戰フ、吉良左兵衛佐ノ兵、三百餘騎被討テ、本陣ヘ引退ケバ、官軍モ二百餘騎ゾ被討ケル、二番ニハ高武藏守師直、越後守師泰、二萬餘騎ニテ、橋ヨリ下ノ瀨ヲ渡シテ、義貞ノ右將軍大島額田籠澤岩松ガ勢ニ打懸ル、官軍七千餘騎喚イテ眞中ニ懸入テ、東西南北ヘ懸散シ、半時計ゾ採合ヒケル、高家ノ兵又五百餘騎被討テ、又本陣ヘ引退ク、

旗本

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

大將武藏守師直ハ、二十餘町引殿テ、將軍〇足利尊氏ノ御旗下ニ輪違ノ旗打立テ、前後左右ニ騎馬ノ

兵二萬餘騎、馬回ニ徒立ノ射手五百人、四方十餘町ヲ相支テ、如稲麻ノ打圍フタリ、

〔永享記〕持氏鎌倉へ歸給ふ事附鎌倉合戰事

憲實追討の爲に、下向し給ふ兩一色の人々も、相伴ふ軍兵は、管領の方へ駈付ければ、手勢計にて、大敵を可除様なくして、一戰にも不及、同四日海老名の御陣へ引返す、上杉安房守數萬の軍勢を相具して、同四日上州を打立て、同月十九日に分陪に著陣す、是を見て御旗本に有し人々、御内外様の侍奉行頭人に至る迄、公方を捨置申、管領の勢へぞ馳加はる、今は宗徒の御一揆、普代舊功の御勢より外は、殘り止る人もなし、

〔壽齋記〕長時公家中ヲ召テ、御意ニハ、下ノ諏訪晴信ヨリ城代ヲ被置事、無念至極也、諏訪ノ城代追拂可被成旨被仰付、前兩郡ノ侍、仁科道外、瀬馬、三村、山邊、西卷、青柳、カリヤ原、赤澤、島立、犬耳、平瀬、右之衆何レモ大身旗頭ナリ、其外長時公御ハタ本衆神田將監、泉石見、栗葉サウシヤ、下枝、草間、相原瀬馬、村井、鹽尻衆、征矢野大池等也、

〔長篠合戰物語〕一武田方にては信長家康兩旗にて後詰に御出のよし、勝頼被爲聞、家老中を呼、明日の軍評議有り、〇中略扨諸手へ明日合戰の儀申ふるゝ、翌日未明に旗元より掛り貝鳴也、

〔大友記下〕豐州勢高城ヲ責事附耳川合戰之事

カヽリシカバ國々ノ諸軍荒々馳集テ、都合七萬餘騎、角テムシカニ御逗留有、宗麟公御旗本ハ一萬餘騎ニテ御本陣ハムシカニ定ラレ、田原紹恩ヲ大將トシテ、吉弘鑑直、齋藤鎮實、佐伯惟定、萩野鎮信、田北鎮則、臼杵新助、田北鎮敦、北佐井市郎、吉岡、以上十頭ニ仰付ラレ、天正五年五月下旬ニ日向耳川ヲ渡ル、

〔松隣夜話上〕上杉古參ノ大名藤田、見田、荻谷等ノ人數評定シテ、平井ノ不久ヲ鑑テ、氏康〇北條ニ手ヲ入、旗下ニ屬ス、

〔甲陽軍鑑九上品第二十四〕一或時晴信公、山本勘介をめし、弓矢の取沙汰諸國の事、又は國をきり取、よく治むる事をとひ給ふ、○中略晴信公仰らるゝは、近國と無事をば如何と有、勘介申は、總別一國をも持、主のなき侍大將と定め、一郡許もちて、あなたこなたへ旗をかたぶけて稍て、世をすごす侍をば、侍大將と申す、此人一國をもつ大將へ隨身いたし申せば、與力と定め、又一國をとる大將の、三ヶ國をも持大將と緣などを組て、無事有て、加勢あるは、小身の方を旗下と定て申たるが、物の埒はやく聞えてよく御座候、

〔甲陽軍鑑二十品第五十八〕一信玄公御他界十年以前、謙信他界五年已來、織田信長につゞく弓取、日本の事は扠をきぬ、唐國にも當時はまれならんと申に、其上勝賴公をたやし、其跡四ヶ國をそれぞれにわりくれ、此節飛彈の國をも手に入、旗下の北條氏政持分、又濱松家康に駿河をくれ、是三ヶ國、飛彈へかけては卅六ヶ國なり、

本備

〔籾井家日記一〕攝州青野合戰事
宗長公○澁谷ノ御本備ノ宗徒ノ人々、穗田刑部孝繁、革名帶刀左衞門高則、○下略

〔甲陽軍鑑十上品第二十九〕一天文十八年己酉四月十二日卯の刻に、晴信公甲府を御立あり、同十三日に上の諏訪へ御著被成、○中略廿二日○中略味方右の方には、日向大和守同勢にて、足輕大將には小幡山城、横田十郎兵衞三頭なれ共、小幡山城は、せり合有べきとて、先本備板垣彌二郎殿へ參られ候間に、山城子息小幡孫二郎、遠藤と申馬乘同心一騎、歩者六人つれ、丸山筑前あたる所へ馬を早め乘著、○下略

中備

〔增補筒井家記〕天正十五年三月上旬ヨリ、秀吉公二十餘萬人ヲ從テ為西國退治發駕アリ、先陣大友義統、吉川駿河守元春、小早川左衞門督隆景、仙石權兵衞秀久等也、羽柴侍從定次モ、上野城ニハ島左近友之、中坊左近秀行ヲ為留守代、桃谷與次郎國仲ヲ名張城ニ殘シ、島新吉政勝、桃谷與太右

衞門、河村與六郎、松浦佐内、布施小太郎、萬財太郎、吉村新次郎、巨勢猛助等五千餘人中。備。タリシガ、所々軍功有ㇾ之、

〔書言字考節用集 九言辭〕先陣（センヂン）

〔保元物語 二〕白河殿義朝夜討被ㇾ寄事

新院（崇徳）ノ御所ニモ、敵既西南ノ河原ニ鯢波ヲ作テ攻來レバ、爲義以下ノ武士、各〻カタメタル門ヨリ懸出ケリ、判官ガ手ニハ四郎左衞門賴賢ト、八郎爲朝ト先。陣。ヲ爭テ既珍事ニ及バントス、賴賢思ケルハ、今子共ノ中ニハ、我コソ兄ナレバ、今日ノ先陣ヲバ、誰カハ懸ント云、爲朝ハ又恐ラクハ弓矢取テモ打物取テモ我コソアラメ、其上判官モ軍ノ奉行ヲ仕ラセラル丶上ハ、我コソ有メト論ジケルガ、暫思案シテ兄達ヲモ蔑ニスルエセ者トテ、親ニ不孝セラレシガ、適勘當被ㇾ赦タル身ノ、父ノ前ニテ兄ト先ヲ論ゼン事、惡カリナン。ト思ケレバ、所詮誰々モ懸サセ給ヘ、強カラン所ヲバ幾度モ承テ、支奉ラントゾ申ケル、四郎左衞門是ヲ聞モトガメズ、則西ノ川原ヘ出向、紺村濃ノ直垂ニ、月數ト云鎧ノ朽葉色ノ唐綾ニテ威タルヲ著、二十四差タル大中黑ノ矢、頭高ニ負ナシ、重藤ノ弓眞中取テ、月毛成馬ニ鏡鞍置テゾ乘タリケル、大炊御門ヲ西ヘ向テ防ケルガ、爰ヲ寄ルハ源氏カ平家カ名乘レキカン、角申ハ六條判官爲義ガ四男、前左衞門尉賴賢トゾ名乘ケル、河向ニ答テ云、下野守殿ノ郎等相模國ノ住人、須藤刑部丞俊通子息瀧口俊綱前陣ヲ承テ候ト申セバ、扨ハ一家ノ郎等ゴザンナレ、汝ヲ射ニアラズ、大將軍ヲ射ル也トテ、川越ニ矢二ツ放ッ、夜中ナレバ誰トハ不ㇾ知、矢面ニ進ダル者二騎被ㇾ射落ヌ、四郎左衞門モ内甲ヲ射サセテ引退ク、下野守ハ矢合ニ郎等ヲ射サセテ、安カラズ被ㇾ思ケレバ、既懸ントシ給ヘバ、鎌田次郎正清轡ニ取付テ、爰ハ大將軍ノ懸サセ給所ニテ候ハズ、千騎ガ百騎、百騎ガ十騎ニ成テコソ、打モ出サセ給ハメト申ケレ共、猶懸ントシ給間、歩立ノ兵八十餘人有ケルヲ招寄テ、此由ヲ云含、大將軍ヲ守護セサセ、正清

馬ニ打乘テ、眞先ニコソ進ミケレ、

〔源平盛衰記 十五〕宇治合戰附賴政最後事

平家ハ宮〇高倉以仁王南都ヘ入セ給由聞テ、追討使ヲ被差遣、〇中略下野國住人足利又太郎忠綱進出テ〇中略眞先係テ下知シケリ、此川ハ流荒シテ底深シ、大事ノ川ゾ、過スナ、肩ヲ並テ手ヲ取リ組、サカラン者ヲバ弓筈ニ取付セヨ、強馬ヲバ上手ニ立ヨ、弱馬ヲバ下手ニ並ヨ、馬ノ足ノトヅカン程ハ、手綱ヲスクウテ歩マセヨ、馬ノ足ハヅマバ手綱ヲクレテヲヨガセヨ、前輪ニハ多クカヽレ、水越バ馬ノ草頭ニ乘サガレ、水ニハ多ク力ヲ入ヨ、馬ニハ輕ク身ヲカクベシ、手綱ニ實ヲアラセヨ、去バトテ引カヅクナ、敵ニ目ヲカケヨ、餘リニ仰ノキ內甲射サスナ、餘リニウツブキテテヘン射ヘナ、鎧ノ袖ヲ眞額ニアテヨ、水ノ上ニテ身構スナ、我馬弱トテ、人ノ馬ニカヽリテ二人ナガラ推流ルナ、我等渡スト見ルナラバ、敵ハ矢衾ツクリテ射ズラン、敵ハ射トモ各返シ矢イントテ、河ノ中ニテ弓引テ推流サレテ笑ハルナ、弓ノ本ハズ童ヌカリニ打カケヨ、アマタガ心ヲ一ニナシ、曳聲出シテ渡スベシ、金ニ渡テ過スナ、水ニ從テ流渡ニ渡ベシトテ、橋ヨリ上ヘ三段計打アゲテ、三百餘騎サト打入、曳々トヲメキ叫テ渡タリ、橋ノ下ヘ一段サカラズ、三百餘騎一騎モ流サズ、皆具シテ、向ノ岸ヘサト上ル、見之テ千騎二千騎、打入打入渡タリ、二萬餘騎馬ト人トニ防ガレテ、漏ル水コソ見エザリケレ、自ラ前後ノ勢ニ連カズシテ、十騎廿騎渡シケル者ハ、一人モタマラズ押流サル、大勢河ヲ渡シケレバ、宮ノ兵共暫平等院ニ引退、足利又太郎ハ西ノ岸ニ打上テ、鐙蹈バリ弓杖突、〇中略申ケルハ、唯今宇治川ノ先陣渡セルハ、昔朱雀院御宇、承平ニ將門ヲ討、勸賞ニ預シ下野國住人俵藤太秀鄕ガ五代ノ苗裔、足利太郎俊綱ガ子ニ又太郎忠綱生年十七歲、童名王法師、小事ハ不知、大事ノ軍ハ三箇度未不覺仕、係無官無位ノ遠國ノ夷ノ身トシテ、忝モ宮ニ向進テ、弓ヲ引矢ヲ放侍ン事、天ノ恐候ヘ共、是モ私ノ宿意ニ非ズ、平家ノ下知ニテ侍レバ、果報冥加ハ太政入道殿

ノ御身ニ侍ベシト、〇下略

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

兵衛佐殿〇源賴朝仰ニ、武藏相模ニ聞ユル者共ハ皆在ト覺ユ、中ニモ大場俣野兄弟先陣ト見エタリ、此等ニ誰ヲカ組スベキト宣ヘバ、岡野四郎義眞申ケルハ、弓箭ヲ取テ戰場ニ出ル程ノ者、敵一人ニクマヌ者ヤハ侍ルベキ、親ノ身ニテ申事、人ノ嘲ヲ顧ザルニ似タレ共、存ズル處ヲ申サヾランモ、還テ又私アルニ似タルベシ、義貞ハ此間大事ノ所勞仕テ、未力ツカズヤ侍ラメ共、心シプトキ奴ニテ、弓箭取テハ等倫ニ劣ルベカラズ、其器ニ侍リ、被仰含ベキカト申ケレバ、〇中略兵衛佐、佐奈田ニ宣ケルハ、大場俣野ハ名アル奴原也、今日ノ軍ノ先陣仕テ、彼等二人ガ間ニクメ、源氏ノ軍ノ手合也、高名セヨトゾ宣ケル、

〔平家物語九〕宇治川の事

鎌倉のさきの右兵衛のすけよりとも、木曾がらうぜきしづめんとて、のりより、よし經をさきとして數万ぎの軍兵をさしのぼせられけるが、すでに美濃國伊勢國にもつくと聞えしかば、木曾大きにおどろき、うぢせたの橋を引て、軍兵どもをわかちつかはす、〇中略大將軍九郎御ざうし、河のはたに打出、水のおもてを見わたいて、人々の心を見んとや思はれけん、淀いもあらひへやむかふべき、又河内路へやまはるべき、水のおちあしをや待べき、いかゞせんとの給ふ處に、〇中略こゝに平等院のうしとら、たちばなの小じまがさきより、むしや二き引かけ〳〵出來たり、一きはかぢ原源太かげすへ、一きはさゝ木の四郎たかつな也、人めにはなにともみえざりけれ共、内々さきに心をかけたるらん、かぢ原はさゝ木に一たんばかりぞすゝんだる、さゝ木いかにかぢはら殿、此川は西國一の大河ぞや、はるびののびてみえさうぞ、しめ給へといひければ、かぢ原さも有らんとや思ひけん、手づなを馬のゆがみにすて、左右のあぶみをふみすかし、はるびをといて

ぞしめたりける、さゝ木そのひまに、そこをつとはせぬいて、河へさつとぞ打入たる、かぢ原たばかられぬとや思ひけん、やがてつゞいて打入たり、かぢ原、いかにさゝ木殿高名せうとてふかゝし給ふな、水のそこには大づなあるらん、心得給へといひければ、さゝ木さも有らんとや思ひけん、たちをぬいて、馬の足にかゝりける大づな共をふつ〳〵と打切り〳〵、うぢ川はやしといへども、いけずきといふ世一の馬には乘たりけり、一文字にさつとわたひて、むかひのきしにぞ打上たる、かぢ原が乘たりけるするすみは川中よりのだめがたにをしながされ、はるかの下より打上たり、其後さゝ木あぶみふんばり立上り、大音聲をあげて、うだの天皇に九代のこうゐん、あふみの國の住人さゝ木三郎ひでよしが四なん、さゝ木四郎たかつな、うぢ川のせんぢんぞやとぞ名乘たる、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年〇元暦元年二月七日丙寅、寅剋源九郎先引分殊勇士七十餘騎、著于一谷後山、號鵯越、爰武藏國住人熊谷次郎直實、平山武者所季重等、卯剋偸廻于一谷之前路、自海道競襲于館際、爲源氏先陣之由、高聲名謁間、飛驒三郎左衞門尉景綱、越中次郎兵衞尉盛次、上總五郎兵衞尉忠光、惡七兵衞尉景淸等、引廿三騎開木戶口相戰之、熊谷小次郎直家被疵、季重郎從夭亡、

〔源平盛衰記 四十一〕盛綱渡藤戶兒島合戰附海佐介渡海事

同年〇元暦元年十二月十八日、平家讃岐屋島ニ乍有、山陽道ヲ打靡シテ、左馬頭行盛ヲ大將軍トシテ、飛驒守景家以下侍ヲ相具シテ、二千餘艘ニテ、備前國兒島著、三川守範賴モ室泊ニ有ケルガ、舟ヨリ上、同國西河尻藤戶渡ニ押寄テ陣取、源平海ヲ隔テ磬ヘタリ、海上四五町ニハ過ザリケリ、同廿五日ニ平家海ヲ隔テ扇ヲアゲテ源氏ヲ招、源氏是ヲ見、海ヲ渡セト云コソ、船ナクシテ叶ベキナラネバ、是モ以扇招合フ、源平遙ニ見渡テ、其日モ徒ニ晩ニケリ、爰ニ佐々木三郎盛綱、夜入案ジケルハ、渡ベキ便ノアレバコソ、平家モ招ラメ、遠サハ遠シ淵瀨ハシラズ、如何ハセント思ケルガ、其邊ヲ走

廻テ、浦人ヲ一人語ヒ寄テ、白鞘卷ヲ取セテ、ヤ殿向ノ島ヘ渡ス瀨ハ無カ敎給ヘ、悅ハ猶モ申サント云ヘバ、浦人答テ云、瀨ハ二ツ候、月頭ニハ東ガ瀨ニナリ候、是ラハ大根渡ト申、月尻ニハ西ガ瀨ニ成候、是ヲバ藤戸ノ渡ト申、當時ハ西コソ瀨ニテ候ヘ、東西ノ瀨ノ間ハ二町計、其瀨ノ廣サハ二段ハ侍ラン、其內一所ハ深候ト云ケレバ、佐々木重テ淺サ深サヲバ、爭知ベキト問ヘバ、浦人淺キ所ハ浪ノ音高ク侍ルト申ス、サラバ和殿ヲ深ク憑ム也、盛綱ヲ具シテ瀨蹈シテ見セ給ヘト懇ニ語ヒケレバ、彼男裸ニナリ先ニ立テ、佐々木ヲ具シテ渡リケリ、膝ニ立所モアリ、腰ニ立所モアリ、脇ニ立所モアリ、深所ト覺ユルハ、鬢鬚ヲヌラス、誠ニ中二段計ゾ深カリケル、向ノ島ヘハ淺ク候也ト申テ、夫ヨリ返ル、佐々木陸ニ上テ申ケルハ、ヤ殿暗サハ闇シ海ノ中ニテハアリ、明日先陣ヲ懸バヤト思フニ、如何シテ唯今ノトヲリヲバ知ベキ、然ベクバ和殿人ニアヤメラレヌ程ニ、澪注ヲ立テ得サセヨトテ、又直垂ヲ一具タビタリケレバ、浦人斯ル幸ニアハズト悅テ、小竹ヲ切集テ、水ノ面ヨリチト引入テ立テ歸テ、角ト申、佐々木悅テ明ルヲ遲ト待、平家是ヲバ爭カ可知ナレバ、二十六日ノ辰剋ニ平家ノ陣ヨリ又扇ヲ擧テゾ招タル、佐々木三郎盛綱ハ黃生衣ノ直垂ニ、緋威ノ胄、白星甲、連錢葦毛ノ馬ニ、金覆輪ノ鞍置テゾ乘タリケル、家子ニ和比八郎小林三郎、郎等ニ黑田源太ヲ始トシテ十五騎、轡ヲナラベテ海ヘ颯ト打入テゾ渡ケル、三川守馬ニテ海ヲ渡ス事ヤハアル、佐々木制セヨト宣ヒケレバ、土肥、梶原、千葉、畠山、承繼テ、誤シ給ナ、返セ返セト聲々ニ制シケレ共、兼テ瀨蹈シテ澪注ヲ立タレバ、耳ニモ聞入ズ渡ケリ、馬ノ鳥頭、草脇胸帶盡シニ、立所モアリ、深所ヲバ手綱ヲクレ游セテ、淺クナレバ物具ノ水ハシラカシ、弓取直シ向ヒノ岸ヘサト上ル、鐙蹈張弓杖ニスガリテ名乘ケルハ、今日海ヲ渡シ、敵陣ニスヽム大將軍ヲバ誰トカ見ル、宇多天皇ノ王子、一品式部卿敦實親王ヨリ九代ノ孫、近江國住人佐々木源三秀義ガ三男ニ、三郎盛綱也、平家ノ方ニ我ト思ハン者ハ、大將モ侍モ落合テ、組ヤ〳〵ト喚テ蒐入、散々ニ蒐、源氏ノ兵是ヲ見、

海ハ淺カリケリ、佐々木討スナ渡セ者共トテ、土肥、梶原、千葉、畠山、我先々々ト打入打入、五千餘騎向ノ岸ヘサト上ル、平家ハ扇ヲ以テ度々ニ招ケレ共、流石海ナレバ爭カ渡スベキト思ヒ延テ有ケルニ、角押寄セ、時ヲ造ケレバ互ニ時ヲ合セ、喚叫テ戰ケリ遠キヲバ弓ニテ射、近ヲバ熊手ニカケテ取、或ハ射殺レ切殺サレ、源平互ニ亂合テ、隙ヲアラセズ息ヲ繼ズ討モアリ、被討モアリ、取モアリ被取モ有ケレバ、少時ト思時ノ間ニ、兩方八百餘騎コソ亡ケレ、〇中略平家是ヲ見テ、今ハ叶ハジトヤ思ヒケン、舟ニトリ乘漕退、矢鋒ヲソロヘテ指詰指詰散々ニ射、源氏ハ勝ニ乘、汀ヲマハリテ是モ散々ニ射ケレバ、平家ハ兒島城ヲ落テ、讃岐屋島ヘ漕返レバ、源氏ハ馬ヲ游セテ、藤戸ノ陣ヘ歸ニケリ、佐々木四郎高綱ガ、宇治河ノ先陣ヲ渡シタリシヲコソ、高名ト云タリシニ、同三郎盛綱ガ、馬ニテ海ヲ渡ス事、漢家本朝樣シ無キトゾ、源平共ニ感ジケル、誠ニユヽシクゾ見エタリキ、或說ニ云、平家楯籠備前國兒島之時、盛綱遙海上ヲ渡、先陣ヲ蒐テ、群敵ヲ責落畢、依之右大將家御自筆之御下文云、自古渡河雖有先例、未聞遙渡海之例ト卽賜彼島之上、賜伊豫讃岐兩國畢、

〔吾妻鏡三〕元曆元年十二月七日壬戌、平氏左馬頭行盛朝臣、引率五百餘騎軍兵、搆城郭於備前兒島之間、佐々木三郎盛綱、爲武衞御使爲責落之、雖行向、更難凌波濤之間、濱潟案轡之處、行盛朝臣頻招之、仍盛綱勵武意、不能尋乘船、乍乘馬渡藤戸海路(三町餘)所相具之郎從六騎也、所謂、志賀九郎、熊谷四郎、高山三郎、與野太郎、橘三、橘五等也、遂令著向岸、追落行盛云云、　廿六日辛巳、佐々木三郎盛綱、自馬渡備前國兒島、追伐左馬頭平行盛朝臣事、今日以御書、蒙御感之仰、其詞曰、自昔雖有渡河水之類、未聞以馬凌海浪之例、盛綱振舞、希代勝事也云云、

〔承久記下〕武藏守、芝田橘六ヲ召テ、河ヲ渡サント思ニ、〇中略瀨蹈シテ參レト宣ケレバ、奉リ候トテ、一町計打出タリケルガ、取テ返シ、檢見ヲ給リ候バヤト申、尤サルベシトテ、南條七郎ヲ召テ被指添、二騎連テ下樣ニ打ケルガ、槇島ノ二マタナル瀨ヲ見渡ケルニ、アヤシノ下﨟ノ白髮ナル翁一

人出來レリ、是ヲトラヘテ、汝ハ此所ノ住人、案內者ニテゾ有覽、何ノ程ニカ瀨ノアル、慥ニ申セ、ケンシヤウ申行ベシ、不申バ、シヤ首切ンズルゾトテ、太刀ヲ拔懸テ、問ケレバ、此翁ワナヽキテ、瀨ハ爰ハ淺候、カシコハ深候ト敎ヘケレバ、能申タリトテ、後ニハ首ヲ切テゾ捨ニケル、〇中略サテ此河ハサゾ有覽ト見渡シテ、取テ返シ、瀨踏ヲコソ仕ヲホセテ候ヘト申ケレバ、佐々木四郞左衞門尉、御前ニ候ガ、芝田ガ申詞ヲ聞モ不敢、ウッタチ馬ニヒタト乘テ、シモザマニ馳テ行、芝田橘六、アナ口惜、是ニ前ヲセラレナンズト思テ、同馳テ行、佐々木前ニ立テ、爰ガ瀨カ〳〵ト云ケレバ、未ハルカハルカトテ、槇島ノ二マタナル所ノ、我瀨踏シタル所ヘ、馬ノ鼻ヲ引向、ガバト落サントス、芝田ガ馬ハ鹿毛ナルガ、手飼ニテ未乘入ザレバ、河面大雨降テ、洪水漲落、白浪ノ立ケルニ驚テ、鼻嵐吹テ、取テ返ス、引向テ鞭ヲシタヽカニ打テ落サントス、佐々木是ヲ見テ、コハ如何ニ、カシコハ瀨ニテ有ケル物ヲ、ト思テ引返シ、芝田ガ傍ヨリ、ガバト打入テ渡シケリ、佐々木ガ馬ハ權大夫殿ヨリ給タリケル、甲斐國ノ白幽立、黑栗毛ナル駄ノ下尾白カリケリ、八寸ノ馬、其名ヲ御局トゾ申ケル、駄ノヲツルヲ見テ、芝田ガ馬モ續ヒテヲツル、河中迄ハ、佐々木ガ馬ノ鞭ニ、鼻ヲサス程ナリケルガ、元來馬劣リタレバ、次第ニ被捨テ、二段計ゾサガリタル、佐々木未向ノ岸ヘモ不襄(アガラ)シテ、近江國住人佐々木四郞左衞門尉源信綱、今日ノ宇治河、ノ先陣也ト高ラカニゾ名乘ケル、同續ヒテ奧州住人芝田橘六兼能、今日ノ宇治河ノ先陣ト、同音ニ高ラカニゾ匐リケル、

〔梅松論上〕小山結城長沼が一族、〇中略其勢二千餘騎仰を蒙りて、將軍の先陣として、建武二年十二月八日、鎌倉を御立ありければ、諸人箱根の御陣に加て、御合力あるべきとおもふ處に、〇下略

〔江濃記〕野羅田合戰事

義賢〇六角自身打立給ふ、先陣は蒲生右兵衞大夫、長原太郞左衞門、進藤山城守、池田次郞左衞門、二陣は楢崎壹岐守、田中治部大夫、木戶小太郞、和田玄蕃、吉田新介等、後陣ハ義賢、馬廻幷後藤、箕浦、田

崎、山田以下、其勢二萬五千餘騎、野羅田表へ出張して、敵をそしと待かけたり、淺井父子是に驚き、則勢を催し、百々内藏助、磯野丹波守、丁野若狹守を、先陣の大將として、五千餘騎出張し、後陣は淺井備前守長政、赤尾、上坂、今村、安養寺、弓削、本郷を、前後左右に隨へて六千餘騎、野羅田表へおし出す、

〔信長公記〕六七月○天正元年十六日、眞木島へ信長御馬をよせられ、五ケ庄之やなぎ山に御陣を居(すゑ)させられ、則宇治川乘渡し、眞木島可攻破之旨被仰出、誠に名も高き宇治川漲下ッて逆卷流る丶、大河表、渺々として冷じく、輙可打越事大事と各雖被存知候、可有御用捨御氣色無之、於致延引者、信長公可被成御先陣之旨候、難遁題目也、就而兩手を分而可打越之趣被仰出候、さ候間任先例川上平等院之丑寅より、昔梶原と佐々木四郎先陣爭ひて被渡候所を、稻葉伊豫、息右京助、同彥六先陣にて、齋藤新五、氏家左京助、伊賀伊賀守、不破河内、息彥三、丸毛兵庫頭、息三郎兵衞、飯沼勘平、市橋傳左衞門、種田助丞、嚔と打越、平等院之門前へ打上り、関音を上て、則近邊に被揚烟、

〔蘆名家記〕三摺上一戰

一同○天正十七年七月五日ノ夜、正宗公へ盛國○猪苗代ヨリ相圖シテ、盤梯ノ下摺上、其外猪苗代龜ガ城ニゾ入玉フ、此事カクレナク黑川ニ聞エシカバ、盛重○名蘆大ニ驚カセ玉ヒ、サラバ新橋ヲ越、大寺ニ陣ヲ取可戰、先年關柴一亂ノ節モ、鹽川ノ橋ヲ越テ合戰ヲナシ、勝利ト聞ナレバ、吉例ニ任セ今度モ新橋ヲ越、敵ヲ一途ニ追散サンニ、何ゾ時ヲウツサンヤ、早打立ト宣テ、士卒物ノ具ヲ堅メ、馬引寄ウチ乘〈〈、其夜ノ丑ノ刻バカリニ黑川ヲゾ出馬シ給フ、角テ會津勢大寺ニ著シカバ、軍ノ備ヲ設ケ玉フ、先陣ハ富田將監ト相定メラル、時ニ將監、盛重公ノ御前ニ畏テ申シケルハ、今度某ニ先陣ヲ玉ハルコト、生前ノ眉目、死後ノ譽レ、何ゴトカ如之哉、然バ少々存ル旨候ノ間、他ノ勢ヲ雜ヘズ、手勢バカリニテ先陣仕度由申シケレバ、盛重公聞シ召、頓テ御免サレ有ケリ、去程ニ富田將

一陣

盛手勢五百餘騎ニテ、摺上ノ原マデ打チ出、如何ニ身方ノ者ドモ、今度某ハ存ル旨有之間、討死ヲ遂ベキナリ、汝等モ最期ノ供ヲセント思ハヾ、甲ノシノビノ緒ヲシメ一足モシリゾカズ、唯一サンニ敵陣ヘ駈入テ、イサギヨク討死ヲセヨ、亦落ント思フ者ハ、落行ベシト云ケレバ、五百餘キノ兵ドモ、サスガニ名ヲ惜ム義士ドモナレバ、何レモ御供仕ラント申シテ、皆々甲ノシノビノ緒ヲ押シメ、東頭ニ馬ヲナシ、今日ヲ最期トゾ見エタリケル、〇中略又正宗公ノ方ニモ、先陣猪苗代盛國、會津案內者トシテ、三引兩ノ旗一ナガレ眞先ニ進マセタリ、其勢二千餘騎、我先ニト競進ム、

〔元寬日記〕元和元年五月朔日、忠輝卿〇松平少將越後旗本ニ者村上周防守義明、溝口伯耆守宣直、此兩人ハ隔日勤先陣、

〔源平盛衰記〕三十七平家開城戶口并源平侍合戰事

平山〇季重熊谷〇直實ニ云ケルハ、城ノ搆樣ヲ見ニ、二重ノ櫓ニハ平家ノ侍、國々ノ兵共並居タリ、高岸ニ副テ屋形ヲ並テ、大將軍御座、海ニハ石ヲ疊重テ大船共ヲ片寄置リ、上ニ櫓ヲ搔リ、城戶口ニハ逆茂木重々ニ引廻シテヒラカネバ、輙ク蒐入事叶難シ、如何スベキト云程ニ、城內ノ兵共ノ評定シケルハ、熊谷父子ト名乘テ、組ン〳〵ト訇ルヲ、此陣固ナガラ、漏ン事云甲斐ナシ、サリトテ大勢ニモ非ズ唯三騎也、サテ又後陣ノ大勢ノ連ニモアラズ、東國ニハゲニ此等コソ名アル者ニテ有ラメ日本第一ノ剛者ト名乘ヲバ、如何空ハ返スベキ、イザ殿原熊谷父子虜ニシテ、大臣殿ノ見參ニ入レント云、然ベシトテ、越中次郎兵衛尉盛嗣、上總五郎兵衛忠光、同惡七兵衛景淸、飛驒三郎左衛門景經、後藤內定綱已下早リ雄ノ若者共二十三騎、城戶口ノ逆母木ヲ引却サセテ、轡並テ喚テ蒐出ケル處ニ、平山ハ波打際ヨリ馬ヲ出シテ主從二騎懸出ツヽ、武藏國住人平山武者所季重、角コソ先ヲバ懸レトテ、城戶口ヘゾ馳入タル、城內ノ者共ハ、熊谷鬼神成共、廿餘騎ノ勢ニテハ手取ニセント見ル處ニ、指違テ平山ト名乘テ懸入ケレバ、廿三騎モ平山ニ付テ內ニ入、城中ニハ源

氏ノ大勢ニ城戸口ヲ破ラレヌト心得テ引退、櫓ノ上ヨリ是ヲ見テ敵ハ二騎ゾ、痛ナ騒ソトテ、矢ヲハゲ射ントスレ共、御方ハ多シ敵ハ二騎、一所ニタマラズ電リナンドノ樣ナレバ、弓ヲ引テハユルシ、引テハ免シケレ共、矢ノアテ所ハナカリケリ、櫓ニテ下知シケルハ、平山ト名乘ハ本所經タル名アル侍、ヨキ敵ゾ、其男取テ引落セ、中ニ坂東者ハ馬ノ上ニテコソ口ハ聞共、組テ後ニハ物ナラジ、落合ヘ〳〵殿原ト、兩方ノ櫓ノ上ヨリ進ケレ共、平家ノ侍ノ乘タル馬ハ、舟ニユラレ飼事ハ希也、乘事ハ隙ナシ、日數ハ遙ニ經タリ、平山ガ目油馬ハ勇嘶タル大馬ノ狂象ノタケル樣ニ弓手妻手ヲ嫌ズ、一所ニトマラズ馳ケレバ、相構テアテラレジトゾタメラヒケル、マシテ落合マデハ思ヨラズ、熊谷父子ハ二十三騎ガ後ヲ守テ喚テ蒐、二十三騎ハ平山ヲバ內ハニ成シテ、取テ返テ熊谷ニ向バ、平山又喚テ蒐、二十三騎ハ熊谷ヲ外樣ニ成シテ、取テ返テ平山ニ向バ、熊谷又ヲメキテ蒐ク、三廻四廻クルリ〳〵ト廻タレ共、何ニモ不組シテ、終ニハ敵五騎ヲバ外樣ニ成テゾ鄕タル、熊谷ハ平山ヲ休メントテ、暫和殿ハ氣ヲ繼給ヘトテ、父子二人面テニ立テ散々ニ戰、左右櫓ヨリ射ケル箭ハ、雨ノ足ノ如クナレドモ、冑ニ立ハ裏カヽズ、アキマヲ射ネバ手ハ負ハズ、〇中略平山ハ暫休ミテ馬ヲモ氣ヲ繼セケルニ、熊谷ハ馬ヲ射サセテ歩立ニ成、小次郎モ手負ヌト見ケレバ、又入替テ戰ケリ、旌指ハ黑糸威ノ鎧ニ、三枚甲ヲ著タリ、馬ヨリ眞倒ニ被射落タリケレバ、不安思テ餘ノ者ニハ目ヲ不懸、旗指ガ敵ニ押並ベ引組デ、馬ノ上ニテ頸ヲ切、手ニ捧、一人當千ノ兵、平山武者所季重、一陣懸テ敵ノ頸取テ出、剛者ノ擧動見ヨヤ殿原、我ト思ン者組ヤ者共トテ、城ノ外ヘコソ出ニケレ、誠ニ由々敷ゾ見エタリケル、平山ガ二度ノ蒐トハ是也ケリ、平家ノ侍共、平山一人ヲバ安ク討ベカリケルヲ、後ニ熊谷アリケルヲイブセク思テ、終ニ漏テ出シニケリ、後日ニ關東ニテ一陣二陣ノ諍アリケルニ、熊谷ハ城戸口ヘ寄事ハ一陣、平山ハ城ノ內ニ蒐入事一陣、而モ敵ノ頸ヲ取、甲ハ何レモ取々ナレ共、平山先陣ニ定リケリ、

先鋒

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年二月十六日庚午、關東軍兵爲追討平氏赴讃岐國、廷尉義經爲先陣、今日酉剋解纜、大藏卿泰經朝臣稱可見彼行粧、自昨日到廷尉旅館、而卿諫云、泰經雖不知兵法、推量之所覃、爲大將軍者、未必競一陣歟、先可被遣次將哉者、廷尉云、殊有存念、於一陣欲棄命云云、則以進發、尤可謂精兵歟、平家者結陣於兩所、前内府以讃岐國屋島爲城郭、新中納言知盛相具九國官兵、固門司關、以彦島定營、相待追討使云云、

〔書言字考節用集九言辭〕先鋒センホウ

〔日本書紀九神功〕爰伐新羅之明年、〇攝政元年、中略、三月丙申朔庚子、命武内宿禰、和珥臣祖武振熊タケフルクマ、率數萬衆、令擊忍熊王、〇中略忍熊王出營欲戰、時有熊之凝クマノコリ者、爲忍熊王軍之先鋒サキ、

〔日本書紀二十八天武〕元年七月辛亥、男依〇村國連等、到瀬田、時大友皇子、及群臣等、共營於橋西、而大成陣、〇中略其將智尊、率精兵以先鋒距之、仍切斷橋中、須容三丈、置一長板、設有踰板度者、乃引板將墮、是以不得進襲、於是有勇敢士、曰大分君稚臣、則棄長矛、以重擐甲、拔刀急蹈板度之、便斷著板綱、以被矢入陣、衆悉亂、而散走之、不可禁、將軍智尊拔刀斬退者、而不能止、因以斬智尊於橋邊、〇中略壬子〇中略於是近江將犬養連五十君、自中道至之、留村屋、而遣別將廬井造鯨、率二百精兵、衝將軍〇大伴吹負營、當時麾下軍少、以不能距、爰有大井寺奴名德麻呂等五人、從軍、即德麻呂等爲先鋒、以進射之、鯨軍不能進、

先打

〔平治物語二〕六波羅合戰事
金子十郎家忠ハ、〇中略弓モ引折、太刀ヲモ打折ケレバ、折太刀ヲ提テ、哀太刀カナ、今一合戰セントト思テ懸廻ル處ニ、同國〇武藏住人足立右馬允遠元馳來レバ、是御覽候ヘ足立殿、太刀オリテ候、御帶添候ハヾ、御恩ニ蒙候ハントト申ケレバ、折節帶添ナカリシカ共、御邊ガ乞ガ優キニトテ、先ヲ打セタル郎等ノ太刀ヲ取テ、金子ニゾ與ヘケル、

先備

〔甲陽軍鑑品第二十九〕一荻原助四郎、常の廣言に、鑓をあはする事、一度は少、三度は多、二度はよい

ころ也とて鎗を二度仕る、鎗下の高名二度、城をのる時、御使に參たる備にて、一番のりも二度、先備へ御使に參り、敵の內におひて、馬上にて下知仕る武士と組うちも二度、都合八度武篇をいたし、それより後少もかたがず、

〔甲陽軍鑑品第二十三九上〕就中武者奉行加藤駿河のかみ、十月〇天文十一年廿三日巳の剋に、信州衆よりかかりての合戰なり、都合三度の合戰、四度目にはたもとにて、わきへまはりてかゝり給ふ、はたもと原加賀のかみ、まへぞなへなるが、御はたもとめての方よりまはりてかゝり、敵をくづす事、はた本原加賀守二備をもつて伐くづし、軍巳の時に始まり、午の剋に終る、

前備　〔甲陽軍鑑品第二十八九下〕山本勘介申上る、〇中略御旗本前備は、一眞田彈正、此くみ一九子、一屋さは、是は御旗本一手なり、

後陣　〔書言字考節用集言辭九〕後陣ゴヂン

〔貴嶺問答〕今度合戰武綱最前破二一陣一得レ勝、而秀綱雖レ在二後陣一廻二奇謀一者也、蒙レ賞之時可レ爲二第一一之由所レ申也、若可レ注二申之由被二仰下一者、何樣可レ存知哉、可レ被二計仰一之狀如レ件、

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

此外武藏、相模、伊豆、駿河、上野五箇國軍勢、都合二十萬七千六百餘騎、九月〇元弘元年廿日鎌倉ヲ立テ、同晦日、前陣已ニ美濃尾張兩國ニ著バ、後陣ハ猶未高志二村峠ニ支タリ、

〔太平記六〕關東大勢上洛事

去程ニ畿內西國ノ凶徒、日ヲ逐テ蜂起スル由、六波羅ヨリ早馬ヲ立テ、關東ヘ被二注進一、相模入道〇北條高時大ニ驚テ、サラバ討手ヲ指遣セトテ、〇中略宗徒ノ大名百三十二人、都合其勢三十萬七千五百餘騎、九月〇元弘元年廿日鎌倉ヲ立テ、十月八日先陣既ニ京都ニ著ケバ、後陣ハ未足柄箱根ニ支ヘタリ、

二陣　三陣　四陣　五陣　六陣　七陣

殿

〔陸奥話記〕同〈○康平五年八月〉十六日定諸陣押領使清原武貞爲一陣、〈武則子也、〉橘貞頼爲二陣、〈武則甥也、字志萬太郎、〉吉彥秀武爲三陣、〈武則甥亦聟也、字荒川太郎、〉橘頼貞爲四陣、〈貞頼弟也、字新方二郎、〉頼義朝臣爲五陣、五陣中亦分三陣、一陣將軍、一陣武則、一陣國內官人等也、吉美侯武忠爲六陣、〈字班目四郎、〉淸原武道爲七陣、〈字貝澤三郎、〉

〔源平盛衰記二十七〕墨俣川合戰附矢矯川軍事

十郎藏人行家モ、命モ不惜面モ振ズ、平家ノ大將ゾ、漏スナ餘スナトテ、是ヲ最後ト戰フタリ、矢叫ノ音、馬馳違フ音、隙有トモ不聞、源平旗ヲ差並テ勝負牛角ニ見タリケリ、一。陣。景家、二。陣。忠清、三。陣。盛俊、四。陣。長綱、四千餘騎、重衡惟盛二千餘騎ニ、押合テ七千餘騎ガ一手ニ成テ、入替々々責ケルニ、行家武ク心ハ思ヘドモ無勢ニテ防カチ、小熊ノ陣ヲ落サレテ、尾張國折戸ノ宿ニ陣ヲトル、

〔太平記一〕頼員回忠事

サレドモ寄手〈○六波羅勢〉ハ大勢ナレバ、先陣引バ二陣喚テ懸入、懸入追出、追出セバ懸入、辰剋始ヨリ、午剋ノ終マデ、火出ル程コソ戰ケレ、

〔書言字考節用集四人倫〕殿〈レンガリ、シンハラヒ〉〈太平御覽、軍後也、師古云、殿之言塡也、謂鎭軍後以扞敵、活法、軍前曰啓、後曰殿、又論語、後殿、後軍、〉

〔倭訓栞前編十一〕しんがり　殿をよめり、後狩の義也、軍退くには殿を功とす、俗にしつはらひといふ、後拂の義也、或は破をよめり、序破急の破なるべし、

〔鎌倉大草紙〕長尾景春、武州鉢形の城へうつり、武州相州の內、一味同心の兵を催し、不日におもひたち、五十子の陣へ押寄て、兩上杉を襲ける間、文明九年正月十九日の夜、顯定憲房宣政三人、小勢にては叶まじ、上野へ打越、大勢を催し、景春を退治すべしとて、太田道眞を殿にて、利根川をわたり、那波の庄へ引退、

〔甲陽軍鑑一品第三〕甲州の衆打寄談合申され候は、城〈○信濃海野口〉の內に、三千ほど人數候よし申候へば、がせめにはいかゞにて候、又御味方の人數も七八千にはよも過候まじ、今日ははや極月〈○天文五年〉

廿六日なれば、年もつまり候、先御國へ御歸陣被成、來春の事に可被成候、敵も大雪と申、節季と申、跡ををたふ事努々思ひもよらず候と申上候へば、信虎公〇武田晴信父御合點にて、さらば明日早々引とるべきと相定らるゝ所に、晴信公御出有て、さらばをんがりを被仰付候へと御望候、信虎公聞召、大きにわらひ、武田の家の名折を被申物哉、敵のつくまじきと功者共申候に、縦某をんがりと申付候共、次郎に被仰付候へなどゝ申てこそ、總領共いふべきに、次郎ならば中々加様の事は望申まじきとて、御をかり被成候へば、晴信公荐に御望、をんがりを申請られ候、其儀ならば跡に引候へとて、信虎公廿七日の曉、うつ立、御馬を被入候、晴信公は東道三十里ほど跡に殘り、いかにも用心したる體にて、漸々三百ばかりの人數を下知し、其夜は食を一人にて、三人前許こしらへ、早打たゝん支度をし、單皮、行縢、物具をも其儘きごみにし、馬に物をよくかふて鞍をも置づめにし、寒天なれば、明日打立時分は、上戶下戶によらず酒をすごし、夜の七ッ時分にならば、罷出べき分別仕候へと自身觸られ候、內衆も晴信公の深御分別をば不存、まことに父信虎公の御そしりなさるゝも御尤也、此寒天に何として敵跡ををたひつき申べきやとて、下々にて皆つぶやき申、さて七ッの時分に打立て、甲府へは不行、跡へ歸、もとの歸きたる城へ取懸、廿八日の曉、其勢三百許にて、何の造作もなく城を乘とり給ふ、

〔常山紀談二〕義元討死の時、東照宮は大高の城におはしませしかば、〇中略夜中に大樹寺まで引取せたまひぬ、後殿は大久保五郎右衛門忠俊なり、翌日岡崎に歸入せたまひけり、〇中略謙信〇上杉小田原の蓮池まで攻入、明日は鎌倉に赴べしとて、軍評定ありし時、新發田因幡守治長、其比十五歲なりしが、すゝみ出て、かゝる手くばりならば、一定味方敗北すべしと申す、謙信怒りて、舌のやはらかなるまゝに、物ないひそといはれしかば、治長居直り、謹でけふより君臣の義を絕せたまはり候なば、小田原に馳參り、北條家の先陣して、君を追討まゐらすべし、酒匂川のこな

たにては、たやすく討とり奉らん物をと申す、謙信其時色をやはらげ、天晴剛の者よ、神妙にも申たる哉、明日の後殿をせよと命せられける、治長軍だて去か〳〵すべきとて、やがて事よく小田原を引とりたり、

〔相州兵亂記 四〕景虎小田原へ寄來事

景虎〇上杉小田原ヲ責メントノ計ヒ相違シテ今ハ中々手勢計ニナリ、小田原ヨリ寄ラレヌ前ニト、鎌倉ヲ引拂ヒ、上州ヘ歸リケル、道ニテ甘繩ノ左衛門大夫ニクヒトメラレテハアシカリナントテ、太田美濃守ニシンガリヲサセ、長尾義景ヲ先陣ニ打セ、ヤウ〳〵上州ヘ歸リケル、

〔信長公記 三〕九月〇元龜元年廿三日、野田福島御引拂、和田伊賀守、柴田修理亮兩人、殿に被仰付、路次者中島より江口通御越也、彼江口と申川は、淀宇治川の流にて、大河漲下り、瀧鳴つて冷じき様體也、總而昔年より舟渡しにて候也、猛勢の御人數差懸候處、一揆の企、蜂起、渡舟を隱置、通路自由ならす、稻麻竹葦なんどの如く、過半竹鑓を持て、江口川の向を、大坂堤へ付て雖叫喚、無異事信長公川の上下懸まはし御覽じ、馬を打入、川を可渡の旨御下知の間、悉乘入候之處、思の外川淺く候て、かち渡りに雜兵無難打越候、

〔奧羽永慶軍記 一〕佐竹勢働白川事

寄手ノ大將〇佐竹一族、宇留野源太郎、城〇白川ノ體ヲ見ルニ、ヨワルケシキモ見エズ、迚モ落城スベカラズ、日數ヲ經テ益ナシト、諸勢ニ下知シ、白川ヲ卷播シ、人數ヲゾ引取ケル、所々ノ押ヘモ退ケバ、イザ喰トメントテ、四五ケ所ノ兵ドモ追懸タリ、サレドモ宇留野カチテ其軍慮ヤ定ケン、殿ノ備ヘ三組ニシテ、弓ノ者、長柄ノ者、足輕等油斷ナク防ケレバ、二三里ガ程喰付トイヘドモ、カハル戰ヒモ無リケリ、

〔別所長治記〕秀吉先谷々ヲ放火シテ、足輕軍少々始ラレ、敵ノ體ヲ見給、卒爾ノ軍シテ初テ逢敵ニ

氣ヲ付バ、重テノ軍難」成トテ、人數ヲ上ゲ引取給フ、日既ニ及」夕陽」シカバ、後ハ羽柴小一郎秀長ニ申付、秀吉ハ再拜押取、信長流ノ車引ニ人數ヲ左右ニ引取、三木方ノ若武者、跡ヲシタハントテ、四五百人城戸ヲ開セ出ントス、

〔蒲生氏鄕記〕一信長公御切腹ノ後、羽柴筑前守味方ニ賴ミ被」申ニ付テ、小牧表得押ツメラル、敵是ヲ見テ淸須ノ城ニ被」引退、大閤樣淸須ノ城際マデ押ツメ、ヤガテ又御引返シ被」成候、其時後。拂。誰ニ可」被」仰付」カト思召定テ、城ヨリ可」付一大事ノ儀ナリ、イカヾト御思案アッテ、此度ノ後拂ヒ氏鄕ニ仕候得ト被」仰付、氏鄕承リ御心易ヲボサレ候得、敵出候ハヾ、段々人數ヲ立テ、一マクリニ追返シ申ベシ、御心易クノカセラレ候ヘト被」申上、大閤樣御感不」斜、其次々段々被」爲」仰付、大柿得參著被」成候、今度尾州表御人數御引取被」成、御一代ノ大事ト被」思召」候ニ、氏鄕堅固ニ後ヲ仕、緩々ト被」引取、御滿足被」成之由被」仰聞」候、氏鄕一代ノ覺ハ此儀也、子細ハ何レモ〳〵ノ中ニ、御一代ノ大事ト思召儀ヲ、氏鄕被」仰付」事、面目之至リ不」過」之ト、イツモ語リ被」申シナリ、敵出子バ手ニハ合子ドモ是ヲ第一ノ事トスルナリト被」申ケルトゾ、

〔伊達日記上〕高玉太郎左衞門、兩陣間ヲ乘候處ニ、志賀三郎ト申モノ我等歩小姓、兼テ鐵炮ヲ能ウチ申候ガ、川柳ニ鐵炮ヲ打カケ相待候處ニ、太郎左衞門小川ヲ隔、横ニ乘返候處ヲ、二ツ玉ニテ打候間、一ノ玉ハ馬ノ肩ノモミ合ニ當、一ツノ玉ハ太郎左衞門膽ニアタリ候、馬倒候間、其ニ味方キヲヒカヽリ候間、敵方引除候、太田主膳ト申モノ大功ノ者、後殿ヲ仕候間、敵モクヅレ不」申候ガ、小坂迄乘上候處ヲ、三郎上矢ニ打候間、鞍ノ後輪ヲ打闕犬子所ヘ打出候、主膳ウツムキニ成、其身ノ小旗ヲ拔、弟釆女ニサヽセ、我等除候ハヾ必大崩可」申候間、我等ニ成カハリ後殿仕、物別サセ候ヘト申付引除候、〇下略

〔房總治亂記〕天正十八庚寅年正月十九日、正木大膳俄ニ大軍ヲ起シ、萬喜城ヲ攻ントテ夜中ニ兵

ヲ發ス、〇中略仍土岐兵ヲ卒テ出向、〇中略正木不意ヲ討レテ敗軍ス、萬喜勢氣ニ乘テ追カクル處ニ、正木大膳士卒ヲ先ニ立、身後殿シケルガ、大長刀ヲ馬ノ平首ニ引添、一番ニ追來ル土岐ガ兵、五六人忽ニ薙倒シ、人數ヲ引纏、靜ニ引退ケレバ、土岐ガ兵モ長追セズ、

〔長澤聞書〕高麗陣のはなしになり、釜山海を責候時、〇中略黒田殿の內にては、又兵衞〇後藤しつはらひを致し候よし、不殘はなし申候、

〔常山紀談十三〕關ヶ原の軍の前日、伊藤長門守至孝が大藪の陣所に、石田使を以て、とく大垣に入て、一所になられよといひ送りしかば、至孝大垣に行所を、德永左馬助壽昌、市橋下總守正舒、追ひけるに、伊藤金左衞門、紫ほろに蛇の目の紋付たるをかけ、三宅平大夫と唯二騎殿しけるが、十四五騎計追かけたり、伊藤大音あげ、大事の殿よ、勝負なせそと言て引退く、三宅は馬より下立しが、關の聲に駭て、馬は口に付たる下人をふみ倒してかけ出しぬ、步立に成て靜に退くに日は暮たり、かゝる處に、正舒の兵市橋勘左衞門、追ついて詞をかけ、鎗を合せんとせしに、三宅とは昔より親しみ深かりければ、互にその聲を聞知て、夜中誰も知ざる處に、行あひぬるこそ幸なれ、爰にて戰ふとも何の功名か有べき、いざとて立別れけり、

〔武者物語下〕古き侍の物語に曰、攝州大坂の冬陣、蜂須賀阿波守手へ、判彈右衞門夜討の事、扣軍は米田監物、尻狩は播州牢人山田五郎左衞門なり、

〔大友興廢記六〕門司之城を責事

親堅に相隨武士、武宮武藏守親實これら殿後(しつはらい)にて諸勢引取剋、〇下略

〔續武家閑談十一〕一權現樣遠州に御座候時、濱松より乾へ御働の剋、大久保七郎右衞門、同次右衞門、大久保一黨、拙者親乾の引口の時のせり合、跡のしつはらひ仕り、手柄のよし承申候、七郎右衞門は揚羽の蝶の差物、拙者親は白き御幣の差物にて御座候よし、

跡備

〔甲陽軍鑑品第三〕勝千代殿〇武田信玄又重而の御訴訟には、楯なしはそのかみ、新羅三郎〇源義光の御具足、御旗は猶以八幡太郎義家の幡也、太刀刀脇差は、御重代なれば、それは御家督共下さる丶、時分にこそ頂戴仕べきに、來年元服とても、傍に部屋住の躰にては、いかで請取申べきや、馬の儀唯今より乘習て、一兩年の間にいづ方へも御出陣に、おひては、御跡備をくろめ申べき覺悟にて、所望申處に、右の通の御意共、更に相心得申さず候と被仰越候へば、〇下略

〔桜井家日記二〕桂川合戰事
攝州士ノ宗徒ノ剛者ト名ヲ得申タル、池田伊丹ノ一族ノ尾林越後、伊丹勘解由、池田大學等ヲ始メトシテ、荒木和泉、池田周防、荒木志摩守、渡部彌太郎、野村因幡守等、不殘コノ陣ニ見ヘ候、七千餘人ノ勢ト申候、コレモ村重ハ後陣ニ居申候、跡備ハ筒井順慶ニテ候、

〔甲陽軍鑑品第二十八九下〕山本勘介申上る、〇中略一原加賀守、此一頭は九十騎にて御跡備、引のけて遠く立る、

〔甲陽軍鑑末書陣三下武家名目抄所引軍〕陣場前左右ノクツロギ十間二十間三十間迄モ蹴出ト云也、陣場ノ後跡備ノ蹴出也、

〔甲陽軍鑑品第十二四〕永祿四辛酉年に河中島にて合戰、巳刻の末に終、同午の刻に、輝虎後備甘數近江守と申者、千ばかりの人數を謙信流の丸備に作り、少も噪がず、如何にも靜にのくを、いくづされたる越後勢、又直江がこにだ奉行の人數、信玄方のさき衆にうち餘されたる者も、大略此甘數に付、越後の方へのく、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕さて又原隼人は敵の國ふかく御働の時は、一入後備になされ候、子細は、陣取の場處見合事、御家中の諸大將衆にすぐれたり、他國にて山中などに道のまれざる處をも、此隼人見積り、道をふみ分る事、前代より今にいたる迄、武田の家にも此一人なり、さるほどに陣取の

喰止備　總押備　後詰

場所、合戰の場處、山川の案內なき所を原隼人よきと申され候へば、諸人上下大小共に心よく存る也、

〔籾井家日記 七〕池上夜軍事
敵ノ先陣ドモ驚キ、中ノ陣ヲ助力セントスル處へ、谷田右近秀遠、岩成主馬長國ノ三陣時ヲ作リテ喚キ入テ候、後陣ノ殿備ヘ喰付テ候、

〔籾井家日記 五〕丹波家出張攝州表事附攝州青野合戰事
能勢丹波守殿ハ持口ニテ、能瀨右兵衞基多五百餘キニテ向ハレテ候、籾井兵庫助教親、同名小六左衞門業光八百餘キ、大館主膳氏長五百餘キ、是等ハ喰止メノ備ニ被參テ候、

〔籾井家日記 二〕粟田口合戰事
二ノ目ノ粟田口合戰ノ巨細ハ、石山ノ先陣ハ江田兵庫頭行範ニ大館衆、世良田、里見、籠澤ノ衆一所ニ千二百餘キ、段々ニ山ニトリ上リ候、〇中略又其次ニ總押ノ備ニ澤田大和、谷田賴母等八百餘キ備ヘ申候、

〔書言字考節用集 八言辭〕後詰（ウシロツメ）　〔同 九言辭〕後攻（ゴヅメ）

〔梅松論 上〕建武二年十二月卅日、〇中略勢田は正月三日より矢合とぞ聞えし、〇中略去元弘三年御一統の時、北畠亞相禪門准后腹の三の宮を懷き奉て、出羽陸奧兩國の守として管領ありしほどに、五十四郡の軍勢を率して、後詰の爲に不破の關を越てむかふよし聞えけり、

〔新撰長祿寬正記〕長祿四年十月、カクテ義就〇畠山ノ方ヘハ神南山合戰最中ト聞シカバ、義就モ若江ヲ打立、後詰ノ合戰シテ、彼等ヲ引取ベシ、若又皆討死スルモノナラバ、某モ討死シ、三途ノ大河ヲ供ニ越ン物ヲトテ、高安ノ馬場ヘ手勢計ニテ出玉、カヽル處ニ南京ノ大路ヨリ、馬乘一騎掛來ル、何モノゾトアヤシミケレバ、河內守ガ供ニツレタル時宗ノ僧馳來、味方神南山ニ引籠、合戰火

急ニ候得バ、何モ命難助、サリナガラ殿ノ後詰アソバシ候ハヾ、若ヤ皆々引取候ハンヤト、涙ヲナガシ申ケル、サラバ疾イソガントテ、山ノ井ノ里ヨリ、須屋ト平トヲ先ガケトシテ、三百餘騎副雁道ノ峯ヨリヨヂ上リ、火ノ手ヲアゲ相圖ノケブリヲ立ラルヽト云ドモ、神南山ノ味方不殘討死シケレバ、義就モ終ニ不叶西林寺ヘ引入、

〔鎌倉大草紙〕太田左衛門入道下知として、扇谷より勢をつかはし、同〔文明九年〕三月十八日、溝呂木の城を責落す、〔中略〕夫より小澤の城へ押寄攻けれども、城難所にて難落、〔中略〕景春〔長尾〕一味の寶相寺、并吉里宮内左衛門尉以下、小澤の城の後詰のため、横山より打出、當國府中に陣取、

〔甲陽軍鑑〔品第二十六〕〕一武州岩つきの住人大田源五郎、後に大田美濃と云、此者幼少より、犬ずきをする、ある年武州松山の城を取もつ、己が居城は岩つき也、然ば松山にて飼たてたる犬を五十疋岩付にをき、岩付にて飼たてたる犬を五十疋松山にをく、〔中略〕或時岩付の城に美濃守在之刻、松山にて一揆以外にをこり、北條氏康公御出馬たるべしと有しに、岩付へ使者をたてんには、路次ふさがりて、五騎三騎にては叶はじ、十騎とやらば松山に人數すくなし、況や飛脚は叶まじきに、内内隱密にて前之日美濃守留主居の者に、をしへたればこそ、文をかき竹の筒を手一束に切て、此狀を入、口をつゝみ、犬の頸にゆひ付て、十疋はなしければ、片時の間に岩つきへ、其文を犬共持來る、さる間美濃守やがて松山へ後詰をする、一揆共見之、速に岩付へ聞え、うしろづめをえたるは、希代不思議の名人かなと不審をなし、爾來松山に一揆發事なし、是は大田三樂と申者也、

〔相州兵亂記〔四〕〕松山合戰之事

永祿四年九月十日、上杉輝虎ト武田信玄ト河中島ニテ合戰アリ、〔中略〕其比武州岩付ノ住人太田三樂齋入道資正、輝虎ノ下知ニ依テ、小田原方ノ城松山ヲ責取テ、上杉憲勝ヲ籠置テ、若松山ノ城ヲ小田原ヨリ責ラレバ、安房ノ里見ト輝虎ト一味シテ、後詰ヲスベキ由約諾スト聞エケレバ、小

田原ヨリ馬ヲ被ㇾ出、松山ヲ責給フ、

〔甲陽軍鑑品第十七八〕又八日九日路、遠國もろ〳〵の堺目の城には、いかにも堅固なる地を見たて、丈夫に普請を申付、敵とりまくに付ては、我後詰をして、かねて分別の合戰仕らんと申事也、合戰も城をよくもたせねば、後詰はならぬぞ、後詰なければ、合戰はならぬぞ、さあれば合戰と城取は、車の兩輪の軍法なりと、法性院信玄公御物語を承り、是を感じ奉る、

〔蒲生氏鄕記〕關白樣被ㇾ爲ㇾ成ㇾ御意ㇾ候ハ、岩酌ハ名城ト云、又ハ能者共數人楯籠タル城ナリ九州ノカタメト思召、若責アグミタラバ、島津ムツカシク可ㇾ成ト思召ス、〇中略氏鄕人數計ニテハイカヾト思召、羽柴肥前守利長、丹波ノ少將殿、石川伯耆守被ㇾ指加、關白樣大ニ御感有テ、早朝被ㇾ寄ㇾ御馬、後詰シテ可ㇾ被ㇾ爲ㇾ御見物ㇾ旨被ㇾ仰出、明レバ四月〇天正十五年一日之早天ニ押ツメ、氏鄕ハ本道通リ、利長ハ城ノ尾筋被ㇾ責、口麓三構有之ヲ即時蹈破リ、追付々々攻上ル、城中ヨリ鐵炮ダケニナル時分、關白樣數萬騎被ㇾ召連、板原ト云野山へ御動座有テ、金ノフクベノ御馬印ヲ打フラセラレ、鬨ノ聲作カケ作カケ給、

〔房總治亂記〕天正十七己丑年四月、敵兵小勢ノ弊ニ乘テ、城〇萬喜城際ニ押寄タリ、城兵夢ニモ是ヲ知ラズ、夜既ニ明方ニ成テ、敵寄來ルトテ騷動ス、土岐賴春矢倉ニ騰テコレヲ見レバ、細川一ツ隔テ、持楯搔楯ヲツキナラベ、矢炮ヲ飛シテ一旦ニ攻破ラントス、土岐下知シテ、弓鐵炮ヲ放テ防グトイヘドモ、敵ハ目ニ餘ル程ノ大勢、味方ハ小勢ナレバ、防カネテゾ城兵若干討レ、城既ニ危キ所ニ、土岐ガ家人同州矢竹ノ城主淺生主水助、近鄕ノ士民百餘人ヲ集テ、矢竹高野或有久ノ城ト云々兩城ヨリ、五百騎ニテ後詰仕ル、城中ノ人々出テ、先駈ノ者共ノ剛臆ヲ見玉ヘト、名乘カケ名乘カケ、鐘太鼓ヲ鳴シテ、喚叫テ敵ノ後ヲ襲フ、廳南廳北ノ兩勢、是ニ懸テ後詰ノ勢ト相戰、城兵是ニ力ヲ得テ、城戸ヲ開テ切テ出テ、曳聲ヲ上テ攻戰、敵ハ夜中ニ長途ヲ經、殊ニ昨日喰タル儘ニテ、寅ノ剋ヨリ巳ノ

遊軍

下刻マデ、河ヲ越ヘ山ヲコエ、攻上レバ追下シ、追下セバ攻登リケル程ニ、飢疲レ前後ノ敵ニ揉立ヲレ悉ク敗走ス、

〔小松軍記〕利長攻二大聖寺一并長重後卷事

長重ハ昨日〇慶長五年八月二日之軍、家臣ノ諫ニ依テ默止スル事非二本意一、早夜モ明ヌ、敵大聖寺ヲ攻ルト見ヘタリ、山口サゾヤ待ヌラン、後詰セデハ叶マジト、近習少々引具シ、一騎ガケニ乘出シ玉ヘバ、郎從等追々馳付テ、二千餘騎、先後ノ軍々モナク馳行程ニ、小松ヨリ大聖寺迄、五里餘ノ道ヲ、卯中剋ニ出、辰ノ中剋ニ大聖寺ニ著テ、十町許コナタニテ、軍ノ手分ヲ定ラル、

〔謙信記〕天文十七年戊申、景虎十九歲信州表ニ發向セントス、〇中略村上義清ニ命ジテ云、其手勢一與ハ遊軍ト成テ催促ノ下知ヲ待テ可レ爲二加勢一、

〔甲陽軍鑑〕十一上品第三十五一戰をいそぎ度思召候へども、山縣を始、ゆうぐんの八備を、にろねより志田澤の道へおりてをし歸り、ちやうじやの首尾あふ事おそき子細は、八かしらの人數五千あまりなるをもつてかくのごとし、

〔上杉輝虎注進狀〕夜之四過輝虎致二物具一、西條山を卸下リ、淸野ヲ過、赤坂之渡越、御幣川渡河中島へ移、綱島左ニ當、御幣川ヲ右ニナシ、丹波島後ニ當テ、原之町ノ西北に東へ向テ十二備ニ立候、宇佐見定行入道ハ、二千餘ニテ胴勢ノ數、大塚之西ニ遊軍ニテ相備候事、

〔甲陽軍鑑〕十五品第四十二敵を引懸合戰には〇中略

一遊軍いかほども　口傳有

〔松井家日記〕二栗田口合戰事

大將軍御館殿ハ、攝州ノ忍ビノ者ドモ、追々段々ノ注進イタスコトモ急ニ候ヘバ、國中ヘ手合セヲナサレ、萬事ノ御下知ハ、宗長公ニ指南アラレテ、跡ヨリ拳陣ナサレ候ヘトテ、注進ト一度ニ、御

浮備

脇備

手廻衆ニ遊軍衆少々ツレラレ、僅カニ一千餘騎ニテ進發ナサレ、道筋段々下知アリ候、

〔籾井家日記 五〕丹波家出張攝州表事附攝州靑野合戰事

靑野城攻ノ次第ハ、〇中略後詰押ヘノ遊軍備ノ大將ニハ、廣澤中務綱忠殿ニ酒井佐渡重貞加ハラレテ候、軍勢ハ二千五百餘キニテ候、

〔籾井家日記 八〕萩野城落城事

去程ニ今度ハ、江田殿久下赤井モ、城々ヲバ名代守ニシテ、受備ニシテ、面々ハ浮備トナリテ、城ノ後詰ヲ拂ヒノ陣トナリ居ラレテ候、

〔甲陽軍鑑 品第十二 四〕永祿四辛酉年に川中島にて合戰、巳刻の末に終、〇中略此節內藤修理正、原隼人佐、跡部大炊助、此衆脇備、後備の衆にて有つるが、信玄公上意を承て、味方の勢、敵をうつとて、散たる人數をあつめ川向或川中にも備を立、敵の樣子かゝらずしてのくをみ屆候て、今の甘數近江守を追懸、東道四十四里を射打にいたす、

〔甲陽軍鑑 品第二十七 九下〕八月〇天文十六年廿四日辰の剋に、甲州方より合戰を始むる、武田の御さき板垣信形なり、眞田彈正是非共御さきをと申上候得共、晴信公御右の脇備に仰付らるゝ、子細は、眞田智略故、村上被官をあまた殺されて口惜く存じ、合戰の勝負にもかまはず、眞田彈正備を見付、無理に義淸懸て一戰仕候はゞ、眞田をうたせていかゞと、敵の大將、村上殿心をさとり給ふ、晴信公古今にまれなる弓矢とり大將なりと申、

〔家忠日記追加 十六〕慶長五年九月十五日、大神君野上ト關ケ原ノ間ニ御陣ヲ備ヘラル、〇中略福島刑部少輔同姓伯耆守等首級ヲ得テ台覽ニ入ル、井伊兵部少輔直政、下野守忠吉ヲ相伴テ、福島ガ脇備ヲ馳拔ケ、先陣ニ進ントス、

〔松原自休手錄 上〕定テ信長二ノ合戰可有ト、脇備ヲ先ヘクリ出シ、燒捨篝用本篝、サレドモ敵不懸

援兵

加勢

來、

〔甲陽軍鑑末書〕武家名目抄軍陣三下所引右ノ先手戰ヲ始ルニハ右ノ方ニ立地藏旗、諏訪ノ旂二本ヲ以テスル也、中ノ先戰ヲ始ルニハ右ニ立八幡ノ旂、左ニ立地藏ノ旂二本ヲ以テスル也、左ノ先手戰ヲ始ルニハ左ニミユ、諏訪ノ旂、八幡ノ旂二本ヲ以テスルナリ、先手皆戰ヲ始ルニハ左右ニ立、六本共招ヲ以テスル也、右脇備懸ルニハ右ノ次ニ立八幡ノ旂、諏訪ノ旂二本ヲ以テスル也、左脇備懸ルニハ左ノ次ニ立諏訪ノ旂二本ヲ以テスル也、

〔書言字考節用集〕四人倫援兵タスケノヘイ又云加勢

〔家忠日記增補〕四永祿十二年九月、大神君の命を奉て、淸宗盤井原の砦を守る、是に依て松平左近直乘を掛川の城援兵として遣はしめ給ふ、于時大神君御書を直乘に賜、掛川番手之儀、兼日泉州へ申候、御太儀ニ候共、來ル廿日掛川迄可被相移候、境目之事ニ候間、一刻も可被急候、恐々謹言、九月十六日、家康、松平左近殿、

〔常山紀談〕二十大猷院殿〇德川家光の御時、國姓爺日本に援兵を乞ければ、諸長臣を御前に召出され是を捨置れなば、日本の恥なり、援兵をつかはさるべき旨仰られしに、小事たらざる故に、各とかくを申出かねられし處に、稻葉丹後守正勝、援兵の事然るべからざる旨、再三申されければ、色を變じ內に入せ給ひけり、明日又召出され、昨日申せし處思召にかなはざりしが、つく〴〵御思慮有しに申所理なり、援兵に及ぶまじき由仰出されたり、

〔相州兵亂記〕一關東公方之御事

永享八年丙辰、信濃國住人小笠原大膳大夫ト、同國ノ住人村上中務大輔ト確執ノ事有テ合戰ニ及ブ、村上ハ連々關東公方持氏ヘ奉公申ケル間、御。加。勢。ヲ請タテマツルベシトテ、彼ガ家ノ子布施伊豆守入道ヲ鎌倉ヘ指越ヲ樣々申上ケルヲ、明窓和尙御吹擧アリ、色々御取成アリケル程ニ、

則御加勢ツカハサルベキ旨被仰出ケル、

〔應仁記三〕近江越前軍之事

文明三年正月廿三日、近江南郡ノ大將六角高賴蜂起シ、已ニ攻上ラント打立ケレバ、北郡京極方馳向ヒケリ、加勢トシテ細川讃州、同和泉守護河內衆遊佐、大和十市馳向テ合戰シケレバ、六角方利無ウシテ、山內三郎以下輩多以被討ケレバ、高賴以下甲賀山ヘ引籠ル、

〔鎌倉大草紙〕十月(文明九年)長尾景春、同六郎爲景、公方より加勢ありて、荒巻といふ所へ陣取、切所を前に當、待掛けるに、敵陣は引退て歸陣す、

〔江濃記〕野羅田合戰事

朝倉も今度加勢の爲に、いとこの朝倉式部大輔に五百餘騎相添て、淺井郡まで發向しけれども、淺井勝軍なれば、みな〳〵よろこび歸りける、其後北近江の城ども、のこらず淺井が下知にしたがひけり、佐々木義賢やすからぬ事に思ひ、其後も北郡へ兩度迄、人數をいだされけれども、是を聞て朝倉よりも加勢あり、淺井もゆだんなく防ぎければ、每度南郡の兵打負、蒼坂、美濃部、和田、高宮、望月なむど、云者、皆淺井方へうちとられけり、

〔中國治亂記〕其頃(弘治元年)伊豫國河野彈正方ヘ、陶ヨリモ加勢兵船可給トノ使者再三也、元就(毛利)方ヨリ河野通直ヘ使者アリ、大船ヲ一日御借可給、嚴島ヘ渡海イタシテ則船ヲ指戻シ可申、子細ハ軍ニ勝候ヘバ勿論船ハ不入候、唯嚴島ヘ渡海ノ中計借可申ト有シカバ、來島ノ通康河野殿ニ申ケルハ、船ノカリヤウ面白候條、軍ハ元就ノ勝ニ可成、唯元就方ヘ加勢アルベシトス丶メケル間、來島、村上大和守、能島ヲ始テ三百餘艘加勢アリ、

〔常山紀談二十〕正保元年は明の崇禎十七年なり、明朝亂れ、陝西の李自成などいふ者、盜賊の長となり、一揆を起し、北京へ攻入、明の天子も自ら縊れて崩じ給ひけるに、福建の鄭芝龍書簡をさ丶

合力

げて、加勢を乞けるに依て、紀伊大納言頼宣卿、異國より加勢を頼み申事、日本の武威四海にかゞやくとも申べし、諸浪人を集め候ひなんには、數十萬も有べし、それに西國中國の大名小名差加へられ、然るべからん、拙者に總大將仰付られ候はゞ、何事の悦びか是に過ん、異國に攻入、おもふまゝに日本の武勇を見せ申べしと、願ひ奉り給ひけれども、御加勢の事やみければ、兼て仕へ申せし武功の輩しども、淸兵と一軍して、老後の思ひ出にせんと、いさみける人々、殘多き事よといひあひけるとかや、

〔將門記〕玄明等爲彼守維幾朝臣常懷狼戾之心、深含蛇飮之毒、或時隱身欲誅戮、或時出力欲合戰、玄明試聞此由於將門、乃有可被合力之樣、彌成跋扈之猛、悉構合戰之方、內議已訖、集部內之干戈、發堺外之兵類、以天慶二年十一月廿一日、涉於常陸國、國兼備警固相待將門、

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月廿五日乙巳、武衛〇源頼朝御座箱根山之際、行實之弟、智藏房良暹、以前廷尉兼隆之祈禱師、背行實永實等、忽聚惡徒欲奉襲武衛、永實聞此事、告申武衛與兄行實之間、行實計申云、於良暹之武勇者、强雖非可怖、及奉誅之儀者、景親〇大庭等定傳聞之、競馳合力歟、早可令通給、仍召具山案內者實平幷永實等、經箱根通、赴土肥鄕給、

〔花營三代記〕應安二年三月十六日、爲楠木合力、赤松大夫判官入道等差向南方、 十八日、細川右馬助以下爲同合力差向南方、

〔花營三代記〕康曆元年十二月三日、山名讃州下向之、爲豫州中國合戰合力云々、

〔新撰長祿寬正記〕寬正三年、政長ノ方へ上意トシテ、諸大名合力有、河內、紀伊、越中、大和、山城勢ハ申ニ不及、細川讃岐守、同淡路守、山名彈正忠、泉州兩守護、備前ノ守護、攝津ノ守護、安藝ノ小早川、佐々木六角、伊勢ノ國司、同國ノ長野、管領之衆ニ秋庭備中守ヲ始トシテ、四月十日ヨリ彼兩城ヲ攻ラルヽ、サレドモ要害無雙ナレバ、ヒルムケシキモナカリケル、

番手

〔拾芥記〕永正十七年五月三日、細川左京大夫高國自近江國出頭、東山方々陣取之、六角四郎爲合力、舍弟小原幷阿波治部及二萬人出頭云々、

〔別所長治記〕永祿年中、三好修理大夫企惡逆、奉討大樹義輝公、御舍弟義昭公從南都牢々シテ往濃州岐阜、被頼織田信長欲追討三好一族、剋別所ガ館へ可爲合力之由被成御敎書、依之一家會合シテ、孫右衛門ヲ撰出シ、軍勢以三百人令上洛、及京白川ノ戰ニ畿内無隱盡粉骨追拂敵、依之三好ガ殘黨敗北シテ、義昭公御本意ノ後ハ、一番ニ孫右衛門ヲ被召出蒙御感、一家ノ名望也、

〔甲陽軍鑑品第六〕竹千世殿〇德川家康駿州今川義元公に腸し給ひ、藏人元康と元服し給ひ、十五歲にて參州岡崎へ歸城有て、十九歲の五月、義元公の先手として尾州へ發向ある、義元の先陣の人々、大高の城をせめ落し、番手に元康を置給ふ、

〔甲陽軍鑑品第十七〕一遠州あまかたは駿河一騎合之衆番手がはり也、〇中略一三河岡崎へのとりで宮崎は、三州山家三方衆番手がはり也、

〔大友興廢記十六〕新城御取立の事附法印新地の城取の物語幷法印奇特の事
其後朝日岳のこしらへ成就して、柴田に野津の院の侍を付られ、番手に作り込置る、

〔奧羽永慶軍記十五〕佐竹與伊達安積合戰附岩城石川扱事
今度モ相馬境最上境ニ勢ヲ配リ、番手ヲ指置給へバ、旗本ニ備ル人數八百騎ノ外ハナシ、

番勢

〔甲陽軍鑑品第三十七〕信玄公總軍は西三河落城の御番勢に、千五百殘おかれ、家康への手あてありて、殘る一萬三千、山へとりあげ御旗をたてられ候へば、家康早々吉田へ引いれ申され候、

〔甲陽軍鑑品第三十九〕扨又中根平左衛門ふたまたの城、水の手をとられ、降參仕り、城を渡し、濱松へのき候、水の手に付、信玄公御工夫いくつもあり、殊に二俣御番勢に、信州先方侍大將蘆田下總を被差置候、

番備　請手

〔増補筒井家記〕筒井城ヲ攻落サント、和州ノ麾下、逢坂城主岡周防守、古市城主古市左近、菅田備前守、高山主殿頭等ヲ催シ、多門山ニハ、東大寺ノ大衆ニ番勢八百餘人ヲ入置キ、志貴城ニハ、當山ノ大衆ニ龍田野ノ社人等ヲ加ヘ、千餘人ニテ在番セシメ、〇下略

〔粉井家日記七〕丹波勢粉井波多賀須拔懸事
二陣六百五十騎ニテ同ジク進ミ行ク、カヽル處ニ、粉井波多賀須ガ押行候間道ノ先ニ、信長衆古田佐介、安藤七郎等ガ通路ヲサシ塞ギタル、番備ノアリテ候處ヘハタト行逢タリ、

〔甲陽軍鑑九上品第十八〕小幡山城、一入大剛の働をいたし候様子は、三度の合戰に三度ながら一番に鑓を入はじめ、高名をして、四度めには馬を敵中へ乘入、敵と馬上より組ておち、高名を仕り、其身七ケ所手負、馬にも六ケ所手を負せ、高名のしるしを、馬の四のしほ手につけ、信玄公の御前へ參候故、諸手にすぐれたりとの御感狀をば、小幡山城に下さる、

〔甲陽軍鑑九下品第二十八〕山本勘介申上る、〇中略如此人數くみ合て備を定め、勝利の德を物頭の衆によく仰含られ、あひことを覺候へ、みつまきをよくして、甲の前立物をみて、かぶとの前立は、其備ごとにて見しり、一戰あらばむさき働なき樣にと、諸手の諸人上中下共に勝利のうる事、是なりと存るごとくの組合にて、天文十六年十月十九日の午刻、信州海野だいらにをひて、越後長尾景虎と、甲州武田晴信と信州をあらそひはじめて、對陣に合戰あり、

〔奥羽永慶軍記七〕佐竹武威附宇津宮事
義昭〇佐竹是ヲ聞給ヒテ、伊勢壽丸〇宇都宮尚綱子少年ノ身ニシテ、父ノ敵討ントテ骨髓ニ徹シ思フ事コソ哀レナレ、武林ノ家ニ生レ、是ヲ餘所ニ見ル事ヤアラン、イデ〳〵出馬シテ力ヲ合セ、壬生ヲ討ント、弘治三年十二月十五日宇都宮表ニ發向シ給ヒ、一萬八千ノ軍兵三十七手ニ備ヘ、乙面(タトツラ)原富山ニ陣ヲ取、

先手

〔甲陽軍鑑品第十四六〕信玄公の御時、四年以前に、元龜三年壬申極月廿二日に、遠州味方が原にて、敵の大將家康、三十一歲の時、信長衆も佐久間右衞門、平手、林、水野を始、各來て此合戰にあふ、味方が原あしが、りなけれ共、是にさへ馬をいれず候、それは敵にても家康衆よく存ずべし、○中略家康かた九手にそなへて、平手ともに十手なるが、家康のうち酒井左衞門丞、手に鑓あはずしてくづる、、其夜は九手ながらにて、鑓のあふに馬上にての鑓を鑓と申べく候哉、是もつて武家に未聞の取沙汰也、

〔甲陽軍鑑品第十四六〕天正三年五月廿一日に合戰ありて、三時ばかりた、かふて、柵の木際へをしつめ、右は馬場美濃、二番眞田源太左衞門、同兵部介、三に土屋右衞門尉、四番に穴山、五番に一條殿、以上五手。左は山縣を始て五手、中は內藤是五手、いづれも馬をば大將と役者と一そなへの中に七八人のり、殘りはみな馬あとにひかせ、おりたつて鑓をとつて一そなへにか、る、

〔奧羽永慶軍記十五〕會津摺上坂合戰同落城事

盛重○會津平四郎怒テ、直ニ勝負ヲ決セント進マレケルガ、今ハ遙ニ隔テラレ、味方ノ足並アシク、大將モ危ク見得シ所ニ、橫田左兵衞○中略眞先ニスヽミ相戰ヒ、三十餘騎討死ス、此間ニ會津ノ旗本本陣ニ退キ、五手ニ備ヘヲ立替タリ、

〔鎌倉大草紙〕應仁文明の頃、政知は伊豆の堀越に居住あり、成氏は下總の古河城にあり、兩御所にて候、兩上杉は堀越の味方にて成氏と合戰、武州總州の成氏の味方之者ども、文明三年三月、箱根山を打越、伊豆の三島へ發向して、政知をせめんとす、政知は小勢にて、駿河より加勢を請、三島へ人數を出し防戰ける、政知之軍無利して、已敗軍に及ける處に、上杉の被官矢野安藝入道政知に加勢して、新手にて馳來ければ、成氏方の先手小山結城の兵一戰に打負、山を越敗軍す、此間に山內顯定、宇佐美藤三郎孝忠に五千餘騎を相添、道に待うけ散々に責ければ、成氏方千葉、小山、結城

先勢

等、殘少なに打なされ、古河へ歸城しける、

〔嘉吉記〕細川勝元ハ山名金吾ガ聟也、兼テ上意ニ任セ可申ノ由ヲ約シケレドモ、罪ナキ金吾ヲ討果スベキニアラズト、二日ノ夜逐電シケリ、一方ノ先手ト賴切タル勝元逐電ノ上ハ、今夜ノ征伐ハ止ニケリ、

〔備前老人物語〕今川義元戰場にて何某とかやを召して、先手の樣體をみて急ぎ罷歸れとのたましに、先手はや戰の半なるにゆき合て、のがれがたくやありけむ、鑓を入れて首一ッ取て歸り、見參に入てかくといひしかば、〇下略

〔末森記〕天正十二年八月、〇中略大將又兵衞目ヲクバリ下知シテ、柵ギワヨリ二町計外ニ堀切アリ、アレマデ立出サヽヘ、一合戰シテ勝負ヲ決セント云所ニ、利家御馬廻阿波加藤八郎、江見藤十郎兩人、村井ヲ見廻ニ行合、〇中略朝日ヨリ金澤マデ四里半ノ道ヲ、一刻ニ兩人馳歸リ、此由一々利家卿ヘ申上ケレバ、又兵衞事我下知ナクシテモ、左樣ノ事仕兼ザル者ニテアリ、然ドモ急ギ後詰セント、不破彥三、多野村三郎四郎、片山内膳、岡島喜三郎、原隱岐、武部助十郎ナドヲ先手ノ大將トシテ、其外宗徒ノ軍士共、急々打立候ヘト觸サセ、其儀カイヲ立サセ、利家卿出サセ給フ、心懸ノ小性馬廻五六十騎御供ニテ、先小原ロト云所マデイソガレケルコソタノモシケレ、

〔板坂卜齋記上〕廿九日〇慶長三年正月先手衆の人數不殘引取打續ての雨に道あしく也、壁土をこねたる如くなる道を諸人通候に、馬の前エタの節迄とゞき候、ゆるき土の中を一足づゝ渡り候、中々目も當られぬ體也、

〔細川兩家記〕一細川兩家の儀、常植御跡目晴國御生害の上は、世上靜謐候はんずるかと諸人申候へば、三好筑前守元長の息三好孫四郎範長と申、同名神五郎政長、波多野備前守相談、天文十年辛丑九月六日に打立て、多田一藏城に鹽川伯耆守たて籠、内儀常植方と申事候哉、取卷數日を送る、

然に伊丹次郎親興、三宅出羽守國村は、細川方と內緣により相談、河內國住人木澤左京亮は當時人數持にて候間、たのみ申さるゝに同心有、先勢は弟の左馬允立られける、是は伊丹の聟也、

〔相州兵亂記〕四河越之夜軍之事

兩上杉長久保ノ後詰ノ爲ニ、北條殿ノ城、武州河越ヲ責落スベシトテ、兩上杉東八ケ國ノ勢ヲ拂テ、八萬餘騎ニテ、同年〇天文十二年九月廿六日發向シ、憲政ハ砂久保ニ旗ヲ立、先勢ヲ以テ河越ノ城ヲ稻麻竹葦ノ如ク取卷タリ、

〔江濃記〕道三最後之事

濃州衆ハ明日ノ軍トテ勢ヲマトメ、稻葉山ニ引取、淺井勢ハ御會寺村ヘ取込テ陣ヲ取、翌日未明ニ先勢ノ者ドモ人數ヲ押出シ、稻葉邊ニテ備ヲ立、敵ノ樣子ヲ見計ヒ可有註進旨、磯村方ヘノ給ヒ被遣ケレバ、〇下略

〔淸正記〕一勢州龜山の城主瀧川內佐治新助籠しを、秀吉公先勢にて取卷攻崩し給ふ時、虎之助先勢の働見て參るべし迚被遣、

一ノ手
二ノ手

〔甲陽軍鑑〕六品第十四總別信玄公の合戰は、働前に、取かけんと思ふ國の繪圖を以而、各侍大將打寄、其國の嶮難の場をさたして、一の手、二の手、横鑓、脇備、後備、小荷駄奉行、所によりてまほる旗、遊軍、押勢など、申事わり候ひて、卒爾にがけなどへころびおつる儀、いづかたにてもさのみ無之、

〔見聞雜錄〕武家名目抄軍陣四ノ一所引然るに武田方二の手に扣へし小宮山內膳、阿部加賀守最前より河原迄押出し候はゞ、大軍の二の手は軍の實、魁一の手は軍の花と、花實に譬へて、武田上杉兩家にては、二の手を二の實とも呼は、信玄謙信弓矢の御吟味委しき故也、

〔奧羽永慶軍記〕七佐竹北條合戰ノ事

氏眞下野ノ國藤岡ニ陣ヲ取、〇中略五月〇天正十三年十五日眞壁ニ向テ、明十六日無二無三ニ佐竹ト一

戰ヲ励ムベシ、然ルニ大道寺ハ十年以來先手ヲ望ミシ上ハ、今更引カヘン事成ガタシ、御邊ハ二ノ手ヲ賴ト宣ヒケレバ、眞壁聞テ畏リ候ト領掌ス、眞壁二ノ手ハ却テ先手ヨリ大事成事ト思ヒ、我陣ニ歸ル、

中ノ手

〔太平記二十九〕將軍上洛事附阿保秋山河原軍事

將軍ト宰相中將殿ハ一萬餘騎ヲ一手ニ幷、大宮ヲ上ニ打通リ、二條ヲ東ヘ法勝寺ノ前ニ打出ント相圖ヲ定テ寄セ給フ、〇中略如案中ノ手大宮ニテ旗ヲ下シテ、直ニ四條川原ヘ懸出タレバ、〇下略

〔太平記二十九〕越後守自石見引返事

宮下野守兼信ハ、始七十騎ニテ中ノ手ニ有ケルガ、後陣ノ軍ニ御方打負ヌト聞テ、何ノ間ニカ落失ケン、唯六騎ニ成ニケリ、

〔太平記三十〕薩埵山合戰事

紀清兩黨七百餘騎ハ大手ニ向テ、北ノ端ニ扣タリ、氏家太宰少貳ハ二百餘騎中ノ手ニ引ヘ、藥師寺入道元可兄弟ガ勢五百餘騎ハ、搦手ニ對シテ、南ノ端ニ扣、兩陣互ニ相待テ、半時計時ヲ移ス處ニ、〇下略

一番手　二番手　三番手

〔玉海〕壽永三年〇元暦元年正月廿日庚戌、卯刻人云、東軍已付勢多、未渡西地、〇中略敵軍已襲來、仍義仲奉弃院、〇後白河周章對戰之間、所相從之軍、僅卅卌騎、依不及敵對、不射一矢落了、欲懸長坂方、更歸爲加勢多手赴東之間、於阿波津野邊被伐取了云々、東軍一番手九郎〇源義經軍兵、カヂ波羅平三云々、

〔籾井家日記七〕池上夜軍事

伏谷美濃守氏信殿、谷田右近秀遠、〇中略等ハ、陣ヲ六ツニ作リテ、三段ニ位ヲトリ候テ、處々ニ伏隱シヲナシテ候、一番手ハ須知、渡部、二番手ハ谷田、岩成、三番手ハ伏谷殿、葦田ニテ候ガ、今ヤ〳〵ト時刻ヲ待ノ處ニ、〇下略

〔一話一言二十七〕高田領淺川百姓騷動　高田御領淺川御陣屋付、八萬石之百姓共、大庄屋幷駒付役之ものへ、取計ひ方にも申分有之候哉にて、凡八千人餘程集り、右役々之もの共之家々打潰し、御居出申候、五拾九軒其外少しこはし候、家數餘程有之趣に、御座候、淺川陣屋へ棚倉より三番手迄罷出、白川よりも壹番、貳番手迄罷越、三番手は領分境迄相詰申候、白川壹番手人數左之通、

壹番手　物頭壹人並先手組召連　橫目壹人　醫師壹人　此外數十人　〆百餘人

貳番手　郡代組足輕並同心　代官並郷方役之もの　醫師貳人　此外　〆百八九拾人

三番手　番頭兩人供士付　物頭兩人組足輕付　長柄奉行兩人　橫目　醫師壹人　馬廻り

三拾五人　鐵砲之者四拾人　長柄之者拾五人　〆三百人餘

總人數〆六百人餘

右之通罷出候處、百姓も鎭り引取申候、滕六事、三番手三拾五人之内へ被申付罷出候へ共、無滞當二月七日歸足大悅仕候、御安慮可被下候、〔中略〕　滕六

二月十四日

〔嘉永明治年間錄十三〕長防追討ノ爲海陸ノ攻口ヲ諸侯ニ配ス〇元治元年拾遺

陸路藝州より岩國、夫より山口へ攻寄候面々、　一番　松平安藝守　板倉周防守　眞田信濃守

阿部主計頭　同應接　松平近江守　三浦備後守　板倉攝津守　本多肥後守　松平備前守　脇坂淡路守

同石州より萩、夫より山口へ攻寄候面々、　一番　松平相模守　松平右近將監　龜井隱岐守

二番　松平參河守　松平出羽守　同應接　有馬遠江守　松平佐渡守　松平主計頭

海陸四國より德山、夫より山口へ攻寄候面々、　一番　松平阿波守　松平隱岐守　二番　松平讃岐守　伊達遠江守　同應接　松平壹岐守　三番　松平美濃守　松平肥前守

諸備

同應接　小笠原佐渡守

海路下ノ關、夫より山口へ攻寄候面々、　一番　細川越中守　小笠原大膳大夫　奥平大膳大夫

小笠原近江守　小笠原幸松丸　小笠原大膳大夫儀は、領分近の儀に付、細川越中守、奥平大膳

大夫よりは先立可ㇾ被ㇾ相向ㇾ候、小笠原近江守、小笠原幸松丸儀は、大膳大夫と一手に可ㇾ相向ㇾ候、

海路より萩、夫より山口へ攻寄候面々、　一番　松平修理大夫　同應接　松平主殿頭　二

番　有馬中務大輔　立花飛驒守

右之通被ㇾ仰出ㇾ候に付、陣中の儀は、萬事尾張前大納言殿御指揮に隨ひ、速に遂ㇾ成功ㇾ候樣被ㇾ仰出ㇾ候、

〔奧羽永慶軍記二十二〕鳥屋ケ崎落城事

最上内膳正此由ヲ見ルヨリ、味方ノ兵士ニ下知シテ曰、〇中略備ヲ亂ス事ナカレト、諸備ノ長ニ云

含ムレバ、物ニ馴タル原田、山家、熊澤、藏增、佐藤、加藤ノ武頭術ヲ盡シ攻ケルニ、流石死狂ヒノ稗貫

勢殘リ少ナニウチナサレ、町構二ノ丸モ破レタリ、

〔里見九代記三〕三略傳書乾卷

義實公常々上下ニ組ヲ定メ、組每ニ長ヲ立給フ、軍ノ時ハ以ㇾ之備ヲ立ル也、安房殿ノ七備ト世間

ニ云傳ルモ子細アリ、御旗本一備、先備一組、衝陣備左右二備、休陣備二組、以上六備、衝陣左備ヨリ

先陣備ニカハレバ休陣又替ル、此外或ハ十騎五十騎百騎ガ黨トテ、或トキハ伏勢トナリ、或トキ

ハ鳥雲ノ陣ヲナシ、自由ニ變化ス、故ニ兩備ト云傳フ、總別備ハ軍場ノ形ニソナヘテ地ノ道也、戰

ハ車ノ如ク替々ニ廻ル、日月星ヲ象ドル天ノ理ナリ

一七字ヲ備ニ取事、人間萬事塞翁馬ト口傳ス、人ト備組時ハ、旗本ハ間ト組、萬ト備バ事ト組、塞ト

備バ翁ト組也、右是ハ別ノ事也、總テハ又馬ノ字ニ組ベシ、唯見樣心持有ㇾ之、

〔川中島五度合戰次第〕就ㇾ御尋ㇾ書上候信州川中島五ケ度合戰之次第

同廿七日〔〇天文二十二年十一月〕景虎より平賀宗助を使にて、明日有無の一戰可致と申遣、備配り定申候て、夜の中より人數を出し申、〔〇中略〕後陣は長尾兵衛尉景盛、北條丹後守長國、齋藤八郎利朝、柿崎和泉守景家、宇佐美駿河守定行、大國修理亮等七手にて、四拾九備一手の樣に組、丸備に作り、廿八日卯の下刻に越後方ゟ一戰を始候、武田方にも十四段に立備、防戰火を散し、敵味方手負死人數を知らす、下米宮橋を追越被追越、未の下刻迄合戰勝負區々也、

〔甲陽軍鑑三品第十一〕すこしきそなへを立て、大人數にはくみあはせよからん大備に組、其陣にて用あるとて、人數をわくれば、其そなへへりたるとて、上下ちからをおとす者也、其所にあたる敵も大にきほふ者也、總じて大備の崩たちたるは、何たる名大將とても、其下の剛の者共も、支配成まじきぞ、

〔甲陽軍鑑十下品第三十二〕一永祿三年申の二月十八日に、信玄公甲府を御立あり、信州上野の境、笛吹峠のこなたに御馬をたてられ候、扨又越後の景虎は、關八州の侍大將衆大小合七十六備、此人數九萬六千、謙信譜代衆一萬七千と合て雜兵共に拾壹萬三千の軍兵を將て、北條氏康の居城國相州へ押詰、

〔甲陽軍鑑十一下品第三十七〕一永祿十三年九月初に、信玄公伊豆にら山へはたらき給ふに、〔〇中略〕氏政〔〇北條〕總手をまとめ、山中の人數をおろし、三島の北に三十町あまりへだて、三萬七八千許の人數を五十備あまりにたてらるゝ、信玄公二萬三千の人數二十一備かはらがいへをしいだし、合戰をもつて、馬場、山縣、小幡、眞田、小山田、内藤、朝比奈駿河守、岡部次郎右衛門、原隼人、其外侍大將、老若共に召つれられ、〔〇下略〕

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕備之事

一くり引の仕樣、口傳有、　一備たゝむ事、口傳有、　一城まきほぐしやうの事　一頭へ五頭也、口

傳有、一組事、口傳、山本勘介、前原筑前、日取破事、口傳有、一結ぶ事、口傳有、〇中略

戰場にて備立同賦の事

一御旗本　一前備　一小荷駄奉行備　一脇備　一後備　一先衆　一二の先衆

〔甲陽軍鑑十九品第五十三〕一謙信公備は先衆七手組、一手に七備づゝ、四十九備也、理儀多し、口傳、

一備を立樣は、八ッ伍よりはじまる、口傳、

〔奥羽永慶軍記二十二〕諸國軍勢爲九戸誅罰入奧州事

蒲生氏郷ハ、九戸ノ先手ナレバ、諸將ニ先達テ、六月中旬〇天正十九年ニ京都ヲ打立、同廿三日ニ會津ニゾ著ニケル、夫ヨリ急ギ軍勢ヲ催サル、相從フ兵ニハ、〇中略同〇中村主馬頭ヲ先トシテ二萬五千餘人、十三段ニ備テ、上方勢ノ下著ヲゾ待レケル、

一番備
二番備

〔籾井家日記二〕桂川合戰事

寄手ノ次第ハ、一番ノ中ノ陣ハ明智日向守、佐々丸毛原不破ガ人數トシテ、國々ノ者ドモ馳加ハリ、八千餘人ト申候、旗モ色々見ヘ申候、明智ガ宗徒ノ明知次郎右衞門、同左馬助、齋藤内藏介、溝尾左兵衞等ハ、一番備ニ居申候、日向守ハ後陣備ニヒカヘ申候、

〔續撰清正記一〕肥後國天草合戰事

天草郡の志岐にての合戰の樣子は、〇中略先軍法を定べしと有て、一番備は敵間少遠く隔て備、相圖を待べし、予が指圖なきうちに、必合戰始べからずと也、此時の一番備の大將は、加藤喜右衞門尉後ニ岡田將監ト云二番の備は、未明に出勢して、敵陣の後へ夜中に忍て押廻し、夜の明るを相圖に鬨音をあぐべし、其時旗本にて、鬨聲を合せ、前後より押挾て討ならば、必周章騷て、左右の谷へ悉崩落べし、其時谷底にて、一人ももらさず討捕と、如此軍法定らる、

位ノ備

〔籾井家日記九〕氷上宗貞合戰事

後陣ニハ赤井次郎左衛門景光、廣澤中務綱忠殿、澁谷雅樂助秀辰殿等ノ名將達、精兵七百餘騎ニテ位ノ備ト云フテ扣ヘラレテ候、

輕備

〔籾井家日記六〕久下城兵出張事

屋形ノ御本備衆ニハ、波多野主水秀隆ヲ大將トシテ、位田次郎左衛門晴隆、○中略佐野權九郎賴村等一陣々々ヅヽ、進マレテ候、總ジテ諸手ノ精兵ヲ輕備ニスグリ立テ、七千餘騎ニテ候、何レモ金鐵ノ勇士ニテ、命ヲ塵芥ニ同ジク、名ヲ末代ノ後記ニ留メント契リタル一騎當千ノ人々ニテ候、

待備

〔甲陽軍鑑末書下三所引武家名目抄軍陣〕敵ニ逢テ戰ントテ裏切ヲ作リ土圍ヲ築、柵ヲツクルハ待備トテ、良將剛將ノセザル事也、

〔籾井家日記七〕丹波勢葦名平林波賀野合戰事

信長衆下石彥右衛門、塚本小大膳○中略等ハ、先ヘ懸ヌケ落合テ、平田ノ邊ニテ、敗軍ノ兵ドモヲ集メ、陣ヲ堅メテ待備ヲ致ス處ヲ追詰テ進ミ、○下略

〔籾井家日記十〕籾井矢繼城明退事

追々ニ志賀高島青龍寺ノ後詰モアルベキニ候、早ク軍勢ヲ取纏ラレヨ、敵モ勇將ドモニテ、軍ヲモ知タル者ニ候、ナドヤ待備ヲセヌハ有ベキ、

相備

〔甲陽軍鑑品第二十七九下〕八月○天文十六年廿四日、辰の刻に甲州方より合戰を始むる、武田の御さき、板垣信形なり、○中略其日の合戰、板垣信形、あひ備かけて、三千五百の人數をもつて一戰をはじめ、村上衆をおつくづし、板垣手勢ばかりをもつて、敵を百五十討とる、

〔大友興廢記十四〕宗麟公日州へ御發向之事

先陣右備田北鎭周、田北一黨の侍二千五百、相備に筑後國星野蒲池、彼是三千、二番備兩田原手勢三千、相備豐前宇佐郡三拾六人衆、其勢千百餘、○下略

〔籾井家日記 七〕丹波勢葦名平林波多野合戰事

其人々ニハ、葦名式部忠興、是氷上御目代ニテ候、此手ニハ堀江六郎景賴、一條次郎光國、〇中略竹路後五郎左衞門等相備ナリ、〇中略餘田、位田、左兵衞尉、中院等ハ塚本小大膳、簗田彥四郎、阪井市橋等ガ陣頭ニ當リ、火焰ヲ吐テ切テ廻レバ、信長衆ノ陣々段々ニ、横ヲ入テ喰合ントスルヲ、葦名式部忠興、位ハ是也トテ、相備衆ヲ亂シテ、無二無三ニ懸込、左右へ當リ、前後ニ拔テ、四角八方へ採付ラレ候ニ、〇下略

〔籾井家日記 八〕氷上宗貞八幡山陣取事

奉行ドモニハ菅平右衞門盛政、畑平兵衞守國、〇中略澁谷後左衞門等、此衆ハ皆備持衆ニテ相陣相備ヲ立ラレテ候也、

〔武家閑談 四〕一大坂へ權現樣御取寄可被成前方ニ、眞田隱岐守信尹〇註略ヲ御使トシテ、眞田左衞門佐方へ仰ツカハサレ候ハ、秀賴ニ合力ノ心ヲヒルガヘシ、味方ニ參リ候ハヾ、信州ニテ一萬石可被下之トノ上意ナリ、左衞門佐承リ、上意ノ趣アリガタク奉存候、然レドモ某關ケ原ノ戰ニ御敵仕、其罪科ニ依テ九度山ニ蟄居仕候テ、山賤ノ體ニ罷在候處ニ、秀賴公ヨリ被召出、相備ノ八千餘ノ大將ト被仰付候處、何ボウカタジケナク存候間、心變リ候義ハ罷成間鋪旨申切ケリ、

外備

〔籾井家日記 六〕信長公信忠公八上秀治氷上宗貞江御對面事

天正七年己卯三月八日、國司屋形秀治公攝津國へ御進發ニテ候、〇中略本備外備ノ總軍勢ハ、二萬餘騎ノ著到ニテ候、

迎備

〔籾井家日記 九〕氷上宗貞合戰事

爰ニ下石彥右衞門、原彥次郎、青地與右衞門、中根刑部、小川土佐、池田孫次郎等ハ、初メニ信高陣頭ニテ、大崩シテ討死セヌヲ、無念ナリトノヽシリテ、今又取テ返シ、迎備セントスハミ、大將ノ陣ニ

入テ、討死セヨト呼ブテ、御本備ヲ目ガケテマイリテ候、

シマリ備

〔籾井家日記 七〕赤井内藤攻落池上砦事

平林右馬助殿、三田肥後守ノ二陣、千五百餘騎ハ御名代トシ、總陣ノシ。マ。リ。備。位ノ備ト云フニナラレ、浮備トシテ、四方八方ノ諸陣ヲ下知シテ、合戰ノ形粧ヲヨク調ヘラレ、首尾ヲ結バレテ候、

〔籾井家日記 八〕氷上宗貞黒井表江出張事附黒井表合戰事

御下知〇宗貞ノ候テ、諸手ノ陣々シマリ備ヲ作リテ、随分追討候ヘ、大後口ニハ、大將家ノ御陣丈夫ニ候ハト仰セノ候ホドニ、四五段ニ分リテ追討候ヘバ、跡ヨリ御陣ヲ進メラレ候ニ、〇下略

寄合備

〔籾井家日記 七〕丹波勢葦名平林波賀野合戰事

爰ニ寄合備衆ハ、葦名、平林、波賀野ヲ陣司トシテ、一千餘騎ヲ三手分候テ、進メテ候、

蒸備

〔籾井家日記 七〕赤井内藤攻落池上砦事

肥後守綱氏ハ、老功ノ弓取ニ候ヘバ、諸陣ヲ懸廻リテ、色々ノ謀ヲ致シ、様々ノ武略ドモヲ當ラレ候、敵勢ノ離レ散ヌ様ニ、又一所ニ取圍ヌ様ニ、敵ノ落口ヲ難所ニ引懸ケ、伏隱シヘ落シ掛テ、大將軍殿ヲ始、宗徒ノ者ドモ、一人モ餘サヌ様ニト、工夫ヲ致サレ、評議ヲ究メ候テ、所々ニ蒸備ヲ作リテ、蒸火蒸聲ニモ色々ノ武略ハ候、

〔籾井家日記 五〕丹波家出張攝州表事附攝州靑野合戰事

廣澤殿ハ、ワキヨリ位ヅメニ、ム。シ。備。ヲ立テカヽラル、酒井佐渡ハ、カル備ヲ作リテ、處々ニ色ヲ立ラルヽホドニ、攝州ゼイドモ、散々ニ亂レ申候、

物見備

〔籾井家日記 一〕攝州靑野合戰事

小林修理ト須知主人兩人ハ、五百餘キニテ、今朝早天ヨリ物見備ナルガ、敵ノ敗軍カヘシカヘシ退ントスルヲ見テ、横ニカヽリテ、又カリ廻シ討ケレバ、敵兵ノ名アル侍、今日ノ戰ニ一人モ漏タ

伏備　赤備

ル者ナク、僅ニ引ノク者ハ雜人捨首ノ者ドモナリ、

〔籾井家日記九〕氷上宗貞合戰事

今度ハ御本備ヲ初トシテ、陣々ヲ輕備ニ作ラレテ、從者ヲ大分ニ減ジラレテ候、備衆ヲモ選ミ備ニシテ、引分ラレテ候、集メ備二千五百餘人ヲバ、野伏備ノ樣ニシテ、外備ニ陣ヲ張ラレテ候、コノ備司衆ニハ、菊池河內守武則、富士名左衞義高、菅平右衞門尉政〇中略等ヲ仰セ付テ、所々ニ扣ヘラレ候、

〔甲陽軍鑑品第五十九二十〕一家康、甲州信濃駿河手に入、萬事仕置有、〇中略井伊兵部備赤備なり、家康仰らるゝは、信玄の內にて、一の家老、弓矢にほまれ有山縣が兄飯富兵部と云侍大將の備、赤備なりと聞、其後淺利、此頃は上野先方、小幡赤備なり、少も餘の色無之、具足指物の事は申に及ばず、鞍鐙馬の鞭迄赤有つると聞、其ごとく井伊兵部備へ仰付らるゝ、但山縣三郎兵衞衆の內に、廣瀨美濃、三科肥前、是兩人は、敵の時より見知たる甲の指物なる故、ゆるすとありて廣瀨は白幌はり、三科は金のわぬけ、家康の御意をもつて、赤備の中に、兩人別色の指物を仕り、井伊兵部に、武田の家老山縣ごとく、弓矢の摸樣なる樣に、申をしへ候へとありて如件、駿河にては三枝ゑいふの組衆十四五騎、信州にては松岡八十騎、是も井伊兵部同心なり、天正十二甲申年に、今天下をもたるゝ羽柴筑前守と、家康、尾州小牧と云所にて合戰にも、井伊兵部をあか鬼と上方侍申也、

〔續武家閑談十二〕一長曾我部は、八幡近處橋本の蘆原に御合戰後、隱れ居申候を、蜂須賀阿波守家來見出し搦候て、伏見御城へ差越申候、〇中略長曾我部申候は、六日の朝合戰には、餘程勝申候樣に存候處に、不存寄左の方より、赤備人數を押向、驅來り申樣に相見え候間、備を二ツに取切られ候はゞ、危く可有之と存候處へ、敵強く働、譜代の者ども六拾人程其場にて討死仕候に付て、備たまらず敗軍仕候由申候得ば、直孝申候は、其赤備は某にて候ひつると御申候、則御前にも被為聞召

候、

〔東遷基業 六〕信州平均附織田信雄江加勢羽黑表合戰の事

信雄は十四日〇天正十二年三月の夜清洲の城にて、神君と軍評定あり、神君仰けるは、小牧山は尾張國の中也、此山を取たるかた軍利あるべし、〇中略 榊原小平太に此むねを下知し給ふ、〇中略 信雄も神君も酒井が跡を逐て、小牧山へ出馬し給ふ、道にてのろし一筋見へければ、彌急ぎ我先にと行列少しみだりなりしが、井伊萬千代直政計赤備三千計にて、押太鼓を打て、いかにもしづ〱と行列正しく押來る、

〔嘉永明治年間錄 十三 上〕會津藩磯野某京師長州藩ノ事件ヲ報ズ

廿一日〇元治元年七月、中略、御所の御固め、十九日より今以て、諸家樣方御人數立派に出立、赤白金抔の陣羽織小袴、夫々皆烏帽子を冠り、赤旗白旗風に飄る有樣、井伊の赤備とか申て、掃部頭樣には、小者に至る迄赤支度、誠に美々敷御座候、

古事類苑

兵事部十

隊伍下

幕末諸隊

新徴組　精鋭隊　遊擊隊　百姓隊　彰義隊　增隊　貫義隊　角力隊　礮隊　奇兵隊

天狗組

一揆

古事類苑

兵事部十

隊伍下

〔運歩色葉集 伊〕一揆キ

〔書言字考節用集 八言辭〕一揆キ（爾雅、揆度也、）

〔孟子 八〕先聖後聖其揆一也（揆度也、其揆一者、言度之而其道無不同也、）

〔後漢書 六十二荀淑傳〕爽〇荀氏 字慈明〇中略 拜郎中、對策陳便宜曰、〇中略 天地六經其旨一揆、宜改尙主之制、以稱乾坤之性、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年〇文治元年 正月六日庚寅、參河守範頼、去年九月二日、出京赴西海、去年十一月十四日飛脚、今日參著、兵粮闕乏之間、軍士不一揆、各戀本國、過半者欲逃歸云云、

〔百練抄 十四四條〕嘉禎元年八月五日乙未、隆承法印爲御使登山、仰合子細之間、衆徒一揆、諸堂開戸、神輿自山上歸座本社云々、

〔倭訓栞 中編二伊〕いつき　世俗に一きが起るといふは、東鑑に一揆と見えたり、揆は齊等也といふ義に据る成べし、

〔軍防令講義 一〕四百人又は四百五十人の團にはたゞ毅一人を置となり、（後世一揆といふことあるも、元はこの一毅と云けんが自然と揆の字になりしならん、）

〔建武以來追加〕諸國狼藉條々（貞和二十二十三沙汰）

一號一揆衆致濫妨事

近年或押領他人之所領、對專使妨遵行、或爲散私宿意、率黨類及合戰云々、造意之企、難遁重科、所詮就守護幷使者注進、須處罪科、但隨事體、可有輕重焉、次使節難澁咎事、可被分召所領五分一也矣、

（太平記 二十五）住吉合戰事

十一月〇貞和三年二十三日ニ軍評定有テ、同二十五日山名伊豆守時氏、細川陸奧守顯氏ヲ兩大將ニテ六千餘騎ヲ住吉天王寺ヘ被差下、顯氏ハ去ヌル九月ノ合戰ニ、楠帶刀左衞門正行ニ打負テ、天下ノ人口ニ落ヌル事、生涯ノ恥辱也ト被思ケレバ、四國ノ兵共ヲ召集テ、今度ノ合戰又如先シテ歸リナバ、萬人ノ嘲哢タルベシ、相構テ面々身命ヲ輕ジテ、以前ノ恥ヲ洗ガルベシト、衆ヲ勇メ氣ヲ勵サレケレバ、坂東坂西藤橘伴ノ者共、五百騎ヅヽ一揆ヲ結ンデ、大旗小旗下濃ノ旗三流立テ三手ニ分ケ、一足モ不引可討死ト、神水ヲ飮テゾ打立ケル、事ノ隨實ニ思切タル體哉ト、先涼ジクゾ見タリケル、

（祇園執行日記）天文元年八月四日、堺ニテ聰明殿法觀寺ト取合レ候テ、アマタ一揆ウタレ候由キコヘ候、七日、山村京ノ上下ノ一揆ヲ引グシテウチマワリシ候、

（陰德太平記 七十二）豐前國宇留津城沒落事

隆景、元長、經言、中國勢二萬五千騎ヲ引率シテ、神田ノ松山ヘ陣ヲ替ラル、〇中略同九日諸軍勢松山ヘ打入ケリ、豐前肥後兩國ノ敵城共ハ、一揆ノ城也トハ雖、士民ニハ非、皆國人共也ケレド、一國ノ大將ナリ、皆各各ニ一城ニ據テ在ケル故、人之ヲ一揆ト稱ス、

（信長公記 三）十月〇元龜元年廿日、〇中略江州に在之大坂門家之者一揆をおこし、尾濃之通路可止行仕候へども、百姓等之儀候間、物之數にて員ならず、木下藤吉郎、丹羽五郎左衞門、在々所々を打廻、一

捘共切捨、大方相靜、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

大旗一捘
小旗一捘

師直モ翌日三日〇貞和四年正月ノ朝、八幡ヲ立テ、六萬餘騎四條ニ著ク、〇中略大旗一捘ノ衆ニハ、河津高橋二人ヲ旗頭トシ、其勢三千餘騎、秋篠ヤ外山ノ峯ニ打上テ、東ノ尾崎ニ扣ヘタリ、〇中略去程ニ正月五日ノ早旦ニ、先四條中納言隆資卿大將トシテ、和泉紀伊國ノ野伏二萬餘人引具シテ、色々ノ旗ヲ手ニ差上、飯盛山ニゾ向ヒ合フ、是ハ大旗小旗兩一捘ヲ麓ヘヲロサデ、楠ヲ四條繩手ヘ寄〇寄一原作守、據一本改サセン爲ノ謀也、如案大旗小旗ノ兩一捘、是ヲ僞リ勢トハ不知、是ゾ寄手ナルラント心得テ、射手ヲ分テ旗ヲ進メテ、坂中マデヲリ下テ、嶮岨ニ待テ戰ント見構フ處ニ、〇中略小旗一捘ノ衆ハ、始ヨリ四條中納言隆資ノ僞テ扣タル見セ勢ニ對シテ、飯盛山ニ打上テ、大手ノ合戰ヲバ徒ニヨソニ直下テ居タリケルガ、楠ガ二陣ノ勢ノ戰ヒ疲テ、麓ニ扣タルヲ見テ、小旗一捘ノ中ヨリ、長崎彥九郎資宗〇中以下勝レタル兵四十八騎、小松原ヨリ懸下リテ、山ヲ後ニ當テ敵ヲ麓ニ直下テ懸合懸合戰フニ、楠ガ二陣千餘騎僅ノ敵ニ被追立、進カネテゾ見ヘタリケル、

〔太平記二十九〕越後守自石見引返事

越後守〇高師泰ハ夢ニモ是ヲ知ズ、片時モ行末ヲ急グ道ナレバ、匹馬ニ鞭ヲ進テ、勢山ヲ打越ヌ、小旗一捘、川津、高橋、陶山兄弟ハ、遙ノ後陣ニ引殿テ、未龍山ノ此方ニ支タリ、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

白旗一捘

師直モ翌日三日〇貞和四年正月ノ朝、八幡ヲ立テ、六萬餘騎四條ニ著ク、〇中略白旗一捘ノ衆ニハ、縣下野守ヲ旗頭トシテ、其勢五千餘騎、飯盛山ニ打上テ、南ノ尾崎ニ扣ヘタリ、〇中略楠ガ騎馬ノ兵五百餘騎ト、縣ガ徒立ノ兵三百餘人ト、喚キ叫テ相戰フニ、田野ヒラケ平ニシテ、馬ノ懸引自在ナレバ、徒立ノ兵、汗馬ニ被懸惱、白旗一捘ノ兵三百餘騎、大略討レニケレバ、縣下野守モ、深手五所マデ被テ、

叶ハジトヤ思ケン、被討殘タル兵ト、師直ノ陣へ引テ去、

〔太平記 三十一〕武藏野合戰事

敵〇新田氏小手差原ニアリト聞ヘケレバ、將軍〇足利氏十萬餘騎ヲ五手ニ分テ、中道ヨリゾ寄ラレケル、〇中略二陣ニハ、白旗一揆二萬餘騎、白葦毛、白瓦毛、白佐目、鴾毛ナル馬ニ乘テ、練貫ノ笠符ニ、白旗ヲ差タリケルガ、敵ニモ白旌有ト聞テ、俄ニ短クゾ切タリケル、〇中略二番ニ脇屋左衛門佐ガ二萬餘騎ト白旗一揆ガ二萬七千餘騎ト、東西ヨリ相懸リニ懸テ、一所ニ颯ト入亂レ、火ヲ散シテ戰フニ、〇中略敵御方ニ討ルヽ者、又五百人ニ及ベリ、〇中略新田兵衛佐ト脇屋左衛門佐トハ、一所ニ成テ、白旗一揆ガ二三萬騎、北ニ分レテ引ケルヲ、是ゾ將軍ニテオハスラン、何クマデモ追攻テ討ントテ、五十餘町迄追懸テ行處ニ、降參ノ者共ガ馬ヨリ下、各對面シテ色代シケル程ニ、是ニ會尺セントテ所々ニテ馬ヲ磬(ヒカ)へ會尺シ給ヒケル間、軍勢ハ皆北ヲ追テ、東西へ隔リヌ、義興ト義治ト、僅ニ三百餘騎ニ成テゾヲハシケル、

〔太平記 三十九〕芳賀兵衛入道軍事

鎌倉殿〇基氏ノ御陣ヲ見渡セバ、東ニハ白旗一揆ノ勢五千餘騎、甲冑ノ光ヲ耀シテ、明殘ル夜ノ星ノ如クニ陣ヲ張ル、

〔鎌倉大草紙〕小山は關東の御下知を背て、剩陳謝の言迄もなし、謀反の最なりとて、鎌倉殿より御退治あるべし、但京都の御加勢を賴不申ば、後難如何有べき由、上杉道合申により、梶原美作守道景御使として、康曆三年辛酉上洛、則白旗一揆御加勢合力を申請て歸國、

〔太平記 三十六〕秀詮兄弟討死事

和田、楠、橋本、福塚五百餘騎拔連テ追懸タリ、〇中略佐々木ガ兼テヨリ憑ケル國人ノ中、白。一。揆。五百餘騎ハ一戰モ不戰、物具太刀刀ヲ取捨テ、河中へ皆飛漬ル、

中白一揆

〔太平記 三十八〕和田楠與箕浦次郎左衛門軍事
守護代箕浦次郎左衛門、伊丹大和守、河原林彈正左衛門、芥河右馬允、中白。一。揆。三百餘騎ハ神崎橋爪ヘ打臨ム、〇中略敵ハヤ入替リタリト覺テ、勝時ヲ作ル聲、淨光寺ノ內ニ聞ヘタリ、是ヲ見テ中白一揆ノ勢三百餘騎ハ國人ナレバ、案內ヲ知テ、何ノ間ニカ落失ケン、一騎モ不殘留、唯守護ノ家人僅五十餘騎、思切タル體ニ見ヘテ、二箇所ニ扣ヘテ居タリケル、

赤旗一揆

〔太平記 二十八〕三角入道謀叛事
森〇小太郎高橋〇九郎左衛門三吉ガ兵百餘人痛手ヲ負、石弓ニ被打、進兼タルヲ見テ、越後守〇師泰三吉討スナ、アレツヾケト被下知ケレバ、山口七郎左衛門、赤。旗。小旗大旗ノ一揆、千餘騎拔連テ懸ル、

赤印一揆

〔太平記 三十一〕武藏野合戰事
一方ノ大將ニハ、新田武藏守義宗五萬餘騎、白旗、中黑頭黑、打輪ノ旗ハ兒玉黨、坂東八平氏、赤。印。一。揆。ヲ五手ニ引分テ、五所ニ陣ヲゾ取タリケル、

赤一揆

〔太平記 三十五〕尾張小河東池田事
サレ共佐々木大夫判官入道、其氣勇健ナル者ナリケレバ、此軍天下ノ勝負ヲ計ルノミニ非ズ、今日打負ナバ、弓矢ノ名ヲ可失トテ、僅ノ勢ヲ數タニ成テハ叶マジトテ、目賀田、楢崎、儀俄、平井、赤。一。揆。ヲ旗頭ニテ、河端ニ傍テ扣ヘタリ、

黃旗一揆

〔太平記 三十二〕神南合戰事
西ノ尾崎ヲバ、赤松律師則祐、子息彌次郎師範、五郎直頼、又五郎範實、肥前權守朝範、幷佐々木佐渡判官入道道譽ガ手者、黃。旗。一。揆。、彼是合テ二千餘騎ニテ堅メタリ、〇中略佐々木ガ黃旗一揆ノ中ヨリ、大鍬形ニ一樣ノ母衣懸タル武者三人、己ガ結タル鹿垣切テ押破リ、日本一ノ大剛ノ者、近江國ノ住人、江見勘解由左衛門尉、箕浦四郎左衛門、馬淵新左衛門、眞前懸テ討死仕ルゾ、〇下略

〔太平記三十四〕二度紀伊國軍事附住吉楠折事

同四月〇延文五年十一日、畠山式部大輔、〇中略佐々木黄旗一揆、都合其勢七千餘騎、重テ紀伊路ヘゾ向ラレケル、

〔太平記三十五〕尾張小河東池田事

黄一揆

青地、馬淵、伊庭入道、黄。一。揆ヲ大將トシテ左手ノ河原ニ陣ヲ取、

〔太平記三十一〕武藏野合戰事

平一揆

敵〇新田氏小手差原ニアリト聞ヘケレバ、將軍〇足利尊氏十萬餘騎ヲ五手ニ分テ、中道ヨリゾ寄ラレケル、先陣ハ平。一。揆三萬餘騎、小手ノ袋、四幅袴、笠符ニ至ルマデ一色ニ皆赤カリケレバ、殊更耀テゾ見ヘタリケル、〇中略先ヅ一番ニ新田左兵衛佐〇義治ガ二萬餘騎ト平一揆ガ三萬餘騎ト懸合テ、追ツ返ツ合ツ分レツ、半時計相戰テ、左右ヘ颯ト引除タレバ、兩方ニ討ルヽ兵八百餘人、疵ヲ被ル者ハ未計ルニ不遑、

〔太平記三十七〕畠山入道道誓謀叛事附楊國忠事

畠山入道道誓舍弟尾張守義深、同式部大輔兄弟三人ハ、其勢五百餘騎ニテ、伊豆國ニ逃下リ、三津金山修禪寺ノ三ノ城ヲ構テ、楯籠リタリト聞ヘケレバ、鎌倉ノ左馬頭基氏先ヅ平一揆ノ勢三百餘騎ヲ被差向、其勢已ニ伊豆府ニ付テ、近邊ノ庄園ニ兵粮ヲ懸、人夫ヲ駈立ケル程ニ、葛山備中守ト、平一揆ト所領ノ事ニ就テ、鬪諍ヲ引出シ、忽ニ軍ヲセントゾヒシメキケル、畠山ガ手ノ者ニ、遊佐、神保、杉原此ヲ聞テ、アハレ弊ニ乘ル處ヤト思ヒケレバ、五百餘騎ヲ三手ニ分テ、三月二十七日ノ夜半ニ、伊豆府ヘ逆寄ニゾ寄セタリケル、葛山ハ平一揆ノ者共、畠山ト成合テ、夜打ニ寄セタリト騒ギ、平一揆ハ葛山ト引合テ、畠山御方ヲ打ントスル物ナリト心得テ、トモニ心ヲ置合ケレバ、矢ノ一ヲモハカ〲シク不射出、寄手三萬騎徒ラニ鎌倉ヲ指テ引退ク、

扇一揆
鈴付一揆

弓一揆
鍬形一揆
母衣一揆

白母衣一揆
黒母衣一揆
鳥毛牛月一揆

〔太平記三十九〕芳賀兵衛入道軍事
鎌倉殿〇基氏ノ御陣ヲ見渡セバ、〇中略西ニハ平一揆ノ勢三千餘騎戟矛勢ヒ冷ジク、陰森タル冬枯ノ林ヲ見ニ不異、〇中略芳賀伊賀守馬ニ打乘テ、母衣ヲ引繕ヒテ申ケルハ、平一揆白旗一揆ハ、兼テ通ズル子細有シカバ、軍ノ勝負ニ付テ、或ハ敵トモナリ、或ハ御方トモ成ベシ、

〔花營三代記〕貞治七年六月廿八日夜、關東事、去十一日於武州平一揆打負合戰引籠川越館之由、使者到來云々、

〔太平記二十九〕將軍上洛事附阿保秋山河原軍事
桃井〇直常ハ東山ヲ後ニアテ、賀茂河ヲ前ニ境テ赤旗一揆扇一揆、鈴付一揆、二千餘騎ヲ三所ニ扣テ、射手ヲバ面ニ進マセ、帖楯二三百帖ツキ並ベテ、敵懸ラバ共ニ懸リ合フテ、廣ミニテ勝負ヲ決ント、靜リ返テ待懸タリ、〇中略斯ル處ニ桃井ガ扇一揆ノ中ヨリ、長七尺計ナル男ノ、ヒゲ黒ニ血眼ナルガ、火威ノ鎧ニ、五枚甲ノ緒ヲ縮、鍬形ノ間ニ紅ノ扇ノ月日出シタルヲ不殘開テ、夕陽ニ耀カシ、〇下略

〔太平記三十一〕武藏野合戰事
一方ニハ新田左兵衛佐義興ヲ大將ニテ、其勢都合二萬餘騎、カタバミ、鷹ノ羽、一文字、十五夜ノ月、弓一揆、引テハ一リモ歸ジト、是モ五手ニ一揆シテ、四方六里ニ扣ヘタリ、一方ニハ脇屋左衛門佐義治ヲ大將ニテ、二萬餘騎、大旗、小旗、下濃ノ旗、鍬形一揆、母衣一揆、是モ五箇所ニ陣ヲ張リ、射手ヲバ左右ニ進マセテ、懸手ハ後ニ扣ヘタリ、

〔大坂軍記下〕一岡山筋は、度々大御所〇德川家康御下知にて合戰不始の處に、天王寺口ゟ合戰始るに、〇中略水野隼人白母衣一揆、青山伯耆守黒母衣一揆、松平越中守鳥毛の半月一揆、関をあげてかゝる、〇下略

鐵砲一揆

〔播州佐用軍記下〕寄手城内へ夜討之事

去程ニ寄手ハ若城ヨリ打出バ、追返サントテ、大手橋ヨリ二町計隔テ、北ノ柵際へ糟屋、竹中、中村、杉原、英積、岸本、長濱甚吉、海津孫八等ガ鐵砲一揆、弓一揆二手ニ備テ出張シ、城兵若打出バ、爰ヨリ出合テ、追返サントト出張ス、

花一揆

〔太平記三十一〕武藏野合戰事

敵小手差原ニアリト聞ヘケレバ、將軍十萬餘騎ヲ五手ニ分テ、中道ヨリゾ寄ラレケル、略○中三陣ニハ、花一揆、命鶴丸ヲ大將トシテ、六千餘騎、萌黃火威、紫絲、卯ノ花ノ妻取タル鎧ニ、薄紅ノ笠符ヲツケ、梅花一枝折テ、甲ノ眞甲ニ差タレバ、四方ノ嵐吹度ニ、鎧ノ袖ヤ匂フラン、略○中三番ニ饗庭ノ命鶴、生年十八歲、容貌當代無雙ノ兒ナルガ、今日花一揆ノ大將ナレバ、殊更花ヲ折テ出立、花一揆六千餘騎ガ眞前ニ懸出タリ、新田武藏守義○宗是ヲ見テ、花一揆ヲ散サン爲ニ、兒玉黨ヲ向ハセ、打輪ノ旗ハ風ヲ含メル物也トテ、兒玉黨七千餘騎ヲ差向ラル、花一揆皆若武者ナレバ、思慮モナク敵ニ懸リテ、一戰戰フトゾ見ヘシ、兒玉黨七千餘騎ニ被揉立、一返モ返サズ、ハツト引、自餘ノ一揆ハ、カクル時ハ一手ニ成テ懸リ、引時ハ左右へ颯ト別レテ、荒手ヲ入替サスレバコソ、後陣ハ騷ガデ懸違タレ、

桔梗一揆

〔太平記三十四〕龍泉寺軍事

或時土岐桔梗一揆ノ中ニ、些ナマ才覺アリケル老武者、龍山ノ城ヲツクヾヽト守リ居タリケルガ、其衆中ニ語テ云ク、略○中此一揆計向テ、龍泉ヲ責落シ、天下ノ稱歎ニ備ント云ケレバ、桔梗一揆ノ衆五百餘騎、皆可然トゾ同ジケル、サラバ軈テ打立トテ、閏四月廿九日ノ曉、桔梗一揆五百餘騎、忍ヤカニ津々山ヨリ下テ、マダ篠目ノ明ハテヌ霧ノ紛レニ、龍泉ノ一ノ木戶口ニ推寄、同音ニ時ヲドツト作ル、

〔太平記三十二〕山名右衞門佐爲敵事附武藏將監自害事

宮方手合ノ軍ニ打勝テ、氣ヲ揚ゲ勇ニ乘テ、東ノ方ヲ見タレバ、土岐ノ桔梗一揆、水色ノ旗ヲ差上、大鍬形ヲ夕陽ニ耀シ、魚鱗ニ連リテ、六七百騎ガ程扣ヘタリ、〇中略美濃勢ニハ土岐七郎ヲ始トシテ、桔梗一揆ノ衆九十七騎マデ討レヌ、

〔太平記三十三〕京軍事

中ニモ桃井播磨守ガ兵共、半過テ疵ヲ被リケレバ、惡手ヲ替テ相助ケン爲ニ、東寺ヘ引返シケル程ニ、土岐ノ桔梗一揆、百餘騎ニ被攻立、返シ合ル者ハ切テ落サレ、城ヘ引籠ル者ハ、城戸逆木ニセカレ不入得、〇中略氏範〇赤松、唯一騎返合々々、馳並々々切ケルニ、〇中略サシモ勇メル桔梗一揆、叶ハジトヤ思ケン、七條河原ヘ引退テ、其日ノ軍ハ留リケリ、〇中略斯處ニ土岐桔梗一揆五百餘騎ニテ、惡手ニ替ラント進ケルヲ見テ、敵モ惡手ヲヤ憑ケン、搔楯ノ陰ヲバツト捨、半町計ゾ引タリケル、敵ニ息ヲ繼セバ、又立直ス事モコソアレトテ、佐々木ト土岐ト、搔楯ノ內ヘ入テ、敵ノ陣ニ入替ラントシケルガ、廻ル程モ猶遲クヤ覺ヘケン、佐々木ガ旗差堀次郎、竿ナガラ旗ヲ內ヘ投入テ、己ガ身ハ續テ搔楯ヲ上リ越テゾ入タリケル、其後相摸守〇細河清氏ト桔梗一揆ト左右ヨリ回テ搔楯ノ中ヘ入、南ニ楯ヲ突雙テ、三千餘騎ヲ一所ニ集メ、向城ノ如クニテ踞セタレバ、東寺ニ籠ル敵軍ノ勢氣ヲ屈シ、勢ヲ呑ンデ、城戸ヨリ外ヘ出ザリケリ、

三吉一揆

〔太平記二十八〕三角入道謀叛事

或時寄手ノ、三吉一揆ノ中ニ、日來ヨリ手柄ヲ顯シタル兵共三四人寄合テ評定シケルハ、〇下略

河津一揆
高橋一揆

〔太平記二十九〕越後守自石見引返事

備中ノ合戰ニハ越後守師泰念ナク打勝ヌ、是ヨリ幡磨マデハ、道ノホド異ナル事アラジト思處ニ、美作國ノ住人、芳賀角田ノ者共、相集テ七百餘騎、杉坂ノ道ヲ切塞テ、越後守ヲ打留ントス、唯今

備中ノ軍ニ打勝テ勢ヒ天地ヲ凌グ、河津高橋ガ兩一揆一矢ヲモ射サセズ、拔ツレテ懸リケル程ニ、敵一タマリモタマラズ、谷底ヘマクリ落テ、大略皆討レニケリ、

鹿角一揆

〔太平記二十九〕師直以下被誅事附仁義血氣勇者事

同二十六日〔觀應二年二月〕ニ、將軍〔足利尊氏〕已ニ御合體ニテ上洛シ給ヘバ、執事兄弟〔師直師泰〕モ同遁世者ニ打紛テ無常ノ岐ニ策ヲウツ、〔中略〕將軍ニ離レ奉テハ、道ニテモ何ナル事カアランズラント危テ、少シモサガラズ、馬ヲ早メテ打ケルヲ、上杉畠山ノ兵共、兼テ儀シタル事ナレバ、路ノ兩方ニ百騎二百騎五十騎三十騎處々ニ扣ヘテ待ケル者共、スハヤ執事ヨト見テケレバ、將軍ト執事トノアハイヲ、次第ニ隔ント、鹿角一揆七十餘騎、曾尺色代モナク、馬ヲ中ヘ打コミ打コミシケル程ニ、心ナラズ押隔ラレテ、武庫川ノ邊ヲ過ケル時ハ、將軍ト執事トノアハヒ、河ヲ隔山ヲ阻テ、五十町計ニ成ニケリ、

御所一揆

〔太平記三十一〕武藏野合戰事

敵小手差原ニアリト聞ヘケレバ、將軍〔足利尊氏〕十萬餘騎ヲ五手ニ分テ、中道ヨリゾ寄ラレケル、〔中略〕四陣ハ御所一揆トテ三萬餘騎二引兩ノ旌ノ下ニ、將軍ヲ守護シ奉テ、御内ノ長者國大名閑ニ馬ヲ扣ヘタリ、

桐一揆

〔太平記三十五〕尾張小河東池田事

仁木京兆〔義長〕ノ憑タル桐一揆ヲ始トシテ、宗徒ノ勇士五百餘騎ニ、伊賀ノ服部河合ノ一揆馳加テ、廻天ノ勢ヲ振フ、

蝿拂一揆

〔太平記三十五〕尾張小河東池田事

佐々木大夫判官入道ニ、吉田、黑田、二部、鈴村、大原、馬杉ヲ始トシテ、宗徒ノ兵ヲ馬回ニ扣ヘサセテ、敵ノ眞中ヲ破ント扣ヘタリ、尫弱ノ勢ガサヲ見テ、大勢ノ敵ナドカ勇マデアルベキ、三手ノ小勢

ヲ見ルニ、中ナル四目結ノ大旗ハ、大將佐々木ト見ルゾ、打取テ勳功ニ預レヤト呼テ、長野ガ蠅拂（ハイハラヒ）一揆、一陣ニ進テ懸出タリ、

輪寶一揆　日一揆

〔鎌倉大草紙〕跡部駿河、同上野は本主の信長〇武田氏を背き、輪寶一揆の衆をかたらひ、日一揆の衆を亡し、信長を追出し、主の知行を押領しけるが、牢人の道成を招き入、名を主水と名付ながら、狂言者のてつしをもてあつかふごとく、心のまゝにしてありしかども、天罰にて終に子孫まで亡び果ける、

〔甲斐國志〕四十七古蹟一日出壘迹三ノ藏村〇巨麻郡 日ノ城ト云處ニ在リ、〇中略當城卽チ日一揆ノ叢宅スル處ナリ、旗文ニ日輪ヲ繪テ一黨ノ標トセシ故ニ此號シテ、日ノ出ノ城トモ、日ノ城トモ呼ベリ、

六方一揆

〔建內記〕文安四年九月七日丙申、其後重藝送興福寺六方衆事書、寫左、　加押紙案文加文書了

興福寺六方衆徒群議偁

夫春日社被造替之時、當時每度、任舊例致施行者佳例也、〇中略爰今度東大寺背舊儀令遁避棟別錢、〇中略剩對當寺及違害之企、剪拂當寺管領之竹木、結構用害、入置勇士、責取當寺公人等之財產之條、先代未聞之惡行也、寺門條々失面目者也、所詮滿寺不開愁眉者、御造替成立不可得次第也、然間縱被成下綸旨等、縱以嚴密之御使雖有被仰下候子細、於此題目者、六方一揆評定之旨、曾以不可有改變、仍被任施行於當寺之進止、於彼寺之申狀者、一向被棄捐之者、殊可爲天下泰平之洪基之旨、群議如斯、

文安四年九月日

本一揆

〔今川記〕二かくて關東の大名小名初めは京都よりの御下知と思ひ、禪秀〇上杉氏憲に一味しけるが、氏憲の造意勿論なるよし聞て、皆持氏公へ降參申ける、然共上總國本一揆の族皆背申せしかば、木戶內匠助大將として是を退治し給ふ、

上州一揆
武州一揆
武州本一揆

〔喜連川判鑑〕應永二十六年五月六日本一揆ノ大將榛谷小太郎重氏降參ス、木戸相伴テ鎌倉へ歸ル、榛谷ヲバ由比ノ濱ニテ誅セラル、

〔永享記〕公方管領不和の事

去程に村上加勢として、桃井左衛門督を大將として、上州一揆、武州一揆、那波上總介、高山修理亮等、已に打立よし聞へける、○中略同九年○永享四月、上杉陸奧守憲直を大將として、武州本一揆打立べき由被仰付けるを、如何なる野心の者が申出したりけん、是者信濃へ御加勢に非ず、管領を誅伐せらるべきよし風聞しければ、憲實の被官舊功恩顧の輩、國々より馳集る、

武州北一揆

〔永享記〕村岡合戰事

同七月○永享十二年一日、一色伊豫守、武州北一揆を相語ひ、利根川を馳越て、武州の一騎須賀土佐入道が宿城へ押寄、悉く燒拂、須賀が郎等共暫支て討死すと聞へければ、同三日、憲實性順、長尾景仲、成田の館へ發向す、

武州南一揆

〔今川記二〕滿隆禪秀○上杉氏憲不日に退治可有由、今川殿へ被仰下、依之關東の諸家へ廻狀を被下、○中略此狀を披見して關東之諸家尤々と同心し、皆持氏方へ與力す、先武藏國には江戶豐島の人々、二階堂下總守を初めとして、南一揆の人々、禪秀退治の爲に、鎌倉へ發向しければ、持仲公を大將として、上杉伊豫守同舍弟五郎、十二月○應永二十三年廿五日入間川に馳向ひ合戰し、散々にかけまけ、伊豫守同五郎鎌倉へ引返せば、禪秀大にいかり、同正月朔日滿隆御發向あり、禪秀御供申、鎌倉を打立、武州世谷と申所にてせめたゝかひて、南一揆江戶豐島等を追散、禪秀大によろこびけり、

常州一揆

〔長倉追罰記〕抑比ハ永享七年乙卯ノ六月下旬ノ事ナルニ、常州佐竹ノ郡、長倉遠江守御追罰トシテ、御所ノ御旗進發シ、岩松右馬頭持國大手ノ大將承リ、八月中旬ニハセムカフ、茂木ノ郷ニ著陣ス、○中略右ハ扇谷殿、江戶、品川、河越、松山、フカヤヲハジメトシテ、武州一揆モ打續、東ハ那須ノ一黨、

紀州一揆

其次海上、油井、大須加、相馬、總州一揆張陣、

〔中村一氏記〕一同年〇天正十一年二月、秀吉ハ江州志津嶽表ニテ柴田ト對陣、其月ニ攝州大坂城ヘ、和泉侍淑仁清寺田又右衞門、松浦安太夫、眞鍋次郎、桑原清輪、以下不殘被召寄、秀吉ヨリ尾藤甚右衞門、戸田民部御使ニテ仰出サレ候ハ、紀州表根來粉川雜賀ノ一揆ドモ御下知ニ隨ハズ、チカゴロ曲事ニヲボシメシ候、サリナガラ四方ノ大敵ドモ御退治ナサレ候テ以後、紀州一揆ドモ御成敗ナサレベク候、若其内大坂邊ヘ一揆ドモ出張仕、狼藉仕候ヘバ、イカヾニ思召ル丶ニツキ、ヲサヘトシテ泉州岸和田ニ中村式部被爲聞候ハン條、其意ヲ得ラルベク候、〇中略

一紀州一揆ドモ右ノ旨承リ、根來雜賀申合セ、泉州表ヘ出張ツカマツリ、中村、澤、田中、積善寺、千石堀、五ケ所ニ附城ツカマツリ、岸和田ト何モ五十町バカリヘダテ、日々ノカケ合御座候、一揆大將ハ根來杉坊、赤井坊、粉川御池坊、雜賀、中村、木本、的場、横庄司、鶴皆一味ニテ打出申候、其年中ハ三國切腹親方々ニテノ取合、式部人數骨ヲリ申候、

和州五條一揆

〔日本錦〕〔維新史料所收〕覺

元中山侍從〇忠光去ル五月〇文久三年出發、官位トモ返上、祖父以下義絕、當時庶人ノ身分ニ候處、和州五條ノ一揆中山中將、或ハ中山侍從ト名乘、無謀ノ所業有之由ニ候得共、勅諚ノ旨相唱候故ニ、致斟酌候モノモ有之哉ニ相聞候、當時稱官名候ハ全ク僞名、且不憚朝權、唱勅諚候段、國家ノ亂賊ニテ、朝廷ヨリ被仰付候モノニハ一切無之候間、早々打取鎭靜可有之、討手ノ面々ヘ不洩樣可被申達候事、

右之通從京都被仰出候間、此段面々ヘ可被相觸候、

九月　右有馬遠江守殿御渡

侍一揆　土一揆

〔甲陽軍鑑末書〕〔武家名目抄稱呼八下所引〕侍一揆ニハ先無事ヲナシ、引退テ禮ヲ盡スベシ、百姓一揆ニハ推ツメテ食ヲ斷、後和ヲ入ベシ、

〔看聞日記〕永享五年四月八日、抑自去比炭山與相論事未落居之間、地下鄕民等柴苅ニ此間山ヘ不

入、仍今日地下人炭山へ押寄云々、〇中略所詮地下張本人可被召進之由承、〇中略土一揆所行之間、誰を張本とも難申、珍事々々、

〔建內記〕嘉吉元年九月六日庚子、今夜時聲響河東、終夜物忩、言語道斷事也、土一揆楯籠洛中洛外堂舍佛閣、不被行德政者、可燒拂之由訴訟之、〇下略

〔師鄉記〕康正二年九月十九日丙戌、坂本土一揆號馬借、此間號德政、閉籠八王子社頭、仍被催山門使節幷山徒等、被對治之間、今日發向、取籠土一揆等、欲討之間、放火社頭云々、

〔宣胤卿記〕文明十二年九月十一日戊子、自葉室有狀、先日爲德政土一揆出張之間、追却之處、今朝又蜂起、御出之間、通路不可叶、明日番第二所役事可存知云々、下邊物忩、言語道斷事也、入夜時聲聞耳、取陣於東寺云々、十二日己丑、夜下邊放火發時聲、土一揆亂入以外云々、十五日壬辰、土一揆內野邊充滿、三條坊門東洞院放火、聊燒失、〇中略入夜上邊土一揆物忩無極、一條高倉邊放火、酒屋土藏懸兵粮、伏見殿右府許等懸取酒肴料云々、希代事也、十九日丙申、世間物忩未休、土一揆下亭小家等來、懸兵粮云々、

〔長興宿禰記〕文明十二年九月十六日癸巳、今日洛中上下騷動、近日邊土土一揆、德政張行、東寺其外所々集會、〇中略去十四日、於五條油小路、土一揆與所司代浦上群勢合戰、土一揆放火五條堀川ヲ下リ道場、〇下略

〔親長卿記〕文明十六年十一月四日、下京邊土一揆出現物忩、五日、土一揆蜂起、被仰細川九郎可宛支云々、已指遣軍勢畢、六日、土一揆東寺取陣、九郎勢六角堂因幡堂等取陣、已及合戰、及晚土一揆大將金崎被打取、其外餘黨七八輩被打取畢、各殘黨退散、天氣大慶也、

〔長興宿禰記〕文明十八年八月廿五日丁酉、今夜洛中物忩、下京在家人運雜物、土一揆蜂起、號德政、東寺邊集會、方々亂妨之間令騷動、土御門烏丸在家少々燒亡、亂妨人所行云々、後聞自室町殿被仰付

細川京兆被官人等可禁制之由、有沙汰之間靜謐云々、近年每年當折節令蜂起、曲事也、

〔親長卿記〕明應二年十一月十六日、今日聞、土一揆爲德政閉籠日吉社、自山門衆徒等發向、大宮社以下灰燼云々、籠入者也、　十八日、或仁云、十禪師幷二宮、同小社許炎上云々、志賀郡之土民稱土一揆自山門發向、悉燒拂、志賀八幡同炎上云々、穴太同發向、燒上云々、

〔嚴助往年記下〕同月〇天文十五年十一月日、御法之德政制札被懸之、十月晦日云々、土一揆禁中江參致訴訟、先代未聞珍事有之、仍自武家其外所々、御警固武者被進之、從當門跡一夜被進之也、不可思儀子細共有之、是十月末之事也、　同月日、依德政事北村地下人三人打之、仍自門跡被催方々、以一揆而一味之儀被責之、大篇之儀有之、

〔甲陽軍鑑末書武家名目抄所引八下〕御分國諸百姓一揆ヲ起サヾル爲ニ、新衆ヲ用ラルヽ也、

〔上杉輝虎注進狀〕一輝虎小荷駄奉行中條兵次郎は、信玄方致敗軍被追餘候處、地之百姓一揆共、物取ニ出候而、其荷物ヲ奪取候故、中條兵次郎散々合戰仕候ヲ見、信玄人數ヲ推返合戰ヲ始、味方餘討死候得ば、中條切拂堅固ニ罷除候事、

〔紀州一揆覺書〕紀州打潰一揆騷動之事、同僚岡了允心易仁之方へ手簡差越候、書面に委細申越候趣左之通、〇中略

其御地へも相知れ、最早御承知も被成候哉、此度紀州御國表百姓一揆起り、至て騷々敷儀有之候、去月廿九日より當月四日まで、若山御城下近邊海士郡名草郡之百姓水論より事起り、御城下まで騷々敷、其内打こわし有之候處、漸當月四日に靜謐に相成候由、然る處亦々當月八日より紀之水上高山近邊橋本より二里上、紀和の國境待乳山麓より下若山まで十三里の處、百姓一度致し、其勢三萬、亦十二萬も有之候とも申、〇中略　先右樣子內密に御噂申上候、以上、

未〇文政六年六月十九日

黨

〔伊呂波字類抄太人倫〕黨

〔大日本史兵志二〕自二王政衰一而諸國武士爭占二莊園一其有二土地一大者曰二大名一曰二高家一小者曰二小名一曰二黨一皆養二其子弟僕隷一爲二私兵一謂二之家子郎黨一或謂二家人一

〔倭訓栞前編十四多〕たう　口語にたう結ぶなどいふは黨也、丹黨は丹治比眞人也、中村、安陪、勅使河原、小島、青木等の類多し、私黨は私部也、開化帝の胤、私市、川原、久下等多し、此外東黨西黨は紀清也、此を添て七黨といふ、横山黨は又猪俣黨ともいふ、小野朝臣也、荻野、岡部、海老名、野內等多し、兒玉黨は本藤原也、中比より平氏を稱せし者多し、本庄倉賀野若兒玉等の族類多し、

〔源平盛衰記十九〕兵衛佐催家人事

去程ニ北條ヲ召テ、平家追討ノ院宣ヲ給リタレドモ、折節無勢也、イカヾスベキト宣ヘバ、時政悅申ケルハ、東八箇國ニハ、黨モ高家モ、大名小名、君ノ御家人ナラヌ者ハ候ハズ、

〔源平盛衰記三十七〕平家開二城戶口一并源平侍合戰事

黨ニハ、小澤、横山、兒玉黨、猪俣、野與、山口ノ者共、我モ〳〵ト白旗サヽセテ、十騎、廿騎、百騎、二百騎、入替入替、劣ジ負ジト戰ケレ共、西國第一ノ城〇一谷ナレバ、可レ落樣コソナカリケレ、

〔太平記八〕摩耶合戰事附酒部瀨河合戰事

寄手〇北條氏勢少シ射シラマカサレテ、互ニ人ヲ楯ニ成テ、其陰ニカクレント色メキケル氣色ヲ見テ、赤松入道子息信濃守範資、筑前守貞範、佐用、上月、小寺、頓宮ノ一黨五百餘人鋒ヲ雙テ大山ノ崩ガ如ク、二ノ尾ヨリ打テ出タリケル間、寄手跡ヨリ引立テ、返セト云ケレ共、耳ニモ不二聞入一我先ニト引ケリ、

四月三日合戰事附妻鹿孫三郎勇力事

四月〇元弘三年三日ノ卯刻ニ、又京ヘ押寄セタリ、其一方ニハ殿法印良忠、中院定平ヲ兩大將トシテ、

伊東、松田、頓宮、富田判官ガ一黨幷眞木、葛葉ノ溢レ者共ヲ加ヘテ其勢都合三千餘騎、伏見木幡ニ火ヲ懸テ鳥羽竹田ヨリ推寄スル、又一方ニハ赤松入道圓心ヲ始トシテ、宇野、柏原、佐用、眞島、得平、衣笠、菅家ノ一黨、都合其勢三千五百餘騎、河島桂ノ里ニ火ヲ懸テ、西ノ七條ヨリゾ寄タリケル、

十六騎黨

〔太平記十四〕箱根竹下合戰事

義貞〇新田ノ兵ノ中ニ、杉原下總守、高田薩摩守義遠、葦堀七郎、藤田六郎左衞門、川波新左衞門、藤田三郎左衞門、同四郎左衞門、栗生左衞門、篠塚伊賀守、難波備前守、河越參河守、長濱六郎左衞門、高山遠江守、園田四郎左衞門、青木五郎左衞門、同七郎左衞門、山上六郎左衞門トテ、黨ヲ結ダル精兵ノ射手十六人アリ、一樣ニ笠符ヲ付テ、進ニモ同ク進ミ、又引時モ共ニ引ケル間、世ノ人此ヲ十六騎ガ黨トゾ申ケル、

百騎黨

〔里見九代記三〕三略傳書乾卷

大永五年ノ亂ニ、百騎ガ黨舟ノ上ヲ强クハラセ、ソノ内ニ大石ヲ畳テ軍中ヘコミ入ル、大力ナル者ドモ、サテヨキ鎧ヲ着、船ノ上ニ顯ハレ出テ、舟底ヨリ調錬ニテ大石ヲ上レバ、上ナル士聲ヲアゲ、引上ゲ突オトスヤウニ見スレバ、敵ノ船中ヘコカシ入ハテ入レ、舟モ人モ打破レバ、ソノ舟ヨリ軍破レケリ、

武藏七黨

〔書言字考節用集十數量〕武藏七黨(丹治、私市、兒玉、猪股、西野、横山、村山、)

〔武家職號〕武藏七黨　丹治、兒玉、猪股、私市、西野、横山、都築、

〔軍防令講義一〕武藏に七黨の兵士あり、多摩郡は大郡なれば三つに分ち、多西を横山黨といひ、西黨といひ、多東を村山黨といひ、秩父郡を兒玉の黨と云、足立大里等の郡を丹の黨と云、賀美榛澤の郡を猪俣の黨と云、崎玉の郡を野與の黨と云、

〔太平記十四〕節度使下向事

丹黨

左馬頭直義朝臣〈○足利〉不〈レ〉斜喜テ、聽テ鎌倉ヲ打立テ、夜ヲ日ニ繼テ被〈レ〉急ケリ、相隨フ人々ニハ、〈○中略〉坂東ノ八平氏、武藏七黨ヲ始トシテ、其勢二十萬七千餘騎、十一月〈○建武二年〉廿日鎌倉ヲ打立テ、同二十四日三河國矢矧ノ東宿ニ著ニケリ、

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事

二十九日〈○治承四年八月〉ノ早朝、河越又太郎、江戸太郎、畠山庄司次郎等大將軍トシテ、金子、村山、山口黨、兒玉、横山、丹黨、〈○○〉忍、綴黨ヲ始トシテ三千餘騎、衣笠ノ城へ發向ス、追手ハ河越、搦手ハ畠山、二手ニ分テ推寄ツヽ、時ノ音三箇度合テタメラフ處ニ、綴ノ一黨當家ノ軍將三人迄、小坪ノ軍ニ討レテ不〈レ〉安思ケレバ、二百餘騎先陣ニ進テ、木戸口近ク攻寄タリ、

〔武藏七黨系圖〕丹〈丹治氏〉　桑名　中村〈上下〉　古郡〈○郡一本作〈レ〉羽〉　大河原　鹽屋　長田　岡田　坂田
大窪　栗毛　薄　横瀝　彌郡〈○郡一本作〈二〉那郡〈一〉又部〉　織〈○織一本作〈二〉淵又紙〈一〉〉　原　横瀬　秩父　勅使河原　新里
安保　瀧瀬　長濱　青木　榛澤　小島　志水　栢原　高麗　加治　桐〈○桐一本作〈レ〉相〉原　肥塚
判乃　白鳥　岩田　韮山　山田　竹内〈○内一本作〈レ〉淵〉　小鹿野　黒谷　堀口〈○口一本作〈レ〉田〉　南荒居　由
良藤　矢淵　野上　井戸　葉〈○葉一本作〈レ〉若〉　栗〈右丹黨之紋、丸ノ中寫〈二〉丹ノ字〈一〉或窓月、〉

〔太平記三十一〕新田起〈二〉義兵〈一〉事

新田武藏守義宗、左兵衛佐義治、閏二月〈○文和元年〉八日、先手勢八百餘騎ニテ、西上野ニ打出ヲル、是ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル、當家他門ノ人々、〈○中略〉丹〈○○〉ノ黨ニハ、安保信濃守、子息修理亮、舍弟六郎左衛門、加治豊後守、同丹内左衛門、勅使河原丹七郎、〈○中略〉都合其勢十萬餘騎、所々ニ火ヲ懸テ、武藏國へ打越ル、

〔今川記二〕去程に禪秀〈○上杉氏憲〉方の郎等共兵具を俵に入、粮米の如く馬に付、人に負せて忍び〳〵に鎌倉に入來る、滿隆の御内書と禪秀の廻状を關東中へ觸まはる、意趣は京都樣よりの御下知

にて持氏公并憲基杉〇上等を討伐し、改道をたゞすべきの趣なり、御請申人々には、禪秀が聟新田城主岩松治部大輔、同相聟千葉新介兼胤、澁川左馬助、武州には丹黨のものども、〇下略

〔關八州古戰錄八〕那須七黨沙汰附降參峯黑羽城等軍事

下野國那須家ニ於テ、黨ノ七騎ト稱スル旗下アリ、〇中略其中ニ大關太田原ハ元同姓ニシテ、武藏七黨ノ一員、丹治黨ノ餘流ナリ、宣化天皇ノ王子殖葉王ノ苗裔、正三位中納言丹比縣守ノ六世家義、醍醐天皇ノ朝、和州澁田庄ヲ賜フ、其嫡孫武延、始テ關東ヘ下リ、武藏國加地郷ニ居住ス、是ヨリ丹黨起レリ、

篠黨

〔源平盛衰記十七〕大場早馬事

同廿六日、〇治承四年九月武藏國住人江戸太郎重長、河越小太郎重頼ヲ大將トシテ、黨ニハ金子、村山、山口、篠黨、兒玉、横山、野與黨、綴喜等ヲ始トシテ、二千騎餘、相模ノ三浦城ヲ責、三浦〇義明ノ一族絹笠ノ城ニ籠テ、一日一夜戰テ矢種盡テ船ニ乘、安房國へ渡畢、

〔安齋隨筆後編十四〕一私黨と云事、武藏國私市庄と云所あり、ふるきものにはキサイチと假名つきしあり、今はキサイと稱す、熊谷の庄のほとり也、近き頃迄、松平伊豆守殿領所也、當國七黨の内也、又彼庄のほとりの國人の黨をくみたるを私市黨といふ、それを略して、私の字を字音によびて私黨とは稱しける也、私市、久下、川原、是を私黨と云、又一說に岡部、人見、この二流を加へて五流を私ノ黨と云也、〇下略

〔源平盛衰記三十七〕景高景時入城并景時秀句事

武藏國住人篠黨ニ、河原太郎高直、同次郎盛直、兄弟二人馳來テ、馬ヨリ飛下、藁下々ヲハキ城戸口ニ責寄テ、今日ノ先陣ト名乘テ、逆茂木ヲ登越々々城内へ入ケルヲ、〇下略

兒玉黨

〔源平盛衰記三十七〕平家開城戸口并源平侍合戰事

信濃國住人村上次郎判官代基國ト名乘テ、一時戰テ出、此等ヲ始トシテ、〇中略兒玉黨、猪俣、野與、山口ノ者共、〇中略入替々々、劣ジ負ジト戰ケレ共、〇下略

〔武藏七黨系圖〕兒玉有道氏改二藤原一　庄　本庄西東　具〇具一本作レ久　下塚　若水　四方田　宮田　蛭河　今居〇居一本作レ君　阿佐美　小中山　鹽谷〇谷一本作レ屋　兒玉　富田　蔦田　長軸　新生　中條　新里　鳴瀨　里岩　岡崎　入西　淺羽　堀籠　長岡　大河原　小見野　粟生田　小代　越生　高坂　平〇平一本作レ早　兒玉　秩父　與島　吉〇吉一本作レ岩田　竹澤　多子　小幡　倉賀野　大類　稻島　狛島　片山　新屋　大淵　島方　眞〇眞一本作レ直下　御名　大濱　奥平　白倉　吉島　山名　島名　小河原　木西

〔承久軍物語二〕上くはう〇後鳥羽たねよしをめされて、たうじかまくら中に、よし時と一味すべきもの、たしかにいかほどあらんとか思ふと御尋ありければ、〇中略こ玉たうに、庄の四郎兵衛と申もの、おなじく御まへに候けるが、〇下略

〔太平記十〕長崎次郎高重最後合戰事

高重〇長崎郎等ニ向テ宣ケルハ、餘リニ人ノ逃ルガ面白サニ、大殿ニ約束シツル事ヲモ忘ヌルゾ、イザサラバ歸參ントテ、主從八騎ノ者共、山内ヨリ引歸シケレバ逃テ行トヤ思ヒケン、兒玉黨五百餘騎キタナシ返セト罵テ、馬ヲ爭テ追懸タリ、

〔太平記三十〕薩埵山合戰事

諸軍勢〇足利直義勢皆一同ニ、アハレ後攻ノ近付ヌ前ニ、薩埵山ヲ被二責落一候ヘカシト云ケレ共、傾ク運ニヤ引レケン、石堂、上杉、曾不二許容一ケレバ、餘リニ身ヲ揉テ、兒玉黨三千餘騎、極メテ險シキ櫻野ヨリ、薩埵山ヘゾ寄タリケル、

〔太平記三十一〕新田起二義兵一事

猪俣黨

新田武藏守義宗、左兵衞佐義治、閏二月(〇文和元年)八日、先手勢八百餘騎ニテ、西上野ニ打出ラル、是ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル、當家他門ノ人々、(〇中略)兒玉黨ニハ淺羽、四方田、庄、櫻井、若兒玉、(〇中略)都合其勢十萬餘騎、所々ニ火ヲ懸テ、武藏國ヘ打越ル、

〔八幡愚童訓上〕文永十一年九月ノ比、異賊(〇蒙古高麗)四百五十艘、大船ニ三萬人乘テ寄來リ、對馬壹岐二島打落シ、筑前國今津ニゾ著ケル、(〇中略)九國馳參ル軍兵誰々ゾ、小貳、大友、紀伊ノ一類、臼木、ヘツキ、松浦黨、菊地、原田、小玉黨以下、神社佛寺司マデ、我モ〳〵ト打立タリ、

〔源平盛衰記三十七〕景高景時入城并景時秀句事

同國(〇武藏)猪服黨ニ藤田三郎大夫行安ツヾキテ、逆母木ヲ登越ントシケルヲ、眞鍋(〇五郎助光)引固テ放矢ニ、同此ニテ討レニケリ、

〔武藏七黨系圖〕猪俣　猪俣　荏原　河勾　太田　人見　甘糟　藤田　山崎　岡部　内島

達沼　男衾　横瀨　野部　木里　尾(〇尾一本作瓦)園　无動寺　友庄　木部

西黨東黨

〔太平記三十一〕新田起義兵事

新田武藏守義宗、左兵衞佐義治、閏二月(〇文和元年)八日、先手勢八百餘騎ニテ、西上野ニ打出ラル、是ヲ聞テ國々ヨリ馳參ケル、當家他門ノ人々、(〇中略)西黨、東黨、熊谷、太田、平山、私市、村山、横山、猪俣黨、都合其勢十萬餘騎、所々ニ火ヲ懸テ、武藏國ヘ打越ル、

〔武藏七黨系圖〕西(〇日奉氏連、直也、)西　長澤(〇澤一本作沼)　上田　小川　稻毛　平山　川口　由木　西宮

由井　中野　田村　立河　泊江　信乃　高橋　清恒　平目　田口　二宮(〇二ノ宮住相模國大住郡二宮村大山)

(日リ西方四風儀アリ)

横山黨

〔長秋記〕天永四年(〇永久元年)三月四日、横山黨依殺害内記太郎、被下追罰宣旨、左府(〇源雅實)仰云、頭辨(〇藤原實)行來仰横山黨廿餘人、常陸、相模、上野、下總、上總、五ヶ國司、可追討進之由、可宣下者、直雖下同辨被辨

猶示可下大辨之由、依事道理、召右大辨下之、如此凶事必所下右辨官也、四月十二日、左府仰云、坂東横山黨可追討之由宣下、而追捕後不申上子細、別催撿非違使請取條、尤不似先例事也者、

〔武藏七黨系圖〕横山氏小野　横山　㯃田　海老名　藍原　平子　野部　荻野〇荻野二字、一本補、　山崎　鳴瀨　古郡　小倉　菅〇菅一本作葛一生　椚谷〇谷一本作屋　由木ユキ　室伏　大串　千與字　伊一〇一本伊作權平　㯃生　古市　田屋〇屋一本作谷　八國府　山口　愛甲　小子　平山　石川　古澤　小野　古庄　中村　大貫オホヌキ　田名　小澤　小俣

〔源平盛衰記二十一〕小坪合戰事
爰ニ畠山、〇重忠横山黨ニ彌太郎ト云者ヲ使ニテ、和田小太郎〇義盛ガ許ヘ云ケルハ、〇下略、

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事
相模入道〇北條高時大ニ驚テ、サラバヤガテ討手ヲ差上セヨトテ、一門他家宗徒人々六十三人迄ゾ被催ケル、〇中略侍大將ニハ、〇中略横山猪俣兩黨、此外武藏、相模、伊豆、駿河、上野、五箇國軍勢都合二十萬七千六百餘騎、九月〇元弘元年廿日鎌倉ヲ立テ、同晦日前陣已ニ美濃尾張兩國ニ著バ、後陣ハ猶未高志二村峠ニ支タリ、

村山黨

〔保元物語二〕白河殿攻落事
常陸國住人中宮三郎、同國住人關次郎、村山黨ニハ山口六郎、仙波七郎、轡ヲ雙テ懸入レバ、三町礫ノ紀平次大夫、大矢新三郎以下防ケルガ、新三郎ハ仙波七郎ニ弓手ノ肩被切、紀平次大夫ハ山口六郎ニ右ノ腕被打落ヲ引返ス、

〔武藏七黨系圖〕村山氏平　村山　大井　宮寺　金子　山口　須黑　横山　久米　仙波　廣屋　荒波多　難波田

〔源平盛衰記三十四〕東國兵馬汰幷佐々木賜生唼附象王太子事

野與黨

梶原源太ハ磨墨ニ優ル馬モヤ有ラント思ヒテ、大名ノ中ヲ廻テ馬共ヲ見ニ、〇中略磨墨ニ倍ル馬ナシ、源太大キニ悦、一重アガリタル所ニ居テ、引廻々々愛シ居タリ、餘ノ嬉サニ人ガ嘆ヨカシ、引出物セント思處ニ、村山黨ノ大將ニ金子十郎家忠、折節爰ヲ通リケリ、

〔源平盛衰記十七〕大場早馬事

同廿六日〇治承四年九月ニ武藏國住人江戸太郎重長、河越小太郎重頼ヲ大將トシテ、〇中略野與黨綴喜等始トシテ二千餘騎、相模ノ三浦城ヲ責、〇下略

〔武藏七黨系圖〕野與平氏

野與　多名　鬼窪北南　白岡　澁江　萱間　道智　多賀谷　大藏

西脇　箕勾　大相撲　利生　栢崎　須久毛　八條　金重　野崎〇崎一本作島　高柳

渡邊黨

〔保元物語一〕上皇三條殿御幸事附官軍勢汰事

兵庫頭源頼政ニ相順兵誰々ゾ、先渡邊黨ニ省播磨次郎、授薩摩兵衛、連源太、與右馬允、競瀧口、丁七唱ヲ始トシテ、二百騎計也、

〔源平盛衰記四〕山門御輿振事

頼政ハ丁七唱ト云者ヲ招テ、子細ヲ含テ大衆ノ中ヘ使者ニ立、唱ハ小櫻ヲ黄ニ返タル鎧ニ、甲ヲ脇挾ミ、弓ヲ平メ、神輿近參寄、敬屈シテ云、是ハ渡邊黨箕田源次〇次原作氏、據二一本改綱ガ末葉ニ、丁七唱ト申者ニテ侍、

〔源平盛衰記十三〕入道信嚴島幷垂跡事

抑入道〇平清盛ノ嚴島ヲ崇給ケル事ハ、鳥羽院御宇、淸盛安藝守タリシ時、以彼國高野ノ大塔造營スベキ由、院宣ヲ賜テ、渡邊黨ニ遠藤六頼賢ニ仰テ六箇年ニ被組立タリケリ、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最後事

アタラ者共討スナ、荒手ノ軍兵入替ヨヤ〳〵ト源三位入道下知シケレバ、渡邊黨ニ省、連、至、覺、授、

松浦黨

與、競、唱、列、配、早、清、進ナンドヲ始トシテ、各一文字、聲々名乘テ三十餘騎、馬ヨリ飛下々々、橋桁渡テ戰ケリ、

〔太平記劍卷〕サテ宗任〇安倍ハ筑紫ヘ被ㇾ流タリケルガ、子孫繁昌シテ今ニアリ、松浦黨トハ是ナリ、

〔藩翰譜十上松浦〕凡そ肥前の國の侍に、上と下との松浦あつて、其種各異なり、先づ上松浦と云ふは、嵯峨天皇の御子源融公の玄孫渡邊源五綱が曾孫、松浦源大夫判官久が末葉なり、久、肥前の國上松浦の守護と成つて、宇野の御厨の執行を兼ね、子孫打續きて唐津、伊万里、有田、山代、久原等の地を領し、皆一字を以て名とす、鎭西の國人の一字を名のる輩は、悉く此後なり、又下松浦と申すをば、平戸松浦とも申すなり、是は陸奥六郡の押領使安倍賴時が男、宗任法師が後胤たり、宗任源賴義朝臣に降て、死罪一等を宥められて、肥前國に流さる、其子孫續いて平戸と云ふ所に住して、下の松浦と申せしなり、これ肥前守鎭信の先祖たりと云々、鎭西の事記したる古記、傳ふる所皆斯くの如し、此説の如くなれば、下松浦は安倍氏にて、上松浦は嵯峨源氏の流なり、されども古記を考ふるに、上松浦の人々多くは一字を名のる源氏あれども、又二字を名のる源氏もあり、下松浦にも一字を名のる源氏あつて、上にも下にも、近頃は安倍氏を見ねば、宗任が後の下松浦の流、如何がなりけん、後には夫れも亦源を名乘りしにや、

〔明月記〕嘉祿二年十月十六日、法眼音信之次云、對馬國與高麗闘諍之由有巷説、〇中略十七日、高麗合戰一定云々、鎭西凶黨等號松浦黨構數十艘兵船、行彼國之別島合戰、滅亡民家、掠取資財、

〔太平記十四〕箱根竹下合戰事

新田義貞宗徒ノ一族二十餘人、千葉宇都宮、大友千代松丸、菊池肥後守武重、松浦黨ヲ始トシテ、國國ノ大名三十餘人、都合其勢七萬餘騎、大手ニテゾ被ㇾ向ケル、

〔梅松論下〕三月〇建武三年三日、〇中略一色禪門、仁木右馬助、兩大將として、九州の輩、松浦黨を先として、

白兒黨

肥後の菊池へ發向す、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附頼政最後事

平家方ヨリ伊勢國住人古市ノ白兒黨トテ、サヽメキテ押寄タリ、宮御方ヨリ渡邊者共、省、授、與、列、競、唱、淸、澄ト名乘合テ散々ニ射、白兒黨ニ先陣ニ進戰ケル內ニ、三人共ニ赤威ノ鎧ニ赤注附タリケル武者、馬ヲ射サセテ川中ヘハネ入ラレテ、浮ヌ沈ヌ流テ宇治ノ網代ニヨル、秋ノ紅葉ノ龍田川ノ浪ニ浮ニ異ナラズ、網代ニ懸テ弓筈ヲ岩ノハザマニユリ立テ、希有ニシテコソアガリケレ、源氏是ヲ見テ、

白兒黨皆火威ノ鎧著テ宇治ノ網代ニ懸ケルカナ

鎌倉黨

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

大場三郎景親ハ武藏相模ノ勢ヲ招キ、相從フ輩舍弟股野五郎景尙、長尾新五、同新六、八木下五郎、澁揚五郎以下、鎌倉黨ハ一人モ不漏、海老名源八、權頭季定、子息ノ荻野五郎季重、同彥太郎、同小太郎、河村三郎能秀、曾我太郎祐信、佐々木五郎義淸、澁谷庄司重國、山內瀧口三郎經俊、同四郎、稻毛三郎、重成、久下ノ權頭直光、子息次郎實光、熊谷次郎直實、岡部六彌太忠澄、淺間三郎、廣瀨太郎、笠間三郎等ヲ始トシテ、宗徒ノ者共三百餘騎、家子郎等相具シテ三千餘騎也、

早川黨

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

八月〇治承四年二十二日ニハ、兵衞佐〇源頼朝北條佐々木ヲ先トシテ、伊豆相模二箇國ノ住人、同意ノ輩三百餘騎ヲ引具シテ、早川尻ニ陣ヲ取、早川黨進出テ、爰ハ軍場ニハ惡ク侍リ、湯本ノ方ヨリ、敵山ヲ越テ後ヲ打圍、中ニ取籠ラレナバユヽシキ大事ナリ、更ニ一人モ難通ト申ケレバ、其ヨリ米嚙石橋ト云所ニ移テ陣ヲ取、

加藤黨

〔源平盛衰記二十〕八牧夜討事

今夜討ノ大將軍ハ北條佐々木歟、土肥土屋歟、加藤ガ黨カ名乘テ、我矢請取テ、名聞ニセヨト呼テ内ヘ入ヌ、

三浦黨

〔源平盛衰記二十一〕大沼遇三浦事

小太郎義盛〇和田大音揚テ、西ノ川ノ耳ニオハヌルハ誰人ゾト問フ音ニ附テ、三浦黨ニ大沼三郎也、佐殿頼朝〇源ノ御方ニ參タリキ、〇中略義盛ハ名乘テ通ラン同心シ給ヘ佐原殿トテ、鎧ノ表帶シヅシヅト結カタメ、甲ノ緒ヲシメ弓取直シテ、鐙ニ募附サセテ、大音アゲテ、是ハ畠山ノ先陣歟、角云ハ三浦黨ニ和田小太郎義盛ト云者也、石橋ノ軍ニ佐殿ノ御方ヘ參ツルガ、軍既ニ散ジヌト聞ケバ、酒匂宿ヨリ歸也、平家ノ方人シテ、留ント思ハヾ留ヨト、高ク呼テゾ打過ル、

〔源平盛衰記三十五〕東使戰木曾事

木曾方ニモ根井次郎行直、進六郎親直等思切テ、大勢ノ中ヘ打入、命ヲ不惜我一人ト戰タリ、小勢懸レバ大勢サト引退、大勢懸レバ小勢サト引退、寄ツ返ツセシ有樣ハ、辻風ノ塵ヲ卷ニゾ似タリケル、其手ヲモ打破テ落行バ、横山黨ニ奥次彌次ト、三浦黨ニ佐原十郎、三浦二郎三百餘騎ニテ、漏スナトテコソ攻戰ケレ、二十五騎ト見シカ共、僅ニ十二騎ニ成ニケリ、

綴黨

〔源平盛衰記二十一〕小坪合戰事

爰ニ武藏國ノ住人綴黨ノ大將ニ、太郎、五郎トテ、兄弟二人アリ、共ニ大力也ケルガ、太郎ハ八十人ガ力アリ、東國無雙ノ相撲ノ上手、四十八ノ取手ニ暗カラズト聞ユ、

金子黨

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事

三浦與一受太刀ニ成ケレバ、不叶ト思テ、カイフッテ逃ケルヲ、金子與一追附テ、三浦與一ヲ懷キ留、脇ニシテ首ヲ切、敵ノ頸ヲ手ニ提ゲ、十郎ヲ肩ニ係テ、陣ノ内ニゾ入ニケル、家忠ガ疵ハ痛手ナレ共、フエ切レザレバ不死ケリ、今日ノ高名金子黨ニゾ極タル、

海老名黨

〔源平盛衰記 二十三〕賴朝鎌倉入勸賞附平家方人罪科事

兵衛佐殿〇源賴朝ハ其ヨリ鎌倉へ歸入テ樣々事行シ給ケリ、〇中略次ニ罪科ノ輩、其沙汰アルベシトテ、〇中略海老名黨ニ荻野五郎末重ハ、石橋軍ノ時、源氏ノ名折ニ、何ニ敵ニ後ヲバ見セ給ゾ、返給ヘ返給ヘト申タリシ者也、裸ニナシ引張テ將參レリ、佐殿ハイカニ末重、石橋ノ合戰ノ時ノ詞バ忘ズヤトテ、門外ニテ切ラレケリ、

佐々木黨

〔江濃記〕雲州佐々木由來有事

昔佐々木四郎高綱宇治川先陣をいたし、忠功人に勝れ、名を天下の人にしらるゝもの也、名遂て身退は天の道とかや心得けむ、出家入道して紀伊國高野山に籠り、をこなひすまして居たりし、〇中略されば其大善根一門に答て、佐々木黨此國を知行する事、むかしより今にたえず、

石黑黨

〔源平盛衰記 二十七〕周武王誅紂王事

越中國ニハ野尻河上石黑黨、加賀國ニハ林、富樫ガ一族ヲ始メトシテ、寄合々々評定シテ云、〇中略源氏ニ力ヲヤ合スベキ、平家ニ忠ヲヤ盡ベキト、樣々議シケルニ、〇中略急ギ木曾殿へ參ラント議シケル、

木曾黨

〔源平盛衰記 二十七〕信濃横田川原軍事

源氏〇木曾義仲方ヨリ進ム輩、〇中略諏訪上宮ニハ諏訪次郎、千野太郎、下宮ニハ手塚別當、同太郎、木曾黨ニハ中三權頭兼遠ガ子息樋口次郎兼光、今井四郎兼平、與次、與三、木曾中太、彌中太、撿非違所八郎、東十郎、進士禪師、金剛禪師ヲ始メトシテ、郎等乘替シラズ、棟人ノ兵百騎、轡ヲ並テ一騎モ先ニ立ズ、一騎モサガラズ、筑摩河ヲ颯ト渡シテ、西ノ河原ニ北へ向テゾ懸タリケル、

高山黨

〔源平盛衰記 二十七〕信濃横田川原軍事

當國ノ人々ハ、或ハ緣者、或ハ親類知ラヌハヨモ御座セジ、上野國ノ殿原ハ見參スルハ少ナケレ

ドモ、サスガ音ニモ聞給ラン、昔ハ信濃國ノ住人、今ハ牢人笠原平五頼直ト云者也、信濃上野ニ我ト思ハン人々ハ、押並テ組ヤ〳〵ト云懸テ敵ノ陣ヲゾ睨タル、上野國ノ住人高山黨三百餘騎ニテヲメキテカヽク、笠原ハ八十餘騎ニテ、三百餘騎ヲカケ散サントテ中ニ破入テ、面ヲ振ラズ散々ニ戰フ、○中略程ナシト見ル程ニ、高山黨ガ三百餘騎、九十三騎ニ討ナサル、笠原ガ八十五騎、四十二騎ニゾ成ニケル、

星名黨

〔源平盛衰記二十七〕信濃横田川原軍事

両陣軍ニシ疲テ、暫ク互ニ休ミ居タリ、木曾ハ謀ヲゾ構タル、信濃源氏ニ井上九郎光基ト云者ヲ招テ、加樣ノ馳合ノ軍ハ、勢ニヨル事ナレバ、御方ノ勢ハ少ナシ、如何ニモ軍兵數盡ヌト覺ユ、サレバ敵ヲ謀落サン爲ニ、御邊赤旗赤符附テ、城太郎ガ陣ニ向ヒ給ヘ、サアラバ敵御方ニ勢附タリトテ、荒手ノ武者ヲ指向テ、軍セヨトテ休ミ居ベシ、其間ニ白旗白符取替テ蒐給ハン處ニ、義仲河ヲ渡シテ北南ヨリ指挾ミテ蒐立バ、ナドカ追落サヾルベキト云ケレバ、可然トテ、井上九郎光基ハ、星名黨ヲ相具シテ三百餘騎、赤旗俄ニ作出シ、赤符ヲ白符ノ上ニ附隱シテ、木曾ガ陣ヲ引下テ、靜靜ト筑摩川ヲ打渡シテ、城太郎ガ陣ニ向フ

〔源平盛衰記二十九〕倶梨伽羅山事

其時義仲搦手ヘ廻澄シテ、追手搦手、北南ヨリ押合テ、平家ヲ倶梨伽羅南谷ヘ攻落サント思也、去バ急馳向テ陣ヲ取ントテ、信濃國住人星名黨ヲ差遣ス、

佐用黨

〔源平盛衰記三十三〕行家與平氏室山合戰事

爰ニ美作國住人惠比入道守信、播磨國住人佐用黨利季兼知ヲ始トシテ七百餘騎、西ノ山ノ鼻ヨリ時ヲ造テ懸ケレバ、源氏三方ヨリ被押圍テ、軍忽ニ破テ、東ヲ差テ落行ケリ、

草香黨

〔源平盛衰記三十四〕明雲八條宮人々被討附信西相明雲事

吉田黨

紀黨 淸黨

荒木黨

土屋黨

爰ニ仲兼〇源ガ郎等ニ、河內國住人草香黨ニ、加賀房ト云法師武者有、黑絲威ノ鎧ニ葦毛ノ馬ニ乘タリケリ、

〔源平盛衰記三十七〕平家開二城戶口一并源平侍合戰事

信濃國住人村上次郎判官代基國ト名乘テ、一時戰テ出、此等ヲ始トシテ、〇中略吉田黨ニハ小澤、横山、〇中略入替々々、劣ジ負ジト戰ケレ共、〇下略

〔太平記六〕楠出二張天王寺一事附隅田高橋并宇都宮事

楠〇正成暫思案シテ云ケルハ、〇中略紀淸兩黨ノ兵元來戰場ニ臨テ命ヲ棄ル事、塵芥ヨリモ尚輕クス、其兵七百餘騎志ヲ一ニシテ戰ヲ決セバ、當手ノ兵縱退ク心ナク共、大半ハ必可レ被レ討、

〔松隣夜話上〕天文二十年、太田三樂飛札ヲ以テ景虎公へ關東ノ成行注進アリ、書付ノ次第、〇中略

一坂東ニ於テ宗徒ノ者、〇註略遠國ニハ結城多賀谷、武佐、熊谷、淸黨、〇中略此等ノ外ハ悉ク古河北條ガ幕下ニ候事、

〇按ズルニ、紀淸兩黨ノ事ハ、尙ホ姓名部姓氏下篇雜載條ニモアリ、

〔關岡家始末〕應安六年、仁木義長、勢州ヲ攻取ラント欲スルノ時、氏淸鈴鹿山ニ出張シテ是ヲ拒ギ、義長ト相戰事數回、ツイニ義長ガ一族仁木義信ヲ討捕ル、又關椋本ニテ義長ト戰フ、然ニ服部山田柘植荒木ノ一黨馳加リ、氏淸大ニ勝利ヲ得タリ、義長敗軍シテ退ク、氏淸ハカフト谷ニ矢倉ヲアゲ、服部柘植山田ノ人々ニ是ヲ守ラセ、其身ハ荒木黨ヲ相具シテ歸陣シ、翌日名張越ニ勢陽ニ赴キ、國司ノ勢ニ加リ、重テ義長ト相戰、軍功ヲ勵スコト數多シ、

〔明德記上〕山名播磨守滿幸ハ分國勢一千七百騎、廿九日〇明德二年十二月ノ宵ヨリ峯ノ堂ヲオリ下リ、梅津ノ上瀨ヲ越シテ、二條末へ西ノ口ヨリ押寄テ、河原ノ面東洞院迄ニ烟リ上ランズル時ニ、內野へ責入、直ニ雌雄ヲ決セントル也、丹後ノ守護代ヲ小萩ノ次郎左衞門尉、同平次右衞門尉、土屋黨ヲ

引具シテ上梅津ヨリ仁和寺ヘ懸通リ、並岡ヲ東ヘ一條ノ通ヲ大將軍ノ鳥居ノ前ヘカケ出テ、方方ノ責口軍ノ初ヲバ、一條ヲ東ヘ懸通シテ敵ノ後ヲオソヘトテ、方々ノ責口ヘ思々ニ打立ケリ、

中村黨　秋田黨

〈結城戰場物語〉四番にさがみせい中村、本間、賤間黨、都合其勢三千餘騎おしよせて戰けるが、大勢うたれてひきさりぞく、〇中略五番に奥州勢あいた、古堀、伊達、さのぶ、あい河、黑川、彊がまたうをさきとして、都合其勢一萬餘騎さきを論じて押寄、

楠黨

〈新撰長祿寬正記〉長祿四年九月十八日、公方ヨリ伊勢兵庫助飯尾下總守兩人ヲ御使ニテ、畠山右衞門佐義就ニ、早々屋形ヲ開テ分國ニ下向可致、遲々ニ及ナラバ猶背上意由被仰出ケレバ、〇中略明レバ十九日辰ノ剋ニ、義就打立給ヒケリ、〇中略先陣ハ譽田、後陣須屋甲斐庄以下ノ楠黨也、

細川黨

〈長興宿禰記〉文明十三年六月五日戊申、是日室町殿化御所被築始四方築地、東方管領畠山金吾北方赤松一同築之、南方今日令始之、西面細川黨、南方一色武田被仰付云々、

赤松黨

〈富樫記〉長享元年甲戌秋八月上旬ノ比、忝クモ高賴〇佐々木追討ノ宣旨ヲ下サレ、將軍家勅ヲ蒙リ、江州南ノ郡ニ發向ス、御供ノ人々誰々ゾ、武衞細川、畠山、土岐、山名、赤松黨、大內、上杉、小笠原、武田、京極、富樫介、其外諸國ノ受領、衞府諸司一騎モ不殘打立リ、

望月黨　服部黨

〈關岡家始末〉永正七年二月、京勢江州ニ發向ス、同廿六日、氏則一族ヲ相具シテ野尻ノ城ヲ固ム、〇中略氏則多勢ニナレバ、野田、普川、土山、水口ニ人數ヲクリ出シテ、京勢ヲ拒ガシム、甲賀郡ノ諸士鵜飼ノ某、甲池田彌次郎、同隼人、野田ノ一黨、伴ノ一黨、望月黨、般童寺ノ衆徒ニ至ルマデ相從ヒケレバ、京勢ハ一戰ニ及ズ敗軍シテ引退キケリ、〇中略伊賀國ハ服部黨大名ニテ、北郡ニ威ヲ振ヒ、國中偏從ヒ、信樂ノ多羅尾等モ相從ヒケル、

越後黨

〈松隣夜話下〉天正四年二月、謙信公越後春日山ヲ御立、一萬五千ニテ飛驒國江間常陸介居城ヘ取詰玉フ、〇中略常陸守又九郎後ニハ一所ニ成テ、身近キ郎從七八人ヲ隨ヘテ討死ス、大城戸〇市兵衛ハ

越後黨ノ者瀨場四介ト組テ生捕ニ遇ヒ、本城ニハ又前ノ四頭押寄テ見ケレドモ、兵士殘ラズ常陸介連テ出タレバ、防ギ戰フ者百人計リニ足ラズ、

上田黨　上村黨

〔松隣夜話〕下謙信公ソコニテ仰ケルハ、〇中略河田、直江、北城、荒尾、上村一萬餘兵ニテ城攻尤ニ候、長尾小四郎苦桃組上田黨四十ハ越中ニ居テ神保ヲ押ヘ然ベシト委ク仰付ラレ、天正四年丙子年五月朔日、長ガ城ヘ取寄ル、二萬ノ人數ヲ二手ニ分ケ、河田豐前、柴田播部、直江山城、北城丹後、荒尾一角、上村黨一萬ニテ城ヲ責、

池田黨

〔籾井家日記〕五信長卿丹波家名代使者對面事附從信長卿丹波家江攝州荒木退治被仰出事

尾林大膳基康申ス、某ガ先祖ハ賴光五代ノ後胤、瀧口右馬允秦政ヨリ代々傳ヘテ候、中比楠左衛門尉正行ニモツラナリテ候、今攝津ノ池田黨ハ一類ニテ候ヘドモ、弓矢ヲ義理ノ前代々池田荒木ホドハ怨敵ニテ候、攝津ノ源氏ニテ候ト云フ、

鹽川黨

〔川角太閤記〕一此上は毛利家より後詰可有之とて、堤を丈夫につき、其上にへいをかけ、陣屋をかけならべ、堤の外にはゑやくをゆひ、らんぐひさかもぎをふり、水も過半たまり候之由、筑前守〇秀吉所より注進候、爲加勢中川瀨兵衛、高山右近、長岡與一郎、只今の三齋の事也、津の國鹽川黨、備中へ陣用意可仕と被仰付、國えさし戻され候間、日向〇明智光秀事、但馬より因幡江入、彼國より毛利輝元分國伯州雲州江成程亂入可申者也、〇中略と被仰付、

〔川角太閤記〕一それより御馬をはやめられ、御登の道すがら、方々よりの早飛脚到來候、其中にも津の國大名衆中川瀨兵衛、高山右近、鹽川黨以下の人々より注進狀、文躰は有增同篇に相聞え申候、〇中略御先手は高山右近、中川瀨兵衛、其外鹽川黨に御まかせ可被成との、追々の早飛脚到來候と承候事、

籾井黨

〔籾井家日記〕七丹波勢籾井波多賀須披懸事

粟光〔○井粗〕光村〔○須賀〕波多物ハジメ心ヨシト悦ビ勇テ忍ビ進ンデ候處ニ、古田〔○佐介〕安藤〔○七郎〕等ハ馬ニ鞭ヲ早メテ、池ノ上ヘ懸付テ、唯今御本陣ヘ夜討ノ色ノ見ヘテ候、丹波勢數ヲ盡シテ押寄ルト見ヘテ、籾井黨ノ者一陣ニ進テ候、〔○下略〕

井芹黨

〔菊池傳記五〕井芹一黨被誅附甲斐宗立兄弟叛逆事

其頃阿蘇家人にて宗運が與力に井芹黨と號し、七十餘人の兵あり、其を加賀と云、いかなる子細か有けん、薩州島津に志を通じ、薩摩勢を引入、大宮司を滅さんと企けるを、宗運是を傳へ聞、ひそかにはかつて一人も殘らずうち殺す、加賀をば渡邊軍兵衛吉次といふもの討とりぬ、味方は一人も死亡なし、此とき宗運が二男藏人、三男三郎四郎、四男四郎兵衛も井芹黨に與する故、此事を聞とひとしく豐後をさして逃けるを、宗運駿馬に騎て阿蘇南江俵山にて追つき、藏人、三郎四郎を切殺す、

高家

〔伊呂波字類抄加疊字〕高家

〔運歩色葉集賀〕高家

〔源氏物語九葵〕さばかりにてはさないはせそ、大將殿をぞかうけには思ひきこゆらんなどいふを、その御かたの人々もまじれゝば、いとおしとみながら、よういせんもわづらはしければ、しらずがほをつくる、

〔宇治拾遺物語十〕舍人〔○右兵衛〕おほきにはら立て、おれはなにごといふぞ、わがしうの大納言〔○伴善男〕をかうけにおもふか、をのがしうは我口によりて、人にてもおはするはしらぬか、わが口あけてはおのがしうは、人にてはありなんやといひければ、出納はらだちさして家にはい入にけり、

〔和簡禮經一〕一高家江對シ書出シノ時代書事

組衆

堂上方ハ｜｜｜｜雜掌　武家方ハ｜｜｜｜代　但當時分ニ混亂候

〔源平盛衰記三十四〕東國兵馬汰幷佐々木賜ニ生唼ニ事附象王太子事

鎌倉殿ノ侍所ニテ評定アリ、〇中略ヨキ馬共ヲ支度シテ、宇治勢多ヲ渡シテ、高名アルベシトゾ被レ議ケル、斯リケレバ大名小名黨モ高家モ、面々ニ其用意アリ、

〔源平盛衰記三十七〕平家開ニ城戸口ニ幷源平侍合戰事

高家ニハ、秩父、足利、三浦、鎌倉、武田、吉田〇中略我モ〳〵白旗サヽセテ、十騎、廿騎、百騎、二百騎、入替入替劣ジ負ジト戰ケレ共、西國第一ノ城谷〇一ナレバ可レ落樣コソナカリケレ、

〔甲陽軍鑑十四品第四十下〕一山本勘介駿河より甲府へ始て召よせられたる時、信玄公勘介に駿河今川家の背語(うはさ)を尋なさるゝ、山本勘介申は、義元公の御家、むかしより高家にてまします、子細は、公方たえば吉良つぐ、吉良たえば今川つぐとある譜にて、家風いづれも少として、ひだちの入事御座有まじく候、

〔甲陽軍鑑二十品第五十八〕一信玄公御他界十年以前、謙信他界五年巳來、織田信長につゞく弓取、日本の事は扨をきぬ、〇中略信長は甲州柏坂を越、駿河を一見有べきと有儀なり、然れば武田の高家退治の故、近衛殿を同道まし〳〵候に、〇下略

〔籾井家日記一〕丹波家七頭七組事

此比ノ屋形マデ、代々屋形樣ト仰ギ奉リ、當國旗頭衆、高家衆モ相傳ノ御主ト代々首ヲ傾ケ、國人ドモハ一天下ノ內ニ戴クモノハ、外ニハナキモノヨト存コミ申候、

〔甲陽軍鑑八品第十七〕西面遠州三州江之御先

一山縣三郎兵衛　手前三百騎甲州信濃同心共に　此組衆　一朝比奈駿河守　一松尾逍遙軒聟　一大熊　一相木山縣聟　一奧平美作守　一菅沼新三郎　一長篠　一三浦右馬助　一三浦兵部　一孕

石主水　一きところ道壽

合九百八十騎、但組衆は遠陣の時は半役也、關東御陣の時は、駿河三州の衆、信長家康を押られ候、

關東方新田足利江の御先

一內藤修理　手前二百五十騎　此組衆　一高山、一白倉　一たいら　一あま村　一くらがの　一こかんなかね

合六百騎、西面御陣の時は、組衆は半役也、內藤手前も五十騎箕輪に殘す、

美濃國岩村の城に信長押

一秋山伯耆　手前五十騎　此組衆　一下條　一ばんさい　一地く　一松岡　一さくおふる

合三百五十五騎御供申さず、美濃の御陣之時ばかり御供いたす也、〇下略

〔甲陽軍鑑品第二十三九上〕廿三日〇天文十一年十月の朝、大門到下へ人數見ゆると申もあへず、此方より物見を出しみれば、村上、小笠原、兩旗にて出る、さくらいさがたの侍大將、村上に隨も隨がはざるも、悉組て、其勢一萬三千許にて、いきほひかゝつて、しかも三の軍まで持て仕かくる、

〔甲陽軍鑑品第二十七九下〕村上殿〇義淸も、何かに一萬に及人數なれ共、七千餘にて出陣あり、さて信州上田原へ出、八月〇天文十六年廿四日辰の刻に、甲州方より合戰を始むる、〇中略甲州勢は、板垣組衆さへ、程遠くして、味方一備も見えず、さるにより板垣衆敗軍して崩て、組衆五備の所へ、樣々崩かゝる、然れば板垣くみ合て、七備の衆中に栗原左衛門まつさきに懸て、競て來る村上衆を、おし返し一戰をはじむる、

〔戸川記上〕天正十九年の頃は、秀家〇宇喜多稍長せられ參議に被任、〇中略文祿元年四月、朝鮮國へ御先手諸勢渡海す、〇中略秀家も引續著有て、行長〇小西と對議の上、都と釜山浦の間城々〈是をワタリ城と號す〉

秀家を以令守之、肥後守〇戸川秀安則其一ヶ所を預、或時組衆を働に出すに、朝鮮兵大勢莵て組頭中島杢助を打殺、〇下略

佐藤組

〔松隣夜話上〕永祿四年〇中略三樂〇太田旌本ノ內、佐藤組迚五十人ニ備合テ百人有ケル、奈良ノ佐藤一甫ノ弟子ニテ、其頃絕ヲ無リケル十文目玉ノ鐵砲ヲ得手ニウツ者ドモ也、三樂是ニ下知ヲナシ北條雅樂助〇武藏松山城將北條玄庵子副東ノ門前山ノ寄手ヲ追拂ヒ、〇下略

〔松隣夜話中〕上田又次郞二千餘兵、佐藤一景ト云法師武者ヲ大將トシ、太田ヲ包ミ寄來ル、三樂是ヲ見テ馬廻リ千五百ノ內六百ヲ別テ筑前坊ニ相副、東ノ方五町程隔テ備ヲ立、敵味方ノ勝負ニ構ザレト下知シ、自身ハ一千餘騎南向ニ備テ立直シ、佐藤組ヲ左右ニ置、鐵砲ニテ射サシメ、敵ノ備シラミタル處ヘ槍ヲ入突立ケル間、又治郞ガ先頭一景足ヲ立兼テ見ヘケルニ〇下略

山縣組
內藤組

〔甲陽軍鑑品第三十九十二〕一同年〇元龜三年申の夏秋、遠州、三河の繪圖をもつて、兩國險難の地、或は大河小河の出様一村一里に渡いくつ有、ふけたまり池、萬を遠州、三河牢人衆に沙汰させ、原隼人、內藤修理兩侍大將能聞、信玄公御前におひて申上、穿鑿被成て後、御備〇中略山縣組共に九百八十騎之內、大熊三十騎、遠州小山の定番相木八十騎、御跡備殘て八百七十騎也、內藤ぐみ八頭そへて六百騎、組衆牢役にして百七十五騎、內藤手前も五十騎蓑輪に置殘りて三百七十五騎なり、

飯富組
穴山組

〔松隣夜話上〕信玄陸步者四人追來リ、謙信ヲ引落シ率ラント仕ケルヲ、謙信ト勝尾ト二人シテ四人ガ中二人ヲ討切拂ヒ遁レ給フ、去程ニ信玄十一備ノ內、飯富組、穴山組ヲ以テハ、越後勢最初ニ掛ル二組、柿崎和泉、河田豐前ヲ切崩ス、殘ル九組ハ信玄旗本共ニ總敗軍也、

小山田組

〔松隣夜話上〕本城淸七、加治內匠、飯富兵部、馬場民部ニ仕負ケ、川中ニテ追討ニ遇、長尾小四郞、中條五郞右衞門ハ、相木、蘆田、小山田組ヲ追崩ス、

川田組
直江組

〔松隣夜話中〕對馬守〇長濃齒ヲ嚙テ口惜哉、利根川ノ腰拔タル味方ヲ賴トシ、不覺ノ死ヲ遂ル者哉

ト云捨テ、西ノ門ヲ破テ亂入ル太田勢ニ馳向ヒ、與力同心十四五人伴ヒ、暫ク戰テ東ヲ顧レバ、北城柿崎兩手ノ馬印、早本丸ノ城地ニ立ツ、川田組、直江組トモニ續テ攻入、

伯耆組

〔甲陽軍鑑品第三十九十二〕一同年〇元龜三年中の夏秋、遠州、三河の繪圖をもつて兩國嶮難の地、或は大河小河の出樣、一村一里に渡いくつ有、ふけたまり池、萬を遠州、三河牢人衆に沙汰させ、原隼人、內藤修理兩侍大將能聞、信玄公御前におひて申上、穿鑿被成て後、御備、〇中略又五頭を秋山伯耆にそへ、伊奈の御留主に伊奈秋山伯耆組の衆、下條は三河足助の城に殘りて四頭、蘆田下野と一所にして、是は落城御抱の地に御番の勢のため也、

〔甲陽軍鑑品第三十九十二〕天正元年癸酉三月十五日辰剋に、美濃國岩村へ取つめせめ給ふ、〇中略足助の下條伯耆組故、岩村へ參り、其跡へ伊奈はるちが五人衆平屋玄蕃、波相備前、こまんば丹波きところ、髙尾孕石主水、由井市丞、由井彌兵衞、小林正琳、郡內の安左衞門、上下合て七十六騎、此警固御旗本足輕大將小幡又兵衞差をかるゝ也、

若桃組

〔松隣夜話下〕謙信公、三月〇天正元年朔日、一萬二千ニテ春日山ヲ御立アル、供奉ニハ、〇中略上村甚右衞門、若桃兼竹〇中略椎名二陣ヲ續テ追合ントスルヲ、上村若桃組ニテ横槍ヲ入、二ノ手モ椎名敗軍ナリ、

土佐組

〔戸川記上〕一同〇天正十八年、小田原陣御發向也、〇中略備前家老は一日替に先手を勤る法令にて、其日は長船紀伊守が先手當番なれ共、押懸りの事なれば、肥後守〇戸川秀安尾首の山へ押詰陣を取、〇中略戸川が旗奉行中村彌右衞門旗押立、先へ押行を、土佐組の內より聲を掛て、彌右衞門は昨今迄同組に居て、今掟を破り不知顏にて押行は如何にと云、中村曰、紀伊守殿に從ふ內は勿論也、今肥後殿に屬する身が、爰ぞ紀伊殿の言を用ん、武道不案內の申樣哉と罵て先へ進み、尾首の山に登り、旗おし立る、

備中組

〔戸川記下〕一慶長十九年、大坂御謀反御手切に成、〇中略扨諸國御陣令出る、肥後守〇秀安は備中組の頭にて、岡越前守、花房志摩守、同五郎左衛門、戸川助左衛門一同に登、〇中略
一慶長廿年〇中略大坂との御和睦破れ、〇中略四月諸大名悉登、〇中略肥後守幷備中組不殘尼崎加番被仰付、各彼所に相詰、番所を構、往來を改、

旗本組

〔甲陽軍鑑四品第十二〕永祿四辛酉年に河中島にて合戰巳剋の末に終、〇中略信玄公旗本組は越後への道をとりきり備給へば、にぐるほどの越後勢、旗本の前へ行かゝらざるはなし、さて旗本組の諸勢手を碎て敵を追ちらし、人を打もあり、くびを取て我旦那を尋、小幡を目付、我備々へよるもあり、又敵は旗本組の備、左へにぐるはすくなし、右の方さい川の渡を心懸たる故、輝虎方の諸勢三ケ二に餘り此筋をのく、

〔甲陽軍鑑十下品第三十二〕一永祿四辛酉年八月十六日に、信州川中島より飛脚參りて申上る、輝虎出てかいづの向、西條山に陣取候て、是非かいづの城を攻おとし申べしとあり、其勢一萬三千計なりと申上るより、信玄公同月十八日に、甲府を御立なされ、同廿四日に、川中島へ御着あり、〇中略山本勘介を召、馬場民部助と兩人談合にて、明日の合戰備を定よと被仰付、山本勘介申は、二萬の御人數を一萬二千、謙信の陣どり西條山へ仕懸、明日卯刻に合戰を始、越後勢負候ても勝候ても、川を越退申べく候間、そこにて御旗本組二の備衆をもつて、跡先より押はさみ討取様になさるべく候と、山本勘介申上る故、
一高坂彈正　一飯富兵部少輔　一馬場民部　一小山田備中　一甘利左衛門尉　一眞田一德齋　一あい木　一蘆田下野　一郡内の小山田彌三郎　一小幡尾張守　此拾頭は西條山へ懸て、卯刻の合戰をはじむべき也、就中御旗本組は、一飯富三郎兵衛中左は　一典厩　一穴山殿右ハ　一内藤修理　一諸角豐後　御旗本脇備は左、一原隼人佐　一逍遙軒　右脇備は　一太

郎義信公、其時廿四歳也、　義信公右　一望月殿　御旗本後備は　一跡部大炊助　一今福善九郎　一淺利式部丞　此十二備、御旗本共に八千有、○中略甲州勢も手前に取紛、信玄公いづ方に御座候も存せず、越後勢も其通也、然ば萌黄の胴肩衣きたる武者、白手巾にてつぶりをつゝみ、月毛の馬に乘、三尺斗の刀を拔持て、信玄公牀机の上に御座候所へ、一文字に乘よせ、きつさきはづしに三刀伐奉る、○中略後きけば其武者輝虎なりと申候、然ば旗本組の内飯富三郎兵衞人數にて、越後方一の先手、柿崎衆を追崩、三町程追討にする、

〔松隣夜話中〕八月○永祿八年十二日、輝虎前橋へ來リ大勢ニテ頓テ後詰申サルヽ由、先達テ聞ヘ有ケレバ、○中略氏康氏政ハ一萬五千ヲ從ヘ小田原ヘハ歸給ハズ、鳴瀨ヨリ畠瀨ヲ渡リ前橋ヘ逆寄ニ仕掛ケ、町口迄押込、人數ヲ打入引取ントセラレケルヲ、○中略二陣ハ謙信旗本組柴田出雲、中條五郎右衞門等三千、三番ハ甘糟近江黑川竹脵等二千餘人城ヲ出備ヲ立ル、

〔甲陽軍鑑十一上品第三十五〕十月○永祿十二年八日には、信玄公かねて御定のごとく、小幡は志田澤上の山を組傳に沼へをし通る、其跡につき山縣おさへ候へば、山縣につき七頭も組傳に押、小荷駄奉行内藤は能小荷駄をすぐり、みませ坂の道のわきを上る、信玄公は御旗本組共に十六備を高き山へあげ、みませ到下を左に見て備なされ候、

百人組

〔松隣夜話中〕左有ヲ字佐美ニ仰付ラレ、御旗本百人組幷苦桃組等ヲ以テ、謙忠ガ與ミ家來西ノ丸ニ在ル所、是ヲ殺害セシム、

弓鐵砲組

〔奥羽永慶軍記二十一〕蒲生伊達攻大崎一揆事

此度出陣ニハ、○中略七陣、弓鐵砲組、鳥井四郎左衞門、上杉源之丞、布施二郎左衞門、永原孫右衞門、坂崎五左衞門、建部令史、松田金七、速見勝左衞門、○下略

長柄組

〔奥羽永慶軍記二十七〕小野寺湯澤城返攻事附岩崎合戰事

湯淺方ヨリ伊良子長右衛門尉貞平、一栗兵部少輔三百人ト、吉田孫市、西野修理亮俊武同ジク孫三郎五百人ト鑓先ヲ揃ヒテ戰タリ、横手方ニハ兼テ名ヲ得シ長柄組十八人一陣ニ進ミ、鑓長刀ヲイハセズ、八方嚴シク切テ廻ル、向フ者コソ不運ナレ、

〔細川兩家記〕一然に同〇享祿五年五月十九日より、總州〇畠山諸勢催候て、木澤城飯盛を又せめさせられける、又三好遠江守合力に打立、大和國衆も立て責られければ、既にはや城難儀に及候間、木澤左京亮、可竹軒、談合にて屋形へ申され、晴元より山科本願寺光教を御頼有ければ、同心あり、則攝州大坂へ下向有、近國の門徒へ相ふれさせられければ、則三萬計馳集る也、同六月十五日に先々飯盛の後巻ありければ、寄手河内衆大和衆ちり〳〵に成にける、

〔新撰長祿寬正記〕去程ニ右衛門佐義就ハ生地ガ館ニ籠リ、甲斐庄、和田、鹽川以下ノ河内衆數多、河州へ引退ベキヨシ議スルト聞シカバ、政長ヨリ管領へ此由ヲ注進有シカバ、則大和衆越智彈正大將トシテ、若江ノ城ノ後詰ニ發向ス、是モ猶無勢ナルベシトテ、重テ細川殿ヨリ大和勢ヲ催サル、

〔細川兩家記〕晴元〇細川方に山中又三郎、天王寺大塚へ城構て籠けるを、河内衆打立て責候得ば、難儀に成間、三好方同宗三衆、淡州衆、かの城の後詰の爲、九月〇天文十五年朔日に中島へ打渡、同三日に少少渡邊川を渡る所に、攝州上下の國衆、三宅出羽守、池田筑後守初て、悉氏綱〇細川へ歸參の儀、遊佐河内守相談て、使を立られければ、川をこさずして諸人外方なき次第也、然ば天王寺城曖に成て明渡也、

〔今川記四〕去程に駿河國義忠〇今川討死被成、其跡大に亂れ、合戰數度におよびし事關東に聞えければ、伊豆の御所より上杉治部少輔政憲を大將として、三百餘騎にて馳向ふ、上杉扇谷修理大夫殿より代官として、太田左衛門大夫三百餘騎にて馳登り、兩陣狐が崎八幡山に陣どりて、駿河衆

の兩陣へ使を以申送けるは、〇下略

甲州衆

〔嚴助往年記下〕十月十〇天文九年朔日、信州村上領知分於作久郡、甲州衆五千計打死云々、

江州衆

〔嚴助往年記下〕同月八〇天文十年四月廿六日、右京兆出陣丹波、越攝州、多田鹽香城逗留云々、江州衆悉又京著、數千人東山方々陣居云々、自舊多於攝州合戰、京方散々躰也、

越中衆

〔松隣夜話上〕謙信杉〇上ハ諸軍ニ一日後レ、普代衆幷越中衆合テ一萬六千前後十三備鐘鼓靜ニ打擧ゲ、一歩ヲ亂サズ、岫雲ノ雨ヲ帶、暮山ヲ出勢ヲナシ川田豐前ト齋藤主稅ト繰替リニシンガリヲ致シ、自身ハ其前ニ、以上三萬計リ與シグラニ成テ引取玉ヒケルヲ、氏康〇北條其外松田大道寺遠山山角等ノ城將遙ニ見テ、合戰ノ道ニ於テハ天生ノ英雄也ト、數度讃歎セラレタリ

丹波衆

〔嚴助往年記下〕七月二〇天文十年十四日、晴元方人數出張、三好右衞門太夫、香西、柳本、山本、山中、織田左近太夫、十川左介、岸和田可也將監、今日降云々其外馬廻丹波衆已下、都合三千計云々、等持寺邊迄打出云云、三好方松長兄弟、攝津國河內衆大和衆已下、都合四萬人計有之云々、

根來寺衆

〔細川兩家記〕一明れば永祿五年壬戌三月五日に、三好實休の陣所は和泉久米田と云處也、然るに畠山の高政、根來寺衆安見衆相談し、俄打出る、阿波勢も二手になり、根來寺衆安見美作守一所に在ける處に、篠原右京亮大將にて切還り、數剋責戰所に根來寺衆切負て引退、〇中略飯盛城には三好修理大夫殿楯籠堅固候也、然に安見美作守、根來寺衆一味して、三月〇永祿五年中比より近陣取、晝夜責ければ、城內難儀の由風聞、〇中略五月廿日に、河內の敎興寺と云處に紀州の湯川方、根來寺衆陣取所へ切懸合戰有、三好方切勝て、六百餘人討取といふ、殊大將湯川直光方討死なれば、殘衆ちりぢりに成行也、飯盛城責衆、安見方根來寺衆、此由を聞、ちりぢりに落行也、

雜賀衆

〔宇野主水記〕一廿日〇天正十三年三月根來寺雜賀衆爲成敗、秀吉御人數今日先勢出陣、又カッカニ羽柴孫七郎出陣、其外所々ニ陣取也、　一廿一日秀吉御著陣、虎口ヲ爲見廻、千石堀ト云城ヲ乘崩畢、城內

之根來寺衆悉討果、火ヲ掛訖、責衆モ數多死、同日入夜富中城自燒シテ悉取退畢、是ハ百姓持タル城ナリ、山ノ手ニ積善寺ト云城、是ハ根來寺衆ノ城ナリ、是ヘハ責衆不ㇾ及打寄、濱ノ手ニ澤ト云城、是雜賀衆ノ持タル城ナリ、廿一日ヨリ責衆ヒタト壁際ヘ打寄テ、城内ヨリ鐵炮ニテ手負ヲ討出ス也、

淡路衆　播磨衆

〔細川兩家記〕同〇永正八年七月廿六日に、蘆屋河原にて合戰あり、又鷹尾より河原林手を合てたゝかひけるに、京高國方討勝て、淡路衆首百餘り討取て、京勢は則明る廿七日に上洛して、此由申上られければ、高國聞召、御感なか〳〵申計なし、去間播磨衆は此合戰の事を聞、思案に及ばれけれども、一度約束の上は、八月の初比播磨國を立て、同八日九日に鷹尾城を取卷、

大内衆

〔應仁記三〕義視西陣ヘ御出之事附五檀法之事

文明元己丑、攝津國ハ池田筑後守、同遠江守、大内上洛ノ時降參スト云ヘドモ、當守護代藥師寺與一申子細有テ歸參シケル、依ㇾ之大内衆追取卷テ火水ニナレト責ノ由、急告ケレバ、勝元〇細川ヨリ合力ノコト被ㇾ申、

三筑衆

〔細川兩家記〕一同〇天文十二年二九月三日に、三筑衆の松永兄弟大將にて、丹州出陣也、波多野與兵衞尉方城を被ㇾ責候半、晴元方ノ衆香西方、三好右衞門大夫方、同十八日に後卷して、此衆討勝、

筒井衆

〔細川兩家記〕一同〇永祿三年七月廿四日に、和州井士城三好方の松彈取卷有ㇾ之處ヘ、筒井衆後卷して討負、廿二人討死す、首三好方に取也、

上杉衆

〔松隣夜話上〕北條モ宗雲ノ子息氏綱ノ代トナリ、豆相兩州ヲ治、〇中略天文六年七月十五日ノ夜軍ニ柏原ノ本陣ニ切入、二時計ニ切崩シ、八十餘リ敵ヲ討取、兩上杉共ニ敗軍也、是ハ由良ト云上杉侍二千計ノ大勢、氏康ノ語ラヒヲ得テ裏切セシユヘ也、上杉衆到著八萬餘之有ト雖、身ニ掛テ敵合スル者僅一萬ニ足ラズ、其餘ハ悉ク見物人ノ樣ニテ、敗軍ニ引立ラレ動亂セシ計也、

武田衆

〔松隣夜話上〕深澗、荒尾、柳、神保、謙信公御馬廻ヲ加テ八百餘人、散々ニ相戰、切崩ントセラレシカドモ、武田衆軍法違ハザルニ依テ、一旦崩ルレドモ、亦人數ヲマトメ、後度ノ戰ニテ追返ス、

毛利衆

〔江濃記〕尼子合戰之事

天文九年九月下旬、雲州衆安藝國吉田郡へ七萬餘人にて發向して、處々放火しければ、元就方より郡山太山口七口の道にてせり合有、寄手は不案内者にて毎度毛利衆勝軍なり、毛利元就是にきほひ、自三千餘騎にて尼子が本陣青山へ逆打して、二の木戸まで責入けるを、尼子方にて諏訪刑部大夫が子息三澤と云もの切て出、毛利衆を悉く押拂ふ、

柿崎衆

〔松隣夜話上〕廣瀬ノ戰ハ爰ニテ畢、本ノ戰場ニ在謙信公ト宇佐美、荒尾、柿崎衆ニハ高坂、眞田、甘利、小幡等五千計リニテ付ケ來リケルヲ、〇下略

百人衆

〔里見九代記四〕分限之卷

百人衆　一百石　正木信濃〇此下九十九人書略　以上百人衆百俵ヅヽ也、地方過半アリ、右百人衆ハ常ニ方々番替ニ、行軍ノ時ハ別シテ一備ニ組ム、九代トモニ同ジ、

法華衆

〔細川兩家記〕一世上如此成行條、同〇天文二年三月五日に一揆衆おこり、伊丹の城へ取懸らうかといふ物を一町あまりづゝ、二通りこしらへ、晝夜の境なく尼女迄集り堀をうめければ、難儀に及候處、同廿九日ニ木澤左京亮調儀して、京中法華衆相かたらひ後卷に下る、合戰有後卷衆切かちて、一揆衆五百ばかり切捨也、

牢人衆

〔嚴助往年記下〕五月〇天文十四年六日、上野源五郎牢人衆、三千計山城江出張、井出城取之、赤澤弟若衆七十人打死、其外十三人打死云云、自去月比丹波江內藤牢人出張、所々如此相働云云、雖然丹波出張衆敗北、山城宇治江出張衆玄蕃頭敗北、卽時仁靜謐也、是併尾州死去之故、牢人失力歟云云、　同月〇永祿元年六月八日、三好方人衆如意嶽江責上、牢人衆者勝軍江引退間、則如意嶽所殘置人衆雜物馬等、悉

皆取之、雜兵少々打取云云、三好得勝理也、

〔安齋隨筆前編四〕一浪人牢人　浪人は身を寄する方なく、流浪する人なり、浪客ともいふ、然るに俗書に、浪人の事を牢人と書くは誤り也、牢は獄屋也、獄屋に入る人を牢人と云ふべし、

〔嘉永明治年間錄十七〕三月〇慶應四年十五日私ニ隊名ヲ唱フルヲ禁ズ

近日以來、追々同志を相かたらひ、隊名を私に唱へ、甚しき者は、本務有之輩といへ共、私に隊へ加はり候者も有之哉に相聞え、心得違の事に候、以後右樣の儀は不相成候、尤も御爲筋見込有之者は、各其頭支配へ申立、差圖を受くべく候、

〔海陸新聞三〕閏四月〇明治元年廿九日仰出され候御書附の寫

私に黨を結び、幷猥に隊名を設候義に付、先達て被仰出候趣も有之候處、陸軍局の内より彰義隊幷其外之隊へ無謂本勤を脫し相加り、又者申合の上、私に黨を結び候者も有之哉に相聞え、以の外の事に候、右樣之義者不相成候間、其段支配の者へ嚴重に可申渡置候、且是迄彰義隊等へ加はり居候者ども、小普請入申渡、御抱の者者、その身一代小普請入可申渡候間、名前取調可申聞候、

但支配向之者、夫々見込の次第も有之、自然情實の通じ難き處より、右樣成行候樣にては不都合に付、銘々見込も有之候はゞ、聊忌畏を憚からず、十分其筋へ申立候樣可被致候、

右之趣、陸軍所局一同不洩樣可相達置候、

〔海陸新聞六〕五月〇明治元年三日　此ほど中、市中取締は官軍方の持になり、諸隊の屯所は御廢し被仰出たるにより、東叡山へも勅使御出ありて、彰義隊の者一同御山を引拂ひ候やう仰付られたる處、彰義隊の者は日光山御門主樣御警衛として、猶上野御山に勤番屯集するにより、官軍方より追討使御發向のよし市中に風聞あるにより、九日ごろより上野廣小路より御成街道邊見物にて、日々群集なすこと、神事祭禮なぞの時の人の如し、

新徴組

追討使東向のころより新規取立の隊名大略

精鋭隊、彰義隊、草風隊、純義隊、貫義隊、誠忠隊、靖共隊、清義隊、セイ難隊、四平隊、卍隊、乳虎隊、神木隊、旭隊、義勇隊、此外猶幾隊もあるべし　奥詰銃隊、表銃隊、別手銃隊、遊撃隊、狙撃隊、騎兵隊、歩兵隊、撒兵隊、撒兵分隊輕兵隊、(同)重兵隊、(同)護衛隊、砲兵隊、千人隊、

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十五日官軍彰義隊ヲ上野ニ攻撃ス

或は言ふ、當時江戸御府內に在て義を結び、相盟約するの諸隊、游撃隊、銃隊、撒兵隊は暫く言はず、彰義隊、純忠隊、精忠隊、盡義隊、松石隊、臥龍隊、萬字隊、水心隊、其他諸國の脱走兵士所々に潜伏し、事を計る者幾萬人なるを知らず、其徒一時相響應するに於ては、如何なる事變を生ぜんも計り難しと、衆說紛々更に定論なし、

〔御書付留十三〕文久三年四月十五日　鵜殿鳩翁　松平上總介　中條金之助

今度浪士之內、人物相撰、新徴組と唱替、酒井繁之丞江御委任被仰付候間、得其意、繁之丞江申談可被動、尤浪士取扱之義、以來新徴組と可被相心得候、

〔嘉永明治年間錄十六〕慶應三年十一月十三日盜江戸市中商家ニ入テ金ヲ奪フ

一金五千兩餘　日本橋　飛脚問屋　和泉屋某

右金子は、諸家より京坂へ登せ金預り分のよし、然る處當時市中取締庄內酒井侯より呼出有之、手代共罷出し處、此度賊難の儀札有之、委細申立しに、酒井家附屬新徴組の內に、不埒のもの有之しを、兼て押込置たるに、右申立の時日員數等符合に付、相違も有之間敷、就ては右の金子差戻すべし、○中略

一金子員數不知　兩替屋　播磨屋新右衛門

右は十一月十五日夜八時頃、賊多人數押込たるに、此節物騷敷に付、兼て警固として新徴組を頼

み置、此夜も十四五人詰居たれば、賊へ應接及びたる處、賊の大將と見えける者、ケンカタバミの紋付たる手丸提灯を持居り、横柄に應答し嚴命を以て世上を直す爲の用意金取集抔と云ひ罵り、談判決せず、〇下略

遊擊隊

〔御書付留十五〕慶應元年十一月廿日、美濃守殿〇本多忠民、老中、御渡、　大目付江

覺

新橋御厩之儀、遊擊隊當番所ニ被仰付候、尤當分之内、常盤橋御門内陸軍所、右當番所ニ被仰付候間、御旗本御家人之面々同所江罷出、鎗劍術修行候樣可被致候、尤御開場日限之儀は、追而可相達候、

右之趣、向々江可被達候事、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年十月廿三日、遊擊隊ヲ置ク、

槍術方與詰、同講武所詰、遊擊隊仰付られ、此後講武所劍術師範役名御廢止、遊擊隊頭取被仰付、其餘諸場所より御入人有之、

彰義隊

〔嘉永明治年間錄十七〕四月〇慶應四年廿四日、官軍暫ク東叡山進軍ヲ遏ムルノ旨ヲ達ス、

彰義隊忠義奮發、幷に當御山諸向御警衛に付、赤心の條々、宮樣御感淺からず、以來恐多くも尊體當局へ御委任被遊候段、御沙汰の趣、覺王院より被相達候間、此段及廻達候、

別紙

昨日大總督宮樣より、岩井左衞門被爲召、今日登城の處、參謀正親町へ御逢有之、北陸道總督兩卿、當山へ轉軍の儀に付、昨日覺王院を以て、右御兩卿へ被仰入、且つ彰義隊長より申上候趣、逐一大總督宮へ言上の處、御門主樣思召の次第、覺王院盡力の段幷に彰義隊精忠の旨委細承知、御感不斜思召候に付、右轉陣の儀は御見合被成候段、御口達之事、

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十五日官軍彰義隊ヲ上野ニ攻擊ス

五月十四日夕方、東叡山に屯集致し居候彰義隊より、明十五日官軍襲來の風聞有ㇾ之候間、老人婦女子立退き候樣、近邊町々へ大鼓を打ち觸廻り候に付、人々騷立、荷物等持運び大混雜、〇中略本文彰義隊と云は、德川幷に諸藩の脫走人等屯集したる者にして、決て德川家の正兵にあらず、其頭は小田井藏太、池田大隅守、菅沼三五郎、春日鐵太郎と稱する者の由、此騷動の當日、德川家執政より解兵の使として、服部筑前守行向ひけれども、遂に服せざりしとの風聞あり、實に遺憾と云べし、

貫義隊

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十五日官軍彰義隊ヲ上野ニ攻擊ス

十五日朝五時過、官軍分隊にて諸方より押寄せ、湯島天神山幷に不忍池を隔てたる、榊原の邸へ大砲相備へ、松源幷雁鍋共に料理屋なりの樓上へも大砲引上げ、山下邊戰ひ相始り候と、直に發砲、〇中略始め彰義隊の方、大に勝利の樣子に相見え候處、八ッ時頃、官軍の大兵黑門前に寄來り、山内貫義隊の一手裏切の由にて、諸方戰ひ一際劇敷く、時々會と相記し候旗押立候て、裏手より援兵來り候樣子の處、右は僞兵にて忽ち發砲、〇中略本文貫義隊は多分諸藩の脫走人にして、彰義隊中の一分隊なり、

磅礴隊

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十五日官軍擊テ上野屯集ノ徒ヲ平定ス

各藩攻口左之通、〇中略駒込水戶邸、備前伊州佐土原尾州磅礴隊、

精銳隊

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十五日德川家臣山岡鐵太郎兵火ヲ侵シテ上野東照宮ノ木主ヲ出ス

去る十五日、〇慶應四年五月上野山内兵火の節、東照宮樣御木像は、取出し奉る者も無かりしに、山岡鐵太郎これを歎き、大總督府の免許を受け、精銳隊の士數名を召連れ、彈丸劒戟の中を侵して、恙無

く取出し奉り、寺社奉行並酒井安房守の宅まで移し奉りし由、

〔嘉永明治年間錄十七〕慶應四年五月十七日上野東照宮木主ヲ舊田安邸中ニ遷ス

此程御届申上置候、東照宮木主、上野事件の節、精鋭隊の者持運び、小石川富坂住居罷在候、寺社奉行并酒井安房守宅へ遷座致し置き、日々精鋭隊にて警衛爲仕置候處、此度田安門内元田安屋敷内へ遷座仕り、尤も途中の儀は十二三人にて警固爲致候、此段御届申上候、以上、

德川龜之助後見　松平確堂

百姓隊

〔嘉永明治年間錄十七〕二月〇慶應四年六日上州綠野多胡兩郡農民騷動事件某氏ヨリ書翰

一簾て申上候、岩鼻御陣屋木村公より、百姓隊歩兵村々より差出方、舊多被仰出、苛政嚴重、村々不服罷在候折柄、當正月大坂大事件風評、且關東追討使御下向傳聞、次第に人々氣強相成、右百姓隊歩兵差出方、遂て不服申募り、村々所々集評の上、右銃隊人足申付方取扱候組合內、大總代と唱候者、木村公へ阿諛の奸徒、神田村某、大塚村某、新町宿屋某右三人住宅打毀し、八州廻村役人澁谷鷲郎を打殺し、衆人の怨を晴さんと決評相成候趣にて、當月四日頃より、綠野多胡兩郡、武州賀美郡邊村民貝鐘を鳴し、鐵砲打立、追々上州藤岡町最寄寺院、或は堂社へ馳集リ當十二日より十五日迄數千人に及び、既に打毀し始り可申處、數ヶ村の寺院へ馳集り、精々差押、へ談判中に御座候、

增隊　角力隊

〔嘉永明治年間錄十三拾遺〕長州藩岡村伊助長州藩ノ事情ヲ語ル〇元治元年

長州藩戰士凡四五萬も可有之、全く精兵不備、其餘增隊角力隊抔と、新兵組立候へ共、萬一の節には瓦解致し、不用の儀、顯然の儀と被存候、　岩國藩士は、大牢武術に達し、精兵八萬も可有之、長藩よりは遙に勝れ候由、〇下略

奇兵隊

〔嘉永明治年間錄十三拾遺〕長州藩岡村伊助長州藩ノ事情ヲ語ル〇元治元年

天狗組

先達て以來、浮浪の徒を招き、攘夷の魁け可致を以、凡三千人計り、奇。兵。隊。と唱へ、屯集致させ、實は忠直の者、奸徒を覘ひ、可討事を恐れ、豫め防として、重立候奸臣（○金田右衛門分等）平常途中一人に、凡二百人計宛引連罷在候由、奸臣共奇兵隊を以て、忠直の士を殺害致し、御使をも隊中より爲致暗殺候樣及承候、（○中略）奇兵隊を組候後に、忠勤の臣始め、下賤の者をも妄に暗殺致し、暴行甚敷に付、郡内一圓國主を怨み、人心離散致し候、

〔嘉永明治年間錄（十二拾遺）〕下總國佐原村騷動

當亥（○文久三年）秋、下總國佐原村騷動の巷説あり、（○中略）去る酉年（○文久元年）右忠兵衛養子伴次と云者水藩天。狗。組。へ申出、右佐原村一條取分貰度趣、當地支配へ申出たる處、右支配榮太郎利解申聞るには、其方養父忠兵衛は如何存じ居る哉と尋たる處、伴次の答るには、養父儀は、最早白木屋一條自決可申由申居候へ共、餘り迷惑の事故、天狗組へ申立度存ると云、榮太郎利解には、其方養父最早思ひ止りたる儀ならば、其方もあきらめたる方可然、假令天狗組を頼み埒明く共、半金は彼の者に取られ、其上此後公邊より御手入にても有之、天狗組退散せし時は、又々佐原村より公邊へ必可願出、其時は其方申譯無く、右本金は云に不及、何樣の御咎請けんも難計間、先々思ひ止るべく旨云聞たる處、先其儘にて打過ぎ、其後當亥の六月、窪谷榮太郎儀、天狗組の爲に讒せられ、水府の揚屋へ入られたる故、右伴七其留守中を幸ひとして、右佐原村一條、八月に至り、天狗組へ申出たるに依て、九月朔日天狗組の内、木村孝之助兄弟、唐澤新助、外一人、都合四人にて、佐原村名主長澤仁兵衛方へ參り、其方支配の事故、白木屋へ案内可致旨云入たるに付、無據案内したる處、翌二日明方白木屋へ踏込、家内十人餘縛り上、金銀物品等不殘封印を付け、同所橋本と云宿屋へ引取たる由、其後白木屋より村役人を以追々歎願し、金二百兩品物百兩都合三百兩、外に金十兩差出たり、天狗組の者も承引して潮來へ立歸り、右當人忠兵衛養子伴次へは百兩分の品物を渡し、金二

百兩は彼の四人にて配分せりと云、

古事類苑

兵事部十一

練兵

古事類苑

兵事部十一

練兵

練兵トハ、兵馬ヲ訓練教習スルヲ云フ、文武天皇ノ大寶令ニハ、軍團ノ大小毅ヲシテ、兵馬ヲ調習シ、陣列ヲ簡閲スル事ヲ掌ラシメ、又諸國ノ衞士ヲ教習スル制ヲモ設ケ給ヘリ、而シテ練兵ニハ、日常之ヲ行フアリ、時アリテ之ヲ行フアリ、將ニ戰ハントシテ之ヲ行フアリ、天武天皇ノ十三年ニ、詔シテ文武ノ官人ヲシテ悉ク用兵乘馬ノ事ヲ練習セシメ給ヒ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ニ、大宰府ノ防人ニ五教ヲ習ハシメ給ヒシガ如キハ、共ニ日常ノ練兵ナリ、天智天皇ノ七年ニ、近江國ニテ武ヲ講ゼシメ、聖武天皇ノ神龜元年及ビ淳仁天皇ノ天平寶字五年ニ、坂東諸國及ビ東海南海西海諸道ノ兵ヲシテ、騎射陣列ノ法ヲ教習セシメ給ヒシ如キハ、共ニ不時ノ練兵ナリ、神武天皇及ビ神功皇后、淳仁天皇等ノ士卒兵甲ヲ訓練シ給ヒシハ、或ハ不逞ヲ誅セントシ、或ハ新羅ヲ征セントシテ、軍旅ヲ整ヘ給ヒシナリ、其他持統天皇ノ朝以後屢陣法ヲ教習セシメ給ヒシ事アリ、(陣法ノ事ハ別ニ其篇アリ)中世以後練兵ノ事漸ク衰ヘ、毎年正月ノ射禮及ビ賭弓、五月ノ騎射及ビ競馬、七月ノ相撲等ノ朝儀ニ於テ、僅ニ武技ヲ奬勵セラレシニ過ギズ、

兵馬ヲ簡閲シ、戎具ヲ點檢スル事モ、亦練兵ノ一ニシテ、大寶ノ制、軍團ノ大小毅ハ、其兵士戎具ヲ檢校シ、國司ハ毎年百姓隨身ノ戎具ヲ簡閲ス、而シテ此事ノ史ニ見エタルハ、孝德天皇

名稱

ノ大化元年ニ治兵ノ事アリ、天智天皇ノ四年ニ大閲ノ事アリシヲ始トシ、天武天皇、持統天皇ノ兩朝、屢閲兵ノ詔アリ、其後孝謙天皇ノ天平勝寳四年ニハ、百濟王敬福ヲ以テ檢習西海道兵使ト爲シ、桓武天皇ノ延暦五年及ビ其十年ニハ、蝦夷ヲ征スル爲メニ、使ヲ遣シテ東海東山兩道ノ兵士及ビ戎具ヲ簡閲セシメ給ヘリ、降テ朱雀天皇ノ天慶四年ニ、右近馬場ニテ試兵ノ事アリシ以後、此事亦漸ク廢絶スルニ至レリ、其他天武天皇ノ朝ニハ鼓吹ノ調習アリ、其後大寳ノ制ニハ、兵部省中ニ鼓吹司ヲ置キテ調習ノ事ヲ掌ラシメ、醍醐天皇ノ延喜式ニハ、山城國七十五烟、攝津國二烟、河内國二十三烟ヲ以テ、鼓吹戸ト定メ給ヘリ、

武家ニ在リテハ、平素隊伍ヲ整ヘ、兵馬ヲ訓練セシ事極メテ少シ、後世馬揃ト稱シテ、爆竹ニ擬シテ軍馬ヲ盛裝シ、馳駈周旋シテ以テ威容ヲ觀ス事アリ、天正九年ニ、織田信長、正親町天皇ノ勅ヲ奉ジテ之ヲ行ヒ、文久三年ニ、會津藩ヲ始メ、因幡、阿波、備前、米澤等ノ各藩之ヲ行ヒテ、孝明天皇ノ叡覽ニ供セリ、將軍德川氏モ亦屢麾下ノ士ヲシテ之ヲ行ハシメタリ、近世德川氏ノ末造、内外漸ク多事ナラントスル時ニ當リ、幕府ハ其麾下ヲシテ、頻リニ洋式ノ銃隊ヲ操練セシメ、諸侯モ亦各其藩兵ヲ訓練シテ、不時ノ變ニ備ヘシ事アリ、其他鎌倉幕府以後、流鏑馬、笠懸、犬追物、牛追物等ノ武技アリ、或ハ田獵放鷹ニ託シテ武ヲ講ズル等ノ事アレドモ、此等ハ何レモ、彼ノ射禮以下ノ朝儀ト共ニ別ニ其篇アレバ、就テ看ルベシ、

〔兵要録五〕練兵　練者、武備之最要也、士不練則陣而不整、戰而易敗、攻而不能取、守而不得固、所謂以不教民戰、是謂棄之者是也、雖良將用不練兵、而不能取勝矣、故自古言武備者、練爲最要也、教練成、則指麾萬人、猶使一人、此可以稱節制之師矣、

〔續日本後紀一仁明〕天長十年四月戊寅、〇中略天長元年有詔、廢五月五日節、爲隣近皇太后昇遐之日也、但事在練武、不可闕如、所以改用四月廿七日、至是太政官論奏、停彼權制、仍舊宜遊、許之、

制度

〔兵要錄練兵九四上〕春蒐秋獮者、古之所以講武也、今之將士唯荒于田獵、而無意于講武者、徒爲民之害而已、凡山野放鷹逐雉獵猪鹿者、有整部伍慣旗鼓練射砲閑馳逐健步行之益也、江海捕鯨鯢布網罟者、慣旌旗相照之法、得櫓楫旋轉之便、得擲鏢習練之利也、且夜牽犬獵狐狸者、得夜戰夜候之助也、是操練之一端也、

〔海國兵談十三〕操練　操練とは、軍を出ス時は云に不及、太平の時にも、人馬に軍の仕形を敎置事也、異國にては、周に是を治兵ト云、唐に敎旗ト云、明に操練と云、皆同事也、日本の古は、都に鼓吹司を置、國々には軍團を置て軍事を敎シ事史書に見ユ、其外犬追物、牛追物又は戲道など、云事も、操練敎旗の心持也、孔子モ以不敎民戰是謂棄之ト宜り、然ルに近世日本に操練の事絶たり、危シト云べし、其故は、弓馬鎗力の小武藝たりとも、稽古せざれば其一藝不取廻なるもの也、況ヤ天下分目の大武藝を稽古なしに働ク事は、不吟味の至なるべし、大將たる人能々思惟あるべし、異國にては、末世になりても能操練を致スト見へたり、其證據は、太閤の朝鮮征伐は明の萬曆中にて、其國數十年太平積たる時なれども、明より朝鮮江加勢に來シ軍勢ども、其動止駈引甚自在にして、一身を使ウが如シとて、日本の諸將大に驚かれたり、又近世明和の頃、唐山福州江漂流して、三年にして日本江歸りたる者どもの物語を聞シに、南京省に逗留の間、軍の稽古を度々見たりと云り、今の淸も康熙以來百餘年の靜謐にして、其上南京省は京師を去事四十日路の邊鄙なれども、右の如ク軍事を不褰事、手あつき政にして、可羨事ども也、扨日本の軍は、操練もなく、軍法も疎なり、只國土自然の英氣にまかせて、其鋒先鋭なるのみ也、唐山の兵と接戰せば、一旦の勝利を得とも、久ク戰て仕詰に逢ば、軍法嚴重ならざるゆへ、必瓦解して壞ルべし、兵を用ル者、此所を能會得して、操練軍法忽にする事勿レ、

〔令義解一職員〕軍團

練兵法

大毅一人、掌檢校兵士、充備戎具、(謂充備兵士之戎具也、)調習弓馬、簡閲陣列、(謂檢閲軍行之陣列也、)事、少毅二人、掌同大毅、

〔令集解六職員〕調習弓馬、穴云、謂、令兵士便習弓馬也、○中略簡閲陣列、(中略)釋云、閲音悅反、左傳、大閲、簡車馬也、穴云、周禮、簡閲軍實、

〔令義解五軍防〕凡衛士者、中分一日上、一日下、○中略每下日、即令於當府教習弓馬、用刀、弄槍、(謂弄者玩也、槍者、木兩頭銳者、即戈之屬也、)及發弩、拋石、(謂拋者、擲也、作機械擲石、擊敵者也、)至午時各放還、仍本府試練知其進不、

〔兵要錄三將略〕操練　凡操練之法七等、曰選士、曰編伍、曰懸令、曰練心膽、曰練銃頭、曰教旗鼓、曰檢從馬、一曰選士者、因能授職、各取所長、故國無遺士、二曰編伍者、編隊編陣、各設畢合、俾之合力相勢、故結解分合、治衆如治寡、三曰懸令者、設賞格罰條、而使士卒有所操守焉、故軍律不敢亂、四曰練心膽者、使士曉養氣習藝之要、接戰衝鋒之利、故心正膽壯、而獲活潑復競業、五曰練銃頭者、使銃頭守職而竭忠、且得就銃手於彀中、捲舒殺活都在于己、故能施神器之用、而俾賊挫銳亂陣、六曰教旗鼓者、使士卒習分合變化之法、旌旗相照之術、坐作進退之節、故臨于敵、期約不忒、七曰檢從馬者、雖承平之久、使吏士莫懈于武備、故克應警急、而不失國之衛、是操兵之大綱也、

〔海國兵談十三〕操練　操練するには、まづ操練すべき場所を設べし、大概大なるは方六七里、(六丁一里也、)小なるは四五町十町許なるべし、國の大小人數の多寡に隨べし、是を大馬場ト云、但シ此大馬場は總人數を集て大操練する所なれば、一年に二度致スべし、(二月八月)其餘の小操練は、末卷に圖する大學校の内にて教べし、○中略

第一、八卷目に云ル所の押前、陣取の次第、亦は野陣の張樣などを教べし、　次に、總軍兵陣屋に居時、陣觸の趣を操練すべし、其仕形、薄板江明幾日何の刻何方江出陣ト書、但出陣の宛所を除ク事もあるべし、此札を三尺計の竹に挾ミて、昇の如クするなり、右の昇を本大將より一札を三人宛に持せて番頭江遣ス也、但番頭七頭ならば、右の札を七枚拵て、一頭江一札づゝ遣ス也、勿論使の者直に番頭江對面して相渡シ扣居なり、其時番頭自筆にて姓名承ルト書て、別に使者を仕立て、

手下の百人頭江遣ス也、其時百人頭自筆にて書付ル事上の如シ、但百人頭幾人ありとも、番頭の使者持廻ルべし、段々持廻て打止の百人頭より持歸て、大將の使者江返スべし、大將の使者是を持歸て、直に大將軍江納ムべし、扨百人頭は、各右の札を寫シ取て、手下の小組頭共を呼集て、右の札を見せて、其札江受書をなさしむべし小組頭は又其札を寫て持歸り、手下の首立五人を呼集て、右の札を借與べし、五人の首立右の札を借歸て、面々の組合四人の軍士共に見せて、其札に皆爪判を取て、右の札を小組頭江返スべし、如此すれば、百萬人の軍士ト云とも、一々受判を取てたしかに知らせらるゝ也、　次に、貝の吹樣を敎べし、其法一番貝は起シ也、起て飯の用意すべし、二番貝は支度也、身堅すべし、三番貝は揃也、出て陣門に揃て、大將の出ルを待べし、扨貝に種々の吹樣有て、其法繁多なれども、戰場の騷シキ中にて細なる相圖は聞分難ク、却て間違の端トなる事もあるべき也、然ル故に只貝は貝トばかり定べし、但レ急長の二通りに吹分ル事はあるべき歟、但出陣に貝梆子木等の鳴物を一向に禁じて、ひそかに出陣する事もあり、此體も又操練あるべし」次に太鼓の作法を敎べし、其法敵間四五町より二三十間に詰ル迄は緩打也、大概太鼓一聲に一歩はこぶ法なるべし、扨敵間二三十間に詰ては、雙方睨合て武間詰り衆ルもの也、其時は居敷て弓鐵炮を連發、太鼓をば三柏子の頭附を打て早太鼓に直せば、士卒無二無三に矢烟の下より敵隊江飛込也、○中略　次に、押行體を敎べし、然ながら押前は人數の多寡土地の險易に因て、次第不同なるものなれば、一概には言難シ、只行列を不亂事ト大小便を便シ、草鞋等を著替ル等の荒增を敎べき也、此仕形ハ一篇前ニ記せり　次に、押行道中にて、敵に出會たる時の働を敎べし、總じて押行一路も前後左右の物見を用べし、扨東の方に敵ありト物見より注進あらば、旗本にて金を鳴て押行人數を止ルなり、其時總人數居敷て旗本の下知を待べし、○中略　次に、押行道中に兩方より敵の見ユル體を敎べし、三方四方皆同然也、　次に、押行人數を金を鳴て押止ル事を敎べし、其法先旗

本の足を止て金を鳴ス時は、先陣は行過、後陣は押懸て難儀に及ブ也、此故に人數を押止ントする時は、押行ながら金を五聲打べし、其時諸手も金を鳴シて應ずる也、鐘を打法は、一呼吸に一聲打べし、扨六聲目に旗本の足を止メ、其外も聞付次第足を止ル時は、先陣行過ル事なく、後陣押懸ル事なくして行列調也、　次に、敵味方備を押出シて大拵セリ合の體を敎べし、其次第、懸リ口に六あり、悉ク陸戰の卷ニ出せり、其趣を以て操練すべし、就中大切の操練也、　次に、敵を蹈破りて追行時の事を操練すべし、〇中略　次に、味方敵に追立られたる時、二の見より横を入ル體を操練すべし、〇中略　次に、馬入の體を操練すべし、〇中略　次に、敵より馬入をするを喰止ル體を操練すべし、〇中略　次に、長柄備の立樣を敎べし、〇中略　次に、長柄備を破ル趣を敎べし、〇中略　次に、大銃の打樣、又大銃を放戰に用ル體を敎べし、〇中略　次に、城攻の法を敎べし、就中仕寄の態仕難ものなり、能敎べし、〇中略　次に、守城の諸法を敎べし、〇中略　右の外、楯の持樣、虛敗の仕樣等、了簡次第敎べし、〇中略只今太平の世の人に甲冑著て奔走せしむる時は、肩を引レ身節痛て、一里も往來仕難キもの也、然ル故に操練の度毎に甲冑著て、終日奔走せしむる時は、度重て自然ト甲冑に馴ル故、肩も引レず身節も不痛、足も重からず、息も不切、後には二三日甲冑不脫とも、さのみ身體も不疲もの也、此所操練の妙なり、能々心を用て敎べし、

〔兵法一家言三操練〕國家ニ君タル者ハ、武備精銳ナラザレバ、他國ノ侮ヲ免ルベカラズ、故ニ先第一ニ士民ノ人數組ヲ整正ニセズンバアルベカラズ、凡武備ヲ嚴重ニスルハ、人數組ヲ以テ根本トスル事ナリ、既ニ人數組ヲ整正スルノ上ハ、此ヲ敎習シテ軍容操練セシムルヲ要務トス、凡人數操練ノ業ヲ興行スルニハ、先曠野ノ中ニテ土地ヲ撰ビ、講武場ヲ定置キ、猪鹿狩等ニ事依セテ、農事ニ故障ノ無キ時ヲ以テ、春夏秋冬士民ヲ帥ヒテ、人馬ヲ操練シ軍禮ヲ敎習ベシ、大抵一操練ニハ、十日程ヅヽモ掛ルコトヽ心得テ、豫メ其前國內ニ猪鹿狩ノ期日ヲ觸流シ、其前夜ヨリ貝ヲ以

テ人數ヲ齊ヘ、當日陣場奉行ハ、主將ヨリ二時許モ早行テ陣場ヲ割リ、總軍ニ此ヲ渡ス、總軍諸手各其陣場ヲ受取リ、法ノ如ク人數ヲ分テ、張番ハ出張シテ四方ヲ固メ、土方ハ堀ヲ穿リ土居ヲ掻上、柵ヲ振リ、地ヲ平均シ、陣具採ハ、竹木、繩、菰、薪、馬草等ヲ採集シテ、總軍皆掛リテ急ニ小屋ヲ作リ、各其割渡分ノ小屋ヲ受取テ、雨露ヲ凌ギ夜ヲ明ス、此等ノ役割ハ兼テ定置ベク、或鬮取ニスルコト有リ、此ニ野宿シテ、日々操練スル間ニハ、雨風雪等ノ降日モ有ベケレバ、自然ニ上下共武邊ニモ艱難ニモ馴習者ナリ、

操練ノ次第、陸戰ハ先急ニ野陣ヲ取ルノ法ヲ習ハセタルノ上ハ、第一ニ陣中晝夜用心ノ仕樣ヨリ、小荷駄渡、兵粮渡、薪水採リ樣、篝火ノ燒樣、夜番交代、夜廻ノ仕樣、相辭ノ觸樣、物見ノ仕樣、陣觸ニ並出陣ノ仕樣等ヲ、悉ク習ハスベシ、第二ニハ出陣ノ前夜ヨリノ具ヲ用ル法ヲ習ハセ、備押ヲ能敎ヘ、備押ヨリ陣立ニ直スニ及ベシ、操練ハ即敵兵ニ遇テ接戰スルト同事ナルヲ以テ、弓組モ鐵炮組モ、組頭ハ組子四人ノ眞先ニ弓鐵炮ヲ發チ、鎗長柄組モ、組頭ハ眞先ニ進テ敵中ニ驅入テ、敵兵ヲ打倒ヲ定例トス、小頭百人頭モ亦總皆此心得ニテ、平日ノ調練ニモ、頭分ハ配下ノ者ヨリ勝レテ勇進ヲ以テ接戰ノ專務トス、或陣立ヨリ又備押ニ直シ、或繰掛ニシ、或繰引ニスルコトヲ熟習スベシ、第三ニ長柄ニテ敵ヲ打倒シ進ム仕方ト、我流儀ノ十匁玉筒ニテ劇ク敵ヲ打挫ク仕方等ヲ習スベシ、第四ニハ雨掛リ、手詰掛リ、玉碎キ、指矢掛リ、乘崩シ、獨輪車、駒倒シ、長柄倒シ等ヲ習スベシ、第五ニハ堀切ヲ越ス仕方ト、泥深キ沼等ヲ越シ、或大河及急流ナル山川ヲ渡ル仕方等ヲ習スベシ、第六ニハ夜軍ノ容體ヲモ時々習スベシ、

〔講武事備編 練兵〕練兵息合之事　練兵嫺習ノ場ハ、長三百間、幅三十八間ニシテ、的ヲ立テ是ヲ放ニ準ヒ、其的ニ各青黄赤白黑ノ招キヲ付、面々ノ腰印ト其色ヲ同フシ、的ノ高サ三尺、幅八寸ニシテ、星ハ中程ヨリ下ニシテ、人ノ膝節タケト畫ク、槍組ハ、譬ヘバ五十人ナラバ二十五人宛敵味方

トナリ、鐵炮組討仕マヒ弓組射シマフト、敵ノ武者的ノ前ニ並ビ勝負ヲ決ス、鐵炮組弓組ハ其中リヲモテ賞シ、槍組ハ其勝ヲモテ賞スベシ、其趣向ハ、

一右ノ場ニ先横ニ鐵炮組ヲ並ベ、三十間隔テ次ニ弓組ヲ並ベ、又三十間ヲ隔テ長柄組ヲ備ヘ、其三組ニ組頭伍頭アリ能揃ヒ、其宜キヲ見テ貝ヲ吹、序ノ大鼓ヲ打、的ヲ兜ニ承ケ、英々聲ニテ進ム、弓組ハ矢ヲツガヒテ進ミ、槍組ハ中段ニ構ヒ、鋒先ヲ鎮メテ進ム、○中略偕組頭ハ、青竹杖ヲ突キ、隅取紙ヲモテ指揮スベシ、若指揮ニ背ク者ハ杖ヲモテ打ベシ、コレ練兵ノ法令ナリ、

一漸々攻寄リ、的ヨリ三十間隔テ表ヲ立タル所ニテ、組頭打テト指揮ス、其トキ各敵ノ矢玉ヲ冒ニテ避ル構ヒ、一重身ニナリ的ノ星ヨリ上ヲ見セズ、伍人一同矢聲ヲ掛、雨垂レ拍子ニ進ミナガラ討コト、三歩ニ二放シ、十五歩ニ十放シ、六間進ム內ナリ、玉込スルニ臺尻ヲ的ノ方ヘ向ベシ、十放討畢リ、弓組ノ攻寄リ來ル間迄尻去リ引シ、夫ヨリ後ロニ向キ本ノ所ヘ駈戻リ、重子テ身構ヒシ進ムベシ、

一弓組モ續キ攻寄リ、是亦的ヨリ十五間隔テ表ヲ立タル所ニテ、組頭打テト指揮ス、其トキ各身構ヒシテ、伍人拍子ヲ揃ヒ、矢聲ヲ掛進ミナガラ、三歩ニ二矢射出シ、十五歩ニ十放シ、六間進ム內也、十放シ射畢リ、槍組ノ攻寄リ來ル間迄尻去リ引シ、夫ヨリ後ロニ向キ本ノ所ヘ馳セ戻リ、重子ヲ身構ヒシ進ムベシ、

一槍組進ミ寄ルトキ、打槍ノ伍人的ノ前ニ出テ横ニ立並ビ、敵味方トナリ、矢聲ヲ掛テ勝負ヲ爭フベシ、其トキ勝負ヲ書記ス者アリ勝負畢リ、鐵炮組攻寄リ來ル間迄尻去リ引シ、夫ヨリ後ロニ向キ本ノ所ヘ駈戻リ、重子テ身構ヒシ進ムベシ、其業各呼吸ヲ休メズ十返ニ及ブ、鐵炮ハ百討、弓ハ百射、槍ハ百度其手柄ヲ顕ス、又息ノ續クダケ働クベシ、○中略

練兵早雛之事○中略

一法ハ、初メノ如ク鐵炮弓槍ノ三組立場々々ニ列シ、合圖ニ應ジ、太鼓ノ序破急ヲモテ足揃ヒヲ爲シ攻寄リ、表ヲ立タル所ニテ居スクリノ太鼓ヲ聞テ、總勢据ルベシ、其宜キヲ見テ、招キノ者日ノ丸ノ扇ヲ開クヤ否、十騎各出テ馬場ヲ通ルトキ、圖ノ如ク杭ノ間ニテ討ベシ、十騎行戻リ一人毎ニ二十放宛畢リ、弓組並ビ居タル所迄尻去リ引、夫ヨリ後ロニ向キ槍組扣ヘ居タル六間跡ニ折敷扣ヘ、重ネテノ用意ヲ爲スベシ、

一鐵炮ノ業畢リ十騎戻リテ後、貝ヲ吹、旗ヲ振リ、太鼓ノ節ニ應ジ、弓組身搆ヒシ、馬場除ヘ進ム、其トキ居スクリノ太鼓ヲ聞テ總勢据ルベシ、其宜キヲ察シ、招キノ者日ノ丸ノ扇ヲ開クヤ否ヤ、十騎各馬場ヲ通ルトキ、杭ノ間ニテ矢聲ヲ掛テ射ベシ、十騎行戻リ、一人毎ニ二十本射畢リ、槍組並ビ居タル所迄尻去リ引、夫ヨリ後ロニ向キ、鐵炮組扣ヘ居タル六間跡ニ折敷扣ヘ、重ネテノ用意ヲ爲スベシ、

一弓ノ業畢リ十騎戻リテ、前ノ如ク合圖ヲモテ槍組進ミ、居スクリノ太鼓ヲ聞テ總勢折敷、其宜キヲ察シ、招キノ者扇ヲ開ク、十騎各通ルトキ、杭ノ間ニテ矢聲ヲ掛ケ突ベシ、十騎行戻リ、一人毎ニ二十度ノ槍合トナリ畢リ、鐵炮組並ビ居タル所迄尻去リ引、夫ヨリ後ロニ向キ弓組扣ヘ居タル六間跡ニ折敷扣ヘ、重ネテノ用意ヲ爲スベシ、各其業十返ニ及ブ、鐵炮ハ百討、弓ハ百射、槍ハ百度也、

〔兵法一家言 三 操練〕押出シタル人數ヲ以テ速ニ備ヲ立ルヲ、甲州流ニテ備ヲ屈(タム)ト云フ、又其屈(タミ)タル備ヲ、急ニ押陣ニ直スヲ伸(ノバス)ト云フ、一隊五百人ヲ五段ニモ十段ニモ分テ、一行トモ二行トモシテ押行人數ヲ、屈テハ備ヲ立テ、又伸(ノバシ)テハ押行ヲ屈伸往來ト名ク、又其人數ヲ片端ヨリ繰廻シテハ、前ヘ進メ、又繰廻シテハ後ニ退ケ、或左右ニ開キテ後ニ廻リ、其場處ヲ二之手ニ讓リナドスルヲ、進退周旋ト名ク、所謂此進退周旋ト、屈伸往來トヲ、一隊ノ人數ニ教込ミテ、自由自在ニ馴習ハセ、

日常練兵

弓鐵炮ヲ連發シ、鎗太刀ヲ打振リ、指揮スル如ク能奮飛スルヲ一隊ノ操練ト云フ、此一隊ノ操練ニ能熟スルコトヲ得レバ、百隊千隊ノ操練モ皆無造作ニ成就シテ、所謂魚鱗、鶴翼、鋒矢、灣月、三才、四武、五行、六花、七星、八卦、九官等諸陣モ、皆望ノ如ク布ルヽノミ、凡操練ノ自在ニ成就スルニ、悉皆人數組ヨリ起原(ハジマル)コトナルヲ以テ、國家ニ主タル者ハ先其根本ヲ堅固ニスベシ、

〔兵法一家言八接戰〕抑合戰ト云フ者ハ、如何ニ備ヘ立スルトキハ、急度勝ツベシト云フ定法ノ無キ者ナリ、然レバ廣ク世上ニ流布シテ、皆人ノ熟知スル所ノ法立ヲ用ルノミニテハ、勝利ヲ得ルコトハ殊更ニ難キコトナルベキハ勿論ナリ、故ニ此以後万一兵ヲ用ルコト有ラバ、意外ニ新奇ナル妙手ヲ出シ、敵人惶怖テ膽ヲ破ルニ非ザレバ、十分ナル大勝ハ得難キコトナルベシ、所謂新奇ナル妙手ヲ出シテ、敵人ヲ惶怖センコトヲ欲スト雖ドモ、其國人主君ニ親服シ、諸士卒伍能ク調ヘ操練熟習シテ、元帥ノ指揮ニ從フコト手足ノ意ニ從フガ如ク、或ハ分レ、或ハ渾合リ、或ハ繰懸リ、或ハ繰引シ、其往來屈伸ト進退周旋ノ自由自在ニ出來ザレバ、迚モ立派ニ戰フコトハ叶ハザルコト、知ルベシ、

〔日本書紀二十九天武〕十三年閏四月丙戌、詔曰、凡政要者軍事也、是以文武官諸人、務習用兵及乘馬、則馬兵幷當身裝束之物務具儲足、其有馬者爲騎士、無馬者爲步卒、並當試練以勿障於聚會、若忤詔旨、有不便馬兵、亦裝束有闕者、親王以下逮于諸臣、並罰之、大山位以下者、可罰罰之、可杖杖之、其務習以能得業者、若雖死罪、則減二等、唯恃己才、以故犯者不在赦例、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年閏八月壬申、勅曰、太宰府防人、中略〇自今已後、宜差西海道七國兵士合一千人充防人司、依式鎭戍、集府之日、便習五教、事具別式、

〔管子六兵法〕五教、一曰、教其目以形色之旗、五色之旗各有所當、若春尚青夏尚赤之類、二曰、教其身以號令之數、謂坐起之數、三曰、教其足以進退之度、四曰、教其手以長短之利、長兵短兵、各有所利、遠用長、近用短也、五曰、教其心以賞罰之誠、貪賞畏罰、

士乃自厲、五教各習、而士負以勇矣、（負恃也、恃其便習而勇也、）

〔梅花無盡藏 六〕靜勝軒銘詩幷序

公（○太田道灌）平日繋志翰墨、取法軍旅、（○中略）一月之中、操戈擊鉦、閱士卒兩三回、其令甚嚴也、

〔日本書紀 二十七 天智〕七年七月、于時近江國講武、

〔續日本紀 九 聖武〕神龜元年四月癸卯、敎坂東九國軍三萬人、敎習騎射、試練軍陣、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年十一月丁酉、以從四位下藤原惠美朝臣朝狩、爲東海道節度使、正五位下百濟朝臣足人、從五位上田中朝臣多太麻呂爲副、判官四人、錄事四人、其所管遠江、駿河、伊豆、甲斐、相模、安房、上總、下總、常陸、上野、武藏、下野等十二國、檢定船一百五十二隻、兵士一萬五千七百人、子弟七十八人、水手七千五百二十人、數內二千四百人肥前國、二百人對馬嶋、從三位百濟王敬福爲南海道使、從五位上藤原朝臣田麻呂、從五位下小野朝臣石根爲副、判官四人、錄事四人、紀伊、阿波、讚岐、伊豫、土佐、播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防等十二國、檢定船一百二十一隻、兵士一萬二千五百人、子弟六十二人、水手四千九百二十人、正四位下吉備朝臣眞備爲西海道使、從五位上丹治比眞人土作、佐伯宿禰美濃麻呂爲副、判官四人、錄事四人、筑前、筑後、肥後、豐前、豐後、日向、大隅、薩摩等八國、檢定船一百二十一隻、兵士一萬二千五百人、子弟六十二人、水手四千九百二十人、皆免三年田租、悉赴弓馬、兼調習五行之陣、其所遺兵士者、便役造兵器、

○按ズルニ、五行陣ノ事ハ、陣法ノ條ニ詳ナリ、

〔續日本紀 二十五 淳仁〕天平寶字八年九月丙申、以大師正一位藤原惠美朝臣押勝、爲都督使、四畿內、三關、近江、丹波、播磨等國習兵事、

〔續日本紀考證 八〕卜本、永正本、金澤本、堀本、作爲都督四畿內、三關、近江、丹波、播磨等國兵事使、紀略同、（○中略）案四畿內當作五畿內、

〔日本書紀 神武三〕己未年二月辛亥、命諸將練士卒、

○按ズルニ、此時神武天皇、新城戸畔以下ノ土蜘蛛ヲ征討セント欲シテ、士卒ヲ練習シ給ヒシナリ、

〔日本書紀 神功九〕九年〇仲哀九月己卯、令諸國集船舶練兵甲、時軍卒難集、皇后曰、必神心焉、則立大三輪社、以奉刀矛矣、軍衆自聚、

○按ズルニ、此時神功皇后、新羅ヲ征セントシテ、兵甲ヲ調練シ給ヒシナリ、

〔續日本紀 淳仁二十四〕天平寶字六年十一月庚寅、遣參議從三位武部卿藤原朝臣巨勢麻呂、散位外從五位下土師宿禰犬養、奉幣于香椎廟、以爲征新羅調習軍旅也、

〔續日本紀考證 八〕按征新羅事實無所見、蓋議寢不果歟、

〔武將感狀記 五〕一信玄〇武田出陣ノ前ニ必ズナラシアリ、是孫武ガ七計廟算ノ遺意ナリ、軍ハテヽ後諸將ヲ召テ其日ノ勝負ノ理ヲ問タマフ、諸將各其旨ヲ云、信玄聞召、可ナル時ハコレヲ稱シ、不可ナルトキハコレヲ戒ム、故ニ一陣々々ニ功者ト成テ、弓矢ノ味ヒフカシ、

〔常山紀談 九〕蒲生氏郷、笠井大崎にての軍に、佐久間備前同内膳兄弟を先陣とせらるゝに、下知する事氏郷の心に叶はず、此兄弟は元秀吉に屬せしが、秀吉より氏郷に賜りたる侍大將也、氏郷明日の軍は神田修理、外池信濃、岡野左内、蒲生源左衞門等先陣せよ、佐久間兄弟は見物せよとぞ下知せられける、先陣の士大將六人相集り、佐久間兄弟の軍立あしきとてかく仰承りぬ、おの〳〵討死したりとも、己が弱を捨て只汚名を出さゞるまでの事にて、かく仰を承りたるかひもなくては、御大將の恥辱なり、然らば進退の節、内ならしせずば叶ふまじとて、先陣の軍兵を打具し、平野に押出し、かけ引のならし五度に及びけれども尚調はず、六人そこにて、明日の軍は殊に大事なる故、かやうに馴しに及びぬるよ、人々の進退以の外調はず、いかにも能心得候へと再三詳に

申聞せ、さて再拜を取下知するに、進退節にあたりしかば、さらば明日の軍はおもふ儘なるべしと悦びいさみて、果して敵を切なびけ、大勝を得たり、淺野長政秀吉の命にて陸奥國にありしかば、其軍の有様駈引の圖に當りたる、終に見聞に及ざる所なりと褒られたりとなり、氏郷も大方ならず悦びて、六人に感狀を與へて、いろ〳〵の物添て賞美ありけり、

〔外交志稿二十四學術宗教〕天保十二年辛丑、長崎町年寄高島高敦四郎大夫ヲ江戸ニ召シ、西洋流ノ銃隊ヲ武藏德丸原ニ練習ス、卽チ洋兵操練ノ始トナス、幕府其門人江川英龍太郎左衛門ニ命ジテ之ヲ傳習セシム、大小火技鬱然以テ起ル、

○按ズルニ、銃隊操練ノコトハ、武技部小銃術及ビ大砲術篇ノ演習條ニアリ、參看スベシ、

〔續々泰平年表〕安政元年十二月十五日、松平肥後守江、其方家來共調練、先達而於二駒場一年寄共及二一覽一候處、隊伍相整、歩卒足並等行屆、格別專熟之趣達二御聽一、一段之事に被二思召一、此段可二申聞一旨御沙汰有、

〔嘉永明治年間錄四〕安政二年七月二日、阿部伊勢守殿渡書付、

近來異船度々渡來に付ては、御備向別て嚴重に無レ之候ては難二相成一、然る所外夷防禦の儀は、銃陣專務の儀に付、與力同心并御徒等、西洋銃陣修行可レ致旨被二仰出一候、右に付御筒等も追々張立被二仰付一候間、出來次第御貸渡可レ有レ之候條、此節より以二其心得一專ら調練精出候樣世話可レ被レ致、尤も弓組の儀も、銃隊を相兼修行候樣可レ被レ致候、右之通、三番頭、百人組頭、御持頭、火消役、御先手御徒頭、并八王子千人頭へ相達、其段御鐵砲方へも相達候間、可レ被レ得二其意一候、尤も向々へも爲二心得一可レ被二達置一候、

〔安政錄〕安政戊午五年五月十四日、備中守殿御渡候書付、銃隊調練之爲、今般深川越中島新規築立、講武所附調練場被二仰出一候、同所稽古日の外は、萬石以上以下之面々江も御場所拜借被二仰付一候間、相願候向は、大森町打場拜借之振合を以、日割其外の儀は海防掛り御目附へ問合可レ申候、右之通、萬石以上以下之面々江可レ被二相觸一候、

〔嘉永明治年間錄十一〕文久二年九月廿二日、御曲輪内外屋敷に於て銃隊調練の節、金鼓貝三器とも相用不苦儀と相心得、向後其段不及相屆、空砲打試の儀も伺に不及、掛りの御目付へ可問合候、

十二月九日、兵部少輔殿御渡、　奥向寄合諸番衆等、總て御旗本の面々は、分限に應じ、歩騎二隊に相立て、御馬前守衞に相成り、銘々所長に寄り、刀槍二兵に相分り、右兩兵を以て隊伍編立致し、亂雜不相成樣御陣制相立候御趣意に付、銘々所長の術彌無懈怠可致修行候、尤歩騎共刀隊は馬銃相携へ、槍隊は拳銃相用可申積りに付、此叉可被心得候、

〔七十冊物類集御入用二十五〕臨時御褒美御手當之部

深川越中島おゐて調練上覽ニ付、御場所へ罷出候事之義申上候書付、

御屆　　年番

御組與力高橋吉右衛門次男　高橋壽老三郎　同松浦安右衛門次男　松浦彌三郎
同中島三郎右衛門忰　中島彌三郎　御組同心　高松鐵次郎　同吉澤仙四郎忰　吉澤銀次郎
同田中源内忰　田中晴太郎

右者明十九日深川越中嶋調練場江御成有之、調練上覽ニ付、一同御場所江罷出申候、此段御屆申上候、以上、

午〇安政五年　三月十八日　　高橋吉右衛門　秋山久藏　松浦安右衛門

〔嘉永明治年間錄十四〕慶應元年四月廿一日、御勢揃、其上亂軍御押等御試として駒場野へ被為成候、此後兩三度勢揃等ありと云ども略之、

〔嘉永明治年間錄十五〕慶應二年五月十日、周防守殿渡書付、　西洋銃隊調練の儀は、外の利器を採り、御國文武備一際御嚴整に可被遊御趣意を以て、先年中より厚く御世話も有之事に付、右御趣意相心得勉勵可致は勿論に候得共、近來習練の道實理を失ひ、虚飾に流れ、兎角新奇を好み、自己

の工夫等取交、遊戯同様の擧動致し、又は從來の御制度も不顧、外國人に齊き服を著用候向も有之哉に相聞え、漸々士風を破り、且一體の御趣意にも相振れ、以外の事に候、以來形容に不拘、眞實と致修行、筒袖陣股引の類、異樣の仕立幷に華美の品一切相止め、都て陣服類、稽古の外平常猥に著用候儀は不相成候、若し心得違の者有之候はゞ、急度御沙汰可有之候條、其旨可心得候、右之趣向々へ不洩樣可被相觸候、　此月、周防守殿口達覺、〇中略　練兵に横笛相用候儀、可致無用候、〇中略レキションと唱候筒袖の羽織不苦候事、ダンブクロハ、袴腰有之分不苦候事、胴服の儀、ボタン一ツ懸けは不苦候事、頭巾の儀は、是迄の通り仕立にて不苦候事、右何れも地合木綿羅紗與絹の内勝手次第、尤も色は黑計りに限り候事、英國仕立羽織、一切不相成候事、沓の儀は、場所の外著用致間敷候事、士並に太鼓打は羽織一切著用不相成候事、小袴の儀は不苦、尤も黑紺にて印付外は、一切不相成候事、

此令命有て四五日過たる頃、佐野侯堀田藩銃隊の行列を見るに、太鼓幷に横笛を用る事は前の如き故、不審しけるに、其後或說を聞に、是迄薩州藩は、調練横笛を用ざるに、何故か令命出し翌日より、銃隊行列へ横笛を交へ、芝邊より西ノ久保邊、縱横周旋せり、是に依て無據萬石以上は横笛可相用旨、萬石以上へ計り達しに成事と云ふ、此故に堀田藩横笛を用ゐし事なるべし、併し不日にして一統横笛用る者なし、

〔津輕藩史 六上 信順公〕文政二年八月七日、世子〇信順親率將校以下、操練於宇和野、此日烈風暴雨、有司請止行、世子曰、兵士臨戰陣、豈可以風雨止乎、遂畢練兵而歸、

〔津輕藩史 七政 承順公〕嘉永四年五月、令兩番士將津輕右近、高倉敏次郎、習陣法於宇和野、公〇承順臨覽、先是掌旗校岩田平吉建與酌古法適宜制陣法議、士將高倉敏次郎採用之、至是習之、此月十一日復大習陣法、爲備蝦夷及我地邊警也、

〔常陸帶 上〕逐鳥狩によせて武備を整へ給ふ事

君〇德川齊昭、中略、庚子の年〇天保十一年水戸に至り玉ひて、家中の武備を見玉はんと思召しけるに、江戸邸の式の如くなるのみにては、人々の物具身廻りの器械を見玉ふ許りにて、人馬軍役の用意、又將長士卒指麾進退のさまを試みるに足らざれば、物具したる士卒を野外に出して、進退を調練せん事を幕府に請ひ玉ひけるに、やがて許し玉ひければ、其年二月廿一日の日に、初めて千束原と云へる處にて逐鳥狩を催し玉ひける、治れる世に亂を忘れざるはさる事なれども、全く武備調練抔云ひてはものものし、古田獵によりて兵を習はすと云ふ義こそよけれと宣ひ、逐鳥狩と名け、鷹狩がてらに、武事を習はし玉ひけり、明る辛丑の年の春に文恭公薨じ給ひければ、其秋の長月に堀原と云へる所にて催ふし給ひ、又明年の春は千波原と云へる所にて催ふし給ひしに、此原何くれの便りよき地なれば、是より後は年々同じ原にて催し給ひ、御鷹を以て捉り飼ひたる雉を、年々幕府に捧げ給ふ、武事を講せしめ、御代長久を祝し給ふ御心なるべし、かくて狩を催すべき日の前夜戌亥の時の頃各々出立て、郭門の内なる屯場に至り、寅の刻許りに先鋒より押出し、巳の刻計りに原に著きて、陣を布きぬる樣をし、金鼓の音砲礮の響き、千軍萬馬の進退馳驅しぬるあり樣、實に勇ましく、昔の物語りに旌旗翩々として風に翻へり、鎧の袖を連ね、兜の星を耀かし鬨きの聲矢さけびの音、山嶽も崩るゝ許り抔云へるは、文をかざりたる虚言のみと思ひしに、此逐鳥狩を見ては、其勇々しき樣言葉にも述べ難く、筆にも盡し難き事、人皆まの當り知る處なれば、委しき事は記るさず、兵馬の多少、操練の作法は、國の大事なれば漏しつ、

〔水藩聞見錄 上〕先生椿園翁〇佐藤信淵洪祚ニ命ジテ曰、風聞水府侯近來學校ヲ建テ弘道館ト名ケ、日夜文武ノ學ヲ講究シ、敎化能行レ、是月〇天保十四年二月二十五日、城外ノ演武場ニ於テ兵馬ヲ操練シ、大炮ヲ連發シ、戰法ヲ講習ノコトアリト、汝行テ此ヲ熟覽シ、〇中略筆記シ來テ我ニ見セヨト、僕ガ固

ヨリ好所ナルヲ以テ謹諾シ、乃二月二十日ニ江戸ヲ出立シ常州ニ趣ク、路中彼演武見物ノ旅人甚多シテ、旅店ハ論ズルニ及バズ、百姓家ト雖ドモ一宿スベキ所アルコトナク、大ニ困窮セリ、二十四日、水戸城下ヨリ二里隔タル長岡村ニ泊リ、翌二十五日早起シテ演武場ニ至シニ、昨日ノ大雨ニ因テ、明日ノ操練ニ成レリト云フ、於是先演武場ヲ一見セリ、抑此講武場ハ、水戸ノ城ヲ去コト一里十餘丁、申酉ノ間ニ當リ、笠原ト云フ所ニテ、平坦ナル野原ヲ測量セシニ、大約縱十二三丁、横六丁餘モアルベシ、子丑ヨリ午未ニ長ク、兵馬ヲ調練スルニハ究竟ノ場處ナリ、本陣ハ午未方ニ向タリ、陣場ノ入口ニハ土居ノ升形アリ、其高サ一丈、升形ノ中ニ制札ヲ建タリ、其文曰、

一御調練之節、教場ヘ一切立入間敷候事、　附、常々往來不苦、尤狼ケ間敷儀無之様、心得可申候、

一御園土居ヘ登べからず、幷樹木伐取候儀者勿論、芝切り申間敷事、

一教場御小屋ヘ立入、不作法有之間敷事、

右條々堅相守べき者也

寅十二月〇中略

二十六日、黎明ニ千場池ノ新道ヨリ上野ノ多門ノ邊ニイテ、人數ヲ繰出シ備押スルヲ見物セリ、總軍ハ皆寅ノ太鼓ニ大手先ニ集リ、卯上刻ヨリ繰出ス、〇中略總人數都合五千餘ト聞エシ、軍勢先ニ演武場ニ着到シタル者ハ、各々其備場ニ陣ヲ張タル趣ナリ、其軍師ハ山國喜八郎ト云人ナリト聞ケリ、〇中略鄕司及修驗者禰宜等ノ遊軍ノ人數ハ、諸手ノ軍士皆備ヲ立テ陣列ヲ定メタル其外圍ヲ警護シ、各々鐵炮ヲ備テ、圖ノ如ク演武場ノ東西六丁、南北十二丁ノ四周ヲ固メ、各々方位ニ從ヒ、十二支ノ文字ノ旗ヲ立テ備ヲ嚴ニシ、見物ノ者ヲ此備ヨリ三間許ハナレテ居シメ、時ニ小人等奔走シテ此ヲ指令ス、故ニ我等モ遊軍備ノ三間外ヨリ見物セリ、陣列既ニ定マリテ、須臾ノ後ニ、植込升形ノ中ヨリ里犬五疋ヲ追放ツ、時ニ使番六騎ニテ其犬ヲ追往ント、四角八方ヲ

追廻スコト恰モ、犬追物ノ如シ、使番ハ家中ニ名ヲ得タル馬術ノ達人ノ由、殊ニ駿馬ニ鞭打、勇進テ追廻ト雖ドモ、犬モ生涯ノ浮沈ト思フト見エテ、皆必死ト爲テ逃ゲ走ル故ニ、如何ニ追トモ追付コト能ハズ、何レモ終ニ犬ヲ追ハズシテ止タリ、其後少頃ニシテ旗本ヨリ太鼓ヲ打出セバ、右備ノ一之手、二之手、三之手モ、亦太鼓ヲ平調ニ打出シ、打ナガラ旗ヲ進ムルコト一町計リニシテ歩ヲ止ム、其時旗本ノ前ニ備タル一貫目彈ノ大銃ヲ發スルヲ合圖トシテ、コレヲ次テ一之手ニ備タル三百目彈ノ頭筒ヲ打發セバ、同ク數多ノ鐵炮ヲ連發シ、煙ノ下ヨリ歩ヲ進ムルコト六七歩ニ過ギズ、乃チ止テ列ヲ齊フ、二之手モ亦同ク數多ノ鐵炮ヲ連發シ、烟ノ下ヨリ歩ヲ進ムルコト六七歩ニ過ギズ、乃止テ其列ヲ齊フ、次デ三之手モ亦右ノ如ク大小鐵炮ヲ連發シ、煙ノ下ヨリ歩ヲ進ムルコト全ク同ジ、而其太鼓ノ頭付三拍子ノ早太鼓ニ直ト齊シク、長柄組ノ次ニ備ル武者等、一齊ニ皆鎗ヲ投捨テ、鞭ヲ執テ直地暗ニ植込升形ヲ目當ニ馳リ進ム、是時彼升形ノ中ヨリ兎及狢雉子等ヲ追放ツ、諸軍士皆爭テ此ヲ追立テ、或ハ手捉ニシ、或ハ打殺シ、奔走シテ大ニ働ク、番頭モ共ニ旗馬印ヲ押立テ、相次デ馬ヲ進シム、諸軍士ノ働キ終ルコロニ、旗本ニテ鐘ヲ打ツコト五聲、是ニ於テ散亂シタル諸軍士皆番頭ノ旗馬印ヲ目當ニ悉ク其旗ノ下ニ集リ、進退周旋シテ備ヲ繰回シ、平々トシテ其行ヲ正ク齊ヘ、旗本ノ右方モトノ陣處ニ引上タリ、

軍士追立ノ働ヲ見シ中ニハ、顚仆テ急速ニ起ルコト能ハザル者多アリ、兎狢ノ類仆タル武士ノ上ヲ踏越エ、飛越走モアツテ、頗ル見苦シカリケル次第ナリ、

少頃アリテ、植込ノ升形左ノ方ヨリ武者一人出テ、手ニ柄ノ長サ六尺計リアル緋采幣ヲトリ、横筋違ニ西ニ進ムコト五十歩計リ、本陣ノ井樓ニ向ヒ、采ヲ以テ麾クコト六回スレバ、君侯井樓ヲ下リ、七本骨金扇ニ日ノ丸ヲ畫タル馬印ヲ押立テ、御手ニ鷹ヲ居エ、陣前ニ進玉フコト百歩餘、是トキ彼采幣ヲ振タル脇ヨリ雉子二羽ヲ放ツ、君侯乃チ鷹ヲ逢ハシテ雉子ヲ得玉ヘリ、近習ノ士

走リ來テ此ヲ君侯ニ呈ス、君侯乃チ歸テ樓上ニ登リ玉フ、○中略

天保十四癸卯年三月　　小島洪祚謹記

〔島津齊彬公略傳〕嘉永四年七月、偶公騎兵にて天保山の操練場に臨み、大小砲の試發を觀る、是れ公家を繼ぎし以來始て臨みしなり、此時公は近臣數名を率ひ、馬上茲に至る、同場は遠干潟の埋地にて、地は砂礫にして樹木なく、僅に松木を植ゆるのみ、時暑中にして、炎熱蒸くが如し、藩吏先例に倣ひ、棧敷を設けて公が觀覽所と爲せり、然るに公茲に至り棧敷に上りしが、前面數百の兵士は、炎天に曝されつゝ、操銃に從事するを見玉ふや、直に立ちて棧敷の前面に立出で玉ひ、侍臣を喚び床木を持來らしめ、之に踞して觀覽せらる、公纔に頭に陣笠を戴き玉へるのみ、侍臣之を見て、傍より進んで日傘を翳して日光を蔽はんとせり、公曰、藩士炎熱を犯して操兵を爲す、我何ぞ炎天を厭はん、速に傘を撤せよと、侍臣と倶に炎日に踞して、遂に操兵を終る迄動き玉はざりしとぞ、○中略又薩摩國沿岸地方を巡視し、到る處附近の兵を徵集して操練調砲を檢閱し、各所砲臺を閱視して、一日として倦むことなく、凡そ數十日にして鹿兒島に歸館ありたり、之より藩内の兵備頓に面目を改めたりとぞ、

〔柏原藩史〕嘉永五年六月、令二藩士甲冑巡一回于郭内一、且閱二兵操練場一、行篤爲二軍師一、親和總二管之一、

慶應四年閏五月二十五日、革二新藩政一、置二政務局一、以レ要爲二總裁一、○中略置二軍事局一、以二岡田重義一爲二總裁一、江間杢行篤爲二輿議一、而田中正岑爲二補議一、更命二杢于干城隊長一、星合雄八于折衝隊長、津田貞正于山風隊長、山室昌言、礒野主一、大井介藏于半隊長、○中略而悉編二入干城、折衝、山風、及巨砲諸隊一、日閱二兵于練兵場一、非二公事一則不レ許レ休、特命二少壯者一、以レ修二文武一爲レ務、且廢二戰袍之類一、許二束髮及洋服一、

○按ズルニ、柏原藩ハ丹波國氷上郡ニ在リテ、當時織田信民ノ領スル所ナリ、

〔三條實美公記 九〕文久三年十一月二日、波多野金吾、宰相ノ命ヲ受ケ來リ告ゲテ曰ク、明後四日、小

調習鼓吹

郡近邊小松名〔里〕ニ於テ、當藩士、〇長門萩藩騎兵操練アリ、仍テ宰相父子、〇毛利慶親、定廣、臨テ之ヲ視ル、故ニ公〇三條實美ノ觀覽如何ヲ問フ、公臨覽ヲ諾ス、佐世八十郎〇前原一誠モ、眞光院ニ至リ各卿ニ謁シ、小松ノ操練ヲ告グ、各卿往テ視ルヲ諾ス、四日時々飛雪、是日小郡ノ操練ヲ觀ント欲シ、各卿眞光院ヨリ湯田ニ來リ、公ヲ誘ヒ、各馬ヲ走ラシテ寒風ヲ冒シ、巳刻頃湯田ヲ發シ小郡ニ赴ク、自湯田南一里半佐世八十郎、轟武兵衛外奇兵隊士數名之ニ從フ、宰相父子モ來テ倶ニ棧敷ニ在リ、倶ニ之ヲ觀覽ス、騎馬隊士各戎裝、數百ノ駿馬ヲ放チ、之ニ騎シテ種々騎法ヲ演ズ、尤壯觀ナリ、未刻頃操練畢リ、宰相父子ニ別レヲ告ゲ、黃昏湯田ニ歸ル、各卿倶ニ酒宴ヲ催フシ皆湯田ニ宿シ、翌日眞光院ニ歸ル、

〔日本書紀 二十九 天武〕十年三月甲午、天皇居新宮井上、而試發鼓吹之聲、仍令調習、

〔令義解 一 職員〕鼓吹司

正一人、掌調習鼓吹、謂、敎習鼓吹戶人也、鼓吹、事、

〔延喜式 十一 太政官〕凡兵庫寮召使發管戶、自十月至來年二月、敎習鼓吹、其初發聲日者、寮預申官、官仰陰陽寮令擇定、然後少納言奏之、事畢之日、右辨一人、史一人、兵部輔丞錄各一人、就本司試其業、事見兵部式、

〔延喜式 二十八 兵部〕凡鼓吹初發聲者、兵庫寮預申省、省申官、官令陰陽寮擇日、仰下然後乃發、限滿之日、辨史各一人、輔丞錄各一人、就寮共監試能不、訖後放却、

〔延喜式 四十九 左右兵庫〕鼓吹戶

山城國七十五烟　攝津國二烟　河內國廿三烟別丁六烟

右起十月一日、盡二月卅日、以十人爲一番、番別卅日、更代敎習、若有破除、隨卽補之、其始發聲日、申官待報、三月一日、辨官幷兵部省官人、就寮簡試能不、訖乃放却、

〔儀式 九〕三月一日於鼓吹司試生等儀

當日平旦、司率鉦鼓等師幷生等、區別廳事前庭、幷立標、其制也、版位以南一許丈之地、左右相分、畫地

爲界、版之正南廣一丈二尺爲大路、(南不至司南垣三許丈)大路東西開小徑、各縱七、橫卅六、(徑廣二尺、縱橫徑間方四尺、號之爲町、)大路東西第一徑、與北極徑之角、夾大路立第一標、北第四徑立第二標、第九徑立第三標、第十四徑立第四標、第卅六徑立第五標、自東第二標東去二町、第三徑立大角師標、東去一町、第四徑立小角師標、東去一町、第五徑立鉦鼓師標、更區別同廳前西南角地、亦畫地爲界、(謂之塞陣、)南北相分、中央一丈二尺亦爲大路、大路南北、各開縱四徑橫廿町、其北方第一徑、曲通廳前大路以西區西第一徑、第二徑通第三徑、第三徑通第五徑、第四徑通第七徑、大路以東區西第一徑、第二徑通第三徑、第三徑通第五徑、第四徑通第七徑、塞陣東極町、大路南北相夾各立楯一面、(備楯預二人、)楯後備鼓各一面、(備各一人、□□生、以下皆同、擔丁一人、)與楯平頭路中央立幡一旒、(執夫二人、)退西一許丈立楯領標、(用角師一人、將軍亦同、)第五町北置鉦一面、南鼓一面、(師及擔丁同上、)中央與鉦鼓平頭立幡一旒、幡後立將軍隊標、第八町南置答鼓、北多羅羅鼓、第十一町南北相夾、置多羅羅鼓、第十四町南北置多羅羅鼓、第十九町亦相夾立楯一面、訖設座於廳事、(當北戶南向設辨座、東方當楹西面設史座、其後去六許尺史生座、自此南去二許尺官掌座、西方楹北東面兵部輔座、南去三許尺丞座、南去三許尺錄座、丞座西去六許尺史生座、南去二許尺省掌座、南方北面當中央正座、西去三許尺佑座、西去三許尺令史座、)巳一刻、右辨并史率史生官掌等就座、訖兵部輔丞錄及司正佑令史、經廳以西屋南頭東行、從西區北第十七徑、進到大路、北向進就版立定、辨命云、召之、輔稱唯、(正帶五位、與輔共稱唯、)次六位以下共稱之、依次就座、訖生等左右分進、各就標、(大角生立第二標、小角并大笛生立第三標、鉦并鼓立第四標、)卽正申云、生等習(流)事申給(止)申、令史讀申、并唱其名、生等隨之稱唯、進就第一標、訖更東去一許丈列立、卽試所習才、每一人試畢、更東去三丈、北面東上面立、每足十人、角師一人稱云、直立生等稱唯、東去四丈、北面北上列立、試鍊已畢、正申云、試生等畢(止)申、辨命云、縱正以下依列稱唯、訖佑召角師名、師稱唯就版、佑命云、生等退給(幣)、師稱唯、至於本標稱云、生等退出(與)生等共稱唯退出、三師依次退出、次令史持第札退出、訖更三師率生等列塞陣、(大角生左右各列外極徑、其次第生一人立第一町、以下隔一町列立、其以內第二第三徑、幷列小角生、其列立之儀、一同大角生、)訖吹部一人進就版、(謂之節申、)申云、將軍之處(爾)常(爾)吹鼓鉦置(天)、朝日中夕夜半鷄鳴之時(止)、鉦三段擊、大角一節吹、小

角一節吹久、擊鼓初音細久、中大久、擊鼓二十四手遣一節天止之二行半擊八、擊手數六十手、次爾小角一節吹久、此者時止申須、隨之將軍隊北鉦師、幷南鼓師、各擊如申辭、以下應申吹角擊鉦鼓亦同次申云、人覺止大角一節吹久、申云、覺留軍乎裝束止、大角一節吹、次申云、裝束留軍乎政所爾集止、將軍之處爾大角一節吹、小角一節吹、擊鼓、將軍乃右鼓乎平聲爾、九段乎一節天止之三節擊、此乎聞天集立奴、次申云、集留軍乎、今波陣場爾楯領乎解出往介止、將軍乃右鼓乎擊上爾、九段乎一節天止之三節擊、同鼓乎道往鼓爾、六段乎一節天止之三節擊、次申云、此乎聞天楯領乃右鼓乎道往鼓爾六段乎一節天止之三節擊、四節爾波左鼓乎擊加天、導乃幡前仁立天、解出往奴、爰楯領陣進、自大路就第三標、次申云、最後楯乎見天將軍毛陣場爾往牟止小角吹、小角乃吹上爾鼓輪擊知、皮擊知、諸鼓擊知、小角乃竟爾波、答鼓擊[illegible]天、將軍毛陣場爾至立奴、爰將軍北鉦南鼓、幷將軍進大路、就第四標、次申云、今波楯領乎進行止、將軍乃右鼓乎、擊上爾、九段乎一節天止之三節擊、同鼓乎進鼓爾六段乎一節天止之三節擊、次申云、此乎聞天、楯領乃右鼓乎進鼓爾、六段乎一節天止之三節擊、四節爾波左鼓乎擊加天、楯擧天二段呼天進行、進行楯領乎留止、將軍乃左鉦乎五段擊、此乎聞天楯策天留立奴、爰楯領進就第二標、次申云、將軍進往牟止、右鼓乎進鼓爾六段乎一節天止之三節擊、四節爾波左鼓乎擊加天進往、楯領乎見天留立奴、爰將軍進就第三標、次申云、復楯領乎進往止、將軍乃右鼓乎擊上爾、九段一節擊、同鼓乎進鼓爾、六段乎一節天止之三節擊、次申云、此乎聞天楯領乃右鼓乎進鼓爾、六段乎一節天止之三節擊、四節爾波左鼓乎擊加天、楯擧天二段呼天進行、進行楯領乎留止、將軍乃左鉦乎五段擊、此乎聞天策楯留立奴、爰楯領隊、幷楯及鼓、進就第一標、楯領隊、幷幡在大路中央平頭下、將軍隊亦同、又將軍進行牟止、右鼓乎進鼓爾、六段乎一節天止之三節擊、四節爾波左鼓擊加天進往、楯領乎見天留立奴、爰將軍幷鉦鼓、進就第二標、自餘答鼓以下各進、就第三以下標、次申云、楯領二段、將軍毛二段、進往奴、今波戰牟止久、將軍乃右鼓乎領鼓爾、五段乎一節天止之三節擊、此乎聞天、楯領乃左右將軍乃左右大角小角諸鼓鉦相擊天、三段與止見天戰入奴、隨卽亂擊三度、謂之軍府次申云、戰入留軍乎留

止、將軍左鼓平擊下留、九段平一節止天之三節擊、次申云、此平開天楯領左鼓平擊下留、九段平一節止之
天行、擊答天立奴、次申云、今波將軍退往牟止、左鼓（須多羅鼓）羅道行鼓留六段平一節止天之三節擊、四節留波右
鼓平擊加天退行、退行將軍留牟止左方乃鉦五段擊、此平開天、來方留面還天留立奴、爰將軍以下退出、
（將軍退就第三標、更北向、以下亦隨之退立、）次申云、楯領毛退往牟止、左鼓平道行鼓留、六段平一節止天之三節擊、四節留波右鼓
平擊加天退行、將軍平見天來方留面還、策楯留立奴、爰楯領隊、并楯鼓、退就第二標、北向而立、次申云、
又將軍退往牟止左鼓平道行鼓留、六段平一節止天之三節擊、四節留波右鼓擊加天退行、退行將軍留牟止、左
方乃鉦五段擊、此平開天、來方留面還天留立奴、爰將軍退就第四標、自餘亦隨之退立、次申云、又楯領
毛退行牟止、左鼓平道行鼓留、六段平一節止天之三節擊、四節留波右鼓平擊加天退行、將軍平見天、來方留
面還天、策楯天留立奴、爰楯領隊、并楯鼓、退就第三標、自餘隨之亦退立、次申云、將軍二段、楯領毛二段
退立奴、今波政畢止、將軍之處留大角一節吹、小角一節吹、擊鼓、將軍乃左鼓平擊下留、九段平一節止之
天三節擊、次申云、此平開天楯領乃左鼓平擊下留、九段一行、擊答而立奴、次申云、今波將軍塞留入牟止、
小角吹、小角乃吹上留鼓乃輪擊諸鼓擊、小角乃覺波、答鼓擊（惡亘波天）、導幡前立天入奴、爰將軍以下皆率
入塞、次申云、楯領毛塞留入牟止、左鼓平道往鼓留、六段平一節止之天三節擊、四節留八右鼓平擊加天、楯領
毛塞留入奴、隨之楯領隊、及楯鼓皆入塞、（如陣列初）次申云、今者將軍從馬下牟止、大角一節吹、次申云、兵治留
軍平勤止止、鉦三段擊、次申云、隊隊之長平召止、大鼓三段擊、訖陣解去、辨史省官共退、

〔令義解五軍防〕凡國司每年孟冬、簡閱戎具、（謂戎具者、國內百姓隨身弓箭刀劒等之類也、）

〔日本書紀二十五孝德〕大化元年九月丙寅朔、遣使者於諸國治兵、（或本云、從六月至九月、遣使者於四方國、集種々兵器、）

〔日本書紀二十七天智〕四年十月己酉、大閱于菟道、

〔日本書紀二十九天武〕八年二月乙卯、詔曰、及于辛巳年、（○十年）檢校親王諸臣及百寮人之兵及馬、故豫貯焉、

十三年閏四月丙戌、詔曰、來年九月必閱之、因以教百寮之進止威儀、 十四年九月甲寅、遣宮處王、廣

馬揃

瀨王、難波王、竹田王、彌努王於京及畿內、各令校人夫之兵、

〔日本書紀三十持統〕七年十月戊午、詔、自今年始於親王下至進位、觀所儲兵、淨冠至直冠、人甲一領、太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、鞍馬、〇日本書紀通證云、此下疑脫二一四二字、勤冠至進冠、人太刀一口、弓一張、矢一具、鞆一枚、如此預備、

〔續日本紀十八孝謙〕天平勝寶四年十月戊寅、以常陸守從三位百濟王敬福、爲檢習西海道兵使、判官二人、錄事二人、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月壬子、軍士石村村主石楯、斬押勝、傳首京師、押勝者、近江朝內大臣藤原朝臣鎌足曾孫、平城朝贈太政大臣武智麻呂之第二子也、〇中略時道鏡常侍禁掖、甚被寵愛、押勝患之、懷不自安、乃諷高野天皇、爲都督使、掌兵自衞、准據諸國試兵之法、管內兵士、每國二十人、五日爲番、集都督衙、簡閱武藝、奏聞畢後、私益其數、用太政官印、而行下之、

〔續日本紀三十九桓武〕延曆五年八月甲子、使從五位下佐伯宿禰葛城於東海道、從五位下紀朝臣楫長於東山道、道別判官一人、主典一人、簡閱軍士、兼檢戎具、爲征蝦夷也、

〔續日本紀四十桓武〕延曆十年正月己卯、遣正六位上百濟王俊哲、從五位下坂上大宿禰田村麻呂於東海道、從五位下藤原朝臣眞鷲於東山道、簡閱軍士、兼檢戎具、爲征蝦夷也、

〔日本紀略二朱雀〕天慶四年六月六日乙未、於右近馬場、試瀧口中戸諸家及貞盛朝臣兵士、　廿四日癸丑、於右近馬場、試近江、美濃、伊勢等兵士、

〔兼見卿記〕天正九年正月廿五日庚寅、入夜惟任日向守書狀到來、今度信長有御上洛、而御馬汰也、御分國悉可罷上之旨、被仰付日向守之條相觸也、其內公家參陣之衆、可被罷出之旨御朱印也、案書寫來、予可用意歟之由申來也、

〔信長公記十四〕天正九年正月廿三日、維任日向守に被仰付、京都ニ而可被成御馬揃之間、各及程結

構仕、可罷出之旨、御朱印を以て、御分國中御觸在之、　二月廿八日、五畿內隣國之大名小名御家人を被召寄、駿馬を集、於天下被成御馬揃、聖王へ被備御叡覽訖、上京內裏之東に、北より南へ八町ニ馬場をやり、馬場中に竪に高さ八尺に、柱を毛氈を以てつゝませ、埒をゆはせられ、抑禁中東門御築地之外ニ、行宮を立させられ候事、借染とは申ながら、鏤金銀、從淸涼殿、帝雲客卿相殿上人、衣香撒、當四方に薰じ、其粧さも花やかなる御粧にて出御有、攝家淸花之御衆、歷々甍を並、皇居之四面を守護し申され、左右に御棧敷を打せられ、扨も儀式御結構、美々敷有樣、筆ニも詞ニも難述、何れも何れも晴ならずと云事なし、下京本能寺を信長辰剋ニ出させられ、室町通御上りなされ、一條を東へ、

御馬場入之次第

一番ニ　惟任五郎左衞門長秀　（井）攝州衆　若州衆　西岡の河島　二番　蜂屋兵庫頭　（井）河內衆　和泉衆　根來寺之內大ヶ㠀　佐野衆　三番　維任日向守　（井）大和　上山城衆　四番　村井作右衞門　根來　上山城衆　御連枝之御衆　三位中將殿信忠　御內衆、御馬乘八十騎、美濃衆　尾張衆　北畠中將殿（○信雄）　御馬乘三十騎　伊勢衆　織田上野守（○信兼）　御馬乘十騎　神戶三七殿（○信孝）　御馬乘十騎　津田七兵衞殿（○信澄）　御馬乘十騎　源五殿　又十郎殿　勘七郎殿　周防　中根殿　竹千代殿　孫十郎殿　源二郎殿　御公家衆　近衞殿　正親町中納言殿　烏丸中納言殿　日野中納言殿　高倉藤右衞門佐殿　細川右京大夫殿　細川右馬頭殿　伊勢兵庫頭殿　一色左京權大夫殿　小笠原　長岡兵部大夫殿　同與一郞殿　同頓五郞

御馬廻御小性衆、何れも十五騎ヅヽ、與々を被仰付、

越前衆

柴田修理亮　柴田伊賀　柴田三左衞門　不破彥三　金盛五郎八　前田又左衞門　原彥次郞

佐々內藏佐　御弓衆百人　頓而御先を平井久右衛門、中野又兵衛両人、二手ニ分而二段ニ參候也、是ハ一統に打矢を腰にさゝれたり、

御馬ひかせられ候次第　御厩別當靑地與右衛門御率行也

右御先 桐杓持 草履持　みちげ 御のぼりさし　左御先 水桶持 桐杓持　御のぼりさし 今若　一番　鬼蘆毛　御くらがさね唐織物、同あをり同前、雲がたはこうのきんらん也、　二番　小鹿毛　三番　大蘆毛　四番　遠江鹿毛　五番　小雲雀　六番　河原毛　此御馬と申は、奥州津輕日本迄、大名小名によらず、是ぞと申名馬、我も〳〵とはる〳〵牽上せ進上仕候、餘多之名馬之其中に而、勝れたる御馬也、於我朝、是に上こす不可有御馬、御皆具不及申、何れも色々に御結構無申計、御中間衆出立、立ゑぼし黃成水干、白き袴すそに草鞋(ワラジ)也、　七番　夕庵山うばの出立に而、此外坊主衆長安、長雲、友閑御先ニ參らるゝ、　八番　御曲彔持四人、御率行市若、地を金に雲に浪を繪取たり、

右 御先小性 御小人五人　御杖持 御行縢持　北若 小市若　御長刀持　ひしや

左 御先小性 御小人六人　御行縢持 御太刀持　小駒若 糸若　御長刀持　たいとう

御馬大黑にめされ　總御小人廿七人

御行縢地を金に虎の府を綱に御くらがさね、御あをり、御手綱、腹帶尾袋まで同前、紅之大房の鞦に、やうらくを付させられ候也、御小人衆あかき小袖に、こう地白の肩衣、黑皮の袴一統也、

御內府之御裝束、御眉に而きんしやを以て御ほふこふめされ候、今度京都、奈良界にて珍敷唐織物被成御尋、各御枝葉之御衆御裝束と被仰出之處、近國隣國より、我不劣と上品の唐綾、唐錦、唐縫物等、盡其員備上覽奉る者也、此きんしやと申者、昔唐土か天竺にて、天子帝王の御用に織たる物と相見候て、四方に織止有て、眞中に人形を結構に織付たり、今又天下納て、內裏仙洞御ほふこふの御用に可能立爲參りたり、態爲被織如く、御ほふこふ似合申也、上古之名物、幷見難有次第也、御

頭巾とうかむり、御後之方に花を立させられ、高砂大夫之御出立歟、折二梅花一插レ首、二月雪落レ衣此心
か、御腐にめさせられ候御小袖、紅梅に白のだん段々にきり唐艸也、其上に蜀紅之錦の御小袖、御
袖口にはよりきんを以てふくりんをめされ候、是は昔年大國より、三卷本朝へ渡りたる内の其
一卷也、永岡與一郎都にて尋搜求進上、古今之名物共參集、御名譽無レ申計、御肩衣べにどんすにき
りから草也、御袴同前也、御腰にぼたんの作花をさゝせられ、是は禁裏樣よりまゐりたる由也、御
腰蓑白熊御太刀御のし付、御はきぞへはさや卷ののし付也、御腰に鞭をさゝせられ、御ゆがけ白
革にきりのとうの御紋あり、御沓は猩々皮、立あげは唐錦、花やかなる御出立にて、御馬場入之御
儀式さながら住吉明神御影向もかくやと、心もそゞろに各神感をなし奉り訖、然ば隣國之群集、
晴がましきに付て、愛を專と思々の頭巾出立は、我不レ劣とあらゆる程之御結構、生便敷各手を盡
し、面々の衣裝、下には過半紅梅紅筋、上着は薄綸唐縫物、金襴唐綾、狂文之小袖、側次袴同前、各腰蓑
付られ候、或きんへい、或紅の綵縫物を切さきにして被レ付たるも有、馬具押懸、鞦三尺縄、各上品之
紅之綵を以て、大房にくませられ、又金襴段子を以て、つゝませて、大房にきんへい紅之綵を付た
るも有、又五色之綵に而くませたる鞦もあり、踏皮草鞋等ニ至まで、皆五色之綵に而作らせ、太刀
は過半のし付也、生便敷仕立、結構と申は中々愚也、數百人之事なれば、一々には志るし得ず、初は
一與に十五騎づゝと被二仰出一候へども、ひろき御馬場にて、三與四くみづゝ一手に成、入違々々無二
透間一馬に行當候はぬ樣に、埒を右より左へ乘廻し、辰剋より未剋までめさせられ、駿馬の集是又
一々難レ記、勿論御料の御馬、細々めしかへさせられ、誠飛鳥なんどの如く也、關東より祗候之矢代
勝介、是にも御馬乘させられ、三位中將殿驄之御馬、勝れたる早馬也、御裝束事にすぐれて花やか
也、北畠中將殿河原毛御馬、三七殿糟毛御馬、目に立て足きゝはや馬達者無二比類一、此外何れもおと
らぬ名馬、いづれを何れ共申難し、似相々々の御裝束、是又催レ興有樣也、後には御馬ども懸足にめ

させられ、被備御叡覽、皆々馬上之達者、花麗成御出立、本朝之儀は不及申、唐土高麗迄も、かほどの樣不可有之、貴賤群集之輩、かゝる目出度御代に生合、天下安泰にして、黎民烟戸さゝず、生前思出、難有次第にて、上古末代の見物也、然而御馬めし候半、十二人之御勅使を以て、かほど面白御遊興、天子御叡覽、御歡喜不斜之旨、忝も御綸言、併信長御面目不可勝計、及晩被納御馬、本能寺に至而御歸宅、千秋萬歳珍重々々、　三月五日、從禁中御所望ニ付て、又御馬めさせられ、此時者御馬揃之中の名馬、五百餘騎を寄させられ、御裝束は黒き御笠に、御ほふこふ何れもめされ、黒き御道複(ダウブク)に御たち付、御腰蓑させられ候也、抑御門百敷之大宮人、女御更衣等、其數美々敷御粧にて御幸有て、被備御叡覽、御遊興御歡喜不斜、信長御威光を以て、忝もかけまくも、一天君萬乘之主を、間ちかく拜み奉る事、難有御代哉と、貴賤群集之輩、合掌感じ敬申訖、〇原本有錯脫、據一本補正、

〔御湯殿の上の日記〕天正九年正月廿四日、さゆんちやうけん所へ、くわんじゆ寺中納言、左大辨宰相ひろはしして、みやこにてさぎつちやうあらば御らんせられたきよし、のぶながに申候へとの御つかいにてまゐらせられ候へば、かへり事に、けふ上人あがりて、申候はんとぞんじ候所へ、ちか比さかるべきよし、御かへり事申、

〔立入左京亮入道隆佐記〕天正九年辛巳正月十八日に、江州於安土御爆竹を信長させられ、諸大名をよせ、金銀をちりばめ、天下に其聞無隱事候、就其於京都可有御興行之由被及叡慮聞召、同二月五日以内々上臈御局樣御さたを被差下候、同下之御所さま若御局樣之五いを被差下候、則立入立佐入道を被差副安土へ御下候、八日信長之御機嫌なのめならず、御返事被出、内々御請被申候、御使之衆上下共けつこうほんそう御振舞にて、九日に京着仕候つる、就中惟任日向守へ正月廿三日に御觸狀を被出、五畿内を被相觸候、觸狀如此候、　先度は爆竹諸道具拵らへ、殊きらびやかに相調、思よらずの音信、細々の心懸神妙候、然者重而京にては切々馬を乘可遊

候、自然にわかやぎ思々の仕立可有之候間、其方事者不及申、畿内之直に奉公之者共、老若共可出候、其方請取可申觸之候、於京都陣參被仕公家衆、又只今信長に扶持を請候公方衆、其外上山城奉公者共、不殘内々可用意旨可申聞候、於大和者、筒井順慶其外國持取次直參いたす者共可用意事尤候、津國にては高山瀨兵衞親子、池田、是は子共兩人、親者伊丹城之留守居たるべく候、從多田者鹽川勘十郎同橘大夫是兩人、河内にては多羅尾父子三人、池田丹後、野間左橘、同與兵衞、其外取次者結城安見新七郎、三好山城、是は安波へ遣候間、其用意可除之、但於望者覺悟次第可乘候、和泉にては寺田又右衞門、松浦安大夫、沼間任世、同孫、其外直參之者共根來寺連判扶持人共、其外杉坊佐野一流之者共可用意、次大坂在之五郎左衞門、蜂屋方へも其用意可申送候、若狹よりは武田孫大、内藤、熊谷、粟屋、逸見、山縣下野可出候、是は五郎左衞門可申遣候間可申候、六十餘州へ可相聞候條、馬數多可仕候、其外手寄之あとに可乘もの在之者可申付候、長岡父子三人、但兵部大夫は丹後に在之候よし候、兄弟二人、一色五郎これも可乘旨可申送候也、

二月二十三日　　　御朱印信長

惟任日向守どのへ

〔藩翰譜山内七上〕昔一豐、織田家に出て仕へし初め、東國第一の名馬たりとて、安土に引來て商ふ者あり、織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり、されども價餘りに貴くして、買ふべき人一人もなく、空しく引て返へらんとす、其頃一豐は猪右衞門尉と申せしが、此馬ほしく思へども、求る事如何にも叶ふべからず、家に歸りて、世の中に身貧しき程口をしき事はなし、一豐仕の初めなり、かゝる馬に乘て見參に入たらんには、屋形の御感にも預るべき者をと獨言いひしに、妻はつく〳〵と聞いて、その馬の價いかばかりにやと問ふ、黃金十兩とこそ云ひつれと答ふ、妻さほどに思ひ給はんには、その馬もとめ給へ、あたひをばみづからまゐらすべしとて、〇中略これは

わらはが父の此家に參りし時に、この鏡の下に入れ給ひて、あなかしこれよのつねの事に用ゐるべからず、汝が夫の一大事あらん時に參らせよとて賜ひき、〇中略まことか此度都にて御馬揃へあるべしなど聞こゆ、もしさもあらんには天下の見物なり、君また仕へのはじめなり、かゝる時ならでは、屋形にも傍輩にも見知られ給ふべきよしもなし、よき馬めして見參に入れ給へと思へばこそまゐらすれと云ふ、一豐やがて其馬もとむ、程なく都にて馬揃へのありし時、織田殿此馬御覽あつて大に驚き給ひ、あつはれ名馬や、何者の馬ぞと仰ありしに、是は東國第一の馬なりとて、商人が引て參りしが、餘りに價たつとくして、誰も買ふ事叶はず、空しく引て歸るべかりしを、山内が買ひ得て候ひしと申す、信長聞召し、價貴き馬なり、當時天下に信長が家ならで買ふべき人なしとて、奥よりはるばる來りしを、空しく還したらんには無念の至りなるべし、その山内は年頃久しき浪人と聞く、家もさぞ貧しからんに、買ひ得たる事の神妙さよ、且は信長の家の恥をもすゝぎ、且は武士のたしなみいと深しと感じ給ふ事大方ならず、これより次第に身を起せしといふ、誠にや、

〔松平家譜〕文久三年七月二十四日、傳奏を以て、二十八日建春門外に於て馬揃を爲し、天覽に供すべし、雨天順延の命あり、

本月十九日、關白鷹司輔煕、傳議兩奏を會し、松平慶德、松平茂政、上杉齊憲、松平茂韶、阿部正方、山內豐積等を召し告げて曰く、幕府攘夷の勅を奉ずと雖も、因循今に至りて事實行れず、而して長州既に其端を開き、事兩端に渉るを以て、或は天皇親征の議あり、或は別に適宜の處置あるべきの論あり、宜く速に意見を奉るべし、慶德等曰く、親征も亦可ならん、然れども公卿始め未だ軍裝せしこと無し、會津は守護の職に任じ、臣等も亦此に在り、故に先づ其軍裝を観、砲擊に慣れ、然後之を議す可しと、衆議小異同あれども、親征を以て可とする者なし、是に於て馬揃觀

覽の命ありと云ふ、此時に方りて慶德、茂政、茂韶、齊憲等朝議に參し、詔勅の下るもの必らず四人の手を經、其密議の如きに至りては、四人も亦與るを得ざるものありと云ふ、今此親征重大の事件と雖ども、尋問曾て守護職に及ばず、家臣等之を憤り、容保に退職を勸る者あれども、容保已に聖慮の所在を感戴し、之を肯んせず、

二十八日、二十九日雨ふる、晦亦雨ふる、故に順延を稟す、曰く急出陣は時日を擇ばず、雨天日暮も亦妨げずと、往復の間未牌に至る、容保乃ち令を下し、士衆をして急に凝華洞に聚らしむ、建春門より北數十歩の外に於て、高く觀棚を設け、主上〇孝明出御あり、堂上及諸侯亦皆棚を其下に設けて之を觀る、士卒皆甲を着け、鉦鼓螺及び五方旗を設くる等、皆藩の舊制に仍る、兵隊御所の西北を繞りて練場に出づ、容保〇會津藩主隊間に在りて之を指揮す、操練一周して日已に暮る、場傍篝を焚く、而して雨未だ止まず、命ありて之を止め、更に他日を期せしむ、

八月朔、特に容保を召し、大和錦二卷、白銀二百枚を賜うて曰く、

馬揃雨天順延御沙汰の所、俄に可有御覽旨被仰出、速に順列相調叡覽に備、御滿足に候、從來軍備熟練御感候、依之目錄之通賜之、

五日、復た馬揃を爲して叡覽に供す、操練一周、終りて各隊皆列に就き糧食し、小憩して又二周す、終て各隊、次序整肅凝華洞に入る、此日容保、所賜の大和錦を以て製する所の戰袍を着け、始終隊間にありて之を指揮す、因幡、阿波、備前、米澤四藩、亦操練を爲し天覽に供す、畢りて天皇特旨容保を召し、戎衣の儘御車寄の階下に至らしめ、練兵の素あるを賞して、水干馬具黄金三枚を賜ふ、

初め馬揃の命下るや、練兵數箇の條目を擧げ、傳奏に因りて決を請ふ、小砲空發の條に至りて堅く之を拒む、只三四發せんといへども可とせず、大砲は唯裝藥點彈の狀を爲んといへども、其形を見るだも且つ欲せずといふ、松阪三内、私に豊岡隨資に就きて發砲を禁ずるの由を問

ふ、曰く、會津の士强悍、或は勢に乘じて實彈を發するを恐ると、聞者倘能く親征を主張する者あるを恠む、松平慶德之を聞き請ふ、練兵に發砲せざれば勢なしと、自ら往きて朝廷に請ひ、三四發の空砲を許さるゝに至れり、

〔三條實美公記 七〕文久三年七月三十日、建春門（俗稱日御門非也、日門代在建春門北、）前ニ於テ、親征首途ノ爲メ、松平肥後守戎裝式ノ調練ヲ行ヒ、叡覽ヲ請フ、天皇同門北ニ棧敷ヲ設ケ（翠簾）出御、晡時頃開場、調練央ニシテ强雨下ル、之ニ仍リ場ヲ罷ム、翌月五日ニ至リ、復調練ス、

非藏人日記ニ曰ク、先是御覽所、建春門北ノ方穴門外被設、小四方（大臣方ト云フ）以下拜見場所少シ經テ、南ノ方被設、　一今日警固ノ武士、因州阿州（淡路守）上杉備前等也、　一議奏傳奏衆、近習衆等、拜所被詰、（公列座）　一調練ノ武士、一番手相濟、二番手取掛リノ砌、追々依强雨、臨期延引被仰出、

八月五日、建春門前會藩戎裝ノ馬揃陸軍式、去三十日天覽アリ、降雨ノ爲メ央ニシテ止ム、仍テ是日再ビ天覽ニ及ブ、未中刻出御、會藩先ヅ調練シ、次デ因州藩、備前藩、阿州藩、米澤藩等、陸軍大炮連發式ヲ行フ、而シテ各藩火事裝束、一藩一隊、藩主各之ニ將トシテ指揮ス、戌刻過入御、

或ハ曰ク、此回會津藩ガ練兵ノ天覽ヲ請ヒシハ、元深謀遠慮ニ出タルナリ、之ニ用ヒシ火器兵具等、之ヲ黑谷ノ本陣ニ輸還セズ、悉ク凝花洞ニ蓄フ、初人其何ノ故ナルヲ知ラズ、是月十八日ノ變起ルニ方リ、大ニ其用ヲ爲セリ、

〔元寬日記〕寬永十年八月三日、將軍家（〇德川家光）品川へ御成、是自象日、老中御近習（井）御旗奉行諸番頭組中物頭、其外御使番御目付以下馬揃可有上覽之旨依被仰出、今日有馬揃、着具足羽織指陣刀、其衣裳綾羅錦綉、奇羅輝天、鞍鐙鑣、金銀押掛、厚總、小總猩々緋畫、風情見物之人令悅目、及暮還御、

〔續々泰平年表〕安政二年八月廿七日、軍行馬揃上覽、（同十七日、海防懸リ御目付達、今度馬揃上覽之節、三千石已上之面々、采幣相用、士卒指揮いたし不苦、座敷之者ニ而も、當日罷出不苦、曉七時揃、場所植溜也、一番貝に而着具屯所、四番所邊迄、三番貝に而屯所出拂、上覽所前通行之節、馬上之儘平伏、從者居敷平伏、畢而御目見し）

有之候はゞ、甲冑之儀扣可ㇾ在候、被ㇾ下物有ㇾ之節、御饗應勤不ㇾ及候、相濟御島内江繰込、上覽所御玄關前にて御切飯被ㇾ下ㇾ之、初而廿七日、大番頭、御書院番頭、御小性組番頭、百人組頭、御持頭、火消役、御先手、御徒頭、小十人頭、右組者、九月二日、百人番頭、新番頭、御持頭、火消役、御先手、御徒頭、小十人頭、同七日、前同斷、同十六日、前同斷、同十八日、中奧御小性、中奧御番寄合面々、御番衆申合、尻鞘太刀鎧大袖遠慮之由、稻葉兵部少輔、久貝因幡守兩人物具各別美麗なりと云、

〔家忠日記七〕天正廿一年（〇文祿二年）九月四日乙卯、城へ出仕候、御馬進上候へ共、去五月之御馬揃に黒馬とらせられ候間、無用之由にて御返し、

〔奥羽永慶軍記三十七〕最上義光騎馬揃事

同（〇慶長）十一年冬、義光一門郎等ヲ鶴ケ岡ニ召シ、扨モ近年ハ諸國靜謐ニテ、諸人遊山榮耀ノミニ誇ヌレバ、家中ノ武道取失フ事モ有ベシ、來正月ハ最上ノ郡天童ノ野ニ於テ、騎馬ヲ揃テ見物セン、其用意セヨトイハレケレバ、相心得候ト一々相觸ケリ、是ヲ聞テ山形鶴ケ岡ノ旗本ハイフニ及バズ、温泉、藤島、櫛川、龜崎、由利、赤尾、津、上ノ山、長谷堂、白岩、谷地、寒河江、鮭登、小國、清水、延澤、楯岡、東根等ノ與力陪臣ニ至マデ、馬武具母衣旗差物馬印ナド丶テ、爰ヲ晴ト出立ヌ、同十二年正月十一日、義光申サレケルハ、秋田ノ境赤尾津ノ與力二百十一騎、鶴ケ岡百五十騎、龜崎百騎、寒河江三十騎ハ、諸城ノ押ナレバ、今度ノ騎馬揃ニ出ベカラズ、重テ一見スベシト境毎ニ相觸、用心稠シクセラル、馬揃ハ正月十五日ニ定ラル丶ニ、此事越後米澤仙臺山北ノ境ヲ隔シ所ヘ聞ヘケレバ、最上騎馬揃ヲスルヨシ、委シク見テ參レト、目付ノ者ヲ遣スニ、皆物ニ紛テ在々所々ニゾ充滿ケル、其外隣郡ヨリ來リ見ル者モ、貴賤群集セリ、既ニ今日出ント觸ヲ待所ニ、義光昨日山形ニ來給ヒテ、今度ノ役人安食大和守ヲ召、騎馬帳見給ヘバ、都合三千七百廿騎ゾ有ケル、義光此騎馬ハ皆々山形ニ相詰ケルカト問給フ、安食承ニ、一騎モ殘ラズ相詰候ト申、義光聞給ヒオ、ヨシ〳〵天童ニ出テ汰ユルニ及バズ、騎馬帳ヲ見テモ同前也、皆々歸ス・シトイハレケレバ、爰ヲ晴ト出立シ者ドモ、己々ガ宿所ニゾ歸ケル、所々ヨリ見物衆モ皆々歸リケリ、義光父子三人其外一門モ、假屋彩シ

ク輕蔑ヲ打セケルガ、其心底奥深シト感ジケル者多カリケリ、

〔兵要錄九練兵四上〕練心膽　夫兵士之爲職也、在崇文德養武義、致身竭忠爲國之干城矣、蓋文武猶表裏、偏廢則不足以盡士道矣、鳥翔有兩翼之擊也、車行有兩輪之轉也、士德有文武之成也、故曰、兵者以武爲植、以文爲種、如不獲其穀種、何以栽植焉、　仁與禮者文德也、義與勇者武德也、知德之所以行者智也、誠之於行者信也、這箇六德、非自外將來做去焉、性之所固有而具於心、這心也、操則存、舍則亡、士若於武有所舍、則不足以議焉、於文或舍而不修、則亦不足以爲士矣、　信者文武之樞紐也、若無信、則仁者止乎姑息、禮者流乎諂諛、智者文乎譎詐、義者事乎任俠、勇者陷乎暴賊、共非德也、夫士有信、而後治則可佐教化、亂則可除民害、乃足以爲國之衞也、　凡士守節致死、其志爲義者上也、爲名者次也、本朝之士風甚貪乎名、故或有誤認要名以爲義者、蓋行義而成名者善也、要名而成功者卑也、況其志專於利祿者乎、雖有戰功、亦不足以爲士矣、　羞名近于義、羞者責於己也、求名遠于義、求者心在外也、故管多方、做虛套、專事粉飾、實事日偸矣、安得而所求者至乎、所謂有求全之毀是也、○中略　夫忠者豈惟奉命忘身、殉國忘家、會敵犯鋒、臨難死節已矣、在乎行義而不求其名、竭忠而不計其利、保君而不憂辱躬、功成名顯不肯伐、守身愼德、要殉於社稷之安危、而竭人臣之節矣、

〔宕陰存稿四〕步操軌範序

唐虞三代之世、其講兵演武、何其深也、○中略　人唯知蒐苗獮狩之爲練兵、而不知庠序學校之禮、朝庭鄉黨之樂、莫不寓講武之意也、○中略　今西洋之銃與唐虞三代之射同、其用陣艦火輪船、與木輅革輅同、其工作之精、拔隊龍百羅屯之練、與興樂大師之敎、蒐苗獮狩之閱同、其坐作擊刺分合進退之節、制度有淺深者道之殊也、器藝有短長者時之變也、方今取其火術以名一家者、下曾禰先生爲最盛、此編以牧培蘭之筆、配諸先生之術、相扶以行、兵制之變將自此始矣、○中略　若夫敎師藝技、而明者擇焉、下有專門之學、則上有集以定制者焉、變而通之、存乎其人、然則此編固步操之軌範、亦師律之階梯哉、

〔水藩聞見錄上〕二月〇天保十四年二十日ニ江戸ヲ出立シ、〇小島洪許常州ニ赴ク、〇中略二十五日ノ夜ハ下町六丁目ナル知己ノ家ニ泊レリ、宿ノ主人ノ噂ヲ聞ニ、初メ水府侯曾テ野猪ノ四年子ヲ四頭ヲ飼シメ、馬屋側ニ四間四方ノ升形ヲ造リ、此中ニ猪ヲ追セ入置テ、調練ノ時ニ此猪ヲ追出シ、諸軍士ヲシテ手捉ニセシメントノ儲ナリ、家中ノ諸士此ヲ聞テ、其猪ヲ見ント欲シ、升形ニ近寄トキハ、猪忽ニ怒ヲ發シ、大ニ吼テ飛掛ントスルノ猛威ヲ作ス、然ルニ調練ノ前日ニ至テ軍令ヲ下シ、凡猛獸ニ遇テ鎗刀ヲ用ルコトナク、總テ手捉ニ爲ベシ、軍令ニ背ク者ハ死罪ニ行ン、モシ猛獸ニ遇テ逃者ハ、追テ沙汰アラント、故ニ諸士等大ニ恐惶リ、然ルニ當日ノ備ニ押ニハ、其猪ニ大綱ヲ付ケテ引セラレシカドモ、操練ノ時ニ至テ、何處ニ遣サレシニヤ、猪ノ形ダニ見タル者ナシト云、

古事類苑

兵事部十二

戰鬪上

古事類苑

兵事部十二

戰鬪上

戰鬪ハタヽカヒ、若シクハイクサト云ヒ、後又合戰、戰爭ナドトモ云ヘリ、卽チ敵味方互ニ兵ヲ交ヘテ相鬪爭スルヲ言フナリ、

凡ソ戰鬪ノ法ハ、兵器ノ進步ト相待テ漸ク變ジタルモノニテ、往時ハ專ラ刀、槍、弓箭等ヲ用キ、其戰場ニ臨ムヤ、敵味方互ニ名乘ヲ爲シ、其門地ヲ擧ゲ、祖先ノ美ヲ稱揚シ、次ニ己ノ從前ノ戰功ヲ陳ヌルモノアリ、又組打ト稱シテ、馬上ニテ格鬪シ、或ハ地上ニ展轉シ、或ハ故ラニ刀ヲ棄テ兩手ヲ張リテ格鬪ヲ求メ、敵ノ首級ヲ獲ルヲ以テ勇士ノ名譽ト爲セリ、是ヲ以テ士卒等各、先登ニ志シ、競テ一騎驅、拔驅等ヲ爲スモノ多カリキ、

足利氏ノ末、鐵砲ノ渡來スルニ及テ、從前ノ甲冑殆ド其用ヲ爲サズ、從テ隊伍ノ編成、戰術ノ運用ノ如キモ亦大ニ面目ヲ新ニスルニ至レリ、卽チ其法タル、鐵砲、弓、長柄、武者ノ四段ニ備ヘ、彼我相接スル凡ソ二三町ニシテ先ヅ銃ヲ發チ、半町ニシテ弓ヲ射、十三四間ニシテ長槍ヲ用キ、最後ニ機ヲ見テ短兵急ニ接セシム、之ヲ一ノ手ノ拵合ト稱ス、而シテ其勝敗尙ホ未ダ決セザル時ハ、更ニ二ノ手ノ合戰ト稱シテ、急ニ貝ヲ吹キ鼓ヲ鳴シテ、前後左右ヨリ擊破セシム、是ヲ近代ニ於ケル戰鬪法ノ概略ト爲ス、

此篇ハ特ニ陣法、隊伍、及ビ兵器ノ諸篇ト相關聯スルモノ多シ、宜シク參看スベシ、

名稱

〔伊呂波字類抄 太人事〕戰タヽカウ　鬪　征　陣已上タヽカウ

〔類聚名義抄 九戈〕戰之綿切タヽカフ

〔倭訓栞 前編十四多〕たゝかふ　古事記にみゆ、戰ひを讀り、たゝきあふ也、きあ反か也、よて合戰とも擊戰ともいへり、

〔日本書紀 三神武〕戊午年十有一月、先是、皇軍攻必取、戰必勝、而介冑之士、不無疲弊、故聊爲御謠、以慰將卒之心焉、謠曰、哆哆奈梅氏、伊那瑳能瑘摩能、虛能莽由毛、易喩耆摩毛羅毗、多々介陪麿、和例破椰隱怒、之摩途等利、宇介譬餓等茂、伊莾輸開珥虛禰、

〔運步色葉集 伊〕軍イクサ師

〔比古婆衣 十〕いくさといふ言　いくさと云ふ言のもとは、古言に弓射て矢の物を通すかたにつきて、射くはすといひ、又矢を射遣るかたにつきてさと云ひ、さて其わざをこゝろみるをいくさと云ひ、其試の目當とするものをいくはといへり、さてそのいくさといふを、仇と戰ふ事に轉じてもいふを、後世にはその戰ふ事をのみ、いくさと云ふ言となりしものなるべし、

〔假頭屋本節用集 加雜用〕合戰カツセン

〔書言字考節用集 八言辭〕合戰カツセン　戰タヽカヒ 左傳、兩兵相接曰戰、朱子云、交兵曰戰　鬪　〔同 九言辭〕戰陣センジン　—鬪セントウ　—爭センソウ

〔漢書 一高帝〕元年十二月、亞父范增說羽、○中略於是饗士、旦日合戰、是時羽兵四十萬、號百萬、沛公兵十萬、號二十萬、

〔保元物語 一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

左府○藤原賴長卽合戰ノ趣計ヒ申セト宣ヒケレバ、某ハ爲朝久ク鎭西ニ居住仕テ、九國ノ者共從ヘ候ニ付テ、大小ノ合戰數ヲ不知、中ニモ折角ノ合戰二十餘箇度也、

〔甲陽軍鑑 九下品第二十七〕此合戰○上田原五度なりと申は、板垣初。合。戰。に勝一度、村上方二。の。合。戰。に勝二

度、飯富兵部三の合戰に勝三度、村上旗本にて晴信公旗本へ懸て三町ほどくづす、四度馬場民部さいはいを取て懸て、村上殿旗本を追ちらして敵を討取て、五度めには終に晴信公御利運になされ、〇下略

〔易林本節用集〕言辭 軍陣(グンヂン)

〔甲陽軍鑑〕十五品第四十一 國持給ふ大將の、自國他國をあらそひ、せりあひ合戰、又は城せめなど、いふ勝負をばこれ軍陣と申す、

〔大塔物語〕九月〇應永七年廿三日、其勢八百餘騎、自寺家打出犀河打渡、横田郷取陣、敵餘目猛勢、守透移于鹽崎城、爲待軍評議、

〔甲陽軍鑑〕九上品第二十一 一敵諏訪衆、村上衆二手にわけて境目迄參り、いかにもつゝしみて働申べし、むし川口へ典厩樣、わかみこ口へ屋形樣御旗を向られ、境目にて待合戰になされ候て、然べく候事、

〔長門本平家物語〕十四 大將軍權亮三位中將の給けるは、いかなればまいど軍にまくるぞ、御かたは大勢なり、かたきは小勢なり、平組の軍にまくる事こそ心得ね、

〔源平盛衰記〕二十一 小坪合戰事

小太郎義平ニ問ケルハ、義盛ハ楯突ノ軍ニハ、度々アヒタレ共、馬ノ上ハ未知、イカヾ有ベキトイヘバ、〇下略

〔源平盛衰記〕三十七 熊谷父子寄城戸口幷平山同所來附成田來事

平山熊谷ニ語ケルハ、打籠ノ軍ハ剛臆見エス、如何ニモ追手ニテ、鍔金顯サント思テ、子時ニ山ノ手ヲ忍出タリツレバ、寅時ニハ爰へ來付ベカリツルヲ、〇下略

〔明德記〕中 去程ニ一色ノ右京大夫二條ヲ東へ懸出デ給ヘバ、勘解由ノ小路ノ治部ノ大輔義重モ、

五百餘騎ニテミエタリ、大内左京權大夫モ今度ハ打籠ノ軍也、下立テハ敵ニ相ニヲクル、ベシ、皆々乘レト下知シケレバ、○下略

〔源平盛衰記二十九〕俱梨伽羅山事

木曾ハ六動寺ノ國府ヨリ打上テ、般若野御河端ヘ著ニケリ、是ニテ軍ノ談議アリ、平家ハ大勢ト聞、御方ハ無勢也、彼礪並山ヲ越レテ、松永邊、柳原、小矢部ノ河原ヘ打出ナバ馳合ノ軍ナルベシ、

〔太平記二十二〕義助朝臣病死事附鞆軍事

土居得能以下ノ者共、同ク死ナバ、我國ニテコソ、尸ヲ曝サメトテ、大可島ヲ打棄テ、伊豫國ヘ引返ス、敗軍士卒相集テ、二千餘騎有ケル、其中ヨリ日來手柄露ハシ、名ヲ被知タル兵ヲ、三百餘騎勝リ出シテ、懸合ノ合戰ニ勝負ヲ決セント云、

〔相州兵亂記三〕小弓義明ト合戰ノ事

義弘○里見以下ノ兵ドモハ、大將ノ行衞モ不知、氏綱ノ旗本ト懸合ケルガ、五十騎ニ打ナサレ、○下略

〔大友記下〕豐州勢高城ヲ責事附耳川合戰之事

今日○天正五年十一月十日ノ卯ノ刻ヨリ軍ハジマリ、終日之合戰ニ島津勢ヲ川中ヨリヲイアゲ、豐州勢イクサ場ヲトリテ、備ヲダン〳〵ニ固メ、一手切ノ合戰ヲトゲ、鑑直サイハヒヲ取テ武者ヲアゲ、合戰ノ次第宗麟公ヘ言上シ、明ヲ遲シゾマチキタリ、

〔奧羽永慶軍記十五〕佐竹與伊達安積合戰付岩城石川扱事

同○天正十六年六月廿三日、佐竹方ヨリ大繩隱岐守、大塚源之助、幕内東野其外足輕大將七八騎出テ、人數四百五拾人出張シテ、窪田郡山ノ中ノ間ニ堀ヲホリ、郡山ノ構ヘニ毎日鐵炮ヲ討セケレバ、伊達方忽通路止ル所ニ、伊達上野介政景足輕ヲ出シ端合戰ヲハジム、

〔大友興廢記十四〕島津義久公人數を出さる、事同軍の事

宗天〇佐伯内の家老をあつめ、今度鎮周〇田北邪の分別にて、たゞ死なん事のみ思ひ、軍に勝べき行は一つもなし、其儀ならば人數を備へ、軍法の沙汰も極らず、まばらがけの軍して利を失はん事、案の内なりとの給ふ、

〔太閤記九〕池田勝入父子討死之事

秀吉〇中略篠木、柏井に兩城を拵へ、一揆原に多くの扶持方など扶助し、毎夜敵の在々へ夜討を入、おびやかす程ならば、尾州半國は味方に屬し候べし、必敵を侮候な、まばらがけし侍るなと諫めて勝入を歸し給ふ、

〔太平記十七〕京都兩度軍事

將軍始ハ態ト小勢ヲ河原へ出シテ、矢一筋射違ヘテ引ントセラレケル、〇中略寄手片時ガ間ニ五百餘人被討テ、西坂ヲ差テ引返ス、サテコソ京勢ハ又勢ニ乘リ、山門方ハ力ヲ落シテ牛角ノ戰ニ成ニケレ、

〔大塔物語〕九月〇應永七年廿四日寅剋、坂西次郎長國〇中略舉大音云、息者長秀被聞召候哉、敵勢者四千餘騎、御方勢者八百餘騎也、不可有牛角之戰、〇中略今日師者長國承軍奉行、軍可下知仕云、

〔籾井家日記一〕攝州青野合戰事

氷上殿下知ヲシ給ヒケルハ、城主民部ハ名ヲ取タル勇士ニテコラヘヌ者ナリ、城ヨリ引出シテ討ベシ、然バ大手搦手ツリ合ノ合戰ヲセヨ、カハリニ強攻ヲイタシ、出口ヲ開ケトアレバ、〇下略

〔太平記十七〕山門攻事附日吉神託事

吉良、石堂、仁木、細川ノ人々是ヲ聞テ、昨日ハ已ニ追手ノ勸ニ依テ、高家ノ一族共、手定ノ合戰ヲ致シツ、今日ハ又搦手ヨリ、此陣ノ合戰ヲ被勸事、誠ニ理ニ當レリ、

〔奥羽永慶軍記三〕和賀山北境藤倉合戰ノ事

山北方ノ大將黒澤長門守小田島大采配振ラ大音アゲ、矢軍シテ叶フマジ、手攻ノ諍合ニ勝負セヨヤモノドモ、時分ハヨキゾ切テカヽレト下知スレバ、山北勢百餘騎ヌキツレテゾカヽリケル〇下略ニ

〔太平記九〕六波羅攻事

妻鹿モ武部モ、スハヤ被討ヌト見ヘケレバ、佐用兵庫助、得平源太、別所六郎左衛門、五郎左衛門、相懸リニ懸テ、面モ不振戰フタリ、

〔信長公記首〕八月廿四日、〇中略造酒丞、三左衛門兩人は、きよす衆土田の大原をつき伏、もみ合て頸を奪候處へ、相がゝりに懸り合戰所に、爰にて上總介大音聲を上、御怒なされ候を見申、さすがに御内之者共候間、御威光に恐れ立とゞまり、終に逃崩れ候き、

〔太平記三十二〕山名右衞門佐爲敵事附武藏將監自害事

宮方手合ノ軍ニ打勝テ、氣ヲ揚ゲ勇ニ乘テ、東ノ方ヲ見タレバ、〇下略

〔見聞雜錄十一ノ一所引武家名目抄軍陣〕蜂須賀彥右衞門家正申出るは、爰は正敷評定にては、中々無覺束して、手出し不成所に候へ、手打たる一六の了簡を以相決候へ、其趣は毛利家へ此段白地に被仰、信長は如此の不幸たれども、此上にも安國寺を以申合たる如く、彌和睦有べき哉、又此變を幸ひ秀吉途に迷間、幸ひの節と被思、御打取候て御望も可被催哉、此兩條を聞屆、其上にて大變を幸として、此頃之相談を變じて取掛弓矢を可試躰に候はゞ、夫からは運の勝負たるべし、味方の二萬五千と毛利の五万と一倍の違ひたれ共、千人と万人と、十雙倍の違程に、太儀には不可有、博奕軍とは此事也云々、

〔籾井家日記四〕丹波家三木別所江使者事

夜ニ入候テ別所御前樣ヨリ、使者衆ニ對面アラレ度旨ニテ奧へ參られ規式ノ候、〇中略明日ニモ

當城ェ敵ノ亂入テ候ハヾ、搦手口ヲバ請取テ、花。軍。ヲバ致スベキト存ズルトノコトニテ、鎧モ、ヒタタレ袴マデ嗜マレテ候、

〔淺井三代記十五〕横山の城沒落附佐和山の城を攻給ふ事

礒野丹波守は兼て心得たる事なれば、若者共二百計左右にして、鳥井本表へ打て出、信長卿の先勢に弓鐵砲を少々打かけ、化。粧。軍。して城〈佐和山〉中の中へ引入、〇下略

〔太平記三十四〕新將軍南方進發事附軍勢狼藉事

南方ノ兵ノ軍立、始ハ坂東ノ大勢ノ程ヲ聞テ、城ニ籠テ戰ハヾ取卷レテ、遂ニ不レ被レ責落云事有ベカラズ、只深山幽谷ニ走散テ、敵ニ在所ヲ知レズ、前ニ有カトセバ、後へ拔テ、馬ニ乘カトセバ野伏ニ成テ、在々所々ニテ戰ハンニ、敵頻ニ懸ラバ、難所ニ引懸テ返合セ、引テ歸ラバ、跡ニ付テ追懸ケ、野。軍。ニ敵ヲ疲カシテ、雌雄ヲ勢兵ノ弊ニ決スベシト議シタリケルガ、〇下略

〔別所長治記〕大村合戰

秀吉目ニ餘ル程ノ大敵ヲ見、少アキレテ馬ヲ掛居ラレケルガ、大音アゲテ下知シ給フ、平。場。ノ軍。ニ大敵ヲ請、尋常ノ如ク出合々々戰バ、必味方可レ失二勝利一、善戰フ者ハ不レ戰、善陳スル者ハ不レ死トイヘリ、捨レ命ヲ戰ヘトテ、取次ニ成タル味方ノ勢ヲ鉾矢ノ陣ニ押直シ、イナリ掛リニ突掛ル、

〔荒山合戰記〕能登國石動山衆徒蜂起附同所荒山合戰之事

前田利家ハ備ヲ立、温井、三宅等ガ先陣ノ勢ニ向テ、鬨ヲ噇ト作テ馳掛ケリ、温井モ三宅モ平。場。ノ軍。不レ叶トヤ思ヒケン、三千餘人ヲ引連テ、荒山ノ要害へ取上ル、

〔應仁記二〕一條大宮猪熊合戰之事

一條ノ大宮猪ノ熊ハ未四方トモ、人家ノ軒端重リ、小。路。軍。ノ事ナレバ、武衛方甲斐、朝倉、瓜生ガ軍兵、戰ツカレ荒手ニマクリ立ラレテ、廬山寺ノ西迄引退ケレバ、〇下略

〔書言字考節用集 九言辭〕矢軍(ヤイクサ)　小迫合(コセリアヒ)〔本朝兵家出二歩卒一交レ戈謂二之一〕　迫合(セリアヒ)

〔北條五代記 五〕昔矢軍の事

陣中終夜篝をたき夜明ぬれば、先手の兵士等さかひ目へ日々出向て陣する所に、若手の侍はまれを心がくる輩は、陣中をぬきんで、兩陣の間へたがひに進で出あひ、矢。い。く。さ。をなす、見物しておもしろきは此せ。り。あ。ひ。軍なり、〇中略北條美濃守氏親家中に鈴木左京亮は、すぐれたる強弓なり、前登にすゝみ、かれがはなつや、はぶくらをのまずといふ事なく、忽射殺す所の者おほし、是を見て敵がたより武者一騎はせ來り、青木角藏と名乘て、左京亮と既に弓手に相あふ、たがひに矢をさしはさむ、左京亮敵の弓を引ざる前にひやうと射る、此矢あやまたず弓手の脇よろひを射とをしのぶかに立、角藏弓をひかんとすれ共、痛手なりければ叶はずしてひらき退く、左京亮又二ツの矢をつがひて射る、馬のふと腹にはぶくらせめてたつ、馬はまきりにはねければ、角藏馬上より落たり、みかた是を見て勝どきをどつと作り、此仕合を其日の矢軍の勝負の驗として、雙方の士卒等相引し本陣に旗を立たり、

〔甲陽軍鑑 十三品第四十上〕馬場申さるゝは、小幡山城の雜談に、せ。り。あ。ひ。の時は、敵よりまづ味方をよく見合候て、其上で一命をすてかせぐときんば、犬死もなし、人にもさのみこされずして、其手柄まつたしと有つるを、此馬場美濃も其まねを仕り、〇下略

〔總見記 十八〕信長公播州御發向延引事附秀吉忍上京都事

五月〇天正六年七日、播州下向勢大將トシテ、三位中將殿〇信忠並ニ惟任五郎左衞門長秀等總人數三萬餘人出陣セシメ、上月表へ參着、毛利勢ト對陣ス、先後ノ後詰ノ人數都合五萬餘人ト云、時々小。攻。合。有レ之トイヘドモ、大河ヲ隔タルヲ以テ、更ニ其勝負ヲ決シガタシ、

〔奥羽永慶軍記 九〕二本松合戰事

先手ハ一族上野介安房守也、總人數同音ニ鬨ノ聲三度アグレバ、山川徹上徹下シテ空ニタヾヨヒテ夥シ、先手ハヤ鐵砲ヲ打入攻付ドモ、城中鎭リ返テ音モセズ、政宗此體ヲ見給ヒテ、城中ノ者共ハ必死ノ合戰ト思ヒ定、鐵砲軍ヲ好マズ寄手ヲ近付一度ニ切テ出、命ヲ限ニ戰ハン軍慮ナルベシ、然ラバ味カタ多ク討ルベシ、卒爾ニ攻近付テ益モナシ、速ニ人數ヲ引上ヨト下知セラレバ、阿武隈川ヲ渡シ高田ニゾ陣取給ヒケル、

〔太平記 三十四〕平石城軍事附和田夜討事

和田ハイツモ戰ヒヲ先トシテ謀ヲ待ヌ者ナリケレバ、都テ此儀ニ不同、軍ノ習ヒ負ルハ常ノ事也、只可戰所ヲ不戰シテ、身ヲ慣ヲ以テ恥トス、サテモ天下ヲ敵ニ受タル、南方ノ者共ガ、遂ニ、野伏軍計シツル事ノヲカシサヨト、日本國ノ武士共ニ笑ハレン事コソ口惜ケレ、〇下略

〔北條五代記 五〕昔矢軍の事

見しは昔、關東諸國に弓矢をとる東西南北にをいてたゝかひやん事なし、〇中略其時節鐵砲はすくなく弓はおほし、日々のたゝかひに矢種盡ぬれば、主人より矢箱を諸侍へくばりわたす、敵近くそなへたる時は、矢束引強弓をえらび矢印を書付、右の數矢をもて敵のそなへを射くづす、是をのぶし軍といふ、

〔足利季世記 五 將軍地藏軍記〕細川氏綱淀城入事

三好長慶攝州上下衆相催シ河內國エ責入、十七ケ所ニ陣ヲ取リケレバ、安見美作、野尻丹後、草部肥後守、子息喜齋介カハリ〳〵打テ出、日々ノ足輕軍ヤムトキナシ、

〔淺井三代記 十〕高宮合戰の事

翌日十八日〇永祿二年六月に義賢〇佐々木修理大夫は大きにいさみて、佐和山の南芹川まで人數押寄給へば、佐和山にも討て出、互に足輕合戰少々して、あひしらひてぞ置にける、

〔甲陽軍鑑(品第二十一九上)〕一天文十年辛丑、其夜其歳中も敵味方ともに、境目の仕置にて合戰は是なし、但海野口、海尻をきり、岩村田或はつだきり青柳をきり、番手の衆は日々足輕ぜりあひなり、

〔易林本節用集(言語登)〕同士軍(イクサ)

〔太平記(六)〕楠出張天王寺事附隅田高橋并宇都宮事

楠風ニ聞テ、兵ヲ道ノ切所へ差遣シ、悉是ヲ奪取テ、其俵ニ物具ヲ入替テ、馬ニ負セ人夫ニ持セテ、兵ヲ二三百人、兵士ノ樣ニ出立セテ、城中へ入ンドス、楠ガ勢是ヲ追散サントスル眞似ヲシテ、追ッ返ッ同士軍ヲゾシタリケル、

〔新田老談記(下)〕小田原へハ、上方ヨリ大勢ヲ催シ責來ル風聞アルニ依テ、新田足利へモ三百餘騎ノ加勢ヲ可出トノ事也、是ハ近年ノ坪軍トハ替リ、晴ガマシキ合戰ナリト謀ゲリ、

〔大友記〕同註所治部大輔旗ヲ揚事附志和瀨セリ合事

宗曆カクテハ後度ノ戰カナヒガタシ、敵ハ地戰ナリ、味方ハ遠陣ナレバ、(〇下略)

〔甲陽軍鑑(品第二十一九上)〕同月(〇天文九年二月)十八日辛巳に、信州村上方の侍大將衆に、清野、高梨、井上、隅田、此四頭をさきとして、都合三千五百あまりの人數にて、甲州こあらま迄きたりて、其近郷を燒拂、しかりといへども、いまだ雪きえずふかくして、他國勢あまりに自由ならず、晴信公は地戰なる故、其筋地下人に道の雪をかゝせいそぎ出給ひ、(〇下略)

〔梅松論(下)〕建武三年(〇中略)漸五月五日の夕、(〇中略)太宰少貳賴尙進申けるは、(〇中略)賴尙陸地の先陣を承て亡父妙惠が遺言に任て、百ケ日の追善合戰して佛事に仕べし、

〔太閤記(九)〕秀吉卿依池田父子討死御出馬之事

秀吉もはや彼寺へ着給ふていかりつゝ、池田に敵をかならず侮らざれ、まばらがけすなと、再三制しつるに、不用してかく取越度事、むねん極々せりとて、腹をたち〳〵小幡へかゝつて、池田が

弔ひ合戰してんよと、いきまきて馬をはやめ給ひしを、○下略

〔板坂卜齋記 中〕十月○慶長四年日を忘れ申候、秀忠公眞田を捨、木曾路を日夜御急御上り、大津にて御對面候、今度合戰に勝候、万一負候ハヾ、弔合戰すべしと、人數を揃へ上て能候はんに、道を急候迚まばらに被上候と御機嫌あしく、○下略

〔類聚名義抄 九文〕敵 正 敵 俗 音狄 アダ アタル カタキ 和チヤク

〔干祿字書 入聲〕敵敵上俗下正

〔運歩色葉集 天〕敵讎曰敵、當身曰敵、

〔倭訓栞 前編二安〕あた 讐をよむも當るの義、敵對の意なり、日本紀に虜をもよめり、盛衰記にあたくねといふ辭あり、

〔倭訓栞 前編六加〕かたき 敵をいふ、難んずるの義なるべし、日本紀に無前をかたきなしとよむも此義也、相手にするをかたきといふ、○下略

〔日本書紀 三神武〕戊午年四月、長髓彥○中略起兵徼之於孔舍衞坂、與之會戰、○中略皇師不能進戰、天皇憂之、乃運神策於沖衿曰、今我是日神子孫而向日征虜、此逆天道也、○下略

〔保元物語 一〕新院御所各門々堅事附軍評定事

抑爲朝一人トシテ、殊更大事ノ門ヲ堅タル事、武勇天下ニ赦サレシ故也、件ノ男、○中略城ヲ攻ル謀、敵ヲ打行テ、人ニ勝レテ、三年ガ內ニ、九國ヲ皆攻落シテ、自ラ總追補使ニ押成テ、○下略

〔太平記 九〕山崎攻事附久我畷合戰事

赤松入道圓心ハ三千餘騎ニテ、淀、古河、久我畷ノ南北三箇所ニ陣ヲ張、是皆强敵ヲ拉氣、天ヲ廻シ地ヲ傾トスル機ヲトギ、勢ヲ呑ト云トモ、今上リノ東國勢一萬餘騎ニ對シテ、可戰トハミヘザリケリ、

御方

〔結城戰場物語〕くば十郎、森の四郎、窪田の太郎、たがやが一ぞく初として、卅六騎の人々は、かたきの中に取こめられ、〇下略

〔大友記下〕豐州勢高城ヲ責事附耳川合戰之事
清水、柴田、大原ナンド、イフ、一人當千ノ兵ドモ、聲々ニ名乘テカケイリ掛入、カタキアマタウチトリ、一人モノコラズ討死ス、

〔甲陽軍鑑品第四十三十五〕五敵　一強敵　一大敵　一小敵　一弱敵　一若敵
第一に強敵とは、無類に健にて、人の目利よく、上手にありて、我にをとらぬ家老の、然も大將御ため不淺存奉り、侍大將あまたもち、工夫思案の分別すぐれて、せり合合戰、城せめに、度々勝利を得たる名大將を強敵と其名をとなふる、〇中略
一第二に大敵とは、國五ケ國十ケ國も持たる大將の事也、〇中略　弱敵とは未練にして、我持來る國計長久と存知、他國へ心をかけざるは、よそより其まゝをかぬものなり、〇中略　扨又若敵とは、年はいくつにもなり候へ、よはくもつよくも落つかず、一度もほまれなき大將は、其わざ若き故、是若敵と云、勿論年若てがらなきは若敵也、〇中略
一第三小敵の強きは、能々弓矢強ければこそ、少身にて大軍と戰はんと存るなれば、是もてあなづるに及ばず、〇次ニ、大敵、若敵ノ事アレド略ス、

〔倭訓栞前編三十一〕みかた　同仇の兵をいふ、御方と書り、古事記に出たり、身方と書は後世の事なるべし、

〔古事記中仲哀〕此時忍熊王以難波吉師部之祖伊佐比宿禰、爲將軍、太子〇應神御方者、以丸邇臣之祖難波根子建振熊命、爲將軍、故追退到山代之時、還立各不退相戰、

〔古事記傳三十一〕御方〇中略　後世に味方と書くは、由もなき非なり、常にも己が方さまの者を、美加多と云、其も軍に云、御方よ

り轉れるか、又は其は身方の意にて本より別なるか、

〔日本紀略二朱雀〕天慶三年十二月十九日庚戌、土佐國言、八多郡爲海賊燒亡、合戰之間御方人並賊類多中箭死者、

〔奧州後三年記中〕吉彥秀武將軍〇源義家に申やう、城の中かたく〻まもりて、御方の軍すでになづみ侍にけり、〇下略

〔保元物語二〕白河殿攻落事

寄手モ究竟ノ兵五十三騎討レテ、七十餘人手負タリ、敵魚鱗ニ懸破ントスレバ、御方鶴翼ニ連テ射シラマカス、御方陽ニ開テ圍ントスレ共、敵陰ニ閉テ圍レズ、黃石公ガ傳ル處、吳子孫子ガ秘スル處、互ニ知タル道ナレバ、敵モ不敗、御方モ不引、サレバ千騎ガ十騎ニ成迄モ、可果軍トモ見ヘザリケリ、

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

大場三郎景親大將軍トシテ、〇中略三千餘騎鞬ヲ調テ時ヲ造ル、佐殿モ同時ヲ合テ鳴矢ヲ射通シケレバ、山神答テ敵モ味方モ大勢トコソ聞エケレ、

〔應仁記下〕相國寺炎上之事

民部〇安富合戰ノ隙ニ、弟ヲ近付テ云樣、サテモ今日ノ合戰ニ、敵モ身方モ今ヲ限リト覺ヘタリ、

〔鎌倉大草紙〕上杉藏人の手のもの、此勢にかけ合、大庭を初として、不殘手を負引退、所々の軍味方打負ければ、〇下略

〔義貞記〕可討敵月日時幷ニ方角事

春ハ庚辛日、夏ハ壬癸日、秋ハ丙丁日、冬ハ戊己日、土用ハ甲乙日也、但三日、五日、九日、十一日、十五日、十七日、廿一日、廿三日、廿七日、廿九日ヲ可除、殊ニ小月ノ晦日敵討事ナカレ、出テ歸事ナシ、次朔日、

二日、七日、八日、十三日、十四日、十九日、廿日、廿五日、廿六日、是ヲ上吉トス、赤日ニ二時、夜ニ二時、人死スル時アリ、知此時可寄、此時ニアラズバ討敵亡ス事難シ、此ヲ兵法ノ占トモ、知死期ノ占トモ云也、用心ヲスルニモ此時ヲ知テ、稠ク警固スベシ、

〔鴉鷺合戰物語〕第六住吉願書　後見烏惡日發向敎訓　城用害事

九月三日、眞玄が方には軍の評定これあり、明日四日と定めしを、赤口日とて延べにけり、さらば五日にもなさずして、六日にぞ定りける、九月六日はみづのえむま、天一神戌亥にあり、後見の烏いはく、殿は四十一歲木性酉の御年なり、壬午は御爲には一生不用日也、又道虛日也、玄かも中鴨は乾にあたりて、天一神の方なり、餘の惡日は暫おきぬ、天一神の方にむきて、是非弓ひかぬ事也、山城守も四十三とやらむ、申さば土性の酉にて、御同性に參られ候間、彼がためにも惡くは候へども、敵にとりかけられては、惡日かへつて利をうる物なり、其上六日より土用に入ば、土王木囚して、王相御身に當ては以の外わろし、冬の節に入ては、木相土囚にして、相尅相生思ふやう成べし、いかに覺しめすとも、土用の間を御まち候べし、總じて道虛往亡歸亡伐日六蛇七鳥八龍九虎十惡日、此は万に凶なり、又大禍滅門狼藉沒日は四ヶの惡日、四不出日、五墓、十死、赤口日、此等は事によるべきかなれども、多分は好からざる日也、指神斗賀神日塞、これ又きらふべき方なり、明日の御合戰は、大きに然るべからずと、鳴つ口說ついさむれども、目の前なる敵をさしおいて、吉日惡日とて師せざらんは、近比のくせ事、短慮未練の正躰なし、敎訓に拘らず、今迄もあればこそ有しに、往亡日といひ、十惡日といひ、天一神の方といひ、取集めたる惡災日口日の九月六日に、合戰を定めける事こそ、返々も淺猿けれ、

〔朝倉敏景十七箇條〕一可勝合戰、可取城攻等の時、吉日を選び方角を考て、時日を移事甚口惜候、如何に能日なるとて、大風に船を出し、大勢に獨向はゞ不可有其甲斐候、假令雖所惡日たりとも、細

かに虚實を察て、密々に奇正を整へ、臨機應變して謀を本とせば、必可被得勝利事、

〔大友興廢記 十二〕戸次鑑連石宗に軍配相傳契約の事附石宗氣之講談の事幷に諸葛孔明が事
日取の事は軍の發端に第一とすといへども、味方の吉事は敵も吉事なり、たゞ方がくをかんようとするものなりといふ人あり、それはよろしからず、その大將の性に合かんがふる日は、餘の大將のためには吉日にならず、また惡日を吉日にとりなし、惡方を吉方にもちゆる秘術あり、日により、時によりかゝりて利を得るもあり、引うけて勝もあり、あるひは氣をうかがひ、あるひは日をかんがへ、あるひはときをくる皆是軍法の行なり、

〔當流軍法功者書 下〕敵ヲ討時節之事
敵ヲ討コト、一曰敵アツマラザル前、二曰人馬不食前、三曰敵方角ヲ得ザル前、四曰陣取セザル前、五曰備ミダレタル時、六曰仕置セザル前、七曰ツカレ、八曰大將ソナヘヲハナレタル時、九曰長道ヲ來ルナカバ、十曰川ヲ渡ルナカバ、十一曰難所ヲ越時、十二曰弓斷(ユダン)ノ時、十三曰敵手立ヲウシナフトキ、十四曰ヲソルヽヲ見テ討ベシ、是ヲ軍ニ十四ノ習アリト兵儀ニ有之、

〔陸奥話記〕十六日(○康平五年八月)定諸陣押領使、(○中略)翌日到同郡(○磐井)萩馬場、去小松柵五町有餘也、件柵者、是宗任叔父僧良照柵也、依日次不宜幷及晚景、無攻擊心、而武貞賴貞等、先爲見地勢近到之間、歩兵放火燒柵外宿廬、於是城內奮呼、矢石亂發、官軍合應、爭求先登、將軍命武則曰、明日之議俄乖、當時之戰已發、但兵待機發、不必擇日時、故宋武帝不避往亡而功好、見兵機可隨早晚矣、武則曰、官軍之怒、猶如水火、其鋒不可當、用兵之機不過此時、則以騎兵圍要害、以歩卒(○此間恐有脫字)城柵、件柵東南帶深流之碧潭、西北負壁立之青巖、歩騎共泥然、而兵士深江是則、大伴員季等、引卒敢死者二十餘人、以劍鑿岸、杖鋒登巖、斬壞柵下、亂入城內、合力攻擊、城中擾亂、賊衆潰敗、

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月六日丙戌、召邦道昌長等於御前、有卜筮、又以來十七日寅卯剋點可被誅兼

隆之日時訖、

〔山槐記〕治承四年九月廿九日戊寅、今曉東國追討使右少將維盛朝臣、出六波羅家發云々、去廿二日出福原、廿三日著舊都、其後于出所逗留也、傳聞、上總守忠清、於此都忌十死一生日、少將云、於今者途中儀、於舊都可忌日次、忠清云、六波羅者、先祖舊宅也、不被忌者、如此間相論云々、

〔吾妻鏡一〕治承四年十月廿七日丙午、進發常陸國給、是爲追討佐竹冠者秀義也、今日爲御衰日之由、人々雖傾申、去四月廿七日、令旨到著、仍領掌東國給之間、不可及日次沙汰、於如此事者、可被用廿七日云云、

〔源平盛衰記二十八〕頼朝義仲中惡事

同年〇壽永二年三月ノ比ヨリ、兵衛佐〇頼朝ト木曾冠者〇義仲ト中惡キ事出來レリ、〇中略折節又十郎藏人行家ハ、兵衛佐ニハ伯父也ケレバ、大場三郎景親ガ平家ノ儲ニ造タル、松田亭ニ御座ケルガ、〇中略兵衛佐憑ミテハ墓々シカラジ、木曾ヲ憑マントテ、千餘騎ノ勢ヲ引具シテ、信濃國へ越ニケリ、佐殿是ヲ聞給テ、木曾ト十郎藏人ト一ニ成テ、義仲平家ニ親ミテ、頼朝ヲソムカバ、由々敷大事、人ニ上手セラレヌ前ニ、木曾ヲ討ントテ、十萬餘騎ニテ打立給フ、今日ハ坎日也、如何ン有ベキカト評定アリ、佐殿宣ヒケルハ、昔頼義朝臣、奥州ノ貞任ガ、小松館ヲ責給ケル時、今日往亡日也、明日可遂合戰カト被定ケルヲ、武則先例ヲ勘テ曰、周武王合戰ニ勝事、往亡日ヲ不避、勇士ハ以得敵爲吉日申テ、小松館へ押寄テ、忽ニ貞任ヲ誅シテ勝事ヲエタリキ、況ヤ坎日ヲヤ、先規ヲ思フニ吉例也ト宣ヒケレバ、可然トテ十萬餘騎上野ト信濃トノ境ナル、臼井坂ヲゾ越給フ、

〔太平記二十二〕義助朝臣病死事附稱軍事

敵ノ國中へ入ヌ先ニ打立トテ、金谷修理大夫經氏ヲ大將トシテ、勝タル兵三百騎、皆一樣ニ曼茶羅ヲ書テ襯ニ懸テ、兎テモ生テハ歸マジキ軍ナレバトテ、十死一生ノ日ヲ吉日ニ取テ、大勢ノ敵

擇方位

ニ向ヒケル心ノ中、樊噲モ周勃モ未得振舞也、

〔鎌倉大草紙〕房州(○上杉憲貞)は御所へ馳參り、上樣いまだ恙なく御座ば、御供申これへ奉入べし、若又御所中を敵取巻申さば、西の御門に火をかけ、實壽院へ推寄、一戰たるべきよし申合處に、持氏公これへ入せ給へば、皆人大に喜び、色をなをしいさめける、翌日は惡日とて、犬懸よりもかゝらず、佐介よりも不寄、

〔官地論〕角明六日(○長享二年六月)早天、諸陣之面々、大將御陣大乘寺打寄、思々評議、爰洲崎入道進出申、(○中略)殊更明日明後日惡日、其上爲天一天上、不可攻山城申、(○中略)木越光德寺進出被申、(○中略)爰本遲張、從鄉國可亂入、可爲亡國之基、次擇吉日良辰事、無一代之教文、被立善惡不二邪正一如、亦指方所、聽本來無東西、何處有南北、時何指天、何可指地、任運於天道、拋命佛法、泥攻々、卽日可責落事、案內存也、不存餘人、於法師、翌日早天打立、可晒骸於城之麓、殘名於世之末、心底趣、無所憚被申、諸勢一同尤同、(○下略)

〔常山紀談拾遺二〕福嶋正則、關が原の役赴のとき、出陣の日往亡日なり、或人諫に曰、占之趣出て再無歸事と候へば、他の日に定められよといふ、正則聞て、實吉日なり、我此度の戰功名第一と被言働を遂、大國に被封て行か、運盡なば討死と思極たり、左かれば何ぞ再びこの地に歸らんや、日を替ること有べからずとて、出陣せられしが、果して働功拔群なるが故に、勢備兩州五十二万石に被封たり、

〔義貞記〕可討敵月日時幷ニ方角事

亦敵ヲバ玉女方ニ向テ討テ、聞神方可引、聞神指神斗加神ノ方ニ向テ、敵ヲ討事努々有ベカラズ、大將軍幷天一遊行之方ヲモ愼ミ、空忘神殊ニ大節也、

〔當流軍法功者書下〕方ニヨリ攻マジキ方之事

其年ノ大將軍ニアタリタル方ヲ不可攻ナリ、鵜尾方金神ノ方ニムカフベカラズ、若無是非此方ニ向トキハ、其年ノアキ方ガ我タメニ能方ヘムカイテ、摩利支天ノ眞言百返、八幡ノ眞言十返トナヘ、サテ可行方ニ向テ九字ヲキルベシ、加樣ノ習サマ〴〵在日取書、

〔異俗佛事編一新篇〕武士信摩利支天問、武士專ラ末利支天ヲ守本尊トスルハ如何、答、末利支天經ニ依ニ、此天大神通力自在ニシテ、常ニ日天ノ前ヲ行ケドモ、神通迷疾ニシテ日天月天モ新天ヲ不能見ト云ヘリ、又隱形印深秘アリ、夫武士ノ事業ヲル、兵法別術ノ達ナル、逐ニ奔電ニ常ノ心トス、故ニ惟此天ヲ崇ナリ、別又經ニ云、若有知摩利支天名常懷念者、彼人亦不可見、亦不可知、亦不可捉、亦不可縛、亦不可害、亦不可欺誑、亦不為人之所責罰、亦不為怨家能得其便、

〔古事記中神武〕於是與登美毘古戰之時、五瀨命、於御手負登美毘古之痛矢串、故爾詔、吾者爲日神之御子、向日而戰不良、故負賤奴之痛手、自今者、行廻而背負日以擊期而、自南方廻幸之時、到血沼海、洗其御手之血、故謂血沼海也、〇又見日本書紀

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年五月壬子、勅征夷將軍正四位上兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂等曰、〇中略出羽守大伴宿禰今人、巡行管內、簡閱軍士、者是知征戰之具、猶有寥落、前後來奏、事何相乖、加以國家之忌、及大歲、同在東方、兵家所避、不可抵觸、宜緣軍庶事、今年備擧、來年六月發入、

〔保元物語二〕白河殿義朝夜討被寄事

去程ニ下野守義朝ハ、二條ヲ東ヘ發向ス、安藝守清盛モ同續テ寄ケルガ、明レバ十一日〇保元元年七月東塞成ウヘ、朝日ニ向テ弓引ン事恐有トテ、三條ヘ打下リ河原ヲ馳渡シテ、東ノ堤ニ北ヘ向テゾ歩セケル、下野守ハ大炊御門川原ニ、前ニ馬ノ懸場ヲ殘シテ、河ヨリ西ニ東ガシラニ引ヘタリ、

〔長門本平家物語十四〕大將軍權亮三位中將の給けるは、いかなればまいど軍にまくるぞ、御かたは大勢なり、かたきは小勢なり、平ぐみのいくさにまくる事こそ心えね、けふ七月一日朝日にむかひて軍をすればこそまくらめ、ひけ後日のいくさにせよとて引しりぞく、

〔梅松論下〕夜更て赤松入道圓心、潜に將軍の御前に參りて申けるは、〇中略去年御合戰に、御方利を

うしなひし事は、大將軍西の方に有しゆへに、關東より御發向の時、毎度戰の利なかりし也、然といへども御運に依て、御上洛相違なし、今西國より責上り候はゞ、洛中の大將軍の方にむかふべき間、秀御本意を達せらるべし、

〔北條五代記〕二北條氏綱と上杉朝定合戰の事

氏綱は朝定發向のよしを聞、强敵をばしりぞけ自國を治めんがため、同き〇天文六年七月十一日、數万の軍兵を引卒し、武州へ出馬し、同十五日、河越の城にをしよする、〇中略しばらく辰星の吉凶を待が故に、合戰の時刻うつりさつて、漸丑みつの時にも近くなりぬ、

〔北條五代記〕五下總高野臺合戰の事

氏康かさねていはく、今朝辰の刻のたゝかひをかんがふるに、敵は東方に陣し、出る日の光をかがやかす所に、みかた西より向て、劒光をあらそふ事、是孤虛のわきまへあらざるがゆへ、遠山富永勝利うしなひたるなり、然に今はや未の刻も過、東敵は入日にして、みかたの後陣に影きへぬ、時のうらなひ吉事をえたり、其上當年は甲子なり、甲子は殷の紂がほろぼされ、武王は勝る年也、義弘〇里見は紂に同意し、氏康は武王に比して、かれを討ん、しかのみならず、先祖の吉例多し、早雲氏茂永正元年甲子九月、武州立河原にをいて、上杉民部大輔顯定と合戰し、討勝て顯定敗ぼくす、隨て父氏綱大永四年甲申正月十三日、武州江戶にをいて上杉修理大夫朝興と合戰し、討勝てともおきを追討す、就中今年今月は甲子正月八日に當る吉例なり、扨又氏綱天文七戊いぬ十月七日ごろ、高野臺に至て、小弓の御所義明と一戰討勝て、よしあきらをほろぼす、はなはだもて戰ひの場所かはらず、いかでか先例をたのまざらん、あまつさへ孤虛支干相應ずる事、われに天のくみする所なり、時刻うつすべからず、無二に一戰に治定す、然に臺より東北は、節所にて寄所惡し、諸勢を二手に分、兩旗本前陣なり、〇中略比は永祿七年甲子正月八日申の刻に至て、氏政軍兵近々

製地圖

とをしよせ、鯨波をどつとあぐる、○中略つゐには義弘討まけ、こと〴〵くはいぼくす、

〔太田道灌兵書 下 張陣之法〕一敵國ノ地利ヲ大將、諸物頭吟味シ、繪圖ヲシテ所持スルニハ、四方ノ地ヲ符ヲ以テ書付示合スベシ、其地ノ樣子諸卒委ク知ルハ、戰フニアシキコトアル者也、故ニ秘之符ヲ作ルナリ、ダトヘバ大道ハ⏀、里ハ∞、徑路ハ⏄、間道ハ∀、切所ハ⊠、高山ハ△、平山ハ⏢、茂林ハ▦、平野ハ田、泥水田ハ凵、本城ハ✹、出城ハ☆、海ハ≋、川ハ︿、大河ハ〰、中河ハ︵、絶險ハ⋈、古塞ハ凸、廣野ハ∴、小池ハ▯、陣所ハ◎、如此ノ類ヲ以テ了知スベシ、諸人シラバ改ムベシ、○圖略

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月四日甲申、散位平兼隆前廷尉號山木判官者、伊豆國流人也、依父和泉守信兼之訴配于當國山木郷、漸歷年序之後、假平相國禪閤○淸盛之權、輝威於郡郷、是本自依爲平家一流氏族也、然間且爲國敵、且令插私意趣給之故、先試可被誅兼隆也、而件居所、爲要害之地、前途後路、共以可令煩人馬之間、令圖繪彼地形、爲得其意、兼日密々被遣邦通、邦道者、洛陽放遊客也、有因縁盛長依擧申候武衞、而求事之次、向兼隆之館、酒宴郢曲之際、兼隆入興、數日逗留之間、如思至山川村里、悉以令圖繪訖、今日歸參、武衞招北條殿於閑所、置彼繪圖於中、軍士之可競赴之道路、可有進退用意之所々、皆以令指南給、凡見畫圖之體、正如莅其境云云、

〔甲陽軍鑑 十二 品第三十九〕一同年元龜三年○中の夏秋、遠州、三河の繪圖をもつて、兩國嶮難の地、或は大河小河の出様、一村一里に渡いくつ有、ふけたまり池、萬を遠州三河牢人衆に沙汰させ、原隼人、内藤修理兩侍大將能聞、信玄公御前におひて申上、穿鑿被成て後御備先衆七手は、山縣三郎兵衞、内藤修理、小山田兵衞尉、小幡上總守、眞田源太左衞門、高坂彈正、馬場美濃守七人也、

〔別所長治記〕野口合戰

秀吉思慮深ク世ニ賢キ大將ニテ、當國ノ案内者ヲ召寄、國中ノ繪圖ヲサセ、山川嶮難ヲ、我モシリ

軍兵ニモシラセ、家老ノ面々ニ向テ宣フハ、當國ノ敵ドモ居城々々ニ引籠ルハ、秀吉三木ノ城ヲ攻シ時、四方ヨリ後詰シテ追拂トノ謀ナリ、善戰者致レ人不レ致レ人云リ、又愚將ハ敵ノ防グ所ヘカヽリ、無理ナル戰ヲ致ス、良將ハ敵ノ心ヲ知テ得レ利ナリ、當國ノ敵ドモ三木ノ後詰ヲセントト計リ、思ヲスリ違テ先弱キ方ヨリ得レ利ナラバ、小城ドモ不レ攻トモ可二落去一、サアラバ後心安シテ三木ノ城ヲ攻ンニ可レ安、

〔續武將感狀記〕天正十三年、秀吉、仙石權兵衛ヲ商買トナシテ九州ニ遣シ、山々野々浦々島々ノ地理ヲ見セシム、三年逗留シテ委細ニ圖シテ歸ル、秀吉熟覽シテ九州ノ地形ヲ諳ズ、秀吉島津ヲ伐ルヽ事、只氣勢ヲ恃テ思慮ナキガ如クスレドモ、萬變ニ心ヲ用ヒラルヽ事皆如レ此、

〔本朝通鑑後陽成七十八〕文祿二年七月、秀吉疎二於文字一、故不レ能レ記二臆朝鮮八道之名一、命二畫工一圖二於屛風一、以二彩色一區二別八道一、置二坐右一、遣二其副本於朝鮮諸陣一、其所二啓達一、又所二論答一、共曰二赤國、黄國、青國、白國、黑國一、而其旨互通、

〔朝鮮征伐記三〕遊擊沈惟敬謂二和議一事

大明與二日本一和平相定條々○中略

一赤國成敗之上にて、右前之城相拵、依二人數多少一、城之大小、其見計夫々に可レ被レ待事、○中略

文祿二年五月朔日　　御朱印○宛名略

〔加藤家傳清正公行狀奇〕天正二十年正月五日、秀吉公朝鮮國征伐ノ陣觸アリ、○中略清正ニハ高麗國ノ制札、幷朝鮮地理ノ圖ニ、南無妙法蓮華經ノ七字ノ御旗ヲ下シ賜ル、

〔軍法極秘傳書一人數押〕押前を知事

味方地は五日七日ゆくとてもくるしからざるに、敵地へ入前日、物見をやり、明日押べき道をしる事第一なり、右のもの見立歸り、さき〲の樣子には、山路坂などを堀きり、繩手道の土はきり

かへし、足いりにし、川は橋を引、船わたしもなく、かた山際に茂みあり、伏なども有べきを事こまかに聞とゞけ、普請奉行に小人黒鍬をさしそへつかはし、なるほどは、みちをなをし、隣家あらば少々とりこぼし、筏をもくませ、川越の用意をさせ、さてかやうの時、さまたげの伏ありて、道をなをさせざる事有べし、騎馬一兩人に足輕四五十さしそへ、此鐵炮にふせがせ、道川をなをすべし、又山際の茂み、かりすかざればからせて、萬事心得をつくし、人數押事尤なり、又敵地の道すじ、いくとをりあるなしを兼てしり、もやすき方を押事、いふにをよばず、

〔日本書紀三神武〕太歲甲寅、其年冬十月辛酉、天皇親帥諸皇子舟師東征、至速吸之門、時有一漁人、乘艇而至、天皇招之、因問曰、汝誰也、對曰、臣是國神、名曰珍彥、釣魚於曲浦、聞天神子來、故卽奉迎、又問之曰、汝能爲我導耶、對曰、導之矣、天皇勅授漁人椎檝末、令執而牽納於皇舟、以爲海導者、乃特賜名爲椎根津彥、椎此云辭毗、此卽倭直部始祖也、　戊午年六月丁巳、皇師欲趣中洲、而山中嶮絕、無復可行之路、乃棲遑不知其所跋涉、時夜夢、天照大神訓于天皇曰、朕今遣頭八咫烏、宜以爲鄕導者、果有頭八咫烏、自空翔降、天皇曰、此烏之來、自叶祥夢、大哉赫矣、我皇祖天照大神、欲以助成基業乎、是時大伴氏之遠祖日臣命帥大來目督將元戎、蹈山啓行、乃尋烏所向、仰視而追之、遂達于菟田下縣、因號其所至之處曰菟田穿邑、穿邑、此云于介知能務羅、于時勅譽日臣命曰、汝忠而且勇、加能有導之功、是以改汝名爲道臣、

〔源平盛衰記三十六〕鷲尾一谷案內者事

ヤヽ、辨慶承レ、木陰茂テ道見エズ、山ノ案內者尋テンヤト宣ヘバ、取定タル事モナキニ候ナントトテ、馬ニ乘乾ニ向テ、十餘町歩セ下ツテ、谷ノ底ヲ伺求ニ、幽ニ火ノ見エケルヲ打寄テ見レバ、ケシカル萱屋アリ、內ニ七十餘ナル翁ト、六十餘ナル嫗ト、腹搔出シテ火ニアタリ居タリ、辨慶コハヅクロヒシテ事々敷申ケルハ、鎌倉兵衛佐殿、朝敵追討ノ院宣ヲ給リ、御座ニヨリテ、軍兵ヲ被指上間、平家都ヲ落テ、此山ニ籠、則御弟ノ蒲御曹司、大手ニ向給ヌ、九郎御曹司搦手トシテ、此上ノ山

ニ御座、案內者ニ參トノ御使ニ、武藏房辨慶トテ、古山法師ノ怖者ガ來レリ、疾々可ㇾ參也ト云、老人急起上、烏帽子打著テ申ケルハ、若侍シ時ハ、攝津國丹波山々暗キ所ナシ、春夏ハチヲヒ射、秋冬ハ笛待落シク丶リ押上、犬山ナド申テ、晝夜ニ山ニ侍シカバ、木根岩角知ヌハナシ、年闌身衰テ此二十餘年ハ不二弓引一、行歩不ㇾ叶候、子息ノ小冠者〇鷲尾經春ハ不敵ノ奴、案內ヨク知テ候ラン、被二召具一ベシトテ、片屋ニ有ケルヲ呼起シテ心ヲ合テ進セケリ、

〔源平盛衰記四十一〕盛綱渡二藤戸一兒島合戰附海佐介渡ㇾ海事

同十八日〇元暦元年九月ニ平家ハ讃岐屋島ニ乍ㇾ有、山陽道ヲ打靡シテ、左馬頭行盛ヲ大將軍トシテ、飛驒守景家以下侍ヲ相具シテ、二千餘騎ニテ、備前國兒島著、三川守範賴モ、室泊ニ有ケルガ、舟ヨリ上、同國西河尻、藤戸渡ニ押寄テ陣取、源平海ヲ隔テ轡ヘタリ、海上四五町ニハ過ザリケリ、同廿五日ニ、平家海ヲ隔テ、扇ヲアゲテ源氏ヲ招ク、源氏是見、海ヲ渡セト云コソ、船ナクシテ叶ベキナラチバ、是モ以ㇾ扇招合フ、源平互ニ見渡テ、其日モ徒ニ晩ニケリ、爰ニ佐々木三郎盛綱、夜ニ入案ジケルハ、渡ベキ便ノアレバコソ、平家モ招ラメ、遠サハ遠シ、淵瀨ハシラズ、如何ハセント思ケルガ、其邊ヲ走廻テ、浦人ヲ一人語ヒ寄テ、白鞘卷ヲ取セテ、ヤ殿向ノ島ヘ渡ス瀨ハ無カ、敎給ヘ、悅ハ猶モ申サント云ヘバ、浦人答テ云、瀨ハ二ツ候、月頭ニハ東ガ瀨ニナリ候、是ヲバ大根渡ト申、月尻ニハ西ガ瀨ニ成候、是ヲバ藤戸ノ渡ト申、當時ハ西コソ瀨ニテ候ヘ、東西ノ瀨ノ間ハ二町計、其瀨ノ廣サハ二段ハ侍ラン、其內一所ハ深候ト云ケレバ、佐々木重テ淺サ深サヲバ、爭知ベキト問ヘバ、浦人淺キ所ハ浪ノ音高ク侍ルト申ス、サラバ和殿ヲ深ク憑ム也、盛綱ヲ具シテ、瀨蹈シテ見セ給ヘト懇ニ語ヒケレバ、彼男裸ニナリ先ニ立テ、佐々木ヲ具シテ渡リケリ、膝ニ立所モアリ、腰ニ立所モアリ、脇ニ立所モアリ、深所ト覺ユルハ、鬢鬚ヲヌラス、誠ニ中二段計ゾ深カリケル、向ノ島ヘハ淺ク候也ト申テ、夫ヨリ返ル、佐々木陸ニ上テ申ケルハ、ヤ殿ノ暗サハ闇シ、海ノ中ニテハアリ、明日

先陣ヲ懸バヤト思フニ、如何シテ只今ノトヲリヲバ知ベキ、然ベクハ和殿人ニアヤメラレヌ程ニ、澪注ヲ立テ得サセヨトテ、又直垂ヲ一具タビタリケレバ、浦人斯ル幸ニアハズト悅テ、小竹ヲ切集テ、水ノ面ヨリチト引入テ立テ歸テ、角ト申、佐々木悅テ明ルヲ遲ト待、

〔朝鮮御陣實記〕同年〇天正十九年諸大名衆江御陣觸之御朱印出ヅ、其御衆は、小西攝津守殿、羽柴對馬侍從殿、〇中略右之御大名衆江對馬ゟ爲案内者被相添候者共之覺、

久留米侍從殿ニハ平山四郎右衛門、備前宰相殿ニハ中尾三郎兵衛、〇宰相殿內岡豊前ニハ小田彌三右衛門、長船紀伊守ニハ石田伊兵衛、石田治部少輔殿ニハ阿比留庄右衛門、神宮助太郎、扇惣兵衛、增田右衛門尉殿ニハ松尾久兵衛、梭原伊右衛門、柏木右衛門、大谷刑部少輔殿ニハ渡島藤左衛門、串崎又左衛門、服部采女殿ニハ平山惣右衛門、一柳右近將監殿ニハ友屋彌右衛門、加藤主計頭殿ニハ服部傳右衛門、鍋島加賀守殿ニハ松尾作右衛門、黑田甲斐守殿ニハ脇田利兵衛、羽柴豊後侍從殿ニハ間永甚七郎、毛利壹岐守殿ニハ不覺、福島左衛門大夫殿ニハ松尾三郎右衛門、蜂須賀阿波守殿ニム不覺、戸田民部殿ニハ長野福右衛門、生駒雅樂殿ニハ不覺、羽柴安藝宰相殿ニハ平山五右衛門、小早川侍從殿ニハ數山治郎右衛門、竹中源介殿ニハ松尾甚右衛門、早川主馬殿ニハ柏木左馬助、木村常陸介殿ニハ井手進右衛門、同進三郎、加須屋內膳殿ニハ江崎小左衛門、牧林兵部殿ニハ小島甚兵衛、大田小源吾殿ニハ島島四郎兵衛、新庄新三郎殿ニハ松尾加右衛門、毛利兵吉殿ニハ佐次奈村庄藏、羽柴藤五郎殿ニハ今井新右衛門、重田津右衛門、淺野彈正殿ニハ井手彌六右衛門、伊達侍從殿ニハ住永四郎兵衛、小西攝津守殿ニハ梯七大夫〇攝津守內小西作右衛門ニハ平山相右衛門、

〔加藤家傳淸正公行狀〕天正二十年壬辰、〇中略淸正都案內ノ爲ニ、宗對馬守ニ通事ヲ借フ、德右衛門ト云吶、而モ都ヘノ不案內ナル通事ヲ遣シ、不埒ナレドモ馬ニ騎セ、眞先ニ立テ行ク、

〔庭訓往來〕當家一族同馳向彼戰場、破却城郭、追伐所楯籠之賊徒、可警固要害云々、

〔庭訓往來抄 下〕戰場ハ師場也

〔陸奧話記〕將軍〇源頼義 置陣如常山蛇勢、士卒奮呼、聲動天地、兩陣相對、交鋒大戰、〇中略 自戰場至河邊所射殺賊衆百餘人、所奪取馬三百餘匹也、〇中略 同〇康平五年九月 七日、破關到膽澤郡白鳥村、攻大麻生野及瀬原二柵拔之、得生虜一人、申云、度々合戰之場、賊帥死者數十人、所謂散位平孝忠、金師道、安倍時任、同貞行、金依方等也、

〔後三年合戰記 中〕武衡使を將軍〇源義家の陣へ遣はして消息して云く、戰やめられて徒然限りなし、龜次といふこは打なん侍る、召て御覽ずべし、そなたよりも然るべき撃手一人出して召合せ、互に徒然を慰められ侍るべきかといひ送れり、將軍出すべき討手を求むるに次任が舍人鬼武といふ者あり、心たけく身の力ゆゝしかりけり、是を撰びて出す、龜次城の中よりおり下る、二人鬭の庭に寄りあへり、兩方の軍目もたゝかず是を見る、

〔奧州後三年記 下〕よし家よし光に爪はじきをしかけていふやう、降人といふは、戰の場をのがれて、人の手にかゝらずして後に咎をくひて首をのべてまいるなり、〇下略

〔保元物語 二〕白河殿義朝夜討被寄事

安藝守ノ郎等、伊勢國ノ住人山田小三郎伊行、〇中略 合戰ノ場ニモ度々ニ及ヲ高名仕タル者ゾカシ、承及八郎御曹司ヲ一目見奉ラバヤト申ケレバ、〇下略

〔源平盛衰記 二十〕石橋合戰事

與一〇佐奈田 既ニ打出ケレバ、佐殿〇源頼朝 ハ義貞ガ裝束毛早ニ見ユ、著替ヨカシト宜ヘバ、與一ハ弓矢取身ノ晴振舞、軍場ニ過タル事候マジ、尤欣處ニ侍トテ、〇下略

〔北條五代記 二〕北條氏綱と上杉朝定合戰の事

軍神血祭

氏綱は〇中略武州へ出馬し、同〇天文六年七月十五日、河越の城にをしよする、三木といへる原は、むさし野の北にて、河越の城にわづか五十餘町をへだつ、此野は人馬の備所せばからず、求るに幸なる修羅場なりとて陣す、

〔北條五代記〕七駿河海にて船軍の事
浮島が原田子の浦は、分てことなる名所、〇中略其頃〇天正はむかしにかはり、波には軍船數々うかび、原には鐵炮の藥の煙、空によこをれ、鬨聲矢さけびの音のみやん事なく、修羅のちまたとなれり、

〔神道名目類聚抄〕四軍神　大將軍神　大將軍ト稱スルハ、武勇ノ神ヲ合祭、是戰場守護ノ神ナリ、故ニ大將軍ノ神ト稱ス、或說ニ大將軍ト云ハ、大山祇神ノ大女磐長姫命ナリト云、今按ニ、江州日吉ノ末社ニ大將軍ト稱スル社アリ、磐長姫命ヲ祭ノ由、日吉社記ニ見タリ、然レドモ山州西京紙屋川邊ニ祭大將軍ハ、武神ヲ合祭ノ由傳來ノ旨アリ、又曆家ニ大將軍ト云アリ、各別ナリ、是陰陽家ニ祭祀スル神ナリ、我軍神ニアラズ、混合シアヤマルベカラズ、

〔軍神問答〕一問云、九万八千軍神と昔より云習はしたり、いかなる神ぞや、又是を祭るべきや、
答〇伊勢貞丈云、佛家の說に、九万八千夜叉神と云は、三寶荒神の眷屬にて、具さにいへば、九億九万八千七百七十二神荒神經に見ゆあり、常には略して九万八千と云、三寶荒神は三世三寶荒神とて、過現未の三世に作る所の惡業に付て來る神也、人の家に種々の障難あるは、皆荒神の祟なり、過去荒神を祭れば、過去九万八千夜叉神を撥ひ、現在荒神を祭れば、現在九万八千夜叉神を撥ひ、未來荒神を祭れば、未來九万八千夜叉神を撥ふと云、按るに古の書に、九万八千軍神と云事見えず、中古源平合戰の物語以來の書に、九万八千軍陣と云事見えたり、然れ共軍神には非ず、九万八千夜叉神は人に祟をなし、障難を施す事を好む惡神なる故、中古以來の武士是を祭り、我身方にして敵方

に祟をなさしめんと欲して、推して是を軍神として、九万八千軍神と稱し習はせる成べし、かの夜叉も佛家の說にして天竺の神也、前にも記す如く、我國の軍神を指置て、外國の神を祭るは不義也、かの夜叉神の說とるにたらず、

〔軍神問答〕一問云、古き物語に、合戰の日最初に敵の首を切る事を、軍神の血祭にするといふ事あり、血祭の作法ある事歟如何、　答云、血祭といふ事軍物語の草子などには見えたれ共、正しき書には見えず、作法はなき事なれども、俗人の意には、軍神は專ら殺罰を司どり、人を殺すことを好み悅び給ふなるべしと、推量にて、最初に首を切る事を血祭と名付たるのみにて、別に作法はあるまじき也、それ天下を治るに二つの道あり、文道武道是也、文道は万民を憐み惠み、善を勸る道也、文道のみにては愛憐に乘じて、万民我まゝに成て治め難きに仍て、武の道あり、武道は万民を威し怖れしめて、惡を懲すを本意として、人を殺すをば本意とせざるなり、若し惡人有て武威を怖れず、猶惡逆を行ふに至ては、これを殺さゞれば其惡逆止ず、大害をなすに仍て、軍を起して彼惡人を殺すに至る、是止事を得ざれば也、神功皇后の新羅を征伐し玉ひしに、新羅王一戰に不及して降參し、それに次で高麗百濟兩國共に戰はずして順ひ奉りき、皇后の御軍是ぞ誠に神武とはいふべき、如斯軍を起すといへ共、戰はず刃に血ぬらずして、敵の兵を屈せしめて勝を、武道の本意とすることなれば、武道を守り玉ふ軍神、人を切る事を好み悅び給ふべからざれば、軍神の血祭といふ事は、武道の本意根本を知らざるもの、いひ出したる詞のみにて、實に其祭法有にはあらず、

〔兵法一家言〕八軍神ノ事ニ諸家種々ノ異說アリ、然レドモ本邦ノ古典ヲ按ズルニ、太古ノ世ニ勇威猛烈ニシテ天地ヲ震動セシハ、須佐雄神ニ比スベキ無ク、其次ハ健雷雄神ナリ、其後ハ日本武尊功業最大ニシテ、其次ハ神功皇后、其後ハ田村將軍ナリ、本邦ニ於テ軍神ト齋(イツク)ベキハ、斯五柱ノ

神ナリ、近古ニ至テ八幡宮ヲ軍神トシテ此ヲ祭ル家多シ、善ナルコトハ善ナリト雖ドモ、古傳ニ應神天皇ノ自親軍シ給タル說アルコトヲ聞ズ、或ハ不動明王、大威德明王、摩利支天、辨財天、千手觀音、鬼子母神等ヲ軍神トスル家有リ、然レドモ天竺國ノ佛達ヲ本邦ノ軍神ニ祭ルハ、義ニ於テ迂ナリト云ベシ、又愚老先年游歷中信濃國諏訪神社ノ舊記ヲ見シニ、此神社ハ神世ヨリ鎭座シ給フ神ナレドモ、今社ヲ興シタルハ、桓武天皇延曆十九年、坂上田村麻呂蝦夷ヲ征伐スルトキニ祭リテ、以テ建立セシ所ナリ、然レバ朝敵征伐ノトキニ祭ル軍神ハ、健御名方神ヲ用ルモ宜シカルベシ、田村麻呂ノ大功ヲ成セシヲ以テ斯神ノ威德ヲ奉察スベシ、○中略延曆十九年田村麻呂蝦夷ヲ征伐シ、信濃國ヲ過リテ諏訪神社ヲ建立シ、蝦夷降伏ノ祭ヲ爲セリ、同二十年田村麻呂蝦夷ヲ征シテ大ニ此ヲ打破リ、連リニ戰ヒ皆勝チテ惡潞王ヲ困死セシメ、蝦夷ノ殘黨ヲ攻擊テ遂ニ海外ニ追攘ヘリ、是ヨリ以後ハ日本國中ニ絕テ蝦夷人ノ住居スルモノ無シ、田村麻呂ノ功業大ナル哉、由是コレヲ觀ルトキハ、諏訪明神ノ神德モ亦廣大ナルコトヲ欣戴スベシ、

〔參考保元物語二〕義朝白河殿夜討事

京師本、杉原本並云、伊勢國住人古市伊藤武者景綱、子息伊藤五伊藤六、今日ノ軍ノ先陣ゾト名乘ケレバ、爲朝件ノ大弓ニ、サキ細ノ矢ヲ打番ヒテ、平氏ガ郎等サシモノ者ニテハヨモアラジ、此矢ヲ射ンズルハ彼ガ爲ニハ惜キ物哉ト宣ケレバ、須藤九郎申ケルハ、淸盛ガ郎等ニハ、是等コソ宗徒ノ者ニテ候ヘ、疾クアソバシ候ヘト申ケレバ、去バ軍神ニ祭ラントテ暫弓ヲ引持、表ニ進タル伊藤六ガ眞中ニ押當テ發チタリ、

〔平家物語九〕宇治川の事

こゝにぎよれうのひたゝれにひおどしのよろひきて、れんせんあしげなる馬に、金ふくりんのくらをおきて乘たりける。むしや一き、まつ先にすゝんだるを、はたけ山こゝにかくるはいかな

る者ぞ、なのれやと云ければ、是は木そ殿の家の子に、ながせのはんぐはん代志げつなと名のる、品山けふのいくさ神いはゝんとて、ぞしならべてむずとくんで引おとし、我のつたりけるくらのまへわにをし付、ちつ共はたらかさず、くびねぢきつて、本田の次郎がくらのとつ付にこそ付させけれ、

〔源平盛衰記三十五〕巴關東下向事

鎌倉殿〇源頼朝ノ仰ヲ蒙、勢田手ノ先陣ニ進ルハ、遠江國住人、内田三郎家吉ト名乘、進ケリ、巴〇義仲妾ハ一陣進ムニハ、剛者大將軍ニ非ズトモ、物具毛ノ面白キニ押竝テ組、シヤ首ネヂ切テ軍神ニ祭ラント思ヒケルコソ遲カリケレ、

〔源平盛衰記四十二〕義經解纜渡四國附資盛清經頸可上京都由事

判官〇源義經ハ、此奴原ハ近國ノ歩兵ニコソ有メレ、若者共責入テ、一々ニ首切懸テ軍神ニ奉レト下知シケレバ、河越小太郎茂房〇中略五騎轡ミヲ並、鞭ヲ打テ蒐入ケリ、〇中略首共四五十切掛テ奉軍神、悅ノ時二度造、西國ノ軍ノ手合也、物能々々トゾ勇ニケル、

〔曾我物語四〕小二郎かたらひえざる事

五郎〇曾我時致申けるは、〇中略一ぢやうは、ゝや、二のみやの太郎にいひつる事とおぼえたり、〇中略ただい一うへ〇源頼朝にきこしめされては、志ざいるざいにもおこなはれ、身をいたづらにせん事のむねんさよ、いざや此事もれぬさきに、小次郎がほそくびうちおとし九万八せんのいくさがみのちまつりせん、われらが志たるとは、たれか志るべきといひければ、

〔太平記六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

降人ノ輩〇平野將監等、中略ハ日ヲ經テ京都ニ著シカバ、六波羅ニ誡置テ、合戰ノ事始ナレバ軍神ニ祭テ、人ニ見ゴリサセヨトテ、六條河原ニ引出シ、一人モ不殘首ヲ刎テ被懸ケリ、

出陣　歸陣

〔關八州古戰錄三〕武州村岡河原軍ノ事
甘精承リテ手ノ人數ヲ引連、彼敵陣ヘ押懸、弓鐵砲一放シ宛放スヤイナヤ、鎗ヲ傾、鋒先ヲ揃ヘテ、曳聲揚テ突テ懸リ、四角八方ヲ切亂シケレバ、武州衆立足モナク捲クリ立ラレ、我先ニト逃走ケリ、景虎首共實檢シテ、軍神ノ血祭ニイシクモ能セリト悦喜ヲナシ、村岡河原ヘ押詰ラル、(〇下略)

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕極月(〇元龜三年)廿二日に、濱松(〇徳川家康)味方が原までをし詰被成る、其日御一戰有べしとて、廿二日の朝、信玄公いくさ神へ被進とて、あそばすとて、御歌に、
たゞためたのむやはたの神風に濱松がえはたをれざらめや、とかくあれども、合戰にはなさるまじきと有、

〔大草相傳聞書〕一出陣御肴集養の事、主人貴人も志かとは居たまはず候、うきさそくにて御座候て、御酌まはり候へば、打あふひの前の二ばんめを御口にあて、御懷中有て、御盃三ッかさねたる上の盃を取、三ど御酒きこしめし候て、御酒の下を志たの盃に御捨候て、かはらけ二つの下にかさね、又二こんめにはかちぐりの五ッすはりたる中を取、御口にあて懷中有、又上の盃を取、三ど御酒きこしめし、かはらけを又下に御かさね、三こんめにはこぶ五ッすはりたる前二番めのをとりて、又口にあて懷中有て、又御盃を取、三どきこしめし、左のひざをかづき、かはらけをば又下に御かさね候へば、最前の上のかはらけ、又後に上に成なり、
一御歸陣の御肴は、かつて、うつて、よろこぶとくみ候、御さかなあげ樣の事、出陣には相ちがひ候、いつものごとくさいの外にてちとかゞみ、左の足よりあがる也、御前にていつものごとくひざをつきあげ候て、歸り樣は左とも右ともなく、そのむきよきかたに歸る也、
一出陣門出の時は支度の樣躰の事、主人も御守りなどかはさせられ、御心もち人べく候、同宮づかひの役者支度の事おしいだし、そのまゝ御出陳の時は、のどわはきつめはひだてまで仕、わき

ざしはこらんにさす也、みやづかひの事は右にくはしくあり、又御出陣とて兼日御かどいでの時は、上にみえぬやうに、はだにはこぐそくして、支度もかろ〴〵として宮仕有べく候、

〔今川大雙紙〕陣具に付て式法之事

一軍陣へ出給ふ時、女にうしろみせぬ事也、〇中略

一御出陣の時、御ぐそくからふとを出す事、妻戸より出べし、同御旗も同前也、〇中略

馬に付て式法之事

一都鄙たとへば出陣の時、其外へ出る時、馬に乘べき次第、東へ馬を引むけて乘べし、何ものやうに乘て、左右の手に手綱を輪にして左江三度まわすべし、但出陣之時は、口をひかずまわし乘也、〇中略

酒に付て式法の事

一出陣の時酌執事、御酒參らするには、左の膝をつきて參らする也、膝をばなをすとも、足をば後へひかぬ事也、又御肴のかうのもの一きれ也、

一出陣の門出の時酌の事、常は長柄のほしをおさゆる事無し、此時は右の大指にてほしをおさゆべし、左の膝を立て、右の膝を片敷て、三々九度を進すべし、加杓は有べからず、扨貴人の左の脇へ寄てかしこまる也、御立にて後罷立也、

〔高忠軍陣聞書〕出陣并歸陣時祝肴次第酌以下事

ヘイカウ盃也

出陣時

かちぐり 七も 五も　よろこぶ 五も 三も
へいかう 三
打あはび 五本も 三本も

前

歸陣時

鮑 五本も 三本も　よろこぶ 五も 三も
へいかう 三
かちぐり 七も 五も

前

一肴をばかんながけの上に、めしかへにをしきにすゆる也、へいかうはめしかへに折敷にはすへぬ也、其外三種をば折敷に居べきなり、三度のみくふなり、出る時は先一番に鮑のひろきかたのさきより、中程まで口をつけて、尾の方より廣きかたへ少くひて、酒をのむべし、其次二獻めにかち栗を一ツくひて、酒をのむべき也、其次三獻めにこぶの兩方のはしを切のけて中をくひて酒をのむべきなり、毎度軍ばいの時は、あはびかち栗こぶ、此三色たるべき也、我家にしてぐんばいをいはふには、玄ゆでんの九間にて南向て祝なり、家のつくりやうによりて、南へ向がたくば、東へも向べき也、東南は陽のかたなり、其謂なり、〇中略

一軍ばいにかぎらず、兵具ふせひの事、さたする時は、東南可然なり、西北は不可然、陰の方成謂也、何時にても軍ばいの盃を人にのませぬ事なり、只我獨祝なり、のみはてゝ後は、肴を總をひとつにくづして、人のみしらぬ樣にすることなり、はしをば置ぬなり、盃はへいかうならではすまじき也、但時としてなくば、何をもするなり、こぶ五きれの時は、一ナしたに、二ツづゝ重てならべて、其中の上に一置也、三の時は、二ならべて、其中の上に一置なり、かち栗鮑例式のごとくたるべし、打鮑は出陣の時は、細き尾の方をくひての右へ成べきなり、廣きかしらの方にくちをつけそめて、尾のほそき方より、廣きかたへ喰なり、末ひろく成こゝろなり、如此祝をしていづるとも玄ちありて、こゝろにかゝる事あらば、いはひなをすべし、軍ばいをば具足を著てもきざるときも、又旗へたつときも祝なり、

一歸陣して祝の時は、初獻にかち栗をくひて、酒をのむ也、二獻めに、鮑のひろき方のさきをちと切て、折敷に置てその切めよりほそき尾の方へ喰て、酒をのむなり、三獻めには、こぶの兩方のはしを切のけて中をくひて、酒をのむべきなり、鮑のくひやうばかり出陣と歸陣とかはるなり、〇中略

一軍陣へ出さまに弓を可ㇾ持事、弦を下へなして、左の方にひつさげて可ㇾ持、立て物言時は弦をさきへなして、弓杖をつきて物をいふなり、弓杖の突様、左にても右にてもつくべし、又人にたちあふて物をいふ時は、もろ手にて弓杖をつきて弦をそとへなして可ㇾ言、弓のとり様、右の手は上、左の手にて下をもつべし、又畏て物をいふ時は、かずづかにつくばいたる時のごとく弓を持べし、弓のうらはず人にむくる事あるまじき也、弓を人にあてぬやうに可ㇾ持なり、馬上にて弓を持やうのこと、犬笠懸射ときのごとく可ㇾ持、但弦を内へなして持事もあり、是ははや合戦にも及時の儀也、〇中略

一出さまに弦打をする也、南のかたにても東の方にてもむきて、一ッ打べし、人打といふ義也、一打うちて弦に手をかくる也、一打にうち納るこゝろなり、〇中略

一軍陣へ出る時、三ッわすれよといふ事あり、第一家をわすれ、妻子をわするゝ事、第二合戦場にて命をわするゝ事、第三うち勝て忠節をわするゝ事肝要儀也、〇下略

〔義貞記〕一兵具事

戰ニ出ル時酒ヲ飲事アリ、此ハ藥ヲ服セン料也、藥ノ名字ハ宗ノ肝要ニアリ、左ニ盃ヲ取右ニ銚子ヲ持テ立ナガラ嗜ベシ、盃ヲ折敷ニ置事、居テ酌ヲ取ル事禁忌ノ儀也、能々可ㇾ愼之、肴ニ義アリ、銚子ニ子細アリ、

〔了俊大艸紙〕一軍陣に出給路次に、神社又は鳥居に上矢鏑などを奉給ときの役人は、習知らずして不ㇾ可ㇾ勤、殊なる秘事有べし、然ば左右なく人の勤まじき可㆓意得㆒、

〔信玄家法下〕一出陣之砌一日不ㇾ可ㇾ後㆓大將之跡㆒事、語云、聞㆓鐘聲㆒憂、聞㆓鼓聲㆒嘉、〇中略

一御歸陣之砌、片時不ㇾ可㆘御先江歸㆖事、語曰、愼ㇾ終猶ㇾ始、

〔兵法雄鑑三十二客戰〕出陣有て跡さはがざる仕樣三ヶ條事

一持の國地、境目の城々堅固に能繩張可ㇾ仕事、　兵法曰、易坎之彖曰、天險不ㇾ可ㇾ升也、地險山川丘陵、王公設ㇾ險以守ㇾ其國、險之時用大矣哉、自ㇾ古帝王必依ㇾ險以立ㇾ國、所ㇾ謂險者有ㇾ三焉、天險也、地險也、人險也、天險者本ㇾ天之理ㇾ也、地險者因ㇾ地之形、人險者用ㇾ人之力云々、口傳、

一自國他國の境目に諸士の人質をとりて籠、留主居いかにも丈夫に可ㇾ申付ㇾ事、　兵法曰、委ㇾ質爲ㇾ臣、無ㇾ有ㇾ二心、委ㇾ質而策ㇾ死、古之法也云々、

一三百姓の中にて器量の能者をえらび出し、頭お付、鍬鎌をかつがせ、雜人おほく召つるべき事、

〔相州兵亂記 三〕府中軍之事

享祿三年夏ノ比、上杉修理大夫朝興ハ、河越ノ城ニアリケルガ、小田原ノ氏綱ヲ退治シテ、先年ノ恥ヲ雪ハヽシトテ、〇中略武州府中マデ出陣シテケルト聞ヘケンバ、〇下略

〔北條五代記 七〕東海にて魚貝取盡す事附人魚の事

天文六年の夏、小田原浦近く釣舟おほくうかび鰹をつる、此よし北條氏綱聞召、小舟にめされ、海士のしわざを御見物、珍事の御遊、盃酒に興じ給ふ所に、鰹一ツ御舟へとび入たり、氏綱喜悅におぼしめし、勝負にかつうをと、御悅詞なゝめならず、卽時酒肴に用ひらる、然におなじき七月上旬、上杉五郞朝定武州へ發向のよし告來る、氏綱出陣、同十五日の夜いくさに氏綱討勝て、武州を治め給ひぬ、其比は四方に敵有て、每日戰ひやむ事なし、氏綱賞翫し給ふ件の鰹は、勝負にかつうをともてはやし、常に支度し、諸侍戰場門出の酒肴には、鰹をもつはらと用ひ給ひぬ、

〔太閤記 四〕前田又左衞門尉利家末森之城後攻之事

利家被ㇾ申けるは、奧村事尾州荒子の城を、信長公御朱印をも用ゐず渡さゞりし者なれば、城を持遂る事ならずして、縱然切腹に及事は有共、扱に致し渡す者にてはなきぞ、唯急ぎ後詰をせんとて、嫡子肥前守〇利長諸共に物具取て著給へば、籠中御心に思召事もや有けん、熨斗鮑、搗栗など取

すへ、手づからあたゝめ酒を持出、門出を祝ひ給ふ内にも、なごりおしげなる氣は見へながら、門出をいはふことの葉、露よはからず、さすが弓取のつまに備り給ふゑるしかなと覺へ侍る、

〔鴉鷺合戰物語〕一兩方軍手合　九月六日合戰　鴉追善雀かけあづさの事

山城守門出に酒をのむ、さかなにうちあはび、かち栗なり、ちがやの葉にて酒をそゝひで、九万八千のいくさ神に手向、神勸請つねのごとし、此いくさにかちぐり、此敵をうちあわびとまじなひて、馬に打のりて白はた一ながれさゝせて、面ての廣しばに打出たり、

〔奧羽永慶軍記〕七佐竹武威附宇津宮事

義昭是ヲ聞給ヒテ、伊勢壽丸少年ノ身ニシテ、父ノ敵討ントト骨髓ニ徹シ、思フ事コソ哀レナレ、武林ノ家ニ生レ、是ヲ餘所ニ見ル事ヤアラン、イデ〳〵出馬シテ力ヲ合セ、壬生ヲ討ント、弘治三年十二月十五日、宇都宮表ニ發向シ給ヒ、○下略

〔總見記〕十二信長公御父子江北御働虎御前山城搆對陣事

同年○元龜三年七月十九日、於岐阜勘九郎殿信忠初テ御具足ヲ召サレケレバ、上下ノ武士賀詞申上ケル、サラバ陣初ニ江北ヘ出馬有ベシトテ、同日岐阜御首途、○下略

〔常山紀談〕六尾州蟹江に、瀧川一益中入すと告來る時、祐筆尊通といふ者、御出馬可被成者也と書けるを、東照宮、此可の字を削れ、今日に於ては一字も大切也、大敵を前に置、可出馬とはおくれたり、出馬するとは、其時をぬかさぬ也、と仰られけり、

〔江濃記〕野羅田合戰事

義實○六角自身打立給ふ、○中略後陣は義賢馬廻幷後藤、箕浦、田崎、山田以下其勢二万五千餘騎、野羅田表へ出張して、敵をそしと待かけたり、

〔相州兵亂記〕四高野臺合戰之事

初陣

義弘○見ニ上一國ノ勢、幷總州ノ軍兵ヲ催シテ、總州高野臺へ出張ス、

〔太平記 十六〕小貳與菊池合戰事附宗應藏主事

菊池ハ手合ノ合戰ニ討勝テ、門出吉ト悅デ、頓テ其勢ヲ卒シ、小貳入道妙惠ガ楯籠タル、內山ノ城ヘゾ推寄ケル、

〔備前文明亂記〕明レバ文明十六年正月二日、軍首途祝トテ、太田垣參河守大將ニテ山陣ヨリ下、一日攻テ幾バクカ手負死人被射出、晚夕ニ及ビ引退、

〔加藤家傳淸正公行狀 奇〕天正二十年正月五日、秀吉公朝鮮國征伐ノ陣觸アリ、○中略正月廿六日、吉方ナレバ玉名郡船林ニテ勢汰ヲシ、二月朔日諸軍ヲ率ヒテ、隈本鎭守八幡宮へ社參し、諸隊長各上簡ヲ寶殿ニ納メテ、首途ヲ祝シ理運ヲ祈リ、歸陣マデハ後ロヲ不見ト誓ヒ、目出度歸朝セバ、八月十五日每ニ祓川ニテ放生會ヲ行ヒ、隨兵百人ヲ以テ神輿ヲ守護シ、新座本座ノ猿樂ヲ囃シ、廢レタル神事ヲ興隆スベシト淸正自ラ立願シ、祓川ノ橋ヲ渡リ金峯山ヲ遙拜シ、阿蘇大明神ニ立願ス、翌二日瑞龍院ニ詣デ、祖先ノ靈ヲ祭リ、隈本ヲ發シテ大坂ニ到ル、

〔毛利家記 二〕輝元卿朝鮮へ渡ラセ給フベキナレバ、秀元卿ニ系圖ヲツラセ給ハントテ、滿願寺ノ春盛法印ニ吉日良辰ヲ撰セ給ヒ、二月○文祿元年二日ニ系圖ヲツラレテ、賀ノ御祝夥シキアリサマニテゾアリシ、

〔甲陽軍鑑 十一上 品第三十五〕一永祿十二年巳の七月中は、信玄公御內談あり、○中略御談合にも、みませすちは、敵城つく井の城、一ツならで是なしとありて、十が九はみませ海道を、御歸陣とさだめらるる也、

〔書言字考節用集 八言辭〕初陣ウヰヂン

〔保元物語 二〕白河殿攻落事

矢合

金子十郎ハ〇中略太刀ヲ戴テ眞向ニアテ、武藏國住人金子十郎家忠十九歲、軍ハ今日ゾ始ナル、御曹司ノ御內ニ、我ト思ハン兵ハ、出アヘヤトゾ名乘タル、〇下略

〔相州兵亂記三〕府中軍之事

氏綱〇中略子息新九郎氏康ヲ押向ラル、氏康生年十六歲、軍ハ今日ゾ初ナリ、器量骨柄父ヲ越、〇中略肩ヲ雙ル人ゾ無キ、

〔甲陽軍鑑九下品第二十五〕子息玉〇甘利千代父備前守におとらぬ武篇の人にて、其年十月の御陣より望て、初陣を仕り、笛吹峠にての合戰に、十三歲にて、能武者を討て高名仕る、大方武田の家の侍衆は、大小ともに十六歲を初陣と定らる、然共藤藏は、百五十騎の馬乘かしらなしには、いかゞと佗言申上、十三にて初陣なり、

〔總見記一〕信長公元服初陣風俗事

天文十六年、信長公武者初トシテ、三州エ御出陣也、此時信長公、紅筋ノ頭巾羽織馬鎧ノ出立也、是ハ平手中務計ヒ申シケルト也、サテモ三州ニ至テ、今川家ヨリ人數ヲ籠ヲキケル、吉良大濱ト云處ヲ信長公民屋ヲ燒拂テ、其日ハ野陣ヲ張テ一宿アリ、翌日名古野エ歸陣シ給フ、是信長公陣始也、

〔明良洪範續篇九〕空印〇酒井忠勝初陣ノ時ノ事ナド尋ラレシニ、初陣ニハ闇夜ノ如クニテ、一步ノ先モ見エヌ也、二度目ニハ少シハ明ルク、オボロ夜ノ樣也シ、恥敷事也、大勇ノ者ハ左ハ有ベカラズ、我等如キハ、皆斯如クト申サレケリ、謙退深キ賞能ナリ、

〔保元物語二〕白河殿義朝夜討被寄事

四郎左衞門賴賢〇中略川越ニ矢二ツ放ツ、夜中ナレバ誰トハ不知、矢面ニ進タル者二騎被射落ヌ、四郎左衞門モ內甲ヲ射サセテ引退ク、下野守〇義朝ハ矢合ニ郞等ヲ射サセテ、安カラズ被思ケレ

ば、〇下略

〔平家物語七〕くりからおとしの事

去程に源平兩方、ぢんを合す、ぢんのあはひ、わづか三町計によせあはせたり、源氏もすゝます、平家もすゝます、やゝ有て、源氏の方より、せい兵をすぐつて十五きたてのおもてにすゝませ、十五きが上矢のかぶらを、たゞ一度に平氏の陣へぞい入たる、平家も十五きを出て、十五のかぶらをゐ返さす、源氏三十きを出て、三十のかぶらをゐさすれば、平家も三十きを出て、三十のかぶらをゐ返さす、源氏五十きを出せば、平家も五十きを出し、百きを出せば百きを出す、兩方百きづゝ、陣の面にすゝませ、たがひにせうぶをせんとはやりけるを、〇下略

〔吾妻鏡九〕文治五年八月八日乙未、金剛別當率數千騎、陣于阿津賀志山前、卯剋二品〇源頼朝先試遣畠山次郎重忠、小山七郎朝光、加藤次景廉、工藤小次郎行光、同三郎祐光等、始箭合、秀綱等雖相防之、大軍襲重、攻責之間、及巳剋賊徒退散、

〔八幡愚童訓上〕十一月〇文永十一年廿日、蒙古自船下、乘馬擧旗責カヽル、日本大將ニハ、小貳入道覺惠孫、纔ニ十二三者、箭合ノ爲トテ、小鏑ヲ射出タリシニ、〇下略

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

東西南北寄手、相近テ時ヲ作、其聲百千雷ノ鳴落ガ如ニシテ、天地モ動ク計也、時聲三度揚テ、矢合流鏑ヲ射懸タレドモ、城中靜還テ、時聲ヲモ不合、當矢ヲモ射ザリケリ、

〔太平記十四〕將軍御進發大渡山崎等合戰事

山崎ノ合戰ハ、元弘ノ吉例ニ任セテ、赤松先ヅ矢合ヲスベシト、兼テ定メラレタリケルヲ、播磨ノ紀氏ノ者共三百餘騎拔懸シテ一番ニ推寄セタリ、

〔應仁記三〕今出川殿御上洛之事

同年六月〇應仁二十三日、土岐世保違背上意之條、國司〇伊勢國司北畠教具へ被仰出御退治無異儀也、〇中略同七〇月廿八日進發、北方柳若松ニテ矢合在、

〔倭訓栞中編九〕さきがけ　先驅の義、殿最の最也、神代紀にみさきはらひとよめり、或は魁をよみ、東鑑に先登をよめり、物にさきうちともいふめり、

〔花徑樵話二帙六〕文昌星〇中略勝田祐義ノ人正德頃要字集節用大成、魁星字ノ標註ニ云、魁星、斗魁トモ北斗柄トモ云フ、北斗ノ七星ノ一ツナリ、サキガケヲ守ルノ星、又ハ文章ヲ守ルノ星ナリ、右ノ手ニ筆ヲ持、左ノ手ニ硯ヲ持、鰲トイフ魚ニ乘ル、魁ハサキガケトヨムト見ユ、

〔奧州後三年記〕四郎これ弘臆病の略頌に入たる事をふかくはぢとして、今日我剛臆はさだまるべしといひて、飯さけおほくくひて出、こと葉のまゝにさきをかくる間に、かぶら矢頸の骨にあたりて死す、射きられたる頸のきりめより喰たる飯すがたもかはらずしてこぼれ出たり、見るもの慚愧せずといふ事なし、

〔吾妻鏡二〕養和二年〇壽永元年六月五日甲辰、熊谷二郎直實者、匪勵朝夕恪勤之忠、去治承四年、追討佐竹冠者之時、殊施勳功、依令感其武勇給、武藏國舊領等、停止直光之押領、可領掌之由被仰下、而直實此間在國、今日令參上賜件下文云云、

下　武藏國大里郡、熊谷次郎平直實所定補所領事、

右件所、且先祖相傳也、而久下權守直光押領事停止、以直實爲地頭之職成畢、其故何者、佐汰毛四郎、常陸國奧郡花園山楯籠、自鎌倉令責御時、其日御合戰、直實勝萬人前懸一陣、懸壞、一人當千顯高名、其勸賞件熊谷鄉之地頭職成畢、子々孫々永代不可有他妨故下、百姓等宜承知、敢不可違失、

治承六年五月卅日

〔吾妻鏡九〕文治五年七月八日丙寅、下河邊庄司行平、依仰調獻御甲、今日持參之、開櫃蓋置御前、相副

一紺地錦御甲直垂上下御覽之處、皆後付笠標、仰曰、此笛付袖、爲尋常儀歟如何者、行平申云、是曩祖秀郷朝臣佳例也、其上兵本意者先登也、進先登之時、敵者以名謁知其仁、吾家自後見此笛、可必知其先登之由者也、但可令付袖給否、可在御意、謂進如此物之時、用家樣者故實也云云、于時蒙御感、

〔春秋左氏傳一隱公〕十一年秋七月、公會齊侯鄭伯伐許、庚辰傅于許、潁考叔取鄭伯之旗蝥弧以先登、子都自下射之顚、瑕叔盈又以蝥弧登、周麾而呼曰、君登矣、鄭師畢登、壬午遂入許、

〔義經記四〕すみよし大物二ヶ所かつせんの事

たゞのぶ〇佐藤にさきがけを給て、〇中略へさきに打渡て出合たり、

〔承久軍物語三〕こゝにたけ田の五郎のぶみつは、あまたの子どもの中に小五郎をまねきて、いくさのならひは、おや子をもかへりみねば、ましてたにんは申にやをよぶ、一人ぬけ出てさきをかけ、かうみやうせんと思ふがほんいなり、汝をかさ原の人どもにとられずしてぬけ出、大井のわたりの先陣をつとめよかしといはれければ、小五郎それがしもさこそ存候へとて、一二町ぬけ出て河のはたにすゝみけり、

〔新撰長祿寛正記〕カヽル處ニ、南京ノ大路ヨリ馬乘一騎掛來ル、何モノゾトアヤシミケレバ、河内守ガ供ニツレタル時宗ノ僧馳來、味方神南山ニ引籠合戰火急ニ候得バ、何モ命難助、サリナガラ殿ノ後詰アソバシ候ハヾ、若ヤ皆々引取候ハンヤト涙ヲナガシ申ケル、サラバ疾イソガントテ山ノ井ノ里ヨリ須屋ト平トヲ先ガケトシテ、三百餘騎、副鴨道ノ峯ヨリヨヂ上リ、火ノ手ヲアゲ相圖ノケブリヲ立ラルヽト云ドモ、神南山ノ味方不殘討死シケレバ、義就モ終ニ不叶、西林寺へ引入、

〔播州佐用軍記上〕羽柴秀吉卿播府へ下給事

秀吉卿播州下向ノ時、路次ヨリ三木へ使ヲ立ラレ、府中へ參ランヨトナリ、依之長治幷家臣別所

一番鎗
一番乘

吉親三宅忠治ヲ倶シテ秀吉卿ノ陣ニ參、一兩日逗留シテ病ト稱シ三木ニ歸リ、其後出仕ヲ爲ザリキ、〇中略今秀吉ヲ大將トシテ此人之先蒐セン事、先祖ニ對シ面目無ケレバ、サテコソ病ト號シ不出逢、

〔武道初心集下臣職〕只明日ニモスハトイフ時、平場ノ迫合ナラバ壹番鎗、敵城ヲ攻ルニ於テハ一番乘、モシ味方利ヲ失ヒ引退ク刻ハ殿、(シンガリ)或ハ品ニ寄リ敵ノ射ル矢オモテニ立塞リテ、主君大將ノ御身代リニモ罷立、或ハ其場ヲ一足モ引退カズシテ、晴ナル討死ヲモ遂ナン、

〔相州兵亂記四〕加島合戰之事

小田原方ニハ、大橋山城守、桑原平内、諏訪右馬介乘ヌケ、一番ヤリ、

〔別所長治記〕平山合戰

羽柴小一郎秀長、平山ノ腰ノ廣ミニ驅出、一番鑓ヲ合スル、

〔武功雜記上〕一番ヤリト云モノハ、敵味方鐵炮セリ合濟、互ニ大勢守リ合候中ニ、一番ニ進出、鑓ヲ合スルヲ一番鑓ト云、

〔長澤聞書〕高麗陣のはなしになり、釜山海を責候時、加藤主計殿內、庄林隼人、森本儀太夫、飯田角兵衞等、一番乘仕候、黑田殿內にて後藤又兵衞一番乘、赤き母衣をかけ、城中にて無比類、爰かしこの働驚目候、舟手軍一番手の手柄、左馬殿〇加藤內萩作右衞門、〇下略

〔藤堂家覺書〕後之高麗陣、なんこいへ御取かけ被成候に、かたなみ殊之外楯籠居申候、和泉樣〇高虎一番乘、八月〇慶長二年十五日之夜、則時に責崩し、首數二百六十九御取被成候、則御よこ目衆御覽被成、何も御寄合候て、度々之御手柄之段、具言上可被成と被仰候、

拔懸

〔易林本節用集言語〕拔懸(ヌケガケ)

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

九月〇元弘元年一日、六波羅兩檢斷糟谷三郎宗秋、隅田次郎左衞門五百餘騎ニテ、宇治平等院へ打出テ、軍勢著到ヲ著ルニ、催促ヲモ不待、諸國軍勢晝夜引モ不切馳集テ十萬餘騎ニ及ベリ、既ニ明日二日巳剋ニ押寄テ矢合可有ト、定メタリケル其前日、高橋又四郎拔懸シテ、獨高名ニ備ヘントヤ思ケン、纔ニ一族勢三百餘騎ヲ率シテ、笠置ノ麓ヘゾ寄タリケル、

〔太平記 六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

去程ニ赤坂ノ城へ向ヒケル大將阿曾彈正少弼、後陣ノ勢ヲ待調ヘンガ爲ニ、天王寺ニ兩日逗留有テ、同二月二日午剋ニ、可有矢合於拔懸之輩者、可爲罪科之由ヲゾ被觸ケル、爰ニ武藏國ノ住人ニ、人見四郎入道恩阿ト云者アリ、此恩阿本間九郎資貞ニ向テ語リケルハ、〇中略某不肖ノ身ナリトハ云へ共、武恩ヲ蒙テ齡已ニ七旬ニ餘レリ、今日ヨリ後差タル思出モナキ身ノ、ソヾロニ長生シテ、武運ノ傾ンヲ見ンモ老後ノ恨、臨終ノ障共成ヌベケレバ、明日ノ合戰ニ先懸シテ、一番ニ討死シテ、其名ヲ末代ニ遺サント存ズル也ト語リケレバ、本間九郎心中ニハ、ゲニモト思ナガラ、枝葉ノ事ヲ宣者哉、是程ナル打圍ノ軍ニ、ソヾロナル先懸シテ討死シタリトモ、差テ高名トモ云レマジ、サレバ只某ハ人ナミニ可振舞也ト云ケレバ、人見ヨニモ無興氣ニテ、本堂ノ方へ行ケルヲ、本間怪ミ思テ、人ヲ付テ見セケレバ、矢立ヲ取出シテ、石ノ鳥居ニ何事トハ不知、一筆書付テ、己ガ宿へゾ歸リケル、本間九郎サレバコソ、此者ハ一定明日先懸セラレヌト、心ユルシ無リケレバ、マダ宵ヨリ打立テ、唯一騎東條ヲ指テ向ケリ、石川河原ニテ夜ヲ明スニ、朝霧ノ晴間ヨリ、南ノ方ヲ見ケレバ、紺唐綾威ノ鎧ニ、白母衣懸テ、鹿毛ナル馬ニ乘タル武者一騎、赤坂ノ城ヘゾ向ヒケル、何者ヤラント馬打寄セテ是ヲ見レバ、人見四郎入道ナリケリ、人見本間ヲ見付テ云ケルハ、昨夜宣シ事ヲ實ト思ナバ、孫程ノ人ニ被出拔マジト打笑テゾ頻ニ馬ヲ早メケル、本間跡ニ付テ、今ハ互ニ先ヲ爭ヒ申ニ及ズ、一所ニテ尸ヲ曝シ、冥途マデモ同道申サンズルゾヨト云ケレバ、人見申ニヤ

及バント返事シテ跡ニナリ先ニナリ、物語シテ打ケルガ、赤坂ノ城近ク成ケレバ、二人ノ者共、馬ノ鼻ヲ雙テ懸襄リ、堀ノ際マデ打寄テ鐙蹈張弓杖突テ、大音聲ヲ揚テ名乘ケルハ、武藏國ノ住人ニ、人見四郎入道恩阿、年積テ七十三、相模國ノ住人本間九郎資貞、生年三十七、鎌倉ヲ出シヨリ、軍ノ先陣ヲ懸テ、尸ヲ戰場ニ曝ン事ヲ存ジテ相向ヘリ、我ト思ハン人々ハ出合テ手ナミノ程ヲ御覽ゼヨト、聲々ニ呼テ城ヲ睨デ引ヘタリ、

二度懸

〔源平盛衰記〕三十七平家開城戶口幷源平侍合戰事

平山ハ波打際ヨリ馬ヲ出シテ、主従二騎驅出ツヽ、武藏國住人平山武者所季重、角コソ先ヲバ懸レトテ、城戶口ヘゾ馳入タル、城内ノ者共ハ熊谷鬼神成共、廿餘騎ノ勢ニテハ、手取ニセント見ル處ニ、指違テ平山ト名乘テ懸入ケレバ、廿三騎モ平山ニ附テ内ニ入、○中略熊谷ハ平山ヲ休メントテ、暫和殿ハ氣ヲ繼給ヘトテ、父子二人面テニ立テ散々ニ戰、○中略平山ハ暫休ミテ馬ヲモ氣ヲ繼セケルニ、熊谷ハ馬ヲ射サセテ歩立ニ成、小次郎モ手負ヌト見ケレバ、又入替テ戰ゲリ、旗指ハ黑糸威ノ鎧ニ三枚甲ヲ著タリ、馬ヨリ眞倒ニ被射落タリケレバ、不安思テ、餘ノ者ニハ目ヲ不懸、旗指ガ敵ニ押並ベ引組デ馬ノ上ニテ頸ヲ切、手ニ捧、一人當千ノ兵、平山武者所季重、一陣懸テ、敵ノ首取テ出ル剛者ノ擧動見ヨヤ殿原、我ト思ハン者組ヤ者共トテ、城ノ外ヘコソ出ニケレ、誠ニ由由敷ゾ見ヘタリケル、平山ガ二度ノ蒐トハ是也ケリ、

〔源平盛衰記〕三十七景高景時入城幷景時秀句事

梶原ハ今ハ軍庭平也、寄セヨ者共トテ、子息ノ源太相具シテ、五百餘騎喚テ中ヘゾ入ニケル、此手ニハ新中納言父子、本三位中將、大將トシテ御座ケルガ、敵内ニ亂入ト見給テ、二千餘騎ヲ差向テ、梶原ガ五百餘騎ヲ中ニ取籠テ、アマスナ漏スナトテ、一時許ゾ戰ケル、何レモ互ニ引ザリケルガ、流石無勢ナレバ、梶原下手ニ廻テ、颯ト引テゾ出タリケル、源太ハ如何ニト問ヘバ、御方ヲ離レテ、

敵ノ中ニ取籠ラレ給ヒヌト云、穴心憂ヤ、サテハ討レヌルニヤ、景時生テ何カセン、景季ガ敵ニ組デ死ナントテ、二百餘騎ヲ相具シテ、平家ノ大勢蒐散シテ内ニ入、聲ヲ揚テ、相模ノ國ノ住人鎌倉ノ權五郎平景政ガ末葉梶原平三景時ゾ、彼景政ハ八幡殿ノ一ノ郎等、奥州ノ合戰ノ時、右ノ目射ラレナガラ、其矢ヲ拔カズシテ、當ノ矢ヲ射返シテ、敵ヲ討、名ヲ後代ニ留シ末葉ナレバ、一人當千ノ兵ゾ、子息景季ガ向後率クテ返入リ、我ト思ン大將モ侍モ、組ヤ〳〵ト名乘懸テ、轡ヲ並ベテ責入ケレバ、名ニヤ實ニ恐ケン、左右ヘサトゾ引退、源太尋ヨトテ責入見レバ景季未討、初ハ菊池ノ者共ト射合ケルガ、後ニハ太刀ヲ拔合セテ、名乘ケリ、和君ハ誰、菊池三郎高望、和君ハ誰ゾ、梶原源太景季ト名對面シテ切合タリ、源太ハ甲ヲ被打落、大童ニテ三十餘騎ニ被取籠テ切合ケルガ、菊池三郎ニ押並ベテ引組テ馬ノ際ニ落重テ、菊池ガ頸ヲ取、太刀ノ切鋒ニ指貫テ馬ニ乘出ケルガ、父ノ梶原ニ行逢タリ、平三景時源太ヲ後ニ成テ、矢面ニス、ミ、暫戰ツ、、其間ニ源太ニ鎧キセ、暫休メテ寄ツ返ツ戰ケリ、城戸口ニ眞鍋四郎五郎ト名乘テ出合タリケルガ、四郎ハ梶原ニ討レヌ、五郎ハ手負テ引退ク、平家ノ兵共モ、入替入替戰ケレ共、景時ハ源太ガ死ナヌ嬉サニ、猛ク勇テ、竪サマ横サマ戰ヒケリ暫シ息ヲモ繼ケレバ、父子相具シテ引テ城戸ヘゾ出ニケル、サテコソ梶原ガ生田森ノ二度ノ蒐トハイハレケレ、

〔太平記十四〕箱根竹下合戰事

爰ニ脇屋右衞門佐(義助)子息式部大輔(義治)トテ、今年十三ニ成ケルガ、敵御方引分レケル時、如何シテ紛レタリケン、郎等三騎相共ニ、敵ノ中ニゾ殘リケル、(中略)父義助是ヲバ不知、義治ガ見ヘヌハ、誅レヌルカ又生捕レヌルカ、二ノ間ヲバ離レジ、彼死生ヲ見ズバ、片時ノ命生テモ何カハスベキ、(中略)其死生ヲ知ラデハ、如何ナテ有ベキトテ、鎧ノ袖ニ泪ヲカケ、大勢ノ中ヘ懸入リ給ケルガ、誠ニ父ノ子ヲ思フ志、今ニ初ヌ事ナレドモ、哀ナル御事哉、イザヤ御伴仕ラントテ、義助ノ兵共轡

ヲ雙ベ三百餘騎、主ヲ討セジト懸入ケル、義助ノ二度ノ懸ニ、指モノ大勢戰疲レテ、一度ニバツトゾ引タリケル、

一騎驅

〔甲陽軍鑑十九品第五十一〕山縣三郎兵衞は、家康持の小屋おとしに、人數をつかはし候が、逍遙軒御敗軍をきゝ、一騎がけにもりへ懸付候へども、家康乘勝てかぶとの緒をしめ、早々引取故、五日に山縣をはじめ各武田勢甲州へ引いる、

〔別所長治記〕大村合戰

秀吉宣フハ、是程相圖ヲ定ル合戰ナレバ、敵一手ニハ働マジ、南北ニモ手立アルベシト、方々へ心ヲ配リ見合ラルヽ處ニ、大膳被討テ候、後詰ノ勢遲々ニヲイテハ、唯今當城落去疑ナシト注進ス、秀吉聞モアヘズ、駿馬ニ鞭ヲ加ヘ一騎掛ニカケラル、

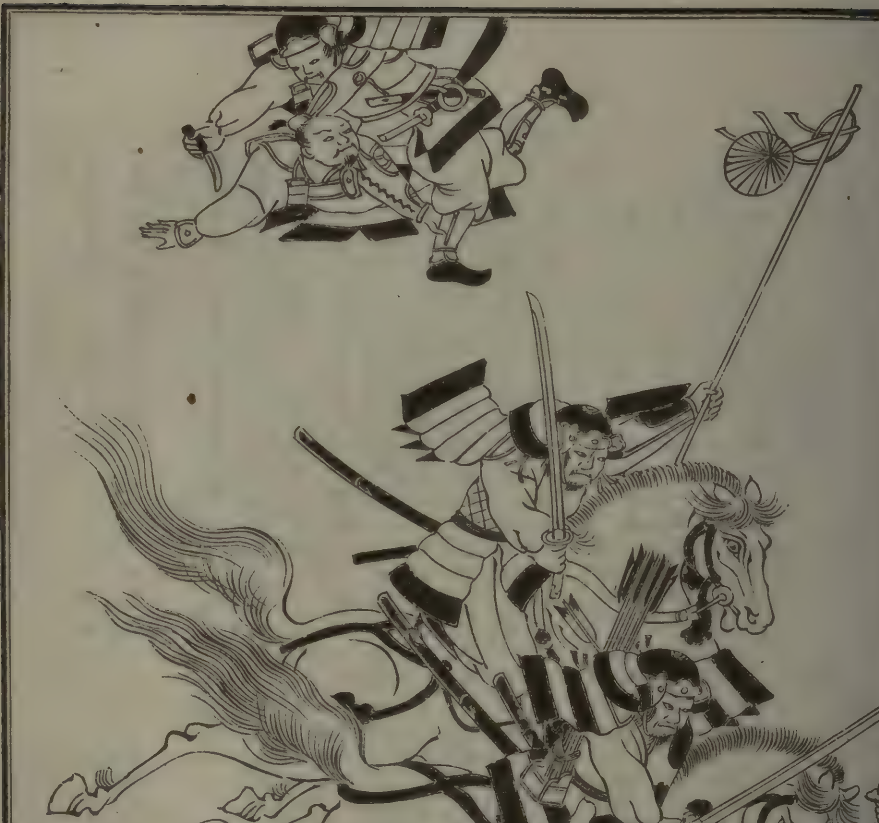
組打

〔兵法一家言一披御〕組打ノ時ハ、早右手刺ヲ用テ、組ナガラ胸脇ヲ突ベシ、是別シテ大事ノ早業ナリ、常ニ能心得居ベシ、都テ組打ハ高組ハ損ナリ、早下手ニ組ヲ良トス、假令下ニ成テモ、組敷シテモ、早右手刺ニテ、二刀三刀モ、敵ノ胸脇ヲ突通ベシ、大事ノ處ヲ突通サレテハ、如何ナル强敵モ、直ニ弱ル者ナリ、

〔保元物語二〕白河殿攻落事

金子十郎ハ、滋目結ノ直垂ニ、裾緝目ノ鎧著テ、鹿毛ナル馬ニ黑鞍置テ乘タルガ、矢種ハ皆射盡テ、太刀ヲ拔テ眞甲ニアテ、武藏國住人金子十郎家忠十九歲、軍ハ今日ゾ始ナル、御曹司〇源爲朝ノ御内ニ、我ト思ハン兵ハ、出アヘヤトゾ名乘タル、八郎宣ケルハ、惡ヒ剛者カナ、我矢比ニ寄テ扣ヘタリ、只一矢ニ射落サント思ヘ共、餘ニ優シケレバ、誰カ有、アレ提テ參レ、一目見ント有シカバ、木蘭地ノ直垂ニ、紫革ノ腹卷著、栗毛ナル馬ニ乘、高間四郎ト名乘テ、押雙テ組テ落、高間ハ、兄弟共ニ聞ユル大力ナルヲ、家忠上ニ成テ押ヘテ頸ヲカヽントスル處ニ、高間三郎落重テ、弟ヲウタセジト、金


一谷合戰繪



予ガ甲ヲ引仰ケ、頸ヲカヽントシケルヲ、下ナル敵ノ左右ノ手ヲ膝ニテ敷詰、上ナル敵ノ弓手ノ草摺引擧寄返テ、柄モ拳モ徹レ徹レト三刀指テ、ヒルム處ニ下ナル敵ノ頸ヲ取、太刀ノ先ニ差擧テ、此比鬼神ト聞ヘ給、筑紫ノ御曹司ノ御前ニテ、高間ノ四郎兄弟ヲバ、家忠討取タリトゾ呼ハリケル、

〔平治物語〕二〕待賢門軍附信頼落事

大將重盛、與三左衞門景安、新藤左衞門家泰、主從三騎カケ放レ、二條ヲ東ヘヒカレケレバ、惡源太、鎌田ニ蛇ト目合セテ、爰ニ落ルハ大將トコソ見レ、返セヤトテ追懸タリ、既堀河ニテ追詰ケルガ、弓手ノ方ニ材木多充滿タルニ、惡源太ノ乘給ヘル馬、カタナツケノ駒ニテ、材木ニヤ驚ケン、妻手ノ方ヘ跳シトンデ、小膝ヲ折テドウト伏、〇中略鎌田堀川ヲ馳越テ、重盛ニ組マント落逢、重盛近付テハ叶ハジトヤ思ハレケン、弓ノハズニテ鎌田ガ甲ノ鉢ヲ丁ト突、被突テユラユル間ニ甲ヲ取テ打著ツヽ、緒ヲ強クコソ被縮ケレ、與三左衞門馳寄テ、中ニ隔、〇中略景安爰ニアリ、ヨレヤ組マント云儘ニ、鎌田兵衞ト引組テ取テ押ヘケル處ニ、惡源太馬引起シ、是モ堀川ヲ馳越テ、重盛ニ組マントテ飛テ懸リケルガ、鎌田ヲヤ助ル、大將ヲヤウタント思案シケレ共、大將ニハ又モ寄逢ベシ、政家ヲウタセテハ叶ハジト思、與三左衞門一落合テ、三刀サシテ頸ヲ取ル、重盛ハ憑切タル景安討セテ、命生テ何カセントテ、既惡源太ト組マントセラレケルヲ、新藤左衞門馳來リ、家泰ガ候ハザラン所ニテコソ、大將ノ御命ヲバ捨給ベケレトテ、我馬ヲ引向、中ニ隔テ惡源太トムズト組、政家ハ重盛ニクマントシケルガ、主ヲ討セテハ叶ハジト思ケレバ、新藤左衞門ニ落重テ頸ヲ掻、此間ニ重盛ハ虎口ヲ通テ、六波羅迄ゾ被落ケル、

〔源平盛衰記〕二十〕石橋合戰事

兵衞佐〇源頼朝佐奈田ニ宣ケルハ、大場俣野ハ名アル奴原也、今日ノ軍ノ先陣仕テ、彼等二人ガ間ニ

クメ、源氏ノ軍ノ手合也、高名セヨトゾ宣ヒケル、與一蒙ㇾ仰畏テ御前ヲ立、〇中略大場三郎ハ弟ノ俣野五郎ニ、構テ與一ニ組給ヘ、景親モ目ニ懸ラバクマンズルゾト云、俣野ハ餘ニ暗テ敵モ味方モ見エワカズ、與一モ何哉ラントイヘバ、與一ガ鎧ハスソ金物ノ、殊ニキラメキテ馬ノ毛モ白カリキ、白キ幌ヲ懸タリツレバ、験カリツル也ト敎、俣野歩セ出ス、與一馬ニ引レテ近付タリ、俣野敵ノヨスルト思ケレバ、佐奈田與一義貞ト名乘ツルハ落ヌルカト呼ケリ、無下ニ近カリケレバ、義貞コヽニアリ、問ハ誰、俣野五郎景尙ト名乘ヤ遲、押並テ馬ノ間ヘ落重ル、上ニ成下ニナリ、騈返持返、山ノソバヲ下リニ大道マデ四段計ゾコロビタル、今一返モコロビナバ、互ニ海ヘハ入ナマシ、俣野ハ大刀ト聞ニ、イカヾシタリケン、下ニ被二推付一テウツブシニ臥、頭ハ下ニ足ハ上ニ、起ン〳〵トシケレ共、俣野力ナカリケル、與一ハ上ニヒタト乘得テ、義貞敵ニ組タリ、落重レ〳〵ト呼ケレ共、家安ヲ始トシテ、郎等共押隔ラレテ、ツヾク者ナシ、俣野今ハ叶ハジト思テ、景尙佐奈田ニ組タリ、ツヾケヤ〳〵ト叫ケルニ、長尾新五聲ニ付テ落合テ、上ヤ敵下ヤ敵ト問、與一ハ上ニ乘ナガラ角宣フハ長尾殿歟、上ゾ景尙下ゾ與一、謬シ給ナト云、俣野下ニテ上ゾ與一、下ゾ景尙、謬スナト云、頭ハ一所ニアリ、クラサハクラシ、音ハ息突テ分明ニ不二聞分一上ヨ下ヨト論ジケレバ、思侘テゾ立タリケル、俣野穴不覺ノ殿ヤ、音ニテモ聞知ナン、鎧ノ毛ヲモ搜給ヘカシト云、長尾誠ニト思テ、鎧ノ毛ヲゾ搜リケル、與一アラハレヌト思テ、右ノ足ヲ揚テ、長尾ヲムヅト蹈、フマレテ下リニ弓長三杖バカリ、トヾ走テ倒レケリ、其間ニ與一刀ヲ拔テ、俣野ガ首ヲカク、搔共搔共不ㇾ切、指共指共透ラズ、與一刀ヲ持揚テ雲透ニ見レバ、サヤ卷ノクリカタカケテ、鞘ナガラ拔タリケリ、鞘尻クハヘテヌカン〳〵トシケレ共、運ノ極ノ悲サハ、岡部彌次郎ガ首切タリケル刀ヲ、不ㇾ拭サヤニ差タレバ、血詰シテ拔ザリケリ、長尾新五ガ弟ニ新六落合テ、與一ガ胡籙ノ間ニヒタト乘得テ甲ノテヘンヲ引仰テ、頸ヲカク、無慙ト云モ疎也、俣野ヲ引起シテ、イカニ手ヤ負タルト問ヘバ、クビコソ重覺

ユルト云、頸ヲサグレバヌレ〳〵トアリ、手負タルニコソトテ、與一ガ刀ヲ見レバ、鞘尻一寸バカリ碎タリ、ツヨク指タリト覺タリ、其後俣野ハ軍ハセズ、佐奈田與一ハ俣野五郎止メタリト叫ケレバ、源氏方ニハ惜ミケリ、平家方ニハ是ヲ悅ケリ、

〔源平盛衰記三十〕實盛被討附朱買臣錦袴幷新豐縣翁事

平家ノ侍武藏國住人長井齋藤別當實盛ハ、我七十有餘ニ年闌タリ、今ハ後榮期スル事ナシ、終ニ遁ベキ身ニアラズ、何國ニテ死ナン命ハ、同事ト思切、赤地ノ錦ノ鎧直垂ニ、黑絲威ノ鎧ヲ著、十八差タル石打ノ征矢負テ、只一人進出テ、死生不知ニゾ戰ケル、木曾〈〇義仲〉ノ手ニ信濃國住人手塚太郎光盛ト云者アリ、實盛ニ目ヲ懸テ歩セヨル、實盛モ亦手塚ニ目ヲ懸テ進テ懸リ、手塚近寄テ、誰人ゾ、只一人殘留テ軍シ給ハ、大將軍カ侍カ、心ニクシ名乘レ、角申ハ信濃國諏訪郡住人手塚太郎金刺光盛ト云者也、能敵ゾ名乘給ヘヤ、組給ヘト云懸テ、互ニ駒ヲ早メタリ、實盛申ケルハ、戲呼猿者アリト聞、思樣アリ名乘マジ、汝ヲ嫌ニハ非ズ、只首ヲ取テ源氏ノ見參ニ入ヨ、能所領ノ價ナルベシ、徒ニ淵瀨ニ捨ベカラズ、木曾殿ハ見知給ハンズル也、思ヒ切タレバ一人留テ戰也、敵ハ嫌マジ、軍ノ習ハ勝負ヲスルコソ面白ケレ、寄合手塚ト云儘ニ、弓ヲバ捨テ、無下ニ近ク寄合ス、手塚ガ郎等主ニ組セジトテ、馬手ニ並ベテ中ニ隔タリ、實盛押並テムズト組、己ハ手塚ガ郞等ニヤ、餘スマジト云マヽニ、鎧ノ押附ノ板ヲツカマヘ、左ノ手ニテ手綱カイグリ、左右ノ鎧ヲ强ク蹈テ引落シ、馬ノ腹ニ引附テ、提モテ行、足ハ地ヨリ一尺許擧リタリ、手塚是ヲ見テ、郞等ヲ討セジトテ、馳並テ敵ノ鎧ノ袖ニ擱付テ、曳音ヲ出シテ鎧　越、我先ニゾ落タリケル、實盛二人ノ敵ニアヒシラハントセシ程ニ、三人組合テ馬ヨリ下ヘ落タリケリ、實盛手塚ガ郞等押ヘテ、刀ヲ拔、首ヲ搔、手塚其間ニ、實盛ガ弓手ノ草摺引上テ、柄モ拳モ透トサシ、軈テ上ニ乘得、首ヲ搔、水モタマラズ切ニケリ、

〔源平盛衰記三十五〕巴關東下向事

内田只一人、駒ヲ早メテ進ム處ニ、巴是ヲ見、先敵ヲ讃タリケリ、天晴武者ノ貌哉、東國ニハ小山宇都宮歟、千葉足利カ、三浦鎌倉カ、蒼(ヲホツカ)ナ誰人ゾ、角問ハ、木曾殿ノ乳母子ニ、中三權頭兼遠ガ娘ニ巴ト云女也、主ノ遺ノ惜ケレバ、向後ヲ見ントテ御伴ニ侍ルト云、鎌倉殿ノ仰ヲ蒙、勢多手先陣ニ進ルハ、遠江國住人内田三郎家吉ト名乘進ケリ、巴ハ、一陣進ムニハ、剛者大將軍ニ非ズトモ、物具毛ノ面白キニ押並テ組、シヤ首ネヂ切テ軍陣ニ祭ラント思ケルコソ遲カリケレ、手綱カイグリ歩セ出ヌ、去共内田ガ弓ヲ引ザレバ、女モ矢ヲバ不射ケリ、互ニ情ヲ立タレバ、内田太刀ヲ拔ザレバ、女モ太刀ニ手ヲ懸ズ、主ハ急タリ、馬ハ早リタリ、巴内田馬ノ頭ヲ押並、鐙ト〳〵蹴合スルカトスル程ニ、寄合互ニ音ヲ揚、鎧ノ袖ヲ引違タリヤヲヲトゾ組タリケル、聞ル沛艾ノ名馬ナレ共、大力ガ組合タレバ、二匹ノ馬ハ中ニ留テ働カズ、内田、勝負ヲ人ニ見セント思ケルニヤ、弓矢ヲ後へ指廻シ、女ガ黑髮三匝ニカラマヘテ、腰刀ヲ拔出シ、中ニテ首ヲカヽントス、女是ヲ見テ、汝ハ内田三郎左衞門トコソ名乘ツレ、正ナキ今ノ振舞哉、内田ニハアラズ、其手ノ郎等カト問ケレバ、内田、我身コソ大將ヨ、郎等ニハ非、行跡何ニト申セバ、女答テ云、女ニ組程ノ男ガ、中ニテ刀ヲ拔、目ニ見スル樣ヤハ有ベキ、軍ハ敵ニ依振舞ベシ、故實モ知ヌ内田哉トテ、拳ヲ握リ、刀持タル臂ノカヽリヲシタヽカニ打、餘ニ強被打テ、把ル刀ヲ被打落、ヤヲレ家吉ヨ、日本一ト聞タル木曾ノ山里ニ住タル者也、我ヲ軍ノ師ト憑メトテ、弓手ノ肘ヲ指出シ、甲ノ眞顏取詰テ、鞍ノ前輪ニ攻付ツヽ、内甲ニ手ヲ入テ、七寸五分ノ腰刀ヲ拔出シ、引アヲノケテ首ヲ搔、刀モ究竟ノ刀也、水ヲ搔ヨリモ尙安シ、

〔平家物語十一〕ゆみながしの事

弓もつて一人、たてついて一人、長刀持て一人、武者三人渚に上り、源氏こゝをよせよやとぞまねきける、判官、〇源義經安からぬ事なり、馬づよならん若たう共、はせよつてけちらせと宣へば、むさしの國の住人みをのやの十郎、同き四郎、同き藤七、上野國の住人丹生の四郎、信濃國の住人きその

中次五きつれておめいてかく、〇中略たてのかげより大長刀打ふつてかゝりければ、みをのやの十郎小太刀、大長刀にかなはじとや思ひけん、かいふいてにげゝれば、やがてつゞひて追かけたり、長刀にてながんずるかと見る所に、さはなくして長刀をば、弓手のわきにかいはさみ、めての手をさしのべて、みをのやの十郎が甲のしころをつかまうとす、つかまれじとにぐる、三度つかみはづいて、四度のたびに、むずとつかむ、しばしぞたまつて見えし、はち付の板よりふつと引きつてぞにげたりける、殘り四きは馬をおしうでかけず、見物してぞいたりける、みをのやの十郎は、みかたの馬のかげににげ入て、息つぎゐたり、かたきはおふてもこず、其後甲のしころをば、長刀の先につらぬき高くさし上、大音聲をあげて、遠からん者は音にも聞、ちかくはめにも見給へ、是社京童べのよぶなる、かづさの惡七兵衞かげ淸よとなのりすてゝ、みかたのたてのかげへぞのきにける、

〔源平盛衰記四十三〕二位禪尼入海幷平家亡虜人人附京都注進事

能登守、〇平敎經今ヲ限ト狂廻ケレバ、面ヲ向難シ、爰ニ安藝太郎時家ト云者アリ、是ハ安藝國ノ住人ニモナシ、安藝守ガ子息ニモ非ズ、阿波國住人安藝大領ト云者ガ子也、三十人ガ力持タリト聞ユ、郎等二人アリ、同三十人ヅヽ力アリ、時家二人ノ郎等ニ云ケルハ、我等三人心ヲ一ニシテクマンニハ、鬼神ト云共負マジ、能登守强シト云共、ヤハ三人ニハ勝給ベキ、三人取テ合スレバ九十人ガ力也、私ノ力態ハ人ノ證據ニタヽズ、能登守ニ組デ力ヲモ人ニ知セ、剛ノ名ヲモ極メント思フハ如何ニトイヘバ、郎等子細ニヤ及ベキトテ、三人一度ニ䋺(シコロ)ヲ傾打テ懸ル、能登守ハ源氏ノ郎等ニ、名モアリ力アレバコソ敎經ニハ懸ラメ、是ゾ軍ノ最期ナルト思ケレバ、閑々ト相待處ニ、三人鼻ヲ並、透間モナクツト寄ル、一人ヲバ海中ヘダフト蹴入、二人ヲバ左右ノ脇ニ搔挾デ一凛凛(シメ)テ、イザヲノレラ敎經ガ御伴申セ、南無阿彌陀佛〱トテ、海ノ底ヘゾ沈ケル、

〔承久記上〕去程ニ、京方落行ケルヲ、各追懸々々行程ニ、伊具六郎有時ガ手者、伊佐三郎行正、山田二郎ヲ目ニカケテ行程ニ、彼方端モ、此方ノ岸モ、草ハ生ヲホヒ、底モ見ヘザルニ、馬ノシリ足蹈ハヅシテ倒ニ歸リケレバ、山田二郎、堀ノ底ニテ落立タル、伊佐三郎馳ヨセテ、如何ナル者ゾ、山田次郎重忠ゾカシ、ワ君ハタゾ、伊佐三郎行政ト名乘、鎧ヲ越テ落合テ、堀ノ底ニテ引組間、敵御方是ヲ不知、山田次郎乘替下人モナシ、伊佐三郎雜色一人具シタリ、主ガ軍セバ、寄テ手傳モセズ、打合時ハ、立ノキ見物シ、戰疲レテ休時ハ、寄テソバヱ居ル、角スル事三度ニ及ベリ、

〔太平記十七〕山門攻事附日吉神託事
數萬人ノ中ヨリ只一人、備後國住人江田源八泰氏ト名乘テ、洗革ノ大鎧、五枚甲ノ緒ヲ縮、四尺餘ノ太刀所々サビタルニ血ヲ付テ、マシクラニゾ上タリケル、是ヲ見テ杉本ノ山神大夫定範ト云ケル惡僧、〇中略長刀ヲカラリト打棄テ、走懸テムズト組、二人ガ蹈ケル力足ニ、山ノ片岸崩テ、足モタマラザリケレバ、二人引組ナガラ、數千丈高キ小篠原ヲ、上ニナリ下ニナリ覆ケルガ、中程ヨリ別々ニ成テ、兩方ノ谷ノ底ヘゾ落タリケル、

〔應仁記二〕一條大宮猪熊合戰之事
武衞方甲斐朝倉瓜生ガ軍兵、戰ツカレ荒手ニマクリ立ラレテ、廬山寺ノ西迄引退ケレバ、爰ニハ山名相摸守ヒカヘタリケルガ、荒手ニ成リ入替リテ戰ヒケレバ、赤松方ニ浦上小寺依藤爰ヲ詮ト戰ヒケリ、中ニモ依藤豐後守弓手ノ頰ヲ射ラレ、其矢ヲ打カケテ、相摸守一門山名常陸守ト引組デ取テ押ヘ、頸カキ切、太刀ニ貫、名乘ケルハ、古ノ權五郎景政ニモ不劣高名哉トミエケル、相摸守ノ內片山備前守トテ大力有、赤松方明石越前守是又力量ノ者也、互ニ引組テ上ニ成下ニ成ケルガ、明石組勝テ片山ガ頸ヲ取テ立擧處ニ、山名孫四郎ト云片山ガ傍輩押並組ケルヲ、明石引寄是ヲモ打テケリ、

戰場唱己名

〔大友記〕問註所治部大輔旗ヲ揚事附志和瀨セリ合事

豐後勢ノ中ヨリ野上了閑ト名乘テ、川へ駒ヲカケ入ケレバ、秋月勢ノ内ヨリ三柴木彌平次生年十六歲ト名乘テ、川中ニテ引組テサシチガヘテ死ニケリ、

〔常山紀談十一〕清正一揆を攻る時、或夜森本義大夫清正の前にて軍評定せしに、凡組討は力によらず候、心剛にて手きゝたれば易き物なりと申を、清正、組討は危きもの也、勇に誇る時は必仕損ずべしと戒められぬ、其翌日清正の眞先に、森本馬を進る處に、步行武者一人寄合たり、森本聞ゆる馬の上手なれば、敵を橫さまにあてゝ、ひらりと飛下り、立上らんとする敵を引組で、頓て首をとる、清正に向ひ、夕部申せしに違ひ候哉といへば清正大に賞せられけり、○又見續武將感狀記

〔保元物語二〕白河殿攻落事

我先ニト懸ケル中ニ、相模國住人大庭平太景能、同三郎景親、眞前ニ進ンデ申ケルハ、八幡殿、後三年ノ合戰ニ、出羽國金澤ノ城ヲ責給シ時、十六歲ニシテ軍ノ眞前懸、鳥海三郎ニ、左眼ヲ甲ノ鉢付ノ板ニ乍被射付、當ノ矢ヲ射返テ、其敵ヲ取シ、鎌倉權五郎景正ガ末葉、大庭平太景能、同三郎景親トゾ名乘タル、

〔三國志蜀書六〕張飛字益德、涿郡人也、○中略先主奔江南、曹公追之一日一夜、及於當陽之長阪、先主聞曹公卒至、棄妻子走、使飛將二十騎拒後、飛據水斷橋、瞋目橫矛曰、身是張益德也、可來共決死、敵皆無敢近者、故遂得免、

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

與一○佐奈田、中略十五騎ノ勢ヲ相具シテ進出テ申ケルハ、源氏世ヲ取給フベキ軍ノ先陣給テ、蒐出タルヲ誰トカ思フ、音ニモ聞ラン目ニモ見ヨ、三浦介義明ノ弟ニ、本ハ三浦惡四郎、今ハ岡崎四郎義實、其嫡子ニ佐奈田與一義貞、生年廿五、我ト思ハン人々ハ、組ヤ〳〵ト叫デカク、○下略

〔平家物語十一〕弓ながしの事

甲のまころをば、長刀の先につらぬき、高くさし上、大音聲をあげて、遠からん者は音にも聞、ちかくはめにも見給へ、是こそ京童べのよぶなる、かづさの惡七兵衛かげ淸よとなのりすて、ゝみかたのたてのかげへぞのきにける、

〔吾妻鏡九〕文治五年八月十二日己亥、一昨日合戰之時、千鶴丸若少之齡、而入敵陣發矢及度々、又名謁云、河村千鶴丸云云、

〔太平記九〕六波羅攻事

官軍ノ中ヨリ、櫨匂ノ鎧ニ、薄紫ノ母衣懸タル武者只一騎、敵ノ前ニ馬ヲ懸居テ、高聲ニ名乘ケルハ、其身人數ナラネバ、名ヲ知人ヨモアラジ、是ハ足利殿ノ御内ニ、設樂五郎左衛門尉ト申者也、六波羅殿ノ御内ニ、我ト思ハン人アラバ、懸合テ手柄ノ程ヲモ御覽ゼヨト云儘ニ、三尺五寸ノ太刀ヲ拔、甲ノ眞向ニ差カザシ、誠ニ矢所少ク馬ヲ立テ扣ヘタリ、〇中略爰ニ六波羅ノ勢ノ中ヨリ、年ノ程五十計ナル老武者ノ、黑絲ノ鎧ニ、五枚甲ノ緒ヲ縮テ、白栗毛ノ馬ニ靑總懸テ乘タルガ、馬ヲシヅシヅト歩マセテ、高聲ニ名乘ケルハ、其身雖愚蒙、多年奉行ノ數ニ加ハテ、末席ヲ汚ス家ナレバ、人ハ定テ筆トリナンド侮テ、アハヌ敵トゾ思ヒ給フ覽、雖然我等ガ先祖ヲイヘバ、利仁將軍ノ氏族トシテ、武略累葉ノ家業也、今某十七代ノ末孫ニ、齋藤伊豫房玄基ト云者也、今日ノ合戰敵御方ノ安否ナレバ、命ヲ何ノ爲ニ可惜、死殘ル人アラバ我忠戰ヲ語テ子孫ニ留ムベシト云捨テ、互ニ馬ヲ懸合セ、鎧ノ袖ト袖トヲ引違ヘテ、ムズト組デドウト落ツ、〇下略

〔太平記二十九〕將軍上洛事附阿保秋山河原軍事

桃井ガ扇一揆ノ中ヨリ、長七尺計ナル男ノ、ヒゲ黑ニ血眼ナルガ、〇中略只一騎河原面ニ進出テ、高聲ニ申ケルハ、戰場ニ臨ム人每ニ、討死ヲ不志云者ナシ、然共今日ノ合戰ニハ、光政殊更死ヲ輕ジ

テ、日來ノ廣言ヲ、ゲニモト人ニ云レント存也、其名人ニ知ラルベキ身ニテモ候ハヌ間、餘ニコトゴトシキ樣ニ候ヘ共、名字ヲ申ニテ候也、是ハ淸和源氏ノ後胤ニ、秋山新藏人光政ト申者ニ候、王氏ヲ出テ雖不遠、已ニ武略ノ家ニ生レテ、數代只弓箭ヲ把テ、名ヲ高クセン事ヲ存ゼシ間、幼稚ノ昔ヨリ、長年ノ今ニ至マデ、兵法ヲ厤ビ嗜ム事隙ナシ、但黃石公子房ニ授シ所ハ、天下ノ爲ニシテ、匹夫ノ勇ニ非ザレバ吾未學、鞍馬ノ奧、僧正谷ニテ、愛宕高雄ノ天狗共ガ、九郎判官義經ニ授シ所ノ兵法ニ於テハ、光政是ヲ不殘傳得タル處ナリ、仁木細川高家ノ御中ニ、吾ト思ハン人々名乘テ、是ヘ御出候ヘ、花ヤカナル打物シテ、見物ノ衆ノ睡醒サント呼ハテ、勢ヒ當リヲ撥テ、西頭ニ馬ヲゾ扣ヘタル、仁木細川武藏守ガ内ニ、手柄ヲ顯シ、名ヲ知レタル兵多トイヘ共、如何思ケン、互ニ目ヲ賦テ、我是ニ懸合テ勝負ヲセント云者モナカリケル處ニ、丹ノ黨ニ阿保肥前守忠實ト云ケル兵、略○中只一騎大勢ノ中ヨリ懸出テ、事珍シク耳ニ立テモ承ル秋山殿ノ御詞哉、是ハ執事ノ御内ニ、阿保肥前守忠實ト申者ニテ候、幼稚ノ昔ヨリ東國ニ居住シテ、明暮ハ山野ノ獸ヲ追ヒ江河ノ鱗ヲ漁テ業トセシ間、張良ガ一卷ノ書ヲモ、吳氏孫氏ガ傳ヘシ所ヲモ、曾テ名ヲダニ不聞、サレ共變化時ニ應ジテ、敵ノ爲ニ氣ヲ發スル處ハ、勇士ノ己レト心ニ得ル道ナレバ、元弘、建武以後三百餘箇度ノ合戰ニ、敵ヲ靡ケ御方ヲ助ケ、強キヲ破リ、堅キヲ碎ク事、其數ヲ不知、白引ノ精兵、呂水練ノ言ニヲヅル人非ジ、忠實ガ手柄ノ程試テ後、左樣ノ廣言ヲバ吐給ヘト、高ラカニ呼ハテ、閑々ト馬ヲゾ步マセタル、

〔別所長治記〕神吉ノ城攻

大手ノ矢藏ノ扉不殘開カセ、年來廿八九ノ男、卯ノ花威ノ鎧キテ、甲ヲバ卸テ童ニ持セ、皆紅ノ扇開テ大音アゲテ名乘ケルハ、當城ノ大將ノ神吉民部少輔ト云者也、別所小三郎ニ賴レ、今日於當城可討死、同ク死スル道ニテモ、天下ノ大將信忠ノ眼前ニテ、花ヤカナル軍シテ、剛臆ノ程ミセテ

死センコト、武士タル者ノ本望ナリ、イデ見參申サント、甲ヲ取テ著、シノビノ緒ヲシメナカラ、楢ヨリヲ・リ大手ノ城戸開カセ、究竟ノ兵二百餘騎、前後左右ニ隨ヒ、面モフラズ切テ出、

○戰場ニ於テ己ガ姓名家系等ヲ唱フルコトハ、ナホ姓名部諱牓篇揚言系譜條ニモアリ、

古事類苑

兵事部十三

戰鬪下

古事類苑

兵事部十三

戰鬪下

代士將而戰

〔源平盛衰記 二十〕高綱賜姓名事附紀信假高祖名事

兵衞佐殿、又射殺シ給タリケル箭ヲ取テ番ヒ、既ニ引カントシ給ケルニ、佐々木四郎高綱矢面ニ塞リテ、大將軍タル人ノ、左右ナク弓ヲ引矢ヲ放事侍ラズ、御伴ノ者共一人モアラン程ハ、輕々敷事有ベカラズ、郎等乘替其詮也、トク〱延給ヘ、定綱高綱兄弟御身近侍リ、可禦矢仕、但姓名給ラント云ケレバ、佐殿子細ニヤ暫高綱ニ預給フト宣ヘバ、佐々木姓名ヲ給テ、弓矢取テ番ヒ坂ヲ下ニ向テ、大音揚テ名乘、清和帝ノ第六皇子、貞純親王ノ苗裔、多田新發意滿仲ノ後胤、八幡太郎義家ニ、三代ノ孫子、左馬頭義朝ノ三男、前右兵衞權佐源賴朝爰ニアリ、東國ノ奴原ハ、先祖重代ノ家人等也、馬ニ乘ナガラ御前近參條狼藉也、奇怪也、罷退ト云カケテ、暫シ堅テ態ト馬ヲゾ射タリケル、先陣ニ進ケル大場ガ童馬ノ太腹ヲ射通タレバ、如返屛風馬ハ山ノ細道ニ横サマニ倒臥、童ハ馬ニ敷レタリ、道狹ケレバ乘越進テ上者ナシ、馬ヲ取除童ヲ起ントスル程ニ、佐殿遙ニ延給ヌ、其後大場通スナ者共トテ打テ上ケルヲ、定綱高綱兄弟返合テ散々ニ防戰、矢種モ盡ケレバ、四郎高綱兄弟、太刀ヲ拔、坂ヲ下ニ返合返合、七箇度マデ切下ケレバ、大場ガ大勢坂ヲ下リ被追返、此間ニ深杉山ニコソ籠給ヘ、

〔太平記 七〕吉野城軍事

大手ノ合戰急也ト覺テ、敵御方ノ時ノ聲相交リテ聞ヘケルガ、ゲニモ其戰ニ自ラ相當ル事、多カリケルト見ヘテ、村上彦四郎義光、鎧ニ立處ノ矢十六筋、枯野ニ殘ル冬草ノ風ニ臥タル如クニ折懸テ、宮〇大塔宮護良親王ノ御前ニ參テ申ケルハ、大手ノ一ノ木戸云甲斐ナク責破ラレツル間、二ノ木戸ニ支テ、數刻相戰ヒ候ツル處ニ、御所中ノ御酒宴ノ聲冷ク聞ヘ候ツルニ付テ參テ候、敵既ニカサニ取上テ、御方ノ氣ノ疲レ候ヌレバ、此城ニテ功ヲ立ン事今ハ叶ハジト覺ヘ候、未敵ノ勢ヲ餘所ヘ回シ候ハヌ前ニ、一方ヨリ打破テ、一先落テ可レ有二御覽一ト存候、但跡ニ殘リ留テ戰フ兵ナクバ、御所ノ落サセ給フ者也ト心得テ、敵何ク迄モツヾキテ追懸進セント覺候ヘバ、恐アル事ニテ候ヘ共、メサレテ候錦ノ御鎧直垂ト、御物具トヲ下給テ、御諱ノ字ヲ犯シテ敵ヲ欺キ、御命ニ代リ進セ候ハント申ケレバ、宮爭デカサル事アルベキ、死ナバ一所ニテコソ、兎モ角モナラメト仰ラレケルヲ、義光言バヲ荒ラカニシテ、カヽル淺猿キ御事ヤ候、漢ノ高祖滎陽ニ圍レシ時、紀信高祖ノ眞似ヲシテ、楚ヲ欺カント乞シヲバ、高祖是ヲ許シ給ヒ候ハズヤ、是程ニ云甲斐ナキ御所存ニテ、天下ノ大事ヲ思食立ケル事コソウタテケレ、ハヤ其御物具ヲ脫セ給ヒ候ヘト申テ、御鎧ノ上帶ヲトキ奉レバ、宮ゲニモトヤ思食ケン、御物具鎧直垂マデ脫替サセ給ヒテ、我若生タラバ汝ガ後生ヲ弔ベシ、共ニ敵ノ手ニカヽラバ、冥途マデモ同ジ岐ニ伴フベシト被レ仰テ、御淚ヲ流サセ給ヒナガラ、勝手ノ明神ノ御前ヲ南ヘ向テ落サセ給ヘバ、義光ハ二ノ木戸ノ高櫓ニ上リ、遙ニ見送リ奉テ、宮ノ御後影ノ幽ニ隔ラセ給ヌルヲ見テ、今ハカウト思ヒケレバ、櫓ノサマノ板ヲ切落シテ、身ヲアラハニシテ大音聲ヲ揚テ名乘ケルハ、天照大神御子孫、神武天皇ヨリ九十五代ノ帝、後醍醐天皇第二皇子、一品兵部卿親王尊仁、逆臣ノ爲ニ亡サレ、恨ヲ泉下ニ報ゼン爲ニ、只今自害スル有樣見置テ、汝等ガ武運忽ニ盡テ、腹ヲキランズル時ノ手本ニセヨト云儘ニ、鎧ヲ脫テ櫓ヨリ下ヘ投落シ、錦ノ鎧直垂ノ袴計ニ、練貫ノ二小袖ヲ押膚脫テ、白ク淸ゲナル膚ニ、刀ヲツキ立テ、左ノ脇

朝合戰

ヨリ右ノソバ腹マデ、一文字ニ掻切テ、腸繰デ櫓ノ板ニナゲツケ、太刀ヲ口ニクワヘテ、ウツ伏ニ成テゾ臥タリケル、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

已ニ楠ト武藏守ト、アハヒ僅ニ半町許隔タレバ、スハヤ楠ガ多年ノ本望、爰ニ遂ヌト見タル處ニ、上山六郎左衞門、師直ノ前ニ馳塞リ、大音聲ヲ擧テ申ケルハ、八幡殿ヨリ以來、源家累代ノ執權トシテ、武功天下ニ顯レタル、高武藏守師直是ニ有ト名乘テ討死シケル、其間ニ師直遙ニ隔テ、楠本意ヲ遂ザリケリ、

〔新撰長祿寬正記〕尾張守政長ハ菖蒲谷ニ陣ヲトリ、同〇寬正四年五月粉河寺ヲセメ給フ、同年六月二十一日、政長向ヒ合戰有ケル、義就方ニハ湯淺二郎、遊佐河內守郎等中村左近將監、粉骨ヲツクス、然リト云ドモ多勢ニ無勢不叶、已ニ義就討死セント有シトキ、湯淺ト御鎧ヲヌギカヘ、右衞門佐義就ト名乘、度々切テ出、太刀打シ、時剋ヲ移シケル間ニ、義就落ノビタマヒケル、

〔豐鑑二秀吉〕勝家は猶本の陣所、柳瀨の村のはづれに、軍の備をなしてありしが、先勢玄蕃打負るを見て、猶一陣せばやと云しに、毛受勝介と云兵言しは、軍兵やゝ落て失ぬ、戰給ふとも勝べきにあらず、敵に顏をさらさせ給はんよりも、城に歸り自害有て、跡をかくさせ給ふべし、某殘留て御名をけがし討死すべしと、please

〔相州兵亂記三〕小弓義明ト合戰ノ事

去程ニ明日五日〇天文六年十月ノ朝合戰ト定リシカバ、先陣ハ宵ヨリモ河ノ端ニシノビヨリ、明ナバ松戶ヲ越ントツヽミノ下ニゾヒカヘケル、夜已ニ明ケレバ〇中略小田原ノ先陣一度ニ颯ト馬ヲ

打入テ、弓ノ本弭末弭取違テ、匹馬ニ流ヲセキ上テ、向ノ岸ニゾ懸上ル、

〔甲陽軍鑑品第二十七九下〕此歌○略歌を板垣信形見て、目をふさぎまばし案じて申は、去十月やかた樣御病氣故、御代官として、七千餘の人數を我等におほせ付られ、笛吹峠へ向ひ朝合戰に勝、我等牀机に腰をかけ勝時を執行、

朝駈

〔軍中故實〕一夜ガケ朝ガケ、大風大雨ヲ可レ用也、

〔足利季世記三高國記〕常桓發向之事

同○享祿三年九月廿一日ニ、神呪寺ヨリ富松城エ朝ガケシテ責落、廿餘人首ヲトリテ、手合ノ軍ニ物始ヨシト悦ビケリ、

〔武陰叢話四〕高麗にて虎を切たる事は、全義館といふ所に、黒田長政六千餘にて、廿日計陣取居ける、或時夜の引明に陣中俄に騷動す、長政も敵朝。込。に來ると心得、甲を著て井樓へ上り見もふに、大成虎一疋馬屋へ入、馬共嚙殺し狂ひ廻る、

晝討

〔播州佐用軍記上〕十二月十六日ノ夜大平撰手合戰之事

先勢ノ義祐正繼鵜野丸山等ガ二百計ニテ、爰ヲ最期ト防戰ニ、敵ハ堀尾、山中、英積、英賀、羽柴、春日野等ガ、度々夜討晝討。。ニ逢テ、味方毎度追立ラレシ事ヲ、無念ニ思ヒケレバ、今夜ハ去リトモ夜討等ヲ追返サント思ヒ切、喚キ叫デ相戰、

夜軍　夜討

〔釋日本紀十五述義十一〕私記曰、案調連淡海安斗宿禰智德等日記云、○中略天皇問唐人等曰、汝國數戰國也、必知戰術、今如何矣、一人進奏言、厥唐國先遣者視者、以令視地形險平及消息、方出師、或夜襲、或晝。擊。、但不知深術、

〔甲陽軍鑑品第四十二十五〕味方夜。軍。をせんに

一あつくうつて、うすく出る、　口傳有　一險難をよく見る、是に付てすつはの入所也、但それは

まへの事、　口傳　うはぎ胴肩衣白　口傳　一ひかへぐん肝要なり、一時を合こと肝要なり、

一伏かまりに、風の大事、　口傳　かまりの物見は、かきもの聞と云、

〔備前老人物語〕一夜討うつべき心得の事、第一案内者、本より案内なき事もあるべし、第二足場險難心得、第三敵のつかれをうかゞふ事、幷雨風の時うつべし、第四相印、第五鳴物役、第六とひまはる敵をうつべき役者之事、第七立合能する事、第八引志をあいの事、第九打出の時方角の事、引時も目付の事、第十出る方、より約束の備ををき引時それら跡を仕門に立歸分別の事、

〔海國兵談五〕夜軍　夜の戰ハ陣所江寄ルを夜討ト云、城江寄ルを夜込ト云、互に陣を取て夜出て戰フを夜軍ト云ト世上ニ云習わせり、其中夜討ト夜軍トハ少シ替レり、夜討ト夜込トハ、大なる差別なし、

夜ハ敵の容子も分明ならず、足場の善惡、旌旗の相圖も慥ニ見分難ク、敵味方もさだかに知レ難キものなれば、諸軍不都合なる故、十に八九ハ夜の戰をば好マざる事也、然ト云ども夜討ハ勝難キ敵に勝事あるものなり、然シながら約束十分に調ハざれば、只彼是トひしめくばかりにて、戰も仕がたきもの也ト云り、此故に相圖の鳴物、相印、相詞等ヲ能々呑込スべし、まづ夜戰の大趣意ハ旌旗の相圖ハ見へ難キ故、鳴物の相圖を嚴ク定ムべし、鳴物の相圖とは東西南北の鳴物を定メ敎ル事也、たとへば梆子木を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を北ト定ルが如シ、平生の操練に此趣を能呑込セ置て、事に臨て間違のなき様にすべし、此外松明大薄等工夫次第定ムべし、

〔兵法一家言八接戰〕夜戰ニハ三種ノ異有リ、敵陣處ニ押寄テ戰ヲ夜打ト云ヒ、敵城ニ押寄テ攻ルヲ夜込ト云ヒ、敵味方互ニ陣ヲ取リ、雙方夜出テ戰フヲ夜軍ト云フ、夜軍ト夜打トハ其趣少シク異ナルコト有リ、夜打ト夜込トハ大ナル差別ノ無キ者ナリ、〇中略夜打ヲ仕掛ルニハ四箇ノ圖アリ、其一ハ敵ノ到著シタル夜ナリ、其二ハ終日合戰アリシ夜ナリ、其三ハ大風大雨雪降等ノ夜ナリ、其

四ハ敵方吉凶ニ就テ事ノ多キ夜ナリ、猶此外ニ時ノ宜キニ臨ミ、打ツベキ圖ヲ能考ヘ伺ヒテ、神速ニ打掛ルヲ良トス、

〔日本書紀天武二十八〕元年七月甲午、近江別將田邊小隅、越鹿深山而卷幟施鼓、詣于倉歷、以夜半之、銜枚穿城、遽入營中、〇中略於是足摩侶衆悉亂之、事忽起不知所爲、

〔漢書高帝紀一〕秦二年九月、章邯夜銜枚擊項梁定陶、〔師古曰、銜枚者止言語譁囂、欲令敵人不知其來也、周官有銜枚氏、枚狀如箸、橫銜之、繣繫於項、繣者結礙也、繫繞也、音爲結紐、而繞項也、〕

〔將門記〕以同年〇承平七年十一月五日、介良兼掾源護、幷掾平貞盛、公雅、公連、秦清文、凡常陸國等、可追捕將門官符、被下武藏安房上總常陸下毛野等之國也、於是將門頗述氣附力、而諸國之宰乍抱官符慥不張行、好不堀求、而介良兼尙銜忿怨之毒、未停殺害之意、求便伺隙、終欲討將門、于時將門之駈使丈部子春丸依有因緣、屢融於常陸國石田庄邊之田屋、〇中略彼介良兼兼構夜討之兵、同年十二月十四日夕發遣於石井營所、其兵類所謂一人當千之限、八十餘騎、〇中略卽以亥剋出結城郡法城寺之當路、打著之程、有將門一人當千之兵、暗知夜討之氣色、交於後陣之從類、徐行更不知誰人、便自鴨橋上竊打、前立而馳來、於石井之宿、具陳事由、主從惚忙、男女共囂、爰敵等以卯剋押圍也、於斯將門之兵十人不足、揚聲告云、昔聞者由弓人名楯爪以勝於數万之軍、子柱人名立針以奪千交之鉾、況有李陵王之心、汝等愼而勿歸面、將門張眼嚼齒進以擊合、于時件敵等弃楯如雲逃散、將門羅馬而如風追攻矣、遁之者宛如遇猫之鼠失穴、追之者譬如攻雉之鷹離韝、第一之箭射取上兵多治良利、其遺者不當九牛一毛、其日被戮害者卌餘人、猶遺者存天命以遁散、

〔保元物語一〕主上〇主上舊作上皇、據參考本改、三條殿行幸附官軍勢汰事

義朝御前ニ被召、〇中略少納言入道ヲ以テ軍ノ樣ヲ召問ハル、義朝畏テ申ケルハ、合戰ノ行ヤウヤウニ候ヘ共、卽時ニ敵ヲ順ヘ、立所ニ利ヲ得事、夜討ニ過タル事候ハズ、就中南都ヨリ衆徒大勢ニ

テ、吉野十津河ノ者共ヲ召具シテ、千餘騎ニテ今夜宇治ニ著、明朝入洛仕由聞ヘ候、敵ニ勢ノ著ヌ前ニ押寄候ハン、內裏ヲバ淸盛ナドニ守護セサセラレ候ヘ、義朝ハ罷向テ、忽ニ勝負ヲ決シ候ハントゾ進ケル、信西御前ノ床ニ候ケルガ、殿下ノ御氣色ヲ奉リテ申ケルハ、此儀尤可ㇾ然、詩歌管絃ハ臣家ノ翫所也トイヘ雖モ、ソレ猶クラシ、況武藝ノ道ニ於テヲヤ、一向汝ガ可ㇾ爲ㇾ計、誠ニ先ズル時ハ人ヲ制ス、後スル時ハ人ニ制セラルト云ヘバ、今夜ノ發向尤也、然ラバ淸盛ヲ留メン事モ不ㇾ可ㇾ然、武士ハ皆々可二罷向一、

〔源平盛衰記二十〕八牧夜討事

十七日〇治承四年八月ノ夜ハ、忍々ニ兵共集ケリ、時政ハ夜討ノ大將給テ、嫡子宗時ニ先係サセ、弟ノ小四郎義時、佐々木太郎兄弟四人、土肥、土屋、岡崎、佐奈田與一、懷島平權頭等ヲ始トシテ、家子モ郎等モ濯汰タル者ノ手ニ立ベキ兵、八十五騎ニテ八牧ガ館〇加藤兼隆館ヘゾ寄ケル、佐殿〇源賴朝時政ヲ呼返シテ宣ケルハ、抑軍ノ勝負ヲバ爭カ知ベシト問給ヘバ、時政申テ曰、御方勝軍ナラバ城ニ火ヲ放ベシ、負軍ニ成テ人々討ルヽナラバ、急使者ヲ可ㇾ進、靜ニ御自害ト申捨テゾ出ニケル、八十五騎ヲ二手ニ造ル、佐々木兄弟四人ハ搦手ニ廻ル、北條、土肥、岡崎等追手也、兩方ヨリ時ヲ造テ寄タレバ、城ノ內ニモ時ヲ合ス、八牧ニハ折節勢コソ無リケレヨキ者共ノ有ケルハ、伊豆國島田宿ニテ遊バントテ、十餘人出ヌ、殘者共十人計ニハ過ザリケリ、ソモ假事ニテ物具著ニモ及バズ、大肩脫ニテ櫓ヨリ落シ矢ニ、散々ニ射、〇中略去程ニ景廉ハ太刀ヲバ投捨テ、下人ニ持セタル長刀ヲ取、甲ヲシメシコロヲ傾テ、緣ノ上ヘツト上リ、〇中略懸テ內へ攻入テ寢殿ヲサシノゾヒテ見レバ、額突アリ、燈白ク掻立テ、障子ヲ細目ニ開テ、太刀ノ帶取五寸計引殘セリ、見レバ兼隆紺ノ小袖ニ上腹卷著テ、太刀ヲ額ニ當テ、膝付居テ敵ツト入ラバ、ハタト切ント覺シクテ待懸タリ、加藤次過セジトテ、左右ナクバ不ㇾ入、甲ヲ脫ヒデ長刀ノサキニ懸テ、內ヘツト指入タリ、待儲タル兼隆ナレバ、敵ノ

入ルゾト心得テ、太刀ヲ入テ、ハタト切ル、餘ニ強打程ニ、甲ノ星二並三並切削、鴨居ニ鋒打立テ、ヌカン〳〵トスル處ニ、傍ノ障子ヲ蹈倒シ、長刀ノ柄ヲ取直シテ、腹卷ガケニ胸ヨリ背ヘ差貫、籠テトラヘテ頸ヲ搔ク、〇中略郎兼隆ガ頸片手ニ提、障子ニ火吹付テ、暫待テ躍出、北條ニ向テ仕タリトテ、敵ノ首ヲ捧タリ、佐殿ハ遙ニ燒亡ヲ見給テ、景廉ハヤ兼隆ヲバ打テケリ、門出能ト獨言シテ悅給ケル處ニ、北條使ヲ立テ、八牧ノ判官ハ景廉ニ討レ候ヌ、高名ユヽシクコソト申タレバ、神妙神妙ト感ジ給ヘリ、

〔源平盛衰記三十六〕義經向三草山事

九郎義經ハ、サラバ夜討ニセヨトテ、一萬餘騎ニテ、三草山ヲ山越ニ、西ノ城戸ヘト打給、平家ノ方ニハ、先陣コソ自夜討モヤト用心シケレ共、後陣ハ明日ノ軍トテ、甲ヲ脫、箙ヲ解テ枕トシテ打重打重、前後モ不知伏タリケリ、〇中略既ニ子丑剋ニモ成ヌ、如法夜半ノ事ナレバ、クラサハ闇シ、東西モ不見ケルニ、夜討ノ聲ニ驚テ、平家取物モ取アヘズ、甲ヲ著テ鎧ヲバ棄、矢ヲバ負テ、弓ヲバ取ズ、馬一匹ニハ二三人取付テ、我先ニト諍、弓一張ニハ、四五人取合テ引折タリ、主ハ從者ヲ不知、親ハ子ヲ省ズ、適太刀ヲ拔テ敵ヲ斬ト思ヘ共、目指トモ知ヌ、闇ナレバ、多ハ友討ニコソ亡ケレ、大將軍新三位中將資盛ハ、大勢ニ追散サレテ、一矢ヲ射マデハ不思寄、匍々落テ通給タリケルガ、面目ナシトテ福原ヘハ入給ハズ、船ニ取乘、讃岐屋島城ヘ渡リ給、源氏ハ軍ノ手合ニ、門出能トテ勇ケリ、虜リ共ノ首切テ、西ノ山口ニ竿結渡シテ、百八十人ヲ縣タリケル、

〔應仁記一〕御靈合戰之事

夜ニ入ケレバ、寄手モ構ノ內モ、互ニ夜合戰ハ不叶ト、引退テ對陣トツテ、人馬ノ息ヲゾ休メケル、

〔淺井三代記三〕淺井新三郞智略を以て上坂の城乘取事

淺井新次郞教政は鄕つゞきなる垣籠村に火を放ち、鬨を噇とあげ行方しらずに成にければ、上

坂勢は是を聞、されば小勢なるぞ一人ももらすな討とれと、かの村へ押寄、四方を取卷て見れども、敵一人もなかりけり、里の者を尋出し問ければ、武士とおぼしくて甲冑を著たる者、二三十人馳來り、家々に火を放ち鬨をあげ何方へか歸り行候と申せば、それはいかなる方へにげ行やと問ば、南東へ迯行候と申、兵庫頭〇上坂泰舜是を聞扨もにくき夜込の次第かなとて、跡をしたふて討とらんといひしに、〇下略

〔淺井三代記〕四淺井夜合戰の事

淺井亮政は、大橋、伊部、赤尾、海北此人々を近付、密談して宣ひけるは、はや寄手も攻あぐみ、油斷のやうに見えたるぞ、味方も又此中の籠城に、人數もつかれければ、次第に小勢に成べし然れども各や我だに殘りなば、二ヶ月や三ヶ月は、城も堅固に守るべけれども、誰を賴みにいつまでかくは籠るべき、寄手の方へ忍びの者を出し、其樣體を聞屆、夜合戰に驅出、勝負を可決とぞ宣ひける、

〔關八州古戰錄〕八那須七黨沙汰附降參峰黑羽城等軍事

天文ノ初ノ比、大關彌五郞增次ト、太田原備前守資清中惡クテ隙アリケルガ、資清塲へ兼テ不意ニ兵ヲ發シ、黑羽ノ城へ夜驅ヲナシ、

〔相州兵亂記〕四河越之夜軍之事

氏康ハ敵ヲ謀リスマシ、天文十三年四月廿日、上杉ヲ夜討ニスベシトテ、先笠原越前守ヲ以テ、敵陣へ忍ヲ付テ體ヲウカヾヒケルニ、上杉衆、小田原勢ナドノ懸ルベシトハ思ヒモカケズ、氏康ハ定テ明日明後日ハニゲテ行ベシ、河越ヲ責落シテ後ニ、小田原ヲモ取ベシト云モアリ、亦氏康へ內通シテ音信ニ及モアリケル、中々合戰ヲ胸ニ持タルハスクナシト申ケレバ、時分ハヨキゾヤ懸レトテ、皆一同ニ打立ケル、比ハ四月廿日宵過ルホドナリシカバ、月モヤウ〱出シカドモ、天クモリサダカナラズ、小田原勢ワザトサト字〇サト恐衍ニ松明ヲバ不持シテ、紙ヲ切テ鎧ノ上ニ懸、肩

衣ノヤウニシ、相言葉ヲ定メ、重キサシ物馬ヨロイヲ不レ懸、首ヲトルベカラズ切ステト約束シ、前ニアルカトセバ後ヘマハリ、四方ニ變化シテ一處ニヨルナト下知シ給ヒ、子ノ刻計ニ下立、砂窪ヘ切テ入ル、管領ノ勢ハ小田原衆ヲアナドリ、由斷シケレバ、俄ニアハテフタメキ懸合ケルガ、小田原勢四方ニ馳入、前後ヨリ切テ入ル、氏康ハ大道寺ヲ初トシテ、印浪、荒川、諏訪、橋本鑓ヲ披入披入、十文字ニカケ破リ、巴ノ字ニ追廻シ、太刀ノ鍔音矢サケビノ音天地ヲ轟シ、前後ニ入亂、左右ニ散ジテ責戰フ程ニ、上杉憲政ノ旗本ヘ追付、小野播州、本間江州、倉賀野三河守、難波田彈正左衞門、子息隼人佐勢儀入ヲ初トシテ、クッキヤウノ兵三千餘人討死シ、太將憲政不レ叶敗北シケレバ、氏康勢追掛々々討取ケル處ニ、多目周防守ハ氏康ノ旗本ニアリシガ、アゲ螺ヲ吹立ケレバ、諸軍皆引歸シテ集リケレバ、周防守申ケルハ、今夜ノ軍不思議ニ味方ノ御勝ナリ、故ハ敵八萬騎ニ味方八千餘騎、十ガ一ニ不レ及勢ニテ、加樣ニ勝利ヲ得ル事、古今タメシ少シ、若敵取テ返サバ、又味方ノツカレタル處ニ、却テ敵ニ利ヲ付ナン、夜曉天ニ及ブナレバ、明ナバ各勝テ甲ノ緒ヲシメ、松山ノ城ヘ引籠リテ、今日ノ休息スベシト評定シテ、四方ヲハセ廻リ、士卒ノ機ヲ励シケル處ニ、左衞門大夫城ヲ拂テ切テ出テ、御所ヲ追散ス、一陣破レタレバ殘黨不レ全、公方勢モ頼切タル上杉ヲ追散サレテ、ナジカハコラフベキ、一サヽヘモサヽヘズ亂散テ落行ケル、

〔四國軍記〕二吉良退二去讚州一事

元親○長曾我部床机ニ腰打掛、諸將ヲ近付、○中略夫敵ノ銳氣ヲ挫事、不意ニ出ルニ勝ルマジ、願ハ今夜物馴タル兵ヲ擇、一夜擊シテミント思フナリ、密ニ用意セヨヤトテ、究竟ノ勢三百餘人合符合言葉ヲ定、枚ヲ含ミ馬ノ舌ヲ勒シ、其夜ノ三更ニ閑々ト打立ケリ、○中略番所々々ノ戍卒モ冑ヲ脫デ枕トシ、前後モ知ズ臥タリケリ、時分ハ能ゾ素波入ト、先陣ノ兵三百餘騎、一度ニ懷中ノ松明振立振立活ト喚デ切テ入、

〔粉井家日記 二〕桂川合戰事

仁木三郎兵衞賴永、碓井丹後則近、足立右近、小野原右京一手ニナリ候テ、七百餘キニテ、夜中ニ嵯峨ノ邊ヨリ出テ、ムシ夜討ノ勢ト定ム、〇中略遠江守〇波多野御名代ニ參リ居ラレ候、沼田殿林殿モ一分ノ持ノ陣ニテ候、夜ニ入遠江守殿ノ五百ヨキ後ニ扣ラレタル事ナリ、旗頭衆ノ評議ニハ敵ヲ帝都ヘ入候テハ、無禮至極ニ候、弓矢ノ法ヲ取失フニテ候ヘバ、遊奇備衆イヅレモ其心得カンヨウニ候、尤モ松明ニテムスベシ、放火ハ無益ト申合ス、夜モフカク候ヘバ、蒸夜討ノ遊奇衆ハ、嵯峨、仁和寺、東寺、朱雀ノ邊ノカリ集勢ヲ調テ相圖ヲ待居申候、〇中略相圖ト一度ニ兼テトヽノヘヲキ申候雜人セコノ者ニ、侍少々加ハリテ下知シ、松明ヲ一人シテ五本三本持ニシテ幾千萬ト云數ヲシラズ、大音アゲテザヽメキ、エイ〳〵聲ニテ嵯峨、仁和寺、千本西(サイ)ノ邊ヨリ起リ出、九條東寺ノ方ヘ押廻シテ、取切ントスレバ、其勢ハ肝ノツブルヽ程ニ見ヘ申候ユヘ、諸陣サハギテ、敵ハ四方ニアリト崩レ立候、〇中略蒸明松衆ハ東寺九條ヨリヲコルモ、西千本ヨリヲコルモ、嵯峨仁和寺ヨリ起ルモ、後ハモミヨセ蒸コミニテ一ツニナリシ比、東ノ二方ヲ塞ギ候テ、曳々聲ニテ揉立、國衆ノ後卷ヨトイ唱ル程ニ、雷電ノ百千萬モアタマノ上ヘ落カヽルヤウニ、南ニ向テ崩レカヽル、足バカリハ一歩モ先ヘ進メドモ、首ヲバ跡ニ殘置ル、衆、其數ヲシラズ無慙ノ次第ナリ、

〔續武將感狀記〕竹森石見貞幸、寬永十五年、肥州島原ノ役ニ、二月二十一日、吉田壹岐ガ陣屋ヘ夜話ニ行歸ニ及デ、今夜必夜討アルベシ、勿怠ト戒ム、其夜賊徒黑田ガ陣所ニ忍來テ夜討シツレドモ打負ケテ引退、或人其兼テ知タル故ヲ問ニ、前日ノ城中物サハガシク、殊ニ夜ニ入テ、婦女ノ泣聲聞ユ、是ヲ以察シタリト答、

〔兵法雄鑑騎戰三十六〕馬をいるゝ五ケ條事

一、敵味方共にこせり合の時、馬をいるゝ事、敵方馬上跡に見へず、味方能馬武者多くつゞかば、其

場を見切弓手妻手より入べし、若味方馬すこしならば、其地形を見切、味方左其勝手吉、各口傳、　三、敵馬多して其地形道細ばしりぞくべし、口傳、付さかも木之事、　四、乘込、　乘込と云は、敵我城下或は陣下まで寄來りて陣をとり、備をたてんとするに、其作法たゞしからずして押への備なくば、能馬武者をすぐり大物見に出、其所へ乘込、雜人等を乘たをし、其備をみだして引取を乘込と云也、　五、乘切、　乘切と云は、敵に崩れ色付て敗軍するに、大勢かたまりて引取敵有を、味方の勇士五騎十騎づゝばかりも、能馬に乘り乘付、其敵の間を切押へだてゝ、我下之者共に首をとらするを乘切と云、口傳深し、

〔平治物語　中〕待賢門軍附信賴落事

大內へ向人々ニハ、大將軍ハ左衞門佐重盛、三河守賴盛、淡路守敎盛、侍ニハ筑後守家貞、子息左衞門尉貞能、主馬判官盛國、子息右衞門尉盛俊、與三左衞門尉景安、新藤左衞門家泰、難波次郎經房、瀨尾太郎兼安、伊藤武者景綱、館太郎貞泰、同十郎貞景ヲ始トシテ、都合其勢三千餘騎、六波羅ヲ打出テ、賀茂河ヲ馳渡シ、〇中略三手ニ分テ、近衞中御門大炊御門大宮面へ打出テ、陽明待賢郁芳門へ押寄タリ、〇中略左衞門佐重盛五百餘騎ヲバ大宮面ニ殘シ置、五百餘騎ニテ押寄テ呼リ給ケルハ、此門ノ大將軍ハ信賴卿ト見ルハ僻目歟、角申ハ桓武天皇苗裔太宰大貳淸盛ガ嫡子、左衞門佐重盛生年二十三ト名乘懸ケレバ、信賴返事ニモ不及、ソレ防ゲ侍共トテ引退ク、大將ノ引給間、防侍一人モナシ、我先ニト逃ケレバ、重盛彌勇ミテ、大庭ノ椋木許迄責付タリ、義朝是ヲ見テ惡源太ハナキカ、信賴ト云大臆病人ガ、待賢門ヲ早被破ツルゾヤ、アノ敵追出セト宣ケレバ、承候トテ被懸ケリ、續兵ニハ鎌田兵衞、後藤兵衞、佐々木源三、波多野次郎、三浦荒次郎、須藤刑部、長井齋藤別當、岡邊六彌太、猪俣小平次、熊谷次郎、平山武者所、金子十郎、足立右馬允、上總介八郎、關次郎、片桐小八郎大

夫、巳上十七騎轡ヲ雙ベテ馳向、大音聲ヲ揚テ、此手ノ大將ハ誰人ゾ、名乘レ、聞カン、角申ハ清和天皇九代後胤、左馬頭義朝嫡子、鎌倉惡源太義平ト申者也、〇中略年積テ十九歲見參セントテ、五百騎ノ眞中ヘ割テ入、西ヨリ東ヘ追マクリ、北ヨリ南ヘ追廻シ、竪樣橫樣十文字ニ、敵ヲ颯ト蹴散シテ、半武者共ニ目ナカケソ、大將軍ヲ組テウテ、櫨匂ノ鎧ニ蝶ノ下金物打テ、黃鵇毛ノ馬ニ乘タルコソ重盛ヨ、押雙ベテ組テ落、手捕ニセヨト下知スレバ、大將ヲクマセジト防グ平家ノ侍共、與三左衞門、新藤左衞門ヲ始トシテ、百騎計ガ中ニゾ隔リケル、惡源太ヲ始トシテ、十七騎ノ兵共、大將軍ニ目ヲ懸テ、大庭ノ椋木ヲ中ニ立テ、左近ノ櫻右近ノ橘ヲ七八度迄追廻シテ、組マンクマントゾ揉ダリケル、十七騎ニ被懸立テ、五百餘騎叶ハジトヤ思ケン、大宮面ヘ颯ト引、大將左衞門佐ハ、弓杖ツキテ馬ノ息ヲツガセ給處ニ、筑後守ツト參テ、義祖平將軍ノ二度生替リ給ヘル君哉ト、向樣ニ譽奉レバ、今一度懸テ家貞ニ見セントヤ思ハンケン、前ノ五百餘騎ヲバ留置、荒手五百餘騎ヲ相具シテ、又大庭ノ椋木マデ責寄タリ、又惡源太カケ向見マハシテ云ケルハ、只今向タルハ皆荒手ノ兵也、但大將ハ元ノ大將重盛ゾ、以前コソ洩ストモ、今度ニ於テハアマスマジ、押雙テ組デ捕レ兵共ト下知スレバ、勇ニ勇ミタル十七騎、我先ニト進ケレバ、今度ハ難波次郎、同三郎、瀨尾太郎、伊藤武者ヲ始トシテ、百餘騎ガ中ニ隔タルニ事トモセズ、惡源太弓ヲバ小脇ニ貝挾、鐙踏張ツタチ揚リ、左右ノ手ヲ擧、幸ニ義平源氏ノ嫡々也、御邊モ平家ノ嫡々也、敵ニハ誰カ嫌ハン、ヨレヤクマント云儘ニ、先ノ如ク大庭ノ椋木ノ下ヲ追マハシテ、五六度マデコソ揉ダリケレ、重盛組ヌベウモナクヤ思ハレケン、又大宮面ヘ引テ出、惡源太二度マデ敵ヲ追マクリ、弓杖ツキテ馬ニ息ヲツガセケルニ、義朝是ヲ見テ、須藤瀧口ヲ以テ、汝ガ不覺ニ防ケバコソ、敵度々懸入ラメ、アレ速ニ追出セト被云使ケレバ、俊綱馳テ此由ヲ云ニ、承候進メヤ者共トテ、色モ替ラヌ十七騎、大宮表ニ懸出テ、敵五百餘騎ガ中ヘ面モ不振割テ入、引立タル勢ナレバ、馬ノ足ヲ立兼テ大宮ヲ下リニ二

弓戰
鐵砲戰

條ヲ東へ引ケンバ、我子ナガラモ義平ハ、能懸タル物哉、アカケタリトゾ被譽ケル、大將重盛、與三左衛門景安、新藤左衛門家泰、主從三騎カケ放レ、二條ヲ東へヒカレケレバ、惡源太鎌田ニ乾ト目合セテ、爰ニ落ルハ大將トコソ見レ、返セヤトテ追懸タリ、既堀河ニテ追詰ケルガ、弓手ノ方ニ材木多充滿タルニ、惡源太ノ乘給ヘル馬、カタナツケノ駒ニテ、材木ニヤ驚ケン、妻手ノ方へ蹴ントシテ、小膝ヲ折テドウト伏、鎌田兵衛不延十三束取テ番ヒ、能引テ兵ト射ル、重盛ノ射向ノ袖ニハタト中テ飛返ル、聽テ二ノ矢ヲ射タリケレバ、押付ニ丁ト中テ篦カツキ碎ケテ跳返レリ、惡源太是ハ聞ユル唐皮ト云鎧、ゴサンナレ、馬ヲ射テ落チン所ヲウテトテ被下知ケレバ、又能引テ追樣ニ、ハズノカクル丶程射込タリ、馬ハ屏風ヲ返ス如倒レバ、材木ノ上ニハ子被落、甲モオチテ大童ニ成給、鎌田堀河ヲ馳越テ、重盛ニ組マント落逢、重盛近付テハ叶ハジトヤ思ハレケン、弓ノハズニテ鎌田ガ甲ノ鉢ヲ丁ト突、被突テユラユル間ニ甲ヲ取テ打著ツ丶、緒ヲ強クコソ被縮ケレ、中略此間ニ重盛ハ虎口ヲ遁テ六波羅迄ゾ被落ケル、二人ノ侍ナカラマシカバ助カリ難キ命也、十二月二十七日ノ巳刻計ノ事ナルニ、一村雨サットシテ、風ハ烈ク吹タリケリ、鎌田ガ鞍ノ前輪ニモ、ツラ丶イタレバ乘兼ケリ、惡源太是ヲ見給テ、手形ヲ付テ乘レヤト宣ケレバ、打物拔テツブツブト手形ヲ切テゾ乘タリケル、鞍ニ手ガタヲ付ル事、此時ヨリゾ始レル、

〔兵法雄鑑足輕二十五〕一、足輕武功七ケ條之事、　二、弓鐵炮をさめ所之事、

三、鐵炮をはなし、弓を射、敵を可防心持之事、　先敵よせ來と云共、足輕を一へんにくばり、鐵炮をつ、よくはなす敵わ、大形城を乘敵にあらず、是におとらじと鐵炮をはなし、無用の事に矢玉をついやす事なかれ、敵軍きり岸の下につき屏をのらんとする時わ、先に進む味方にあたらむことを憚によつて、大かたよせ手にわ鐵炮なきもの也、そのときは石打棚、あるひは屏のをほひのうへより、あがりても外よりの鐵炮のおそれはなきもの也、然者如此の時は鐵炮をはなし、弓を可

射時也、不利を考、損徳のつゝしみ可有事、

四、鐵炮をつよく可放時分之事、たとへば敵軍城下にいたり仕寄をつけんとする時か、或は敵の物見武者城下に至時か、又は見切所のてきをはらわんとするの時か、或は敵の氣を奪謀略か、何とぞ子細なくして無用の鐵炮放べからざる事、但戰國治國のかわり可有、口傳、

〔日本書紀 二十八 天武〕元年七月辛亥、男依等到瀨田、時大友皇子、及群臣等、共營於橋西、而大成陣、不見其後、旗旘蔽野、埃塵連天、鉦鼓之聲聞數十里、列弩亂發、矢下如雨、其將智尊率精兵、以先鋒距之、仍切斷橋中、須容三丈、置一長板、設有蹋板度者、乃引板將墮、是以不得進襲、於是有勇敢士、曰大分君稚臣、則棄長矛、以重擐甲、拔刀急蹈板度之、便斷著板綱、以被矢入陣、衆悉亂而散走之不可禁、將軍智尊拔刀斬退者、而不能止、因以斬智尊於橋邊、

〔扶桑略記 二十二 宇多〕寛平六年九月五日、對馬島司言上新羅賊徒船四十五艘到着之由、太宰府同九日進上飛驛使、同十七日記曰、同日卯時守文室善友召集郡司士卒等、仰云、汝等若箭立背者、以軍法將科罪、立額者可被賞之由言上者、仰訖卽率列郡司士卒、以前守田村高良令反問、卽島分寺上座僧面均、上縣郡副大領下今主爲押領使、百人軍各結廿番、遣絶賊移要害道、豐圓春竹率弱軍四十人度賊前、凶賊見之、各鋭兵而來、向守善友前、善友立楯令調弩、亦令亂聲、時凶賊隨亦亂聲、卽射戰、其箭如雨、見賊等被射幷逃歸、將軍追射、賊人迷惑、或入海中、或登山上、合計射殺三百二人、就中大將軍三人、副將軍十一人、所取雜物大將軍縫物甲冑貫革袴、銀作太刀、纏弓、革胡籙、宛夾保呂各一具、已上附脚力多米常繼進上、又奪取船十一艘、太刀五十柄、桙千基、弓百十張、胡籙百十房、楯三百十二枚、

〔今昔物語 二十五〕源宛平良文合戰語第三

今昔東國ニ、源宛平良文ト云二人ノ兵有ケリ、宛ガ字ヲバ箕田ノ源二ト云、良文ガ字ヲバ村岳ノ五郎トゾ云ケル、此ノ二人兵ノ道ヲ挑ケル程ニ、互ニ中惡シク成ニケリ、(中略)其後ハ各軍ヲ調ヘ

テ戰ハム事ヲ營ム、既ニ其契ノ日ニ成ヌレバ、各軍ヲ發シテ此ク云フ野ニ、巳ノ時許ニ打立ヌ、各五六百人許ノ軍有リ、皆身ヲ弃命ヲ不レ顧シテ心ヲ勵マス間、一町計ヲ隔テ楯ヲ突キ渡シタリ、各兵ヲ出シテ牒ヲ通ハス、其兵ノ返ル時ニ定レル事ニテ箭ヲ射懸ケル也、其レニ馬ヲモ不□ス、不見返シテ靜ニ返ルヲ以テ、猛キ事ニハシケル也、然テ其後ニ各楯ヲ寄テ、今ハ射組ナムト爲ル程ニ良文ガ方ヨリ宛ガ方ニ云ハスル様、今日ノ合戰ハ各軍ヲ以テ射組セバ、其ノ興不レ侍ラ、只君ト我レトガ各ノ手品ヲ知ラムト也、然レバ方々ノ軍ヲ不レ令レ射組シテ、只二人走ラセ合テ、手ノ限リ射ト思フハ何ガ思スト、宛此レヲ聞テ我レモ然思給ウル事也、速ニ罷出ヌト云セテ、宛楯ヲ離テ只一騎出來テ雁胯ヲ番テ立テリ、良文モ此ノ返事ヲ聞テ、喜テ郎等ヲ止メテ云ク、只我レ一人手ノ限リ射組マムト爲ル也、尊達只任セテ見ヨ、然テ我被射落ナバ其時ニ取テ可レ葬キ也ト云テ、楯ノ内ヨリ只一騎歩カシ出ヌ、然テ鴈胯ヲ番テ走ラセ合ヌ、互ニ先ヅ射サセツ、次ノ箭ニ慥ニ射取ラムト思テ各ノ弓ヲ引テ箭ヲ放ツテ馳セ違フ、各走セ過ヌレバ亦各馬ヲ取テ返ス、亦弓ヲ引テ箭ヲ不レ放シテ馳セ違フ、各走セ過ヌレバ亦馬ヲ取テ返ス、亦弓ヲ引テ押宛ツ、良文宛ガ最中ニ箭ヲ押宛テ、射ルニ、宛馬ヨリ落ル様ニシテ箭ニ違ヘバ、太刀ノ股寄ニ當ヌ、宛亦取テ返シテ良文ガ最中ニ押宛テ射ルニ、良文箭ニ違テ身ヲ□ル時ニ、腰宛ニ射立テツ、急ニ亦馬ヲ取テ返シテ、亦箭ヲ番テ走ラセ合フ、時ニ良文宛ニ云ク、互ニ射ル所ノ箭皆□ル箭共ニ非ズ、悉ク最中ヲ射ル箭也、然レバ共ニ手品ハ皆見エヌ、弊キ事无シ、而ルニ此レ昔ヨリノ傳ハリ敵ニモ非ズ、今ハ此テ止ナム、只挑計ノ事也、互ニ強ニ殺サムト可レ思キニ非ズト、宛此レヲ聞テ云ク、我モ然ナム思フ、實ニ互ニ手品ハ見ツ、止ナム吉キ事也、然バ引テ返ナムト云テ、各軍ヲ引テ去ヌ、○中略 昔ノ兵此ク有ケル、其ノ後ヨリハ宛モ良文モ、互ニ中吉クテ露隔ツル心无ク、思ヒ通ハシテゾ過ケルトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔三河物語 三 下〕天正三年乙亥五月廿一日、信長、上之助殿、〇信忠 親子兩旗、家康、信康、親子兩旗にて、十萬余にてあるみ原へ押出し、谷を前にあて、ちやうぶに作〇柵假借を付而待かけ給ふ所に、勝頼は纔二萬余にて、たき河之一ッ橋之、せつしよを越、朦橋を越てから、一騎打の處を一理半越て、押寄而之合戰成、然共十萬余之衆は、作の内を不出してあしがる計出し而た、かひけるに、信長之手ェは作ぎわ迄おい付而、其寄は引而入、〇中略 然間勝頼も、土屋平八郎、内藤修理、山方三郎兵衛、馬場美濃守、さなだ源太左衛門ナド云、度々の合戰に合付而、其名を得たる衆が、入かへ／＼おもてもふらず責た、かいて、雖事なき處に、此衆は雨之あしのごとく成てつぼうにあたりて、場もさらず打死をしければ、勝頼も是を御覽じて、是非もなき、馬場美濃と、山方三郎兵衛が打死之うへは、合戰は見へたりと思召處に、其外こと／＼く崇之兵打死をしたりければ、則亂而はいぐんする、然共勝頼は無何事引のけさせ給ふ、

〔北條五代記 三〕關八州に鐵砲はじまる事

一年北條氏直公、小田原籠城の時節、敵は堀ぎはまで取より、海上は波間もなく舟をかけをき、秀吉公西にあたつて山城を興し、小田原の城を目の下に見て仰けるは、秀吉數度の合戰城責せしといへども、か程軍勢をそろへ、鐵砲用意せし事、さいはいなるかな、時剋を定め一同にはなさせ、敵味方の鐵砲のつもりを御覽せんとて有て、敵がたよりよば、ゝりけるは、來五月十八日の夜、數万挺の鐵砲にて總せめして櫓も矢倉も殘りなく打くづすべしといふ、氏直も關八州の鐵砲を兼て用意し、籠をきたる事なれば、敵にも劣るまじ、鐵砲くらべせんと、矢狹間一ッに鐵砲三挺つつ、其間々に大鐵砲をかけをき、濱手の衆は舟に向て海ぎはへ出、暮るをおそしと相待處に、十八日の暮がたより放しはじめ、敵も味方も一夜があいだ放しければ、天地震動し、月の光も煙に埋れ、ひとへにくらやみとなる、

一之手捽合
二之手合戰

〔兵法一家言 接七 戰〕甲州流戰法ハ、弓鐵炮業既究テ長柄鎗ノ場ト爲テハ、長柄奉行軍士ノ後ニ乘掛テ急ニ下知ヲ傳ヘ、長柄ヲ錫杖擔ニ持セ、右足ヲ前ニ出シ左足ヲ後ニシテ、假令バ紺屋ノ虎落竹ヲ立タル如ク、長柄ヲ揃テ左靡キニ押立サセ、奉行ノ打ト下知ノ無キ前ニハ嚴ク妄ニ打コトヲ禁ジ、若下知ノ無キ以前ニ打タル者ハ、卽坐ニ斬棄ニスル法ナリ、故ニ皆長柄鎗ヲ揃靡テ部返テ其法ヲ守リ、敵ハ長柄ノ地打シテ近寄ルヲモ知ザル眞似シテ、敵長柄ノ穗先ハ我軍士ノ右肩ニ屆ントスル頃マデクヒシメテ蹈堪ヘ、敵鎗ノ地ニ下タルヲ見濟シ、奉行雙方ヨリ一度ニ其打ヤ下知スル聲ト齊ク、味方ノ軍士一齊ニ長柄ノ鎗ヲ卸ザマニ左足ヲ前ニ蹈出シ、鋭々聲ヲ揚テヒシギ打ニ打倒ス、敵ハ先刻ヨリ地打シ進テ、頗草臥タル所ヲ鎗ヲ上サセズ、疊掛テ勇進ミ打挫トキハ、敵人此ヲ堪兼テ長柄ヲ引ズリ五七間モ崩立テ亂ル、味方軍士得道具ヲ取テ、長柄備ノ後ヨリ、喊キ叫テ、競進ミ一度ニ此ヲ打崩ス、此ヲ一之手ノ捽合ト云フ、右ハ甲州流ノ戰法ヲ說タルナリ、然レドモ天文弘治ノ頃ヨリ文祿慶長ノ初マデ、鐵炮ノ小筒ヲ盛ニ用タル合戰ニテ、雙方互格ノ位詰ニ爲タル時ノ仕方ハ、何レノ家モ皆同樣ナルコトナリ、故ニ諸兵家ノ說ヲ聞ニ、格別奇異靈妙ナル戰法ハ有ルコト無シ、〇中略 二之手ノ戰法ト云フハ、諸兵家大抵皆急貝ヲ吹立テ、弓鐵炮ヲバ一兩發シテ、頻リニ早大鼓ヲ打鳴シ、足輕モ諸軍士モ無二無三ニ敵陣中ニ飛込テ、或ハ太刀ヲ打振リ、或ハ鎗ヲ合セ、或ハ大太刀大長刀等ヲ振廻シテ橫合ヨリ切崩ス、兎ニ角ニ合戰ノ落著ハ、二之手ノ利不利ニテ勝敗ノ極ル者ナリ、且又大軍ヲ帥ヒテ出タル時ハ、大正大奇ノ業ヲ以テ勝ヲ取ルコトモ有ベク、或ハ奇伏ヲ不意ニ起シテ大勝利ヲ得ルコトモ有ベシ、故ニ二之手、勝ト奇兵之術トハ、筆舌ノ能盡スベキ所ニ非ルコトハ諸家皆同論ナリ、

〔太田道灌兵書 戰下 圖之法〕一若先手ノ軍强クシテ身方討死多キ躰ナラバ、早ク二之手ヨリ関ヲアゲ競イ進ミテ救應スベシ、先手不利ノ躰ヲミレバ、雜人輕者身方ヘ崩レカヽルコトアルモノナ

リ、友崩トナラザルツモリアルベシ、敵合遠ケレバ救應ノ汐合ヌケテ、先手ニ堪タル能キ武士盡ク討死トグルモノナリ、故ニ兼テ備ノ間ヅモリ救應ノ地利、先手敗北ノ地形ヲ、其場其所ニテ速ニ見切ルベシ、是諸將ノ心掛ナリ、都テ決勝負ニ進競シ走ル勢イ一丁ノ内ハ其氣盛ナリ、一丁ヲ過レバ虚ノ心ヲ知テ突カヽル汐合ヲ失フベカラズ、又先手ノ人數、若ハカリ武者、アツメ勢ナドニテモロク敗北スルニ、二三ノ備敗北ノ身方ヲ左右ニ見ナシ、靜々ト突カヽレバ、敵追捨テ其所ニ備ヲ立ルカ引トルカナルベシ、其トキハ敵心一時ノ虚ナリ、其心ヲヌカサズ押カケ切崩スベシ、最奇正ノ法ヲ忘ルコトナカレ、但此時ノ汐合ハ遲ケレバ虚又變ジテ盛トナル可思量、

〔海國兵談二〕陸戰　日本諸流の戰法ハ大概法組極りて、鐵砲、弓、長柄、武者ト四段に立て、六十間より三十間程迄鐵砲ニテ挊合、それより十四五間に詰ル迄弓挊合、それより長柄ノ挊合にて鼻突になり、そこで武者の勝負ト切組、大概定りある也、當時頃ハ世人多クハ、此切組の外、合戰の次第はなき事ト思フ人も多けれども、接戰の懸り口、是のミに限りたる事ならねば切組を違へたる敵に出逢ば、大に狼狽ル事あるべし、總て軍ハ先を取にあり、先を取事ハ人の膽を奪にあり、

〔兵法一家言接七戰〕蓋今時流行ノ諸兵學、其門人ニ講習スル所ヲ聞ニ、合戰ノ摸樣大抵法組定リタル炮、弓、長柄、武者ト備ヲ四段ニ立テ、敵間二三町程ニ迫レバ鐵炮ヲ打始メ、其ヨリ半町程ニ詰迄ノ間ハ、何モ鐵炮ヲ專用ヒ、半町内ヨリ十三四間ニ迫ル迄ハ、專ラ弓ニテ挊合、其ヨリ長柄ノ鎗ヲ打合テ、甲乙ノ出來ルニ及テ、武士モ進ミ戰テ遂ニ勝敗ヲ決著スルコトヽ定メ、此ヲ一之手ノ挊合トシテ、先此ヲ摸範トスルコトナリ、二之手ノ合戰ハ、諸兵家ノ說何モ急ニ貝ヲ吹鳴シ、早大鼓ヲ打立テ、諸士ヲ敵陣ニ飛込セ、或ハ大身鎗ヲ打振リ、或ハ太刀長刀ヲ振廻シテ、横合ヨリ切崩ベキヲ敎フ、總テ合戰ノ勝敗ハ、二之手ノ利ヲ得ルト利ヲ失フトニテ事ノ極ル者ナレバ、如何ニモシテ奇妙ナル戰法ヲ工夫シ、必勝ザレバ國家ノ大事ヲ誤ルナリ、〇中略本邦古來ヨリノ戰法、大抵上ニ說

タルガ如シ、故ニ是以後ノ合戰ト雖ドモ、小筒鐵炮ノミヲ專用ニテ、大銃ヲ用ルコトヲ知ラザル軍法ナラバ、右古法ニ似寄タル事ナルベシ、然レドモ軍理ニ明達スル者ノ兵ヲ用ルハ、意出テ意奇ナリ、且合戰ト云者ハ戰毎ニ樣子ノ異ナル者ナルヲ以テ、一流ノ兵法ヲ皆傳スルト雖ドモ是ニテ足レリト思フコト勿レ、萬一是迄ノ仕方トハ、存外ニ異ナル戰法ニ遇フトキハ、大ニ途ヲ失ヒテ困窮スルコト有ル者ナリ、故ニ兵法ヲ學フ者ハ、廣ク諸家ノ傳書ヲ讀ミ、漢土、天竺、其他西洋諸邦、西班牙、諳厄利亞、及拂郞察、都兒格、入爾馬泥亞等ノ兵書ト雖ドモ、苟モ軍事ニ利益アル說ヲバ悉皆此ヲ取用テ己レガ智識ヲ增加スベシ、一流ニ泥ムガ如キハ、信ニ固陋ト云ベシ、

〔足利季世記 三好記 四〕一藏之城攻事

木澤左京亮、齋藤山城守、杉原石見守、大和衆河內衆相語ヒ、同天文十年十一月四日ニ打立、三好方ノ原田城ヲ攻ケル、三宅出羽守京ニ御座ス、右京大夫晴元ヘ歸參ノ噯有由キヽテ、木澤一夜陣シテ、原田城ヲ卷ホグシ河內エ引退、

〔甲陽軍鑑 品第三十九 十二〕信長は、まきたる城をまきほぐし、味方を捨、退口あらき事數度有、中略信玄手がらは、若き時分より、他國の大將をたのみ馬を出させ、兩旗をもつて弓箭をとりたる事、一度もなし、まきたる城を卷ほぐしたる事、一度もなし、

〔總見記 十〕信長公江州發向堀樋口降參事附小谷御働事

信長今日元龜元年六月廿二日ノ後殿ハ、切所ノ地ニテ、大軍ハ却而惡カルベシ、佐々內藏助、中條將監、簗田左衞門太郎三人シテ仕ルベキ由被仰付、總勢ノ中ヨリヌキ鐵砲五百挺、直ノ弓五十張ヲ被指添、柴田勝家ハ此者ドモ三人ハ、皆以無勢ナリ、今日ノ後殿心モトナシ、某ト佐久間右衞門カ、森三左衞門ト坂井右近トカニ、被仰付候ヘト諫ケレドモ、信長曾テ御承引ナシ、三人ノ者ドモニハ、某シカツテ下知シテ、タヤスク引取ルベシ、皆々ノ者ドモ早々先ヘ引取リ、一里バカリ退ヒテ、人數ヲ

タテ相待ベキ由、堅ク御下知有ケル故、力及バズ諸軍勢段々ニ引取ル、信長公我モ下知ニ加ルベシトテ、御馬廻二百騎バカリニテ、トヾマラセ給ヒケルヲ、後殿ノ三將カタク辭退申シ上テ、御下知ノ次第ハ承リ畢シ間、ヒタスラ御先ヘ御ヒラキ被下候樣ニト、樣々ニ申シケル間、是モ先ヘ御引取ナリ、扨モ三將鬮取シテ、退口ヲ定メケルニ、一番ニ簗田、二番ニ佐々、三番中條トゾ鬮取有ケル、三將シヅ〳〵ト引退ク所ヘ、小谷勢案ノゴトク、丁野若狹守ヲ始テ、ヒシ〳〵ト付テ討カヽル、

相引

〔太平記 三十一〕笛吹峠軍事

千葉介、宇都宮、小山、佐竹ガ勢相集ヲ七千餘騎、上杉民部大輔ガ陣ヘ推寄テ、入亂入亂戰フニ、信濃勢二百餘騎討レケレバ、寄手モ三百餘騎討レテ、相引ニ左右ヘ颯ト引タ、

〔相州兵亂記 四〕高野臺合戰之事

氏政自身カケツケ給ヒ、終ニ敵ヲ追落シ、晩ノ戰ニハ小田原勢打勝ケル、サレドモ朝ノ軍ニ利無シテ、遠山ヲ初メ討死シケレバ、房州勢ハ悅ブ事カギリナシ、日已ニ暮ケレバ、相引ニ引ク、

繰引

〔松隣夜話 上〕結城多賀谷、聞ル勇將タル故、上杉敗軍ニモ備ヲ不動、夜ヲ明シ、白晝ニ氏康ノ前ヲ押通リ、無恙引テ歸ル、其比坂東ニテ、クリ引ト云コト絕テナシ、是ヨリ興リケルトナリ、

〔播州佐用軍記 上〕上月城ヲ捕圍附城ヨリ夜討之事

殿ニハ鵜野林四郎左衛門尉、丸山八助、此人々足輕ヲ連テ、繰引ニ土橋マデ引ケルニ、慕來敵モ無ク、夜討城兵足輕ナンドニ至ルマデ、一人モ不討、

繰入

〔籾井家日記 二〕桂川合戰事

敵ノ大將ドモハ、信長名代ノ三七ヲ始トシテ、志賀ノ城ヘト志シ、粟田口邊ヲ一同ニ引ト申候、早ク爰ヲ捨テ粟田口邊ヘ向ハレ候ヘト、敎訓致スユヘ、山城同心致サレ候、其ヨリ諸陣ヲトヽノヘ、ヨク下知シテ心シヅカニ引取ル、諸陣ヲクリ入レノ法トシテ、段々ニ引入レ、粟田口邊ヘイヅレ

車引

モ同道ニテイリ申サレ候、

〔別所長治記〕三月〇天正六年廿九日、三木ノ城ニ押寄ス、〇中略日既ニ及タ陽シカバ、後ハ羽柴小一郎秀長ニ申付、秀吉ハ再拜押取、信長流ノ車引ニ人數ヲ左右ニ引取、

〔奥羽永慶軍記十八〕仁賀保矢島確執事

同〇永祿三年五月中旬ニ成レバ、矢島勢ヲ催シ、瀧澤ガ館ヘト押寄ル、カヽル處ニ遠斥候ノ役人、アハタヾシク走リ來テ、只今鎌ガ淵ノ方ヨリ、人數五六百人押來リ候、後勢ノ多少ハ見得ズ候フ、是正シク仁賀保殿ノ後詰ノ勢トコソ存ジ候ヘトイフ、矢島是ヲ聞テ、扨ハ我人數當ルベカラズトテ車引ニス、

盛返

〔足利季世記三高國記〕香西四郎左衛門尉討死之事

同〇大永六年十一月晦日ニ、丹波ノ赤井五郎近國ノ勢ヲ催シ、三千餘人柳本ガ後詰ノ爲メニ出張ス、京方十三頭ノ勢ヲ分テ、赤井衆ト合戰シ、京方打チ負ケ三百餘人打死ス、藥師寺ヽ荒木モリ返シ責メ戰ヒ、赤井衆以上二百餘人打死シケル、

切返

〔北條五代記五〕前陣軍に討負二陣にて切返す事

聞しは昔、老士語りけるは、我數度の軍にあひたり、大合戰にをいては、たゞ一勝負也、有無の二ッにきはまる故、先陣の者は、万死一生にさだめ、心たけく樊會をもあざむく、討負はいぼくに至ては、心をくれ餓鬼にもをとれり、大合戰に崩れかゝつて、返す事叶はず、然に小田原北條家、五代の内數度の大合戰に討勝たり、扨又みかた負る事有といへ共、つゐに一度も大負なし、是定をかるる所の法度を用るが故也、それいかにとなれば、かねての軍法に、そなへを一手づゝ、段々に立る、其間一町へだつ、一備への内、前後に武者奉行有て、をくるゝ者をば、せんがりの奉行、そなへの内へ追入、さし出る者あれば、さきの奉行、をさへ下知す、其上はた本より、檢使として、騎馬の武者、總

總返

小返

陣を馳廻て、兩陣一町へだゝる間に、紛るゝ者あれば、是非を論せず切捨る、然にみかたの先陣いくさに討負敗北に至ては、二陣の武者奉行先立て、備へをとがり矢がたに鋒を作て敵を待、みかたくづれかゝるといへ共、待所のみかたの鋒さきにをそれ、左右へ分てはいそうす、若そなへへにげ入らんとする者あれば、切て捨る故に一人も入得ず、敵かち軍となれば、かならず鋒矢形に追來る、然にみかた待請たる威ひを見て、かなはじと前登にすゝむ者、引返しぬれば、殘黨まつたから事とて、悉く敗軍せずして叶はざる也、北條家の軍、二陣にて切返す事度々に及ぶ、なかんづく享祿三年庚寅六月十二日、武州小澤原にて、官領上杉朝興と、北條氏綱かつせんに、みかたの前陣討負るといへ共、二陣にて切返し千餘人討取、扨又氏康と里見義弘、下總の國高野臺合戰に、先陣討負るといへども、二陣にて切返し大勝あり、件の軍法は、氏綱時代このかた北條家にもつはら是を用る、軍に大負あるは、備を亂すが故也、一合戰切勝といふ共、新手の敵に、二度切勝事叶ふべからず、人馬ともに筋力つかれ、いきほひをうしなふによて也、

〔松原自休手錄 上〕西尾ノ城ニ入ニ兵粮、櫻井小川野寺、八面へ働其邊放火シ、直ニ行バ三里ナレドモ、敵地ナレバ出ニ西野、水野野州ノ類ニ加勢、二月八日ニ、八面へ押寄スル處ニ、從ニ寺内ニ突テ出ルニ、弱々ト會釋ヒ敵ヲ引出シ、總返シニシテ敵ヲ追ニ入寺内ニ、

〔籾井家日記 一〕八上氷上御先祖事附宗高卿於ニ越前國ニ横死事

凡ソ今日ノ合戰十四度ノ掛合ト申傳ヘ候ヘドモ、大ゼリ合ハ六ケ度、小返シノ掛合ハ其數ヲシラズ候、

〔家忠日記追加 十五〕慶長五年八月廿三日黎明、寄手の軍勢関を發して岐阜の城下商町を破る、○中略城兵拒ぎ戰て敵味方互に力を盡す、○中略正則忠興嘉明等一所に集り、士卒を指揮して相戰はしむ、坂口ゟ武藤砦の間に於て、敵兩度小返して味方の兵を追拂ふ、

敗軍

聞逃

〔書言字考節用集 八言辭〕敗北(ハイボク)方後漢臧宮傳註、人好陽而惡陰、北方幽陰之地、故軍敗者皆謂之北、　敗績(ハイセキ)左傳、凡師大崩曰敗績、　敗軍(ハイグン)　敗走(ハイソウ)

〔甲陽軍鑑 品第十四 六〕此合戰信玄公のまけなるを、山本勘介と加藤駿河と見切をよくして、諸住豐後、小山田出羽、日向大和、今井伊勢守此四頭をもつてもり返し、敵を三百廿餘討捕、漸芝居をふまへ給ふ、戸石くづれとて此合戰は、信玄公大形負給ふ樣にあれ共、芝居を踏玄づめ給へば、村上終に敗北して信玄の是も勝なり、負合戰に芝居は何としても場所ふまへられぬ者也、

〔甲陽軍鑑 品第三十 十上〕扨又義景二番目の敗軍、三千の備を五百分て、到下か坂中に置申され候はゞ、後も是程敗軍あるまじきに、景虎、義景をば堀の埋草と思はれ候を、義景悟、腹を立此通、されば全く義景、無功者にて崩たるにてなし、ましてオ綠とは申されず候、子細は何時も初合戰に、諸手の人數打ちりて、敵を討取て、敵よりあらてすけ來らば、縱からの韓信樊噲といふ共、人數まとむる事ならずして、敗軍は必定なり、それによつて、十分一なりとも、そく事あり、

〔源平盛衰記 二十三〕實盛京上附平家逃上事

三月ノ比モ過テ、闇ニ成ヌ、互ニ人ノカヨウ事ナケレバ目ニノミ見ニ、御方ニハ付副勢ナシ、源氏ハ日ニソヘ時ヲ逐テ、雲霞ノ如クニ集ル、サハアレ共、此川ヲ何方ヨリモ渡スベキ樣ナケレバ、平家ノ方ニハ宿々ヨリ、傾城ドモヲ迎テ帶トキヒロゲテ、歌ヨミ酒盛シテ居タリ、源氏ノ方ニハ、明日廿四日ニ、矢合有ベシトテ内談アリ、終夜篝ノ火ヲゾ燒タリケル、宿々浦々ニ充滿テ、澤邊ノ螢ノ飛集タルニ似タリ、平家ノ方ニモ如形篝火ヲ燒、夜モ漸深ケレバ、各寢入テ有ケルニ、夜半バカリニ富士ノ沼ニ、群居タリケル水鳥ノ、イクラ共ナク有ケルガ、源氏ノ兵共ノ、物具ノサヽメク音、馬ノ嘶聲ナドニ驚テ、立ケル羽音ノヲビタヾシカリケルニ驚テ、源氏ノ近付テ、時ヲ造ルゾト心得テ、スハヤ敵ノ寄タルハト云程コソ有ケレ、平家ハ大將軍ヲ始トシテ取物モ取敢ズ、甲胄ヲ忘レ、弓箙ヲオトシ、長持、皮籠、馬鞍共ニ至マデ捨テ迷上、親ハ子ヲモ不知、從者ハ主ヲモ顧ズ、只我先

我先ニトゾ落タリケル、此日比呼集テ遊ツル遊君ドモ、或ハ踏殺或手足踏折ラレテ、鼓々泣迯去ケリ、見迯ト云事ハ、昔ヨリ申傳タリ、其ダニモ心憂カルベシ、是ハ聞迯也、

〔太平記三十二〕山名右衛門佐爲敵事附武藏將監自害事

時氏〇山名大ニ悦テ、五月〇文和二年七日伯耆國ヲ立テ、但馬丹後ノ勢ヲ引具シテ、三千餘騎丹波路ヲ經テ攻上ル、〇中略南ハ淀、鳥羽、赤井、大渡、西ハ梅津、桂ノ里、谷堂、峯堂、嵐山マデモ陣ニ取ラヌ所ナケレバ、燒ツヾケタル篝火ノ影、幾千萬ト云數ヲ不知、此時將軍〇足利尊氏未上洛シ給ハデ、鎌倉ニヲハセシカバ、京都餘リニ無勢ニテ、大敵可戰様モ無リケリ、中々ナル軍シテ、敵ニ氣ヲ著テハ叶マジトテ、土岐佐々木ノ者共頻ニ江州ヘ引退テ、勢多ニテ敵ヲ相待ント申ケルヲ、宰相中將義詮朝臣、敵大勢ナレバトテ、一軍モセデイカヾ聞迯ヲバスベキトテ、主上〇光嚴ヲバ先山門ノ東坂本ヘ行幸ナシ進セテ、仁木、細河、土岐、佐々木三千餘騎ヲ一處ニ集メ、鹿谷ヲ後ニ當テ、敵ヲ洛川ノ西ニ相待タル、

見崩　聞崩

〔關八州古戰錄十七〕秀吉公湯本著陣事

秀吉公、四月〇天正十八年朔日ノ黎明ニ、三嶋ノ驛ヲ出馬シ給ヒ、足柄筥根ヲ越テ、小田原ノ城ヨリ行程半里コナタ、湯本ノ眞覺寺ヘ著陣マシ〱、先隊ノ勢ヲ分テ、湯本口、竹ガ鼻口、畑湯坂、塔峯、松尾嶽邊ヘ指向ケ〱、攻立ラレケレバ、持口ノ寄合勢、臆病神ニヤ引レケン、或ハ見崩シ聞崩シテ、片端ヨリ城ヲ開テ、小田原ノ本城ヘ萃ミシカバ、〇下略

友崩

〔籾井家日記八〕氷上宗貞黒井表江出張事付黒井表合戰事

伊豆守秀香公ノ御陣モ羽柴小市郎ヲ追崩サレテ、要害取テ位ノ備ニナラセ候カ、是モ追討衆ノ後陣ニハナラセテ候、次第ニ追詰ラレ候ホドニ、國中ニハ一人モ敵ノ足ハナク、所々ノ城ヲ攻タル軍勢マデ友崩レシ〆北チリヲ候、前代未聞ノ大勝利ト云ニテ候、

裏崩

〔江濃記〕淺井引退事

大野木㕝ヲセントヽ防ゲドモ、敵勇ミ勇ンデ突懸レバ、小野木ガ勢モ引色ニ成ル所ニ、牧村再拜ヲ把テ下知シケレバ、彌勇ミカヽル程ニ、小野木ガ勢モ追立ラルヽ、敵ハ是ニ利ヲ得ツヽ、備ヘヲ崩シテ追カクル、後ニヒカヘタル堀ガ勢裏崩シテ敗北スレバ、〇下略

〔關八州古戰錄〕十九 武州忍城初度軍淺責事

皿尾口ニテハ寄手馬ヨリ下リ立テ、徒立ニ成リ攻懸リケルニ、城兵松嶋内匠助鐵砲ノ手達ニテ、大筒ヲタメスマシ、打出セシ程ニ、進ム味方七八人矢庭ニ命ヲ損ジケル儘、裏崩レシテ引退ク、

〔松原自休手錄〕上 石川伯耆、本多平八郎、鳥井彥右衛門、平岩七ノ介、大久保七郎右衛門等入鑓、馬場ガ後備裏崩シテミヘケレバ、佐々信長ヘ云フ、敵ノ旗色騷立テ見エ、今一備被加尤ト云ヘバ、被命瀧川攻入勝頼本陣、總軍一度ニ上鯨波、

勝軍

〔源平盛衰記〕二十 八牧夜討事

佐殿〇源賴朝時政ヲ呼返シテ宣ケルハ、抑軍ノ勝負ヲバ爭カ知ベシト問給ヘバ、時政申テ曰、御方勝軍ナラバ、城ニ火ヲ放ベシ、負軍ニ成テ人々討ルヽナラバ、急使者ヲ可進、靜ニ御自害ト申捨テゾ出ニケル、

〔太平記〕八 摩耶合戰事附酒部瀨河合戰事

斯ル所ニ備前國ノ地頭御家人モ大略敵ニ成ヌト聞ヘケレバ、摩耶城ヘ勢重ナラヌ前ニ、討手ヲ下セトテ、同〇元弘三年閏二月二十八日、又一萬餘騎ノ勢ヲ被差下、赤松入道〇則祐入道圓心是ヲ聞テ、勝軍ノ利、謀不意ニ出テ、大敵ノ氣ヲ凌デ、須臾ニ變化シテ先ズルニハ不如トテ、三千餘騎ヲ卒シ摩耶ノ城ヲ出テ、久々知酒部ニ陣ヲ取テ待カケタリ、

〔甲陽軍鑑〕九上 品第十八 甲州勢ことに信虎公御追出の砌なる故、かれこれ人數ちり六千餘許也、六千

の人數飯富兵部一番合戰晴信公旗本二の勝、二番合戰甘利備前是も晴信公御旗本にて二の勝なり、三番合戰小山田古備中也、二の勝は是も御旗本、四番合戰板垣信形是も御旗本にて二の勝なり、二の勝といふに口傳あり、

〔北條五代記 五〕北條氏直と瀧川左近將監合戰の事

西上州衆は、前陣にこと〲くそなへり、安房守○北條氏邦無勢を見て、氏直はいまだ出馬なし、あはの守が一手ばかりは、物の數ならず、いざ打ちらさんと一同し、おなじき○天正十年六月十八日の巳の剋に至て合戰す、既に上州衆切勝。あはの守敗北し、二百人程討れ、みかたの陣へ亂れ入、上州衆初合戰にうち勝、いきほひける所に、氏直是を見給ひ、一戰をもよほし、かなくぼへをしよする軍勢しうまんする事雲霞の如し、

〔太閤記 九〕池田勝入父子討死之事

勝入同嫡子紀伊守、森打死せしに依て、總敗軍に及びければ、丹後守も退にけり、兩卿の先陣後陣ひとつに成て追行、平討にうち行候を、母衣之者、使番之士を以て、長追ばしすな、もはや引かへし候へと、制したまへば、○下略

平討

〔甲陽軍鑑 品第三十二 十下〕旗本組の内、飯富三郎兵衛人數にて、越後方一の先手柿崎衆を追崩し、三町程追討にする、穴山殿衆も、謙信の內柴田を四町程追うちにする、信玄公御牀机立られたる場を少も立退給はず、其外九頭悉敗軍して、ちくま、廣瀨の渡り迄追討にうたれ、太郎義信公をはじめしざり給ふ、○下略

追討

〔淺井三代記 十五〕姉川合戰の事

かくて散々に敗北せしかば、寄手は勝に乘り追打に打程に、矢島の鄕守照寺田川迄追たりけるに、備前守長政も小谷をさして逃入ぬ、

追崩

〔易林本節用集〕〔言辭〕追崩(ヲツクヅス)

〔應仁記〕〔二〕岩倉合戰之事

三番畠山ノ遊佐、譽田、山科口ヨリ攻上ル、城中ニハ兩度ノ敵追崩、勝ニノリ、木々ノ透岩ノ陰ヨリ散々ニ射、疼所ヲ切崩コト、山下ノ紅葉ヲ散ス如ナリ、

〔信長公記〕〔三〕元龜元年六月廿八日卯剋、巳寅へむかつて被及御一戰、御敵〇淺井淺倉もあね川へ懸り合、推つ返しつ、散々に入みだれ、黑煙立て、しのぎをけづり、鍔をわり、爰かしこにて、思ひ〳〵の働有、終に追崩し、〇下略

切崩

〔別所長治記〕大村合戰

三木勢少シ色メキ立ヲ、秀吉下知シテ爰ゾ勝負ヲ決スル所ヨ切崩セ、敵味方ノ剛臆ハ秀吉能見ルゾ、退氣色不可有、身ヲモンデ下知シ給ヘバ、三木勢不叶シテ引退ク、

〔淺井三代記〕〔十五〕姉川合戰の事

かくて淺井が手は、信長卿の御勢を十一段まで切崩し、森が手にてしばしさゝへけれども、備前守長政勝にのり旗本をくづしかゝれと、下知せられければ、〇下略

〔北條五代記〕〔五〕下總高野臺合戰の事

氏政旗本二陣に有て、下知して云、敵かつに乘て、長途をすぐ、是を討べしと、團扇をあげ給へば、命は義によつて輕し、面をふらず、一足もひかず、まつしぐらに責かゝる、すでに切くづし、敵を追返し、首四五十討捕、本陣に旗を立られたり、

追返

〔蒲生氏鄕記〕一氏鄕武篇物語被致ニ、〇中略柴田修理勝家ト秀吉公ト合戰ノ剋ハ、伊賀伊勢ノ敵無心許トテ、氏鄕ヲ兩國ノ押得ニ賴被置、江州日野ノ居城ニ被居、其節伊賀ヨリ八度マデ甲賀ヘ伊賀守打出、氏鄕其度每ニカケ合戰追返ス、一度モ自身高名ナキ事ハ無之、

勞師

〔日本書紀神武三〕戊午歲八月乙未、天皇使徵兄猾及弟猾者、猾此云宇介志是兩人菟田縣之魁帥者也、魁帥此云比登誤廼伽瀰時兄猾不來、弟猾卽詣至、○中略兄猾獲罪兄○恐術兄於天事無所辭、乃自蹈機而壓死、時陳其屍而斬之、流血沒踝、故號其地曰菟田血原、已而弟猾大設牛酒、以勞饗皇師焉、天皇以其酒完班賜軍卒、

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事

城ノ中ヨリ提子ニ酒ヲ入テ、杯モタセテ出シケリ、城ノ中ヨリ大介、家忠ガ許ヘ申送ケルハ、今日ノ合戰ニ武藏相模ノ人々多ク見エ給ヘ共、貴邊ノ振舞コトニ目ヲ驚シ侍リ、老後ノ見物今日ニアリ、今ハ定テツカレ給ヌラン、此酒飲給テ、今ヒトキワ興アル樣ニ、軍シ給ヘト云遣シタリ・ケレバ、家忠甲振仰弓杖ツキ、杯取三度飮テ、此酒ノミ侍テ力付ヌ、城ヲバ只今責落奉ベシ、其意ヲ得給ヘトテ、使ヲバ返シテケリ、軍陣ニ酒ヲ送ハ法也、戰場ニ酒ヲ請ハ禮也、義明之所爲ト云、家忠之作法ト云、興アリ感アリトゾ皆人申ケル、家忠唯非勇心之甚、專存兵法之禮ケリ、

〔太平記十八〕瓜生判官老母事附程嬰杵臼事

去程ニ敗軍ノ兵共杣山ヘ歸ケレバ、手負死人ノ數ヲ註スニ、里見伊賀守、瓜生兄弟、甥ノ七郎ガ外、討死スル者五十三人、被疵者五百餘人也、子ハ父ニ別レ弟ハ兄ニ殿レテ、啼哭スル聲家々ニ充滿リ、去共瓜生判官ガ老母ノ尼公有ケルガ、敢テ悲メル氣色モナシ、此尼公大將義治ノ前ニ參テ、此度敦賀ヘ向フテ候者共ガ不覺ニテコソ里見殿ヲ討セ進セテ候ヘ、サコソ被思召候ラメト、御心中推量リ進セテ候、但是ヲ見ナガラ、判官兄弟何レモ無恙シテバシ歸リ參リテ候ハヾ、如何ニ今一入ウタテシサモ、無遣方候ベキニ、判官ガ伯父甥三人ノ者、里見殿ノ御供申シ、殘ノ弟三人ハ大將ノ御爲ニ、活殘リテ候ヘバ、歎ノ中ノ悅トコソ覺テ候ヘ、元來上ノ御爲ニ、此一大事ヲ思立候ヌル上ハ、百千ノ甥子共ガ被討候共可歎ニテハ候ハズト、淚ヲ流シテ申ツヽ、自酌ヲ取テ一獻ヲ進メ奉リケレバ、機ヲ失ヘル軍勢モ、別ヲ歎ク者共モ、愁ヲ忘レテ勇ミヲナス、

〔兵要錄二十二攻守〕愷旋　兵以正爲本、由義擧用、以毒天下、而利天下、討亂而復治、故戰勝不有焉、散財發粟、以賚于其民、封歸順之將、賞歸順之士、以定其地、博播仁政、約懸正令、以綏其國、　陷邑攻城之際、有横罹鋒刃者、眞可哀焉、故於攻戰之地、設蔬果酒饌、爲横死者致祭、以悼其非命、有口占、　愷旋而告成功於宗廟、封功賞勞、各有差、且燕饗將士、歸功于下、錄死事者、爲之將自親致祭、涕泣以感其死節、

〔令義解五軍防〕凡大將出征、○中略凱旋之日、奏遣使郊勞、謂凱旋者、凱樂也、軍歸之時、獻功之樂也、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月甲寅、是日、討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂等凱旋獻捷、

〔古事記序上〕皇輿忽駕、凌渡山川、六師雷震、三軍電逝、杖矛擧威、猛士烟起、絳旗耀兵、凶徒瓦解、未移浹辰、氣沴自清、乃放牛息馬、愷悌歸於華夏、卷旌戢戈、儛詠停於都邑、

〔古事記傳二〕愷悌は軍勝たる時の樂なり、書紀にイクサトケテと訓り、今按に、悌字心得ず、其故は、愷こそ愷樂とも云て、軍勝之樂なれ、悌字には其義あることを聞ず、愷悌と連れいへることは多かれども、其は義の異なることなり、然るに今愷樂を愷悌といへるは、愷字にひかれて、彼愷悌と一ッに思ひ混へつるにや、但し此は世になべて誤れることにやありけむ、書紀などにも然あり、漢籍にも例ありや、なほ尋ぬべし、

〔續日本後紀四〕承和二年三月辛酉、下總國人陸奧鎭守外從五位下勳六等物部匝瑳連熊猪改連賜宿禰、○中略昔物部小事大連錫節天朝、出征坂東、凱歌歸報、藉此勳功、令得於下總國建匝瑳郡、仍以爲氏、是則熊猪等祖也、

〔神皇正統記後醍醐〕安倍の貞任、奥州をみだりしを、源の賴義の朝臣十二年までにたゝかひて、凱旋の日、正四位に敍し、伊豫守に任す、

〔信長記一ノ上〕義元合戰事

義元○今川四萬五千騎ノ軍兵ヲ引率シテ、永祿三年五月十七日、愛智郡沓懸ニ著テ、翌日十八日ノ夜ニ入、大高城ヘ兵粮ヲ入、爰ニ於テ軍評議シケルガ、翌朝ハ鷲津丸根兩城ヲ可攻干ニゾ定メケル、此由佐久間大學方ヘ告知スル者アツテ、早々支度有ベシト、潛ニ云ヤリケレバ、○中略信長卿尤

鬨

ナリ、サラバ我ヲ越セヤ者ドモトテ、馬上ニ鎚ヲツ取、眞先ニ進ミ玉フ形勢ハ、十高祖百張良ガ怒ヲ發セシ勢ヒモ、是ニハ爭デ勝ルベキ、〇中略斯リシカドモ義元ハ可相靜旨下知シ玉ヒテ、幕打廻シ鳴ヲシヅメテ在々ケル處ヲ、服部小平太サシカヽリ角ゾト名乘タレバ、意得タルト云儘ニ、サスガ最後ゾヨカリケル、〇中略角テ首ノ注文ハ二千五百餘トゾ記ケル、而シテ軍忠ノ秀タル懸引ノ勝レタル、一々被記付、猶樣子ヲ盡シ賞祿行ルベキトテ御勢ヲ打入給ヒケルガ、此近年鬼神ノ樣ニ云シ義元ガ勢ヲ打隨へ、剩大將ノ首ヲ角見ル事身ノ悦無限、是偏熱田大明神ノ御神力ヲ合シ給ヒシ事疑ナシトテ、神前ニ詣テ禮拜其體ヲ盡シ、宮中不殘御修理ヲ可被加旨、田島千秋ナドニ被仰テ、同日申剋ニ清洲へ歸城シ玉ヒケルニ、普代相傳ノ者共或ハ僧俗男女、推並テ出向祝シ奉ル有樣ハ、周武王ノ紂ヲ討テ歸給ヒシニ、天下ノ士民悦合シモ角コソ有ラメト覺エタレ、

〔豐薩軍記〕四田澤成鍋島家臣并隆信ノ首送葬之事

島津中務少輔家久、〇中略其後八代へ凱旋シテ、隆信〇龍造寺ノ首ヲ義久〇島津ノ實撿ニ入ケレバ、義久情アル人ニテ、卽チ町田ヲ使者トシテ是ヲ佐賀へ送ラレケル、

〔易林本節用集〕言語登凱歌トキノコヱ　鯨波同　鬨音同

〔倭訓栞〕前編十八登ときつくる　時の聲をつくる也、〇中略吶喊など見えたり、〇中略軍神招禱したてまつる聲を、時つくるといひ、敵軍退散して神を送り奉る聲を、勝時と名くともいへり、〇中略ときのこゑ　鬨字をよめり、孟子注に、鬪聲と見ゆ、史記に、呼聲動天といふめり、禁中にて時をまうす聲よりいひて時聲の義也、神代紀にいふ雄誥より出るよし、口訣に見えたり、三度聲を發するも習ありといへり、或は鯨波を訓ず、水靜鯨波など、西土の文にも見えたり、

〔駱賓王集〕下和孫長史秋日臥病

金壇分上將、玉帳引雄才、決勝鯨波靜、騰謀鳥谷開、〇下略

〔甲陽軍鑑品第四十六十六〕一とのゐときの順逆の事、陣中にて日入ぬる時分、大將の陣より時かしらをあぐるに、うけ〳〵事あらば、三日は軍仕る事なかれ、敵陣とのゐを逆に作る事あらば、三日よりうちによせかけて切勝べき事、万代と云とも此掟不可替也、

〔武雜記補註下〕一ときのこゑは、左より右へあげ候、ときの聲は合戰の時ときの聲也、左より右へあげ候とは、陣立をゑたるに、陣の左の方よりときの聲をあげ始て、陣の右の方の軍兵も聲を合て、ときの聲あぐるは吉事也、左は陽、右は陰なる故、陽の方よりあげ始るを吉事とする心なるべし、ときの聲はゑい〳〵わうとあぐる物也、敵に對して合戰を始る時、ときの聲を上る也、又軍に勝たる時も、ときの聲を上る、是をかちどきと云、

〔軍用記七〕ときの聲は、左より右へ上るは吉なり、右より左へあげるはいむ也、ときの聲はゑいゑいわうと上るなり、勝どきの事、敵を退治しては床机にこしをかけ、祝の肴に向て勝栗を右の手にとり、左にて扇を不殘ひらき持て、大將ゑひ〳〵ゑいといふ時、三度めに諸軍勢ときをついで、ゑい〳〵わうとあぐるなり、

〔扶桑略記二十二宇多〕寛平五年九月五日、對馬島司言、新羅賊徒船四十五艘到著之由、太宰府同九日進上飛驛使、○中略豐岡春竹卒弱軍四十人、度賊前、凶賊見之、各鋭兵而來、向守善友室○文前、善友立楯令調弩、亦令亂聲、時凶賊隨亦亂聲、即射戰、其箭如雨、

○按ズルニ、亂聲モ亦鬨聲ナラン、

〔源平盛衰記十五〕宇治合戰附賴政最後事
平家ハ宮以仁王○高倉宮南都へ入セ給由聞テ、追討使ヲ被差遣ニ、○中略都合二萬餘騎宇治路ヨリ南都ヲ差テ追テ懸、平等院ニ敵アリト見ケレバ、平家ノ兵共雲霞如クニ馳集テ、河ノ東ノ端ニ引ヘテ時ヲ造ル事三箇度、夥シトモ不斜、宮ノ兵共モ時ノ音ヲ合テ、橋爪ニ打立テ鏑矢射ケリ、

〔源平盛衰記二十〕八牧夜討事

八十五騎ヲ二手ニ造ル、佐々木兄弟四人ハ搦手ニ廻ル、北條土肥岡崎等追手也、兩方ヨリ時ヲ造テ寄セタレバ、城ノ内ニモ時ヲ合ス、

〔源平盛衰記三十四〕明雲八條宮人々被討附信西相明雲事

廿日〇壽永二年十一月卯時ニ木曾〇義仲六條河原ニ出テ、昨日十九日ニ所切頸共、竹結渡シテ懸並ベツヽ、千餘騎ノ兵、馬ノ鼻ヲ東ヘ、悦ノ時トテ三箇度作リ叫ケリ

〔太平記三十一〕武藏野合戰事

新田足利兩家ノ軍勢二十萬騎、小手差原ニ打臨テ、敵三聲時ヲ作レバ、御方モ三度時ノ聲ヲ合ス、上ハ三十三天マデモ響キ、下ハ金輪際迄モ聞ユラント震シ、

〔相州兵亂記三〕府中軍之事

氏康ハ初陣ニ敵ヲ押落シ、物初メ吉ト悅ンデ、カチドキヲ上ゲ、猶幕ノ内ヘ歸リ、手負ヲ助ケ、心靜ニ兵粮ツカヒ、扱馬ヲ入給フ、

〔陰德太平記五十五〕元春隆景被圍上月城附秀吉後詰之事

元春〇吉川ノ命ニテ、二宮佐渡守俊實鬨頭ヲ揚ケルニ、總軍七万鬨ヲ作ル事三箇度ナレバ、其聲上ハ非想非々想天ノ上、下ハ奈落黃泉ノ底ニ徹シヌベク覺エテ夥シ、

〔板坂卜齋記中〕十五日〇慶長四年九月小雨降、山間なれば霧深くして、五十間先は見へず、霧あがれば、百間も百五十間先も僅に見ゆる歟と思へば、其儘霧下りて敵の旗少し計見ゆる事も有歟と思えば其儘みえず、家康公御馬立させられ候所と、治部小西攝津守、備前中納言殿、大谷刑部少輔陣場とは其間一里計り也、〇中略御旗本大形備御立候時、鬨の聲夥敷御旗本の若衆敵味方の勝負如何と申あへり、又時の聲あぐる合時の音歟と申あへる所に、又鬨の聲を上ル三度なり、此内勝負は

軍ヨバヒ

不ㇾ知、先へ小栗又市、米津清右衛門兩人物見の御使被ㇾ遣候、米津清右衛門可ㇾ然首を持參仕、御合戰御勝と申上候、

〔常山紀談十三〕關ヶ原の軍敗れしかば、金森法印とく勝鬨の儀式行はれ候はばやと申けるを、東照宮諸將の武功により、かく敵をば打破りたれども、諸將の妻子大坂に人質となりて敵の中に有、此を事故なく歸し與へざらん間は、わが心安んぜず、勝鬨をいかで行ふべきと仰られしを、聞く人愈感服しけるとぞ、

〔源平盛衰記十三〕熊野新宮軍事

源氏ノ方ニハ角コソ切レ、平家ノ方ニハ角コソ射トテ、軍ヨバヒ六種震動ノ如シ、

〔平家物語十二〕六だうのさたの事

女院(建禮門院平德子)なみだをおさへて申させ給ひけるは、(中略)津の國一の谷とかやに女やうくはくをかまへ、その〳〵なをしそくたいを引かへて、くろがねをのべて身にまとひ、あけてもくれても、いくさよばひのこゑのたゆる事もなかりしは、(下略)

〔大塔物語〕爰村上滿信、伴野平賀、田口成ニ一手、不ㇾ朝ニ央入替、立ニ黒煙ニ降ニ血雨、半時計相戰、師呼矢叫、太刀音雷震、不ㇾ異ニ百千之雷公鳴ㇾ穹岩、

〔結城戰場物語〕京勢十万餘騎、箱根の城へ押よせて、時をどつとぞ作りける、(中略)おめきさけんで責戰、軍よばひ矢叫は天地も動計也、

合詞合印

〔倭訓栞前編二〕あひことば　相詞の義、軍中に用う、西土にて暗號といへり、

〔里見九代記三〕三略傳書乾卷

一相印相言葉餘所ヨリ才角シテ出スベカラズ、大將ト老中軍法者ト密ニ示シ合セ出スベシ、但夜討ノ相詞相印、其間定メテ其大將ヨリ不ㇾ可ㇾ出事、

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕あひことば

一敵がうつ　一花かみなる　一水か水　一山か山　一森か林　一日かにち
一みちかしる　如件雑人のいふよき事を吉凶に任つくるなり、信玄公のあひこと、關東越後美濃、三河もろ〱の敵地にて、後は存たるにより、御他界の一兩年前よりは、敵がふくべなど、作て申候は、能信玄公御ほこさきつよくして、敵共謀て、たすかりたがるとばかり、末代にも思食候へ如件、

〔兼貞齋筆記〕太皷貝ノ數ハ、其時ニ取テ定ル事、甲州家ノ秘事也、○中略相言葉勿論右ノ通リナリ、一壹ツト答ヘル、二貳ツ、三參ツ、四四ツ、五五ツ、六六ツ、七七ツ、八八ツ、九九ツ、十トウト答ヘル、其上ニ或ハ一々二ト答ヘル、二々四ト答ヘル、三々六、四々八ツ、五々十ト答ヘル、此十數ヲ以テスベシ、是大事ノ相言葉也、

〔明良洪範續篇十〕刀脇差ノ鞘ニ左巻右巻一ツ巻二ツ巻三ツ巻迚之有、左リ巻ハ紙ヲ切サヤヲ左リヘ巻也、右巻ハ右ニ巻也、一ツ巻ハ一ト所巻也、二ツ巻二所、三ツ巻三所也、是ハ何レモ味方ノ合印也、戰場ニテ敵トモ味方トモ知レザル者ニ、左リ巻カ右巻カ一ツ巻カ二ツ巻カ抔ト尋ルニ、味方ハ兼テ約束致シ置候故、此方合點ノ様ニ返答申候、敵ナレバ何カトウロタヘ候也、又具足ノソタガミニ栞ヲ付ル事アリ、子細ハ右ニ同前、何レモ大將ヨリ仰付ラレズ候得バ、成ザル事ニ候得ドモ、先心得有ベク候、合印合言葉抔トハ加様ノ事ト申ゲニ候事、

〔常山紀談拾遺一〕老功の士の曰く、古法に相言葉を夜々に替ると云ことは大なる僞なりと心得べし、末々までのことゆへ、中々毎夜かへがたし、大阪陣のとき、城内相詞は山、關東方は旄と唱へたるに、一陣すむまで右の相言一ツ宛にて濟たる事なり、是證據なり、大阪落城のとき、城中より女中大勢おちたるに、旄とさへ云へば寄手は助ると心得て、銘々旄々と唱へて出たるとなり、

〔日本書紀 天武 二十八〕元年七月甲午、近江別將田邊小隅、越鹿深山、而卷幟拖鼓、詣于倉歷、以夜半之、銜枚穿城、遽入營中、則畏己卒與足麻侶〇田中臣衆難別、以每人令言金、仍拔刀而毆之、非言金乃斬耳、於是足摩侶衆悉亂之、事忽起不知所爲、唯足摩侶、聽知之、獨言金以僅得免、

〔太平記 三十一〕八幡合戰事附官軍夜討事

官軍七千餘騎ガ中ヨリ、夜討ニ馴タル兵八百人ヲ勝リテ、法性寺左兵衞督ニ付ラル、左兵衞督畫程ヨリ、此勢ヲ吾陣ヘ集テ笠符ヲ一樣ニ著サセ、誰ゾト問ヘバ進ト名ノルベシト約束シテ、夜已ニ二三更ノ程也ケレバ、宿院ノ後ヲ廻テ如法經塚ヘ押寄、八百人ノ兵共同音ニ時ヲドツト作ル、

〔太平記 三十四〕平石城軍事附和田夜討事

和田ハイツモ戰ヒヲ先トシテ、謀ヲ待ヌ者ナリケレバ、〇中略敵アラケテ引退ナバ、靡テ勝ニ乘テ討ベシ、引ズンバ又力ナク、其時コソ金剛山ノ奧マデモ引籠テ、戰ハンズレトテ、夜討ニ馴タル兵三百人勝テ、問ハヾ武シト答ヘヨト、約束ノ名乘ヲ定ツヽ、夜深ル程ヲゾ待タリケル、

〔淺井三代記 四〕淺井夜合戰の事

亮政重て宣ひけるは、味方の相詞を定むべし、南風吹といはゞ、切て掛るべし、北風烈といはゞ、城中へ引退くべし、谷かととはゞ、味方は山とこたふべし、味方のしるしには、天目さいを切、具足のわたがみに付べし、歩立の者には、三引兩を紙にて押付べしと相定め、其支度をぞいたされける、

〔奧羽永慶軍記 十〕蕨野合戰ノ事

城中〇蕨野ノ者共大將ノ下知ヲ守テ、武具ヲ著ナガラ寢タル體ナレバ、我劣ラジト打テ出ヅ、寄手ニハ昨日ノ敗軍ノ者共ニ會稽ノ恥ヲ雪ガントヽ、命ヲ惜マズ攻入、温海川、五十川ノ者共ハ、是ニ劣ラジト、面モフラズ拔ツレテ切テ入、其上カネテ合詞ヲ定メ袖印ヲ付タリ、

〔陰德太平記 二十七〕三浦越中守最後之事

一枚楯ヲ突並ミ、日輪ノ卓物ヲ拔テ捨、吹芮ニ頤ヲ持セ大息繼デ休ミ居タリケルガ、敵ノ來ルヲ見テ莞爾ト打笑テ、味方デ候ゾ、聊爾被成候ナト詞ヲ懸タリ、然レ共山口詞ニテ味方デノデノ假名セノ字ヲ濁リタル樣ニ聞エケル間、扨ハ無所紛山口者也、聞ユル三浦越中守ナルベシト思ケレバ、二宮木工助三浦ガ前ニ大木一本倒テ有シニ鎗ヲ持セ、味方ナラバ相符有ベシ、見セ候ヘト云ケルヲ聞テ、三浦是見ヨヤトテ、楯ノ外レヨリ具足ノ總角少シ許出シテ、早ク楯ノ內ベゾ入ニケル、二宮只今ノ樣體ニテハ不分明、今一度見セヨヤト云ケル所ニ、內藤內藏允後ヨリ能引テ放ツ矢、三浦ガ綿上ニシタヽカニ立タリケリ、

〔播州佐用軍記〕下臘月十四日合戰之事

山脇勢竹中ノ何某、其勢二百計ニテ高山ガ後一丁許隔テ陣ヲ張扣ケルガ、高山ガ敗軍スルヲ見テ、竹中頓テ入代テ、早瀨ニ打テ莵ル、〇中略早瀨モ兵ヲ先キニ立、我身ハ里ト相言葉シテ、敵ノ向サマ少右リヘ微反、隨兵五騎馬廻リニ有ケル弓ノ兵十餘人一手ニ成テ、敵ノ左ノ手先橫合ヘトカケ出、敵間二十間計ニ馬ヲカケ居テ、矢ヲ射カケタリ、

〔川角太閤記〕一一正龍寺のあてに、在鄕々々へ心を付よ、火先見ゆる事もや有、夜明迄心にかけよとて、番の者を御出し候、盡の御觸には、夜討には大略相印にはかみこばをりか、志めだすきかのもの也、敵と一ツ樣に是有ものならば、やくもたいも有ましきぞや、味方は刀のさやに、志でをきり三所に付べし、其上具足の左のわたがみにも、にたる志でを付させよ、すはだ者かち者には、左のゑりに是も刀のさやのごとく、志でを付させよ、夜明なば此しでは不入、常のごとくにと被仰付候事、

〔川角太閤記〕五又左衞門殿〇前田利家陣取夜に入とひとしく、甚の陣取を引替、夫小荷駄抔を高山へ引上、陣取を夜に入十町計人數を操出、夜打入候半と疊敷海道筋へ出、海辺より二町計引のけ能

相圖

伏せを返、夜討すべき者をと敵勢を今や遅しと被相待候處、如案夜の八ッ時分に又左衞門推量のごとく夜討入申處、千四五百やり過し、眞中と覺しき所へ撞懸り、四方八面に切崩、内藏助殿〇佐成政方案に相違して敗北す、やにはに百六拾餘被討捕候、又左衞門御内片山伊賀守、高畠石見相印を被成候へと申上候處に、又左衞門殿分別には、敵は定相印可有之者也、味方は相印指間敷なり、相印無き所是則相印也、其分下々可相心得なり、如案敵は繩にしでを切掛、前みの如くに引廻たると見へたり、

〔續武將感狀記〕十之〇細今夜風雨ノマギレニ、一夜擊シテ敵ヲ追拂ハント、嘉明〇加藤ノ貯ヲカレシ白布ヲ、胴肩衣ニ裁縫テ諸卒ニ與ヘ、十成ハ背ニ松ノ字ヲ墨ニテ書テ著之、合詞ヲ定メ、首ハ不可取、貝ノ音ヲ聞バ、勝負ヲ止テ引トレト約シテ、〇下略

〔倭訓栞中編安一〕あひづ　西土にいふ號也、相圖とかけり、すべて口語にづといふも是也、

〔太平記十七〕義貞軍事附長年討死事
阿波淡路ノ勢千餘騎ハ、未京中ヘハ入ズ、泉涌寺ノ前今熊野邊マデヲリ下テ、相圖ノ烟ヲ上タレバ、長坂ニ陣ヲ取タル額田ガ勢八百餘騎、嵯峨仁和寺ノ邊ニ打散、所々ニ火ヲ懸タリ、

〔太平記三十二〕山名右衞門佐爲敵事附武藏將監自害事
文和二年六月九日卯剋ニ、南方ノ官軍、吉良、石堂、和田、楠、原、蜂屋、赤松彈正少弼氏範三千餘騎、八條九條ノ在家ニ火ヲ懸テ、相圖ノ烟ヲ上タレバ、山陰道ノ寄手山名伊豆守時氏、子息右衞門佐師氏、伊田、波多野五千餘騎、梅津、桂、嵯峨、仁和寺、西七條ニ火ヲ懸テ、先京中ヘゾ寄タリケル、

〔關八州古戰錄六〕國府臺後度合戰附里見太田敗北事
福嶋ガ合屬大橋山城守、橫江忠兵衞ハ、サル覺ノ者ニテ心利ナリケレバ、審ニ敵陣ノ樣子見テ參レトテ伺ハセケルニ、大手初度ノ戰既ニ終テ、敵勝軍シタリシマヽ、悅ノ螺吹テ竹葉遣ヒ、寛々ト

シテ見ヘタリシ、急ギ馳歸テ、敵ハ甚ダ油斷ノ由ヲ申ケレバ、福嶋松田早勝タルゾ時分ヨシトテ、眞間ノ森陰ヨリ相圖ノ旗ヲ颯ト指擧ゲ、木ノ根椙ノ端ヲ敲キ鬨ヲ噇トゾ揚タリケル、折シモ小雨降出デ、北風梢ヲシブキケレバ、山谷ニ響ク事夥シ、大手ニモ件ノ相圖ヲ見ルヤ否、鬨ヲ合セテ攻登レリ、

〔關八州古戰錄〕七武田信玄西上野所々軍事

晴信泉龍齋ヲ近付ケ國峯ノ小幡圖書助ハ汝ト相聟ナリ、其氣質何ナル者ゾト問レシカバ、憲重〇小幡ト答テ力量モ勝レ、等倫ニ超タル徑庭ノ者ニテ候、爾ナガラ短慮ノ生得故、不意ノ事ニ遇フテハ、動轉仕ル天性ナリト申ケレバ、信玄拐ハ便有トテ、內藤修理亮昌豐ガ小荷駄奉行タリシヲ招キ、汝ガ召俱ス處ノ駄馬共ニ、提灯二ツヲ一匹宛ニ結付サセ、雜ノ夫男ニモ松明一本宛持サシムル用意スベシ、然レバ予ガ旗本ニテハ竿ノ先ニ提灯ヲ結付置テ、國峯エ押詰、旗本ヨリ彼ノ提灯ヲ指擧ルヲ相圖トシテ、汝ガ小荷駄ノ提灯松明共ニ灯シ連レ、城近キ高揚ノ地エ一同ニ噇ト押騰ベシ、其時急ニ攻懸テ敵ヲ劫カシ、乘捕ンニ子細アルベカラズト計略ヲ示サレ、斯テ西牧ヲ打立、甘羅ノ郡ニ押向ハル、件ノ術アルガ故ニ、態ト黃昏ニ及テ、國峯ノ城エ取懸、旗本ヨリ相圖ノ灯ヲ差擧ルヤ否、透カサズ內藤小荷駄ヲ下知シテ、山手エ追登セ、鬨ノ聲ヲ發シケレバ、大手ノ甲兵モ同ジク鬨ヲ作リ懸喚キ叫デ攻寄セシマヽ、圖書助景純以ノ外ニ周章シ、前後ヨリノ大軍、暗夜ト謂ヒ、微勢ト云ヒ、防戰叶フベカラズト心得、姑ク支ヘテ奮擊シ、自害シテコソ失セタリケレ、

〔關八州古戰錄〕九太田三樂父子再入小田城事

太田資正入道父子ハ、〇中略〇小田城ハ源太左衞門資晴ヲ殘シテ、詰々ノ手配ヲ大夫ニ認メ、以來天苍方ヨリ働ヲ懸ンズル時ハ、眞壁大曾根ニ告知シメ、助援ヲ相圖ノ爲トテ井樓ヲ揚ゲ、遠候ヲ居ヘ、敵間近キニハ早鐘ヲ撞キ、遠キニハ狼煙ヲ擧ル約束ヲ定テ、三樂齋ハ片野エ歸陣ナリ、

〔常陽四戰記〕富谷ヨリ出兵シテ、飯田村ノ邑ニ備、茶磨山ニ遠候ヲ置、鹿ヲ持セ相圖ヲ定テ、笠間方ノ人數ノ打出ル多少ヲ告知ラシム、

〔蒲生氏鄕記〕一内々氏鄕被存ハ、木作足長ニ出ヨカシ、討果トテ方々ニ物聞ヲ置、指出候ハ鐵砲ヲ打候ヘ、ソレ次第ニ松ガ嶋ヨリ掛付可討捕ト、相圖シテ度々掛合追散ス、

〔常山紀談拾遺三〕信州高遠の城に、保科彈正廿七騎にて籠城のとき、小笠原一万の人數を以て攻之、このとき彈正、鄕民を大勢かりて見せ勢となし、それに旗を多くもたせて見せ旗となし、又山上に相圖の旗を置き、敵の押來るとき、半途にして相圖の旗を振て石弓をおとし、敵の人數を去きりて終に廿七騎を以て勝利を得たり、

〔會津陣物語三〕上山城口合戰附上杉方穗村酒造允討死之事
中山式部篠野井彌七郞高ミヘ推出シケル處ニ、最上方ニ俄ニ紅ノ吹貫ヲ指上タリ、是ハ如何ト見ル處ニ相圖ニテアリケルカ、川口ト云谷際ヨリ、伏兵五ケ所ニ立起リ、尾崎ヨリ峯筋ニ取上リ、鐵砲ニテ打立懸入ケル、

神助

〔古事記中神武〕故神倭伊波禮毘古命、從其地(和泉)廻幸、到熊野村之時、大熊髮出入、卽失、爾神倭伊波禮毘古命、倏忽爲遠延、及御軍皆遠延而伏、(遠延二字以音)此時熊野之高倉下(此者人名)齎一横刀、到於天神御子之伏地而獻之時、天神御子卽寤起、詔長寢乎、故受取其横刀之時、其熊野山之荒神、自皆爲切仆、爾其惑伏御軍、悉寤起之、故天神御子、問獲其横刀之所由、高倉下答曰、己夢云、天照大神高木神、二柱神之命以、召建御雷神而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜藝帝阿理祁理、(此十一字以音)我之御子等、不平坐良志、(此二字以音)其葦原中國者、專汝所言向之國故、汝建御雷神可降、爾答曰、僕雖不降、專有平其國之横刀、可降、○(注略)降此刀狀者、穿高倉下之倉頂、自其墮入、○(中略)故阿佐米余玖(自阿下五字以音)汝取持、獻天神御子、故如夢教、而旦見己倉者、信有横刀、故以是横刀而獻耳、於是亦高木大神之命以、覺白之、天神御子、自此於奧方

莫使入幸、荒神甚多、今自天遣八咫烏、故其八咫烏引道、從其立後應幸行、故隨其敎覺、從其八咫烏之後幸行者、到吉野河之河尻、(古事記) ○又見日本書紀

〔日本書紀 三 神武〕戊午年九月戊辰、復有兄磯城軍、布滿於磐余邑、(磯此云志) 賊虜所據皆是要害之地、故道路絕塞無處可通、天皇惡之、是夜自祈而寢、夢有天神訓之曰、宜取天香山社中土、(香山此云介遇夜摩) 以造天平瓮八十枚、(平瓮此云毘羅介) 幷造嚴瓮、而敬祭天神地祇、(嚴瓮此云怡途背) 亦爲嚴呪詛、如此則虜自平伏、(嚴呪詛此云怡途能伽辭離) 天皇祇承夢訓、依以將行、時弟猾又奏曰、倭國磯城邑有磯城八十梟帥、又高尾張邑(或本云葛城邑也) 有赤銅八十梟帥、此類皆欲與天皇距戰、臣竊爲天皇憂之、宜今當取天香山埴、以造天平瓮、而祭天社國社之神、然後擊虜則易除也、天皇既以夢辭爲吉兆、及聞弟猾之言、益喜於懷、乃使椎根津彥著弊衣服及蓑笠、爲老人貌、又使弟猾被箕、爲老嫗貌、而勅之曰、宜汝二人到天香山、潛取其巓土、而可來旋矣、基業成否當以汝爲占、努力愼歟、是時虜兵滿路、難以往還、時椎根津彥乃祈之曰、我皇當能定此國者、行路自通、如不能者賊必防禦、言訖徑去、時群虜見二人、大咲之曰、大醜乎、(大醜此云鞅奈瀰爾句) 老父老嫗、則相與闢道使行、二人得至其山、取土來歸、於是天皇甚悅、乃以此埴造作八十平瓮天手抉八十枚、(手抉此云多衢餌離) 嚴瓮、而陟于丹生川上、用祭天神地祇、則於彼菟田川之朝原、譬如水沫而有所呪著也、天皇又因祈之曰、吾今當以八十平瓮無水造飴、飴成則吾必不假鋒刃之威、坐平天下、乃造飴、飴即自成、又祈之曰、吾今當以嚴瓮沈于丹生之川、如魚無大小悉醉而流、譬猶柀葉之浮流、(柀此云磨紀) 吾必能定此國、如其不爾終無所成、乃沈嚴瓮於川、其口向下、頃之魚皆浮出、隨水噞喁、時椎根津彥見而奏之、天皇大喜、乃拔取丹生川上之五百箇眞坂樹、以祭諸神、自此始有嚴瓮之置也、時勅道臣命、今以高皇產靈尊、朕親作顯齋、(顯齋此云于圖詩怡破毘) 用汝爲齋主、授以嚴媛之號、而名其所置埴瓮爲嚴瓮、又火名爲嚴香來雷、水名爲嚴罔象女、(罔象女此云瀰菟破廼迷) 糧名爲嚴稻魂女、(稻魂女此云于伽能迷) 薪名爲嚴山雷、草名爲嚴野椎、 十月癸巳朔、天皇嘗其嚴瓮之糧、勒兵而出、先擊八十梟帥於國見丘、破斬之、 十二月丙申、皇師遂擊長髓彥、連戰不能取勝、時

忽然天陰而雨氷、乃有金色靈鵄、飛來止于天皇弓弭、其鵄光曄煜、狀如流電、由是長髓彥軍卒皆迷眩、不復力戰、長髓、是邑之本號焉、因亦以爲人名、及皇軍之得鵄瑞也、時人仍號鵄邑、今云鳥見、是訛也、

〔日本書紀九神功〕九年〇仲哀二月、足仲彥天皇、崩於筑紫橿日宮、時皇后傷天皇不從神敎而早崩、以爲知所祟之神、欲求財寶國、是以命群臣及百寮、以解罪改過、更造齋宮於小山田邑、　三月壬申朔、皇后選吉日、入齋宮、親爲神主、〇中略而請曰、先日敎天皇者、誰神也、願欲知其名、逮于七日七夜、乃答曰、神風伊勢國之百傳度逢縣之拆鈴五十鈴宮所居神、名撞賢木嚴之御魂天疎向津媛命焉、亦問之、除是神有神乎、答曰、幡荻穗出吾也、於尾田吾田節之淡郡、所居有之也、問亦有耶、答曰、於天事代於虛事代、玉籤入彥嚴之事代主神有之也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、於是審神者曰、今不答而更後有言乎、則對曰、於日向國橘小門之水底、所居而水葉稚之出居神、名表筒男、中筒男、底筒男神有之也、問亦有耶、答曰、有無之不知焉、遂不言、且有神矣、時得神語、從敎而祭、　九月己卯、令諸國、集船舶、練兵甲、時軍卒難集、皇后曰、必神心焉、則立大三輪社、以奉刀矛矣、軍衆自聚、〇中略既而神有誨曰、和魂服玉身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船、〇註略卽得神敎而拜禮之、〇中略既而攜荒魂爲軍先鋒、請和魂爲王船鎭、　十月辛丑、從和珥津發之、時飛廉起風、陽侯擧浪、海中大魚、悉浮挾船、則大風順吹、帆舶隨波、不勞櫓楫、便到新羅、時隨船潮浪、遠逮國中、卽知、天神地祇悉助歟、新羅王、〇中略曰、吾聞東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其國之神兵也、豈可擧兵以距乎、卽素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、　十二月辛亥、於是從軍神、表筒男、中筒男、底筒男三神、誨皇后曰、我荒魂令祭於穴門山田邑也、時穴門直之祖踐立、津守連之祖田裳見宿禰、啓于皇后曰、神欲居之地、必宜奉定、則以踐立爲祭荒魂之主、仍祠立於穴門山田邑、

〔日本書紀二十八天武〕元年七月壬子、先是軍金綱井之時、高市郡大領高市縣主許梅、儵忽口閉、而不能言也、三日之後、方著神以言、吾者高市杜所居、名事代主神、又牟狹社所居、名生雷神者也、乃顯之曰、於神

日本磐余彥天皇〇神武之陵、奉馬及種々兵器、便亦言、吾者立皇御孫命之前後、以送奉于不破而還焉、今且立官軍之中守護之、且言自西道軍衆將至之、宜愼也、言訖則醒矣、故是以便遣許梅而祭拜御陵、因以奉馬及兵器、又捧幣而禮祭高市身狹二社之神、然後壹岐史韓國、自大坂來、故時人曰、二社神所敎之辭適是也、又村屋神著祝曰、今自吾社中道、軍衆將至、故宜塞社中道、故未經幾日、廬井造鯨軍自中道至、時人曰、卽神所敎之辭是也、軍政既訖、將軍等擧是三神敎言而奏之、卽勅登進三神之品、以祠焉、

〔續日本紀文武二〕大寶二年十月丁酉、先是征薩摩隼人時、禱祈太宰所部神九處、實賴神威、遂平荒賊、爰奉幣帛、以賽其禱焉、

〔文德實錄一〕嘉祥三年五月丙申、詔以武藏國奈良神列爲官社、先是彼國奏請、撿古記、慶雲二年、此神放光如火燄然、其後陸奧夷虜反亂、國發控紘赴救、陸奧軍士、載此神靈奉以擊之、所向無前、老弱在行免於死傷、〇中略人命所繫不可不崇從之、

〔三代實錄三十四陽成〕元慶二年八月四日、是日彼國〇出羽正三位勳五等大物忌神進勳三等、正三位、勳六等月山神四等、從五位下勳九等小物忌神七等、先是右中辨兼權守藤原朝臣保則奏言、此三神自上古時、方有征戰特標奇驗、去五月賊徒襲來誂戰官軍、當此之時、雲霧晦合、對坐不相見、營中擾亂、官軍敗績、求之蓍龜、神氣歸賊、我祈無感、增其爵級、必有靈應、國宰齋戒、祈請慇懃、望請加進位階、將答神望、仍增此等級、

〔陸奧話記〕武則、〇淸原氏以同年〇康平五年秋七月、率子弟萬餘人兵、越來於陸奧國、將軍〇源賴義大喜、〇中略於是武則、遙拜皇城、誓天地言、臣既發子弟應將軍命、志在立節、不顧殺身、若不苟死、必不空生、八幡三所照臣中丹、若惜身命、不致死力者、必中神鏑先死矣、合軍擾臂、一時激怒、今日有鳩、翔軍上、將軍以下、悉拜之、〇中略十七日〇九月未時、將軍命士卒曰、各入村落、壞運屋舍、塡之城隍、亦每人苅萱草、積之河岸、於

是壞運苅積、須臾如山、將軍下馬、遙拜皇城誓言、〇中略伏乞八幡三所、出風吹火燒彼柵、則自把火、稱神火投之、是時有鳩、翔軍陣上、將軍再拜、暴風忽起、烟焰如飛、

〔源平盛衰記四十三〕源平侍遠矢附成良返忠事

判官〇源義經ハ軍負色ニ見エケレバ、鹽瀨ノ水ニ口ヲ漱、目ヲ塞テ合掌、八幡大菩薩ヲ祈念シ奉、加神明擁護給、白鳩二羽飛來テ、判官ノ旗ノ上ニゾ居タリケル、源平共ニアレ〳〵ト云程ニ、東方ヨリ一村ノ黑雲タナビキ來テ、軍場ノ上ニカヽル、雲中ヨリ白旗一流ヲリ下テ、判官ノ旗頭ニヒラメキテ、雲ト共ニ去ヌ、源氏ハ合掌拜之、平家ハ身毛竪テ心細覺シケル、

〔八幡愚童訓上〕小貳三郎左衞門尉景資、蒙古ノ大將軍ト思敷者、長七尺計ノ大男、鬚ハ臍ノ邊マデ生下リ、靑キ鎧葦毛ナル馬乘、十四五騎打連、カチ走七八十人ガ程ニ相具シテ、ヲソイテ走ラカス、其時景資ガ旗蟬口ニ鳩カケリ舞シカバ、八幡大菩薩御影向ト憑敷奉憶ケリ、究竟馬乘弓ノ上手也シカバ、逸物ノ上馬ハ乘タリ、一鞭打テ馳、見返テ能引テ放ツ矢ニ、一番ニ懸タル大男ノ眞中射レテ、馬ヨリ下ヘ逆コソ落ケレ、郎等共抱之ヒシメキタル紛ニゾ、景資御方ヘ引返リ、葦毛ノ馬ニ金作ノ鞍置、馳廻リシヲ捕ヘ、後詩レバ、蒙古一方ノ大將流將公ガ馬也、蒙古ノ生捕申ケルハ、鳩翔テ大將軍ヲバ打テケリ、八幡降伏目出タク貴キ事也、

〔太平記十〕稻村崎成干潟事

新田義貞逞兵二萬餘騎ヲ率シテ、廿一日〇元弘三年五月ノ夜半計ニ片瀨腰越ヲ打廻リ、極樂寺坂ヘ打莅給フ、〇中略義貞馬ヨリ下給テ、甲ヲ脫テ海上ヲ遙々ト伏拜ミ、龍神ニ向テ祈誓シ給ケルハ、傳承ル日本開闢ノ主伊勢天照太神ハ、本地ヲ大日ノ尊像ニ隱シ、垂跡ヲ滄海ノ龍神ニ顯シ給ヘリト、吾君〇後醍醐其苗裔トシテ、逆臣ノ爲ニ西海ノ浪ニ漂給フ、義貞今臣タル道ヲ盡ン爲ニ、斧鉞ヲ把テ敵陣ニ臨ム、其志偏ニ王化ヲ資ケ奉テ、蒼生ヲ令安トナリ、仰願ハ內海外海ノ龍神八部、臣ガ忠義

ヲ鑒テ、潮ヲ萬里ノ外ニ退ケ、道ヲ三軍ノ陣ニ令開給ヘト、至信ニ祈念シ、自ラ佩給ヘル金作ノ太刀ヲ拔テ、海中ヘ投給ケリ、眞ニ龍神納受ヤシ給ケン、其夜ノ月ノ入方ニ、前々更ニ干ル事モ無リケル、稻村崎俄ニ二十餘丁干上テ、平沙渺々タリ、横矢射ント構ヌル數千ノ兵船モ、落行鹽ニ被誘テ遙ノ澳ニ漂ヘリ、不思議ト云モ無類、○中略江田、大館、里見、鳥山、田中、羽河、山名、桃井ノ人々ヲ始トシテ、越後上野武藏相模ノ軍勢共、六萬餘騎ヲ一手ニ成テ、稻村崎ノ遠干潟ヲ、眞一文字ニ懸通テ、鎌倉中ヘ亂入ル

〔信長記一ノ上〕義元合戰事

信長卿○中略清洲ノ城ヲ出サセ給フ時ニハ、織田造酒丞、岩室長門守、長谷河橋介、佐脇藤八、山口飛驒守、賀藤彌三郎、河尻與兵衛尉、簗田出羽守、佐々內藏助、唯十騎計ニテ、先熱田ヘト急セ給ヒケルガ、熱田ノ旗屋口ニテハ、早雜兵一千餘騎方々ヨリ馳加リケル、卽當社大明神ヘ御參詣有テ、謹テ伏拜マセ給ヘバ、丹誠神ニヤ通ジケン、內陣ニ物ノ具ノ音シテ、物冷ジク聞エタリ、信長卿信心肝ニ銘ジ賴毋敷思召、扨ハ明神モ我小勢ヲ憐ミ力ヲ合セタベナント思スラン、イザ祈禱ノタメ願書ヲ一筆書テ奉ラバヤトテ、手書ニ被具タル武井肥後入道夕庵ヲ召テ、夫々ト仰ケレバ、夕庵硯疊紙ヲ取出、御前ニ畏テ聊思惟シテ見エケルガ、事急ナレバ、取敢ズ、

敬白　祈願事○中略

永祿三年五月十九日　平信長敬白トゾ書タリケル

角テ信長卿急ガセ給フ處ニ白鷺二ツ御旗ノ先ニ立テ飛行ケレバ、彌タノモシク思召、濱ノ手ハ折節鹽滿テ馬ノカヨヒモナカリケレバ、笠寺ノ東ナル細道ヲ經テ、取出々々勢ヲモ相具シ、善照寺ノ東山ノ夾ニテ勢ヲ揃ケルニ、漸々三千計ニ見ユルヲ、勢ハ五千餘騎ゾ、軍ノ行ヲ以敵ヲトリコニスベキ事案ノ內ナリ、皆々心安ク思ヘトテ、兵ノ勇氣ヲ勵シ給フ○中略折節黑雲頻ニ村立來

テ、大雨頻ニ熱田ノ方ヨリ降リ來リ、石氷ヲ投グルゴトクニ、敵勢ヘ降カヽリ、蒼海ヲタヽヘテ呀カリケレバ、味ニ寄ル味方サヘ敵陣ニ近クヲモ覺束ナキ程ナレバ、敵ハ曾テシラザリケルモ理リナリ、〇中略此近年鬼神ノ樣ニ云シ義元ガ勢ヲ打隨ヘ、剩大將ノ首ヲ角見ル事、身ノ悅無限、是偏熱田大明神ノ御神力ヲ合シ給ヒシ事、疑ナシトテ神前ニ詣テ、禮拜其體ヲ盡シ、宮中不殘御修理ヲ可被加旨、田島千秋ナドニ被仰テ、〇下略

佛助

〔清水寺緣起上〕桓武天皇御宇、延暦十四年の春、東海より蝦夷發逆のよし、頻に其きこへあり、依て征伐のために、以田村麻呂、爲征夷將軍さし下さる、天下の重事これに過ず、仍大樹延鎭の室に向て、今度東夷爲誅戮、勒を蒙り進發せしむべき者也、朝家安泰のため又愚夫息災のため、懇懃懇懃に、筋力を可被勵のよし被命之、〇中略　大樹すでに戰場に臨出給へる時、いづくともなく老比丘一人、老翁一人忽爾にすゝみ出たり、容貌端正豪傑なり、皆恐怖の思ひをなし、先其姓名出所を尋ぬるに、答に及ばず、則僧は大將軍のさきにたちて、凶徒の矢の雨脚のごとくなるを、法衣に防禦し、翁は又賊徒を射る、其いきほひ弩弓異ならず、箭ごゑを出し百發百中して、數百輩斃倒せり、神助佛力あらはれて、各歡喜の心ぞ深かりける、

〔清水寺緣起中〕此時將軍彼二叟に向て、三揖し三禮し、千手寶號を誦し給へり、然處に夷族なを忿激たゆまず、弓杖鉾楯をとり束ね、雲霞のごとく競來り、官軍の勇氣を拉がむとす、時に大雷頻に震て、焰煙敵陣におほひ、風は旋嵐をなして吹かけたり、敢て官軍は難ぞなき、我遣水火雷電神常當擁護の御誓約、眞なるかなと、軍勢彌力を得て戰ひける、　官軍猶勝に乘て万刃をならべ、一同に轡をもみ合、たゝかひけるに、群羅夷族の中へ墮落せり、然者彼陣場忽に敗北して、方々に漂倒せり、

軍陣

〔今川大雙紙〕一軍陣にて弓のおれたるにて吉凶を志る事、弭か上のおれたるは吉事也、弭より下

のおれたるはあしきことなるべし、○中略

陣具に付て式法之事

一軍陣の時、旗棹の折たるにて吉凶を見る事、持たる手上のおれたるは吉事、持たるより下は凶事也、○中略

馬に付て式法之事

一軍陣にて馬御目にかけべき次第、引立る時ゑざらせぬもの也、足をそろゆる事も有べからず、足をそろゆるは前へ引出してそろゆる物也、努々ゑざらせてそろゆる事不可有、

一軍陣にて馬乗べき次第、努々ゑざり口に乗べからず、乘様は何も同前なり、

一軍陣にて馬を見せ申には、前のごとく見せ申て、左を御目にかけ右を見せ申、其後面を御目にかけ申也、ゆめ／＼おつさまを御目に掛申さぬ也、○中略

酒に付て式法之事

一せんぢやうへの酌の事、てう／＼二度して拶つぐべし、大將に大指のさきをむけべからず、酌取人もか用の人もゑざる事を嫌也、

〔軍中故實〕一城ヲ取トキ、鳩鳥夜ナハギスル事、二三度モアラバ其城七日ノ内落ベキ也、

〔源平盛衰記三十六〕清章射鹿并義經赴鵯越事

同六日○元暦元年二月ノ未明、上ノ山ヨリ巖崩テ落、柴ノ梢ユルギケレバ、城ノ中ニハスハヤ敵ノ寄ハ、トテ、各々甲ノ緒ヲシメ、馬ニ騎、筈ヲ取テ待處ニ、雄鹿二雌鹿一、ツゞキテ出來レリ、能登守○教經ハ、此鹿ノ下様ヲ思ニ、一定敵ガ寄ルト覺タリ、○中略我ト思ハン者アマスナト宣ヘバ、伊豫國住人高市武者所清章ハ、○中略箙ノ上サシ拔出シテ雄鹿二ハ同草ニ射留ツ、雌鹿一ハ逃テケリ、不意狩シタリ、殿原草分ノカフソシゞノハツレ、肝ノタバネ、舌根、鹿ノ實ニハ能鹿ゾ、鹿食殿原ト云ケレ共、

大形ノ忩々ノ上、軍場ニテ鹿食事憚アリ、其上稻村明神トテ、程近ク御座ケレバ、松ノ二三本有ケル本ニ弃置ケリ、

〔武器考證五〕軍中忌食鹿　卷卅六〇源平盛衰記清章射鹿條、軍場ニテ鹿ヲ食コト憚アリ、　按、鹿嶋ハ武神ナルユヘ憚ナルベシ、

〔廻國雜記〕みしまにまうで、〇中略歌矢たての杉とて大木あり、軍陣へ出る武士ども、この木に矢を射たて、吉凶を見侍るよし傳ければ、

もの ゝ ふのためしにひける梓弓やたての杉やしるしなるらん

〔大坂夏陣物語〕大和口之衆水野日向守軍兵、五月〇元和元年五日に、和州關屋越を通り、河内の國府に押行、日向守松倉等を引率し、田尻越を經、河州へ入る事を、堀丹後守〇直寄へ告けり、丹後守は此日先鋒なれば、此旨を聞き驚き打立けるが、遲く告來る故に途を失ひ、丹後守大に怒て、里人を呼て直に河州への道を問、龜瀨と云龜瀨は昔落なり順路にして近く候、昔守屋〇物部此道を通り、河内へ往て軍に負て後は、軍に趣く者、此道を行く事を戒め、石を刻み驗と爲し、石の面に龜の形あり、其龜首を書かず、龜の首なきを見て、戰に利なし、此故に禁め通らず、又藤井越と云ふ有、是れ昔より禁む、藤蔓手足に纏ひ候故にや候らんと云へり、丹後曰く、龜瀨を古より忌と雖も、我今人に先立進み、命を捨て敵を殺す時は、千年の禁忌我破り、愚者の迷は解く也、守屋軍に負け死せば、我は勝て生ん、其吉凶明か也、若し戰に利なく我死なば、末世の勇士の戒と爲すべしと、軍兵を引率し、龜瀨を越河内國分寺へ馳著く、松倉以下暫く有て來る、諸人丹後守を感ず、

〔建武以來追加〕一故戰防戰事貞和二二五齋藤四郎兵衛入道玄秀奉行

縱雖有確論之宿意、可仰上意之處、任雅意及鬪殺之條、罪科不輕、所詮於故戰者、雖有理運、不可有御免者也、至防戰者、若有道理者、可被免許者哉、於無理之輩者、可被行攻戰之同罪歟、〇中略

一故戰防戰事

縱雖有確論之宿意、經上訴宜仰裁斷之處、任邪意及鬪殺之條、難遁其科、所詮於故戰者、雖懷本訴之道理、不可遁濫吹之罪責、何況於無理之仁哉、自今以後堅可令停止之、若尙違犯者准本條、悉召上所領、可處遠流焉、次與力人事、可召上所領、無所帶者、可處遠流也、子細同前、至防戰者、爲非領主者、可爲故戰同罪、若爲理運之仁者、隨事體可有其沙汰矣、○中略

一合戰咎事

帶御下文施行輩、尤可相待使節遵行之處、恣亂入所々之間、本主依支申、多及合戰之由有其聞、甚不可然、自今以後者不論理非、至故戰之輩者、悉可收公所帶、亦於防戰之仁者、可被分召所領半分、但非領主者可准故戰也矣、○中略

一故戰防戰事　永正十一四十、　長秀

於故戰者、雖有確論之宿意、可經上訴之處、及鬪殺之條、被收公所帶之段、度々制炳焉也、然今度被定置、故戰之儀尙被停止畢、有不叙用之輩者、可被行本人於死罪、若令逐電者、尋捜同意之族、可處罪科、次防戰事、被遂御糺明、隨事體可有其沙汰也、

〔軍陽軍鑑品第四十六　十六〕一軍陣時之事　拔書　數ヶ條

軍の時、敵味方を見るに、二色あり、　武者の黑は勝なり　赤見ゆる方は必負なり　軍の時馬よりおりたるに、北へ向方まくる也、よくこゝろへべし、

一軍兵の寄來をもつて勝負をしる事、　見知と云は、人數押來時に、ばら〳〵に見え、それに烏付事有、武者にほこりなく、人馬共に、足なみ音たかくなりきこえば、かならず滅亡なり、太刀打に及ばず負なり、○中略

一軍陣の物たち縫日　庚申を用べし、物たち、かき板は、柳たるべし、縫事は跡へ針を返さぬなり、

又たちさまに、刀の先をそろ〳〵と三度、先へつきやりてさてたつべし、

一時日を不ㇾ嫌行事有ㇾ之、合戰に出る時の事なり、東へ行には木を越よ、南へ行には火を越よ、西へ行には金を越よ、北へ行には水を越よ、何も三度なり、又或說には、甲乙には木を越よ、丙丁には火を越よ、戊己には土を越よ、庚辛には鐵を越よ、壬癸には水を越よ、〇中略

一五音勝負占相の事、凡音律の方に學有人を輕足の馬に乘て、敵陣に近付て、十二律を耳に當て、徵音に吹て、時の宮商角徵羽を知事、有情非情の、聲を何の調子と聞仰て、吾勝べき方角時分を知て、敵の城に詰よせて可ㇾ攻也、萬ゝ万代ゝ此占違事有べからず、其方に曰、雙調の時は、東の方より敵の城可ㇾ破云々、黃鐘調の時は、南の方より敵城可ㇾ破云々、平調の時は、西より敵城可ㇾ破云々、一越調の時は、巳午の方の間、丑未の方の間より敵城可ㇾ破云々、可ㇾ秘々々、

一馬をあたらしき馬といふは惡し、珍き馬と云也、但常の事歟

一軍陣の馬牽出して、馬の前足の左の足のすゝみたる時、のり出すべき也、

一軍陣の祝は、具足しても小具足しても也、くはへことその中のをくはへ候事也、

〔北條五代記〕一犬也入道弓馬に達者の事

秀康卿聞召、犬也も若き比はさぞ馬たんれんしつらむ、むかしの面影をそとまなんで見せよかしとの仰なり、〇中略犬也鴾毛の駒に黑糸威の鎧著、星甲の上に頭巾あて、白袈裟をかけ、いぶせき山臥のすがたに出立、矢をひ弓持て郎等一人めしぐし鑓を提させ、馬に打乘て御前近くまづまづとあゆませ、軍陣に候下馬御免と申もあへず、馬場を二三返はせめぐり、〇下略

〔奧州後三年記〕中家ひらが乳母千任といふもの、やぐらの上に立て、聲をはなちて、將軍〇源義家にいふやう、なんぢが父賴義、貞任家任をうちえずして、名簿をさゝげて、故淸將軍をかたらひたてまつり、ひとへにそのちからにて、たま〳〵貞任らをうちえたり、恩をになひ德をいたゞきて、いづ

れの世にかむくひたてまつるべき、志かるを汝すでに相傳の家人として、かたじけなくも重恩の君をせめたてまつる、不忠不義のつみ、さだめて天道のせめをかうぶらんかといふ、おほくのつはものをの〱くちさきをときて、こたへんとするを、將軍制してものいはせず、○下略

〔源平盛衰記二十〕石橋合戰事

大場進出テ、弓杖ヲ突鐙蹈張立上テ、抑平家ハ桓武帝ノ御苗裔葛原親王御後胤トシテ、代々蒙將軍宣、遂ニ朝家ノ御守タリ、天下ノ逆亂ヲ和ゲ、海內ノ賊徒ヲ隨ヘ、武勇ノ名勝他家、弓矢ノ譽傳當家、就中太政入道殿、保元平治ノ凶賊ヲ鎭治シヨリ以來、公家ノ重臣トシテ、其身太政大臣ニ昇、子孫兼官兼職ニ御座ス、一天重之、萬民誰カ輕シメン、依之南海西海ノ鱗ニ至マデ、隨其威應、東國北國ノ民何ゾ可奉忽諸、爰ニ今タヤスクモ奉傾平家御代トノ合戰ノ企誰人ゾ、恐クハ蟷螂ノ手ヲ奉テ向龍車喩カハ、名乘名乘トゾ攻メタリケル、北條四郎歩セ出シテ、汝不知哉、我君ハ是淸和天皇第六皇子貞純親王ノ御子、六孫王ヨリ七代ノ後胤、八幡殿ノ四代ノ御孫、前右兵衞權佐殿ゾカシ、傍若無人ノ景親ガ申狀頗尾籠也、平家ハ惡行身ニ餘テ朝威ヲ蔑ニス、依之早彼一門ヲ追討シテ、可奉休逆鱗由、太上法皇ノ院宣ヲ被下タリ、錦ノ袋ニ納テ御旗ノ頭ニ挾ミ給ヘリ、且ハ可奉拜、サレバ佐殿コソ日本ノ大將軍ヨ、平家コソ今ハ朝家ノ賊徒ヨ、綸言之上ハ誅戮不可廻時剋處ニ彼家人ト號スル輩依有之、先其黨類ヲ追討シテ後、花洛ニ上リ逆臣ヲ可被誅也、景親慥ニ承レ、故八幡殿奧州ノ貞任宗任ヲ被攻ヨリ以來、東國之輩代々相續テ、誰人カ君ノ御家人ニアラザル、隨テ景親モ父祖相傳ノ者也、馬ニ乘ナガラ子細ヲ申條奇怪也、後勘兼テ可不顧歟、下テ可申也、御伴ニハ時政父子一人モ不漏、佐々木太郎定綱兄弟四人、加藤太光胤兄弟ト、澤六郎、近藤七、新田七郎父子、城平太、小中太、公藤介父子、土肥次郎父子、新開荒太郎、土屋三郎、岡崎四郎ト、其子與一、懷島、豐田次郎等侍ラフ也、其外ノ人々國々ヨリ任院宣御教書ニ付テ、夜ヲ日ニ繼テ馳參、王事無脆、八虐

ノ凶徒ニ諂テ後悔スナ、速ニ甲ヲ脱、手ヲ合テ可レ參也トイヘバ、大場重テ申ケルハ、昔八幡殿後三年ノ軍ノ御伴シテ、出羽國仙北ノ金澤城被レ責時、十六歳ニテ先陣ヲ蒐ケ、右ノ目ヲ射サセテ答ノ矢ヲ射、其敵ヲ討捕テ、甲ヲ其場ニ施シ、名ヲ後代ニ留シ、鎌倉權五郎景政ガ末葉大場三郎景親大將軍トシテ、兄弟親類已下三千餘騎也、是程ノ大事ヲ思立給ナガラ、勢ノカサコソ少ナケレ、實ニ誰カハ隨ヒ奉ベキ、只心ニクキ體ニテ落給ヘカシ、命バカリ生ケ申サント云、北條又申ケルハ、景親ハ先祖ハ具ニ知タリケリ、イカニロハロ心ハ心ト、三代相傳ノ君ニ敵シ申ゾ、忠臣ハ二君ニ不レ仕ト云事アリ、其上奉レ向二十善帝王一、院宣ヲ係レ蹄、弓矢ヲ放タン事、冥加ノ程窘(ヲボツカナ)シ、背二勅命一者ハ蹐ヲ歩ガ如ト云ニヤ、旁以無益ノ事也、唯急參レト云、大場重テ申、先祖ハ誠ニ主君、但昔ハ昔今ハ今、恩コソ主ヨ、源氏ハ朝敵ト成給テ後ハ、我身一人ノ置所ナシ、家人ノ恩マデハ沙汰ノ外也、景親ハ平家ノ御恩ヲ蒙事如二海山一、高深、不レ知レ恩ハ木石也、何ゾ世ニナキ主ヲ顧テ、今ノ可レ忘レ恩、勇士ハ如レ諂ト云事アリ、只今追落タテマツルベキ也トテ、三千餘騎我モ／＼ト勇ケリ、北條又申ケルハ、欲ハ身ヲ失トイヘリ、マサナキ大場ガ詞哉、一旦ノ恩ニ耽テ、重代ノ主ヲ捨ントヤ、弓矢取身ハ言ハ一モ不レ輙、生テモ死テモ名コソ惜ケレ、景親ヨ、權五郎景政ガ末葉ト名乘ナガラ、先祖ノ首ニ血ヲアヤフ、欲心ノ程コソ不當ナレト云ケレバ、敵モ味方モ道理ナレバ、一度ニドツトゾ笑ケル、

古事類苑

兵事部十四

攻守

古事類苑

兵事部十四

攻守

攻守ハ、セムルトマモルトナリ、其汎ク攻ムルヲ言フモノニハ、總攻、力攻、蒸攻等ノ稱アリ、其術ヲ以テ名クルニハ、水攻、火攻アリ、糧道ヲ斷チ、水道ヲ斷ツガ如キ、皆其術ヲ以テスルモノナリ、井樓ヲ以テ城中ヲ窺ヒ、龜甲ヲ用キテ壘壁ヲ崩壞シ、金堀ヲシテ城墻ノ底ヲ穿タシムルガ如キハ、最モ晩出トス、守ルニモ亦術多シ、菱ヲ散シ、亂杭、逆茂木ヲ設ケ、橋板ヲ撤スルガ如キアリ、而シテ其間ニハ、籠城ノ久シキ或ハ數年ニ涉ルモノアリ、

〔類聚名義抄 九支〕攻 音公 セム ウツ セムル

〔伊呂波字類抄 世辭字〕攻 セム 攻擊也 攻敵也

〔書言字考節用集 九言辭〕征伐(セイバツ) 孟子征者上伐下也 征討(セイタウ) 略○中 攻擊(セメウツ) 攻戰(セメタヽカフ) 攻伏(セメフス) 攻落(セメヲトス)

〔類聚名義抄 六宀〕守 音首 マモル

〔伊呂波字類抄 末辭字〕護 マホル 守 主守也 衞 防 援 已上同

〔兵要錄 十九攻守〕兵法曰、攻有餘也、守不足也、蓋按所謂有餘不足有以力言者、衆寡强弱是也、有以虛實言者、合離練否智愚是也、唯以力論則不足不可以敵於有餘、以虛實論則蔑由當焉奈何者如敵衆而且强、我將士之親附、節制、智計、足以破之矣、若夫以愚勝智、以離叛勝親附、以白徒勝練卒、我未知其術也、故攻者不恃衆强、只要以實擊虛、守者不憂寡弱、只要親操以轉弱、神算以制强、凡攻守之變在將不知

地形

彼我之勢、可攻而守者不知彼、可守而攻者不知己、彼不可以攻、己不可以往、而攻者不知彼我、所以破軍亡國也、攻守得時、眞國之輔也、

〔兵法雄鑑巻二十〕地形之變十四ヶ條之事

一、敵味方共に往來自由にして、四方にさはる所なきを通と云、通形者、先居高陽、利糧道、以戰則利云々、　二、敵味方共に出る事はやすけれ共、歸事の成がたき所あり、是を掛と云、掛形者敵無備、出而勝之、敵若有備、出而不勝、難以返、不利云々、　三、我出ても利あらず、敵出ても利あらざる地形あり、如此なる地形を支と云、支形者敵雖利我、我無出也、引而去之、令敵半出而擊之利云々、　四、兩山の間、谷の中の道、馬も人も多立ならむで押入事かなひがたき地形あり、是を隘と云、隘形者、我先居之、必盈之以待敵、若敵先居之、盈而勿從、不盈而從之云々、　五、其山けはしくして、また谷深堅固の地有、如此なるを險と云、險形者我先居之、必居高陽以待敵、若敵先居之、引而去之勿從云々、　六、敵國深働入、味方の國地を離事甚遠し、如此成を遠地と名付て、進て不可戰の地形と云也、遠形者勢均、難以挑戰、戰而不利云々、　七、我國地か、或は敵國の境に入事未深、後に能城地など在て引取にやすかるべき地形有、是を散地、或は輕地など、名付て、諸卒志を一つにしてた、かわずんば不可利の地と云ふ也、散地者、謂自戰其地、人心易散、謂之散地云々、輕地者人心輕返之地也、入敵人之境未深、而去吾城郭未遠、士卒心易於思返、故謂之輕地云々、　八、我此地をとれば味方に得利、敵此地をとれば敵が得利之地形有、是を爭地と云、爭地則無攻云々、　九、地形平にしてかくれたる所なく、掛引自由なる地形有、是を交地と云、交地則無絶、或吾將謹而其守云々、　十、四方よりの通路多して、敵味方其備を出しやすき地形有、是を衢地と云、四通八達之所也、有援則成、無援則敗、必其當合其交與之國爲應援云々、　十一、敵國へ入事甚深して、味方の國地遠、十死一生の地を名付て重地と云也、重地則掠云々、　十二、けはしき山路、或は澤、或は深田、あし入など多して、足場のあ

以軍討衆

しき地形有、是を名付て圮地と云、圮地無舍云々、　十三、敵地へ働入道切所にして、出入不自由成地形有、是を名付て圍地と云、圍地則謀云々、　十四、敵國深働入、味方の國をはなれ、敵に前後をかこまれ糧道をたゝれ、敵にわ得利、味方にわ失其利、すゝむ事も難成、又引べきにも便なき地形を死地と云也、死地吾將示之以不活、又云、疾戰則可以存、不疾戰則必亡云々、

〔孫子地形〕孫子曰、地形有通者、有挂者、(通典作掛)有支者、有隘者、有險者、有遠者、○中略凡此六者地之道也、將之至任不可不察也、○下略

〔孫子九地〕孫子曰、用兵之法、有散地、有輕地、有爭地、有交地、有衢地、有重地、有圮地、有圍地、有死地、○下略

〔兵法雄鑑二十一 戰地〕敵地へ働入にわ、山寄より取よすべし、其法七ヶ條之事、

一、小勢を以大軍にむかふに、其手だて多し、　二、負軍の時、引取にも其便あり、　三、敵地戰なれ共、險難を越てわ、夜軍不叶事、　四、俄に城地取立るにも其法多し、　五、合戰の吉凶をみかたへ告、我國の事を聞、又加勢を可呼にも其自由よし、　六、陣具を取にも竹木多して、味方には其利を得、敵方には其利を失事、　七、山よせより取よすれば、敵國の地下人大きにさだつ事、如此の法多して、その損なき故に敵國へ取よするにわ、平陸の戰をば好事なく、其國の山寄より先取しくべしと云也、故兵法云、山林所以少擊衆云々、

山中より押入作法三ヶ條之事

一、甲州女坂、かしは坂抔のやうなる難所は、たとへば日本國にも一ッ二ッの難所なれば、ヶ樣成惡所をば不可越行事、　二、東美濃などのごとく成山中をば、忍を用て先を見切道をあけ、山の頂に備可立事、　三、十里の道をば十日にもおせ、一備づゝ先へ進て山の頂々に備をたて、本道をば小荷駄、或は雜人を通じて、能手配して少づゝはみ可入事、

以衆討寡

敵地始て見る山中にて道をあて、人數を通し、先にてつかへ、つかへまじきを知事、

一、敵地初て見る山中なり共、木性の山を東より上る時は、上る所よりむかふの方は平成べしと知て、跡を當て人數をとおすべし、先にてつかゆる事あるべからず、又西より上る時は、此方よりむかふの方は險阻なるべしと可知也、餘は皆是にて知べし、　山之性、向東爲金性、向南爲水性、向西爲木性、向北爲火性、向丑未辰戌土性、其前平後險也云々、

〔兵法雄鑑三十一衆寡〕大軍をもつて少勢を擊謀功七ヶ條事

一、大軍をもつて少勢を擊には、山林險阻の地形をいとひ平陸のきらきら成地形を可用事、兵法曰、凡戰若我衆敵寡、不可戰於險阻之間、須要平易寬廣之地、聞鼓而進、聞金而止、無有不勝、法曰、用衆進止、　二、大軍をもつて他國へ働入、其國地、切所けんなんの地にて堅固の地形ならば、先付城を付向城をとつて人數を分篇卒爾に戰事なかれ、　武侯問曰、若敵衆我寡、爲之奈何、起對曰避之於易、邀之於阨、故曰、以一擊十莫善於阨、以十擊百莫善於險、以千擊萬莫善於阻、今有少卒卒起擊金鳴鼓、於阨路、雖有大衆莫不驚動、故曰用衆者務平、用少者務隘、　三、味方大軍を以て少勢の國へ責入時は、少勢成方は籠城なるべし、味方の人數大軍成をたのみて卒爾にとり卷責る事なかれ、敵をひき出して合戰すべき樣計策肝要也、　兵法曰、夫守者不失其險者也、守法、城一丈、十人守之、工食不與焉、出者不守、守者不出、一而當十、十當百、百當千、千當萬、故爲城郭者非特費於民聚土壤也、

兵法曰、上兵伐謀、其次伐交、其次伐兵、其下攻城、攻城之法爲不得已、修櫓轒轀具器械、三月而後成、距堙又三月而後已、將不勝其忿而蟻附之、殺士卒三分之一而城不拔者、此攻之災也、故善用兵者屈人之兵而非戰也、拔人之城而非攻也、毀人之國而非久也、必以全爭於天下、故兵不頓而利可全、此謀攻之法也、　四、敵方に取出、あるひわ脇城おほくあらば、大軍の方大に勝、吉事の本也、口傳、　五、敵居城ばかりにて一國一城ならば、付城を付陣城をかまへ向城を築、けがなき樣に取まき、克知略

をもつて計策して敵を無事にすべし、無事にすれば大軍の方利運に成もの也、利運に口傳ふかし、　六、山川をまぼりてさわし備遠近之事、　七、勝をこなたにおく事、

速攻

〔永享記〕結城落城の事

長沼が申けるは、此城殊に寄手大勢にて候得ば、致總攻候もの外城易攻候べし、

〔足利季世記久米田軍記六〕教興寺合戰之事

松永彈正久秀ハ、大將長慶ノ前ニ來リテ申シケルハ、實休打死アリテ、高屋城岸和田城モ落城シテ、此城〇飯盛ヲバ八重九重取卷、總責ニスベシト申候、急ギ後詰ノ勢ヲ催シ、敵ヲ追拂給ヘト申シケレドモ、〇下略

〔淺井三代記十五〕姉川合戰の事

磯野勢きをひ二番にひかへたる池田が勢も追立る、淺井が勢ども是を見て總懸りにかゝるべしと、淺井玄蕃兄弟四人、阿閉、新庄、月ヶ瀬、上坂、西野、東野を宗徒の初として、七千餘騎一足もひかじと突懸る程に、信長の備給ふ十三段の勢を十一段迄切崩す、

力攻

〔太平記六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

爰ニ播磨國ノ住人吉河八郎ト云者、大將ノ前ニ來テ申ケルハ、此城ノ爲體、力責ニシ候ハヾ、無左右不可落候、

〔奥羽永慶軍記二十三〕九戸合戰事

淺野彈正少弼是ヲ見テ、氏郷ノ陣ニ使者ヲ以、此城〇九戸ヲ力攻ニシ給ヒテハ、味方大勢討ルヽノミニシテ、利アルベシトモ覺エズ候間、急ニ攻ラレ候事曾テ停止セラレ、然ルベク候トイヒ送リケレバ、氏郷尤ナリトテ諸軍ニ相フレ、〇下略

一時攻

〔關八州古戰錄七〕輝虎總州臼井城攻附松田鬼孫太郎事

輝虎サレバコソ時昔モ懸時待得テ打出タルラメ、ヨシ〳〵斯ル平城空城ニ柵根タル計ナレバ、迯落サンニ手間入ベカラズ、一時責メニ攻落セト、先隊エ下知ヲ加ヘラレケレバ、〇下略

〔安西軍策四〕雲伯近國侍馬尼子事附雲石兵多歸國事

立華ニハ雲伯皆尼子ニ與スト聞給テ、多ノ兵ヲ上セ、立華ノ勢モ彌減ジケレバ、一刻モ早ク當城ヲ攻落スベシトテ、一時攻ニ攻ントスル勢ヲ見テ、城兵防カネケル處ニ、城ヲ明渡サバ一命ヲ可助ト云送給フ、

〔妙善寺合戰記〕直家〇宇喜多立上り甲おつとり、忍の緒をしむるやしめずに馬引寄打乘、かゝれ者共、妙善寺の城を一時にもみ落せ、さもなくば軍は大事ぞ、生る者は稀ならん、妙善寺を落しなば、備中勢何千萬騎たり共、かばねは備前にさらさせんとよばはつて、〇下略

が攻

〔甲陽軍鑑六品第十四〕馬場美濃〇信房申は、さらば長篠の城をがせめにあそばし候はゞ、味方手負死人共に千とつもりて候、子細は、此長篠の城におほうして、鐵砲五百丁あらん、然ば一時づめには始の鐵砲にて五百討死、二番目にてはあはてうちなるべし、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕天正元年三月十五日、〇中略吉田の城を無理せめに申付、旗本はくみ共に、吉田の在郷山に備をたて、馬場美濃守、內藤修理、小山田兵衞尉、三頭を旗本の先に相定、山縣三郎兵衞を警固して、上野、信濃、駿河にて、五十騎百騎の備共に、山縣くみ共に合八千餘をもつて、吉田をがせめにと被仰付、〇下略

逆寄

〔太平記六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事

去程ニ河內國ノ住人和田孫三郎此由ヲ聞テ、楠ガ前ニ來テ云ケルハ、先日ノ合戰ニ負腹ヲ立テ、京ヨリ宇都宮〇公綱ヲ向候ナル、今夜既ニ柱松ニ著テ候カ、〇中略宇都宮縱ヒ武勇ノ達人ナリトモ、何程ノ事カ候ベキ、今夜逆寄ニシテ、打散シテ捨候バヤト云ケルヲ、〇下略

〔江濃記〕尼子合戰之事

天文九年九月下旬、雲州晴久〇尼子衆安藝國吉田郡へ七万餘人にて發向して處々放火しければ、元就方より郡山太山口七口の道にてせり合有、寄手は不案内者にて、毎度毛利衆勝軍なり、毛利元就足にきほひ、自三千餘騎にて、尼子が本陣青山へ逆打して、二の木戸まで責入けるを、尼子方にて諏訪刑部大夫が子息三澤と云もの切て出、毛利衆を悉く押拂ふ、

〔關八州古戰錄十五〕正木彈正亮時茂攻萬喜城事

大膳亮〇正木時茂、中略、明ル正月〇天正十八年十九日、僅ニ三百餘人ヲ率ヒ、夜駈ニスベシト打出タリ、土岐モサル剛強ナレバ、舊冬何ノ譯合モナクシテ、正木ガ無下ニ退陣シタルヲ、不審ニ思ケル故、那サマ替ル術モコソアレトテ、隨分ノ透ヒ三四人、根小屋ノ城邑ニ入置テ窺セシ程ニ、此企ヲ聞附テ、馳來テ注進シタリケレバ、土岐サレバコソト打頷キ、サラバ此方ヨリ逆寄シテ其不意ヲ撃ベシトテ、半途ノ節所々々出張シテ、弓鐵砲立雙ベテ今ヤ遲シト待居タリ、

〔海國兵談十一〕城攻並攻具

城を攻ル事ハ止事を不得して攻ル也、其謂レは元來城ト云ものは、地形に便り堀塀を設ケ、遠キ敵をば弓鐵砲等の飛道具にて打拂ヒ、近キ敵をば鎗長刀等の短兵にて切伏ント、堅陣ニ嬉たる所江外より仕懸て其城を乘取ントする故、人數も多ク損傷シ、又國内の人民も苦ム事也、此故に城攻をば爲ざる覺悟なれども、敵要害を固メ根本を堅クして、暴亂を逞するをば捨置事も仕難キものなれば、止事を不得して攻ル也、扨攻ル時に至ては、その術に巧拙あり、能存込ざる時は、人數を損するのみならず、却て害を引出ス事あり、將たる人詳ニ會得あるべし、

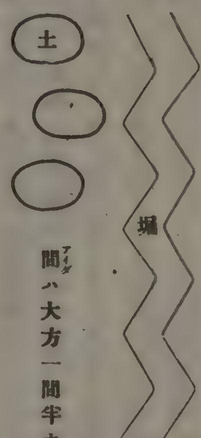
〔軍法極秘傳書五城責〕城責始の事

先よき地形を見立、むかい城をとり、味かたの備かたくし、そろ〳〵とあひしらひ、自然と押よせ、

鐵炮軍にて、敵の手立を見るものなり、是非をいはずとりかゝる時は、味方利をうしなひ、人數そこぬる事あるべし、

〔當流軍法功者書上〕仕寄堀ホリ樣附土俵付樣之事

仕寄ハガンギニ付ル



土俵ハ違チガヘ付ル

間アイダハ大方一間半ナルベシ

〔軍法極秘傳書五城責〕地道の事

城中つよき矢倉ありて、其手より責がたき折ふしは、町づもりをし、あなをほり入、矢倉じたまでほり、今すこしと思ふ時、分別あり、たれやの人も知ごとく、城中のふせがめにほり入、音ひゞくにより、城中も心得をするものなり、此時にをひては、その矢倉先に仕寄を付、大筒、小筒、石火矢、さまざまの責をせば、城中是をふせぐとて、物さはがしき事なれば、かめのひゞきもまぎるゝ也、又いそがはしき矢倉なれば、かめに氣も付まじき、其時あなをとくとほりとゞけ、桶にてもかめにても、藥をじやうぶにこみいれ、長き竹に火繩をはさみ、自然と藥にさし火つけば、此藥の勢にて、矢倉は落るものなり、ほりいる穴のはね土を土俵にして、土山せいろうをも築あげ、向城むかひじろにもするなり、右此土は兩用なり、

〔軍法極秘傳書六籠城〕敵穴をほり入を知事

敵かねほりをいれて、穴をほりいる事あり、左樣のため、こゝろもとなき所には、大きなる瓶をうつむけふせてをけば、かならず瓶にひゞきあるものなり、

〔軍法極秘傳書 六 籠城〕敵仕寄の事

敵より仕寄つけんとおもふ所を、とくと此方より見をよび、晝より鐵炮石火矢をしかけ置、夜に入うたする事專なり、

〔雲流軍法功者書 下〕敵我城ニ寄タル時之事 付 城責ル心持之事

敵我城ヘ寄タル時ハ、アイシライイテ日ヲクラスベシ、日暮ニ引トセバ其時討トルベシ、是ニテ敵ノ城セムル事可レ有二心得一、又云、小城ヲバ二方ヨリ不レ可レ責、味方討アル物ナリ、

〔兵法一家言 九 攻城〕本邦ニテ近古、武將中、城攻ノ上手ナルハ毛利元就主ニ如者ナシ、然レドモ彼主山陽山陰諸州ニ於テ數多、城ヲ攻取タルハ大抵臨時ノ權謀ニシテ、以後城攻ノ規則トスベキノ定法有ルコト無シ、天正年中豐臣太閤東國征伐ノ時ニ、相州小田原城ヲ攻ラレシニ、三箇月ヲ經レドモ城中弱リタル氣色モ見得ザリケレバ、小早川隆景ヲ召シテ、汝ガ父元就ハ中國ニ於テ數多、城ヲ攻取レリ、城ヲ攻ルニ良法アリヤト問給フ、隆景答ニ、要害堅固ニシテ軍兵數多、兵粮澤山ナル城ハ、城内仲間割ヲ生ズルノ外ニ絶テ良法ノ無キヲ奏ス、太閤點頭給ヒ、乃チ諸將ニ下知シ、緣由ヲ探索シ、シメテ頻ニ箭文ヲ射込シメ、遂ニ成田下總守等ガ仲間割ヲ生ジテ、小田原ノ落城ニ及ベリ、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十一月四日壬子、爲レ攻二撃秀義一、〇佐竹冠者被レ遣二軍兵一、所謂下河邊庄司行平、同四郎政義、土肥次郎實平、和田太郎義盛、土屋三郎宗遠、佐々木太郎定綱、同三郎盛綱、熊谷次郎直實、平山武者所季重以下輩也、相率數千强兵、競二望佐竹冠者於金砂一、築二城壁一固二要害一、兼以備二防戰之儀一、敢不レ搖レ心、動二干戈一、發二矢石一、彼城郭者構二高山頂一也、御方軍兵者、進二於麓溪谷一、故兩方在所、已如二天地一、然間自レ城飛來矢多以中二御方壯士一、自二御方一所レ射之矢者、太難レ覃二于山岳之上一、又巖石塞レ路、人馬共失二行歩一、因レ茲軍士徒費二心府一、迷二兵法一、雖レ然不レ能二退去一、憖以挾二箭相窺之間一、日既入レ西、月又出レ東云云、

〔太平記 七〕吉野城軍事

吉野ノ執行岩菊丸、己ガ手ノ者ヲ呼寄テ申ケルハ、東條ノ大將金澤右馬助殿ハ、既ニ赤坂ノ城ヲ責落シテ、金剛山ヘ被向タリト聞ユ、當山ノ事我等案内者タルニ依テ、一方ヲ承テ向ヒタル甲斐モナク、責落サデ數日ヲ送ル事コソ遺恨ナレ、倩事ノ樣ヲ案ズルニ、此城ヲ大手ヨリ責バ人ノミ被討テ、落ス事有難シ、推量スルニ、城ノ後ノ山、金峯山ニハ嶮ヲ憑デ、敵サマデ勢ヲ置タル事アラジト覺ルゾ、物馴タランズル足輕ノ兵百五十人スグツテ歩立ニナシ、夜ニ紛レテ金峯山ヨリ忍入、愛染寶塔ノ上ニテ夜ノホノ〴〵ト明ハテン時、時ノ聲ヲ揚ヨ、城ノ兵鬨音ニ驚テ、度ヲ失ハン時、大手搦手三方ヨリ攻上テ、城ヲ追落シ、宮〇護良親王ヲ生捕奉ルベシトゾ下知シケル、サラバトテ案内知タル兵百五十人ヲスグツテ、其日ノ暮程ヨリ、金峯山ヘ廻テ、岩ヲ傳ヒ谷ヲ上ルニ、案ノ如ク山ノ嶮キヲ憑ケルニヤ、唯コヽカシコノ梢ニ、旗許ヲ結付置テ、可防兵一人モナシ、百餘人ノ兵共、思ノ儘ニ忍入テ、木ノ下岩ノ陰ニ、弓箭ヲ臥テ冑ヲ枕ニシテ、夜ノ明ルヲゾ待タリケル、アイ圖ノ比ニモ成ニケレバ、大手五萬餘騎三方ヨリ押寄テ責上ル、吉野ノ大衆五百餘人、責口ニオリ合テ防戰フ、寄手モ城ノ内モ、互ニ命ヲ不惜追上セ追下シ、火ヲ散シテゾ戰タル、斯ル處ニ金峯山ヨリ廻リタル搦手ノ兵百五十人、愛染寶塔ヨリヲリ下テ、在々所々ニ火ヲ懸テ、時ノ聲ヲゾ揚タリケル、吉野ノ大衆前後ノ敵ヲ防ギ兼テ、或ハ自腹ヲ掻切テ、猛火ノ中ヘ走入テ死ルモ有、或ハ向フ敵ニ引組デ、指チガヘテ共ニ死ルモアリ、思々ニ討死ヲシケル程ニ、大手ノ堀一重ハ死人ニ埋リテ平地ニナル、

〔梅松論上〕五月〇元弘三年七日、方々の寄手洛中へ亂入ければ、六波羅勢は、城郭に引籠けり、其中に家をおもひ、名をおしむ勇者共は、かけ出て戰し程に、七日は暮しけり、去ほとに御方には、此大勢にて時剋を移さず、城郭を圍み、悉く討取べきよし、諸人諫申ける處に、細川阿波守申されけるは、之かのごとくならんには、敵思ひ切て御方多く損ずべし、一方を明て沒落せしめば、敗軍になりて

は御退治たやすかるべきよし申ける間、尤可然とて一方を明られけり、

〔太平記二十〕宸筆勅書被下於義貞事

既ニ來廿一日ニハ、黑丸ノ城ヲ攻ラルベシトテ、堀溝ヲウメン爲ニ、ウメ草三萬餘荷ヲ、國中ノ人夫ニ持寄サセ、持楯三千餘帖ヲハギ立テ、樣々ノ責支度ヲセラレケル處ニ、〇下略

〔太平記二十二〕大館左馬助討死事附篠塚勇力事

斯リシカバ、大將細川賴春ハ、〇中略聽テ大館左馬助ガ籠タル、世田ノ城ヘ寄ヨトテ、八月〇曆應三年二十四日ノ早旦ニ、世田ノ後ロナル山ヘ打上テ、城ヲ遙ニ直下、一萬餘騎ヲ七手ニ分テ、城ノ四邊ニ打寄リ、先己ガ陣々ヲゾ構ヘタル、對陣已ニ取卷セケレバ、四方ヨリ攻寄セテ、持楯ヲカヅキ寄セ、亂杭逆木ヲ引ノケテ、夜晝三十日迄ゾ責タリケル、

〔鎌倉大草紙〕十一月〇永德二年七日、先手の人々是にもひるまず、堀をうめさせんと埋草を寄て、責といへども、城防戰强手負死人數しらず、

〔甲陽軍鑑品第三十二十下〕天文廿一年壬子に、信州かりやはらの城を、信玄公せめ取給ふ時、甘利左衞門尉より口にて、竹をたばね持てたて置、城ぎはへより跡をくづしては、くりよりに仕り、甘利家中、よきはたらき、諸手にすぐれ候て、此城をせめおとす事、悉皆米倉丹後武略の故如此、〇下略

〔相州兵亂記四〕松山合戰之事

武州岩付ノ住人太田三樂齋入道資正、輝虎ノ下知ニ依テ、小田原方ノ城松山ヲ責取テ、上杉憲勝ノ籠置テ、若松山ノ城ヲ小田原ヨリ責ラレバ、安房ノ里見ト輝虎ト一味シテ、後詰ヲスベキ由、約諾スト聞エケレバ、小田原ヨリ馬ヲ被出、松山ヲ責給フ、比ハ永祿四年極月十一日、上杉景勝大手ヘ打テ出、ヲメキサケンデ責戰、トキノコヱ矢サケビノ音天地ヲ動シヲビタヾシ、此城ト申ハ上田左衞門尉トリ立シヨリ、難波田彈正父子久ク住シテ、要害コトニ嶮難也、兵糧水モ卓山ニテ籠

ル兵ニハ、憲政ノ末子上杉新藏人憲勝大將ニテ上州名譽ノ勢兵籠リケレバ、毎度寄手射シラマサル、サレドモ小田原力ニモ一人當千ノ兵、吾ヲトラジト責シカバ、總廻輪責破ル、北條左衛門大夫外カハ悉火ヲ放チ燒拂フ、然ドモ城中少モヒルマズ、城ヲカタクゾ持ケル、去程ニ武田ノ信玄ハ氏政ノシウトナレバ、御加勢トシテ父子軍兵ヲ拂出陣アル、小田原勢是ニ力ヲ得、只一モミニモミ落セトテ、追入々々戰シカドモ終ニ不落、サラバ手ダテヲ改テ責ベシト、金鑿ヲ集メ城中ヘホリ入ル程、城ノ兵共、鐵炮ヲソロヘテカネホリドモヲ打殺ス、上ヨリミヲロシ打ケルホドニ金ホリ多死ニケレバ、ヨセ手工夫ヲ廻ラシ竹ヲ結集メ、ソレヲタテニシテタケタバト名ヅケ、掘ケルホドニヤグラ二ツ堀クヅス、山城ナレバ、方々ヨリ掘入ホドニ、城中迷惑シテ防ガタシト聞ケレバ、三樂越後里見ヘ此由ヲフレヲクル、此人々後詰ノ爲ニ出勢トキコエケレバ、小田原勢後詰ノナキマヘニ責落セトテ、掘入々々責ケル程ニ、城中難儀ニ見エケル〇中略憲勝城ヲ渡シケル、

〔關八州古戰錄五〕甲南兩家武州松山城攻事

南方〇北條勢ノ謀議トシテ、諸方ヨリ金掘共ヲ召寄セ、山ノ崖ヨリ掘入テ漸ク桁二ツ掘頽シケルガ、城兵〇松山城兼テ用水ノ爲トテ、地中ニ渠ヲ通ジ、大ナル瓶ヲ伏セ置シニ、是ヲ切崩シ土ヲ穿ケル程ニ、金掘共悉ク壓ニ打レ、水ニ溺レテ半ハ死失セ半ハ御々逃出タリ、

〔雲州軍話首〕雲州白鹿城沒落之事附穴仕寄十番鎗之事

于玆白鹿蘭洞尾崎ヲバ、去ル六月ヨリ石州銀山ノ金掘ヲ呼寄、上下左右二間ノ穴仕寄ヲ掘ケルニ、城内ヨリモ此術ヲ不知、突出ル路ノナケレバ、是モ内々横穴掘テ近々ス、時コソアレ今日互掘貫テ、金掘雙方狼、礫二十ヲ拋喚キ叫、其聲穴中埋リ、鐘音颪響ガ如シ、于玆安藝國住人福間彦右衛門尉元明、數渡大功ヲ勵シ、三軍ヲ抽メル勇氣ナレバ、人越サレジト穴中蒐入ル、尼子方ニモ山陰道八箇國其名ヲ得タル兵、身日大藏助久盛是モ樊噲ヲモ呑ム程成、形狹ニテ穴中ニテ行當ル、持

タル明松抛テ名乘レト個所コソ多キニ古今珍キ鎗場ナレバ、一鎗仕ラント互名字ヲ名乘テ暫戰ヒシカバ、稲間勝利ヲ得、身日ガ首取テ出ケル、

〔四國軍記〕六元親豫州發向事

元親〇長曾我部、中略、河原淵源八兵衛ガ楯籠タル河篭ノ城ヘト押ヨセタリ、〇中略兎角シテ日ヲ經處ニ、大森西川竹森薄木四ケ所ノ城ニ籠ヲキタリシ兵共、城ヲ捨テ駈來リ、城中又大勢ニ成シカバ、此ニ氣ヲ得テ防ギ戰フトイヘドモ、寄手ハ猶事トモセズ、熊手薙鎌ヲ櫓掻楯ニ引カケ〳〵切レドモ射レドモ不用、乘越々々攻タリケル、元ヨリ先度ノ戰ニ臆病神付タル城兵、騒立テ一人二人落失ツヽ、千騎ニ餘ル兵、今ハワヅカ二百騎ニハ足ザリケリ、

〔別所長治記〕野口合戰

元來此城〇野口城播州一ノ名城ニテ、四方沼田ニテ、駈引自由難成、秀吉ノ下知ニテ近邊ノ草木青麥等苅取、沼モ堀モ平地ニ埋メテ、懸入々々三日ノ間無透間攻サセ給ヘ共、城兵ヨハル氣色モナク、味方既ニ戰ヒ勞レタルヲ秀吉見給ヒ、大音聲ニ中國ノ武士ト始テノ合戰ニ、弱氣ヲミセソ、美濃尾張ノ名ヲリスナ、城乘ノ大事ト云ハ、少モ敵ニ息ツガセヌ物ゾ、透間ナク乘入レ、我ヲ越セト、馬廻三百騎抜連テ駈入給ヘバ、大將ニコサレジト、軍ヲ亂シテ攻ケル程ニ、外向ノ塀四五十間引敗、既ニ乘取給フ處ニ、〇下略

〔太閤記〕五北伊勢表進發附柳瀨台戰之事

佐治新助がこもりし龜山之城をば、秀吉之先勢として取卷せ給ふ、總かまへも柵逆茂木を引、用心きびしかりしと云共、閏正月〇天正十一年廿六日之朝、押詰柵を引破、塀を乘、山下を燒拂ひ、日々夜々に仕寄たゆみもなければ、日を經て今は城中の旗の招き味方のまねきと結ひ違ふ計にぞ見えにける、夜に入ば鐵砲をつるべ立、鯨波を上、攻鼓をうち隙透間もなく攻、金掘を入、坤之矢ぐらを

ほり崩し、塀も倒れしかば、其々込入んとこころを傾け進め共、城中一命をすて防ぎ戰ふに依て、其夜は空しく明にけり、

〔柴田退治記〕秀吉自身寄馬見敵之働、以短兵引拂亂杭逆茂木打破山下、卽其地結廻柵重竹手把以材木積之、止敵之通路、時々刻々成仕寄、或以鐵炮火矢投松明燒破屋宅、或以鋤鍬玄翁鶴觜突崩磊築地、又雖上發櫓樓門寄龜甲入金掘數百人掘之、則塞如大木之倒風、籠城士卒悲嘆事頗似轍跡之魚吻沫泥之水、

〔太閤記 七〕秀吉四國退治之事

同國阿波○木津之城とて、地之利全き名城有、桑名左衞門督と云しもの、累代の居城なり、依之秀長、秀次の勢を合て取卷、持楯、龜甲、竹多把を付攻よせ、塀一重許に攻つめければ、雨風はげしき夜を便り忍び出、這々命計助り退にけり、

〔伊達日記 下〕秀吉公キコシメサレ、都ヨリ引除候人數浮田中納言殿、加藤主計、○中略岐阜ノ少將殿衆ヲ以、赤國判官ガ城ヲ取可申候、人ノ損不申樣ニ長陣仕、討タイラゲ可申由仰付ラレ候間、七月廿日比、赤國ヘ何モ御越候、彼城南ハ大川ニテ岸高、三方ハ七間程ノ石垣ニ候、吉川ハ河ノ南向ニ陣取候、竹束ヲ付仕寄被成候、城内ヨリ日暮候ヘバ、タイ松ヲ三間計ニ一ツヽトモシ候、加藤主計龜ノ甲ヲ作、人ヲノセ、石垣ノ根ヘ押寄、其内ヨリ、鶴ノハシヲ以テ石垣ヲコヂ候ヘドモ、大石ニテ不成處ニ、城内ヨリ燒草ヲカケ、彼龜ノ甲ヲヤキヤブリ候、カサネテ牛ノ皮ヲハギ毛ヲ下ヘナシ、龜之甲ニ張付、又押寄候處ニ、右ノ如ク燒草ヲカケ候、內ニ居候モノドモ有氣出候而、一二人ツルノハシニテ石ヲコネ返シ候故、石垣クヅレ兩人石ニ被打殺、一人生候、寄手コレヲ見取付責候間、破候テ城中ノモノ可働ヤウナク、大川ヘトビ入候、

〔難波戰記 三〕有樂修理之使參茶臼山事

遠巻

翌十一日、〇慶長十九年十二月大御所〇徳川家康間宮權左衛門、神子田〇神子田、一本作二日向半兵衛、島田清左衛門ヲ召テ、金掘ノ上手ニ相談シ、攻口ニ石壁有處ヲ見テ掘シムベシト仰付ラル、然ニ藤堂和泉守、井伊掃部頭、前田筑前守三人ノ攻口ニ可掘入處有バ、地ノ底ニ掘入、鐵砲ノ藥ヲ積、指火ヲ以テ火ヲ付バ石垣等忽崩ベシト申上ル、其後掃部頭攻口ヨリ金掘ヲ入テ掘セケルニ、城中ニモ是ヲ知テ、同穴ヲ掘テ穴ノ中ニ於テ相戰ベシト支度シケルガ、井伊ガ攻口モ土心惡ク成就セザリケリ、

〔江濃記〕佐々木承禎出張事

佐々木承禎父子ハ、淺井ガ濃州へ出張シテ齋藤ト合戰ス、此時人數ヲ出シ佐和山ヲ乘取リ、其後小谷へ押寄、淺井下野守ニ腹切セ、北ノ郡ヲ切シタガヘ、年來ノ本意ヲ達ントス、永原新左衛門頻ニイサメ申ス間、同年〇永祿七年ノ三月廿二日寅ノ刻、一萬四千ノ勢ヲ卒シテ、佐和山へ馳向ヒ町屋ヲ燒拂ヒ遠巻ニシタリケリ、城中ニ驚テ後詰ヲ小谷へ申送リケリ、

〔太閤記七〕秀吉四國退治之事

長曾我部新右衛門尉が居城和氣之城を、秀次の先勢遠巻にしけるが後はおしつめ、幾重共なく打圍み、櫓を上、鐵砲にて射すくめ、既に攻入むとひしめきあへる處に、〇下略

遠攻

〔太平記三十一〕八幡合戰事附官軍夜討事

楠次郎左衛門夜ニ入テ八幡へ引返セバ、翌日朝敵馳テ入替テ、荒坂山ニ陣ヲ取ル、然レドモ官軍モ不懸、寄手モ不攻上、八幡ヲ遠攻ニシテ四五日ヲ經ル處ニ、〇下略

〔奥羽永慶軍記二十三〕九戸合戰事

先手ノ大將蒲生忠三郎下知シテ、卒爾ニ城〇九戸城ヲ攻ベカラズ、只遠攻ニセラレ候ヘト、陣々ニ觸ラレケリ、

平攻

〔萬松院殿穴太記〕去程にけふ三好筑前守は中島にをいて、諸大將を集め評定とりどり成しに、〇中

蒸攻　巻攻

略長慶が舍弟十河民部大輔一存進み出て申けるは、〇中略急ぎ晴元〇細川のおはする三宅の城にとりかけ、腹切せ奉り、頓而江口に押寄、ひら攻に責て、かちたらんぞ心地はよかるべきといひければ、皆此儀にぞ同じける、

〔太閤記九〕池田勝入父子討死之事

池田が先手一番備、伊木清兵衛尉、其勢二千餘、二番備、片桐半右衛門尉、其勢二千、岩崎之城に至て著とひとしく取巻、ひら攻にせめて乗入處に、〇下略

〔播州佐用軍記上〕寄手總勢城麓攻寄之事

城ニハ加勢在シハ、血氣ニ乘ジ打出バ僞引出シ、後ヲ押切不漏討留ヨ、間能バ城へ乘入ベシ、敵不出バ毎日モ蒸攻ニシテ、城中ヲ疲勞、去程ナラバ、終ニハ降參スルカ、餓死スルカ、二ツノ中ハ遁マジト委ク可下知仰下サレケル、

〔太閤記十〕數ケ所之城明退事

肥後之内熊本之城は、城十郎太郎居城也、先陣として遠巻にし、一むし蒸ければ、甲を脱て降人に成しかば、城を請取、〇下略

〔軍法極秘傳書五城責〕城をまく事

城をまくに、三方をつよくかこみ、一方を明置なり、此方にも遠々と、よき番の者をうけ勢に置、城中へ他所より兵粮、其外種々をしのびいるゝ時、かたくおさゆる事尤なり、さて三方より手ひとくせむる時は、一方より落行者もあるゆへに、城かたまらぬもの也、四方よりせむる時は城中思ひ定め、死武者になるにより、事外つよきなり、

〔當流軍法功者書下〕敵ニ圍ヲ日ノ暮タル時之事

敵ニ圍テ日暮タラバ虎落ヲ結ベシ、虎落モナラザルホド近バ、ヤラ、イ、サカモギヲフセテ夜ノ明

後巻

テ退ベシ、此時ハ征月カ事掛ニ人數備ベシ、

〔中國治亂記〕隆元藝州サヽメト云處ニテ、同年〇永禄五年八月四日、四十一歲ニテ頓死シケレバ、元就以下ノ諸軍ノ歎息カギリナシ、然カハアレド、カヤウノ時分ユルカセニアラバ、敵方ヨリシカケラレテハ惡シカリナントテ、先手ヲ以テ白鹿ノ城ヲ被﹅破ケル、後。巻。攻ニシタリケレバ、九十日計ハ持詰ケレドモ、富田ヨリ義久〇尼子後詰アルベシトテ、白鹿ノ一里程北ノ方マデ出ケルガ、合戰不﹅叶引テ歸ル間、〇下略

〔總見記七〕和州所々軍事附駿州今川沒落沙汰事

松永彈正久秀ハ、〇中略井上ノ城ヘ押寄ス、城主井上若狹守近々トヨセサセテ、時分ヲ見合セ、内ヨリ一度ニ切テ出レバ、寄手思ヒモヨラズ崩レテ、松永勢多ク討死ス、寄手又ソレヨリ卷ヨセタリケレドモ、此城中々强シテ落ガタケレバ、〇下略

〔別所長治記〕野口合戰

秀吉思慮深ク世ニ賢キ大將ニテ、〇中略四月〇天正六年三日早朝ヨリ長井四郎左衞門ガ楯籠ル野口ノ城ニ押寄ス、〇中略長井四郎左衞門不﹅叶シテ請﹅和、寄手ノ軍兵聞モ不﹅合降參セバ、以前ノ事是程ニ落去シテ助一命有マジキト云ヘバ、秀吉サハセヌ物ゾ、〇中略城ヲ攻ル謀ニ一方開キテ攻ルモ、敵ニ通ル道ヲ知ラセテ早ク得﹅勝利﹅タメ也、敗軍ノ者ニ少モ不﹅可﹅指﹅手トテ城ヲ請取ラル、

〔書言字考節用集八言辭〕後巻（ウシロマキ）

〔細川兩家記〕高國〇細川ハ、丹波、山城、攝津國相觸させられて、同〇永正十六年十一月廿一日都を立せ給ひ、同十二月二日池田城へ著給ふ、越水の城の後。卷。のために、小屋、野間、九十九町、高木、河原林、武庫、寺部、水堂、濱田、大島、新田、武庫川のかた、上から下迄陣を取つゞけ、折々合戰させられたり、

〔赤松再興記〕永正十六年十二月、浮田能家三石ノ城爲﹅後。卷。﹅出張ス、備前國新田安養寺居陣也、浮田

ハ佐々木ノ庶流、備後三郎高徳ガ後胤也、

〔細川兩家記〕同〇大永六年十一月卅日に、赤井五郎二千餘騎にて柳本方して後卷する也、然ば藥師寺九郎左衛門、荒木大藏、馬廻り十三頭渡合して合戰す、京方三百餘人討死也、赤井方も二百餘人討死と云、されば京方諸陣、皆々くづれ、京へにげ上る、

〔勢州四家記〕一弘治年中、近江國六角左京大夫源義賢、伊勢を打取べきとて、小倉三河守に三千の兵を相副、先千種を攻、千種服從の後、宇野部蘆生以下をしたがへる、此時神戸與力柿城を攻、弘治三年神戸下總守後卷に出、神戸之長鬼神岡城主佐藤中務丞父子謀叛して、神戸の城を取、小倉を引込なり、

〔萬松院殿穴太記〕故大將殿御存命の時、諸侯の輩を城中にこめられしに、直に被仰けるは、うしろまきの義は、定賴朝臣御請を申ぬれば、心安存べし、若遲くあらば御兩所なり共、御馬のはなをむけられ、死を士卒に先達て、勝事を一擧の中に定めむとの堅き御契約也、

〔信長公記六〕八月〇天正元年八日、江北阿閉淡路守、御身方の色を立、則夜、信長御馬を被出、其夜御敵城つきがせの城あけのき候也、　八月十日、大づくの北山田山に悉陣どらせ、越前への通路御取切候、朝倉左京大夫義景後卷として二萬計罷立、與語木本たべ山に陣取候、近年淺井下野守、大づくの下やけをと云所こしらへ淺井對馬を入置候、是又阿閉淡路と同心に、御身方の色を立、御忠節とし、　八月十二日、大づくの下やけをへ、淺見對馬覺悟にて、御人數引入候、

〔信長公記八〕去程に、〇天正三年武田四郎〇勝賴岩村へ後卷として、甲斐信濃土民百姓等迄かり催罷出、既打向の由注進候の間、十一月十四日、戊剋京都を被成御立、夜を日に繼、十五日に岐阜に至而御下、

〔信長公記十四〕十月〇天正九年廿六日、伯耆國に南條勘兵衛、小鴨左衛門尉兄弟兩人、爲御身方居城候

後責　包討

處、吉川罷出、南條表取卷之由注進候、眼前に攻殺させ候ては、都鄙之口難無念之由候て、羽柴筑前守後卷罷立、東西之虜を合、可レ及二一戰一行にて、十月廿六日先勢を遣し、十月廿八日、羽柴筑前守秀吉出陣、

〔豐鑑一長濱眞砂〕天正六年、〇中略毛利氏大江輝元、吉川小早川はらからの某を大將として、備前美作の主宇喜田氏直家をかたらひ、五六萬がほどの軍勢にて西幡に出、上月の城を幾重も圍ぬ、鹿之助〇山中後責請ければ、秀吉小寺氏など催加て向ひ、高倉山に軍だてし給ふ、

〔豐鑑二吹上濱〕秀吉卿は、畿內北國美濃伊勢の勢を具して、筑後肥前をへて、薩摩へをもむかんとなり、からめ手へ趣く勢は、豐後日向の境なる、たかたやうといふそこを取まはして、竹たばといふ物を持より、夜晝責戰ふ、島津主後責をやすべきよて、兵卒を分てその備をなせり、あんのごとく島津兵庫頭を大將として、後責の爲に出向ふ、暫ためらひもせで、後責の爲に陣をはりそなへし宮部善祥坊が陣にをしよせ責戰ふ、

〔淺井三代記三〕今濱勢軍評定附上坂勢評議の事

治部大輔〇上坂泰貞俊孝軒に向ひて、それ〳〵人數組いたされよと有ければ、俊孝心得たりとて、人數立をぞ定めける、淺井は武者の色をよく見て、軍立すぐやかなり、此方にも一備せんとて、旗本に治部大輔兵庫頭を七百餘騎にてかためさせ、一番を淺見對馬守、二番を掃部頭、三番寄勢今村掃部頭、上坂信濃入道と俊孝は脇備になりて、亮政〇淺井が働く色を見て、雙方より包討に可討とのたくみなり、其座の若者共は、加樣に敵にをちては軍勝事よもあらじ、敵の勢を味方の勢に合すれば、五分一も有まじ、新三郎討て出ば、ひつつゝみ打取べき物をと、敵をあなどつて申者も多かりけり、俊孝人數組それ〳〵相極め、永正十三九月三日の卯の刻に、六千餘騎を率し、上坂の城へ押寄たまふ、一番淺見對馬守上坂修理亮、二番に上坂掃部頭口分田彥七郎、三番寄勢今村掃部

火攻

頭、四番上坂伊賀守小蘆宮内、五番旗本上坂兵庫頭、同治部大輔指添て置、上坂信濃守は脇備となりて居る、淺見入道俊孝右脇備となり、堀部村に隱居る、是は淺井つよく働ば、押包可討との事なり、

〔海國兵談 十一〕城攻並攻具　火攻は大風の時、風上より在家々々に火を懸て、其火氣にて城を燒也、若又在家無時ハ、竹木を山ト積上て火を放スべし、

〔孫子 火攻〕孫子曰、凡火攻有五、一曰火人、二曰火積、三曰火輜、四曰火庫、五曰火隊、行火必有因、煙火必素具、發火有時、起火有日、時者天之燥也、日者月在箕壁翼軫也、凡此四宿者風起之日也、凡火攻必因五火之變而應之、火發於內、則早應之於外、火發而其兵靜者、待而勿攻、極其火力、可從而從之、不可從則止、火可發於外、無待於內、以時發之、火發上風、無攻下風、晝風久、夜風止、凡軍必知五火之變、以數守之、故以火佐攻者明、以水佐攻者强、水可以絕、不可以奪、

〔兵法一家言 九攻城〕火攻ヲスルニハ、大風ノ吹起リタル時ニ、城近キ風上ノ在家ニ火ヲ掛テ、其火勢ヲ城內ニ及シテ城ヲ燒ベシ、若城近キ場處ニ在家ノ無キトキハ、近村里ノ民家ヲ毀シ持運ビ、風上ニ在ル矢倉多門ノ下ニ山ノ如ク積疊テ、火ヲ放テ此ヲ燒立ツベシ、或ハ枯燥タル柴、萱、薪、諸材木等ヲ積テ燒モ宜シ、其他棒火矢、箭烽烙等ヲ打掛テ燒ベシ、

〔日本書紀 六垂仁〕五年十月己卯朔、天皇〇中略命上毛野君遠祖八綱田、令擊狹穗彥、時狹穗彥、興師距之、忽積稻作城、其堅不可破、此謂稻城也、踰月不降、〇中略則將軍八綱田放火焚其城、〇中略時火興城崩、軍衆悉走、狹穗彥與妹共死于城中、

〔陸奥話記〕六日〇康平五年九月午時、將軍〇賴義到高梨宿、卽日欲攻衣川關、〇中略武則〇淸原氏下馬、廻見岸邊、召兵士久淸命曰、兩岸有曲木、枝條覆河面、汝輕捷好飛超、傳渡彼岸、偸入賊營、方燒其壘、賊見其營火起、合軍驚走、吾必破關矣、久淸云、死生隨命、則如猿猴之跳、粱、著彼岸之曲木、牽繩纏葛牽、卅餘人兵士同

得越渡、即仰到藤原業近柵、俄放火燒、宗任腹心也、業近字大藤内、貞任等見業近柵燒亡、大駭遁奔、遂不拒關、保鳥海柵、而爲久清等所殺傷者、七十餘人也、○中略十五日酉剋到著、圍廚川嫗戸二柵、○中略十七日未時、將軍命士卒曰、各入村落、壞運屋舍、塡之城隍、亦每人苅萱草、積之河岸、於是壞運苅積、須臾如山、將軍下馬、遙拜皇城誓言、○中略伏乞八幡三所、出風吹火燒彼柵、則自把火稱神火投之、是時有鳩、翔軍陣上、將軍再拜、暴風忽起、煙焰如飛、先是官軍所射之矢、立柵面、樓頭猶如簑毛、飛焰隨風著矢羽、樓櫓屋舍、一時火起、城中男女數千人、同音悲泣、賊徒潰亂、

〔保元物語二〕白河殿攻落事

義朝使者ヲ内裏へ進セテ、夜中ニ勝負ヲ決セント、攻ニ攻テ責候ヘ共、敵モ堅防テ難破候、今ハ火ヲ懸ザラン外ハ、利有ベシトモ覺候ハズ、但法勝寺ナドモ風下ニテ候ヘバ、伽藍ノ滅亡ニヤ及候ハンズラン、其段勅定ニ可隨ト被申上タリシカバ、少納言入道承テ義朝誠神妙也、但君ノ君ニテ渡ラセ給ハヾ、法勝寺程ノ伽藍ヲバ、即時ニ可被建立、努々ソレニ不可恐、只急速ニ凶徒誅戮ノ謀ヲ可廻ト被仰下ケレバ、御所ヨリ西ナル藤中納言家成卿ノ宿所ニ火ヲ懸シカバ、西風烈キ折節ニテハアリ、即院○崇德御所へ猛火夥ク吹懸タレバ、院中ノ上﨟女房乳母童ハ、方角ヲ失テ呼リ叫テ迷アヘルニ、武士モ是ガ足手纏ニテ進退更ニ自在ナラズ、落行人ノ有樣ハ、峯ノ嵐ニサソハルル、冬ノ木葉ニ不異、

〔源平盛衰記三十七〕義經落鵯越并畠山荷馬附馬因縁事

御曹司○源義經下知シ給ケルハ、城郭廣博ナリ、賊徒數ヲ不知、多官軍ヲ亡サン事、最不便ナリ、火ヲ放テト宣ヘバ、武藏坊辨慶屋形ニ打入、假屋ニ火ヲナス、折節西ノ風烈クシテ、猛火城ノ上へ吹覆、平家ノ軍兵煙ニ咽、火ニ被責テ、今ハ敵ヲ防ニ及ズ、取物モ取敢ズ、濱ノ汀ニ迯出ツヽ、海ノ藻鹽ニ馳入、船ニ乘ラントゾ迷ヒケル、助船モ多有ケレ共、ソモ然ベキ人々ヲコソ乘セケレ、次々ノ者共ヲ

バ乘ザリケレバ、乘ンノセジトスル程ニ、多ク海ニゾ沈ミケル、猛火ノ煙燄立ノ灰、逃去道モ見エザリケレバ、皆敵ニ討レケル、サレバ助ルハ希ニ亡ルハ多シ、無慙ト云モ疎ナリ、

〔太平記十七〕京都兩度軍事

山門是ニ又力ヲ得テ、同年〇延元元七月十八日、京都ヘゾ被寄ケル、〇中略一勢ハ河原ヲ下リニ押寄セ、東西ヨリ京ヲ中ニ插テ、燒攻ニスベシトゾ被議ケル、

〔關八州古戰錄十七〕豆州下田ノ兩城沒落事

伊豆國下田ノ城ハ、南方ノ清水上野介信久六萬餘ノ兵ニテ相守リケル處ニ、志州鳥羽ノ城主九鬼大隅守嘉隆、殿下〇秀吉ノ命ヲ受テ、伊勢、志摩、尾張、三河ノ海賊ヲ駈集メ、大船數十艘ニ取乘リ、海面ノ攻手トシテ、相州表ヘ渡海シケルガ、爰ニ至テ兵船ヲ漕著ケ、浸々ト陸ヘ攀リ押寄テ攻タリケル、上野介サル覺ノ剛ノ者故、防ギ戰テ手並ヲ震ヒ數日ヲ送ル、加藤左馬助嘉明是モ同ク海手ノ大將トシテ、豫州松山ヨリ發船シ漕渡リシガ、下田ノ城ノ繋トシテ、東ノ方ノ出崎ニ新ニ砦ヲ築キ、相圖ノ飛脚篝ヲ設ケ、小田原ヨリ番兵ヲ籠置ケルヲ、嘉明乘破テ通ラントテ、家人菅平兵衛ニ下知シ、海手ノ民家ヲ放火ナサシメ、多勢打騰テ攻懸レリ、佃次郎兵衛十成本岩松氏先登シテ進ミ寄スルヲ見テ、城兵鋒先ヲ汰テ突テ出、逐込追出シ、三ケ度ノ迫合アリ其內ニ佃次郎兵衛砦ノ武主ト引組テ首ヲ捕リ、競ニ乘ジテ城中ヘ攻入、火ヲ放テ燒崩シ、一旦ニ乘破レリ、嘉明ハ夫ヨリ伊豆浦ニ著船シ、殿下ノ本陣ヘ參向シテ、事ノ由ヲ達シケレバ、聞ク者側ニ眉ヲ顰メ、嘉明私ノ計ヒナシテ燒討ニシタル事、將命ヲ恐ザル働ナリト耳語ケル處ニ、秀吉公聞召シ、嘗ニ吾儕打回テ海面ヲ巡見セシ時、彼砦ヲ見及シガ、是ヲ攻擊ンニハ、人數モ多ク損害シ、輙クハ乘捕リ難カラン、俗ニ云眼ノ上ノ疣、腹心ノ病是ナリ、所詮燒討ニナサシメント、心懸リニ思タルニ、臨軍不俟君命ト云ル兵法ノ詞ヲ、左馬助會得シテ克クコソ仕ナシタレ、今ニ始メザル嘉明ガ猾カナトテ、頻ニ感

喜シ給ヒ、佃次郎兵衛ニモ褒美ヲ賜テ、懇ニ召仕フベシト、左馬助ニ宜ヒ含メラレシ儀、最前誹謗シタリシ面々、案ニ相違シ口ヲ箝侍リシトゾ、

〔海國兵談十一〕城攻並攻具　水攻ト云に二ッあり、一は水無山城などにては、城外より水を引て用ル事あり、其水源を斷切、城中に一滴の水も無樣にして攻ル時は、沽渇ニ苦で落城に及ブ事あり、一は水吐(ハキ)惡キ城地をば、卑キ方(江)長堤を築て、高キ方より水を注懸れば、城地水に浸(ヒタツ)テ落城する事あり、太閤(豐臣○秀吉)此術を致されたり、但堤ト城トの高低は、術を以て能計ルべし、若堤卑クして水を注でも、城を浸サざる時は勞して功なきのみならず、千古の笑トなるべし、

〔漢書(五十一賈鄒枚路傳)〕水攻則章邯以亡二其城一、陸擊則荊王以失二其地一、

〔兵法一家言(九攻城)〕水攻ニハ二種有リ、其一ヲ乾渴攻ト云ヒ、其二ヲ灌流攻ト云フ、乾渴攻トハ、水ノ乏キ城ハ外ヨリ水ヲ呼取、水道ヲ斷絶リ、兵糧攻シテ城兵ヲ餓死セシムルガ如ク、水ニ渴死セシムルヲ云フ、又灌流攻トハ、水吐ノ惡キ城ハ、其卑キ方ニ數万ノ土囤ヲ積上テ長堤ヲ築キ、又其高方ヨリ諸河水ヲ灌流シテ大ニ水ヲ溜聚メ、其城ヲ悉ク水中ニ浸沈(シム)ルヲ云フ、但城ト堤トノ高低ヲ精ク測量シテ取掛(ル)ベシ、昔天正十八年豐臣太閤小田原征伐ノ時ニ、石田治部少輔三成ヲ始メ數多ノ大名其命ヲ受テ、武州忍城ヲ水攻ニシ、既ニ城危見エケル頃、城兵夜出デ竊ニ其堤ヲ決ケレバ、大水橫流シテ寄手諸陣ニ溺漫リ、寄手大敗軍、殊更石田三成ハ既ニ溺死セシヲ、家來介抱ニ因テ免ルヽコトヲ得タリ、水攻モ斯ノ如(キ)ハ翻ニ勞シテ功ノ無キノミナラズ、實ニ千歲ノ笑料ナリ、能勤辨スベシ、

〔深谷記〕寅年　忍の御城留守居に坂卷靫負殿と申仁御座候が、御兩人せめ被來候得共、うさき筒打掛け終に落不申候、餘りにありかね、荒川を堀わり、水ぜめに被成候得共落不申候、

〔新田老談記(上)〕越後謙信公モ武州松山廐橋迄乘取、新田桐生館林ヲモ御責可有トテ、奧澤峯ニ陣

場ヲ拵ヘ、先奈和伊勢崎ヲ可攻迚、鹽田主税之助ヲ大將トシテ、二百餘騎押寄戰ハントシタリケレドモ、敵ハ皆逃去テ無故濫妨狼藉思ノ儘ニシテ歸リケリ、成田城ヲモ水攻ニ可被成トテ、御用意ノアルヲ左衛門聞及デ、早速和談ヲ願給フ故、其通リニ被成ナリ、

〔四國軍記　六〕中留川合戰付三好讃州退去事

元親(○長曾我部)密ニ國繪圖ヲ以テ地理ヲ考エ、ツク〴〵ト思案ヲメグラシ、中内源兵衛ヲ呼デ申シケルハ、汝ハ五百餘騎ヲ引テ中留川ノ川上ニ屯シ、土俵ヲ以テ水上ヲセキ切ベシ、サアラバ敵馬ノ雌雄自在ナルニ由テ川中ニテ戰ベシ、味方ハ礒際ニ支エ、半進半退ノ軍ヲ張テ敵ヲ道引ベシ、戰理ニ當ン時、相圖ニ烽ヲ擧ベシ、其時ニ積水ヲ切テ落シ、流ニ引添テ走下ルベシ、正安(○三好)ヲ手捕ニセン事、此一戰ニアリ、相カマヘテ誤ル事ナカレト、仔細ニ下知ヲナシケレバ、中内領掌シ五百餘騎ヲ率テ出ニケル、(○中略)後軍ノ大勢押來、一同ニ旌ノ手ヲ進メ、鬨ヲドツトアゲ川中ヘ打テ入シカバ、三好ガ兵我ヲトラジト馬ヲカケヨセ〳〵川水ヲ蹴立、水烟ヲ飛シテ斬伏突伏散々ニ戰タリ、土佐ノ先勢タマリカネ、堤ノ上ヘ引退ク、三好是ニ機ヲ得テ、眞一文字ニ川下ヲ堀ト押渡リ、兩軍互ニ入亂レ追靡追歸シ、爰ヲ專途ト戰ケル、去程ニ中内ハ川上ニ扣テ有ケルガ、合圖ノ煙ヲ乾ト見テ、スハ時コソ至レト、積置シ土俵ヲ切テ落シ、流ニ添テ下リシカバ、逆浪忽チ川岸ヲヒタシ、飛滂渦卷來テ雲ノ崩ルヽガ如クナリ、河中ニ有シ三好ガ兵、水ヲ恐レテ敗走シ、或ハ浪ニ打レ、或ハ淵ニ乘込テ死スル者數ヲ知ズ、

〔太閤記　三〕備中國冠城落去幷高松之城水攻之事

爰に高松の城とて名城あり、(○中略)輝元(○毛利)より加勢として、弓鐵砲の司なる難波傳兵衛尉、近松左衛門尉、其勢二千有餘の着到にて籠城せり、秀吉高松之城のやうす精しく損益を盡し見給ふに、たゞ水せめに如くは有まじきと覺ふなり、然ればまづ近邊之在々所々令放火、其後つゝみを

つかせ攻らるべきとて、燒働に發向し、勢をさつと打入給ひけり、かくて城の廻り三里が間、堤をつかせられけるに、堤の根をき十二間上にて六間のはゞと定られ、晝夜の堺も分ず、急がせ給ひしかば、四月十三日につきかゝりしが、廿四日五日には悉く出來たり、五月朔日より、大小之河水を關入給へり、又おく山に分入ては谷川をも水道を付かけ入給ひければ、五日六日の間は水いづち行らむやうに、漲共みへざりしが、十日比にはつね〳〵卑く侍りし所は、はや人の住するなし、堤の上には柵を付廻し、下には町屋作りに小屋を、小路〳〵もやつて作りならべ、夜番廻番絶間もなくして毛利家よりの密通だも思ひたへたり、況助成の便をや、○中略水はながれざれ共關入し湖水晝夜をすてず、水かさまさりければ、網代之魚、籠中之鳥にもこへて極運にせまり行に浮沈せり、長左衛門尉湖水日々夜々にまさり行を見て、身の行末の日數をかへり見、兄の月清入道に云けるは、如此水まさりなば、溺死旬日之內外なるべし兄弟腹を切て諸人を助んと奉存は如何有べきと相議しければ、月清も內々左も有度と啐啄す、

〔豐鑑 二 [illegible]〕秀吉○中略それよりたけがはなの城へ寄かこみぬる、堀ふかく廣きに水をたゝへ、城の外も沼川にて輙近づきがたし、いかゞあらんど思ふに、秀吉、備中高松のごとく、水をつけて責ばや、とて、城のまはり五十餘町に、高く堤を築あげせきかけしかば、程なく湖水に成て、城はわづかに島のごとし、大木にすのこをかきてあがり居、程なく水にしづみうせなんとみえしに、いかゞしたりけん、大和國筒井順慶が陣所の前堤崩、落行水は高し、川のみなぎる音して、一夜の中にかはきつきて、もとの地とぞなりにける、崩し所をつきて、又水をたゝへんとする所に、城主不破源六父子、城を明わたし尾張に到べし、命たすけ給へと、和をこひしかば、その義にまかせ城を請取、

〔川角太閤記 三〕一秀吉は其年○天正十一年も暮行ば、大坂の城江御入被成、明なば尾張へ取懸、常眞を可被攻と思召、御意には水攻の城は二ツも三ツもしをふせたり、尾張の國は水攻になる國ぞや、其

故は殊之外大河はあり、少の水にも國中へいかる也と御意候へば、皆人々借々御氣を被付て候なり、熱田あたりを丈夫に御せき被成候ば、國中水はまるべき也、其用意せよとて、御分國の鍛冶にくわ、かま、よきなど被仰付、幷に明俵御用意おびたゞ敷聞え申候、伊勢、近江、美濃、山々にて、わくの木など被仰付候事、

〔豐鑑〕二秀吉〇中略あくる日天正十三年三月二十二日土ばしといふ所にうつり給ひ、兵どもを大田村といふ所にさしむけ、城をかこみ給ふ、時の中にせめおとさば、兵多く死うすべしとて、例の水責にせ給ふ、城の高さをはからはせ、堤を築まはし、敵の出ざる樣に、外にせゝがきをゆひまはせり、水次第にたゝえければ、浦々よりも舟ども取入て、かいだてをかき、旗を立ならべ、四方よりこぎよせ、鐵炮を打掛事おびたゞし、今幾程もこらへじなど思ふ處に、卯花くだしふりせきりて、いにしへの川のながれの所、堤崩て湖水のごとくたまりし水、時のまにかはけり、又こそ水をたゝえめとて、崩し所を築調んとせし程に、城より和談の事をこひければ、其城の長たる者、つぎ〴〵四五人生害させ、殘者どもをば助出し給へり、

〔關八州古戰錄〕十九武州忍城初度軍浸責事

石田治部少輔申ケルハ、當城ハ要害ノ地ニシテ、其上兵粮矢玉モ澤山ニ籠置シト聞ヘタレバ、輙クハ陷リ難カラン、城郭ノ四方ニ堤ヲ築キ、利根川荒川ヲ切懸テ浸攻ニスベシトテ、近隣ヘ相觸レ、過分ノ米錢ヲ配當シテ、人足ヲ驅集メ、晝夜ノ境モナク土石ヲ山ノ如ニ運バセ、四面ニ堤ヲ築立タリ、〇中略幾程ナク堤モ出來ケリ、然バトテ利根川ヲ防ギ留テ、江原堤ヲ切カケヽルガ、五月雨晴テ後ハ、炎天打續テ水ノ掛リ乏キニヨリ、マタ荒川ヲ防ギテ掛タリシカバ、水沼々ト湛ヘテ溢タリ、去共城兵高地ニ集リサノミ困シマザリケル、同月〇天正十八年六月十六日ノ申ノ剋ヨリハ、曇リ雷鳴シテ晩雨車軸ヲ流シケルニ、川西トイフ所ノ堤五六間切ルヽヤイナヤ、新ニ築シ堤ナレバ、爰

彼ヲ押破リ逆水ト成テ、寄手ノ陣所々々ヘ浸シケルマヽ、人馬溺死ニ及ブ事若干ナリ、

〔今昔物語二十五〕源頼信朝臣責平忠恒語第九

今昔、河内守源頼信朝臣ト云者有リ、此レハ多田ノ滿仲入道ト云フ兵ノ三郎子也、○中略頼信常陸守ニ成テ、其國ニ下テ有ケル間、下總國ニ平忠恒ト云兵有ケリ、私ノ勢力極テ大キニシテ、上總下總ヲ皆我マヽニ進退シテ、公事ヲモ事ニモ不為リケリ、亦常陸守ノ仰スル事ヲモ、事ニ觸レテ忽諸ニシケリ、守大キニ此レヲ咎メテ、下總ニ超テ忠恒ヲ責メントスルヲ、其國ニ左衛門大夫平惟基ト云者有リ、此ノ事ヲ聞テ、守ニ云ク、彼ノ忠恒ハ勢有ル者也、亦其ノ栖輙ク人ノ可寄キ所ニ非ズ、然レバ少々ニテハ、世ニ被責不侍ラ、軍ヲ多ク儲テコソ超サセ給ハメ、守此レヲ聞テ、而リト云ドモ、此テハ否不有マジト云テ、只出立ニ出立テ、下總國ヘ超ユルニ、惟基三千騎軍ヲ調ヘテ、鹿島ノ御社ノ前ニ出來會タリ、○中略而ルニ彼ノ忠恒ガ栖ハ、内海ニ遙ニ入タル向ヒニ有ル也、然レバ責ニ寄ルニ、此ノ入海ヲ廻テ寄ナラバ、七日許可廻シ、直グニ海ヲ渡ラバ、今日ノ内ニ被責ヌベケレバ、忠恒勢有ル者ニテ、其ノ渡ノ船ヲ皆取リ隱シテケリ、而レバ可渡キ樣モ无クテ、濱邊ニ皆打立テ、可廻キニコソ有ヌレナド、若干ノ軍共思ヒタルニ、守大中臣成平ト云者ヲ召テ、小船ニ乘セテ忠恒ガ許ニ遣ス、仰セテ云ク、不戰ト思ハヾ、速ニ參來、其レヲ猶不用バ、否返リ不敢ジ、只船ヲ下(クダリ)樣ニ趣ケヨ、其レヲ見テ渡ラムト、成平此レヲ承テ、小船ニ乘テ行ヌ、○中略而ル間成平船ヲ下樣ニ趣ク、忠恒守ノ返事ヲ申ケル樣、守殿止事无ク御坐ス君也、須可參ト云ドモ、惟基ハ先祖ノ敵也、其レガ候ハム前ニ、下リ跪キテナム、否不候マジキト、亦渡ニ船无クシテ、何カ一人ハ參ラムト云ケレバ、船ヲ下樣ニ趣クル也ケリ、守斯ヲ見テ云ク、此ノ海ヲ廻リテ寄ラバ、日來經ナムトス、而レバ逃ゲ亡ナム、亦不寄マジキ構ヲモシテム、今日ノ内ニ寄テ責ムコソ、彼ノ奴ハ案ノ外ニテ、迷ハシテ、其レニ船ハ皆隱レタリ、何カセムトスルト、若干ノ軍兵ニ仰スル時ニ、軍兵ノ申サク、他ノ事不

候バ、廻テナム寄ラセ給フベキト、守ノ云ク、賴信、坂東ハ此度ナム始メテ見ル、而レバ道ノ案內可知キニ非ズ、而レドモ家ノ傳ヘニテ聞キ置ケル事有リ、是ノ海ニハ淺キ道、堤ノ如クニテ、廣サ一丈許ニテ、直ク渡リケリ、深サ馬ノ太腹ニナム立ツナル、其ノ道ハ定メテ此ノ程ニコソ渡タラメ、此ノ軍ノ中ニ論无ク、其ノ道知タル者有ラム、而レバ前ニ打テ渡レ、賴信其レニ付テ渡ラムト云テ、馬ヲ搔早メテ打寄ケレバ、眞髮ノ高文ト云フ者有テ、己レ度々罷リ行ク渡リ也、前馬仕ラムト云テ、葦ヲ一束從者ニ持セテ打下シテ、尻ニ葦ヲ突差々々渡ケレバ、是ヲ見テ他ノ軍兵共モ悉ク渡リケルニ、游グ所二所ゾ有ケル、軍共五六百人計渡リニケレバ、其次ニナム守ハ渡ケル、多ノ軍ノ中ニ三人計ナム、此ノ道ヲバ知タリケル、其ノ外ハ露聞ニダニ不聞リケレバ、此ノ守殿ハ此度コソ、此方ハ見給フラメ、其レニ我等ダニ不知ニ、何カデ此ク知リ給ヒケム、尙人ニハ勝レタル兵也トナム、皆思テ恐ヂ合ケル、然テ渡リ持行クニ、忠恒ハ海ヲ廻テゾ寄來テ責メ給ハム、船ハ取隱シタレバ、否渡リ不給ト、此ノ淺キ道ハタ否不被知、我ノミコソ知タレ、廻ラム程ニ日來經バ、逃ナムニハ否責メ不給ハラムト、靜ニ思テ軍調ヘ居タル程ニ、家ノ廻ニ有ル郞等、走ラセ來テ告テ云ク、常陸殿ハ此ノ海ノ中ニ淺キ道ノ有ケルヨリ、若干ノ軍ヲ引具シテ、既ニ渡リ御スルハ、何セサセ給ハムト爲ルト、橫ナハリタル音以テ周章云ケレバ、忠恒兼テノ支度大キニ違ウテ、我レハ被責タルニコソ有ナレ、今ハ術无シ術无シ、進テムト云テ、忽ニ名符ヲ書テ、文差ニ差テ、怠狀ヲ具シテ、郞等ヲ以テ小船ニ乘セテ、向テ寄セタリケレバ、守此レヲ看テ、名符ヲ令取テ云ク、此許名符ニ怠狀ヲ副テ奉レルハ、既ニ□□シニタル也、其レヲ强ニ責メ可罰キニ非ズト、速ニ此レヲ取テ可返キ也ト云テ、馬ヲ取テ返シケレバ、軍共モ皆返リニケリ、○下略

〔源平盛衰記　三十七〕義經落鵯越事幷畠山荷馬附馬因緣事

同○壽永三年二月七日ノ曉、九郞義經ハ鷲尾ヲ先陣トシテ、一谷ノ後鵯越ヘゾ向ケル、○中略其後鷲尾尋

承ニテ下リ上リ打程ニ、辰半ニ鵯越一谷ノ上エ、鉢伏礒ノ途ト云所ニ打登、兵共遙ニ差ノゾキテ谷ヲ見レバ、軍陣ニハ楯ヲ並突、士卒ハ矢束ヲクツロゲタリ、前ハ海、後ハ山、波モ嵐モ音合セ、左ハ須磨、右ハ明石、月ノ光モ優ナラン、追手ノ軍ハ半ト見エタリ、喚叫聲、射違鏑ノ音、山ヲ穿谷ヲ響シ、赤旗赤符シ立並テ、春風ニ靡ク有様ハ、劫火ノ地ヲ焼ランモ、角ヤト覺タリ、時既ニ能成タリ、追手ニ力ヲ合セントテ見下セバ、實ニ上七八段ハ小石交ノ白砂也、馬ノ足トヾマルベキ様ナシ、歩ニテモ馬ニテモ落スベキ所ニ非ズ、サレバトテサテ有ベキ事ナラネバ、只今マデ乗リタリケル大鹿毛エハ佐藤三郎兵衛ヲ乗セ、我身ハ大夫ト云馬ニ乗替テ、谷ヘ打向給、鹿ノ通路ハ馬ノ馬場ゾ、各落セ〱ト勧給フ、兵共我モ我モト馬ヲバ谷ヘ引向テ、心ハ先陣トハヤレ共、次石イブセキ礒ナレバ、手綱ヲ引ヘテ跡躊バ、馬モ恐テ退ケリ、互ニ顔ト顔トヲ見合テ、何國ヲ落スベシ共見ズ、軍將宣ケルハ、一ハ馬ノ落様ヲモ見、一ハ源平ノ占形ナルベシトテ、葦毛馬ニ白覆輪白ケレバ、白旗ニ准ヘテ源氏トシ、鹿毛馬ニ黄覆輪赤ケレバ、赤旗ニナゾラヘテ平氏トテ追下ス、各木ノ間ニテ是ヲ見上ルニ、七八段ハ小石交ノ白砂ナレバ、宛轉トモナク落ルトモナク下ツヽ、巖ノ上ニゾ落著タル、良暫有、岩ノ上ヨリ宛轉下リ、越中前司盛俊ガ假屋ノ後ニ落付テ、源氏ノ馬ハ這起ツヽ、身振シテ峰ノ方ヲ守リ、二聲嘶、篠草ハミテ立タリ、平家ノ馬ハ身ヲ打損ジ、臥テ再起ザリケリ、城中ニハ是ヲ見テ、敵ノヨスレバコソ、鞍置馬ハ下ラメトテ、騒速ケル處ニ、御曹司ハ、○中略義經ガ馬ノ立様ヲ本ニセヨトテ、眞逆ニ引向、ツヾケ〱ト下知シツヽ、馬ノ尻足引敷セテ、流落ニ下タリ、三千餘騎ノ兵共、大將軍ニツヾケトテ、白旌三十流城ノ内ヘ指覆、轡並テ手綱カイグリ、同様ニ尻足シカセテ、サト落テ壇ノ上ニゾ落留ル、夫ヨリ底ヲ差ノゾヒテ見レバ、石巖峙テ苔ムセリ、刀ノハニ草覆ヘル様ナレバ、イトイブセキ上、十二十丈モヤ有ラント見エ渡ル、下ヘ落スベキ様モナシ、上ヘ上ルベキ便モナシ、互ニ堅唾ヲ呑テ思煩ヘル處ニ、三浦黨ニ佐原十郎義連進出テ、我等甲斐

信濃ヘ越テ、狩シ鹿仕時ハ兎一ツ起イテモ、鳥一ツ立テモ、傍輩ニ見落サレジト思ニハ、是ニ劣所ヤアル、義連先陣仕ラントテ、手綱掻グリ鐙蹈張只一騎、眞先蒐テ落ス、御曹司是ヲ見給テ、義連討スナ、ツヾケ者共〳〵ト下知シテ、我身モツヾキテ落サレケリ、〇中略白旗三十流颯ト捧、三千餘騎同時ニ時ヲ造、山彦答テ夥シ、平家ノ城墎ニ亂入テ竪サマ横サマ蜘蛛手十文字ニ馳廻、喚叫デ戰ケレバ、城中ニハ東西ノ城戸口バカリコソ防ケレ、サシモ恐シキ巖石ヨリ、敵ヨスベシ共思ハザリケレバ、打延テ左右ノ城戸口ノ弱カラン時軍セントテ、鎧物具脫置テ、小具足バカリニテ居タル所ヘ、ハト寄咄ト時ヲ造リタレバ、弓矢ヲ取馬ニノル隙ヲ失ヒ周章迷、御方ノ兵モ皆敵ニ見エケレバ、適馬ニノリ弓矢ヲ番ケル者モ、御方討ニ討殺レ切殺サレテ、上ニ成下ニ成テ、肝モ心モ身ニソハズ、失度騷フタメキケル形勢ハ、少魚ノタマリ水ニ集リ、宿鳥ノ枝ヲ諍ニ異ナラズ、

〔中國治亂記〕弘治元年十月十日ニ、以ノ外大風吹大雨降ケレバ、元就吉日ハ今夜也、渡海アルベシトフレラル丶、風荒大雨ニテ、諸船頭モ船出シガタシト頻リニ申ケレドモ、無二承引渡海アリ、嚴島ノバクチヲノ鼻、皷ガ浦ト云處ニ船ヲ付ケレバ、隆元申ケルハ、皷ノ浦モ打道具、バクチヲノ鼻モ、バクチウツトイヘバ、敵ヲ可計事ウタガイナシト申セバ、皆是ヲ聞テ大ニイサミケル、カヽル所ヘ元就ノ陣ノ前ヘ鹿一匹走リ來リケル、見ヨ大明神御加護ノ瑞相トテ、甲ヲヌギテ禮拜アル、扨諸軍ニハ一日ノ食計持ベシ、舟ヲバ皆人數上リテ、悉ク廿日市ヘ乗戾シ候ヘト下知ス、諸船頭モ加勢ノ舟モ、當島ニ相詰御用可承ト申ス、元就イヤ〳〵左ニアラズ、十死一生ノ軍ナレバ、勝テバ船ハタヤスカルベシ、万一ニ負バ二度戾ルベカラズト存ジ、手船ドモヲモ著戾シ候トテ、皆戾サレケル、サテ諸軍兵粮ツカヒテ、則敵陣ノ上ノ山ヘ旗ヲ指上ゲ、貝ヲ吹セ、戊亥ノ剋ニ自身時ガシラヲ上、敵ノ本陣ヘ切テカヽル、敵陣ニハ今宵ヨスベキトハ不思所ニ、不意ニ攻ラレテ塔ノ岡ノ尾張守ガ本陣ヘ寄ル、尾張守モ手合スベキヤウモナク、船ニ乗ラント思ヒ、大モトノ谷ヘ引退キ、

船ヲ尋ケレバ、周防ノ船頭ドモ、今朝能島來島ガ大船ドモ、乘廻リ追カケヽレバ、驚テ悉ク逃ケル間、尾張守手ヲ失テ、アヲノリヘ被退ケレドモ、船頭大濱ヲ始、是モ皆返シケル間、不叶シテ山々谷谷ヘ逃カクレケルヲ、爰ニ追詰カシコニ追込、被討兵數ヲ不知、城中ヨリモ隆景ヲ始切テ出テ、陶ガ兵大將三浦越中守ト、隆景ト鑓ヲ合、三浦越中ヲ討取ケル、

〔甲陽軍鑑品第三十二十下〕謙信は、あまがす近江守と云大剛の侍大將、雜兵千の備を、はる〲次にたて、直江二千の侍大將に、小荷駄奉行を申付、謙信は、壹万の人數ををしまはし、柿崎と云侍大將を一のさきにして、二の手に、輝虎指つゝみ、旗をうつぶけて、無二無三にかゝりて、ひとてぎりに、合戰をはじむる、其間に謙信旗本にて、信玄公、味方の右のかたへまはり、義信公の旗本五十騎雜兵四百餘の備を追立、信玄公の旗本へ、謙信の旗本、敵味方三千六七百の人數入亂て、ついつ、つかれつ、きつつ、きられつ、互に具足の、わたがみを取あひ、くんでころぶもあり、首をとつて立あがれば、其首をわが主なりと名乘て、鑓を持てつきふせ候を見ては、又その者をきりふせ候、甲州勢も手前に取紛、信玄公いづ方に御座候も存せず、越後勢も其通也、然ば萌黃の胴肩衣きたる武者、白手巾にてつぶりをつゝみ、月毛の馬に乘、三尺計の刀を拔持て、信玄公牀机の上に御座候所へ、一文字に乘よせ、きつさきはづしに、三刀伐奉る、信玄公たつて、軍配團扇にてうけなさる、後見れば、うちわに八刀瑕あり、御中間衆頭、廿人衆頭、都合廿騎の者ども、大がうのつはものゆへたちまはり、敵味方に知られざる樣に、信玄公をとりつゝみ、よる者共を伐拂申候中に、原大隅と申御中間頭、靑貝の柄の御鑓を持、月毛の馬に乘たる、萌黃の段子の胴肩衣武者をつけば、つきはづしたるにより、具足のわたがみをかけ、うちつれば、馬のさんづをたゝき、馬さうたつてはしり出候、後きけば、其武者輝虎なりと申候、

〔甲陽軍鑑品第三十四十一上〕北條氏康父子四万の人數と、信玄公壹万八千餘の勢にて御對陣あり、正月

中旬末の事なれば濱風いたく吹、敵味方共に寒き嵐に陣をはりがたし、信玄公御中間かしら衆に被仰付、駿府の酒をかひ、陣衆の道作り千人にもたせ、興津へ取よせ在之、釜鍋口もあつめ、今の酒をわかし、信玄公もひとつ聞召、御家中大身小身上下共に、此酒を振舞被成と被仰出候に付、武田の諸勢、此酒をのみがちに仕り候、信玄公各此酒をたべて、寒き事なきかと仰らるゝ、諸人寒き事御座なきと申者もあり、これにても寒く候と申者もあり、そこにて信玄公被仰、平地におひて酒をのみてさへ寒きにいはんや山の上なる氏康衆、酒ものまずして高所に陣屋はかけたりとも、人は山の麓へ下て可在之候、○中略只今のみたる酒の覺ざる内に、北條家の先衆かけたる陣屋を破、あぶなげもなく敵に一玄ほ付よと被仰付候て、甲州勢先衆薩埵山へせめあがり見れば、まことに陣屋には一二人ありて、本の人皆麓へおりてゐたるゆへ、いかにもやす／＼と陣屋を破、其上小田原先衆の武具馬具鎧、結句代物など甲州武田がたへ取候、○下略

〔信長記一ノ上〕義元合戰事

佐々隼人正千秋四郎ハ、御紋ノ旗ヲ待ウケ見ルト等ク、義元ガ先陣ノ勢山際ニ引ヘタルニ面モ不振懸入テ、北ヨリ南、西ヨリ東、懸破懸通切ツ切ラレツ散々ニ戰ケルガ、遂ニ二人ナガラ討レケレバ是ヲ始トシテ岩室長門守究竟ノ者共枕ヲ雙テ討レヌ、敵頸ヲ取テ義元ノ見參ニ入タリケレバ物始ヨシト悅テ、今朝ハ鷲津丸根兩城陷時ニ取乘、今又多ノ敵ヲ討捕事、兎ニモ角ニモ我鋒先ニハ、イカナル天魔鬼神也ト云共、タマルマジ、舞ヤ歌ヘヤトテ、酒飲テゾ居タリケル、角テ信長卿ハ中島へ移ラセ給ントシ給フニ、林佐渡守、池田勝三郎、毛利新介、柴田權六御轡ニ取付、アノキホウタル大勢ニ、此小勢ニテ懸ラセ給ンハ、無勿體ト聲々ニ留ケレバ、ヤア各聞給ヘ、無理ニ懸ラント云ニハ非ズ、彼凶徒等終夜大高城へ兵粮ヲ入ルヽ、ノミナラズ、今朝鷲津丸根兩城ニテ、兵共皆ツカレヌベシ、大將モ勝ニ乘テ、帶ヒモ解テ休ムラン、味方ハ亦城共オトサレ機ヲ失ヌ、殊ニ大

臨機道

軍ナレバ思侮テ、ヨモ平ニ懸ラントハ思ヒモヨラジ、角油斷シテ居ケル所ヲ、不意ニ起テ合戰ヲセバ、ナドカ勝ズト云事無ラン、以寡勝多トハ只加樣ノ時ヲ得ルノミナリ、是天ノ與フル所ニ非ヤ、然レバ此合戰ニハ、分捕高名スベカラズ、一向軍功ヲ事ニスベシト、理ヲ極メ義ヲ勵シ、例ノ大音聲ニテ仰ケレバ、尤ナリト人々思入タレバ、夜ノ明タル樣ニ心モ晴レテゾ見ヘタリケル、斯ル處ニ、早前田又左衞門尉利家其時ハ未犬トテ、生年十八歲ニナリシガ、首取テ參タリ、木下雅樂助、中川金右衞門尉、毛利河內守、同新介、佐久間彌五郞手々ニ首ヲ提ゲ〳〵參リケル、信長卿スハ首途ハヨキゾ、敵勢ノ後ノ山ヘ至テヲシマハスベシ、去程ナラバ山際迄ハ旗ヲマキ忍ヨリ、義元ガ本陣ヘ懸レト下知シ給ケリ、簗田出羽守進出テ、仰最可然候、敵ハ今朝鷲津丸根ヲ責テ、其陣ヲ不可易、然レバ此分ニ懸ヲセ給ヘバ、敵ノ後陣ハ先陣也、是ハ後陣ヘ懸リ合フ間、必大將ヲ討事モ候ン、只急ガセ給ヘト申上ケレバ、イシクモ申ツル者哉ト高聲ニ宣フ、各聞テ實ニ左モ有ントテ、彌軍ノ機ヲゾ勵シケル、折節黑雲頻ニ村立來テ、大雨頻ニ熱田ノ方ヨリ降來リ、石氷ヲ投グル如ニシテ、敵勢ヘ降カヽリ、霧海ヲタヽヘテ暗カリケレバ、殊ニ寄ル味方サヘ敵陣ニ近ヅクヲモ無覺束程ナレバ、敵ハ曾テ不知ケルモ理リ也、○中略敵アヒ間近ク成ケレバ、時ヲ噇ト上マツクロニ黑煙ヲ立喚叫デ馬ヲ入、四方八面懸破リ懸通テ、思ノ儘ニ追立突伏切ヒタシケレバ、餘ニ敵共アハテサハイデ、謀叛人ガ有テ角ヤト云者モアリ、イヤ〳〵喧嘩ゾト云者モ有テ、同士討ナドシテツカミ合フ者モアリ、斯リシ處ニ、義元ハ屛風引廻シ毛氈ヲシカセ、緩ヤカニシテ在々ケル處ヲ、服部小平太サシ懸リ、角ゾト名乘タルニ、意得タリト云儘ニ、サスガ最後ゾヨカリケル、打物拔テ小平太ガ膝ノ皿ヲワツタリケル、爾リシ處ニ、毛利新介ト名乘テ戰ケルガ、其マヽ撞伏遂ニ首ヲ給テゾ出タリケル、

〔太平記二十四〕三宅荻野謀叛事附壬生地藏事

丹波ヘハ山名伊豆守時氏三千餘騎ニテ押寄セ、高山寺ノ麓四方二三里ヲ屏ニヌリ籠テ、食攻ニシケル間、朝忠終ニ戰屈シテ降人ニ成テ出ニケリ、

〔後漢書光武一〕更始二年秋、光武擊銅馬於鄡、後漢將突騎來會淸陽、賊數挑戰、光武堅營、有出鹵掠者、輙擊取之、絶其糧道、積月餘日、賊食盡夜遁去、

〔太平記三十一〕八幡合戰事附官軍夜討事

同〇正平七年三月廿四日、宰相中將殿三萬餘騎ノ勢ヲ率シ、宇治路ヲ回テ木津川ヲ打渡リ、洞峠ニ陣ヲ取ラントス、是ハ河内東條ノ通路ヲ塞テ、敵ヲ兵粮ニ攻ン爲ナリ、

〔新撰長祿寬正記〕其歲〇寬正二年ノ夏ノ比迄、政長ヨリモ人衆ヲ不出、城ヨリモカヽラズ、對陣取テ有シガ、短氣成義就衆嶽山ニテ評定シケルハ、イツマデ加樣ニ兵粮詰ニセラレ、冥々ト有ランヨリ、弘川ヘ亂入、有無ノ合戰ニ運命ヲ見ルベシトテ、〇下略

〔松隣夜話下〕羽持ハ志津ケ嶽ノ要害ヘ籠城仕リケルガ、謙信公巡見坐マシ、四方ニ柵ヲ付獸路ヲ切塞ギ、鳥道ヲ絶シテ食責ニ爲レ、〇下略

〔陰德太平記六十四〕牛尾春重入鳥取城事

羽柴筑前守秀吉ハ、攻伐ノ烈氣遠近ニ卓立タルノミナラズ、計策ノ智慧又古今ニ傑出シタル大將ニテ御坐セバ、商買船數艘若州ヨリ因州ヘ差下シ、五穀ノ類ヲ買求ル事、其價倍蓰セリ、森下、中村等淺智ニシテ、是ヲ謀トハ夢ニモ不知、眼前ノ利欲ニ心耽テ、蓄貯タル兵糧共悉ク取出シ、糶トナスコソ方便ケレ、是ハ鳥取サル名城ナレバ、矢石ノ力ヲ以テ爭ンハ、容易ニ不得落、不如糧道ヲ斷ンニハトノ智謀ノ程コソ淺カラネ、

〔常山紀談六〕東照宮長久手の軍に勝せ給ひ、勢州蟹江の城前田與十郎を御攻あらんとて、打向はせ給ふ所に、加勢多く馳入けるを御覽じて、敵いかほども城中へ入よと仰られしを、酒井左衞門

斷水道

尉忠次承て、何とて押留給はぬぞやと申す、東照宮いかゞ思ふぞと御尋ありしかば、忠次、城は堅固なり、多勢こもりなば、爭か攻落すべき、いかなる御心か候と申すを聞召、大將謀を云やうや有と仰られけるが、其後援兵の乘來りける船を追拂はせ、粮道を絶せ給へば、粮忽乏しく成て城を渡し降參しけり、

〔太平記六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

爰ニ播磨國ノ住人吉河八郎ト云者、大將ノ前ニ來テ申ケルハ、此城ノ爲體、力責ニシ候ハヾ無左右不可落候、楠此一兩年ガ間、和泉河內ヲ管領シテ、若干ノ兵粮ヲ取入テ候ナレバ、兵粮モ無左右盡候マジ、倩思案ヲ廻シ候ニ、此城三方ハ谷深シテ、地ニ不續、一方ハ平地ニテ、而モ山遠ク隔レリ、サレバ何クニ水可有トモ見ヘヌニ、火矢ヲ射レバ、水彈ニテ打消候、近來ハ雨ノ降ル事モ候ハヌニ、是程マデ水ノ卓散ニ候ハ、如何樣南ノ山ノ奧ヨリ地ノ底ニ樋ヲ伏、城中ヘ水ヲ懸入ルヽ歟ト覺候、哀人夫ヲ集メテ、山ノ腰ヲ掘キラセテ御覽候ヘカシト申ケレバ、大將ゲニモトテ、人夫ヲ集メ、城ヘ續キタル山ノ尾ヲ、一文字ニ掘切テ見レバ、案ノ如ク土ノ底ニ、二丈餘リノ下ニ、樋ヲ伏セテ、側ニ石ヲ疊ミ、上ニ眞木ノ瓦ヲ覆テ、水ヲ十町餘ノ外ヨリゾ懸タリケル、此揚水ヲ被止テ後、城中ニ水乏シテ、軍勢口中ノ渴難忍ケレバ、四五日ガ程ハ、草葉ニ置ケル朝ノ露ヲ嘗メ、夜氣ニ潤ヘル地ニ身ヲ當テ、雨ヲ待ケレ共雨不降、寄手是ニ利ヲ得、隙ナク火矢ヲ射ケル間、大手ノ櫓二ツヲバ燒落シヌ、城中ノ兵水ヲ飲マデ十二日ニ成ケレバ、今ハ精力盡ハテヽ、可防方便モ無リケリ

〔太平記七〕千劍破城軍事

爰ニ赤坂ノ大將、金澤右馬助、大佛奧州ニ向テ宣ケルハ、〇中略是ヲ以テ此城ヲ見候ニ、是程纔ナル山ノ巓ニ、用水有ベシ共覺候ハズ、又アゲ水ナンドヲ、ヨソノ山ヨリ懸べキ便モ候ハヌニ、城中ニ水卓散ニ有ゲニ見ユルハ、如何樣東ノ山ノ麓ニ流タル溪水ヲ、夜々ニ汲歟ト覺テ候、アハレ宗徒

人々一兩人ニ仰付ラレテ、此水ヲ汲セヌ樣ニ、御計候ヘカシト被申ケレバ、兩大將此義可然覺候トテ、名越越前守ヲ大將トシテ其勢三千餘騎ヲ指分テ、水ノ邊ニ陣ヲ取セ、城ヨリ人ヲリ下リヌベキ道々ニ逆木ヲ引テゾ待懸ケル、楠ハ元來勇氣智謀相兼タル者ナリケレバ、此城ヲ拵ヘケル始、用水ノ便ヲミルニ、五所ノ秘水トテ、峯通ル山伏ノ秘シテ汲水、此峯ニ有テ滴ル事、一夜ニ五斛許也、此水イカナル旱ニモヒル事ナケレバ、如形人ノ口中ヲ濕サン事相違アルマジケレ共、合戰ノ最中ハ、或火矢ヲ消サン爲、又喉ノ乾ク事繁ケレバ、此水計ニテハ不足ナルベシトテ、大ナル木ヲ以テ、水舟ヲ二三百打セテ、水ヲ湛置タリ、又數百箇所作リ雙タル役所ノ軒ニ繼樋ヲ懸テ、雨フレバ霤ヲ少シモ餘サズ舟ニウケ入レ、舟ノ底ニ赤土ヲ沈メテ、水ノ性ヲ損ゼヌ樣ニゾ拵ケル、此水ヲ以テ縱ヒ五六十日雨不降トモコラヘツベシ、其中ニ又ナドカハ雨降事無ラント、了簡シケル智慮ノ程コソ淺カラネ、

〔簑輪軍記上〕長野信濃守業政卒去之事附簑輪城落城之事

天神の原にて信玄陣所をかまへ、日數重て城中〇中略伺ひける所に、彼高城ゟ水を汲し所は、城の西の窪谷合に水有、見銘寺と申寺之前より水を汲上營ける、信玄の家臣共見銘寺を宿所にいたし、彼高城より水汲に參りし人鐵炮にて打、又は矢先にかけ、一人も歸るものなし、城中軍兵共も水なけれ共、少もひるまず、白米にて馬の背をあらひ、水とみせ謀なしけれ共、中々水なくては不叶、〇下略

〔東遷基業三〕江遠三戰附一言坂退口二股城退去の事

濱松勢卒爾に河を越淺瀨を敎たり、此後はよく渉り瀨を知りたると申ける、さる程に二股城兵少も屈せず防ぎける故、武田家の士大將上野の松井田の城主小宮山丹後を始として、よき者多く討れけり、信玄下知して、竹把を間なくつけて、水の手をとれとや、信豐梅雪相共に謀りて、此城

西は天龍川に臨み、東には小河あり、天龍川の方に水矢倉ありて、城中に水を汲と見えたりとて、大綱を以て材木を數多筏に組て、川上より流しかけければ、水路をふさぎて水の手を取切けり、夜に入て敵兵數百城に近付て鐵炮を放つ、松平康定巨石に蔽れてこれを覘ひけるに、しばらく在て、敵又鐵炮をつるべかくるゆへ、城兵皆愕きけれども、康定獨事ともせずして退たりけり、かくて城中の水乏く成て大に困みければ、正照も力盡て降を乞、城を開き城兵悉く濱松に歸りけり、

〔總見記九〕長光寺城軍柴田瓶破事

佐々木六角承禎ハ、猶先敗ノ殘徒ヲ集メ、淺井朝倉ニ和睦シテ、信長公ニ敵對ス、同五月廿一日江州南郡ノ多勢ヲ率シ、承禎自身鯰江ノ城ヲ立テ、柴田修理進勝家ガ籠リ居タル長光寺ノ城へ押寄セ、四面ヲ取籠キ、コヽヲ先途ト攻ケル程ニ、城中ハ小勢ナリ、防カネ總構ヲ押破ラレ、本丸バカリニナリケレドモ、柴田サスガノ剛ノ者ニテ、少シモヒルマズ、毎度自身切テ出テ、寄手數多討取リケレバ、攻アグンデ見へケル處ニ、其近郷ノ百姓ドモハ、皆佐々木家ノ譜代ノ民ニテ、忽ニ心ヲ變ジ、承禎ニ告ケルハ、此城ニハ井水ナシ、城外ヨリ懸樋を以テ、水ヲカケ入候間、水ノ手ヲ御取候ヘ、城兵渇ニヨハリテ落申サント申ケレバ、承禎此由ヲ聞テ、頓テ水ノ手ヲ取切リ、樋ヲ掘塞ギケル程ニ、城中日々水トボシク渇命ニ及ブ、〇中略柴田ハ〇中略城中ノ水ヲ點檢スルニ此比マデコソ五月雨ノ軒ノ雫ヲタメ置テ、少シヅヽモ呑ダリシガ、今ハハヤ六月ノ炎天ニ雨水悉ツキハテヽ、只二石入ノ水瓶ニ、三ツナラデハ無リケリ、柴田是ヲ見テ、アツハレ水ヨ、此比中ノ諸卒ノ渇ヲヤメサセントテ、三ノ瓶ナガラ廣緣ニカキスヘサセ、大小上下ノ士卒ヲアツメ、夜モスガラ酒宴シテ、明朝ハ我等モ各モ、切テ出テ討死スベシ、トテモ渇シテ死ヌベキ上ハ、是ヲ最期ノ思出也、イザ各此水ヲ呑ツクシテ、此間ノ渇ヲ散ゼヨトテ、三ツノ瓶ノ水ヲ、人馬トモニ不殘呑テ、心ヲ和シ人數一統ニ思ヒキリ、只一筋ニ討死ヲ究ム、其後勝家自身長刀ノ柄ヲ以テ、石突ニテ件ノ三ノ水瓶

ヲ悉タヽキワリ、水ノ蓄是マデナリト云内ニ、短夜已ニ明ガタナレバ、明レバ六月四日ノ曉、松明ヲトボシツレ、勝家マツサキカケテ、城兵不殘切テ出ル、佐々木勢一戰ニ突崩サレテ、四角八方ヘ敗軍ス、

〔新田老談記下〕金山ニテハ一族家人集リ、所々ノ番所用心嚴シク構ヘ置、自然夜討ノ望モ不知トテ、逆茂木ヲ引、御城ニハ飢水ノ體ヲ敵ニ見セジトテ、池ノ土ヲ揚テ西南ニ塀ヲ俄ニ懸ケ廻シ、五十間曲尺ノ手ニ壁ヲ塗リ、馬共ヲ引取、白米ヲ以テ湯洗ノ體ニ催シ、水ニ飢ヲ敵ニ被謀ジトシタリケリ、

〔陰德太平記四〕丹比元就被圍青屋城事

元就〇中略此城ヲ攻ベシトテ、晝夜十四五日攻ラレケレ共、城中少モ不疼防戰ス、サレ共當城ニハ水乏シキ由、其聞エ有ケレバ、頓テ用水盡テ沒落スベキニ、サノミ手詰ニ攻ズ共可在トテ、陣々ヲ堅メ、三吉等ガ後詰ノ用心手堅シテ、數日ヲ經ラレケル所ニ、青屋出羽守入道友梅有功ノ老兵ナレバ、雪ノ如ナル精ノ米ヲ水桶ニ入、馬共引出シ、頭ヨリ草寸迄洒サセケル程ニ、餘處目ニハ水ニテ馬ノ頭冷シ、湯洗ヒスル樣ニ見エケレバ、寄手ノ者共、扨ハ思ノ外ニ、水ハ澤山ニ有ケリトゾ沙汰シケル、或時寄手ノ陣ニ在ケル井上甚左衞門光親ト云者、城ノ塀ノ手ヘ付テ、如何ニ青屋殿ニ可申コトノ候ト呼ハリケレバ、城中ヨリ何事ニテ候ゾト答、是ハ元就ガ家人井上甚左衞門光親ト申者ニテ候、吾常ニ耽酒候トイヘ共、元來范丹顏淵ニモ越タル孤貧第一ノ者ニテ候ヘバ、酒債在行處不自由、幾回モ欲解甲冑當候ヘ共、又何時カ合戰ノ候ベキト存ジ、空敷打過、唯酒家門外ニ流涎ノミニテ候、若城中ニ美酒ノ候ハヾ一盃賜ハリ候ヘカシ、枯腸ヲ沾ホシ候ナンズト、所望シタリケレバ、青屋扨ハ井上殿ニテ御入候ヤ、ヨクコソ御光來ニテ候ヘ、永々ノ籠城ニテ候ヘバ、蓄ヘ置タル薄酒共モ、皆空樽くミニテ候、然共濁酒ナドハ少々殘テ候ヤラン、一盞ノ空茶サヘ、醉人

籠城

ニテ候ヘバ先此方ヘ御入候ヘ、承及タル鼓舞ヲモ一サシ所望可仕ニト戯レテ、城中ヘ請ジイレ、饗應シテ數杯ヲ勸メケレバ、井上サシ受引受、長鯨ノ百川ヲ吸ガ如ニ痛飮ス、其後入道何ニテモ井上殿ニ御モテナシノ無候ニ、此入道ニ藤原ノ春津、晉ノ王濟ニモ超タル馬ノ癖有テ、如形ノ善馬ドモ、數多飼置テ候ヲ、御慰ニ御覽有ベウモヤ候ハント云ケレバ、井上其コソ望ム所ニテ候ヘト答フ、入道サラバトテ肥ニ肥タル駿馬共、六七匹引立サセ、扨蓄置タル水悉ク取出シ、井上ガ眼前ニテ、頭冷シ口洗セナドシタリケレバ、井上當城ニ水ナシト云ツルハ、虛言也ケリトゾ思ケル、良有テ暇乞テ立歸ケレバ、元就光親ヲ召テ、如何ニ汝ハ靑屋ニ酒所望シタリトナ、次デ面白キコトナレバ、城中ノ樣體能見ツラン、委敷語リ候ヘトアリケレバ、光親畏テ申樣、城中ニハ兵糧潤澤ニ有之ト見エテ、塀裏ニハ俵ヒシト積置テ候、又水ノ乏キナド風聞候シハ相違ニテ、澤山ニ候ヘバコソ、飼置タル馬共引出シ、頭ヒヤシ足洗ヒナド仕テ候ト申ス、諸人此ヲ聞テ、扨ハ水ハ乏カラザリケリ、此程朝夕馬ヲ洗ハセタルニ、水澤山ニツカヒツルモ理リ也ト云ケレバ、元就此城ニ水乏キ事ハ、古來人ノ所知也、靑屋入道耿恭ガ術ヲモ得ザレバ、拜井水ノ涌出スルコトモ有マジ、唯汝ニ水澤山ニ有ト知セン爲ニコソ馬ナド洗ヒテ見セツラメ、ソレ程ノ謀ニ絆サルヽコトヤ有ベキ、又俵積置タリトテ、深ク不可信、祖逖ガ囊土セシ謀無ニシモ非ズ、今三十餘日攻ナバ立所ニ飢渴ニ及ヌベシトテ、仕寄城樓ヲ組上、攻近付ケル程ニ、取出ノ丸一ツ攻破ラレテ、當城ノ沒落ニ可在トゾ見エニケル、

〔兵法雄鑑 守城 三十五〕籠城之大將可存五ケ條之事

一、國持の城へ籠、大軍にまかるヽ程ならば、無事にする事なかれ、和談すれば籠城の方負に成もの也、可爲將人は此處を能々可在工夫事、　二、城へ籠、降參せんと思はゞ、籠城する事なかれ、必前方に旗下に可成事、　三、籠城して大軍を引請るほどならば、負必切腹すべしと可思定事、　四、籠

城して大軍をひき請防戰可仕樣は、大軍我國に入防戰のごとし、五、城を堅固に取敷作法は、前に書之、故に略之、

〔兵法雄鑑 三十五 守城〕籠城可仕作法四十三ヶ條之事

一、米、大豆、薪、味噌、鹽、ぬか、わら、乾魚、海藻等に至まで、其不足なき樣に用意可仕事、　二、水の手其用意不足なき樣に可仕事、　三、矢石玉藥無不足樣に用意可仕事、　四、竹木普請の道具、無不足樣に用意可仕事、　五、敵城外へ押詰ざる以前に、城外近隣の竹木を切拂ひ、橋をたつべき事、　六、民家を放火し自燒可仕事、　七、城外の井水泉には不淨を沈め、水の手をたつべき事、　八、城外の近隣の竹木、ぬか、わら、鍋、釜、疊、莚、こもに至まで、城の內へ取可入事、　九、取入事不入物をば燒すつべき事、　十、門矢倉家何方にても、敵方より放火に便有處をば、泥をもつて可塗事、　十一、備は方圓の格を守るべし、先諸軍の人質を取て本城に籠、婦人壯男一處におく事なく、老弱の兵を撰て其つり合をよくし、是を守らしむべし、扱殘る人數をわけて四方を堅べし、各陰陽の備あつてをこたる事なかれ、　十二、足輕も二ツに分て陰陽の心持あつて、藥込の間なき樣に可仕事、　十三、遊軍、奇兵、殿りの備可在事、　十四、相印を多くし、相札を定め、相言葉夜々に替、おこたる事なかれ、姦人の紛あらんを可改事、　十五、番の交代は約束の貝鐘を以て其剋限を定べし、但諸手一度に代る事を不用、剋限に不同可在事、　十六、堅固の不堅固と云事可心得事、　十七、敵よせ來りて城を責るとも周章て防之事なく、克靜にして門壁を堅固に守り、鐵炮をうたせ、弓を射、木石をころばし、火矢をなげ、敵をころすべし、其遠近をはかり、無用の働をせいし、兵具のついへ、かんがへあるべき事　十八、籠城の砌、堅可法度事七ヶ條有、一、籠城の內食物は一汁一菜たるべき事、二、無用事して他陣他の役所へ不可行事、三、敵外へ寄來て後、城中よりみだりにたかき物をあげ、外へみゆる樣にすべからざる事、四、外よりの使みだりに取次事なかれ、但是は事に可依事、五に、飛書落し文

うる事あらば、ひらき見る事なかれ、則大將へ可指上事、六に、けいふしぎ萬事の吉凶一切云べからざる事、七に、高聲小うた大酒可禁事、　十九、敵竹たばをもつて仕寄ば、竹たばをひき崩す武略あるべき事、　廿、竹たばをひき崩すにわ、竹たばを崩す役人敵を押る備可在事、　廿一、時分をはかり夜討夜軍あるべき事、　廿二、寄手の備厚き薄きを見、敵の將の强弱知不知を可知事、　廿三、敵埋草をもつて仕寄ば、火矢をなげ、そのうめ草を可燒事、　廿四、水はじき水溜桶を處々に調置て、敵より火矢を放つけば可消事、　廿五、籠城かなひがたく、後詰の便もなき時わ、僞りて降をたつる事有、上は將を繫、中は敵をはろふ、下は難をさる、其手だて可在工夫之事、　廿六、俄に要害を構る謀略可在事、　廿七、僞て降參し敵をひき入て繫事、　廿八、十死一生の合戰可在事、　廿九、屛をかくべき樣わ、たかく外より手のとゞかぬ樣に、内をばうめていしの打よきやうにすべし、或は屛をたかくかけひかへ、木をろくにいたし、上に板をならべて二重さまを切、石打棚を用、各口傳、　卅、屛柱を立事、間四尺程置柱をば二本づゝ立、其間に矢間を切べし、堀入る事三四尺ひかへ木をつよくして、屛の、崩ざる樣にすべき事、　卅一、折屛わ無横矢城に用、敵折味方折可在口傳事、卅二、尤はしりひろきを嫌ふ、可在心得事、　卅三、門の扉板を打たるはだうづきによわし、角木をならべ打たるを可用事、　卅四、籠城の時は屛の覆は取たるがよし、口傳可在事、附、屛下地の竹きりそぎにして丈夫なるを用事、　卅五、屛裏に道を付、内もがり可在事、　卅六、屛の外の植物わ竹を植たるがよし、但籠城の時わ屛の外わ何も嫌ふ、敵寄不來前に切はろふべき事、　卅七、きり戶、屛かくし口、處々に可在事、付屛下埋門、かくし口、同堀の内の道、各可在口傳事、　卅八、山城には家家の軒に樋をかけ、處々に水ため桶を置、用水の支度可在事、　卅九、堀をほるべきには、障子を立るに口傳可在事、　四十、城下近邊の森林にね鳥の付にわ德有、城下水堀の水鳥何も可在心得事、

四十一、門は大方舉城戶よし、口傳可在事、　四十二、城内の植木は、藥の食物に成木を植べし、か

ざしじとみにあらざる木竹の外へ見ゆるを嫌ふ、可在口傳事、　四十三、城常に可在用意物は、一炭薪、のために用多く、土に埋て可置、二物を結にも何も丸打のもめん繩を用、三器物大方すゞなまりの道具を所用の事、四から竹にが竹藪有べき事、五鍛冶大工、城下の町屋に多く置べし、右何も口傳、

〔兵法一家言 十二籠城〕今時兵學家ノ諸説ヲ聞ニ、或云、既籠城ト云コトニ成テハ、城下ノ町人ハ論ズルニモ及バズ、近邊村々百姓共所持ノ金銀、米、錢、諸雜穀ヲ始トシテ、絹布、木綿、絲、麻、綿、茶、紙、炭、薪、油、蠟燭、味噌、鹽、酒、酢、醬油、醬菹、醯醢、醃魚、鱁鮧、鮑魚、其外銅、鐵、錫、鉛、鋸、鉋、斧、鉞、鋤、鍬、鎌、釘、鐵線等諸金物ニ至ルマデ悉皆借上テ城内ニ取リ入ルベシ、若運ヲ開ニ於テハ一倍ニシテ返スベキノ約束ヲスルコトハ定法ナリト云、愈右ノ如クナル法ナランニ於テハ不仁ノ甚キコトニテ、自己ヨリシテ己ガ百姓ノ心ヲ離シテ背カシムル樣ナル仕方ニテ、籠城ノ定法トスベキ事トモ覺エザル説ナリ、然レドモ皇國ノ諸侯、中古以來農政ヲ講明シテ百姓ヲ敎化スルノ道ヲ脩ムルコト無ク、足食足兵民信之ノ政ヲ疎略ニスルノ國俗ニテ、右ギ樣ノ暴逆ナル法ヲ行フニ非ラザレバ、兵粮、金銀、布帛、味噌、鹽、蠟燭、油等ヲ才覺スベキ仕方ノ無キ國多シ、故ニ今時万一籠城セザルコトヲ得ザルノ急難アルニ至リテハ、手早ク右ノ惡法ヲ行ヒテ手當ヲ嚴重ニスベシ、此ニ亦衰微空虛ナル國ニ於テハ籠城第一ノ要務ナリ、

〔軍法極秘傳書 六籠城〕兵粮つきたる事

城中粮つきたるには、松のあまはだを日ぼし、其あまはだ壹斤、人參壹兩、白米五合、右三種粉にして丸め、さてせいろうにてむし、是を人十五人におたゆる時、三日はつゞくなり、又水とぼしき時は、城へ横穴をほり、水をとる事尤なり、

〔日本書紀 十四雄略〕十四年四月甲午朔、天皇聞驚大怒、深責根使主、根使主對言、死罪々々、實臣之愆、詔曰、

根使主自今以後子々孫々八十聯綿莫預群臣之例、乃將斬之、根使主逃匿、至於日根造稻城而待戰、遂爲官軍見殺、

〔奥州後三年記上〕前陣の軍、すでにせめよりてたゝかふ、○中略將軍○源義家のつはもの、狄をかうふるものはなはだし、○中略ちからをつくして、せめたゝかふといへども、城○金澤柵おつべきやうなし、岸たかくして、壁のそばだてるがごとし、遠きものをば、矢をもつてこれを射、近きものは、石弓をはづして是をうつ、死するもの數をしらず、

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事

大介○三浦義明云ケルハ、敵ハ一定明日寄スベシ、佐殿○源頼朝ヨモ討レ給ハジ、急ギ衣笠ニ引籠テ軍セヨ、敵コハク共散々ニ蒐破テ、今一度佐殿尋奉ベシ、難通バ討死ヲセヨトイヘバ、義盛○和田申ケルハ、衣笠ハ馬ノ足立ヨキ所ナレバ、寄手ノ爲ニハ便アリ、忽ニ追落サレナン、奴田ノ城ハ三方ハ石山高シテ、馬モ人モ通ヒ難キ惡所也、一方ハ海口ニ道ヲ一ツ開タレバ、能キ者一二百人アラバ、縦敵何萬騎寄タリ共輙ク責落スベカラズト申、大介重テ申、奴田ト云ハ僅ノ小所人是ヲ不知、衣笠コソ聞ヘタル城ヨ、三浦ノ者共ハ、小坪ノ軍ニ打勝テ、軈衣笠ニ引籠テ、散々ニ戰テ討死シタリトイハヾ、嗚呼サル名譽ノ城アリ、其ニテヨキ所也ナド人モ沙汰スベシ、奴田城ニテ討死トイハヾ、奴田トハドコゾ、未知ト云ハレン事面目ナシ、只衣笠ニ籠レ、急ゲ〳〵ト云、義盛ガ云ケルハ奴田モ三浦モ皆御領内ナリ、就中軍ト申ハ身ヲ全シテ敵ニ物ヲ思ハセ、日數ヲ經テ戰フコソ面白ケレ、衣笠ニ籠リタリ共、ヤガテ追落サレナバ、無下ニ云甲斐ナシ、能々御計候ベシトイヘバ、大介腹ヲ立テヤヲレ義盛ヨ、今ハ日本國ヲ敵ニ受タリ、身ヲ全セント思トモ、何日何月カ有ベキ、縦命生ベク共、人ノイハンズル事ハ、三浦コソ一旦命ヲ延ントテ、サシモノ名所ヲ閙テ、奴田城ニ籠リタリケレト沙汰セン事モ口惜シ、若又百人ガ中ニ一人ナリトモ生殘テ、佐殿世ニ立給ヒタラン時、父

ヤ祖父ガ骸所トテ知行センニモ衣笠コソ知タケレ、軍ト云ハ所ニハヨラズ、手ガラ謀ニ依ベシ、荒野ノ中ニテ戰フトモ、能アヒシラハヾ不ㇾ可ㇾ負、石ノ櫃ニ籠タリ共、惡ク戰フナラバ難ㇾ叶、命惜クバ軍ナセソ、ナドヤ己ハ物ニハ覺ヌ、且ハ父ノ命也、老者ノ云言ハ驗アリ、義明ハ只一人也トモ、衣笠ニテ討死セン、敵ヨセズバ干死ニモ彼ニテコソ死ナメト大ニ嗔リ云ケレバ、力及バズ孫引連テ衣笠城ニ籠ニケリ、上總介弘經ガ弟ニ金田大夫ト云者ハ義明ガ聟ナリケレバ、七十餘騎ヲ引率シテ同城ニ籠ニケリ、都合勢僅ニ四百五十三騎ゾ有ケル、○中略廿九日ノ早朝、河越又太郎、江戸太郎、畠山庄司次郎等、大將軍トシテ、金子、村山、山口黨、兒玉、横山、丹黨、ヲシ綴黨ヲ始トシテ三千餘騎、衣笠ノ城ヘ發向ス、追手ハ河越、搦手ハ畠山、二手ニ分テ推寄ッヽ、時ノ音三箇度合テタメラフ處ニ、綴ノ一黨、當家ノ軍將三人マデ小坪ノ軍ニ討レテ、不ㇾ安思ケレバ、二百餘騎先陣ニ進テ、木戸口近ク攻寄タリ、城ノ内ニハ本ヨリ支度ノ事也、搔楯ノ上、精兵共一騎々々ヲ主附テ差詰々々射ケル矢ニ、馬共イサセテハ子落サレテ深田ニ落入、アガラン〳〵トシケル處ヲ、小竹ノ中ヨリ杖打ノ冠者原、鼻ヲ並テ細道ヨリツット出テ、打殺差殺シテ、乘替郎等多ク討レテ、生ル者ハ少ク、死ル者ハ多カリケレバ、綴黨モ不ㇾ叶シテ引退ク、

〔太平記三〕赤坂城軍事

遙々ト東國ヨリ上リタル大勢共、未近江國ヘモ入ザル前ニ、笠置城既ニ落ケレバ、無念事ニ思テ、一人モ京都ヘハ不ㇾ入、或ハ伊賀、伊勢ノ山ヲ經、或ハ宇治醍醐道ヲ要テ、楠兵衛正成ガ楯籠タル赤坂城ヘゾ向ケル、石河河原ヲ打過、城有様ヲ見遣バ、俄ニ誘ヘタリト覺テ、ハカバカシク堀ヲモホラズ、僅ニ屏一重塗テ、方一二町ニハ過ジト覺タル其内ニ、櫓二三十ガ程搔雙タリ、是ヲ見ル人毎ニアナ哀ノ敵ノ有様ヤ、此城我等ガ片手ニ載テ、投ルトモ投ッベシ、アハレセメテ如何ナル不思議ニモ、楠ガ一日コラヘヨカシ、分捕高名シテ、恩賞ニ預ラント思ハヌ者コソ無ケレ、サレバ寄手

三十萬騎勢共、打寄ト均ク、馬ヲ蹈放蹈放、堀中ニ飛入、櫓下ニ立雙テ、我劣ニ打入ントゾ爭ケル、正成ハ元來策ヲ帷幄中ニ運、勝事ヲ千里外ニ決セント、陳平張良ガ肺肝間ヨリ、流出セルガ如者ナリケレバ、究竟射手ヲ二百餘人城中ニ籠テ、舍弟ノ七郎ト、和田五郎正遠トニ、三百餘騎ヲ差副テ、ヨソノ山ニゾ置タリケル、寄手ハ是ヲ思ヒモヨラズ、心ヲ一片ニ取テ、只一揉ニ揉落サント、同時ニ皆四方切岸下ニ著タリケル處ヲ、櫓上サマノ陰ヨリ、サシツメ引ツメ鏃ヲ支テ射ケル間、時程ニ手負死人千餘人ニ及リ、東國勢共案ニ相違シテ、イヤ〳〵此城爲レ體、一日二日ニハ落マジカリケレバ、暫陣々ヲ取テ、役所ヲ構、手分ヲシテ合戰ヲ致セトテ、攻口ヲ少引退、馬鞍ヲ下、物具ヲ脫テ、皆帷幕中ニゾ休居タリケル、楠七郎、和田五郎、遙山ヨリ直下シテ、時剋ヨシト思ケレバ、三百餘騎ヲ二手ニ分、東西山木陰ヨリ、菊水旗二流、松嵐ニ吹靡カセ、閑ニ馬ヲ步マセ、煙嵐ヲ捲テ推寄タリ、東國勢是ヲ見テ、敵カ御方カト、タメラヒ怪ム處ニ、三百餘騎、勢共、兩方ヨリ時ヲ咄ト作テ、雲霞如ニ靉ヒタル三十萬騎ガ中ヘ、魚鱗懸懸入、東西南北ヘ破テ通、四方八面ヲ切テ廻ニ、寄手大勢アキレテ陣ヲ成カ子タリ、城中ヨリ三木戸ヲ同時ニ颯ト排テ、二百餘騎、鋒ヲ雙テ打テ出、手崎ヲマワシテ散々ニ射ル、寄手サシモノ大勢ナレドモ、僅ノ敵ニ驚騷テ、或維ゲル馬ニ乘テアヲレドモ進マズ、或弛セル弓ニ矢ヲハゲテ射ントスレドモ不レ被レ射、物具一領ニ二三人取付、我ヨ人ノヨト引遇ケル其間ニ、主被レ打ドモ從者ハ不レ知、親被レ打共子モ不レ助、蜘子ヲ散ガ如、石河河原ヘ引退、〇中略彼赤坂城ト申ハ、東一方コソ、山田畔重々ニ高、少難所ノ樣ナレ、三方ハ皆平地ニ續キタルヲ、堀一重ニ屛一重塗タレバ、如何ナル鬼神カ籠リタリ共、何程事カ可レ有ト、寄手皆是ヲ侮、又寄ルト均、堀中切岸下マデ攻付テ、逆木ヲ引ノケテ打テ入ントシケレドモ、城中ニハ音モセズ、是ハ如何樣昨日如、手負ヲ多ク射出テ漂フ處ヘ、後攻勢ヲ出シテ、揉合ンズルヨト心得テ、寄手十萬餘騎ヲ分テ、後山ヘ指向テ、殘二十萬騎、稻麻竹葦如城ヲ取卷テゾ責タリケル、掛ケレドモ、城中ヨリハ矢一筋ヲ

モ不射出、更人有トモ見ヘザリケレバ、寄手彌氣ニ乘テ、四方ノ屏ニ手ヲ懸、同時ニ上越ントシケル處ヲ、本ヨリ屏ヲ二重ニ塗テ、外屏ヲバ切テ落樣ニ拵タリケレバ、城中ヨリ四方屏釣繩ヲ、一度ニ切テ落タリケル間、屏ニ取付タル寄手千餘人壓ニ、被打タル樣ニテ、目計ハタラク處ヲ、大木大石ヲナゲ懸ナゲ懸打ケル間、寄手又今日軍ニモ、七百餘人被討ケリ、○中略今度ハ質ヲ替テ可攻トテ、面面ニ持楯ヲハカセ、其面ニイタメ皮ヲ當テ、輙ク被討ヌ樣ニ拵テ、カヅキツレテゾ責タリケル、切岸高サ堀深サ、幾程ナケレバ、走懸テ屏ニ著ン事ハ、最安覺ケレ共、是モ又釣屏ニテヤアラント危ミテ、無左右屏ニハ不著、皆堀中ニヲリ漬テ、熊手ヲ懸テ屏ヲ引ケル間、既ニ被引破ヌベウ見ヘケル處ニ、城内ヨリ柄一二丈長杓ニ、熱湯湧翻リタルヲ酌テ懸タリケル間、甲ノ天返、綿ガミノハヅレヨリ、熱湯身ニトヲツテ燒爛ケレバ、寄手コラヘカ子テ、楯モ熊手モ打捨テ、バツト引ケル見苦サ、矢庭ニ死ルマデコソ無レドモ、或手足ヲ被燒テ立モ不揚、或五體ヲ損ジテ病ニ臥ル者、二三百人ニ及ベリ、寄手質ヲ替テ責レバ城中工ヲ替テ防ケル間、今ハ兎モ角モ可爲樣ナクシテ、只食攻ニスベシトゾ被議ケル、カヽリシ後ハ混軍(ヒタスラ)ヲヤメテ、己ガ陣々ニ櫓ヲカキ、逆木ヲ引テ、遠攻ニコソシタリケレ、是ニコソ中々城中兵、慰方モナク、氣モ疲ヌル心地シテケル、

〔太平記七〕千劒破城軍事

千劒破城ノ寄手ハ、前ノ勢八十萬騎ニ、又赤坂ノ勢吉野ノ勢馳加テ、百萬騎ニ餘リケレバ、城ノ四方二三里ガ間ハ、見物相撲ノ場ノ如ク打圍テ、尺寸ノ地ヲモ餘サズ充滿タリ、○中略此勢ニモ恐ズシテ、纔ニ千人ニ足ヌ小勢ニテ、誰ヲ憑ミ何ヲカ待共ナキニ、城中ニコラヘテ防ギ戰ヒケル楠ガ心ノ程コソ不敵ナレ、此城東西ハ谷深ク切テ、人ノ上ルベキ樣モナシ、南北ハ金剛山ニツヾキテ、而モ峰峙タリ、サレドモ高サ二町計ニテ、廻リ一里ニ足ヌ小城ナレバ、何程ノ事カ有ベキト、寄手是ヲ見侮テ、初一兩日ノ程ハ、向ヒ陣ヲモ取ズ、責支度ヲモ周意セズ、我先ニト城ノ木戸口ノ邊マ

デカヅキツレテゾ上タリケル、城中ノ者共少モサハガズ靜マリ歸テ、高櫓ノ上ヨリ大石ヲ投懸投懸、楯ノ板ヲ微塵ニ打碎テ、漂フ處ヲ差ツメ〳〵射ケル間、四方ノ坂ヨリコロビ落、落重テ手ヲ負、死ヲイタス者、一日ガ中ニ五六千人ニ及ベリ、○中略同三年元弘三月四日、關東ヨリ飛脚到來シテ、軍ヲ止テ徒ニ日ヲ送ル事、不可然ト被下知ケレバ、宗徒ノ大將達評定有テ、御方ノ向ヒ陣ト、敵ノ城トノ際ニ、高ク切立タル堀ニ橋ヲ渡シテ、城へ打入ラントゾ巧マレケル、爲是京都ヨリ番匠ヲ五百餘人召下シ、五六八九寸ノ材木ヲ集テ、廣サ一丈五尺、長サ二十丈餘ニ、梯ヲゾ作ラセケル、梯既ニ作リ出シケレバ、大繩ヲ二三千筋付テ、車ヲ以テ卷立テ、城ノ切岸ノ上へゾ倒シ懸タリケル、○中略楠兼テ用意ヤシタリケン、投松明ノサキニ火ヲ付テ、橋ノ上ニ薪ヲ積ルガ如クニ投集テ、水彈ヲ以テ、油ヲ瀧ノ流ルヽ樣ニ懸タル間、火橋桁ニ燃付テ、溪風炎ヲ吹布タリ、憖ニ渡リ懸リタル兵共、前へ進ントスレバ、猛火盛ニ燃テ身ヲ焦ス、歸ントスレバ、後陣ノ大勢、前ノ難儀ヲモ不云支タリ、ソバへ飛ヲリントスレバ、谷深ク巖ソビヘテ肝冷シ、如何セント身ヲ揉テ推アフ程ニ、橋桁中ヨリ燃折テ、谷底へドウト落ケレバ、數千ノ兵同時ニ猛火ノ中へ落重テ、一人モ不殘燒死ニケリ、

〔太平記十五〕三井寺合戰幷當寺撞鐘事附俵藤太事

額田、堀口、江田、大館、七百餘騎ニテ、逃ル敵ニ追スガツテ、城ノ中へ入ントシケル處ヲ、三井寺ノ衆徒五百餘人、關ノ口ニ下リ塞テ、命ヲ捨鬪ケル間、寄手ノ勢百餘人、堀ノ際ニテ被討ケレバ、後陣ヲ待テ不進得、其間ニ城中ヨリ木戸ヲ下シテ、堀ノ橋ヲ引ケリ、義助是ヲ見テ、無云甲斐者共ノ作法哉、僅ノ木戸一ニ被支テ、是程ノ小城ヲ責落サズト云事ヤアル、栗生、篠塚ハナキカ、アノ木戸取テ引破レ、畑、亘理ハナキカ、切テ入レトゾ被下知ケル、栗生、篠塚是ヲ聞テ、馬ヨリ飛デ下リ、木戸ヲ引破ラント走寄テ見レバ、屛ノ前ニ深サ二丈餘リノ堀ヲホリテ、兩方ノ岸屛風ヲ立タルガ如クナ

ルニ、橋ノ板、ヲバ皆刎迦(ハツ)シテ、橋桁計ゾ立タリケル、

〔箕輪軍記 下〕箕輪滅安中松井田落城之事

甲軍無二無三に責かゝる、城中〇箕輪城より矢を射る事雨のごとく也、鐵炮箭透間もなし、寄手是を見て、木戸逆門木を引破り操會ける、兼て構置たる大木數千木釣繩を切落しかけ、塀起と敵ははね木にてはねかへし、箭をはなしければ、鱗のごとく死人重り、軍兵共冑の鉢を打碎かれ、手足を損じ、忽に手負死人七百六十人餘、〇下略

〔淺井三代記 四〕淺井夜合戰の事

小谷の城には、亮政千三百五十餘騎にて楯籠りけるが、寄手八千餘騎にて、取圍五六日が間は、晝夜のさかひなく喚叫で攻給ひけれども、味方少もたゆまず、つまり〳〵より矢種をおしまず、射出しければ、寄手左右なく攻入る事もならざりけり、〇中略追手搦手三方に廻て攻入ける、東の手へ向ひし磯野伊豫守員吉、同右衛門大夫員詮、子息源三郎爲員、東野左馬助など、はや總構討破込入ける、城中にはこれを見て、すは東の手は敵總構まで込入たるぞ、つみ石を落せと有ければ、山のかさより爲利秀元心得たりとて、石を落て大木を切おとせば、切岸まで寄たる磯野が兵共三十餘人、矢場に討殺されて、すゝみかねてぞ見えにける、〇中略元來亮政此城を立建る時より如此被取圍給はん事は覺悟なり、から堀深くほり立、其上は岸なり、高さ四丈計も土ひきおとし手を立たるがごとくなり、其上に石を所々に置、大木を横たへ、ひかへ繩を付、敵近々に寄來る時、繩を切とひとしく敵の上へ落かゝるやうに拵へ置、それのみならず、種々の方便をたくみおき敵近付ば、平討にうたるゝやうにしたりければ、寄手攻あぐみ、徒に日をぞ送りける、

〔東照宮御實紀附錄 三〕天正元年正月、武田信玄三州野田の城を責ける時城將菅沼新八郎定盈よりかくと注進す、君我やがて援兵を出さむまでは、味方の城々堅く持抱ゆべし、すべて籠城は橋

斷橋而拒守

橋との上意にて、直に軍を笠頭山までも進め玉へり、後に本多豐後守廣孝はし〱と仰られしは、いかなる儀なるかとうかゞひしに、まづ籠城の心得、門を堅め弓銃をくばり、敵を城門の橋まで、思ふ圖に引よせ、俄に打立射立、敵の陣伍亂るゝ樣を見すまして、門より打て出、一散して輕く引とれば、城は持よきものなり、さるに籠城とだにいへば、まづ橋を引て自ら居ずくまるゆゑ、兵力振はずして遂に攻落さるゝなりと仰けり、

〔明良洪範續篇　五〕關ケ原ノ時、伏見御城ヨリ籠城ノ事抔委細ニ申上ケル、其使ノ者ニ、ハネ橋ハ如何致セシヤト御尋成サレ候ヘバ、早先達テ引候由申上ル、權現樣仰ニハ、此度ノ籠城ハ叶難カルベシ、其故ハ敵ハ大軍ナレバ、ハネ橋ヲ引テ入ベキ道無ト見タランニハ、四方ヨリ一度ニ攻入ベシ、左候ハヾ小勢ノ城兵防ギ難カルベシ、ハネ橋ヲ引ズシテ置ナバ、諸軍渡サントシテ、一所ニ心ヲ寄ベシ、其時ニハ防ギ安カルベシ、カクテコソ籠城モ成ベケレト仰ナリ、

〔日本書紀　天武二十八〕元年七月辛亥、男依等到瀨田、時大友皇子及群臣等、共營於橋西、而大成陣、不見其後、旗旘蔽野、埃塵連天、鉦鼓之聲聞數十里、列弩亂發、矢下如雨、其將智尊率精兵、以先鋒距之、仍切斷橋中、須容三丈、置一長板、設有蹈板度者、乃引板將墮、是以不得進襲、於是有勇敢士、曰大分君稚臣、則棄長矛、以重擐甲、拔刀急蹈板度之、便斷著板綱、以被矢入陣、衆悉亂而散走之不可禁、將軍智尊拔刀斬退者、而不能止、因以斬智尊於橋邊、則大友皇子、左右大臣等、僅身免以逃之、男依等卽軍于粟津岡下、

〔源平盛衰記　十五〕宇治合戰附賴政最期事

宮〇以仁王ノ兵ハ、橋ノ西爪ニテ差詰々々射ケレバ、面ヲ向ガタシ、平家ノ軍兵ハ、東ノ爪ニ轡ヲ並テ如雲霞、橋ハ狹シ人ハ多、我劣ラジ〱ト上ガ上ニ籠入ケリ、未曉ノ事ナルニ、上河霧立テ暗サハ闇シ、橋ヲサヘ引タリケレバ、先陣ニ進者、橋ヲ引タルゾ〱ト、口々ニヨバヽリケレ共、指モトヾ

メク中ナレバ、唯我先ニト馳コミケル程ニ、〇下略。

〔源平盛衰記三十五〕範頼義經京入事

元暦元年正月廿日、大手搦手宇治勢多ニ著、九郎義經河端タニ推寄見給ヘバ橋板ヲ破取テ、向ノ岸ニ垣楯ニ掻、橋ニ構タリ、水ハ深サ増テ底不見、其上亂株逆茂木隙ナク打テ、大綱小綱引張テ流シ懸タレバ、鵜鴨ナドノ水鳥モ、輙クハ通ルベシ共見ザリケリ、川ノ耳分内狭シテ、打臨タル者四五千騎ニハ不過、二萬餘騎ハ寄附ベキ所ナクシテ、只徒ニ後陣ニ引ヘタリ、河ノ様ヲモ見ズ、橋ヲ引タルモ知ヌ者ノミ多ケレバ、渡ルベキ評定ニモ不及ケリ、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十三日丙寅、相州〇北條時房以下自野路相分于方々之道、相州先向勢多之處、曳橋之中二箇間並楯鬬戰、官軍并叡岳惡僧、列立招東士、仍挑戰爭威云云、酉刻毛利入道、駿河前司向淀手上等、武州陣于栗子山、武藏前司義氏、駿河次郎泰村不相觸武州向宇治橋邊、始合戰、官軍發矢石如雨脚、東士多以中之、籠平等院、及夜半、前武州以室伏六郎保信等進于武州陣云、相待曉天可遂合戰由存處、壯士等進先登之餘、已始矢合、被殺戮者太多者、武州乍驚、陵甚雨向宇治、此間又合戰、東士廿四人忽被疵、官軍頻乘勝、武州尾藤左近將監景綱、可止橋上戰之由、加制之間各退去、武州休息平等院、

〔太平記十四〕將軍御進發大渡山崎等合戰事

去程ニ正月七日ニ、義貞内裏ヨリ退去シテ、軍勢ノ手分アリ、勢多ヘハ伯耆守長年ニ出雲、伯耆、因幡三箇國ノ勢二千騎ヲ副テ向ケラル、〇中略宇治ヘハ楠木判官正成ニ、大和、河内、和泉、紀伊國ノ勢五千餘騎ヲ副テ向ケラル、橋板四五間ハネ迦シテ、河中ニ大石ヲ疊アゲ、逆茂木ヲ繁クエリ立テ、東ノ岸ヲ高ク屛風ノ如クニ切立タレバ、河水二ニワカレテ、白浪漲リ落タル事、恰モ龍門三級ノ如也、敵ニ心安ク陣ヲ取セジトテ、橘ノ小島、槇島、平等院ノアタリヲ一字モ殘サズ燒拂ケル程ニ、魔

風大厦ニ吹懸テ、宇治ノ平等院ノ佛閣寶藏忽ニ燒ケヽル事コソ淺猿ケレ、(中略)大渡ニハ新田左兵衞督義貞ヲ總大將トシテ、里見、鳥山、山名、桃井、額田、田中、籠澤、千葉、宇都宮、菊池、結城、池風間、小國、河內ノ兵共一萬餘騎ニテ堅メタリ、是モ橋板三間マバラニ引落シテ、半ヨリ東ニカイ楯ヲカキ櫓ヲカキテ川ヲ渡ス敵アラバ橫矢ニ射、橋桁ヲ渡ル者アラバ、走リヲ、以テ推落ス樣ニゾ構ヘタル、馬ノ懸上リニ逆茂木ヒシト引懸テ、後ニ究竟ノ兵共、馬ヲ引立々々並居タレバ、如何ナルイケズキ、スルスミニ乘ル共、コヽヲ渡スベシトハ見ヘザリケリ、

燒炭火而拒守

〔日本書紀(三神武)〕戊午年九月戊辰、天皇陟彼菟田高倉山之巓、瞻望城中、時國見岳上則有八十梟帥、(梟帥此云多稽屢)又於女坂置女軍、男坂置男軍、墨坂置焃炭、其女坂、男坂、墨坂之號、由此而起也、

〔加澤平次左衞門覺書〕北條氏直出張矢澤禰津手柄之事附剛田下總馬乘捕事

同月(天正十年九月)廿九日辰ノ一天ニ、氏邦先陣トシテ一萬五千餘騎、田北ノ原ヘ押寄タリ、矢澤ナリヲシヅメテ待カケヽレバ、敵城ヲ十重二十重ニ取卷、鯨波ヲドットアゲニケル、矢澤兼テ計シ事ナレバ、諸方入木戶口邊ニテ、薪澤山積置火ヲタカセ、敵木戶口ヘ押寄、塀ノ內ヘ乘入、唯一時ニ屏打ヤブリ、矢澤ヲ生捕ニセント罵リ、トリ分口四ノ門ヘ押寄スル、長尾ノ案內者ニ參リタル矢野兵部左衞門ハ、岡谷平內、上原淺右衞門塚本ト戰ヒ、岡谷一人ハ討レケリ、其時焚タル炭ノ火ヲ百姓ノ役ニ、板ニテナゲ出シケレバ、寄手不叶シテ引退ク、其時城中ヨリ二千餘人一度ニ切テ出ケレバ、一萬五千ノ兵色メキケル程ニ、氏邦采配ヲ振テ、ヒクナ〳〵ト下知セラレケレドモ、大勢ノ引立タル事ナレバ耳ニモ入レズ、白井野原ヘ一時ニ引上タリ、

鐵菱

〔倭訓栞(前編二十五ひし)〕軍用にいへるは、通鑑に鐵菱と見えたり、

〔和漢三才圖會(二十兵器)〕鹿角木(さかもぎ)(中略)

鐵菱角　如鐵蒺藜布水中刺人馬足、天旱水淺則亦布之、

〔陸奥話記〕十五日(○康平五年九月)酉剋到著、圍廚川嫗戸二柵、相去七八町許也、結陣張翼終夜守之、件柵西北大澤、二面阻河、河岸三丈有餘、壁立無途、其內築柵自固、柵上構樓櫓、鋭卒居之、河與柵間亦掘隍、隍底倒立刃、地上蒔鐵、亦遠者發弩射之、近者投石打之、適到柵下者、建沸湯沃之、振利刃殺之、

〔承久記上〕武田小五郎ガ郎等武藤新五郎ト云者アリ、童名荒武者トゾ申ケル、勝レタル水練ノ達者也、是ヲ呼デ大炊ノ渡、瀬踏シテ、敵ノ有樣能見ヨトテ指遣ハス、新五郎瀬ブミシヲホセテ歸來テ、瀬踏コソ仕テ候ヘ、但河ノ西方岸高シテ輙ク馬ヲアツカヒ難シ、向ノ岸渡瀬七八段ガ程菱ヲ種流シ、河中ニ亂株打ツナハヘ、逆茂木引テ流懸、四五段ガ程菱拔捨テ流シヌ、綱キリ逆茂木切テ、馬ノアゲ所ニハシルシヲ立テ、其ヲ守ツテ渡サセ給ヘトゾ申ケル、

〔嘉吉物語〕あかまつ方にもおもひさだめたる事なれば、今さらさわぐべき事にもあらずとて、書寫坂本にまし〳〵けるが、あまりに平要害なればとて、木の山白はたの城をこしらへて、亂杭さかも木くるまびしをうへたて、ほりよこぼり重々にこしらへて、まことにおびたゞしきふせいなり、

〔阿州將裔記〕之長

初は號三好主膳正、細川氏に仕へて、後に號筑前守、三好に在城す、三好天下に名をあらはす事は、文明のころ北國勢二萬餘騎にて、都へせめのぼりしを、細川對陣のとき、三好三千騎にてさきがけして、洛外にて合戰す、北國勢のはかりごとに、車びしといふ物を、先手の者に負つ宛もたせ、にぐるまねをして道にまき、其ひしを敵にふませ、たゞよふ處を討取べしとたくみけるが、三好勢のすくなきをみて、味方の同勢は待まじきに、先手の勢ばかりにて三好を討とれとて、かの車びしをなげすてかゝり來る、三好は小勢なりといへども、各こゝろをひとつにして、鑓の柄を四方竹にこしらへて、之長が下知にまかせ、一同にかゝりければ、北國勢敗北しけるが、捨置たりける

逆茂木 亂杭

車びしをふみたて周章しけり、

〔豐薩軍記 八〕鶴崎城合戰之事

妙麟〔○嫡統增祖母、鶴崎城守將、中略、〕堀ヲ藥研堀ニシテ菱ヲ植ヘ、柵ヲ振リ、柵ノ外ニハ諸所ニ陥穴ヲ拵ヘ、其上ヲ平地ト成テ、城中ヨリ打出ン時、目驗ノ杭或ハ篠ヲ捨置ケル、〔○下略〕

〔足利季世記 七義秋公方記〕御祝ノ御能之事

信長衆〔○中略〕堺南北エモ夫錢二万貫可出ト使タテラルレバ、中々叶フマジキ由返事シケレバ、其儀ナラバ責トルベシト聞エケル間、堺衆トテモ責ラレバ用意セヨトテ、能登屋べニヤ大將トシテ、三十六人會合衆トテ庄官アリ、彼等一味同心シテ則櫓ヲ上堀ヲホリ、北ノ口々ニヒシヲ埋テ待カケヽレバ、先捨置ベシトテ歸リケル、

〔播州佐用軍記 上〕熊見川渡ニテ寄手ヲ防事

高嶋七郎兵衛尉是ヲ見テ、天晴敵哉、志ノ武士成リ、弓鐵砲ニテハ打ベカラズ、此敵之轉化ヲバ、某防テ見ントテ云儘ニ、革ノ袋ニ入テ持タル鐵菱竹菱ヲ、退後細道ニ百歩計ガ程ヨリ蒔タリケル、

〔別所長治記〕丹生山夜討淡河軍

淡河彈正ハ一族郎等ヲ集申ケルハ、〔○中略〕誘打出テ敵ヲ防ガン用意セメトテ、一族郎等五六十人足輕人夫三百人、皆諸道具ヲモタセ、日々ニ城ヲ出、敵ノ可寄來道ヲ堀切、落ヲ拵、或馬サクリ、車菱ヲマカセ、逆茂木大綱ヲ張ケル、掛ル處ニ何者カ云ケン、今朝彈正忠城ヲ出、油斷ジテ普請ヲ申付ルノ由告、秀吉、大將小勢ニシテ城ヲ出ル事、天ノ與ル所也ト、舍弟小一郎秀長ニ五百餘騎二手ニ分、俄ニ押寄既ニ掛入ントシケルガ、堀切、馬サクリ、車菱ニサヽヘラレ、少シタヾヨフタリ、

〔倭訓栞 中編九〕さかもぎ　鹿砦をいふ、逆木と書たれど、もぎはもがり也、かり反ぎ也、もがりは虎落の類也、棘木を用う、鹿角の形に出たる木を埋み馬脚を障ふといへり、

〔倭訓栞中編二十八〕らんぐひ　亂杭とかけり、逆もぎの類也、

〔和漢三才圖會兵器二十〕鹿角木(さかもぎ)　鹿砦、左加毛木

三才圖會云、鹿角木擇堅木如鹿角形者、斷之長數尺、埋入地深尺餘、以閡馬足、城外遍植之、

〔備前老人物語〕一逆茂木とは、或は門或は用心の構ある所に、大なる木を引かけて、枝を切とがらかし、根のかたは内になしおく事なり、互にむつかしき物也といひし人あり、

〔源平盛衰記二〕額打論附山僧燒淸水寺并會稽山事

同八月元年〇永萬九日、山門ノ大衆下洛スト云披露アリ、〇中略大夫尉貞能以下甲冑ヲ著シテ、皇居ノ四面ヲ守護ス、陣ノ口ニハ雜役ノ車ヲ以、逆茂木ニ引、隨兵東西ニ馳迷テ、偏ニ迷惑ノ體也、

〔源平盛衰記三十六〕一谷城構事

平家ノ人々ハ讃岐國屋島ヲバ漕出シテ、攝津國ト播磨トノ境、難波潟一ノ谷ニ籠ケル、〇中略陸ニハ此コ彼ニ堀ヲホリ、逆茂木ヲ引、〇下略

〔源平盛衰記三十七〕景高景時入城并景時秀句事

眞鍋五郎ハ櫓ヨリ下、河原兄弟二人〇高直、盛直ガ首ヲ手鉾ニ貫、城戸ノ上ニ昇、高ク捧テ源氏ノ殿原是ヲ見ヨ、進敵ヲバ角コソ取、ツヾケ〳〵ト招タリ、梶原是ヲ聞、口惜人共也、ツヾク者ガナケレバコソ、兄弟二人ハ討レタレトテ、五百餘騎ニテ押寄ツヽ、足輕四五十人ニ楯ツカセテ、曳聲出シテ逆茂木ヲ引除、〇中略櫓ヨリハ逆母木ヲ引セジト、矢衾ヲ造テ是ヲ射ル、寄手ハ是ヲ引セント差詰差詰矢倉ヲ射ル、〇中略寃ケレ共足輕共一ツ二ツト引程ニ、逆母木ヲバ遂皆引除ニケリ、

〔太平記十四〕將軍御進發大渡山崎等合戰事

去程ニ正月元年〇延元七日ニ、義貞内裏ヨリ退出シテ軍勢ノ手分アリ、勢多ヘハ伯耆守長年ニ、出雲、

伯耆、因幡三箇國ノ勢、二千騎ヲ副テ向ケラル、供御ノ瀬、ゼヽガ瀬二箇所ニ太木ヲ數千本流シ懸テ、大綱ヲハヽリ、亂グヒヲ打、引懸々々ツナギタレバ、何ナル河伯水神ナリ共、上ヲモ游ガタク、下ヲモ潜難シ、

〔播州佐用軍記 上〕政範籠城之事

其後評議有テ、足輕大將小寺庄之助、別所左門、丸山八助、此三人ニ仰テ、熊見川ノ上下有梗苅屋マデノ川筋ノ渡船迄奪取碎テコソハ捨タリキ、加之敵ノ渡ラント思フ瀬毎ニハ、亂杭打テ水底ニハ藤綱多張置タリ、

〔難波戰記 七〕穢多崎之砦乘取事

同年〇慶長十九十一月十九日、兩將軍家〇德川家康同秀忠住吉ニ於テ軍議アリ、其後城中〇大坂城ノ要害ヲ尋シメ玉フニ、〇中略北ニハ湖水アリ、淀川ノ流澱ル水瀧成テ沆瀁タリ、水ノ底ニハ亂杭逆茂木ヲ引テ流シ掛タリ、

〔書言字考節用集 二乾坤〕虎落モガリ 顏師古云、以竹篾相連遮落之也、 杪欏同 儲胥同出也 摸壢同俗字

〔倭訓栞 前編 三十三 毛〕もがり 竹を並べ行馬のごとく、毎節に枝を存し、物をかけほすに便りするをいふは、曲りの義なるべし、或は茂架籬と書り、虎落此に近し、

〔漢書 四十九 鼂錯傳〕錯復言守邊備塞勸農力本當世急務二事曰、〇中略高城深塹、具藺石、布渠荅、〇註略復爲一城其内、城間百五十歩、要害之處、通川之道、調立城邑、毋下千家、〇註略爲中周虎落、鄭氏曰、虎落者外蕃也、若今時竹虎也、蘇林曰、作虎落於塞要下、以沙布其表、且視其跡、以知匈奴來入、一名天田、師古曰、蘇說非也、虎落者以竹篾相連遮落之也、

〔築城記〕一モガリ竹ハ枝をソギてもくまじき也、又所々木の柱をたつる也、

一土居にさかもがりをゆふ、くひをうち、横木をゆひ、それへ折かけゆふ也、又陸地にゆふは、竹のさきを腰のとほりにあるほどに、本ヲひきくくひをうち、よこ木をゆふ也、

柵

井樓

〔海國兵談 十〕城制 附居館

虎落ハ、竹を筋違に組合せて埋立、繁繩を以て結固也、

〔奧羽永慶軍記 廿二〕土崎湊落城ノ事

湊ニモ此事ヲ聞、安カラヌ事ニ思ヒ、兼テヨリ普請丈夫ニシテ、鹿垣虎落ヲカサネ、要害ヲ三所ニ構ヘ、〇下略

〔運歩色葉集 志〕柴欄 又柵 〇中略 柵 篩

〔倭訓栞 前編十一志〕しがらみ　万葉集にみゆ、柴がらみの義成べし、柵をよめり、篩も同じ、川水のつよき所を防がんとて、杭など打つゞけて、横さまに竹木などからみつくるをいへり、

〔吾妻鏡 九〕文治五年八月七日甲午、泰衡日來聞二品發向給事、於阿津賀志山築城壁固要害、國見宿與彼山之中間、俄構口五丈堀、堰入逢隈河流柵、

〔倭訓栞 中編十二世〕せいろう　兵家にいふは城樓と書り、櫓なりといへり、

〔和漢三才圖會 二十兵器〕巢車 此云釣井樓

登樓必究云、巢車其制以車輪當中建高竿、首施轆轤、以繩挽板屋上竿首、其屋方四尺高五尺、以生牛皮裹之以禦矢石、使人藏屋中、下窺城中事、遠望如鳥巢、故名、

按巢車即釣井樓也、其制不一、有車井樓、櫓井樓等之異、皆令人登窺視敵陣之機也、

〔築城記〕一せイロウヲアグルは、先スソバカリに柱をふんばらせツヨク立也、一重あぐるはサマを下にて切て、面の方を先トク上べき也、一重の時も上へあげ、かさぬるやうに柱の心えをしてあぐるなり、又夜中にあぐるがよき也、敵へ近くあぐる時如此、晝は敵見スカシ矢を射あげにくき也、面に矢をふせぐ用意をしてあぐる也、此時のたてこしらへやう可在之、

〔永享記〕結城落城の事

清方持朝千葉土岐等が陣の前には、十餘丈の井樓を二重三重に組上たり、

〔東遷基業 三〕三方ヶ原合戰の事

神君〇德川家康は井樓に望み給ひて、富永孫大夫を召して、敵の去就を問せたもふに對へて、大軍の後拒小荷駄不多、軍竈に煙なし、此は必引去申べしと申けるが、果して其言の如くなり、

〔藤葉榮衰記 中〕御代田籠城事

陣中ニテ日暮ニ簸空穂ヲ叩チ、入相ノ鯨波ニ天地震動シテ、須彌ノ金軸モ碎べシ、此城平ナレバ二ヶ所ニ井樓ヲ上ケル處ニ、城中ヨリ是ヲ上サセジト、大工人足ヲ鐵砲ニテ打、矢ヲ射掛ケレバ、夜ニ入暗ニ紛レ、大方接上、城内ヨリ鐵砲ヲ打方へ、不見様ニ筵ヲ張ケレバ、其後ハ晝モ不危三階ニ臨キ井樓ニ高樓上ゲ二ヶ所ニ出來テ、井樓ノ上ヨリ城内目下迄、蟻ノ這モ見ユル如ク也ケレバ、一人モ出ル事ナシ、城中ニテモ井樓ノ上ヨリ、人ノ不見様ニ筵薦ヲ張リ、其陰ヲ城内ニテハ往行シケリ、夜ニ成バ、館ノ内ヨリ色々ノ口ヲ叩テ、井樓ノ内へ鐵砲ヲ打者アリ、諸人彼ヲ憎ミテ何樣ニモシテ是ヲ殺サントて、井樓ノ上ヨリ種々問答シテ、彼ガ聲ノ通ヲ鐵砲ヲ揃テ打ツ、晝ヨリ目當ヲ積リ定テ打ケレドモ終ニ不當ケリ、

〔長澤聞書〕一寄せ衆之内大せいろう被上候ば、備前の武州殿大坂天滿八間屋の前川中に、一夜の内に五重のせいろう上られ候、大坂町を見落し候樣に被成候事、其せいろうより内の塀の間は二十四五間程ならではなく候、天滿口にては敵味方互に物語致居申候、

〔三河物語 三〕信玄は、きゝ及たる野田は是にて有か、其儀ならば、とふりがけにふみちらせと仰あつて、押寄給へば、打立て、あたりへもよせ不付、さらばとて、竹たばを付、もつたて、かめのかうにて倍中夜ゆだんなく、がねたいこを打て、夜もすがらせめけれ共、〇下略

〔遠州高天神軍記〕甲州方、竹束龜の甲を繁く突立、雅攻に手痛く急に、〇下略

〔柴田退治記〕又殿上井楼門、寄二亀甲一、入二金堀數百人一堀レ之、

〔伊達日記〕下彼城〇晉州城南ハ大川ニテ岸高、三方ハ七間程ノ石垣ニ候、吉川〇廣家ハ河ノ南向ニ陣取候、竹束ヲ付、仕寄被レ成候、城内ヨリ日暮候ヘバ、タイ松ヲ三間計ニ一ヅヽトモシ候、加藤主計〇清正亀ノ甲ヲ作、人ヲノセ、石垣ノ根ヘ押寄、其内ヨリ鑓ノハシヲ以テ石垣ヲコヂ候ヘドモ、大石ニテ不レ成處ニ、城内ヨリ焼草ヲカケ、彼亀ノ甲ヲヤキヤブリ候、カサネテ牛ノ皮ヲハギ、毛ヲ下ヘナシ、亀之甲ニ張付、又押寄候處ニ、右ノ如ク焼草ヲカケ候、内ニ居候者ドモ有、兼出候而、一二人ツルノハシニテ石ヲコヂ返シ候故、石垣クヅレ、兩人石ニ被二打殺一、一人生候、

〔毛利家記〕加藤主計頭亀ノ甲ノ仕寄ニテ、城ノ大手ノ門迄堀入リシヲ、内ヨリ種々ノモノニテ焼キテケリ、

〔黒田家譜〕入朝鮮陣中

清正〇加藤長政〇黒田思案して、亀の甲といふ車を作りて、石垣を崩さんとたくみ出されける、其制法は乗物の形に似て、上を亀の甲の如く中高にして、木にて厚く堅固に拵へ、下には車の輪を四付て、上には牛の生皮を以毛を下へ成て包張廻し、火のつかぬ様に拵、其内に人を入、跡に長き大綱を付て、城中より火をなげ懸、あつく成時、或大石など落さんとし、又石垣崩かゝらんとする時、綱を動せば忽に引戻す事自由にして、内に入たる鐵梃にておして、城の石垣際迄行、かなてこを以、石垣を崩すべしとの用意也、〇中略日本に用る事是初成べし、六月〇文禄二年廿九日長政清正彼亀甲を以、城を攻落すべしと相約し、〇下略

〔會津陣物語〕三最上義光被レ乞二加勢於伊達政宗一事附政宗加勢事幷上杉方松本杢助討死事

直江〇兼續一萬餘上泉主水ガ勢ヲ先立テ、春日ニ入替リテ攻カヽル、持楯、疊楯、竹束、亀甲ヲ以テ、附寄附寄、攻近付、

〔大友興廢記十二〕戸次鎭連石宗に軍配相傳契約の事付石宗氣之講談の事幷諸葛孔明が事

鎭連〇戸次、中略、軍配殘りなく御相傳希所なりと所望有ければ、石宗やすき事に候、〇中略先少氣の物がたり申べく候、城の氣に東西南北のなびきと云事あり、外典に多く見へて珍らしからず候へども、子細をのぶべし、夫氣と云は、烟霧雲などにて窺みるものなり、凡攻レ城圍レ邑、城之氣色如二死灰一城可レ屠といふ心は、城郭を責、在所をとりまわしたる時、城の上にたつ氣、火の氣もなき灰のごとくならば、その城は屠べきなり、屠とは、人にせめおとさるゝを云也、城の氣出而東、城不レ可レ攻、城の氣東へなびかば、落城しがたし、行才覺あるべきもの也、城の氣出而南、城不レ可レ拔、城の氣南へ行ば責たりとも落まじきなり、策行を肝要にすべし、城の氣出而西、必降、城の氣西へ行ば、寄手の勝になりて、城は降參すべきなり、城の氣出而北、城可レ克、城の氣北へ行ば、寄手のまけになるべし、城の氣出而復入レ城、主逃北、城の氣何方へも出て又城の方へ入ば、城主やがてにぐべし、城の氣出而覆二我軍の上一必病、城の氣寄手の諸軍勢の上ふさがらば、寄手に病人多かるべし、城の氣出る高而無レ所レ止用一日長久、城の氣たかくあがりて、何方へ行とも見さだめぬは、急に勝負みへず、日數をふるべきなり、

古事類苑

兵事部十五

內應

兵事部十五

內應

內應トハ、內ニ在リテ、敵ニ應ズルノ謂ニシテ、內通、裏切、反忠等ノ名アリ、或ハ我ノ機密ヲ漏泄シテ敵ニ告ゲ、或ハ敵ヲ導キテ城ニ入レ、或ハ敵ノ爲メニ城ニ放火シ、或ハ戰ニ臨ンデ俄ニ我軍ヲ攻ムル等一ナラズ、而シテ內應者ノ名ヲ敵ニ告グルハ、敵兵ヲシテ相疑ハシムル戰略ナリ、

〔釋日本紀〕〔十八秘訓〕內應（ウチアヒヒス、ナカダチス、秘訓）

〔運歩色葉集〕〔奈〕內通（ツウ）

〔書言字考節用集〕〔八言辭〕返忠（カヘリチウ）　內通（ナイツウ）　內應（ナイヲウ）

〔政事要略〕〔八十一糺彈雜事〕擅興律曰、擅發兵廿人以上、杖一百、其寇賊卒來、欲有攻襲、卽反叛、若賊有內。應。急須兵者、得便調發、

〔太閤記〕〔十二〕小田原間者幷忍之城事

忍之城主成田は常に連歌にすき侍りければ、每年秀逸之句を記し付、紹巴法橋へ使者を上せ點を取にけり、將軍の右筆にて有ける山中山城守も、同じすきにて侍れば、兼て成書簡因み侍し事、秀吉公內々其あらましを知給ひしかば、山城守をめして宣ふは、忍之城主成田下總守小田原籠居之由なり、ひそかに遣使札心を變じ候やうに計ひ可申旨仰す、山中承り何とぞ才覺致しみん

以内應者首級而付敵

とて成ニ書簡一、〇中略

密通之使者夜半に出しつかはしければ、無ニ恙成田が陣所へ參、此旨かくと云入しかば、成田使者に對面し、口上之趣承屆、げに左もあらんとて、此いさめにしたがひ累祖之名字を相續し、祭ニ先祖一事不レ絶やうにせばやと思慮し、返書に曰、

御内狀之趣忝次第、雖レ盡ニ楮上一、御前之樣子宜樣憑入外無レ他、委細之儀任ニ御使者口上一之條止レ管城公、恐惶謹言、

季夏念日　成田下總守

山中山城守殿　廻章

山城守彼狀を披露しければ、關白殿事外御機色にて被レ仰けるは、小田原程有まじき計策是なりとて、家康卿をめし謀り給ふは、成田返簡を氏直かたへつかはし、八州之城々何も秀吉に對し、粗内通有と見えしなり、急降人と成、續ニ一命一可レ然之旨内通せられ候へ、中々成田にかぎらず、何之城主も、降人となる密通有よし、ひそかに告知らせられ候やうにと有しかば、頓て其沙汰に及びけり、

〔總見記十八〕大臣家軍將御手分事

同月〇天正六年十二月四日、瀧河左近、惟住五郎左衛門、人數ヲ以テ兵庫一谷表悉燒拂ヒ、人數打返シ、伊丹ヲ押ヘ、塚口ニ在陣ス、同八日申刻ヨリ、諸卒伊丹ヘ取ヨセラル、是ハ城中ニ謀叛人有テ、相圖ヲ定メ、今日返忠ノ裏切リ仕ルベキ由、御約束申スニ依テナリ、然ル處ニ城中ニ於テ、件ノ者謀叛ノ儀露顯セシメ、忽ニ誅戮シテ首ヲ指出シ、寄手ノ者ニ見セケル故、此企相違セシム、

〔陰德太平記六十〕攻ニ高森城一事

與州宇和郡高森城中ヘ反忠（ハンチウ）ノ者有テ、土州ヘ内通シ、兼約ノ日ヲ定メ、城中ニ火ヲ掛、相圖ニ從テ

攻ント期シタリケルニ、陰謀忽露顯シテ、反心ノ者六人搦捕テ首ヲ刎ニケリ、是ヲバシラズ土佐勢共、高森ノ近邊善家山へ取上リ、相圖遲シト待居タリ、高森城中ニハ敵ニ内通ノ樣體ヲ知タリケレバ、兼テ枯草多ク積重ネ置テ火ヲカケタレバ、城中ニ相圖ノ火ヲカケタリトテ、寄手我先ニ乘入ントス、深田ノ城ヲ後ニナシ、高森ノ城へ押寄タル所ニ、城中ヨリ此中兼約仕候面々、御道引ニ出候トテ六人ノ首共、塀ノ外へ拋出ス、土佐勢案ニ相違シタリケレバ、皆惘テセン方ナク引テ行ク、〇下略

〔信長記十二〕伊丹城落去事

去程ニ老武者程物ノ香バシゲハ有ゾカシ、其故ハ瀧河左近將監ツク〲ト謀テ、伊丹ニ居タル中西新八郎ト云者ヲ潜ニ呼出シ、和殿ガ主ハ既ニ一命ヲ助ランガ爲、士卒ヲ捨テ逼出タル也、斯比與ナル大將ヲ賴ンデ、死ヲ可致樣ヤアル、唯御味方ニ參ジテ忠ヲ致セ、能取申ベキゾト申扱ヒケル程ニ、剩荒木ガ定置シ足輕大將五人迄心ヲ變ジケリ、既ニ十月〇天正七年十五日ニ事調テ、十六日ノ未明ニ瀧河人數、上臈塚へ引入ケル間、士庶人トナクアタルヲ幸ニ切捨ツル事無限、

〔家忠日記追加九〕天正十二年六月十三日、信雄〇織田は勢州長島の城に在て、同國萱生地に要害を築んが爲、佐久間駿河守正勝をして、萱生地に遣し是を監せしむ、是に依て正勝、前田與十郎〇甚七郎父、與平次兄、を蟹江の城に留て是を守らしめ、正勝萱生地に赴く、瀧河一益其隙を窺ひ、密に使を發して、前田與十郎に謂て云、汝秀吉に屬して内應し、蟹江の城に兵を引入、軍忠を盡すに於ては、其賞厚く行はるべきの旨を説しむ、前田異儀なく是に應する、

〔關原軍記大成十三〕伏見落城附鳥居内藤以下戰死

寄手の諸陣〻、火矢大筒を打懸て、晝夜のさかひもなく責けれども、城兵堅固に持ちこらへて、七八日を過しけるに、長束政家が軍勢の中に、鵜殿藤助といふ者有、彼は松丸に籠りし甲賀の者の

諱內應

一類なるが、秀家公の下知を蒙り、松丸へ矢文を射こみていひけるは、面々當城に籠るによりて、在所に置たる妻子を水口に於て磔に掛べしと、長束大藏太輔催さる、若返り忠をなし、其郭を燒立るならば、妻子の命を助らるゝのみならず、面々に御恩賞有べし、其心得して急ぎとかくの御請可ㇾ申由申つるに、甲賀の者ども大きに驚き、永原十內、山口宗助一族四十餘人同意して、然ば明夜亥子刻に必ず火の手を揚ぐべし、其時急に攻入給へと返答す、

〔菅氏世譜〕慶長五年、石田治部少輔三成亂を起し、家康公に叛き奉る、〇中略長政公〇黑田つら〱計を廻し、筑前中納言秀秋卿を味方となし、兩方入亂戰ふとき、敵の後松尾山より兵をおろし裏切をさせ、慥に家康公の御利運に成らんと思ひ、秀秋卿の家老平岡石見は、長政公の內緣あり又其家臣井上越前は、長政公の御家老井上九郎右衛門が弟なれば、彼等をたよりにして云入べしとて、家臣大久保伊與助、神吉三八をして、事の由を告やり給ひければ、筑前中納言同心の返事なり、大久保神吉歸りて、此由をかくと申ければ、長政公喜悅淺からず、重て彼陣所にこなたより人質として、吉田宮內、大久保伊與助を遣し給ふ、若又秀秋卿僞り同心しこなたよりの人質どもを手ごみにする事もやあらんとて、正利〇菅をさしそへ被ㇾ遣ける、正利彼方へ趣き軍の手立をも談合し、互の內通相調、あなたよりの質に、平岡石見が弟を召連て歸りける、後に秀秋卿の返り忠にて、終に家康公の御勝にぞ成にける、

〔會津陣物語〕三蒲生飛驒守秀行以二使者一示二岡野左內志賀布施一之事

秀行ヨリ密々自筆ノ狀ヲ使者ニ持セ、會津ニ殘ル蒲生家ノ侍共ニ遣シ被ㇾ申ケルハ、イヅレモハ元是蒲生家ノ譜代ノ侍ナリ、一旦上杉家ヘ付候トモ、定テ舊恩ハ忘レ申間敷候、此度秀行事宇都宮ハ一ノ手先タルヲ以テ、內府〇德川家康ノ先手トシテ向所ナリ、昔ノ契リヲ存候テ、景勝ヲ裏切リ仕候ヘ、本望ノ上ハ大分恩賞ヲ可ㇾ出ト被ㇾ語ケル、栗生美濃守、岡野左內、志賀與總右衛門、布施次郎

右衛門、外池甚五左衛門、小田切所左衛門、高力圖書、安田勘介、小川圖書等イヅレモ秀行ノ直書ヲ拜見シ、返狀ヲ送リケリ、其趣ハ思召ノ處誠以テ不淺忝事存候、乍去古ヨリノ申傳ニモ、人ノ祿ヲ食者ハ人ノ事ニ死ルト御座候ヘバ、古主ノ御恩不淺ト乍申、差當リテ上杉ノ恩ヲウケナガラ、裏切ハ不能成候、殊更景勝コト唯今天下ヲ敵ニ被請、危事目前ニミエ候時ニノゾミ、二心ヲ指ハサミ候ンコト、武士ノ恥辱候、乍去明日御一戰ニ及時、秀行樣御難義ニ被及候ヲミカケ候ハヾ、イヅレモ馬ヲヒカヘ進申間敷候、是ヲ御恩報ト被思召、裏切ハ御免候ヘト申ケレバ、秀行モ感涙ヲ流シ聞人モ皆稱嘆セリ、

料知內應

〔武將感狀記〕三一太田三樂齋小田原ノ攻口ニアリ、松田尾張守ガ手ヲ見テ、異心アリト云、此時松田スデニ秀吉ニ誘レテ內通ス、三樂コレヲ知ズシテ其言當レリ、秀吉コレヲ奇テ曰、何ノ見ル所ゾ、三樂ガ云、松田ガ勇謀人ノ恐ルヽトコロナリ、今日軍備ヲ正サズ、諸卒ヲイマシメズ、役所ヲ巡ズカレ素ヨリ聽スベキ者ニアラズ、心ヲ味方ニ通ルガ故ナリト、〇下略

內應不成

〔太平記〕三十一新田起義兵事

又三浦介、葦名判官、二階堂下野二郎、小俣宮內少輔モ、高倉殿方ニテ薩埵山ノ合戰ニ打負シカバ、降人ニ成テ命ヲバ繼タレドモ、人ノ見ル處、世ノ聞處口惜キ者哉、哀謀叛ヲ起サバヤト思ケル處ニ、新田武藏守、同左衛門佐ノ方ヨリ、憑ミ思フヨシヲ申タリケレバ、願フ處ノ幸哉ト悅テ、則與力シテ此人々密ニ關谷ニ寄合テ評定シケルハ、新田ノ人々旗ヲ擧テ上野國ニ起リ、武藏國ヘ打越ルト聞エバ、將軍ハ定テ鎌倉ニテハヨモ待給ハジ、關戸入間河ノ邊ニ出合テゾ防ギ給ハンズラン、我等五六人ガ勢何ト無共、三千騎ハアランズラン、將軍〇足利尊氏戰場ニ打出給ハンズル時、態ト馬廻リニ扣ヘテ合戰既ニ半バナランズル最中、將軍ヲ眞中ニ取籠奉リ、一人モ不殘打取テ、後ニ御陣ヘハ參候ベシト、新田ノ人々ノ方ヘ相圖ヲ堅ク定テ、石堂入道、三浦介、小俣、葦名ハハタラカ

デ鎌倉ニコソ居タリケル、諸方ノ相圖事定リケレバ、新田武藏守義宗、左兵衞佐義治、閏二月八日、先手勢八百餘騎ニテ西上野ニ打出ラル、○中略都合其勢八萬餘騎將軍ノ御陣ヘ馳參ル、已ニ明日矢合ト定メラレタリケル夜、石堂四郎入道、三浦介ヲ呼ノケテ宣ヒケルハ、合戰已ニ明日ト定メラレタリ、此間相謀ツル事ヲ、子息ニテ候右馬頭ニ會テ知セ候ハヌ間、此者一定一人殘止テ、將軍ニ討レ進セント覺候、一家ノ中ヲ引分ケテ義季ニ與シ、老年ソ頭ニ冑ヲ戴クモ、若望ミ達セバ後榮ヲ子孫ニ殘サント存ズル故也、サレバ此事ヲ告知セテ心得サセバヤト存ズルハ、如何カ候ベキト問給ヒケレバ、三浦ゲニモ是程ノ事ヲ告進セラレザランハ、可レ有ニ後悔一覺候、急知セ進ラセ給ヘト申ケル間、石堂禪門子息右馬頭ヲ呼テ、我薩埵山ノ合戰ニ打負テ、今降人ノ如クナレバ、仁木細川等ニ押スヘラレテ、人數ナラヌ有樣、御邊モ定テ遺恨ニゾ思ラン、明日ノ合戰ニ、三浦介、葦名判官、二階堂ノ人々ト引合テ、合戰ノ最中將軍ヲ討奉リ、家運ヲ一戰ノ間ニ開カント思也、相構テ其旨ヲ心得テ、我旗ノ趣ニ可レ被レ順ト云レケレバ、右馬頭大ニ氣色ヲ損ジテ、弓矢ノ道貳ロアルヲ以テ恥トス、人ノ事ハ不レ知、於レ某ハ將軍ニ深ク憑レ進セタル身ニテ候ヘバ、後矢射テ名ヲ後代ニ失ハントハ、エコソ申マジケレ、兄弟父子ノ合戰、古ヨリ今ニ至マデ無キ事ニテ候ハズ、何樣三浦介、葦名判官、隱謀ノ事ヲ將軍ニ告申サズバ、大ナル不忠ナルベシ、父子ノ恩義已ニ絶候ヌル上ハ、今生ノ見參ハ是ヲ限リト思召候ヘト、顏ヲ赤メ腹ヲ立テ、將軍ノ御陣ヘゾ被レ參ケル、父ノ禪門大ニ興ヲ醒シテ、急ギ三浦ガ許ニ行テ、○中略如何樣聽テ討手ヲ向ラレント覺候、イザヽセ給ヘ、今夜我等ガ勢ヲ引分テ、關戶ヨリ武藏野ヘ回テ、新田ノ人々ト一ニナリ、明日ノ合戰ヲ致候ハント宣ヒケ、レバ、多日ノ謀忽ニ顯レテ却テ身ノ禍ニ成ヌト恐怖シテ、三浦、葦名、二階堂手勢三千餘騎ヲ引分、寄手ノ勢ニ加ラント關戶ヲ廻テ落行、是ゾハヤ將軍ノ御運盡キザル所ナレ、

〔松隣夜話上〕永祿三年三月上旬、越後ノ官領輝虎入道謙信公、近衞公方前久○關白ヲ大將軍トシ、一萬

六千ニテ北越ヲ御進發、〇中略翌日ヨリ總軍ヲ進メ、三渠ヲ魁首トシテ小田原ヘ押詰、蓮池迄亂入ル、中間所々ノ取合有ケルニ、謙信每度二ノ手ヨリ掛出、初對面ナル東國武士ノ心モ識ズ、諸手ヘ乘入胄ヲモ着ラレズ、白キ布ニテ頭ヲ包ミ、朱ノ釆幣ヲ取テ下知ヲ爲、人ヲ蟲トモ思ハヌ振廻ヲ見テ、諸將大ニ懼ヲナシ、假令如何ナル良將ニテモヲハセ、此人ヲ主ト賴ナバ首ノ切ン事疑無迚、退屈セザル者一人モ無、將至テ剛キ時ハ、士必應ゼズトカヤ、兵法ノ言是也、此時忍小幡長尾白倉氏康ト素ヨリ內通セシ者、時節宜シト思ヒ、謙忠ト談ジ、旌本ノ左右ニ相雙ンデ、後矢ヲ射ント相謀ル、城內ヨリハ、此者裏切ヲシ、旌本騷グ同時ニ突テ出、外ヨリモミ合セ討取ント擬シテ待掛タリ、謙信ハ神變ヲ得タル大將ニテ坐ス故、方々ノフリヲ早見知給ヒケレドモ、少シモ氣ヲ屈シ給ハズ、味方ノ將ノ內甘糟バカリニ內意ヲ含給ヒ、近衞殿御陣只一備ヲ立替、楯ナシ山ト云山ニ居申サレ、宇佐美駿河守、上村甚右衞門ヲ副置レ、自身ハ柿崎和泉守、直江山城守ヲ左右ニシテ、蓮池ノ門前近ク詰寄セ、城中ヨリ備ヲ出サバ無理ニ蒐入テ、刹那ガ內ニ勝負ヲ決ントスル機ヲ量リテ、城中ヨリモ曾テ人數ヲ出サズ、謙信池ノ兩端ニ馬ヲ扣ヘ、辨當ヲ取寄セ、茶ヲ喫セラル所ヲ、金澤ト云者、出丸ヨリ鐵砲十挺計リ連ネ、三十間程ニテ、二繰マデタメツケニ打ケレドモ、射向ノ袖鎧ノ鼻ナドヲ擊テ、一毛ノ隔ニテ御身ニハ恙無、謙信少モ騷ギ給ハズ、長々ト茶ヲ三貼マデ喫シ、悠閑無事ノ體ニテ坐シケレバ、左右ニ候ケル數千ノ兵士髮毛ヲスリテ、鐵砲ガ來レドモ、頭ヲウツムク者獨モ無、城中ヨリ北條舊老ノ面々、是ヲ見物シテ譽ザル者ナシ、橋富大吉苦桃伊豫相豫ル、二備ノ足輕鐵砲八十挺連テ、右ノ出丸井樓矢倉ヲ射閉チ、城內ノ箭口ヲ留テヨリ、謙信公御茶ヲ取置セ、本陣ヘ馬ヲ入給フ、跡備ハ甘糟近江、北條伊豆、同名丹後、長尾義景、越中侍ニ神保常陸、飯尾左吉等、彼是八千五百前後ノ備、圖ニ當リ少モ違ハズ勇鋭ヲ見テ、逆心ノ諸將欺事ヲ待ズ、太田ハ又家ノ舊老大道澁谷ト云者ニ總勢ヲ附置、自身ハ陸者廿四人ヲ從ヘ、諸手ヲ乘廻シ備ノ色ヲ

見、白倉丹波ガ陣所ヘ行、丹州ヲ謀リ本陣ヘ同道シ、之ヲ歸サズ、人質ノ如クニシテ置タル間、逆心ノ謀、盡ク相違シテ手ヲ出ス者無、

〔總見記十四〕勢州長島凶徒御退治事

同〔○天正二年八月〕二十二日、篠橋ノ者ドモ同月十二日品ヲ替テ、御侘言申シケルハ、當城ニ籠居ノ者ドモ一命ヲ御助被下候ハヾ、長島ノ城中ヘ入コミ、裏切シテ御忠戰致スベシト申ニ付、サラバ其意ニ任スベシトテ、訴訟ノ通御赦免有テ、篠橋城中ノ者ドモ皆一命ヲ助ラレ、長島ヘ被追入、サレドモ城兵等是ヲ察シテ、遙ナル外郭ニ置ケレバ、裏切リノ忠戰案ニ相違シケルト也、

〔太閤記五〕柴田伊賀守家來山路將監謀反露見之事

本山之要害に、心を變ずる者有由、誰共なしに云出しかば、木村小隼人佐を本丸へ入、大金藤八郎、木下半右衛門尉、山路將監を外輪へ出し、用心きび敷見えし處に、山路卯月〔○天正十一年〕十三日の朝、小隼人佐へ茶を申さんと約し、用意丈きりなり、此企は木村を討て、柴田が勢を本山へ引入んとの隱謀とかや、然るを其夜の子刻計に、木村が門を叩く者有、誰ぞと番之者共問ければ、御本陣より急用之事にて有ぞ、先門を啓き候へと云しまゝ、隼人に其旨告し處、大崎宇右衛門尉聞候へと有しかば、卽出向ひ何用の御事ぞ、承候べしと云し時、いや御本陣よりの御用には非ず候、伊賀守其臣野村勝次郎、是まで參たる由申候へと有に因て、大崎立歸り其由申ければ、さらば内へ入よとて、近習十人計野村が左右に隨ひ、屋庫へ入しかば、野村刀脇差を大崎に渡し、密かに申上候はんと、やはら立寄さゝやきけるは、山路將監心變じて候、明朝御茶を申すきやにて御邊を奉討、本山城へ柴田が勢を引入んとの事に相極たる由云ければ、木村げに左もあらんと覺えたり、さらば只今逆寄によせ可打果と有しを野村承り、先蒙氣之由被仰遣被相延、明朝仕懸候はゞ、同類不殘被打果候はんやと指圖せしかば、尤なりとて山路方へ頓に虫さし出し痛候間、明朝は參まじき

内應者處罰

旨使者を遣しければ、扨は此事推量有し也、返忠を無心許思ひ、密談之者共誰かれと呼に、野村勝次郎ぞ居ざりける、

〔淺井三代記 九〕今井肥前守同孫左衛門同十兵衛尉切腹の事

今井肥前守頼弘、同孫左衛門尉、同十兵衛尉三人は、番場表にて敵江南定頼卿〇六角方へ內通して、亮政〇淺井を可討計略したる旨、慥に證人出ければ、たばかつて小谷の城へ右三人をめされける、三人の者共何心もなく登城仕ければ、總門の下馬より供の侍を押留め、三人が脇指を雨森彌兵衛、海北善右衛門尉請取、亮政の前へ召出し、一々吟味左たまへば、肥前守臆する色なく、有のまゝに白狀す、亮政是を聞、流石名ある者なれば、少も己が罪をかくさず、申條神妙なりとて、神勝寺と云寺へ右三人追込二三日して切腹を被仰付、

〔陰德太平記 三十〕富田若山城明退事

城中ニ陶ガ手ノ者ニ野田寺內ト云兩人、降人ニテ籠リ居タリケルガ、忽野上等ト心ヲ通ジ、傍ナル固屋ニ火ヲ付タリケル間、長屋即彼二人ヲ討テケリ、

〔北條五代記 十〕笠原新六郎氏直へ逆心の事

新六郎を世に立んがため、父尾張守謀叛をくはだて、秀吉公へ申により、關東へ御馬出され候へ、尾張守うしろ切仕べきよし申によて、秀吉公小田原へ發向の砌、尾張守新六郎父子二人密談し、來六月〇天正十八年十五日の夜、町中へ火をかけ、松田持口より敵をこと〴〵く城中へ引入べきよし兼約いたす所に、壁に耳、岩に口あるならひ、尾張守が次男左馬助是を聞、〇中略此儀を氏直へ告しらしむる、氏直聞召、左馬助が忠功淺からずと信感あり、時日を移さず、尾張守新六郎二人討罪せらる、

〔大坂冬陣覺書 二〕此時分城中〇大坂城には南條中務御成敗、子細は井伊掃部方へ內通、伯州の本領を

内應雜例

可ㇾ被ㇾ下旨御朱印拜領に付、塀柱を引切寄手の人數を引入んとしたる訴人出顯はれ、七組の内を御成敗被ㇾ成事、

〔難波戰記三〕祖父江法齋城中江内通露顯之事

御和睦調ヒ、總堀ヲ埋石壁ヲ壞下率行トシテ、御使番山田十大夫、渡邊半四郎、青山石見守(清長、初號ニ祖父江法齋ト)、等參向シケル、抑此青山石見守ハ、〇中略家康公御心安思レ、常々御寢所迄モ召寄ラレシ者也、然ルニ二十二日、山田渡邊青山三人城中ニ入ケル時、女房一人立出テ、御使番青山石見守殿ニテハナキヤト呼ブ、石見守面ヲ赤シ、迷惑ノ體ニ見ヘナガラ石見守ナリト答フ、時ニ彼女房高聲ニ御城中ニテ、上々樣方御恙ナケレバ、御心安カルベシ、足下ニモ無異ノ御事誠ニ目出度ト申テ内ニ入リヌ、石見守、山田十大夫、渡邊半四郎ニ對シテ語リケルハ、兩人ノオモハク近比面目ナシ、某ガ聟幷ニ親類ドモ籠城仕ルニ依テ、彼女房モ能知テ、加樣ニ呼掛申スニヤ、定テ此事御耳ニ達セバ、御糺明有ベシト申ス、兩人聞テ、縱ヒ内通有トテモ、御和睦成サルヽ上ハ子細有マジト挨拶シケルガ、猶覺束ナクヤ思ヒケン、密ニ御耳ニ達シケレバ、回リ忠顯ルヽ上ハトテ、終ニ御成敗ナサレケル、去レバ前廉不慮ニ關ノ聲ヲ揚シカドモ、城中少モ騷ガズ關ノ聲ヲ合セ、明松ヲ投出々々、大筒小筒ヲ打掛シハ、此青山ガ内通セシ故トゾ後ニハ聞ヘシ、

〔長澤聞書〕一八町目にて伊達侍從と申者、持口十三間有之もの也、此侍從越前少將殿へ内通致し、十三間の板の根を切置候、敵より約束の矢文を射候へば侍從方へは不參、織田左衞門持口へ參故あらはれ、粗どもに方々へ分御成敗被ㇾ成、

〔源平盛衰記二十八〕齊明射ニ蟇目一事

但馬守經正ノ祈誓ノ驗シニヤ、源氏ノ大將ニ憑タル齊明倩案ジケルハ、平家ハ聞體十萬餘騎、木曾ハ僅ニ十分ガ一、サレバ軍ニ負テ平家ニ生捕ラレ事テ、憂目ヲ見ンヨリモ、返忠シテ平家ニ力

ヲソヘント思フ心ゾ付ニケル、薄キ切紙ニ細々ト狀ヲ書テ蟇目ノ中ニ入テ、平家ノ陣ヘ射渡シタリ、平家ハ此蟇目ノ鳴ヌ事コソ怪シケレトテ、取上見レバ中ニ切紙ノ文アリ、披テ是ヲ見ルニ云、源平ノ合戰ニ依テ、意ナラズ木曾ガ爲ニ驅催サレテ、北城ニ籠テ候、身ハ源氏ニ加テ、心ハ平家ニ通、此城難所ニ非ズ、谷川ヲ塞テ下ニ堤ヲ築、シガラミヲ搔、水ヲ關止タレバ、東西ノ山ノ根ニ湛テ海ノ如ク見ユレ共、夜ニ入テ水ニ心得タラン足輕共ヲ、東ノ山ノ根ヘ指遣ハシメ、シガラミヲ切下ナラバ、山川ノ習ニテ、水ハ程ナク早落候ベシ、其後案內者シテ後矢仕ベシ、是ハ越前國平泉寺ノ長吏齋明ガ申狀也トゾ書タリケル、平家大ニ悅デ、夜ニ入テ足輕共ヲ廻シテ、大石ヲ崩シ除ケ、シガラミヲ切流ス、夥シク見エケル海ナレ共、山川ナレバ水ハ程ナク落ニケリ、

〔源平盛衰記 四十三〕源平侍遠矢附成良返忠事

民部大輔成良〇阿波人ハ、サシモ平家ニ忠ヲ致シカ共忽ニ心替シテ、四國ノ軍兵三百餘艘漕却テ、軍ノ見物シテ居タリ、平家強クハ源氏ヲ射ン、源氏勝色ナラバ平家ヲ射ントゾ強健タル、天ヲモ可度、地ヲモ可度、只不可度ハ人ノ心ト、誠哉成良、源氏海ニハ櫓櫂ヲ並テ、兵船數ヲ不知、陸ニハ轡ヲ並テ、其勢雲霞ノ如シ、平家ハ如何ニモ難叶見エケル上、子息傳內左衞門ガ事モ悲ケレバ成良、判官〇源義經ヘ使ヲ立テ申ケルハ、唐船ニハ大將軍ノ乘タル樣ニテ、軍兵ヲ被乘タリ、兵船ニハ大臣殿〇平宗盛已下ノ公達召レタリ、唐船ヲ責サセテ、源氏ヲ中ニ取コメント支度シ侍、御意有ベキ由中言シテ、成良ガ一類相從四國ノ者共三百餘艘漕寄ツヽ、指合テ平家ヲ射ル、成良ハ心替ノ者ナリ、頸ヲ切バヤト、中納言ノヨク宜ケル者ヲト、大臣殿後悔シ給ケレ共云カヒゾナシ、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十一月五日癸丑、寅剋實平宗遠等進使者於武衞〇源賴朝申云、佐竹所搆之塞非人力可敗、其內所籠之兵者又莫不以一當千、能可被廻賢慮者、依之及被召老軍等之意見、廣常申云、秀義叔父有佐竹藏人、藏人者智謀勝人欲心越世也、可被行忠賞之旨恩約者、定加秀義滅亡之計者歟、

依令許容其儀給、則被遣廣常於侍中之許、侍中喜廣常之來臨、倒衣相逢之、廣常云、近日東國之親疎、莫不奉歸往于武衞、而秀義主獨爲仇敵、太無所據事也、雖骨肉、客何令與彼不義哉、早參武衞、討取秀義、可令領掌件遺跡者、侍中忽和順、本自爲案內者之間、相具廣常、廻金砂城之後、作時音、其聲殆響城郭、是所不圖也、秀義及郞從等忘防禦之術、周章横行、廣常彌得力攻戰之間逃亡云云、秀義晦跡云云、

〔新撰長祿寬正記〕高野山ノ衆徒ドモ、大塔ノ庭ニ集リ評定シケルハ、〇中略則當國紀伊國ハ、代々此義就ノ分國ナリ、然バ當山モ分國ノ中ナレバ主君ナリ、義就ヲフセギ可申候事、後難如何ト申人モ多カリケリ、然ドモ能方ヘ付人多クシテ、此義ハ不叶、皆寄手ト一味ス、義就方モ不動坂八里道兩所ニ二手ニ分テ待カケヽル、然ドモ高野衆敵ト內通シ、彼手ニカマハズ摩尾越ト云道ヨリ押寄、奧院ニ陣取、時ノ聲ヲ上シカバ、彼二手ノ人衆フセグニ力不及、同〇寬正四年卯月二十二日引退、義就ノ陣所淨光院ヘマイリケル、義就是ニ住山セバ猶敵ノ責入ベシ、然バ佛法破滅ノモトヰナルベシ、唯是ヲ落ヨヤトテ、同年五月二日和歌ノ浦ノ岡ノ城ヘ落給、

〔足利季世記二舟岡記〕池田高名之事

高國方川原林對馬守正賴、池田民部丞、鹽川孫太郞評定シテ、同〇永正十六年十月廿二日、夜打寄來ル、然レドモ敵ノ中ニ返忠ノ者出來シテ、此由告來シカバ、三郞五郞用心シテ待カケテ靜テ居タル處ニ、案ノ如ク寄來リ、寄手卅餘騎逆打ニ、ウタレテ、ハウ〳〵引キ返ス、

〔土岐累代記〕大桑落城之事

山城守〇齋藤勝ニノリ、城〇大桑ニ火ヲ掛燒立ケレバ、賴藝〇土岐父子近習ノ侍山本數馬、不破小次郞以下七騎、一往越前ヘ落サセ給ヘ、重テ一戰可然ト申ケルニヨリ、父子共城ノ後靑波ト云所ヘ出、夫ヨリ山傳ニ數馬ガ在所大野郡岐禮ト云里ニゾ落給フ、山城守遁サジト追手ヲ掛タリ、其大將ニハ河村圖書國勝、林駿河守通村兩將ニテゾ追タリケル、此時駿河心ヤ替リケン、佐原ト云所ヨ

リ行方ナク落行ケル、河村モ三代相傳ノ主君ニ弓ヲ引ン事、冥罪恐レアリト思ヒケレバ、山本ガ方ヘ密ニ矢文ヲ射テ、内通ヲゾシタリケリ、山本數馬心得、ヤガテ七騎ノ侍ト共ニ、後ノ山ユ登リ喪服ヲ着シ、太守御父子御生害シ給フト披露シテ葬禮ノ取行ヲシ、柴ヲ積デ火ヲ放、火葬ノ體ニ見セケレバ、河村ハ川ヲ隔テ戰フ體ニ亂矢ヲ射カケ、相圖ノ勝鬨ヲ上ゲ、井ノ口ニ引取、稻葉城ニ入カタト告ニケリ、

〔總見記十七〕羽柴秀吉播州下向附赤松由來事

政村〇赤松、中略、翌年永正十六年ノ春、一族小寺加賀守則職ニ人數ヲ屬テ、美作國岩屋ノ城ヲ攻ル處ニ、浦上大軍ヲ以テ岩屋ノ城ノ後詰セシム、于時小寺人數ノ中ニ返忠ノ者出來テ城兵ト一味シ、同十月六日内外ヨリ切立合戰ニ及ブ、寄手悉敗軍シ、小寺則職父子三人自害セシメ畢ヌ、

〔松隣夜話上〕氏康ハ一萬餘リニテ、井流間川ノ西端ニ陣ヲ張、天文六年七月十五日ノ夜軍ニ、柏原ノ本陣ニ切入、二時計ニ切崩シ八千餘リ敵ヲ討取、兩上杉共ニ敗軍也、是ハ由良ト云上杉侍二千計ノ大勢、氏康ノ語ラヒヲ得テ裏切セシユヘ也、

〔相州兵亂記四〕高野臺合戰之事

武州江戸ノ住人ニ太田源〇源一本作新六資高ト云人、大力剛兵ノ譽レ八州ニ雙ビナシ、凡三十人シテ動シガタキ大石ヲ輕ク動シケルシタヽカ者ナリケリ、物ハ類ヲ以テ集ルコトナレバ、其弟ニ太田源三郎、同源四郎トテ大力ノ兵ドモアツマリテ云タルハ、ソレ兵ハ剛強計ニテハ末代マデノ高名ニハ成ガタシ、〇中略我々隨分奉公ヲ勤メ、父子二代小田原ヘ奉公シ、去ル大永三年江戸ノ城ヘ氏綱ヲ引入、管領ヲ追落シヽカドモ、城ニハ遠山ヲスヱ置玉ヘバ、猶以万事心ニ不叶、イザヤ同名美濃守入道三樂齋ト相談シ、房州ノ里見義弘ト引合、江戸ノ城ヲ責落シ、永ク豐島郡ヲ知行シヲ、本ヨリ道灌ノ跡ヲツイデ、江戸ノ城ヲ取ルベシト思フハ如何ニト云ケレバ、二人ノ弟ドモ最

可然トゾ進ミケル、此程ノ大事ナレバ、左右ナクバ云ハジトテ、彼源六郎ガ菩提ノ寺、法音寺ト云法華寺ノ番神堂ニ集リ、神水ヲ呑ミ此事思定メヌレバ、二度返スベカラズト敬白シ、扨太田三樂方へ此由ヲ云ツカハス、三樂大ニ悅ビ、則房州へ使者ヲ立テ里見殿ヲ招キシカバ、義弘一國ノ勢、幷總州ノ軍兵ヲ催シテ、總州高野臺へ出張ス、カヽリシ程ニ僧法師ナド程、賴ミ無キ物ハナシ、法音寺、太田兄弟ガ密談ヲ聞テ、檀師ノ好ミヲ忘レ、此由ヲ則小田原へ注進シテ、己ガ檀那兄弟ガ謀叛ノ由ヲゾ告タリケル、

〔四國軍記　三〕蓮池城軍附土居孫太郎返忠事

妙遠寺トテ城下ニ寺有ケルニ、孫太郎睦カリケレバ、或時住僧ニ向ヒ、某ガ當卦如何樣ニ候ヤ、立身可致心懸ニモ成候ナン、考エテ賜リ候ヘト云ケルニ、住僧ヤガテ蓍策ヲ取出シ、掛扐過揲ノ後、風雷益ノ卦ヲ得テ孫太郎ニ申サルヽハ、當卦考申ニ、成程功名成立アルベシ、夫益ノ卦タル震巽ノ二卦相合シ、風雷ノ勢交相助ケ、日々ニ進デ止ザルノ心アリ、大川ヲ涉有所往ニ利アリト辭ニ見ヘ候、サレドモ其中遷善改過ハ、益事ノ大ナル者ニテ候ヘバ、可然主人ヲモ求メ玉ヘカシ、行末榮へ玉ベシト答ケレバ、孫太郎急度心付、此川ハ當國一番ノ大河ナリ、幸我此所ニ有テ兵權又某ニアリ、何トゾ立身ノ方便モ可有ト、深ク心中ニ秘シテ、住僧ニ對シ何トナク四方山ノ物語畢テ、我陣ニ返リ、熟ト當時ノ變ヲ案ズルニ、國司ノ威勢ハ日々ニ衰ヘ、長曾我部ノ家ハ逐日繁榮シ、總ニハ一國ノ主トナランの器量ナリ、諺ニ其礦礫而不窺玉淵者、未知驪龍之所蟠也トカヤ、所詮此人ニ志ヲ通ゼント思ヒ定シカドモ、媒ヲ以テ志ヲ可露便モナク、兎角默ケルニ、幸此所ニ魚鳥多ク集レバ、川逍遙ニ事ヨセ、心中ノ通ヲ矢書ニ認メ、元親ガ陣へ射入ケリ、江村急ギ本陣へ達シケレバ、元親披見シ、大ニ悅ビ如渡得船トハ此事也、土居我ニ志アラバ、蓮池ノ城ヲ乘取ン事掌握ニアリ、去ナガラ我久敷對陣シテ戰ヲ不好、故ニ敵若謀ニテヲビキ入ンモ難知ト思ヒ、自筆ニ返書ヲ調、

味方ノ爲何ニテモ大ナル功ヲ立玉ヘ、サアラバ味方モ合圖ヲ約シテ攻入ント書テ、孫太郎ガ方ヘ射返シケルヲ、人ハ更ニ不知ケリ、斯テ孫太郎ハ元親ガ返書ヲ得テヨリ、何トゾ良謀ヲ以テ、元親ガ兵ヲ引入ント、晝夜肺肝ヲ摧處ニ、或夜風一陣吹シボッテ、雲ノ風色冷シク、陣々叓彼ニ五人三人打寄々々物語ナドシテ、人々心細キ折節、孫太郎ガ役所ニ空誤シテ猛火燃出、矢倉ニクワットト燃付、親ガ中ニ此火諸侍ノ陣屋々々ニ飛散テ、餘烟東西ニ覆ヒ、南北ニ穪滿シテ炎焔一遍ニ吹敷タリ、河向ニ扣タル元親コレヲ見テ、素破土居ガ火ヲ揚タルハト云程コソアレ、四千餘騎ノ兵迭ニ馬筏ヲ組合セ、轡ヲ龍壯ニ列ネ、馬ニ鼻嵐ヲ吹セテ、塀際マデ着シカドモ、城兵ハ火ヲ消ント恊テ騷デ、烟ノ下ニ迷ヒ憧キシカバ、我モ々々ト城中ニ馳散テ鬨聲ヲ上タリケル、

〔飛州軍覽記〕三木防戰松倉落城之事

城中日々ニ戰ヒ疲レタル折フシ、後ノ山上ヨリ放火起テ燃上ル、城中ノ上下アワテフタメキテ、今ハセンカタナク、皆散々ニ落行ケル、是ハ法印〇金森兼テ計略ヲ廻ラシ、城中ノ侍ニ藤瀨新藏ト云フモノアリシニ內通有テ、藤瀨返リ忠ヲシタル故ナリトゾ聞ユ、

〔奧羽永慶軍記〕四武藤駿河守光安滅亡ノ事

武藤上總介ハ家人松野內匠トイフ者、大將光安ノ前ニス丶ミ出、中務〇川越ガ此度ノ備ハ先例ニ相違仕候フ、天晴中務心替リト覺候、御油斷有マジクトゾ申ケル、中務其座ニ有テ是ヲ聞ケレドモ、流石物馴レタル古兵ニテ有ケレバ、色ニモ出サズサラヌ體ニテ居タリケル、光安此ヨシヲ聞、中務ニ於テハ軍慮違フ事ナシ、義光大勢ニテ來ルト聞、汝聽シテ左樣ニハ思フナルベシトゾ宣ヒケル、內匠此ヨシヲ承リ、天晴大將御運盡ヌル故ニコソ、カヤウニハ宣ヘトテ、中務ヲ礌トニラミ先陣ニゾ進ミケル、謀反內通ノ者共ハ、怖敷松野哉ト肝ヲ冷シケル、又謀叛ヲ知ラザル人々ハ、麁忽ナル內匠ト是モ肝ヲヒヤシケル、〇中略去程ニ今迄大梵字ノ味方トミヘシ者共、光安ノ旗本

エ弓鐵炮ヲ打懸ル、城ニハ早火ヲカケテ、黒煙天ニ滿テモエ上ル、大將光安松野内匠ガイヒケル事ゾ、今思ヒ合ケル、

〔奥羽永慶軍記十四〕淺利父子滅亡事

淺利頼○則ハ其性邪ニシテ情モ知ラヌクセ者ナレドモ、普代ノ郎等強ク諫言ナシケル故、サノミ我マヽモ無リケル所ニ、今新參ノ者ヲアゲ用ヒテ、古參ノ者ヲ外樣ニシケレバ、野心ヲ含ム者多カリケリ、元來今井、片山、佐藤、齋藤トテモ賢ナル志ノ者ニテモナシ、毎度秋田ヨリ祿ヲ與ヘント云時ハ、二心ナカリケレ共、人ニ仇ヲナサントテハ、身命ノ亡ブル事モ辨ヘザル者共ニテ、況ヤ内内語ラハレタル末ナレバ、何カハ遠慮ノアルベキ、秋田ノ郎等堤五左衛門ガ許ヘ内通シテ曰、主君淺利ヲ討ン謀ヲ廻ラス、ベク候フ間、我々方ヨリ飛脚到來仕候ハヾ、御勢ヲ此地ヘ賜フベシ、仕負フセ候トモ、恩賞ノ事ハ我々本領ノ外給ハルマジキト、書札ヲゾ送リケル、堤是ヲ披見シテ、實季ニ斯ト申セバ、實季悦ビ給ヒテ、彼等ガ使到來ヲゾ待レケル、○中略其翌日家臣駿河守ハ片山ノ城ヲ出テ、長岡ニ來リ、昨夜侍共大勢ニテ落行候事、定テ敵方ニ降參仕ルト存ジ候、然レバ近日此所ニ取懸ルベシ、何トカ仕候ハントアハタヽシク申ケル、則頼此ヨシヲ聞、殘ル人數ヲ數ヘテ見ヨト仰ケルニ、今朝ヨリ落行候モノ有トミエテ、纔三百人ノ外ハナシ、則頼モアキレ果タル體ナリシガ、暫ク思案シテ今迄殘リ止ルモノハ、ヨモ二心ハアルベカラズ、是等ヲ引具シ涌本ニ落行テ、脩季ヲ頼ムベシ、兼テイヒ合セタル事ナレバ、今更違變有ベカラズトテ、三百人ノ内二百人具シテ、殘ル百餘人ハ嫡男則祐ガ供トシ、ハヤ長岡ノ城ヲ出、二心アリケル今井、片山、佐藤ナドモ、則頼ノ供シテ出ケルガ、幸ヒナレバ路次ニテ討奉リ候ハント、内談ヲ極メ、檜山ニゾ注進シタリケル、檜山ニハ實季ノ舍弟實泰有ケルガ、此由ヲキクヨリモ、時刻ヲ移サズ、上杉半左衛門尉實定、堤五左衛門尉實致、三村九左衛門尉、笠原内記三百餘騎ヲ向ラル淺利ガ落行跡ヲ半途ニテ討ント、

綴子ニ待チ居タリ、是ヲ聞傳ヘテ近邊ノ鄕民爰カシコヨリ馳集テ三千人ニゾ成ニケル、則賴ハ家臣共ノ心變リヲバ夢ニモ知ラズ、扇田迄出ケルガ、我人數ヲ見レバ次第ニマバラ也、馬ノ前後ニ四五拾人ノ外ハナシ、佐藤大學申ケルハ、カクノ如ク御人數落行候テ、何方ヘ御渡リ候トモ、路次危ク存ジ候、先々是ナル佐藤新助ガ館ヘ御入、日ヲクラシテコソ出候ハメ、與市殿ヲモ是ニテ待給フベシ、今白晝ニ此無勢ニテ御通リ候ヲ、敵見付候ラハヾ、タヤスク通シ候ベシトモ存ジ候ハズト申ケレバ、淺利實ニモト思フテ、新助ガ館ニ入テ、人數ヲ顧レバ、片山勘五郎武士佐六只二人ノ外ハナシ、況ヤ足輕中間體ノ者ハ一人モナシ、其外五六十人有之者ハ今井、片山、佐藤ガ郎等共也、則賴是迄モ彼等ガ心變トハ悟リ得ズ、彼等ニ向テ爰ニテ日ヲクラシヌルトモ、此勢ニテ何方ヘモ叶マジ、中々本城ヘ立歸リ、與市ト一所ニ兎モ角モ成ベシト、椽ノ上マデ立出テ馬ヲ呼ニ、中間ナケレバ片山勘五郎ト、武士佐六馬ヲ牽テ來ケリ、則賴乘ラントスル所ヲ、後ヨリ佐藤新助鑓押取テ、具足ノ透間ヲ突貫ク、痛手ナレバタマラズ、カシコニドウト倒レタリ、サレドモ勘五郎佐六ハ心變ラザル者共ナレバ、アット驚キコハ何事ゾ、惜キ奴原ト太刀拔テ切カヽレ共、逆心ノ者ハ多勢ナリ、終ニソコニテ討レケル、

〔奥羽永慶軍記十六〕五城目兵庫心變比內落城事

比內ノ城ニ有ケル五城目兵庫ハ、主君實季ヲ恨メル子細アリ、大光寺ハカネテ五城目ト朋友ノヨシミアレバ、幸ニシテ五城目ヲ語ラヒ、比內ヲ南部ノ手ニ入、我身ノ科ヲモユルサレ、本領安堵セントト思ヒ、密ニ五城目ヲ語ラフニ、兵庫元來主ヲ恨メル時ナレバ、ヤス〳〵ト領掌セリ、○中略扨モ比內一方ノ城代和田內膳ハ、思ヒヨラザル所ニ、南部ノ大勢寄ルト聞、五城目心變トハ夢ニモシラズ、軍ノ術ヲ廻ラシ評定ヲ極メ、大館近邊ノ勢ヲ集メ、楯籠ル所ニ、三戸ノ勢雲霞ノ如ク押寄セ、城ノ東西南北ヲ打圍ミ、鬨ノ聲ヲ上ケレバ、城中ヨリ打テ出、雌雄ヲ爭ヒ戰フ處ニ、兼テ合圖ノ

事ナレバ、五城目兵庫、大光寺左衛門尉敵ヲ城中ニ引入レ、裏切ヲゾシタリケル、

〔家忠日記追加十五〕慶長五年八月一日、伏見之城兵長原之族、敵に內應して城に火を放て、寄手の多勢を城中に引入る、

〔武德大成記十九〕神君ノ先鋒關原ヲ攻ル事附秀秋內應ノ事

十五日〇慶長五年九月、中略、兩軍戰半バナル時、秀秋〇小早川大兵ヲ發セントス、平塚因幡其機ヲ察テ、大谷吉繼ニ告テ曰ク、秀秋異心既ニ顯ハル、備ヘナクンバアルベカラズ、吉繼イマダ脇坂、朽木、小川、赤座モ、秀秋ニ同心スルコトヲ知ラズ、四人ヲシテ秀秋ガ備トナサシメ、其嫡子大谷大學吉助ヲシテ、二千餘騎ヲ率ヒ垂井ニ向ヒ、山ノ左ニ陣セシメ、次男山城守頼經ヲシテ、一千餘騎ヲ率ヒ、山ノ右ニ陣セシメ、吉繼自ラ六百餘騎ヲ率ヒ、初陣ヲ去ラズ、〇中略此ノ間神君〇徳川家康奥平藤兵衛貞治ヲ、松尾山ニ遣ハシ、秀秋ガ軍ヲ發セン事ヲ催ス、秀秋畏リヲ申ス、〇中略秀秋一万餘騎ヲ率ヒテ、大谷吉繼ガ陣ニ向フ、其ノ先鋒平岡頼勝、吉繼ガ爲ニ敗ラレテ退ク、稻葉正成平岡ニ代テ競ヒ進ム、吉繼ガ軍大ニ敗レテ離散ス、〇中略大谷大學及ビ山城守吉繼ヲ救ハントシ馳セ來ル、時ニ吉繼既ニ死ス、是ニ依テ從士或ハ散ジ或ハ降ル、秀秋ノ大軍、脇坂、朽木、小川、赤座等競ヒ起テ是ヲ撃ツ、

〔黑田家譜十二〕筑前中納言〇秀秋は、兼而返忠の內通かたく約し置れしが、先身方の備を押出し合戰に及ぶ迄、裏切の氣色も見へざれば、家康公御心元なく思召、長政の方へ御使を被遣、筑前中納言裏切遲きは、身方を欺きたるには非やと仰下されける、長政兼而約せし事なれば違變あらじと思ひ、其由を委敷言上せん爲、家臣榊傳兵衛といふ辯才ある者を使として參らせらる、家康公榊を御前に召れ其由を聞せ給ふ、〇中略かゝる所に黑裝束したる武者一騎、家康公の御前に馳來り、筑前中納言裏切可仕由に候得共、旗色敵共味方共知不申、心元なき由馬に乘りながら申上れば、家康公聞給ひて、然らば福島が手の鐵炮を二十挺組にして二通つるべはなしに松尾山に向

ひて打せよと仰られ、御使番の士を指添遣さる、頓て白き笠符を付たる足輕二十人松尾山にむかひ、諸軍に立はなれ鐵炮二つゝべ打出す、黒裝束したる武者は、福嶋左衛門大夫ゟ參らせし使と云、一説に、家康公御家人久保嶋孫兵衛と云し人也、又松尾山には長政より人質に付て兼而より遣し置れたる大久保といふ者、平岡石見が傍に在又鐵炮打せたるは御陣より布施孫兵衛自分の鐵炮頭堀田勘左衛門といふ者兩人にて鐵炮十挺打懸しとぞ、然ども中納言の勢は猶山よりおろさず、て裏切の時節を伺ひ居るが、關が原の合戰はや半になりしかども、聊裏切の働見へず、何とやらん無覺束思ひければ、平岡石見が右脇に近付申けるは、早敵身方入亂軍最中と見へ候に、裏切の手立も今に見へざるは、甲斐守を御欺候かと推量申て候、若左樣の儀にて候はゞ八幡大菩薩も御照覽あれ、爰をば立のかせ申間敷候と申せば、石見きつと見て和殿などの知事に非、裏切の能時節は我に任せよ、時分猶早ければ相待居る也とて、關ケ原の合戰の樣を目もはなさず守り居たりける、是は秀秋の兵士は、小早川隆景の教習して置れたる練兵成ば、軍の鹽合を能しる故に、我兵の勝比に至らざればみだりに戰をはじめず、是其戰法也とかや、かくて左近が陣破れて東兵の進みかゝる勢を見て、時分能と思ひしにや、再拜振てかゝれ／＼と下知しける、○中略筑前の旗動き出してより山より下りけるを見て、其邊に有し脇坂中務、朽木河内守、小川左馬助、赤座久兵衛、此等の人々も心替して同じく返忠を志し、筑前中納言の勢と一に成て、大谷刑部が備たる大關村の北野に向て、敵の右の方より弓鐵炮を放ち掛吶喊で攻寄けるに、○下略

〔武功雜記〕二　一渡部内藏介ト大野修理同座ノ所へ後藤又兵衛來リ、オモシロキ事ヲウケタマハリ候、大住與左衛門ハ東へ内通ノアルトナリ、修理イヤ／＼與左衛門ニカギリ、其氣遣カツテ無之、アレハ太閤秀吉○豐臣ノ魚洗ニテアリシヲ、賢ナルモノトテ御取立ナサレテ、秀頼公ニ御機嫌ヨク物ヲアガラセヨトテ、御付ナサレ候、今度御籠城以後モ、方々アマタノ倉ノ鑰ヲ、與左衛門一人ガ手前ニトリ置、晝夜ヲカギラズ御用ヲ辨ジ見廻リ候、アノ心入ニテハ、中々二心アルマジキモ

雜載

ノナリト云、又兵衞鈍ナルモノヨリモ、其樣ナモノガ結句氣遣ニ候ト云、如案市正外ヨリ火矢ヲ射タル時、内ヨリ火ヲ付候ハ、與左衞門ガ所行ナリシ、

〔日本書紀 天武 二十八〕元年六月己丑、是日大伴連吹負密與留守司坂上直熊毛議之、謂一二漢直等曰、我詐稱高市皇子、率數十騎自飛鳥寺北路出之臨營、乃汝内應之、既而繕兵於百濟家、自南門出之、先秦造熊令犢鼻而乘馬馳之、俾謂於寺西營中曰、高市皇子自不破至、軍衆多從、爰留守司高坂王及興兵使者穗積臣百足等、據飛鳥寺西槻下爲營、唯百足居小墾田兵庫運兵於近江、時營中軍衆聞熊叫聲悉散走、

〔續日本紀 光仁 三十六〕寶龜十一年三月丁亥、陸奧國上治郡大領外從五位下伊治公呰麻呂反、率徒衆殺按察使參議從四位下紀朝臣廣純於伊治城、〇中略伊治呰麻呂本是夷俘之種也、初緣事有嫌、而呰麻呂匿怨陽媚事之、廣純甚信用殊不介意、又牡鹿郡大領道島大楯每凌侮呰麻呂、以俘夷遇焉、呰麻呂深銜之、時廣純建議造覺鱉柵以遠戍候、因率俘軍入、大楯呰麻呂並從、至是呰麻呂自爲內應、唱誘俘軍而反、先殺大楯、率衆圍按察使廣純、攻而害之、

〔陸奧話記〕賴時聟散位藤原朝臣經清、平永衡等皆叛舅以私兵從將軍、〇源賴義悉軍漸進、將到衣川之間、永衡被銀冑、有人說將軍曰、永衡爲前司登任朝臣郎從、下向當國、厚被養顧、勢領一郡、而娉賴時女以後、貳于太守、合戰之時、與于賴時、不屈舊主、不忠不義者也、今雖外示歸服、而内挾奸謀、恐陰通使告示軍士動靜謀略所出歟、又所著冑與群不同、是必欲合戰時使賴時軍兵不射己也、黃巾赤眉豈不別軍之故乎、不如早斬之、斷其內應矣、將軍以爲然、則勒兵收永衡及其隨兵中委腹心者四人、責以其罪立斬之、

〔太平記 二十二〕畑六郎左衞門事

寄手ノ中ニ上木九郎家光ト云ケルハ、元ハ新田左中將〇義貞ノ侍也ケルガ、心ヲ翻シテ敵トナリ、

責口ニ候ケルガ、數百石ノ兵粮ヲ通ジテ、畑ニ内通スト云聞ヘ有シカバ、何ナル者ガ爲ケン、大將尾張守高經ノ陣ノ前ニ、畑ヲ討ント思ハヾ先上木ヲ伐ト云秀句ヲ書テ、高札ヲゾ立タリケル、

〔松平記〕二戸田三郎右衞門心ならず家康の御勘氣をかうぶりし間、一揆共に催されしが、家康へ返忠を致し、寺内を燒たて、家康衆ヲ引入んと相圖をしけるが、不叶して外のくるはを燒て、早早にげ出ける間、頓而家康御勘氣をゆるし給ふ、

〔續武家閑談〕九此陣中〇德川家康陣御近習中に、城内〇大坂城へ反忠の者有之由申來る、其時權現樣御座を立せ給ひ、次の間を開かせ給ひて、御近習の者反間を爲す者あらんには、我見知らぬ事はあらじとて、各の顏を熟御覽有けるとなり、是れは彼の嚴成御容貌にて御覽あらんには奸曲なる輩あらば、自ら恐懼戰慄して、其心の邪曲容貌に顯れんとの御事なるべし、誠に名將の作略當意卽妙の御事なり、

古事類苑

兵事部十六

講和

古事類苑

兵事部十六

講和

講和ハ和議、和睦、又ハ和平ナド稱シ、兩軍兵ヲ解キテ相和スルヲ云フ、講和ノ法ニ種々アリ、期日ヲ定メテ會見ノ禮ヲ行フアリ、領地ノ境界ヲ劃定シテ互ニ侵サヾランコトヲ約スルアリ、誓紙ニ血判シテ約束ニ背カザランコトヲ誓フアリ、或ハ互ニ質ヲ交換シテ、萬一ニ備フルアリ、或ハ婚嫁ヲ以テ和親ノ意ヲ表スルアリ、若シ力屈シテ和ヲ乞フ時ハ、多クハ城ヲ致シテ退軍スルヲ例トス、

講和ニ、兩軍互ニ使ヲ遣シテ和ヲ議スルト、他人間ニ居テ兩者ノ間ヲ周旋調停スルトアリ、而シテ後者ノ例ニ在リテハ、僧徒ノ盡力セシコト少シトセズ、後柏原天皇永正ノ頃、近江國江南江北ノ戰ニ、叡山三井寺ノ門主等相議シテ、屢、佐々木兩家ノ紛爭ヲ和解セシメ、正親町天皇元龜天正ノ頃、長尾顯長等ノ館林城ヲ攻メシ時、近傍ノ諸寺院相會シテ、末寺門徒等ト共ニ屢、和平ヲ勸メシガ如キ是ナリ、又武將ノ命ヲ以テ和睦セシメシ事アリ、將軍足利氏及ビ織田豐臣等ノ諸氏ノ、屢、其部下ノ騷擾ヲ鎭メシガ如キ是ナリ、又勅シテ和ヲ約セシメ給ヒシ事アリ、正親町天皇ノ、天正八年ニ近衞前久等ヲ大坂ニ遣シ、本願寺光佐ニ諭シテ退城セシメ給ヒシガ如キ是ナリ、其他詐リテ和ヲ約スル事アリ、和ヲ議シテ中ゴロ變ズル事アリ、和ヲ背ゼザル事アリ、而シテ和成ルノ後ハ互ニ往來シテ相賀スルヲ例トス、

名稱

〔類聚名義抄 五〕講 古項反 和 カウ トク

〔段注説文解字 三上〕講 和解也 和當作龢、不合者調二龢之一、紛糾者解二釋之一、是曰講、易曰、君子以朋友講習、史記虞卿甘茂二傳、漢書項羽傳、皆假購爲講、古音同也、从言冓聲 古項切

〔唐書 列傳百二十五〕張説、字道濟、〇中略 始爲相時、帝 玄宗〇 欲事吐蕃、説密請講和以休息邊塞、

〔下學集 中言辭〕和談(ワダン) 和睦(ワボク)

〔運歩色葉集 和〕和合 和談 和融

〔書言字考節用集 八言辭〕和睦(ワボク) 李經 和平(ワヘイ) 和談(ワダン) 和義(ワギ) 〇中略 屈睦(クツボク)

奉勅講和

〔足利季世記 八野田福島合戰記〕信長與朝倉和睦之事

角テ十一月 元龜〇元年 モスギ行、十二月ニモ成シカバ、今年ハ取分寒天ニテ、雪モ切々降ケレバ、長途ノ長陣ニテ、北國衆モ信長衆モ薄衣ノ小屋ノ居住故、互ニ諸軍煩傺ヘガタク聞エケレバ、忝モ禁中ヨリ勅使ヲ立ラレ、公方樣 足利〇昭義 ヨリ御使ヲ添ラレ、兩方和談有テ可然ト御拵アリケリ、天子 〇正親町 ヨリノ御拵ハ前代未聞ノ事ナレバ、各々畏リ悅テ人質ヲ乞、十三日ニ和睦アリテ、十四日信長ハ岐阜ヘ下リ給ヒ、十五日淺井衆 長〇政 モ淺倉衆 義〇景 モ各本國ニ歸リケリ、

〔總見記 十一〕依勅定淺井朝倉與信長公和睦事

角テ對陣數月ヲ送リ、ハヤ極月 元龜〇元年 ニモナリケレバ〇中略 今ハハヤ敵モ味方モ退屈シテ、アハレ一戰ニ勝負ヲ決スルトモ、又和睦シテ引トルトモ、何方ヘ成トモハヤク埒ノアク樣ニトチガハヌ者コソナカリケレ、然ル處ニ當時ノ公方新將軍源義昭公ヨリ被遂奏聞、忝モ當今 〇正親町 ノ勅定トシテ、信長ト淺井朝倉和睦ノ儀御噯アリ、公方家ノ御使ニハ一色駿河守孝秀、イマダ其比ハ二階堂駿河守ト申シケルヲ以テ、綸旨幷ニ將軍嚴重ノ御書ヲ雙方ヘ下サレ、和睦仕ルベキトノ義ナリ、則公方ハ十一月晦日ヨリ、此御噯ノタメ將軍塚ヲ御立有テ三井寺ヘ御動座ナリ、角テ上

使此旨ヲ取曖ハル、ニ、先ヅ信長公御請ヲ申サレ、忝モ帝王ノ勅定、公方ノ御下知、誰有テ難澀申スベキヤトテ、畏入候由早速ノ承伏ナリ、上使ソレヨリ淺井朝倉ヘ行向テ申シ渡セバ、兩將トモニ綸旨上意忝キ次第ニ存ル上ハ、兎角ニ不及畏奉存由ヲ申ス、然ラバ向後タガヒニ疎意ノ儀有マジトテ、同十二月十三日信長公ト義景ト起請文ヲ取カハシ、和睦相調ヒケリ、

〇按ズルニ、此時ノ講和ノ、勅命ニ出デタリト云フハ、甚ダ疑ハシキニ似タレド、姑ク此ニ收載ス、

〔信長公記十三〕天正八年三月朔日、禁中より、大坂爲御無事、近衞殿(〇前久)勸修寺殿(〇晴豊)庭田殿(〇重通)被成御勅使訖、信長公(〇織田)より爲御目付、宮内卿法印、佐久間右衞門相添被進候、閏三月二日、大坂退城可仕之旨、忝も從禁中被成御勅使、門跡(〇光佐)北方年寄共可有如何哉否之儀、不恐權門、心中之存知旨趣不殘可申出之由尋被申之處に、下間丹後、平井越後、矢木駿河、井上、藤井藤左衞門始として致許諾、退屈之驗歟、又者世間見究申之故歟、今度者上下御一和尤と申事ニ候、爰ニ而御院宣を違背申ニ付てハ、天道之恐も如何候也、其上信長公被成御動座、荒木、波多野、別所御退治之如く根を斷葉を枯して可被仰付候、近年大坂端城五十一ヶ所相拘、上下苦勞之者共に賞祿をこそ不宛行共、せめての恩に命を助可申旨門跡被相存知、來七月廿日以前ニ大坂退散に相定、御勅使近衞殿、勸修寺殿、庭田殿幷宮内卿法印、佐久間右衞門等へ御請を申、誓紙御檢使被申請候、此旨安土へ言上之處ニ、青山虎御檢使被仰付候、　七日、誓紙之筆本見申され候也、　四月九日、大坂退出之次第、門跡より新門跡(〇光寿)かたへ可被相渡之旨御届之處に、近年山越を取妻子を育候雜賀淡路島之者共、爰を取離れ候ては迷惑と存知、新門跡を取立候はん之間、先本門跡北方を退申され、一先被相拘尤之由樣々申に付て、若門跡此儀に同事右趣返事候、本門跡、北方、下間、平井、矢木等御勅使へ御理申、雜賀より迎舟を乞、四月九日大坂退出、　八月二日、新門跡大坂退出之次第、御勅使近

衞殿、勸修寺殿、庭田殿、右ノ下使荒屋善左衞門、信長公より被相加御使宮内卿法印、佐久間右衞門、大坂請取申さるゝ、御撿使矢部善七郎、〇中略然而大坂退城之後、頓て信長公御成有而、此所可被成御見物、其意を存知端々普請掃除申付、面には弓鎗鐵炮等之兵具其員懸並、內には資財雜具を改有べき體を結構に飾置、御勅使御奉行衆へ相渡し、八月二日未刻、雜賀淡路島より數百艘の迎船をよせ、近年相拘候端城之者初として、右往左往に緣々を心懸、海上と陸と蛛の子をちらすが如く、ちり〴〵に別れ候、彌時剋到來して、たい松の火に西風來而吹懸、餘多之伽藍一字も不殘、夜日三日黑雲となつて燒ぬ、

〔東遷基業十六〕田邊城和平の事

前田德善院玄以ハ、去年〇慶長四年より在京の職となりけるが、此頃禁中へ召れて勅命ありけるは、細川玄旨〇藤孝は秀賴〇豊臣に對して疎意なき趣は分明なり、志かるを天下の爲とて此ほど兵革を動す輩、罪なき玄旨を征伐せんとす、その子越中守〇忠興玄蕃頭等、若秀賴に背くとも、豈父が素意ならんや、是を滅さば誰か其暴逆の甚しきを惡ざるものゝあらんや、幽齋も又强て一城にたて籠らば、自ら秀賴を蔑にするの譏りあらんか、次には古今和歌集の傳受、當時幽齋壹人也、彼れ若計らざるに命を殞さば、數十世の傳來永く絕て、ひとへに歌道の衰へとなるべく、是に依て宸襟を惱し給ひ、彼古今集を召上られ、此間叡覽有つれども口決なくしては明らかならぬ所有て、此書あれどもなきがごとし、志かれば雙方親睦して、幽齋再び都に上り、此集の傳へを世に殘さば、叡感いかで淺かるべき、幸玄以は、日頃內府〇徳川家康に志たしみふかく、また秀賴を餘所にみるべきものにもあらねば、互に玄以が言葉を信じて和睦せん事疑ひなし、急ぎ此事の思慮をめぐらすべしと仰出さる、德善院勅命を承りて朝廷を退き、急ぎ丹後へ飛脚を下し、勅諚違背しがたき事あり、城中寄手相倶に矢留せらるべしと云遣し、其身は直に大坂へ下り、安藝中納言〇毛利輝元と

許勅命

増田右衛門尉〇長盛に逢て勅命をのべ、願くは丹後へ軍使を立られ、寄手の諸將圍みを解き、幽齋恙なき樣に御下知あれかしと申ければ、輝元長盛兩人共に、勅命更に背きがたし、去ながら備前中納言其ほか石田長束方へ此趣を申遣し、重ねて貴方迄内談すべしとあるにより、德善院は歸京せらる、五六日過て、輝元長盛兩人より德善院方へ使者を上せ、先日申聞らるゝ趣いづれも我等同意なり、但和談の古法なれば、幽齋丹後國中を退き、四ヶ所の城には小野木縫殿介差圖して、堅く番手を置べき旨、貴殿の所存に寄て此方より申付べしと也、玄以返答せられけるは、宮津峯山久美の城は、籠城の初より捨置たれば、幽齋迹禮をいふべき樣なし、田邊の城を小野木にわたし、剩領地を退かん事は、幾たび仰聞らるゝとも、幽齋同心なかるべし、去からば田邊の城番は、某が手のさきに申付てはいかゞ候べき、重ねて御下知を請べしと也、使者大坂へ歸りて、此旨を申ければ、ともかくも宜きやうにさたせらるべしと有に仍て、勅命の趣を玄以自筆の書面にあらはし、次に自分の料簡を使者の口上に云含め、幽齋へ異見せられけれども、曾く同心なかりけるに、西三條大納言實條卿を勅使として、〇註略急ぎ城を開くべきよし懇に仰下されければ、幽齋勅命背き難きに依て、終に田邊を退去あり、

〔時慶卿記〕慶長五年九月三日、丹後へ幽齋扱ニ、日野大納言〇輝資中院〇通勝富小路〇秀直同心ニテ下國也、北澤ヘ出テ、物語ノ次ニ聞、廿一日、日野、中院、富小路、丹後ヨリ上洛ト遣使飛鳥井預使又此方ヨリモ祝着ノ旨申遣、

〔孝亮宿禰記〕慶長十九年十二月十五日癸巳、將軍家〇德川秀忠與秀賴和談之事、自公家被仰下、件御使廣橋大納言〇兼勝、西三條大納言〇實條兩人今朝下向大坂云々、

〔駿府政事錄六〕慶長十九年十二月十七日、爲勅使廣橋大納言、三條大納言被參、是者寒天之時分、于將軍〇德川秀忠被仰付、大御所〇德川家康先可有上洛歟、且若和睦之儀可被仰付歟、御内證勅定云々、日野

入道唯心、金地院宗傳申上之、大御所仰曰、諸軍勢可申付致在陣也、和睦之儀不可然、若不調則令輕天子之命、甚以不可然也、勅答被仰上、

〔赤松再興記〕明應八年ヨリ、備前美作播磨ノ三州、東西二ツニ分テ蜂起ス、浦上美作守則宗、才松丸〇赤松ヲ相伴テ鹽屋ノ城ニ入ル、當城ハ下野守政秀ガ城也、然後公方家〇足利義澄ノ御敎書、幷細川政元ヨリ下知アルヲ以テ、東西悉和睦ス、

〔朝倉始末記〕三朝倉太郎左衞門入道宗滴進發加州事

朝倉金吾敎景入道宗滴、齡既傾ケレドモ、武略ノ道ヲ不捨シテ、朝暮心ニ懷被思ケルハ、〇中略近年加州ノ土民等、本願寺ヲ語、武士ノ國ヲ押領シテ、恣ニ逆威ヲ振フ有樣ハ、千古未聞ノ暴惡カナ、是只佛法ノ怨敵ノミニ非ズ、兼テハ又害君敗國ノ凶賊ナリ、今若彼ヲ絕ズンバ、誰カハ誅伐スベキトテ、內々義景ヘ〇中略申サレケレバ、義景打領、尤理ト覺候間、諸卒ニ申觸ルベシトテ、卽多勢ヲ附タマフ、因茲弘治元年七月廿一日、宗滴加州ヘ進發シ給フ、〇中略弘治二年ノ春、京都〇足利義輝ヨリ大館氏御敎書帶シテ下向アリ、其御內書ノ詞ニ、

先度以晴元如申遣、立置人數先急度可召返、於存分者以兩樣之內可申聞、本願寺不能承引者重テ而出勢事可任義景心中候、被仰噯剩及一戰、不慮之儀出來者、互不可意趣止候歟、併存天下ノ爲候者、此時同心可爲神妙候、猶義堅可申也、

弘治二年三月廿九日

朝倉左衞門督殿へ

斯テ越加和睦ノアツカヒ既ニ成ケレバ、大將右兵衞尉景高ハ、諸軍勢ヲ引具シテ、弘治二年四月廿一日、一乘ヘコソ歸ラレケレ、

〔安西軍策〕三隆元赴防州事付大友毛利和睦事

永祿六年、大友宗麟ト毛利元就トハ、昔日ハ和睦シ給ヒケルガ、大内義長切腹ノ後又不和ニ成ケレバ、元就朝臣思給ハ、大友宗麟ハ無雙ノ弓取ナリ、其上防長兩國ハ義長ニ好有ケレバ、志ヲ發シ大友へ靡隨事ヤ有ントト、隆元朝臣ヲ兩國ノ押ヘトシテ防州へ下シ、岩國永興寺ニ在陣シ給フ、○中略光源院義輝公ヨリ、毛利家ヘハ聖護院(○道増)大友ヘハ久我大納言殿(○通堅)ヲ御使トシテ、近年諸國兵亂ノ事、是偏ニ上ヲ蔑如ニスルガ所致ナリ、然バ大友毛利早ク令和睦、中國九州靜謐ノ計專要ノ旨被仰下ケレバ、兩家大樹ノ高命ニ任セ總令和平、

〔淺井三代記　十六〕信長與朝倉淺井和睦の事

斯而元龜元年の歳も極月にせまりければ、○中略信長卿より御内意こそ侍りけめ、室町殿(○足利義昭)時分をはかりたまひ、信長も淺井(○長政)朝倉(○義景)も對陣につかるべし、噯を可入と思召、雙方中和せしむべき趣、信長卿の本へ仰こされければ、本より信長卿は内通したまひける事なり、○中略幸と思ひたまひ、とも角も御諚次第と御請申上させたまふゆゑ、淺井朝倉兩人の方へも將軍の御使として中和可仕旨被仰越ければ、兩人右の趣承、將軍の仰尤忝奉存候へ共、信長卿はよく契約を違へ被申人の事にて御座候へば、相心得難く奉存旨申上、承引申さゞれ共、御使再三に及び、其上將軍義昭公御自身御出被成、達て被仰付けるに、長陣にやつかれけん、やがて御請申上る、將軍御諚として、向後よりしては互の領分へ手ざし有間敷旨誓紙を取かはし、和睦重て相調りける、○中略其時淺井朝倉叡山にて對陣をはり、越年して大坂野田、福島といひ合せ、後卷をせさする物ならば、なんなく信長卿を討取べきものを、兒童の様成淺き噯かなと京童は笑ひける、

○按ズルニ、信長公記ニハ、霜月(○元龜元年)廿五日、公方様へ朝倉色々歎申に付て、無爲之儀被仰出候、信長公御同心無之處に、霜月晦日三井寺迄公方様御成有而、頻に上意候事候間、難默止被思食、十二月十三日御和談相究トアリ、

不從命

〔豐薩軍記 二〕大友島津和睦事

其比天下ノ武將ヲ織田信長公ト申シケル、大友島津不快ニシテ、干戈ヲ動シ合戰ニ及ブノ由聞召シ及バレ、兩家ノ確執和睦アルベシトテ、伊勢六郎左衞門尉貞順ヲ上使トシテ差下サレケル、是ニ依テ雙方共ニ和親ヲゾ遂ラレケル、其後ハ互ニ使札到來シテ、名馬ヲ送リ送ラレケル、彼貞順ト云ケルハ、天文ノ比ヨリ數回豐後ヘ下向シテ、宗麟懇意ナリケル故、此般信長公兩家確執和融ノ事、此人ニ仰セラレシトカヤ、

〔豐薩軍記 五〕能呂傳右衞門之事

關白秀吉公ヨリ、大友〇宗麟毛利〇元就和睦ヲ遂ゲ、西國靜謐ナラシムベキ由仰下サレタリケレバ、違背スベキニアラズトテ、兩家合體ノ御請ヲゾ申サレケル、

〔陰德太平記 三〕武田攻有田城附吉川高橋論同城事

當國〇安藝ノ探題武田太郎左衞門元繁、吉川〇經基高橋〇久光ヘ使ヲ以、今國中暫穩ナル時節、兩人私ノ宿意ヲ以爭鬪ニ及事、亂邦ノ基、對公儀不忠不義ノ至也、只互ニ理ヲ枉忿ヲ押ヘテ可被和解ト被云送ケレバ、雙方仰ノ趣存其旨候、當城ヲサヘ吾ガ有ト爲候ハヾ、和平可仕ニテ候ト被答、元繁重テ云レケルハ、有田ノ城ニ於テハ吉川高橋共ニ手ヲ不可被付、元來小田刑部少輔〇信忠ガ代々ノ本領ニテ候間、彼者ニ可被返與候ト扱レケリ、探題ノ扱ナレバ、無力雙方忿ヲ押テ和睦シ、城ヲバ小田ニゾ渡シケル、

〔豐薩軍記 五〕能呂傳右衞門之事

關白秀吉公ヨリ〇中略薩州嶋津〇家久ヘモ大友〇宗麟ト和融ヲ致シ申スベシトテ、仙石權兵衞尉ヲ以テ仰遣サレケルニ、一向ニ隨ハズ、剩ヘ仙石ガ使者能呂傳右衞門ト云ケルヲ歸サズシテ押籠置ケルガ、其年ノ極月ニ殺スベキニ極リ、密ニ是ヲ亡シテ、何トナキ體ニモテナシ、湯屋ニテ先ヅ

澡浴ヲ致サシメケル、浴モ半ナラントスル比ヲヒ、預リ人ノ某太刀拔モツテ入來ルヲ、傳右衛門元來シタヽカナル者ノ、心飽マデ早カリケレバ、盥ヲ取テ投付シ程ニ、アヲノケニ打倒シ、直ニ屛ヲ蹈破リ、突ト出テ一散ニ走リ行ク、誰カハ爭デ止ムベキ、疾キコト魯戈ガ日ヲ追テ虛空ヲ翔ルモ斯ヤランヽ早ヤ十餘里バカリモ逃ノビヌ、比シモ十二月ノ半バナレバ、天寒ク地凍リテ、朔風凜凜タリケルニ、一重ノ衣ダニ繫ネバ、イトヾ寒風身ニ入テ肌ヲサス事刃ノ如シ、奈ハセント思ヒシガ、去ル事アリトテ、アル川水ニ飛入、姑クアリテ立アガリ、足ヲハカリト走リケルニ、後ニハ混身アタヽカニシテ、吹風トテモ寒カラズ、兎角シテ豊後ノ地マデ來リシハ、不思議ナリケル事共ナリ、

〔源平盛衰記二十一〕小坪合戰事

畠山〇重忠ガ乳母子ニ半澤六郎成清、和田小太郎〇義盛ガ前ニ下塞テ云ヒケルハ、三浦ト秩父ト申セバ一體ノ事也、兩方源平ノ奉公世ニ隨フ一旦ノ法也、佐殿イマダ討レ給ハズト承ル、世ニ立給ハヾ、畠山殿モ本田半澤召具シテ、定テ源氏ヘ被參ベキ、平氏世ニ立給ハヾ、三浦殿モ必御參アルベシ、是非ノ落去ヲ知ズシテ、私軍其詮ナシ、兩陣引退カセ給ハヾ公平タルベキ歟ト云ケレバ、半澤ガ角云ハ、畠山ガ云ニコソ、人ノ穩便ヲ存ゼンニ、勝ニ乘ルニ及バズトテ、和田小太郎ハ小坪ノ峠ニ引返ス、軍既ニ和平シテ、〇下略

〔鎌倉大草紙〕正月〇文明十年朔日、簗田中務方より、長尾左衛門尉〇景春方へ寺尾上野介を使として、上杉と御和談可有由申來る間、和談にて互に合戰をやめられ、陣拂あり、

〔安西軍策五〕義昭卿信長朝臣不快扱事

天正元年、公方義昭卿信長朝臣御中不和ニ成テ、既ニ矛楯ニ及ノ由其聞エ有ケレバ、爲扱自輝元朝臣ハ林木工允、安國寺惠瓊西堂、元春朝臣ヨリハ井下左衛門尉、隆景朝臣ヨリハ粟久内藏允ヲ

被差上セ、節宇治ノ眞木ノ島ニテ羽柴藤吉丼ニ日乘上人ニ付テ取扱シ、義昭卿ノ御命ヲ助ケ、天正元年七月十六日紀伊國ノ方へ送申ケリ、

〔奥羽永慶軍記十二〕小野寺秋田ト合戰ノ事

小野寺〇義道ノ陣ヨリ六郷長五郎正乘、秋田〇城介實季ノ小勢ナル由利ノ人々ノ方へ使ヲ以テ案内ヲ乞ヒ、其後手ノ者十四五人具シテ敵ノ陣中ニ入、由利ノ打越岩屋赤尾津ニ對面シテ、各何トカ思ヒ給フ、今度小野寺ト秋田トノ戰、互ニ遺恨有テ起シ給フニモアラズ、一旦大平廣治ガ進メニ依テ小野寺思立シ事ナレバ、秋田殿モ止事ヲ得ズシテ戰ニ及給フ、サレドモ且ハ都ノ將軍聞シ召レン事モ憚アレバ、我々扱ヲ入テ、兩方和睦ヲナサシメント思フハイカニトイヒケレバ、打越赤尾津岩屋大ニ打ウナヅキ、尤ニ候、イザヤ兩大將ニ此由ヲ申サントテ、六郷ハ小野寺ニ行キ、打越赤尾津岩屋ハ城介ニ對面シテ此旨ヲ述ケレバ、兩將元來絶テ戰ヲ好ムニアラザレバ、和睦ニゾ及ビケル、

〔豐鑑二吹上濱〕その年十〇天正三年の秋、秀吉越中國に趣給ふ、彼國は織田信長公、佐々陸奥守主〇成政にあたへ給ふ、〇中略佐々陸奥守越中に留りて、〇中略越中國殘らず心の儘にまれり、秀吉尾張の軍の折、信雄に心を合せ、秀吉をそむきければ、かく馬をすゝめ給ふ、〇中略佐々氏は信長のずさにて、常にあひなれし中なれば、富田左近、津田隼人媒にして、頓而平をなせり、

〔奥羽永慶軍記十五〕佐竹與伊達安積合戰付岩城石川扱事

岩城左京大夫常隆、石川大和守昭光心ヲ合セ、伊達〇政宗佐竹〇義重ノ兩家、近頃度々合戰益ナキ事ト覺ルナリ、兩家和睦ヲ成サシメ、此後戰ヒナカランヤウニセントテ、佐竹方ヘハ岩城ガ郎等白土攝津守、伊達方ヘハ石川ノ郎等志賀閑長齋ヲ遣ハシケル、扱モ佐竹方ニハキノフノ戰ヒニ雌雄ナキ事ヲ本意ナク思ヒ、今日ハ有無ノ働ヲ成サント、諸大將モ軍勢モ勇ミ進ンデ既ニ打出ン

ト見エツル所ニ、岩城石川ノ使者來リ鹿ヲ以テ招キ、道ヲヒラカセ兩陣ニ入、常隆昭光ノ所存ヲ述、兩使ハ入替テ再三扱テ、弓鐵炮ヲ相止、名代ヲ以テ佐竹伊達和睦ノ驗ヲナス、佐竹ヨリハ小野崎三郎來テ、伊達成實ヲ以テ政宗對面ス、伊達ノ名代原田左馬介來テ、小貫伊勢守ヲ以テ義重ヘ見エケレバ、岩城石川ノ兩使面目ヲ施シテコソ歸リケル、

佐竹伊達和睦破事付阿子島高玉落城事

伊達〇政宗ト最上〇義光中アシク矛盾ニ及ベバ、政宗母儀是ヲウキ事ニ思ヒ給ヒテ、政宗ニ宣ヒケルハ、今度石川殿〇昭光岩城殿〇常隆ノ扱ニテ、佐竹殿モ一ツノヨシミ深事コソウレシケレ、此上ハ最上殿ニモ和睦シテ、母ノ歎キヲ止ヨカシト有ケレバ、政宗聞給ヒテ、我邪ニハアラネドモ、外舅義光道ニ背キ候ヘバ、詮方ナク兵ヲ起シ候、サレドモ仰ヲバイカデ背キ候ラハン、少將殿サヘ心解候ハヾ何ノ恨ヲ殘ス事カ候フベキトイハレケレバ、母儀斜ナラズ悅ビ、身ヅカラ最上ノ境ナル中山トイフ所迄出給ヒテ、舍兄義光ノ許ヘ此事ヲクハシクイヒ送リ給フ、義光聞給ヒテ、政宗野心ナシトイハルヽニ於テハ、某モ子細ナシトテ、則米澤ト最上ノ境ニタチ出給ヘバ、政宗モ同ク爰ニ至リ、互ニ對面ヲゾセラレケル、是ニ依テ一昨年大崎義隆ヨリ請預リシ泉田安藝守ヲモ米澤ニ返シ、大崎トモ和睦ニゾ成ニケル、

〔關八州古戰錄二十〕小田原城大扱事

同月〇天正十八年七月十三日、小早川隆景笠懸山ノ陣營ニ參シテ、今ハハヤ北條家持分タル近國ノ城々悉ク麾下ニ服シテ小田原一城ニ相迫リ、時節ノ至レル所ナレバ、東國ノ案內者ト云、彼是以大神君〇德川家康ノ內談マシ〳〵、計策アラレ然ルベシト申サレケレバ、殿下〇豐臣秀吉點頭シタマヒ、則大神君ヘ密談有シニ、調略ノ事ハイト安カルベキ義ナレド、氏直〇北條ト緣座タレバ、術ニ乘ザル事有ヌベシ、一先上方衆ヲ以テ計義ヲ入ラレ、其上ハ家康兎モ角モ取計ヒ可レ申旨御挨拶ニ付テ、是モ

又尤ナリトテ、黒田勘解由次官孝高ハ去年己丑四十四歳ニテ、家督ヲ嫡子甲斐守長政ニ與奪シ、致仕ノ身タリト云共、○中略是ヲ招テ相談セラル、孝高承諾シテ、家人井上周防守之房ガ弟平兵衛ヲ潜ニ太田十郎氏房ノ陣ニ遣ハシ、和睦ノ事ヲ申入ラル、○中略此和平整ヒシニ付テ、氏直ヨリ黒田孝高ニ禮謝トシテ日光一文字ノ太刀、北條家ノ白貝ト名付タル陣螺、并ニ賴朝卿以來鎌倉將軍家治世ノ間ノ日記ヲ送ラレケリ、孝高是ヲ受納シテ、後年太刀ト陣螺トハ吾ガ家ニ留置、日記ハ大神君ニ進獻アリ、此書今マデハ北條家ニノミ秘シ傳ヘテ、他家ヘハ披露セラレザリシガ、家康公御覽有テ、武家天下ノ權ヲ執リ、海内ノ成敗是ニ據ズシテハ徹ナカルベキニ、末代マデノ龜鑑ナリトテ殊更ニ悅ビ思召、官庫ニ納置セ賜ヘリ、今ノ世東鑑ト號シモテハヤス實錄ハ則是ナリ、

僧徒爲武人勸和

〔淺井三代記〕二江南江北和睦の事

觀音寺には、江南旗頭不殘集り軍評定をして居たりけるに、三井寺門主登城被遊けるに、此門主は圓滿院殿なり、南屋形定賴卿○佐々木一門なれば、軍評議を聞給ひて宣ひけるは、近年は君は臣を討て、臣は又君ををかし、父子の間に干戈を用る世となれば、仁信の道すたれて、天下大きにみだれければ、其故を以て江南江北の戰となる、本は六角京極とて一家にして、車の兩輪のごとくなり、今かく一家として、雌雄をあらそひなば、他國の大事は何と防ぐべき、よからぬ一家の取合なり、中和尤たるべしと諫められければ、定賴卿も長陣あぐみ給へば、仰尤にて御座候、先年明應の戰に、京極と不和に成、江南より人數を出し相戰ふ所に、度々の取合に打勝、佐和山城迄此方より切とるなり、それゆゑ今以遺恨散せねば、如此戰ふなり、中和の理御座候はゞ可被仰付、諸卒休め可申とぞ被申ける、三井寺の門主聞給ひて、さあらんにおいては、先江北勢をおさふべしとて、圓滿院殿より、治部大輔○上坂泰貞許へ、思召入有之條、先軍互にやめらるべしとて、御使僧を被遣ける、

治部大輔承り、江北の者頭共に件の旨いかゞ可有とありければ、決定中和相調べきにはあらざれど、三井寺の御門主の仰にて候へば、一先御請可然事存候、其上にて此方の勝手あしく候はゞ御承引被成まじく候と申ければ、泰貞然らば御請を可申上とて、御使僧の趣畏奉存候、御一左右次第迄軍をやめ可申とぞ被申上ける、斯て圓滿院御門跡、延暦寺へ御越被成、彼山の御門主〇堯法親王をかたらひまし〳〵て、中和のよそほひ被成ける、

〔淺井三代記〕九朝倉勢佐和山表働の事付南北和睦事

淺井〇亮政朝倉〇宗滴の兩將軍議して、近日荒神山へ押寄、佐々木六角〇定頼を討取、近江一國を可治と事決定して居たりける處に、三井寺山門の門主達、江南江北近年又亂れ、互に雌雄をあらそふと聞給ひ、御噯に出御有て、已前の如く愛知川堺南北の領內證文をたゞし、起請文を取かはし、可爲中和旨種々再三宣ふ故、亮政もいかゞと思はれけれども、南北數年の戰ひに諸士もつかれはて、神社佛閣破滅不大形、民屋もおだやかならねば、先味方の者共にも、しばしなりともやすませばやと思ひ、和睦同心して勢を小谷へ引入ければ、定頼も觀音城へ引給ふ、

〔鎌倉管領九代記〕八下北條今川兩家確執附北條武田刈屋川軍並原美濃守心操並北條武田今川

三家和睦

瀨古の善德寺、府中の臨濟寺〇雪齋兩寺の長老は兄弟にて、今川〇義元の一門也、雙方來りあつかひをかけ、近國敵對の合戰は、遠境弊に乘の基なり、蟷螂蟬を伺へば、鳥雀蟷螂をうかゞふのおそれなきにあらず、無用の我執をとゞめて、向後和睦し給へとて、〇中略三大將〇今川義元、北條氏康、武田晴信、一所に盟會し、たがひに相救ふべき約をかたくし、後はしらず、めでたき歸陣とぞ聞えける、

〔關八州古戰錄〕八北條氏康父子越後謙信交和附上杉三郎景虎事

永祿十一年戊辰ノ夏、氏康入道萬松軒、家門宿老等ヲ集メ輝虎ト和平セン事ヲ內議シ、野州富田

ノ大中寺ノ長老虎溪和尙ヲ湯本ノ早雲寺ニ招テ、存念ノ旨趣ヲ相議セラレ、先以テ皆川ノ信鐵齋佐野ノ小太郎宗綱ニ、秘計シテ取繕ベキ旨云含メラレケレバ、虎溪和尙甲斐々々シクモ承諾シテ皆川榛木ニ往反シ、然シテ五月下旬、東上野上沼積ノ金剛院ト云ル修驗者ニ、小田原ノ足輕大將荒川道龍齋差副ヒ、氏康ノ使者トシテ越府ニ趣ク、佐野宗綱ノ家人遠藤織部正案内者トシテ、新發田尾張入道道如齋山吉玄蕃允業守ニ參會シ、萬松軒ノ懇望ヲ述ベ、和平事成ルニ於テハ、氏政ノ末ノ弟北條三郎氏秀ヲ質トシテ越府へ送リ置ベキ旨、委細ノ口上申シ達シケレバ、謙信モ滿悅有テ同心ノ返答有シ程ニ、重テ南方ヨリ一禮ノ爲トテ、武州江戸ノ城主遠山左衛門佐景政并ニ評定ノ頭人タリシ坂部岡江雪齋差副ヒ、金剛院相共ニ春日山ノ城邑エ打越、互ニ違變アルベカラザル盟書ヲ首尾贈答シテ、同年九月上旬、富田大中寺ニ於テ氏康父子輝虎對面アリ、千秋萬歲ノ慶賀ヲナシ、兩家和睦シテ退散ナリ、

〔館林盛衰記〕諸宗僧侶扱事

斯て寄手の諸大名各攻口を引退て、今日の合戰物語して、かさねて寄手有無の勝負を決せんと議せられけるが、流石名を得し名城に、諸野○因幡守秀氏一族同意の諸侍數を盡して籠りたれば、左右なく寄るもいかゞなり、又事延引におゐては、因幡守小田原を賴みなば、氏直○北條出馬有べし、然ばゆゝしき大事也、いかゞせんと智謀をもとめかねて、各意見まち〳〵なり、かゝる所へ近里の寺院和談の扱をなさんため、長尾但馬守○顯長の陣に出來給、其寺院は、茂林遍照普濟光恩善長寺等なり、但馬守對面あつての給ふは、○中略吾義兵を揚げ、旗下衆中馳加はり此合戰におよび候、城の沒落因幡守を切る事、後日の一戰なるべし、然ども戰國となりては、民くるしみ國おとろへ候はん事を恐れ御あつかいの段、僧徒の身には結搆成事共なり、さあらば因幡守を隱居致させ、城を退け、文六照景を歸城させ申さば、諸野內膳正○秀氏子を返し、本領に相添百貫の知行を增、永代可ニ

宛行」と被申ければ、僧侶不斜悦、此上は城中に參り因幡守に申さんと、暇乞て城を差急給、城になりぬれば、案內を乞て斯と申給へば、因幡守を始一族郎等與力の衆中に至る迄、內膳を返し助るうれしさに、後の難儀も不思皆尤と同じければ、僧侶よろこび、寄手の諸大將へも委細のむね申されければ、皆萬歲を唱へけり、○中略

小田原勢歸陣事幷依人質落城之事

氏親○北條喜悅し、さあらば氏高謀て見給へと被申ければ、畏て候と、若黨にも知らせず、其身鎧をぬいで衣冠を著し、同國赤尾山光恩寺へ被參けり、其比赤岩貫主を法印良重と申て、世に才覺優長の貴僧にて御座す、○中略氏高對面し、四方山の物語畢て、此度合戰和睦の事談じ被申ければ、法印聞しめし、尤國の衰微民の悲み、何事か是にしかん、愚僧和睦の扱すべしと隨し給へば、氏高悅て陣中に歸り給、其後廻文を以て門末の僧をまねきて、兩陣扱の本懷を議し、天正十一年十二月廿日、末寺門徒の寺主同宿數百人を運て館林に至り、かくと案內申給へば、長尾但馬守○顯長を始、諸大將に會して和睦の扱ひを被申、其樣は小田原旗下の義否の合戰に及しに、先旗下之義、自今以後小田原より可構にあらず、國法政務の事は、互に相談を可被遂と扱給へば、城にも異議なく、寄手子細に及ず、陣を武藏國忍成田深谷鉢形まで引れければ、小泉の寄手朝倉も、强陣を引て返れば、さすが亂れし世の中無爲の世と成て、民百姓も財寶雜具を荷返て、新玉の目出度よはひを重けり、

〔奧羽永慶軍記十八〕仁賀保兵庫頭與矢嶋合戰和睦事

兩陣○仁賀保勝俊、矢島滿安、ノ先手、是ヲ見テ、味方ヲ討セジト喚キ叫ンデカケ合、爰ヲ專途ト相戰フ、○中略仁賀保ノ禪林寺、矢嶋ノ高建寺兩僧來テ和ヲ入レヌ、其故ハ鮎川筑前守、瀉尾雙記齋、岩屋內記、打越左近ノ四家內談シテ、○中略モト親シキ中トシテカク合戰ニ及ブ事笑止ノ至リ云計ナシ、是非和

納質講和

睦セラレ候ヘト使トシテ取扱ハレシカバ、仁賀保矢嶋其意ニ任セ、互ニ陣ヲゾ引ニケル、

〔細川兩家記〕年くれて大永八年戊子に成也、越前衆と三好方相談して、細川雙方和睦の曖有、同正月廿一日に互に人質出し可然處に、三好神五郎、柳本一味同心して和睦を破り、三好元長を背て境へ下り、元長の儀色々讒言申されける也、

〔足利季世記五將軍地藏軍記〕公方三好和談之事

江州六角左京太夫義賢ヨリ、楢崎ヲ使トシテ、三好筑前守長慶方江公方樣〈〇足利義輝〉御入洛ノ儀ヲ再三御調儀アリ、三好殿モ日良上人ヲ以テ色々陳答アリシカバ、和談ノアツカイ相スミケル、其樣子ハ、三好殿先年宗三ノ讒言故、晴元〈〇細川〉ノ下知ニヨリ亡父海運亡命ノ恨フカヽリシカドモ、已ニ宗三打レ畢、晴元モ三代ノ主君ナレバ、御命ヲトリ奉ルマデノ事ニハ不及、以來家督ノ御望ミナク、御出家ナシ奉リヌ、晴元ノ若子ヲバ後ニ三好取立申サルベシ、先ヅ氏綱ヲ家督ニナホシ申サレ、公方樣御入洛アルベシト也、依之天文廿一年正月廿八日、公方樣ハ寶泉寺ノ御所ヨリ御入洛アリ、總明丸トテ晴元ノ一男五歲ニ成給フヲ御供ニ召ツレラル、是ハ昔木曾殿〈〇義仲〉ヨリ志水殿〈〇義仲子義高〉ヲ鎌倉〈〇源頼朝〉ヘ渡シ申サレシヨリ、人質トテ和談ニカナラズ有事ノ由キコエシ、

〔小松軍記〕和睦之事

城中〈〇小松城〉ノ家老ドモ相擬シテ、三陀山ヘ使者ヲ遣シ、横山山崎方ヘ云遣シケルハ、此比ノ爲體天下ノ大義ニテモ候ハズ、亦父祖ノ宿恨モナシ、僅ノ恨ヲ一家ノ御中ニ結レテ、公義ヲ御違背有ン事自他ノ御爲ヨカルマジ、枉テ和睦シ玉ハヽ、ンナラバ、長重ヲモ宥メ可申ト有シカバ、横山モ山崎モ尤可然トテ、頓テ利長ヘ達シケレバ、自是コソ有ベキ事ナレ、サラバ江口等ト對談シテ、直ニ疑ヲ解シメント宣ヘバ、此由ヲ返答ス、大谷與兵衞モ兼テ利長知玉ヒタレバ、江口坂井ト打連テ、三陀山ヘゾ參ケル、利長出合玉ヒテ、面々ノ計ヒ誠以神妙也、意恨殘ラヌ驗ニハ、舍弟利光ヲ人質ニ

出スベシ、能ラン樣ニ計ヘトテ、太刀一振宛給リテ歸サレケル、三家老立歸テ斯ト云シカバ、長重同之、舍弟左近將監長元、其時ハ口口トテ十歲ニ成ケルト、伯父丹羽九兵衞ガ娘二歲ニ成ケルヲ、人質ニ出スベシト云レケル、江口坂井大谷モ自分ノ人質一人宛相添可申ト云遣シケレバ、利長悅ビテ、時刻ヲ不可移トテ、舍弟御犬殿八歲ニ成玉ヒシガ、後ハ養子ニシテ肥前守利光トゾ申ケル、掛橋口ヘ倡ヒ來テ、人質ヲ出サレケル、長重モ定置レシ五人ノ人質ヲ供セラレテ出向、橋ノ上ニテ對面シ、人質ヲ取カハシ、二度親戚ノ契ヲ結バレケルトゾ聞エシ

〔備前老人物語〕ある人のいひしは、戰にのぞみて敵みかたあつかひになりて、互に人質をとりかはすことあり、其時は人質の乘來れる馬を乘かへさすべし、口授ある也、

〔甲陽軍鑑品第三十一〕天文二十三年甲寅二月中旬に、小田原北條氏康と駿河今川義元と取合おこりて、義元公より甲州信玄を賴み給ふ故、信玄公富士の大宮へ御馬を出され、氏康と度々のせりあひ都合十六日在之、〇中略此取あひ其せり合四日目に無事になり、駿府臨濟寺雪齋の扱にて、駿河今川義元公の子息氏眞公は相州氏康公の聟に、氏康の子息氏政公は甲州武田信玄公の聟に、信玄公子息太郞義信公先年より義元公の聟に約束有故、弘治二年丙辰に三方へ御輿入、今川北條武田無事也、

〔肥陽軍記二〕毛利大友和平附有馬寄小城事

毛利大友の交戰際なきよし天聽に達ければ、將軍義輝公の御あつかひとして、兩家を和睦せしめ、永祿五年大友〇宗麟の姬を毛利輝元の室家にさだめられける上は、九州の動亂ましづまりて、諸人安堵の思ひをなす、

〔總見記八〕大河内城攻國司和睦事

信長公〇中略御思案ヲ被廻、織田掃部助ニ被仰付、矢文ヲ射テ御噯ノ事有リ、掃部御使ヲ仕リ、和睦

ノ義ヲ申シ遣ス、其旨ハ八月〇永祿十二年ヨリ十月マデ數十日ノ合戰、互ニ軍兵ヲ費ス事詮ナキ次第ナリ、國司父子〇北畠信教、信意、信長ト和睦有テ、公方へ出仕シ玉フナラバ、御家モ目出タカルベシ、然ラバ當國司左中將信意ハ、フトリ肥テ公方家へ出仕ナンドモ成シ給ハジ、大腹御所ト異名セラレ病氣ナル人ナレバ、今ニ於テ子息モナシ、是ニ依テ信長ガ次男茶筌丸ヲ信意ノ養子ニ參ラスベシ、又信意モ妹ヲ養女トシテ茶筌丸ニ合セ、養子聟ニシタマヒテ國司ノ家ヲ讓リ給ハヾ、御家門次第ニ繁昌タルベシ、左アラバ和談ノ上ニテ茶筌丸ヲ遣スベシト、念比ニ被仰遣、國司父子此由悦ビ、朴木隼人ヲ使者ニテ、此旨畏候由同心申サレ、織田播部助、柘植三郎左衛門ト相談シテ、同十月廿一日和睦既ニ相調ヒケリ、

〔川角太閤記〕三秀吉家康卿を御引付被成べきと、被思召候御分別御工夫、中々枕を御わらし被成と相聞え申、其段々の御分別の次第は、御あつかひを被掛、樣子手引被成御覽と思召、家康卿の國の樣子御聞可被成ために、人を色々に作りなし、三河遠州へ被成御入候、御分別は、家康卿は籠城の支度有まじき也、唯一合戰とのみ計り可被相定と思召、右の目付御入被成候、目付時ニ罷上り候、御尋候へ者、籠城之用意一圓に見え不申候、鷹野川がりなどのやうなる慰までと、跡より參る目付も同篇なる言葉也、さればこそ秀吉推量すこしも違はぬなれ、御あつかひには先御妹可進候なり、此上は兄弟に可罷成と、御あつかひを可被懸也、其上に家康卿無合點ば、母と女とも又妹此三人を家康卿へ人質に可出と、蜂須賀彥右衛門、黑田官兵衛、其外二三人に被仰聞せ候へば、彥右衛門被申樣には、こはいかに、昔が于今に至るまで、天下人より其下へ人質を御出し候天下主の先例はいまだ不承候、是は以之外のようちに覺申候と申上候へば、秀吉御返事には各申上通尤也、去ながら秀吉昔が于今至るまで、げてんにも先例なき事を秀吉仕置、日本の後記に可留ぞや、秀吉に隨ふ國ははや三十ヶ國に及ぶ也、家康卿は甲斐國と四ヶ國なり、秀吉威光日をおつて

募りなば、この人質請取被置候共、秀吉我に不隨もの、此人質はた物にかけ火あぶりにせんなどとは被申間敷ぞや、此上は彌位詰に可成なり、右の人質の合點も無之候はゞ、此上の分別有之也、皆々聞候へと、和議澄候へば、東國は奥州外の濱までも則時に可討隨者也、○中略秀吉御分別には、御妹を家康卿と御ゑんへんに御取むすび可被成なり、是に家康卿合點ならば、祝言の取組に可納也、先へ被仰遣べきと思召、蜂須賀彦右衛門、津田四郎左衛門、此兩人御使に被立候處に、御口も和らぎ、右之御ゑんへん相すみ、御兄弟の御契約目出度をさまり候、家康卿より御使酒井伯耆なり、秀吉御妹則被進候、御こしを被入候故、家康卿も御上洛候事、

〔松平記一〕天文十八年、駿河今川殿○義元被仰るは、何とぞ安定の城を攻落し、三河一國平均に治めらるべしとて、雪齋和尚大將にて安定を攻らるゝ、○中略すぐに城へ押寄、二丸三丸を岡崎衆攻破る、○中略終に本丸計に成、大將三郎五郎を生捕にせんとす、尾州より後詰の大將平手と申者扱を入て後、三郎五郎殿をたすけて此方へ給り候はゞ、岡崎の人質を其方へ返すべしとの儀にて、雪齋扱を聞て、竹千代殿○徳川家康熱田に置申たるを其時此方へ取、織田三郎五郎殿に三河衆大久保等を付て、西野まで送り申候、

〔鎌倉管領九代記九上〕輝虎入道養子附上杉北條和睦

同○永祿十一年三月、上杉輝虎入道謙信、家老の面々を召あつめ軍評定せられけるついで、直江山城守諫言を奉りて申けるは、我君年比村上上杉兩家に頼まれ給ひ、武田北條の兩敵に向ひて軍をおこし義兵をすゝめ、○中略人のため義のため武力を疲かし、國のため家のため兵氣を損さし給ふもの數費ありて利なし、しばらく武田北條の對陣をとゞめ、加賀越中佐渡庄内の方へ御發向候らひて、國郡を打しづめ、諸將を招きしたがへ、時を待、運に乘じ、世の變をうかゞひ給へかしとぞ申ける、謙信も實もと思ひ給ふ處に、甘糟近江守申けるは此議誠に然るべく候、但し此まゝ

差置れなば、武田北條兩家のほこさきに、謙信戰かひ倦で手にあまされ、北陸の片邊物にも覺えぬ弱敵を打て功を立んと企らる、これぞ鳥なき里の蝙蝠よとあざけり笑ば、當家弓矢の疵成べし、同じくば先無事を作りて、秘計をめぐらし給ふべきかと申たりければ、柴田黑川竹俣以下一同に、此仰こそ然るべう候らへとて、小田原に使者をつかはし申されけるやう、北條家に於て輝虎更に遺恨なし、只上杉村上の兩家賴來るをもつて義兵をあげ、本領還住のはかりごとをいたす所に、武田信玄妨られ、北條氏康これに與し給ふ故に、怨なくして怨を結ぶ、輝虎苟も義を守る所に、上杉村上家運ひらきがたし、其間に加賀、越中、能登三ヶ國の諸侍、隙をうかゞひて弊にのらんとす、彼等を責伏候らはずば、是又家門の盜賊たるべし、何ぞ腹心の痾疾を忘れて、皮膚の塵垢をいとはんや、北條家もし輝虎にをひてさせる意恨もなく候らはゞ、輝虎があだを存じて根をふかくせん、然れば輝虎四十歲に及びていまだ一子をもたず候、氏康は子息あまたおはし候、其中に一人を給はり輝虎が養子とし、北條上杉兩家魚水の緣を結び、親族のよしみをなし候らはばやとぞ仰せつかはされける、氏康家老の人々を召て評定せらる、北條安房守申されけるは、武田北條一味のまじはり淺からずといへ共、信玄虎狼の心ありて、今川に不會し、織田に緣者となり、近を捨て遠に與す、當家のため終に蠹害と成べし、幸に和を請て輝虎親族と成給はゞ、關東をさまたぐる人有べからず、假令武田當家確執すとも、公方管領方人あらば、理運の勝利をとるべき道あり、御思案までもなく、御息の內一人を越後につかはし、御合體を遂られたらむは、武威長久のもとひ成べき歟と申されしかば、滿座此義に同じ、氏康第七の末子三郎殿を越國につかはし無事を作られけり、輝虎大に喜び父子の契約をなし、頓て元服せさせ上杉三郎景虎と名づけ、上杉北條の兩家たがひに音信をぞ通せられける、

〔總見記　三〕信長公與德川殿和睦事

信長公ツラ〳〵御思慮ヲ廻ラサレケルハ、予一度天下ノ亂ヲ鎮メテ萬民ノ愁ヲ止ンタメ、上方五畿內へ討ノボラント思フナリ、然レバ東方ノ押サヘニハ名將ヲ指置キ、跡ノ氣遣ヒナキ樣ニアラマホシク思者也、幸ニ德川元康弓矢ヲ取テ私ナク、心底ニ誠アリケル名將ナレバ、早ク彼レト和睦シテ東國ノ押ヘヲ賴置キ、心安ク上方へ切上ラント御工夫アリ、家老ノ面々ニモ此事御相談アレバ、皆々尤ノ由申スニ付テ、卽チ苅屋ノ城主水野下野守信光ヲ中人トシテ、德川殿ト御和睦有ケリ、略〇中鳴海表ニ指置レシ清須方ノ城々楯籠ル人數皆々引取リ、清洲一所ニ集メラレ、御人數大勢ニ成給ヒテ、今ハ早遠駿三ノ國々悉ク御隙アキニ成ニケリ、

〔豐薩軍記〕八權現嶽ノ城和睦之事

新納右衛門佐久將ハ、僅ノ砦ニ攻カヽリ勝利ヲ得ザルノミナラズ、士卒多ク討セヌレバ、空ク引退カンモ歎息シ、攻ントスルモ兵スヽマズ、案ジ煩ヒ居タル處ニ、略〇中一人ガ進ミ出略〇中所詮辨舌巧ナル者ヲ差遣シ、賺テ彼ニ和ヲ乞セ、若シ領承セバ其ニ事ヨセ引退ンニ如ハアラジト云ケレバ、久將此儀然ルベシトテ、先ヅ其口才ナリケルヲ且シ擇テ居タリケル、城ニハ略〇中斥候ノ者走リ來テ、敵陣ヨリモ武者一騎出來ルト告タリケレバ、此方へ入ラシメ惡シカリナントテ、平井將監兩三輩ヲ相伴ヒ、略〇中是ハ何方ヨリ何地へ越レ候ヒケルゾヤ、斯籠城ノ處ナレバ、容易ク通シ申事エコソ叶ヒ候マジキト云ケレバ、彼者則手ヲ束ネ、慇懃ニ躊躇シテ、某ハ新納右衛門佐ガ使者村井權之助ト申者ニテ候、山城守殿〇狹間鎮秀へ仰上ラレ給ルベシ、主人久將申入候ハ、今度島津ノ命ニ隨テ當城ニ罷向ヒ、互ニ義ノ爲メナレバコソ、是非ナク箭鋒ヲ変シナレ、然ルニ大友義統公豐前へ御退去アリシ後、郡庄多ハ薩州ニ從ヒ申サレ候ヒ、又此上ハ狹間殿御一黨モ共ニ心ヲ傾ケラレ、歸順マシマスベキニ於テハ、何方ニテモ御望ノ處ヲ先知一倍宛行ルベキ由、兵庫頭義弘方へ申遣シ、既ニ內意相極リヌレバ、向後御長久ノ御思案然ルベクナド辭ヲ盡シ申ケル、〇中

許講和

〇中略此由狹間ニ語リケレバ、〇中略鎮秀、尤ナリト云ヘドモ、暫シテ退カシメントセバ、定テ質ヲ取替サン、人質ヲ取カハサバ、大友方ニ疑レ後難ノガレ難カルベシ、然ラバ一向討死ニ如ハナシトテ、議定未ダ整ザル處ニ、二宮源助ガ弟庄次郎トテ、今年既ニ十六歳ニ成ケル者進ミ出テ曰ク、憚ナガラ某ニ姓名ヲ御許シ給ハラバ、敵ノ望ニ從ヒ出ン、一旦彼等退キナバ、如何ナル秘計モ御心ノ儘ナルベシト申ケレバ、滿座ノ士大夫コト〴〵ク謂ヲ齊フシテ、最モ然ルベカラント云フニ隨ヒ、鎮秀顏色トケテ感賞シ、汝未ダ若年ニシテ能モ命ヲ我ニ歸シ、身ヲ敵ニ委スル者カナト斜ナラズ悅ビ、則三ケ尻長門助ヲ使者トシテ和融スベキ由ヲ申セシカバ、案ノ如ニ右衞門佐質人ヲゾ乞ニケル、三ケ尻、其儀ニ候ハヾ狹間ノ嫡子鹽松ヲ進ラセン、其替ニ御一族ノ內一人遣シ給ハルベシ、左ナキニ於テハ此契諾爭カ整ヒ申候ハン、右衞門佐曰ク、當陣ニ我親戚ヲ具セザリケレバ、去ヌベカランズル者ヲ十人遣シ、國許ヨリ重テ計ラヒ申サントテ、酒ヲ出シ賞シ返シケリ、此由狹間ニ語リケレバ、彼借名ヲシタル鹽松ヲヤガテ遣シ、十人替リ質ヲ請取リ、狹間ノ邑龍祥寺ノ傍ニ圍ヲ造リ籠置キケリ、

〔相州兵亂記〕二小田原軍之事幷大森敗北之沙汰

相摸國ノ仕人大森式部少輔入道ト云者アリ、〇中略伊豆國ニハ、早雲菴宗瑞家老ドモヲ集メテ語リ玉ヒシハ、〇中略先ヅ大森ト和睦シテ交リヲ深クシ、タバカリテ討ベシト思フハ如何ニトアリシカバ、家老ノ面々皆然ルベシトゾ感ジケル、頓テ大森方へ使者ヲ立、種々ノ送物數ヲ盡シケレドモ、大森入道約條シテ和ヲ請フモノ謀アリト云事アリトテ、打解ル事ナシ、互ニ使者ノミニテ、サノミ入魂シ玉ハズ、然レドモ數月親ミ通ヒケレバ、後ニハヤヽ打解テ、ヲリフシノ會交アリケレバ、彌々深クゾカタラヒケレ、或時新九郎入道宗瑞小田原へ使者ヲ立テ申ケ、ルハ、此間當國ノ山ドモニテ多日鹿狩仕候故ニ、他山ノ鹿箱根山へ集ルト見エ候間、此方ノ勢子ヲ御分國ノ方ヨ

リ入テ、鹿ヲ此方ヘ押テ追入度存ズルトイヘドモ、貴國ノ方ヘ人衆ヲ廻シ候ハンコト如何恐入候、マゲテ御免ヲ蒙ラバヤト申ケルニ、大森運盡果ケルニヤ、斯ヲ謀計トハ不知シテ、安キ御事ナリト免シケル、

○按ズルニ、此後早雲ハ、狩獵ニ託シテ兵ヲ出シ、遂ニ小田原城ヲ襲ヒテ之ヲ陷レタリ、

〔常山紀談三〕元龜元年の春、大友左衞門督義鎭、肥前の龍造寺山城守隆信をうつ、隆信和を乞しかば、大友兵を加へず、肥前と筑後の堺に千栗といへる大川あり、吉岡下總入道宗觀といふ者、龍造寺は大敵なり、勝負もわかれず故なく和を乞しは謀あるべし、千栗をわたらん事たやすからじといへば、義鎭も尤なりとて、豐後の留守に置たる佐伯紀伊守惟敎、其子彈正少弼惟實、田原近江入道紹恩を呼よせ、六千の兵を二陣として、千栗の渡に備へて川をわたる、隆信はたばかりて敵の引退ん所を、不意に擊んと謀しに、大友の設有事を聞て、追はざりしとなり、

〔館林盛衰記〕因幡守切腹附一族郞等切害分散事

和談のあつかい調ければ、元龜元年十一月十七日、土橋善長寺にて會盟有べしとて、諸大將衣冠にて著寺あり、因幡守〇諸野秀氏も船にて善長寺へ被參たり、何も客殿に移り座定て後、諸寺の僧侶被申けるは、志合する則は吳越も地を不隔、況や親にもこへ親しきは同家傍輩のよしみ、予にも不劣、床敷は多年主從の好みなると申されければ、向後互に旨趣不可有、水魚和睦の御盃とて一獻の禮有ければ、流石此間確執片腹いたし、互の詞なく無興にて各座を立んとし給時、藥師寺九郞左衞門公通、小曾根玄蕃允〇正好の袖をひかへて、〇中略和漢共に會盟の席にて敵を亡し世を持たるためし多し、はや因幡守を討べしと被申ければ、玄蕃允われも此義を思なりと被申ければ、さあらば人々にも知らせんと、玄蕃允座敷に歸り、少し式代する體にて、人々にきつと目くばせし、何も心得座敷を立て郞徒若黨をまねき、長尾但馬守〇顯長は兼て其心懸有けるや士卒兵具を

著せり、諸勢善長寺を十重廿重に取盡し、鯨をどつと作る、因幡守が其風情、籠の内の鳥、網代の獸の如くにて、遁れてゆくべき樣もなし、此有樣を見て因幡守はがみをなし、予は三界のくびかせとは能言たり、我内膳が命を助んと此謀に載たり、侍は死る時を以譽あり、誰も遁べき命ならねば、敵の手に虜となり恥をさらさんより、尋常に腹をきれや人々とて、言葉の下より腹かき切て死にけるは、積惡は身を攻るとは兼て知る事なれども、無念なりし事共なり、

〔甲陽軍鑑二十品第五十七〕織田の信長きりほこり、播磨國を取て、信長家老木下藤吉を羽柴筑前守と、申付、播磨一國を右筑前守にくれ、安藝毛利にさし向らるゝに、かの筑前守信長に謀ごと劣らぬ侍ひ大將にて候故、信長金子を過分に申うけ、毛利家へ手を入無事にと申、其もやうは、信長東の敵武田を何樣にも倒し給ふべきと有故、中國毛利家とは無事に仕つれと仰こされ候と筑前方より毛利家へ申越、毛利家の弓矢も末に成る故、是を誠と存ずる所へ、見事なる金子の十兩吹をさしこし、八木をかひとり、舟にて駿河の國へまはし候といへば、毛利家の衆八木をうるに、城米まで悉く賣候、毛利家の隆景是れをきゝ、但馬半國をばおさへて米をうらせず候、去る程に羽柴筑前守手人數一萬五千をはらつて出、因幡伯耆但馬半國をせめ取に、城米なき故悉く城をあけ迯て、羽柴筑前守にとらるゝ、

〔籾井家日記一〕織田信長丹波國附屬光秀事附丹波家僞與信長和睦事幷黑井表合戰事

十兵衞〇明智光秀ハ、丹波ハ信長〇織田ニモラヒ申トテ、萬事ヲサシヲキ東丹波ノハシノ、桂川邊ニ討テ出候テ、東方ノ先鋒衆ト毎々弓矢致シ候、〇中略十兵衞モアグミ堅リテ、トカクナテトゾ和儀ヲ調申度ノ旨ニテ、織田ニ申候ヘバ、織田モ尤ト云ニヨリ、申コスハ、信長丹波衆ト元來遺恨ナシ、不慮ニ取合ニ及候コト本意ニアラズ、屋形〇八上秀治モ御館殿〇氷上宗長モ本領安堵アラレ、近國ノ旗下衆ヲモ御心マヽニ御指南ヂラレ、信長ト和談ニナサルベク候、信長ハ私ナラヌ將軍ニテ候ヘバ、

御使者ヲ折々進ゼラルベク候トノコトナリ、氷上殿八上ノ御城ヘ入セラ候ヘバ、旗頭衆宗徒ノ人々アツマリ評定アリ、國衆ノ申ハ、織田ハ仕合者ニテ、近年方々ト弓矢致候ヘドモ、一代ツイニ弓矢ヲ知タル手ゴハキ者トシタルコトハナク、長袖ノヤウナル者トバカリ致スユヘ、當國ヲモ他國ノコトノヤウニ思ウテ不覺ヲトリ、和談ト申スナレバ彼ト意知合テ腹ヲ立サセ、直ニ信長ヲ引付テコラシメニ逢セヨ、明智メヲバ生捕テ、桂川ニハタ物ニカケテ見セヨト申ス、氷上殿旗頭衆ニ御密談ノコトアリテ、和談ニナサレ申候ヘバ國衆ハヨリ合、フカキ軍法コソアルラメ、腹ノ入ラヌコト丶云フ、其後屋形ヨリ、使者ニテ信長明智ガ方ヘ申ツカハサル丶ハ、今度將軍樣ト和談ヲ國中ヨロコブノ處ニ、當國旗頭ノ内ニ、黑井穗壺兩所ノ城主ノ赤井惡右衞門ト云者、信長ノ旗下ニナルノ道ナシ、成上リノ明智ニ和談致スマジキト申切候、〇中略ヨキ大將衆ヲツカハサレ、大軍ニテ退治イタサレ候ヘ、然バ國司衆大將衆モ、アヤシキ國旗ドモヲバサシヲキ、内樣ノ者バカリニテ大將衆ト出合、評議シテ先手タルベシトノコトナレバ、信長腹ヲスヘカ子、明智日向守ニ、其赤井メヲ早速ニ退治セヨト申付ルニヨリ、明智ハ、〇中略一萬五六千ノ人數ニテ、當國ヘウカウカト來リ、屋形ノ衆ヲ案内ト致シ、黑井ノ八幡山ニ陣取申候、〇中略屋形ト氷上殿トハ、内樣衆ヲ御スグリ、小勢ニテ出ラレ、明智ニ對面シテ評議アルトテ、暮方ニ及テ兩旗ニテ進マセテ、俄ニ時ヲ作リカケ、太皷ヲ打テス丶マル丶、明智ガ人數ギヤウテンシテ、陣ヲ立カ子色メク處ニ、屋形ノ御旗明智ガ先陣ニ向テ前後左右ニ切テマハル、〇下略

〔太閤記〕五秀吉卿與柴田修理亮勝家及鉾楯起之事

初冬之比、瀧川左近將監謀りけるは、勝家は若き時より腹のあしき事大かたならぬ人也、北國へ中冬より中春までは雪ふかうして、心八長におもふ共上方への出勢も成まじき也、いざ年内は秀吉と和睦の調宜からんと思ひ、勝家へ其趣ひそかに云やりければ、則其義に應じ、前田又左衞

門尉、不破彦三、金森五郎八、幷養子伊賀守を以、秀吉へ入魂有べき趣云つかはすべきと思ひつゝ勝家老臣に相議しければ、何も宜しく候はんと也、天正十年十月廿五日、小島若狹守、中村文荷齋を以、三人之衆へ右之旨頼入之條、京都へ上り候て、信長公如此ならせ給ひ、今幾程もなく傍輩と戰を挑まん事も口惜、たゞ和睦し、若君を取立、先君の御恩を可奉存旨、よきに計ひ給り候へと有しかば、何も左もこそ有べき事にて候へとて、十月廿八日北庄を立、江州長濱に至て伊賀守に此趣を語りければ、尤可然事に候、吾病の床に在と云共、肩輿に助られ上著し、此事を諷見んと悅び、晦日長濱より同船し出にけり、十一月二日、攝州寶寺にいたり、四使富田左近將監宿所へ尋行、此人を以羽柴筑前守殿へ右之趣申述候へば、是は忝奉存也、何樣にも勝家御差圖次第に御座有べし、信長公老臣之事なれば、何を以いなび申候はんやとて、一兩日饗膳よきに沙汰し、霜月四日四使を歸しけり、四人之衆、秀吉の御存分おもひの外かろくおはします也、雖然そのしるしなくては、遠路上りたるかひなしとおもひ、おし返し筑前守殿へ申入やうは、とてもの御事に盟のところいかゞ御座有べく候や、たがひの御誓紙も能候はんやと有ければ、我もかく存寄候、丹羽五郎左衞門尉、池田勝入などゝも申談、宿老共殘らず其かため宜おはさんや、各へ其趣申つかはし、是より一つ書を以申上候はん、其旨修理亮殿へ被仰達候へと有しかば、四人の衆げに左もあらん事なりと思ひ、重て右之沙汰に及ばず歸にけり、○中略十一月八日、都を立て大津より船に乘、其夜の明がたに長濱にいたりて著陣し、すぐに越府に著て、十日之晩北の庄へ參り、秀吉よりの返事之趣勝家へ委申ければ、寒天之節楚辛勞力段滿足之通、其謝尤ねん比也、柴田春は時の宜きに順ひなん物をと笑を含み、筑前守を方便りすましたるよと悅び思へり、かくて三人之衆は居城へ歸りにけり、○中略

筑前殿、蜂須賀彦右衞門尉、木村隼人に向て仰ける、今度柴田が方より四使を以和睦之事察し思

ふに、中冬より中春までは深雪ある故、上方へ出勢も成ざる之條、和談と稱し吾に油斷をさせ、春は雪消ると等しく大波を打せ、嚥と攻上るべきとの謀也、抑予を方便らん物は、異朝にては子房、我朝にて近きをいはゞ楠多門兵衛等が所及にもあらんかし、柴田などが愚意を以計みん事、蟷螂が斧なるべしと嘲り笑ひにけり、

〔士氣古城再興傳來記〕小田原落城幷氏政自害同系圖ノ事

太閤秀吉公、日ヲ継數日雖責之、以ノ外强シテ不落處ニ、城ノ東井細田口ヲバ、氏直〇北條ノ弟太田十郎氏房防之、此口エ向シ寄手ノ大將羽柴下總守、一旦ノ謀ヲ以秀吉公ト氏直ト和睦有べキ使ヲ立處ニ、氏政父子運ノ盡期ニテヤ有ケン、其深意ヲ不悟シテ、是ハ秀吉同心金斷ノ心地ト思ヒ、和融可有返事シテ、既ニ七月〇天正十八年六日出城有シニ、元來計略ナレバ終和睦ナシ、因茲氏直ハ高野山ニ登リ蟄居シ給、氏政ハ子息氏直ト秀公吉ト依和平無、同十一日於城内切腹シ給フ、

〔攝戰實錄四十六〕五月〇元和元年七日接戰之最中御和睦之義被仰遣事

將軍家〇德川秀忠重て御和睦の事仰遣はされ、和州を進せらるべしとの事有り、秀賴〇豐臣は、昨日の軍に木村〇重成後藤〇基次薄田〇兼相を始として、大將過半討死し、氣臆れたるなれば、和睦の術に勇氣撓み、秀賴の出馬暫く延引す、此事如何と御尋有り、皆御和睦然るべしと申、其中に速水甲斐守告しけるは、此程に成行ては、實の御和睦とは存せず、天王寺表の寄手は、早合戰を仕懸し也、案るに是は城〇大坂城兵必死の志を奪んが爲とこそ推量仕り侍れと申す、此兩儀決せず、剰へ御相談の爲天王寺に打出たる大野修理亮〇治長其外七組の番頭城中へ召れしかば、出張したる軍勢共、子細はしらず大坂城中へ逃ると心得、勇氣撓み落行者も多し、將軍家御覽有て、兵を進めて競ひ戰はしめらる、

〔慶長年錄五〕一、七日〇元和元年五月之晩、〇中略干飯藏に人之大勢籠居候體見得申候間、人を遣し委し

講和中變

く見申候へば、秀頼御籠被成候て、修理甲斐守、竹田永翁、氏家内膳等罷在、御袋様も御座候而、女中等も見得申候、○中略大御所様ゟ加々爪民部、豊嶋主膳兩人、爲御使參候、將軍様ゟ安藤對馬、近藤石見兩人參、掃部○井伊直孝と相談仕、加々爪豊嶋藏の內ゟ大野修理を呼出し、上意之旨を申渡、是は秀頼之命を御助被成、高野へ御上せ候て、御袋へ一萬石可被進との儀也、○中略其後御袋も御合點も候哉、乘物無之候間、乘物貳三丁御借候へと申來、乘物一丁ならでは無之候間、御馬を可進由掃部被申候、是は秀頼を慥ニてどり可申ために被申と見得申候、然而掃部對馬石見三人談合して、大御所様御正直ニ而御慈悲ふかく、此上ニ而も御誓狀など被遣、御助可被申儀かと被存候、とかく此首尾に成、早々埒明候て可然と令內談、鐵炮二ツ打懸候へば、頓而內ゟ附草用意仕候哉、各々自害仕燒立申候、

〔甲陽軍鑑十品第三十二〕永祿元戊午年二月、越後景虎入道謙信より信玄公へ手を入申さるゝは、景虎信玄へ少も子細は無之候、村上義淸に賴まれての儀是迄なり、所詮信玄公と面談申無事に仕り、○中略ちくまの川を隔諸禮仕、以來はともかくもと景虎申越さるゝに付、○中略五月十五日に、兩大將御對面の時、筑摩川を隔て兩方の川のはたに牀机を置き、兩大將ながら馬にめし、牀机の際にて馬よりおり、互に御供は五人づゝ、あたりに人を拂てと定、其ごとくなされ、既に川端まで乘よせ、兩方馬よりおり給ふ時、景虎公手がるき大將なれば、信玄公に手遲くみられじと思召し候故、早く馬よりおりて牀机に腰を懸給ふ、信玄公そこにて馬氈を直すふりをなされ、馬の上においてくるしからぬ、景虎馬にのられ候へと被仰候間、景虎おほきに腹を立て、頓て馬に乘もどりて信玄公へ使を立、我等の家は、鎌倉の權五郎景政から梶原平三景時迄五代、それより代々續き來りて爲景景虎と申候、武田は賴朝右大將富士山まきがりの時分も、御所の次梶原其次に武田といふ事歷然無之、其上八年以降は上杉に成、管領職を請取て候と謙信申され候、信玄公御返事

には、梶原は頼朝の取立の被官なり、武田は公方の御相伴也、時にいたりて出頭なれば、何樣のいやしき者も君邊へ近付事、昔が今に至る迄珍しからず候、それが家の系圖には成がたきなり、又管領職の事、上杉則政の忠不忠もしらず、○中略氏康に負て、嫡子龍若迄捨て、越後へ逃入、名利の盡たる管領を讓られて、景虎の管領と申さるゝは、一段若氣なり、殊更信玄に慮外せられたりと腹を立らるゝ、景虎無分別なり、信玄は緩怠するとは努々思はず候、只有樣の會釋なれば、堪忍の二字を分別せられよと御返事に付、謙信大形なく無興にて、又取あひをおこし、五月より閏六月半迄七十日餘對陣、

〔加越鬪諍記〕五金津溝江大炊館ヲ一揆等攻ル事

天正二年二月十日ニ、河北ノ一揆蜂起シテ、○中略溝江○長逸ガ館へ打寄テ、四方ヲ圍ム、其勢二萬餘ト聞エケル、城中ヨリモ頻リニ弓鐵炮ヲ射出ス間、○中略同二月十六日ニ、賀州ヨリ杉浦壹岐法橋出張シテ、總持寺ニ著陣アリテ、和談ノ曖ヲスル處ニ、一揆共云ケルハ、死罪ヲ赦シ可申、當國○越前ニハ居住アルベカラズト云程ニ、其時親父宗天長逸宜ヒケルハ、○中略此度ノガレ出タリトモ、百年ノ齡ヲ持候ベキカ、去年大炊路中ニ於テ名ヲ得テ、所領五六千石知行スル間、世上ノ望モ榮花モ是マデニテアリ、只速カニ腹ヲ切候ヘト云ケル間、各此儀ニゾ同ジケル、然處ニ壹岐法橋重テ杉浦金十郎ヲ人質ニ出シ、岩倉幷林次兵衛尉ト云者兩人使者トシテ館ノ中エツカハシ、當御知行分ホド、賀州ニ於テ進ズベシト云、大形宗天長逸モ領掌アリテ、盃ヲ出シ酒ヲゾスヽメラレケル、卽土田喜一郎酌ヲ取テ杉浦金十郎呑、其盃ヲ大炊○長逸呑テ林次兵衛尉ニサス、次兵衛取テ呑ントスル時、四方ノ寄手鬨ヲ咄ト擧タリ、其時土田喜一郎附贅(フスベ)ノ和談ノ曖ヤ、奴原ガ僞テ云モノヲトテ、持タル銚子ヲ林次兵衛ニナゲカケテ、三尺二寸ノ刀ヲ拔テ、袈裟ガケニ打落シ、大庭へ飛デ出ル、大炊是ハ何事ゾト云テ飛出テ、喜一郎ヲ切伏スル、然ニ敵早乘入タルト見ヘテ、家々ニ火

乞和

ヲカケヽル、魔風烈クシテ一度ニ燒上ル、

〔武功雜記四〕筑前立花城ニハ立齋籠ル、薩摩ヨリ攻ラレテ九年籠城ナリ、其後城ヨリ和ヲ乞フ、薩摩同心ス、今日ヨ明日ヨト延引、其内ニ修理普請ナドヲシ、兵粮ヲモ城ヘトリ入テ、最早和談スマジ、父高橋ガ仇ナリ、堅固ニ籠城シテ勝負ヲ決セントト云遣ス、薩摩勢怒テ、約束ヲ變ゼラレ不屆千萬ナリ、トカク和談イタサレ可然トノ使ヲ遣ス、城ヨリ返事ニ、彌和談罷成間敷候、此上ハ又クドキ使ナドコサレバ、打棄申ベキトノ事ナリ、其後薩摩勢ヨリ、山臥ヲ無刀ニテ使トシテ、トカク先約ノゴトク和談アルベシ、御母儀ヲ岩屋ニテ生捕置タレバ、父ノ仇トテ和談ナキニ於テハ、母儀ヲ棄テラルヽナリ、所詮和睦ナクバ、母儀ヲ先ニ立テ城ヲセムベシト云遣ス、立齋返事ニ不及、忽チ其山臥ヲ切テ棄タリ、薩勢猶更イキドホリテ、立齋ノ母儀ヲ先ニ立テ、星野ヲ先手トシテ立花山ヘヨスル、城中ヨリ能圖ヲ見テ拂出テ、寄手ヲ追崩シ、母儀ヲ十時雪齋奪取リ、追打ニ星野ガ城ヘツケ入、直ニ下關ヘ渡テ、首ドモヲ太閤ノ實撿ニ入奉ル、

〔細川兩家記〕天文十六年丁未二月九日に、四國衆、淡路衆、三好方衆、畠山總州、同遊佐、同木澤大和守、同弟、都合三萬餘騎にて攝津國原田城を取卷ければ、則城内難儀なり、宗三を賴み噯に成て、同二月廿日に城を明渡也、

〔別所長治記〕野口合戰

四月三日、〇天正六年、中略、長井四郎左衛門不叶シテ請和、寄手ノ軍兵聞モ不合、降參セバ以前ノ事、是程ニ落去シテ、助一命有マジキト云ヘバ、秀吉サハセヌ物ゾ、軍ハ六七分ノ勝ヲ爲十分、降人ヲ打果セバ、逆モ通レヌ道ナリト、敵思サダメヌレバ、彌強クナルモノゾ、城ヲ攻ル謀ニ一方開キテ攻ルモ、敵ニ遁ル道ヲ知ラセテ、早ク得勝利タメ也、敗軍ノ者ニ少モ不可指手ヲトテ、城ヲ請取ラルヽ、無思慮ツヨキ計ノ人カナトオモヘバ、如此智謀フカキ人ナリト、世ニ譽ト云々、

不講和

〔豐鑑二〕天正十一年の春、秀吉伊勢國に向給ふ、是は瀧川左近とて、信長のすさなりしが、勢北を知て長島と云所に城を搆へありしが、秀吉にしたがはざれば、討んとの爲なり、〇中略城中粮漸々つきければ、平をこひて城を落渡しぬ、

〔豐鑑二吹上濱〕同〇天正十五歲の春、秀吉卿〇中略筑前國秋月をへて、筑後肥後に趣たまふに、島津にしたがひし國人の武士ども、我先にと秀吉卿にしたがひ、禮をつくしければ、道にとゞこほりなく、肥後國を過て、薩摩國千代と云川の際なる村に軍だてして、暫留りたまふ、これより島津居ける城の鹿兒島といふ所へは、その間十里にはたらざりけり、島津義久主かくては叶はじとや思ひけん、我知所の國秀吉にたてまつる、生國なれば、薩摩大隅二の國給はせ、常に都にあるべしと侘ければ、其いふ旨にまかせて平をなし、義久主千代の陣に來て禮を成しかば、其よりして歸登り給ひぬ、

〔關八州古戰錄一〕上杉憲政武州川越城責之事

古河ノ御前晴氏〇足利憲政ノ陣中へ使者ヲ以テ、雙方〇上杉憲政北條氏康無事ノ扱ヒヲ入ヲル、所ニ、管領家〇上杉憲政許容セズ、結句紀州高野山ノ非事吏芳春院ヲ使僧トシテ、御前へ申上ラレケルハ、此度晴氏御旗ヲ出サレ、憲政へ御助援有ニ於テハ、北條一家ヲ皆殺シニシテ、御前ヲ鎌倉へ移シ參ラセ、當家モ又古代ニ復シ管領ノ職ヲ守テ、君臣永ク社稷ヲ保護仕ベシ、左アラバ枯タル樹二タビ榮、晒セル屍重子テ肉付ガ如シ、關東靜謐ノ基ヒ、私ノ大幸何事カ是ニシカント、詞ヲ盡シテ濱送ラレケレバ、晴氏モ上杉ハ重代ノ舊臣ナリ、氏康ハ婚家ノ親戚ナリ、イヅレヲカ荷擔シイヅレヲカ誅罰セン、兎ヤセマシ斯ヤ有ラント心ヲ定兼ラレシ處ニ、氏康件ノ荒增ヲ風カニ聞テ、急ギ使ヲ古河へ馳テ、南上杉言上ノ首尾、何等ノ子細有ト云共、渠ニ貿慮ヲ傾ケラルベカラズ、〇中略親疎順逆ノ損益ヲモ考ヘラレ、御遠慮ヲ廻ラサレ然ルベキ旨、料ヲ碎テ申入ラレケレバ、晴氏實ニ

講和使

モトヤ思ハレケン、憲政ヘ加勢ノ沙汰暫ハ默サレタリ、

〔大內義隆記〕法泉寺ノ二條殿〇尹房ノアツカヒニ、義隆ハ隱居シテ御曹子ヲ家督シテ和與シ玉ロトノ調定ニ、法性寺外記殿ト兩人ヲ使ニテ、內藤〇和隆ガ方ヘ申サル丶、今更ニ御拵ナルベカラズ、法泉寺ニテ義隆ハ御腹召レ候ベシ、御使ノ兩人ハ命ハ助ケ申ンゾ、留リ玉ヘト申シテ座敷ヲ立內ヘ入ニケル、

〔看聞日記〕永享三年三月三日、寶幢寺院主栂西堂來臨、抑九州錯亂、菊池大友一統大內京兆合戰打負云々、仍自公方〇足利義教可和談之由被仰、明日兩使僧九州下向云々、

〔豐鑑一高松〕六月十〇天正十年二日の夜に及程に、信長明智が爲に自害し給ひぬと、秀吉の陣に聞えけり、此先毛利家より平を請侍りぬれども、秀吉用ざりしが、いそぎ都に登り、明智光秀と戰はんと思ひ給へりければ、毛利家の媒小寺官兵衞をよび、かう〳〵京より人來りぬ、かねていひしごとく、毛利家と平をなすべし、其趣かくとはからふべしと宣へば、小寺いそぎ毛利家の陣所に行て、かうかうといひかたらひ侍りぬ、

〔攝戰實錄二十六〕御嗳之沙汰幷勅使下向之事

大御所〇德川家康、信々思召樣は、此儀嗳ひの儀、兎角女性を以て往來せずんば調ふまじと、阿茶の局を呼下さる、同十四日〇慶長十九年十二月風雨烈しといへ共、早速二條ゟ茶臼山江下著也、此儀は京極若狹守忠高の母儀常高院、城中〇大坂城に居玉ふに付、是を呼出し和談の御使仰付らるべき爲と也、

常高院は忠高の父、大津宰相高次の後室にして、江北四郡の太守淺井備前守長政の中女也、秀賴公母公淀殿、將軍秀忠公の御臺と御兄弟也、

〔東遷基業二十七〕兩御所秀賴公と御和睦御誓約附塡壞毀壘事

京極忠高の母來て和成ければ、里巷に一首の狂歌を立置たり、

茶磨山ひきわけになるあつかひは京極どの、袋ちやと聞

〔加越闘諍記 二〕朝倉右兵衛尉景隆大將ノ代ニ發向有テ働事附自京都大館下向有テ兩國和睦之事

于時弘治二年ノ春、京都ヨリ大館御教書ヲ帶シテ下向シテ、兩國〇越前加賀和睦ノ御曖ニ依テ、同四月廿一日ニ、大將右兵衛尉景隆〇朝倉諸勢モ開陣アル、然バ賀州四郡ノ衆ノ代官トシテ、窪田肥後守屋形エ御禮ニ參ケリ、

〔總見記 三〕信長公與德川殿和睦事

翌年〇永祿五年ノ春、和睦御禮ノタメ、德川殿清須へ參向アリ、家老ニハ酒井左衛門尉忠次、石河伯耆守數正、其外馬廻リ百騎バカリ御供ナリ、信長公ヨリ御迎トシテ林佐渡守、瀧川左近將監、菅屋九右衛門、熱田表エ被遣、〇中略扨元康本丸へ參向信長公モ御迎ニ出サセ給ヒ、一禮終ッテ和睦ノ儀互ニ悅ビ思召ス由、色々被仰合、其上ニテ善盡シ美盡シ御饗應アリ、御膳過ギ御酒ノ上ニテ、信長公ヨリ長光ノ御腰ノ物、吉光ノ御脇指ヲ德川殿へ被進ゼ、首尾無殘所御仕廻有テ御暇乞アリ、林佐渡守、瀧川左近將監、菅屋九右衛門ヲ熱田マデ送リ、ニ被遣ケレバ、元康重々忝由御禮アリケリ、扨御返禮ノタメ、林佐渡守、菅屋九右衛門ヲ岡崎エ被指越、元康御悅ビ、殊ノ外御馳走ニテ、松應寺ニ寄宿ノ儀申シ付給ヒ、本丸ニテ對面、種々饗應酒宴アリ、兩人トモニ引出物賜リテ返シ給ヘリ、

〔總見記 二十〕長曾我部元親御鷹進上事并大坂門跡開城事

七月〇天正八年二日、大坂門跡ノ三使御目見へ、先ヅ中將殿〇織田信忠へ御禮申上候、進物御太刀代トシテ銀子百枚獻之、其後大臣家〇織田信長へ御目見へ仕候、進物是又右ノ通ナリ、勅命ニ依テ近衛殿〇前久并ニ庭田〇重通勸修寺〇晴豐此御衆御前ニ召連ラレ、御取次宮内卿法印佐久間右衛門是ヲ勤ム、大臣家ヨリ御返禮トシテ下シ遣ハサレ候條々、黃金三十枚本門跡へ、黃金二十枚北方へ、同十五

講和

枚抜察使法橋へ、同十五枚下間刑部卿法橋へ、同十五枚下間少進法橋へ、同廿五枚今度ノ三使藤井、矢木、平井方へ是ヲ下サル、翌日悉キ由申上罷歸候、

〔花營三代記〕應永卅一年甲辰二月五日、鎌倉左兵衛督持氏與二京都（○足利義持）殿一御和睦落去畢、管領以下御太刀進上也、甲斐信乃駿河討手共被二召返一云々、幷方々へ御内書被レ下也、

〔信長公記首〕霜月（○天文十二年）廿日、此留守に尾州の内清洲衆、備後守殿（○織田信秀）古渡新城へ人數を出し、町口放火候て、御顔の色を立られ候、如レ此候間備後守御歸陣也、是より及二鉾楯一候ひき、平手中務丞（○政秀）清洲のおとな衆、坂井大膳、坂井甚助、河尻與一とて在レ之、此衆へ無事の異見數通候へども、平手扱不二相調一、翌年秋の末互屈睦して無事也、其時平手、大膳甚助、河尻かたへ和睦珍重の由候て書札を遣、其端書に古歌一首在レ之、

袖ひぢて結びし水のこほれるを春立けふの風や解らん、と候ひつるを覺候、か樣に平手中務は、借染にも物毎に花奢成人にて候ひし、

〔關八州古戰錄三〕駿甲相三家交和附原美濃守虎胤ガ事

自今以後三家（○今川義元、北條氏康、武田晴信、）隔心ナク膠漆ノ交ヲナシ、相互ニ救ヒ合テ社稷ヲ保護スベシトテ、千秋萬歲ヲ唱ヘ各本國ヘ歸ラレケルガ、晴信ヨリ甲府一向宗ノ僧長延寺實了ニ使者ヲ差添、小田原ヘ遣ハシ、交和ノ賀詞ヲ述ラレタリ、其時ノ書翰ニ曰、

兩國爲二和親一ノ祝儀、以二使者一申候、無二心許一指南可レ爲二本望一候、仍具足一領（腹卷）進レ之候、猶可レ在二長延寺口上一候、恐々謹言、

五月（○天文二十三年）十六日　信玄判

依田大膳亮殿　垪和刑部丞殿

〔總見記十一〕依二勅定一淺井朝倉與二信長公一和睦事

信長公ハ、公方〇足利義昭へ御暇被仰上、同〇元龜元年十二月十六日凱陣、先ヅ佐和山ノ城ノ麓礒野郷ニ著カセ給フ、百々屋敷ノ城主丹羽五郎左衛門加勢水野下野守兩將罷出御目見仕リ、今度ノ御和睦賀シ奉ル、信長公被仰ハ、我等今度和睦ノ儀ハ庚申待ノ夜ノ歌也ト被仰、コトノ外ニ笑ハセ給フ、

〔東遷基業七〕秀吉與信雄講和附秀吉養子之事

十一日〇天正十二年十一月に秀吉〇豐臣信雄〇織田矢田河原に會せらる、〇中略神君〇德川家康は會盟の既に成る事を知り給はず、清洲にて聞せ給ひ、石川數正を使として、秀吉に賀し給ひけり、

〔矢島十二頭記上〕一同〇天正十五年六月中旬頃、潟保殿鮎川殿と御中分にて、仁賀保殿と矢島殿〇小笠原光安とは御和睦被成候、爲御祝仁賀保殿より赤石與兵衛殿御使者參候、矢島殿よりは、芥川攝津殿御禮御挨拶として御使者被遣候、雙方又々御懇意被成候、

〔駿河土產〕大坂御陣御あつかひニ成御款として、城中ゟ織田有樂大野修理〇治長兩人、茶臼山御陣所江參上之事

一大坂冬御陣御あつかひに成、事濟候に付、御款として城中より織田有樂、大野修理兩人御陣所江最初ゟ來る、其已後七組之頭を初、兼々御出入之面々、御太刀折紙を指上ゲ、各御目見申上る中に、織田雲生寺計は龜相成扇子二本臺にのせ、八方院土用坊といふ下ゲ札を付持參となり、

〔淺井三代記二〕江南江北和睦の事

去程に佐和山落城以後、佐々木定賴と上坂泰貞、愛知川表にして、日々夜々に足輕小せりあひにて、敵味方共に、やすきこゝろもせざりしが、其年〇永正七年の九月迄は、泰貞は佐和山の城に任せしに、江北の諸士は、一手づゝ、番がはりに休息のために、おのれ〳〵が在所へぞかへりけり、〇中略斯て圓滿院御門跡延曆寺へ御越被成、彼山の御門主〇尭胤法親王をかたらひまし〳〵て、中和のよそほひ被成ける、兩御門主御相談あつて被仰けるは、江北京極家〇上坂泰貞へのたよりなし、其方にて聞

出し注進可申由、佐々木家へ被仰遣ければ、定頼吟味を被致ければ、平井加賀守すゝみ出て申けるは、御内の小倉將監道氏は、上坂治部太輔泰貞とは近き一門にて、別ての間のよしかね〴〵承及申候といひければ、道氏をめされて右の旨を宣へば、御諚畏奉存候へども、大事の御使なり、泰貞と申者、一戰に取結よりしては、親子の間にても心をゆるさゞる者なり、今斯敵味方と罷成候上は、私罷越候とも、定て逢申間敷かと被存候、いかゞ可有御坐候やと辭退申上れば、後藤、いやとよ相調ひ不申とも、貴殿の無調法にては更になし、先御請被申可然と申せば、畏て候と申上る、斯て兩門主の御使僧に道氏被相添、佐和山へ罷越、則先へ案内を申入れば、泰貞聞て、道氏殿には逢申まじくと申ければ、道氏、脇指を泰貞が小性にあづけて、是非御目にかゝり申入度事候と申に付、泰貞對面す、兩御所の使僧も御登城のよし道氏申に付泰貞衣冠たゞしくして請待申入、善盡し美盡し御馳走を申上らる、漸有て中和の事申出されければ、泰貞謹て承り、兩御門主の御諚、誠以恐多御事に御座候、尤佐々木京極は、雙方ともに佐々木氏にて、京都御守護の館によそへて六角京極と名乘候へ共、本は一家の儀にて御座候間、中和仕可申の旨、雖有奉存候、乍然數年が內江北は佐々木殿に掠められ、遺恨山のごとくに御座候間、是非此度は一戰仕、兩家の內一方は滅亡可仕と覺悟極め、是迄罷向ひ申候間、御前宜被仰上可被爲下と、さらぬ體にもてなせば、兩使の衆もあきれたる體なり、道氏泰貞を引立、小聲に成て申けるは、此度は其方存分達するやうにいたすべしと申ければ、泰貞、存分は何と御はからひ候と被申ければ、道氏、いやとよ佐々木家此中の戰に大につかれ申候、貴殿も嘸つかれ給ふべし、いにしへのごとく國分の定相違有まじと申せば、泰貞も長陣につかれ果、言葉やはらかに成にけり、兩使の人々重て申されけるは、泰貞殿、兩御所より被仰出よりしては、貴殿にきずはつけ申まじ、よく〳〵思案し給へと申ければ、淺見對馬守上坂信濃守などは老武者なれば、御曖の筋目により、いかにも畏可奉存とぞ申けるに付、泰貞

も御請をぞ申ける、兩使はそれより佐和山を御立有て、佐々木の館へ引給ひ、曖の筋目を被㆑申付けるに、定頼とかく兩御所の御下知次第に仕、違背申まじくと御請被㆓申上㆒ける、此旨兩御所はきこしめされ、いにしへのごとく愛知川をかぎり、北は京極南は佐々木領分たるべし、海より西兩郡は、志賀の郡は佐々木、高島郡は京極家の領知たるべき旨、かたく一札を取かはし、雙方一家の中和と成にける、

〔相州兵亂記〕四加島合戰之事

其日〈○天文二十三年三月三日〉互ニ相引ニシテ、明後日有無ノ勝負ト有ル處ニ、セコノ善徳寺ノ長老〈○中略〉御和談アリテ可㆑然トテ、樣々被㆑仰程ニ、三大將〈○今川義元、北條氏康、武田晴信、〉トモニ善徳寺へ出合玉ヒ、和談ノ御祝ヒ御盃トリカハシアヲ、

〔關八州古戰錄〕三駿甲相三家交和附原美濃守虎胤ガ事

善徳寺ニテ三大將會盟ノ折柄、晴信、氏康へ對シ申サレケルハ、某ガ家人原美濃守、我等ガ旨ニ違ヒ、懲シメノ爲領國ヲ追ヒ拂ヒ申所ニ、貴客ノ膝下ニ罷在、此度モ出陣仕ル由承リ及侍ル、老父信虎ヨリ渠モ父子二代勳功ノ者ニテ、不便ニ存侍ル條、和交ノ原ニ返賜ルベキ旨懇望ニ付テ、氏康默止難ク、歸參ノ義ヲ申渡サレ、甲州へ返サレタリ、

〔總見記〕四吉良武衞石橋謀叛事

三州ノ屋形ヲ吉良殿ト云テ、尾州ノ武衞殿〈○斯波〉同位ノ高家也、連年吉良武衞中惡フシテ參會モ無リケルガ、信長公被㆑仰ハ、戰國ノ時分ト云ヘドモ、我先祖ノ主君ノ筋ハ武衞ニテマシマス、三州ノ屋形ト中惡フシテ叶ベカラズ、急ギ和睦有テ然ルベシト有リケレバ、吉良ヲバ駿河衆取持テ、即チ武衞ト和睦有リケリ、左有ラバ參會ノ日ヲ定ムベシトテ、永祿四年四月上旬ニ、吉日良辰ヲ撰テ參會ノ期ヲ約束シ、三州ノ內ノ上野原ト云フ所ニテ、互ノ人數ヲ立クラベ、其間一町五反程

有テ、吉良義安モ其場ヘ出向ハル、信長公ハ即武衛義銀ノ御供ナサレ、是モ同所ヘイタリ給フ、寔ニ以カヽル大名トナラセ給ヒテモ、先祖ノ由緒ヲ思召サレ、君臣ノ筋目ヲ御立アル事、奇特千萬ノ御志也トテ、皆人信長公ヲ感ジ申ケリ、角テ吉良武衛、其間一町五反程ヲ兩方互ニアユミ出給テ、互ニ默禮ニテ退キ給フ、和睦成就シテ各兩國ヘ引取給ケリ、其後ヨリ吉良ヘモ信長御入魂也、

〔總見記〕三信長公〇織田與徳川殿〇元康和睦事

信長公御悅ビ不斜ナラシテ、〇中略兩家ノ宿老共鳴海ヘ出合ヒ、萬端申シ合スベキ由被仰付、因茲當家ヨリハ林佐渡守、瀧川左近將監、岡崎ヨリ石河伯耆守、高力與左衛門出向テ、境目其外郡仕置ノ品々、向後互ニ違亂有ベカラザル旨雙方結搆ニ申シ合セ、一味同心ノ和睦相調ヒケレバ、〇中略此以後織田家ニ事ノ有ル時ハ、徳川家出勢有ベシ、徳川家ニ難儀アラバ、何時モ信長加勢シテ見繼申サント被仰合タリケル、

〔岩淵夜話別集〕一水野下野守信元取扱を致され、織田信長と家康公御和睦被成、尾州小牧に於て御對顏を遂られ、尤下野守罷出御あいさつ也、諸事御物語の上、たがひに御神文被遊、信元も判形を加へ、灰に燒て神水となし、御兩殿まいりたる殘を下野守給り納けるとなり、

〔家忠日記增補〕四永祿十二年四月十二日、大神君〇徳川家康御使を氏眞〇今川が臣小倉內藏介が許に遣はじめ、命有て曰、我幼年の昔、今川家の助成を得る、今に是を忘ず、故に氏眞と兵を結ぶ事、我本意に非といへ共、讒者屢其交好を隔るの間、爲方なく鉾楯に及ぶ、遠州を一圓吾に屬しめば、氏眞と交和を結び、末代に於ても聊も疎意有間敷の旨を誓て、北條氏康と議して謀を廻し、武田信玄が取所の駿府の城を奪ひ返して、再府の城へ氏眞を本居ならしむべきの旨を說しめ給ふ、小倉大に悅て、即此旨を氏眞に達す、氏眞是を諾す、是に依て小倉大神君の御陣營に來て誓約し、遂に交和なる、

〔安西軍策六〕兩城扱附式部少輔已下自害事

去程ニ秀吉ヨリ堀尾茂助ヲ以吉川式部少輔ヘ云送ラレケルハ、去ヌル七月○天正九年巳來、互ニ諸卒ヲ勞シ、徒ニ數日ヲ送候、然バ令和睦、藝州勢式部少輔ヲ初一人モ不殘歸シ申ベク候、又森下、中村、佐々木、鹽谷等ハ、山名豐國譜代相傳ノ家人トシテ、己ガ身ヲ立ントテ主ヲ追出ス事、前代未聞ノ儀也、○中略是等ヲバ頭ヲ刎諸人ノ見懲ニセントト有ケレバ、城中ヨリ野田左衞門尉小野太郎右衞門尉立出、此趣ヲ聞、式部少輔ニ告ケレバ、經家此由ヲ聞、暫思惟シ宜ハ、我大將ノ號ヲ受テ當城ニ籠リ諸卒ノ命ヲ司リ、國方ノ者共ヲ捨テ、甲斐ナキ命助リ、爭カ本國ヘ可歸、唯某甲一人自害シ、諸卒ノ命ヲ被助候ヘト返答シケリ、角テ二三日過又堀尾ヲ以被申ケルハ、此上ハ互ニ堅以誓紙可令和睦候、誰ニテモ一人被差出候ヘ、起請ノ判形居申、證據ヲ見セ可申ト有ケレバ、城中ヨリ野田左衞門尉、小野太郎右衞門ヲ被差出タリ、兩人起請文ヲ請取立歸リ、式部少輔秀吉ノ起請文披見シテ、頓テ客殿ヘ立出、具足櫃ニ腰ヲ掛、秀吉ヨリノ撿使堀尾茂助ガ目前ニテ、○中略脇差弓手ノ脇ヘ突立、○中略刀ヲ持ナガラ兩手ヲ突テ首ヲ差出シ給ヘバ、靜間首ヲ打落ス、

〔川角太閤記一〕一羽柴筑前守殿、右の備中高松の水攻のとき、輝元と陣和談に御取あつかひ被成、無差御上次第、○中略

一四日○天正十年六月に城主切腹被仕候やいなや、御手前の大知坊と申陣僧を、毛利殿陣吉川駿河守元春、小早川左衞門允隆景宍戸備前守元次、此三人へ被仰遣次第、城主志水儀は、今朝拙者陣の前へ舟を著切腹に及候、如約束家中の者一人も不殘武道具以下に至まで、進之置候迚、毛利陣江被相渡候、此上は互の長陣の事に候間、無詮事と被思召候ば、互に今一先退可申候、爲其に靈社の起請を進之候、右之通於御同心は、御陣僧一人此使に御添被成可給候者也と被仰遣候所に、毛利家も、城をば見捨候上は、無詮事とや三人被思けん、一先輝元も御馬を被入、また重て御出陣も被成

候様にと、談合評定かためられ候事、

一其時安國寺を御使に被添、筑前守殿筆本見候へとて被進候、○中略

一毛利家大形合點に候ば、我身の筆本を見せ候はんと御意にて、其上今朝よりその心がけあり、精進けつさいあきらか也、それに被待候へと、行水被成御身をきよめられ、やがて御出被成候、毛利家は兎も角も候へ、拙者心中においては、此起請の面少も相違有まじきとて、目の前にて書判を被成、其上に白きさらを御取寄せ被成、左の小指より血を御出し被成、書判の上に押付被成候事、

一陣和談あはれ首尾仕候て、此上はまた右の様子をゑんに結び、已來は互に入魂可仕事もや可有、目出度々々々、さらばずい物をと御意にて、その上に盃にかはらけ出、被召上、安國寺に被遣候、其かはらけ又被召上、御言葉には、手前にてをさめ置候、拙者陣僧を、貴僧被召連候へ、毛利家の筆本見可申ためにと候とて、則御手前の御陣僧安國寺に被添、毛利家へ被遣候事、○中略

一筑前守殿より來候陣僧の前にて、靈社の起請判をかためられ候、大形下々江聞え申通も、筑前守殿御登候とも表裏有まじく候、また毛利家被退候とも、筑前守殿よりも表裏あるまじくとの誓紙と相聞候事、

一同日四日戌刻計に森勘八を召、夜に入なば引退べきものなり、さあるにおいては勘八殘可申候、その様子は、信長公御切腹の到來、毛利陣へもはや〱相聞え可申候、今朝の誓紙を破り可被付候事も尤に候、其子細は、毛利家陣へは未聞先の誓紙なり、表裏は秀吉こそ仕、毛利家の表裏にては有間敷ものなり、但かためたる起請文にて有と心得、秀吉國本へ歸城迄の誓紙を被立候はば、りちぎ第一たるべき儀也、○中略

一其夜暮合より、備前の宇喜田八郎殿を戌の刻のかしらに御退被成候、御身は夜の丑の刻に御

引被成候事、

一毛利家上方に被付置候早打、四日の七ッさがりに參著候、信長公二日の卯の刻に御切腹候、〇中略

一それより吉川駿河守元春陣屋へ、小早川左衛門允隆景、宍戸備前守寄合談合の次第は、今日の誓紙は破りても不苦候、だまかされ候ての儀にて候と、吉川駿河守被申様には、か様の時にこそ馬を乘殺せよ、はや〳〵と進め給ふ事、

一舍弟小早川左衛門允隆景は、右には一言も不出ず、暫工夫して被申出様子は、元春御意御尤にては御座候へ共、昔より今に至まで何事にも付もの丶かためは、書物誓紙を鏡に仕ものにて候へ、父にて候元就公御死去の時仕候誓紙には、只今の輝元公を兄弟共として取立よとの誓紙被仰付候、時日の下の判は元春公被成候、其次には私仕候、さて兄弟四人仕、元就公御命の内に御目に懸候事は昨今の様に覺候、其誓紙元就公載、一ッは元就公の御遺言に我くわんへ入よ、一ッは嚴島の明神へ奉籠よ、一通は輝元公へ上ゲ置申候、此二通は只今も御覽候へよ、條數の内に毛利家より我死して後天下の不可心懸と一の筆に御座候事、

一今日の起請文を破り候得者、めいどに被成御座候父元就公への別心也、一は嚴島の明神の御罰、又は五常の禮儀の二ッをも破に似たり、羽柴筑前守國本播磨へ歸城候との一左右を聞召屆られ、其上にては御馬を被出候ても不苦と、達而兄の元春へ異見被申ける、元春も隆景に道理に被攻、なま合點に納申候、小早川はそれより我陣へ被戻候事、〇中略

一、それより毛利家へ早飛脚御立被成候、今度其表において陣和談と申かはし、互の誓紙をかため罷上候事、ぶりやくの様に可被思召候へども、弓馬にはかようふの事も互の事に候と可被思召候、我君信長公を、明智日向守光秀無道の故により、當月二日に奉討候間、この上は光秀と君の弔

合戰仕、打死の覺悟に御座候、若又拙者武運もながらへ候はゞ、右の申談も候處は、目出度以來は可ㇾ得二御意一覺悟に候、天下の御望御尤かと存候、猶自ㇾ是可ㇾ得二御意一候、吉川駿河守殿、小早川左衞門允殿、宍戸備前守殿江と御狀に候、早飛脚毛利家へ被ㇾ進候、それより彼渡り御越被ㇾ成と相聞え申候事、

〔太閤記三〕信長公御父子之義注進之事

五日〇天正十年六月の朝、小早川〇隆景吉河〇元春より使者來りぬ、爰に至て秀吉、隱より見はなるはなし、亡君の御事、隱す共やはかくるべきかと思惟し、今度信長公去二日惟任日向守逆心により、御父子於二京都一弑せられ給ひぬ、此上にても最前の如く承及、筋目無二相違一仰談せられ候はんや否の事、兩使還て輝元へ申屆候へ、其上を以相極べしとて、又使者を歸し給ひけり、卽兩使立歸て、輝元へ小早川吉川を以、信長公御父子之事申ければ、家老之面々よび集め、いかゞ有べしと評議有けり、年わかうして勇がちなる人々は是天之與ふる幸也、打破て歸陣し、世中之體を御見合せ宜しからんと高言を吐も多し、又心有は、とかうを云ぬも半ばせり、何れを是とし何れを非と、一著まちまちなりし處に、小早川存知寄し通申上みんと、指を折て云けるは、今度信長亡給ひし事、秀吉のためには一往不吉の兆なり、爰を鍛直し、惟任をも討平逐ㇾ年威勢加り行事あらば、今度變約之義骨髓に徹し、忘れもやらず恨ふかゝるべし、然卽當家をば、葉を枯し根を絕す計に打果らるべく候か、是一、信長公御父子切腹之注進はとく秀吉聞可ㇾ被ㇾ申、然るを取しづめたる事共多かりし、尤なる裁判とこそ存候へ、其上百人は百人千人は千人、昨日之無事之扱かやうの節を幸に濟し可ㇾ被ㇾ申處也、其扱をも甚以よしとせず、昨今兩使を徒に歸し侍りし事、至剛なる所存、是を以能可ㇾ被ㇾ存か、是二、秀吉年來文武之達者なりし事共、聞ても知ㇾ之傳ても識ㇾ之に、離倫絕類の武勇才知兼備りし人なれば、是天下之大器なり、天下之大器は天の生せる所ぞかし、豈人力之所ㇾ及にあらん

や、是三、かやうの危き節を見續給ひなば、秀吉も一入之合力に被存、當家入魂根深蔕固かるべし、願は昨日之筋目聊無相違仰談せられ、宜しくおはしまさんや、然者信長公之御弔として、まづ年寄中之內一、人つかはされ宜しからんや、又弔合戰に秀吉上洛ましまさば、加勢之義をも御沙汰可然候はんやと、隆景おいらかに諫ければ、滿座默止してけり、輝元尤にや思はれけん其議に同じ、右之兩使に福原越前守廣俊を相添、信長公御弔として秀吉之陣へまゐらせらる、兩使蜂須賀彥右衞門尉を以、信長公かくならせ給ふ共、最前約諸之筋目相違有まじきとの事におはしまし候條、御入魂之義奉賴由、輝元幷小早川吉河、向後疎意存まじき旨誓紙を以被申しかば、秀吉も不斜悅給ふて、有のまゝ心底を殘さず被申けるは、惟任を早速討平、亡君尊靈の憤を散せむ事在掌握、其元只今輝元入魂之義によれり、何より以大慶に候也、此節を窺ひ違々承候筋目相違せらるるにおいては、浮田を是に殘しおき、某は上洛せしめ、弔合戰を挑みなんと銘心腑候し、然處に向後無他事可有入魂、誓紙固く信を守らるゝと云、危節を可被相救之結構と云、旁以大慶甚深候、信長へ忠孝を可令報謝、前表此上有まじきと、感悅再三に及べり、

〔武功雜記〕二一權現樣〇德川家康ト北條〇氏直ト一戰ノ剋、北條人數ヲ三枚橋マデ出シ、和談ニ成候テ、兩將對顏ノ節、北條ハ床机ニ腰カケ居、權現樣ハ御手ヲツカヂラレ、御腰ヲカヾメラレ御挨拶被遊候ヲ、酒井左衞門尉見申候テ、中々口惜敷御坐配ニテ候、北條ハ奢タル體ニテ候ニ、殿ノ爲體アマリ敬過候、加樣ノ事ハ味方ノ志ノ弱ト成リ、且又人之歸伏モ無之モノト諫ラレ候ヘバ、權現樣合掌被成候テ、御免アレ〳〵此返事ヲヤガテ可申入ト被仰候、

〔武德大成記〕二十八二十日〇慶長十九年十二月又常高院〇京極忠高母ニ阿茶局ヲ副玉ヒ、城〇大坂城中ヘ入シメ、淀殿〇豐臣秀賴母ヘ喩シ玉ケルハ、秀賴大坂ニ猶モ居住セラレバ、舊領ノ地ヲ授ベシ、天下ノ要津トテ佗ノ邦ヲ願ナラバ、大國ヲ數ケ所封ズベシ、招集ル浪人ドモヲモ制禁スベカラズ、心ニ任セラルベ

シト仰遣サル、淀殿モトヨリ和親ノ心ナレバ、二人ノ言ニ從ヒ同心セラル、二人イヨ〳〵約ヲ固セント思ヒ、只今和親アル上ハ、何ニテモ大御所公〇德川家康ヘ請玉コト仰ラルベシト申ケレバ、淀殿スナハチ有樂〇織田修理〇大野治長幷ニ七組ノ士ヲ召集議セラル、浪人ドモ申ケルハ、二三年モ籠城ニテ變ヲ待バ運ヲ開キ玉ベキニ、和議セラルコトアルベキヤト口々ニ申ケレドモ、有樂修理七組ノ士皆和議ヲ悦ケレバ、御返答申上ラレケルハ、秀頼モトノ如大坂ニ在テ、家臣ドモ皆舊地ヲ領シ、浪人ドモ制禁シ玉ハズバ、永ク和親アルベシトアリケレバ、神君聞召テ、請トコロノ條々、皆願ノ如スベシ、今マデニ和親シ、永ク干戈ヲ止ル上ハ、我士卒ニ命ジテ總堀ヲ塡、所々ノ要害ヲ壞テ人々ノ疑ヒナキヤウニセラルベシト仰遣レケレバ、淀殿和親ヲ悦ビ佗ノ思慮ナク、諸事仰ニ從ヒ奉ルベシ、秀頼誓紙ヲ獻ズベシト返答セラル、是日後藤少三郎ニ命ゼラレ、上野介正純ガ家臣寺田將監ヲ副ラレ、城ニ入有樂修理ガ人質ヲ受シム、各子ヲ以質トス、修理ハ幼少ノ子ヲ出シケレバ、少三郎怒テ、嫡子ヲ人質ニセラルベシ、幼稚ノ人ハ無益ナリト申ケレバ、修理モ異義ニ及バズ、嫡子信濃守十七歲有樂ガ子武藏守十九歲ヲ人質タラシム、神君聞召、少三郎ガ幼稚ヲ受ザルヲ御褒美アリ、

〔攝戰實錄〕二十八慶長十九年十二月廿四日〇傳に廿一日と有り御和睦の誓紙取替さるに付、大御所御印形撿使として、木村長門守重成年廿一歲、幷郡主馬良列、二ノ丸水の手の門を出、天王寺口より茶臼山の御陣營に來る、〇中略其時本多上野介〇正信謹て言上、御城中より御印形の撿使として、木村長門守伺公すと也、時に木村かうべを上ゲ進み出、少も臆せず、主君此度不意に叛逆、其罪まぬかれ御和睦の段萬々慈愍を仰ぎ奉る也、殊に是より猶太平の始と、御誓紙を遊ばし候べき由、重疊の恩嘉何事か是に如かん、依てとても御儀に、御印形拜見に恐れながら拙者を差越候と云終て、少し退き又かうべを下げ畏る、大御所宜はく、和睦の上は其儀ニ及ずといへども、互の誓紙勿論

世上評議の爲なれば、默すべきに非らず、○中略御右筆曾我又左衛門[一書に太郎左衛門と有り]文臺の上に硯箱御文箱を載せ持出る、御前に居へ置退く、大御所御誓紙の認め有るを開らかせ給ひ、墨を點じて御諱に及び、御判を遊ばされ、小刀を以て御指を突給ふ、御血出がたければ、其時仰に、年寄血少き故か深く突ども出ずと也、此時諸士思ふ樣、木村御挨拶に、御血判に及ざる由言上すべしと察する處に、木村詞無く、右の御咄しを聞ざる體にして、さしうつぶき居ながら、御手先をしかと見詰て居し故に、大御所止事を得給はず、御舌の端を切裂て血を出し給ふ、是は古血多く又治し安き所故也、御醫師則粉藥を持參し是に附る、上野介臺共に御誓紙を披きながら持出て木村に授く、木村臺共に捧げて御誓紙を拜見す、其委しき事良程あり、此間醫師入る、曾我出て御硯箱明ケ文箱を取入る、其内御血判漸くかはく故に、木村卷納め持參の文箱に入れ、服紗を以て上を包む、曾我又出て文臺を取入る、木村左の手に御文箱を捧げ、右の手をつき御暇を申、左京進此時御熨斗の臺を持出置、伊奈筑後守御名代に立、はさみて木村に與ふ、是は御傍へ近付ざる謀と也、

傳に曰、御誓紙御血判の時、常高院阿茶の局も、其御席に罷出、御後ろに侍座す、阿茶の局進み出、其刀を取て己れが指を添、自分の指に突立、其血を御指にぬり、是にて御血判を調へる、長門守是を見とらずと云々、

大御所内に御入有り、木村罷出、初て刀を置たる所に、於て御文箱を又頭に懸け、刀を差て立出る、成瀨安藤敷臺迄送りしと也、郡主馬も續て出と云々、○中略御誓紙の案文如何樣なるや、具に是を知る人なし、但し村越傳記には左の如し、

敬白起請文之事

一今度互に確執に及び、令對陣候といへ共、雙方取噯に依て令和睦者也、自今以後御子孫に至る迄、毛頭疏意不可有事、

一年來の所領并家人召抱る輩、一人も不殘前々之如く無相違令滿悅候事、
一大坂の城に在住子孫長久之事
一母儀安穩一生可令送事
右之條々皆々可相守者歟、但此度興行之趣、城外側を埋み、要害を破り畢、若此趣一事にても於令違亂は、正八幡宮を始奉り、本朝神明佛陀之冥罰可罷蒙者也、仍而起請狀如件、

慶長十九甲寅十二月廿四日　秀頼 家康 御判

城中江之撿使之義、○中略　板倉伊賀守子内膳正○重昌を遣はさる、將軍家○秀忠より阿部備中守○正次を差添らるゝと也、○中略　大野修理亮○治長兩手を束て、大御所の御使板倉内膳正、將軍家の御使阿部備中守兩人、御誓紙の印形を撿知に參上と申、秀頼公諾し給ふ計也、兩人の使者も言上の詞無し、秀頼公も使者に對し御詞もなし、其時尼子三郎左衞門、再び柳盤上に誓紙の認め有之硯箱とを載て、御前に持出差置、秀頼公筆を取自名を書付、宛所を誰とかと尋給ふ、修理其趣を板倉に傳ふ、板倉答へて、大御所の使にて罷越候得ば、大御所を御宛所たるべしと申す、秀頼公則其通に認め給ふ、

冬夏實錄に曰、此宛所の事、大御所御心元なく御思案有之、御使番衆兩人を以追懸られしか共、早城入之由、然るに板倉歸ると先此義を御尋也、板倉城中にての次第を言上す、大きに御機嫌よかりしと云々、

次に封刃を以て指を突給ひ、則血判相濟、尼子則硯箱を持出し、誓紙を披らきながら兩使に渡す、板倉請取、差上つら／＼相詠め、則卷納し節、尼子白木の文箱を持出内膳に渡しければ、秀頼何の挨拶もなく内へ入給ふ、大野修理兩使に向ひ、御太儀千萬之由挨拶す、兩使も兩上々樣御和睦目出度よし互に一禮の後、兩使罷出、修理內藏助兩使を送り出たり、兩使は夫より茶臼山の御本陣

八立歸ると也、

〔白石紳書十〕和睦の志るしには、〇中略外郭の堀ひとえ埋らるべきに事極る、互ひに御誓ありて堀うづめらるゝ、奉行は本多上野介〇正純成瀨隼人〇正成安藤帶刀〇直次其外侍大將の物に慣たる人奉行になさる、外郭の堀埋めて、二の丸の堀うづめんとす、こは思ひよらずとて、秀賴の御使來りて此由をいへば、本多、御物頭どもの承り誤りし也、さらば下知すべしとて、其場に至りて堅く制す、人々承りぬとて、上野介歸りぬれば又もとのごとくに埋ながら、推參なる奴原がいひ事やとて埋ぬ、淀殿此由を聞し召て、お玉といへる女房して、上野介にいか成事ぞ心得ねと仰られしに、成瀨は生得口惡しき人にて、お玉の御方に、扨もそなたは見めよく姿のやさしきよなどたはふれ、安藤物をもいはず、人夫等はひた埋めに埋しほどに、其儘には有べからずとて、お玉に大野主馬添て京都に登せらる、本多佐渡守〇正信に其由を云へば、佐渡守承り、上野介がうつけにこそ侍れ、ものゝ下知するやうをも知らぬ不覺さよ、只今此由を大御所に申さめど、二三日風邪になやまされぬ藥をも服しぬれば、頓てたいらぎ候はんほどまち給へ、よく申べきにて侍るとてうち過ぬ、其後は佐渡守も病日々に重りしかば、板倉〇勝重に催促す、板倉は本多が快復せむほど、今志ばし待給へといふて過る程に、堀は本城迄埋ぬと聞て、本多、板倉、大坂の御使の由を申、大御所大に驚れ給ひ、使のむね理に至極せり、二人は先歸るべしとて、佐渡守を下さる、堀は本城まで埋たり、人夫壹人もみへず、佐渡守、かほどまでは埋じとこそ思ひしに、かゝる奇怪なる事はなし、此上は詮方なし、我子上野介を初て、其罪輕かるべからず、急ぎ罷歸て此由申さんとて歸る、後に此御謀をいみじき事に申ければ、大御所、小田原をせめられしに、隆景〇小早川が云ひしを聞て和睦の事をば家康すゝめ、其後此城を築かれしとき、此城力責には叶ふまじ、和睦の後二たび責ずしては、責落しがたかるべしと太閤のたまひし、此事誰も

聞しかど、心付なければ力なしと宣ひしとなり、

古事類苑

兵事部十七

降服

古事類苑

兵事部十七

降服

降服ハ一ニ降伏ニ作ル、古ニマツロフト云ヒ、後ニ降參、歸降等ノ稱アリ、又單ニ降ト稱シ、文字ノ本訓ニ據リテクダルト云ヒ、音ヲ用キテカウトモ云フ、故ニ其人ヲ指シテ降人ト云フ、降ハ原來勢盡キテ服從スルモノナレバ、死ヲ乞フノ狀ヲ爲スモノアリ、故ラニ面縛スルアリ、磔柱ヲ以テ之ニ先ヅルアリ、又頸ヲ延ベテ降ルト云フモ、亦斬ヲ乞フ意ナリ、其害心ナキヲ示スヤ、旗ヲ捲キ、刀ヲ解キ、兜ヲ脫グアリ、又手ヲ束ヌト云フモ、亦兵器ヲ執ラザルヲ云ヒテ、降伏ノ常語ナリ、又緇ヲ披キ僧ト爲リテ降ルアリ、僧ト爲ルハ世事ニ意ナキヲ示スモノニテ、中世以後國俗此ヲ以テ謝罪ノ證ト爲セリ、亦名簿ヲ敵ニ納ル丶アリ、古昔服從ノ證ニシテ、己ノ名ヲ書シテ人ニ與フルナリ、故ニ人ノ僕從ト爲リ、弟子ト爲ル、皆之ヲ用キル、其將ニ降ラントスルヤ、白旗ヲ樹ツルアリ、笠ヲ城頭ニ揭グルアリ、是降伏ヲ表示スルモノニテ、敵ニ對シテ攻擊セラレザランコトヲ求ムルナリ、又嗳ヲ入ル丶ト云フ語アリ、紹介ニ託シテ、降ヲ約スルナリ、侘ヲ入ル丶ト云フ語アリ、罪ヲ謝スルヲ云フ、但シ直ニ其僕從ト爲リ、或ハ城ヲ去リ、要害ヲ毀ツガ如キハ、降後ノ事ニシテ、主將ノ自ラ死シテ將士ノ死ヲ救ヒシガ如キハ、降前ノ事ナリ、其間ニハ一時ノ詭計ニ出デ丶、敵ヲ欺キシモノモ亦多シ、(一時ノ詭計ニ出タルモノハ、軍略書僞降條ニ載セタリ、)又其降ヲ受クルガ如キハ、初ニ賞ヲ懸ケテ降スアリ、降リテ後ニ之ヲ疑ヒ、

之ヲ殺スアリ、降ノ事タル借ニ多種ニシテ擧グルニ勝ヘズ、

名稱

〔日本書紀九神功〕十月○仲哀九年、中略、皇后○神功曰、○中略今既獲財國、亦人自降服、殺之不祥、

〔類聚名義抄六佛上〕降音絳 フス クダル 和、我サ、 シタガフ

〔伊呂波字類抄久辭字〕降クダル、伏也、歸也、落也、

〔運歩色葉集賀〕降參サン 降人ニン 乞降コウカウ

〔易林本節用集加言語〕降伏ガウブク

〔書言字考節用集八言辭〕降參カウサン 乞降コフカウ 脫冑降スイナカブトヲヌグル 免冑

〔高麗陣日記附錄〕清正家軍言○中略歸キスルト云ハ戰ザル先ニ味方ニ屬スルヲ云、降クダルトハ籠城ナドニテ戰負、和ヲ乞ヲ云、服フクスルトハ、敵方ノ者此者ヘ來テ、ヒタスラニ隨ヲ云、

乞降

〔日本書紀九神功〕九年○仲哀十月辛丑、從和珥津發之、○中略便到新羅、時隨船潮浪、遠逮國中、卽知天神地祇悉助歟、新羅王於是戰々栗々、厝身無所、則集諸人曰、新羅之建國以來、未嘗聞海水凌國、若天運盡、國爲海乎、是言未訖之間、船師滿海、旌旗耀日、鼓吹起聲、山川悉振、新羅王遙望以爲、非常之兵、將滅己國、讋焉失志、乃今醒之曰、吾聞東有神國、謂日本、亦有聖王、謂天皇、必其國之神兵也、豈可擧兵以距乎、卽素旆而自服、素組以面縛、封圖籍、降於王船之前、因以叩頭之曰、從今以後長與乾坤、伏爲飼部、其不乾船柁、而春秋獻馬梳及馬鞭、復不煩海遠、以毎年貢男女之調、則重誓之曰、非東日更出西、且除阿利那禮河返以之逆流、及河石昇爲星辰、而殊闕春秋之朝、怠廢梳鞭之貢、天神地祇共討焉、時或曰、欲誅新羅王、於是皇后曰、初承神敎、將授金銀之國、又號令三軍曰、勿殺自服、今既獲財國、亦人自降服、殺之不祥、乃解其縛、爲飼部、

〔三代實錄四十三陽成〕元慶二年十月十三日乙亥、勅符出羽國司曰、得今月日奏狀、具知賊虜乞降之由、○中略但古之降者、去其甲兵、面縛待命、裁得制其死生、然可謂降伏歸降之法、

〔吾妻鏡 一〕治承四年十月十八日丁酉、工藤庄司景光、於波太山與景久攻戰、竭忠節之旨言上、皆被仰可行賞之趣、于時令與景親奉射源家之輩、後悔銷魂云云、仍荻野五郎俊重、曾我太郎祐信等、束手參上云云、

〔吾妻鏡 九〕文治五年八月廿日丁未、卯剋二品(頼朝○源)令赴玉造郡給、則圍泰衡多加波々城給之處、泰衡兼去城逃亡、自殘留郎從等束手歸降、　廿六日癸丑、日出之程匹夫一人推參御旅館邊、投入一封狀逐電、不知其行方、諸人怪之召覽之處、表書云、進上鎌倉殿(侍所)　泰衡敬白云云、狀中云、伊豫國司事者、父入道奉扶持訖、泰衡全不知濫觴、亡父之後請貴命奉誅訖、是可謂勳功歟、而無罪而忽有征伐、何故哉、依之去累代在所交山林、尤不便也、兩國已可爲御沙汰之上者、於泰衡蒙免除欲列御家人、不然者被減死罪可被處遠流、若垂慈慧有御返報者、可被落置于比內郡邊、就其是非歸降可走參之趣載之、親能讀申御前、依之有重々沙汰、

〔太平記 六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事

湯淺入道內外ノ敵ニ取籠ラレテ可戰樣モ無リケレバ、忽ニ頸ヲ伸テ降人ニ出ヅ、

〔太平記 二十八〕慧源禪巷南方合體事附漢楚合戰事

左兵衛督入道(直義○足利)都ヲバ、仁木細川高家ノ一族共ニ背カレテ浮レ出ヌ、大和、河內、和泉紀伊國ハ、皆吉野ノ王命ニ順テ、今更武家ニ可付順共不見ケレバ、漢ニモ不著楚ニモ離タル心地シテ進退歩ヲ失ヘリ、越智伊賀守角テハ何樣難儀ナルベシト覺候、只吉野殿ノ御方ヘ御參候テ、先非ヲ改メ後榮ヲ期スル御謀ヲ可被廻トコソ存ジ候ヘト申ケレバ、尤此儀可然トテ、竊テ專使ヲ以テ吉野殿ヘ被奏達ケルハ、

元弘初先朝爲逆臣被遷皇居於西海、宸襟被惱候時、應勅命雖有起義兵輩、或敵被圍或戰負屈機𡮢志處、慧源荷勅尊氏卿企上洛、應勅決戰歸天下於一統皇化候事、乾臨定被殘叡感候歟、其後依

義貞等讒、無罪能成勅勘之身、君臣空隔胡越之地、一類悉殘朝敵名條歎有餘處也、臣罪雖誠重、天恩不過往、負荊下被免其咎、則蒙勅免綸言、靜四海之逆亂、可戴聖朝之安泰候、此旨内々得御意、可令奏聞給候、恐惶謹言、

十二月九日　　沙彌慧源

進上　四條大納言殿

ト委細ノ書狀ヲ捧テ、降參ノ由ヲゾ被申ケル、

〔信長記一下〕岩成主稅頭降參事

廿九日〇永祿十一年九月信長卿青龍寺ニ押寄、寺戸寂照院ニ本陣ヲ被居ケレバ、〇中略流石至剛ナル岩成モ難叶ヤ思ヒケン、種々佗言申シ降參シテ、即先駈ヲ申請、

〔信長記二〕淺香城降參幷大河内城沒落事

二十三日〇永祿十二年八月木造城ニ御著有テ、一兩日軍評議有テ、淺香ノ城ヲ責給フ、先陣木下藤吉郎秀吉推寄、時ヲ作リ懸責ケレバ、城中俅ガタクヤ思ケン、頻ニ佗言シテアケ退ク間、〇下略

〔信長記三〕手筒山城幷金崎城沒落事

翌日廿六日〇元龜元年四月朝倉中務大輔ガ籠タル金崎城ニ押寄、先遠卷ニシ給フ、〇中略然ル處ニ城中ヨリ僧二人、朝倉同名ノ者一人已上三人罷出、命ヲダニ被助候ハヾ城ヲ開渡シ、當國ノ案内者致スベキ旨達テ佗言申上ケレバ、サラバ案内者ニ召具スベシトテ被赦免、

〔信長記六〕室町殿重御謀叛之事

翌日〇天正元年七月七日未明ヨリ室町殿ノ御構如稻麻竹葦取卷ル、元ヨリ攻敵疾則備設ニ不及ト云コトサヘ有ニ、殊更事ニモアイ付ヌ人々籠タリ、寄手ハ獎喻ヲモ欺程ノ信長卿ニテ、揉ニ揉デ攻サセ給ヘバ、中々忍ウベクモ見ヘズ、色々佗言シテ重テ人質ヲ差出シ、赤手ヲスッテ降參セラル、

間、サラバトテ免シ給ヒケリ、

〔關八州古戰錄十七〕佐竹宇都宮以下上方一味事

野州ノ皆川山城守廣照ハ、竹ケ鼻口ノ警固タリシガ、最前ニ沒落シテ、小田原ノ城ヘ引入リケルガ、同キ八日(○天正十八年四月)ノ夜、主從百餘人ニテ、潜ニ出奔シ、笠懸山ノ陣營ヘ來リ、降參ノ由歎訴セラレケレバ、秀吉公聞召レ、渠ハ去年大坂ニモ使者ヲ相越音問ノ因アリ、其上吾儕此地ニ押詰、未ダ幾許ノ日數モナキニ、逸早ク軍門ニ降レル事物始宜シトテ、最モ麾下ニ列セラルヽノ旨、懇ニ合メラレケリ、

〔關八州古戰錄十八〕武州松山落城事

北國ノ兩大將前田利家、上杉景勝、及ビ信州衆ハ、(○中略)四月(○天正十八年)十二日、武州比企郡松山ノ城ヘ働ヲ懸ラル、(○中略)城兵寄手ノ大軍ヲ見テ當リ難クヤ思ケン、城下ノ寺僧ヲ出シテ降ヲ乞ヒ、前驅ニ加ハッテ忠戰ヲ抽ヅベシ、左アラバ本丸二ノ郭ヲ相亘シ、三丸ニ諸士ノ妻子ヲ入レ置レ給ルベキヤノ旨申送ケレバ、寄手ノ大將達同心シテ其望ニ應ジ、則彼降人等ヲ案内者トシテ、北條安房守氏邦ノ家人共、四百許ニテ籠リ居タル、本田ノ鄉四山ノ保障ヘ取懸ラル、

〔足利季世記(四三好記)〕三好攝州衆追伐ノ事

同(○天文十六年)二月二十五日、三宅ノ城ヘ押寄取卷テ攻ケレバ、城中ハ小勢ニテ、同三月十五日ニ水城ヲ攻落シ、本城計ニ成ケレバ、城ノ本人出羽守モ、加勢ノ人々モ不叶シテ、是モ城中ヨリ笠ヲ出シ色々噯テ、同二十二日ニ城ヲ明ケ渡シケル、(○中略)

公方御入城ノ事

公方勢(○足利義晴勢)籠鳥ノ出タル如ク悅ビケル、カクテ其勢同年(○天文十六年)五月五日ヨリ、藥師寺與一ガ楯籠リシ芥田川城ヲ被攻、晴元(○三好)モ讃岐守畠山總州モ自身打立、數日取卷攻給ヘバ、此城モ不

叶シテ、笠ヲ上テ降ヲ請ケリ、命計ヲ助ケ、六月二十五日平旦ニ城ヲ明テ退去ス、

〔總見記二〕信長公三州境出馬村木城被攻落事

城〈村木〉ノ中ノ兵共随分防戰ケレ共、寄手〈織田勢〉三方ヨリ透間モアラセズ攻入ケレバ、手負死人出來テ、次第々々ニ人數モ薄ク力モ疲レテ、笠ヲフリ樣々降參申ケル、

〔信長記一下〕箕作城攻落事附觀音寺城開退事

佐久間右衛門尉、木下藤吉郎、丹羽五郎左衛門尉、淺井新八ハ、兼テ箕作ノ責手ニ被定タル事ナレバ、時ヲ作カケ〳〵攻寄ケルニ、〈中略〉敵難怺ヤ思ケン、笠ヲ出シテ、其ニ詰ラレタルハ、誰々ヤアラント云ケレバ、〈中略〉丹羽ガ手ニ與セシ林志島ナド、答ケレバ、是迄ハ持ハ持テ候ヘ共、一命ヲ被助候ハヾ、旗ヲ卷鉾ヲ逆ニシテ可降ト申ケル間、即此由四人ノ大將ヘ注進シケルニ、信長卿モ幸彼ガ手ニ御坐シケル間、佐久間進出、先城中ノ者共一命ヲ助、城ヲ請取可申ト存ズルハイカヾ候べキト窺申ケレバ、兎モ角モ事ノ能樣ニ計候ヘト宣ヒシ間、箕作ヲ請取テ勝時ヲ噇トゾ上タリケル、

〔信長記六〕大ツクノ城開退事

總軍勢〈織田信長勢〉螺ヲ立鬨音ヲ上、四方八方ヨリ攻上ル、〈中略〉詰ノ城ニ成ケレバ、塀ニヒタ〳〵ト手ヲ掛乘入ント見エシ處ニ、城中ヨリ僧一人笠ヲ上、降參ヲ請テ申ケルハ、〈下略〉

〔關八州古戰錄十八〕武州岩槻落城事

伊達與兵衛ハ、〈中略〉剛ノ者ナレ共、極運ノ時至テ力ナク、櫓ヨリ笠ヲ揚ゲ降ヲ乞テ、同キ〈天正十八年五月〉廿日退散シタリケレバ、城ヲバ淺野長政ノ手ヘ受取、

〔鎌倉大草紙〕景春〈長尾〉が被官人溝呂木の城にたて籠、頭越後五郎四郎は小磯と云山城にたて籠る、金子掃部助は小澤と云城に楯こもる間太田左衛門入道下知として、厚谷より勢をつかはし

同〇文明九年三月十八日溝呂木の城を責落す、同日小磯の要害を責らる、一日防戰ひ、夜に入ければ、越後の五郎四郎かなはずして、城をわたし降參す、

〔安西軍策三〕雲州白鹿城攻事

白鹿ノ籠城僅十餘箇日ナレドモ、極水乏シケレバ無力、一命ヲ助ラレバ、城ヲ明渡可申ト降參ヲ乞ケレバ、其旨ニ任セラレ、同〇永祿六年九月二十九日城ヲ請取、

〔總見記五〕稻葉山落城濃州退治事同齋藤家滅亡事

城〇稻葉山ノ中ノ兵ドモ、兼テ籠城ノ事支度モ無レバ、俄事ニテハ有リ、殊ノ外迷惑シテ悉ク難儀ニ及ブニ依テ、降參シテ申シケルハ、城ヲ開渡シ可申候間、城ノ大將ヲ始メ士卒等マデ、一命ヲ助ケ被下ベシト申上ル、信長公早速御容赦有テ、サラバ楯籠ル所ノ者共、一命ヲ助ケラルベシ、早々城ヲ明テ渡スベキヨシ被仰渡ケレバ、城中ノ者ドモ各承伏シテ、此上ハ大悦ナリト云フ、扨城明渡シ楯籠ル者ドモ、皆々方々ヘ浪人シテ、散々ニナリニケリ、

〔信長記六〕松永父子降參之事

去程ニ松永彈正少弼其子右衛門佐相共ニ計ケルハ、信長卿若年ノ時ヨリ少勢ヲ以大軍ヲ碎キ、度々ノ勝利ヲ得ラレシ事共、時ノ運ニ乘タルノミニ非、武勇モ世ニコエ、智謀モ人ニ勝レ、古今ニ傑出セル人ナルガ故ナリ、往ヲ以來ヲ謀ルニ、此後彼武威彌四海ヲ蓋ナンズ、身危逼スルニ及デ屈伏セバ、敵ニモ味方ニモ侮レテ、中々悔共甲斐有ベカラズ、マヅ香バシゲノ有ル内ニ降參シテ、和州多門ノ城ヲバ開渡シ、偏ニ忠ヲ盡サバ、ナドカ其益ナカラント議定シテ、内々佐久間右衛門尉信盛ニ便リ、件ノ子細ヲ伸シカバ、信盛岐阜ヘ參ジテ取申ケルニ、松永ハ武略ニモ達シ、且ハ聰明ニモ有ト云トモ、隱レナキ佞人也、己ガ名利ノ爲ニ謀ル者ハ其威積累スル、則果シテ國家ヲ亂ス事掌ヲ反スルニモ過タリ、左樣ノ徒者ヲイカヾ有ベキト仰ケレバ、佐久間其ハ暗君ニ事ヘテ

毀要害而降

ノ事ニテコソ御座候ヘケレ、先御赦免有バ天下靜謐ノ功速ニ候ベシト諫申セバ、サラバ汝覓モ角モ計フベシト有シカバ、降參ノ義調リ、先多門城ヲ請取ケリ、

〔柴田退治記〕佐治新介相踐龜山、秀吉自身寄馬、見敵之働、以短兵引拂亂杭逆茂木、○中略籠城士卒悲嘆事、頗似轍跡之魚吻淤泥之水、故佐治新介脫甲致退城之降參、然間助命、被送著長島、

〔豐薩軍記五〕稻富與高森伊豫守合戰之事

伊豫守思惟シテ、先ヅ今般ハ降ヲ乞ヒ、後日ニ謀ヲ運シ、本意ヲ達スベキナリト思ヒケレバ、矢留ヲ乞ヒ、使者ヲ以テ武士ノ習ヒノ難默止、一旦ノ勇氣ヲ勵シ、敵對申セシ事ドモ恐入候キ、已往ノ罪ヲ赦サレバ、當城ヲ相渡シ貴命ニ隨ヒ進セテ、宜ク勤仕イタスベシトゾ云送リケレバ、稻富則其意ニ應ジ圍ヲ解テ引退ク、○下略

〔奧羽永慶軍記十五〕佐竹伊達和睦破事附阿子島高玉落城事

政宗○伊達、中略、同○天正十七年八月十四日ニ、片倉小十郎、大內備前守、片平助右衞門尉父子ヲ以テ、阿子島ノ城ヲ攻サセラル、城主治部○中略四方ノ口々攻破ラレ、今ハ本丸計殘リケリ、其上我身手負ヌレバ、討死セント思ヒケルガ、急度思案シケルハ、敵方ニ降リ命助ルナラバ、又本望ヲ遂ル事モ有ルベシト思ヒ、日來朋友ノヨシミ有ケレバ、伊達安房守ヲ賴ミ、命ヲ請城ヲ渡シテ猪苗代ニ退カント云、○中略治部助ハ伊達安房守ガ陣ヘ使ヲ送、我壹人生害仕、城ヲ明ワタシ候ハンノ條、籠城セシ者共ヲバ、命ヲ助ケ給ハリ候ラヘトイヒ送リケレバ、成實則政宗ノ前ニ出テ、此由ヲゾ訴ケル、政宗聞給ヒテ、城ヲサヘヒラキ渡サントイハヾ、何ゾ城主ヲ殺サンヤ、速ニ何地ヘモ退ベシ、尤城中ノ老弱一人モ討事有ベカラズト、安房守ニ下知シ給ヒテ、目付ヲ付テ退カセラル、

〔鎌倉大草紙〕同月○文明九年四月十三日、道灌○太田江戶より打て出、豐島平右衞門尉が平塚の城を取卷○中略同十四日石神井の城へおし寄責ければ、降參して同十八日に罷出、對面して要害破却すべ

爲義降參

きよし申ながら、亦敵對の樣子に見えければ、同十八日に責おとす、金子掃部助が籠ける小澤の城も、同日に攻落す、

〔朝野群載十一廷尉〕太政官符　伊豫國司

應下安二置便所一歸降俘囚安倍宗任、同正任、同貞任、同家任、沙彌良增等五人從類參拾貳人上事、○中略

右得二正四位下行伊豫守源朝臣賴義去月廿二日解狀一偁、○中略沙彌良增俗名則任、從二最初戰之庭一被二追散一之後、爲レ助二身命一忽出家、即以レ母爲レ先、合掌出來、○中略

康平七年三月廿九日

〔保元物語二〕爲義降參事

判官○源爲義ハ重病ニ煩給フ、其上海道モ塞リ、關々モ堅ク守ルト聞エケレバ、中々東國へ下ラン事モ叶ヒ難シトテ、又三郎大夫ガ家ニ立歸テ、日暮シカバ山上ニ上リ、其夜ハ中堂ニ通夜シテ、殊ニ重病失除ノ悲願ヲ憑テ、終夜祈請セラレタリ、明レバ十七日、○保元元年七月西塔ノ北谷黑谷ト云所ニ、二十五三昧行フ所ニ行テ、出家ヲ遂、法名義法房トゾツカレケル、月輪房堅者ノ許ヨリ、墨染ノ衣袈裟ヲ奉リテ、沙彌ノ形ニ成給フ、○中略入道ハ賀茂河ヲ渡リ、糺森ヨリ雜色花澤ヲ義朝ノ許へ遣シテ、是マデ逃來レル由ヲ申サレケレバ、左馬頭夜ニ入テ輿ヲ奉リ、竊ニ判官殿ヲ迎取給ヒケリ、去程ニ平馬助忠正ハ、淨土谷ト云所ニテ出家シテ深ク隱テ有ケルガ、爲義入道モ降參シタリトヤ聞テケル、

謀反人被レ誅事

〔太平記十一〕金剛山寄手等被レ誅事附佐介貞俊事

宇都宮紀清兩黨七百餘騎綸旨ヲ給テ上洛ス、是ヲ始トシテ、百騎二百騎、五騎十騎、我先ニト降參シケル間、今平氏ノ一族ノ輩、譜代重恩ノ族ノ外ハ、一人モ殘リ留ル者モ無リケリ、是ニ付テモ今

ハ何ニ憑ヲ懸テカ、命ヲ可惜ナレバ、各打死シテ名ヲ後代ニコソ殘スベカリケルニ、責テノ業ノ程ノ淺猿サハ、阿曾彈正少弼時治、大佛右馬助貞直、江馬遠江守、佐介安藝守ヲ始トシテ、宗トノ平氏十三人幷ニ長崎四郎左衞門尉、二階堂出羽入道道蘊已下、關東權勢ノ侍五十餘人、般若寺ニテ各入道出家シテ、律僧ノ形ニ成リ、三衣ヲ肩ニ懸ケ、一鉢ヲ手ニ提テ、降人ニ成テゾ出タリケル、

〔梅松論上〕元弘三年〇中略正成〇楠討手の大將阿曾彈正少弼、陸奥右馬之助、長崎四郎左衞門尉、奈良にて出家して降參しけるを、即禁せらる、

〔太平記二十九〕師直師泰出家事附藥師寺遁世事

サテモ三條殿〇足利直義ハ御兄弟ノ御事ナレバ、將軍〇足利尊氏ヲコソ惡クシト不思召トモ、師直〇高去年ノ振舞ヲバ、尙モニクシト思召サヌ事不可有、ゲニモ頭ヲ延ベテ參ル位ナラバ、出家ヲシテ參ルカ、不然バ將軍ヲ赤松ノ城ヘ遣リ進ラセテ、師直ハ四國ヘヤ落ルト評定有ケルヲ、藥師寺次郎左衞門公義ナド加樣ニ無力事ヲバ仰候ゾ、六條判官爲義ガ己ガ咎ヲ謝セン爲ニ、入道ニ成テ出候シヲバ、義朝子ノ義トシテダニモ、首ヲ刎候シゾカシ、縱御出家候テ、何ナル持戒持律ノ僧ト成セ給テ候共、三條殿ノ御意モ安マリ、上杉畠山ノ一族達モ、憤ヲ散ジ候ベシトハ覺候ハズ、剃髮ノ尸墨染ノ衣ノ袖ニ血ヲ淋テ、憂名ヲ後代ニ殘シ候ハン事、只口惜カルベキ事ニテ候ハズヤ、將軍ヲ赤松ノ城ヘ入レ進セテ、師直ヲ四國ヘ落サバヤト承候事モ、都テ可然共覺候ハズ、〇中略只御方ノ勢ノ未スカヌ前ニ、混ラ討死ト思召定テ、一度敵ニ懸リテ御覽候ヨリ外ハ、餘義アルベシ共覺候ハズト、言ヲ殘サデ申ケレ共、執事兄弟只朦々トシタル計ニテ、降參出家ノ儀ニ落伏シケレバ、〇下略

〔太平記二十九〕師冬自害事附諏訪五郎事

執事兄弟カクテモ若シ命ヤ助カルト、心モ發ラヌ出家シテ、師直入道道常、師泰入道道勝トテ、裳

ナシ衣ニ提鞘サゲテ、降人ニ成テ出ケレバ、見人毎ニ爪彈シテ、出家ノ功德莫太ナレバ、後生ノ罪ハ免ル共、今生ノ命ハ難助ト、歎ヌ人ハ無カリケリ、

〔鎌倉大草紙〕享德四年閏四月、○中略上杉方悉敗軍して、野州へ向ておちゆきけり、○中略等綱○宇都宮も息男明綱幷芳賀伊賀守已下降參の上は、防戰にたよりなく、籠城かなふべきやうあらざりければ、出家入道して黑衣を著し城を出、奧州白川へ落行ける、山川の城眞壁の城も責おとされて、いづれも成氏へ降參す、

〔雲州軍話〕尼子伊豫守義久大江方エ降參之事

山中鹿介幸盛進出テ、○中略今義久一旦ノ耻辱ヲ凌給ハヾ、鹿介世ニアラン程ニハ重テ時ヲ候ヒ、義兵ヲ發シ、當家ヲ興隆セン事、幸盛ガ掌握ニ在ベシト、古ヲ喩ヘ理ヲ碎諫シカバ、義久諫理ニ被責、十一月○永祿九年二日山下ノ小院下テ、剃髮染衣ノ姿ト成、天山瑞閑ト法名シ、麻ノ衣ニ身ヲ窶シ、寄手ノ陣ニ角ト告ラルヽ、從田玄蕃頭元廣、吉見大藏大輔廣賴馳向テ、忽生捕進セ、島根洗合崎ニ送ケル、

〔黑田家譜四〕秋月父子大に驚き恐れ、今迄は先年より島津へ屬したる義理を遂ん爲に、關白殿○豐臣秀吉に從はずといへ共、あの猛勢に向て弓を引ん事、蟷螂が斧をかゝげて龍車にむかふがごとし、今はかなひ難しとて、秋月種實髮を剃、墨染の衣を著し、向後御方に參り、御下知を背き申間敷由御誓詞を書て、家に傳りたる楢柴といふ名譽の茶入に持添持出て、其子種長と共に、大隈の西一里なる芥田といふ里の道の邊の廣呂に出、屈伏して是を捧げ罪を謝して、御赦免を乞ければ、關白殿牀机に御腰を掛られ、御對面有て、今迄は是非首をはねんと思ひしかども、かく來てあわれみを乞ふ體を見れば、又忽に不便に思ふ心出來たり、此上は命を助る間、薩摩征伐の先手に加り、忠節を勵すべしと被仰付、

脱兵器而降

〔黒田家譜　四〕五月十五日、〇天正十五年秀吉公既ニ薩摩の國へ入、千代川の口太平寺に御陣をすへたまふ、數万の軍勢三里四里に充滿せり、〇中略然る處に島津義久家臣等と相談して曰、〇中略我先祖忠久初て頼朝卿の封を請て、大隅薩摩を賜りてより以來、今に至て其子孫當家を相續す、若此度秀吉に降參せずば、我家忽滅亡し、先祖よりの血脈我に至て絕べし、只降參して當家を相續せんにはしかじとて、家臣伊集院左衞門大夫入道を、孝高の陣に遣し、詞を盡し降參せん事をこふ、孝高此由を大納言秀長卿に告られければ、秀長卿木下半助を太平寺に遣し、秀吉公に言上せらる、是に依て秀吉公其罪を御赦免ありければ、島津義久髮を剃り衣を著して名を隆白と號し、礫木を金みがきにして眞先にもたせ、太平寺に行て秀吉公の陣へ降參し、其罪を謝す、若御憤ふかく御免有まじく候はゞ、此礫にかゝり可申ため持せ參て候と申上ける、秀吉公是を感じ給ひて其罪をゆるし、却て御慇意を加へらる、〇又見島津家譜

〔太平記　十四〕將軍御進發大渡山崎等合戰事

城中早色メキ立テ見エケルガ、一番ニ但馬國ノ住人長九郎左衞門、同意ノ兵三百餘騎旗ヲ卷テ降人ニ出ヅ、是ヲ見テ洞院按察大納言殿ノ御勢文觀僧正ノ手ノ者ナンド云テ、此ノ間畠水練シツル者共、弓ヲ弛シ冑ヲ脫テ我先ニト、降人ニ出ケル間、城中ノ官軍力ヲ失テ防得ズ、

〔鎌倉大草紙〕同〇應永九年壬午奥州宮方の餘黨、伊達大膳大夫政宗法名圓教、隱謀を企て篠川殿の下知にしたがひ申さず、一味同心の族蜂起しける間、同五月廿一日、上杉右衞門佐入道禪秀爲大將發向す、伊達かねてより赤館といふ所に城をかまへ、合戰して鎌倉勢を追返し、悉く討取ける、然ども近國の大勢重而馳向ひ、九月五日伊達打負、甲をぬぎ降參す、

〔大內義隆記〕同〇大永八年四月上旬ニハ、肥前ノ國龍造寺ノ一揆ノ時ハ、義隆御發足ノ事ナレバ、入道〇道麒道麒先陣仕リ、屋形ハ長府ノ修禪寺ニヒカヘサセ玉ヒツヽ、扨天文元年霜月十五日ニ、道麒ハ

樹白旗而降

渡海仕リ、赤間ガ關ヲ打過テ、肥前ノ國ニ亂入リ、龍造寺ガ向ノ山ニ對陣スレバ、龍造寺ハ甲ヲヌイデ降參ス、

〔陰德太平記三十二〕釜田藤包降參之事

元春ヨリ城中ヘ使ヲ以テ降參スルニ於テハ、本領安堵タルベシト云送ラレケレバ、藤包卽領許シ、胄ヲ脫デ降人トコソ成ニケレ、

〔關八州古戰錄八〕那須七黨沙汰附降參峯黑羽城等軍事

政義東〇既ニ生害ニ思極メ、兵ヲ一所ニ集ムルヲ見テ、千本秋蠅齋軍使ヲ馳セ、降參ノ義ヲ勸メケレバ、左近將監同心シテ旗ヲ卷キ降人トナリ、諸卒ノ命ヲ助ケテ常州ヘ歸陣シタリケリ、

〔奧羽永慶軍記一〕奧州關山合戰ノ事

安積ノ者共佐竹ノ大勢ニ向テ、戰勝利有ベシトモ思ハズ、ミナ〳〵甲ヲ脫、弓弦ヲハヅシ、降參シテ幕下ニゾ屬シケル、

〔太閤記七〕秀吉四國退治之事

翌日〇天正十三年四月二十六日長曾我部新右衛門尉が居城和氣の城を、秀次の先勢遠卷におけるが、後はおしつめ幾重共なく打圍み梯櫓を上、鐵砲にて射すくめ、既に攻入むとひしめきあへる處に、戈を橫たへ甲を脫で請一命之間、卽城を請取、新右衛門尉をば人質を渡し送りつかはしけり、

〔日本書紀七景行〕十二年七月熊襲反之不朝貢、八月己酉、幸筑紫、九月戊辰、到周芳娑麼、時天皇南望之詔群卿曰、於南方烟氣多起、必賊將在、則留之、先遣多臣祖武諸木、國前臣祖菟名手、物部君祖夏花、令察其狀、爰有女人、曰神夏磯媛、其徒衆甚多、一國之魁帥也、聆天皇之使者至、則拔磯津山賢木、以上枝挂八握劒、中枝挂八咫鏡、下枝挂八尺瓊、亦素幡樹于船舳、參向而啓之曰、願無下兵、我之屬類必不有違者、今將歸德矣、

納名簿而降

○按ズルニ、神功皇后ノ時、新羅王ノ素旆ヲ樹テヽ降リシ事ハ乞降條ニ在リ、

〔日本書紀十九欽明〕二十三年七月、是月遣大將軍紀男麻呂宿禰將兵出哆唎、副將河邊臣瓊缶出居曾山、而欲問新羅攻任那之狀、○中略河邊臣瓊缶、獨進轉鬪、所向皆拔、新羅更擧白旗、投兵降首、河邊臣瓊缶、元不曉兵、對擧白旗、空示獨進、新羅闘將曰、將軍河邊臣今欲降矣、乃進軍逆戰、盡鋭遄攻破之、前鋒所傷甚衆、

〔今昔物語二十五〕源頼信朝臣責平忠恒語第九

今昔河内守源頼信朝臣ト云者有リ、○中略頼信常陸守ニ成テ、其國ニ下リ有ケル間、下總國ニ平忠恒ト云兵有ケリ、私ノ勢力極テ大キニシテ、上總下總ヲ皆我マヽニ進退シテ、公事ヲモ事ニモ不爲リケリ、亦常陸守ノ仰スル事ヲモ、事ニ觸テ忽諸ニシケリ、守大キニ此レヲ咎メテ、下總ニ超テ忠恒ヲ責メムト早ルヲ、其國ニ左衛門大夫平惟基ト云者有リ、此ノ事ヲ聞テ守ニ云ク、彼ノ忠恒ハ勢有ル者也、亦其ノ栖輙ク人ノ可寄キ所ニ非ズ、然レバ少々ニテハ世ニ被責不侍ラ、軍ヲ多ク儲テコソ超サセ給ハメ、守此レヲ聞テ然リト云ドモ、此テハ否不有マジト云テ、只出立ニ出立テ下總ヘ超ルニ、惟基三千騎軍ヲ調ヘテ、鹿島ノ御社ノ前ニ出來會タリ、○中略忠恒ハ海ヲ廻テゾ寄來テ責メ給ハム、船ハ取隱シタレバ否渡リ不給ト、此ノ淺キ道ハタ否不被知、我ノミコソ知タレ、廻ラム程ニ日來經バ、逃ナムニハ否責メ不給ハラムト、靜ニ思テ、軍調ヘ居タル程ニ、家ノ廻ニ有ル郎等走ラセ來テ告テ云ク、常陸殿ハ此ノ海ノ中ニ淺キ道ノ有ケルヨリ、若干ノ軍ヲ引具シテ既ニ渡リ御スルハ、何ガセサセ給ハムト爲ルト、横ナハリタル音以テ周章云ケレバ、忠恒兼テノ支度大キニ違ウテ、我レハ被責ヌルニコソ有ナレ、今ハ術无シ術无シ、進テムト云テ、忽ニ名符ヲ書テ、文差ニ差テ、怠狀ヲ具シテ、郎等ヲ以テ小船ニ乘セテ、向テ寄セタリケレバ、守此レヲ見テ、名符ヲ令取テ云ク、此許名符ニ怠狀ヲ副テ奉レルハ、既ニ□□シニタル也、其レヲ强ニ責メ可罰キ

ニ非ズト、速ニ此レヲ取テ可返キ也ト云テ、馬ヲ取テ返シケレバ、軍共モ皆返リニケリ、

有所約而降

〔三代實錄 三十四 陽成〕元慶二年十月十二日甲戌、出羽國司飛驛奏言、秋田營中牒俘、〇中略從去八月乞降之賊相續不絕、野心難量、抑而不許、今春風自入賊地、取其降書、亦其首豪隨而共來、以此見之知有降心、〇下略

〔花營三代記〕應安二年正月二日、楠木左兵衞督〇正儀依可參御方之由申之、被成御敎書畢、

〔豐鑑 二 吹上濱〕其春〇天正十三年四國へ美濃守秀長を大將として、蜂須賀彥右衞門、黑田官兵衞、小早川高景、其外軍兵渡給ふ、土佐國主長曾我部、土佐國計給はり、長く秀吉のずさとなりなんと佗ければゆるし給ひぬ、その外國侍のすこしき者どもをば知所取はなして、阿波國をば蜂須賀、讃岐を仙石越前、伊豫は福島左衞門大夫、戶田民部などにあたへ給ひけり、〇又見三十河物語

殺將而降

〔日本書紀 三 神武〕戊午年十二月丙申、皇師遂擊長髓彥、〇中略饒速日命、本知天神慇懃、唯天孫是與、且見夫長髓彥稟性愎很、不可敎以天人之際、乃殺之、帥其衆而歸順焉、

〔吾妻鏡 九〕文治五年九月三日庚申、泰衡被圍數千兵、爲遁一旦命害、隱如鼠、退似鶂、差夷狄島、赴糟部郡、此間相恃數代郞從河田次郞、到于肥內郡贄柵之處、河田忽變年來之舊好、令郞從等相圍泰衡梟首、爲獻此頸於二品、揚鞭參向云云、　六日癸亥、河田次郞持主人泰衡之頸、參陣岡、令景時奉之、以義盛重忠、被加實撿上、召囚人赤田次郞、被見之處、泰衡頸之條、申無異儀之由、仍被預此頸於義盛、亦以景時被仰含河田云、汝之所爲、一旦雖似有功、獲泰衡之條、自元在掌中上者、非可假他武略、忽忘譜第恩、梟主人首、科已招八虐之間、依難抽賞、爲令懲後輩、所賜身暇也者、則預朝光、被行斬罪云云、

〔重編應仁記 十三〕洛陽法華亂事附細川晴國生害事

三宅出羽守國村ハ本願寺上人〇證如ト一味シ、故細川常桓禪門高國ノ弟細川八郞晴國ヲ取立、大坂ノ城ヘ招待シ、大將ト仰ギケルガ、是モ中島ノ合戰ニ打負タリシヲ、同〇天文五年八月廿九日ノ夜

岡村棠内ジテ、堺ノ津へ落行處ニ、天王寺ノ邊ヲ過ケル時、岡村何トカ思ケン、俄ニ心替シテ、却而晴岡ヲ害シ、首ヲ取テ是ヲ忠節ノ土産物ニ謂立テ、晴元、〇細川ヘ降參シヌ、

〔筑紫軍記二〕攻討小原鑑元秋月久種事

寄手ノ諸將會合シテ、此城力責ニセバ兵多損ズベシ、計謀ニシクハナシ、然ルニ長門守ガ陪臣小野四郎左衛門ト云者、元來邪慾不道ノ旨聞及ブ處ニ、四郎左衛門寵愛セシ妾ノ兄弟某ガ近習ノ名ノ内ニ有之、宜キ内緣ニ候ヘバ、何トゾ計セテ見候ハンヤト、鑑實〇一萬田申サレケレバ、各一同ニ是ハ幸ヒナル方便ナルベシ、内緣ノ從士ニ竊ニ仰付ラレ候ベシトテ、陣所へ歸ラレ、其ヨリ面々ノ責口ヲ些退ケテ、遠責ニコソセラレケル、斯テ内緣ノ者ヲ以テ、此度一味セラルヽニ於テハ、古所城主タラシメント、誠シヤカニ計ケル、四郎左衛門如何ハシタリケン、主君久種〇秋月ヲ弑シテ首ヲ持參シ降伏ス、

〔關八州古戰錄十〕里見上總入道父子始末事

上總入道〇里見實堯谷山マデ念ナク落延シガ、石原怨心ヲ變ジ、押テ生害ヲ勸メ、證ヲ拘テ敵陣ヘ降シケレバ、惜マヌ者コソナカリケレ、

〔毛利元就記〕毛利輝元一門、其外數國ヲ引率シ、備中ノ國ヘ罷出、夫ヨリ上月ノ城ヲ取卷、備前宇喜多輝元ヘ一味ニテ馳走申ス、羽柴筑前守殿、何ト御見切候哉覽、無レ程御引退ナサレ候ヘバ、鹿〇山中鹿之助不相叶、助四郎勝久〇尼子晴久孫子首ヲ打、輝元ヘ捧ゲ、則降參ス、隆景才覺ニテ、毛利家人ニ召伏ス、備中ノ國ヘ呼越、河部ト云處ニテ、天野隆重ニ仰付ラレ打果玉、隆重内、河村新左衛門ヲ打手ニ仰付ラレ無レ相違打果者也、

〔別所長治記〕神吉ノ城攻

櫓上ノ合戰半也ケル處ニ、城主民部ガ同名家ノ子神吉藤大夫、一命ヲ助給バ、民部ヲ討テ味方ニ

執主而降

參ベシト云ケレバ、信忠卿子細アルマジト宜フ、何トカタバカリケン、手モナク民部ガ首ヲ持信忠卿ヘ奉ル、爲藤大夫ガ民部ハ甥也、一家ノ總領ナリ、前代未聞ノ事也、

〔信長公記十四〕天正九年十月、今度因幡國とつ島一郡之男女、悉城中へ逃入楯籠候、略○中兎に角に命程強面物なし、然共依義失命習大切也、城中より降參之申様、吉川式部少輔、森下道祐、日本介、三大將之頸を取可進之候間、殘黨扶被出候樣にと侘言申候間、此旨信長公へ伺被申處無御別義之間、則羽柴筑前守秀吉同心之旨城中へ返事候之處、不移時日腹をきらせ、三大將之頸持來候、

〔相州兵亂記四〕上杉敗北幷龍若最期之事

天文十五年、略○中上州白井ニ憲政ノ一男龍若丸ヲ留メ玉ヒテ、上杉ノ侍少々殘リケル、其中ニ龍若殿乳母ノ夫、目方新介ト云モノ、其弟同長三郎、九里采女正ナド云侍、憲政重恩ノ者ドモナレバ、貳ハ非ジト深ク被憑ケルニ、憲政ハ越後へ行玉ヒ、景虎ハ未來、若小田原ヨリ責メバ難叶ト思ヒケレバ、寄合評定シケルハ、果報盡果玉ヒシ人ヲ頼テ生涯ヲ失ハンヨリ、此人ヲ氏康へ出シ、貳ナキ處ヲ顯シ、所領一所ヲモ安堵セバヤト談合有テ、則此者ドモ氏康へ降參シ、主人龍若ヲ敵方ヘ出シケルコソ轉手ケレ、

將士而降

〔應永記〕自南方細川赤松以下手痛ク戰間、略○中新介內○大ガ堅メケル東ノ陣ハ、自元難所ニテ無左右不破、一色、今川兩手ニ合テ戰フ、略○中新介ガ手勢五百餘騎、一色、今川、杉生圖明ガ手ニ合テ一所ニテ討モアリ、被討モアリ、殘勢二百餘騎ニテ、此上ハ合戰シテモ何カセジトテ、新介ヲ始トシテ、相從者三百餘騎、吾モ〳〵ト腹切ントシケルニ、平井新介ガ刀ヲ押ヘテ申ケルハ、入道殿御討死ノ上ハ、順義ノ合戰ナラバ不申及、是ハ朝敵ノ事也、何カハ可被苦、內々上意ヲ伺申、可有御降參ト申ケレバ、新介非本意思ヒ、今此際ニ成テ軍難義ニ成ヌレバトテ、降參セント云事ハ、且ツハ我家ノ瑕、且ハ弓矢取ノ耻也トテ、討死セントシケルヲ、平井頻ニ宥メツヽ、冑ヲ脫ガセ降參ジケレバ、

勸夫而降

相從ケル者迄モ同ク降人ニゾ參ケル、

〔陰德太平記 四十〕牛尾豐前守降參之事

牛尾豐前守ハ弱年也シ時、美妻世ニ類無リケル故、尼子晴久寵愛甚シカリケリ、サル故千萬人ガ敵ニ黜スレ共、吾一人ハ當家ヲ背ジト思入テ居タリシガ、忽敵ニ降ケル事ハ是妻故也トゾ聞エシ、彼牛尾ガ室女ハ安藝ノ武田元繁ノ孫ニシテ、伴五郎ガ息女也、〇中略此女熟ト思ケルハ、此テハ尼子家滅亡シテ、豐前守、大藏左衞門モ敵ノ爲ニ討レヌベシ、不如元就ヘ降參ヲ乞、夫ノ一命ヲ助ケ、今宗領遠江守ガ所領ノ牛尾七百貫勸賞ニ申賜ラン、然バ牛尾ノ家不斷絕シテ、吾子ノ大藏左衞門ハ立身スベシ、サリトテ今豐前守ハ是非ニ付テ、義久ノ先途ヲ見屆可申覺悟ナレバ、カクト云共ヨモ同心セラレジ、先吉川ノ元春ニ附テ降參ノ約ヲナシ、元就父子ノ判物ヲ執テ後コソ、夫ノ豐前ニハ云ベキナレト、吾賢等ニ思惟シテ、密ニ洗合ヘ使ヲ遣、宗領ノ遠江守ガ采地牛尾七百貫ヲ賜リ候ハヾ、夫ノ豐前守御味方ニ參候ハン樣ニ諫可申候、於御領掌ハ御判物ヲ賜候ベシト云送リケレバ、元就、豐前守降參セバ、彼一門ハ悉味方ニ可屬ゾトテ、父子三人ノ判物ヲゾ被出ケル、彼女是ヲ懷ニシテ夫ニ向、ナウ如何ニ聞給ヘ、尼子ノ微運ニ引テ、牛尾ノ家ヲ亡シ給ハン事ハ、氏諏訪大明神ノ照覽モ如何オハシマサン、先一旦毛利家ヘ降參シテ、牛尾七百貫ヲ領シ、當家相續ノ謀ヲ被運候ヘト云ケレバ、豐前守是ヲ聞テ女ノ無詮諫哉、吾ハ他ニ替リ思子細ノアレバ、義久ノ御身ノ浮沈ヲ見屆可申也、重テカヽル事不可申ト云ケル所ニ、彼女判物ヲ取出シ、是々見給ヘ、吾女ノ身ニテ候ヘ共、御身ノ命ヲ失ハン事ノ悲シサニ角迄計ヒ、其上牛尾七百貫ノ主ニナシ申候ゾヤ、元就カク判物ヲサヘ被出タルニ、若御同心無バ、御身ハ不及云、六親眷族ニ至ル迄可被行罪科候ゾ、年老タル母上ノ辛キ目見給ハンヲバ、痛シトハ不思召ヤ、侍ハ渡物ニテ候ゾ、先一旦毛利家ヘ降參セサセ給ヘ、カヽル例モ古今多キ習ニテ候ゾヤト、或ハ怒リ或ハ淚ヲ流テ云ケレ

身死所活將士

バ、サシモニ心無リシ豐前守モ、終ニ此儀ニ同ジ、或夜城中ヲ忍出ニケリ、

〔太閤記 二〕因幡國鳥取落城之事

吉川式部少輔、森下出羽入道道與、中村對馬守相議しけるは、此急難を免るべきやうもなし、毛利家より救ひ給はんと有し事共も、度々僞に成來て、今は涸魚の身とせまれり、我々三人上下の輜且々有と云共、罪もなき諸人を餓莩に及ばせ侍る事、極て不仁也、所詮秀吉卿へ降參し、我々諸人の命に代て、多くの人々を助んと思ふなりと、堅く評諚して、福光小三郎を以申けるは、源暑の比より、當地御對陣有つるに、珍らしき斷にも及ず、箕裘之業空に似たり、然ば今某共籠鳥の身と成て、雲を戀るに便なし、諸人の餓莩不便なる事、とかう申に及ばれず、然間某等可レ致二切腹一之條、籠城の者共悉く助け被レ下候やうに、淺野彌兵衛尉殿を以、申上候へと也、即福光參て右之趣申ければ、淺野も哀とや思ひけん、涙を推へ御前に參じ、かくと申上けるに、秀吉も感じ給ひて、諸人の命にかはらんと請所、是誠に死すべき節を知、死を輕んずる義士也と、即應二其望一、老たる彼三人が父母幷妻子勿論、雜人原の事は云にも及ず、悉く可二相助一之由、被二仰渡一しかば、福光立歸り御望之儀相叶ひ、悉く可レ被二相助一との事にて候と申ければ、寔に某等及二仁死一、諸人の命を助るのみならず、父母妻子まで相助る事、歎きの中の悦び也、さらば明後日に可二相究一ぞ、其用意をせよと云しかば、福光奉、淺野彌兵衛殿へ參、明後日廿五日可レ致二切腹一に極め申候、即三人以二書翰一申上候、〇中略 廿五日の早朝に、淺野殿へ可レ致二切腹一と撿使を乞ければ、則堀尾茂助後帶刀吉晴可レ參旨なり、堀尾も還使と打つれ參りけり、三人の者共より、撿使へ使者を以て申上けるは、頓て渡し可レ申城をば、けがし申まじく候、寺にて可レ致二切腹一之條、直に寺へ御座候へと有しかば、堀尾も即寺へ參りける處に、三人の衆はや寺に在て、今度の望相叶、多くの者共を助け申事、身の喜不レ可レ過レ之、彌可レ然樣に堀尾殿を賴入旨、思度計なげに云捨、三人一度に聲を上、腹十文字に搔切て、朝の露と成にけり、

誘降

〔奥羽永慶軍記三十二〕谷地合戰下治右衛門降最上事

谷地伯耆守米澤表參陣ニ依テ、居城ニハ同苗大學、金山伊豆守三百人ヲ籠置ケルガ、○中略大勢ニ圍マレ、所々ノ持口ヲ押破ラレ、殘少ナニ討レテ、大學、伊豆モ數ケ所ノ手負ヌレバ、敵陣ニ使シテ、今ハ此城持ガタク候、城中ノ女童老人以下ノ者共ヲ御助ケ、寒河江ニ退カセ給ヒ候ヘ、然バ自害シテ城ヲ渡シ候ハントイフ、治右衛門聞テ、女童ニ限ルベカラズ、城ヲサヘ渡サレバ、御邊等モ殘ナク寒河江ヘ遁レ候ラヘト返答シテ、陣ヲヒラキ通シケリ、サレドモ谷地大學、金山伊豆、荒川虫笠、貝津彼是十七騎ハ、此城ヲ敵ニ奪ハレ、何ノ面目有テ命ヲ助リナントテ、女童計ヲ出シ、城内ノ掃除シ、見苦敷物ヲバ、或ハ溜リヘ持出シ燒捨テ門外ニ出、皆腹切テゾ死ニケル、

〔太平記三十八〕畠山兄弟修禪寺城楯籠事附遊佐入道事

筑紫ニハ宮方蜂起ストイヘドモ、東國ハ無程靜リヌ、去年ヨリ畠山入道道誓、舍弟尾張守義深伊豆ノ修禪寺ニ楯籠テ、東八箇國ノ勢ト戰ケルガ、兵粮盡テ落方モ無リケレバ、皆城中ニテ討死セントス、左馬頭殿基氏○足利ヨリ使者ヲ以テ、先非ヲ悔テ子孫ヲ思ハヾ、頸ヲ延テ可降參由被仰ケルヲ、誠ゾト信ジテ、道誓ハ禪僧ニナリ、舍弟尾張守ハ伊豆國ノ守護職還補ノ御教書ヲ給テ、九月○康安二年二十日降參シタリケルガ、道誓ハ伊豆ノ府ニ居テ、先舍弟尾張守ヲ鎌倉左馬頭ノ御座スル箱根ノ陣ヘゾ參ラセケル、○中略角テ三四日經テ後、九月十八日ノ夜、稻生平次潜ニ來テ道誓ニ囁キケルハ、降參御免ノ事ハ、元來被出拔事ニ候ヘバ、明日討手ヲ可被向ニテ候ナル、ゲニモ聞ニ合セテ、豐島因幡守俄ニ陣ヲ取易テ、道ヲ差塞グ體ニ見エテ候、今夜急ギ何クヘモ落サセ給ベシトゾ告タリケル、道誓聞モ不敢、舍弟式部大輔ニ乾ト目加セシケルガ、假初ニ出ル由ニテ、中間一人ニ太刀持セ、兄弟二人徒ニテ其夜先ヅ藤澤ノ道場マデゾ落タリケル、

〔奥羽永慶軍記二十三〕九戸落城事

氏鄕南部ニ向テ、城中ヘ遣ハスベキ者ヤアルト問レケレバ、南部聞テ政實ガ舍弟中野修理ト申スモノ、某ヲ頼ミテ居候、是ヲ出シ候ヲハンカ、又爰ニ長光寺トイフ會下僧ノ候フ、是ハ政實ガ歸依僧ニテ候、此兩人ノ內一人仰付ラレ然ルベシト申セバ、長政申ケルハ、中野修理ハ兄弟ナレドモ敵味方ト隔タレバ、政實心ユルシ有ベカラズ、長光寺コソ然ルベカラメ、左アラバ彼僧ヲ招カレ候得トイフニ、南部心得候迚、頓テ人ヲ遣ハシ呼ニケリ、長光寺何事ヤラント、取物モ取アヘズ來リケル、氏鄕長政對面シ給ヒテ、和僧存ジノ如ク、政實今度ノ働諸軍ノ耳目ヲ驚ス所ナリ、去ナガラ戰ニ依テ衆人愁ヲ懷ク條、甚無益ノ所ナリ、其上天下ヲ敵ニ引受、イカニ防ギ戰フトモ豈本望ヲ達センヤ、終ニ城ヲ攻落サレ、九戶ガ子孫永ク此時ニ絕ベシ、是ヲ思ハヾ速カニ降參シ、急ギ上洛ヲ遂、前非ヲ悔ナバ殿下ニモナドカ聞召入ザルベキ、其上我々モ能樣ニ申ベシ、此旨和僧城中ニ入テ、政實ニ申サレヨ、政實若シ異議ニ及ナバ、急ギ城ヲ攻落スベシトテ各狀ヲ認メ、彼僧ニ渡サレケル、僧是ヲ聞テ政實イカヤウニイハレンモイザ知ラズ候得ドモ、一先仰ノ旨ヲ申テ見候ラントテ狀ヲ請取テ、急ギ城中ニゾ行ケル、〇中略

政實此狀ヲ見テ、櫛川河內守、七戶彥三郎、久慈備前守、大里修理、坂本、江刺、工藤、島森等ニ向テ、抑我今度ノ戰ハ天下ニ向テ、逆心ヲ企ルニ非ズ、信直ニ野心有ガ故ニ、不慮ニ起リタル事ニテコソ候ヘ、其上長政イヒ送ラルヽ如ク、我一人ノ心ヲ以テ萬人ヲ惱ス事モ不便ナリ、兎ニ角我ニ一人ハ思ヒ定シ事ナレバ、死スル命露塵トモ思ハザレドモ、稚キ者共ヲモ助ケ、萬人ノ愁ヲ止メント思フハ、如何トイヒケレバ、舍弟隼人正進出テ、御諚尤ニハ候ヘドモ、上方ノ軍慮ニ、強キ敵ヲバ、弓矢ヲ止テ謀テ討トコソ傳承候ヘ、近クハ去年相州ノ北條左樣ノ謀ヲ實トシテ城ヲ渡シ、首ヲ刎ラレ候フナリ、但此度ハ長政計ニテ無之實ナル事モ候フベシ、タトヘ實ニ候ラフ共、南部ノ敵イカデカユルシ候ラフベキ、所詮武士ノ死スベキ所ニテ死セズバ、必不覺ヲ取ト古ヨリイヒ傳

招降

ヘテ候ラヘバ、且幾度モ命限リニ戰ヒ、戸ヲ九戸ニサラサレ候ラヘ、名ヲ後代ニ殘スベシトゾ申ケル、一座ノ諸將是ヲ聞、皆々是ニ同ジツヽ、降參ノ事ハ思ヒモヨラズト評定一決シタリケル、其時長光寺イヒケルハ、隼人正ノ申サルヽ所、一理有トイヘドモ、流石淺野程ノ侍ガ出家ニ逢テ僞ハシ給フマジ、僞ナキニ於テハ御邊一人ノ思案ヲ以テ、大勢ヲ亡シ給ハン事コソ淺間シケレ、又一旦敵ニ降リ身命ヲ全シテ、子孫ノ後榮ヲ殘ス事ハ、父祖ノタメ孝行トモ成ベシ、ヒラニ怨害ノ心ヲヤメテ、御請申サレ候ヘト、理ヲ盡シテゾ申ケル、政實重テ申ケルハ、信直野心ナキニ於テハ、數多ノ眷屬ヲ助ケン事、何ノ子細カ有ベキ、今一度敵陣ニ行テ、此義ヲ能々聞給ヘトイヒケレバ、長光寺再ビ寄手ノ陣ニ行、長政ニ對面シ、仰ノ通九戸ニ申テ候ラヘバ、皆悉タ其義ニ伏シテ候フ、去ナガラ南部ハ日比ノ敵ニテ候ラヘバ、後日ニ討果サントセラルベキカ、其義サヘ無之バ、降參ノ義子細アラジト申セバ、長政聞テ此義尤也、サラバ信直ヲ呼、和備ニ引合セ候ハント、使ヲ遣シテ招ヨセ、此事ヲ申サレケリ、信直モカネテ示シ合セシ事ナレバ、少シモ異義ニ及バズ、長光寺是ヲ開テ、此上ハ子細アラジト思ヒツヽ、城中ニ入テ具申申セバ、政實則降人ト成テ出ニケリ、

〔陸奥話記〕貞任等益横行諸郡、劫略人民、〇中略將軍〇源頼義不能制之、而常以甘言說出羽山北俘囚主清原眞人光頼舍弟武則等、令與力官軍、光頼等猶豫未決、將軍常贈以奇珍、光頼武則等、漸以許諾、康平五年春、〇中略頼義朝臣、頻求兵於光頼幷舍弟武則等、於是武則以同年秋七月、率子弟萬餘人兵越來於陸奥國、將軍大喜、率三千餘人、以七月二十六日發國、八月九日到栗原郡營崗、〇註略武則眞人先軍此處邂逅相遇、互陳心懷、各共拭淚、悲喜交至、

〔吾妻鏡 一〕治承四年九月三日壬子、景親〇大庭作爲源家譜代御家人、今度於所々奉射之次第、一旦匪守平氏命、造意企、已似有別儀、但令一味彼凶徒之輩者、武藏相模住人計也、其内猶三浦中村者、今在御共、然者景親謀計、有何事哉之由、有其沙汰、仍被遣御書於小山四郎朝政、下河邊庄司行平、豐島權

守清元、葛西三郎清重等、是各相語有志之輩、可參向之由也、就中清重於源家抽貞節者也、而其居所在江戸河越等中間、進退難治定歟、早經海路可參會之旨有慇懃之仰云云、

〔松平記二〕一方々の合戰に、味方打勝といへども、三州所々一揆の起り、御一家衆もあまた逆心し、味方つかれ果けり、此時多勢にて甲駿の敵押來ば御大事なりと、大久保一黨謀を廻し、一揆どもをはかり、和談の才覺有、一揆共も三ヶ寺を大切に存迄にて、さすがに國郡をとらんとの義にもあらず、度々の合戰に打負、大かた退屈しける時分、大久保五郎右衞門方より、色々いさめ異見に及間、蜂屋半之丞降人に成て、御免を蒙ふりしかば、〇下略

〔陰德太平記四十七〕熊野降參井高瀨城巡見之事

熊野兵庫助ハ先年富田城沒落ノ時、毛利家へ一味シタリシガ、勝久國入ノ比、舊好難忘思ヒ、再度尼子家君臣ノ盟ヲ結ビケリ、然ニ井上肥前守ハ熊野ト斷金ノ友也ケレバ、竊ニ書ヲ送テ曰、再回毛利家へ降禮ヲ執ラレヨ、本領ハ無相違可申與也、行末トテモ無賴勝久ニ從居ラレン事ハ、異ニ士牛ノ氷ヲ渡例甚以愚昧ナリ、侍ハ渡り者ナレバ何ノ憚ル事カ有ン、早ク降參シテ妻子眷族ノ心ヲ安穩ナラシメラレヨト、或ハ宥メ或ハ恐テ再三諫メタリシカバ、熊野實モトヤ思ケン、聽テ熊野ノ城ヲ明テ降旗ヲゾ樹タリケル、

〔陰德太平記二十四〕野間隆實降參之事

諸軍息ヲモ不繼本丸ヲ乘取ントセシ所ニ、隆實ハ熊谷伊豆守信直ガ婿也ケレバ、信直ヨリ元就へ隆實ガ一命助賜リ候ハヾ、降人ニ罷出候樣ニ申シ扱候ナンズ、某日來ノ忠功ニ對シテ、御宥免ヲ蒙リ候ハヾヤト、頻リニ申斷リケルニ由テ、トモカウモ信直計ハレ候ヘト宣ケル間、即時城中へ云送リケレバ、隆實不堪喜悅ヲ脫テ降參ノ旛ヲゾ被樹ケル、

〔武將感狀記五〕一信長美濃ヲ取テ、其勇强智謀ノ名アル者ヲ扶持セラル、美濃先鋒衆ト云、ソノ中

ニ稻葉氏江安藤ヲ勝レタリトス、稻葉ハ又ソノ最一ト稱セリ、信長紀伊ノ雜賀孫一郎、同若左衞門兄弟ニ說テ降ラシメントス、使ヲヤルニ使歸ラズ、其殺サルヽヤ留ラルヽヤノ間イマダ分明ナラズ、信長カサネテ稻葉伊豫守ニ命ズ、稻葉スナハチ彼地ニ往テ、孫一郎、若左衞門ハ信長ニクダリ、尾張ニ來テ幕下ニ屬ノ禮ヲナス、此時信長孫一郎ニ問テ曰、ハジメノ使イカン、孫一郎ガ曰、臣コレヲ殺ス、信長ノ曰、何ガユヘニコレヲ殺ヤ、孫一郎ガ曰、ソノ人騎步多クヒキツレ、兼テ案內ヲモ通ゼズ、馬ニ乘ナガラ俄ニ城門ヲ叩キ、信長ノ使ト稱シテ言詞色驕レリ、謀テ臣ヲ擒殺セントスル者ナリト思ヒ、本丸ト二丸ノ間ニ入トキ、門ヲ閉前後ヨリ取コメテ、コト〴〵ク討果シ候、信長ノ曰、シカラバ何ガ故ニ稻葉ヲ殺ザルヤ、孫一郎ガ曰、稻葉ハ其體ハジメノ使ト大ニ異ナリ、先五六里前ヨリ案內ヲ慇懃ニ云、信長ノ使トシテ來ル、臣櫓ニ上テコレヲ見レバ、馬鞍カザラズ、出立質素ニシテ、步士タヾ十人許ツレテ、城門ノ外ニテ馬ヨリ下タチ、人ヲ殘シ若黨二人、草履取一人具シ、威儀ヲ正シクシテ徐ニ步來ル、臣大ニコレヲ感ジ、自身門ヲヒラキ出迎ヘ、內ニ招入テ口牒ヲ聞ニ、義理明ニシテ而モ恭敬ナリ、股引ノハヅレヨリ見レバ、布ノ下帶ヲシタリ、是便チ身ヲ儉ニシテ財ヲ武事ニ用ル志ナルベシ、良士ノ風アルニ化セラレテ歸服スト、信長コレヲ聞テ且笑ヒ且嘆ジタマフ、

〔關八州古戰錄十二〕眞田安房守昌幸沼田近邊切捕事

北條氏直川中島ヨリ梶ケ原ヘ打出ラレシ砌、眞田安房守昌幸ヲ招テ、汝ハ佐久小縣二郡ヲ伐數、當家ヘ附屬ナサシムベシ、其勳功莫大ナラントテ居城上田ヘ戾サレケル故、急ギ馳歸テ近邊ノ城々ヘ手遣ヲナスノ處ニ、大神君〇德川家康古府中ヨリ新府ノ城ヘ移ラセ玉ヒ、渠ガ勝レテ剛强タルヲ聞召及バレ、大久保七郎右衞門忠世ニ拵テ見ヨトノ仰有シニ依テ、忠世蘆田ノ依田右衞門佐信蕃ニ談ジケルハ、貴客ハ最前ヨリ安房守ト舊友ノ義ナリ、當時北條家ニ屬スト云ヘ共、秘計

ヲ回シテ、味方ニ參ラシヌル一稜ノ忠節タラント云、信蕃聞テ大祿ヲ賜ハランノ命有ンニ於テハ、某行向テ諭シテ見ント申ケル故、忠世則大神君ノ聽ニ達ス、是ニ依テ大神君杉浦久藏ト云ヘル右筆ノ者ヲ召テ、御判物ヲ書サシメ、忠世ニ亘サシメラル、信蕃是ヲ持參シテ上田ヘ赴キ、何クレト賺シケルマヽ、昌幸應諾シテ御幕下ニ加ハリケルガ、氏直甲州陣拂ヒノ後、大神君モ濱松ヘ御歸坐ノ由ヲ聞テ、眞田使者ヲ以テ嫡子源三郎信幸、後ニ伊豆守ト申ケルヲ人質トシテ、差遣シケレバ、大神君事ノ外御喜悅有テ、源三郎ヲ本多平八郎忠勝ノ聟ニ仰付ラレ、濱松ニ留置レケリ、

〔陰德太平記七十三〕龍造寺政家降參事

輝元朝臣ハ元春ノ遺言ノ旨ニ任セ、隆景、元長相共ニ龍造寺政家ヘ使ヲ以、味方ニ被降候ハヾ、殿下〇豐臣秀吉ヘ能樣ニ吹擧シ、本國安堵ノ朱印可申與也ト云送リ給ヘバ、政家如何ナル便モ哉ト思フ時節ナレバ、聊ノ不及思惟即降人ニ成ニケリ、

〔常山紀談十五〕關ケ原の軍敗れしかば、長束大藏大輔正家、江州水口の城に引こもりしを、國淸公〇池田輝政船戶帶刀を使として、降參を勸めらる、船戶是は物なれたる人然るべしと辭し申けれども、汝とく行向へよと仰られしかば、船戶方三四寸許の小さき鐵の板を造らせ、ふところに入て、水口に行、長束に逢、降參あらば士卒も別の事候まじ、此旨よく申せと申なりといふに、長束阿濃津の城攻して、關ケ原にさせる軍もせで、口惜く候、さらば此城を枕にせんと、手の者ども存る處なり、然るに降參せんは恥辱にて候といへば、船戶長束がかたへの士を呼て、懷より鐵の板取出し、燒て給はり候へ、三左衞門尉が詞、今かく申所僞なき印に、鐵火をとりて見せ申さんとて思ひ切たる體げにもいつはりならざりしかば、長束感じて、たとへたばかられて、いかにならんも力なし、汝が志わざたぐひなきによりて、降參せんずるにて候、是は見苦しき物に候へどまゐらすとて、貞宗の脇指をあたへけり、船戶倚座を立ざりしかば、長束小性をよんで硯取出し、降參すべき

招降不從

よし書て船戸にあたへしかば、船戸歸りぬ、長束城を出ければ警固の兵を入られけり、

〔關八州古戰錄十八〕玉繩左衞門大夫氏勝降參事

大神君〇徳川家康本多中務大輔忠勝ヲ召テ、北條左衞門大夫〇氏勝ハ、父祖ヨリ關東ニ其名高ク小田原ノ氏族門楣ノ將タリ、嚮ニ山中城ノ加勢ニ籠リ、沒落シテ己ガ居城玉繩ニ蟄居スト聞及ベリ、彼ヲ謀テ味方ヘ歸降ナサシメバ、嚮導トシテ東國ノ枝城共ヲ攻靡ケンニ、手寄一段ト然ルベキカ、秘計ヲナスベシト仰ラレシニ付テ、忠勝陣屋ヘ歸リ、家人都築彌左衞門、松下三郎左衞門ニ此事ヲ眘議シ、氏勝ノ叔父了達和倘ト云ル禪僧、幸ニ兩士知人ニテ有シ程ニ、頓テ是ヲ拵テ玉繩ヘ遣ハシ、一往論シケレ共、左衞門大夫允容セズ、サラバトテ都築、松下相副テ再三ニ及ビ、玉繩ヘ赴キ、身上ニ於テハ家康公肯ヒ給フノ間、理ヲ枉テ降參アラルベシト詞ヲ盡シ諫シケレバ、氏勝終ニ同心シテ人質ヲ獻ジ、四月〇天正十八年廿一日、剃髮染衣ノ姿ニテ大神君ノ御陣所ヘ來リ、忠勝及ビ井伊、榊原ニ面會シテ、關東表城攻ノ先鋒ニ列スベキノ旨約諾ヲ申述タリ、

〔源平盛衰記三十五〕粟津合戰事

兵ノ中ニ家包甲ヲ脫、太刀ヲ納テ降人ニ參レ助ン、木曾殿モ今ハ主從三騎也、和君一人命ヲ弃タリ共、木曾殿軍ニ勝給フベキヤ、唯降人ニ參レ、無由々々ト云ケレバ、家包申ケルハ、弓矢取身ハ主ハ二人不持、軍ノ習討死ハ期スル處也、命惜降人ニ成テ、角云フ人々ニ面ヲ合スベシヤ、正ナシ正ナシ、敎訓モ事ニヨルベシ、其ヨリモ只寄合組デ討取給ヘヤ殿原トテ、斬廻リケレドモ、大勢禰ヲ傾テ押寄終ニ生捕ニケリ、

〔關八州古戰錄十三〕由良國繁長尾顯長抱留小田原事

桐生表ハ神梅ノ地侍百五十騎、雜兵五百人ニテ廣澤寄居ニ出張シ、敵寄來ラバ一軍シテ、手ナミノ程ヲモ見スベシト、諸勢心ヲ一ニシテ、今ヤ今ヤト侍居タリ、此折節武州忍ノ城主成田左馬介

氏長ノ舍弟左衛門次郎秦喬ヨリ、橋本加右衛門ト云被官ヲ使トシ、兩將擒ニセラル上ハ、一族宿老以下南方へ降參アラレ然ルベシト、多年金山館林へ疎意ナク申通ゼシ義ナレバ、吾レ傳扱ヲ入ベシトテ云送リケレドモ、母堂ヲ始家人等同心ノ機ナクシテ打過ル內、成田ハ南方ノ促ニ依テ、先陣ノ嚮導トシテ押向フトゾ聞エケル

〔家忠日記追加九〕天正十二年六月十二〇二一本作レ三日、九鬼〇嘉隆瀧川〇一益及前田父子使を大野の城に發して、山口長次郎重政に謂て云、前田父子、信雄及佐久間正勝に比年恨を含む事有、是に依て一益嘉隆に與して、志を秀吉に通ず、汝が母質として蟹江の城に有、一益嘉隆等と志を同して秀吉に屬し、軍忠を盡さば、母の命は全して、賞祿は萬人に勝るべし、重政聞て叩頭して云、我少年より正勝に仕へテ、恩を受る事既に年有、今何の恨有て野心を企んや、我正勝に二心なきを以て、母を蟹江の城に留て質とす、汝等賞祿を貪て主の恩を忘れ、秀吉に屬して我母を掠奪ん事、我正勝に叛す、其忠義を守に於ては、縱ひ母を生害すと云とも、敢て怨ず、我城を守り拒て義死を遂、正勝が恩を報せんと欲るの由を返答す、九鬼瀧川是を惡て、兵を發して大野の城を攻む、

〔關原始末記上〕十二日十三日〇慶長五年七月の頃より伏見の城をせめむとて、大坂より勢を上せ、伏見の近邊に陣をとる、伏見の御留守鳥居彥右衛門、松平主殿頭、內藤彌次右衛門等相談し、籠城の用意懈らず、本丸をば彥右衛門、大手の曲輪をば主殿頭、西の丸をば彌次右衛門固めたり、〇中略十四日の午の剋より筑前中納言秀秋、備前中納言秀家、島津兵庫頭、增田右衛門尉、長束大藏、並に毛利の家人等數万の勢を率て、伏見の城を取卷遠攻にせらる、十七日增田右衛門尉方より、彥右衛門方へ使者を遣し、城を渡し關東へ下向においては、寄手より構ひ有べからずと申ければ、彥右衛門同心せず、重て加樣の事申越さるゝに於ては、其使者の首を刎べしと返事しけり、

〔奧羽永慶軍記三十一〕最上畑屋落城事

受降處分

會津勢畑屋ガ館ヘ使ヲ以イヒケルハ、御邊縦ノ要害ニ籠城シテ、大軍ヲ防ガン心ザシ、天晴穎モシクコソ侍レ、去ナガラ迚モ叶ハヌ者共ニ、討死センヨリハ、旗ヲ卷鉾ヲ逆シマニシテ降參セバ、今度ノ味方ニ加ヘ、恩賞宜シク申與ヘン條、早々城ヲヒラキ渡サレヨト言送リケル、五兵衛尉〔江〕口是ヲ聞テ、使者ニ向テカラ〳〵ト打笑ヒ、我數年義光ノ恩ヲ荷ヒ、此城ニ籠リシ事、カヽル時ノタメゾカシ、敵大勢ナレバ迚、降人ニ出城ヲ渡ス法ヤアルホシクバ軍シテ請取給ヘ、北國邊ノ武士ハイザ知ラズ、最上ノ者ハ一人籠テモ、軍セズシテ城ヲ渡スヤウハナキゾト返答ス、

〔當流軍法功者書下〕降人之事

降人ハ慈悲心フカキ人ニアヅケ置、イカニモ懇ニスベシ、アラクスレバ重テ降人出ザル物ナリ、尤如何程忠アル者ナリトモ、降人ニ出タル者ヲバ、必大將ノ御ソバ近ク召寄ラルベカラズ、

〔太平記六〕赤坂合戰事附人見本間拔懸事

城中〇赤坂城中ニ籠ル所ノ兵二百八十二人、明日死ナンズル命ヲモ不知、水ニ渇セル難堪サニ、皆降人ニ成テゾ出タリケル、長崎九郎左衛門尉是ヲ請取テ、先降人ノ法ナレバトテ、物具、太刀、刀ヲ奪取リ、高手小手ニ禁テ、六波羅ヘゾ渡シケル、降人ノ體如此ナラバ、只討死スベカリケル者ヲト後悔スレ共無甲斐、日ヲ經テ京都ニ著シカバ、六波羅ニ誡置テ、合戰ノ事始ナレバ軍神ニ祭テ、人ニ見ゴリサセヨトテ、六條河原ニ引出シ、一人モ不殘首ヲ刎テ被懸ケリ、

〔太平記十四〕將軍入洛事附親光討死事

大友ト太田〇結城太田判官親光ト楊梅東洞院ニテ行合タリ、大友ハ元來少シ思慮ナキ者也ケレバ、結城ニ向テ御降參ノ由ヲ申サレ候ツルニ依テ、某ヲ使者ニテ、事ノ由ヲ能々尋ネヨト仰セラルヽニテ候、何樣降人ノ法ニテ候ヘバ、御物具ヲ解セ給ヒ候ベシト、アラヽカニ言ヲゾ懸タリケル、

〔陰德太平記二十八〕陶全薑最後之事

粟屋三河守、扨御邊ナドハ何レノ手ノ衆ニテ候ゾト尋ケレバ、サン候、某甲ハ陶ガ家人手塚ノ何ガシト名乘、某ハ豐前ノ長野ガ手ノ者、筑前ノ宗像ガ郎等ナド思々名乘ケリ、粟屋降參ノ人々ヲバ、命ハ助ケ申候ヘトノ掟ニテ候程ニ、心易ク思ハレ候ヘ、乍去降人ノ法ニテ候、鎧脫太刀刀被渡候ヘト云ケレバ、畏リ候、萬事ハ賴存候トテ、皆乙々ト太刀刀差出シケリ、

〔毛利元就記〕尼子終に不相叶して元就へ降參す、元就一門中各申されけるは、尼子は毛利と代々の宿敵なり、月山の城せめ崩し、尼子兄弟三人打果し、本望を達せられ可然の由也、元就仰られけるは、大將たる者の軍に勝利を得て、降參の者を助る事、弓矢取の法也、尼子兄弟三人命を助、家人に可召仕候宜て、總領尼子三郎四郎義久、二男九郎四郎、三男百吾子、右三人家來になされ、永祿六年七月下旬に藝州へ下し、志路村に置給ふ、

〔奧羽永慶軍記十三〕大内兄弟降參米澤ノ事

鹽ノ松ノ城主大内備前守、米澤ニ敵對セシニ依テ、政宗〇伊達是ヲ攻レバ、鹽ノ松ハ米澤ノ爲ニ乘取レ會津ニ從事ス、〇中略カヽル所ニ米澤ノ郎等片倉小十郎、此事ヲ聞テ、大内兄弟ノ者共ニ密ニ使者ヲ以、無道ノ會津ニ居給ヒテ末覺束ナシ、當時政宗ホド情深キ人モナシ、早ク降人ニ參ラレヨ、然ラバ我ヨキヤウニ申サントイヒ送リケレバ、備前守ハ會津ノ惡行ニ殆ド疎ミハテ、兎ヤセンカクヤアラマシト思ヒシ折ナレバ、大ニ悅ビ、夜半ニ紛レテ米澤ニ來リ、片倉ニヨリテ訴ヘケレバ、政宗是ヲ聞、ツク／＼思ヒ給フハ、大内兄弟降スル事、會津ノ家來共ノ無道ヲ惡ミテ來ル事ナレバ、今度ハ子細アラジ、彼等兄弟ハ剛ノ者共ナレバ、祿ヲ厚クシ情ヲ深クセバ、却テ忠臣トナラン事疑ヒアラジト宣ヒテ、則對面シ本領安堵ノ證文ヲ賜フ、

〔德川禁令考四武家〕行軍法令　條々〇中略

一降人生捕者猥ニ殺べからざる事〇中略

殺降人

慶應元乙丑年五月四日　黒印

〔吾妻鏡　四〕元暦二年(〇文治元年)七月七日戊子、前筑後守貞能者、平家一族故入道大相國(〇平清盛)專一腹心者也、而西海合戰不敗以前、遂電不知行方之處、去比忽然而來、于宇都宮左衛門尉朝綱之許、平氏運命縮之剋、知於其時、遂出家、遁彼與同難訖、於今者隱居山林可果往生素懐也、但雖山林、不蒙關東免許者、難成之、早可申預此身之由、懇望云云、朝綱則啓事由之處、平氏近親家人也、爲降人之條還非無其疑之由有御氣色、隨而無許否之仰、而朝綱强申請云、屬平家在京之時、聞擧義兵給事、欲參向之剋、前内府(〇平宗盛)不免之、爲貞能申宥朝綱幷重能有重等之間、各全身參御方、攻怨敵畢、是啻匪思私芳志、於上又有功者哉、後日若彼入道有企反逆事者、永可令斷朝綱子孫給云云、仍今日有宥御沙汰、所被召預朝綱也、

殺降人

〔常山紀談(附錄雨夜燈)〕稻葉伊豫守一徹、織田信長に從ひけれども信長心解ず、數寄屋にて茶を賜はり、其席にて刺殺すべしとの巧なり、一徹數寄屋に入る時、相伴の三人挨拶に、掛物の繪の讃を讀給へといふ、是は韓退之の詩にて、雪横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前といふ句なり、一徹少し學問ありて讀けるに、相伴其心を問ふ、一徹あら〳〵子細を咄しければ、信長壁越に是を聞、つと走出て、一徹には荒勝負ばかりする勇士と思ひしに、今聞く處文學にも達せり、奇特の事感ずる餘りに實を語るべし、今日のもてなしは茶の湯にあらず、其方を刺殺さんとせし巧みなり、相伴の三人皆懷劒を差たり、今日より永く我に從ひて謀を致されよ、ゆめ〳〵害心を止たりと云れければ、三人の相伴懷より小脇差を取出す、一徹平伏して死罪を御免下され候事忝候、私も内々今日殺さるべきにて候らんと察し申候へば、詮方なく是非一人相手を取可申と存、用意仕候とて、是も懷劒を取出して信長に見せ申ければ、信長いよ〳〵其心がけを感られけり、

〔保元物語　二〕謀反人被誅事

寄降人之死

去程ニ平馬助忠正ハ、淨土谷ト云所ニテ出家シテ、深ク隱テ有ケルガ、爲義入道モ降參シタリトヤ聞テケル、子共四人相具シテ、竊ニ姪ノ播磨守〈〇平清盛〉ヲ憑テゾ來リケル、〈〇中略〉平馬助忠正、嫡子新院藏人長盛、次男皇后宮侍長忠綱、三男左大臣勾當正綱、四男平九郎通政五人ヲバ、清盛朝臣承テ、申剋許ニ六條河原ニテ是ヲ斬、

〔足利季世記〔四三好記〕〕細川玄蕃頭打死之事

六月〈〇天文十七年〉七日、公方樣御父子、近衞殿已下御門跡衆、御公家衆自坂本御上洛アリケリ、カクテ池田筑後守ハ首ヲ伸テ、晴元〈〇細川〉ヘ降參シケレドモ、先々ノ忠義マデ、今度ノ罪ニテイタヅラニ成ルトサタアリテ、五〈〇五恐誤字〉月六日京ニテ生害セラレケル、

〔松隣夜話〔上〕〕氏康〈〇北條〉島左近大道寺ナド云侍ヲ大將トシテ、大勢ヲ差向、平井ニ於テ其闇ヘ懸シカリケレバ、乳母〈〇上杉龍若乳母〉ノ一類馬方新介、九里釆女等、其外相議シ、拐モヤ命ヲ助ルトテ、龍若殿ヲ取參セ氏康ヘ降參ス、氏康義將タルニ依、以ノ外之ヲ惡ミ給フ、降參ノ輩彼是八人縛リ、首ヲ切獄門ニ掛ラル、

〔川角太閤記〔三〕〕翌日〈〇天正十三年三月二十五日〉和歌山被成御入候、それより太田の城水攻に被及見、堤御つきたて候て、きの川を御そかけ被成候事、〈〇中略〉

一其後城より又降參を乞申候故、蜂須賀彥右衞門御とりあつかひの御使被仕、太田の城請取、かしらかしら被召捕、則はた物に御あげ被成候、左して國中御仕置被成、和歌山へは桑山法印を入置かれ候事、

〔吾妻鏡〔一〕〕治承四年十月廿三日壬寅、大庭三郎景親、遂以爲降人、參此所、卽被召預上總權介廣常、〈〇中略〉又瀧口三郎經俊、召放山內庄、被召預實平、　十一月廿六日甲戌、山內瀧口三郎經俊可被處斬罪之由、內々有其沙汰、彼老母〈武衞御乳母〉聞之、爲救愛息之命、泣參上申云、資通入道仕八幡殿、爲廷尉禪室

御乳母以降、代々間、竭微忠於源家、不可勝計、就中俊通、臨平治戰場、曝骸於六條河原訖、而經俊令與景親之條、其科責而雖有餘、是一旦所憚平家之後聞也、凡張軍陣於石橋邊之者、多預恩赦歟、經俊亦盍被優難時之功者哉、武衛無殊御旨、可進所預置鎧之由、被仰實平、實平持參之、開櫃蓋取出之、置于山内尼前、是石橋合戰之日、經俊箭所立于此御鎧袖也、件箭口卷之上、注瀧口三郎藤原經俊、自此字之際、切箆乍立御鎧袖、于今被置之、太以掲焉也、仍直令讀聞給、尼不能重申子細、拭雙涙退出、兼依鑒後事給、被殘此箭云云、於經俊罪科者、雖難遁刑法、優老母之悲歎、募先祖之勞効、忽被宥梟罪云云、

〔關八州古戰錄 十一〕笠原新六郎政堯降武田 附 松田尾張守秀家傳事

勝頼滅亡有テ、笠原(○政堯)寄處ヲ失ヒ、氏政ヘ降參シケレバ、以ノ外ノ景色ニテ、諸臣見懲ノ爲トナレバ、召捕テ首ヲ刎ヨト申サレシヲ、父尾張守歎訴シテ、漸クニ死刑ヲ宥ラレ、頭ヲ剃テ父ノ領分相州河村郷ヘ蟄居ナサシメタリ、

以降人付敵

〔總見記 十三〕義景江北出張事 附 諸城退散事

小林、齋藤、西方院三人降參申上ケリ、信長公御承引ニテ、三將ノ命ヲ御タスケアリ、夜中ト云ヒ、風雨トイヒ、大嶽ノ城落去ノ儀、義景イマダ存ズベカラズ、早ク三人ノ者ドモヲ敵陣ニ送リ遣シ、此表取抱ガタキ由、能々敵ニ告シラセヨト御下知有テ、三人ノ降參ノ者ヲ皆敵方ヘ送リコサル、

不納降

〔奧州後三年記 下〕將軍(○源義家)武ひら(○清原)をめし出て、(○中略)傔仗大宅光房におはせて、その頸を斬しむ、武衡いできらんとする時に、義光に目を見あはせて、兵衛殿たすけさせ給へといふ、爰によし光、將軍に申て曰、つはものゝ道降人をなだむるは、古今の例なり、志かるを武ひら一人あながちに頸をきらるゝ事、その心いかゞといふ、よし家、よし光に爪はじきを志かけていふやう、降人といふは、戰の場をのがれて、人の手にかゝらずして、後に咎をくひて、首をのべてまゐるなり、所謂宗任等なり、武衡はたゝかひの場にいけどりにせられて、みだりがはしく片時のいのちをおし

むかれをば降人といふべしや、君この禮法をしらず、はなはだつたなしといひてつゐに斬つ、

〔平治物語〔二〕〕信頼降參事并最後事

去程ニ信頼卿ハ、○中略ソレヨリ大白衣ニテ、這々仁和寺ヘ參、昔ノ御惠ノ餘波ナレバ、御助ゾアランズラントテ、頸ヲ延テ參タル由被申入タリ、加之伏見源中納言師仲卿モ參、越後中將成親モ被參ケリ、上皇○後白河本ヨリ不便ニ被思召人々ナレバ、傍ニ被隱置テ、先主上○二條ヘ信頼ヲバ助サセ給ヘト御書ヲ進ラサセ給シカ共、敢テ御返事モナカリケレバ、重テ愚老ヲ憑テ參タル者ドモナレバ、枉テ助置セ給ヘト申サセ給、御使モ未不歸ニ、三河守頼盛、淡路守教盛、兩人大將ニテ三百餘騎、仁和寺ニ押寄、信頼ヲ始テ上皇ヲ憑進セテ參集タル謀叛ノ輩、五十餘人召捕テ被歸ケリ、越後中將成親朝臣ハ島摺ノ直垂ノ上ニ繩付テ、六波羅ノ馬屋ノ前ニ被引居テ御坐ケリ、

〔岡本記〕一かうさん人に去やくしてのまする事、道具をとりたらば、わが刀をよくとむべし、彼めしうとにとられじため也、一段のかくご也、

〔手鑑〔六〕〕城ヨリ降人出ル時勝負ヲ持テ敷アリ付座備取次

此儀ハ籠城ノ將降服シテ出來ル時ノ心得也、勝負ヲ持テ敷有リト云フハ、若シ降參ト號シテ變ジテ、必死ノ戰ヲ成ス時ハ勿論、何レニ詭リ來ル時ハ、味方ノ破レトナル儀、大軍ノ上ニテモ多キ也、故ハ敵降リ來ル事ヲ我ガ兵悦ビ思テ、自然ト兵氣ニ怠リノ生ズル儀人情ナリ、依之備ヲ正シク相圖ヲ期シテ、容貌ヨリ形ギヲモ嚴カニナルヨウニシテ、表向キハ其降將ニ應ズルノ禮ヲ設ケ、主意ハ怠リナク全ク變ニ應ズベキ爲也、如此シテ兵氣ニ勢ヲ含マシメテ、戰ヲ持テ扣ルギヲ云フ也、又右ノ如クニ備フルニ、城ノ虎口ヨリ手前ヘノ敷ヲ考辨シテ、變ジテ戰ヲ成ス時ハ、味方ハ一二ノ働キ自由ナルベキ場ヲ積リ、敵ハ混ジテ救應自由ナラザル程ニ場ヲ殘ス、此所ノ心得ハ其場敷ノ丁間ニヨル事ナリ、爰ヲ以テ敷有リト云フ也、右指向フ間ノギ也、

座備取次ト云フハ、上ミニ云フ所ハ其場へ出向フ、總タイノ心得ナリ、其中降將ニ先ツ應ズル備ヲ定メテ、此手三備三備ニテモ座備ニ作リ、降將へ出向イテ、其虚實ヲ計リテ、御大將へ通ズル儀也、依之此座備ノ將ハ度量ノアル者ヲ用キルギ也、降將ノ言語眸子、備ノ武者色等旁其機ヲ知ル所肝要也、駿府ニテ岡部ガ出ルヨウスハ、降將ノ禮良也、

〔日本書紀七景行〕四十年六月、東夷多叛、邊境騷動、　十月癸丑、日本武尊發路之、〇中略爰日本武尊、則從上總、轉入陸奧國、〇中略至蝦夷境、蝦夷賊首、島津神國津神等、屯於竹水門而欲距、然遙視王船、豫怖其威勢、而心裏知之不可勝、悉捨弓矢、望拜之曰、仰視君容、秀於人倫、若神之乎、欲知姓名、王對之曰、吾是現人神之子也、於是蝦夷等悉慄、則褰裳披浪、自扶王船而著岸、仍面縛服罪、故免其罪、因以俘其首帥而令從身也、〇中略則以所俘蝦夷等、獻於神宮、　五十六年八月、詔御諸別王曰、〇中略汝專領東國、是以御諸別王承天皇命、且欲成父業、則行治之、早得善政、時蝦夷騷動、卽擧兵而擊焉、時蝦夷首帥、足振邊、大羽振邊、遠津闇男邊等叩頭而來之、頓首受罪、盡獻其地、因以免降者、而誅不服、是以東久之無事焉、

〔陸奧話記〕貞任〇安倍拔劒斬官軍、官軍以鉾刺之、載於大楯、六人舁之、置將軍〇賴義之前、〇中略將軍責罪、貞任一面死矣、亦斬弟重任、字北浦六郎但宗任自投深泥逃脫亡了、〇中略其後不幾、貞任伯父安倍爲元、字赤村介貞任弟家任歸降、亦經數日、宗任等九人歸降、同〇康平五年十二月十七日國解云、斬獲賊徒、〇中略歸降者安倍宗任、弟家任、則任、出家歸降散位安倍爲元、金爲行、同則行、同經永、藤原業近、同賴久、同遠久等也、此外貞任家族無有遺類、但正任一人未出來云々、僧良昭已至出羽國、爲守源齊賴所擒、正任初隱出羽光賴子字大鳥山太郎賴遠許、後聞宗任歸降由、亦出來了、

〔奥州後三年記中〕館のうち食つきて、男女みななげきかなしむ、武ひら〇清原よし光〇源につきて降をこふ、よし光このよしを將軍〇源義家にかたる、將軍あへてゆるさず、たけひらなをねんごろなること葉をもちて、よし光をかたらひていはく、我君かたじけなく、城の中へきたりたまへ、その御

供にまいりなば、さりともたすかりなんといふ、義光ゆくべきよしをいふと聞て、將軍よし光をよびて、○中略口說はぢ𛀙むる事かぎりなし、これによつてゆるさず、武ひらかさねてよし光にいふやう、御身わたり給ふ事有べからずば、𛀙かるべき御つかひ一人を給て、おもふことよく〳〵申ひらかんといふ、よし光らうどうどもの中に、誰かゆかんずるとえらぶ、みな季方こそまからめとさだむるによりて、季かたをやる、あか色のかりあをに、むもんのはかまを著て、太刀ばかりをはきたり、城戸はじめてひらきて、わづかに人ひとりをいれ、○中略武ひら出合て、かづ〳〵よろこぶ、季かたちかく居よりてあり、家ひらはかくして出ず、武衡なをまげてたすけ給へと、兵衡殿に申さるべきよしをいひて、金おほくとり出してとらす、季かたがいふやう、城中の財物今日給はらずとも、殿原おち給ひなば、われらが物にてこそあらんずれといひてとらず、○中略武ひらがいふやう、○中略たゞとく〳〵歸給ふて、よく〳〵申給へと云てやりつ、季方さきのごとくに、兵の中をわけてかへる時、太刀のつかに手をかけて、うちゑみてすこしも氣色かはりたる事なくてあゆみ出にけり、○中略城をまきて秋より冬におよびぬ、

〔細川兩家記〕木澤左京亮長政、大和河內催候て、同十年○天文十一月四日に打立て、池田城、原田城は三好方と一味なるにより、先原田城へ取懸責る所に、三宅出羽守京の晴元へ歸參の噯有により、木澤方聞、原田城打畳て、一夜陣取て河內へ歸られける、同十二月に三宅出羽守風聞のごとく晴元へ歸參申さるゝ也、

〔大友記上〕龍造寺山城守謀叛之事

隆信此文ヲ見テ、思慮深キ名人ナレバ、是ハ敵タバカリ某ニ誠トオモハセ、カレラ三人ヲ討セ、味方ニ事オコルツイデニ、ノリセメントノ謀ナリ、加樣ノ矢文ヲマコトニセヌ者ナリトテ、大キニ怒リ引破リテ捨ラルヽ、其後古飯、八重、犬塚ニハ敵タバカリ、其方三人カヘリ忠スベキトノ矢文、

某マコト、思ハズ、少モ氣遣仕マジキモノナリ、彌忠節ヲツクサルベシ、今度筑後表發向ノクハダテモ各ニ不限、忠節ノ輩ガ恩ノタメナリトイヒ聞セ、イカニモ事ナキ體ニモテナサレケレドモ、タバカリテノ矢ブミナラバ餘人ノ持ロコソ射ベキニ、則古飯ガモトヘノ矢文ハ、古飯ガ役所ヘ射クルハ、イツハリニテハアル間ジキ、折節夜廻リ衆見付候ヘバコソ、シレ候ヘナド丶云族多、隆信モサナガラ心元ナクヤ思ヒ給ヒケン降參ヲコヒテ、質人ニ龍造寺豐前守ヲ出ス、宗觀〇吉岡シテ人召レ、永祿十二年三月廿日ニ豐州ヘ歸陣也、

〔常山紀談〕八新納武藏守忠元は、島津家の士大將也、勇名をもて指を折る時第一なりとて、大指武藏と稱しけり、義久秀吉に降參の時、新納は肥後の堺泉の城にあり、一說に大口と有日本國の軍を引受、一戰をせずして降參せんは、弓箭の無禮なり、疾陣を寄させ給へ、一軍して討死仕らんとぞ申送りける、秀吉頓て師を城下に進めらる丶に、かの城の路三四里が程は、馬の鞍をおろし、轡の紐を解ばかりの嶮難にて、輙く打入がたし、武藏守暫く支へて後、一說に、義久斷と聞て大に驚き、疾く降參せよと、下知せられしといへり、今ハ是までなり、主君既に降參せし上は、家臣の身として爭でその心に背んや、弓箭の禮義をもて、かく申たるにてこそ候へ、日本の軍を城に引受る事、士の一面目にて候とて城を出にけり、

古事類苑

兵事部十八

人質

古事類苑

兵事部十八

人質

人質ハ、舊クムカハリト云ヒ、後ニヒトジチト云フ、親戚家臣ヲ人ニ致シテ以テ、降服和親ノ證ト爲スヲ云フ、故ニ又證人ノ名アリ、而シテ其間ニハ互ニ質ヲ納ルヽアリ、互ニ質ヲ返スアリ、人ヲ執ヘテ質トスルアリ、質ハ原來約ヲ結ブタメナレバ、約ニ背キテ殺サレシコト往往アリ、故ニ又約ヲ破ラントシテ、質ヲ奪ヒシコトアリ、而シテ質ノ史上ニ見エタルハ、日本書紀神功皇后紀ニ、仲哀天皇九年、新羅王ノ微叱己知波珍干岐ヲ質ト爲シヽヲ以テ始トス、

名稱

〔類聚名義抄 三貝〕質 ムカハリ シロ

〔運歩色葉集 比〕人質

〔書言字考節用集 四人倫〕人質 ヒトジチ

〔松平記 一〕今川殿より廣忠〇松平へ御人質を可給との儀也、是によりて廣忠の總領竹千代殿〇家康七歳に成給ふを、駿河へ證人に御越被成候、

制度

〔徳川禁令考 四武家〕同〇行軍雜令

定〇中略

一人質體之者其外女又ハ童、船渡ニ而可相改事、〇中略

慶長十九年十月

互納人質

〔武家嚴制錄 一〕武家諸法度

一陪臣質人所獻之者、可及追放死刑時者、可任上意、若於當座有難遁儀而斬殺之者、其子細可言上事、○中略

右之條々准當家先制之旨、今度潤色而定之畢、堅可相守者也、

寛永十二年六月廿一日　御朱印

〔總見記 二〕岩倉城開渡事 附尾張一國被治事

織田七郎左衛門、山内猪之助、織田源左衛門、堀尾忠助四人ノ家老等相談シテ、寄手ヘ訴訟申シケルハ、城ニ籠ル者ドモ一命ヲサヘ御助ケ候バ、皆々退去仕リ、城ヲ開キ指上ベキ由申シ上ル、信長公御同心アリ、サラバ城ヲ相渡シテ思ヒ思ヒニ引取候ヘトテ、互ニ人質ヲ取カハシ、城ヲバ此方ヘ請取ヲセ、楯コモル者共ハ、城主○織田信清ヲ始メテ城ヲ開キ、思ヒ思ヒニ落行キケリ、

〔奥羽永慶軍記 三〕和賀山北境藤倉合戰ノ事

二郎○筒井信ハ、和賀一手ノ大將筒井縫殿ガ一子ナリケレバ、小田嶋悅ブ事限ナシ、頓テ敵陣ニ使ヲ以テ、筒井二郎殿ヲバ此陣ニ捕テ候、薄手少々負ハレ候故隨分勞ハリ候、後日ノ合戰勝負ノ事ハ、互ニ武勇次第タルベシ、明日猿嶋ヲモ返シ給ヘ、二郎殿ヲモ返シ候ハント云送リヌ、和賀諸頭是ヲ開テ、此境爭事數年ナリト雖モ終ニ破レズ、破ラレザル上ハ、和賀山北ノ鬱憤モ有ルベカラズ、是ヲ幸ニシテ和睦セバヤト內談一決シテ、其趣ヲイヒ遣ハス、山北モ願フ所ナレバ、互ニ生捕ヲ人質ト定メ、其翌日兩方ノ大將五人宛半途ニシテ出會、對面式代シテゾ歸リケル、

〔小松軍記〕和睦之事

利長○前田出向合玉ヒテ、面々ノ計ヒ誠以神妙也、意恨殘ラヌ驗ニハ、舍弟利光ヲ人質ニ出スベシ、能ラン樣ニ計ヘトテ、太刀一振宛給リテ歸サレケル、三家老立歸テ斯ト云シカバ、長重○丹羽同之、

執人爲質

舍弟左近將監長元、其時ハ□□トテ十歳ニ成ケルト、伯父丹羽九兵衞ガ娘二歳ニ成ケルヲ、人質ニ出スベシト云レケル、江口、坂井、大谷モ自分ノ人質一人宛相添可申ト云遣シケレバ、利長悅ビテ時刻ヲ不可移トテ、舍弟御犬殿八歳ニ成玉ヒシガ、後ハ養子ニシテ肥前守利光トゾ申ケル、掛橋口ヘ倡ヒ來テ、人質ヲ出サレケル、長重モ定置レシ五人ノ人質ヲ供セラレテ出向、橋ノ上ニテ對面シ、人質ヲ取カハシ、二度親戚ノ契ヲ結バレケルトゾ聞エシ、

〔會津陣物語〕一藤田能登守栗田刑部會津立退事

甘糟備後守淸長〇中略會津ニテ不識庵謙信廿三年忌ノ大法會アルニ付、甘糟モ此法席ニ參詣セン事ヲ望シカドモ、若其留主ヘ被取懸テハト遠慮ヲ廻シ、使者ヲ以テ懇ニ石川昭光ニ申遣シ、三月六日〇慶長五年ニ和談相調、則人質ヲ取カハシ、同七日ニ白石城ヲ立會津ヘ赴キケル、

〔關原軍記大成〕十九秀秋廣家內應附井伊本多誓書

內府公〇德川家康秀秋〇小早川の今度內通に於て、若謀事有かの由內々御不審有に依て、黑田甲州赤坂へ著陣の時、平岡賴勝が方へ使者を立て、秀秋卿いよ〱內府と御一味有て、合戰の日裏切せらるべき御心底ならば、人質を取かはすべしと有ければ、秀秋此旨承引有て、平岡が弟出羽を長政の陣所へ出されしかば、井伊本多相謀、長政の家人喜多村甚左衞門が壻養子、喜多村〔後號二吉田一〕宮內に大久保猪之介を相添て人質に遣はし、秀秋卿回忠有に於ては、內府疎略になき樣に我々相計ひ、近日誓紙を捧べしと云ひ送りたり、

〔甲陽軍鑑〕九上品第十八一板垣信形、飯富兵部兩人を、晴信公御賴あり、信虎公甲府を御立ありて九日目、十七日〇天文七年三月に逆心也、殊に駿河義元と內通し給ふゆへ、少も手間どる事なし、信虎公御供の侍衆みな妻子を人質に取給へは、信虎公をすて申、御供の侍衆皆甲州へ歸る、

〔甲陽軍鑑〕二十品第五十五一落合市之丞と申侍は、度々の武功あり、〇中略勝賴公御あてがひ惡故、他國

仕たるに、市之丞母を人質に御取候へば、剛の武士なる故歸り申、こゝにてよくは被成ずして、足輕大將の小幡又兵衛、遠山右馬介兩人に仰付られ、からめとらせて、見ごりのためにまばり頸をきれと、勝賴公仰られ、彼市之丞を御成敗也、如件、

〔甲陽軍鑑二十品第五十七〕初鹿傳右衛門は參らず候やと御尋あれば、傳右衛門かはうらと申、惠林寺の奥山へ入候に、鶴瀬へ參るべきと申候へば、郷人共　右衛門内方を是非共人質に取りて、越申まじく候、若無理に御越候はゞ、二度と此方へよせ申まじく候とことはりて、それにてもゆかばころすべき摸樣なる故、傳右衛門鶴瀬へまいらず候、いづれの山小屋にても皆如件、

〔飛州三澤記〕閏八月〇天正十三年十六日甲申ノ日、午剋ヨリ宮山下ノ百姓共樵ノ楳ニ出立チ、悉ク山内ニ入ル、斥候ノ輩是ヲ見付テ、同日申ノ上剋近邊ノ家々エ足輕ヲ差遣シ、土民ノ妻子ヲ生捕テ人質部屋ニゾ入置シニ、其暮方ニ一揆等百姓共大將ナシニ、猪突鎗、猿打鐵砲ヲ携エテ、一身ヲ拋攻カヽル、

〔奥羽永慶軍記八〕青木捕二人質一事

大内備前守武略ニ長ジタル兵ニテ、米澤ニ背キシ以來、田村境四本松領ノ城主ヨリ、人質ヲ取テ置シ事ナレバ、青木修理モ舍弟新八郎十六歲嫡子播部五歲ノ時也、人質トシテ備前守ニ取ラレヌレバ、如何セント思ヒ煩ラヒケルガ、才覺ヲ以テ人質ノ代ヲ取ラント思案ヲ廻ラシケルハ、備前守ガ家臣ノ子中澤九郎四郎、大内新八郎、大河内次郎吉トテ三人ノ若者有ケルヲ、人質ニ取テ米澤ノ味方ト成ンニ、新八郎ト播部ヲ殺害スル事成ベカラズト思ヒケレバ、先彼三人ガ方ヘ使ヲ以イヒ送リケル樣ハ、イマ程苅田松近邊ニ小鷹狩最中ナレバ、速ニ此地ニ來リ狩シテ慰ミ候ラヘカシト、イヒヤリケリ、中澤、大内、大河内三人ノ者共、夫ヲ聞テ、ソレハ興アル遊ビナラント悅ビ、急ギ苅田松ニゾ來リケル、〇中略元來三人ノモノ、イマダ友ニモタラヌ若者共ナレバ、謀トハ夢

ニモ知ラズ、高歌一曲シテ夜更ルヽ迄ゾ飲タリケル、醉テ後其マヽ座ニ倒レ臥シ、前後モ辨ヘズイタク寢入シ處ニ、修理時分ハヨシト、究竟ノ武士十五人ニ仰セテ、三人ノ若者ヲカラメトリ、其外三人ニ付添來ル若黨中間ニ至ルマデ、皆悉ク搦メケル、三人ノ者共働カントスルニ叶ハズ、修理ニ向テイヒケルハ、我々不覺故ニ、オメ〳〵ト搦ラレシ事コソ口ヲシケレ、今ハ命生キテモ何カハセン、只トク首ヲ刎ラレヨトイヒケリ、修理答ケルハ、全ク各ノ命奪ハントニアラズ、我舍弟ト嫡子ヲ人質トシテ、備前守ニ取ラレヌレバ、其代リニナサンガタメ、御邊達ヲバ捕ラヘテ候ヲヘ、備前守我弟ト子ヲ返シ給ハヾ、各ヲモ返シ送ルベシ、夫迄ハ暫ク爰ニ候ラヘトテ、一間ナル所ニ押込テゾ置ニケル、

人質相代

〔家忠日記增補二〕永祿五年三月十五日、鵜殿長昭は今川家の忠臣なり、是に依て長昭が二子三州に囚と成事、氏眞是を愁ふ、大神君の御臺(後築山と號す)三郎信康質として駿府に寓居有、大神君志を信長に通じ給ふに依て、氏眞是を憤て既に其質を殺んと欲、大神君の臣石川伯耆守數正駿州に往て、關口刑部大輔と議して、御臺及信康と長昭が二子を以是と代んと請ふ、氏眞是を諾す、數正悅で岡崎え歸り、此旨を大神君に達す、大神君悅給ふ、鵜殿が二子を駿府に返さしめ、石川數正をして御臺若君を迎へしめ給ふ、その後大神君彌氏眞と交を絕給ふ、

返人質

〔日本書紀二十六齊明〕六年十月、百濟(○中略)又乞師請救、并乞王子余豐璋(或本云、佐平貴智達率正珍也)曰、唐人率我蝥賊、來蕩搖我疆場、覆我社稷、俘我君臣、(○略注)而百濟國遙賴天皇護念、更鳩集以成邦、方今謹願迎百濟國遣侍天朝王子豐璋、將爲國主云々、(中略)送王子豐璋及妻子與其叔父忠勝等、(其正發遣之時見于七年)

〔書紀集解二十六齊明〕以舒明天皇三年質、至此三十年、

〔東國通鑑八〕辛酉(唐龍朔元年、新羅太宗王八年、文武王元年、高勾麗寶藏王二十年)春正月、百濟宗室福信等立故王子扶餘豐爲王、豐嘗質於倭、福信起兵與浮屠道琛據周留城迎立之、

〔總見記十三〕淺井方城主等心替信長公又江北御進發事

阿閉○中略八木左京亮、熊谷忠兵衛、今村掃部助、同十郎兵衛ヲ呼デ、此城ヲバ木下藤吉郎殿ヘ渡シ申ス事ニ候、各ハ早々小谷ヘ御歸候ヘト云、熊谷ハ此城ヲ枕トシ、討死セント訇リケレドモ、殘テ三人承引ナケレバ、是非ニ及バズ、四人トモニ阿閉方ヨリ人質ヲ取、城ヲ渡シ立退テ、扨人質ヲモ返シケリ、

〔陰德太平記六十二〕因州鹿野城明渡事

因州鹿野ノ城ニハ、毛利家ヨリ三吉三郎左衛門、進藤豐後守ヲ大將トシテ被籠ケレバ、吉川家ヨリモ森脇内藏允久之、佐々木善兵衛忠守ヲ被加テ、山名豐國ノ家人共ノ人質ヲバ、此城中ニゾ置レケル、カヽリケル所ニ、羽柴秀吉山名ヲ味方ニ引成ント欲シテ、因州ヘ發向シ、先鹿野ノ城ヲ稻麻竹葦ノ如ク取圍、仕寄ヲ付、城樓ヲ組上、無透間攻近付、已ニ可乘破體也ケレバ、城中甚難儀ニ及、如何セン一命ノ助ル由モ哉ト、身ヲ歎キ故郷ヲ望テ、吐息ノミ呼折シモ、秀吉ヨリ使ヲ以山名家ノ人質共ヲ渡シ候ヘ、サルニ於テハ諸卒悉ク可助也、若左ナキ物ナラバ、一時ニ乘崩シテ一人モ不殘可討ト被云送ケル間、三吉、進藤比來ハサシモ剛ノ者也ケルガ、能一命ハ名ニ代テモ惜カリケリ、聊ノ思慮擬議ニモ不及領掌シテ、豐國幷ニ中村、森下已下ガ人質共、悉ク相渡シテ、辛ウジテ一命ヲ助カリ、藝州ヘ歸ニケリ、

〔關八州古戰錄十二〕瀧川一益武藏野合戰事

瀧川○中略先方衆ヲ集メテ、此度ノ粉骨良ニ無二ノ志、在世ノ間忘失スル事有ベカラズ、然レバ各ノ人質悉ク返シマキラスル條、弓矢ノ禮義是マデナリ、某上洛仕ルノ上ハ、南方○北條ヘ一和シテ社稷ヲ保護アルベシトテ、繰返シ謝辭ヲ述ベ、○中略一益父子厩橋ヲ打立ケレバ、小幡、倉賀野ヲ始、先方衆假ノ人質ヲ亘シテ、路次警衛ノ爲トテ、前後ニ屬副相送レリ、明レバ廿一日、○天正十年六月松井

田ノ城ヘ至テ、津田小平次、稻田九藏ガ勢一千餘騎ヲ召連、碓氷峠ヲ越、信州小諸ニ著馬シ、一日逗留ノ間、關東衆ノ人質ヲ差戻シテ、見送ノ面々ニ色代シ、是ヨリ在所々々ヘ返サシメ、〇下略

〔奧羽永慶軍記三〕由利山北境合戰ノ事

大將義通宣ヒシハ、所々ノ旗下ヨリ人質ヲ取ルトイヘドモ、心ヲ替ラレジトノタメ也、今ハ人質アリテモ何カセン、矢嶋、玉前、下村ノ人質三人ノ幼女ヲ殺シテモ益ナシ、三人ノ人質ヲ送リ返シテ、後ニ由利ヲ攻ントテ、矢嶋、下村、玉前ノ人質ヲゾ返シケル、于時日野内匠奧山左衞門八郎ヲ使者トシテイヒ送リケルハ、其地ヨリ人質ニ取タル幼女ハ、今ハ死罪ニモ行フベキヲ、餘リイタハシキ故返シ送候、以來ハ人質ノ恩ヒナク、隨分心替テ軍能シ給ヘ、急々ニ其地ノ境マデ働クベシトゾイヒヤリケル、

〔陰德太平記六十八〕阿州中富川合戰附三好存保沒落事

富城ノ主岩倉式部少輔ハ、先年元親ヘ降參シテ實子ヲ人質ニ出シタリケレド、先頃三好笑岩阿州渡海ノ時異見シテ、二度三好方ヘ歸參シヌ、已前人質ニ出セシ子ハ、笑岩ガ寵孫也ケレバ、元親彼淵明ガ是モ亦人子也ト云ル、惻隱ノ心ヲ抱テ、笑岩ガ意嚥有ラント思、彼方ヘ送リ返サレタリケレバ、笑岩ハ誠ニ死タル人ノ蘇タルニ逢心地シテ、悅ブ事限ナシ、

〔東遷基業七〕石川數正岡崎を出奔の事

數正は出奔する時に、松平五左衞門近正へ(左近將監景正の孫、左衞門尉親清の事也、)使を遣し、同じく大坂に出奔すべしと勸めけるに、近正これを却て若再び使を遣さば、首を刎べしと申遣しける故に、其後數正より不申越しが、近正は松平源次郞景勝(景正の子、近正が伯父、)の家に在て、其日嫡子新次郞一生を景勝の臣二人を添て濱松に遣し、數正が申越たる旨を告、且新次郞を濱松に留て、人質とせさせ給ふべしと申上ける、神君(〇德川家康、)其忠純を賞し給ひ、近正は叛臣數正に黨せず、去年(〇天正十二年、)蟹江の戰にも

忠を勵せるものなれば、質を捧るに不及とて、一生には脇差を賜りて歸し給ひけり、〇中略

神君與關白秀吉講和附大坂に到り給ふ事

石川數正亡去せし後、三州の城主多く濱松に人質を納けるゆへ、本多彥次郎康重も第二子次郎八紀貞〈後稱備前守〉を納られければ、神君〈〇德川家康〉聞召て、汝等忠貞厚く二心有べからず、質を用べからずとて、紀貞を祖父廣孝へ送還し給ふ、

〔武功雜記〕十一 關ヶ原御陣之刻、尾州犬山ニハ石河備前守致籠城候ニ付、木曾衆之人質ヲ取置候處、台德院樣〈〇德川秀忠〉ヨリ木曾衆ニ被仰付、道ヲヒラカセラレ候、備前守申候ハ加樣ニ人質取置候テモ、夫レニ不構候テ、木曾衆台德院樣へ道ヲヒラキ、御奉公被致候上ハ、人質モ無益ナル事トテ、コトゴトクユルシ出候、

互返人質

〔豐內記〕上 片桐駿河下幷大坂ニ歸テ始末ノ事

廿八日〈〇慶長十九年九月〉ニ、七人ノ組頭速水甲斐守家ニ集テ申シケルハ、サイゼン市正〈〇片桐且元〉無如在通リ理リヲ盡テ申ケル、猶疑シク思召、如此有ベキ事ニ非ズ、天下ヲ御爭候事ノ始メニ、理不盡成御沙汰候ヘバ、皆人上ヲ疑イテ身方ニ與スルモノ無習ト承候、市正ヲ不審ニ思召者、人質ヲ乞テ御ラン候ベシト申ケレバ、ヨキニ計ヒ候ヘト御諚也、七人ヨリ人質ノ事ヲ申遣ハシケレバ、市正方ヨリ、最前御使ニ如申今以無相違トテ、即一子出雲守ヲ人質ニ出シケル、此上ハ市正ガ心中無疑トテ、時ヲ移サズ人質ヲ返シ給ヒケル

〔松平記〕一 藏人殿御討死有しかば、三河衆大かた御手に入ける、明年天文十八年、駿河今川殿被仰るは、何とぞ安定の城を攻落し、三河一國平均に治めらるべしとて、雪齋和尙大將にて安定を攻らる丶、岡の城をば早々明渡し、安定には織田三郎五郎殿籠りしに、先年は岡崎衆大久保新八、阿部大藏、本多平八郎を初として三百にて出す、尾州より後詰の勢有、雪齋被申は、城をば駿河遠江

衆被攻べし、三河衆は後詰へ向て給はれと申、尤と請て後詰の勢へ夜討し速に追散、すぐに城へ押寄、二丸三丸を岡崎衆攻破る、爰にて榊原藤兵衛、本多平八郎討死しける、終に本丸計に成、大將三郎五郎を生捕にせんとす、尾州より後詰の大將平手と申者扱を入て後、三郎五郎殿をたすけて此方へ給り候はゞ、岡崎の人質を其方へ返すべしとの儀にて、雪齋扱を聞て、竹千代殿熱田に置申たるを、其時此方へ取、織田三郎五郎殿に三河衆大久保等を付て、西野まで送り申候、

〔東遷基業〕一東三河合戰附駿府人質かへの事

神君(○徳川家康)師を出し給ふ時は、後勝岡崎に來り、留主には康光守りけり、今川氏眞忿て岡崎の人質害せんと思はれけれども、關口親永は今川の豪族なるゆへにさて止ける、(此時成瀬吉左衛門が才覺に歎かれて延引すると有は誤也)石川與七郎數正潜に思けるは、君の人質駿府に在て勢甚危し、一朝これを殺さるゝ事有とも、殉死する士なくば吾邦の恥辱なり、神君(江)告るとも許し給ふまじと思ひ、書を一通殘置て駿府に至り保護しけり、しかるに氏眞は鵜殿長照兄弟岡崎に圍れ居けるを、深く憂らるゝよしを聞出して、關口親永に就て、駿府の人質と長照兄弟を易ん事を申通ければ、氏眞許諾せられけり、數正いそぎ岡崎へ歸りて此よし申上ければ、神君大に悦せ給ひ、長照兄弟を駿府へ還され、神君の夫人幷に竹千代君を數正誘ひ奉りて、岡崎に歸りけり、譜第の將士も皆御迎に參りて、數正が此度の成功を褒美しけり、時人皆申けるは、長照兄弟と岡崎の質を易るは、味方は幸にして敵は禍なり、氏眞の愚なるを皆笑者多かりけり、

〔松平記〕四菅沼新八郎城を出る處に、信玄衆待請生捕にしける、(○中略)菅沼新八郎をば長篠の城へ遣し、家康衆へ使を以て申斷、山家三方衆筑手多岸、長篠、此三人衆の人質家康方に有しに、菅沼が命にかへんといふ、家康尤と仰られて、則三方衆の人質に、人數二千餘人相添送らるゝ、信玄よりも菅沼新八郎に、二千餘人の人數相添、河の中にて替て相引にしける、是は山家三方衆初め家康

と一味し、後に信玄と一味有し故、かやうに人質を替へしと聞えし、是は三月〇天正元年十日の事、

〔家忠日記追加〕八天正十年十月廿九日、北條氏直數日大神君と對陣して、兵を締び謀を廻らすといへ共、其利なく勇力漸く衰ふ、是に依て北條美濃守を以て大神君に和を請て云、上野沼田の地を以て、甲州都留郡及信州佐久郡の地に易え、甲信兩國は大神君全く領内有べし、上野は一圓に氏直是を領すべし、大神君是を許し給ふに依て和睦成る、于時氏直大道寺孫九郎直政、山角の某兩人を質として、大神君に獻ず、大神君酒井小五郎家次をして、北條が方に遣はしめ給ふ、晦日、大神君の姫君を以、北條氏直に嫁し給ふべきの旨御契約有、是に依て互に質を取置に及ず、大神君鳥居元忠、榊原康政、水野勝成をして、北條が質大道寺山角を三坂の城に送り返さしめ給ふ、北條美濃守氏規に是を渡して、鳥井、榊原、水野等三坂ゟ歸る、

〔總見記〕二十三河尻重能被討事附信州北國等合戰事

長一〇中略、松本ノ城ニ到テ、木曾義政ト人質ヲ易合ヒ、終ニ虎尾ヲ踏脫レテ、長途無恙濃州ニ歸著シ、三七殿ニ拜謁シテ、先君ノ喪ヲ弔ヒ訖ヌ、

〔奧羽永慶軍記〕二十一木村父子從佐沼城來名生事

一揆ノ籠城ハ宮崎、古川、師山、登米高清水、小野田等ナリ、政宗宮澤ニ在陣シテ、此數ケ城ヲ攻メン爲メ、軍ノ內談トシテ、氏鄕ノ居城セラレシ名生ノ城ニ、使者ヲ遣シケルニ、イカナル事ニヤ、政宗ノ使者城中ニ入可ラズト追歸サル、政宗不審晴ザル所ニ、佐沼ノ城ヲ圍ミケル一揆ノ大將ノ中ニ、黑澤豐前守ト云フモノ只一人、密ニ政宗ノ陣ニ來リ申ケルハ、扨モ木村伊勢守殿父子ノ人々一揆ドモニ圍マレ、佐沼ノ城ニオハシ候ニ付、今度伊達ドノ蒲生殿御後詰、木村父子ノ命ヲ救ハント來リ給ヘドモ、我々急ニ攻ルナラバ、イカデカ佐沼ノ城ヲセメ落サデ候フベキ、去ナガラ一揆ノ者ドモ城中ニ妻子ヲトラレ候ラヘバ、是ヲ人質ニシテ死罪ニ行ハントセシ故ニ、イカニモ

不納人質

シテ是ヲ取返サント軍延引仕リ、遠ク圍デ居候、依之某モ一子ヲ人質ニ取ラレ候事、頃日承候得バ、木村殿ヨリ童子丸ヲ害ニ蒲生殿ニ相渡サレ候ヨシ、定テ死罪ニ行ハルベシト、恩愛ノ悲シミ堪ガタク、是マデ忍ビ參リ候、願ハクハ政宗公ノ御計ラヒヲ以テ、一子童子丸ガ命ヲ助ケテ給ハリ候ハヾ、某計略ヲ廻ラシ、木村父子ヲ佐沼ノ城ヨリ出シ候ハントイヒケレバ、政宗是ヲキヽ給ヒテ、タトヘ一揆ヲ何ホド退治ストモ、木村ヲ助ケズンバ、其甲斐有マジ、左アラバ此事ヲ名生ノ城ニイヒ送リ、童子丸ヲモ助ケ、木村父子ヲ佐沼ヨリイダサントテ、氏鄕ノ方ヘ使者ヲ以テ、具サニイヒ送リケレドモ、又先ノ如ク使者ヲ入レズ追返サル、政宗彌不審晴ヤラズ、黒澤豐前守今ハ力ナク、如何セントテ案ジ煩ヒケルガ、急度思案ヲ廻ラシ、文ニ委細ヲ書認メ乞食ニモタセ、名生ノ城ニゾ送リケル、此文ヲ何ノ子細モナク受取テ返狀ヲ渡セバ、乞食ヤガテ持來レリ、其書ニ木村父子ヲダニ此城ニ送リ屆ケバ、童子丸ヲ助ケントテ、神文ヲ書レタリ、黒澤大ニ悦ビ、佐沼ノ城ニ歸リ、一揆ノ諸將靑山、里見、飯川等ニ向テ、各イカヾ思ヒ給フゾ、今度蒲生殿伊達殿ノ兩家、木村ヲ救ハントテ大軍ヲ引卒シ、後詰ヲセラレ候ラヘバ、輙ク城ヲ攻落ス事成ベカラズ、縱ヘ攻落ス共、味方大勢殺サレン事モ不便ナリ、トカク此圍ヲトキ木村父子ヲ出シ、人質共ノ命ヲ助ケテ、佐沼ノ城ヲバ乘トリ、其後討死シ給ヘカシ、氏鄕政宗ノ陣ヘモ、我害ニ行テ此事ヲ伺ヒ候ラヘバ、木村父子ダニ城ヲ出スナラバ、佐沼ノ城ヲ渡スベシト申サレ候トイヘバ、諸將聞テ此上ハ異儀ニ及ブベカラズト、圍ヲ解テ木村ノ人々ヲ出セバ、木村父子幷一族郎等鰐ノ口ヲ遁レテ、名生ノ城ニ入ニケリ、是ニ依テ一揆ノ人質共モ助リ、其上佐沼ノ城ヘハ一揆ドモ乘移リケリ、

〔信長記十五上〕羽林信忠御最期事

惟任日向守ハ、信長公御父子討奉テ直ニ江州ヘト急ケル程ニ、同日〇天正十年六月二日申刻ニ勢田ニ著陣シ、山岡美作守同對馬守兄弟方ヘ使者ヲ立、光秀ト同心ナラバ則人質ヲ可被出ト、事モナゲニ

云遣ケルニ、山岡兄弟元來義深キ者ナリケレバ、信長公ノ御厚恩イツ報奉ラン、今般討死セデ可レ有カト議定一决シテ、則彼使ヲ討果シ、勢田ノ橋燒落シテ山中ヘ引籠ル、

身不爲人質

〔小松軍記〕南部無右衞門永原松雲喧嘩之事

一城ニハ大手搦手役所役所之手分シテ、各持口ヲ堅ケル、籠城ノ法ナレバ諸士ハ云ニ不レ及、商民ニ至迄、人質ヲ可レ出ト相觸ラル、〇中略今般籠城ニ付ノ人質南部ニモ出スベシト觸ケレバ、某ハ妻女モナク親類モナシ、養子一人候ヘドモ、是ハ今度ノ合戰ニ武勇ノ稽古ヲモ致サセ申ベシ、人質ニ出シ參ラスル事ハ叶マジ、南部程ノ侍ニ野心ノ御氣遣ハ有マジト、荒言吐テ不レ出レ之、

〔細川家記忠興四〕遙後正保四年三月、光尚君江戸へ御參勤の前、監物是季ニ御意御座候は、秀林院樣〇細川忠興妻御生害の事、今程覺候者可レ有レ之哉、監物母雲仙庵が妹しもと申者、御側ニ相勤、其節之儀覺居可レ申候、當年は御急被レ成候間、來年御のぼりの節、京都御まん樣へ御寄可レ被レ遊候、其時分しも罷出候はゞ、可レ被二聞召一との事ニ付、監物より其段しもに申遣候、〇中略

右之通ニ付、翌年霜より書付差上申候、

しうりんいん樣御はて被レ成候次第之事

一石田治部少〇石田三成亂の年七月十三日に、小笠原少さい、河ぎたいはみ兩人御臺所までまいられ候、私をよび出し被レ申候は、治部の少かたより何れも東へ御立被レ成候、大名衆の人じちを取申候由風聞仕候が、いかゞ仕候はんやと申され候故、則秀林院樣へその通申上候へば、秀林院樣御意被レ成候は、治部の少と三齋樣〇忠興とは、兼々御あいだあしく候まゝ、定めて人じち取初には、此方へ申參べく候、はじめにてなく候はゞ、よそのなみも有べきか、一番に申來候はゞ、御返答いかが被レ遊能候はんや、せうさいいはみふんべついたし候やうにと御意被レ成候故、其通私承、兩人へ私申渡候、

一せうさいいはみ被申候は、かの方より右のやうす申來候はゞ、人じちに出候はん人無御座候ば、與一郎樣〇忠隆與五郎樣〇興秋ハひがしへ御立被成候、內記樣〇忠利は江戶人質に御座候、唯今爰元にて人質に出候はん人壹人も無御座候間出し申事成まじきと可申候、ぜひ共に人質取候はんと申候はゞ、丹後へ申遣、幽齋樣〇藤孝御上り被成御出候ものか、其外何とぞ御さしづ可有之候まゝ、それまで待候へと返事いたすべきと申上られ候へば、一段可然よし御意御座候事、

一ちやうこんと申びくに、御上樣へ御出入仕候を、彼方より此人を賴み、內せうに工右之樣子申こし、人じちに御出候樣にと、度々ちやうこん申候へ共、三齋樣御爲に惡しく候まゝ、人質に御出候事は、如何樣の事候とも、中々御どうしんなきよし仰られ候、又其後參り申され候は、左樣に候はゞうきたの八郎殿は、與一郎樣おくさまに付候て、御一門中にて御座候間、八郎殿まで御出候へば、其分にては人質に御出候とは、世間には申まじく候まゝ、さやうに被遊候へと申いり候事、

一御上樣御意被成候は、うき田の八郎殿は、尤御一門中にて候へ共、是も治部少と一味の樣に被聞召候間、夫れ迄も御出候ても同前に候儘、是も中々御同心なく候ゆへ、內せうの分にては埓明不申候事、

一同十六日かの方よりおもてむきの使參候て、是非〱御上樣を人質に御出し候へ、さなく候はゞ押かけ候て取候はんよし申越候に付、少齋石見申され候は、餘り申度まゝの使にて候、此上は我々共是にて切腹致候共、出し申まじき由申遣候、それより御屋敷の者共覺悟仕申候事、

一御上樣御意には誠押入候時は、御自害可被遊候まゝ、其時少齋奧へ參御かいしやくいたし候樣にと被仰候、與一郎樣御上樣へも人じちに御出し有間敷候まゝ、是も諸共に御じがいなさるべきよし、內々御約束御座候事、

一少齋石見稻富此三人だんがう有之、いなとみはおもてにて敵を防ぎ候へ、其ひまに御上樣御

索人質

さいご候樣ニ可㆑仕由談合御座候故、則稻富は西の門へ居申候、左候而其日の初夜の頃、敵御門迄よせ申候、稻富は其時心がはりを仕り、敵と一所ニ成申候、其樣子を少齋聞てはや成まじくと思ひ、長刀を持、御上樣御座候所へ參り、只今が御さいごにて候由申され候、內々被㆓仰合㆒候事にて御座候故、與一郞樣奧樣をよび一所ニ而御はて候はんとて、御へやへ人を被㆑遣候へば、もはやいづかたへやらん御のき被㆑成候ニ付、力なく御果被㆑成候、少齋長刀ニて御かいしやくいたし申され候事、〇中略

しも印判

正保五年二月十九日

〔谷川七左衛門覺書〕一豐公〇山內掛川より奧州へ御出陣の節、大坂御室樣の事を無㆓御心許㆒被㆓思召㆒、駿州丸子より御家臣市川山城被㆑遣、〇中略無㆑恙大坂に至て御屋敷へ罷越、一豐公御意の趣御室樣に申上候得ば、殊の外御滿悅被㆓思召㆒也、御室樣被㆑仰候は、頃日御大名方へ敵押込來候由被㆓聞召㆒候、御守脇差御身に副、敵亂れ入候へば、御自身刃に御懸り可㆑被㆑成御支度と被㆑仰候に付、山城申上候は、御心易可㆑被㆓思召㆒候、敵來候はゞ日來嗜む所の弓勢を以て、矢種限りは一矢宛に射盡し可㆑相防、其上にて御生害を可㆑被㆑遂旨申上候處、御室樣被㆑仰出候は、細川忠興殿の內室自害、屋敷に火を懸申故、御聞及被㆑成候へば、御室樣にも御自害可㆑被㆑成候由にて、御括り袴山城介錯可㆑致旨御意の處、山城申は先御扣可㆑被㆑成、世間承合候て御時節は從㆑是可㆑申上候處、左候はゞ如何樣にも考不㆑愧樣に、差圖可㆑仕旨御意被㆑成也、然處右騷動今以甚敷、御隣家へも通達難㆑成に付、御屋敷近邊へ矢文を射、世間の取沙汰承合候處、忠興殿御室自害故、大坂御城へ人質取込候儀止り候旨、御隣家より矢文を以返答來る、其旨御室樣へ申上候、御運の強き御事也、

〔日本書紀 九神功〕五年二月己酉、新羅王遣㆓汙禮斯伐、毛麻利叱智、富羅母智等㆒朝貢、仍有㆘返㆓先質微叱許智伐旱㆒之情㆖、是以誂㆓許智伐旱㆒而紿之曰、使者汙禮斯伐、毛麻利叱智等、告㆑臣曰、我王以㆓坐㆑臣久不㆑還而

悉沒妻子爲孥、冀暫還本土、知虛實而請焉、皇太后則聽之、因以副葛城襲津彥而遣之、共到對島、宿于鉏海水門、時新羅使者、毛麻利叱智等、竊分船及水手、載微叱旱岐、令逃於新羅、乃造芻靈、置微叱許智之牀、詳爲病者、告襲津彥曰、微叱許智、忽病之將死、襲津彥使人令看病、卽知欺而捉新羅使者三人、納檻中、以火焚而殺、

〔東國通鑑四〕戊午晉義熙十四年、新羅訥祇王二年、高勾麗長壽王六年、百濟腆支王十四年、秋新羅朴堤上如倭死之、王弟未斯欣自倭來、初卜好既還、王語堤上曰、我念二弟如左右臂、今只得一臂、乃何、堤上曰、臣雖駑才、既以身許國、有何敢辭、然高勾麗大國王亦賢、臣得以一言悟之、若於倭當以謀紿、不可以口舌諭、臣若得罪而逃者、及臣既行、請囚臣家屬、乃以死自誓不見妻子、抵栗浦已解纜、其妻追至大哭、堤上曰、我已將命自分必死、遂入倭國、若叛者、倭主疑之、先是百濟人入倭國紿言、新羅與高勾麗將謀伐倭、王遂遣兵邏戍、會高勾麗侵新羅、并其邏卒殺之、倭主以百濟人言爲實、及聞新羅王囚未斯欣堤上家屬、謂堤上實叛者、於是出師將襲新羅、仍以堤上未斯欣爲鄉導、行至海島、諸將密議滅新羅、執堤上未斯欣妻孥以還、堤上知之與未斯欣日乘舟若遊玩、然倭人不疑、堤上勸未斯欣潛還、未斯欣曰、豈忍捨君而獨行、堤上曰、若能救公之命、而慰大王之情則足矣、安敢愛生、未斯欣泣辭遁還、堤上獨寢舟中、晏起以俟未斯欣遠行、倭人詗知未斯欣之亡、縛堤上追之、會煙霧晦冥不及、倭主怒囚堤上、〇中略倭主怒剝堤上脚、刈蒹葭使趨其上、問曰、汝何國臣、曰鷄林之臣、又使立於熱鐵上、問何國之臣、曰鷄林之臣也、倭主知不可屈、乃燒殺木島中、王聞之哀慟、贈堤上大阿飡、厚賜其家

〔陰德太平記二十四〕陶與吉見和睦之事

正賴〇吉見重テ被申ケルハ、此程爲人質進セ置所ノ愚息龜槌ガ母病痛甚シク、已ニ末後ニ及候ニ由テ、一子龜槌ヲ一目見候ナバ、今生遺恨ナク當來ノ妄執モ晴候ベキト、此耳歎ク所ニ候、少時ノ御暇ヲ賜リ候ヘ、其程ハ別人ヲ以テ質人ニ進セ候ベシト被斷タリケレバ、陶此事如何可有ト思

惟未決所ニ、正頼半途迄人ヲ出シ人質ヲ盜ミ取テ、先立テ石州ヘ歸シ、吾身モ後ヨリ鞭馬馳歸、重テ敵ノ色ヲゾ立ラレケル、

〔陰德太平記三十六〕山名誠通戰死付武田高信謀反幷因州布施鳥取諸所合戰之事
豐前死シテ後ハ、高信モ彌邪謀不怠シテ、終ニハ布施ヲ攻亡サント欲スル志有ケル故、布施ニ爲人質置タリシ、十歲ノ嫡男ヲ盜取ン事ヲ思ヒ、土手一ト云、賢々敷盲人ノ有ケルニ、此事ヲ賴ケレバ、此座頭應諾シテ、ヤガテ弟子一人召連、布施ヘ越テ行ヲ廻シ、彼子ヲ小葛籠ニ納テ盜去ニケリ、

〔松平記一〕一三左衛門〇松平生害之後、〇天文十六年尾州衆〇織田力を落し人數をかけ、猶岡崎を取らんと評定す、此由駿河へ聞えしかば、今川殿より加勢として遠州衆悉岡崎へ參る、其時今川殿より廣忠へ御人質を可給との儀也、是によりて廣忠の總領竹千代殿七歲に成給ふを、駿河へ證人に御越被成候、駿河への御供に金田と申者參しに、此者少相煩、道にて遲々致す程に、田原の住人戶田彈正弟戶田五郎と申者、しほ見坂にて竹千代殿の乘物を奪とり船にて尾張の國へ參る、〇中略さて竹千代殿を熱田に加藤圖書と申、地下人に御預置、岡崎へ御使有、今度今川殿を離れ尾州と一味被成可然、無左候はゞ竹千代殿を殺し可申由被申越、廣忠流石の大將にて御返事被申は、此方人質の事、駿河へは心ざして遣候處に、不慮に其方へ御取被成候、不及是非候、此上はたとひ御殺し被成候とも、駿河と不和に仕事有まじ、人質はもとより此方より駿河へ奉りし事なれば、證人を惜みて駿河へ敵に成事、中々有間鋪と被仰、彈正聞て、扨々廣忠は良將也と感じ給ふ、されば竹千代殿をも殺し不申、熱田に置被申、

〔松平記二〕永祿七甲子年夏の比迄ハ、東三河吉田城に大原肥前守在城して、近邊の侍人質を皆吉田に召置、三河治めんとしけるが、設樂を初として其外野田の菅沼、下條の白井等皆家康に付忠節をして、よし田をせめんと謀を廻らす、二連木の戶田丹波守も家康へ內通は有しか共、母儀を吉

田に置ければ不叶、何とぞぬすみ出し家康へ付、吉田の城をかつぎ可申候と、日夜心懸、ある夜思案を廻し、先吉田へ行、雙六を打て城代をなぐさめ、其次日又吉田へ行雙六を打、其間に風流の道具菓子などを、あまた長持に入、丹波守家老野々山と云者に、彼長持をもたせ、城に入、門の番衆にふたをあふのけて見せ、頓て又返し可申候間、とほして給れと申断城へ行、大原肥前守に菓子など進上し、夜に入しかば、彼長持に母を入替、丹波守手形を書添、野々山を付て返し、又雙六を打て時を移し、はや時剋ものびしかば、丹波守も城を出、頓而母儀に追付、迎の者待しかば馳行、二連木に返り、此由家康へ申越、家康大に感じ、松平を給り、松平丹波守とぞ申ける、

〔大友興廢記十七〕人質取返す事附立願歌の事

鎮實〇齋藤此御手洗を近付て、其方の知らるゝごとく、此たび秋月種實に僞の和談をとげ、人質を出しをく、盗取べき才覺は有まじきかと内談せらる、御手洗申ようは、いか樣にも才覺御座候はん、先はした女などに近付、知人をもとめんは鏡とぎなどに變じ、内意を告候はん事可然候と申て暫し思案し、又申は工夫仕たる事御座候、魚賣に成て、秋月殿臺所方にさい〳〵行、後は料理の間近くねり込ほどの白地者に成申べく候、我等をば秋月方に、見知たる者は御座なく候と申、鎮實可然たくみなり、左之右之はからへと申付らるゝ、御手洗ひげもさかやきもそらず、垢じみたる賤男に成て、魚籠をになひ、常に秋月の城中へ行て、魚をうるほどに、後には下々に知人をまうくる、いかにも白地者に成、諸人になぶられ興を催す、よき時分に鎮實姫の方への文に、來る八月廿七日の夜、搦手より忍びを入盗取べし、其心得有べしとかきたる文を、魚の腹にこめて持て秋月かたへ行、臺所へ入、〇中略わらはめ一人來るを見て、魚を一ッとり出し、なふそなた是を毛利殿のおちの人に進じて給はれと云、わらはめ何心なくうけとり、めのとの女ばうにわたす、鎮實兼而物毎に氣を付べきよし云含められたるにや、魚に込たる文をとり出し見て、忍々によろこび、

約束の日を待けるに、八月廿七日の夜俄に大風しきりに吹て、家も破れ屏も崩る、、其時なんなく相圖の口に出る、手見の城鎮實よりきたる忍びの者に行あひ、則盗取て御手洗が計いにて、手見へは行す、豐後の內日田の郡へのけ置、後には坂本十郎が妻になりぬ、○中略

蒲池人質取返す事

筑後國蒲池も秋月方へ人質を出し置、然共多年宗麟公○大友の幕下に相隨ひし筋目を守り、質を出し置ながら、秋月に隨はす、さあるによつて、蒲池質に置たる娘を引出し、すでにはたものにかけんとする處に、立花の城代戶次道雪、岩屋の城代高橋紹雲自身はせ來り、人數押かけ質をうばひ取て、其場に來る奴原を悉く討果す、

〔總見記二十二〕依高遠落城甲州方難義事

勝頼方ヨリ當方ノ押ヘトシテ、江尻城ニ人數ヲ籠メ、一族穴山玄蕃入道梅雪齋ヲ指置處ニ、德川殿ヨリ長坂血鑓九郎ヲ以テ、樣々ニ誘ヘ招カル、穴山終ニ同心シテ、二月○天正十年廿五日雨夜ノ紛ニ、甲府ニ置タル人質ヲ盜出シ、味方ニ參テ別心ノ色ヲ立ル、

〔總見記二十二〕信長公甲州表御動坐事附勝頼滅亡事

小山田左兵衞尉逆心ヲ企テ、己ガ命ヲ助カランガタメ、勝頼ヲ討テ出サント思ヒ、俄ニ鶴瀬ノ方ヘ向テ柵ヲ付ケ、鐵炮ヲ立ナラベ、今月九日ノ夜、一族小山田八左衞門ト、聟ノ武田左衞門佐兩人ヲ遣シ、左兵衞ガ人質ヲ奪取テ別心ノ色ヲ立、○下略

〔兼山記〕御舍弟衆御弔附肥田玄蕃攻給事

武藏守○森長可仰○中略岐阜ノ城ニ在仙千代○長可子ヲ奪取、人多テハ叶フマジ、宇右衞門一人供仕レ、畏候ト申、下人少々召連、主從六人ニテ岐阜之城忍入給、彼地成シカバ日暮人靜、唯一人人質ノ家ニ忍入、傅ニ付居タル各務長助十三歲、仙千代殿十四歲二人共ニ手ヲ取引出、兼テ用意シ城ノ後ト十

丈計ノ谷ニ、大キ成蒲團ヲ張、井戸宇右衛門其外ノ者共相待、二人共ニ蒲團ノ内エ飛入セ、扨馬乘セ、豆渡ノ渡ニ指掛、川岸ニ望淺處ヘ馬ヲ乘入、無難川ヲ越、尾張ノ地著給エバ夜ハ程ナク明ヌ、

〔奥羽永慶軍記二十七〕西馬音内以武略奪返人質事

爰ニ西馬音内道茂ガ嫡子式部大輔□道ツクヅク思慮ヲ廻ラスニ、我々最上ニ降セシ事、何ゾ横手ヲ背ニアラズ、一旦ノ急難ヲノガレンタメ也、此上ハ湯澤ヲ返リ攻ニシテ、最上ニ手切セント思ヒ、父道茂ガ前ニ出デ此由ヲ述ベニケリ、道茂聞テ某モ内々左コソ思ヒツレ、去ナガラ妻ヲ人質ニ渡シ遙庄内ニアレバイカヾアランド云フ、□道承リテ御心ヲ安ク思シ召レ候ラヘ、取返シ候ラハントイフマヽニ、密ニ山田、深堀、柳田等ニ内談ヲスルニ皆尤也ト同意ス、先急ニ庄内ノ人質ヲ奪ヒ返サント思ヒ、年盛ンニ勇猛ノ兵ヲ撰ムニ、矢代彌兵衛〇中略ヲ始メ六十騎、大將ハ西馬音内□濱、山田民部少輔、小柳左馬介、柳田治兵衛尉、都合八百餘人庄内ニ近キ山中ニテ日ヲクラシ、究覺ノ忍ビノモノ十四五人町内ニ入、東西南北六七ケ所ニ火ヲカケタリ、夜中ニテハアリ、武士ドモ周章スル事夥シ、折節風烈敷、餘烟八方ニ廻レバ、時分ハヨシト大手ノ方ヨリ攻入テ時ヲ作リ、鐵炮ヲ打懸シニ、火ヲ消サントシ敵ヲ防ガントスルニ隙ナケレバ、カネテ見置シ人質ノ屋ニ火ヲ掛タリ、人質ハ四人ナリシガ、是ニ仕ヘシ譜代ノ者共内通ノ事ナレバ搦手ヨリ逃出ル、忍ビノ者共城中ノ者ニ紛レテ、人質ト一所ニ出レバ、素肌ナル迎ノ者三千餘人輿持テ待受ケシガ、忽盗取テ出、山北路ヘゾ趣キケル、〇下略

〔會津四家合考附錄十一〕諸士傳考

或時壬生ガ許ヘ、太田原ガ子ヲ質ニ取テ置タルニ、彼子存命不定ニ相煩故ニ、太田原ガ方ヨリ母ニ對面セサセ度候間、暫ク返シ給リ候ヘト侘ケレバ、壬生子細ナク戻ス、其後彼子病氣平愈シケレドモ、太田原壬生ガ方ヘ不遣、別心ニ及、壬生腹立シテ、此コト如何スベキト郎從等ト談合ス、源

人質逃走。

兵衛此由ヲ聞テ、○中略サラバ某ガ一ノ思案候フトテ、方便リケルハ、太田原ノ宿ニテ一月ニ六度宛市有テ、其日必風爐ヲ燒ク、先一番ニ太田原入リ、其後皆打混ニ入ナレバ、此時如何ニモ討ントシ支度シケルニ、折シモ彼市日ニ風雨シテ寒キ日ナルニ、源兵衛成程賤キ者ノ樣ニ成リ、蓑笠ヲ著テ小脇指ヲ指シテ市立シ、風爐屋ガ前ニ轉臥シテ、今日ノ市人ニテ候ガ、雨風ノ寒ニ中ラレ腹痛スルトテ、大聲揚テ呻ケレバ、亭主モ出合テ兎角勞ケレバ、源兵衛扨コソ事ハ仕濟シタリト思ヒ、御亭主ノ御情ニ些風爐ノ竈ノ火ヲ當テヽ賜レト侘レバ、最安トテ扶入、竈ノ前ニ臥セケレバ、猶腹痛眞似ヲシテ居ケルニ、頓テ太田原來テ一風爐入處ヲ、源兵衛不圖走懸テ取ヘ、脇指ヲ引拔テ突懸ル、コハ如何ニト太田原仰天スレドモ、裸身ナレバセンカタナシ、源兵衛塞詰テ言樣、此比壬生ガ方ヘ人質異變ノ事、非人ノ擧動ナレバ、斯ハ擧動候、所詮人質被返ベシヤ、應否ノ一ツ定テ御申候ヘ、否ナルニヲイテハ一刀進スルゾトテ、事既ニ急ナレバ、太田原如何ニモ御邊ノ仰セ理過テ覺侍ゾ、所詮子細ナク我子ヲ質ニ出シ侍ンゾトノ會釋ナレバ、則彼子ヲ質ニ取テ引具シ、頓テ壬生エ歸リシトナリ、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年○元曆元年四月廿一日己丑、自去夜殿中聊物忩、是志水冠者雖爲武衛御聟、亡父已蒙勅勘被戮之間、爲其子其意趣尤依難度可被誅之由内々思食立、被仰含此趣於昵近壯士等、女房等伺聞此事、密々告申姬公御方、仍志水冠者廻計略、今曉遁去給、此間假女房之姿、姬君御方女房圍之出、而海野小太郎幸氏者與志水同年也、日夜在座右片時無立去、仍今相替之入彼帳臺、臥宿衣之下出髻云云、日闌後出于志水之常居所、不改日來形勢獨打雙六、志水好雙六之勝負、朝暮翫之、幸氏必爲其合手、然間至于殿中男女、只成于今令坐給思之處、及晚縡露顯、武衛太忿怒給、則被召禁幸氏、又分遣堀藤次親家已下軍兵於方々道路、被仰可討止之由、姬公周章銷魂給、　廿六日甲午、堀藤次親家郎從藤内光澄歸參、於入間河原誅志水冠者之由申之、此事雖爲密儀、姬公已令漏聞之給、

愁歎之餘令レ斷二漿水一給、可レ謂二理運一、御臺所又依レ察二彼御心中一、御哀傷殊太、然間殿中男女多以含二歎色一云云、

〔總見記 五〕重而勢州御發向事附神戶長野和睦事

信長公、此勢〇千草宇野部等兵ヲ合セテ、又高岡ノ城ヲ圍マル、神戶藏人〇友盛ハ人數ヲマトメテ、神戶ニ籠リ居、〇中略高岡ノ城主山路彈正一個ノ微力ヲ以、大軍ヲ引受ケ、防戰叶ヒガタク、又武勇ニモ思案アル者ニテ、急度和睦ノ工夫ヲ廻ラシ、信長公ヘ言上申シ、又神戶ヘモ云遣ハシ、和談ノ儀ヲ取噯フ、〇中略藏人大ニ悅ビ、急ギ御請申シ上テ和睦調ヒ、高岡ノ御陣ヘ參上シテ、謹而御禮申シ上ラル、〇中略神戶モ今迄ハ六角ノ幕下ニ屬シカバ、兼日ヨリ友盛ガ叔父圓貞坊ト云フテ、樂三ガ末子ナリシ福善寺ノ住僧ヲ人質トシ、江州ヘ遣ハシ置タリ、今度友盛ガ信長ヘ降參セシヲ聞テ、六角左京大夫義賢大ニ怒テ、圓貞坊ヲ殺サントス、此坊長袖ナレドモ、心カイ〲シキ者ニテ、其色ヲ見取リ、狂人ノ眞似ヲシテ、囚タル所ヲ脫出勢州ヘ歸來ル、

〔松平記 三〕今度十一年〇永祿駿河沒落の時、家康一腹の弟松平源三郎と酒井左衞門尉が女を、先年吉田城を大原と和談被成、三河平均に御退治の時、家康と左衞門尉誓紙幷人質を以て、氏眞と和談にし、駿河へこし給ふ時、三浦與一と云者預り置けるが、今度三浦信玄へ別心して、甲州へ行とて、彼人質も則甲州へ進上申けるに、彼源三郎若き人なれども、さすがに家康の弟にて、心はやき人なれば、大雪ふり多番衆油斷しける中に、雪を踏分て家康の方へ、其年の內に歸り給ふ、誠ニ由々敷と諸人申ける、されども雪にやけて、兩足のゆび皆落けるとぞ聞えし、

〔明良洪範續篇 十五〕伊集院右衞門太夫忠棟入道幸侃ハ、島津ガ領ヲ分テ一郡ヲ玉ハル故ニ、直參ノ士ノ格ニテ八萬石ヲ領シ、威ヲタクマシクシテ、君上ヲモ犯スノ意アリテ、次第ニ色立ケル、島津義弘朝鮮ヨリ歸國シテ、直ニ伏見ニ至リ、其隱謀ヲ聞テ、三月九日菊亭ニ於テ、幸侃ヲ手討ニス、

●近習ノ小壹別府小吉ト云者突テ討留タリ、幸侃ガ妻人質トシテ伏見ニ有シ、此事ヲ聞ヨリ、其子従者ト倶ニ鞍馬山ニ走リ入、右ニ付諸方騒動セリ

〔續撰清正記〕五清正内儀人質として大坂に置けるを盗み出す事

石田治部少輔謀叛企る時分の事は、本書〇清正記の如し、其時清正内儀は人質として、大坂の屋敷に有しを、治部少輔分別を以て、大坂の城内へ取入、かたく番を付をくべきとの内談あるよし風聞す、依之清正思はれけるは、今度は無二に家康公の御味方いたすべし、然におゐては人質を城内へ取入ては、無念の次第なるべし、何とぞ計略いたし、屋敷に居内に盗とるべきとて、大坂にをかれたる大木土佐守と、船奉行の梶川才兵衛と兩人の者に斯事を密談いたし置て、肥後國へ下國有たり、右兩人の者共談合きはめ、梶川才兵衛は大坂でんぼ口におゐけるが、毎日二度づゝ屋敷へ通けるに、老人と云病中と云、かた〴〵もつて行歩不自由のことはり、番所〳〵に申、乗物にのり大綿帽子をかぶり、大夜著をうしろに打懸て、乗物の左右の戸を開き往來しけるを、始の程は一度一度に乗物の内を改め見けるが、後は番所の者共見知て、いつもの病人ならばくるしからずと云て、改むる事もなく通しける、かやうに二十日餘して後、番の者共の油斷したるていをとくと見付、扨御前を乗物にのせ申、彼大夜著を打懸、我後に押付てきつともたれかゝつて大綿ぼうしをかぶり、いつもの如く乗物の左右の戸をくわつとをしひらき、土佐守を歩にてつれ、若あやしみ乗物を改んといはゞ、あやまたず取ておさへよ、其間には御前をさし殺して、他人の手には渡し申間敷と、兩人が心金石より堅固に云合て、いかにも去づかに通りければ、番所〳〵にて、いつもの病人ならばくるしからずといひて、難なく通り、扨舟には大きなる水溜桶を三つ居、其中に一つ中底を入て、何れにも水をくみ入、其下に御前を入置て、舟ををし出しけるに、湊口にて船番所の者改め見けれども、その比長雨の降たる故、にごり水をたゝへける故、水底見え兼て、中底

の有を見付ずして通り過て、無恙くまもとへ著城あり、誠に鰐の口はのがるゝ共、此難はのがれがたき番所どもを、安々と通り給ふ事は、偏に梶川才兵衛が勇智謀の故也とて、清正感悦不斜して、才兵衛に加増知行給りたり、

〔關原軍記大成十〕有馬加藤山崎內室去留

攝津國三田の地頭山崎左馬助家盛は、吉田輝政の妹聟にて、又侍從輝政の御奥方は內府の御息女なるが、此時大坂におはしけるを、左馬助常に內府の御慈志をうくるにより、いかにもして輝政の奥方をぬすみとるべしとはかりけれども、口々に番所有て、其志遂げがたきにより、侍從の留守居たるものと相かたらひ、彼奥方所勞ありといひ廣め、其後左馬允增田長盛が宅に至り、吉田侍從〔 〕方、當春より煩ひいられたり、たしかに氣鬱の病なれば、折節山野の遊興あらば、藥驗も有べしと、醫師どもの見立てなり、只今折柄遠慮なき樣なれども、若めしあるにおゐては、二人の幼息を大坂へ發し、內室ばかり某が領地へ遣し、しばらく氣力を補ひたく、有馬の湯治をもいたさせ申度と有ければ、輝元長盛許容して、然らば吉田侍從が質人は、其方に御預りある二人の子共を大坂に殘し、氣色聊快くば早々召かへすべしと有によつて、內室と局が乘物の奥に、二人の子共を密にのせて、三田へ遣し、諸大名の人質城中へ取入べしと有に於ては、自分の奥方は奉行の下知にまかすべしと相定む、左馬允內室はその生れ付ふゝたくましく、尋常の女性のやうにはなかりし故に、左馬允心に叶はず、常に疎略なるあしらいなり、然るに奉行中の下知にまかせて、內室を城內へ入置べしとあるを甚怒り、左馬允に逢申度といひ寄て近付、左右の手をひしと取て、亡父勝入よりつたはりたる、守り刀を引そばめ、夫の下知にまかするは常の事ながら、日頃情なくもてなし、今更敵の手に渡し捨殺さんとせらるゝは、おもひもよらぬはからいなり、彌人質に出し給はん御覺悟ならば、座をたゝせ申まじといはれければ、左馬允殊の外に驚きて、誓

殺人質

言の上に色々斷を述られければ、內室其時機嫌を直し、此上は大坂を潛かに立去るべしとて、終に三州吉田へ下り、其後髮をおろして、天久院といひたりとかや、

〇按ズルニ、此時有馬豐氏、加藤嘉明ノ妻ノコトモアレド、繁碎ナレバ載セズ、

〔重編應仁記十二〕常桓禪門浦上村宗攝州出張事

山中、藥師寺、堺勢ハ、同國〇攝津尼ガ崎大物ノ城ニ引籠ル、其ヨリ常桓方ヘ、日々ニ晴元〇細川方ヨリ降參スル者多シテ、遂日多勢ト成ル、サラバ此大軍ニテ大物ノ城ヲ攻ヨヤトテ、同〇享祿三年十一月六日大物へ取懸ケ、入替ヘ入レ替ヘ攻ケル程ニ、大敵防難シトテ、城中一方大將藥師寺次郎左衞門ハ、堺ニ人質ヲ置ナガラ、忽降人ト成テ常桓方ヘ出ニケリ、〇中略扨モ藥師寺次郎左衞門七歲ニ成ル男子ヲ人質ニ出シ置テ、敵陣ヘ降參スル事、不義不忠ノ擧動也トテ、翌年三月十五日、晴元ヨリ彼人質ヲ堺庄ノ釋迦堂ニ、張付ケニシテ殺サレケル、

〔淺井三代記十一〕義賢勢太尾の城を夜込に乘取事付新庄駿河守心替の事

新庄駿河守は太尾より一里許西南、淺妻といふ所に城をかまへて楯籠るが、太尾へ人質遣し、江南佐々木方へ屬し申ける、後に沙汰しけるは、元來其節は久政〇小谷にぶくわたらせ給へば、江南のいきほひはつよし、高宮久德も江南に降參志ければ、義賢入道承禎內意をかよわし、佐々木を太尾へ引いれしとぞ申ける、〇中略小谷の久政は、太尾の次第を聞、不安おもひ給ひ、江北勢を出し合戰をなす事は志らずして、立腹限りなくして、先國中の味方の見せしめにせんとて、新庄駿河守人質は、寬助左衞門尉預り置けるが、當年八歲の男子なり、則串ざしにして、淺妻より四五町北、世次村の川端にさらし、番を付てぞおかれける、久德が人質は則慈母なりけるが、磯野丹波守預りて在けるを、高宮の北方小野といふ所に磔にぞかけ置ける、誠にあはれなりける事どもなり、

〔家忠日記增補二〕永祿五年三月、遠州引間の城主飯尾豐前守は氏眞を叛て、大神君及び信長に志

を通す、是に依て氏眞新野左馬助をして城を攻撃しむ、新野是を攻て、城兵渥美、森川、內田等數百人を擊て、城陷るといへ共、新野遂に命を殞す、大神君御幼君にして駿府に寓居有の間、今川近年三州の諸士を指揮す、是に依て質として各妻子を駿府及び三州吉田の城に置といへ共、皆質を棄て大神君に忠義を盡す、松平備後守清善が娘も質として、吉田の城に有、清善は大神君累世の士たるに依て、質を敵地に棄て、岡崎の城に至り大神君に忠を盡す、吉田の城主小原肥前守三州の諸士を懲さんが爲に、清善が娘を始め、大竹兵衞門尉、淺羽三太夫等が子、其外質を棄て大神君に忠を盡す輩の妻子十一人を捕て、吉田の城下龍念寺に各是を串刺にす、

〔松隣夜話中〕二月〇永祿五年下旬、信玄義信一萬八千餘騎ニテ武州ニ發向セラル、北條ハ氏康、氏政、其弟源藏二萬八千騎、兩家合テ其勢四萬六千餘騎松山ヲ取圍ミ、〇中略カツキ連テ攻ケル間、防戰ニ術絶テ、三月十日、友貞降人ニ成、城ヲ明テ渡ス、〇中略謙信ハ其二日目、八千騎ニテ前橋ニ御著也、三樂ニ對面シ大ニ怒リ、是程ノ不覺人ニ要害ヲ預ケテ謙信ヲ引出シ手ヲ取ラセ、耻ヲ見セ給フ事甚奇怪也、其儀ナラバ三樂ト討果スベシト有テ、刀ニテ追懸、場中ニテ三樂ヲ手討ニス可躰子也、三樂騷ガズ申サレケルハ、〇中略友貞ガ弟ト實子トモ是ヘ召具シ候、彼是御覽遊サレテ下サレ候ヘ迚、兵粮玉藥ノ注文ト、友貞ガ子弟ヲ御目ニ掛ル、謙信席ヲ立給ヒ、二人ノ童子ノ長キ髮ヲ左ノ手ニ握リ中ニ提ゲ、右ノ手ニテ卽刀ヲ拔キ、兩人ヲ一打ニ四ツニ斬テ投捨、氣ヲ直シ酒ヲ乞出シ一ツ召サレ三樂ニ差給フ、三樂少モ遲々セバ能カラジト思ヒ、差寄テ一ツ傾ケ側ヲ引取、虎口ノ死ヲ免タル心地ニテ、息次居タリ、

〔勢州四家記〕柘植三郎左衞門、信長家老瀧川伊豫ト云侍ノ所ヘ立入、內通ノ故三郎左衞門ガ子ヲ伊勢ノクモヅ河ノ端ニテ、國司ヨリクシザシニナサルヽ、是ハ人質ヲステ三郎左衞門立身ノ故ナリ、

〔淺井三代記十六〕磯野丹波守佐和山城を開退事
長政〇淺井内々磯野二心有よし聞たまひ、磯野が人質老母を張付にかけ、丁野山にさらし置、小谷の内へ入ざれば、己が知行處西近江高嶋郡へ引退きける、

〔陰德太平記五十一〕鳥取城合戰附山名豐國與勝久一味之事
大坪吾ハ元春ノ麾下ニ可屬約盟、金石ヨリモ堅固ニセシカバ、今更非可變サリトテ國ニ止リ居テ、鹿助〇山中ト矢石ヲ爭ハヾ、主ノ豐國〇山名ニ楯ヲ突ニ似タルベシ、唯速ニ國ヲ去ンニハ不如トテ、藝州ヘコソ下リケレ、豐國是ヲ聞テ、悄キ大坪ガ行迹哉トテ、サシモ忠志ヲ勵シタル大坪ガ二人ノ子、人質トシテ居ケルヲ、諸人ノ見懲也トテ、鳥取ノ山下ニ於テ、磔ニコソセラレケレ、此ヲ見ル者豐國ノ所業仁モナク義モナシト、彈指ノ嘲呀ヲ傳ヘタリ、

〔松平記六〕武田信玄死去のよし隱すといへ共、端々人の知り、色々申傳へし、〇中略甲州の中にても被官譜代の近習は是をかくし、與力末々の者は皆能知りて、二心有もの多し、中にも三河衆に奧平九八郎父子是を聞て、無程心替し本國へ歸、頓而家康へ附申、多勢の者なれば勝賴無念存、奧平九八郎が妻を人じちに甲州に置しを、はたものにかけらるゝ、

〔總見記二十二〕依高遠落城甲州方離叛事
勝賴〇武田、中略寵臣長坂釣閑齋ニ談ズ、釣閑ガ曰ク、〇中略君只吾妻ヘ行玉フ事ヲ停シメテ、郡内ヘ開カルベシト云フ、勝賴此儀ニ同ジ、眞田ガ約ヲ背テ上州ヘ行カズ、今日新府ヲ立テ郡内ヘ趣ク、時ニ木曾義政ガ人質ヲ殺シ、且又諸方逆心ノ者ノ人質三百餘人ヲ本城ヘ入レ一同ニ燒殺シ、忠節ノ士ノ人質纔十人計アルヲ悉ク赦シ遣シ、褒美トシテ金銀ヲ割與ヘ、賞罰ヲ執行テ新府ノ城ヲ退出ス、

〔總見記十九〕惟任光秀丹州働事附赤井惡右衞門景遠事

光秀又思案ヲ厚フシ、重テ彼仲人ニ云遣ハスハ、然ラバ秀治〇波多野疑ヲ散ゼヨ、當方謀計ニアラズル段證據ノタメニ、光秀ガ老母ヲ人質トシ、秀治ニ相渡スベキノ間、秀治此條信伏セシメ、大臣家〇織田信長ヘ御禮申サレ、一家ヲ全フセラルベシト云、是ニ於テ秀治兄弟安堵セシメ、其儀ナラバ和段ノ儀相心得タリト云フ、既ニ今五月〇天正七年廿八日、漸ク和睦相調ヒテ、光秀方ヨリ老母ヲ渡シ、秀治方ヘ人質トシ八上ノ城ヘ入置カシメ、和平彌成就セシム、是ニ依テ今日六月二日、右衛門太夫秀治、同弟遠江守秀尙等八上ノ城ヲ出テ、光秀對面ノタメ本目ノ城ヘ入來ス、光秀是ヲ悅ビ、本目ノ城ニテ彼兄弟ヲ待ウケ、雙方面談一禮畢テ、祝儀トシテ盃ヲ出シ、酒宴ニ及ブ時、兼テヨリ光秀方々ニ隱シ置タル多勢、俄ニ競ヒ出ル、秀治秀尙心得タリトテ、太刀ヲ拔テ相働クトイヘドモ、數兵前後ヲ圍デ終ニ秀治秀尙ヲ搦捕リ、其外從者十一人都合十三人ヲ相搦テ、早速安土ヘ差上セ、此趣言上シ畢ヌ、秀治ハ痛手負テ、路次ニ於テ死去セシメ畢ヌ、其後秀尙等安土ニ於テ生害ノ以後、丹州ノ殘黨等、光秀人質ノ老母ヲ張付ニ懸テ殺シ畢ヌ、

〔武隱叢話三〕中村五郎忠滋事

播州三木城ヲ秀吉公攻メ玉フ時、城主別所小三郎長治ガ家人中村五郎忠滋ト云者アリ、秀吉公ヨリ谷大膳衛好爲使心ヲ翻シ、城内ヘ引入味方人數、一廉可賜褒美也、中村同心シテ總領ノ娘ヲ出人質、日取時剋ヲ約シ、秀吉公ノ人數ヲ千餘引込城中、跡先ヨリ引包テ不殘一人打果ス、秀吉公大ニ怒リ玉ヒ彼人質ノ娘ヲ被掛磔

〔總見記二十三〕河尻重能被討事附信州北國等合戰事

信州ノ國人春日周防守等、長一ニ訴ヘ云樣、足下上洛ヲ企バ人質早ク還サルベシ、若此儀同心ナクンバ、我々兵ヲ携テ、上洛ノ路次ヲ相妨グベシト云フ、長一大ニ怒テ、汝等大臣家〇織田信長ノ發ヲ聞テ、某柔弱ナランド思ヒ、今此詞ヲ發スルヤ、左有ラバ汝等多勢ヲ催シ、只今一戰シ某ヲ伐取テ

人質ヲ取還セト云フ、國人等如何トモスル事ナシ、斯ニ於テ長一河中嶋ヲ發シ濃州ヘ上ル、忽ニ一揆與テ國人等兵ヲ構ヘ、路次中所々ヲ相遮ル、長一自持鑓ヲ提テ諸卒ヲ下知シ、數箇所ノ合戰悉打勝テ一揆等ヲ追拂ヒ、終ニ大河ヲ乘越タリ、一揆等退散シテ猿馬場ト云所ヨリ、曾以テ行跡ヲシタハズ、于時長一自十文字ノ鑓ヲ持テ、春日周防ガ子ヲ始テ、國人ノ人質ドモヲ悉ク突殺シ、

〇下略

〔常山紀談六〕織田信孝秀吉と弓箭をとる時、信孝の乳の人を人質に、秀吉のもとに出し置れしを、磔にして誅せらる、かの乳の人の子は、幸田彥右衛門とて、信孝の士大將なり、是より前秀吉信孝の長臣等をかたらはるゝに、岡本下野守は同心して、信孝に背きけれども、幸田は背かず、幸田が母誅せらるゝに及で、子の彥右衛門に書を送りて、我今空しく成ことゆめ〳〵歎くべからず、親は必子に先だつ習ひなり、唯忠義を守りて君にな背き參らせそと、言遣はしければ、聞人感じあへり、

〔關八州古戰錄十三〕北條氏忠受佐野名迹之事

佐野ノ舊臣等ガ人質ノ爲、毘沙門丸ヲ小田原ヘ召ショセ、城中ニ留置シガ、天正十八年ノ春了伯(〇天德寺)秀吉ニ相倶シ、關東ニ下向ノ時、野州筋征伐ノ嚮導ヲ云ヒフクメラレ、佐野ニ打入ノ由、小田原ノ城ニ聞エケレバ、氏直下知シテ毘沙門丸ヲ殺シケルコソ無悲ナレ、

〔奥羽永慶軍記十五〕佐竹伊達和睦破事附阿子島高玉落城事

天正十七年ノ春ニ至テ、佐竹伊達ノ和睦ヤブレニケリ、其濫觴ハ會津方ヨリ、大内備前守、同助右衛門兄弟米澤ニ降シヌルヲ、會津ノ諸臣大ニ憎ミケルガ、去年須賀川ノ者共ガ進メニヨリ、安積表ニ取カケ大ニ戰ヒ、其上大内ガ母ヲ人質ニ取タリ、然ルニ大繩讃岐守何ノ思慮モナク、是ヲ殺シ候ラハント、主君盛重ノ前ニ出テ申ケレバ、盛重若年ニシテ、何ノ思慮カ有ベキ、片平ガ母ヲ死

救人質之死

罪ニゾシタリケル、

〔新田老談記下〕佐野天德寺御代ニ成テ彌御繁昌有ケレドモ、小田原ヨリ人質ヲ催促有ニ依テ、無是非末腹ノ御舍弟毗沙門殿ヲ被遣ケリ、無程上方ヨリ小田原ヲ責ルノ御沙汰告來ケレバ、山上道及天德寺御內談ニテ、上方勢ニ組シテ、道筋難所ヲ繪圖ニ被成被遣ケレバ、色々御褒美杯ニ預リ、則先陣ノ案內ヲ被仰付ケリ、其事委細小田原へ聞へケル間、毗沙門殿無情罪科ニ被行給フト聞へケリ、

〔武功雜記四〕肥後隈府城守赤星氏、同國熊部城守熊部氏、兩人トモニ元來菊池家來也、兩人挨拶アシク有シ故、赤星方ヨリ姉ムスメヲ人質ニ出シテ、龍造寺隆信ヲ賴、熊部モ又隆信ヲ賴ミ、赤星ハ娘兩人有シ內、妹ヲ秘藏仕候、シカルニ人質ニ秘藏ニ不存候姉ヲ出シ候トサヽヘ申候、是ヲ傳聞テ赤星又妹ムスメモ隆信ヘ質ニ遣候、其時熊部謀ニ、赤星ヨリ薩摩ヲ賴申候作リ狀ヲコシラヘ、此事ヲ隆信ニサヽヘ申候、依之隆信立腹被致テ、赤星ガ娘兩人共ニ磔ニカケ候、

〔黑田家譜一〕荒木が孝高〇小寺官兵衛、後改稱黑田孝高を禁獄したる事をば、信長公しり給はずして、官兵衛も荒木に同心して、城中に籠て歸らざると思召、大にいかり給ひて、官兵衛が人質松壽を殺べき由、竹中半兵衛重治に被仰付、此已前より秀吉は播州に下り、長濱には居給はず、半兵衛は信長の臣たりしが、先年より秀吉の先備に加へ給ひしかば、秀吉の一味たるに依て、秀吉の預り給へる人質の事を、半兵衛に被仰付ける也、半兵衛は智惠深き人成りしが、信長を諫て曰、官兵衛事既に味方に屬し、忠義の志不淺候、其上智惠有者にて候間、強き身方を捨、弱き敵に與し申べき謂れなし、人質を御殺し候はゞ、官兵衛又は其父美濃守〇黑田職隆恨を含、御敵に成候はゞ、中國御退治もはか行申間敷候間、人質御殺候事惡かりなんと、再三申されしかども、信長公御憤り深くして諫を用ひ給はず、半兵衛力不及松壽を殺し候よし、信長公へは申上、密に松壽を我領地美濃國不破の郡

岩手の奥書提と云居城に遣し、隱置ていと懇にもてなしける、○下略

〔黑田家譜〕二十一月○天正七年瀧川左近將監伊丹之城を責破、○中略信長公此時孝高の荒木に囚れて、渠に同心せざる事を始て聞給ひ、去年官兵衛が人質松壽を誤て殺したる事、後悔の至也、官兵衛に對面すべき面目なしと仰けるが、竹中半兵衛兼而より、孝高の荒木に同心有間敷事を察して、遠慮を廻らし、去年より某領地に松壽を隱し置たる事を聞召、御感悅淺からざりしと也、

人質自死勵人

〔奧羽永慶軍記〕三由利山北境合戰ノ事

京都へ使節ヲ送ツ獻物ヲ捧ゲテ、信長ノ幕下ニ成ル族モ多シ、中ニモ小野寺景通ハ嫡子孫十郎義通ニ領内ヲ預ケ上洛ス、義通横手ニ在テ、父上洛セラレ留守ノ政道ヲセシニ、元來ミダレシ世ナレバ所々ノ幕下ヨリ人質ヲ取ニケル、中ニモ由利ノ石澤ガ母ヲ人質トシテ受取ス、矢嶋、下村玉前ノ三人ヨリモマダ幼キ女ヲ取、赤尾津、岩屋、仁賀保、打越、瀧澤ノ五人ガ許ヨリハ、男子舍弟等ノ兒童ヲ取ニケル、然ルニ近年秋田山北ト中違フ故、既ニ合戰ニ及ブ事度々ニシテ、又和睦ニ成事モアリケリ、由利黨ノ者ドモハ秋田城介ニ親戚朋友ノヨシミ多ケレバ、秋田ニ力ヲ合セント志有ケレドモ、人質ヲトラレケル上ハ、心ナラズ山北ノ味方ヲゾイタシケル、石澤ガ母此旨ヲ密ニ聞傳ヒ、ツラ〳〵思ヒケルハ、我々爰ニアレバコソ、由利一黨ノ人々ニ志ヲモ遂サセズ、我サヘ爰ニナクバ、何カ心ニ懸ルベキ、カク人質ト成テアランヨリハ、自害シテ思ヒノ儘ニ軍ヲモセサセント思ヒ、五人ノ兒童ヲ進メ、ヒソカニ由利ヘ狀ヲゾ送リケル、其狀ニ曰、我々人質ニ取レテアル故ニ、一門違謀叛ヲ起ス事モ叶ハズ、秋田殿ニ一味同心セン事モ叶ハズ、空シク年月ヲ送ラン事コソ物憂カラメ、是ニ依テ我々今日自害ニ及ブノ條、心安ク軍ヲモセラレヨト言ヒ送テ、石澤ガ母ヲハジメ赤尾津、岩屋、瀧澤、仁賀保、打越ノ人質五人ノ者、同時ニ自害スルコソ無慙ナレ、由利ノ者ドモ此狀ヲ見ルヨリモ皆涙ヲ流シ、誠ニ命ハ義ニ依テ輕シトカヤ、一家ノ恥ヲ思ヒ、況ヤ石

澤ノ母女性ノ身トシテ人質共ヲ進メ、我モ共ニ死ケルコソ、前代未聞ノ事ドモナレ、イザ去ラバ此上ハ、我々ガ首タトヘ郊原ニサラストモ、早ク義兵ヲ揚ベシト、與力ノ人數ハ誰々ゾ、赤尾津左衞門尉、(中略)ヲ始トシテ、都合五千餘人ヲ率シ、天正十年八月廿八日家々ノ旗ヲサヽセ大津山ニ陣ヲ取ル、

〔日本書紀 九神功〕九年(仲哀)十月辛丑、從和珥津發之、(中略)爰新羅王波沙寐錦、卽以微叱己知波珍干岐爲質、仍齎金銀彩色及綾羅縑絹、載于八十艘船、令從官軍、

〔東國通鑑 四〕壬寅(晉安帝元興元年、新羅奈勿王四十七年、高句麗廣開土王十一年、百濟阿莘王十一年、實聖王元年、)三月、新羅遣未斯欣質于倭、王常恨奈勿王質己於高句麗、思欲釋憾於其子而遣之、

〔日本書紀 十應神〕八年(丁酉)三月、百濟人來朝、(百濟記云、阿花王立无禮於貴國、故奪我忱彌多禮、及峴南、支侵、谷那、東韓之地、是以遣王子直支于天朝、以修先王之好也、)

〔東國通鑑 四〕丁酉(晉安帝隆安元年、新羅奈勿王四十二年、高句麗廣開土王六年、百濟阿莘王六年、)夏五月、百濟與倭結好、遣太子腆支爲質、

權近曰、世子君之儲副、其重係乎宗社、不可以輕出者也、古者諸侯朝於天子、有時而不可後、故老病者使世子攝己事以行、急述職也、諸侯相朝本無時、未有使世子攝行之禮、故曹伯使世子射姑來朝於魯、君子譏之、以爲取危亂之本也、朝且不可、况出質乎、漢唐以降、外夷君長或遣世子入侍、是以小事大、以夷慕華、禮亦然矣、若百濟王以世子映出質于倭、則是輕其國本而棄之非類之地也、苟能修德行政、强於自治、輯和其民人、愼固其封守、遣使修聘以通隣好、倭人雖暴何畏焉、乃不能然、以千里畏人、汲々焉欲結其好、出質世嫡、虔若小夷之事中國、而不知耻焉、衰微甚矣、何以爲國乎、及其薨也、二弟相戕、國遂危亂、微解忠獻謀國人殺碟禮、則映之復國必不可行矣、此可以爲永世之戒矣、

〔古事記傳 三十三〕東國通鑑などには、阿花を阿莘と作て、其元年は、晉大元十七年とあれば、仁德天皇八十年にあたり、其薨たるは、其十四年とあれば、履中天皇六年にあたれば、書紀と百廿年

ばかり違へり、そも〳〵東國通鑑などは信がたきこと多しといへども、此年代は、彼書の方よろしかるべし、書紀は傳の亂にて、年代違へりと見ゆ、此天皇の御代は、彼國は肖古王貴須王の時なるべし、さて阿花の花字は、華なるべく、莘は華を誤れるものなるべし、

〔日本書紀 十應神〕十六年○乙巳、是歲百濟阿花王薨、天皇召直支王謂之曰、汝返於國以嗣位、仍且賜東韓之地而遣之、

〔東國通鑑 四〕乙巳晉義熙元年、新羅實聖王四年、高句麗廣開土王十四年、百濟阿莘王十四年、腆支王元年、秋九月、百濟王阿莘薨、太子腆支質倭國不還、太子仲弟訓解攝國政、以待太子之還、季弟碟禮殺訓解自立爲王、腆支聞王訃痛哭請歸、倭主以兵百人衞送、腆支既至國界、漢城人解忠迎謂曰、大王棄世、碟禮殺兄自立、願太子早爲之計、腆支以倭兵自衞、依海島備之、國人殺碟禮迎立爲王、

〔日本書紀 二十三舒明〕三年三月庚申朔、百濟王義慈、入王子豐章爲質、

〔日本書紀 二十四皇極〕元年八月丙申、以小德授百濟質達率長福、中客以下、授位一級、賜物各有差、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化二年九月、遣小德高向博士黒麻呂於新羅而使貢質、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化三年、是歲新羅遣上臣大阿飡金春秋等、○中略仍以春秋爲質、春秋美姿顏善談笑、

〔日本書紀 二十五孝德〕大化五年、○中略是歲新羅王遣沙㖨部沙飡金多遂爲質、從者三十七人、僧一人、侍郎二人、丞一人、達官郎一人、中客五人、才伎十人、譯語一人、雜傔人十六人、幷三十七人也、

〔日本書紀 二十六齊明〕元年○中略是歲高麗、百濟、新羅並遣使進調、○中略新羅別以及飡彌武爲質、以十二人爲才伎者、彌武遇疾而死、

〔源平盛衰記 二十八〕賴朝義仲中惡事

同年○壽永二年三月ノ比ヨリ、兵衞佐○賴朝ト木曾冠者○義仲ト中惡キ事出來レリ、○中略折節又十郎藏

人行家ハ、〇中略兵衞佐憑ミテハ甚々シカラジ、木曾ヲ憑マントテ、千餘騎ノ勢ヲ引具シテ、信濃國へ越ニケリ、佐殿是ヲ聞給テ、木曾ト十郎藏人ト一ニ成テ、義仲平家ニ親ミテ、賴朝ヲソムカバ、由由敷大事、人ニ上手セラレヌ前ニ木曾ヲ討ントテ、十萬餘騎ニテ打立給フ、〇中略武藏國角〇角原作月、據ニ參考源平盛衰記說改、田川ノハタ、青鳥野ニ陣ヲ取テ、天野藤內民部遠景、岡崎四郎義貞二人ヲ召テ下知シ給ケルハ、越後へ越テ、木曾ニイハン樣ハ、平家朝威ヲ背キ奉リ、佛法ヲ亡ニ依テ、源家同姓ノ輩ニ仰テ、速ニ追討スベキノ由、院宣ヲ被下訖ヌ、尤夜ヲ以テ日ニ續デ、逆臣ヲ討テ宸襟ヲ休メ奉ルベキ處ニ、十郎藏人私ノ謀叛ヲ起シ賴朝追討ノ企アリト聞ユ、而ルヲ彼人ニ同心シテ扶持シ被置之條、且ハ一門ノ不合、且ハ平家ノ嘲也、但シ御所存ヲ不辨、モシ異ナル子細ナクバ、速ニ十郎藏人ヲ被出歟、ソレサモナクバ、淸水殿ヲ是へ渡シ給へ、父子ノ儀ヲナシ奉ルベシ、兩條ノ內一モ承引ナクンバ、兵ヲ指遣シテ誅シ奉ベシト、慥ニ云ベシトテ、使ニサヽレタリ、若面ニ負テ委イハヌ事モゾ有トテ、副使ニ安達新三郎淸經ヲ指遣ス、岡崎四郎、藤內民部越後ニ行向テ、兵衞佐ノ被申旨憚處ナク、風情ニ過テ申タリ、木曾此事ヲ聞テ、郎等共ヲ招集テ評定アリ、小室太郎ガ儀ニハ、先度ノ穩便今更變改有ベカラズ、若承引ナクンバ、東國北國ノ大合戰、軍兵數盡テ、朝敵追討ニ力アルマジ、本ヨリ御意趣ナキ上ハ、早ク御曹司ヲ渡シ奉ルベキカト申、今井四郎兼平ガ儀ニハ、兵衞佐殿ト、終ニ御中ヨカルマジ、故帶刀先生殿ヲバ、惡源太殿討給ヌ、意趣定テ御座スラント、佐殿モ思召ラン、幼キ御曹司ヲ他所ニ奉置テ、所々ニテ思召ンモ心苦シ、平家ヲ討ント云モ、御家門ノ爲也、只一度ニ思召切テ、兎モ角モ成給へト申、此御曹司ト申ハ、今井四郎兼平ガ妹ノ腹也ケリ、去バ木曾ガ爲ニハ、乳人子ヲ思テ、儲タル子、生年十一ニゾ成ケル、義仲案ジテ、小室太郎ハ今參リ、心モ剛ニ計ヒヨシ、多勢ノ者ニテ中違ハジト申處モ理也ト思ケレバ、子息ノ淸水ヲ呼テ、己ヲバ兵衞佐ノ子ニセントテ宣へバ遣ス也、相搆テ惡レズシテ、一方ノ固メ共ナレトイハレケレバ、淸水冠者返

事ヲバセズ、畏テ父ノ前ヲ立、母ヤ乳母ノ方ニテ、我ヲバ鎌倉へ被遣候、歸參ラン程ノ形見ニトテ、笠懸ヲ七番射テ見セ奉ケレバ、女房達是ヲ最後トヤ思ケン、涙グミテゾ見合レケル、木曾ハ兵衞佐ノ使ニ出合、酒スヽメ馬引ナドシテ、種々ニ翫シ饗應セラレケリ、返事ニハ十郞藏人ニ意趣御座マシケン事ハ不存知、又呼越タル事モナシ、打憑見エ來給タレバ、只自然ノ情ヲ存ル計ニ候、誠ニ平家追討ノ大事ヲ閣テ、何ノ遺恨アリテカ謀叛ノ企アルベキ、人ノ讒言ニ侍カ、信用ニ及ベカラズ、又清水冠者事ハ、未東西不覺ノ者候、仰ヲ蒙テ進セネバ所存ヲ籠タルニ似タリ、召ニ隨テ是ヲ進ズ、不便ニコソ思召レメ、義仲角テ候ヘバ、一方ノ固メニハ、憑思召ベシトテ、清水殿ヲバ、岡崎四郞、藤內民部ニ渡シケリ、兩使畏テ鎌倉へ相具シ奉ル、宇野太郞行氏トテ、美妙水冠者ト同年ニ成ケルヌゾ、伴ニハ具シテ遣シケル、

〔關八州古戰錄〕三柿崎和泉守景家金井左衞門佐ヲ討取ル事
景虎ハ〇中略佐野表へ兵馬ヲ早メラレケレバ、周防守昌綱廻間山ノ後迄迎ヒトシテ出向ヒ、打連テ杤木へ入城シ、叮嚀ノ饗應ヲナシ、申樂ヲ興行シテ暫ク逗留シケル故、景虎三日滯座シテ平井ノ城へ歸ラレシガ、昌綱ガ弟綱千代丸ヲ倶セラレタリ、是ハ猶子ノ約アリト云共、實ハ人質ノ奥意ナリトゾ聞へケル、

〔家忠日記增補〕二永祿二年、此年〇中略大神君の兵大に勝て敵敗亡す、得給ふ所の地を以て有功の者に賜り、又駿州に趣給ふ、〇中略又相州の北條も和を乞て、其子助五郞を質として駿州に趣かしむ、

〔足利季世記〕七義秋公方記新公方樣御上洛之事
此日〇永祿十一年九月晦日信長五萬餘ニテ池田ノ城ヲ責ラル、城中ニモ爰ヲ先途ト防戰ケレドモ、大勢ニ向ヒテ不叶シテ、噯ニシテ池田筑後守勝政所領二千貫文下サルベキトノ約束ニテ、子息ヲ人質

ニ出シ降參ス、

〔淺井三代記十六〕磯野丹波守佐和山城を開退事

丹羽はよき時分と心得て、員正〇磯野が方へ申遣しけるは、今度信長卿へ忠節をたまはゞ、ゆく末迄も可然候はん、同心あれと申越、員正心に思ふやう、兎角當城を開渡小谷へつぼみ、味方の雌雄を可見屆とおもひ、丹羽に返事申けるは、此方よりもたしか成人質を指上べし、信長卿よりも慥なる人質給はるにおいては、當城をあけ渡すべしと申越ければ、丹羽大によろこび、信長卿へ此旨申上れば、信長卿不斜おぼしめし、さあらば人質を可遣とて、織田おきくを被遣ければ、員正は男子壹人も持ざれば、女子一人を指上、佐和山をあけ渡し、小谷をさして來りけるが、〇下略

〔總見記九〕若州江州所々御仕置事幷野州合戰千草越鐵炮事

角ヲ信長御在京淺井朝倉御敵トナル上ハ、彼表御退治ノ事、專以テ御僉議ナリ、就中若州ハ北國ノ手先ナレバ、國人ノ心測リガタシ、今度味方ニ參リシ者ドモノ人質ヲ取テ可來トテ、丹羽五郎左衞門長秀、明智十兵衞光秀ニ仰付ラレ、兩將若州ヘ行向テ、粟屋越中守、松宮玄蕃兩人ニ申シ渡シ人質ドモヲトル、武藤上野介ハ異儀ヲ云ニ付テ、彼館ヘ押寄セ破却シケレバ、武藤モ力及バズ卽降參シテ、是モ老母ヲ人質ニ奉ル、此等ヲ始テ味方ニ參ル者ドモノ人質、殘ラズ取リカタメ、丹羽、明智歸京セシム、

〔四國軍記七〕久武內藏助討死事

元親〇長曾我部、中略、宇和郡ニ攻カヽリ、或ハ稻薙、或ハ苗代カヘシ、又ハ苅田ノ働シテ、國郡ヲ敗リ民ヲ害ス、爰ニ惱デ諸城味方ニ加ル武士共多シ、就中黑瀨ノ城主西園寺、與居嶋ノ城主宇都宮遠江守モ、時々元親ニ內通シテ一味ノ心アリシカバ、此度人質ヲ送リ疎意ナキ由ヲゾ侘タリケル、

〔大友興廢記十七〕人質出立の事

去程に鎭實〇種實使者を返して後、生年十二歲の娘を近付て、汝いまだ幼少なり共能聞、古所の秋月種實より、我々に人質を出し候へとの使來る、今此返事をそむき時刻を移さば、種實此城に押來り戰べし、今時分我手勢方々に配當して人數すくなし、此城を敵にとられ、我名を失なはん事無念なり、汝等迄も生害せられん、唯今質を出せば城を敵に取らるゝ事なし、末迄も無事なるにて、汝を質に出すべし、さは有とても行衞は、宗麟公〇大友に我心替りして、秋月に一味同心はおもひもよらず、後に必らず敵のために汝殺害せられん、其沙汰あらば、人手にかゝらず自害すべしと云含め、小脇差を娘に渡して、汝がすてん命且は屋形樣の御ため、又は父が順義の心故と思ふべしと云聞せける、〇中略娘泪のしたより申けるは、御心安く思召しさふらへ、我命は父にまいらする、城をよく御持、屋形樣への順義の御奉公被成候へ、娘の命を惜しみ、御未練の御心持有ては、餘所の聞へもあしく御座さむらはん、今かようの事侍らずば、我何として屋形樣の御ため、又は父のためにならんと云て、後はさらに泪をこぼさゞりき、鎭實聞て汝幼少といひ、女といひ心ざしの程感じ入たるとて、心やすく思ふべし、以來殺害に及までの事はよもあらじ、隨分才覺を以て盜取べしといさめて、乳母の女房をつけ、使者を添へ出して、思旨をのぶ、秋月利を得て滿足不斜、

〔信長記十二〕伊丹城落去事

荒木ガ定置シ足輕大將五人マデ心ヲ變ジケリ、既ニ十月〇天正七年十五日事調テ、十六日ノ未明ニ瀧河人數上臈塚へ引入ケル間、〇中略丸々皆燒レツヽ、本城計ニ成ケレバ、荒木久左衞門計申ケルハ、尼崎へ罷越、攝津守ニ異見申、尼崎、花熊兩城開渡申樣ニ仕、其上ヲ以テ父母妻子以下一命ヲ被助候樣ニト約シテ、歷々ノ者共三百人相議シテ、妻子ヲバ爲人質伊丹ニ殘置、十一月廿四日尼崎指テ出ケレバ、伊丹ニハ織田七兵衞尉信澄被入替タリ、斯ル處ニ其企兼テ聞シカバ、荒木一向不

同心、久左衛門尉以下曾テ寄モ付ズ、剰鐵炮ヲ打懸ナドシタリケレバ、爰ヘハ不被寄、伊丹ヲバ開渡イツ三百餘人ノ者共、アキレテ立タリケルガ、イヤ〳〵時刻移テハ悪カリナントテ、何ク共ナク成ニケリ、然テ此事調ハズシテ皆生害ニ可及ニ究リケレバ、城中ノ妻子共夫ト一所ニ有ナバ同ジ道ニト頼ミモ有ケンニ、敵共皆入替タリ、コハ如何ナル世ニ生レ合ケルト、老タル母イトケナキ子、最愛ノ女房共、所セケニサシツドヒ、互ニ目ト目ヲ見合ツヽ、只恨シゲナル計ニテ、涙ノ外ハ言モナシ、彼者共ガ心ノ中思ヤルサヘ哀也、荒木一類ノ者三十餘人ハ、於京都可被誅ニテ、池田久左衛門其外宗徒ノ侍共妻子百廿二人ハ、瀧河左近將監、惟住五郎左衛門尉、蜂屋兵庫頭ニ仰テ、尼崎七本松ニシテ張付ニ懸ヨト議定有、

〔陰德太平記 六十四〕山名豐國心替附森下中村背豐國事

秀吉〇中略先使ヲ以テ豐國味方ニ被屬候ハヾ、人質共返シ與、其上因幡一國全ク可宛行、若於無同心ハ、豐國并ニ家ノ子郎等共ノ質人、悉ク誅伐スベシト云送ラレケレバ、豐國アハレ一味セバヤト思ハレケレ共、流石家人共ノ心ノ中モ難知テ、頓テ山口、森下、中村、用瀬、伊田、田井庄等ヲ近付、此事如何可有ト異見ヲ請レケリ、〇中略秀吉下知シテ山口、森下、中村、伊田、田井庄等ガ人質ヲ磔木ニ升セ、久松ノ麓ニ掛并ベ、鎗長劍ヲ差當テ、如何ニ人々味方ニ降ルヤ否ヤ、無同心ニ於テハ、卽今突殺シテント云セラレケレ共、山口已下更ニ耳ニモ不聞入ケレバ、秀吉腹ヲ立一々ニ突殺サレシ形像ハ、〇中略見ル人サヘ魂消心寒ヌ、〇中略斯テ其後又敵ノ士卒共豐國ノ息女ヲ張附木ニ上セ、綠ノ髮ヲ逆ニ引張、手足ヲ左右ニ引分テ結付、サモ散氣無有樣ニテ、鎗ノ鞘ヲ外シ、氷ノ如クナル刃ヲ雪ノ膚ニサシ當テ、如何ニ豐國息女ノ命モ惜ク、又因幡一國モ所望ナラバ、早ク味方ニ降ラレヨ、若左無バ只今息女ヲ突殺ス耳カ、當城ヲモ一時ニ攻取テ、豐國ヲ始メ多クノ妻子等悉ク頭ヲ可刎也、可惜妻子ノ命ヲモ捨、可望國ヲモ閣テ、毛利家ニ所爲一味候ハン事コソ心得ネ、此所好々

思惟シ給ヘト、三日マデ使者ヲ馳テ云送ケレバ、豐國モ初コソアレ、アノ娘ヲ殺サセタランハ、吾浮世ニ在テ何カセン、出家入道シテ、高野粉川ノ奥ニモ入ヌベシ、身ヲ捨國ヲ切取モ、子共等ガ榮耀ヲ思フニコソアレト、歎カレケルヲ見テ、山口、森下巳下ノ者共モ、今ハ諫メ兼、(中略)左ニ右ニ御所存ニ被任候ヘト申ニ依テ、豐國不堪悦頓テ使ヲ以テ、秀吉ノ御味方ニ可參候間、息女ノ命助ケテ給ハリ候ヘト、被云送ケレバ、秀吉豐國吾計策ノ中ニ陷ヌト喜デ、人質ノ命ヲゾ被助ケル、

〔關八州古戰錄十一〕瀧川一益軍評定ノ事

箕輪ノ城ハ(中略)番城ト成テ有シ故、瀧川左近將監是ヘ入テ、西上野ノ諸士ヲ晲ケ、手首尾ヲ整ヘ川東ヘ移テ、厩橋ヘ入城ス、最前武田家ニ服從セシ當國割據ノ面々、先達テ回文ヲ以テ事ノ由ヲ觸知ラシメタリシ故、深谷本庄、平甘尾、上田、高山、白倉倉賀野、和田、大戶、三倉、森下、宮崎以下日夜ニ來リ、湊ニ入部ノ賀儀ヲ述ベテ人質ヲ出シ、悉ク麾下ニ降リケレバ、人馬門前ニ市ヲナシテ、瀧川ガ佳運殆此時ニ有リトゾ見エシ、

〔甲陽軍鑑品第五十八二十〕小田原より氏直一家の總人數三萬餘にて畫懸付たるに、瀧川剛なりと申せ共、纔に三千にて二の合戰に瀧川仕り、上野先方衆始の御辛勞返禮にと申て懸候へ共、松田尾張只一手に仕負、瀧川敗軍して前橋へ逃入、(中略)柴田(勝家)瀧川(一益)兩人ハ一入名高き侍大將故、其日も負たる色なく、前橋の城にて小鼓をうちてゐたるを、上野侍衆瀧川に向て申は、是にましまし候ば馳走申べく候、又上へ御上りに付ては人質を出し、あぶなげなく送申べく候と申に付、瀧川上へ參度と有故、上野衆の人質を出し、信州眞田迄送り、眞田の人質を取、木曾迄送り、眞田衆肝を煎、木曾の人質を取、上方へ瀧川を送るは、上野信濃の武田先方衆表裏なき故也、

〔黑田家譜二〕一秀吉より吉川、小早川へ、人質上すべき由被仰付ければ、吉川より二男又次郎經重、小早川より四郎元總を上せられ、極月十一(天正十一年)初泉州境に著、上使として孝高幷蜂須賀彥右衛門

を被遣、秀吉おもへらく元春天性氣荒くして、物をやぶり人情に背くべき士也、たとひ人質を出す共、夫に拘らずして、我が人質も隆景が人質をも共に捨て約を變ずる事有るべし、もし我人質を出さずば、隆景が人質計を捨させ、我が人質を出さぬとて約を變ずる事は、諸人の思ふ處をかへりみて、左は成がたかるべしと思ひ計り給ひ、隆景壹人の人質にてよしとて、元春の人質をばかへし給ふとぞ、是秀吉の智謀の巧みなる所也、

〔太閤記八〕天正十一年城主定之事

或曰、宇喜田家運二代相續有し事は、毛利右馬頭元就と、秀吉卿と對陣有けるに、宇喜田和泉守直家、備後美作兩國を領し、輝元を西秀吉を東、其間に夾て東西弓矢の行を見もし聞もし勘るに、羽柴の家は興るべき方也とみて、家老長船紀伊守、戸川肥後守、岡越前守、花房助兵衛尉をよび寄、相謀りけるは、秀吉卿合戰之行、國之仕置、毎物はかの行やうを察るに、行く〱天下をも計るべき人なり、此人に與し家運をさかへ、忠功有人々の勞を補ひ、萬民を撫育せんと思ふは如何にと、密かに評しけるに、四老奉り、仰尤にはおはしませども、大切なる子共を、人質に輝元へつかはしおきしなり、殊に安心之儀をば、いかゞおぼし給ふぞやと申ければ、予亦此事を悲しみつゝ、其用捨骨髓に徹し謀りみるに、今西に在る人質は五人也、兩國に在る父母兄弟をかぞふれば百人に及べり、五人を捨て、百人を助けんは、國守の勤め鬼神も悅び給ふべし、寔當然之理に順ひ諸人を撫するは、君主之業なり、所詮直家は理に順ひ萬民を撫すべし、もし此義をそむき正理を知ざる者は、人質に付て西へ參り候へ、更に以て恨みなし、早いなやの返辭有るべし、送り屆くべしと有りしかば、皆直家に同じけり

〔三河物語三下〕太香(〇太閤豐臣秀吉)者御上洛(〇德川家康上洛)之由を聞召而、其儀ならば忝存知候、左樣にも思召ならば、若御用心之儀も思召可有候へば、母にてまします人を、岡崎迄しち物に可進と被仰而、

御老母之萬所〇政所、秀吉母を岡崎迄御越被成ければ、其迄に及不申忝と被仰而、井伊兵部之將〇井伊兵部少輔直政と、大久保七郎右衛門〇忠世にあづけおかせられ給へば、人じちの御越有而、諸人も大いきをつきてよろこぶ、御上洛有ける時、兵部と七郎右衛門を召而被仰けるは、若我が腹を切ならば、萬所をがいして、腹を切可有者成、我腹を切たり共、女共をばたすけおきて歸すべし、家康こそ女房をがいして、腹を切たると有ならば、異國迄の聞へも不被可然、まつ世の云つたへにも可成、然時ンばまん所をばがいし奉り、かならず女共に手だし有間敷と仰おかれて、御上洛被成けるに、何事もなく御歸國被成ければ、各上下共に目出度と申よろこぶ事かぎりなし、然間萬所も御よろこび有而、御上洛被成けり、

〔東遷基業七〕神君與關白秀吉講和附大坂に到り給ふ事

神君〇徳川家康、中略、廿四日〇天正十四年九月岡崎に至り給ひしに、秀吉より使來りて、神君來謁し給へとの事なりしかば、將佐を集めて、此事如何と議せられけり、酒井左衛門は、秀吉の心信じ難し、信ずべきに及んで、京都に上り給はん事、いまだ晩からずと申ければ、諸將も皆此儀可然と申故止給ひければ、神君來り給はずば、秀康を殺さるべしと、云傳へける者有けり、神君聞召て、我秀康を人質として遣すに非ず、秀吉子として養へり、もし其子を殺さば其曲秀吉にあり、我知る事にあらず、古より婚姻を結ぶといへども、讐敵となる者多し、我何ぞこれを畏れて、京都に上らんやと仰られけり、此事秀吉に聞えしかば、廿六日に淺野長政、津田隼人正、富田知信、織田長益、羽柴勝雅、土方雄久を使として、大政所を岡崎に質として遣すべし、京都に上り給へと請ければ、神君聞召て、さあらば上るべきよし御返答ありしかば、長政等歸りて、其旨を秀吉に申ける故、秀吉大に喜び給ひて、其事既定りしかば、羽柴美濃守秀長諫て、秀吉弟、稱大和大納言大政所を敵國へ質とせらるゝハ武將の恥これより大なるはなし、家康卿命を拒れば、一戰を決し給ふにしかじと申されければ、秀吉

廼て汝心隘し、これ汝等が知る所にあらずと宣ひけり、廿七日に、神君濱松に歸り給ひ、秀吉の所望によりて井伊直政、本多忠勝、榊原康政が親族を、各一人京都に遣し質とせられけり、十月四日に、神君は權中納言となり給ひ、京都に上らせ給はんとありけるに、諸將皆秀吉天下を三分にして、其二を有て何の憚所ありて、其母堂を質とせらるゝにや、眞僞量りがたしと申ければ、神君聞召て、我また疑なきにあらず、然ども秀吉善言を以て來遇あるに、我不信して京都に至らざるは、畏るゝに似たり、たとへ詭計ありとも、我其誠を竭す時は、誰か議する事あらむやと宣ひて、大久保忠世、井伊直政を留守居とし給ひ、十三日に、濱松を發し給ひ、京都に赴き給ふ、本多平八郎忠勝、榊原小平太康政○中略相從ふ、十五日、岡崎に至り給ひ、大政所の來れるを待給ふ、十八日、松平主殿家忠、池鯉鮒の驛に至り大政所を迎へ、輿を護て岡崎の城に入れ奉りけれども、大政所を見知る人なかりければ、神君の夫人○豐臣秀吉妹を濱松より迎へ入奉りて、會晤ありければ、群疑盡く散じけり、廿日に、神君岡崎を發し給ひければ、大政所は城中に留て質となし、井伊直政、本多重次護衞し奉る、重次がはからひにて、薪柴を屋の旁に積置て、若秀吉異變の事あらば、大政所を燔り殺し奉也との備をなせり、秀吉は神君の來り給ふよしを聞て、館驛を修め治具を設けて、毎日數萬の從者を饗し供張甚盛なり、○中略十一日○十一月に、神君岡崎に還り給へば、長麻呂君○德川秀忠濱松を出て迎へ給ふ、五州の將士悉く來りて賀し奉る、十二日に、井伊直政は大政所を護送して、大坂に還させらる、

〔奧羽永慶軍記十一〕長井泉田爲大崎被取人質事

大崎方百々ノ城主鈴木伊賀守、古川ノ城主北鄕左馬介兩人ガ方ヨリ、泉田安藝守方へ使ヲ以テ、○中略各利ヲ失ヒ重テ戰事モ成ズ、松山ノ味方ト一所ニ成事モ成ズ、空敷數日ヲ送ラレ候ラヘバ、兵粮定テ盡ヌ可ク覺候、御邊ト某等日來交ヲ結テ候ラヘバ、心許ナクゾ存候ラヘ、夫ニ付御邊ト

深谷ノ長井月鑑老、是ヘ人質ニ來リ給ハヾ、殘ル人數ヲバ道ヲ開通シ申ベク候、御兩人ノ御命ヲバ、某等日來ノ好ミニ申、請フテ、助ケマキラスベシトゾイヒ來リケル、長井月鑑是ヲ聞テ、今此大軍飢ニ臨ム所ニ、泉田殿ト我ト人質ニ行テ、五千ノ味方ヲ助ケン事、イト安カルベシトイヒケレバ、泉田安藝守ガ執權湯村源左衞門トイフ者進ミ出、〇中略四方ヲニランデ申タリ、諸卒是ヲ聞、湯村ガイフ所コソ尤ナレ、我等ガ命助カラントテ、大將達ヲ敵ニ渡サン事コソ道ナラテ、イザヤ川ヲ渡シ速ニ討死セント、一同ニイフ所ニ、泉田諸士ニ向テ、〇中略我々二人ガ命ヲ惜ミテ、人質ニユカズシテ、五千ノ味方ヲ殺シタランニハ、末代迄ノ嘲弄ト成ベシ、又人質ニユカズバ、五千ノ味方ト共ニ討ルベシ、タトヘ遁レテ助カルトモ、生甲斐更ニ有ベカラズ、今我々二人ガ命ヲ捨テ、五千ノ味方ヲ助ケン事、大ナル忠ナリト、理ヲ盡シテイヒケレバ、郎等ノ湯村ヲ始メ諸卒尤ト感ジケリ、去程ニ安藝守、月鑑齋二人ハミヅカラ人質ト成テ、敵方ヘ行ケレバ殘ル人數二月廿三日ニハ松山ノ城ニゾ引取ケル、

〔關八州古戰錄十四〕千葉介邦胤横死附當家氏神宿老等ガ事

邦胤ノ息男千鶴丸僅ニ六歲ノ儀ナレバ、譜代ノ家人相議シテ南方ヘ注進シ、氏政〇北條父子ノ旨ヲ伺ヒケレバ、千葉佐倉ハ諸方ノ敵地ニ介タリ、要樞ノ所也トテ、臼井ノ城主原式部少輔胤成ヲ佐倉ニ移入軍代トシ、千鶴丸ヲバ小田原ヘ招キテ、家臣ドモノ人質トセラル、後新介重胤ト號セシハ是ナリ、

〔奧羽永慶軍記十五〕政宗猪苗代出馬事

扨モ猪苗代彈正盛國ハ、今度伊達殿ニ降シケル上ハ、人質ヲ奉ラントテ、二男二郎丸生年十三歲ニ成シヲ、政宗ヘ送リヌ、政宗其少年ヲ引具シ猪苗代ニ來リ給ヘテ盛國ニ對面シ、御邊ヲ疑フニコソ人質ヲバ取ベケレ、何故ニ取ベキ故ナシトテ、二郎ナヲ盛國ニ返シ給フ、盛國承リテ淺カラ

ザル仰ニ候ヘドモ、諸人存ジノ如ク、我嫡子盛胤既ニ敵ト成テ、會津ニ奉公仕候上ハ、味方ノ面々疑心モ候歟ト、某身ノ上ヲ存候ニ依テ、人質ヲバ指上ル也、此上ナガラ嫡子會津ニ居候上ハ、人ニ疑レン事、モ氣遣ヒニ候得バ、是非人質ヲ差上候ハントテ、片倉ガ居城大森ニゾ二郎丸ヲ送リケル、

〔小松軍記〕利長與長重結恨

内府〇徳川家康、中略、丹羽長重ヲ大坂西丸ニ召テ仰ニ曰、利長〇前田亡君〇豐臣秀吉ノ命ヲ背キ、敵通ノ誓紙ヲ破リ、謀叛ノ企不義ノ張本也、御邊ハ親キ中ナレドモ、斯ル不道ニハ與シ玉フマジ、急歸城シテ金澤ノ形勢ヲ追々注進セラルベシ、加州ヘ出軍セシムルニ於テハ、可被仕先陣トテ、粟田口吉光ノ短刀ヲ給ル、長重無一儀吾館ニ歸リ、手廻リ侍ノ少々召具シ、其夜ニ大坂ヲ立テ、日夜ニカケテ小松ニ歸城シ、老臣等ニ談之、密ニ金澤ノ樣子ヲ伺ヒケル、利長傳聞テ意恨ニ思ハレケルハ、縦バ他門ノ族惡樣ニ取ナストモ、彼ハ親キ中ナレバ、事ノ實否ヲモ糺シ、若又此事難爲實儀、一旦吾ニ異見ヲモ加ベキ事ゾカシ、左コソナカラシメ、讒佞ノ黨ト一所ニ成テ、斯ル計コソ返々モ心得ヌ、只兎ニ角ニ馳登テ、虚名ヲ申開ンニハ如ジトテ、陰カニ上洛シ、内府ニ咫尺シ奉テ、樣々陳謝シ、老母ヲ江戸ヘ人質ニ遣シ、其疑ヲ解玉フ、因是三奉行ノ支度相違ス、此節石田佐和山ヨリ折々忍テ大坂ニ來、一味ノ族密會シテ、談合度々ニ及ブト云々、

〔谷川七左衛門覺書〕扨此度關東供奉之諸大名妻子、大坂に御座被成を、御城中へ人質に可被籠の由にて、先細川越中守忠興御室明智日向守光秀の女也の方へ、大坂御奉行中より使來るに付、七月〇慶長五年十七日自害、右御家臣小笠原伊賀、稻富圖書と云ふ者被附置候に付、伊賀介錯仕、屋敷に火を掛け、伊賀儀御供仕、圖書は行方不知也、件の通故妻室人質の沙汰は止み、只親族の内何れにても質に可被成旨、御奉行中より申來る〇山内一豐方故、坪内圖書二男二王此年十一歳、此者御奥小性相勤候、是御

雜載

甥を御養子に被ㇾ爲ㇾ成由にて御出し、二王に岡久左衛門、後藤助九郎御附置被ㇾ成、毛利右馬頭輝元の預りにて後藝州へ行、關ヶ原落去以後人質何れも御返なり、

〔松隣夜話中〕松山ノ上田又次郎安獨齋ヨリ、長江ト云禪僧ヲ以テ、太田三樂方ヘ申サレケルハ、去去年〇永祿六年父子自ラ人質ニ出デ、身ヲ捨ル計策仕候、落合ノ童父子ガ事、重奸ノ者ニ候ヘバ、定テ時日ヲ移サレズ、首ヲ召レテ候ハント存候處ニ、思ノ外未ダ存生致シ、長慶ノ御宅ニ候由其聞ヘ候、去トテハ叶申難キ事ニ候ヘドモ、童ガ義ハ理ヲ曲テ命ヲ給ハリ候ヘカシ、年頃召仕タル其好ミ申ニテハ努々之レ無候、彼モノ年ノ程ニハ比類ナキ健氣ノ者ニ候、古キ言ニモ後世畏可トコソ申傳テ候ヘバ助ケ置、行末ノ器量ヲモ見申度存候、御赦免ニ於ハ安獨齋生前ノ望足リ候ト、長慶ニ付テ所望アリ、三樂聞テサゾ有ン、實ニ此童去々年十六歳ノ程ニモ似ザル振廻、智仁勇ノ三ヲ兼備セリ、後世畏可トノ理リ義ニ當レリ、唯生テ返ベシトテ、長慶入道之ヲ承リ、父子ノ者ヲ獄舍ヨリ出シ、長江ト云使僧ニ渡ス、二人ノ者感涙眼ニアフレ申出ル詞モナシ、安獨齋ノ感悅又大形ナラズ、甥ノ上田主計ヲ以テ幣禮ヲ厚シテ事ヲ謝ス、是ヨリシテ松山衆下屋ニ働事ナシ、三樂モ松山領ヘハ好テ人數ヲ出サズ、武州頃年平均、

〔太閤記一〕大澤次郎左衛門尉事

濃州宇留馬之城主ハ、大澤次郎左衛門尉と云しを、秀吉調略を以て御味方となし其旨十二月〇永祿九年十日信長公へ注進有しかば、我勇氣之程に怖るゝ所にはあらじ、其方謀略之長ずる所に在とて御氣色なり、〇中略かくて秀吉陽春之御禮として、正月五日清洲へ往給はんと思はれけるが、此次に大澤をも同道し御禮申させ宜しからんと思惟し、其旨次郎左衛門尉へ申遣はされしかば、御參けり、初ての御禮なれば其さまゆゝ敷見えたり、然て明日は御暇申上可ㇾ罷歸との事なるに、其夜秀吉をめし、大澤は聞る剛の者也、若又心を變ずる事も有べし、所詮生害せさせんと被ㇾ仰

ければ、秀吉奉り、於敵之地一剛之者を御味方になし奉るは、大澤初にておはしまし候、然るを無下に害し給はゞ重て左樣の計略を以て敵城を御味方に成事有まじく候間、是非々々御宥免被成候へと再三申上しか共、御許容もなかりしかば、宿に歸て大澤を呼よせ、密かに云ひけるは、汝之身之上においては聊無心元事侍る條、此上は我を人質に取り急退候へと、丸腰に成て被申しを、大澤心は剛なれ共、道を知ざる者なる故、意得たると云つゝ、常の人質のごとくに、脇指を心もとにおしあて、其夜退にけり、

〔飛州軍覽記〕江馬家滅亡之事

輝盛〇江馬 甲州ニテ此有樣ヲ聞、彌信玄ニツカヘ、其上高原ノ圓城寺ハ舍弟ナレバ、甲州ニ迎テ信玄ヘ人質ニ渡シケレバ、信玄是ヲ還俗サセテ江馬右馬允ト名乘ラセ、手勢ヲ預ケ幕下ノ先鋒トシテ、既ニ飛彈國退治セント極ム、

〔甲陽軍鑑九上品第十八〕晴信公〇中略 天正元年癸酉四月十二日、五十三歳にて御他界まで、終に敵に押付を見せず、〇中略 甲州より八日九日路他國をとり、他國の大將の人質をとり給ふ、餘所へは家老の子の一人も不出なり、

〔武功雜記下〕一蒲生氏郷ノ家來ドモ雜談ノ剌、橋本總兵衛ト云モノ、ソレガシハ子ドモアマタ持候間、十萬石ノ約束ナラバ一人ナドハ河ヘ捨ベシト云、コノ事ヲ氏鄕キカレ、總兵衛其方ハ知行ニ子ヲ替ント申サルヽ由、扨々タノモシカラヌ心底カナ、祿ニハ人質ヲモワスレラルベキヤ、內內御手前ハ一萬石ノ約束ニテ呼置タレドモ、千石ツカハスベキト申サル、依之橋本立退タル由、

〔武隱叢話五〕畠山入庵金言之事

關ケ原御陣之前、家康公小山御在陣之砌、上方ニテ石田治部謀反シ、小山在陣ノ大小名ノ人質ヲ悉ク治部三成〇石田方ヘ取入由有注進、家康公仰出サルヽハ、各是迄ノ御同陣致滿足候、然ドモ石田

逆心シ、各ノ妻子取人質候條、嘸可被思無心元、早々大坂ヘ上リ妻子ヲ被片付尤ニ候、家康少モ不存恨候トノ御意也、福島左衛門大夫正則、黑田甲斐守長政、細川越中守忠興、加藤左馬介嘉明ヲ始、各寄合有評議ケルハ、此儘内府之御味方仕ルガ當理歟、又捨人質違義理歟トノ談合也、此時畠山入庵ハ桑山左衛門佐ト一所在末座、進出テ向福島〇正則加藤〇嘉明申ケルハ、各是程ノ事御了簡ニ落兼候哉、妻子ヲ治部方ヘ人質ニ出シ玉ヒテ、内府之味方シ玉ハヾ、筋目違テ天下之誅、妻子ノ恨モ可有之、各ノ人質ハ秀吉公秀頼公ヘ出置玉フ人質ナルヲ、三成奪之各ヲ爲招、然バ不義ハ在治部テ、此方ニ無不義、然レバ只一筋ニ内府之御手ヲ引候ハンコソ可然被申故、福島、加藤、細川、黑田ヲ始、大小名一途ニ家康公御味方ニ極、後々マデモ入庵ガ申分抜モ聞事也ト、加藤左馬介、細川越中守、桑山左衛門佐物語也、

〔武功雜記〕四　權現樣〇德川家康常々上意ニ、人質ハ時ニ依テ取置モノニテ候、アマリ久敷取置申候ヘバ、親子トテモシタシミウスク成候ヘバ、結句無詮候、義理ヲツヨク存候モノハ、主人ノタメニ親子トテモ、存カヘ申候モノハ無之候ヘバ、能々親子ノ間シタシマセ置テ、時ニノゾンデ人質ヲ取候ヘバ、右ノシタシミノヲバワスレズシテ、恩愛ニヽボレテ、人質ヲステカネ申モノニテ候、サレテ人質ヲタノム事ニアラズ候、義ヲ以不義ヲ討時ハ、石ヲ以テ卵ニナゲウツガゴトシト被仰候由、〇中略

權現樣御意ニ、仕置ノ肝要ハ、一萬石以上ノ面々ハ、タトヒ過科有之トモ、死罪ニ不可行、可令流罪者也、跡目ハ半歲ノ子ナリトモ有之者可相立也、人質ヲユルスベカラズトノ御事、

〔川角太閤記〕五　關ケ原御合戰散じて後、島津殿と立花左近殿被仰談、大坂飯森迄被相退候、立花殿大津の攻手にて御座候、夫より輝元大坂へ御座候處に、使者を被立、關ケ原の合戰こそ負に成候とも、毛利殿後詰被成候へば、八幡平塚のあたりにて、今一戰可仕と被相尋候處に、毛利家もそも

そもの様に成行申候故、輝元返事もにんぢやくの處を聞切、さらはとて兩人立合、舟にて大坂より九州へ被罷下候、其内に島津殿は人質を大坂より被差下候處、如水是を聞付け居城中津の沖へせき船を被指出、島津殿人質船を鐵砲ずくめに、船共に被討沈候、其後島津どのも立花殿も面面の城へ入被申候事、

〔國師日記〕七月〇慶長十九年廿九日、秀頼公使東市正〇片桐且元往駿府陳謝鐘銘之事、〇中略重而母堂〇秀頼母淀君以大藏卿〇大野修理母尼正永〇渡邊内藏助母兩人被演無誤旨、兩女入東市正駿府之宅、〇中略於是九月十一日二女出駿河、又有命東市正留駿府一兩日、公以崇傳和尚〇南禪寺金地院本多上野介、命片桐曰、大坂擧兵之儀不肯已、其企已顯然、如此則我千載之後、定有亂逆乎、縱我雖存日、其事未止、則秀頼與大樹不和無疑、思之則嘆而有餘矣、東市正可相計云々、片桐曰、下不能計上焉、承鈞命達之于秀頼矣、公猶命片桐以和睦之事、片桐再三雖辭不能焉、遂演愚慮曰、母堂爲質可被下向關東乎、退去大坂可被遷他郡、秀頼公可來聘東武乎、兩使違之、已賜歸暇、東市正欲談大御所之言而與兩女同報于大坂、急馳駕到江州水口、與兩女相遇語駿府之事、兩女喜而大御所懇詞、東市正曰、公命以表丹心者如何思之乎、兩女曰、故太閤之後到今日請大御所命、逐無悖逆、猶恭順兩公之命、而對關東不可有疎意而已、東市正曰、竊惟大御所之言表赤心者無他、秀頼去大坂被遷他郡乎、秀頼往關東乎、母堂爲質下向江戸、以此三件請于大御所、而隨彼之命則協兩公之旨、永可成水魚之思焉、否則表赤心者無實乎、兩女聞而大怒、竊思我直承大御所鈞命、更無如此之事、秀頼母子倩而爲父子之親矣、以其情之厚故到下愚而蒙芳辭、大御所之懇情於是乎可見焉、東市正爲在我身賣秀頼母子者也、雖不出其言、忿怒形顏色、遽馳脚力大坂告東市正之造意、翌早發駕、東市正依有談板倉伊賀守之事赴京師、兩女從伏見先立、東市正返大坂訴東市正言、

東市正於駿府請三件者、雖知其事之難、就大御所急詰問、故不得已而請焉、東市正竊思、今去大坂

城、則難大擧矣、秀頼公下關東則其威熸焉、莫如母堂往關東耶、請之兩公者喜而許焉、而後定第宅於江戸、撰其地之斥鹵泥濘若峻壑丘陵不可居者、可爲第宅之所築四面之構壘、浚內外之湟潰、易其險高其卑過一兩年、母堂居不可輕易、則宮房鏤金銀者、經始之勢又一兩年、而都三四年也、大御所之年齒已縮、捐館不有日矣、江戸之構營已成、而大御所未薨則僞言、母堂病痾沈難往關東、其病瘳則速可往焉、荏苒送年月而待大御所之薨者、大坂全勝之策也、故請焉而欲逹秀頼、是鋒鏑荐起、忽空其儀矣、悲哉抑又命乎、

古事類苑

兵事部十九

生虜

古事類苑

兵事部十九

生虜

生虜ハ、イケドリ又ハトリコト稱シ、戰陣ニ臨ミテ、敵ノ將卒ヲ生ナガラ捕フルヲ云フ、凡ソ生虜ハ、多クハ殺サルヽモノナレドモ、其間死ヲ免ルヽモノモ亦尠カラズ、源爲朝ガ勇ヲ以テシ、源賴朝ハ幼ヲ以テシテ、並ニ流ニ處セラレシガ如キ是ナリ、又他人ノ乞ニ由リ、生虜ヲ與ヘテ甘心セシムルコトアリ、奈良ノ大衆ガ平重衡ニ於ケル、堺ノ町人ガ大野道犬ニ於ケルガ如キ是ナリ、其他死ヲ賜フアリ、糺問シテ後宥スアリ、其罪ヲ問ハズシテ直ニ放免スルアリ、敵陣ニ放還スルアリ、而シテ生虜ニモ節ヲ守リテ屈セザルアリ、生還ヲ屑トセザルアリ、調伊企儺ノ新羅ノ國將ヲ罵リ、土佐坊昌俊ノ源義經ニ屈セザリシガ如キハ、人ノ知ル所ナリ、其他生虜ヲ奪ヒ還スコトアリ、生虜ヲ交換スルコトアリ、小西行長ノ、吉利支丹ヲ奉ズルヲ以テ自殺スルコト能ハズ、自ラ求メテ生虜タリシガ如キハ、極メテ異例ナリ、又生虜ヲ神ニ獻ジテ贄ト爲スコトアリ、日本武尊ノ東夷ヲ伊勢神宮ニ獻ジ給ヒ、源賴朝ノ樋爪季衡ヲ宇都宮ニ獻ゼシ類ナリ、又外國ヨリ生虜ヲ貢獻セシコトアレドモ、外交部ニ詳ナレバ此篇ニ載セズ、

名稱

〔下學集 下 態藝〕生捕（イケドリ）

〔倭訓栞 中編 二 伊〕いけどり　日本紀に生虜をよめり、生捕の義也、又生獲ともみゆ、

優遇生虜

〔類聚名義抄 三手〕擒 繋トリコ

〔以呂波字類抄 止人倫〕俘 トリコ 軍所獲也　禽　孥　擒 已上同

〔倭訓栞 前編十八〕とりこ　虜又擒又俘をよめり、捕籠の義成べし、

〔吾妻鏡 三〕壽永三年（○元暦元年）二月七日丙寅、本三位中將（重衡）於明石浦爲景時家國等被生虜、十四日癸酉、右衞門權佐定長奉勅定、爲推問本三位中將重衡卿、向故中御門中納言（家成）八條堀川堂、土肥次郎實平同車彼卿來會件堂、於弘庇問之、口狀條々注進之云云、十六日乙亥、今日又定長推問重衡卿事次第同一昨日云云、三月十日己亥、三位中將重衡卿、今日出京赴關東、梶原平三景時相具之、是武衞（○源頼朝）依令申請給也、廿七日丙辰、三品羽林著伊豆國府、境節武衞令坐北條給之間、景時以專使伺子細、早相具可參當所之由被仰、仍伴參、但明旦可遂面謁之由被仰羽林云云、廿八日丁巳、被請本三位中將（藍摺直垂立烏帽子）引於廊令謁給、仰云、且爲奉慰君御憤、且爲雪父尸骸之恥、試企石橋合戰以降、令對治平氏之逆亂如指掌、仍及面拜、不肖眉目也、此上者謁槐門（○平宗盛）之事、亦無疑歟者、羽林答申曰、源平爲天下警衞之處、頃年之間、當家獨爲朝廷之計、昇進者八十許輩、思其繁榮者二十餘年也、而今運命之依縮、爲囚人參入上者、不能左右、携弓馬之者、爲敵被虜、強非恥辱、早可被處斬罪云云、無纖介之憚奉問答、聞者莫不感、其後被召預狩野介云云、四月八日丙子、本三位中將自伊豆國來著鎌倉、仍武衞點郭內屋一宇被招入之、狩野介一族郎從等、每夜十人令結番守護之、廿日戊子、本三位中將依武衞御免有沐浴之儀、其後及秉燭之期、稱爲慰徒然、被遣藤判官代邦通、工藤一臈祐經幷官女一人（號千手前）等於羽林之方、剩被副送竹葉上林已下、羽林殊喜悅、遊興移剋、祐經打鼓歌今樣、女房彈琵琶、羽林和橫笛、先吹五常樂、爲下官以可爲後生樂由稱之、次吹皇麞急、謂往生急、凡於事莫不催興、及夜半女房欲歸、羽林暫抑留之、而盃及朗詠、燭暗數行虞氏淚、夜深四面楚歌聲云云、其後各歸參御前、（○中略）武衞殊令感事之體給、依憚世上之聞、吾不臨其座、爲恨之由被仰云云、武衞又令持宿

衣一領於千手前、更被送遣、其上以祐經邊鄙之女還可有其興歟、御在國之程可被召置之由被仰云云、祐經頻憐羽林、是往年候小松内府〇平重盛之時、常見此羽林之間、于今不忘舊好歟、

〔川角太閤記三〕佐久間玄蕃〇政盛事、志津がたけの御合戰より、越前のつるがのおく在郷へ主從三人にて百姓の家へ立より候つるが、山路を傳ひ候故ときをふみ、杖にすがり百姓にもくさをもらひ候てときの口に灸を仕候内の者主にまなび、あのもの我々召つれ候者にて候、殊の外草臥申候間、食をかい可申候、はや〳〵燒候へと賴候處、百姓ばら心に、あのときをふみたるは主人也、二人の者は、ときふみの内の者かと見及、食燒せうり可申候、其うち御やすみ候へと申だまし候なり、百姓等に云聞せ、棒すくめにして召捕也、百姓推量のごとく、ときふみは佐久間玄蕃也、二人は玄蕃内の者なり、召捕同國北之庄江注進する事、秀吉御心には無情縄をかけたるよなど思召候へども、不及是非仕合也、秀吉御心には、縄をとき身をゆる〳〵と持せ、乘物に乘せ、道中よきにいたはり、それより直に上せよ、所は宇治の槇島におけよと御意にて、道中よきに痛り槇島に置、乍去御番は堅被仰付候事、〇中略秀吉御分別には、合戰のかちまけは世間のならひ也、秀吉まけ候ば、今日は人の上明日は又我身の上と思召被出、百姓には不似合事を仕出したる物かな、令見のため褒美にはた物にあげよと御意にて、其時の十二人はた物に御あげ被成候、是は明智討たる百姓には不可似被討手に科の輕重有なれば也、〇中略

佐久間玄蕃を御敎訓の事、蜂須賀彥右衞門を槇の嶋へ御使に被立、御意には、勝家事は右之通なれば、定て無是非と可被思也、はや跡之儀は何事ももくさんしてすてられよ、やがて明國おほく出來すべき也、大國を一國可宛行者也、此上秀吉を勝家と被思なば、秀吉滿足たるべきと被仰遣候處に、案の外なる玄蕃が返事と聞え申候、御意之通りは承屆候、合戰のかちまけは世間の有ならひ也、勝家合戰利運にもなるならば、秀吉を我等が成行套に可成とこそ存候に、勝家自害の其

上は、玄蕃浮世に留り、たとへ天下を被下候とも、勝家に可思替事存もよらず候、自害と存候ひつるが、待玄ばし、我事心いかやうなるきうめいにも可相事を懇、玄蕃自害したるよと取沙汰於有之は、かばねの上のふかくなるべきため、自害はとまりぬる也、死罪の體いか様にも可被行者也、はや〳〵と御返事に及候事、玄蕃が返事之通被申上候へば、さりとは玄蕃に似合たる返事かな、心底を不被殘候事神妙さよ、君子に二言なければ、重而の教訓に不及、さらば腹を切せよとて、森勘八を御使に被立候、秀吉江一言の訴訟あり、是にてかうべを被刎候へばひそかの様に候、ねがはくは車に乘せ、繩下の體上下に見物させ、一條の辻より下京江引下させ給ふ程ならば可忝もの也、その上秀吉威光も天下へ響渡るにてはなきやの事、秀吉被聞召、さらば玄蕃遺言にまかせよとの御意にて、京江被召寄、車の次第そうにすべからず、いさぎよくかざりたてよとの御意にて、玄蕃所へは是を被着候へとて、御小袖二重被遣候、玄蕃是を見て、忝存候、乍去紋がら仕たて様氣に入不申候、大もんのべにの物のひろ袖、裏はもみこうばいの小袖可給候、是を着申車の上に打乘候ば、目にたち、あれこそ玄蕃よと可被見ため也、軍陣の時の大ざし物と人目にかゝり可申者也、右の小袖にては、軍陣之時の鐵炮の者などのさし物に似たるべき也と申上候事、秀吉聞召被届、最期までぶへんの心忘不置事よな、をし〳〵と御意にて、望の如くなる小袖二ッ、一ッははくの小袖、何れも廣袖也、玄蕃宿へ被遣、玄蕃さしあげ戴べにの物のおはもんを上に着、さて車をさしよする時、態と繩を掛よ、越前つるがの在郷にて、百姓ばらに被召捕候時、玄蕃繩掛たる事、天下に其無隱事なり、繩を不掛して被渡ならば、繩侘言仕たるかと見物の者も不審可立也とて、繩を掛り車に乘る、一條の辻より下京まで、玄蕃遺言にまかせ渡しける、京中の上下見物衆、いげうくんじゆをなす事かぎりなし、さて下京の町屋江入置、角と申上候事、御意には夜に入又本の槇島へ被遣御成敗之次第、晝は無用也、夜る頭を刎よと被仰出、又森勘八に被仰付、槇嶋に着しか

ば、直に野に敷皮を敷せ直し、御腹被召候得とて脇差を扇にするゑ指出し候へバ、腹を切るなど、ゝ申事は、よのつねのありが、ゝりの事にてこそ候へ、腹を切べき程ならば、何とて今日の車の上の縄を可掛、此上を後手にまはし、よくいましめられよと被申候へども、晝のたかてこのいましめの縄迄にて頭を刎事、勘八殿玄蕃死骸に念を入、よくをさめ置、其後石堂をするゑ、玄蕃墓印と定被置候事、

〔太閤記 六〕柴田権六佐久間玄蕃允事

権六郎〈○柴田勝家養子勝久〉玄蕃〈○佐久間盛政〉事、洛中を渡し六條河原にて生害有べき旨、淺野彌兵衛尉に被仰出に依、其沙汰に及びぬ、権六は不及是非體、骨髓に徹し見えてけり、玄蕃允が曰、〈○中略〉生て不得封侯、死五鼎に烹るゝ、共悔なけん、是大丈夫之志なり、吁不知よなと云、淺野を白眼にし大にゑかりしは、あつはれ大剛之者なりと人皆感にあへりし也、所詮夢なりとて、硯をこひ一首かくなん、

世中をめぐりもはてぬ小車は火宅のかどを出るなりけり

中々色もかはらず、首をうけて終にけり、鬼玄蕃と云れし事も有し物を、

〔奥羽永慶軍記 一〕佐竹白川城ヲ攻落ス事

和田〈○興守〉ハ智略ノ軍ナレバ、大將義親〈○白川〉ト引組生捕ニゾ仕タリケル、〈○中略〉義親ヲバ佐竹ノ一門義直ニ預ラレ、仁義正シキ侍二十餘人ヲ付テ、馳走丁寧ヲ盡シ、饗應スル事限ナシ、義親餘リノ無念ニヤ、歯ヲカミ拳ヲ握リ、涙ハラ〳〵ト流シ、何故ニ斯ノ如ク馳走ヲバセラルヽヤ、威ヲ爭ヒ領ヲ奪ヒ合フ事、皆是亂世ノナラヒ也、又合戰セバ、カナラズ一方負ズトイフ事ナシ、我運命盡テ既ニ生捕ラレヌル上ハ、早ク首ヲ刎ラレヨ、死テ恨ヲ泉下ニ報ゼン、馳走ノ事百味ノ飲食モ悦バズ、願ハクハ和田ガ首ヲ刎テ我ニ備ヘ得サセヨカシ、イカナル美酒佳肴ヨリモ心地ヨク食セン

ト怒リケルコソ恐ロシケレ、〇中略義重〇佐竹此者ガ怒リヲナダメ、心ヲ勇メテ助ケ置ント思ヒ給ヒケレバ、養子ノ姫ヲ一人義親ニ賜フ、夫ヨリ婚姻ノ因ミ深ク、義親怨恨ミヲ忘レ、後ニハ和田武勇ノ誉ミアル事ヲ感ジ、遺恨ヲ殘サズ一家ノゴトク睦ケレバ、和田モ其志ヲ感ジ、偏ニ古主ノ如ク振廻ケル、

〔常山紀談十五〕田中兵部大輔吉政、石田〇三成を生捕にせられしが、いと懇に會釋して、數十萬の軍兵をひきゐられし事、智謀のゆたしき事と申すべし、軍の勝敗は天の命に候へば力に及びがたしと禮義正しかりければ、三成打わらひ、

三成此時坐上の楹(ハシラ)によりかゝり、もとより田兵(たひやう)と呼しが如く、此時も田兵と云て常に替らざりしとなり、

秀頼公の御爲に害を除き、太閤の恩に報い奉らんと思ひしに、運盡かくなりし事、何をか悔むべき、是は太閤より賜はりし切刃正宗の脇ざしなり、かたみにまゐらすよとて與へけり、

馳走の士を付てもてなしたれども、片時も早く死んとて食せず、馳走の士、いかで兵部がはからひに及ぶべき、よくいたはりて最後の御用意候へかしといひければ、さらば此頃腹中のあしきに韮雜水をたまへと云しかば、其設してすゝめければ、快く食して打伏て鼾かきたり、

田中石田を引具して大津に參りければ、東照宮本多正純に石田を守護すべきよし仰出されけり、正純石田に向ひて、秀頼公年若く事の是非をしろしめさじ、唯太平を致す道こそ有べきに、よしなき軍おこしてかく恥辱にも及れしぞかしと云しに、三成、吾土民より國を賜ひたる恩たとへんやうなし、世のさまを見るに、德川殿を打亡さずば、終に豐臣家のためよからじと思ひて、秀家景勝を始として、同心なかりしを、しひて勸めて遂に此軍をば起したりき、戰ひに臨んで二心ある輩裏切せし故、勝べき軍に打まけぬるこそ口惜けれ、二心ある人だになくば、汝たちを始め

かくの如くからめなんに、志を失ひたるよ、運盡ぬれば九郎判官も衣川にて空しくなりたりき、吾打まけしは天命なりといふ、正純、智將は人情を計り時勢を知るとこそ申せ、諸將の同心せざるも知ず、かろ〱しうも軍を起されしものかな、軍敗れて自害もせでからめられしはいかにといふに、三成忿て、汝は武略は露も知ざりき、腹切て人手にかゝらじとするは葉武者の事よ、頼朝公土肥の杉山にて朽木の洞に身をひそめし心はよも知らじ、大庭にからめられなば汝に嘲らるべし、大將の道はかたるとも汝が耳には入らじ、今は是までなりとて物もいはず、

東照宮の御前へ三成を召出して、いかに武將もかゝる事むかしより有ためしなり、耻にあらずと仰られしかば、三成けしき打とけて、唯天運のさからしむる處にて候、とう〱首をはねられ候へと申す、東照宮、三成はさすがに大將の器量なりけるよ、平宗盛には大に異なりと仰有けるともいへり、又一說、中納言秀詮、石田が體を見ばやとて座を立れしに、細川忠興何でふ益なき事なりといへども聞入ず、三成秀秋を見て、われ汝が二タ心あるを知ざりしは愚なり、されども約にたがひ義をすてゝ、人を欺きて裏切したるは、武將の耻辱末の世まで語り傳へて笑ふべしと云けるに、秀秋詞なかりけり、又三成大津にいたる時、御本陣の門外に疊をしき其上に坐したりしに、諸將打過けるが、福島正則無益の亂を起して其有樣なりといはれしに、石田おのれを生どりて縛らざりしは天運なりと云ければ、正則詞なく過られぬ、黑田長政通られしに、馬より下りて、不幸にてかくなり給ひぬ、是をとて著られし羽折をぬぎて著せられたりといへり、

石田を始め小西長○行安國寺瓊○惠生どられて、三人の肌に木綿のやぶれたるものを著たるを東照宮聞し召、石田は日本の政務を取たる者なり、小西も宇土の城主なり、安國寺またいやしむべき者にあらず、軍敗れて身の置處なき姿となるも、大將の盛衰は古今に珍しからず、命をみだり

に棄ざるは將の心とする處、和漢其ためし多し、更に耻辱にあらず、其まゝ京中をわたしなば、將たる者に耻をあたふる事吾耻なるべしと仰有て、三人に小袖を賜りけり、石田に見すれば、これはたがあたへたるぞと問ふ、江戸の上樣よりといへば、誰事ぞといふ、德川殿と答ふれば、三成何德川殿を尊ぶべきとて一言の禮に及ばず、あざ笑ひて居たりけり、

小西は、敵對の吾にこれまでのいたはり、心に耻たりとて涙を落しけり、安國寺はとかくいはで赤面し俯き居たりけるとぞ、三成を誅する時、車に載て六條河原に出すに、石田顏色平生の如くなりしとかや、又石田治部が天下を取たると云けるを聞て打笑ひわれ大軍を率ゐ天下わけ目の軍しけることは、天地やぶれざる間は、かくれあらじ、ちつとも心にはづる事なきよはやさずしてもありなんといひけるとぞ、

〔常山紀談二十二〕一説に長曾我部を生捕て、繩二筋つけて白洲に引居たり、台德院殿秀忠〇德川御側の士を以て、數千の大將たる身自害をすべき事なるに、さはなかりしは如何ぞと御尋あり、盛親わるびれたる色もなく、朝の軍に打勝たれども、後の軍に赤備の軍兵に打合て、味方多く討死し敗北せし事、是非なき次第に候と申す、又討死するか自害するか二ツの志なかりし事、返す〻〻も不審なりと、再び御尋仰出されしに、長曾我部承り、盛親も一方の大將たる身に候へば、葉武者と同じく、かろ〴〵しく討死すべきに候はずと申す、再び兵を起して耻を雪ぐべき心言外にあらはれたり、扨其後引出して警固し居たりしに、飯をうづ高くもりて長曾我部にすゆる、盛親警固の士の中おとなしやかに見ゆる人を呼て、昔より名將もからめ捕るゝ事ためし多ければ、露ばかりも耻とおもふ事なし、然るにかゝるいやしき食物をすゆる禮義やある、とう〴〵首を刎てこそよけれと云ける時、井伊掃部頭直孝〇かたへを打過これを見て、法もなきふるまひどもかなと大に怒り、御厨に下知していさぎよく料理を調へさせ、繩をとかせ、座敷に長曾我部を招き

入れ、いと懇に勞れを休め給へといはれしかば、長曾我部是こそ禮義をえりたる武將の道よと悦びて、終始少しもひるめるけしきはなかりけるとぞ、

〔小右記〕寛仁三年六月廿九日甲寅、秉燭後、左中辨經通〇中略傳仰云、太宰言上解文中、注進勳功者、可賞哉否、又流來者幷初刀伊人等勘問等事可定申、〇中略一生虜者勘問事同前、諸卿等定申云、所注申之人、合戰間雖多中矢者、捕得賊徒唯三人也、而勘問之場共陳申高麗國人之爲刀伊賊徒等被虜之由、縱雖非刀伊國之人、同船送數日之間、定見其案內、而不窮問其趣、難散鬱結、又拷訊之者不承伏時、度々可究拷也、加之不注杖數、頗以不憚、重以窮問、可言上其旨歟、

〔源平盛衰記十三〕高倉宮信連戰事

信連〇長谷部持タルモノハナシ、手ヲハタケテ飛デ係、長刀ニノリハヅシテ又右ノ股ヲサヽレツヽ、是ニシテ被虜、其後官人御所中ニ亂入テ、天井ヲ破リ板ジキヲ放テ、サガセドモ〳〵宮モ御渡ナシ、人一人モナカリケレバ、唯信連計ヲ居廻シテ、縄ヲ付テ六波羅へ參ラント云信連ハ云甲斐ナキ者共カナ、マテトヨ、侍程ノ者ニナハ懸事ヤアル、況ヤ靫負尉ニ於テヲヤ、無下ナル田舍撿非違使共カナ、〇中略縄ヲ付ズトテモ信連誤ナケレバ參テ申ベシト云ケレバ、サテハトテ唯追立テ六波羅ノ大庭ニ引居タリ、前右大將〇平宗盛ハ、御簾ヲ半卷上テ、大口計ニ白衣ニテ長押ニ尻懸、大床ニ足差出シテ、謀叛ノ次第幷猥藉ノ樣、拷木ニ懸テ可召問ト宣ヘバ、信連、餘御前ノ恐々ナルニ雜人ヲ被退候ヘ、不預拷問トモ、御尋ニ付テ所存ヲバ申ベシ、イカニ預推問、骨身ヲバ微塵ニ被碎ト云共、無事申サジト存ザラン事ハ申マジ、但今夜狼藉事身ニ誤リナシ、先所存ニテ侍レバ申候、侍品ノ者ガ朝ニ奉召仕時、奉公私ナケレバ諸大夫ニアガリ、其ヨリ殿上ヲ免サレ奉ルコト其例是多シ、就中信連不肖ノ身也ト申セドモ、私ニ主ヲ濫テ諸亭ニウデグヒヲニギラズ、久ク宮ノ御所ニ召仕テ奉公年積レリ、普通ノ侍ニ思食准フベカラズ、御座席コソ無骨ニ覺エ侍レト申、是ハ大將

白衣ニテ長押ニ尻懸タル事ヲ咎メ申ナルベシ、大將モ苦々シク覺サレケリ、次ニ略○中又唯一人候ケル信連ニ被追立、度々逃出逃出シケルモ云甲斐ナシ、衞府ノ官ヲケガス侍ニ、繩付ケムナド申シ行ヒツル事、無下ニ骨法ヲ不知ケリ、侍ケガシニ御恩塞ニ、一人也トモ故實ノ者コソ召仕レメト、憚ル處ナクコソ申タレ、大將彌腹立シテ、兎角ノ陳答ニ不及、疾々川原ニ引出シテ首ヲ刎ヨト宣ケリ、信連重テ申ケルハ、是ハ命ヲ惜ミ咎ヲ申ヒラカントニハ非ズ、假令此御所ヘ思懸ヌ夜中ニ物具シタル者ガ宣旨ノ御使トテ亂レ入ランヲバ、宣旨ノ言ニ恐、侍共ガ防戰ヒ追出タランヲバ不覺トヤ仰スベキ、唯有ノ儘ノ事ニ侍ト云ケレバ、平家ノ侍共ガ、コレヲ聞テ、ゲニモ道理ナリ、略○中度々名ヲ顯シタル剛者ヲ忽ニ被切事不便也、信連體ノ者ヲコソ御所中ニモ召仕ハセ給ベケレナド、人々申合ケレバ、大將ゲニモト覺レケン、死罪ヲバ宥テ、且ク左ノ獄ニ被入ケリ、

〔太平記四〕笠置四人死罪流刑事

廿一日○正慶元年六月殿法印良忠ヲバ、大炊御門油小路ノ籌小串五郎兵衞尉秀信召捕テ、六波羅ヘ出シタリシカバ、越後守仲時、齋藤十郎兵衞ヲ使ニテ被申ケルハ、此比一天ノ君ダニモ叶ハセ給ハヌ御謀叛ヲ、御身ナンド思立玉ハン事、且ハ無止、且ハ楚忽ニコソ覺テ候ヘ、先帝ヲ奪ヒ進セン爲ニ、當所ノ繪圖ナンドマデ持廻ラレ候ケル條、武敵ノ至リ重科無雙、隱謀ノ企罪責有餘、計ノ次第一々ニノベラレ候ヘ、具ニ關東ヘ可注進トゾ宣ケル、法印返事セラレケルハ、普天ノ下無非王土、卒土濱無非王民、誰カ先帝ノ宸襟ヲ歎キ奉ラザラン、人タル者是ヲ喜ベキヤ、叡慮ニ代テ玉體ヲ奪奉ラント企事、ナジカハ可無止、爲誅無道隱謀ヲ企事、更ニ非楚忽儀、始ヨリ叡慮ノ趣ヲ存知、笠置ノ皇居ヘ參内セシ條無子細、而ルヲ白地ニ出京ノ蹤ニ城郭無固、官軍敗北ノ間、無力本意ヲ失ヘリ、其間ニ具行卿相談シテ綸旨ヲ申下、諸國ノ兵ニ賦シ條勿論ナリ、有程ノ事ハ此等ナリトゾ返答セラレケル、

〔氏鄕記〕中 小田原軍事

河井拾介ガ若黨小勘ト云者、敵一人生捕テキテ參ル、是ハ岩槻十郎ガ郞等三島文右衞門ト云モノナリ、○中略生捕敵氏鄕ヨリ關白殿ヘ披露セラレシカバ、秀吉公御感アリテ、小勘ニモ段子ノ羽織ヲ下サル、○中略彼生捕ヲバ、城中ノ樣子ヲ尋ラレテ後茜根ノ著物ヲキセ、城ノ方ヘ向ハセテ、御本陣ニ生張付キ上トアリケリ、虜ガ白狀ニ、城中ニハ兵粮盡候由申ケレバ、此樣子ヲ矢文ニ書テ、城中ヘ射籠給シナリ、

〔常山紀談〕二十二 明石掃部頭全登、大坂に籠りしが、落城の後討死しけるや落行たるや定かならず、明石が士澤原孫太郎一說に右衞門孫を生捕て、明石が行方を問るゝに、志らずといふ、さらばとて拷問に及びけれども、更にいはずあまりにきびしく責られて涙を流しければ、行方をいふにこそあれとて、いかにと問ふに、澤原いひけるは、關東の兩御所○德川家康秀忠の運つよくおはしまし候を感じ奉りての事に候、士たるほどの者、骨をきざまるゝとも主君のゆくへを申べきや、此度大坂軍に勝ば兩御所落行せ給ふべし、其時御邊たちをからめて、今我をせめられ候ごとくならば、主君の行方をも白狀すべき心なればこそ、かく我を責らるゝならめとおもひて、おぼえず涙の流るゝと申ければ、人々詞なかりけり、東照宮聞し召、たぐひなき忠義の士なり、よくいたはり候へとて御赦し有けるとぞ、

〔武將感狀記〕七 米村權右衞門ハ、大野修理亮治長が草履取ナリシガ、大坂一亂ノ前ニトリ立テ士トナシタル者ナリ、才器勇力アリケレバ、治長ガ恩顧ヨノツネナラズ、大坂沒落ノ後、米村治長ガ遺言ヲ受テ、密ニ其小女ヲ養育シテ匿居タリシヲ囚テ江戶ニ到ル、於殿中大坂ノ金銀財寶ヲ問ルヽニ不知ト對、汝修理ガ寵士ナリ、何ゾ不知ト謂ンヤ、不知ト云ハヾ責テ問ト云ヲ聞テ、米村額ヲ地ニ付テアリシガ、頭ヲアゲテ、是ハ御奉行衆ノ御詞トモ不覺候、拙父ハ鄙賤ナリシヲ、今ハ士

ノ數ニ入候、修理大坂ニ在テ軍陣ノ成敗ヲ司リ、運命ノ存亡ヲ社、且晡ニ計リ候ヘ、背テ金銀財寶ヲ心トセズ候、是以テ修理ガ部下モ亦敵ヲ撃首ヲ取ントノミ思テ、他ノ慮ヲナスニ違アラズ候、以理申候ニ、城中戰ニ負ル時ハ、首領ヲモ不保千萬ノ財寶アリトモ何ニカ用候ン、如勝軍ナラバ、兩將軍〇德川家康秀忠ノ御腰物マデ皆我儕ガ有ナリ、財寶ヲ不求シテ財寶ニアキミチ候ハン、且可申儀アラバ卽座ニ申サン、可申ノ理ナクバ、口ヲ裂、舌ヲ拔レテモ可申ヤ、責テ問トハ何事ゾト憚氣色モナク申ケレバ、源君聞召、カレハ無類ノ剛ノ者ナリ、渠ガ如キ者ヲ兵衞常陸ニモ附置タキ事ナリトテ、則御赦免アリ、米村後淺野因幡守長治ニ仕ヘヌ、衣服飲食ヲ賤クシテ、武具ヲキラビヤカニス、治長ガ小女ヲ京師ニ置テ育事、懇情ヲ盡セリ、因州ノ祿ヲ受タルハ爲之トゾ、

〔陸奧話記〕同年〇天喜五年十一月、將軍〇源賴義率兵千八百餘人、欲討貞任、〇中略散位平國妙者出羽國人也、驍勇能戰、常以寡敗衆、未嘗敗北、俗號曰平不負、字曰平大夫、故加能云不負、將軍招之令爲前帥、而馬仆爲賊所擒、賊帥經清〇藤原者國妙之外甥也、以故得免、武士猶以爲耻矣、

〔吾妻鏡〕二治承五年〇養和元年七月五日己卯、長尾新六定景蒙厚免、是去年石橋合戰時、討佐奈田與一義忠之間、武衞〇源賴朝殊被處奇怪、賜于義忠父岡崎四郎義實、義實元自專慈悲者也、仍不能梟首、只爲囚人送日之處、定景令持法華經、毎日轉讀敢不怠、而義實稱去夜有夢告、申武衞云、定景爲愚息敵之間、不加誅戮者雖難散鬱陶、爲法華持者、毎聞讀誦之聲、怨念漸盡、若被誅之者、還可爲義忠之冥途讎歟、欲申宥之者、仰云、爲休義實之鬱下賜畢、奉優法華經之條、尤同心也、早可依請者、則免許云云、

〔源平盛衰記〕二十三賴朝鎌倉入勸賞附平家方人罪科事
罪科ノ輩其沙汰アルベシトテ、〇中略山內瀧口三郎同四郎ハ、廻文ノ時、富士ノ山トタケクラベ、猫ノ額ノ物ヲ鼠ノ伺定ヤナンド、惡口シタリシ者也、大庭ニ被召出タリ、佐殿〇源賴朝宣ケルハ、汝ガ父俊綱幷祖父俊通ハ、其ニ平治ノ亂ノ時、故殿〇賴朝父義朝ノ御供ニ候テ討死シタリシ者也、其子孫ト

テ殘留レリ、我世ヲ知ラバイカニモ糸惜シテ世ニアラセ、祖父親ガ後世ヲモ弔ハセントコソ深ク思ヒシニ、盛長ニ逢テ種々ノ惡口ヲ吐、剩景親ニ同意シテ賴朝ヲ射シ條ハイカニ、富士ノ山ト長並ベト云シカ共、世ヲ取事モ有ケリトテ、土肥次郎ニ仰テ速ニ首ヲ刎ヨト下知シ給フ、實平仰ニ依テ引張テ出ヌ、暫屋形ニ置テ還參テ申ケルハ、瀧口三郎兄弟ガ事、惡口ト申、合戰ト申、忽ニ首ヲハヌベケレ共、彼等ガ親祖父ハ御誼ノ如、故殿ノ御命ニ替シ輩也、愚ナル心ニ思慮ナク申タル者ニテコソ侍レ、只所帶ヲ召テ、命バカリヲ生ラレテ、彼恩分ニ報ハセ給ハヾ、後通俊綱ガ魂魄モ悅、故殿ノ御菩提ノ御追善トモナラセ給ナン、追放チ候バヤ、命生テ侍ルトモ謀叛ナド起べキ仁ニモ候ハズト、細々ニ申ケレバ、誠左樣ニモ相計フベシト宣ケレバ、實平宿所ニ歸テ事ノ子細申含テ、兩人ガ髻切、出家セサセテ追放チケレバ、手ヲ合悅テ出ニケリ、〇中略瀧口三郎ハ父祖ノ忠ニ酬テ命ヲイキ、長尾五郎〇定景ハ轉讀ノ功ニ依テ死ヲ免レタリ、

〔吾妻鏡十七〕正治三年〇建仁元年六月廿八日丙午、藤澤四郎清親相具囚人資盛〇城姨母〈號坂額女房〉參上、其疵雖未及平減、相構扶參云云、左金吾〇源賴家可覽其體之由被仰、仍清親相具參御所、左金吾自簾中覽之、御家人等群參成市、重忠、朝政、義盛、能員、義村已下候侍所、通其座中央、進居于簾下、此間無聊諛氣、凡雖比勇力之丈夫、敢不可恥對揚之粧也、但於顏色、殆可醜陵薗妾云云、　廿九日丁未、阿佐利與一義遠主以女房申云、越州囚女被定既配所者、態欲申預云云、金吾御返事云、是爲無雙朝敵、殆望申之條有所存云云、阿佐利重申云、全無殊所存、只成同心之契約、生壯力之男子、爲奉護朝廷、扶武家也云云、〇中略遂以免給、阿佐利得之下向甲斐國云云、

〔鎌倉大草紙〕結城落城の時、兄弟三人〇安王、春王、永壽王、生捕にして上りけるを、舍兄二人は十三十二おとなしく御座ありければ、美濃國垂井の道場金輪寺にて生害す、永壽王殿六才にて、いまだ東西不覺の體なれば、一命を助、美濃の守護土岐左京大夫にあづけらる、〇中略越後の守護人上杉相摸守房定、

關東の諸士と評議して、九ヶ年が間毎年上洛して捧訴狀を、基氏〔○足利〕の雲孫永壽王丸〔成氏〕を以關東の主君として、等持院殿の御遺命を守り、京都の御かためたるべきよし望て、無數の圭幣をつひやし、丹精を盡し歎き申ければ、諸奉行人も尤と感じ、頻に吹擧申けるが、寶德元年正月、御沙汰ありて、土岐左京大夫持益にあづけられし永壽王殿をゆるし、亡夫持氏の跡をたまはり、公方〔○足利義政〕御對面あり、御太刀御馬を被下、同二月十九日關東へ下らるゝ、此若君の和歌の師にてありし正徹書記、餞別の歌を送る、〔○中略〕

あやうきを天かけりてやまもり劒雲井のつるが岡のへの神〔○中略〕此人五歲のとき被召捕、十三にて關東の主となり致下向事、君恩とは申ながら、偏に鶴が岡八幡宮荏柄天神の御加護なりとて、上洛のとき護持の僧が夢想の歌を語り給へば、徹書記

よろこびと思ひあはせき此秋をつげに北野の夢のまさるしは

〔續武家閑談三〕陶〔○全姜〕が臣渡邊可昌を生捕る、元就、及此期不似合望なれども、汝平日風雅の聞え有、和歌一首讀と申されければ、かくなん、

懸て猶たのむや毛利のなはだすきいのちひとつをふたつ卷にて、陶が同朋宗阿彌も生捕る、是には命惜くば歌讀と申されしかば、

名を惜む人といへとも身ををしむをしさにかへて名をばをしまじ、右貳人の內、渡邊は勇にして和歌を詠じ、又宗阿彌は、武門にあらざる故、和歌を讀て命を乞ふ、各其式は替るといへども、元來元就は、生を好んで殺をいとふ仁愛の良將故、兩人が命を則助け給ふ、

〔武家閑談一〕信長天下をとり給ふ砌、三好長慶の臺所人坪內何某を生捕給ふ、素々庖丁の事なれば、誅戮にも不及、放し四人にて四五年は居る、信長公の出頭人菅谷九右衞門に、賄頭市原五右衞門申候は、四人の坪內は、三好家の料理人にて、鶴鯉の庖丁は不及申、七五三饗の膳、何にても公方

家の法式不存と云事なし、其上子共貳人は、御臺所にて皆被召仕候なれば、はや不苦事に存候、御料理人に仕候ては如何と申、菅谷則申上る、信長公、尤也、料理人にさせ聞食、其出來不出來にて可被仰付とて、其晩の御料理を坪内に被仰付、坪内畏て御料理を仕立、不殘其身口として御膳を上る、菅谷罷出て、信長公御料理被召上、以の外御氣色替り、散々の鹽梅、水臭して中々沙汰の限也、扱扱にくき次第也、其坪内め首刎よと御怒被成、其段申聞せ候へば、坪内承り、左候はゞ明朝の御料理今一度仕たる上、夫にて御意に不叶ば腹切可申と訴訟する、菅谷此旨申上る、信長公暫く御思案有て、左あらば明朝の料理可申付と被仰、翌朝坪内重て又御料理仕立上ルに、中々鹽加減と云風味と云、兎角申に不及、信長公御感不斜、坪内を御家人に被召出由被仰出、其段申聞候へば、坪内畏て、昨晩の御膳の鹽梅は、御意に不叶筈に而候、三好家の鹽梅に而仕立候、今日の鹽梅は、第三番め通の鹽梅にて仕立、御意に入候筈にて候、三好家は筑前守長輝、下總守長秀、薩摩守長元、修理太夫長慶、左京太夫義繼公、五代公方家の御仕置を預り、毎事高上なる家風に而、料理なども至而花車なる事共故、其鹽梅昨晩御意に不入候、今朝の鹽梅は田舍風に仕立上ゲ候故、御意に入候と云、聞人坪内が言を不感はなし、信長に耻辱を與へ參らせしと、皆人笑けるとなん、

〔奧羽永慶軍記三十七〕力丸所左衞門ガ事

志村九郎兵衞尉ガ郎等ニ力丸所左衞門ト云フモノアリ、コノモノハ元上杉景勝ノ郎等ナリシガ、スギシ慶長五年、義光上○最坂田ヲセメ給フニ、坂田ノ城ニハ、景勝ガ郎等志村修理亮河村兵藏籠城シテ防ギ戰フトイヘドモ、無勢ナレバ散々ニウチ負ケ落城ス、○中略扱モ生捕ニセシ武者ヲ見レバ、歲ノ程十八九ノ美男ノ、馬具武具迄清ラカナリ、志村是ヲ見テ、何人ゾ、落行人ハ御邊ノ父カ、左ナクバ大將カナルベシ、然ラズバ引返シ討死シテ助ントハセラレマジ、家名ヲ名乘給ヘト云、此者ハ聊ッヽムモナク、我々ハ城ノ大將志村修理亮ガ舍弟ニ力丸五郎トイフ者ナリ、落行

シ中ニ伯父アリ、扨コソ蹈止リ死ヲ輕ンジ候、我生捕ラレ候上ハ、落行者共ヲバ追討セズ助ケ給ハレカシト云、志村聞テ、御邊正直ナル申サレヤウ哉、是程軍ニ打勝ヌル上ハ、左ノミ落人ヲ討テ何カセン、ソレ制シテ追驅サスベカラズトイヘバ、追行人數ヲ押止メテ、此後ハ追ザリケリ、志村思ヒケルハ、此若者一人ヲ殺シテモ何ノ益カアラントテ、御邊モユルシヌルゾ、早ク會津ニ落行レヨ、去ナガラ今ハ味方諸方ニ充滿タレバ、行先トテモ危シ、大梵字ノ方ヘ送テコソト、郎等ノ近藤但馬ニ下知シケレバ、力丸淚ヲ流シ、扨モ々々味方ヲモ扶ケ給ハルノミナラズ、我々ヲ助ラレ候ハントノ御恩ノ程、未來迄モ忘レ候ハジ、タトヘ今御ユルシ大梵字ノ城ニ籠ルトモ、明後日ハ討死仕候ベシ、中々只今首ヲ刎ラレ候ベシト云、近藤但馬申ケルハ、御身ソレ程奇麗ニ宜フ上ハ、イカデカ志村モ討候ハン、左思シ召サレナバ、命助リテ味方ト成リ、恩ヲ報ジ候ヘカシトイフ、力丸聞テ扶ツカハントサヘ思召給ハラバ、此度ノ御恩ニ奉公仕候ハン事尤易ク候、去ナガラ、此末トテモ上杉ヘ對シ御弓矢アラン時ハ、御陣ノ御供ユルシ給ハリテンヤ、其故ハ我只今討死シテ、古主ヘノ奉公是マデナリ、タトヘ來世トテモ舊君ニ向テ弓ヲ引ハ道ニアラズトイフ、志村聞テ、今程降人イクラモ有トイヘドモ、其日ノ中ニ舊君ヘ弓ヲ引タグヒ也、御邊珍ラシキ所存哉、望ノ通リ上杉家ヘ弓引セル事ハアラジト、志村ガ郎等ニ成ケリ、

〔武功雜記〕一小田原沒落シテ、太閤〇豐臣秀吉板部岡江雪ハ何ト仕リ候ヤト御尋ナサレ候、江雪打モラサレ居候ヲ捕出ル、太閤直ニ被仰ハ、オノレメハニクキ奴カナ、最前美濃守ト兩人使ニノボリ、辯口ヨク申マギラカシ、言相違シテ今加樣ニ合戰ニ及テ、多勢ヲ殺サシムル事ト、怒リツヨク候時、江雪イヤ〳〵私僞ヲ申タルニテハ無之ト急度申ワケ仕候、太閤扨々オノレメハ武士カナ、加樣ニ捕レ來テ閉口ノ體ナク、申分埒明タル事ニ候、成敗可申付ト存候ヘドモ、死罪ヲ宥ルゾ、其縛繩ヲ江雪ニ見セヨト仰ラレ候時、シバリ繩ヲ出シ見セケレバ、江雪忝奉存候、迚ノ儀ニ此繩ヲ申

請度候、神前ニテハ御注連繩、我等ガ爲ノ命ノ繩ハ是ニテ候ト申ス、太閤彌感思食テ其繩ヲ被ㇾ下板部岡ハ言ニクシトテ岡江雪ト呼テ、伽ノモノニナサレ候、

〔淺井三代記十五〕姉川合戰の事

安養寺三郎左衞門は、兄弟の者共討れければ、今はいづくまでと思ひて敵の中へ驅入、よき武者と引組、首を取立上らんとせしに、信長卿〇織田の小走の者四五人落重り生捕にせられて、信長卿の御前に引すゆる、信長卿は御覽じて、安養寺久敷と被ㇾ仰ければ、とかくの御返事も不ㇾ申上、日比の御恩賞にとく／＼首をはねられ可ㇾ被ㇾ下旨申上れば、それは何事ぞ、汝は子細ある者の事なり、先若者共の取たる首を見せよやと仰ければ、織田おなあ持來る首、安養寺見て、是は私の弟甚八郎と申者にて御座候と申、又織田おきく持來る首、是も私弟彥六と申者にて御座候と申上れば、さて／＼不便の次第なり、汝が心底さぞやと被ㇾ仰、〇中略其外首數三十計見せ給へば、一々に名付をぞしたりける、安養寺かさねて申上るは、はや時刻も移り申候間、御暇被ㇾ下首をはねられ可ㇾ被ㇾ下と申上れば、いやとよ汝は一度備前守〇淺井長政が用に立命を捨たり、今日よりは此信長が命なり、小谷に歸り無二の忠義いたすべし、我等も隨分加恩を行なり、〇中略重て小谷を可ㇾ攻なり、其時は忠節をはげますべしとて、安養寺は不破河内に預け給ひ、小谷へ歸し給ひける、

〔朝鮮通交大紀四〕慶長五年庚子、明の萬曆廿八年、〇中略此比、我州連に和を求む、彼れ和好をもとめば、宜しく先俘擄を還し、其後此事を議すべしといひしゆへ、慶長六年辛丑、萬曆廿九年夏、公〇德川家康井手彌六左衞門智正をして、俘を彼國に送り、また是を諸州に求めて、陸續還されたり、

〔藩翰譜十宗〕同き九年〇慶長朝鮮の使僧松雲、對馬の國に來て、義智に就て、德川殿と長く兩國の好み修めん由を議す、是室町殿の御時の例也大御所〇家康此山を聞召し、彼望み請うに因て、此七年が程の戰に擒にして我國に以て來りし彼國の人民、悉に送り返し給ひければ、彼國の王大に悅び、明ければ十二

生虜爲死

年の夏、兩御所へ信使參らせて、隣國の好みを結ぶ、

〔總見記十三〕印牧彌六左衛門被誅事

不破河內守ガ郎黨原加左衛門ト云者、敵方ノ奉行人印牧彌六左衛門ヲ生捕來ル、信長公聞召シ、是ハキコユル勇士ナリ、引テマイレト御諚ニテ、スナハチ御前ニ引スヱル、汝ハキコユル勇士也、何トシテ生捕ラレタリケルヤト御尋有ケレバ、印牧御請申ス樣、江北ノ軍急ニシテ、自身數回敵ニアタリ、息キレ身ツカレ申スユヘ、角トラヘラレ候ト申上ル、信長公被聞召、勇者程アルゾ、正直ナル申シ分也、一命ヲ助ル間、味方ニ加ッテ越前ノ案內仕候ヘト、前波ヲ以テ被仰下、印牧申シ上ルハ、御諚生々世々忝奉存候、併某苟モ朝倉譜代ノ家人ニテ、剩國中奉行ノ名ヲ汚セリ、身不肖ニ候ヘバ、タトヘ義景目ノ前ニテ忠義ノ討死ヲコソ不仕候トモ、敵陣ニ請受テ一命ヲ助ル事思ヒモヨラズ候、貴命ノヲモムキニシタガハヾ、累代ノ瑕瑾當時ノ耻辱是ニ過タル不覺アルマジ、兵盡矢窮テ生捕トナル事モ戰場ノ習也、大將ニ先立テ士卒ノ死スルハ軍ノ道也、厚恩ニハ早々頸ヲハチラレテ給ルベシト云フ、前波吉繼イロ／＼ニ異見申セバ、印牧眼ヲ怒ラカシテ、汝コソ主君朝倉殿ヲ捨、降人ト成テ不義ノ擧動、人非人ノナスワザナリ、某ハ汝ガ樣ナル不義ノ者ニテハナシト云テ、曾テ以テ同心セヌ故、サラバキレトテ頸ヲ刎ントシタリケレバ、印牧申ス樣、凡ソ侍タル者ノ敵ニ逢テ生捕ラルヽ事、古今珍シカラズ、雜兵同前ニ頸切ラレン事思ヒモヨラズ、只切腹コソ本意ナレト云フ、信長公被聞召、敵ナガラモ志アル者也、繩ヲユルシ腹切ラセヨト被仰下、撿使ヲ以テ切腹サセラル、卽印牧思フ儘ニユヽ敷腹ヲ切タリケリ、

生虜處斬

〔陸奧話記〕同年〇天喜五年十一月、將軍〇源賴義率兵千八百餘人、欲討貞任、〇中略藤原景季者景通長子也、年二十餘、〇中略馳入賊陣、殺梟帥出、如此七八度、而馬蹶爲賊所得、賊徒雖惜其武勇、而惡爲將軍之親兵、遂斬之、　十七日〇康平五年九月生虜經淸〇藤原將軍〇源賴義召見責曰、汝先祖相傳爲予家僕、而年來忽諸朝

威蔑如舊主、大逆無道也、今日得用白符否、經清伏首不克言、將軍深惡之、故以鈍刀漸斬其首、是欲經清痛苦久也、貞任拔劒斬官軍、官軍以鋒刺之、載於大楯、六人舁之、置將軍之前、○中略將軍責罪、貞任一面死矣、亦斬弟重任、○中略貞任子童年十三歲、名曰千世童子、容貌美麗、被甲出柵外能戰、驍勇有祖風、將軍哀憐欲宥之、武則進曰、莫思小義忘巨害、將軍頷遂斬、

〔陸奥話記〕經清率數百甲士、出衣川關、放使諸郡、徵納官物、命曰、可用白符、不可用赤符、白符者經清私徵符也、不捺印、故曰白符也、赤符者國符也、有國印、故曰赤符也、將軍不能制之、

〔奥州後三年記中〕家ひらが乳母千任といふもの、やぐらの上に立て聲をはなちて將軍○義家にいふやう、なんぢが父賴義貞任宗任をうちえずして、名簿をさゝげて故清將軍をかたらひたてまつり、ひとへにそのちからにてたまたま貞任らをうちえたり、恩をになひ德をいたゞきて、いづれの世にかむくいたてまつるべき、しかるを汝すでに相傳の家人として、かたじけなくも重恩の君をせめたてまつる、不忠不義のつみ、さだめて天道のせめをかうぶらんかといふ、○中略將軍のいふやう、もし千任を生捕にしたらんものあらば、かれがためにいのちをすてん事ちりあくたよりもかろからんといへり、

〔奥州後三年記下〕寬治五年十一月十四日の夜、つひに落をはりぬ、○中略武衡にげて城○金澤柵のうちに池のありけるに飛入て、水にしづみてかほを叢にかくしてをる、つはものども入みだれてこれをもとむ、つひに見つけて、池よりひきいだしていけどりつ、又千任おなじく生虜にせられぬ、○中略千任丸をめし出して、先日矢倉の上にていひし事たゞ今申てんやといふ、千任かうべをたれてものいはず、その舌をきるべきよしをいふ、源直といふものあり、寄て手を持て舌を引出さんとす、將軍大きにいかりていはく、虎の口に手をいれんとす、はなはだおろかなりとて追立、ことつはものいできて、えびらより金はしをとり出し、舌をはさまんとするに、千任齒をくひあは

せてあかず、かなはしにて歯をつきやぶりて、その舌を引いだして是を斬つ、千任が舌をきりをはりて、ゑばりかゞめて木の枝につりかけて、足を地につけずして、足の下に武衡が首をおけり、千任なく／＼あしをかゞめて是をふまず、ゑばらくありてちから盡て、足をさげてつひに主の首をふみつ、

〔平治物語三〕惡源太被誅事

去程ニ同〇永暦元年正月二十五日、鎌倉ノ惡源太〇源義平近江國石山寺ノ邊ニ忍テ居給ヒケルヲ、難波三郎經房ガ郎等生捕奉テ、六波羅ヘ引テ參ル、〇中略惡源太六波羅ニテ宣ケルハ、我敵ニウカガヒ寄ムトテ、或時ハ馬ヲ扣ヘテ門ニイミ、或時ハ履ヲ捧テ緣ニ至テ相近付カントセシガ、運盡ヌレバ、本意ヲ遂セズシテ生ナガラ囚ル、事無力次第也、義平程ノ大事ノ敵ヲ暫モ置事不可、然速ニ被誅ヨトテ、其後ハ物モ宣ハズ、聽テ難波三郎ニ仰テ六條河原ニ於テ被誅ケルニ、敷皮ノ上ニナホリテ、些モ臆セズ被申ケルハ、敵ナガラモ義平程ノ者ヲ、白晝ニ河原ニテ被斬事コソ遺恨ナレ、去保元ニ多ノ源平ノ兵共被誅シカ共、ヒルハ西山東山ノ片邊ニテ斬、適河原ニテキラル、ヲモ夜ニ入テコソ被斬ケルナレ、弓矢取身ノ習ハ、今日ハ人ノ上明日ハ身ノ上ニテ有物ヲ、平家ノヤツバラハ、上下共ニ都テ無情物モ知ラヌ者共也、去年熊野詣ノ時、路次ニ馳向テ討ムト云シヲ、スカシ寄テ一度ニ滅サントト、信頼ト云不覺人ガ云シニ付テ、今日懸ル耻ヲ見ルコソ口惜ケレ、湯淺藤代ノ邊ニテ取籠テ討カ、安部野ノ方ニ待受テ一人モ不殘討取ベカリシ物ヲト宣ヘバ、難波三郎、是ハ何ノ後言ヲイハセ申候ゾト申セバ、惡源太アザ咲ヒ、イシウ云タリ、實ニ我爲ニハ評ハメ後言ゾ、ヤレ己ハ義平ガ首討程ノ者カ、ハレノ所作ゾ能キレ、惡ク切ナラバシヤ頰ニクヒ付カンズルゾト宣ヘバ、オコノ事ヲ被仰物哉、何條我手ニ懸奉ラン首ノ、爭カツラニハクヒ付給ハントト申セバ、誠ニ只今クヒ付カンズルニハ非ズ、終ニハ必イカヅチト成テ蹴殺サンズルゾトテ、殊更首

高ラカニ差擧給ヘバ、經房太刀ヲ拔後ヘ廻レバ、能切トテニラマレタル眼ザシ、實ニ凡人トハ不見ケリ、

〔源平盛衰記 二十三〕賴朝鎌倉入勸賞附平家方人罪科事
兵衛佐殿(〇源賴朝)ハ其ヨリ鎌倉ヘ歸入テ、(〇中略)罪科ノ輩其沙汰アルベシトテ、大場三郎景親ヲバ介八郎(〇廣常)ニ預ツテ誡置タリケルヲ、繩付引張リ御前ノ大庭ヘ將參タリ、舍兄ニ懷島平權頭人手ニ懸ンヨリトテ申給テ切テケリ、其子ノ太郎ヲバ足利又太郎承テ切、俣野五郎ハ難遁身也トテ、忍テ京ヘ逃上リニケリ、海老名黨ニ荻野五郎末重ハ、石橋軍ノ時、源氏ノ名折ニ何ニ敵ニ後ヲバ見セ給ゾ、返給返給ヘト申タリシ者也、裸ニナシ引張テ將參レリ、佐殿ハ、イカニ末重、石橋ノ合戰ノ時ノ詞ハ忘ズヤトテ、門外ニテ切ラレケリ、舍弟二人子息一人同切ラレヌ、加樣ニ首ヲ被刎者六十餘トゾ聞エシ、

〔吾妻鏡 四〕元曆二年(〇文治元年)四月廿六日己卯、今日前內府(〇平宗盛)已下生虜、依召可入洛之間、法皇(〇後白河)爲御覽其體、密々被立御車於六條坊城云云、申剋各入洛、前內府、平大納言(時忠)各(駕八葉車、上簾前後、開物見云云)右衛門督(宗盛子淸宗)乘父車後、各淨衣立烏帽子、土肥二郎實平(黑絲威鎧)在車前、伊勢三郎能盛(府白赤威鎧)在同後、其外勇士相圍車、又美濃前司(〇平則淸)以下同相具之、信基、時實等者、依被疵用閑路云云、皆悉入廷尉(〇源義經)六條室町第云云、同日則有罪狀定、前內府父子幷家人等、可被處死罪之由、明法博士章貞進勘文云云、　五月十五日丁酉、廷尉使者(景光)參著、相具前內府父子令參內云云、去七日出京、今夜欲著酒勾驛、明日可入鎌倉之由申之、北條殿(〇時政)爲御使令向酒勾宿給、是爲迎取前內府也、被相具武者所宗親、工藤小次郎行光等云云、　十六日戊戌、今日前內府入鎌倉、觀者如堵墻、內府用輿、金吾乘馬、家人則淸、盛國入道、季貞(以上廷尉)盛澄、經景、信康、家村等、同騎馬相從之、經若宮大路至橫大路、暫控輿、宗親先參入申事由、則被仰可招入營中之旨、仍以西對爲被父子之居所、入夜因州(〇大江廣元)奉仰雖羞膳、內府敢不用之、只溺

愁涙之外無他云云、此下向事、并同父子及殘黨罪條々事、二品屬經房卿被奏聞之處、有其沙汰、而招下文可被行之旨勅許既畢、　六月七日戊午、前内府近日可歸洛、可面謁歟之由被仰合因幡前司、是本三位中將〔○平重衡〕下向之時、對面給之故也、而廣元申云、今度儀不可似以前之例、君者鎭海内濫刑、其品已敍二品給、彼者過爲朝敵、無位囚人也、御對面之條還可招輕骨之謗云云、仍被止其儀、於簾中覽其體、諸人群參、頃之前内府〔著淨衣立烏帽子〕出于西侍障子之上、武藏守、北條殿、駿河守、足利冠者、因幡前司、筑後權守、足立馬允等候其砌、二品以比企四郎能員被仰云、於御一族雖不存指宿意、依奉勅定發追討使之處、輙奉招引邊士、且雖恐思給、尤欲備弓馬眉目者、能員蹲踞内府之前述子細之處、内府動座、頻有諂諛之氣、被報申之趣又不分明、只令救露命給者、遂出家求佛道之由云云、是爲將軍四代之孫、武勇稟家、爲相國〔○平淸盛〕第二之息、官祿任意、然者不可憚武威、不可恐官位、何對能員可有禮節哉、死罪更非可被優于禮歟、觀者彈指云云、　九日庚申、廷尉〔○中略〕今日相具前内府歸洛、二品差橘馬允、淺羽庄司、宇佐美平次已下壯士等、被相副四人矣、　廿一日壬申、卯剋廷尉著近江國篠原宿、令橘馬允公長誅前内府、次主野路、以堀彌太郎景光梟前右金吾、〔淸宗〕

〔源平盛衰記　四十五〕女院御徒然附大臣賴朝問答事

能貞、大臣殿〔○平宗盛〕ノ前ニ進リタリケルニ、居直リ深敬節セラレケリ、右衞門督〔○宗盛子淸宗〕ハ不居直、國ノ武士多並居タリ、右衞門督返事シケル、當家代々爲朝家之守護、度々鎭賊陣之狼藉、依勳功之勞昇太政大臣、賜洪恩之賞、顯左右大將、雖無身誤、蒙朝敵咎、是非私恥、世皆所知也、芳恩ニハ急被刎首ヨト、聞之武士彼ニ返答ノ體神妙神妙トテ落涙スル者多カリケリ、〔○中略〕大臣ノ刎首事不容易トテ、俎上ニ大ナル魚ヲ置、利刀ヲ相具シテ内大臣父子ノ前ニ被置タリ、自害シ給ヘトノ謀也、大臣ハ思寄給ハズモヤ有ケン、ソモ不知、右衞門督ハサモト思ハレケレ共、壇浦ニテ水底ニ沈ミハテヌハ父ノ向後ノ覺束ナキ故也、今更非可先立トオボシケレバ自害ナシ、待ドモ々々々自害シ

給ザリケレバ、內大臣ヲバ讚岐權守ト改名シテ、九郞判官ニ被返預ケリ、

〔鎌倉大草紙〕嘉吉元年四月十六日辰刻に打立、旗を靡け兵を進めければ、城中の兵共〇結城氏朝兵、中略、一人も殘らず討死す、總大將安王殿春王殿をば、政廉及越後勢の大將長尾因幡守生捕申けり、則籠輿に乘せ申御上洛とぞ聞えける、〇中略五月四日京都へ著、若公をば濃州垂井の道場金蓮寺にて、兩佐々木參向て、同五月十六日御兄弟ながら奉害、今年十二と十にぞならせ給ひける、

〔豐薩軍記〕十島津家久合戰ノ事

宮部〇善祥坊ガ先手三千餘、眞中ニヲツトリコメ、微塵ニナレト攻立レバ、薩州勢〇島津家久ノ軍心ハ矢猛ニハヤレドモ、大敵凌ギガタクシテ終ニ打負、九百餘人討死シ、五十餘人ハ虜レニケリ、〇中略斯テ宮部ガ手ニ生捕タル五十餘人ヲ召出シ、助命スベキトアリケルニ、一同ニ申ケルハ、今度先陣ニ進ミシ者共ハ、敵陣ヲ破リ得ズンバ二度歸ルマジキ由ヲ大將〇島津家久ニ約束申テ出タルナリ、是見給ヘト何レモ鬢ヲ見セケルニ、實ニモ一所ニ討死スベキ印ト見ヘテ、面々ガ姓命ヲ小キ札ニ書テ、鬢髮ニ結付タルニゾアリケル、去レバ命ヲ惜ム氣色ハ露ホドモナク、只々早クモ死ヲ急ギタキ由ヲ申テ、皆々誅セラレニケリ、

〔保元物語〕一親治等被生捕事

基盛高キ所ニ打上テ下知セラレケルハ、敵ハ只其勢ニテ、續ク者モナシ、御方多勢ナレバ、各組デ一々ニ搦捕テ見參ニ入ヨ、伊賀伊勢ノ者共ト被申ケレバ、伊藤齋藤弓手妻手ヨリ馳寄テ、一騎ガ上ニ五六騎七八騎落重レバ、親治武ク思ヘ共無力、自害ニモ不及、被生捕ニケリ、誠ニ王事モロキコトナキイハレニヤ、宗徒ノ者共十六人搦捕テ、〇中略此由ヲ奏聞シテ、又宇治路ヘゾ向ハレケル、親治ヲバ、北ノ陣ヲ渡シテ西ノ獄ニゾ被入ケル、主上御感ノ餘ニ、其夜除目被行テ、正下四位ニ被成ケリ、

〔菊池傳記 四〕赤星道雲與隈部親永合戰事

山鹿郡城村の城主隈部但馬守源親永と云者あり、彼が先祖は大和源氏宇野七郎親治なり、親治、保元の亂に平基盛と戰て虜となり、當國菊池に預られ、山鹿郡に住居す、其末葉隈部上總介忠直と云もの、菊池持朝爲邦が家臣となり、忠をあらはし世にしらる、夫より數代相續して親永にいたれり、

〔保元物語 三〕爲朝生捕被流罪事

爰ニ佐渡兵衛重貞ト云者、宣旨ヲ蒙テ國中ヲ尋求ケル處ニ、有者申ケルハ、此程湯屋ニ居者コソ怪キ人ナレ、大男ノオソロシゲナルガ、流石ニ尋常氣也、歳ハ二十許ナルガ、額ニ疵アリ、由々敷人ニ忍ブト覺タリト語レバ、九月二日湯屋ニ下タル時、三十餘騎ニテ押寄テケリ、爲朝眞裸カニテ、合木ヲ以テ數多ノ者ヲバ打伏タレ共、大勢ニ取籠ラレテ、無云甲斐被搦ニケリ、季實判官請取テ、二條ヲ西ヘ渡ス、白キ水干袴ニ、赤キ帷子ヲ著セ、髻ニ白幣ヲゾ指タリケル、北陣ニテ叡覽アリ、公卿殿上人ハ不及申、見物ノ者市ヲナシケリ、面ノ疵ハ、合戰ノ日、正清ニ被射タリトゾ聞ヘケル、既被誅ベカリシガ、以前ノ事ハ、合戰ノ時節ナレバ力ナシ、事既ニ違期セリ、未御覽ゼラレヌ者ノ體也、且ハ末代ニ有ガタキ勇士也、暫命ヲ助テ、可被遠流ト議定アリシカバ、流罪ニ定リヌ、但息災ニテハ後惡カリナントテ、肘ヲヌキテ、伊豆ノ大嶋ヘ被流ケリ、

〔平治物語 三〕賴朝被宥遠流事

サル程ニ兵衛佐〇源賴朝ハ、末宗清ガ許ニ御座ケレバ、尾張守ヨリ丹波藤三國弘ト云小侍一人被付ケリ、既ニ今日明日被誅給ベシト聞エシカバ、宗清、御命助カラントハ思召候ハズヤト申セバ、佐殿、去保元ニ多ノ伯父親類ヲ失ヒ、今度ノ合戰ニ父討レ、兄弟皆失ヌレバ、僧法師ニモ成テ父祖ノ後世ヲ弔ラハヾヤト思ヘバ、命ハ惜キゾト宣ヘバ、宗清モ哀ニ覺エテ、〇中略池殿ヘ參、何者ガ申テ

候ヤラン、上ノ大慈悲者ニテ御座トテ、哀賴朝ガ命ヲ申助サセ給ヘカシ、父後生弔ラハント被ㇾ申候シガ痛敷候、可ㇾ然樣ニ御計ヒ候ヘカシト申セバ、ソモ賴朝ニ尼ヲ慈悲者トハ誰ガ知セケル、イザトヨ故刑部卿〇平忠盛清盛父ノ時ハ多ノ者ヲ申免シヽガ、逆時ハ如何侍ラン、扨モ右馬助ニイタク似タラン無慙サヨ、家盛ダニアラバ、鳥ニ成テ雲ヲ凌ギ、魚ニ成テ水ニモ入、誠ニ來世ニテモ可ㇾ逢バ、只今死シテモ行ムト思ゾトヨ、扨イツ可ㇾ被ㇾ斬ニ定タルゾト宣ヘバ、十三日トコソ聞エ候ヘト申セバ、叶ハヌマデモ申テコソ見メトテ、小松殿〇平重盛清盛子其時ノ勳功ニ伊豫守ニ成給シガ、正月ヨリ左馬頭ニテンジ給ヘルヲヨビ奉テ、賴朝ガ尼ニ付テ命ヲ申助ケヨ、父ノ後世ヲトハントハ申ナルガ、條ニ不便ニ侍、能樣ニ申テ給ヘ、殊ニ家盛ガ幼立ニ少モ不ㇾ違ト聞バ、ナツカシウコソ侍レ、右馬助ハソレノ御爲ニモ伯父ゾカシ、賴朝ヲ助テ、家盛ガ形見ニ尼ニ見セ給ヘト宣ケレバ、重盛參テ父ニ此由被ㇾ申ケリ、淸盛聞テ、池殿ノ御事ハ、故殿ノ渡ラセ給ト思奉レバ、如何成アマ逆ノ仰ナリトモ違マジトコソ存ズレ共、此事ハ由々敷重事也、伏見中納言越後中將ナド加樣ナル者ヲバ、何十人助置タリトモ大事有マジ、大體弓矢取者ノ子孫ハ、ソレニハ異ルベキ上、義朝ナドガ子共ハ、幼トモ可ㇾ有ㇾ子細ㇾ物ヲ、殊ニ賴朝ハ官加階モ兄ニ超ルハ、由々敷所ガアルニヤ、父モ見トガメ侍レバコソ、重代ノ中ニモ取分秘藏ノ物具ナド與ヘケメ、傍難ㇾ助置ㇾ物ヲトテ、以外ノ氣色也、左馬頭歸參テ、難ㇾ叶題目成由被ㇾ申ケレバ、池殿涙ヲ流シテ、哀戀シキ昔哉、忠盛ノ時ナラバ、是程ニ輕クハ思ハレ奉ラジ、一門ノ源氏皆滅侍リ、コノ幼者一人助置カレタリトモ、何計ノ事カ侍ラン、前世ニ賴朝ニ被ㇾ助ケル故ヤラン、聞ヨリイタハシク不便ニ侍ゾトヨ、御身ヲ疎トハ思ヒ奉ラヌ共、一ハ使ガラト申事ノ侍レバ、ナドマメヤカニ打クドキテ、猶不ㇾ叶シテ終ニ失ナハレバ、尼ガ無ㇾ甲斐命生テ何カセン、其上右馬助ガ面影ニ似タリト聞ヨリ、イツシカ家盛ガ事思ハレテ、ハタト胸塞リ、湯水モ快ク呑レネバ、自ラ久シカルベシトモ覺エ候ハズ、哀尼ガ命ヲ生サント思召サバ、兵衞

生虜自殺

佐ヲ助テ給ヘカシト歎給ヘバ、重盛モ被迷惑ケルガ涙ヲ押ヘテ、左候ハヾ今一度御諚ノ趣ヲ申テコソ見候ハメ、同尾張殿ヲモ添被申候ヘ、諸共ニ仰ノ由委シク語リ候ハントテ、頼盛ト共ニ重テ此由ヲ被申ケレバ、清盛モ流石岩木ナラネバ、案ジ被煩ケルニ、重盛女性ノイハケナキ御心ニ思沈テ申サセ給事ヲ、サノミハ如何仰候ベキ、可然御計ヒモ候ハズバ、御恨深ク候ベシ、アノ頼朝一人被誅候共、ツキン御果報ノ長久ナルベキニ非ズ、當家ノ運末ニナラバ、諸國ノ源氏イヅレカ敵ナラザラン、又助置レタリ共、榮耀後葷ニ可及バ、何ノ恐カ候ベキト、理ヲ盡テ被申ケレバ、先十三日ヲバ被延テ、慥ノ返事ハナカリケリ、然レバ今日斬ラルヽ、明日失ルヽナド聞エシカドモ、其日モ延ケレバ、兵衞佐、是ハ偏ニ氏神八幡大菩薩ノ御助也ト、彌心中ニ祈念深クゾ御座ケル、角一日モ命延タラバ、念佛ヲモ申、經ヲモ讀テ、父ノ後世ヲ弔ハントテ、略〇中或僧ニアツラヘテ、如形供養ノ儀ヲゾ被遂ケル、池殿加樣ノ事共ヲ聞給テ、彌勞敷思召ケレバ、漸々ニ被申テ流罪ニゾ定リケル、

〔吾妻鏡　四〕元暦二年〇文治元年四月廿六日己卯、今日前内府〇平宗盛已下生虜、略〇中有罪狀定、前内府父子并家人等可被處死罪之由、明法博士章貞進勘文云云、　五月十六日戊戌、今日前内府入鎌倉、略〇中但於時忠事者、可被寬死罪一等之由、是內侍所無爲御歸座者、依彼卿功之故云云、　六月二日癸丑、去月廿日被下配流官府、上卿源中納言通親參陣、頭辨光雅朝臣仰之云云、其交名目錄、今日到著鎌倉、流人前大納言時忠能登　前内藏頭信基備後　前左中將時實周防　前兵部權少輔尹明出雲　法印大僧都良弘阿波　權少僧都全眞安藝　權律師忠快伊豆　法眼能圓備中　法眼行明常陸

〔吾妻鏡　一〕治承四年十月十九日戊戌、伊東次郎祐親法師、爲屬小松羽林〇平維盛浮船於伊豆國鯉名泊、擬廻海上之間、天野藤内遠景窺得之、令生虜、今日相具參黃瀨河御旅亭、而祐親法師聟三浦次郎義澄參上御前、申預之、罪名落居之程、被仰召預于義澄之由、

生虜冥敵

〔吾妻鏡 二〕養和二年（○壽永元年）二月十四日乙卯、伊東次郎祐親法師者、去々年已後所被召預三浦介義澄也、而御臺所御懷孕之由風聞間、義澄得便、頻窺御氣色之處、召御前直可有恩赦之旨被仰出、義澄傳此趣於伊東、伊東申可參上之由、義澄於營中相待之際、郎從奔來云、禪門承今恩言、更稱耻前勘、忽以企自殺、只今僅一瞬之程也云云、義澄雖奔至、已取捨云云、

〔日本書紀 十九欽明〕二十三年七月、所虜調吉士伊企儺、爲人勇烈、終不降服、新羅鬪將、拔刀欲斬、逼而脱褌、追令以尻臀向日本、大號叫（叫也）曰、日本將齧我臗脽、卽號叫曰、新羅王啗我臗脽、雖被苦逼、尙如前叫、由是見殺、其子舅子、亦抱其父而死、伊企儺辭旨難奪皆如此、由此特爲諸將帥所痛惜、

〔源平盛衰記 四十六〕土佐房上洛事
大衆法師原山踏シテ尋ケル程ニ、鞍馬奧僧正ガ谷ト云所ニテ搦捕、伊豫守（○源義經）ニ奉、大庭ニ引居テ、イカニ和僧（○昌俊）ハ腹黑ナシト起請書ナガラ、加樣ノ結構ヲバ巧ケルゾ、冥覽在頂、神罰不廻踵、奇恠々々ト云ケレバ、土佐房今ハ助ルベキ身ニ非ト思テ及惡口、夜討ハ二位家ノ結構、起請ハ昌俊ガ私ノ所作也、必シモ非冥罪、只自然ノ運ノ盡ニコソ、互ニ其期アルベキト云、伊豫守腹ヲ立テ、シヤ頰打トテツラヲ打セタリケレバ、昌俊不振面不損顏、只俺マデ打給ヘ々々々、昌俊ガ顏我ツラニアラズ、是ハ源二位家ノ御頰也、此代ニハ又鎌倉殿（○源賴朝）伊豫守殿ノ顏ヲ打給ハンズレバ、思合給ハンズラント申ス、伊豫守カラ々々ト打笑ツヽ、和僧ガ志誠神妙也、主ヲ戀ムト云ハ角コソ有ベケレ、（○中略）命惜クバ助ン、二位殿ヘ參レト云ケレバ、昌俊取替モナキ命ヲ奉テ鎌倉ヲ立シ日ヨリ、生テ可歸ト不存、夜討シ損ジ、虜レヌル上ハ、非可申請命、芳恩ニハ急頭ヲメセト申、伊豫守以下侍共感ジ申ケリ、サラバ切レトテ、六條川原ニ引出シテ、京者ニ中務丞友國ト云者切テケリ、

〔籾井家日記 十〕八上秀治同秀尙送安土事
屋形秀治卿、遠江守秀尙公、幷ニ其外ノ人々ヲ、張輿アジロ等ニ載セテ、急ニ馳セ候テ、日向守（○明智光）

秀ガ跡ヲ押ヘテ、安土山ヘ送リ行テ候、○中略明智日向守進出、御前ニテ推參ナル弓矢ノ沙汰カナ、前代未聞ノ表裏ノ侍、武士ノ風上ニモ置レヌ男カナ、龜山ヲ乘ラレ候ヲ無念ガリ、某ヲモ色々讒言シテ候、剩ヘ將軍樣○織田信長ヲ手ラヒ奉ルノ條、今天ノ網ニカヽリ候、早キ天罰カナ、繩目ニ逢テ末代ノ耻ヲ曝スハト云フ、秀尙仰セケルハ、汝ラゴトキ下人ガ、大將ノ志ヲ知ルモノニハナキゾトアレバ、日向守怒リテ、末代ノ御仕置ニテ候、カヽルモノヲバハタ物ニナリトモ燒殺シニナリトモナサレテ御尤ト申上ル、波多野彌次郎秀基申サレ候ハ、ヤレ汝光秀慥カニ聞テオケ、死セル尸ニ生ケル志ノアルハ武士ノ魂ニシテ、波多野一家ノ者ドモガ亡魂ハヨク物云ゾ、火ニモ燒ヌ水ニモ朽ヌゾ、汝ラヲ三年ノ内ニ、ハタ物ニモ燒殺ニモサレヌルヲ覺ヘテ居ヨト云フ、明智腹アシクテ惡口ス、瀧川彥五郎モ同ク、天罰ユヘニ繩目ノ耻ヲサラスト惡口スレバ、波多野彌七郎公秀ノ曰ク、汝ハ父ガ子ニテハ有マジキゾ、汝ガ父ハサル勇士ニ候、波多野ガ弓矢ノ道ハ、左近ハシル筋ガ有ゾ、手ナミハ覺ヘテモ居シク慥カニ問ヘ、大將ノ耻ト云フハ、汝ラガ目分ニハミヘヌモノゾ、忝モ某ラガ家ハ、源平以來代々ノ弓矢ヲ取失ハズ、家ヲツギ國ヲ守護シ來リ、大キナル望ガアリテ、運ガ薄クテ將軍ノ運ニ光リヲ失フゾ、日比ノ弓矢ヲバ目ニモミ、耳ニモキクベキナリ、失念シタラバ左近ニトヘ、惡源太ハサセル勇士ナレドモ、運盡レバ囚レニアフ、頼朝囚レニクルシミ玉フテ、遂ニ本意ヲエラレテ候、大キナル志ハ汝ラガ如キ小者ノ目ニハミヘヌゾ、波多野ガ運ハ今度ニツキテ、尸ヲ曝スト云ヘドモ、今生後生ニ思ヒ入テ、日比ニ契リ置タル一念ハチツトモ消ヌゾ、ソコナ人非人ノ光秀ハ申スニヤ及ブベキ、將軍ニモ三年ノ内ニ慥カニ思ヒ知センゾ、勇士ノ魂ヒノ程ヲ末代ニミセンゾ、コノ詞ヲヨク聞テオケト云ヘバ、將軍、推參ナリトテ以ノ外ニ怒ラレテ候、

〔源平盛衰記〕三十三木曾備中下向附齊明被討幷兼康討倉光事

去六月〇壽永二年北陸道ノ合戰ニ虜レタリシ平泉寺長吏齊明ヲバ、六條河原ニテ頸切ル、妹尾太郎兼康ハ、木ヲ樵草ヲ刈マデコソナケレドモ、二心ナク木曾〇義仲ニ被仕ケリ、是ハイカニモシテ再故郷ニ歸リ、今一度舊主ヲ奉見、平家ノ御方ニ成テ合戰ヲ遂ントノ計ナリ、咲中偸ニ鋭刺人刀トイヘリ、木曾ハ是ヲモ不知シテ、齊明ト同時ニ切ベカリケレ共、西國ノ道シルベトテ宥具シ給ケリ、〇中略當國〇備中ノ船坂上ニテ、兼康木曾ニ云ケルハ、暇ヲ給テ先立テ罷下、相親ム者共ニ御馬草ヲモ用意セサセ候バヤ、斯亂レノ世ナレバ、俄ノ事ハ難治ニモ侍ベシト申間、サモ有ベシトテ許シ遣ハス、木曾ハ爰三箇日ノ逗留ト云、兼康スカシ仰タリト思テ、子息小太郎兼通郎黨宗俊ヲ相具シテ下ケルガ、加賀國住人倉光三郎兼光ヲ招ヒテ云ケルハ、ヤヽ倉光殿、兼康御邊ニ奉被虜、難遁命ヲ生、剩西國尋承ヲ給、故郷ニ歸テ再妻子ヲ相見ン事モ御恩トノミ奉思、モシ人手ニ懸リタラバ爭命モ生故郷ヘモ歸ベキ、サテモ兼康虜給タル勸賞ニ、備中ノ妹尾ハ吉所〇所原作野、據二一本一改ニテ侍リ、勳功ノ賞ニ申賜ヒテ下給ヘカシ、同ハ打ツレ奉ラント云、倉光三郎誠ニト思テ木曾ニ所望シケレバ、則下文賜、倉光悦テ妹尾ニ打具シテ下ル、兼康道スガラ思ケルハ、妹尾マデ行ヌルモノナラバ、新司トテ庄内一ハナ心ニテモテナシ、思著者有テ勢付ナバ、如何ニモ難叶ト思テ、備前國和氣ノ渡リヨリ東ニ、藤野寺ト云古キ御堂ニ下居テ兼康申ケルハ、ヤヽ倉光殿妹尾ハ今ハ程近シ、聽打具シ奉ベケレ共、世間ノ忩々ニ所モ合期セン事難シ、兼康先立テ所ノ樣ヲモ見廻リ、又親キ者共ニモ相觸テ、斯ル人コソ下向シ給ヘトテ御饗ヲモ用意セサセント云ケレバ、倉光ハ何樣ニモヨキ樣ニ相計給ヘトテ爰ニ留ル、兼康ハスカシ負セテ、先立テ草壁ト云所ニ駈付テ、使ヲ方方ヘ遣シテ親者四五人招キ寄テ、夜討セントゾ出立ケル、倉光爭カ角ト知ベキナレバ、今ヤ〳〵ト待處ニ、夜半計ニ兼康ハ十餘騎ノ勢ニテ藤野寺ニ押寄テ、倉光三郎ヲ夜討ニシテ、コソ歸ニケル、

生虜逃歸

〔豐薩軍記七〕野津院諸所合戰幷宮千代丸兄弟事
城中〇岩渕城次第ニ勢盡テ、終ニ落城シタリケル、討殘サレタル者共ハ、己ガ武勇ヲ顯ハシテ死ヲ遁レタル者モアリ、足弱ナリケル老幼ハ皆生捕トゾ成ニケル、中ニモ柴田大藏ガ二男宮千代丸ト、及ビ其妹ヲ生捕テ大將ノ見參ニ入レクルガ、幼稚ト小冠者ナル故ニ、侮テヤ繩ヲモカケズ、尋常ナル有樣ナリケレバ、大將間近ク召シケルニ、寄ルト均シク懷中ヨリ小劍ヲ拔テ走リカヽリ、一刀ニ刺通シ、忽チ痛手ヲ負セケル、左右ニ候セル郎從等驚キ騷ゲド甲斐ゾナシ、ヤガテ宮千代丸ヲ刺殺セバ、妹モ亦懷中ヨリ劍ヲ拔テ即坐ニ彼ノ士ヲ突殺シ、忽チ兄ノ敵ヲ討ツ、前代未聞ノ行跡ナリ、於是郎等又妹ヲ殺シケリ、幼稚ノ身トシテ比類ナキ働キ、千英萬雄譽ヘヲ取ルニ物ゾナシ、

〔紀伊國物語上〕長篠にて赤地の緞子の下帶したる武者を生捕、名をとへどもとかう物をいはず、權現樣〇徳川家康御覽被成、腹をきらせべき間名乘候へと御意被成、腹を切せんとの御意を忝がり、多田久藏と申もの也と名乘る、甲州にて名有ものなるを以て、信長公江被仰候へば、多田久藏は、美濃の侍は何も我手に屬する間、我家に居よとの給ふ、久藏申は、繩を一度かゝりて何とて御奉公を申さんやと云、信長公、むかしも鈴木三郎繩を懸られても今に譽をのこす、不苦事也、居候へとて繩をとかせ給、然後物隱にて騷ぐ音する、何事ぞと問給へば、只今の四人繩をとき候へば、長柄を取て三人まで突殺候間、則殺し申候と申、信長のたまふ、一度繩をかゝりたる耻をすゝがんとて如斯、たとひ若黨足輕などは突殺ても不苦間、助置べき物ををしみ給ふ、信長はむごき人なれ共、甲州にて役に立たる者と聞及如斯のたまふ也

〔日本書紀三十持統〕四年十月乙丑、詔軍丁筑紫國上陽咩郡人大伴部博麻曰、於天豐財重日足姫天皇〇齊明七年、救百濟之役、汝爲唐軍見虜、洎天命開別天皇〇天智三年、土師連富杼、氷連老、筑紫君薩夜麻、弓

剛連元寶兒四人、思欲奏聞唐人所計、緣無衣粮、更不能逹、於是博麻謂土師富杼等曰、我欲共汝還向本朝、緣無衣粮、倶不能去、願賣我身、以充衣食、富杼等任博麻計、得通天朝、汝獨淹滯他界、於今三十年矣、朕嘉厥尊朝愛國賣己顯忠、故賜務大肆幷絁五匹、綿一十屯、布三十端、稻一千束、水田四町、〇下略

〔日本靈異記上〕遭兵災信敬觀世音菩薩得現報緣第十七

伊豫國越智郡大領之先祖越智直、爲救百濟、遣到軍之時、唐兵所擒、至其唐國、我國八人同住一洲、儻得一觀音菩薩像、信敬尊重、八人同心、竊截松木、以爲一舟、奉請其像、安置舟上、各立誓願、念彼觀音、爰隨西風、直來筑紫、朝廷聞之、召問事、天皇乘令申所樂、於是越智直言、立郡欲仕、天皇可、然後建郡造寺、即置其像、自時迄于今世、子孫相繼歸敬、〇下略

〔豫章記〕河野系圖〇中略

益躬——武男——玉男——諸飽——萬躬——守興新羅國、年代不詳、承天智天皇勅命、到

〔陰德太平記九〕肥前國大智庵城夜討附松浦幸松丸事

天文九年八月二日、〇中略政〇松浦モ今ハセン方ナク、雜兵ノ手ニカヽラジトテ腹搔切テ伏ラレタリケレバ、內室幷ニ嫡子幸松丸當年五歲ナルヲ生捕テ平戶ヘコソハ歸リケレカクテ幸松丸親子ヲバ河內村ニ置レケルヲ、興信〇松浦ノ家臣一部籠手田ハ、幸松丸ヲ生テ置ルヽ事、所謂養虎自遺患ニテゾ候ハン、早ク可被誅ト、度々納諫言ケレ共、興信曾テ無許容ケレバ、兩人ノ者、所詮一命ヲ捨テ幸松丸ヲ可誅、是今日ハ君命ニ逆トイヘ共、理ヲ論ゼバ君ヲ佐クルノ忠ナルベシト、事ノ序ヲ待居タリ、此由イカナル者カ告タリケン、母上ノ方ヘ洩聞エテ、母上イカニモシテ幸松丸ヲ落サバヤト思ヒ、有田ニ在ケル庄山池田兩人ガ許ヘ、如何ナル謀ヲモ運シ、幸松丸ヲ忍テ落シ候ヘトゾ賴マレケル、庄山池田モ、常々幸松丸盜出スベキ謀ヲ運ス折ナレバ、心得候トテ、乃來ル十一月十五日、例年氏神ナル歲ノ宮參詣ニ事ヨセテ、盜ミ出サントゾ約シケル、既ニ其日ニ成シカ

バ、母上ヨリ與信ノ許ヘ、幸松丸歳ノ宮参詣サセ申ベシト被レ斷ケルニ、苦シカラズト返答有ケレバ、母上不レ斜悦ビ、乳母其外相添、出シ立テゾ参ラセラレケル一部籠手田ハ、カヽル謀計有トハ夢ニモ不レ知、此幸ノ時節ナレバ、歸路ヲ待得テ討ベシト、千計萬方巧ミヲナス斯テ幸松丸今福ノ歳ノ宮ヘ参詣シテ拜殿ニ被レ入ケレバ、禰宜巫共笛鼓ノ聲ヲ揃ヘ神樂ヲ進メケルニ、見物ノ諸人多ク馳集リ、押合犇合ケル、其紛レニ、兼テヨリ隱レ居タル庄山、池田、大曲浦等、寶殿ノ妻戸ヨリ幸松丸ヲ盜取テ、行方不レ知落行ケレバ、一部籠手田ハ、手ヲ空クシテゾ歸ケル、

〔矢島十二頭記〕同〇永祿三年五月十日、山田五郎殿大軍を發し、杉山宗右衛門案内にて信州殿〇小笠原儀満を責る、信州殿自身働き討死す、〇中略嫡子介之進殿其弟二人ともに、郎黨ども落しける道にて、山田勢押付助之進殿を山田へ生捕れ候ゆへ、舍弟兩人を下村内藏人方へ誂置、八島小松計策にて介之進殿を山田より盜出し、永祿六年之秋、玉米養田之館を築、介之進殿を彌三郎儀次殿と改名し地頭にすゆる、

交換生虜

〔信長公記首〕織田上總介信長公、十九の御年〇天文二十二年人數八百計にて御發足、〇中略九郎二郎人數千五百計にて赤塚へかけ出候、〇中略上總介信長三の山より此よしを御覽じ、則あか塚へ御人數よせられ候、〇中略あら川又藏こなたへ生捕、赤川平七敵がたへ生捕候し也、入亂れて火花をちらし相戰、〇中略折立ての事にて、馬共は皆敵陣へかけ入也、是又少もちがひなくかへし進上候也、いけどりもかへ〳〵也、去て其日御歸陣候也、

乞生虜而殺之

〔吾妻鏡四〕元暦二年六月九日庚申、重衡卿自二去年一在二狩野介宗茂之許一、今被レ渡二源藏人大夫頼兼一、同以進發、任二衆徒申請一可レ被レ遣二南都一云云、　廿二日癸酉、重衡卿被レ遣二東大寺一、依二衆徒申請一也、　廿三日甲戌、今日前三位中將重衡、於二南都一刎レ頸云云、是爲二伽藍火災張本一之間、衆徒族申二請之一云云、

〔源平盛衰記四十五〕内大臣京上被レ斬附重衡向二南都一被レ斬并大地震事

土肥次郎使者ヲ南都ヘ立テ云、三位中將重衡ヲバ、關東ニシテ雖可被刎首、南都兩寺ヲ亡ス依咎、可渡遣衆徒之手由、源二位家ノ下知ニ任テ寺邊ニ發向ス、可具足入寺內歟、於境外可被請取歟ト申タリケレバ、東大興福兩寺ノ大衆宿老若輩、貝鐘鳴シテ大佛殿ノ大庭ニ有會合僉議、若大衆ノ僉議云、〈○中略〉重衡獨爲生虜、倐因感果究竟、彼卿寺邊廻來、然者早衆徒ノ手ニ請取、兩寺ノ大垣三度廻シ、其後七箇日間ニ堀頭歟、鋸歟鑿切ニ可殺トゾ申ケル、若大衆ハ尤可然ト同ジケルヲ、老僧ノ僉議ニ云、重衡卿重犯事、衆徒ノ僉議ニ同ズ、因果道理實必然也、但彼卿治承ニ南都ヲ亡シ時、以衆徒力打モ留搦モ取タラバ、刑罪可任僉議之旨、而今年月ヲ送テ勇士ニ取レ、武家ノ手ヨリ請取テ罪ヲ行事、全非大衆高名、就中修學利生之窓中ニシテ、行邪見不善科、背菩薩大悲、僧徒ノ威儀ニアラジ、誠ニ自業自得ノ所催、彼卿死罪難遁歟、然者寺院ノ內ニ不入シテ、イヅクニテモ武士ガ切タランヲ頭ヲバ請取テ、伽藍ノ敵ナレバ可懸奈良坂ナリトゾ僉議シケル、此條可然トテ、別ノ使ヲ相副テ、重衡卿間事被申送、源二位家仰奉畢、但衆徒ノ手ニ請取テ行刑罪事、其憚アリ、般若野ヨリ南ヘ不入シテ可被相計、首ヲバ衆徒中ニ給テ可加一見ト返事シケリ、南都ノ返事聞テ後、土肥次郎ハ、其日モ早暮ケレバ、河ヨリ南ノ在家ノ中ニ、大道ヨリハ東南ニ向テ一間四面ニ造タル舊堂アリ、是ヘゾ入奉リケル、〈○中略〉異說ニ云、中將日野ヲ出テ木津ニ著給ヘバ、賴兼使者ヲ南都ヘ立、衆徒僉議如上、サテハ此ニテ可切トテ、木津川ノハタニ奉下居、布革ノ上ニ奉居、〈○中略〉西ニ向ヒ合掌念佛百返バカリ高聲ニ唱ヘ給ケレバ、頸ハ前ニゾ落ニケル、友時首ヲ地ニ付テ喚叫、見ル人モ皆淚ヲ流ス、〈○中略〉僧モアラレヌ事ナレバ、上ノ山ニテ薪ニ積籠燒アゲ奉リ、灰ヲ埋テ墓ヲ築、卒都婆ヲ立テ、骨ヲバ拾ヒテ高野山ヘ送給フ、一說ニハ重衡ヲバ奈良坂ニテ首斬トイヘリ、重衡卿ノ首ヲバ、賴兼大衆ノ中ヘ渡シタリケレバ、衆徒請取之、東大寺興福寺ノ大垣三度廻ラシ、法華寺ノ鳥居ノ前ニ、竿ニ貫、高捧テ是ヲサラス、治承ノ合戰ノ時、爰ニ打立、南都ヲ亡シタレバトテ也、其後般若

野ノ道ノハタニ、大卒都婆ヲ立テ、張付ニシテ是ヲサラス、見ル人大佛ヲ燒給ハズバ、今懸ル耻ニアヒ給ベシヤトテ、謗ル者モアリ、涙ヲ流ス人モ多カリケリ、

〔太平記十七〕山門攻事附日吉神託事

大將高豐前守〇重範ハ、大股ヲ我太刀ニ突貫テ引籠タリケルヲ、舟田長門守ガ手者是ヲ生虜リ、白晝ニ東坂本ヲ渡シ、大將新田左中將ノ前ニ面縛ス、是ハ佛敵神敵ノ最タレバ、重衡卿ノ例ニ任ズベシトテ、山門ノ大衆是ヲ申請テ、則唐崎ノ濱ニ首ヲ刎テゾ被懸ケル、

〔武功雜記十七〕大野修理長〇治弟ヲ市兵衞ト云、東照宮メシツカハレ、少々御寵愛ナリ、任官シテ壹岐守ト云、三千石被下、修理子ヲ彌十郎ト云、後ニ切腹ス、道犬モ修理弟ナリ、最前チトヒゲナル事ノ名アリテ、京都松木町ヘ養子トナリテユキ居タリ、後ニ大坂ニ籠リ堺ヲヤキシ頭人ナリ、落城以後京ト臥見ノ間ニテ捕ヘラル、堺ノモノドモ重衡ヲ南都ヨリ所望セシ例ヲ引テモラフ、板倉伊賀守ツカハス、堺ノモノ道犬ヲ磔ニカクル、伊賀守無興ニテ、ムカシ南都ノモノ重衡ヲ磔ニセシヤトイフ、堺ノモノ閉口迷惑セシ由、

自爲生虜

〔板坂卜齋記中〕廿日〇慶長五年九月草津、小西攝津守〇行長を關ケ原林藏主搦取て進上すると、和泉守記錄にあり、慶長六年の秋、某、城和泉守父子と同道、木曾路へ掛り江戸へ下り、關ケ原庄屋所に宿を借、城和泉守古き人にて候へば、亭主を呼出し、去年合戰の時は如何と問候へば、亭主六十餘の入道なり、其時地下の人共、落人の事を如何にも委しく物語いたし候、小西殿をば當所の地下人草津へ同道申候か如何と被尋ければ、小西殿を御供申候は某にて候と夜も長く候、其節の事委細語り候へとかたらせ候、〇中略近所の山にて、そこ成人來候へと御申候御方御座候、不入拙者へ御用と被仰候はんよりは何方へ成共忍び御落候へと申ければ、是非共近く來候へと御申候、達て不入御事と申候得共、必近く來候へ賴候はんと御申候、近くへ參り何の御用と申ければ、吾は小

嬖子女

西攝津守なり、內府へ連て行褒美を取と御申候、沙汰の限り無勿體御事、少し成共早く落させられ候へと申ければ、我等は自害するも易けれ共、根本吉利支丹なり、吉利支丹の法に自害はせずと樣々被仰候、在所の百姓も聞候儘、さらば御供申べしとて我宿へ御供申、家康公樣御本陣へ小西殿を御供申に、自然道にて人に奪れ候ては如何可有と存、竹中丹後守殿家老を呼、右之段々小西殿御前にて語り、丹後守家老と申談、小西殿を地下の馬に乘せ申、丹後守家老と某御供申草津へ參り、村越茂助殿御宿へ小西殿御供申、角と申入ければ、此方へ通し候へと人を御出し、小西殿を茂助殿旅宿へ入申候、茂助殿にても左而巳騷ぎたる體にもなく、言れは用ケ間敷見え申候、茂助殿旅亭にて小西殿へ繩を掛申候、某と丹後守家老は道中心易御供申候、繩抔御掛り候はんとは一圓不被存候、御褒美に黄金十枚被下候、

〔武功雜記 二〕治部少〇三成生捕ラレタル時、〇中略三人〇小西行長、石田三成、安國寺惠瓊、へ時服一重宛臺ニノセ被下候、小西ハ、一時ノ寒氣ヲノガレヨトテ小袖被下、辱存候、諸人ニ對面、扨々面目ナシ、身ニ刀ヲタチヌ宗旨ユヘ、如此ミグルシキ目ニ逢ト云フ、

〔源平盛衰記 九〕堂衆軍事

頼方〇平野ハ子息小冠者相具シテ散々ニ戰ケル程ニ、敵多打テ懸リ、アマスナトテ手繁ク戰ケレバ、引退處ニ、イカヾシタリケン我身ハ遁テ子息ノ小冠ヲ被虜ヌ、頼方心細悲ク思テ、今ハ命生テモ何ニカセント思ケレバ、命モ不惜振舞ケリ、堂衆ハ此小冠ガ首ヲ切ベキニテ有ケルヲ、父ノ頼方ヲ招ガ爲ニ子息ヲ城戸口ニ出シテ、我命ヲ助ント思ハヾ、城ノ中ニ入トヨバヽラセケレバ、頼方子ガ頸ヲ續ン爲ニ、甲ヲ脫矢ヲハヅシテ城ノ內ヘゾ入ニケル、大國ノ陵母ハ子ヲ思テ劍ニ伏シ、我朝ノ頼方ハ子ヲ悲テ城ニ入、恩愛親子ノ情コソトリ〴〵ニハ覺エケレ、

〔源平盛衰記 三十五〕粟津合戰事

樋口次郎兼光ハ、十郎藏人行家ヲ追討ノタメニ、五百餘騎ニテ河内國ヘ下リタリケルガ、行家ヲバ討漏シテ、兼光女共虜ニシテ京ヘ上ケル程ニ、淀ノ大渡ニテ、木曾殿〇義仲已ニ討レ給ヌト聞テ、虜ヲバ追放テ、〇下略

〔館林盛衰記〕長尾但馬守館林へ寄事
御邊は諸野秀行とや、我こそ寶田和泉守義勝なり、見參といふより二打三打うち合、引組て二疋が間に落、上に成下になりしが、終に和泉守上に成、諸野が首をかき落し立上らんとする所へ、諸野因幡守〇秀氏が嫡子内膳正一文字にはせより、和泉守が上にのりかゝり、胄を引切て捨、すでに亂髮を顯て首をかゝんと仕たり、小曾根が猶子内匠丞騎澤藤八郎二騎はせ寄て、内膳を引立御方の陣に入けり、因幡守最愛の一子を生捕れ、我此亂をおこすも子孫のためなり、内膳を取歸さでは命生て何にせん、日比の堅約違ずば、つゞけ殿原と、やぐらをとび下り給へば、江口四郎作、宇津木三郎兵衞〇中略を先として、五百餘騎城戸をおし開き切て出たれば、陣ともいはず命かぎりの切死と戰ける、

獲生虜爭功

〔吾妻鏡九〕文治五年九月七日甲子、宇佐美平次實政生虜泰衡郎從由利八郎、相具參上陣岡、而天野右馬允則景生虜之由相論之、二品〇頼朝仰行政、先被注置兩人馬并甲毛等之後、可尋問實否於囚人之旨被仰、景時著白直垂、折烏帽子、紫革烏帽子懸、立向由利云、汝者泰衡郎從中號者也、眞僞強不可搆矯飾歟、任實正可言上也、著何色甲者生虜汝哉云云、由利忿怒云、汝者兵衞佐殿家人歟、今口狀過分之至、無物取喩、故御館者爲秀郷將軍嫡流之正統、已上三代、汲鎭守府將軍之號、汝主人猶不可發如此之詞、矧亦汝與吾對揚之處何有勝劣哉、運盡而爲囚人、勇士之常也、以鎌倉殿家人見奇恠之條甚無謂、所問事更不能返答云云、景時頗赭面參御前申云、此男惡口之外無別言語之間、無所欲糺明者、仰云、依現無禮、囚人咎之歟、尤道理也、早重忠可召問之者、仍重忠手自取敷皮持來于由利之前、令坐之、正禮而誘云、

携弓馬者、爲怨敵被囚者、漢家本朝通規也、不可必稱恥辱之、就中故左典厩〈源義朝〉永暦有横死、二品又爲囚人令向六波羅給、結句配流豆州、然而佳運遂不空、拉天下給、貴客雖令蒙生虜之號、始終不可貽沈淪之恨歟、與六郡内貴客備武將譽之由、兼以留其名之間、勇士等爲立勳功擒獲客之旨互及相論歟、仍云甲云馬毛付畢、彼等浮沈、可究于此事者也、爲著何色之甲者被生虜給哉、分明可被申之者、由利云、客者畠山殿歟、殊存禮法、不似前男奇恠、左可申之、著黑糸威甲、駕鹿毛馬者先取予引落、其後追來者暾々而不分其色目云云、重忠令歸參具披露此趣、件甲馬者實政之也、已開御不審訖、次仰曰、以此男申狀、察心中勇敢者也、有可被尋事、可召進御前者、重忠又相具之參上、被上御幕覽之、仰曰、己主人泰衡者、振威勢於兩國之間、加刑之條難儀之由思食之處、無尋常之郎從歟之故、爲河田次郎一人被誅訖、凡管領兩國、乍爲十七萬騎之貫首、百日不相支、廿箇日内一族皆滅亡、不足言事也、由利申云、尋常郎從少々雖相從、壯士者分遣于所々要害、老軍者依不行歩進退不意自殺、如予不肖之族者、又爲生虜之間、不相伴最後者也、抑故左馬頭殿者、擧令管領海道十五箇國給、平治逆亂之時、不支一日給而零落、雖爲數萬騎之主、爲長田庄司輙被誅給、古與今甲乙如何、泰衡所被管領之者、僅兩州勇士也、數十箇日之間奉惱賢慮、一篇不可令處不覺給歟云云、二品無重仰、被垂幕、由利者被召預重忠、可施芳情之由被仰付云云、　十三日庚午、由利八郎預恩免、是依有勇敢之譽也、但不被聽兵具云云、

〔北條五代記　一〕上杉朝成を生捕事

聞しはむかし武州河越の館において、官領上杉五郎朝定と北條氏綱合戰は、天文六年七月十五日なり、朝定うちまけ滅亡し給ひぬ、敵の軍兵はいぼくする其中に、上杉左近大夫朝成の郎從あまた取て返し討死す、其際に朝成おほくのかたきをのがれたまひぬ、後たゞ一騎に成て落行所に、相模國の住人平岩隼人正重吉是を見ておひかけ、あはれ大將と見えたり、敵にうしろをあやなくも見せ給ふ物哉、引返し勝負を決せよと名乗かゝる、朝成のがれがたく駒引返す、隼人正馬

以生虜獻神

上よりくんで落、はじめは隼人正下に成しが、えいやとねぢ返し上になりたり、味方に山岡豐前守落合、郎等あまた來て敵を生捕、隼人正をばおしへだてうばひ取て、氏綱の御前へ參じたり、又隼人正來て此敵をばそれがしくみふせ候處に、豐前守跡より來て、うばひ取よし相論に及ぶ、氏綱其者の申言葉幷に兩人の馬鎧の毛を記しおかれ、生捕をば山角信濃守に預らる、彼兩人相論實否決しがたし、生捕にたゞ今尋ぬるといふ共、あへてもてこたふべからず、氣色を見合尋ぬべし、彼左近大夫朝成は上杉修理大夫朝興のおとゝ、朝定のをぢなり、いたはり候へと仰付られたり、合戰の後氏綱河越の城に入給ひぬ、信濃守朝成の居所へ參じ、折々昔を語りなぐさめぬ、賴朝公奥州へはつかうの事をかたる所に、〇中略彼由利八郎賴朝公言葉のあやまりをとがめ、至極の道理をもて主人の名をあげ、生どらるゝ身として勇士のほまれをあらはし、末代に名をとゞめ、希代の剛者に候、扨々そこつに生捕の沙汰を申出したり、御氣にかけ給ふべからずといふ、朝成がいはく、生捕の昔を聞に付ても遺恨やんことなし、語て益なしとおもへども、我運命つき、合戰に勝利をうしなひ落行所に、跡より黑革威の鎧を着、あし毛の馬に乘たる武者一騎、名乘ておつかくるの間、駒引返し馬上にてくむ、かれはさしくゝりて下手をとり、我は上手に有て馬上より落たり、され共物の數ともせず、かれをくみふせ刀に手をかけしに、下よりえいやとおし返し朝成下になりぬ、其時あまた落合かさなつて生捕れ、耻辱をさらす事無念口をしきといへり、信濃守氏綱公へ此よし言上す、氏綱聞召、件のよろひ馬は平岩隼人正なり、申つる言葉始終かはらずと御感有て、けんじやうをあておこなはる、氏綱いはく、かれら生捕たる手がらを朝成に尋る共、かたきにくみふせられ、こたへがたからんか、然るを信濃守むかしの生捕を語り出し、朝成をなだめたる知略を感じ給へり、

〔日本書紀〕七景行四十年十月癸丑、日本武尊發路之、戊午枉道拜伊勢神宮、〇中略逮于能褒野而痛甚之、

則以所俘蝦夷等獻於神宮、　五十一年八月壬子、所獻神宮蝦夷等、晝夜喧譁、出入無禮、時倭姬命曰、是蝦夷等不可近就於神宮、則進上於朝庭、仍令安置御諸山傍、未經幾時、悉伐神山樹、叫呼隣里、而脅人民、天皇聞之詔群卿曰、其置神山傍之蝦夷、是本有獸心、難住中國、故隨其情願、令班邦畿之外、是今播磨、讚岐、伊豫、〇豫原作與、據集解說改、安藝、阿波、凡五國佐伯部之祖也、

〔新撰姓氏録 五右京皇別下〕佐伯直　譽田天皇〇應神爲定國堺、車駕巡幸到針間國神埼郡瓦村東崗上、于時青菜葉自崗邊川流下、天皇詔應川上有人也、仍差伊許自別命往問、卽答曰、己等是日本武尊平東夷時所俘蝦夷之後也、散遣於針間、阿藝、阿波、讚岐、伊豫等國、仍居此爲氏也、後改爲佐伯〇下略

〔宇都宮奇瑞記〕同〇後鳥羽御宇文治五年、征夷將軍家賴朝、爲藤原泰衡誅罰、又於當社有祈請、仍感應繁多、三箇日中凶徒誅戮畢、爲報賽以生虜樋爪五郎季衡被掛生贄、

〔吾妻鏡 九〕文治五年十月十九日乙巳、三品〇源賴朝於下野國令奉幣于宇都宮社壇給、蓋是非巡道御參詣、偏爲御報賽也、則奉寄一庄園、剩以樋爪太郎俊衡法師之一族、爲當社職掌云云、

〔源平盛衰記 二十九〕妹尾幷齋明被虜事

木曾云ケルハ、自余ノ兵ハ逃バ逃ス共、齋明アマスナ若者共、同ハ生捕ニセヨ若者共ト下知シケレバ、岡本次郎成時、是モ主從五騎ニテ歩セ出シテ、郎等共ニ山寺法師思フニサコソアランズラメ、齋明ハ我得分ゾ、目ヲカクナ、四騎ノ武者ヲ打拂ヘト云ケレバ、四人ノ郎等四人ノ法師武者ヲ追拂フ、其間ニ齋明ト成時ト、押並テ組デ落、兎角操リ、本意ニ任テ、齋明ヲコソ虜ケレ、

〔源平盛衰記 三十五〕粟津合戰事

鎌倉殿〇源賴朝兵共ニ相觸テ、多胡次郎家包木曾〇義仲ニ付テ在也、相構テ虜テ進ゼヨト被仰含タリケレバ、家包ハ大狂廻切廻ケレ共、軍兵ハ疵ヲ付ジト射モセズ切モセズ、手ヲヒロゲテ取ン取ントシケルコソ由々シキ大事ナリケレ、兵ノ中ニ、家包甲ヲ脱、太刀ヲ納テ降人ニ參レ助ン、木曾殿

モ今ハ主従三騎也、和君一人命ヲ棄タリ共、木曾殿軍ニ勝給フベシヤ、唯降人ニ参レ、無山々々ト云ケレバ、家包申ケルハ、弓矢取身ハ主ハ二人不持、軍ノ習討死ハ期スル處也、命ヲ惜降人ニ成テ、角云フ人々ニ面ヲ合スベキヤ、正ナシ〳〵、敎訓モ事ニヨルベシ、其ヨリモ只寄合組デ討取給ヘノヤ殿原トテ斬廻リケレ共、大勢轡ヲ傾テ押寄、終ニ生捕ニケリ、

〔吾妻鏡　四〕元暦二年〇文治元年正月六日庚寅、宗光帶委細御書、是於鎭西可有沙汰條々也、其狀云、〇中略内府〇平宗盛は極て憶病におはせる人なれば、自害などはよもせられじ、生どりに取て、京へぐして上べし、〇下略

〔吾妻鏡　十六〕正治二年二月二日戊午、今日出御御所侍、仰波多野三郎盛通、被生虜勝木七郎則宗、依爲景時餘黨也、是多年奉昵近羽林之侍也、相撲達者、筋力越人之壯士也、盛通進出則宗之後懷之、則宗振拔右手、拔腰刀欲突盛通之處、畠山次郎重忠折節在傍輩不動坐、捧左手取加則宗之拳於刀欄、不放之、其腕早折畢、仍魂惘然、而輙被虜也、卽給則宗於義盛、　六日壬戌、今日則宗罪名幷盛通賞事有其沙汰、廣元朝臣、善信、宣衡、行光等奉行之、爰有眞壁紀内云者、於盛通成阿黨之思、生虜則宗事、更非盛通高名、重忠虜之由憤申之、仍於石御壺被召決重忠與眞壁之處、重忠申云、不知其事、盛通一人所爲之由承及許也、其後重忠歸來于侍、對眞壁云、如此讒言尤無益事也、携弓箭之習、以無横心爲本意、然而客爲懸意於勳功之賞、成阿黨於盛通者、直生虜則宗之由可被申之歟、何差申重忠哉、且盛通爲譜第勇士、敢不可借重忠之力、已申贖譜第武名之條不當至極也云云、

〔陰德太平記　二十七〕大和伊豆守被擒事

大和伊豆守ハ近國ニ名ヲ得タル大力ノ剛ノ者、太刀執テノ早業、殊ニハ大内代々幷ニ諸家ノ軍法ノ蘊奥ヲ極メ知テ、兵道ノ軌範ニテゾ有ケル、サル故ニ元就〇毛利モ、今度ノ合戰ニ生ケテ置度者二人アリ、大庭加賀守兼方ハ聞ユル歌人ナレバ、吾老後ノ和歌ノ友トスベシ、大和伊豆守與武

ハ大内家ノ軍鑑、尋ネ聽マ欲ト宜ケルニ因テ、光景〇香川モ此一言ヲ思出シテ、興武ヲバ生捕ケルトカヤ、興武ハ、光景ヲ礑ト睨テ、先剋ノ詞ニ相違シテ、伊豆守程ノ者ヲ何シニカク縲紲ノ耻ヲバ與ルヤ、唯早ク頸ヲ打タランコソ故舊ノ標ナタメト云ケレバ、光景サン候、舊識ノ因ミ難忘、且ハ元就モ常ハ斯々宜ツレバ御命ノ助ケマ欲ク存ルニ由テ、如此ハ擧動申ス也、鮑叔管仲ガ囚レヲ免セシ例ニコソ習ヒ候ハンズレト云ケレバ、興武御情ニテ候ハヾ、タヾ疾打テ給ハリ候ヘ、元就モ興武程ノ者ヲ爭カ生テハ置レ候ベキ、迚モ存生ベキ命カハ、片時モ早ク打レシコソ幸ニテ候ハメト云テ、其後ハ更ニ一言ヲモ吐ザリケリ、

〔奥羽永慶軍記〕七眞壁安藝守攻落小田城事

永祿十二年十一月廿四日、〇中略眞壁〇久幹勢同音ニ鬨ヲ作テ案テカヽル、〇中略生捕三十人程有シニ、討取首ヲ見セテ名字ヲ撿ス、

〔奥羽永慶軍記〕二十一會津田村矛盾ニ及ブ事

田村〇清顯方今泉ノ住石井甚七郎、今年十六歲、會津〇盛氏勢ノ殿ニ喰付、首五ツ討取生捕三人シテ、五ツノ首ヲ生捕ニ結ビ付、味方ノ陣ニ引テ歸ル、類ヒマレナル高名トテ清顯之ヲ感ジ、褒美トシテ色ヨキ具足ニ太刀添テ賜リケリ、

古事類苑

兵事部二十

首實檢

古事類苑

兵事部二十

首實檢

首實檢ハ首級ヲ檢スルヲ謂フ、古書往々獻首ニ作ル、後世首檢知ト云ヒ、首對面ト云ヒ、以テ貴賤ヲ別ツ、其之ヲ檢スルヤ、粉ヲ面ニ施シ、涅ヲ齒ニ加フル等ノ事アリテ、髻ニ札ヲ附シ、之ヲ臺ニ置クナリ、而シテ侍者左手ニテ髻ヲ執リ、右手ニテ臺ヲ持シ、少シク側面ニナシテ、主將ノ檢見ニ備フルナリ、檢見終リテ後、其首ハ或ハ之ヲ棄テ、又ハ之ヲ梟シ、又ハ敵ニ送ル等一ナラズ、首級ノ事ヲ記ス者ヲ頸帳ト云ヒ、首級ヲ載スル板ヲ頸臺、又ハ頸板ト云ヒ、首級ヲ納ムル者ヲ頸桶ト云フ、

馘シタル耳、劓シタル鼻ヲ檢スルコトアリ、亦檢首ノ類ナリ、又檢屍ノ事アリ、檢首トハ固ヨリ同ジカラザレドモ、其死ヲ檢スルハ則チ一ナルヲ以テ本篇ニ收メタリ、

名稱

〔雍州府志十陵墓〕耳塚〇中略　凡本朝軍士、得敵首謂取首、或謂高名、依忠功高得武名之謂也、敵之所隨身物、或冑或刀等物、添首取之來、謂分取高名、倭俗一種謂一分、依之一種分來、故稱分取、敵首携歸入主君之一覽、是謂實檢、蓋檢軍實之義乎、記首多少之書謂首帳、

〔軍禮抄〕對面の首の事

一敵の大將の首を我大將の御覽するをば、實檢とはいはず對面と云也、

〔越後軍記三〕景虎間頸實檢之法式事

首級假粧

一頸對面ト申ハ、敵ノ大將貴人高位ノ頸ヲ見給フ、是ヲ對面ト云ヘリ、〇略

一實檢トハ諸ノ者頭奉行等、總ジテ甲冑ヲ帶スル騎兵ノ頸ヲ見給フヲ云ナリ、步立ノ士葉武者ノ頸ヲ双置見給フヲ、見知ト云フナリ、(頸實檢トハ總名ト知ルベシ、)〇中略

一見知ト云ハ、下輩ノ首ナリ、〇下略

〔頸對面之次第〕敵將ノ頸ヲ討取、大將其首ヲ見ルヲ實撿ト總テハ云ヘ共、互ヒニ劣ラヌ將ノ頸ヲ實撿トハイハデ、頸對面ト云也、勝負ハ將ノ運ニ依テ討事モアリ、又討ルヽ事モ有ベシ、將ノ運ニ依テ也、將ノ禮儀ハ死シテモオトサヾルハ武士ノ道トスルナリ、〇中略

口傳ニ云ク、撿知ト云ハ大將ノ頸ニアラズ、連枝ノ首重キ人體ノ時撿知ト云フ、

〔首撿知之次第〕一大將之連枝或ハ親武者再拜採等之首ヲ見ル、是ヲ撿知ト稱ス、備經營等對面ノ如シ、〇中略

一葉武者、白歯者、雜兵等之頸ヲ見ルヲ、配見ト號ス、

〔軍禮抄〕首實撿の事

一首實撿の時は、先首化粧とて、(首敷束とし云)首を水にて能洗ひ、血又は土などを洗ひ落し、髮を引さき、もとゆひにて髻を高くゆひ上べし、(髮ゆふ時水つけて、くしのみれにてなで付る也、是は常にいむ事なり、)もしかねつけおしろいべになど付たる首ならば、其如くにこしらへべし、顏に疵付たらば米の粉をふりかけて、疵をまぎらかす也、(疵あれば顏がはりして見ゆる故なり、)紙札に首の姓名を書て付る也、

〔越後軍記〕三景虎問頸實撿之法式事

一實撿ノ前、頸ノ左ノ方ニ我手ヲアテ、三度摩ルヲ頸ヲ化粧スルト云フナリ、

一頸ヲ洗ニハ首ヲ北向ニシテ、酒ヲ以テ洗、エノ油ヲ面ニ塗事アリ、梟首スル時モ如是スル事アリ、

檢首之所

檢首裝束

〔おあむ物語〕我々母人も、そのほか家中の内儀むすめたちも、みな〳〵天守に居て鐵炮玉を鑄ました、また味かたへとつた首を天守へあつめられて、それ〳〵に札をつけて覺えおき、さい〳〵くびにおはぐろを付ておじやる、それはなぜなりや、むかしはおはぐろ首は、よき人とて賞翫した、それ故、しら齒の首は、おはぐろ付て給はれとたのまれておじやつたが、くびもこはいものではあらない、その首どもの血くさき中に、寢たことでおじやつた、

〔軍用記七〕首實檢の事

首の拵樣、(くび化粧と云ひ、又首裝束とも云ふ、)髮は常より高くゆひ候なり、首の髮をゆふには、初より水を付、右よりくしをつかひ、そのくしのみねにてたて、元ゆひを櫛にて四ッたゝきて結び納る也、さればたゞの時櫛のみねをかみに當つべからず、又齒を黑めたる首にはかねを付け、けしやうしたるくびにはけしやうする也、

〔軍禮抄〕首實檢の事

一首實檢の場所は其所の寺などにて有べし、首御覽ずる人は門の內、首御目にかくる人は門の外にあるべし、門もなき所は幕をはりて、中を卷上げて、內外の隔をなす也、敵來て首をうばひ返す事も有べき歟の用心をきびしくすべし、

對面の首の事(中略)

一首對面の場所は幕を張り、中を外へ卷上る也、その幕より二三間計內に床机を立べし、其幕の外にて首御目に懸る也、(床机に敷皮懸る事例の如し)

〔軍禮抄〕首實檢の事

一首を見給ふ大將も、首御目にかくる人も、首披露の奏者も、其所に伺候の人々も、皆物の具をよろひ、弓を持矢を負ふ也、首御目にかくる人は弓もたず、總て出陣の時のごとし、(中略)

檢首作法

對面の首の事○中略

一首對面の場所は幕を張り、中を外へ卷上る也、その幕より二三間計内に床机を立べし、其幕の外にて首御目に懸る也、床机に敷皮懸る事例の如し

〔頸對面之次第〕一大將首對面出立之事、右ニ渴、左ニ水ヲ置キ、七柄杪宛カヽリ、摩利支天ノ呪ヲ唱ヲ一番天衣、二番地衣、三番鎧直垂、四番髮ヲ亂シ、梨子打烏帽子震結、五番太刀刀、六番箙ヲ負ヒ重藤ノ弓ヲ弨ニ突キ、七番沓ヲ履キ、八番五字ノ反配、九番ニ將器ニ腰ヲ懸ケテ對面有ルベシ、

口傳ニ云ク、○中略髮ヲ亂スハ烏帽子ヲ著ル故也、梨子打ヲ著テ、上ニ震結ヲスルナリ、陣ヘ烏帽子ハ著ザル事ナレ共、首對面ニテ弓矢鬪諍ノ難ナキニ依テ、烏帽子ヲ著鎧モ著ズ、ヨロヒ直垂バカリヲ著タルナリ、太刀刀ヲ帶ビエビラヲ負ヒ、弓ヲ持ハ武用ノ六具ナレバ、鬪諍ナキ時モ武ノ備ヘ也、○中略

一役人出立ノ事、髮ヲ散ラシ震結シ、鐵衣ヲ著太刀ヲ帶ス、異本ニ徒膚トアリ、上古ハ小具足ニテコレヲ勤ム、口傳、

口傳ニ云ク、役人トハ頸ヲ實見ニスル人也、鐵衣ハ具足也、徒膚トハ臑當バカリニテ、胴衣ノ體ヲ徒膚トハ云也、小具足トハ喉輪籠手、臑當此三ツヲ具スルヲ云ナリ、

〔今川大雙紙〕陣具に付て式法の事○中略

一頸を御目に懸る事、左の手にて本どりを執、右にて臺を取て、左の膝をつきて右の足をふみながめて、右の手をのべ首をねぢまはして、實撿させ申也、わが身をそばめべし、大將に頸をぢきに見せ申さぬ事也、又頸取たる人の名字を申上て、其後頸をみしりたらば、頸の名字を申べし、但我が取たる我御目に懸るには、名乘を申也、然れ共大將の御一家我よりも目高き頸ならば、先頸の名字を申て、其後わが名字を名のる也、又臺にすゆる事位による也、てうてき又は御一

家ならば、くぎやうにすべし、常はひら折敷也、居物なくばはながみに居べし、夏頸のしるたるをば、ぬるでのはを敷べし、

〔軍禮抄〕首實撿の事

一實撿の次第、其場に床机を立置也、大將右の手に扇を持て、床机に腰をかけらる、御弓持役人相したがふ大將の後又左右に人々列座すべし、首の奏者は少はなれて、右の方に座べし、何れも座し樣は兩ひざをふせて、前にて足をくみろくに居也、是すべて軍中にての座しやうなり、次に大將の著座定りて、弓持の役人座を立て、弓を大將に進らする、大將持たる扇を腰にさし、或は鎧の引あはせにさす左手にて弓を受取て、直に弓杖つく、弦を内へなし、右の方へ弦を向てつくべし、弓進たる人は左へめぐりて退き、本座に歸るべし、

一次に首御目にかくる人、首を首板にすへ、首板こしらへやう別書にあり略之右の手にて首の髻を提げ、左の手を首板の下に入て、首板にて首を受て持て出て、御前通りにて、門外又は幕を卷上たる所の外にて座す、座し樣前に同扨首板を下に置て、左の手をば首の耳の中へ大指をかけ、殘る指にて腮をかかへ、右の手は頰より腮をかゝへ、首を少あをのけ、少左へひねりて持ちあげ、首の右顏を御目にかくるなり、

一次に首の奏者兩ひざの前に、居すまひ前ニ記ス兩手のゆびさきをつきて首の方を見、大將の方を見て、何がしが討取る何がしが首と云て披露するなり、もし首の姓名しれざる事あらば、たゞ何がしが討取たる首とばかりいふなり、

一次に大將床机を立はなれ、首の方を弓手になして、弓射る如く足ぶみをして立て、左の手に弓杖をつき、右の手を太刀の柄にかけ、少刃をぬきかけ、左の目じりにて首を一目見る也、いまだ披露せざる間は、首の方を見べからず、披露する時首を見る也、扨頓而首持たる人首を首板にすへ、立て左へめぐりて退出する也、

一次に大將左へめぐりて床机に腰かけ給ふ、(立たるまゝにて、あとおさりして腰かくるはいむ事なり、)弓持の役進み出て、弓を受取て左へめぐりて本座に帰る、大將扇を殘らずひらき、左手にて持て三度大にあふぎて、扨扇をたゝみて右手に持て入給ふ、(是までにて侍の首の實検の作法終る○中略)

對面の首の事○中略

一首對面の次第、先大將出て床机に腰懸給ふ、(敷皮の白毛をふまへる事、扇持事、其外前に云に同じ、)伺候の人々前に云如し、

一次に首を臺にすへて、武人して舁出る、(大將の首すゆる臺は、常の首板よりは大也、寸法別書にあり、)首の右の方かく人は上手也、(右かく人はすなはち首を取たる人なり、)左の方かく人は下手也、左の方かく人は兩手にて臺を持つ、右の方かく人は、左手にて臺を持、右手にて首の本どりを持也、左かく人はちとすぢかへにうしろざまに歩み出る、右かく人はちとすぢかへに向へ進みて舁出る也、(臺人して持出る事も、有實検の首に同じ、)扨幕の巻上たる所の外に首を舁すへて、右の方舁たる人、首の後へ立廻り、首を兩手にて持上げ、(持やう前にいふ如し、)少あをのけて、右顔を御目に懸る事前に云如し、左かきたる人は、其まゝ左に居べし、(居ずまひ前に云如し、)

一首の奏者披露するに、誰殿の首と殿の字付べし、

一次に大將首御覽じ様以下、扇つかひ様前に云に同じ、

一次に首を臺に置て、首のうしろを大將の方へ向けて置き、右の手にて首の髻を持て居也、(これも右の方かきたる人のする事也、)

一次に大將へ肴をすへ、銚子提出て三々九度の祝有、其式出陣の時の如し、祝終て肴の膳銚子提等取退、(案の事なり、前にいふごとし、)

一次に首の前へ肴をすへて、(かんなかけの折敷のふちをはなし、とぢめを首の前へなし、向に昆布の帶をかいまきにして、まやうがを二切置なり、或は韮の葉なしかいまきにする兩様なり、前にかはらけを二ツふせて置く、是歪也、着すへす、是等の事常にはいむ事なり、)銚子をさか手に持出る、(さか手とは、左手なを先へなして、か

つらのほしの方を持、右手に柄の丼目を持也、常にはいむ事なり、提は不出、

一次に右の方昇たる人、かはらけを取て酒をうくる、酌の人酒の出し様、銚子をさか手に持てあるを、手を左の方へひねりて酒を出す也、常の如く左口より酒を出ス也、銚子の持様ばかり常にかはる也、或説にてうしをば常の如く持て、酒をば右口より出すと云へり、此説わろし、てうしは本式片口なる物なり、左口ばかりなり、片口のてうしには右口はなきなり、両口のてうしは人あまた混座して、亂酒などの時左右の人に酌すべき為に作たる也、略儀物也、一ッ盃にそゝと二度酒を入る也、二度入る事、常にいむなり、

一次に右の如くかはらけに酒をうけて、首の口のそばへよせて、首の前の土にうちこぼし、かはらけは膳のすみにふせて置也、盃をふせる事、常にいむなり、

一次に又一ッのかはらけを取上、酒をうくるより以下の事、右に同じ、盃二ッにて酒を入る數、都合四度也、常に盃二ッ置事、並四度をいむ也、二獻をいむ事も盃二ッの故也、扨肴の膳も、銚子も其儘にて打捨置也、後に取除け捨さすべし、首に酒手向る事は、敵ながらも大將なるゆへ、禮儀を述る意なり、

一次に右の如く二盃めの酒終るやいなや、巻上たる幕をおろす、大將床机より立去て、陣屋へ歸り給ふ、首は前のごとく、兩人昇て左へめぐりて退くべし、

首實撿雜事

一首實撿略儀には、大將も首懸御目人も鎧着せず、なし打ゑぼし鎧直垂に小具足小手すねあてを云ばかりして、太刀はきて實撿する事も有り、式正にあらず、

一首懸御目様略儀には、右に首の髻を持左に首板を持出て、直に其まゝにて首の右頰を御目にかけて、頓而立て左へめぐり退出する事もあり、

一首板出來合せざる時に、略式にはかんなかけの折敷にても、へぎの折敷にても、又は扇にても、鼻紙にても、首の切口にあてゝ持上、右はいつもの如く、首の髻を提て懸御目也、御めにかけ様は前に同じ、

一入道首は髮なきゆへ提られず、依之首のぬけざる樣に、細き繩にてからげて、いたゞきの上にて結て、其結餘りを提べし、其外の事は俗人に同じ、

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一軍陣にて具足をぬぎて、小具足などの時、頸を御目にかけ候事、頸のたぶさを左の手に提て、頸の面をさきへなして、頸少あふのけて、頸の左を御覽候やうに、左右の膝を立て、つくばひて御目に懸べし、立樣には左へまはりて出歸る也、さやうに出候へば、頸の右のかた御めに懸候也、又入道の頸は、左にて切口をとらへて、大指にて耳の上をよくかゝへて、御目にかけ候樣體は男の頸と同前也、又罷立やうも同前也、〇中略

一敵の大將の頸を取て、味方の大將に見せる事、左に弓を持、右に頸を持、弓をちがへて弓の下よりくびを見せ申也、弦は外へなすべし、

〔越後軍記三〕景虎問頸實撿之法式事

一戰場ニテ直ニ頸披露スル事アリ、其時ハ冑ノ䋝(シコロ)ヲ疊ミ揚、左ニテ持テ、左ノ膝ヲ立右ノ膝ヲ突、右ノ手ニテ冑ノ吹返ヲ抱ヘ、左ノ膝ニ載テ主君ニ右ノ片顏ヲ奉見也、〇中略

一頸數十已上ハ七ツ、百已上ハ十五實撿アルベシ、殘ル首ハ並置テ見知タルベシ、雖然者頭物奉行其外名高キ士ノ頸ハ、幾ツ成トモ實撿アル事ナリ、時宜ニ依ベシ、

一見知ト云ハ下輩ノ首ナリ、首數多キ時ハ、幕外ニ西向ニ頸ヲ並置キ、北ヨリ南ヘ馬ニテ三度乘廻シ、馬上ヨリ御覽アルナリ、或又幕越ニ御覽ノ事モアルベシ、〇中略

一母衣武者ヲ討取テハ、母衣ノ第二幅ヲ取テ四ツニ折、三重ヲ頸ニ敷、一重ヲ頸ニ掛、帝釋ノ緖ヲ以テ結ナリ、實撿ニ入ル時ハ、頸ヲ右ノ方ニ置取出シ、面ニ掛タル母衣絹ヲ下シ、扨如常實撿ニ入ベシ、居物ハ供獲ナリ、

〔首檢知之次第〕一葉武者、白歯者、雜兵等之頸ヲ見ルヲ配見ト號ス、異本ニ陪撿、

口傳ニ云ク、葉武者トハ諸將ニアラズ、梶モ掛ザル程ノ武者ヲ云、白歯者ハ歯ヲ染ザル平士也、雜兵ハ匹夫也、昔ハヨキ侍ハ老若ニヨラズ歯ヲ染ルナリ、近來ハ其沙汰ナシ、此等配見トテ一ツ一ツニハアラズ、首數ヲ集テ實見ニ入ルナリ、○中略

一討込ノ頸ノ事、百級以上ノ時、正頸四級撿知ノ如クニ執行ベシ、頸板ニ居ヘ右手ニ髻ヲ捕、左手ニ板ヲ持、撿知ニ入レ、殘ル頭ハ右顏ヲ揃ヘ、間ニ障板ヲ立テ雙ベ置、配見ニ入ルベシ、大將左眼ニ白眼ニテ通也、又師奉行配見スル事モ有ベシ、○中略

一首揃ト云事、諸手ヨリ討來ル首ヲ一所ニ雙ベ、其内仁體ノ首ニハ隔ノ板ヲ立置也、隔板徑リ四寸二分四方ニ作ル、又異本ニ八分トアリ、横板ニナシテ串ニ挾ミ頸ノ間々ニ立ル、串ノ長サ一尺餘、又隔ニ扇ヲ立、笄ヲ立ル事モアリ、口傳、○中略

一一人ニテ首數實撿ニ入ル時ハ、兩手ニ頸ヲ二ツ髻ヲ提ゲ出、首ノ面ヲ我前ヘナシ、扇ヲ隔ニシテ、首ヲ指上ゲテ實撿ニ入ベシ、大將若シ稱名ヲ尋事アラバ、首ヨリ前ヘ兩手ヲ越シテ、右手ヲ上ヘ重答ベシ、○中略

一城中ニテ實撿之事、閫ノ外妻戸ノ前ニテ有ベシ、大將隔ニ扇ノ小間ヨリ見給フベシ、或ハ蔀ヨリ實撿有ベシ、○中略

一野山ニテ不時ニ實撿ノ時ハ、弓或ハ策ヲ隔ニ置也、末弭アルヒハ策先ヲ以テ、地ニ五行ヲ書ベシ、口傳、○中略

一同馬上實撿之事、大將ノ弓手ノ方ニ馬ニ乘居テ、左鐙ヲ踏浮テ、右手ニ首ヲ持、左ニ打物ヲ持テ隔ニナシ、指上テ實撿ニ入ベシ、○中略

一甲首持様、右手ニ鍬ヲ持、左手ニ腮ト頬ヲ持ベシ、又鍪ヲ臺ニシテ首ヲ載ル事モ有ベシ、

〔軍禮抄〕首を人の許へ送る事

一何ぞ故ありて人のもとへ首を送りつかはす事あらば、首を首絹に包みて首桶に入て、白布一幅を桶の底よりふたの上にかけて結、ふたは落しぶた也、結は諸わなは、絹桶等のこしらへやうは別書にあり、桶のふたの上に、征矢一筋根を我左へなし、布にて、結たる間に横たへさして置なり、これをしるしの矢と云、使者は鎧を著すべし、桶を持參して、兩手にて桶をかゝへ、大指を矢にかけ指そへて、奏者に對し兩ひざ立てつくばひて、鎧をきるゆへつくばふなり目禮し、桶を左に置、矢を右の手にて取て、右脇に矢尻を向ふにして口上述、扨右手にて矢を取て、竪に立て根を下へなし、根の上の方に左の手をそへ渡して、次に桶のとぢめなき方を奏者の方へむけ、緒をときふたを取て、首緒をひらき首を見せて、さて本のごとくふたして緒をむすび、桶のとぢめを奏者の方へなして、下に置て渡す也、首のうしろはとぢめの方にあり、常の物はとぢめを我方になして渡すなり、又常の物は面を人の方へ向るなり、首は常にかはりてかへざまにするなり、奏者は矢を受取て根を先へなして、右の脇に置、扨首を見屆桶を受取てとぢめを向へなし、左の脇に置、使者をあひしらひ、扨矢を前の如くふたの上にさし持て入、主人へ懸御目時、右の如く持出、矢をば我左の方に根を主人にむけず、横に脇ざまへ向けて置、扨桶のとぢめなき方を、主人の方へむけ、とぢめなき方に首のかほに向てある也、ふたを取て懸御目て、扨ふたをして布にて結て、上に矢をさして、左へ廻り退き、桶をば納むべき所に納めて、矢をば持て出て使者に對し、主人の返答を申て、扨前の如くして矢を使者に渡し返すなり、使者は矢を受取て右の脇に置て歸る也、其矢を使者持歸る事なし、其まゝすて置也、返し矢をいむ事也、征矢をそへて送る事は、弓取の首なるゆへ、其しるしに征矢をそへて送るなり、其人を賞しての事なり、禮儀にする事なり、

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一頸桶請取渡之事、桶の蓋をあけて、何がしが頸といひて、本のごとく蓋をして、下よりかけて結

たる布を、左にて取て右の手を少そへて、うしろを前にして渡也、請取人も左の手に布を取、右之手をもそへて請取てなほす也、

一はだか頸は左にてもとゞりを取て、かた手にてうしろを前に成て渡也、請取人ももとゞりをとり請取て直すまで也、

一頸を桶に入て、他所へ遣にも、征矢一ッ添る也、是を矢じるしと申也、あふ人禮有べし、口傳に有り、又頸じるしとも申也、

〔陸奥話記〕六年〇康平二月十六日、獻貞任、重任、經清首三級、京都爲壯觀、車擊轂、人摩肩、子細注別紙也、先是獻首使者、率貞任從者降人也、稱無梳由、使者曰、汝等有私用櫛、以其可梳之、擔夫則出櫛梳之、垂涙嗚咽曰、吾主存生時、仰之如高天、豈圖以吾垢櫛梳其髪乎、悲哀不忍、衆人皆落涙、雖擔夫、忠義足令感人者也、同廿五日除目之間、賞勲功、〇中略獻首使者、藤原秀俊爲右馬允、

〔扶桑略記〕二十八後一條長元四年六月十六日、甲斐守源頼信朝臣、於平忠常首參洛、〇中略下向任所之日、可討忠常之由有勅、仍欲襲征間、忠常請降伏來、頼信随身參上之處、於美濃國山縣、即忠常受病死去、仍只斬其頭、傳于京師、依爲降虜之、返給其首於從類、

〔保元物語〕二爲義最期事

去程ニ爲義〇六條判官法師ガ頸ヲ刎ベキ由、左馬頭〇義朝ニ宣下セラレケレバ、〇中略鎌田次郎太刀ヲ拔テ後ヘ廻リケルガ、相傳ノ主ノ首斬ン事心憂テ、涙ニ昏テ太刀ノ當所モ覺ネバ、持タル太刀ヲ人ニ與フ、其時、願諸同法者、臨終正念佛、見彌陀來迎、往生安樂國ト唱テ終ニ斬ラレ給ケリ、首實撿ノ後、義朝ニ賜テ、孝養スベキ由仰下サレケレバ、正清是ヲ請取テ、圓覺寺ニ收、墓ヲ建塔ヲ築、卒都婆ナドヲ造立セラレテ、ヤウ〳〵ノ孝養ヲゾ致サレケル、

〔平治物語〕一信西首實撿事附大路渡被梟獄門事

去程ニ舍人成澤同ジク都ヘ歸ケルガ、最期ノ乘馬也、紀伊二位〇信西妻ニ見セ率ラントテ、空シキ馬ヲ牽テ歸ル程ニ、出雲前司光泰五十餘騎ニテ、信西ガ行衞ヲ尋來ルニ、木幡山ニテ行逢、馬モ舍人モ見知タレバ打伏テ問ケルニ、始ハ知ズト云ケレドモ、終ニハ有ノ儘ニゾ申ケル、卽此男ヲ前ニ立テ行程ニ、新シク土ヲ穿テル所アリ、アレコソゾヨト敎レバ、卽堀發シテ見レバ、イマダ目働キ息モ通ヒケルヲ、首ヲ捕テゾ歸ケル、出雲前司光泰、信賴卿ニ此由ヲ申セバ、同十四日ニ別當惟方ト同車シテ、光泰ノ宿所神樂岡ヘ行向テ、此首ヲ實檢ス、必定ナレバ、驗テ明日大路ヲ渡シ、獄門ニ梟ラルベシト定ラレケレバ、京中ノ上下、河原ニ市ヲナシテ見物ス、〇中略朝敵ニアラザレバ、勅定ニモアラズシテ、首ヲ獄門ニ梟ラルヽモ、前世ノ宿業ト云ナガラ、去保元ニ絕テ久シキ死罪ヲ申行ヒシ報カトゾ人々申ケル、

〔吾妻鏡一〕治承四年八月十二日壬辰、可被征兼隆〇平氏事、以來十七日被定其期、　十七日丁酉、盛綱〇佐々木三郎景廉〇加藤次任嚴命入彼館、獲兼隆首、〇中略既曉天歸參、士卒等群居庭上、武衞〇賴朝於縁覽兼隆主從之頸云云、

〔吾妻鏡二〕治承五年〇養和元年九月十三日丙戌、和田次郎義茂飛脚自下野國參申云、義茂未到以前、俊綱專一者桐生六郎、爲顯隱忠、斬主人而籠深山、搜求之處、聞御使之由、始入來陣內、但於彼首者、稱可持參不出渡之、何樣可計沙汰哉云云、仰云早可持參其首之旨、可令下知者、使者則馳參云云、　十六日己丑、桐生六郎持參俊綱之首、先自武藏大路、立使者於梶原平三之許申案內、而不被入鎌倉中、直經深澤、可向腰越之旨被仰之、次依可被加實檢、見知俊綱面之者有之歟由被尋仰、而只今於祗候衆者、不合眼之由申之、爰佐野七郎申云、下河原四郎政義、常遂對面云云、可被召之歟云云、仍召仰之間、政義遂實撿、令歸參申云、剃首後經日數之故、其面殊雖令變、大略無相違云云、

〔源平盛衰記三十〕實盛被討事

了塚敵ノ首ヲ郎等ニ持セテ、木曾ノ前ニ持テ行申ケルハ、光盛辯者ノ首取テ候、名乘レト申セバ、存ズル旨アリ名乘マジ、木曾殿ハ御覽ジ知ベシト計ニテ名乘ズ、侍カト見レバ錦直垂ヲ服タリ、大將軍カト思ヘバ續者ナシ、京家西國ノ者カトスレバ坂東聲也キ、若者カト思ヘバ、面ノ皺七十餘ニ疊メリ、老者カトスレバ鬢鬚黑シテ盛ト見ユ、何者ノ首ナルラント申、木曾打案ジテ、哀武藏齋藤別當ニヤ有ラン、但其ハ一年少目ニ見シカバ、白髮ノ糟尾ニ生タリシ、カバ、今ハ殊外ニ白髮ニ成ヌランニ、鬢鬚ノ黑キハ何ヤラン、面ノ老樣ハサモヤト覺ユ、實ニ不審也、樋口ハ古同僚見知タルラントテ召レタリ、髻ヲ取引仰ゲテ一目打見テ、ハラ〱ト泣、穴無慙ヤ眞盛ニテ候ケリト申、何ニ鬢鬚ノ黑ハト問給ヘバ、樋口サレバ其事思出ラレ侍リ、眞盛日比申置候シハ、弓矢取者ハ老體ニテ軍陣ニ向ハンニハ、髮ニ墨ヲ塗ラント思フ也、其故ハ合戰ナラヌ時ダニモ、若キ人ハ白髮ヲ見テアナヅル心アリ、況軍場ニシテ進マントスレバ、古老氣ナシト惡ミ、退時ハ今ハ分ニ叶ハズト謗、實ニ若人ト先ヲ諍モ憚アリ、敵モ甲斐ナキ者ニ思ヘリ、悲シキ者ハ老ノ白髮ニ侍、〇中略云シニ違ハズ墨ヲ塗テ候ケリ、年來内外ナク申シ事ノ哀サニ、樋口次郎兼光水ヲ取寄テ、自是ヲ洗タレバ、白髮尉ニゾ成ニケル、サテコソ一定眞盛トハ知レニケレ、

〔源平盛衰記 四十二〕屋島合戰事

屋島〇平軍ニハ傳内左衛門尉成直ガ、伊豫國ヘ越河野四郎通信ヲ攻ケルガ、通信ヲバ打ノガシテ、其ヲヂ福良新三郎以下ノ黨百六十人ガ首ヲ斬テ、姓名ヲ記シテ參ラセタリケルヲ、内裏〇安德帝御在所ニテ首實檢カワユシトテ、大臣殿〇平宗盛ノ御所ニテ實檢アリ、

〔吾妻鏡 九〕文治五年六月十三日辛丑、泰衡使者新田冠者高平持參豫州〇源義經首、於腰越浦言上事由、仍爲加實檢遣和田太郎義盛、梶原平三景時等於彼所、各著甲直垂、相具甲冑郎從二十騎、件首納黑漆櫃浸美酒、高平僕從二人荷擔之、昔蘇公者自擔其粮、今高平者令人荷彼首、觀者皆拭雙涙濕兩衫、

云云、九月六日癸亥、河田次郎持主人泰衡之頸參陣岡、令景時奉之、以義盛重忠被加實撿上、召囚人赤田次郎被見之處、泰衡頸之條申無異儀之由、仍被預此頸於義盛、

〔太平記 八〕持明院殿行幸六波羅事

河野、陶山勝ニ乘テ作道ノ邊マデ追懸ケルガ、〇中略鳥羽殿ノ前ヨリ引返シ、虜二十餘人首七十三取テ鋒ニ貫テ朱ニ成テ六波羅ヘ馳參ル、主上〇光嚴殿ハ御簾ヲ捲セテ叡覽アリ、両六波羅ハ敷皮ニ坐シテ是ヲ撿知ス、

〔太平記 十八〕春宮還御事附一宮御息所事

去ル程ニ夜明ケヽレバ、蕪木浦ヨリ春宮御座ノ由告ゲタリケル間、嶋津駿河守忠治ヲ御迎ヘニ進ラセテ取リ奉ル、去ヌル夜金ケ崎ニテ討死自害ノ首百五十一取リ並ベテ被實撿ケルニ、新田ノ一族ニハ越後守義顯、里見大炊助義氏ノ首計リ有リテ、義貞義助二人ノ首ハ無カリケリ、サテハ如何樣其邊ノ淵ノ底ナンドニゾ沈メタラント、海人ヲ入レテ被ガセケレ共、曾テ不見ケレバ、足利尾張守春宮ノ御前ニ參リテ、義貞義助二人ガ死骸何ヅクニ有リトモ見エ候ハヌハ、何ト成リ候ヒケルヤラント被尋申ケレバ、春宮幼稚ナル御心ニモ、彼ノ人々杣山ニ有リト敵ニ知ラセテハ、聽テ押シ寄スル事コソアレト被思召ケルニヤ、義貞義助二人、昨日ノ暮程ニ自害シタリシヲ、手ノ者共ガ役所ノ内ニシテ火葬ニスルトコソ云フ沙汰セシカト被仰ケレバ、サテハ死體ナキモ道理也ケリトテ、是ヲ求ムルニ不及、

〔太平記 二十〕義貞自害事

軍散ジテ後、氏家中務丞、尾張守〇足利高經ノ前ニ參テ、重國コソ新田殿ノ御一族カトオボシキ敵ヲ討テ、首ヲ取テ候ヘ、誰トハ名乘候ハネバ名字ヲバ知候ハネドモ、馬物具ノ樣、相順シ兵共ノ尸骸ヲ見テ、腹ヲキリ討死ヲ仕候ツル體、何樣尋常ノ葉武者ニテハアラジト覺テ候、コレゾ其死人ノ

ハダニ懸テ候ツル譴リニテ候トテ、血ヲモ未アラハヌ首ニ、土ノ著タル金襴ノ守ヲ副テゾ出シタリケル、尾張守此首ヲ能々見給テ、アナ不思議ヤ、ヨニ新田左中將ノ顔ツキニ似タル所有ゾヤ、若ソレナラバ、左ノ眉ノ上ニ矢ノ疵有ベシトテ、自ラ鬢櫛ヲ以テ髮ヲカキアゲ血ヲ洗ギ、土ヲアラヒ落テ、之ヲ見給フニ、果シテ左ノ眉ノ上ニ疵ノ跡アリ、（〇中略）サテハ義貞ノ首相違ナカリケリトテ、尸骸ヲ輿ニ乘セ、時衆八人ニカヽセテ、葬禮ノ爲ニ往生院へ送ラレ、首ヲバ朱ノ唐櫃ニ入レ、氏家ノ中務ヲ副テ、潜ニ京都へ上セラレケリ、

〔建內記〕嘉吉元年四月十日丙子、大覺寺前門主（〇足利義昭）御首京著、可有參賀之由、今夕有其沙汰、仍欲馳參之處延引、明日於相國寺可被實撿、其後可被參賀云々、（〇中略）後聞、今夜於中山宰相中將東隣道場有實撿、令立門外給、自身（〇足利義教）御撿知云々、御首者兼有道場內云々、先々賊首於室町殿西面四足門有實撿、自身立門內給、賊首在門外云々、依御舍弟之貴兼日置道場、臨彼門外有御撿知歟、來十三日可被茶毘之儀云々、其地可尋、爰翌日傳聞、彼御首實撿之處不分明、被召門跡候人長田等拜見之處、是又不分明之由申之、　五月三日己亥、賊首京著、可有參賀歟之由有沙汰、仍令用意相尋方々之者也、　四日庚子、今朝可有參賀歟之由風聞、仍相尋中山宰相中將許、渡御相國寺還御、其後可有御禮云々、（〇中略）次還御也、次賊首御實撿也、於門外（四足門外也）有此事、主人門下御佇立也、侍所參此、令兼申行歟、上總國結城（〇氏朝）首并關東一色首已下濟々焉、後聞其數或五十一、或三十餘、或二十餘云々、京著分悉有實撿云々、

〔鎌倉大草紙〕憲忠（〇上杉）の首をば、結城成朝家人金子祥永、同弟祥賀討取て、御所へ參實撿に備へける、憲忠管領なれば庭上にをくべからずとて、疊を布、其上に祥永兄弟をすへられ、御實撿の後、金子に多賀谷といふ名字を下され、（〇下略）

〔中國治亂記〕尾張守全姿モ不叶シテ、自害シタリシヲ、首ヲバ小袖ニツヽミ、岩ノ間ニ押入、其後郎

等ドモ自害シケルヲサガシ出シ、供ノ侍七人ト以上首ハ八ツ有リシヲ、生捕ノ者ニ見セケレバ、クチバノ小袖ニツヽミシハ、至姜ノ首ト申シ、泪ヲ流シケレバ、則クギヤウニスヱ、實撿ノ後、七日市ノ洞雲寺ニテ葬禮アリ、石塔ヲ被立ケル、

〔信長記 二〕六條合戰事

軍散ジテ後各申ケルハ、信長卿定テ夜晝ノサカヒモナク馳著セ可給、上洛ニ於テハ實撿ニ可備トテ、討捕タル首共ヲ求タルニ、方々ヨリ持寄テ二千七百餘ト記タリ、中ニ同ジ名ノ札付タル首五ツ六ツ有ケレバ、一體分身シテゾ見ニケル、

〔末森記〕早村井內ニテ間野新丞首ヲ取テ來ル、小林彌六左衛門、三木十內、屋後太右衛門其外誰カレト名乘、首十一手ニ提ゲ、又兵衛ニ見セ候處ニ、イソギ御本陣ト被申ケレバ、利家卿ノ見參ニ備ヘケリ、物初吉ト御感アツテ、早今日ノ軍大利ヲエンズルシルシニハ、一番首ノ見樣アリト仰ラレ候ヘバ、德山五兵衛入道御尤ニ御座候、但餘御言葉メイ〳〵ニ御カケ候テ、御息ギレ候ヘバ如何ト申サレケレバ、ゲニモト思召、其後ハ首持テ參ル者ニモ秀デタル働ナキ者ニハ、大形ノ御言葉ナリ、扨不破內、不破十左衛門、同四郎左衛門、平野齋其外誰カレト名乘、首八ツ討取、是モ彥三ニ見セ、則利家卿ノ見參ニ入ケレバ、彌御ヨク思召前後ヲ下知仕給フ、

〔越後軍記 三〕景虎問頸實撿之法式事

斯テ景虎米山ノ初陣ニ討勝テ、良勝ヲ召シ、頸實撿ヲ執行ヒ、諸士ノ戰功ヲ賞スベシ、然ニ吾幼稚ニテ父ニ離レ、且逆臣等ニ妨ラレテ、流浪ノ身トナリシカバ、未ダ頸實撿ヲ見聞セズ、宜ク執行フベシト宜ヘバ、良勝畏テ古代ヨリノ法式ヲ演說シタリケル、

〔筑紫軍記 五〕杉七郎重吉叛元就並討死之事

下總守勝関ヲ揚テ首級ヲ集、同七年〇天正三月三日實驗ニ備フ、然ニ大將重吉ガ首ヲ見知ズ、時ニ戶

田勘兵衛尉ガ曰ク、嘗聞、杉七郎重吉ハ風流ナル人ニテアリシガ、今朝伽羅ヲ薫ズト云フ、依テ各首ヲ嗅ニ、其内一ノ首甚ダ薫ズルアリ、是則重吉ガ首ナリト云テ、大將ノ禮ヲ以テ執行フトカヤ、艶ナシ事共ナリ、

〔三河物語〕三其後に勝頼御親子之御しるしを、信長之御目にかけければ、信長御らんじて、日本にかくれなき弓取なれ共、うんがつきさせ給ひて、かくならせ給ふ物かなと被仰けり、

〔甲陽軍鑑〕二十品第五十七三月〇天正十年十一日に勝頼公、信勝公の御證を取り、都へ上するとて、信長は道にて此御頸を實撿なされ、則勝頼公御證に向つて御申候、其方親父信玄、我等嫡子城介を聟に約束あり、天下を望み縁者を變改し、其外度々の表裡いたされ候故、天罰をもつて都へきつて上るとて、俄に煩ひつのり死給ふ、信玄の在世の時、頸にて成り共都へ上り、參内を遂げ度とねがはれ候ひつるよしに候へば、勝頼父子都へのぼり參内有りて、其後獄門にて京童に見しられ給へ、信長もやがてあとより參るべしと仰せられ、勝頼公御證都へさしのぼせ給ふなり、

〔常山紀談〕五信長勝頼の首を見て、いかに汝が父非義不道なりし故、天の譴のがれがたく、今かくなりぬ、信玄一度京に赴んと志しけると聞、汝が首を京におくり、女童に見しられよと罵り、首を東照宮の御もとにおくられけり、東照宮御牀机におはしませしが、勝頼の首と聞し召、牀机をおりさせ給ひ、偏にわかきゆゑ思慮なく、かくならせ候と、禮義正しく仰あり、是を傳へ聞、甲斐、信濃の士ども、德川家に心をよせ奉るもとゝなれり、

〇按ズルニ、家忠日記天正十年三月十一日條ニ、家康穴山同心にて甲府中將殿〇織田信忠御越候、武田勝頼父子てんもく山と云所に山入候を、瀧川手へ打取候て之るしを越候トアリ、

〔川角太閤記〕三一右の陣所より四里隔り宇留津と申城、但是も高橋に相隨ひ候、〇中略談合次第今夜夜半の頃より人數くり出し、明日七日の五ッ時分、彼城取卷、大手口ハ黒田官兵衛寄口なり、卽

時に大手より被ㇾ攻破、毛利陣是を見て攻掛、其日の七ッさがりに一人も不ㇾ殘撫切にぞ討果、頭數二千餘なり、其頭の實撿、天下樣よりの御横目にて御座候間、官兵衞殿に被ㇾ成候樣にと、毛利殿より時宜なり、官兵衞殿は只毛利御實驗被ㇾ成候樣にとの、互に時宜果不ㇾ申候、毛利殿より官兵衞殿への達ての御理故、右の頸は黒田官兵衞殿へ御實撿なり、右の妻子共翌日八日に千計も濵の手に、はた物御あげ申候事、

〔翁物語一〕或夜翁語りて曰、家康公遠州高天神の城を責給ふ時に、〇中略其翌日落城して悉く討死す、右の使に出たる茜の羽織着じたる侍も、城外迄働き出て討死せしとなり、其時討死せし者どもの首實撿有し中に、生捕の者も見知らず、年の程十六七計なるものゝ薄假裝して齒黒付、髮撫付て結ひたる頭の、男女の差別更に見知人なき一ッあり、家康公の宣ふは、其頭の眼を明て見るべし、黒眼を上の方へ見返してまぶたの內へ入白眼計見ゆるにおひては、女人の頭なるべし、黒眼明らかに見ゆるならば、男の首なり、よく〳〵穿鑿せよと有しかば、眼を明て是を見るに、黒眼明らかに見えしかば、男の首に落し付給へり、後に能聞給へば、城主の寵愛せし小性にて有しと、其頃沙汰せしと聞及びたる由語り給ふ、

〔翁物語四〕或老人一座にて語りて曰、信長公の時代に或日の合戰に、敵討負て味方追討にす、味方の中に七八人敵に追はぐれて引返す時、一村有つる所を通るに、雪隱の有ける其中に乞食一人臥したり、右之七八人の中より一人申けるは、只歸るも無念也、向ひの雪隱の內に乞食伏居たる樣子見えたり、あれなりとも首にして歸るべしとて是を討んとす、殘る者共の云けるは、乞食をば討たりとて、何の用にかたゝん、きたなき事をする事哉といひて行過けり、然れども討んと云つる人、終に其乞食を首にして持て歸る、然るに後日に首實撿の有つるときに、右の乞食の首は總大將の首にして、討たる者の譽淺からず、〇下略

〔兼山記〕三ケ所ノ城御手ニ入事、
武藏守〇森長可其日ハ梶田ニ陣ヲ取リ、人馬ノ息ヲ休、首共實檢ス、牛ケ鼻ヨリ兩度ノ戰首數四百六十ノ餘也、爰佐々才藏トテ馬廻ノ侍在リ、首十六ノ內、唯今持參三ツト書付ヲ以差上ル、大將如何才藏相殘十三ノ首、何方在共不知ト宣、才藏承、首ハ取捨ニ仕候、何方ニ在共不存候、定テ此四五百餘ノ內可有之ト申、大將不思議ノ事申者哉、四百餘ノ首ハ各主在、汝ノ取處ノ首證據在ヤ、才藏承、私ノ爲取首ハ、何レモ笹ノ葉ヲ入置候、口ヲ御吟味可被下ト申、大將一々口ヲ爲開見給、中ニ不違口ニ笹ノ葉爲入首十三在、大將橫手ヲ打、汝十六ノ首ヲ取シハ、古ノ朝比奈、畠山、亦義貞ノ家來栗生篠塚ノ如敵ヲ、童ノ如不思者不可取、定テ陣中ノ捨首ニテ在ン、由々何モセヨ神妙ノ至ト打笑、御感狀御褒美被下、佐々ノ名字ヲ改、笹ノ才藏ト被成、滿座ノ面々感笑ス、

〔關八州古戰錄十七〕上方勢攻落山中城事
靑木新兵衞モ谷ヲ越テ此處へ來リ、城中へ伐入テ克キ首ヲ討取、秀吉公ノ實檢ニ備ヘケレバ、今日ノ一番首ナリト宣ヒ、金鍔ノ帷ヲ解テ手自賜リケル、

〔常山紀談拾遺二〕同役〇關原家康公枚方表に御旗を立られ、今度討とり來る敵の首御實檢あり、公甲冑を召、拔身の御長刀を持せられ、枚方前野御牀几に御腰をかけられ、御張肘にて、大坂の方に向はせられ、御前に御旗七本、金の扇子の御馬じるし、御鐵炮百丁、火なはに火付、御弓百張、矢をはげ、御鎗百本拔身、御右に井伊、本多、大久保、酒井、榊原、御譜代の諸將伺公、少し上りて秀忠公初奉り御一門方、御左は池田三左衞門、福島左衞門大夫、その外今度忠節の大小名毛氈をしき、張肘にて伺公す、外樣の大名は馬じるし立し所に、具足櫃を引付々々伺公す、扨諸の首曲物に入、上を絹にて包み、その絹ばかり取て、曲物の蓋を明て首を出さず、その次に桶に入たる首六ツ七ツおく、其外誰々の手へ討とると鼻をかき並たり、然るときに公さて首實檢あるべきやと、池田、福島兩將

へ上意、御受には御時宜く御座なさせられ候旨申上る、其時立上り玉ひ、長刀を御杖に御つきにて、御張肘にて左の御脇を御眼じりにて上覽、その時前後左右大小名一同に頭を地に付玉ふ、各頭を上て張肘にて伺公、御足拍子を左より御ふみ、さて右を御ふみ、又左にて御踏納なさせらる、鯨波を曳々〳〵と長く御あげ、諸軍一同におゝと聲を上げ奉る、さて御長刀を御脇よりそと受取奉り、秀忠公へ渡進上仕る、秀忠公謹で御頂戴あり、そののち御長刀持人に御渡し、さて御盃ありしとぞ、

〔難波戰記 三〕城兵蜂須賀陣江令夜討事

閣右衛門〇塙直之ハ軍勢ヲ悉ク城中ヘ入、跡ニ殘テ潜ヲ指、門ノ内ニテ篝火ヲ燒、首實撿シケリ、

〔難波戰記 六〕眞田御宿之首實撿之事

眞田左衛門佐幸村ハ越前ノ手ト合戰シテ、天王寺ノ勝曼堂ト生靈トノ間ニテ、越前ノ物頭西尾仁左衛門ニ討レケル其首ヲ得タリシカドモ、誰ガ首トモ知レザリシニ、冑ノ立物ニ抱角打タルヲ原隼人佐一目見テ涙ヲ流シ、穴最惜ヤ、是ハ眞田左衛門佐幸村ノ首ニテ候ゾ、去年ノ冬御和睦アリシ時、幸村ノ亭ニ行、茶飯ヲ飲食シケル時ニ、眞田予ニ向テ語リケルハ、アレニ候抱角打タル冑ハ、某先祖代々ノ相傳也、今度ノ一戰ニ此冑ヲ著テ討死セント思定タル所ニ、不慮ノ御和睦ニ、今日迄ノ命ハ繼候ヒヌ、然レドモ終ニハ御和睦破レテ、御合戰アラン事鏡ニ掛テ覺タリ、然時ハ此冑ヲ著テ討死仕ラン、合ヌ敵ナラバ名乘ズシテ討死セン、名モナキ者ノ首ゾト思ハレンコソ口惜ケレ、足下モシ此冑ヲ見バ幸村ガ首ゾト思ヒ、一返ノ回向アランコソ、朋友ノ情ナラント、細細ト語リテ後、河原毛馬ノ三寸計モアル寛ト覺シクテ、太ク逞シキニ金ヲ以テ六文錢付タル、木地伊勢守ガ打タル鞍置キテ、舍人ドモ引來ルニユラリト打乘ル、是又幸村ガ最期ニ乘ベキ馬ナリトテ、十返計騎レタリシ、其形勢只今眼前ニ見ル心地仕ルトテ、鎧ノ袖ヲゾ濕シケル、西尾聞テ

頸注文
頸帳

誠ニ討死ノ體タラク、尋常ノ葉武者トハ思ハレザリシ、馬ハスナハチ本間太郎兵衞取タリトテ、馬ヲ牽セニ遣ハス、隼人佐云ヒケルハ、其レマデモ及バズ、口中ヲ開キテ見玉ヘ前齒二ツ闕タルベシト云ケレバ、則斧ヲ以テ口ヲ開キタルニ、果シテ前齒二ツ缺ケタリ、係ル處ヘ件ノ馬ヲモ引來ルニ、隼人佐ガ詞ニ違ハザリケレバ、眞田ガ首幷ニ御宿ガ首ヲ將軍ノ御旗本ヘ持參ス、此御宿モ馬上五十騎ノ大將ナリ、家康公彼ノ首ヲ御覺有テ、則野本右近ヲ召テ、御宿ガ働キヲ御尋サセ玉ヒケルニ、右近承テ、御宿ハ老武者ニテ合戰ニ疲レケルニヤ、易々ト首取テ候ト申上ル、〇下略

〔常山紀談二十一〕菴原助右衞門は、井伊家の士大將にて、軍奉行なり、大坂夏の軍に五月六日に、〇元和元年、中略、菴原は、十文字の鎗をよこたへ、進んで木村〇重成を目にかけて立向へり、木村、菴原を二鎗まで突たりしに、菴原鎗のまほ首を握り、珠數を手に懸たるが、念佛をとなへて、野猪のあれたるが如く、木村が鎗の下に、走り入て突伏たり、〇中略木村が首を御前に出すに、髮にたきしめし奇南香の薫せしかば、御威あり、木村が冑は、四方白にて、鍬形の立物打たり、

〔書言字考節用集器財七〕頸帳軍中記二斬首多少一之書

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一敵之頸之注文之事、たてがみにはしづくりに、國在所を書て年號日付をして、くびの名字くはんとを云て、うちとり候人の名字官途をも大に書也、あがりたる人の頸ほどおくに書也、

〔北條五代記三〕源義明公滅亡の事附首實撿の事

高名する勇士等首引さげ〳〵氏綱の旗本へ來る、氏綱は高野臺にはたを立て、床机に腰をかけ給ひ、中山修理介御前に候す、此者數度の合戰に武略をもつて敵を亡し、軍法兵義をしる故實の者、兼て武士司にふせらる、此人首じつけんの奉行なり、首討捕戰場の仕合を尋ね聞て、忠の輕重をしるす、大合戰に勝利をうる事なれば、一番鎗にぬきんで首討取者おほし、大將の首は扨おき、

鑓下にて討とる者、一番二番を論ずといへ共、證據なきは本意とせず、然に片山彌兵衛前、登にすすみ首討捕所に見れば、味方に大藤左京亮弓手をはせとほる、此人は武のほまれある勇士幸かなと、甲の妻手の袖にとり付、片山彌兵衛一番首の證據人よと云左京亮見たり、一番首比類あるべからずといひてよせ過る、かくたしかなる證人有故、三千餘討捕内において、片山彌兵衛鑓下の一番首にしるす、扨又鼻を一つかき首一ツ持來て、二ツの首といひ、鼻討を一ツ二ツ持來て、首帳に付べしといふ者おほし、修理介がいはく、此度討死する味方の死體道路山野に算をみだすがごとし、鼻が首になるならば、死する味方の鼻をかゝぬ者やあらん、一年常陸の國において、佐竹義重と小山の高井豐前守かつせんし、味方勝利をえ、首五百討とる、六月中旬炎熱の時節と云て、鼻をかき小田原へ持來る事あり、子細もなくて鼻かく事分明ならずと首帳につけず、然に伊山助四郎、江川兵衛の大夫兩人は、諸人に抽で先がけし、强敵と雌雄をあらそひ討勝て、相ならび首一づゝうつ取、助四郎が手を負たり、兵衛大夫是を見て、其方いた手負進退なりがたし、首の鼻をかき鎧の上帶にはさみ、大刀を杖につき歸陣せよ、其方途中にて死とも我證據人になりて、首帳に付ぬべし、もし撿使うたがひあるにおいては、我討捕首を其方ためにせん、然はむかし攝州一の谷の合戰において、梶原が二度のかけして、ほまれ有事をいひ傳へり、我又二度かけんとほつするゆゑ、討捕首の鼻をかき帶にはさみたり、我討死するならば、其方證據に立て首帳につけてたべ、未來までの芳志たるべしといひすてはせ參じ、又首一ツ取て歸陣し、旗本實撿場へ來て、鼻と首と二ツ御目にかけ、戰場前後の仕合を言上す、修理介がいはく、其方より以前伊山助四郎いた手負、鼻をそぎ持來て、其方と立ならび首一つ討取、生死のせいごんつぶさに御前において言上す、君其方二度のかけを感せしめ給ひ、首いまだ來らずといへ共帳に付おきぬ、前後首二ツ江川兵衛大夫と注したり、

〔關八州古戰錄 二〕上州笛吹峠合戰之事

東國勢林下ヘ引取、後陣ノ新手ト一ツニ成、備ヲ固メ待懸シ故、板垣〇信形追捨テ引返シ、午刻計リニ勝鬨ヲ作、討取首ヲ見知ラシ、一千二百十九級注文ニ載テ、甲府ヘ羽檄ヲ飛セ、人馬ノ息ヲゾ休メケル、

〔關八州古戰錄 九〕東上野桐生家沙汰付黑川谷一戰事

由良家氣色奪テ大ニ歡ビ、其次第ヲ一札ニ記シ、首注文ヲ副テ、古河ノ御所ヘ達聽シケレバ、〇下略

〔武者物語 中〕實撿之書〇中略

天正七己卯年七月五日巳剋合戰　討捕首注文之事

御馬廻

首一　渡邊兵左衞門　山田次郎左衞門討取太刀下

首一　名字官　名字官　鑓下〇中略

首數貳千百餘人、此内生捕百餘人、其外追討不知數也、

右杉原など立紙につゝみかくのごとく調る也、折紙にも書也、一番首、二番首、三番首まで也、扨其外は大將分の首を書べき也、四番五番にかへがたしと也、但時の穿鑿によるべき事也、

〔奥羽永慶軍記 十二〕最上與山北於境目合戰事

此時ニ軍ノ首帳アリ

一首數百六拾八　山田孫兵衞、内一ツ奥村十左衞門首、家來山田總左衞門取　同一ツ安食播磨守首、家來奥山佐左衞門取、内一ツ、同眞崎近江取　同五ツ同細川五郎秀次首アリ、奥山靫負取、内一ツ、同小山伊勢取　同一ツ、佐藤勝吉取、此外内書略ス、〇中略

此外切捨弓鐵炮ニテ討取分、軍以後ニ首ヲ取名アル者ノ首、數々アリトイヘドモ、是ヲ驗サズ、

天正十四丙戌年五月八日　有屋館合戰

〔陰德太平記 三〕有田中井手合戰並熊谷元直戰死之事

三番ニ粟屋源次郎眞黑ニ鎧タル武者ノ、長六尺計ナル大ノ男ノ出來ルニ馳向テ、タソト問バ、末田ノ源内ト名乘ル、粟屋源次郎ト答ヘテ、鋒先ヨリ火焔ヲ出シテ突合ケルガ、粟屋終ニ突勝テ頸掻切、鋒ニ貫キ高ク差上ゲ、氣色バフテ歸ル處ニ、後ヨリ矢一ツ來テ高股ニシタヽカニ中リ、足ヲ曳ントスレ共、ヨロ〳〵トシケル程ニ、後ヨリ十四五人手每ニ頸提來ル者ト、漸々一度ニ馳來テ元就ノ實檢ニ入レ、靜々ト流ルヽ血押拭ヒ、右筆ノ頸注文付ル側ニ差寄テ、粟屋源次郎三番頸ト付ヨト云ケレ共、耳ニモ不聞入、七八番ニゾ付タリケル、粟屋大ニ腹ヲ立、軍中ノ頸注文ハ坊主比丘尼ハ付ヌゾ、能眼ヲ開テ付候ヘト云ケレバ、右筆サン候、某トテモ天眼通ヲ不得バ何トシテカ居ナガラ先陣ノ樣體ヲ見分候ベキ、唯此所ヘ一番ニ頸持來レバ一番ト付、二番ニ來レバ二番ト付候也ト答、源次郎彌腹ヲ居兼、持タル頸注文引拆矢立オツ取テ、右筆ノ顏ヲシタヽカニ打テ、異仰向ニ突倒ス、起上ルヲ見レバ、墨ト血ガ顏ニ付テ見苦シキ有樣ナレバ、アタリノ者共撫掌拍手シテゾ笑ケル、

〔常山紀談拾遺 二〕此とき〇長久手役中村が方究竟の兵士三十六騎討死、〇中略味方へ討とり申候首は、有馬玄蕃頭内稻次右近が討取候、横山監物主從二人の首計なり、此とき右近は御本陣へ參候を、大御所〇徳川家康御覽なされ、烏毛の半月は、先刻この陣下を通り、敵に向候き、高名仕候や、たれが者と御尋あり、有馬法印御傍に居られ、同氏玄蕃家人と申上る、則首帳〇〇に付申、稻次申候は我より先に首一ツ持來りて候仁有候やと云、筆者申候は、中々堀尾信州の母衣のもの、首一ツ持來りて帳に付候といふ、稻次承り、夫は我家人を味方討に仕候、その御帳をけし候ひて下されと申、則大御所御聞なされ、何事を申やと御たづね被成候、筆者承り、右近が申候通りを申上候へば、ケ樣の打交

り軍には、味方討にても高名になり候例もあれば、首帳消申間敷と仰られ候、

〔細川家記忠興六〕一今度忠興君御手の戰功を被改、吟味之上ニ而記之、

首之注文

かゞ山庄右衛門　二朝合戰一ツ、後一ツ、○中略　入江右近　一かゞ山庄右衛門見屆候○中略　森新十郎　一與一郎樣御見屆被成候○中略

已上十八

〔備前老人物語〕一首帳をつくる時、一番首持來るとも、二番首をみてのち一番首をつく、扨二番三ばんとつくべし、四番目よりは番付あるべからず、首をうちし人の名の下には、尉の字をかくべし、首の名には尉の字かくべからず、これ故實也、

一大坂冬の陣の時、城中千疊敷にて首帳付られしに、松浦彌左衛門今福表一番首なりとて、帳面持參す、帳付心得たりとて書付す、松浦かさねてはやく書付られよといふ、帳付我等うけとりたる相違あらじ、書付候べしといふところへ、堀田圖書組渡部清兵衛首取て來り、それがし一番くび疑なし、松浦は馬なり、某は步行也、故に帳前の遲速如此なりといひければ、帳付る人心得たりとて二人ながら一ばん首にしるしける、およそ首帳は二番首見ぬ内はつけぬもの也と、古說あるよし也、

〔武功雜記十六〕慶長二十年五月七日、於大坂表合戰諸大名家中討捕申候頸數帳

一頸三千六百五十二七日岡山表　越前少將家中　此內眞田左衛門佐首西尾久作取今ハ仁左衛門　御宿勘兵衛首野本右近取今ハ越後守ニ付

一同三千貳百七日岡山表　松平筑前守　一同八百六十七六日　藤堂和泉守　一同三百十五　井伊掃部頭○中略

於河內國洲那表討捕首帳

一頸七拾五　那須左京　一同五十七　大關彌平次○中略

頸札

於枚方表討取首帳

一頸五拾三　松平和泉守　一同三拾　伊桑一類○下略

〔軍用記〕七首實撿の事○中略

首注文の事たとへば

天文二年七月六日申時於二大山表一討捕首注文の事

首一　前河左衛門　朝日彈正手 勝手右衛門討二捕之一　首一　名前不知　中間 彦六　首一　菟上次郎左衛門

長尾雅楽介手 徳田彈正忠討二捕之一

此外討捨數不レ知と計書レ之、奥に年號月日も無レ之、

〔武門故實百箇條〕一番頸古義

一番頸ト云事ハ、只一番ニ取タル頸ニハ不レ有、鑓下ノ高名ノ一番頸也、是ハ鑓下ノ高名ニハ一番ヨリ二番迄ニテ、三番ト云無シ、其外ハ頸ヲ取ツテ來リ次第ニ帳ニ附ル事也、鑓下ノ一番頸二番頸計リハ、一番誰ガ頸誰レ討ト書ク、二番是ニ同ジ、信玄、信長ノ頃ハ鎗下ノ頸一誰レ二誰レト書タリ、大坂陣ノ頃ヨリ只一番頸二番頸ト書ク樣ニ成タリ、二番ナケレバ鎗下ノ頸誰ト計リ書也、○中略

一頸帳ノ習　頸帳ハ筆ノ鞘ヲ毛半ヘ掛テ書ク也、爭ヒ有時其サヤヲ向フヘ延バシ、小口ニ墨ヲ付ケテ、此サヤニテ丸印シヲ付置キ、其日ノ事治リテ後ニ軍奉行ヘ相談シ、評議ノ上事ヲ定ムルナリ、

〔武器皕圖〕首簡（くびふだ）○圖略

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一頸之札書樣上中下有り、上をばまなに書、中をばぎやうに書、下をばかなに書也、いづれも口傳

有也、〇中略

一頸の付札之事、さはらをまさめにして付也、實翫の人のをば、板目に付る也、札の長さ四寸也、札にあなをもみても、又はきざみてもかみよりにて付る也、實翫の人には左のもとゞりにも付る也、又實翫の人には杉板にても書て付る也、なみの人には右のこびんにも付る也、又もとゞりにも付る也、又ふくさがみよりにてむすび付、むすびめの兩方ながらつめてきる也、

〔越後軍記 三〕景虎問頸實撿之法式事

一首札ノ事、大將ノ首札ハ桑ナリ、其外ハ何木ニテモ苦シカラズ、長サ五寸ニ横二寸、是ハ大將分ノ首札ナリ、諸士ノ首札ハ四寸ニ横一寸八分、歩者素肌者ノ頸ニハ、三寸六分ニシテ附ベシ、札ノ頭ハ劒先下ハ片ソギナリ、苧縄ニテ附ル

〔首檢知之次第〕一首札之事、椿杉ヲ以テ長サ四寸八分、幅一寸、厚サ二分、上ヲ卒都婆頸ニ下ハ一文字ニ切、下ニ穴ヲ明テ緒ヲ付テ首ニ付ル、是ヲ逆札ト云フ、名字官ヲ書ク口傳、〇中略

一同文字之事、上兵ハ眞字、中兵ハ行字、下兵ハ草字ニ是ヲ書、クビ文字首マタ頸ヲ用ユ、惡頸ノ札口傳有、〇中略

一同札付ケ様、上兵ハ左ノ髮ヨ付ル、以下ハ右ニ付ル、又耳ノ左右ニモ付ル、入道ハ耳ニ付ルナリ、

〔軍用記 七〕首實撿の事、〇中略

首に付くる札の事、木札本也、長さ一寸八分、横は一寸也、上に分け置きて切目付、緒繩にて結ぶ也、木札にても紙札にても、何がし是をうち取るとかくべし、首見知りたらば、何某、或は討取人の名不レ書と云ふ、書きたるかたよろしかるべし、討取之、何某の首と二行に書くべし、札付所は大將分のくびは左の鬢の髮に、緒を結び付くべし、若黨の首は右の鬢に付くべし、入道ならば耳に穴をあけて、緒を通し付くべし、左右は人品によるべし、

〔伊勢家禮式雜書 六〕就軍陣覺悟條々

頸補

一頸臺之事、寸法一尺二寸也、足の高さ四寸二分也、候の間八寸四分、あつさ八心足板厚六分ばかり、さんの足をるべし、かな針にて三所うつ也、足の高さ同つけ樣は見てよき程にすべき也、木は檜木也、足をくらず候、そばおしきたるべし、仍頸の持やうは耳へ大ゆびを入て、左の脇に持、頸の右のそば顏を見て申、頓而右へ歸也、見る人は太刀をはかれ候、同みせ申人も太刀をはき候、又見る人も見せ申人も具足たるべし、例式は小具足ばかりにても不苦候、又見せ申人足半をはくべからず、主人の太刀持やうは左にきつはにもちて、左之脇に有べき也、口傳、又頸板とも申也、

〔越後軍記三〕景虎問頸實撿之法式事

一居頸居物上聾ハ供饗、中聾ハ足付、下聾ハカンナゲ、或ハ山折敷ナリ、但シ切目ノ方フチヲ放シ、首ノ面ヲ角ノ方ヘ向ベキ也、

〔首撿知之次第〕一頸板之事、徑リ六寸四方、厚サ六分、足二寸、裏に角違ヘテ雲手ヲ付ケ、大釘ヲ以テ裏ヨリ表ヘ眞中ニ打テ、其釘ニ頸ヲ刺テ置也、　口傳ニ云ク、貴高人ノ頸ハ公卿ニ居ル、以下ハ足打、或ハ恭盤ヲ用ヒタル事モ有リ、頸板又其以下ニ用ル也、野山ニテ急ノ時ハ草木ノ葉ヲ取テ頸ニ敷テ、首板ニシタル事モアリ、是ヲ首改敷ト云フ、〇中略

一首臺之事、大將ハ公卿、以下ハ足打、又折敷、何モ右ノ方ノ緣ヲ放テ用ユ、下兵ノ首ハ首板ナリ、頸動カザル樣ニ居ベシ、急ノ時草木ノ葉ヲ首臺ニスル事臨時也、葉サキヲ逆ニ成テ敷ベシ、　口傳ニ云ク、草木ノ葉ヲ逆ニ敷事、首ノ前ノ方ヘ葉ノモトヲナシ、葉先ヲ後ベナス事ヲ云フ、常ノ事ニ改メ敷ナドニツカフハ、葉サキヲ向ヘナシテ仕フ也、

〔武器師圖〕首桶〇圖略

〔今川大雙紙〕陣具に付て式法之事

一頸をほかゐに入事、てうてきの頸又御一家の頸ならでは、ほかゐに入まじき也、

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一頸桶之事、まはり二尺四寸也、上下のふち一寸づゝ、ふちを入れば、間二尺二寸也、中にふち一ツいる也、其ふちの中に一筋刀目をとをす也、蓋はうちにをし入るやうにつくる也、蓋のうらに卍の字を書也、緒を付べからず、布にて下よりかけて結也、○略

〔越後軍記三〕景虎問頸實撿之法式事

一首桶ノ事、高サ不定ナリ、大方一尺二三寸バカリ然ルベシ、又ワタリノ廣サ八九寸タルベシ、輪ハ二所ナリ、古流ニハ桶ノ木ヲ四十八本ニシタルヨシ、當流ハ數不定、蓋ハ押込蓋ナリ、上ニ綴目アリ、若曲物ナラバ左前ニ合スベシ、右桶ニ書附スル事、蓋ノ上ニ眞中ニ卍字ヲ書、右ノ方ニ誰ノ首誰討取、鎗下或ハ太刀下ト書、左ノ方ニ月日ヲ書ベシ、桶ニ入頸ニ札附ベカラズ、蓋ノ板立板ニ成ヤウニ書附ヲスベシ、首ノ面蓋ノトヂ目ノ方ヘ向ハスベシ、白布ヲ二幅四方ニシテ桶ノ上ヲ包ミ、射捨ノ木ホウヲ一筋上ニサシテ送ルベシ、是ハ頸送ル時ノ事ナリ、桶ニ入テモ不動様ニ、下ニ輪ヲスヱテ入ベシ、

〔結城戰場物語〕小次郎○中略刀をぬき、御兄弟○結城春王、同安王、の御首を水もたまらず打落し、○中略其後御死がいをば、きやうようしたてまつれとて、上人にけいやくし、御首をば桶に入、ながこしに入まゐらせ、たるゐの宿へかへりける、めのとの女房はしり出、こしのながえにとりつきて、○中略申せども、御聲さらに出されず、さては宵の酒もりに、いたくねぶらせたまふとおもひ、すだれかき上みれば、桶二ツきぬ引懸て見えにけり、

〔太閤記二〕因幡國取鳥落城之事

堀尾茂助後帶刀吉晴○中略三人○吉川、森下、中村、の頸を爲實撿御持參候へとて、箱を持出しかば、卽箱に入、

持參せんと思ふ處に、○下略

〔關八州古戰錄十八〕武州八王子合戰事

此日加州ノ手ヘ首數二百八十、越後ノ手ヘ三百七十三級討捕シヲ、桶ニ入レ注文ヲ副テ、小田原ヘ送ラレケレバ、秀吉公大ニ感喜シ給ヒ、○下略

頸衣

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一頸ぎぬの事、絹を二はゞならべて縫て、其縫め叉をしふせて一とをりぬふ也、長さも絹二はゞの長さなり、方々四方之事あるやうに裁縫べし、口傳有之、

〔頸對面之次第〕口傳ニ云ク、○中略首衣ハ白絹ヲ用ユ、寸尺定ルベカラズ、首ヲ包ム程タルベシ、又錦衣ヲ懸タル大將ハ、其錦衣ヲ取テ包ムナリ、赤直垂ニ包事モ有ルベシ、是ハ其人直垂ヲ著タル時ノ事也、○中略

一首衣ノ事、生絹マタハ白布二幅、長二尺四寸ニ縫フナリ、　口傳ニ云ク、首衣トハ首ヲ包テ、首桶ニ入ル包物ナリ、衣ノ白キ服紗ナリ、

一死衣、布マタハ生絹、長六尺二幅、端一尺六寸宛縫放シナリ、　口傳ニ云ク、死衣トハ首桶ヲ包ム外ノ服紗ナリ、兩方ノ端ヲ縫放ハ、兩方ノ端ヲ取テ、桶ノ上ニテ結ベキ爲ナリ、端ヲ左右取違ヘ結ベシ、

頸袋　頸縄

〔武具短歌圖考上〕首袋クビブクロ○圖略

〔武器師圖〕首縄　首袋

〔單騎要略被甲辨二著用〕頸袋は細き苧縄の網をもてす、步立の時は腰に插み、馬上の時は取付に付べし、然れども嗚呼がましく頸袋を携て、もし首級を取獲事なからむは、他の見る目も愧かるべし、よく心得て目に立ぬやうに計からひ持べし、

檢首後作法

〔武者物語 中〕首繩掛といふは、箙の上帶にてもかくる、えびらをはざるをば鉢卷、又は具足の上帶にてもかくべき也、からぐるやう口傳、

雜々の首をば、左なわをもつて、たぶさをゆひてかくる也、是をばひろひがけといふ也、

〔今川大雙紙〕陣具に付て式法之事〇中略

一頸を見て、後にすてべき方の事、北へすてべし、其故は北と云字をにぐるとよむによりて也、東へすてべからず、

〔細川幽齋覺書〕一大合戰の時、首を取、大將の御目に懸候時、はや捨候得と御意候はゞ、口の内か髮の内に、心印をいたし捨可申候、

〔首撿知之次第〕一撿知ノ時首持樣之事、〇中略撿知終リテ大地ヲ渡シ、又ハ敵方ヘ送ル事モ有リ、口傳、　口傳ニ云ク、入道ノ頸ハ耳ヲ持ベシ、化粧スルトハ兩眼ヨリ額カケテ三度、頸マデ撫オロス事ヲ云、大地ヲ渡ストハ、其頸ヲ諸人ニ驗ス爲ナリ、太刀ノ先ニ貫キ、前後左右隨兵ヲ置テ渡スベシ、是ハモシ敵方ノ者紛レ入テ、奪ヒ取ル事モ有ンカノ用心也、頸ヲ敵方ヘ送ル時ハ、首衣ニ包桶ニ入レ、上ヲ死衣ニテ包、其人ノ假名幷ニ討手ノ名字官ヲ書テ、征矢ヲ一本添テ送ル也、是ヲ頸驗ト云、

〔源平盛衰記 三十八〕熊谷送敦盛首並返狀事

熊谷次郎直實ハ敦盛ノ首ヲバ取ヌレ共、嬉敷事ヲバ忘レテ、只悲ミノ涙ヲ流、鎧ノ袖ヲ濡シケリ、〇中略縱勳功ノ賞ニハ預ラズトモ、此首遺物返送、今一度替レル貌ヲモ見率ラバヤト思ケレバ、實撿ニモ合セ、梟首ニモシタリケレ共、大將軍ニ申請テ、馬、鞍、鎧、兜、弓矢、漢竹ノ笛一モ取落サズ、一紙ノ消息狀ニ相具シテ、敦盛ノ首ヲバ父修理大夫ヘゾ送リケル、

〔太平記 十六〕正成首送故鄉事

湊川ニテ討レシ楠判官ガ首ヲバ、六條川原ニ懸ラレタリ、〇中略其後尊氏卿楠ガ首ヲ召レテ、朝家私日久相馴レ、舊好ノ程モ不便也、跡ノ妻子共、今一度空シキ貌ヲモ、サコソ見度思ラメトテ、遺跡へ被送ケル、

〔豐薩軍記 四〕田澤成鍋島家臣并隆信ノ首送葬之事

島津中務少輔家久、〇中略其後ハ八代へ凱旋シテ、隆信〇龍造寺ノ首ヲ義久〇島津ノ實撿ニ入ケレバ、義久情アル人ニテ、卽チ町田ヲ使者トシテ、是ヲ佐賀へ送ラレケル、

〔豐薩軍記 六〕岩屋落城并紹運最期事

寄手〇島津勢其夜ハ太宰府ニ陣ヲトリ、翌日諸手諸卒ノ實撿アリケルニ、隊將タル宗徒ノ士二十七人マデ討レ、手負死人凡五千三百餘人ニゾ及ケル、紹運〇高橋ノ首ヲ實撿ニ備へケレバ、敵ナガラモ惜ムベキ良將ナリトテ、兩將床机ヲ下テ禮拜シ、岩屋ノ向フ二日市ノ山上ニ、是ヲ葬ラル、

〔關八州古戰錄 二十〕北條氏政同姓氏照生害事

陸奧守氏照ノ侍童山角平太郎ト云者、是マデ扈從シテ居タリケルガ、撿使ノ面々美濃守ニ貪着ノ際アルヲ見テ、氏照ノ首ヲ抱キ取リ走リ出タリケルヲ、漸クニ追驅テ奪ヒ返シ、氏政ノ證ト同ジク、殿下〇豐臣秀吉ノ實撿ニ備へケレバ、王命ヲ恐ザル不廷ノ臣ナリ、朝敵ニヒトシトテ、石田治部少輔三成ニ下知シ、京都へ差登セテ一條戻リ橋ニ梟ラレタリ、

首供養

〔越後軍記 三〕景虎問頸實撿之法式事

頸供養スル事ハ、三十三取ル時ハ、供養ヲシテ塚ヲ築ベシ、〇又見二武者物語一

〔當流軍法功者書 上〕首供養之事

首供養ハ三十三ノ物ナリ、サテ御免ナクトモ母衣ヲ可掛ナリ、依是母衣武者首取テハ、一ツデモ供養ヲスルナリ、三七日精進ヲイタシ、僧ヲ賴テトブラフベシ、

檢馘劓

〔安西軍策一〕舟岡山合戰義澄卿御最後事
義植卿利○足ハ義澄卿利○足ノ御頸實撿シ給テ、諸卒ノ頸ヲバ車ニ積セ、相國寺ノ後ニ頸塚ヲ築給、萬部ノ經ヲ執行サセラレケル、

〔蘆名家記三〕金上遠江守討死之事
蘆名ノ執權金上遠江守平盛春ト、大音聲ニテ名乘カケ、六十三歳ニテ終ニ討死ヲ遂玉フ、二人ノ者共モ一所ニ駈入討死ス、去程ニ正宗公金上ガ首ヲ御實撿有テ、忝モ金上ハ諸大夫ニ任ラレシ者ヲトテ、死體ヲ取集テ墓ヲ築セテ、葬禮シ玉フコソ有難ケレ、

〔常山紀談五〕別所家にて首供養したる人有と孝隆田○黒聞て、秦桐若首三十一とりたるに、惜むべきは死したりき、吉田六之介正利供養すべしといはれしに、正利首數二十七とりて候とて辭したりけり、孝隆小氣なる男かな、今年三十一歳なり、此後首とるまじとや、先供養して後に其數を合せよとて、米百石あたへ供養して、播州青山の南に塚を築きたり、

〔類聚名義抄九戈〕馘キリ

〔首檢知之次第〕一耳鼻ヲ實撿ニ入ル時ハ、鐵蓋ニ入テ出ス也、又ハ袖驗ニ包、或ハ扇ニ載ル事モアリ、　口傳ニ云ク、耳鼻ヲ曾具事ハ多勢ヲ討トリ、又生捕ニシタルヲ耳鼻ヲソギテ放ツ族モ有、太閤朝鮮責ノ時、耳鼻ヲソギタルト云モ此事也、山州ノ内ニ耳塚ト云ヒテ今ニ有、鐵蓋ハ楯ノ事也、

〔古事談五神社佛寺〕六條坊門北西洞院西有堂號ミノワ堂、件堂ハ伊豫入道賴義、奥州俘囚討夷之後、所建立也、佛ハ等身阿彌陀也、賴義造立此佛、恭敬禮拜シテ、往生極樂必引導シ給ヘト申ケレバ、ウナヅカセ給ケリ、十二年之間戰場死亡ノ者、片耳ヲ切アツメテホシテ、皮籠二合ニ入テ、持テ上タリケルヲ、件堂ノ土壇下ニ埋云々、仍耳納堂ト云也、ミノワ堂ト云ハ僻事也、○又見二古今著聞集一

〔尊卑分脈十二〕頼義　伊豫、河內、伊豆、甲斐、相摸、武藏、下野、陸奥等守、斬人首事、一萬五千人也、各取其片耳、納一堂、建立佛閣、號耳納寺、

〔土岐累代記〕齋藤父子矛楯附道三生害之事

道三、〇齋藤山城入道打負テ、同〇弘治二年四月廿日ノ暮方ニ、主從ワヅカニ討ナサレ、城內ヲ心掛引ケルヲ、義龍ノ勢長良ヲ押渡リ追詰、小牧源太、長井忠左衞門、林主水三人ニテ道三ヲ取込、突伏テ首ヲ討落ス、證據ノ爲トテ長井忠左衞門入道ガ鼻ヲソギ取ケリ、義龍此印ヲ實檢ノ後、長良川ノ端ニ捨タルヲ、小牧源太拾ヒ取ロ中ニ埋、〇下略

〔加澤平次左衞門覺書〕禰津助右衞門尉川田在城幷信幸卿大戸ノ城責捕給フ事附一場茂右衞門手柄之事

一場茂右衞門其年十七ナリケルガ、是ハ如何シタリケン、北之丸ヘ入ラズシテ、木戸口ニアリケルガ、敵五十餘人ニ切立ラレ、木戸ヲ開キ出ケルヲ待請テ討ケルホドニ、敵十七人伐臥、則チ其鼻ヲソギ、敵ノ旗ニ包テ、信幸卿ノ御前ニ披露ス、

〔豐臣秀吉譜下〕頃年朝鮮在陣諸將報進其斬獲之數、或人以其首級之重、故劓之而遣于京師、秀吉大喜賞之、自此之後諸將皆效之不可勝計也、其獻軍實于秀吉、必曰鼻若干耳若干、秀吉幷埋之于洛畔大佛殿邊、號耳塚、其後朝鮮人來貢之時、到塚下、讀祭文弔之、哭泣曰、此靈是輸死報國者也、

〔雍州府志十古蹟〕耳塚　在同大佛殿樓門之外、豐臣秀吉公朝鮮征伐時、軍士每得韓人首級、厭海陸運漕之煩勞、斬耳鼻贈日本、秀吉公悉令納埋斯所、建塔於一堆墳上、是號耳塚、爾後朝鮮人貢日、使三使見大佛殿、其所相從之人、若有先祖死斯戰者之子孫、則下馬拜斯塚、曾源頼義東奥之戰、得敵首則殺片耳、携歸京師、是爲提、然後於頼義所住之京師內、納其鹹於一所、築塚傍建寺、號耳納寺、追悼之、秀吉公追其舊例而有斯擧者乎、

檢屍

雜載

〔保元物語三〕左府死骸實檢事

去程ニ二十一日〇保元元年七月午刻計ニ、瀧口三人、官使一人、南都ヘ赴テ左府〇頼長ノ死體ヲ實撿ス、瀧口ハ資俊、師光、能盛也、官使ハ左史生中原師信也、其所ハ大和國添上郡河上村、般若野ノ五三昧也、道ヨリ東ヘ一町計入テ、實成得業ガ墓ノ東ニ新キ墓アリケルヲ、堀オコシテ見レバ、骨ハ未相連テ肉少シ有ケレ共、其形トモ不見分、其儘道ノ邊ニ打捨テ歸リニケリ、

〔岡本記〕一くびをならべておく事、北へむけておくべし、これくびそろへのときの事也、一段かくごすべし、

〔伊勢家禮式雜書六〕就軍陣覺悟條々

一頸かくるかうをゆふ事、なはにて一重にむすびて其上をなはゆひにする也、是を二重むすびと云也、結目を面へなすべき也、

一頸見せ申時も、又はかうにかけ候時も、生活の方へむくる事なし、生活の方とは丑寅の方の事也、

一合戰に頸一ツ取事凶事也、其時は髮を二にわけてむすびて懸る也、則頸二ツ懸ると云儀也、

一對面の頸はかけぬ也、寺家などへ送る也、實撿の頸は懸る也、其時は征矢を一ツもとゞりに横にさす也、口傳秘事也、〇中略

一勝時氣と云は、かちいくさして頸を實撿の時、三度つくる也、〇中略

一頸を見ての呪文、天地天門是を三度となへ申もの也、

一味方の頸を見ての呪文、生死之怨敵、則時皆滅、是を三度となへ申也、

〔中原高忠軍陣聞書〕一頭を鞍のとつ付に付る事、大將の頭をば左に付る也、はむしやの頭をば右に付る也、たぶさをちがへて、其たぶさにとつ付の緒をとをして可付、法師の頭をば口のうち

よりとつ付の緒を、あぎとへとをして可ﾚ付、頭は四より多くは付られぬ也、とつ付の緒の長一尺二寸本也、

〔首檢知之次第〕一馬上ニテ首持樣、取付ノ緒ヲ喉ヨリ切口ヘ通シテ、右ノ方ノ鹽手ニ附ベシ、數多ノ時ハ、前後左右ノ鹽手ニ付ル、

〔梅松論下〕去程に同日〇建武三年正月廿八日の申の時計に、又山の勢神樂岡を下るあひだ、御方の軍兵馳向て責戰じ程に、越前國住人白河小次郎、義貞と號して討て頸を取、赤威の鎧をはぎ取て持來る間、諸人大慶の思ひをなす所に、是は義貞にてはあらず、葛西の江判官三郎左衛門が頸なり、存日に義貞に顏色こつがら少も替らず、赤威の鎧を著たりけるを、聞ゆる義貞重代の鎧薄金と同毛なる間、一旦大將討取たりとて、御方のよろこびけるも斷也、

〔太平記十三〕兵部卿宮薨御事附干將莫耶ガ事

淵邊御胸ノ上ニ乘リ懸リ、腰ノ刀ヲ拔イテ御頸ヲ搔カントシケレバ、宮〇護良親王御頸ヲ縮メテ刀ノサキヲ、シカト呀ヘサセ給フ、〇中略則御頸ヲ搔キ落ス、籠ノ前ニ走リ出テ、明キ所ニテ御頸ヲ奉ﾚ見ニ、噬ヒ切ラセ給ヒタリツル刀ノ鋒、未ダ御口ノ中ニ留ツテ、御眼猶生キタル人ノ如シ、淵邊是ヲ見テサル事アリ、加樣ノ頸ヲバ主ニハ見セヌ事ゾトテ、側ラナル藪ノ中ヘ投ゲ捨テゾ歸リケル、〇中略抑モ淵邊ガ宮ノ御頸ヲ取リナガラ、左馬頭殿ニ見セ奉ラデ、藪ノ傍ラニ捨テケル事、聊カ思ヘル所アリ、〇下略

〔越後軍記三〕景虎問頸實撿之法式事

一初首ニテ吉凶ヲ考ル事、五眼ノ習ヒアリ、右眼、左眼、天眼、地眼、中眼ナリ、右眼ト云ハ玉右ヘ附、是退クナリ、左眼ハ左ヘ附進ナリ、天眼ハ上ヘ附恐ナリ、地眼ハ下ヘ附味方ヲ手下ニ見下スナリ、中眼ハ上下左右ナシ、是ハ敵味方等分後ハ曖ヒニナルベシ、右ノ通ヲ能見テ勝負ヲ可ﾚ考ナリ、

一一日ノ戰ヒニ首一ツ取タルヲ、一ツ首ト云ツテ不吉ナリ、實撿ニ入ベカラズ、其首ヲバ直ニ祭ヲ納ムベシ、若又實撿ニ入ズシテ叶ザル時ハ、實撿ノ次第アリ、先髮ヲ二取ニ結逆ニワケテ、蓀ノ楊枝ヲ削リテ二ツノワゲニ指シ、拐衣ニテ面ヲ包ミ、竈反ニテ結ビ、弓矢ヲ隔テ實撿ニ入ルナリ、大將ハ扇ヲ三間カ四間開テ、其間ヨリ卒度見玉フナリ、

一野心ノ頸ト云事アリ、目ヲ開キ口ヲアキ舌ヲ出シ、面ヲ赤クスサマジキ體アルヲ、野心頸ト云ナリ、左ヤウノ頸ハ實撿ニ入ズ、如此ノ頸ヲモ一ツ首同前ニシテ可祭、若不得已其頸實撿ニ入ルトキハ、頸ノ相ヲ作リ直シテ實撿ニ入ベシ、○下略

〔細川幽齋覺書〕一首を取候共捨耳鼻計と大將より下知候はゞ、口びるをかけてそぎ可申候、髭なく候得ば、女わらべにまぎれ候乍然若年者は髭なく候付、何ぞ其者の道具を取可申候事、

一母衣、武者の首を取候はゞ、母衣ぎぬにて包可申候、常の武者ならば指物絹に包可申候、かやうの事もいそがはしき時には、ならざるものにて候、隙も候て慥と存じ候はゞ、其者の刀脇指などをも取てさす物にて候事、

一取候首耳を通し取付に付候者相見え候、夫にては多分ちぎれ落るものにて候、口よりあごに通し、取付のをもわきに致し付可申候、總別陣に乘候鞍には隱し鹽手とて皮にて拵へ、是は本鹽手切候時の用心にて候、仕樣有之事、

〔今昔物語二十五〕藤原純友依海賊被誅語第二

今昔朱雀院ノ御時ニ伊豫掾藤原純友ト云者有リケリ、○中略散位橘遠保ト云フ者ニ仰ヲ給テ、彼ノ純友ガ身ヲ速ニ可罰率シト、遠保宣旨ヲ奉テ、伊豫國ニ下テ、○中略遂ニ被罰ニケリ、○中略重太丸ヲモ殺シテ、首ヲ斬テ父○藤原純友ガ首ト二ノ頭ヲ持テ、天慶四年ノ七月七日京ニ持上リ著テ、先ヅ右近ノ馬場ニシテ其由ヲ奏スル間、京中ノ上中下ノ人見喤ルコト无限リ、車モ不立堪ヘ、歩人ハ

ウラ所无シ、公此ヲ聞シ食シテ、遠保〇欄ヲ感ゼサセ給ケリ、其ノ次ノ日左衞門ノ府生播部ノ在上ト云高名ノ繪師有リ、物ノ形ヲ寫ス少モ違フ事无カリケリ、其レヲ内裏ニ召テ、彼純友幷ニ重太丸ガ二ノ頭、右近ノ馬場ニ有リ、速ニ其ノ所ニ罷テ彼ノ二ノ頭ノ形ヲ見テ寫テ可持參シト、此レハ彼ノ頭ヲ公ケ御覽ゼント思食ケルニ、内裏ニ可持入キニ非バ、此ノ繪師ヲ遣ハシテ、其形ヲ寫シテ御覽ゼムガ爲也ケリ、而テ繪師右近ノ馬場ニ行テ、其形ヲ見テ寫テ内裏ニ持參リタリケレバ、公殿上ニシテ、此ヲ御覽ジケリ、頭ノ形ヲ寫タルニ少モ違フ事无カリケリ、

〔村越道半覺書〕一四月十〇慶長十九年廿日以後、泉州四立表大野主馬、塙團右衞門出張之處、淺野但馬守出向合戰、但馬守手ニ首數十貳討捕之內、塙團右衞門首有之、右之首共從但馬守家臣上田宗庵入道京都江持參、合戰之趣、本多上野介遂披露之處ニ、團右衞門首、加藤左馬介被爲召御見せ被成候、無紛之由申上候ニ付、既ニ實撿可被遊之由被仰出候處、上野介殊之外首級損、中々匂等有之間、上覽御無用之由及言上候故不能台覽、實は團右衞門首、野心之首之體に候而惡鋪故、右之通及言上候也、當座之取合神妙之由諸人稱美仕候、

〔高忠軍陣聞書〕一頭を合戰場にて懸御目時もへりぬりをきべき事本なり、なきに至てはゆひがみにても懸御目なり、合戰の庭にて俄に懸御目時は、頭すゆる臺の沙汰に及ず、右の手にてもとゞりをさげて、頭の切口に鼻紙など程に紙をたゝみてあて、左の手にて切口を抱て、懸御目て左へまはりてたつ也、

一入道の頭をば左右の手に持て、大ゆびにて左右の耳を抱て、のこりのゆびにて切口を持て懸御目なり、

一頭を懸御目以前にすなかぢとて、すな取て少頭へまきかけて可懸御目、すなのなき在所にては土にてもする也、是はまじなひ也、

一公方樣の御敵をもする程の人の大將の頸を懸御目ときは、うら打の直垂にゑぼしかけをして懸御目なり、頭をば臺にすへべき也、臺は檜の板のあつさ四五分、廣さ六寸よほうばかりにすべし、足はさんあしにて打、足の高さ一寸計、頭を可持やうは、大指にて耳を抱へ、總のゆびにて臺を持、御前にて兩のひざを立、扨て頭を臺にすへながら地に置て、扨もと取を、右の手にて取てひつさげて、左の手を頭の切口にあて丶、公方樣の御かほをきとみ申て、頭の少し左の方を懸御目て、如元臺に置て、扨如以前左右の手にて、臺と友に頭を持て、左へまはりて可立也、法師頭をも臺と友に土に置て、左右の手にて頭の切口へ四の指を入て、左右の大指にて耳をかかへて懸御目て、如元臺に置て左へまはりて立也、如此ある事なれども、御前にて頭をとかく搦事不可然とて、前にゑるすがごとく臺にすへて、御前へ持て參て、扨て臺ながら中に持て、其儘懸御目て、左へまはりて立なり、頭をばまむきには御目にはかけぬ事なり、右のかたのかほを被御覽やうに懸御目なり、

一去嘉吉元年、赤松大膳大夫滿祐法師頭、慶雲院殿樣御實檢のときは、伊勢守殿宿所西向にて御實檢有、其時當方侍所なり、多賀出雲入道所司代職相拘持、出雲入道子左近將監に令指南懸御目也、其時の懸御目やう、うら打の直垂にてゑぼしかけしても丶だちを取て、以前にゑるすごとく臺にすへて持、御前へ參りて頭を其儘中に持、右の方を卒度懸御目、左りへ廻りて立也、頭を臺に置時より直にをりて、右の方を御覽せらる丶ごとく、臺の上にすこしすちかへて置なり、

(高忠軍陣聞書)一軍陣にて頭を懸御目時は、へりぬりをきて鉢まきをして、よろひきる時はわきだてをして太刀はいて矢おふて、懸御目事本儀なり、略儀にて懸御目時に、具足にへりぬりきて、太刀ばかりはいて懸御目なり、○中略

一頭のかしらゆひやうの事、首は常のゆひ所より高くゆひて、手一束程にかみを卷あげて、ひつさげて持やすき樣にゆふなり、但それはもとゞりをとつて、ひつさげて懸[二]御目[一]間、取能ためにたかくゆひあげたる也、

〔安西軍策　一〕尼子晴久敗北事

熊谷、香川等〇中略晴久ノ陣所三猪山ヲ見ルニ、能周章シテ退ケルニヤ、淺野、宮川ガ首ヲバカナカケニ入、下野守ノ頸ヲバ頸桶ニ入テ、打捨テ置ニケリ、

〔雜兵物語〕並中間　新六

各くんずくまれつ、突つつかれつ、細首をこすりおとされ、或はもぎとりけるは、大合戰だつけ、味方と紛れまいとて、頭數をも取た、取たものは、鼻を引欠〳〵もぎる程に、胸板へも入られないで、百八の珠數玉程に引つないで、首へひつかくるものもあり、

古事類苑

兵事部二十一

軍功

兵事部二十一

軍功

功アレバ賞ヲ施シ、罪アレバ罰ヲ行フ、平時ニ於テ猶ホ然リ、況ヤ戰場ノ立功ヲ以テ主トスルヲヤ、故ニ往時朝廷ニテハ功ヲ議シ賞ヲ行フ法ヲ設ケ、文位、勳位、功封、功田、賜田ノ等ヲ立テヽ之ヲ奬勵セリ、文位、勳位ノ事ハ官位部位階篇ニ、功封、功田、賜田ノ事ハ政治部ノ各篇ニ在リ、其後武人ノ互ニ自ラ戰ヲ爲スニ及ビテハ、賞スルニ領地ヲ以テスルアリ、姓名ヲ以テスルアリ、兵器ヲ以テスルアリ、又感書ヲ以テスルアリ、感書ハ一ニ感狀ト云フ、卽チ軍功ヲ錄シテ之ヲ賞スルモノナリ、凡ソ感狀ハ常ニ其家臣ニ與フルモノナレドモ、上杉謙信ガ其敵武田信玄ノ部將向井與左衞門ノ功ヲ賞スルニ、感狀ヲ以テセシガ如キハ異例ナリ、

名稱

〔書言字考節用集〕八言辭 軍忠(グンチウ) 軍功(グンコウ)

〔神皇正統紀〕後醍醐 およそ政道といふことは、所々にしるしはべれど、正直慈悲を本として、決斷のちからあるべきなり、これ天照大神のあきらかなる御をしへなり、決斷といふにとりて、あまたの道あり、中略三つには、功あるをばかならず賞し、罪あるをばかならず罰す、これ善をすゝめ惡をこらす道なり、これに一つもたがふを亂政とはいへり、上古には勳功あればとて、官位をすゝむることはなかりき、つねの官位の外に、勳位といふしなをおきて、一等より十二等まであり、無位の人なれど、勳功たかくて一等にあがれば、正三位の下、從三位の上につらなるべしとぞ見

えたる、また本位ある人のこれを兼たるもあるべし、〇中略中古となりて、平の將門を追討の賞にて、藤原秀鄕正四位下に敍し、武藏下野兩國の守をかね、平の貞盛正五位下に敍し、鎭守府の將軍に任ず、安倍の貞任奧州をみだりしを、源の賴義の朝臣十二年までにたゝかひて、凱旋の日正四位下に敍し、伊豫守に任ず、かれらその功たかしといへども、一任四五ケ年の職なり、これなほ上古の法にはかはれり、保元の賞には、義朝左馬頭に轉じ、淸盛太宰大貳に任ず、このほか受領撿非違使になれるもあり、この時やすでにみだりがはしきはじめとなりにけん、平治よりこのかた皇威ことのほかおとろへぬ、淸盛天下の權をぬすみ、太政大臣にあがり、子ども大臣大將になりしうへは、いふにたらぬことにや、されど朝敵になりて、やがて滅亡せしかば、のちの例にはひきがたし、賴朝はさらに一身のちからにて、平氏の亂をたひらげ、二十餘年の御いきどほりをやすめたてまつりし、むかし神武の御時に、宇麻志麻手命の中州をしづめ、皇極の御宇に、大織冠〇藤原鎌足の蘇我の一門をほろぼして、皇家をまたくせしよりのちには、たぐひなきほどの勳功にや、それすら京上りの時、大納言大將に任ぜられしをば、かたくいなみ申けるを、おしてなされにけり、公私のわざはひにやはべりけん、その子はかれがあとなれば、大臣大將になりて、やがてほろびぬ、さらに跡といふものなし、天意にはたがひにけりとみえたり、君もかゝるためしをはじめさせたまひしによりて、大功なきものまでもみなかゝるべきことゝおもひあへり、〇中略その道にはあらで、一旦の勳功などいふばかりに、武家代々の陪臣をあげて、高官をさづけられんことは、朝議のみだりなるのみならず、身のためもよくつゝしむべきことゝぞおぼえはべる、〇中略ちかき代のことぞかし、賴朝の時までも、文治のころにや、奧の泰衡を追討しに、身づからむかふことありしに、平の重忠が先陣にてその功すぐれたりければ、五十四郡の中いづくをも望むべかりけるに、長岡の郡とてきはめたる少きところをのぞみたまはりけるとぞ、これは人にひろく賞

をもおこなはしめんがためにや、かしこかりけるをのこにこそ、また直實といひけるものに、一所をあたへたまふ下文に、日本第一の甲の者なりと書てたまはりけり、一とせかの下文をもちて奏聞する人のありけるに、褒美の詞のはなはだしさに、あたへたるところのすくなき、まことに名をおもくして、利をかろくしけるいみじきこと、口々にほめあへりける、いかにこゝろえてほめけんといとおかしく、これまでのこゝろこそなからめ、ことにふれて君をおとし奉り、身をたかくする輩のみおほくなれり、ありし世の東國の風義もかはりはてぬ、

〔鈐錄 五〕賞功　一功ニ奇功頭功ト云事アリ、當先殿功、斬將、擒將、搴旗、奪鼓、陷陣、燒營、燒帆、燒輜重、或ハ奇策ヲ獻ジテ勝利ヲ得、或ハ辯舌ヲ以テ敵ヲ降シ、或ハ敵ノ秘策ヲモ聞出シテ、是ニヨリテ勝利ヲ得ル類皆奇功ナリ、首級ヲ得ル内ノ數多キハ頭功ナリ、北狄ノ戰ニ馬ヲ奪ヒ、海上ノ戰ニ船ヲ奪モ頭功ナリ、奇功ハ二級ヲ進メ、頭功ハ一級ヲ進ム、將ノ功ニハ、一隊ニ既ニ戰克タル上ニ、又別隊ニ救援シ、或ハ寡ヲ以テ衆ニ克チ、或ハ敵ノ中堅ヲ衝キ、或ハ敵ノ輜重ヲ奪ヒ、或ハ守リ難キ城ヲ守リ、或ハ克チガタキ戰ニ克ツ類皆奇功ナリ、

〔令義解 五軍防〕凡申勳簿、皆具錄陣別勳狀上、(謂、下文官軍以下戰處以、皆具錄中、是爲勳狀也、)勳人官位姓名、左右廂相捉姓名、人別所執器仗、當團、主帥、本屬、(謂、左右廂、猶左右方也、捉、持也、猶率領也、假令注云、兵士姓名斬首若干級、所執弓箭、左廂軍監姓名之所率領、其國、其團隊正姓名之部伍、其部人之類、文以器仗列當團上者、是舉其大概、不可爲定例也、)官軍賊衆多少、(謂、唯顯彼是衆寡狀、非謂必擧其定數也、)彼此傷殺之數、及獲賊軍資器械、(謂、獲賊者、生禽之虜也、軍資者、粮食牛馬之屬也、器械者、弓箭介胄之屬、並是所掠取者也、)辨戰時日月戰處、幷畫陣別戰圖、(謂、勳狀功帳之外、別有戰圖也、)仍於圖上、(謂、戰鬪之端首、)具注副將軍以上姓名、附簿申送太政官、勳賞高下臨時聽勅、

凡行軍、(謂、行軍之所錄事以上也、)敍勳定簿、每隊以先鋒者爲第一、(謂、文云、每隊、即知有百隊者、亦有百先鋒、鋒者兵端也、)其次爲第二、(謂、假令陣列之法、一隊十備、五備列前、五備列後、備別配兵五人、即以前列廿五人爲先鋒、後列廿五人爲次鋒之類、凡未戰之前、預定先次鋒、故申簿之日、亦據之爲次也、)不得第一等勳多於第二、(謂、第一第二者、猶云先鋒次鋒也、此顯歷名之次第、假令大將下令曰、斬首五級已上爲上勳、四級以下爲次勳、若有先鋒甲乙斬首五級、丙丁四級、次鋒戊己斬首五級、庚申四級者、則是戊己雖不得爲先鋒、

而其功勳過多於次錄之人、卽以甲乙戊己丙丁庚辛爲歷名次第之類、其勳等之日、卽依先次錄以爲次序、功有輕重、卽量其勳級以爲進退、故制此文也、卽勳色雖同、而優劣少異者、皆以次歷名、謂俱是先錄、或共是次錄、而同勳之中各有輕重者、假令有先錄之人中、甲斬首五級、乙三級、丙四級者、卽以甲乙丙爲歷名次之類也、若不合全敍、則從後減退、謂假令有甲乙丙丁共是次錄、有勳云、次錄之勳不過三人者、卽從最後之人而減者類也、

凡敍勳應加轉者、謂轉是不定之意也、假令元年行軍十級爲一轉、二年行軍五級爲一轉之類、依其無定例、故謂之爲轉也、皆於勳位上加、若無勳位、一轉授十二等、每一轉加一等、六等以上兩轉加一等、二等以上三轉加一等、其五位以上加處勳位外、仍有餘勳者聽授父子、謂若父子共在者、理合授父、其有兩轉者、須分授父子也、如父子身亡、每一轉賜田兩町、謂如父子先有勳六等、而餘勳此有一轉者、此則勳少不及加授、仍須賜田兩町、卽此名爲賜田、不爲功田也、其六位以下、及勳位、加至一等外、有餘勳者聽廻授、謂廻授父子也、不在賜田之限、

凡勳人得勳後身亡者、其勳依例加授、謂例者一轉授十二等之類也、依此條案除勳人之外、諸選人位記、未授身亡者不可追敍也、若戶絕無人承貫者停、謂不問親疎、絕而无人、其雖非當戶、別戶有應蔭者、卽亦合授、

凡勳位犯除名、限滿應敍者、一等於九等敍、二等於十等敍、三等於十一等敍、四等以下於十二等敍、其官當及免官、免所居官、計降卑於此法者、聽從高敍、謂假如勳十二等、犯罪免官、准法三載以後、應降先位二等敍、而所降既盡、故猶敍十二等、是爲從高敍也、

〔唐六典〕五兵部員外郞一人、○兵部掌貢擧及諸雜請之事、○中略其科第之優劣、○略註勳獲之等級、謂軍士戰功之等級、若牢城、若(若恐苦)戰、第一等酬勳三轉、第二第三等差減一轉、凡破城陣、以少擊多爲上陣、數略相當爲中陣、以多擊少爲下陣、轉倍以上爲多少、常據賊數以十分率之、殺獲四分已上爲上獲、二分已上爲中獲、一分已上爲下獲、凡上陣上獲第一等酬勳五轉、上陣中獲、中陣上獲、第一等酬勳四轉、上陣下獲、中陣中獲、下陣上獲、第一等酬勳三轉、其第二第三等各遞降一轉、中陣下獲、下陣中獲、第一等酬勳兩轉、第二第三等、幷下陣下獲各酬勳一轉、其雖破城陣、殺獲不成分者、三等、陣各酬勳一轉、其跳盪功不在降限、凡臨陣對寇、矢石未交、先鋒挺入、賊徒因而破者爲跳盪、其次先鋒爲(爲恐受誤)降者爲降功、凡酬功者見任前資常選爲上資、文武散官、衞官、勳官五品已上爲次資、五品子孫、上柱國、柱國子、勳官六品已下諸色有番考人爲下資、白丁、衞士、雜色人爲無資、凡跳盪人上資加兩階、卽優與處分、應入三品五品、不限官考、次資卽優與處分、下資優與處分、無資稍優與處分、其殊功第一等、上資加一階、優與處分、應入三品五品、減四考、次資優與處分、下資稍優與處分、無資放選、殊功第二等、上資優與處分、次資稍優與處分、下資放選、無資常勳外加三轉、殊功第三等、上資稍優與處分、次資放選、下資應簡日放選、無資常勳外加兩轉、若破國全勝、事踰常格、或斬將搴旗、功効尤異、雖不合格、並委軍將臨時錄奏、皆審其實而授敍焉、

〔甲陽軍鑑品第三十九〕〔十二〕武田信玄公御家中武士の手柄は

一第一に鑓を合、第二に鑓下の高名、同馬上より組で落て又高名、第三に一番鑓、或は鑓脇、これ三色よきほまれなり、但我あたる備より抜出、人先にかゝり候はゞ、敵つかへずして鑓合すといふ共、一番鑓ほどのほまれなり、同深入して引のく時、抜出候て跡にさがり、神妙にのくは一番鑓ほどの心ばせなり、猶以味方手負たるに引かけてのき、又は死したる味方を敵にうたせずして、頸をあげて引のくは、おほきなる心ばせなり、追頸は一の下なり、但人うたざるにはまし也、さりながらわかき武士などの、心たけくしよきものをうつべきと存、人にうちはぐるゝ事もこれあるべく候、さる程に合戦せりあひの時、何者にても敵ならば先うつべきなり、悪頸と思はゞ頸帳にのすまじきものなり、

一門のこぐちをおしこみたる人、或は城を乗取たる時、手柄の上中下、塀あさくせばく無堅固なる所を、はやく乗たる人を一番の手柄と云、子細は、門口また無堅固なる所には人数多し弓鐵砲おほき故、如此の御定、信玄公御家中の穿鑿これなり、

一五千とも人數をもちたる大將をうつは、弓箭の冥加の侍也、かならず尊べし、さて又其下の物頭さいはいを手にかけたる頸取たる人も、冥加の武士なり、尊べしとの御定なり、

〔太閤記〕〔一〕秀吉卿輕一命於敵國成要害之主事

藤吉郎に番手之士共相添すゑ置給ふ、其制書に云、

定

一今度於美濃地、番等無油斷相勤め、勞功を勵み候者共淺深を記し付、可令注進、隨其輕重、或感狀、或恩賞之地を施し給ふべき事、

一不寄上下、討捕雜兵之首者には、爲褒美料足百疋、士分之者之首には千疋、如此之通は不及注進

早速可分與之事、

一鑓下又は太刀打之高名は、別に記し付、可差越候事、

一敵城假令謀略を以て攻取勿論、及合戰攻落においては、卽其城主に可被仰付之事、

〔武功吟味集〕凡鎗ト云ハ其品八箇條アリ、一番鑓、二番鎗、小返ノ鎗、大返ノ鎗、ツケ入ノ鎗、城責ノ鎗、籠城ノ鎗、請止ノ鎗是也、コレニサシツヾキタル働又四箇條アリ、一番乘込鎗脇ノ太刀鎗脇ノ弓是也、其外高名ニ七箇條アリ、鎗下ノ高名、鎗場高名、退口ノ高名、組討ノ高名、崩際ノ高名、場中ノ高名、同ク勝負是ナリ、

〔武教全書一戰功〕高名譽ノ批判之事

一一番鑓　其備ニ於テ一番ニ鑓ヲ合スルヲ一番鑓ト云、勝負ハ時ノ運ナレバ不論、其士ノ忠義勇相備ハレルヲ以、英雄ノ武士ト定ル也、

一二番鑓　一番鑓ニ差續テ鑓ヲ合スルヲ云也、三番鑓ト云ハ大方無之、一二ノ鑓合終レバ、何方ニゾ崩レ色付ガ故也、

一鑓脇附鑓下之高名　一二ノ鑓ヲ合スル人ニ差續キ、刀弓鐵砲ヲ以、鑓ノ脇ヲ詰ルヲ鑓脇ト云、刀鑓脇ヲ上トシ、弓鐵砲ハ其次々也、鑓下ノ高名ト云ハ、鑓下ニテ人ヲ討ヲ云也、如此時分ハ白歯者也共是ヲ討ヲ高名トス、尤味方ノ士討死ノ死骸ヲ引掛、被官ニ下知シテ退ケサセ、手負ヲ助ル事、見事ナル振ト云ベシ、

一場中ノ勝負同高名　是ハ敵味方ノ備合未ダ遠キ時、勇士進ミ出、能キ詞ヲツカヒ、能キ弓鐵砲ヲナシ、又ハ打物ノ勝負ヲスル、是ヲ場中ノ勝負ト云也、高名ト云ハ則人ヲ討テ高名ヲナス、是也、是皆其場其所敵味方晴ナル場中ナレバ、場中ト云也、

一組討　是ハ其品一樣ニ定メ難シ、大方追討ノ時有之事也、拔出タル勇士ニアラザレバ不叶

事也、

一崩シ際　一二ノ鑓合終リテ、敵ニ崩レ色付時、崩シ際ニテ鑓ヲ入、人ヲ討ヲ云也、

一將ヲ討事　是ヲ冥加ノ侍ト云、如此事ハ願フテナルベキ事ニアラズ、希有ノ儀ナレバ也、

一追頸ニ采幣ヲ添ル事　是亦能譽レ也、采幣所持ノ侍ハ侍大將歟、者頭物奉行也、然レバ敗軍ノ時分モ、義ヲ知リ恩ヲ感ズル被官同心必附マトフベシ、追行味方ハ逸足ヲ出シテ追フガ故、下人大方一人モ續カザル者也、此所ヲ穿鑿シテ大ナル譽レト定ル也、

一後驅之事　味方敗軍ノ時、諸軍ノ跡ニ下リテ、全ク兵ヲ引入シムル事也、大功ノ勇士忠義ヲ兼備ヘズシテ、成難キ譽レ成故、殿ト號シテ、大方一番鑓ニ相類スル也、

一小返之事　是ハ退口靜カニシテ、敵急ニ付時ハ、幾度モ立止リテ、敵ヲ突立、能詞ヲ番ヒ振見事ナルヲ云也、

一將ニ附事、附馬ヲ奉ル事、　負軍退レ口ニ、大將ニ能付ク、是ヲ將ニ付ト云、頭奉行ニ能付テ、進退ヲ共ニスルモ皆一理也、殊更主人ノ馬草臥、手ヲ負タル時、其馬ヲ奉リ、歩行立ニテ供奉スル事、是又比類ナキ働也、

一印之事　追崩シテ後敵ヲ討、頸ヲ取來ルヲ印ト云、退レズ走リ廻リタルト云印ノ頸ナレバ印ト云リ、

一實桑、コボレ者之事、　敗軍ノ敵カタマリテ退クヲ實桑ト云、二人三人バカリコボレテ行ヲコボレ者ト云、人ヲ討ズ共、實桑へ付ヲ譽レト云也、

一退レ口ニ指物ヲ落シ取テ歸ル事　是亦能譽レ也、異ナル勇士ニアラズシテハ叶ヒ難シ、

一鼻　是ハ場中ノ勝負ニテ場所セハシク、小者若黨モ續カズ、先ノ働キヲ心掛テ、證人ヲ取、鼻ヲカキ具足ノ胸板ニ入ル、事也、尤可然事也、鼻ヲカクニハ髭ヲ付、耳ヲカクニハ鬢ノ髮ヲ

乞賞功

ソグ者也、

一一番首之事　是ハ追首印ノ内ニ、一二ヲ改メ知ベキ爲也、

〔小右記〕寬仁三年六月二十九日甲寅、太宰註進成勳功者、　散位平朝臣爲賢、前大監藤原助高、傔仗大藏光弘、藤原友近、友近隨兵紀重方、　以上五人、警固所合戰之場、相戰者雖數多、賊徒正中件爲賢等矢、但重方不載先日符解事、喚子細依不註申也、令尋實誠追所言上也

筑前國志麻郡住人文室忠光　賊徒初來志麻郡之日、與所差遣兵士合戰之間、中忠光矢者多、又斬賊徒之首進上、并進彼戎具等、

同國怡士郡住人多治久明　賊徒到來之間、於當郡青木村南山邊相戰、賊徒合戰、射取賊一人斬其首進府、先日解文雖註子細、仍件久明同漏矣、

大神守宮擬檢非違使財部弘延　賊徒擊却之間、計要害所々、件守宮等差加兵士豫所遣也、而於筑前國志摩船越津邊合戰之間、中件守宮等之矢者多、就中生捕者二人、但一人被疵死了、

前肥前介源知　賊徒還却之間、於肥前國松浦郡合戰之間、多射賊徒、又生捕進一人、

前少監大藏朝臣種材　賊徒逃却之日、依有兵船遲出之告、以少貳兼筑前守源朝臣道濟遣博多津、且令解纜、且問遣其案內之處、奉使者等各申云、賊船數多、猶造兵船一度可罷向者、其中種材獨申云、種材齡過七旬、身爲功臣之後、待造了兵船之間、恐賊徒早逃、弃命忘身一人先欲進向者、道濟以種材所言而爲善、慭出衆軍口者、依賊船之早去、誠雖無遂戰、種材之所言忠節不淺、

壹岐講師常覺　賊徒三襲、每度擊返、後不堪數百之衆、一身逃脫、身雖非在俗、其忠不可隱、

右去四月十八日、給當府勅符云、箇裏若有攻戰忘身勳功超衆者、隨其狀跡、加以褒賞者、言上如件、

〔吾妻鏡　三〕壽永三年〇元暦元年八月二日戊午、大內冠者〇平賀惟義飛脚重參著、申云、去十九日酉剋與平家餘黨等合戰、逆徒敗北、討亡者九十餘人、〇中略又佐々木源三秀能相具五郎義清合戰之處、秀能爲平

家被打取畢、惟義已雪會稽之耻、可預抽賞歟云云、　三日己未、召大内冠者使賜委細御書、其趣攻擊逆黨事尤神妙、但可被抽賞之由被進申、頗背物儀歟、其故者補一國守護之者、爲鎮狼唳也、而先日爲賊徒被殺害家人等訖、是無用意之所致也、豈非越度哉、然者賞罰者、宜任予之意者、〇下略

〔吾妻鏡三十四〕仁治二年九月三日戊子、信濃國住人奈古又太郎者、承久三年大亂之時、乍施勳功漏其賞由頻雖愁申之、依無便宜之地空送年序訖、但猶雖有如此不幸之類、於奈古軍忠者勝其中之間、相構可被行賞由、故匠作時氏遺命也、仍左親衞爲不違其趣、今日執彼款狀、加別御詞、被仰遣恩澤奉行人師員朝臣之許、師員申御返事云、奈古又太郎申勳功賞事、折紙給預候畢、早可申入候、恐々謹言、

師員

北條大夫將監殿御返事

〔吾妻鏡三十八〕寬元五年〇寶治元年九月十一日辛酉、筑後左衞門次郎知定捧和字款狀、是愁漏合戰賞事也、先考截累家勳功之上、勘例云、朱雀院御宇承平二年己亥、平將軍於東國反逆之間、同三年正月十八日、參議右衞門督藤原忠文蒙征夷大將軍宣旨、賜節刀下向關東、而未到以前、同二月廿四日、爲藤原秀鄕將門被誅之間、忠文自途中歸洛、三月九日、秀鄕貞盛等被行賞之處、忠文同可蒙其賞之由就申之、小野宮殿〇藤原實賴申云、賞疑不行云云、次九條殿〇藤原師輔被申云、下著以前逆徒雖令滅亡、隨勅定之功、何被棄捐乎、刑疑不行、賞疑聽云云、然而就先意見、無其沙汰、忠文喜恩言進富家殿券契狀於九條殿訖、至卒逝之期、奉怨小野宮殿云云者、左親衞數返披覽之、知定已述獲麟一句、何無其沙汰哉、仰勳功奉行人等、究淵源之後、可披露評定次之由、直令示付諏方兵衞入道給云云、　十一月十一日庚申、筑後左衞門次郎知定浴恩澤、去六月五日勳功賞也、是依有疑貽、暫被閣之處、頻愁申之間、被究其沙汰、而武藤左衞門尉景賴爲證人進起請文、併知定於須知替橋合戰討捕岩崎兵衞尉事、無異儀者、就之及此儀云云、今度勳功間珍事是也、有都鄙口遊云云、

〔諸家系圖纂二十五大中臣〕和田系圖裏書

和泉國岸和田彌五郎治氏申軍忠之次第

一延元元年五月廿五日、兵庫湊河合戰之時、楠木一族神宮寺新判官正房并八木彌太郎入道法達相共抽合戰之忠功者也、

一同六月十九日、同晦日、於竹田河原造路六條河原等北□□合戰馳參山門、同八月一日、大塔若宮自山門御□□□御共仕於八幡山、連日令祗候者也、

一同八月廿五日、於木幡山阿彌陀峯抽軍忠者也、

一同九月一日、足利一族阿房次郎國清已下凶徒等令蜂起當國之間、致合戰之處、逆徒等猛勢而御方軍勢各雖退散仕、楯籠八木城構要害之處、同七日、國清已下逆類等率大勢寄來之間、不惜身命日夜致合戰之忠者也、爰自天王寺中院右少將家并楠木一族橋本九郎左衞門尉正茂已下、爲後縮被發向之剋、自城內打出、凶徒等令追罰者也、其後惡黨等楯籠喬原城之間卽罷向追落畢、

一同十月四日、楯籠東條、今年正月一日、河州中川次郎兵衞入道父子被召捕之時、屬當御手令發向彼住所畢、

一同八日、屬當御手令發向若松庄玉井彥四郎入道城、并和田菱木已下凶徒等住所燒拂之、同廿六日、馳向橫山燒拂凶徒住宅畢、

一同三月二日、屬當御手令發向河州古市郡構要害之處、丹下三郎入道西念已下凶徒等、卒大勢寄來當所古市間、馳向野中寺前致合戰、逆徒等追籠丹下城燒拂在家畢、

一同十日、細川兵部少輔同帶刀先生等爲大將軍寄來古市之間、馳向野中寺東防戰之處逆類等引退之間、追懸藤井寺西并岡村北面致散々合戰之剋、細川等大勢分二手寄來之間、數剋致合戰之忠節者也、就中細川帶刀先生討死之時者、於藤井寺前之大路至御方軍勢退散之期抽軍忠畢、此

議功

等次第當國守護代大塚掃部助惟正、幷平石源次郎、八木彌太郎入道法達已下、同所合戰之間所令存知也、

以前條々軍忠之次第、支證分明之上者、且爲後證、爲成弓箭之勇、欲賜御證判、仍粗言上如件、

延元二年三月　日

〔島津文書三〕目安　島津周防五郎三郎忠兼軍忠條々

一去四月、丹生寺凶徒等、擬令當國福田庄亂入間、則馳向三草山致合戰、若黨荒木又五郎被射右足畢、

一同六月、兵庫島御發向之間、於生田前致合戰、舍弟十郎被射害乘馬訖、條々御見知之上者、賜御證判、欲備後日支證、仍目安如件、

建武五年六月　日　承了花押〇赤松圓心

〔古事談四勇士〕忠文卿〇藤原勸賞沙汰之時、左大臣〇藤原實賴被定申云、疑功勿賞云々、右大臣〇藤原師輔被申云、刑疑ヲバ勿、賞、賞ノ疑ヲバ許之トコソ候ヘト被申ケレドモ、依被用左府申詞、遂無其沙汰云々、忠文依畏申此事、後日奉富家之劵契於九條殿云々、小野宮殿ヲバ結怨心、誓失子孫永成靈云々、

〔太平記十二〕公家一統政道事

同八月〇元弘二年三日ヨリ可有軍勢恩賞沙汰トテ、洞院左衛門督實世卿ヲ被定上卿、依之諸國ノ軍勢立軍忠支證、捧申狀望恩賞輩、何千萬人ト云數ヲ不知、實ニ有忠者ハ憑功不諛、無忠者媚奧求竈掠上聞間、數月ノ內ニ僅ニ二十餘人ノ恩賞ヲ被沙汰タリケレ共、事非正路聽被召返ケリ、サラバ改上卿トテ、萬里小路中納言藤房卿ヲ被成上卿、申狀ヲ被付渡、藤房請取之、糺忠否分淺深各申與ントシ給ヒケル處ニ、依內奏秘計只今マデハ朝敵ナリツル者モ安堵ヲ賜リ、更ニ無忠輩モ五箇所十箇所ノ所領ヲ給ケル間、藤房諫言ヲ納レカネテ、稱病被辭奉行、角テ非可默止トテ、九條民部

卿ヲ上卿ニ定テ御沙汰有ケル間、光經卿、諸大將ニ其手ノ忠否ヲ委細尋究メテ申與ントシ給ケル處ニ、相摸入道ノ一跡ヲバ内裏ノ供御料所ニ被置、舍弟四郎左近大夫入道ノ跡ヲバ兵部卿親王ヘ被進、大佛陸奥守ノ跡ヲバ准后ノ御領ニナサル、此外相州ノ一族關東家風ノ輩ガ所領ヲバ、無指事郢曲妓女ノ輩、蹴鞠伎藝ノ者共、乃至衞府諸司官女官僧マデ一跡二跡ヲ合テ、内奏ヨリ申給リケレバ、今ハ六十六箇國ノ内ニハ立錐ノ地モ軍勢ニ可行闕所ハ無リケリ、斯リケレバ光經卿モ心計ハ無偏ノ恩化ヲ申沙汰セントシ給ヒケレ共、叶ハデ年月ヲゾ被送ケル、又雜訴ノ爲ニトテ郁芳門ノ左右ノ脇ニ決斷所ヲ被造、其議定ノ人數ニハ才學優長ノ卿相雲客、紀傳明法外記官人ヲ三番ニ分テ、一月ニ六箇度ノ沙汰ノ日ヲゾ被定ケル、凡事ノ體嚴重ニ見エテ堂々タリ、去レドモ是尙理世安國ノ政ニ非ザリケリ、或ハ自内奏訴人蒙勅許ヲ、決斷所ニテ論人ニ理ヲ被付、又決斷所ニテ本主給安堵、内奏ヨリ其地ヲ別人ノ恩賞ニ被行、如此互ニ錯亂セシ間、所領一所ニ四五人ノ給主付テ、國々ノ動亂更ニ無休時、

〔神皇正統記後醍醐〕たまたま一統の世にかへりぬれば、このたびぞふかきつひへをも、あらためられぬべかりしかど、それまではあまさへのことなり、今は本所の領といひし所々さへ、みな勳功に混せられて、累家もほどほどその名ばかりになりぬるもあり、これみな功にほこれるともがら、君をおとしたてまつるによりて、皇威もいとゞかろくなるかと見えたり、かゝればその功なしといへども、いにしへよりはいきほひある輩をなづけられんためにか、あるひは本領なりとてたまへるもあり、あるひは近境なりとて望むもあり、闕所を以ておこなはるるにたらざれば、國郡につきたりし地、もしは諸家相傳の領までもきほひ申けりとぞ、をさまらんとしていよいよみだれ、やすからんとしてますますあやうくなりにける末世のいたりこそ、まことにかなしくはべれ、およそ王土にうまれて、忠をいたし命をすつるは、人臣の道な

り、かならずこれを身の高名とおもふべきにあらず、しかれども、ものゝふの人をはげまし、その跡をあはれびて賞せらるゝは、君の御政なり、下としてきほひあらそひ申べきにはあらぬにや、ましてさせる功なくして、過分の望みをいたすこと、身づからあやぶむるはしなれど、前車の轍をみることは、まことにありがたきならひなりけんかし、

〔朝野群載十二内記〕軍功

夙登戎秩、善強武威、践永年於暄寒、著勤誠於夷險、宜増榮爵、以申朝奬、

〔日本書紀三神武〕二年二月乙巳、天皇定功行賞、賜道臣命宅地、居于築坂邑、以寵異之、亦使大來目居于畝傍山以西川邊之地、今號來目邑、此其縁也、以珍彦爲倭國造、珍彦此云于砮毘故、又給弟猾猛田邑、因爲猛田縣主、是菟田主水部遠祖也、弟磯城名黒速、爲磯城縣主、復以劒根者爲葛城國造、

〔日本書紀六垂仁〕五年十月、天皇○中略即發近縣卒、命上毛野君遠祖八綱田、令撃狹穗彦、○中略時火興城崩、軍衆悉走、狹穗彦與妹○皇后狹穗姫共死于城中、天皇於是美將軍八綱田之功、號其名謂倭○刊本脱倭字、今據熱田本補日向武日向彦八綱田也、

〔新撰姓氏錄二左京神別〕中臣志斐連、天兒屋根命十一世孫雷大臣命男弟子之後也、六世孫意富乃古連、雄略御世東夷有不臣之民、毎人強力、押防朝軍、於是意富乃古連甲冑五重、跨進敵庭、無勞官軍、一朝夷滅、天皇悦其功績、更加名字、號暴伐連、

〔日本書紀二十八天武〕元年八月丙戌、恩勅諸有功勳者而顯寵賞、　十二月辛酉、選諸有功勳者、増加冠位、仍賜小山位以上各有差、

〔日本書紀二十九天武〕五年六月、物部雄君連忽發病而卒、天皇聞之大驚、其壬申年從車駕入東國、以有大功、降恩賜内大紫位、因賜氏上、　八月、是月大三輪眞上田子人君卒、天皇聞之大哀、以壬申年之功、贈内小紫位、仍謚曰大三輪眞上田迎君、　九月、是月坂田公雷卒、以壬申年功、贈大紫位、

〔日本書紀 持統 三十〕十年八月甲午、以直廣壹授多臣品治、幷賜物、褒美元從之功與堅守關事、　九月甲寅、以直大壹贈若櫻部朝臣五百瀨、幷賜賻物、以顯元從之功、

〔金石萃編 四十一〕附攷唐宋諸碑系銜幷食邑實封

唐宋諸碑標題及撰人書人蒙額人官位顯者系銜、多有食邑食實封之數、攷系銜之例、名目數端、曰功臣、(中略)其制始於唐開元間賜號開元功臣、代宗時有寶應功臣、德宗時有奉天定難元從功臣之號、僖宗將相多加功臣美名、五代寖增其制、宋初因之、

〔續日本紀 文武 二〕大寶元年七月壬辰、又勅先朝論功行封時、賜村國小依百二十戸、當麻公國見、縣犬養連大侶、榎井連小君、書直知德、書首尼麻呂、黃文造大伴、大伴連馬來田、大伴連御行、阿部普勢臣御主人、神麻加牟陀君兒首十一人各一百戸、若櫻部臣五百瀨、佐伯連大目、牟宜都君比呂、和邇部君手四人各八十戸、凡十五人、賞雖各異、而同居中第、宜依令四分之一傳子、

〔續日本紀 淳仁 二十五〕天平寶字八年九月甲寅、是日討賊將軍從五位下藤原朝臣藏下麻呂等凱旋獻捷、

乙卯、授從五位下藤原朝臣藏下麻呂從三位、

〔續日本紀 光仁 三十三〕寶龜六年十一月乙巳、遣使於陸奧國宣詔、夷俘等忽發逆心、侵桃生城、鎭守將軍大伴宿禰駿河麻呂等奉承朝委、不顧身命、討治叛賊、懷柔歸服、勤勞之重、實合嘉尙、駿河麻呂已下一千七百九十餘人、從其功勳加賜位階、授正四位下大伴宿禰駿河麻呂正四位上勳三等、從五位上紀朝臣廣純正五位下勳五等、從六位上百濟王俊哲勳六等、餘各有差、其功卑不及敍勳者賜物有差、

〔扶桑略記 朱雀 二十五〕天慶三年三月九日乙亥、卽賞藤原秀鄕敍從四位下、兼賜功田永傳子孫、更追兼任下野武藏兩國守、又平貞盛敍從五位上、任右馬助、

〔小右記〕寬仁三年六月二十九日甲寅、秉燭後、左中辨經通下給太宰府言上、筑前國壹岐對馬等島人牛馬、爲刀伊人被殺害、幷被追取解文、勳功者注申事、○中略仰云、太宰言上解文中、注進勳功者可賞哉否、○中略抑勳功賞有無如何、大納言公任、中納言行成申不可行之由、其故者有勳之者可賞進由、雖載

勅符、勅符未到之前事也、余（〇府原貳賞）云、不可謂勅符到不、假令雖不募賞事、至有勳功者、賜賞有何事、寛平六年新羅凶賊到對馬島、島司善友打返、即給賞、雖無彼募前跡如此、他事相同、就中刀伊人近來警固所、又追取國島人民千餘人、并殺害數百人牛馬等、忽殺壹岐守理忠、而太宰府發兵士忽追返、并射取刀人、猶可有賞、若無賞、進向後事可無進士歟、大納言齊信同余定、其後大納言公任、中納言行成及已次皆同件等定文注付（〇中略）云、先日賜勅符之日被募功伐之間、有功績輩隨其狀可加抽賞之由、而所註申者、在勅符未到著以前、不可理必被行其賞歟、但散去餘衆、非無向後之畏、爲勵後輩聊可賞進歟、〇下文缺

〔陸奥話記〕同（康平六年二月）廿五日、除目之間賞勳功、拜賴義朝臣（〇源）爲正四位下伊豫守、太郎義家爲從五位下出羽守、次郎義綱爲左衛門尉、武則（〇清原）爲從五位下鎭守府將軍、獻首使者藤原秀俊爲右（〇右一本作左）馬允、物部長賴爲陸奥大目、勳賞之新、天下爲榮矣、（〇又見扶桑略記）

〔平治物語〕一官軍被行除目事附謀叛人被止賞職事

聽テ敍位被行、除目テ、大貳清盛ハ正三位ニ敍シ、嫡子左衛門佐（〇重盛）ハ伊豫守ニ任ジ、次男大夫判官基盛ハ大和守、三男宗盛ハ遠江守ニナル、清盛舍弟三河守賴盛ハ尾張守ニナル、伊藤武者景綱ハ伊勢守ニ補ス、上卿ハ花山院大納言忠雅卿、職事ハ藏人朝方トゾ聞エシ、

〔吾妻鏡〕二養和二年（〇壽永元年）六月五日甲辰、熊谷二郎直實者、匪勵朝夕恪勤之忠、去治承四年追討佐竹冠者之時、殊施勳功、依令感其武勇給、武藏國舊領等、停止直光之押領可領掌之由被仰下、而直實此間在國、今日令參上賜件下文云云、

下武藏國大里郡熊谷次郎平直實所定補所領事

右件所且先祖相傳也、而久下權守直光押領事停止、以直實爲地頭之職成畢、其故何者佐汰毛四郎、常陸國奥郡花園山楯籠、自鎌倉令責御時、其日御合戰、直實勝萬人、前懸一陣懸壞、一人當千顯

高名、其勸賞、件熊谷鄕之地頭職成畢、子々孫々永代不可有他妨、故下、百姓等宜承知、敢不可違失、

治承六年五月卅日

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年四月十日戊寅、源九郎〇義經使者自京都參着、去月廿七日有除目、武衞〇頼朝敍正四位下給之由申之、是義仲追罰賞也、持參彼聞書、此事藤原秀鄕朝臣天慶三年三月九日、自六位昇從下四位也、武衞御本位者從下五位也、被准彼例、亦依忠文〇宇治民部卿之例、可有征夷將軍宣下歟之由、有其沙汰、而越階事者彼時准據可然、於軍事者賜節刀、被任軍監軍曹之時被行除目歟、被載今度除目之條、似始置其官、無左右難被宣下之由、依有諸卿群議、先敍位云云、

〔吾妻鏡九〕文治五年九月二十日丁丑、奥州羽州等事、吉書始之後、糺勇士等勳功、各被行賞訖、其御下文今日被下之、或先日被定置之、或今所被書下也、而千葉介最拜領之、凡每施恩以常胤可爲功之由、蒙兼日之約者、先國中佛神事任先規勤仕之、次於金師等不可成違亂之旨、被仰含于俗恩之輩云云、畠山次郞重忠賜葛岡郡、是狹少之地也、重忠語傍人云、今度重忠雖奉先陣、大木戸之合戰先登、爲他人被奪畢、于時雖知子細、重忠敢不確執、是爲令周其賞於傍輩也、今見之果而皆預數箇所廣博之恩、恐可謂重忠芳志歟云云、此外面々賞不可勝計、次紀權守波賀次郞大夫等勳功事、殊蒙御感之仰、但不及賜所領、被下旗二流、被仰可備子孫眉目之由云云、小山下野大丞政光入道郞等保志黑次郞、永代六次、池次郞等同賜旗弓袋、依勳功之賞下賜之由、所被加銘也、盛時書之、

文治五年九月廿日云云

〔吾妻鏡九〕文治五年十一月三日己未、右武衞飛脚、幷先日自奥州被進之御使等參着、被下御感院宣之上、降人事勸賞事被下仰詞記也、二品〇源頼朝太抃悅給云云、〇中略

勸賞事

征罰早速猶々感思食、隨計申可有勸賞、按察使有闕被任如何、郎從之中有功之輩可注申、尤可被

行二其賞一也、

〔吾妻鏡十六〕正治二年正月廿五日壬子、今日被レ收二公美作國守護職已下景時父子所領等一、駿河國住人等今度竭二合戰之忠節一之輩、各蒙二勳功之賞一、亦比企兵衞、糟屋兵衞同蒙レ賞、未レ到以前景時雖レ被レ誅、依二追罰使之賞一如レ此云云、

〔吾妻鏡十八〕元久二年七月二十九日甲寅、河野四郎通信依二勳功一〈○平氏追討〉異レ他、伊豫國御家人卅二人止二守護沙汰一、爲二通信沙汰一、可レ令レ勤二仕御家人役一之由、被レ下二御書一〈故將軍(源賴朝)御判〉、件卅二人名字所レ被レ載二御書之端一也、善信奉二行之一、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年八月七日戊午、叛逆卿相雲客幷勇士所領等事、武州〈○北條泰時〉尋註分凡三千餘箇所也、二品禪尼〈○平政子〉以二件沒收地一、隨二勇敢勳功之淺深一而賞二充之一、右京兆〈○北條義時〉雖レ執二行一、於二自分一者、無レ立二針管領地一、世以爲二美談一云云、九月十六日丁酉、馬場儀如レ例、右京兆奉幣神事以後、抽二軍忠一輩有二沙汰一、殊神妙之由有二右京兆消息一云云、是面々依レ註二申勳功次第一也、

〔豫章記〕伯耆守〈○河野通時〉ハ大事ノ手ヲ負船中ニテ死ケリ、通有ハ處々蒙レ疵、伊豫國ヘゾ歸也、蒙古ノ頸ヲバ久萬彌太郎成俊是ヲ持セテ京都ヘ上ケル、折節君〈○後宇多天皇〉ハ雍州男山八幡宮ニ御參籠有テ、九州ノ實否注進ヲ御待有ケル所ニ持參申ケレバ、白砂迄召寄、懇ニ御尋有テ、御感賞ヲ被レ成事難レ有次第也、〈○中略〉其頸テ取ケル刀ハ此家ニアリ、大和國壽命作也、通有此時恩賞ニ肥前肥後所々ヲ賜フ、肥前ノ國神崎庄ノ內小崎鄉同加納下東鄉後日拜領ス、同庄餘殘同荒野肥後國下久々村以上三百町賜レ之、同當國山崎庄拜二領之一、此時海上陸地七十餘度ノ合戰ニ每度切勝、夷賊ヲ退治シ、抽二軍忠一之由感賞ノ宣旨ヲ蒙ル者也、

〔太平記十二〕安鎭國家法事附諸大將恩賞事

諸軍勢ノ恩賞ハ暫ク延引ストモ、先大功ノ輩ノ抽賞ヲ可レ被レ行トテ、足利治部大輔高氏ニ武藏常

陸下總三箇國、舍弟左馬頭直義ニ遠江國、新田左馬助義貞ニ上野播磨兩國、子息義顯ニ越後國、舍弟兵部少輔義助ニ駿河國、楠判官正成ニ攝津國、河内、名和伯耆守長年ニ因幡伯耆兩國ヲゾ被行ケル、其外公家武家ノ輩二三箇國ヲ給リケルニ、サシモノ軍忠有シ赤松入道圓心ニ、佐用庄一所計ヲ被行、播磨國ノ守護職ヲバ無程被召返ケリ、

〔神皇正統記後醍醐〕そも／＼かの高氏御方にまゐれりしその功は、まことにしかるべし、すゞろに寵幸ありて、抽賞せられしかば、ひとへに頼朝卿天下をしづめしまゝのこゝろざしにのみなりにけるにや、いつしか越階して四位に敍し、左兵衞督に任ず、拜賀のさきにやがて從三位して、ほどなく參議從二位までにのぼりぬ、三ヶ國の吏務守護およびあまたの郡莊をたまはる、弟直義左馬頭に任じ、のち四位に敍す、むかし頼朝ためしなき勳功ありしかど、高官高位にのぼることは亂政なり、はたしてまた子孫もはやくたえぬるは、高官のいたすところかとぞ申つたへたる、高氏等は、頼朝實朝が時に、親族などゝて優恕することもなし、唯家人の列なりき、實朝の八幡宮に拜賀せし日も、地下前驅二十人の中に相加はれり、たとひ頼朝が後胤なりとも、今さら登用すべしともおぼえず、いはんやひさしき家人なり、さしたる大功もなくて、かくやは抽賞せらるべきと、あやしみ申すともがらもありけるとぞ、關東の高時天命すでに極りて、君の御運をひらきしことは、さらに人力といひがたし、武士たるともがらいへば數代の朝敵なり、御方にまゐりてその家をうしなはぬこそあまりある皇恩なれ、さらに忠をいたし勞をつみてぞ、理運の望みをもくはだてはべるべき、しかるを天の功をぬすみて、おのが功とおもへり、介子推がいましめもならひ知るものなきにこそ、かくて高氏が一族ならぬともがらも、あまた昇進し、昇殿をゆるさるゝもありき、さればある人の申されしは、公家の御世にかへりぬるかとおもひしに、なか／＼なほ武士の世になりぬるとぞありし、

〔諸家系圖纂 八清和源氏〕佐竹家系圖

可令早領知陸奧國雅樂庄地頭職事

右爲子息等討死之賞所宛行也、早任先例可致沙汰之狀如件、

建武四年三月廿六日 〇姓名闕

佐竹上總入道殿 〇中略

天和三癸亥歲、以古內清音寺古本寫之、

〔太平記 十九〕青野原軍事附嚢沙背水事

顯家卿ヲバ武藏國ノ越生四郎左衞門尉奉討シカバ、首ヲバ丹後國ノ住人武藤右京進政清是ヲ取テ、甲太刀刀マデ進覽シタリケレバ、師直是ヲ實撿シテ、疑フ所無カリシカバ、抽賞御感ノ御教書ヲ兩人ニゾ被下ケル、

〔諸家系圖纂 二十五大中臣〕和田文書

參川國釜谷庄內兼清石地頭職、爲勳功賞可令知行者、天氣如此、悉之以狀、

正平五年十二月七日　左京權大夫花押

和田藏人許

〔諸家系圖纂 七清和源氏〕島津譜

貞久(中略)屬尊氏數有軍功、尊氏書扇面於歌、授之曰、九ノ圖ヨリ御代ハ治リテ目出度事チ白菊ノ花、卽爲家紋云々、

〔應仁記 三〕近江越前軍之事

斯波ノ一族千福中務入道增源、甲斐法華院一揆ヲ催シ、再ビ蜂起シケルヲ、朝倉敎景、其弟慈眼院、同修理亮等松山城ヲ攻落シ、御敵六十餘人打取、波若山幷岡保合戰ニ打勝テ、千福增源法華院モ打取ケレバ、朝倉父子兄弟莫大ノ勳功ヲヌキンデ、文明三年五月廿一日、敎景ニ越前ノ守護職ヲ給リケル、

〔北條五代記〕三房州里見家の事

爰に一の物語あり、義高〇里見の時代とかや、合戰のみぎり忠ある侍どもに賞をあたへんと思慮をめぐらさるゝといへども、昔より安房上總兩國計を持來り、相傳の忠臣等に知行を皆さきあたへ、明地は一所もなし、金銀米錢の餘慶もあらざれば、合戰のみぎり忠有さふらひに、感狀ばかりを出されければ、兩國の侍ども訴狀をさゝげていはく、前々親おうぢより、我等まで數度の忠功その志るしに御感狀數々いたゞくといへ共、さらに其感德なし、〇中略自今以後忠有さふらひには、御感狀をさしおかれ、元日の禮を一位づゝ赦免せらるゝにおいては、ほとんど會稽の耻辱をきよむべし、是生前の大幸なるべしと言上す、義高聞召訴狀の旨至極せり、賞のうたがはしきはあたふるにしたがふ、恩をひろむるのゆゑんなり、自今以後において、忠臣には感狀をばさしおき、元日の禮位を宥免せらるべしと、堅約し給ふ、諸侍願望たんぬと、喜悦の眉をひらきける、合戰日々の事なれば、諸侍この元日の禮位に望みをかくる處に、山田豐前守といふ者、合戰のみぎり一番鑓をつき、比類なきはしりめぐりなり、此ほうびに、片肴の禮を赦免せられたり、又豐前守翌日のたゝかひに、岡田左京亮と馬上よりくんで落、左京亮をおさへて首を取て、兩肴の禮をゆるさるゝ、又其後せりあひ軍に、豐前守鳥井左衛門尉といふ剛の者と名乘あふてたゝかひ、數ケ所の手を負といへ共、かれが首を討て片肴の禮をゆるされたり、諸侍是を見て、有難や君臣の兼約は、當月廿日以前の義なり、山田豐前守は氏も位もなき平侍にて有つるが、冥加にかなひ、はや三度の忠勤をぬきんで、片肴の禮位まで赦免なり、ひとつを賞して、もつて百をすゝむとは是かや、扨も豐前守は冥加の侍、浦山敷仕合かなと、兩國の武士元日の禮に望をかけ、一生涯の本懷此一事にしくはなしと、命をば一塵よりもかろくす、歐陽公が本論に、萬物と共につきず、卓然としてくちざるは、後世の名なりといへり、

〔陰德太平記〕七肥前國田傳村合戰之事

敵多勢ナレバ、少貳〇元貴猶モ難儀ニ及デ、既ニ大崩ニ成ベカリシ所ニ、龍造寺ノ一類蹈留テ力戰ス、其中ニモ赤熊胄著タル武者三騎、諸勢ノ先ニ立テ出群ノ功ヲナシ、敵ヲ討事不知員、剛忠是ニ機ヲ得テ指麾振廻シ、先ニ引タリシ先陣ノ勢ヲモリ返シ、遂ニ敵ヲ追立、剩サヘ筑紫尙門、朝日賴貫ヲ討取、其外頸八百餘級ヲ得タリケレバ、冬尙大ニ悅、今度ノ剛忠ガ武功ヲ感ジ、河副ノ庄一千町ヲ賜ハリケリ、カヽレバ剛忠モ吾今度ノ功、偏ニ彼赤熊武者ノ勇ニ依レリトテ、急ギ召出シテ名ヲ問ケレバ、本庄村ノ浪人ニ鍋島平右衞門清久、其子左近將監淸正、同次男孫四郎淸房トゾ名乘ケル、剛忠大ニ感ジ、勸賞トシテ本庄八十町ヲ與ヘ、加之家門ガ兄龍造寺豐後守家純ガ女ヲ以テ、淸房ニゾ嫁セシメケル、

〔總見記〕七信長依大忠賜御感書歸國事

將軍家ヘ信長ヲ被召、歸國ノ御暇給テ、上意誠ニ懇懃ナリ、今度大忠ノ戰功ニ依テ、逆臣不日ニ令退治、五畿內安全、公方家ノ再興、是偏ニ信長一人ノ忠功ナリ、天下ノ大器、武門ノ棟梁、何者カ是ニシカンヤ、恩賞トシテ、今度討取ル近江、山城、攝津、和泉、河內ノ國々望ミ次第可知行由、先日ヨリ度度御使ヲ以テ被仰下トイヘドモ、堅ク辭シテ不受之、今以上意ニ隨ヒ拜領仕ルベシト有ケレドモ、信長彌辭退ヲ固クシ、一國ヲモ拜領シ玉ハズ、皆々公方家忠勤ノ族ニ配當シテ、只泉州ノ堺、江州ノ大津、草津バカリニ、代官ヲ付置ルヽマデ也、然レバ今度勳功ノシルシナキコトヲ、將軍家思召シ煩ルヽニ依テ、古今無雙ノ御感狀トシテ、三通ノ御內書ヲ書キ下シ玉ハリ今日ニモ早々罷歸リ、在國休息可仕由被仰下、信長謹デ御禮申上ラレ、今度戰伐勝利ノ事、公方ノ御威光ヲ以テノ事ナリ、聊信長ガ手柄ニアラズ、御內書ノ儀ハ難有奉存候間、家ノ面目ニ頂戴仕リ可罷歸候、其餘ノ恩賞ハ更々申シ受クベカラズ、天下イマダ一統ナラズ候間、一人成トモ公方ヘ忠節申ス者ニ、

皆々拜領イタサセ申シ候ベシ、但シ御內書三通ノ內モ、一通ハ公方家御自筆ニ被ㇾ認候由、是ハ信長テイノ者拜領可ㇾ仕物ニアラズ、是ヲ拜領申スナラバ、却テ不肖ノ身ノ冥加ニツキ申サントテ、御自筆ノ一通ハ被ㇾ返進、殘ル二通ヲ頂戴シ、禮儀殘ル所ナク御調有テ、御暇乞申シ奉リ、淸水寺ニ歸ラレケリ、其狀ノ文言、御父ノ文字、殿文字何レモ希有ノ事トゾ聞エシ、其狀ニ曰ク、

今度國々凶徒等、不ㇾ歷ㇾ日不ㇾ移ㇾ時、令ㇾ退治ㇾ之條、武勇天下第一也、當家再興之大忠不ㇾ可ㇾ過ㇾ之、彌國家之安治、偏賴入候之外無ㇾ他事、猶藤孝惟政可ㇾ申候也、

永祿十一年十月廿四日 御判

父 織田彈正忠殿

〔信長記〕一下信長卿御入洛幷坂井久藏感狀事

斯ル處ニ敵足輕ヲ出シケルニ、右近ガ嫡男坂井久藏生年十三歲ナリシガ、城ノ山下堀際迄追詰、鑓ヲ合セ散々ニツキ合ヒシガ、遂ニ頸ヲ捕リ信長卿ノ見參ニ入レケレバ、大ニ感ジ給ヒケリ、角テ其日ノ樣子義昭公ヘ注進有シ時、久藏ガ働殊更ニ被ㇾ申上ケレバ、義昭公モ無ㇾ類事也トヤ思召ケン、感狀ヲゾ被ㇾ下ケル、誠ニ馬ニノル委サヘ危キ程ノ身トシテ、將軍ノ御感狀ニ預ルコトハ、古キ例ニモ有難カルベシト、老若譽メヌ人コソ無リケレ、

〔奧羽永慶軍記〕二羽州天童合戰ノ事

天童東根同時ニ落城シケレバ、義光〇山形悅ブ事限ナシ、此度ノ勳功ニ、里見源左衞門ニハ東根ノ一跡ヲ賜リケリ、鈴木左衞門ハ東根ノ與力トシテ、野川ノ要害ヲゾ賜ケル、

〔家忠日記追加〕六天正八年五月五日、輕卒をして田中の城近邊の麥を悉く薙しめ、大神君〇德川家康兵を收て還り給ふ、于ㇾ時望宗の城より、朝比奈駿河守が軍勢等、不意に出て、大神君の後軍を襲討んと欲、石川伯耆守數正、〇中略小原等返し合せて力戰す、松平左近大夫直乘橫

合に馳て、頻に競ひ戰、敵忽に敗北す、〇中略三浦兵部少輔は松平周防守康親が臣岡田竹右衛門尉元次是を擊捕、然るに一色の某、大神君の御勘氣を蒙て、周防守康親が許に蟄居して此陣に在、竹右衛門尉元次、三浦兵部少輔が首を一色に讓り與へて、其戰功を以一色大神君の御勘氣御赦免を蒙らん事を請ふ、大神君元次が軍功を一色に讓る事を御推察有て、著し給ふ御鎧緋威の片袖を以元次に賜、矢部孫三郎は安藤次右衛門尉正次、是を擊て首を得たり、大神君其戰功を褒せられ、永樂二十貫文を正次に賜、

〔川角太閤記 三〕一城攻の體御覽候へば、城の堀へ寄手はや程近付申候處へ、御使番衆被遣候、其樣子は早々終夜辛勞仕候、定て勞れにおよび可申なり、此上は御手廻り小性等にて攻さすべき也、はや〱御入替可被成と御使なり、此御使は入替に可被成とて、先手さらば入替可申とは申まじかりしかども、此御使被立候はゞ、攻者共猶攻口御いそがせ可被成ための御使と聞え申候、如案はやひた〱と塀に手を掛申候を御覽じ被及、御插箱を御取寄被成、其ふた〱に金錢をきり見たし、ふたごとに移しかけ申候、其分別は早く頸可參なり、御褒美の爲め金錢御用意なり、一塀をはや乘よと御覽じ、御馬の上にて御馬印を御手づからふりたて〱、はや貝をふけよと御意なり、夫より程なくひた〱と乘入候とひとしく、はや頸參り候、御馬より御下り被成、金錢御つかみ候て、御自身に被遣候、二三十人には御自身御手づから被遣候、夫より頸數四方八面より寄せ申候故、御意には皆々見可申ものなり、此金錢に我手の不掛はなきぞと御意にて、總の金錢を御手づから御つかみたて被成、其後は御小性衆二三人に被仰付、御小性衆の手より頸取申者請取申候、其時其金錢に秀吉手の不掛は一錢も有間敷と、御意折々相聞申候事、

〔家忠日記追加 十〕天正十五年四月、是月秀吉師を帥て、豐前筑前の境岩石の城を攻、大神君家康臣松平本多豐後守廣孝をして、軍の雌雄を問しめ給、廣孝能戰て軍功有、秀吉是を褒して金鐔の脇指并

羊の皮の羽織を廣孝に授く、

〔武將感狀記 二〕渡瀨ハ城ノ上、三宅ハ坂ノ下ヨリ鑓ヲマジヘテ勝負ヲ決ス、三宅渡瀨ヲ擅伏、短刀ヲ拔テ首ヲ掻、味方ノ陣ニ五十歩バカリ引ケルガ、母衣ヲ添テトラザルヲ後レタリト思ヒ、立歸テツイニ母衣ヲ取テ來レリ、三宅ガ二十三歳ノ時ナリ、秀勝ノ前ニ首ヲ持參シ、其首尾ヲ申セバ一番鎗ト云ヒ、物頭ノ首ト云ヒ、モットモ比類スクナシト詞ノ褒美アリテ、秀吉ノ本陣ニ行シム、市橋下總守披露ス、秀吉ノ前ニ召出サレ、首帖ニ記サルヽニ、秀勝ニハ一番、總軍ニハ三番也、サレドモ物頭ノ首ニ、母衣添タルハ是始ナリ、秀吉感ゼラレテ金錢ヲタマフ、秀勝ニハ大和當麻ノ鎗、幷ニ黄金十兩ヲアタヘラル、其後一番鎗ノ感牒ヲ出シ、祿ヲマシテ一部ノ將ニセラレタリ、

〔總見記 九〕長光寺城軍柴田瓶破事

柴田(○勝家)ハ甚助(○佐々木承禎使者)ヲタバカリ返シテ、城中ノ水ヲ點撿スルニ、此比マデコソ、五月雨ノ軒ノ雫ヲタメ置テ、少シヅヽモ呑タリシガ、今ハハヤ六月ノ炎天ニテ、雨水悉ツキハテヽ、只二石入ノ水瓶ニ三ツナラデハ無リケリ、柴田是ヲ見テ、アツハレ水ヨ、此比中ノ諸卒ノ渴ヲヤメサセントテ、三ノ瓶ナガラ廣緣ニカキスヱサセ、大小上下ノ士卒ヲアツメ、夜モスガラ酒宴シテ、明朝ハ我等モ各モ切テ出テ討死スベシ、トテモ渴シテ死ヌベキ上ハ、是ヲ最後ノ思出也、イザ各此水ヲ呑ツクシテ、此間ノ渴ヲ散ゼヨトテ、三ツノ瓶ノ水ヲ人馬トモニ不レ殘呑デ心ヲ和シ、人數一統ニ思ヒキリ、只一筋ニ討死ヲ究ム、其後勝家自身長刀ノ柄ヲ以テ、石突ニテ件ノ三ノ水瓶ヲ悉タヽキワリ、水ノ蓄是マデナリト云內ニ、短夜巳ニ明ガタナレバ、明レバ六月四日ノ曉、松明ヲトボシツレ、勝家マツサキカケテ、城兵不レ殘切テ出ル、(○中略)柴田ハ心ヨキ軍ニ勝テ、委細ノ事ヲ書記シ、討捕處ノ頸七百八十級ヲ持セテ、使者ヲ以岐阜ヘ申上ケレバ、信長公大ニ御感ニテ、柴田ガ手柄今ニハジメヌ事ナレドモ、此度ハ猶スグレタリトテ、御感狀ニ添、三萬貫ノ地加增ヲ被レ下、瓶破柴田

殿へトゾアソバシ被遣、

〔川角太閤記五〕一扨又左衛門殿〇前田利長二ケ所の軍に打勝、御心よげに居城へ歸陣して、家中の者の一番鑓二番鑓、其次第々々穿鑿して加増褒美夫々に被行候、然る所に篠原出羽と申者、其頃大事の腫物を相煩、存命不定の體、家中にも其隱無御座候處、乘物にて罷出、合戰の時は侍共に乘物を舁せ、一番鑓二番鑓の合申所まで少もさがらず乘懸申候、行歩不叶故にや乘物より罷出る事は不成候、敵方よりは又左衛門殿乘物かと相心得目掛、鐵砲頻りに打掛申候、され共不起候故か、鐵砲は一ツ股にあたり候と聞へ申候、又左衛門殿吟味には、行歩不叶故乘物よりは不出候へど、家中の侍共への令見、又は心掛神妙也とて、一番鑓に被相定候て加増五千石被遣候事、

〔諸家系圖纂十四桓武平氏〕平野　長泰　天正年中、豐臣秀吉公與柴田勝家戰于江北、秀吉公之小臣於志津嶽七人同時合鑓、各携首級赴秀吉公之營、長泰獨心以爲大敵在前、非退一歩之時、使家僕捧其首於秀吉公、獨進以戰、柴田遂敗績矣、長泰謂糟谷某曰、今日之戰如予者、亦逢敵得其首級、是亦可謂合鑓否、糟谷曰、今日足下以鑓突敵獲其首、以此不稱合鑓、又以何爲合鑓乎、長泰笑曰、如今日則逢敵合鑓、亦於余何難之有乎、糟谷大感其不伐功矣、柴田沒而越之前州悉平夷、秀吉公感其勇武賜三千石之采地、且有褒稱之感書、

〔加澤平次左衛門覺書〕上田塞川合戰幷御一族眞田ノ幕下ニ屬スル事

コヽニ眞田ノ家臣ニ深井三口ト云者、生年廿六歲ナリケルガ、一日ニ三度高名シタリケル故、每度感狀賜リケル、塞川ヲ渡シ敵ヲ追カケ行、敵三百餘人ニ取リカコマレシガ、敵一人討取、大勢ノ中ヲキリヌケ、ウスデモ負ハズ歸リケレバ、此度ハ苗字取ラセントテ、深井三口ヲ改メテ眞田但馬守トコソ名乘セケレ、

〔常山紀談八〕利長〇前田の士松原久兵衛を始として、先を爭ひ攻入、終に城を攻落して、首四百餘打

取たり、秀吉氏郷に感狀を與へられ、小坂に金錢十四羽織を賜りぬ、

一說に、小坂を一番と記せり、秀吉坂を賞して刀を與へられけるに、坂申けるは、一番の賞にて候へば、栗田其一人也、栗田は黑き吹貫にて候ひき、坂が吹貫白くて目に立申たるなるべしと讓りければ、秀吉愈大に感じ、刀を栗田に與らるともいへり、

〔常山紀談〕九七藏〇伊藤尾州三本木の軍に、事急にして編笠をかぶりながら、一番鎗を合せける故、信長大に賞美して、編笠と呼れけり、後秀吉に仕へて度々功名有しかば、紫紬井筒の紋腐袖の小袖を與へられければ、甲の上に著たり、秀吉の旗奉行と成たり、

〔末森記〕越中國中御仕置無殘所被仰付ケ、利波郡中郡姉負郡合三郡ヲバ、利家卿ニ一兩年仕置シテ、利長ニ渡可申トナリ、則御判形被成頂戴、新川一郡ハ佐々內藏助ニ給リケル、悉ク境目已下御法度被仰出、加州金澤城マデ秀吉公被成御歸陣、九月十日ニ利家卿ヲ召、今度モ忠功誠ニ不淺次第ニ候、內藏助大國を持謀叛ヲ心ニ懸、人數押ヲ揃、殊ニ緣者ノ結ビヲ企タルタバカリ心ヲトゲサセ、其上多勢ヲ以テ働候處ニ、度々ノ合戰ニ切勝、越中利波郡マデ切取候事、無比類手柄ノ段、日本ニヲキテ武門ノ統領タルベシト、御感狀ニ羽柴筑前守ト御名字御名共、其儘被下候事、唐土天竺ハシラズ、日本ニヲキテハ加樣ノ手柄アリガタシト、世コゾツテウラヤマザル人ハナカリケル、是ゾ君々タリ臣々タル御世ナリト申アヘリ。

〔關原始末記〕下今度石田が叛逆に與する輩、悉く敗亡して、闕國並沒收せらるゝ所々あるにより て、忠功の諸將に恩賞を行はるべしと御沙汰有て、家康公より御使として、井伊兵部少輔、本多中務少輔、榊原式部大輔、本多佐渡守、大久保相模守五人を御使として、秀忠公へ遣はされ、關東を御座所に定めらるべきか、但上方に御座有て可然思召かと御尋あり、秀忠公聞召て、いまだ若輩の事なれば、如何樣にも御仕置宜き樣に、大御所御計ひに不可過と御返事ありければ、家康公御機

嫌能、然らば關東に御座あつて、天下の政務を行はるべしとて、國割被仰出、

越前國、結城少將殿、　尾張國、松平下野守殿、　備前美作兩國、中納言豐臣秀秋、　安藝備後兩國、福島左衞門大夫、　播磨國、池田三左衞門尉、　紀伊國、淺野左京大夫〔改號紀伊守〕、　筑前國、黑田甲斐守〔改號筑前守〕、　筑後國、田中兵部少輔〔改號筑後守〕、　出雲隱岐兩國、堀尾帶刀、　因幡伯耆兩國、中村一學〔式部少輔之子〕、　豐前國並豐後杵築、細川越中守、　土佐國、山内對馬守、　若狹國、京極宰相、　丹後國、京極侍從、　伊豫松山、加藤左馬頭、　同國今張、藤堂佐渡守、　飛驒國、金森法印、　因幡鳥取、池田備中守、　丹波福地山、有馬玄蕃頭、　美濃高洲、德永法印、　伊勢神戶、一柳監物、

其外羽柴肥前守に能登並加賀の小松大聖寺を加增し給はる、能登國は前田孫四郎領地也、小松は丹羽五郎左衞門領知、大聖寺は山口玄蕃領知也、今度此三人石田に與するゆへ皆沒收せられて肥前守に被下、是より加賀能登越中三ヶ國悉皆肥前守領知せらる、加藤主計頭此頃迄は、肥後半國を領して、熊本に在城しけるが、今度小西攝津守が闕所を下され、肥後一國を領して、改て肥後守と號す、〇中略　同年〇慶長六年二月より三月上旬迄の間、御家人に恩賞行はる、

近江國佐和山、井伊兵部少輔、　伊勢國桑名、本多中務少輔、　美濃國加納、奧平美作守、　同國大垣、石川長門守、　參河國岡崎、本多豐後守、　同國吉良、本多縫殿助、　同國吉田、松平玄蕃允、　遠江國濱松、松平左馬允、　同國懸川、松平隱岐守、　同國橫須賀、大須賀出羽守、　駿河國田中、酒井備後守、　同國府中、內藤三左衞門、　同國興國寺、天野三郞兵衞、　同國沼津、大久保次右衞門、　上總國小多喜、本多出雲守、

〔寬永諸家系圖傳　百十四〕蜂須賀　至鎭〇中略　台德院殿〇德川秀忠　岡山に御越年ありて、正月〇慶長二十年十一日、至鎭を岡山にめして、今度の軍忠御感におぼしめさるゝ旨、重疊ありがたき上意にて、松平の姓をくだされ、御感狀ならびに順慶左文字の御腰物を頂戴す、御感書の詞にいはく、

感書
感狀

今度於攝津大坂表穢多崎幷仙波兩所、竭粉骨勵軍忠之條、無比類働感悅候、因玆賜松平氏者也、

慶長二十年正月十一日　御直判

松平阿波守どのへ

〔大和事始五 典制〕感書　武家にて其人の武功を賞して、君より賜はる書を感書と云、又感狀とも云、

〔武家名目抄文書二十二〕感書　按、感書を又感狀ともいふ、近代は御感とのみもいふ、次に見えたり、もと何事にもあれ、主君の御感にあづかりて、其事を賞して賜はりたる文書を感書ともいひしを、後世は軍忠のことに限りていふことゝなりたり、

〔吾妻鏡三〕壽永三年(○元暦元年)十二月廿六日辛巳、佐々木三郎盛綱自馬渡備前國兒島、追伐左馬頭平行盛朝臣事、今日以御書蒙御感之仰、其詞曰、

自昔雖有渡河水之類、未聞以馬凌海浪之例、盛綱振舞希代勝事也云云、

〔吾妻鏡十五〕建久六年七月十六日戊戌、武藏國務事、義信朝臣成敗、尤叶民庶雅意之由、就聞召及今日被下御感御書云云、於向後國司者可守此時之趣、被置壁書於府廳云云、散位盛時奉行云云、

〔武家名目抄文書二十二〕感狀　按、感狀は卽前條の感書なり、是を狀といふは狀は札也、(增韻)陳也(正韻)などゝみへて、其意を形狀し墨に陳るの義にぞあるべき、

〔江濃記〕尼子合戰之事

天文十年正月十三日、晴久敗軍して出雲へ開陣しけれども、大雪降ければ、毛利衆またふに不及、此よし京都へきこえければ、則公方御感不斜して、三管領と聞えし畠山右衛門督在氏、細川右京大夫晴元、六角彈正少弼定賴三人承りにて、感書を毛利(○元就)に給りける、

至當國吉田雲州衆取向候之處、數度之合戰被得勝利候、然義隆被示合、去正月十三日重而致一戰、敵陣衆切崩、悉令敗北候由、木澤左京亮注進候、天下無其隱候、御高名至候、被對天下忠功不可

過之候、仍太刀一腰康眞進之候、彌被廻計策、可被抽戰功事肝要候、猶木澤可申候、恐々謹言、

四月廿八日　在氏　晴元　定頼

毛利右馬頭殿

〔足利季世記〕三好記四木澤打死之事

長教佐〇遊感狀ヲ三木ニツカハシケル、其狀ニ云、

去十一日天文十一年三月於落合上畠合戰之時、一番ニ被初太刀、鑓疵太刀疵被十三箇所、或突臥或組打、爲驚目御働之上、剩木澤左京亮長政討取、云恰云、袷口力量御忠義、凡別儀御高名、且云戰功且云御本意無類之御名譽候、御感之故既植長被成自翰候、爲軍功之地八尾之內七百貫被宛行候、全可有御知行儀肝要候、次多門鎧一領、紫糸太刀一腰吉房進之候、併表軍功之廣色計候、仍感狀如件、

三月廿一日　遊佐河內守長教判

三木牛之助殿進之

〔柴田退治記〕今度柳瀨表秀吉所切崩之一番鑓者悉近習之輩也、其面々者福島市松正則、脇坂甚內安治、加藤孫六嘉明、加藤虎助清正、平野權平長泰、片桐助作直盛後改久基、糟谷助右衛門尉、櫻井左吉秀長近習也也、石河兵助一光者、一番懸入突內甲討死、依之召出舍弟長松、一宗爲家督者也、右九人能設席下盃遣領知、添以黃金羅帛、兼有感狀、其文言曰、

今度三七殿依御謀叛、濃州大垣令陣替之刻、柴田修理亮至柳瀨表取出之條、爲可及一戰、秀吉一騎馳向之所、心懸以不淺故、早速懸著、於眼前合一番鑓、無比類働之條、爲褒美或五千石或三千石充行、彌向後於抽軍旅之忠勤者、於勤功可相計者也、仍如件、

天正十一年七月一日　秀吉判

〔松隣夜話〕下越後衆森出雲ト云侍ト、佐渡先方槇伊賀ト武邊公事ヲ致シ目安ヲ捧グ、兩人大身ノ侍、殊ニ武道ノ出入故、奉行衆モ遠慮ニテ、謙信公御前ニ披露アリ、其濫觴越後ノ風ニテ、侍大將ト釆幣ヲ下サレ候ハ之ヲ除キ、其餘ノ侍私ニ參會仕ル時ハ、老若高下ヲ言ズ、爲景以來ノ御感狀ヲ多ク持タル侍ヲ以テ坐上トス、感狀同ク持タルハ、領知加恩ノ多少ヲ撰ビ、領知同分ノ衆ハ、又借老ヲ以テ崇敬仕ル定メナリ、折シモ春日山蓮華寶院ニテ、近所ノ侍數輩振廻申サレケル時、一ノ座上ハ侍大將柴田內膳、其次ハ長尾小四郞、三番ヨリ感狀ヲ以テ座ヲモ定ル地侍ナレバ、森出雲守トテ年齡六十餘ニテ、感狀ヲ廿三マデ取テ持タル覺ノ侍、侍大將ノ次ニ居ル、然ル所ニ佐渡庄內衆槇伊賀ト云侍後走ニ來リ、座席ヲ見廻シテ後、遙ノ下座ニ居ル、是モ覺ノアル兵ニテ人ニ知ラレタル者也ケレバ、各式對シテ伊賀殿ハ夫ニ坐ス人ニ非ズ、雲州ノ次ニ居ラレヨト申、斯テ些挨拶アツテ後、伊賀守申ハ、雲州ハ故爲景公當謙信公兩殿ノ御感ヲ廿三マデ御取候由、其聞ヘ全ク承候、尤冥加ノ御覺ヘ、イミジキ御事ニ候、去ナガラ某モ近頃ヨリ謙信公ヘ罷出、所々ノ御陣ヘ御供致シ、十六年以來ニ御感狀廿一戴キ罷在候、其內越前衆ト御取合ノ時、日の中ニ十三度ノ迫合ノ有シニ、十一度一番鎗ヲ仕リ、甲冑ヲ帶シタル侍ヲ九人討首ヲ得、天下無雙ト遊サレタル御感狀ヲ一ツ取申テ候、御當家ノ御座席ハ手柄次第ト候ヘバ申ニテ候、其數ヲ申時ハ某二ツ後レタリ、手柄ヅクヲ申ニ於テハ、某增リヤ仕ベク候、先以天下無雙ノ四文字ヲ遊サレタル御感狀ハ、大形常ノ御感狀五ツ六ツニハ替ヘマジク候、其上雲州御所持ノ御感狀、過半ハ御父爲景公ヨリ御頂戴候ト承ハル、某ノハ皆以當謙信公ヨリ申テ候モ、同事ト申ナガラ、謙信公ノ御感狀希ニシテ、大節ナル事自ラ百重千倍也、知行俸祿ハ惜ミ給ハズ御座スト申セドモ、御墨付を下サルヽ事常常無之ヲ以テ也、但是ハ先自分ノ申事、雲州ニモ、如何樣ナル大切ノ御感狀之レアルカモ存ゼズ、又雲州公長尾御譜代ノ御事、某ハ先方ニテ十六年以來ノ者ナレバ、夫ヲ以テ式對ヲ仕ル筈ニ候

ヤ、其時ハ一口モ愚意ヲ申ヲサズ候ト禮ヲ厚ク申ス、森出雲之ヲ聞キ、伊賀殿ノ御事、兼テ以テ承及候ヘドモ、是程委細ノ儀ハ、只今初ニテ候、扨ハ左様ニ様希ナル御感狀ヲ帶シ給フニヤ、先以テ越前ニテ十三度ノ迫合ニ、十一度マデ、一番槍ヲ合サレタルト候事、實ニ天下無雙トモ申ベク御覺ニ候、其故ハ總ノ取合ノ時、相手弱兵ナレバ何ト存テモ、一人ニテ毎度ノ一番槍ハ成リガタキ物ナリ、敵弱兵ナルニ依テ、味方ヨリ進者多シテ一人ニ渡シ申サズ候、亦相手剛強ニテ少モ踏出候ハヾ、其儘命ヲ被取ト強ク見ヘ候時ハ、味方トモニ進兼、拔出ル者之レ無ヲ以テ、幾度モ心掛次第一番槍ヲ一人ニテ仕ル仕合安ク候、是ヲ以テ積リ候ヘバ、越前ノ御敵就中剛敵ト相見ヘ候、其時ハ某儀前橋ニ罷在、手ニ合申サズシテ存ゼズ候、然ラズ謙信公御一將ノ御感狀廿一迄、十六年ノ間ニ御頂戴ト承候上ハ、何レニ爭ヒ申ベク候、強敵アリ、弱敵アリ、危キ場アリ、安キ場アリ、武邊ハ時ノ仕合ナレバ、後日ノ褒貶書リ兼申物ニテ候、感狀ニテ吾一增ニ申サンニ於テハ、某モ少シノ覊ハ持候ヘドモ、全體吾等ノ存ル所、左様ノ書リニテ之レ無候、及バズ乍ラ孟子反ガ誇ラザル意地コソ貴ク候ヘ、是ハ先ヅ當座ノ戲言、座席ノ義ハタメシ希ナル御感狀ヲ御持候ヘバ、卽チ此方ヘ御直リ候ヘ、其餘ノ御方ニモ武邊ヲ申サバ、某杯ノ及申ス御方ニ之レ無候ヘドモ、夫ハ皆以前ヨリノ舊例ニテ、御座上ニ罷在候ヘバ、式對ニ及バズ候、伊賀殿ノ御次ニコソ罷在候ハンズレトテ、則座ヲ立チ伊賀ヲアレヘト請ズ、伊賀守ソコニテ大ニ恥、去トテハ年寄テ不覺ノ義ヲ申出シ、御座敷ノ妨トモ罷成申テ候モノ哉、御普代ト申、殊ニハ御感ノ其數モ二ツ迄御所持多ク候、先程ノ慮外は是非御免成サレ、唯某ハ此座席ニ差置レ候ヘト斷ヲ申ス、出雲一圓承引申サズ、伊賀ヲ強テ坐上ニ請ズ、往返止ザルヲ以テ、柴田長尾アツカヒ兼テ、後日披露ニ及ブ、但謙信公餘ノ事ニ替リ、武邊ノ出入ハ、深ク評議ヲ遂ラレ御念入候ヲ以ナリ、謙信公聞召、先七組衆十一人衆廿一人衆ヲ召シ給ヒ、僉議ノ上仰出サレケルハ、出雲ハ感狀數多シ、殊ニ普代覺ノ者下坐ニ著イ、ワレ

ナシ、伊賀ハ感狀ノ其數ハ劣リ候ヘドモ、日ノ内ニ十一度迄一番槍ヲ合セ、九人侍ヲ討、天下無雙ト云感狀ヲ取候事、是名譽ナレバ、是モ下座ニ著ガタク、兩面ニ別レ對座アルベシ、其上雙方口說ニ及バズ、謙退ヲ第一ニシテ强ミアル論談、就中出雲初段ノ酬對慇懃ノ樣子、御案ナガラ結構ノ式對ナリトテ、兩人同座ニ召サレ、出雲ニハ信國ノ刀、伊賀ニハ大原實守ノ脇差ヲ給ハル、兩腰ナガラ謙信度々手ヅカラ人ヲ切リ、刃金ヨシト、ノ御詞アリ、

〔武家名目抄文書二十二〕御感　按、御感といふは、御感狀といふべきを略していへるなり、凡皇朝の風、常の言語を下略していふが習俗にて、朱印の御書を朱印といひ、練緯の小袖を練緯といふの類、枚擧にいとまあらず、

〔明良洪範五〕大坂冬陣御和談ノ前ニ、塙團右衛門大將ト成テ、蜂須賀ガ陣ヘ夜討シケル、○中略大野主馬ガ組下ノ士モ、此夜討ニ功名セシカバ、木村長門守○重成ヲ賴デ、感狀ヲ給ハラン事ヲ申ス、木村申サレケルハ、如何ニモ上ヘ申上ナバ、感狀下シ給ハルベシト、貴殿感狀ヲ給ハリテ何ニサルルヤ、外樣ノ者ナラバ、他ノ主人ヲ望ム時ノ證據ニモセラレンガ、大野兄弟ハ當城無二ノ長臣ニシテ、生死ヲ君ト同クスル身ヲ以テ、何ゾ感狀ノ入ルベキトイハレシカバ、主馬赤面ニ及ビシト也、

〔享保集成絲綸錄十三〕天和四子年正月

口上之覺

一御感狀、或御書、或御褒美、先祖江被下候趣、幷家來之者にも在之においては、其品委細書付可被差出候以上、

正月廿二日　堀田下總守　阿部豐後守

右書付豐後守月番之刻者、下總守方江可被差越候、於無之者、其段可被申聞候以上、

〔古文書類纂中軍忠狀〕後醍醐天皇元弘三年播磨大山寺衆徒軍忠狀(播磨大山寺所藏)

一見了(花押)

注進

依賜大塔二品親王令旨、播磨國大山等衆徒等、自去潤二月十五日致合戰忠、抽御祈禱實事、

一當寺長日不斷藥師如來供養法　一攝州小平野兵庫島合戰(二月十五日初度)　一同廿三日尼崎合戰手負(實名時敎大輔)　一同廿四日同國坂部村合戰打死刑部次郎(實名安重)　一摩耶山合戰(三月一日)打死兵衛三郎(實名友重)　一京都合戰、同十二日打死、大夫房(大將實名源眞)　肥後(實名有慶)同日手負、民部(實名重舜)兵部(實名了源)少輔(實名圓範)丹後(實名心善)　一摩耶山城于今警固

右今年二月廿一日忝賜令旨之間、自赤松城始、於所々致度々合戰畢、仍注進如件、

元弘三年五月十日

進上御奉行所

〔阿蘇大宮司惟澄申狀〕惟澄軍忠次第記詮要謹言上

最初元弘三年、惟直相共令參上金剛山之處、依下賜令旨、自備後鞆令下國、阿蘇郡鞍岡合戰自被疵以來、關東先代事者不遑言上、　尊氏謀叛以後、筑前國有智山合戰被疵事、(二箇所)　同年八月十八日、肥後國唐河合戰先懸畢、(中略)凡惟澄自最初大小之合戰數百度、所討取凶徒數千人、其間自身被疵事七箇所、令討死親類若黨百餘人也、所詮惟澄立申荒凉軍忠否、以誓文有御尋御方之傍輩之日、若有爭申仁者可申披者也、仍取詮言上如件、

正平三年九月日

〔常山紀談 二〕謙信信玄と和平を結んとせられし時、長遠寺の僧を使とせらる、此僧は遊說の人なり、謙信かの僧に、甲斐の士に、向井與左衛門といふ者やあると問るゝに、これ有と申す、又劍の痕

賞不當功

や有と問る、に、面に刀の痕有と申す、謙信のいはく川中島の戰に名乘かけて、われを後よりつき通す處を、ふり顧て一刀斬たりしぞかし、よもたすからじと思ひつるに、ながらへたるよなとて、萌黄の胴肩衣に鎗のあと有をとり出し、書簡を添て、向井におくられけり、此を世にかへり感狀といふ、其書中に川中島の事をのせられたりといへり、

〔奧羽永慶軍記三十一〕長谷堂合戰付鮭登働事

扨モ今日鮭登ガ武勇、信玄謙信ノ家ニモ覺ナシト、後日ニ直江〇兼續ガ許ヨリ褒美ヲゾシタリケル、此直江ガ狀ヲ、鮭登ガ家ノ永キ證文トセシ事、敵ナガラモ剛ノ者ノ志ハ、最優シキモノ也ト、見ル人直江山城ヲゾ感ジケル、

〔源平盛衰記四十五〕源氏受領附義經任伊豫守事

同〇文治元年八月十四日除目行ハル、源氏六人受領ス、平氏追討ノ賞トゾ聞エシ、〇中略九郎大夫判官伊豫守ニ任ジケリ、鎌倉源二位〇賴朝擧申ニ依テ也、大夫判官ハ伊豫守ヲ賜ハル上、院ノ御厩ノ別當ニ成テ、京ノ守護ニ候ヘトテ、侍十人附ラレタリ、判官思ケルハ、義經度々ノ合戰ニ命ヲ捨テ、既ニ世ノ亂ヲ鎭メ、父ノ敵ヲ亡ス、私ノ宿意ト云ナガラ國家ノ固也、是莫大ノ軍功ニアラズヤ、然ルニ關ヨリ東ハ云ニ及バズ、京ヨリ西ヲバタバンズラント思ツルニ、僅ニ伊豫一國沒官ノ地二十箇所知行セヨトノ、源二位ノ所存本意ナシト思ケレ共、但重テ思計フ樣アリナント過ケル程ニ、

〇下略

〔太平記十四〕節度使下向事

去程ニ同日〇建武二年十一月八日ノ午剋ニ、大將新田左兵衞督義貞都ヲ立給フ、元弘ノ初ニ此ノ人サシモノ大敵ヲ亡シテ、忠功ノ人ニ超エタリシカドモ、尊氏卿君ニ咫尺シ給フニ依テ、抽賞サマデモ無リシガ、陰德遂ニ露ハレテ、今天下ノ武將ニ備ハリ給ヒケレバ、當家モ他家モ推並ベテ、偏執ノ心

ヲ失ヒツヽ、附不隨云者無リケリ、

〔太平記十九〕青野原軍事附囊沙背水事

直信直常〇桃井兄弟ハ、大軍ヲ容易ク追ヒ散ラシ、其身ハ無恙都ヘ歸上ラレケリ、サレバ戰功ハ萬人ノ上ニ立チ、抽賞ハ諸卒ノ望ヲ塞ガント、獨ヱミシテ待居給ヒタリシカドモ、更ニ其功其賞ニ不中シカバ、桃井兄弟ハ萬ヅ世間ヲ述懷シテ、天下ノ大變ヲ遲ミニカケテゾ待タレケル、

〔奧州後三年記下〕武衡家衡が郎等どもの中に、むねとあるともがら四十八人がくびをきりて、將軍〇源義家の前にかけたり、將軍國解を奉て申やう、武衡家衡が謀反すでに貞任宗任に過たり、わたくしの力をもつて、たまたまうちたひらぐる事を得たり、はやく追討の官符をたまはりて、首を京へたてまつらんと申す、然れどもわたくしの敵たるよし聞ゆ、官符を給はらば、勸賞おこなはるべし、仍て官符なるべからざるよしさだまりぬと聞て、首を道に捨てむなしく京へのぼりにけり、

〔太平記三十二〕山名右衞門佐爲敵事附武藏將監自害事

山名右衞門佐師氏ハ、今度八幡ノ軍ニ功有テ、忠賞我ニ增ル人非ジト被思ケル間、先年拜領シテ未當知行無リケル、若狹國ノ齊所今積ヲ如本ノ可宛給ノ由、佐佐木佐渡判官入道道譽ニ屬シテ申達セン爲ニ、日々ニ彼ノ宿所ヘ行給ヒケレ共、今日ハ連歌ノ御會席ニテ候、只今ハ茶會ノ最中ニテ候トテ、一度モ對面ニ不及、數剋立セ暮ルマデ待セテ、只徒ニゾ歸シケル、度重ナレバ右衞門佐、大ニ腹立シテ中略〇此入道加樣ニ無禮ニ振舞コソ、返々モ遺恨ナレ、所詮叶ハヌ訴訟ヲスレバコソ、諂フマジキ人ヲモ諛ヘ、今夜ノ中ニ都ヲ立テ伯耆ヘ下リ、軈テ謀叛ヲ起シテ、天下ヲ覆シ、無禮ナリツル者共ニ思知センズル物ヲト獨言シテ、我宿所ヘ歸ルト均ク、郎等共ニ角共イハズ、唯一騎文和元年八月二十六日ノ夜半ニ、伯耆ヲ差テ落テ行ケバ、相順シ兵共、聞傳テ七百餘騎、迹ヲ

爭功

追テゾ下リケル、

〔朝倉始末記 五〕印牧被生捕被誅事幷朝倉彥四郎頸之事

爰又犬間源三郎長吉ト云者、頸一提來テ庭ニ置ク、信長公是ハ何者ゾト聞給ヘバ、前波噫无慙ヤ、是朝倉同名畫名ハ權守トテ、今年十六歲ニ成候、定テ彥四郎トゾ申ラントテ、淚ヲハラ〳〵ト流ス、信長公近ク持來リ候ヘト宣給ヒ、彼貌ヲツク〴〵ト御覽ジテ、扨モ生ヲ替タル面影サヘ無類也、增テ存命ノ容顏何計ゾヤ、想像テ哀ナリ、其方此仁ヲ生捕テ來ナラバ、可畏忠節ナルベキヲ、情モ無害スル者哉、總ジテ物ノ哀ヲ不知、唯不異木石、汝心中不賴歟、當座ニ誅スベケレドモ、時之戰功ヲ默止スニ似タリ、今日ヨリ對面叶フマジトゾ宣ヒケル、

〔常山紀談 二十〕東照宮○德川家康志貴野にて功名せし、景勝○上杉の士大將に御感狀を賜はりしに、安田上總介は横鎗を入て、城兵を打破りし功大なりといへども、直江と不和なりし故に、其功上に達せず、御感狀賜らざりしかば、其後人に向て、此度御感狀を拜受し給ひて目出度候、上總一人は申立る人なくて、さばかりの武功むなしくなりて候、されどもおとりし事は候はず、是ほどの事武功は申達するまでもなし、且殿の御爲に命を捨て軍仕候、露ちりばかりも公方のためにする事に候はず候へば、是より後も殿をこそ大事におもひ候へ、公方の御感狀何條面目に存べきやと語りしとぞ、

〔吾妻鏡 九〕文治五年八月十一日戊戌、今日二品○源賴朝逗留船迫宿給、於此所重忠獻國衡頸、大蒙御感仰之處、義盛參進御前申云、國衡中義盛箭亡命之間、非重忠之功云云、重忠頗笑申云、義盛口狀可謂骨張、令誅之支證何事、重忠獲頸持參之上無所疑歟云云、義盛重申云、頸事者勿論、但國衡甲者定被剝取歟、召出彼可被決實否、其故者於大高宮前田中、義盛與國衡互相逢于弓手、義盛之所射箭、中于國衡訖、其箭之孔者甲射向之袖二三枚之程定在之歟、甲毛者紅也、馬黑毛也云云、因茲被召出件甲

之處、先紅威也、召寄御前覽之、射向袖三枚取寄後方射融之跡揭焉也、殆如通鑿、于時仰曰、對國衡重忠不發矢乎者、重忠申不發矢之由、其後付是非無御旨、是件箭跡異他之間、非重忠之箭者、義盛矢之條勿論也、凡義盛申詞始終符合、敢無一失、但重忠其性稟淸潔、以無詐僞爲本意者也、於今度儀者殊不存奸曲歟、彼時郞從爲先重忠在後、國衡彙中箭事一切不知之、只大串持來彼頸與重忠之間、存討獲之由、不乖物議歟、

○按ズルニ、生虜ヲ得テ功ヲ爭フコトハ、生虜篇獲生虜爭功條ニ載セタリ、

〔吾妻鏡二十五〕承久三年六月十七日庚午、於六波羅勇士等勳功事、糺明其淺深、而渡河之先登、詮者入敵陣之時事、打入馬於河之時、芝田雖聊先立、乘馬中矢著岸之剋不見來云云、兼義云、佐々木越河事、偏依兼義引導也、還迹爲不知案內、爭進先登乎者、難決之間、尋春日刑部三郞貞幸云云、以起請述事由、其狀云、

去十四日宇治被越間事

自岸落時者、芝田先立トイヘドモ、佐々木勸、仍芝田ハ佐々木ガ馬ノ弓手ノ方ニアリ、貞幸同妻手ノ方ニ磬エタリ、佐々木ガ馬兩人ガ馬ノアルヨリモ、鞭ダケバカリ先ヅ、中山次郞重繼又馬ヲ貞幸ガ馬ニナラブ、但是ハ中島ヨリアナタノ事也、貞幸水底ニ入テ後ノ事不存知候、以下略之、

武州〈○北條泰時〉一見此條之後、猶問傍人之處、所報又以符合間、招兼義云、諍論不可然、只以貞幸等口狀之融、欲註進關東、然者於賞者定可爲如所存歟者、兼義云、雖不預從步賞、到此論者不可承伏云云、

〔關八州古戰錄七〕北條氏政上總國池ノ和田合戰附三士高名論ノ事

南方ノ山中左衞門尉、伊達與兵衞何レモ弓ニ矢ヲツガヒ、多賀ガ左右ヘ驅寄セ、矢比コソ克カリケン、同時ニカツシト放シケル箭、一筋ハ射損ジヌ、一筋ハ右兵衞尉ガ右ノ脇壺ニ中テ、裏カク計

射込タレバ、鞍ノ上ニ屯リ得ズ、馬ヨリ下ニ橕ト落ルヲ、片岡平次兵衛走リ寄テ首ヲ掻キ、氏政○北條ノ實撿ニ入タリシニ、山中伊達兩人馳參ジテ、片岡ガ討捕首ハ、左衛門尉ガ鏃ニカケ射落シテコソ侍レト申セバ、與兵衛モ亦同ク某ガ矢先ニ懸リタリト訴ルマヽ、敵一人三人ノ討手有テ、忽チ爭論トゾ成ニケル、氏政モ戰未ダ終ザルニ依テ、當座ノ僉議ヲ默サレ、後日ニ乾ト穿鑿シテ、判斷ヲ乞フベキ條、其通心得ベキ旨、三士ニ申含メラレ、横目ノ輩ヲ招テ、伊達山中ガ懸リ際、甲冑乘馬ノ毛付、幷ニ矢ノ根等ノ事迄モ問究シテ、兩人ノ口上銘々ニ書記シ、且ハ彼敵ノ鎧ヲモ尋取テ、收メ置クベシトゾ申渡サレケル、○中略然ルニ氏政小田原ヘ入馬ノ後、三士高名爭論ノ赴、萬松軒ヘ物語セラレケレバ、氏康則片岡平次兵衛ヲ召出シテ、其時ノ首尾ヲ尋ラレ、射手兩人ノ馬物具見留タルヤト問レケルニ、片岡流石ノシレ者ニテ、サン候、敵ハ萌黄糸威ノ鎧ヲ著シ、鎗ヲ持テ只一騎、山ノ鼻ニ相支ヘテ見エシヲ、味方ハ三方ヨリ馳寄タリ、其中ニ黑糸ノ鎧着テ栗毛ノ馬ニ乘タル武者、弓押來テ敵ノ射向ノ方ニ懸レリ、妻手ノ方ヘハ、梠縄目ノ鎧ヲ着シ、鴾毛馬ニ乘タル武者、是モ矢刺テ懸リケルガ、左右同ジ計ノ間ヲ隔テ、同時ニ矢ヲ放ケルニ、敵則射伏ラレテ、馬ヨリ下ニ墮タリシヲ、某前ヨリ走リ寄、透サズ討捕申スト云、氏康亦兩士ヲ招テ尋ラレケルニ、片岡ガ申ス處ニ、聊モ違フ事ナシ、但山中ガ矢ハ鷹ノ羽ノ尖矢、伊達ガ矢ハ柳葉ノ由ナリシ故、多賀ガ鎧ヲ取寄テ點撿アルニ、妻手ノ脇ノ下ニ、柳葉ノ矢ノ根ヲ以テ、射徹ス穴分明ナレバ、扨ハ射當タルハ伊達ナリケリトテ、穿鑿ハ治定シタリケル、○中略同○永祿六年年十一月五日、件ノ三士ヲ始メトシテ、戰功ノ忠賞ヲ得タリシ中ニ、伊達與兵衛是ハ弓ヲ以テ敵ヲ射落スガ故、子細ニ及バズ第一番ノ賞タリ、山中左衛門尉是ハ強敵ニ對シ、勝負ヲ決セント欲シ、最前ヨリ敵ノ射向ヘ向シ事、其志拔群ナリトテ第二番ノ賞タリ、片岡平次兵衛是ハ敵ノ首ヲ獲タルヲ以テ第三番ノ賞タリ、其時片岡訴ヘケルハ、山中ハ當敵ヲ射外ス故爭論ヲ構ヘ、既非據トシテ雌伏セリ、左アレバ某ガ働伊

達ガ次トシテ第二番タルベキ義ヲ、御沙汰ノ次第本懷ニアラズト申ス、氏康宣ヒケルハ、凡賞罰ノ淺深ハ勳功ノ輕重ニ寄ル事、自他ノ知ル處勿論タリ、戰場ニ臨ンデ、討モ討ルヽモ武士ノ慣ヒ、偏ニ時運ノ厚薄ニカヽレリ、此度ノ戰山中ガ敵ヲ射損ジタルモ、其身ノ微運ニシテ、全ク臆シタル働ニハアラズ、況山中最初ヨリ剛敵ノ弓手ニ向ヒ、雌雄ヲ志スノ振舞、豈其功ヲ捨ベキヤ、感賞セズンバ有ル可ラズ、亦汝敵ノ首ヲ討取タル事、他人ノ矢先ニ中テ既ニ落命シタル後ノ働ナレバ、伊達山中ガ功ニハ及バズト云ヘドモ、相モ劣ラズ三人一同ニ詰寄タリシ強ミノ働ヲ褒美シテ、賞ヲ行フ所ナリト申シ渡サレケレバ、片岡理ニ伏シテ詞ナク退去シタリケル、

〔末森記〕利家卿利長卿城ノ內ヘ入給フ、其後鎗ノ吟味アッテ、半田半兵衞一番ニ鎗場ヲ見立候ヘドモ手負申候、山崎彥右衞門、野村傳兵衞一番鎗ヲ諍ヒ申セシヲ、利家卿御吟味ナサレ、同鎗ト云ナガラ、傳兵衞一番鎗ト名乘タル間、傳兵衞ニ一番鎗ト御感狀ヲ被下ケル、サテ兩人加增ヲ遣ハサレ、千石ヅヽニ被成間、加樣ノ吟味コソ手本ナレト上下申アヘリ、半兵衞モ千石ニナサレ、其上ニ母衣十五人與力ニ付給フ、加樣ニ其品々ニ被仰付候ヘバ、上下勇ミ命ヲカロンゼザル者モナカリケル、

〔藤葉榮衰記中〕岩田喜內有馬彥市郎鎗論之事

角テ天正ノ頃カトヨ、岩瀨ヨリ田村郡大善寺ノ東ヘ出デ向ヒ扣居タル處ニ、田村來方々ヨリ馳集リ、合戰ニ及バントスル中ヨリ、先陣ニ進ミ向フ岩田喜內ニ突掛、岩田勝レタル強者成ケレバ、散々ニ突合ヒ、岩田ガ鎗ニテ、敵弓手ノ腕ヲ突拔カレテ、鎗ヲ取リ可突合樣ナキ故、引退カントスル處ヲ、喜內是ヲ討ントスル處ニ、有馬彥一郎大力者也ケレバ、二間渡ノ樫ノ柄ノ鎗ニテ、後ヨリ前ヘ夙ト突通サレテ倒レケル處ヲ、菊池甚半馳合セ首捕リ、味方ノ陣中ヘ馳入ケル、岩田モ有馬モ安々ト首ヲ捕ント思ヒ、飛掛ル處ヲ早キ者ト云、又ハ時ノ運ニヨリ辛勞モセズ、造作ナク菊池

ニ首ヲ被捕、不安無念ノ事無限、然ル處ニ或人ノ家ニテ振舞有テ、岩田有馬出ケル所ニ、岩田其時ノ首尾ヲ陰言ニテ、贔屓ニ云由ヲ、有馬菊池ガ居タル處ニテ、有樣ニ云テ傍輩ニ聞カセン、無左バ首尾ノ能モ人ノ口次第ニ惡キニ成事無念ト思ヒ、岩田云ケルハ、我レ先陣ニ突掛ル敵ニ馳向ヒ鑓ヲ合セ、弓手ノ腕ヲ突拔鑓ヲ取リ、刀ヲ可拔樣ナキ儘ニ逃ントスル處ヲ、安々ト討ント思ヒ、鑓ヲ跡ニ捨テ太刀ヲ拔テ飛デ掛ル處ニ、又跡ヨリ敵弓ニテ有馬ヲ目掛テ射ント向ケレバ、有馬モ其間遠ケレドモ、後ヘ二間程引退ク處ニ、誰トハ不知味方ノ陣中ヨリ射ラレテ引ケレドモ、有馬是ヲ討ントモセズ居タル處ヲ、其レ漏スナ討テト詞ヲ掛ラレ、有馬跡ヨリ我討ントスル敵ヲ、二間柄ノ鑓ニテ突、突レテ菊池ガ居タ前ヘ伏ケレバ、菊池夙ト出テ首ヲ捕ル、諸人ノ馬ノ前ニテノ事ナレバ、何トシテ僞ガ云レント云ケレバ、有馬聞テ我レ岩田ニ被勇氣付、鑓ヲ突タルト云事無勿體、諸人ノ見ル處ノ合戰ナレバ、少モ僞ヲ云テハ傍輩ノ心モ辱シ、我レ其時ノ働キ首尾ノ能モ惡キモ、人ノ數多見ツラン、岩田ガ被討處ヲ我レ馳向ヒ、其敵ヲ突倒シ命ヲ助ケヽル處ニ、其恩ヲモ不顧、我レニ力ヲ付テ突倒セケリト云事推參ナリ、戰場ソ働キ廣言ナガラ、重テモ見ヨ、岩田ニハ一足モ劣ルマジトテ、カラ〱ト笑ヒケレバ、岩田聞テ重テハ延タル事也、所存アラバ只今本望ヲ遂ゲ給ヘトテ、兩方トモニ刀ヲ取ケル處ヲ、押隔テ家々ニ連テ行キニケリ、○中略菊池ハ兎モ角モ構ナカリケレバ、岩田ト有馬ガ中ヲ直サントテ、家中上下扱ヘドモ、合戰ノ場ニテ岩田ガ命ヲ有馬ガ助クルト云フヲ所存ニ思ヒ、有馬ハ岩田ガ勇メニテ突伏サセケルト云タルヲ無念ニ思ヒ、何ト教訓スレドモ雙方トモニ合點セズ、岩田ガ申處モ有馬ガ申ス旨モ、其謂レ有ケレバ、何モ可扱無行、四天ノ宿老衆モ唯御館ヘ訴ヘ御諚ヲ窺ヒ、兎ニモ角ニモ屋形ノ被仰付次第ニ相究可然ト、四人家老衆登城有テ、上聞ニ達ケレバ、屋形宣ケルハ、傍輩ノ異見ヲ不用、奉行ノ下知ヲモ背クコト、我儘ノ奴原ナレドモ、諸法度ニ不隨ハ各別ナリ、是ハ互ニ武道ノ諍ナレバ、敢テ憎キニ

非ズ、何レヲ理何レヲ非トモ難定ケレバ、諏訪ノ神前ニテ御祓鬮ノ上ニテ落居セバ、贔屓ナケレバ恨ムベキ者モナシ、神慮ニ任セ少ノ高下ヲバ、雙方トモニ堪忍シテ無事ナレバ、我ニ有忠侍也、互ニ捨二一命一ント威氣ヲ立ルモ、一ツハ當家ノ爲、一ツハ其身ノ名利ソ爲ヲ存ズル故ナラン、武邊モ高名モ時ニヨリ運ニヨル者ナレバ、首尾ノ惡キトテ非惡、働ノ吉トテ天命ノ戰ナレバ、左樣ニ場毎ニ善事計ハ成ヌ者ナリ、鬮ヲ取セヨト宣ケレバ、爭カ屋形ノ御意ヲ背クベキ、兩方トモニ承引シケレバ、菊池モ出テ鬮ヲ取ント云、各被申ケルハ、貴殿トハ論ナシ、兩人ノ鬮所ト云ケレドモ合點セズ、頻リニ取ント云ケレバ、三人ノ鬮取ニ相窮リ、一文字ノ札一ツ、是ハ高名ノ鬮也、白紙ノ札二ツ、是ハ互ニ負ケジ劣ラジノ鬮ナリ、二文字ハ白紙ノ鬮ニ續テノ手柄也トテ、四段ニ鬮ヲ丸メテ披露シテ、神主持テ出テ按合セ、四ツノ内一ツ神ノ御鬮也トテ、御祓ニ付テ取リ内障ニ納メ、三ノ鬮ヲ吉ク振合セ、神主三人ノ前ヘ指シ出シケレバ、岩田有馬菊池思々ニ一度ニ取ケレバ、菊池一文字高名ノ鬮ヲ取リ當リ、岩田有馬ハ白紙ノ鬮ヲ取リ、神慮次第ニ窮リケレバ、誰ガ恨モナク互ニ和睦シテ、其後三人トモニ度々高名シケリ、

〔奥羽永慶軍記　二十七〕山崎藤十郎小栗宮内高名公事事

此度馬倉落城ニ付、諸勢最上ニ歸陣ノ後、山形、旗本ハ、小栗宮内ト、同山崎藤十郎、高名公事ニ及ビシ事アリ、其子細ハ、山崎藤十郎ハ、弟太郎トイフ百姓ノ首ヲ取リ、小栗宮内ハ馬倉ノ城主、右兵衞尉ガ首ヲ取リ、其外高名セシ者數多アリ、義光委細目付ノ者ノ披露ヲ聞給ヒ、感狀褒美トリ〴〵ニ賜ル、中ニモ感狀ノ表勝レシハ、小栗宮内ト、山崎藤十郎也、何レモ甲乙ナクゾ見エニケル、小栗ハ大將ノ首トリシ故尤也、山崎ハ土民ノ首取リシニ、何事ニカ感狀ノ表、小栗ニ劣ラズト云事ヤアル、コレ主君ノ御誤ナルベシト、小栗贔屓ノ者ドモ評判ス、山崎方ノ者共ハ、小栗、大將ノ首ヲ取トイヘドモ、數ケ所ノ手負ツカレタルヲ討タリ、又弟太郎ハ大力ノ曲者ニテ、味方ヲ四人マデ討

取、其上ニモ味方ニ討テカヽルヲ、組討ニシタルハ、山崎ニコソハ増リタレト、言合ツヽ終ニ公事ニゾ成ニケル、義光両方ノ口上ヲ聞給ヒテ、小栗山崎ニ對決ヲサセント召出サル、是ニ依テ山形ノ一門其外最上ニ名ヲ得シ武功ノ者共、武者大將、足輕大將ノ諸役人、爰ヲ晴ト其座ニ出、左右ニ列ス、先ニ小栗宮内言樣ハ、過ル四月廿日味方ノ三千ヲ以テ馬倉ヲ攻ルニ、悉ク敗軍シテ岩崎ノ城ニ退キ、御邊ト我相組ノ陣屋ナリケレバ、其夜一所ニ在テ、イヒ合セシハ、今日味方不慮ニ敗軍ス、是口ヲシキ事也、明日ハ是非ニ一手ノ大將ニ出合勝負ヲ決シ、今日ノ耻辱ヲ雪ガントイヒ合タリ、然ルニ二番組里見作十郎密ニ進ムルニ依テ彼是廿餘人拔駈ス、然ルニ馬倉城ヲ明テ落行、殿ノ十六騎ニ追付相戰フ、我々御邊ニイヒ合セシ一言ヲ違ヘジト心ニカケ、葉武者ニ目ヲ掛ズ大將ヲ討取ナリ、御邊ハ殿ノ十六騎ノ者ヲモウタズ、土民ノ首ヲ取シコト實ニイヒ合セシトモ相違ナラズヤ、我々高名トハ似ベカラズトイフ、山崎聞テ御邊申サルヽ段一々相違ナシ、其夜馬倉ノ殿ハ十六騎大將ヲ始メ何レモ究竟ノ武者也、定テ人モエラミ殿トモセシト見エタリ、猶五六十人歩者皆馬ニモ劣ラヌ達者ヲモエラミシト見エタリ、委細騎馬歩者共ニ其夜ノ仕合ニテ何レモ存知ノ事ナリ、然ルニ御邊ト我イヒ合セシ通リ心ニカケテ大將ヲ討取給フ事左モアルベシ、去ナガラ敢テ御邊一人ノ高名トハ存ゼズ、馬倉ニ鎗ヲ合セシモノハ、高橋武太助、川田三右衞門某等也、中ニモ某ハ馬倉ガ左ノ腕ヲ鎗付タリ、武太助ハ馬ヲ突候、川田ハ手負候、カクノ如ク十六騎ニテ、味方五十騎ヲカケ破リ戰候ヘバ、手負ハヌ者モナク、其上大將ハ五ケ所手負ヒ、馬モ五ケ所疵有テ倒レシ處ヲ、御邊組デ首ヲ取ル事諸士存ジタル事也、同ク我ガ討取所ノ弟太郎ト申百姓ハ三尺餘ノ太刀ニ柄三尺餘ナルヲ以テ、味方ノ中ニ切入ル事數度ナリ、渠ニ向ヒシ者、鎗ヲ打落サレ疵ヲ蒙ムル者十二人、討レシ者岩崎ガ足輕二人、川田ガ若黨一人、次ニ里見作十郎討死ス、彼ヲ其マヽ置テハ味方若干討ルベシ、且ハ里見作十郎ガ敵ナレバト思フ故ニ、大將ニテハ

無ケレドモ、組討ニセシナリ、是御邊ガ高名ニイカデ劣候ハンヤト云、イマダ對決終ラザルニ、義光兩方ヲ押鎭メ、小栗宮内ニ對シテ、汝大將ト組ント心懸シ武功ハ神妙ナレドモ手柄ハ山崎ニ劣レリ、汝大將ノ首ト土民ノ首ト同ジ事タルベカラザルトイフ事コソ不屆ナレ、カヽル爲ヲ思フガ故ニ、カネテ目付ノ者ニ誓詞ヲカヽセ、其上隱密ノ目付ヲ以テ具サニ聞屆タリ、タトヘ大將ノ首タリトモ、味方ノ者ニ戰ヒ手負ヒ倒レタルヲ討取ハ手柄薄シ、又百姓ノ首タリトモ、諸人ニ勝レタル曲者ヲ討取ラバ手柄厚シ、武功ハ敵ノ貴賤ニモヨルベシ、但敵ノ剛臆ニモ寄ルベシ、○中略然ルニ汝、山崎ガ手柄ニ似ベカラズト云事、偏ニ義光ヲ盲目ニヒトシク侮ル處ナリ、則首ヲ刎ベキ者ナレドモ、度々ノ軍忠有シ者ナレバ、死罪ヲユルシテ、所領ヲ召放スベシトゾ宣ヒケル、○中略サレバ最上家ノ掟ニ改テ敵ノ貴賤剛臆ニ隨テ高名ノ品々ヲ書加ヘラレシナリ、

〔常山紀談三〕姉川の戰に、坂井右近が子久藏十六歲にて討死す、久藏は十二の時、信長始て京に入し比、近江北郡にて鎗を合せたる剛の者也、三井角右衛門、生瀨平右衛門二人とも、久藏が首を得たりといふ、二人後關白秀次に仕へければ、此事沙汰ありて、三井がいつはりなりとて、廉部屋におしこめおきて、罪に行れんとす、三井いのちを惜むに非ず、人の功名を盜たる、惡名の子孫の恥とならん事、口をしければ、今一度詮議してたまはり候へ、證據は淺見藤右衛門に問れなば、實否正しかるべしと訴たり、淺見を安土より呼れけり、淺見は生瀨と久しき友なり、三井とは日比中よからず、不通なれば疑もなく、三井がいつはりに定るべし、三井惑亂して淺見を證人に乞たりと誹笑ふ人多し、さて聚樂の廣間に奉行列坐して、雀部淡路守をもて尋問はる、淺見承り、生瀨は年ごろの知音なり、三井とは不通にて候、是非世の人の評せん事も迷惑なり、他人に仰付られよと懇に辭し申す、中よからぬ三井が虛妄をいふに、心よからぬは理なれども、證人にひきたる上はとく申せと、勸らるれども猶辭し申す、秀次聞て重て辭すべからずとなりければ、其時淺見、今

讓功

は已事を得ず候、武義の論少も詐僞候まじ、坂井が首は三井がとりたるにまぎれなく、又其はたらきも比類少く候、生瀨は何と存過たるにかといひければ、一坐駭てとかくいふ人なく、これによりて三井を赦て賞せらる、生瀨は秀次に寵せらるゝの故に罪に及ばず、

〔武將感狀記〕〔三〕長久手ノ戰ヒニ鳥井金次郎ハ、井伊兵部少輔直政ノ先手ノ兵トアラソヒ進デ、一番鎗ヲ合ス、平松金次郎ハ旗本ノ眞先ニテ、一番鎗ヲ合セタリ、コレニ由テ兩金次郎一二ヲ論ズ、源君〔○德川家康〕平松ガ鎗ハ我眼前ニ見ル所ナリ、誰カ共ニ功ヲ爭フベキヤト仰セラル、鳥井、臣ハ兵部ガ手ニ屬テ前鋒ニアリ、兵部ガ備ト旗本トソノ間遠シ、旗本ニテ鎗ヲ合セタル者、定テ其ハタラキ强カラン、然レドモ一番ヲイハヾ、他ニ讓ルベカラズ、臣ナリト云、汝鳥井復言コトナカレ、今日ノ鎗一番ヲ已ニ平松ニ極メタリト仰ラル、鳥井重テ、武功ハ直ヲ以テ論ゼサセ給ベキニ、君ヒトヘニ平松ヲ贔屓シ玉フハ何事ゾヤ、大軍諸隊ノ鎗、君ノ一身兩眼コト〳〵クヨク御覽ジ屆ケラルベキヤ、其見モ見ザルモ公論ヲ以テコソ、一二ヲ定ラルベケレ、徒ニ見トコヽヲ取テ、見ザルトコロヲ捨ヲバ、明君ト申ベキヤ、臣ガ今日ノ鎗ハ泥土ニ捨タリト云テ、其坐ヨリ出奔ス、後前田利家ニ招レテ、祿八千石ヲ受、又浦生氏鄕ニ仕ヘテ、一万石ヲ領ス、

〔常山紀談〕〔二十二〕大坂夏の軍に、越前の士大將本多伊豆守富政が一陣に、首百七十三取たりければ、我にまされる首數はあらじといふ處に、落合美作守我こそ增りたれといふ、伊豆何ゆゑぞといへば、落合聞て、本多には、組に付られし士の祿凡七萬五千石に及べり、かく申美作は一萬石の祿にて、首四十八取たり、祿の多少にて士卒の多少ある事はいふにや及ぶといへば、東照宮〔○德川家康〕の使番諸星金右衞門、杖によりて居ねぶりしが、目をひらき落合の詞尤ことわりなりといひしかば、本多は詞なくてやみぬ、

〔豐薩軍記〕〔六〕宗茂攻高鳥居城並齊黎彌事

遲賞陳恩

大將星野中務大輔吉實ハ、櫓ニ登リ、諸軍ヲ下知シテ居タリケルヲ、立花次郎兵衛鎗ヒッサゲ走リカヽッテ突ケレバ、鎧ノ上帶ヲ突切リテ二ノ鎗ヲ突カントスルニ、急ニ奧ニ逃入ケルヲ、十時傳右衛門續テ追ツメ突伏タリ、〇中略十時傳右衛門ハ吉實ガ首ヲ取、シカモ首帳ニハ立花次郎兵衛ト記サレヨト云、次郎兵衛聞テ、是ハ思ヒモ寄ラズ、某ハ突損ジヌ、正シク討取タル人コソ、高名ナレト云ケレバ、十時、イヤ〳〵獵場ト戰場ハ同例ナリ、初手ヲ本トスルゾトテ辭讓シケルヲ、宗茂聞テ兩人ノ志ヲ感心シ、昔日陸奧ノ軍ニ由利八郎伊達家人ヲ生捕シ相論、和田畠山ガ國衡西木戸ガ首ヲ爭ヒシヨリハ、聞ヨカリケル事ドモカナトテ、兩人共ニ褒美ニ預リ、感狀ヲゾ賜ハリケル、

〔常山紀談四〕諏訪の原の城を甲州より攻來りて合戰あり、松平康重康親の子の士山内治大夫、進士清三郎、山崎總左衛門三人殿しけるに、山内は精兵の手きゝにて、射拂て引退く時、矢だね盡たり、山縣源四郎猶追かくる時、進士清三郎、矢一筋を山内になげやりしかば、山内ふみ止りて射けるに、志村金右衛門が胸板を射通し、後の松の木に射つけたり、それより物わかれす、山縣此矢を康重に送り返して、強弓精兵無雙なりとぞほめたりける、康重其矢に進士が姓名の彫付たりしを見て賞する處に、是は山内が射申たるにて候と申す、復山内を呼出して去か〳〵なりやと問るゝに、清三郎が射たるにて候とゆづりけり、康重兩人に感狀をあたへたり、世の人兩人を今の孟之反といひあへり、

〔本朝續文粹六奏狀〕正四位下行伊豫守源朝臣賴義誠惶誠恐謹言

請殊蒙天恩依征夷功被下重任宣旨與復任國勸斷公事狀、

右賴義謹檢案內、依勳功蒙恩賞之者、本朝異域軌躅多存、或起於徒隸以昇金紫之高位、或出於卒伍、以至相將之崇班、賴義爲功臣之末葉、持奉公之忠節、爰奧州之中、東夷蜂起、領郡縣以爲胡地、驅人民以爲蠻虜、數十年之間、六箇郡之內、不從國務、如忘皇威、就中近古以來、暴惡爲宗、仍去永承六年忽以

賴義爲令征罰、被任彼國、天喜元年兼鎭守府將軍、賴義銜鳳凰之詔、向虎狼之俗、紆甲冑以赴千里之路、交矢石以忘萬死之命、運籌於氈帳之中、決勝於邊塞之外、爲其魁首者、安倍貞任、同重任、散位藤原經淸等、適依兵略皆伏誅戮、或傳首於京師、或聚馘於隴道、其餘醜虜安倍致任等五人、束手歸降、夷狄之居、已爲公地、叛逆之輩皆爲王民、依其功績、去康平六年被任伊豫守矣、明聖之恩尤足欽仰、賴義其年爲平餘類、逗留奧州、去年二月適以入華、須割虎符早赴豫州、而征戰之間、有軍功之者十餘人、可被抽賞之由、雖經言上、未有裁許、仍相待綸言、難赴任國、況去年九月被賜任符、下向遲引自然如是、然間四年之任、二稔空過、彼國官物不能徵納、然而封家納官其責如雲、仍以私物且勤進濟、方今彼國雜掌申云、頻遇旱損、稻粱不秀、境無秋實、民有菜色、須廻興復之計、且致辨濟之勤者、重檢傍例、或尋莅境之年限、以計歷、或依擧國之亡弊、以重任之者、古今之間、寔繁有徒、況致希代之大功、何無殊常之厚賞、昔班超之平西域也、早封千戶之侯、今賴義之征東夷也、盍賜重任之賞、彼送三十年以彰功、此歷十三年以立勳、遲速之間、已有優劣、採擇之處何無哀矜、望請天恩依征夷功、被下重任宣旨、且廻興復之計、且致進濟之勤矣、賴義誠惶誠恐謹言、

年　月　日

〔朝野群載二十二諸國雜事〕依勳功申受領事

前出羽守從五位下源朝臣義家誠惶誠恐謹言

請特蒙天恩依征夷之勳功、被拜任越中國守闕狀、

右義家、謹撿案內、諸州刺史辭退之後、拜任要國之輩蹤跡多存、不遑毛擧、況乎儒學勳功之人採於異常者也、爰親父賴義朝臣、當勤王之選、蒙征夷之詔、任奧州刺史、兼任鎭守府將軍、且思家門之名、且恐朝廷之議、殊振武威、遠赴邊塞、戎狄之爲體也、其力拔山、其居因險、騎騏驥之駿足、習虎狼之驍勇、及臨戰場彌成激怒、百萬之衆、戈鋋之勢、中國之人不可敢當、而旁施兵略、不損皇威、討擊醜虜、平定蠻貊、斬

魁帥之首、驚衆庶之眼、開闢以來、未曾有如此比、義家存扶親之誠、勵奉公之節、不顧其身、無避矢石、共撃夷戎、新蒙褒奬、以頼義朝臣任伊豫守、以義家任出羽守、然而南海東山其程渺焉、雖喜仁恩之適及、猶恨勳功之遠隔、是以爲專孝思、辭出羽守、然間越中國守已有其闕、若優軍功、何不拜任哉、昔班超之討西域、早遇漢家封侯之賞、今義家之征東夷、欲浴越州傳城之恩、所申之旨誰謂非據、望請天恩、依征夷之功、被拜任越中守闕、將令後昆勵立身報國之志、義家誠惶誠恐謹言、

康平七年　月　日

〔吾妻鏡九〕文治五年十月五日辛卯、有手越平太家綱之者、征伐之間候御共、募其功可被行賞之由言上、且賜駿河國麻利子一邑、招居浪人、建立驛家云云、仍任申請之旨被仰下、爲散位親能奉行、早可充行之趣、下知内屋沙汰人等云云

〔源平盛衰記十五〕南都騷動始事

上總介忠清、相國禪門〈○平清盛〉ニ申ケルハ、今度合戰ノ高名足利太郎忠綱ガ、宇治河ノ先陣ノ故ナリ、向後ノ爲ニ速ニ勸賞候ベシト、細々申ケレバ、入道大ニ感ジテ、忠綱ヲ召、宇治川ノ先陣返々神妙、勸賞乞ニ依ベシト宣フ、忠綱畏テ、靫負尉、檢非違使、受領ヲモ申ベク候ヘ共、父足利太郎俊綱ガ、上野十六郡ノ大介ト、新田ノ庄ヲ屋敷所ニ申候シガ、其事空シク候ベキ、御恩ニハ同ハ父ガ本意ヲモ遂、身ノ面目ニモソナヘン爲ニ、彼兩條ヲユルシ給リ候ハント申、入道當座ニ下知セラレタリ、忠綱大ニ悦眉ヲ開テ宿所ニ歸ル、足利ガ一門此事ヲ聞テ、十六人連署シテ訴訟ス、宇治川ヲ渡ス事、忠綱一人ガ高名ニ非ズ、一門與セズバ忠綱爭カ渡スベキ、サレバ勸賞ハ十六人ニ配分候ベシ、忠綱ガ大介ヲ召返サレズバ、向後ノ御大事ニハ、忠綱一人ヲ召レ候ベシト、一時ニ三度マデ申タリケレバ、入道力及給ハズ、巳ノ時ニ給タリケル御教書ヲ、未ノ剋ニ召返サレケリ、

〔續日本紀十三聖武〕天平十二年九月癸丑、勅筑紫府管内諸國官人百姓等曰、〈○中略〉如有人雖本與廣嗣同

心起謀、今能改心悔過斬殺廣嗣、而息百姓者、白丁賜五位已上、官人隨等加給、若身被殺者、賜其子孫、忠臣義士宜速施行、大軍續須發入、宜知此狀、

〔續日本紀二十五淳仁〕天平寶字八年九月丙午、高野天皇〇孝謙勅、今聞逆臣惠美仲麻呂盜取官印已逃去者、忝爲人臣、飽承厚寵、寵極禍滿、自陷淫刑、仍復劫略愚民、欲爲僥倖、若有勇士自能謀計、急爲剪除者即當重賞、

〔本朝文粹二〕太政官符東海東山道諸國司

應拔有殊功輩加不次賞事

右平將門、積惡彌長、宿暴暗成、猥招烏合之群、只宗狼戾之事、寃國宰而奪印鎰、領縣邑而事抄掠、輕狡之黨、愚惷之徒、或欲免一朝之辱、自赴勸誘之屬、或擬延片時之命、多入劫略之中、將門不顧徼分遁忘朝憲、遂恣叛逆之意、更夾窺窬之謀、縱有帶甲之千萬、何犯晝象之化、縱有驍勇之數百、何越紆帶之城、獨知井底之廣、空忘海外之守、開闢以來、本朝之間、叛逆之甚、未有此比、適懷暴心之志、空遇殄滅之殃、皇天自可施天誅、神明何有秘神兵、抑一天之下寧非王土、九州之內誰非公民、官軍黠虜之間、豈無憂國之士乎、田夫野叟之中、豈無忘身之民乎者、左大臣宣、奉勅、宜仰國宰、若殺魁帥者、募以朱紫之品、賜以田地之賞、永及子孫、傳之不朽、又斬次將者、隨其勳功賜官爵者、諸國承知依宣行之、普告遐邇、令知此由、符到奉行、

天慶三年正月十一日　員外從五位下左大史尾張宿禰言鑑

右中辨正五位下兼行內藏頭源朝臣相職〇又見扶桑略記

〔吾妻鏡四〕元暦二年〇文治元年正月六日庚寅、御下文一通被遣于九國御家人中、其狀云、

下　鎮西九國住人等

可早爲鎌倉殿〇源賴朝御家人、且安堵本所、且隨參河守〇源範賴下知、同心合力追討朝敵平家事、

右仰彼國々之輩、可追討朝敵之由院宣先畢、仍鎌倉殿御代官兩人上洛之處、參河守向九國、以九郎判官〈源義經〉所被遣四國也、爰平家縱雖在四國、雖著九國、各且守院宣旨、隨參河守下知、令同心合力、可追討件賊徒也者、九國官兵宜承知不日全勳功之賞矣、以下、

元暦二年正月　日

前右兵衞佐源朝臣〈賴朝〉

〔吾妻鏡四〕元暦二年〈文治元年〉三月廿九日壬子、平氏追討事、武衞〈源賴朝〉依被申為令勵軍旅之功、被下廳御下文於豐後國住人等之中、是雖為先日事、彼案文今日所到來關東也、

院廳下　豐後國住人〈某〉等

可彌專征伐遂勳功期勸賞事

右平家謀叛黨類往反四國邊島、蔑爾朝憲之間、鎮西邊民多入烏合之群、令致狼唳之企、而當國軍兵等堅守王法、不與兇醜、遂艤數船迎取官軍、可令服從九國輩之由有其聞、殊以叡感、彌增銳兵、可令討滅彼凶徒也、各隨其勳功依請可有賞賜也、當國大名等宜承知勿令違越者、所仰如件、故下、

元暦二年二月二日

〔吾妻鏡二十五〕承久三年五月十九日壬寅、十五日京都飛脚下著、〈中略〉關東分宣旨御使今日同到著云云、仍相尋之處、自葛西谷山里殿邊召出之、稱押松丸、〈季康所從云云〉取所持宣旨、幷大監物光行副狀、同東士交名註進狀等、於二品〈源賴朝妻北條政子〉亭〈號御堂御所〉披閲、同廷尉胤義〈義村弟〉私書狀到著駿河前司義村之許、是應勅定可誅右京兆、〈北條義時〉於勳功賞者、可依請之由、被仰下之趣載之、

〔南山巡狩錄追加一〕尊氏直義以下凶徒追討了、各急馳參當所、可抽軍忠、於恩賞者可依功者、大塔若宮令旨如此、悉之以狀、

延元元年十一月三日　右馬頭〈判〉

褒贈死者

粉河寺行人等中寺院文書纂

〔兵要錄八練兵三下〕陳亡例

一凡戰死者、隨其功勞之等第、賞祿遺子、以報父之忠、給與賻贈、著悼陳亡之心矣、

一功高者、雖死與其子於書、以感父之勞也、

一陳亡者雖無可賞之功、俾其子繼父之本祿、給與賻贈、若奔敗而被殺死者、不必用此例、

一陳亡者、有功無子孫、則使弟姪繼其祿、無繼者、勞養其父母寡婦、照等第之條而爲差等、

一國建一蘭若名曰報忠寺、死于事者、葬于此寺、因功等設位、分爲上下行、將臨而自親祭之、每歲以節令人祭焉著追慕之情矣、

〔兵法一家言八〕手ヲ負タル軍士ハ、下々ノ者ト雖ドモ、主將自ラ此ヲ撫勞シ、辭ヲ掛テ愛憐シ、介抱人ヲ附テ治療ヲ加ヘ、時々自身ニ行テ容體ヲ尋問ヒ、醫師ニ能ク命ジ、懇到ニ取扱遣スベシ、古ノ良將、士卒ノ創ヲ受テ膿タルヲ、自身ニ其膿ヲ吮テ遣シタル例アリ、古來軍士ヲ愛育撫納スルコトハ、將タル者第一ノ要務ナリ、又戰死シタル者アレバ、主將自ラ行テ其屍ヲ抱キ、涙ヲ流シテ撫摩リ其屍ニ謂テ曰、國家ノ爲ニ能ク命ヲ致セリ、最上ノ忠臣ナリ、嗚呼惜哉ト愁傷テ、子弟ニ厚恩ヲ賜ルベン、若子弟ノ無キ者、、父母妻等ニ厚恩ヲ賜ハリ、父母妻女等ノ望ニ任セ、遺跡ノ家督ヲ定遣ハスベン凡打死セシ者ノ葬禮及去事ノ諸入用ハ、悉國君ヨリ賜リテ此ヲ立派ニスベシ、或ハ、國君モ葬送ニ自ラ臨ミテ哀ヲ爲シ、法事ニモ自身ニ臨ミテ香花ヲ手向、何事ニ就テモ其子孫ヲ愛シ、長ク恩命ヲ篤クスベシ、是士氣ヲ振ハシムルノ古法ナリ、

〔兵法新論八法度賞罰〕討死及手負ノ賞則

一討死スルモノハ、其功等ヲ以テ其子孫ニ賞祿ス、若子孫ナケレバ弟姪ヲ以テ家ヲ繼ガシメ、功等一等ヲ降シテ賞ス、父母妻兄弟姉妹アレバ、惠恤シテ其忠ヲ榮トセシム、

一討死シタルモノハ、其身分ト其功ニヨリテ、其遺骸ヲ或ハ其所ノ寺院ニ葬シ、或ハ國元ノ墓地ニ葬シテ、厚ク香奠葬送ヲ賻贈シテ祭ラシメ、戰終ノ後、君將自臨テ懇ニ祭リ、國家ニ忠スルノ義ヲ謝ス、

一出陣シテ死スル時ハ、タトヘ戰功ナシトイヘドモ、其子ニ遺跡本ノ如ク繼ガシム、葬埋ハ戰死ノ者ト同ジ、タヾ君將臨祭ト賻贈ト與レリ、若臆病ヲ働キ、或ハ謀ヲ失シテ大衆ヲ討死セシムルノ類ハ、災子孫ニ連坐シ、本葬埋ノ禮ヲナサシメズ、不忠ノ罪ヲ以テ處置ス、

一敵地遠クシテ歸葬スルコト能ハズ、其地ニ寺院アル時ハ、其寺院ニ葬セシメ、之ナキ時ハ其野ニ葬シ柵ヲ廻シ、一屋ヲ作テ墓守リヲ付、年々米錢ヲ供給シテ淨清ニ地ヲ掃シ、其死スルノ日祭リヲナサシム、君將ヨリ戰終ノ日ヲ祭日トナシ、役人ヲヤリ香奠ヲ給フテ祭ラシム、サテ如此其地ニ於テ葬埋スルモノハ、官ノ高卑ニヨリテ上下行ヲナス、其同位ノ者ハ功ノ上下ヲ以テ列ヲ定ム、タヾ官卑トイヘドモ逸等アリ、國家ニ於テ大功アル程ノ者アレバ、第一行ノ上頭ニ葬セシム、

一第一等ノ功ヲナシテ戰死スル者ヲ上ノ上功トス、

一第二等ノ功ヲナシテ戰死スル者ヲ上ノ中功トス、

一第三等ノ功ヲナシテ戰死スル者ヲ上ノ下功トス、其他ノ戰死ハ中ノ中功ヲ以テ論ズ、

〔古事談 五神社佛寺〕六條坊門北西洞院西有堂、號ミノハ堂、件堂ハ伊與入道賴義奥州浮囚討夷之後所建立也、佛ハ等身阿彌陀也、賴義造立此佛、恭敬禮拜シテ往生極樂必引導給ヘト申ケレバ、ウナヅカセ給ケリ、

〔吾妻鏡 四〕元暦二年二月十九日癸酉、今日辰剋到于屋島内裏之向浦、燒拂牟禮高松民屋、○中略合戰之間、廷尉○源義經家人繼信被射取畢、廷尉大悲歎、啒一口衲衣、葬千株松本、以秘藏名馬號大夫黒、元院御厩御馬也、行

幸供ノ時、自仙洞給之、每向戰場帶之、賜件僧、是撫戰士之計也、莫不美談云云、

〔源平盛衰記四十二〕源平侍共軍附繼信盛政孝養事

忠信ハ、此間ニ兄ノ繼信ヲ肩ニ引懸、泣々陣ノ中ヘ負テ入タリ、判官近ク居寄給ヒ、イカニ繼信ヨ繼信ヨ、義經爰ニ有、一所ニテトコソ契シニ先立ル事ノ悲サヨ、如何ニモ後生ヲバ可弔、冥途ノ旅心安思フベシ、サテモ何事ヲカ思フ、云置カシト宣ヘ共、只淚ヲ流ス計ニテ是非ノ返事ハナシ、判官重テ汝心ガアレバコソ淚ヲバ流スラメ、猛兵ノ矢一ニ中テ生ナカラ不言事ヤハアル、左程ノ後レタル者トハ不存者ヲ、今一度最後ノ言聞セヨト宣ヘバ、繼信息吹出シ、ヨニ苦ゲニテ息ノ下ニ、弓矢取身ノ習也、敵ノ矢ニ中テ主君ノ命ニ替ハ、兼テ存ル處ナレバ、更ニ恨ニ非ズ、只思事トテハ老タル母ヲモ捨置、親キ者共ニモ別レテ、遙ニ奧州ヨリ付奉シ志ハ、平家ヲ討亡シテ、日本國ヲ奉行シ給ハンヲ見奉ラントコソ存シニ、先立奉計コソ心ニ懸侍リシ、老母ガ歎モ勞シト申ケレバ、サシモ猛武士ナレ共、判官淚ヲハラ々々トゾ流シ給ケル、實ニ思フモ理也、敵ヲ亡サン事ハ不可經年月、義經世ニアラバ、汝兄弟ヲコソ左右ニ立ント思ヒツルニトテ、手ニ手ヲ取合テ泣給ヘバ、繼信穴嬉シト其ヲ最後ノ詞ニテ、息絕ケルコソ無慙ナレ、此ヲ聞ケル兵共モ鎧ノ袖ヲ絞ケリ、○中略今ハ軍モ無爲トテ、繼信光政ガ死骸ヲ舁テ、當國ノ武例高松ト云柴山ニ歸給ヒテ、其邊ヲ相尋テ僧ヲ請ジ、薄墨ト云馬ニ金覆輪ノ鞍置テ申ケルハ、心靜ナラバ懸ニコソ申ベケレ共、斯ル折節ナレバ無力、此馬鞍ヲ以テ、御房庵室ニテ、卒都婆經書、佐藤三郎兵衛尉繼信、鎌田藤次光政ト廻向シテ後世ヲ弔給ヘトテ、舍人ニ引セテ、僧ノ庵室ニ被送ケリ、此馬ト云ハ貞任ガヲキ黑ノ末トテ、黑キ馬ノ少チイサカリケルガ、早走ノ逸物也、多ノ馬ノ中ニ秀衡殊ニ秘藏也ケレ共、軍ニハ能馬コソ武士ノ寶ナレバ、山ヲモ河ヲモコレニ乘テ敵ヲ攻給ヘトテ、判官奧州ヲ立ケル時進タル馬也、宇治川ヲモ渡シ、一谷ヲモ落セシ事此馬也、一度モ不覺ナカリケレバ、吉例ト申ケルヲ、判官

五位尉ニ成タルニ、此馬ニ乘タリケレバ、私ニハ大夫トモ呼ケリ、片時モ身ヲ放ジト思給ケレドモ、貴テモ繼信光政ガ慈サニ、中有ノ路ニモ乘カシトテ被レ引タリ、兵共是ヲ見テ、此君ノ爲ニ命ヲ失ハン事不レ惜トゾ勇ケル、

〔高野山朝鮮陣戰死者供養碑〕爲二高麗國在陣之間、敵味方鬪死軍兵皆令一レ入二佛道一也、

慶長二年八月十五日、於二全羅道南原表一、大明國軍兵數千騎被二討捕一之內、於二當手前一四百廿人伐果畢、

同十月朔日、於二慶尙道泗川表一、大明人八万餘兵擊亡畢、　右度々於二戰場一味方士卒、當二弓箭刀杖一被レ討者三千餘人、海陸之間橫死病死之輩具難レ記矣、

薩州島津兵庫頭義弘同子息少將忠恒建レ之、

〔明治史要 二〕明治元年慶應四年、九月八日改元、五月十日、新ニ祠宇ヲ京都靈山ニ建テ、癸丑○嘉永六年以降死事ノ士、及ビ春來戰死ノ者ヲ祀ル、　二十五日、贈正三位楠正成ヲ河東操練場聖護院村ニ祭ル、　七月十日、戰死者ヲ河東操練場ニ祭ル、翌日ニ迄ル　二十三日、護良親王ヲ河東操練場ニ祭ル、

〔嘉永明治年間錄 十七下〕慶應四年七月、奧羽ニ於テ討死官軍ノ靈ヲ祭ル、

當春以來征討奮戰忠死の靈、來る十日十一日兩日於二河東繰練場一祭典式被二仰出一候事、

右に付十日巳の刻より申の刻迄、十一日辰の刻より未の刻迄の內、諸官參詣可レ爲二勝手一事、

右刻限の內、諸人參拜被二差許一候、並に有志の輩詩歌を供し、且兵隊繰練式等慰二靈魂一候儀、可レ爲二勝手一事、

但靈前詣の者へ、夫々相斷り、不レ及二混雜一樣可レ致事、且朝廷御祭奠金下賜候へバ、地方より料物奉納の儀、被レ止候事、

〔甲陽軍鑑 十九品第五十三〕武士道批判の事

人をほむるに能き證據を引、誹に惡き證據を引候儀本道なり、又邪道は上杉則政御家中のごと

く、分限なる者をばあしきをもほめ、不辨成るをばよきをもそしる家中には、臆病成る人十人に八人あり、二人よしとても大勢惡きにかさまれ、未練の樣になる時は十人ながらよは者になりて、則政公子息をすてゝ越後へにげこまる、さて證據をひきて善惡のさたある家は、先づ運盡て其大將死給ひても、跡まで其家中衆、弓箭に利發なるは、證據をもつてほめそしる故、よき武士多くあつめ給ひ、未練なる人、十人の内に二三人ありても、みなよきやうにあひみゆる者なり、仍如件、

〔當流軍法功者書下〕戰場ニテ褒美之事

物前ニテノ褒美ハ、サホドナキ手柄ナラバ金銀ヲツカハスベシ、スグレタル武邊ナラバ扇、鼻紙、菓子ノ類ヲ可被下、追付感狀ツカハサレン爲ナリ、尤武者ハ拜領物ヲ失ベカラズ、又比類ナキ働ナラバ御盃ヲ可被下、其時ノ御肴ウシナフベカラズ、

〔奥州後三年記上〕將軍〇源義家つはものどもの心をはげまさんとて、日ごとに剛臆の座をなん定めける、日にとりて剛に見ゆる者どもを一座にすへ、臆病にみゆるものを一座にすへけり、をのをのの臆病の座につかじとはげみたゝかふといへども、日ごとに剛の座につく者はかたかりけり、腰瀧口秀方なん一度も臆の座につかざりけり、かたへもこれをほめかんせずといふ事なし、

〔甲陽軍鑑九下品第二十六〕一板垣信形、笛吹峠のこなたかる井澤に、十一月〇天文十五年まで罷有、同野陣に、假屋形をひろく作り、十月六日の始の合戰に、手にあはざる衆、手柄の武士共にも、上中をさたして、饗應を仕るに、上の手柄には、膳三膳、或は二膳、赤椀にて振舞、又手にあはざる人々には、黑椀にて精進飯をくれらるゝ、是を他國にて、信玄公なされたるとさたあり、板垣信形短氣なる人にて如此、

〔吾妻鏡三〕壽永三年〇元暦元年二月五日甲午、去月於攝津國一谷、被征罰平家之日、武藏國住人藤田三

郎行康先登令討死訖、仍募其勳功賞、於彼遺跡、子息能國可令領之旨、今日被仰下、御下文云、件行康平家合戰時、最前進出被討取其身訖、仍彼跡所知所領等無相違男小三郎能國可令相傳知行之由云云、

〔台德院殿御實紀三十八〕元和元年閏六月十七日、この日大坂にて合戰の時、潰散せし御家人御前にめして、剛臆の糺明し給ふ、榊原左衛門佐職直、山田三十郎重次よく踏こたへて、衆人剛臆の證となる、書院番頭水野隼人正忠淸、青山伯耆守忠俊は、互に戰功をきそひ爭論に及びしかば閉戶せしめられ、菅沼主殿頭定行も、戰功に誇りしにより、御勘氣を蒙る、

〔常山紀談十八〕或人本多忠勝に、思慮ある人功名をとげ候か、思慮なき人功名をとげ候かと問ふ、思慮なき人も、思慮ある人も功名するなり、思慮ある人の功名は士卒を下知し、大なる功名をとぐる物なり、思慮なき人は、鎗一本の功名にて、大なる事はなしと答へられけり、

古事類苑

兵事部二十二

軍糧 輜重併入

古事類苑

兵事部二十二

軍糧 輜重併入

軍糧ハ又兵糧ト云フ、卽チ兵食ナリ、而シテ上古ハ糒ヲ用キシガ、後ニハ日常ノ飯ヲ用キタリ、大寶ノ制、兵士ヲシテ人別ニ、自ラ糒六斗、鹽二升ヲ備ヘテ、軍團ニ貯ヘシム、延喜ノ時、長門國ヲシテ、毎年稻四萬束ヲ出擧シテ、其地ノ兵糧ニ充テシメンコトアリ、而シテ其間ニ在リテモ民ノ私穀ヲ募リテ、陸奧ノ軍鎭等ニ獻ゼシメ、其運輸ノ多寡、道程ノ遠近ニ隨ヒテ、位階ヲ授ケシ等ノ事アリ、後鳥羽天皇ノ朝ニ至リ、源頼朝ノ奏言ニ依リ、諸國ノ田ヲ擧ゲ、段別ニ米五升ヲ課シ、名ヅケテ兵粮米ト云ヒ、以テ田租ノ外ノ常賦ト爲セシ、後世ニハ、又軍中ニ兵粮奉行ノ職ヲ置キ、軍糧ノ事ヲ司掌セシメタリ

輜重ハ後世小荷駄ト云フ、兵糧兵器等ヲ運輸ス

〔類聚名義抄七米〕糧音良 カテ　粮通 カテ　ハン

〔運歩色葉集比〕兵粮

〔干祿字書平聲〕粮糧上通下正

〔周禮註疏十六地官〕廩人〇中略凡邦有會同師役之事、則治其糧與其食、註、行道曰糧、謂糒也、止居曰食、謂米也、

〔細川幽齋覺書〕一御陣の時は下々の事は不及申、自身も一日一夜の兵粮米は腰に付け、馬のはみをも鹽手に付可申事、

一陣頭にて兵糧米無之時は、何にても時々の草木の實を喰ふ物にて候、我等も靑麥などあぶりもみ候て、喰て合戰いたし手に合候事也、桑の實殊之外うまき物にて候事、○中略

一陣に立候はゞ、具足の綿がみに梅干を付可ㇾ參候、のどかはき候ても、水無ㇾ之時はせんかたなく候、左樣の時は梅干の事思ひ出し候へば、口につたまる物にて候事、

一巾着に入置可ㇾ申物、干飯にても米にても、何ぞくはれ候物を常に絶ざる樣に入候て、ふだん居候所に懸置可ㇾ申候、○下略

〔海國兵談〕九小荷駄附糧米　總て陣中にて飯を炊には、釜は不便利なり、銅鍋を善トス、鍋ハ弦ある故に何等の物江も懸られ、又物に觸ても鐵の如ク破レ損せざる故、銅鍋を用ル也、糧米ハ一人に一日一升なるべし、味噌五勺、鹽一撮ト積ルべし、味噌を用ルは上の軍役也、多クハ飯ト鹽ト而已也、　糧米ヲ總軍江渡ス法ハ、先づ兵糧奉行の所に虎落を結て、口二箇所付、一ハ入口、一ハ出口に定ムべし、尤入口出口ト大札ヲ立べし、扨上に云如ク陪卒無の人數ならば、五伍二十五人一同に受取べし、陪卒ある人數組ならば、一伍五人陪卒の數を計て、一同に受取べし、長陣ならば三五日分も、一同に渡ス事もあるべし、扨受取時ハ番頭誰組某幾人分ト札を書て持來リ、米穀ト引替にすべし、○中略　薪水ハ自分にて支度するなり、其法陣取の卷に記スが如シ、　鍋ハ鍋ばかり別荷物に簡り車馬に付て、鍋を染たる小旗を指べし、著陣以後陣中の小路小路ヲ持廻りて渡ス也、是も陪卒なき人數組ならば、五伍二十五人江二ツ渡シ、陪卒ある人數組ならば、一伍五人江二ツ渡ス也、押行時ト接戰の時ハ、人々腰兵糧なるべし、內場にしても五合飯ヲ帶べし、　陣所ニ打著て飯を炊ント欲スル時、急に軍始りて、軍士皆打て出ル時ハ、一組にて五人づゝ居殘り、急に飯を炊て、戰場江送ルべし、尤大將よりも心を附て、兵糧の世話を致スべし、○中略

糧穀、蓄たる時糧に用ル品々

鹽を加て能煮熟すれば草木の葉、十種ニ九種ハ食ハるゝものなり、 諸木ノ内皮及ビ根、是亦鹽を加て煮熟すれば食ハるゝ者多シ、〇中略 百草の根及莖葉共に、上の如にして可食、炒て食へば糠藁の類皆飢を救、尤麥稗などの莖も細末シ湯に攪立て呑べし、能煮熟する時は草道具食ハるると云り、 清正の家士ハ蔚山籠城の時、糧盡て爲方なく壁土を水に攪立て呑たる事有り、其艱難押計ルべし、是半息猶存スル時ハ、敵に降ル間敷義氣の一念なり、 至極の飢に及時ハ、人肉を食フコトあるべし、是不仁の甚キ言語に絶たる所なれども、時勢に因て遁レ去べき手段もなく、又是非に降參する事も成難ク、又自害討死も犬死に準ずる趣意ある時ハ、人肉を食てなりとも一日も生延ル計をするコト、軍を致ス上にハ覺悟あるべき事ト思設べし、 右の外、海に昆布、鹿角菜、荒布、和布、海藻等あり、山に石麪、觀音粉等あり、是皆食て飢を救フもの也、捜り求べし、 飢人に食を與ルにハ先ヅ赤土を水に攪立て半椀程飲せて後、食を與フべし、又朴の皮を煎じて一椀飲せて後、食を與フべし、此二法を不用して、直に食を與レば、忽チ死スルものなりと云り、

〔籠城守禦之卷〕兵粮渡樣之事 二人ニ付一日ニ九合宛ノ積ヲ以テ、三日分渡スベシ、朝晝晩ニ六合也、殘ル三合ハ夜中ノ用分也、味噌ハ一人ニ付一日ニ二勺、廿五人五合也、鹽ハ一日ニ一勺廿五人、組ニ二合半也、此積ヲ以テ三日分渡スベシ、尤兵粮ツカフ事ハ、持口ノ明カザル樣ニ、更代食スベキ也、

〔令義解五軍防〕凡兵士人別備糒六斗、（謂兵士私自備、卽隊正以上亦自備之、若身死及得替者、還故納新、其鹽亦准此也、）鹽二升、幷當火供行戎具等、並貯當色庫、（謂供行戎具者、下條紺布幕釜等是也、當色庫者軍團庫也、）若貯經年之久、壞惡不堪、卽廻納好者、（謂亦令兵士廻成也、）起十一月一日、十二月卅日以前納畢、每番於上番人內取二人守掌、不得雜使、行軍之日、計火出給、

〔尙書註疏二十費誓〕峙乃糗糧、無敢不逮、汝則有大刑、（中略正義曰、中略鄭玄云、糗、擣熬穀也、謂熬米麥使熟、又擣之以爲粉也、糒、乾飯也、糗糒是行軍之糧、皆當臨時汝糗糒之糧使在軍足食、無敢不相逮、）

〔軍防令講義〕この六斗は大概今の五斗七升八合許と玄るべし、〈今の升法五寸、深二寸五分、積六十二寸半なり、〉但六斗は幾日分と云こと詳かならねども、天平九年但馬國税帳に鹽を充らるゝ、定使には日別二勺、將從には一勺五撮とみえ、同十七年四月皇后宮職解に、直丁廝丁等の公粮米は一日一升、鹽は一勺づゝなり、是を以て考ふれば、鹽二升を一勺づゝに分てば二百日を支つべし、然らば糒六斗も亦二百日分にて一日三合に充るか、或云、鹽二勺づゝ、二升は百日分、糒六斗一日六合づつにて百日分ならんと、又大同五年の頃鎮兵三千八百人に、五十餘萬束を充らるゝ、由類聚國史に見ゆ、五十餘萬束には米二萬五千石にあたる、三千八百人に除ば、一人六石五斗七升八合九勺四有奇なり、三百六十日歸(ワレ)ば、一升八合二勺七撮奇となる、又三代實錄元慶五年三月の條に、鎮兵には日糧一升六合、兵士糧八合とあり、今量にて七合六勺八撮許に當る、蓋鎮兵は他郷より來り鎮するものなれば倍給し、兵士はその土(トコロ)の兵士なるが故に八合を給ふと知べし又糒六合は飯一升二合にあたる、

〔續日本紀光仁三十六〕寶龜十一年五月丁丑、勅曰、機要之備、不可闕乏、宜仰坂東諸國、及能登、越中、越後、令備糒三万斛、炊曝有數、勿致損失、　七月甲申、征東使請襖四千領、仰東海東山諸國、便造送之、勅曰、今爲討逆虜、調發坂東軍士、限來九月五日、並赴集陸奥國多賀城、其所須軍粮、宜申官送、兵集有期、粮餽難繼、仍量路便近、割下總國糒六千斛、常陸國糒一万斛、限來八月二十日以前、運輸軍所、

〔享祿本類聚三代格十八〕勅、〈○中略〉兵士白丁赴軍及待進止、應給公粮者、計自起家五日乃給、其閑處者給米、要處者給糒、〈其六〉

寶龜十一年七月廿六日〈○又見續日本紀〉

〔續日本紀桓武四十〕延暦八年六月庚辰、征東將軍〈○紀古佐美〉奏偁、膽澤之地、賊奴奥區、方今大軍征討、剪除村邑、餘黨伏竄、殺和人物、又子波和我、僻在深奥、臣等遠欲薄伐、粮運有艱、其從玉造塞至衣川營四日、輜

重受納二箇日、然則往還十日、從衣川至子波地、行程假令六日、輜重往還十四日、總從玉造塞至子波地往還二十四日程也、途中逢賊相戰、及妨雨不進之日、不入程內、河陸兩道輜重一万二千四百四十人、一度所運糒六千二百十五斛、征軍二万七千四百七十人、一日所食五百四十九斛、以此支度、一度所運僅支十一日、臣等商量、指子波地、支度交闕、割征兵加輜重、則征軍數少、不足征討、加以軍入以來經涉春夏、征軍輜重並是疲弊、進之有危、持之無利、久屯賊地、運粮百里之外、非良策也、雖蠢爾小寇、且逋天誅、而水陸之田不得耕種、既失農時、不滅何待、臣等所議、莫若解軍遺粮、支擬非常、軍士所食日二千斛、若上奏聽裁、恐更多糜費、故今月十日以前解出之狀、牒知諸軍、臣等愚議、且奏且行、

〔大日本史百二十二紀古佐美〕按上文云、一日之食五百四十九斛、而此云軍士所食日二千斛、蓋擧本軍成數乎、今不可考、

〔享祿本類聚三代格六〕太政官符

一應給健兒百人粮事

年中料稻一万一千三百廿八束人別日三把二分

右得征夷將軍參議從三位左衞門督兼陸奧出羽按察使勳四等文室朝臣綿麻呂解偁、出羽國司解偁、依民部省延暦廿年六月廿九日符宣、○宣恐旨字誤准射田數割置乘田、以其地子可給粮料、而依無射田不得宛行、望請用申官乘稻三万七千五百束之內、每年出擧、以其息利准陸奧國健兒永給件粮者、使加覆勘、所申有實者、依請、以前被右大臣○藤原園人宣偁、奉勅如件、

弘仁五年正月十五日

○按ズルニ、年中トハ一年ヲ三百五十四日ト爲シタルナリ、三把二分ハ穀ヲ得ルコト三升二合ニシテ米一升六合ナリ、卽チ健兒一日ノ糧料ナリ、

〔三代實錄三十三陽成〕元慶二年四月廿八日癸巳、勅符上野下野兩國曰、得出羽國奏、已知凶類氣盛、殺略

良民、亂逆發狂、狼戻無已、〇中略宜國各發二千兵、星夜赴救、表裏合勢、腹背攻擊、〇中略亦其所發之士、各備路粮、便遣國司目已上一人、史生若品官一人、押領其事、以此一擧之兵、早成萬全之計、

〔羽倉考一〕兵士粮食事〇中略　案ズルニ、征討行軍ノ間ノ粮食ハ、明ニ官ヨリ給フ事、續日本紀寶龜十一年四〇四字當作五月丁丑、及同年七月癸未、〇癸未二字甲申誤此ニ擧タル同月戊子ノ文以下國史ニ見エタル所枚擧ス可ラズ、然レドモ軍防令ノ如クナレバ、一人ニ糒六斗ヅヽハ自備ヘ、或ハ寶龜十一年七月ノ勅ノ如クナレバ、家ヲ起テ五日ガ間ハ私ニ備ヘ、元慶二年四月ノ勅符ノ如クナレバ、路ノ間ノ粮ハ私ニ備フル類、臨時ノ定アルト見エタリ、

〔延喜式二十六主税〕諸國出擧正稅公廨雜稻〇中略　長門國〇中略　兵粮料四万束、

〔大內家壁書〕安藝國西條鏡城法式條々〇中略

一置兵粮、無爲之時不可配當城衆事、〇中略　以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由、所被仰出也、仍壁書如件、

文明十年六月廿日

軍用寄合

〔鈐林日知錄五〕軍用寄合　武野燭談後編卷四云、酒井修理大夫忠直は、常に家中の軍用寄合といふ日を極めて、侍大將以下六奉行、其外家士用人まで、毎月立合て、締を改め、兵糧軍器の不足を償ひ、不時の備に、早速出立の支度を極め、諸士若輩の者ども、馬もたぬ者には、厩の別當に下知して、稽古申付、當番といへども射術劍術常に怠らざる樣に、卷藁的場を勝手座敷の庭間に構へ置、たがひに稽古すべしと定めける、惣て日を月に六度と定め、乘料の馬をはじめ、兵具に馴させ、大鼓にて仕込、夏は水練の稽古をはげまし、我身も淺草の大川を二三遍づゝ矩尺に游て、若き者どもにはげます、在國にては、猪狩川狩に事よせて、家中の者どもの働を試みける、

〔日本書紀三神武〕乙卯年三月己未、徙入吉備國、起行宮以居之、是曰高島宮、積三年間備舟檝、蓄兵食、將

欲以一擧而平天下也、

〔日本書紀二十七天智〕八年十二月、是多修高安城、收畿內之田税、　九年二月、修高安城、積穀與鹽、

〔續日本紀四十桓武〕延暦十年十一月己未、更仰坂東諸國、辨備軍粮糒十二万餘斛、

〔日本紀略桓武〕延暦二十一年正月庚午、越後國米一萬六百斛、佐渡國鹽一百廿斛、毎年運送出羽國雄勝城、爲鎭兵粮、　廿二年二月癸巳、令越後國、米三十斛、鹽三十斛、送造志波城所、

〔類聚國史八十四政理〕大同五年五月辛亥、東山道觀察使正四位下兼陸奧出羽按察使藤原朝臣緒嗣言云々、國以民爲本、民以食爲命、而鎭兵三千八百人、一年粮料五十餘萬束、因此百姓疲弊、倉廩空虛、如無蓄積、何防非常、加以往年毎有征伐、必仰軍粮於坂東國、伏請以坂東官稻、充陸奧公廨、以陸奧公廨、留收官庫、然則公私得所、實愜便宜、並許之、　壬子、東山道觀察使正四位下兼陸奧出羽按察使藤原朝臣緒嗣言云々、又陸奧國、元來國司鎭官等、各以公廨作差、令舂米四千餘斛、雇人運送、以充年粮、雖因循年久、於法無據、但邊要之事、頗異中國、何者苅田以北近郡稻〇稻字原闕、今依享祿本類聚三代格補、支軍粮、信夫以南遠郡稻給公廨、其去國府二三百里、於城柵七八百里、事力之力、不可舂運、若勘當停止、必致飢餓、請給舂運功、爲例行之、並許之、

〔類聚國史百五十九田地〕弘仁三年七月癸酉、陸奧國言、屯田元二百町、伏望定一百町、爲鎭守儲者、許之、

〔類聚國史八十四政理〕弘仁四年九月丙子、勅、邊要之地、外寇是防、不虞之儲、以粮爲重、今大軍頻出、儲粮悉罄、遺寇猶在、非常難測、若無貯蓄、如機急何、宜陸奧出羽兩國公廨、混合正税、毎年相換、給於信濃越後二國、但年穀不登、無物混税、并有不可得公廨之人、合隨狀移送、依實相換、停止之事、宜待後勅、

〔日本後紀二十四嵯峨〕弘仁五年十一月己丑、陸奧國言、膽澤德丹二城、遠去國府、孤居塞表、城下及津輕狄俘、野心難測、至於非常、不可不備、伏望豫備糒鹽、收置兩城者、許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應ㇾ大野城衞卒粮米依ㇾ舊納ㇾ城庫ㇾ事 條々內

右參議權帥從三位在原朝臣行平起請偁、被ㇾ太政官貞觀十二年二月廿三日符偁、參議從四位上行大貳藤原朝臣冬緖起請偁、除ㇾ五使料ㇾ之外、庸米幷雜米總納ㇾ稅庫、每ㇾ月下行、若非ㇾ有ㇾ判行、輙以下用、監當之官准ㇾ法科ㇾ罪者、官符之旨、固有ㇾ宜、然但至ㇾ于件城、城邊人居、或屋舍頽毀、或人跡斷絕、仍問ㇾ城司等、申云、此城衞卒卌人、粮米每月廿四斛、元來納ㇾ城庫、而時城庫□□□等、逐ㇾ往還之便、求ㇾ賣買之利、從ㇾ納稅庫ㇾ以來、人乘ㇾ無ㇾ到、賣買失ㇾ術、百姓逃散、總而由ㇾ此者、夫守ㇾ城在ㇾ人、聚ㇾ人在ㇾ食、望請件粮米特納ㇾ城庫ㇾ者、右大臣宣、奉ㇾ勅依ㇾ請、

貞觀十八年三月十三日

〔太平記 七〕先帝船上臨幸事

長年○名和近邊ノ在家ニ人ヲ廻シ、思立事有テ船上ニ兵粮ヲ上ル事アリ、我倉ノ內ニアル所ノ米穀ヲ、一荷持テ運ビタラン者ニハ、錢ヲ五百ヅヽ取ラスベシト觸タリケル間、十方ヨリ人夫五六千人出來シテ、我劣ラジト持送ル、一日ガ中ニ兵粮五千餘石運ビケリ、

〔東遷基業 三〕三方ヶ原合戰の事

作左衞門○本多重次は、かねて守城の備をなして、兵粮多く儲へければ、神君○德川家康是を悅せ給ひけり、

〔天正記 三〕紀州御發向の事幷水責の事

そうべついくさのつかるゝ事、かてをはこびがたきによつてなり、しかも內府○豐臣秀吉國をとるは、しよせいにひやうらうをつかはすゆへなり、古今ためしなき次第、ことに今度、すま、あかし、ひやうごにしのみや、あまがさき、さかひの津、其ほか所々の船にてひやうらうをはこび、まし田仁右衞門をひやうらう奉行として、きのみなとにこれを置、一日に八木千びやう、まめ百たはら相

わたす、

〔黒田家譜 三〕秀吉公より孝高江賜る御書に曰、〇中略

一兵粮玉薬指圖次第、彌船を被揃、重而當年中に、追々可被遣候、來年の爲に而候間、兵粮一廉可被作届候條、二万石も三万石も入候樣に、藏已下可申付候儀專要に候、其藏次第に御兵粮可被遣候事、

一小西彌九郎ニ先兵粮を被遣候はヾ、兵粮と申は、家の場を取候物にて候間、能々さげすみ、彌九郎歸り次第に追々御兵粮可被遣候、其心得專要候事、

一輝元隆景元春人數長陣を致、兵粮相きれ候はヾ、可申越候、其透間を見、兵粮を各々も可被遣候事、

右之條數何も令心得、可申付事專要候、諸事無越度分別尤候事、

十月〇天正十四年三日　秀吉御書判

安國寺　黒田勘解由どのへ　宮木右兵衛入道どのへ

〔難波戰記 一〕大坂騷動之事

秀頼公〇豐臣修理亮〇大野治長ヲ召テ仰ケルハ、今度ノ騷動關東ニ聞エナバ、定テ兵ヲ向ラレン、早ク城中ニ兵粮ヲ取入、籠城ノ用意スベキ也、治長畏テ、大坂堺及ビ尼ケ崎ノ川口ニ著置タル、賣買ノ米船ヲ悉ク點撿シテ、金銀ヲ與ヘケル程ニ、四五日ノ間ニ、二十万石餘ヲ籠タリケル、

〔御日記〕慶長十九年十月十一日、三輪左平次、雀原與右衞門爲使節到駿河、九月末ヨリ近國へ金銀ヲ遣シ兵粮ヲ被貯、福島正則兵粮八万石、其外大名ノ米三万石、町人ノ米二万石、城へ取入、町人へハ代銀ヲ遣ハス、公ノ米五万石有、

〔日本書紀 二十二推古〕十年二月己酉朔、來目皇子、爲擊新羅將軍、四月戊申朔、將軍來目皇子、到于筑紫、

乃進屯島郡、○筑前而聚船舶、運軍粮、

〔續日本紀光仁三十六〕天應元年二月己未、穀一万斛、○續日本紀考證云、一下、金澤本堀本有十字、紀略同、仰相模、武藏、安房、上總、下總、常陸等國、令漕送陸奧軍所、

〔續日本紀光仁三十六〕天應元年十月辛丑、尾張、相模、越後、甲斐、常陸等國人總十二人、以私力運輸軍粮於陸奧、隨其所運多少加授位階、

〔續日本紀桓武三十九〕延暦七年三月庚戌、軍粮三万五千餘斛、仰下陸奧國運收多賀城、又糒二万三千餘斛并鹽、仰東海東山北陸等國、限七月以前轉運陸奧國、並爲來年征蝦夷也、

〔吾妻鏡四〕元暦二年○文治元年三月十二日乙未、爲征罰平氏兵船三十二艘、日來浮于伊豆國鯉名與并妻郎津、被納兵粮米、仍早可解纜之由被仰下、俊兼奉行之、

〔源平盛衰記四十二〕義經解纜四國渡附資盛淸經頸可上京都由事

判官○義經ハ風既ニ直レリ、急ギ船共出セト宣フ、○中略唯五艘ヲ出ス、一番判官ノ船○中略五艘ノ船ニ馬ヲノセ、兵粮米ヲ積ム、

〔藤葉榮衰記中〕御代田籠城事

角テ城內ニテハ、加樣ニ籠城可有トハ夢ニモ不被存、兵粮ヲモ不貯事ナレバ、水練ノ上手ニ白米ヲ負セ、川上ヨリ阿武隈川ヲ流泳ニシテ、夜々陣中ヲ忍ビ、城中ヘ兵粮ヲ入テ、兵ノ飢ヲ助ケル、初ノ程コソアレ、度重リケレバ、後ニハ寄手是ヲ知テ、阿武隈川ノ端ニ弓鐵炮ヲ揃ヘ、番衆ヲ數多居テ待ヲ夢ニモ不知、水練ドモ例ノ如クト心得テ、白米ヲ持テ流泳ニ忍來ル所ヲ、川中ニテ弓鐵炮ヲ以テ打殺シケレバ、其後ハ白米一粒モ不入、然ニ城中ニテハ一日二日コソアレ、日數積リヌレバ、兵疲ケル處ニ、又如何シテカ白米ヲ入タルラン兵粮ヲ積ケリ、

〔宗像軍記〕宗像ノ家臣ト立花ノ家臣ト鞍手郡稻光小金原合戰ノ事

爰ニ鷹取ノ城主毛利鎭實ハ、無二ノ大友方ナレバ、立花ノ道雪ト親交淺カラズ、近年鎭實ノ領地作毛不熟ナレバ、粮粟ニ乏キ故兵粮ヲ立花ニ乞、道雪ヨリ兵粮數百石、小荷駄數百疋ニ付サセテ、原田源右衞門ヲ奉行トシテ鷹取ノ城ニ送ル、

〔家忠日記增補〕二永祿二年三月、此月〇中略今川義元鵜殿長助をして尾州大高の城を守らしむ、信長兵を出して是を圍て攻擊、大高城中の糧乏し、是に依て城兵疲勞す、大神君〇德川家康城兵を援んと欲し、兵を出し信長が軍士を押へ、城中へ糧を速に運び入、敵其嚴整なるを見て進る事を得ず、

〔東遷基業〕一神君初て所々城責附大高城內納糧丸根城陷る事

山口左馬助信長に叛て、大高沓掛の二城の守將を誘て、義元に屬せしめける故、義元より鵜殿長助長將一說作長照、誤也、長照長將子、藤三郞之名也、を遣して、大高沓懸二城を守らせらる、是よりさきに、義元部將葛山播磨守、三浦左馬助、飯尾豐前守、淺井小四郞等を、笠寺城に據て、尾州の鷲城に犄角をなす、大高城に糧乏しきが故に、駿府に急を告來りしかば、義元、神君〇德川家康に糧を納め給ふべしと、下知せられければ、神君時に御年十八歲、英氣銳なりけるに、譜第の士踊躍して相從ふ事千騎計、急ぎ軍を進め給ひて、大高に至り給ひて、左右の間を伺て糧を納んとし給ふ、信長兵を鳴海の海邊に出し、城塞を伺察せらる、味方の糧道を遮むとするがごとし、神君御覽じて鳥居四郞左衞門、內藤甚五左衞門義敎、內藤四郞左衞門正成、右京進義淸孫甚藏養子石川十郞左衞門、杉浦藤次郞時勝、杉浦八郞五郞勝吉等に命じて是を偵せらる、義敎正成等は敵兵味方の糧道を絕べしといふ、勝吉は敵戰を不待、はやく糧を納て然るべしと云、義敎正成聞て、敵の銳氣を見ずや、何とて納べしと云やと云ければ、勝吉答て、左からば、敵戰んと思はゞ山を下りて陣すべし、今味方の軍を見て陣を山の上に返すは、是味方を避るなるべし、糧を納る事猶豫すべからずと云けるを、神君聞召て、勝吉が言を尤なりと思召ければ、寺部梅坪の二城へ人數を遣はされ、近邊の民屋に火を縱させ給ひ、敵を誘き

給へば、鷲津丸根の二城より、彼煙の發るを見て、人數を出して救むとせしかば、其間に乘じて大高の城へやすく〱と糧を納たり、是神君兵略の始也、義元も是を聞て其功を感賞せられけり、

〔信長記〕九自中國兵粮入大坂城事

七(天正四年)月十五日、天王寺ヨリ飛脚來テ申ケルハ、中國ヨリ大坂ヘノ兵粮船七八百艘沖ニ見エタル由申上ケレバ、和州ノ間鍋主馬兵衛尉、沼野伊賀守、同越後守、寺田又右衛門尉、河内ノ杉原兵部丞、宮崎鎌大夫、其弟鹿目助、(部甥)尼崎ノ小畑花熊、野口等防可申旨被仰出ニ因テ、三百餘艘ニテ出向ヒ、敵船ヲ大坂ヘ入ジト防戰勝負區々ナリシノ處ニ、中國船ヨリホウロク火矢ヲ沼野ガ船ヘ投入燒立ノカハ、主馬兵衛野口小畑、伊賀守、越後守、兵部伯父甥三人比類ナキ討死ヲシテノ又右衛門尉ナドハ退散セシニ依テ中國船利ヲ得テ兵糧米思ノ儘ニ入置、西國ヘ漕戻シ候キ彼敵船ノ大將ニハ能島、來島兒玉大夫、粟屋大夫、浦兵部ナド云者共ニテ候ント聞エ申由言上センナノ其後住吉濱ノ城相拵、定ニモ佐久間久右衛門尉カ勢ヲ被入置

〔別所長治記〕大村合戰

毛利家ノ諸大將(略中)三木ノ城ト相圖ヲ定メ、可遂一戰ヲ、忍テ三木ノ人ヲ入來レ十日丑ノ剋ニ敵陣ヘ寄可始合戰ヲ狼烟ヲ上ン時、從夜中押出給ヘ、兩方ヨリモミ合手痛キ軍シテ可定ト否云一木返事ニ御手立ニ々得其意候然レドモ兵粮乏キ故、城中堅固ニ難拘九日ノ宵ニ從城案内者參セン人夫ヲ以テ糧ヲ城中ヘ運ブ手立ヲノミ入候ト申含テ返ス、既ニ其日モ成ハ城中ヨリ案内者百餘人、弓ニ手矢取添忍ビ魚住ヘ出シケル、天正七年九月十日ノ丑剋ニ、藝州ノ住人生石中務ヲ大將トシテ先秀吉ノ與力大膳平田ナド云所ニ付城ヲシテ居タル所ヘ、中國勢押寄、(略中)此戰ノ間ニ三木方ノ武者手島市之助、土橋平之丞、渡邊藤左衛門下知シテ、七八千ノ人夫ヲ以、三木城ヘ兵粮ヲ入ル

〔黒田家譜〕三同年〇天正十四年十二月朔日より秀吉公幕下の諸將及諸國江觸給ひけるは、來年三月朔日筑紫爲征伐發向すべし、東國畿内の軍兵は、二月廿日已前大坂江來り集るべしとて、畿内五ケ國〇中略凡三十七ケ國のみを召催されけるに、其勢都合二十万餘人也、其上筑紫の兵馳加れば彌大勢たるべしとて、士卒三十万人の兵粮、馬二万疋の飼料、數月の用意をなして、諸軍江下行すべきよし命せられ、諸國の浦舟を寄られ、先兵粮米拾万石、長州の下の關江運送せられける、

〔陰德太平記〕七十四佐々成政攻肥後國隈府城及山鹿城幷一揆圍熊本城事

山鹿付城ヨリ兵糧乏キ由、頻リニ注進シケルニ依テ、成政ヨリ立花飛彈守宗茂ニ兵糧入テ賜ハリ候ヘト頼レケル故、卽領掌シテ三千餘騎ヲ引卒シ、九月〇天正十六年下旬袋ノ中ニ、八木、味噌、肴、蔬菜ノ類ヲ入テ、總軍ノ腰ニ付サセ、山鹿城ノ原口ヘ押寄、鐵炮迫合スル所ニ、城中ヨリ兵ヲ分ツテ立花ガ後陣ヲ打ケル間、立花下知シテ軍士ヲ引上ゲ、退口ニ總軍ノ腰ニ付タル袋共ヲ、二箇所ノ付城ヘ抛入テゾ引取ケル、

〔關八州古戰錄〕十五大神君御上京附秀吉公小田原攻陣觸ノ事

來年〇天正十八年三月朔日、秀吉公京都ヲ出馬アルベキ旨、回文ヲ回サル、兵粮米ノ事ハ、江州水口ノ城主長束大藏少輔正家總司トシテ、下奉行十人差副ラレ、今年中ニ先以テ現米廿萬石、諸代官ノ面面ヨリ是ヲ受取、年明ナバ船積シテ、駿河國江尻淸水ノ湊マデ運漕ナサシメ、其地ニ庫倉ヲ建置キ悉ク納置、着到ノ諸軍勢ヘ割渡スベシ、此外ニ伊勢、美濃、尾張、參河、遠江、駿河ノ內ニテ、米穀ヲ買入レ、追々ニ右兩所ノ藏入ヲナサシメヨトテ、黃金壹萬枚長束大藏少輔ニ相渡サル、

〔常山紀談〕九同時〇小田原役東照宮伊奈熊藏を召て、仰出さるゝ事どもあり、其時伊奈去年より兵粮の用意して沼津に運びたりき、然るに此筥根山中に穀物の價、江尻沼津と相同じ、遙に運漕せんより、爰にて求る事然るべし、心得がたき事なりと申けるを、東照宮聞し召、夫は長束大藏大輔ハ

謀なり、長束は武功勝れたるにもあらざれども、斯る謀は長じたる者なれば、秀吉城主として寵せらるゝぞかし、汝が職にては兵粮運漕の事、よく心得べきに、心得がたしといふは、吾も心得がたしと仰有ければ、伊奈汗を流して退出しけり、

〔武將感狀記二〕相摸ノ小田原ノ役ニ、堀左衞門督秀政先人ヲ遣テ、伊豆、相摸、駿河、遠江ニテ牛數十頭買置タリ、秀吉箱根ノ嶮路ニカヽルトキ、秀政牛ヲ以テ糧ヲ運ブ、他ノ軍ハ是ニ迷惑スレドモ、秀政ヒトリ豫備ヘタルガユヘニ患ナシ、

〔武將感狀記三〕一秀吉朝鮮ヲ伐ツトキ、池田三左衞門尉輝政、船奉行中村九郎兵衞ニ令シテ、糧ヲ肥前ノ名護屋ニ漕セシム、中村挑燈二三百、大鼓三四十ヲ買テ名護屋ニ至ル時、巳ノ刻ニテ潮モヨシ、サレドモ玄海ガ島ニ止メテ、ワザト日ヲ待暮シ、亥ノ刻ニナリテ船ヲ漕入ル、二三百ノ挑燈ニ火ヲトモシツレ、三四十ノ大鼓ヲ敲立レバ、火光海中ニ移リ、鼓聲城上ニ響テオビタヾシ、秀吉使ヲ遣ハシテ何者ゾト問セラルヽニ、輝政ガ家臣中村九郎兵衞糧ヲ漕スルノ船也ト答フ、秀吉本ヨリ華美ヲ好ム、中村ヨク逢迎シテ甚秀吉ノ心ニ適ヘリ、スナハチ中村ヲ朝鮮ニ渡海セシム、中村朝鮮ニ至レバ軍スデニ解ヌ、時ニ糧將ニ盡ントス、諸將大ニコレヲヨロコブ、是誠ニ中村オ略アリト云ヘドモ虛名也、實功ニアラズ、君ノ爲ニシテ自爲ニセザルトキハ、少クユルスベシ、

〔小早川式部物語下〕或老人語曰、高麗陣の時日本勢の兵粮なくして及₂迷惑₁、急ぎ米の運送有べしと申來る、船過半高麗へ行て、俄に米の運送成がたく如何可ₗ有しと、太閤秀吉公へ披露申たりしかば、秀吉公宣く、夫こそ安き事也、京大坂堺其外國々の商人共に可ₗ申聞は、高麗へ兵粮米入也、高麗へさし越て賣ならば、賣直に一倍可₂買取₁と觸候へと有に因て、諸商人悅び高麗へ米渡す事無ₗ限、去によつて高麗の兵粮も澤山に續き、商人も喜び、日本の米の直段も高直に成て、跡先能して商人も利する工夫の方配、誠に智惠深き工夫也しと語る、

〔續日本紀 九元正〕養老六年閏四月乙丑、太政官奏曰、〈中略〉用兵之要、衣食爲本、鎭無儲糧、何堪固守、募民出穀、運輸鎭所、程道遠近、爲差委輸、以遠二千斛、次三千斛、近四千斛、授外從五位下、奏可之、其六位已下至八位已上、隨程遠近、運穀多少、亦各有差、語具格中、　七年二月戊申、常陸國那賀郡大領外正七位上宇治部直荒山、以私穀三千斛、獻陸奧國鎭所、授外從五位下、

〔續日本紀 九聖武〕神龜元年二月壬子、從七位下大伴直南淵麻呂、從八位下錦部安麻呂、无位烏安麻呂、外從七位上角山君內麻呂、外從八位下大伴直國持、外正八位上壬生直國依、外正八位下日下部使主荒熊、外從七位上香取連五百島、正八位下大生部直三穗麻呂、外從八位上君子部立花、外正八位上史部虫麻呂、外從八位上大伴直宮足等、獻私穀於陸奧國鎭所、並授外從五位下、

〔續日本紀 三十六光仁〕天應元年正月乙亥、下總國印幡郡大領外正六位上丈部直牛養、常陸國那賀郡大領外正七位下宇治部全成、並授外從五位下、以進軍糧也、　十月辛丑、尾張、相摸、越後、甲斐、常陸等國人、總十二人、以私力運輸軍糧於陸奧、隨其所運多少、加授位階、

〔續日本紀 三十九桓武〕延曆六年十二月庚辰朔、授外正七位下朝倉公家長外從五位下、以進軍糧於陸奧國也、

〔續日本紀 四十桓武〕延曆十年九月癸亥、授陸奧國安積郡大領外正八位上阿倍安積臣繼守外從五位下、以進軍糧也、

〔扶桑略記 二十九後冷泉〕天喜五年八月十日、前陸奧守源賴義襲討俘囚安倍賴時之□給官符東山東海兩道諸國、可運充兵糧之事、公卿定申、　九月二日鎭守府將軍源賴義與俘囚安倍賴時合戰之間、賴時流矢所中、還鳥海柵死了、但餘黨未服、仍重進國解、請賜官符、徵發諸國兵士、兼納兵糧、悉誅餘黨、　十二月、鎭守府將軍賴義言上、諸國兵糧兵士雖有徵發之名、无到來之實、〈中略〉　同月廿五日、〈中略〉其後諸國軍兵兵糧頻雖賜官符、不到彼國、

〔山槐記〕治承四年十二月十日戊子、未刻參新院、○高倉、中略、右中辨兼光朝臣奉新院仰、召兵亂米於諸國、返事且到來之由、申大理、○平時忠能登、○平宰相教盛知行國但馬大夫修理大夫經盛領狀、紀伊佐渡已上兩國、平中納言賴盛知行國、力不及之由申、

〔吾妻鏡 二〕治承五年○養和元年正月廿一日戊辰、平相國禪門○平清盛驕奢之餘、蔑如朝政、忽緒神威、破滅佛法、惱亂人庶、近則放入使者於神三郡、○大神宮御鎭座充課兵粮米、追捕民烟、天照太神鎭座以降千百餘歲未有如此例云云、凡此兩三年、彼禪門及子葉孫枝可敗北之由、都鄙貴賤之間、皆蒙夢想、其旨趣雖區分、其料簡之所覃、只件氏族事也、

〔吉記〕壽永元年三月十七日丁亥、近日諸國庄々、兵粮米重有苛責、可被付使廳之使由被下院宣、行隆朝臣沙汰也、上下失色事歟、

〔玉海〕文治元年十一月廿四日癸卯、傳聞賴朝妻父北條四郎時政今日入洛、其勢千騎云々、廿八日丁未、傳聞賴朝代官北條丸今夜可謁經房云々、定示重事等歟、又聞件北條丸以下郎從等相分賜五畿山陰山陽南海西海諸國、不論莊公可充催兵粮段別五升、非啻兵粮之催、總以可知行田地云々、凡非言語之所及、

〔吾妻鏡 五〕文治元年十一月廿八日丙午、補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家庄公、可宛課兵粮米段別五升之由、今夜北條殿○時政謁申藤經房卿中納言云云、廿九日戊申、北條殿所被申之諸國守護地頭兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由、被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、

〔源平盛衰記 四十六〕時政實平上洛附吉田經房卿廉直事

時政○北條源二位○賴朝ノ下知ニ依テ、諸國ニ守護ヲ置、庄園ニ地頭ヲナスベキ由、吉田藤中納言經房卿ヲ以テ奏シ申ス、又二十六ケ國ヲ相分テ庄領國領ヲ云ズ、段別兵粮米ヲ充ツ、義經行家追討ノ爲トゾ聞エシ、○中略申ウクル旨ニ任セ、諸國ノ守護人段別ノ兵粮米、平家知行ノ跡ニ地頭職ヲ

禁徵糧

免サレケリ、

〔川角太閤記〕三海道筋は玄づが嶽を心掛よと堅被仰付、御身〇豐臣秀吉も十九日〇天正十一年四月の夜城を被成御出、玄づがたけへと御馬をはやめられ候事、

道々●在々所々の庄屋大百姓ども被召寄、藏を開きめしを燒せよ、馬のはみをば合ぬかにせよ、先手〳〵に持たるおしなみの米を出し燒せよ、米の算用は百姓ばら自分の米ならば、十そうはしいにして後に可取者也、いそげ〳〵と御自身御觸候、めし出來候はゞ、明俵を跡さきたはらはしをば、其まゝおけ、たはらをたつにきりあげ、內江鹽水のからきを以よくしめし食を入よ、めし出來候はゞ、牛馬に付させ、玄づがたけを心掛急ぎ可參なり、合ぬかには、木の枝か、かみなどを玄るしにつけよ、跡より人數つゞかば、草臥たるもの多く可有なり、是は食にて候、可參〳〵と言聞せよと定め、皆々うへきもの多く可有者也、はいとる者あるならば、其まゝとらせよ、きるものに御包候へて、のごひなどにも御つゝみ候て可然と、おしはなしとらすべき也、縱はいとる食も先江持來りなば、皆用に可立也、玄るしのあるたはらを食かと、おもひとる者あらば、是は御馬の合ぬかにて候が、御用に候はゞ可進之と是も可相渡もの也、如仰道々にてはい取もの、又はもらひ申もの數を玄らず有之也、御意の通ニまかせ相渡申事

〔續武將感狀記〕天正十一年、志津嵩戰ヒノ前ニ、秀吉加藤虎之助清正ニ、步士三十人相副ヘラレ、近江國中ノ農商ノ富者ニ、一倍ノ息ヲ以金銀米錢ヲ貸聚ラル、此ヲ以テ五萬人ノ粮餉トスルニ、飽滿セズト云コトナシ、上下皆終ニカヽル自由ナル軍陣ヲ覺エズト云ヘリ、

〔玉海〕壽永三年〇元曆元年二月廿三日壬午

左辨官下五畿內諸國、七道諸國同之、

應早仰國司停止被催公田庄園兵粮米事

右治承以降、平氏黨類、暗稱兵粮、掠成院宣、悉充五畿七道之庄公、已忘敬神尊佛之洪範、世之衰微、民之凋弊、職而由斯、況源義仲不改其跡、益行其惡、旨失朝威、共背幽冥、爰散位源朝臣頼朝不過幾日、討滅西賊、氏○平然則干戈永戢、宇宙靜謐、權大納言藤原朝臣忠親宣、奉勅早仰諸國司、宜停止件催者、諸國承知、依宜行之、

壽永三年二月廿二日　　大史小槻宿禰

中辨藤原朝臣

〔吾妻鏡〕四元暦二年元年○文治二月五日己未、典膳大夫中原久經、近藤七國平爲使節上洛、先々雖爲使節、他人相替、今度治定云云、是追討平氏之間寄事於兵粮、散在武士於畿内近國所々致狼藉之由、有諸人之愁緒、仍雖不被相待平家滅亡、且爲被停止彼狼唳、所被差遣也、先相鎮中國近邊之十一箇國、次可至九國四國、悉以經奏聞、可隨院宣、此一事之外不可交私沙汰之由被定仰云云、

〔吾妻鏡〕六文治二年正月十一日庚寅、高瀨庄事不可交武家沙汰之由、雖被仰下、北條殿時政○平注所存於折紙、被付帥中納言經房○藤原云云、

高瀨庄事雖令究濟兵粮米候、於地頭總追補使被補候畢、但於狼藉者可令停止候也、

二月廿一日己巳、弓削庄兵粮米事可停止之由、爲帥中納言奉被仰北條殿、召問沙汰者可令言上之由今日被進請文、而無左右不成免判、頗以稱可御不審、黄門加斟酌、暫不奏御返事之由云云、廿二日庚午、神崎御庄兵粮米事可停止之旨、以帥中納言被仰北條殿之間、今日且任符宣、且相尋子細可致沙汰之由、被示遣天野藤内遠景、其上被申關東云云、廿八日丙子、被申京都條々有其沙汰治定云云、

一　仰五畿七道諸國庄園免除兵粮未進可令安堵土民事、

依此米催事、民戸殊費、於今者殆無乃貢運上計之由、頻有領家訴之間及此儀、然者賦遣使者可觸

遲之由、可被仰北條殿者、〇中略

三月一日己卯、諸國被補總追補使幷地頭、內七箇國分、北條殿被拜領畢、而深存公平、去比上表地頭職、其上重被付書狀於帥中納言、黃門又付定長朝臣被奏聞之、〇中略

凡國々百姓等兵粮米使等、寄事於左右、押領所々公物之由、訴訟不絕候也、且糺明如此等之次第、若兵粮米有過分者、即糺返件過分、又百姓等令未濟者計糺田數、早可令究濟之由、尤可蒙御下知候、兼又沒官之所々蒙院宣幷二位家仰候之間、可令見知之由同所令存也、以此由可令言上給候、時政誠恐誠惶謹言、

三月一日　平時政申文

進上　大夫屬殿

二日庚辰、今南石負庄兵粮米可停止之由、昨日帥中納言以使者被傳院宣於北條殿之間、今日所被成進下文也、亦北條殿言上事奏聞之由、左少辨〇藤原定長所被示送于帥中納言之狀、黃門遣北條殿云云、

時政申狀奏聞候畢、七箇國地頭辭退事、尤穩便聞食、總追補使事可何樣哉、爲逐勤農停止地頭職、無人愁者、旁神妙定爲其儀歟、兵粮米未濟事又以同前、迎春譴責窮民若爲歎歟、其條又定相計旨候歟、沒官所々檢知事、自二位卿許申上旨モ不候、次第何樣候哉、委趣尋聞子細、且可令計申給之由、內々御氣色候也、恐惶謹言、

三月二日　左少辨

帥中納言殿

今日故前宰相光能卿後室比丘尼阿光、去月進使者於關東、相傳家領丹波國栗村庄爲武士被成妨由訴申之、仍早可停止濫吹之趣被仰云云、

下　丹波國栗村庄

可停止武士狼藉如元爲崇德院御領備進年貢隨領家進止事

右件庄、可爲崇德院御領之由、被下院宣也、而在京武士寄事於兵粮催、賠以押領、於今者早如元爲彼御領、隨領家進上、可令備進年貢所當之狀如件、以下、

文治二年三月二日

七日乙酉、北條殿被申七箇國地頭上表事、兵粮米事、沒官所々事、已經奏聞畢之由、左少辨遣奉書於帥中納言、彼卿又送其狀於北條殿云云、

時政申狀　奏聞畢、○中略

一兵粮米未濟事、任道理尤可有沙汰歟、○中略

三月七日　　左少辨定長

進上　帥中納言殿

十六日甲午、山城介久兼爲使節上洛、被仰伊勢國神領顚倒奉行等事、又諸國兵粮米催事、漸可被止之由、被仰北條殿、是及狼藉之旨、預所有訴之故也、依之可被奏達此趣之旨、被申帥中納言許云云、

〔古文書類纂上辨官下文〕順德天皇承久三年辨官下文京都教王護國寺所藏

左辨官下備中國

應令停止兵粮米責、幷以同宛文及守護所自由下知、恣號地頭、不用領家使、押領最勝光院領當國新見庄事

右夏比以來世間不靜、丁壯苦軍旅、老弱罷轉餉、稱資蕭何之糧道、普費華夷之編戶、已雖辨濟有限之兵粮、猶又責取無故之民稼、因茲諸方之貢賦不全、万人之愁訴無盡、神社佛寺之用途已多闕怠、權門勢家之所領不叶進止、爲上爲下不可不禁、仍宛賜備前備中二箇國於武士、被停止諸國諸庄三升米

之濫責、加之稱、爲地頭職、不用京下使之者多有之歟、本自帶下文、知行顯然之者不及子細、今更雖下知、證據炳焉之者又以勿論、或以守護所之自由、始置地頭、或以兵粮米之宛文、恣號地頭、如此張行皆可停止、是豈非庄公落居之基、士民安堵之計乎、若背鳳銜之旨、猶有猥藉之輩者、可注進交名、仰武士可被行其罪、權大納言源朝臣通具宣、奉勅布告五畿七道諸國、令知此意矣者、國宜承知、依宜行之、

承久三年十月廿九日　　大史小槻宿禰 花押

中辨藤原朝臣 花押

〔古文書類纂 上觸狀〕順德天皇承久三年興福寺觸狀 大和春日神社所藏

興福寺領近江國犬上庄 (本書此處蠹損アリ)

件庄三升米弁之上、守護人佐々木四郎右衞門尉代敷居庄內、責取所當等、兼搦取庄民男女七人、令收公一庄之間、有限寺節用途悉闕如了、早可被停止武士之亂入也、委細之旨在別解、

承久三年十二月廿一日

〔建武以來追加〕同守護人非法條々

一大犯三箇條 付苅田狼藉、使節遵行、 外相綺所務以下、成地頭御家人煩事、〇中略

一號兵粮幷借用、責取土民財產事〇中略

以前條々非法張行之由、近年普風聞、雖爲一事、有違犯之儀者、忽可改易守護職、若正員不存知、爲代官結構之條、蹤跡分明者、則可召上彼所領、無所帶者可處遠流之刑矣、

〔太平記 十〕新田義貞謀叛事附天狗催越後勢事

相摸入道〇北條高時 舍弟ノ四郎左近大夫入道〇泰家 ニ、十萬餘騎ヲ差副テ、京都ヘ上セ、畿內西國ノ亂ヲ可靜トテ、武藏、上野、安房、上總、常陸、下野六箇國ノ勢ヲゾ被催ケル、其兵粮ノ爲ニトテ、近國ノ庄園ニ、臨時ノ天役ヲ被懸ケル、中ニモ新田庄世良田ニハ有德ノ者多シトテ、出雲介親連、黑沼彥四

郎入道ヲ使ニテ、六萬貫ヲ五日ガ中ニ可沙汰ト、堅ク下知セラレケレバ、使先ヅ彼ノ所ニ莅デ、大勢ヲ庄家ニ放入テ、譴責スル事法ニ過タリ、

〔太平記 三十三〕公家武家榮枯易地事

前代相摸守（〇北條）ノ天下ヲ成敗セシ時、諸國ノ守護大犯三箇條ノ撿斷ノ外ハ、綺フ事無リシニ、今ハ大小ノ事共ニ只守護ノ計ヒニテ、一國ノ成敗雅意ニ任スレバ、地頭御家人ヲ郎從ノ如クニ召仕ヒ、寺社本所ノ所領ヲ兵粮料所トテ押ヘテ管領ス、

〔建武以來追加〕一寺社本所領事（觀應三七廿四御沙汰〇中略）

次近江、美濃、尾張、三箇國本所領半分事、爲兵粮料所、當年一作可預置軍勢之由、相觸守護人等訖、於半分者宜分渡本所、若預人寄事於左右、不立渡者、一圓可返付本所、

一寺社本所領事（觀應三八廿一御沙汰）

違背先日事書、不應使節遵行、空令馳過當年西收之由、多以訴之、造意之企難遁其咎、於如然之族者、可處所當罪科之上、縱雖立忠功、永可止恩賞、且諸方訴訟不可有其沙汰、次軍勢發向所々八箇國（近江、美濃、伊勢、志摩、尾張、伊賀、和泉、河內、）本所領事爲兵粮料所、當年一作可令均分之由、先度被定下之處、或除先納分稱半濟、或押遵行、欲皆納云々、太不可然、所詮兩方員數承諾者、乃貢之相應分不及子細、不然者爲止混亂之妨、仰雜掌召出下地折中之注文、預人可令撰取一方、若於彼地亦致非分煩者、守護人加嚴禁可注進子細矣、次先納分事遂散用宜令便補、兵粮方內縱預人雖及數輩守施行之日限、以中分內可令割分也、替面改名可疊本所半分之子細同前焉、次寺社一圓所領等事、且爲祈國家之安全、且爲全面々之運祚、軍士等尤可令禁慎哉、混本所領曾不可致違亂、但戰場兩國（河內、伊勢、）兵粮事、兩陣相互及闕如者、隨時儀可致少分支配、寄事於左右、更不可及佛神用之闕怠、此上條々若違犯者、罪名相同先條矣、次重施行事、面々雖訴不可有盡期、無殊子細者每度難成御敎書、先召出守護專使等代幷當參論人兩

糧食匱乏

奉行人、加問答尋究遵行難澁之旨趣之後、尙可施行哉否可有其沙汰矣

〔陸奧話記〕官軍（○中略）亦遭霖雨、徒送數日、糧盡食盡、軍中飢乏、磐井以南郡々依宗任之誨、遮奪官軍之輜重、往反之人物、爲追捕件姦類、分兵士千餘人、遣栗原郡、又磐井郡仲村地、去陣四十餘里也、耕作田畠、民戶頗饒、則遣兵士三千餘人、亦令苅稻禾等、給軍糧、如此之間、經十八箇日、留營中者六千五百餘人也、貞任等風聞此由、語其衆曰、如聞者、官軍食乏、四方求糧、兵士四散、營中不過數千云云、吾以大衆襲擊必敗之、則以九月（○康平五年）五日、率精兵八千餘人、動地襲來、

〔吾妻鏡四〕元曆二年（○文治元年）正月六日庚寅、爲追討平家在西海之東士等無船糧絕、而失合戰術之由、有其聞之間、日來有沙汰、用意船可送兵粮米之旨、所被仰付東國也、以其趣欲被仰遣西海之處、參河守範賴（去年九月二日出京赴西海）去年十一月十四日飛脚今日參著、兵粮闕乏間、軍士等不一揆、各戀本國、過半者欲逃歸云云、

〔梅松論下〕斯て歸洛の事兩義あり、一には諸國の御かた力を落さぬ先に、いそがるべきか、一には兵粮の爲に秋を可待歟、御さた未定ずして、宰府に三月（○建武三年）三日より四月三日まで御座ありし時分、播磨より赤松馳申て云、新田金吾大將として、多勢を以當城にむかひて陣を取、圓心が一族、其外京都より九州へ參する輩馳籠間、城の中の勢滿足すといへども兵粮無用意の間、君（○足利尊氏）御歸洛延引あらば、堪忍せしめがたし、御進發を急がるべし、又備前の國三石の大將尾張親衞同申て云、新田脇屋大將としてむかふ間、兵粮用意なきよし赤松と同申、

〔太平記十八〕金崎城落事

金崎城ニハ瓜生ガ後攻ヲコソ、命ニ懸ケテ待レシニ、判官討負テ軍勢若干討レヌト聞エケレバ、澁方ナク成ハテ心細ゾ覺ケル、日々ニ隨テ兵粮乏ク成ケレバ、或ハ江ノ魚ヲ釣テ飢ヲ資ケ、或ハ磯菜ヲ取テ日ヲ過ス、暫シガ程コソ加樣ノ物ニ、命ヲ續デ軍ヲモシケレ、餘リニ事迫リケレバ、寮

ノ御馬ヲ始トシテ、諸大將ノ被立タル秘藏ノ名馬共ヲ毎日二匹ヅヽ差殺シテ、各是ヲゾ朝夕ノ食ニハ當タリケル、

〔北條五代記九〕三浦介道寸父子滅亡の事

道寸は至剛智謀兼備せし大將たりといへ共、かまくら合戰に、人數こと〴〵く討れ、小勢なれば叶はずして三年籠城す、然に千馱矢倉と號し、大きなる岩穴有、是に常に米穀を千馱つみおく、此穴の内も皆はらつて兵粮米つきはてぬれば、すでに城中の者共難儀にをよぶ、

〔安西軍策一〕元就備藝所々城攻事

元就〇毛利、中略、四年〇天文三月、又同國高野山へ發向、城下ニ著陣シ、城ノ尾頸ヨリ仕寄攻ケレバ、城主高野山久意難敵、備前ノ赤松ニ援兵ヲ乞バ、赤松領承シケルガ、聊カ事アリテ遲々シケレドモ、城中是ニ力ヲ得テ、赤松ガ後詰ヲ待、然處ニ城中粮乏シテ二丸ヘハ本丸ヨリ粮ヲ少ヅヽ運ケルガ、間ニ深谷アリ、人ノ運不容易、故ニ綱ヲ張瓢簞ニ粮入テ、朝夕通シケルニ、綱ヲ射切ントシケレドモ、遠シテ難成、

〔陰德太平記四十〕卯山飛驒守生害之事

其比富田城中ニ有德ナル者二人有、中井駿河守久包、卯山飛驒守久信也、中井ハ實ハ左迄富饒ニハ無リシカ共、才智深キ者ニテ、己ガ米藏ノ窻毎ニ磨糠ヲ俵ニ入テ積上テ、外ヘ米俵ノ充滿セル樣ニ見セ置、糧盡テ無力落行ントスル者ヲバ、今暫木ノ葉艸ノ根ヲ食シテ也共堪ヨ、實飢ニ望ナバ吾庫中ニ八木蓄置タリ、是ヲ可與ナド云テ留メ置ニケリ、宇山ハ實ニ米錢多ク持タリケレバ、落行者ヲ扶持シ置テ、城中ノ勢ヲ不減樣ニト謀計ヲナス、

〔太閤記二〕因幡國取鳥落城之事

爰に哀を留めしは、今度籠りぬる男女共、傾の事なるにより、十日廿日の糧のみ用意しければ、程

もなく饑に望み、饑莩の者若干其數を知ず、雜人原無甲斐命を續んため、柵際までよろぼひ出、立歸るありさま、よろ／＼よは／＼とし、たをれては立、たつては倒れ、歸りがたふぞ見えにける、定に繪にかける餓鬼の眞黒にやせ衰えたる男女數多よろぼひ來つゝ、もだえこがれ、ひらに引出し助てたべよ／＼と呼り叫ぶ聲、強に高くは聞えざれ共、何となふ物悲しうぞ覺えたる、中にも苅田せし稻かぶをば、上食とや思ひけん、取々に爭ひあふて、氣を取失ひし者もあり、後にはかやうの物も事盡て、牛馬をさし殺し食せしが、馬肉に醉て死るも有、馬の肝を食ひ度く思ひ、年來ひざうせし道具を持來て、是にかへてたび候へよ／＼と、侘悲しむ體も亦哀なり、是全く民の爲にして與す義兵にあらざれば、かやうの報ひも積り／＼て、其行末いかゞあらんと、必有は悔にけり、分ていと不便なるは、柵を乘越出んとせし餓鬼をば、鐵炮にてうち倒し侍るに、未死もやらで片息なる者を、男女こぞつて或小刀菜刀、或かまを手々に持來て、續節をはなちみとる事、恰も屠者が牛馬の皮を剝に得たるが如し、佳味は首に有やらんと、奪あひ爭ふ事甚し、云恰云恰哀なる事共、たとへんとするに物なし、

〔徵古文書乙集相模國〕相州文書

松田康長書狀(天正十八年)

尙以御移不存□殊御酒御茶被下候、□一入珍重候て、昨日まで致賞翫候、然ば信州口へも上州衆打入故、甲信之衆も歸候由、昨日之申口候、一內府家康御取扱ニも候歟、韮山筋へ使衆被參逢候、於敵陣ヱも此取沙汰成就ぞとよろこび候由申候、陣中兵粮ニ詰り、野老をほり候てくらひ候よし、兵粮一升、びた錢百文ヅヽ、是もはや無賣買由申候、さうさい什器一ッ十錢ヅヽのよし申候、此分にては長陣更ニ難罷成存候、早々世靜ニ罷成御尊顏申度候、一代ニ苦勞仕、老體可爲御察候、將亦任到來一籠さし上候、此地者以來籠城之分ニ御座候、彼是可爲御察、先々何事も御吉

兵糧

左右計候間可ㇾ被ㇾ思ㇾ召御心易候、重而可ㇾ申宣候、返々[illegible]宣候迄候[illegible]候忝次第候、以上、(中略)

三月廿一日　康長 花押

自山中

〔朝鮮軍記大全 三十四〕蔚山城飢渇事

斯ニ蔚山ノ城中、曾ヨリ水ノ手乏シフシテ、夜々ニ人歩ヲ出シテ、渓水ヲ汲トラセケル處ニ、寄手ノ方ヨリ是ヲ察シ、密シク番手ヲ置ケル故、出テ汲ムベキヤウノナケレバ、城中ノ迷惑大方ナラズ、日々渇ニ及ビケルユヘ、士卒ノ憂ヒ甚シキニ、然ノミナラズ兵粮モ又罄ルニ至ッテ、一方ナラヌ艱難ニ至リ、此城ノ危キコト旦夕ニ逼リケル、城中ノ士卒ドモ水ニ渇シテ堪ヘザレバ、密ニ城ノ外ニ出テ濠ニ臨ンデ、死屍ヲ涵セル溲水ノ半バ血ニテ混レルヲ汲トッテ、暫時ノ渇ヲ凌ギ、飢テハ又粮ナキノ初ニハ、紙ヲ嚙ンデ氣ヲ助ケ、或ハ鼠ヲフスベ、或ハ壁土ノ中ナル草藁ヲ煮テ食ニ充レド、中々ニ堪テ生ベキ伎倆モナケレバ、牛ヲ殺シ馬ヲ屠リテ、口腹ヲ養ヒタリ、斯テモ叶ハヌ期ニ至レバ、城兵ドモハ潜ニ城ヲ忍ビ出テ、明兵ドモノ討死シタル死骸ヲ捜リ求メテ、腰ニ付タル幾米牛ノ炙リモノナンドヲ見付レバ、尋常ニ萬金ノ珠玉ヲ得タルガ如クニ思ヒナッテ、毎夜ニ出テ是ヲサガセリ、

〔源平盛衰記 三十四〕法住寺城郭合戰事

木曾(義仲)ハ勅勘ヲ蒙ル由聞テ申ケルハ、(中略)東西道塞テ京都ヘ物上ラネバ、餓疲テ死ヌベシ、命ヲ生テ君ヲ守護シ奉ラン爲、兵粮米ノ料ニ德人共ガ持餘タル米共ヲ少々トランニ、何ノ苦事カ有ベキ、武士ト云ハ殊ニ馬ヲ勢テ敵ヲモ責、城ヲモ落ス、馬弱シテハ高名ナシ、サレバ其食ミ物ノ料ニ、青田青麥ヲ刈ランニ僻事ナラズ、院宮々原ノ御所ヘモ參ラズ、公卿殿上人ノ家ニモ入ズ、兵粮米トテハ支度シ給ハズ、五萬餘騎ノ勢ニテハアリ、兵共ガ我命ヲ全シテ君ノ御大事ニアヒ進

セントテ、片邊ニ付少々入取セントモ惡カラズ、上下異トイヘ共、物クハデハハタラカレズ、馬牛强トイヘ共、ハミ物ナケレバ遣ユカズ、サレバ御制止モ折ニ依ベシ、院强ニ不可咎給、タヾシ推スルニ是ハ皷〇平知盛メガ讒奏ト覺ユ、〇下略

〔太平記六〕楠出張天王寺事附隅田高橋幷宇都宮事

同〇元弘二年四月三日、楠五百餘騎ヲ卒シテ、俄ニ湯淺ガ城ヘ押寄テ、息ヲモ不繼責戰フ、城中ニ兵粮ノ用意乏シカリケルニヤ、湯淺ガ所領紀伊國ノ阿瀨河ヨリ、人夫五六百人ニ兵粮ヲ持セテ、夜中ニ城ヘ入ントスル由楠風聞テ、兵ヲ道ノ切所ヘ差遣シ、悉是ヲ奪取テ、其俵ニ物具ヲ入替テ、馬ニ負セ人夫ニ持セテ、兵ヲ二三百人、兵士ノ樣ニ出立セテ城中ヘ入ントス、楠ガ勢是ヲ追散サントスル眞似ヲシテ、追ッ返ッ同士軍ヲゾシタリケル、

〔陰德太平記十九〕義隆卿遣難風給幷公家衆御最後事

カクテ義隆卿法泉寺ヲ出給テ、糸伊根、朝倉、大坂ヲ越、八小路ノ谷ヲ足ニ任セテ落行給フ、〇中略岡邊右衛門尉綾木ト云所ニテ、小荷駄二匹奪取、二人ノ若君ヲノセ申、下山田ト云所ヲ過、長門國岩永ノ御心庵ト云寺ヘ入玉り、〇下略

〔松平記六〕一去夜酒井左衛門尉と金森五郎八、松平左近、同主殿助等ひそかに人數を分て、鷲巢山へ押寄る、是は鷲巢山を攻落し、勝賴が陣屋を燒立、小荷駄を取、長篠の城中の者ともみ合て、をさへの人數を追拂はんため也、

〔家忠日記增補二〕永祿六年九月、此月菅沼藤十郎大神君の命を奉て、三州佐々木の邊に砦を構る、兵糧不足に依て、佐々木の鄕上宮寺〇註略に兵を發して、糧を奪取て菅沼が構る要害に運び入、上宮寺の僧大に是を怒て、國中の宗門の僧を招き集め、上宮寺に會合して評議して云く、當國三ケ寺は開山より以來守護不入の地也、〇中略三ケ寺の惡僧を催し、甲冑を帶し、兵器を携へ、菅沼が館に

不意に發す、菅沼が家人等少々出合せ、是を拒ぐといへども、惡僧の大勢競て亂入し、遂に糧を奪返して上宮寺に歸る、菅沼大に憤て此由を酒井雅樂頭正親に訴る、即正親大神君の台聽に達す、大神君怒り給ひて、正親に命じて寺中狼藉の惡僧等を糺明有て、其張本人を斬罪せらる、

〔蓑輪軍記上〕信玄○武田兵粮に御詰り被成、然る處に此千部の原に大伽藍有、○中略其後家來新井喜總治と申者使者寺へ被遣、信玄是迄の貯の俵物等あら〳〵に成候間、追而代金成共、又は米成共返金可有候間、米二三百俵才覺賴と申ける、住寺承り申けるは、米と申者一圓無御座候間、外樣へ御賴可被成と申ける、夫ならば金子は此方より可出間、米の才覺賴入と申ければ、是も相成申間敷と申ける、○中略右之趣信玄へ申入ければ、信玄悊勘心被成、夫は切支丹にもあらんや、夫と聞より家臣共進出早々押寄、一旦に打滅しける、則寺の諸道具陣所の燒物になし、在合の俵物不殘うばひ取、○下略

〔武將感狀記五〕一鼻熊ノ城攻ニ、安井仁王十六歲ニテ初陣ナレドモ勇知アリ、市童餅ヲ沽ガ爲ニ時々陣中ニ來ル、仁王私ニ市童ヲ城ニ呼入、錢ナドヲ與ヘテ、敵ノ陣ニ粮ヲバ何レノ所ヨリ運ヤト問ケレバ、某ノ所ヨリト具ニ告グ、仁王悅デ步者四五人具シテ城ヲ出、ソノ地ノ道ノ傍ニ伏ス、夜半過ルホドニ粮ヲハコブ者果シテ至ル、仁王射テ一人ヲ殪ス、殘ル者ドモ多兵ナリトヤ思ヒケン、粮ヲステヽ奔散ス、仁王急ニコレヲ告テ、コトゴトク城中ニ取入タリ、

〔相州兵亂記四〕景虎小田原へ寄來事

小田原勢今日人衆ヲ出シ合テ、斯ニテ懸合ナバ兩虎ノ戰トナリ、縱ヒ景虎ヲ討タリトモ、味方モ大半可亡ニ、若干ノ兵ヲ討セナバ、弓矢ノ上ノ大損ナルベシ、兎角軍ニハ終ノ勝コソ第一ナリ、大行ハ細謹ヲ不顧トハ此事ナリ、案ノ如ク未ダ五十ケ日ニモ及バザルニ、軍兵ドモ長途ノ長陣ニ兵粮ニツマリ、荒大將ニモマレ頓て引心地シケレバ、小田原ヨリ忍ビ〳〵ニ人衆ヲ出シ、田島竹

刈稻參

我山ヨリ夜ル〳〵忍ビヲ入レ、敵陣ノ小屋ヲ處々燒拂フ、其上小田原ヨリ小荷駄ヲトラレテ、越後衆兵粮ニツマル、

〔松隣夜話上〕謙信公杉〇上是ハ成田ガ野伏ヲ掛タルニテゾ有ン、〇中略本庄清七、加治内匠ハ後陣ニ下リ、小四郎ト組合小荷駄ヲ守護仕レト下知ヲナシ給ヒ、自身ハ柴田大學ト河田豐前ヲ前後ニシテ、平塚ト云小キ尾ニ陣ヲ張、夜ヲ明シ給フ、〇中略小荷駄兩陣ノ内、長尾小四郎ハ恙有ラズ、同名傳左衞門ハ敗軍ニ及ビ候ヲ以テ、小荷駄ハ殘ラズ奪ハレケリ、

〔奥羽永慶軍記三十一〕福島合戰甘糟働事

甘糟白石ヲ攻トラレシ其恥ヲ雪ガント、雜兵共ニ七百餘人、愛ヲ專途ト突テカヽル、伊達方ハ數百疋ノ小荷駄ヲ立シ故、防グニ自在ナラズ、其上小勢ナレバ、人數過半討レテ散々ニ崩レタリ、甘糟ガ者ドモ、勝ニ乘テ追驅々々射フセ突フセ、小荷駄十八疋取ニケリ、

〔紹幽物語〕一太閤樣朝鮮國御陣御催之時、〇中略道中其外之兵粮如何樣ニ被仰付候哉之事、

是は兵粮たくわへの義、其村々ニテ家をさがし、或はしげり木の林、何もか樣之隱し所を見付相尋候へば、大形隱し置候米御座候を取候而飯米仕候、尤右之通ニ心懸候へば、結搆成能諸道具の物もぼく取仕候へば、有之事に候へ共、隆景樣御下知にて何にても喰物にて無之物取候は、一廉御法度可被仰付候間、兎角兵粮之たくわへ肝要に候と被仰出、兵粮を取候而參候、其上二日三日之間ニ一度宛御驗使被遣、何にても能物をぼく取仕候をば、皆一所ニ集御燒せ被成候、其故給候物計之手遣肝要仕候事、

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕初てあふ敵に武略の事

一かつ田に口傳　一植田をこねるに口傳

〔南海治亂記十三〕土佐幡多西伊豫攻合記

宇和、喜多ノ二郡ハ土佐境ナル故ニ、幡多郡ヨリ取カクベキト聞ヘケレバ、豫州ニモ其備ヲ設ケテ相保チ、互ニ其隙ヲ窺フ、〇中略土佐方ノ群將、幡多郡中村ノ城ニ集リ、評議シテ曰、西伊豫ハ險阻幽谷ノ地也、是ヲ力攻ニセンコトハ謀ナキニ似タリ、彼ガ領分ヲ費耗テ其疲勞ニ乘ジ戰バ必勝ナント決定シ、毎年十二月廿七日、幡多ヨリ兵ヲ出シ、正月一日及ビ五ケ日ノ内ニ城二ケ所三ケ所ヲ取掛ミ發向シ、其邊ヲ放火シ、其備ナキヲ攻テ歸陣ス、又三月半ニ出テ麥作ヲ薙捨、城アレバ押寄、足輕ヲカケテ鐵炮ニテ打スクメ、士卒ハ城ヲ圍ミ、下僕ハ麥ヲ薙、在家ヲ放火シ、民間ノ產業ヲ失シテ歸陣ス、又四月初ニ出陣シ、苗代ヲ返シ歸陣シ、秋ニナレバ苅田陣シ、侍足輕ハ城ヲ圍ミ鐵炮合戰シ、下々ハ稻ヲ刈セ、日數廿日餘リモ一所ニ逗留シ、新穀ヲ食シ盡テ歸陣ス、毎年カクノ如クセシカバ、敵國疲テ連々城持ドモ土佐方ヘ降參ス、又滅亡スルモ有之也、

〔春秋左氏傳一隱公〕三年四月、鄭祭足帥師、取溫之麥、秋又取成周之禾、〈四月今二月也、秋今之夏也、麥禾皆未熟、言取者盜芟之、〉〇中略周鄭交惡、

〔松隣夜話上〕永祿四年正月下旬、柿崎和泉千三百ニテ平井ヲ發シ、島瀨ヘ出、忍ノ成田ガ居城朝日山ノ麓迄相働キ、村里ヲ放火シ、靑麥ヲ刈、人數ヲ上ゲ、定光寺ニ陣ス、長安八百餘ニテ卽出合、對陣シ、雌雄未決セズ、

〔松隣夜話中〕三樂武州下屋ト云處ニ塞ヲ拵ヘ、取續テ松山ノ近邊ヘ節々働キ出、靑田ヲコネ、麥作ヲカル、

〔藩翰譜四大久保〕慶長五年の秋、東西一時に軍起る、中納言殿〈德川秀忠〉宇都宮より引返し、山道より攻め上り玉ふ、〇中略眞田安房守昌幸上方に心合せて、信州上田の城に立籠る、〇中略八月五日、先陣の軍勢等糧料の爲に、敵の地に押入て、稻を刈て歸る、城の兵とはしたなく行合て戰ふ、大番の人々馳加り、御方次第に多勢に成しかば、敵は城に引て入る、六日にも稻刈らん刈らせじとて戰ふ、〇中

略明れば七日、御勢又稻刈らんと、爰かしこに打出しを、城中の兵城戸押開て打て出づ、御方散々になつて馳歸る、

斷鹽

〔武將感狀記〕三一北條ト今川ト相計テ、遠州武州ノ鹽商人ヲ留テ、甲斐信濃ニ鹽ヲ入ズ、此ヲ以テ信玄ノ兵ヲ困ント ス、謙信コレヲ聞テ、領國ノ驛路ニ令シテ、シホヲ甲信ニハコバシム、我ハ兵ヲ以テ戰ヒヲ決セン、鹽ヲ以テ敵ヲ窮セシムル事ヲセジト云送ラレケレバ、信玄受ラレタリ、

腰兵糧

〔兼貞齋筆記〕一騎武者ハ申スニ不及、腰兵粮、水呑要用ノ藥種サヘ持候ヘバ宜候由、○中略承リ傳申候、○中略　足輕腰兵粮可持事

〔太閤記〕九尾州犬山之城落居之事

勝入○池田、中略、かくて陣ふれ有けるは、明後十三日○天正十二年三月東美濃にいたり發向し、其日に歸陣すべく候然腰兵粮のみの用意せよとなり、

〔武將感狀記〕一一同○寬永十四年十一月耶蘇ノ賊起ル時、○中略原田ハ古ノ原田ガ末葉也、其被官筋ノ士ドモ腰兵粮ヲ付テ、來リ從フ者五十餘人、原田ガ前ニ立塞リ力戰ス、

〔續撰淸正記〕二王子御兄弟を追奉り威鏡道押行時之事

右同威鏡道押行ける時に、ある野の原にて人馬の息を休め、晝の破籠をとり出し喰けるに、十六七になりける小姓、わりごをもたず、故に諸人の喰ゐるを守ゐければ、其者の伯父が見かねて、我もちたる燒食を一ッくれけるを、淸正御覽有て、小姓の伽車だても時により所による事也、今此時に花奢風流は不都合なり、總而老若によらず、其時其事に隨て、一守る事を忘ざるが、武士のたしなみと云物なりと仰られ、今日わりご持ざるは、ぶたしなみの志輕からず、過代として馬召上られたり、又燒食くれたる伯父も同罪也、甥が若輩なる故、軍中の樣子厺らずば、萬指南して心がけあるやうにこそ致すべき事なるに、今淸正が見る前にて、わりごくるゝ事、一入不屆なりと仰

られ、同罪に馬取上被成候也、此後は父子兄弟もたがひに、わりごくるゝ事いたさゞる故、老若上下腰辨當を絕さず持候也、

〔籾井家日記 五〕丹波家出張攝州表事附攝州青野合戰事

大將越後ハ、隨兵ワヅカノ小勢ニテ池田勢ニ加ハリテ引テ入候、嫡子ノ主膳ハ四方ヲ包マレ引入ガタキト見切タルガ、コレマデモ四五百ノ陣ニテ引ケルガ、ソレヲ小高キ岨ヘ引上旗ヲ立テ、敗軍ノ兵ヲ集ムルニ、程ナク千餘騎ホドニナレバ、是ニテ是非ノ勝負シテトト思ヒ込、腰東ヲツカフテ休息ス、

糧袋

〔令義解 五 軍防〕凡兵士〇中略 飯袋一口〇中略 令自備、

〔軍防令講義 二〕飯袋は糒をいれて、釜に浸す袋なり、苧または藁などにて作る、糒六合入るゝ、大きさに造るなり、

〔享祿本類聚三代格 十八〕勅〇中略 戰士已上明知賊來者、執隨身兵、兼佩飰帒、發所在處、直赴本軍、各作軍名、排比隊伍、以靜待動、乘逸擊勞、其四〇中略

寶龜十一年七月廿六日〇又見續日本紀

〔三代實錄 十七 清和〕貞觀十二年三月十六日戊辰、從五位下行對馬島守小野朝臣春風進起請二事、〇中略 其二曰、軍興不虞、倍日兼行、轉餉易絕、輜重難給、望請以調布縫造納糒帶袋千枚、可帶士卒腰底、以支急速之備、詔從之、以太宰府庫布造充之、

〔三河之物語〕一うちがひには干飯よく候、木綿うちがひの中に、口あるをこしらへ置候て、用候時干飯入、腰に付候へば、さい〳〵かみ候によく候、又はうちがひながら、水に入て少おけば、ほどへて飯のやうになるもの也、吉右語り被申候、

一梅干の肉をすりて絹につゝみて、糸をつけて持べし、砂糖がよく候よし、同人語り候、

〔武法老談〕武具之事

糧袋中ヲ明テ縫、後輪ノ下兩方ヘ下ル樣ニシテ付タルガ善、目ニ立色ハアシヽ、

〔單騎要略二 着用〕糧嚢は腰桶、腰苞、面桶、骨柳等の別あり、皆一得を備ふ、就中平士は腰苞に益おほし、其製は細き紙撚を合せて經とし、間々一寸ばかりづヽ置て、同じく紙撚をもて緯とし、簾のごとく編なり、經八寸餘、緯一尺餘にす、竪の兩端をば簀のごとく折返し、縫にして紐を通し、緊るやうにし、伯柿澁を數遍加て固くす、然して兵糧を入るヽには、別に麻の布巾のごときものにつヽみて、彼苞に引くるみ、右の腰にさげ、紐をば左の腰にて結び置なり、

〔單騎要略三 具傳〕糧嚢は何れの製にても腰に着べき事勿論なり、其外に糒を三四合ばかり布の糧嚢に入貯持べし、急に臨で湯に浸せば、卽飯と成なり、又甚急なる時は其儘に食するにも利あり、或は寒天の節は燒飯をこしらへて、懷中する事よし、第一膓ひゆる事なし、食にも温にして慊し、總じて糧食は幾品ももちたるがよし、用なくて弃は易し、用ありて求は難し、

〔眞野家傳甲冑故實〕糒袋　カテ袋是ハ兵糧ヲ持外ニ、此糒袋ト云物ヲ、糒ヲ詰テ持コト也、付樣アリ、扱方モアルコト也、傳ナレバ末ニ傳、古曰、三代實錄曰、調布ヲ以テ縫作リ、干飯ヲ納メ士卒ノ腰底ニ負ハセシムベシ、以テ休息ノ備ヲ保ツ、令ノ義解軍防令ニ云、飯袋一口ト有、總ジテ戰場ヘ出ルニハ、飯ヲモ糒ヲモ貯ヘ持コト也、飯ハ兼テ軍ヲ出ス時、其日一日ノ兵糧ヲ飯袋ヘ入レテ腰ニ付ル、然レドモ其日軍終ラザレバ、兵糧嚢ルコト有、其爲ニ糒ヲ拵ヘテ兼テ所持シ、其變ニ應ズルノ覺悟勿論也、諸流ニモ此傳有テ、兵粮ヲ持コトナレドモ、唯此一品ニテ持、古ハ兵粮ノ盡タル時ノ爲兼テ持コト也、軍防令ニ糒ヲ貯ル義モ、委シク見エタリ、今デハ仕方カハリタレバ論ズルニ及バズト雖モ、古實ヲ以テ考ル時ハ、我分限ニ應ジテ一ケ年ニ兩度程宛、糒ヲ拵ヘ置ベキ義也、俄ニ大分据ル義ハ成難シ、依テ年々心懸ベキ事也、今ニテモ心懸ル人ハ道明寺ト云テ、粮米ヲ焚キ

夫ヲ干テ火事場抔ヘ、我モ家來ヘモ腰ヘ付サスル者有ト云ヘドモ、軍用ノ爲ニ拵フルニハナシ、總ジテ軍場兵粮ノ取廻シ、今軍家者流ニテ拵ル所、古ノ法ニハ大キニ違ヘリ、今兵粮ノ取廻シハ、甲州時代ノ法ニヤ計リ難シ、古法ノ積又取廻シ、此所ニ入用ナルコトナレドモ、兵粮ノ義ハ軍術ノ秘ニシテ、タバ子トスルコトナレバ、先ヅ此所ニ略ス、兵粮ヲ腰ニ付ル付樣、幷其入物ノ所ヲ論ズル所ナレバ、先糒ト飯ト兩樣ヲ貯ルコト丶知ルベシ、古曰、箙ニ納タルコト、太平記第廿六卷、四條繩手合戰ノ條下ニ、○中略アリテ、兵粮ヲ古ヘ箙ニ納メルコトモ有、前ニ云所、三代實錄ニハ、士卒ノ腰底ニ負ハシムト有、腰ニ付ルコトハ勿論ナレドモ、箙ニ納メタルコト見エタリ、是ニ色々ノ說アリテ、一說ニハ古ヘ飯ヲ持コト、戰場ヲシナベテ、今云所ノ笹千卷ノ如ク、笹ノ葉ニ飯ヲ包ミ、夫ヲ箙ニ指シ入レテ持タルト云、又酒ヲ箙ニ貯テ是ヲ取出シテ用キタルト云說アリ、或ハ竹ノ皮ニ飯ヲ包タルト云說アリ、何レモ其證據ナケレバ、是トシガタシ、是モ何レニモセヨ、箙ニ兵粮ニ成ルベキ物ヲ納メタルニ依テ、兵粮ヲ遣ヒ氣ヲ助ケテ並居タルトアリ、諸流ニテ此入物樣々アリ、付所モ又區々ニテ、横腰ニモ付、後腰ニモ付、或ハ飯ヲ小サク丸ク握リ、腰ニグルリト卷樣ニスル傳アリ、然レドモ只一ツヲ以テ總軍ニ向ヒ、拙者ノ流儀ニテハ此所ニ付ルト敎ヘテモ、其人ニ依テ横腰ニ付難ク、後ニモ付ラレズ、又腰ニグルリト卷モシガタキ人有、是ニ限ラズ一切ノコト其人ニ依ルコト也、尙亦飯ヲ入物柳ゴリヲ用ルト云流儀、或ハ布袋ヲ澁染ニシテ入ルト云、又觀世ヨリヲ拵ヘ、是ヘ入ルト云傳有、仕方樣々有、是何レヲ是ト定メ難シ、布袋抔ハ大將持難シ、古布袋ヲ以テ飯ヲ入レタルコトアレドモ、士卒ノ腰底ニ負ハシムトアリ、戰士ノ義ニシテ歷々ノコトニアラズ、故ニ今輕キ一騎ノ武士ハ是ヲ用レドモ、大將ヨリ以下等ニ至ル也、又其々別アルコトナレバ、一ツニハ論ジ難シ、

〔陰德太平記二十七〕毛利元就嚴島渡海附同所合戰事

元就重ネテ陣中ヨリ立出給フ裝束ヲ見レバ、緋威ノ鎧ニ赤熊付タル冑ヲ著、相符ニハ二ツ巻、ト襷カケ給、腰ニ燒食袋、餅袋、米袋、三ツ結付躍出給ヒ、各是ヲ見候ヘ、若此三日ノ兵糧ヲ蓄ヘ、命ヲ限ニ戰ハンニ、ナド勝利ヲ不可得、但三日ト云ハ用心ノ爲ニテコソアレ、合戰ハ唯半日ガ間ニ勝利タルベシ、

〔甲陽軍鑑品第五十四二十〕北條丹後守謙信跡のさたつをき、急とちうを打立春日山へ著、景勝に異見申子細は、〇中略信長と云大きに手だれなる大將、此人の仕形は、五畿内の弓矢もいづれもするになりたるをば、高聲をしておどし、緞子のうちがい袋に米を入、五騎十騎にて都へかけつけ、五畿内中國の町人に相似たる侍共、或は一向坊主などをば、いかにも信長は手がるにして、武篇を仕るとおどしかけ、弱敵の國共を澤山にとり、

〔會津陣物語三〕直江山城守兼續攻入最上事幷攻取幡屋城事

前田慶次郎利大ハ、〇中略乘替ハ烏黑ノ馬ノ二寸五分計ナルガ、殊ニ太ク逞ニ、梨地ノ鞍置セ、純子ノ嚢ニ糒米干味噌ヲ入テ三頭ニカケ、種子島二挺鞍所ニ付牽セタリ、

〔太平記二十六〕四條繩手合戰事附上山討死事

和田楠ガ勢百餘騎討レテ、馬ニ矢ノ三筋四筋射立ラレヌハ無リケレバ、馬ヲ踏放テ徒立ニ成テ、トアル田ノ畔ニ後ヲ差宛テ、胡籙ニ差タル竹葉取出シテ、心閑ニ兵粮仕ヒ機ヲ助テゾ並居タル、

〔太平記三十一〕鎌倉合戰事

サテハ只今ノ合戰ゴサンナレ、爰ニテ軍ノ用意ヲセヨトテ、兵粮ヲ仕ヒ馬ニ糟カハセテ、三千餘騎二手ニ分テ、鶴岳ヘ旗指少々差遣テ、大御堂ノ上ヨリ眞下ニゾ押寄タル、

〔關八州古戰錄三〕柿崎和泉守景家金井左衞門佐ヲ討取ル事

景虎〇上杉ハ渡ル瀨川ヲ渡リ、佐野足利境岡崎山ノ腰ニ下リ、辨當ヲ遣ヒ息ヲ休メテ、〇下略

兵糧奉行

〔關八州古戰錄三〕南方勢上總國久留里城攻ノ事

久留里勢彌々機ヲ得テ、田舍道二三里ガ間逃ル敵ヲ追懸シニ、向ヒノ郷栗坪村ノ地頭岡田豐後守、小豆交ジリノ强飯ヲ支度シ、追討ノ味方ニ是ヲ喰シメ、長途ヲ制止シテ、諸兵ヲ城ニゾ收ケル、

〔松隣夜話上〕謙信池ノ兩端ニ馬ヲ扣ヘ、辨當ヲ取寄セ、茶ヲ喫セラル丶所ヲ、金澤ト云者、出丸ヨリ鐵砲十挺計リ連テ、三十間程ニテ二繰マデ、タメツケニ打ケレドモ、〇下略

〔關八州古戰錄九〕太田三樂齋乘捕小田城事

三樂齋父子、〇中略多賀谷家人ニ白井金銅等、小田ノ城邊マデ打出、人馬ノ足ヲ休メ、兵糧認メ居タリケルニ、〇下略

〔見聞雜錄 武家名目抄輜重部所引〕角て信長方先手十一備之內、美濃三人衆へ上杉家相手取の究めは、氏家に越後方、芋川修理、稻葉に越後方、上杉彌五郎安東には越後方河田軍兵衛と定りし處、阿多賀の原にて上杉方は二番兵糧を遣ふ、尤一番の認めは夜の內七ッ時に食事ゑたる故、此方に各遣候樣にと有て認する、乍去謙信仰付には一二三の軍いたし候者共居敷て喰候へ、四番より十一番迄は騎馬は馬上、步武者は立て居て喰候へ、謙信とても未軍の手に不合は、馬上にて可喰との御意なれば、各嚴敷事とは乍存、小荷駄より配るを待合て云々、

〔播州佐用軍記上〕寄手總勢上月表ノ山々ニ取登之事

殘黨等東西ノ方へ逃去、又出張ノ陣ニハ是ヲ見テ、飯鍬ヲタヽキ、同音ニ鬨ヲ揚、頓テ川端ヲ引退キ、藪林ニ隱居テ兵糧ナド遣ヒ暫見繕ヒ、〇下略

〔豐內記上〕秀吉公ノ本陣モ山崎ニ推シ寄テ、暫ク兵糧ヲ遣ヒ、馬ノ口ナド洗ハセ、一息キ休ミ給フ處ニ、敵敗軍トゾ喚ハリケル、

〔信長公記十五〕三月〇天正十年廿四日、各致在陣、兵糧等迷惑可仕之旨被仰出、菅屋九右衛門爲御奉行、

糧職

御著到付させられ、諸卒之人數に隨て御扶持米、信州ふかしにて渡被下候次第也、

〔武家名目抄〕（職名二十四下）兵粮奉行　兵粮小奉行

按兵粮を辨備して軍士に配當するは、藏奉行の所役なり、鎌倉殿室町殿の時共に、兵粮奉行の名目聞えず、（兵粮をのみいふことは、古くよりいへる辭なり、建武式目追加の觀應三年八月廿一日の沙汰の内に、軍勢發向所々入當國（註略）本所領事、爲兵粮料所（中略）この兵粮方とあるは、兵粮の事にあづかる吏をいへるにはあらず、兵粮料の用に充らるべしといへるなり、この外にもまゝ兵粮方と見ゆるは、みなそのことにて有司の意にはあらず、）思ふにこの職名は、織田豐臣家の頃よりおこりしなるべし、凡此奉行は大かた出陣の時に定めらる丶つかさにして、常日の所職にはあらず、（但戰爭連綿の程は、平常其人を定めおけることもありしとみゆ、）織田家にては物頭ほどの者、兵粮の事を奉行せしとみゆ、豐臣家の時には五奉行の内にて兵粮奉行を承り、藏奉行の輩を其小奉行になせしとみゆ、（室町殿の時、政所執事代の下に、倉司ありしたぐひなり、）大名諸家には小荷駄奉行たる者、倉方の有司を率ゐて、兵粮配當の事をつかさどれり、（但豐臣家にも出軍の時、別に小荷駄奉行を命ぜしこともありとみゆ、九戸記には豐臣家の小荷駄奉行に曾根内匠あり、これは藏奉行にて兼たるにやいまださだかならず、）今の世大名諸家ともに、兵粮奉行といふ名目のなきにても、全く臨時のつかさなりしを知べし、

〔日本後紀〕（二十一嵯峨）弘仁二年七月辛酉、出羽國奏、邑良志閉村降俘吉彌侯部都留岐申云、己等與貳薩體村夷伊加古等久構仇怨、今伊加古等練兵整衆、居都母村、誘幣伊村夷將伐己等、伏請兵粮、先登襲擊者、臣等商量、以賊伐賊、軍國之利、仍給米一百斛、以勵其情者、許之、

〔日本紀略〕（三村上）天暦元年二月十八日甲戌、右大臣（○藤原實賴）著宜陽殿相定云、鎭守府將軍貞盛朝臣申使並茂爲狄坂丸等被擊殺、其員十三人、件坂丸等徵發軍士、春運兵粮、將以討滅云々、先差遣國使於賊地、可令勘糺之由、給官符、

〔太平記〕（十七）瓜生判官心替事附義鑑房藏義治事

同（○延元元年十月）十四日、義助、義顯三千餘騎ニテ敦賀ノ津ヲ立テ、杣山へ打越給フ、瓜生判官保、舍弟兵

庫助重、彈正左衞門照兄弟三人、種々ノ酒肴舁セテ、錆並ノ宿ヘ參向ス、此ノ外人夫五六百人ニ兵粮ヲ持セテ、諸軍勢ニ下行シ、毎事是ヲ一大事ト取沙汰シタル樣、誠ニ他事モナクニ見エケレバ、大將モ士卒モ皆タノモシキ思ヒヲナシ給フ、

〔總見記 六〕江州六角家幷蒲生家由來事

凡ソ江州ハ城外ノ藩屏ニシテ、大切ノ要地ナリ、江州ニ關ヲスエテ、上洛ノ通路ヲフサギ、兵粮ノ運送ヲトゞムル時ハ、軍勢在京ノ住居ニ苦シミ、長陣ノ支度ヲ失フ故ヲ以テ、代々ノ公方深ク是ヲ恐レ玉ヒ、イカニモシテ六角ガ心ヲ傾ケ、味方ニ服シテ、洛外ノ守護タル事ヲ計ラハセ玉フガ故ニ、御恩厚フシテ彼家以ノ外ニ繁昌セリ、

〔川角太閤記 三〕一宮部法印陣取程近陣取衆備藤神右衞門、備藤神右衞門後、身上相果申候、黑田勘兵衞父子は、其樣子は右に如申上候、節所大難所を越、總軍兵入はまり申候、兵粮米つゞき兼申、上下四日計もやかつゑ申候、食物にはところ、山の芋、竹の子などの體にて御座候つる處へ、大將大納言殿〇豐臣秀長兵粮一万石計、日向の浦著申候、上下の推量には定て此米總御陣へ可被遣と存候處、案に相違して、此米高く御賣被成候、上方衆も備藤神右衞門を始と仕、大將軍には不似合御裁判哉と取沙汰仕候、され共大名小名御本陣大納言どの江御見舞被仕候、輝元御見舞被申付、大名衆先々二三人も御座候處へ、輝元御見〇見上恐脫目字に被罷出候、大納言殿御意には今日は雨中に御座候、緩々と是に御咄被成候へ、辨當振舞可申との御意なり、各は忝奉存候、御振舞被下可罷歸との御返事被仕候、備藤神右衞門は罷出候處に、跡より御使を被立、皆々是に御座候間、神右衞門罷歸御馳走申せと被仰遣候處、神右衞門慮外成御返事仕候と聞へ申候、罷歸可申候へど、折節はたご錢持合せ不申候迚、夫より直に陣屋へ被歸候と相聞へ申候、夫も餘り大納言殿を存過し、右の御米賣候を笑止さの餘りに、惡口申され候と聞へ申候事、

一二三日過毛利殿兵粮米船二三艘著申候、輝元分別には此兵粮米總陣へ進じ度候得ども、右に大納言樣米御賣被成候に、輝元きよう言葉不入者とて、言葉に品をあらせ、總陣へ被申遣候は、我等兵粮澤山著申候、御用に候はゞ借可申候、此米京都にて御返被成可被下候、本にて被下候へ共、五わりにあたり申候、是にて請取申間敷くと、陣中へ被申渡候、いまだ米とぼしき故、大形の衆中御借被成候、後聚洛にて皆御返被成候時、輝元返事には、此時の音信にて御座候とて、一粒も其米受取不被申候事、

〔村越道半覺書〕五月〇元和元年三日秀忠樣御出張、同五日家康樣御出馬令決定、家康樣は大坂路より被寄に相定候也、諸軍勢三日の腰兵粮所持可仕之旨、御觸有之、小荷駄壹疋にても無益之由被仰出、家康樣御自身之御粮米五升、味噌貳升、鹽三升、鹽鯛壹枚、鰹魚十、成程輕き御支度にて、今度之御合戰御勝にても御負にても、三日目に者御歸京可被遊之旨被仰出候事、

〔續武將感状記〕權現尊君〇徳川家康大坂乙卯ノ役ニ、御陣中干肴精米各幾許ト御膳米五升、干鯛一枚、備樽、味噌、鰹節有應ニ持参、此外ハ無用、御頭長持一ツノミナリ、松平淨慶ニ上意ナリ、上意ニテ、其員數ノ輕少ナルハ、不日ノ成功ヲ示サセ給フ御奥旨也ケルトゾ、今郡主モ其分量ニ不詳人多カルベシ、

〔校合雜記〕八一大坂陣の時に、城中より落人來るを、或人搦捕て見せ奉る、家康公其時彼の落人に尋させ給ふは、城中の米の賣買は如何程するぞとあれば、具に直段を申上、又狹間一ッに足輕幾人立て居ぞとあれば、三人程なりと答ふ、塀一間に士は如何程掛りて居ぞとあれば、二間に一人程づゝと答ふ、騎馬足輕の預たる士は如何程有ぞと問せ給へば、幾人有之と答ふ、其後浮勢の員數米倉の在所迄問給ひて書記させ、只今は何々と云ふ所より米を出すやと、倉數を能々尋させ給ひて、城の大抵を分別し、何方何間何百間有べきと積り、倉數を考て米の直段是程なれば、米何程有るべしと積り、城中總人數の兵粮を目論給ひ、市中の米は賣直を以て多少を積り、扨又城內

に賣餅もありやと問せ給へば、有之と答ふ、其大小を尋させ給ひ、白粉赤小豆兩やうの餅を賣やと問せ給へば、何れも有之て、直段も輙しと答ふ、さては城中にも食物多きものなりと、御心に不審し給ひて、餅の大中小を土にて作らせ、落人に見せて、其大小を云せて問給ひ、又器物に堅き土と、柔なる土と、大に緩き土と別々にして、餅を三やうに作て、城中の賣餅何れの剛柔ぞと問せ給へば、其中にて大きに緩きを指して是れ程也と答ふ、其時家康公さては城中には米穀卓散にはあるまじと察し給ひて、落人は髮を剃りて、城中へ追入れ給ふ、

〔長澤聞書〕一ながらの川張番に又兵衛〈○後藤〉出申候向は、松平周防殿、岡部内膳殿にて、又兵衛彼申候は、か樣の川越候時分は、具足は鑓にかけき申候、萬桶、めんつ、辨當などは入不申候、〈○中略〉食も出來次第、丸め何も手に請給申候がよく御座候事、

〔雜兵物語〕夫丸　馬藏〈○中略〉

おれがおゝぢをば、馬兵衛と申たが常々咄し申たが、籠城の時は、〈○中略〉米は壹人に六合、鹽は拾人に壹合、味噌は十人に貳合と申す、夜合戰などが有べい時は、米が増し申てごさるべい、米も一度に渡さば上戶めは、酒に造てくらひ申ものだ程に、三日四日のをば一度に渡し、五日より日數おほくは飯米渡さない物だと申たが、若籠城の有まいでも御座ない、是は古法で御座り申所で、御心得にもなり申べいとぞんじて、お耳に入申たが、〈○下略〉

○

輜重

〔書言字考節用集〕〈七器財〉輜重〈コニダ〉

〔漢書〈五十二〉韓安國傳〕當是時、漢伏兵車騎材官三十餘萬匿馬邑旁谷中、〈○中略〉約單于入馬邑縱兵、王恢李息別從代主撃輜重、〈師古曰、輜衣車也、重謂載重物也、故行者之資總曰輜重、〉

〔兼貞齋筆記〕一小荷駄ノ事、牛馬トモニ宜候、小荷駄壹匹ニ口付二人ハ定法ニ候ヘドモ、夫ニテハ

人數多ク無益故、二四ニ三人掛リ、内一人一日ガハリニシテ、才料ノ心得ニ候、小荷駄奉行ノ格式ハ武者奉行同格ニ候、奉行一人ニ兵士二三十騎、足輕四五十人モ附候事、其上ニ鐵炮大將三四頭有ベシ、一手切リノ小荷駄ニハ、鐵炮大將二頭、足輕五六十人、其餘ノ義ハ其分限ニ可寄、一手ニ一本宛小荷駄印ノ昇有ベシ、是ハ一手々々ノ將ノ紋ヲ三ツ附ケ可申、小荷駄請取渡シ諸流同斷也、尤小役人ハ不申及、其家々ノ作法ニ准ベキ也、○中略

一乘馬、小荷駄ツナギ樣ハ、其主人々々ノ家來一人宛夜分ナドハ替合、小細引ヲ轡ニ通ロヲヨク割リ、右小細引ヲ腰ニ付、手ニ持添可置、腹帶尤ヨクシメ、カヒバナド其儘ニテ宜候、

一兵粮積リハ色々樣々アリ、能方ヲ取リ用フベシ、小荷駄ハ小荷駄ノ兵粮ト云事ナシ、諸流トモニ小荷駄ノ兵粮ガ增故、又小荷駄ヲ增ト云事アリ、甚不宜也、小荷駄口付ノ兵粮ハ小付ニ致シ、直ニ其馬ニ可付、右ニテ宜候、

〔海國兵談五〕小荷駄附粮米　小荷駄は唐土にて輜重ト云、三等あり、車に載ルあり、牛馬に附ルあり、人の擔フあり、都て小荷駄は軍の根本なるものなれば、唐土の法は輜重をば、軍の中央に置て片端には置ざる事也、日本風にて小荷駄をば、一跡に置事本意を失る事なるべし、其訣は不意に敵に當ラるゝ時は、小荷駄を被切取べし、了簡あるべき事なり、　小荷駄は粮米幷に炊道具、其外陣用也、陣用はなるだけ省て、冬ならば寒氣防ギの桐油木綿の胴服一ツを用べし、何レ其場に臨ては寒氣强クとも、薦むしろ藁等の類を引被て事足ものなり、尤長陣には虱雲霞の如ク生ズル者也ト云リ、是等の事も覺悟あるべし、　小荷駄は平場を押には車に如はなし、其次は牛馬を用ユ、急に難處を押行には步荷便利なり、尤貫目の積も預定メ置べし、步荷は米ならば、一斗內外、雜具ならば六貫ロを限ルべし、馬は强キには米六斗、弱キには四斗位、雜具ならば二十貫目に限べし、牛も馬に準ずるなり、車は强馬の四駄振を載て、牛ならば一疋、人ならば四人して推べし、扨一

人の食は一日一升ト積て、一斗の米は十人一日の食なり、餘は是ヲ推て知べし、

粮米は兵粮奉行の手懸リにて、諸手江割渡スなり、其法下に記ス、陣用の荷物は一組切に寄合て印を附べし、たとへば陪卒無の人數組ならば、五伍二十五人寄合て一箇に拵置、番頭、百人頭、小組頭の姓名を書記シ、並に一組の印を附置べし、又陪卒ある人數組ならば、一伍五人寄合に箇置、三頭の姓名、幷に一組の印を付置べし、

押前にも陣所にも小荷駄を守ル、兵士を別に定メ置べし、此人數の多寡は時宜に因べし、

自國を遠ク離る程、諸事不自由に成ものなれば、愈小荷駄を太切にして、切取レざる樣に計ルべし、是迄小荷駄扱の大略なり、

〔三代實錄 三十五 陽成〕元慶三年三月二日壬辰、正五位下守右中辨兼行出羽權守藤原朝臣保則、飛驛奏言曰、○中略案ニ去延曆年中、被ㇾ下ニ當道陣圖ニ、以ニ一萬三千六百人ニ、爲ニ一軍、分ニ作三軍、輜重八百人、擔夫二千人、而今上野下野兩國之軍千六百人、輜重擔夫二千餘人、好蔭 ○陸奥權介坂上大宿禰 所ㇾ率之兵五百人、輜重擔夫千餘人、因ㇾ茲言ㇾ之多違ニ舊例、

〔陸奥話記〕十六日、○康平五年八月 定ニ諸陣押領使、○中略 翌日到ニ同郡 ○栗原郡 萩馬場、去ニ小松柵ニ五町有餘也、○中略 敗ニ宗任軍、○中略 休ニ士卒ニ整ニ干戈ニ不ニ追攻擊、亦遭ニ霖雨ニ徒送ニ數日、粮盡食盡、軍中飢乏、磐井以南郡々、依ニ宗任之誨ニ、遮ニ奪官軍之輜重、

〔新田老談記 上〕謙信公 ○上杉 上モ新田早鐘ノ音ヲ聞驚、先勢小荷駄ト紛レ添テ、早々渡良瀬川ヲ越テ、佐野、足利ノ境成岡崎山へ御著有テ、跡勢ヲ待給ヒケリ、

〔甲陽軍鑑 十下 品第三十三〕永祿六年癸亥二月十二日に、信玄甲府を御立あり、○中略 小荷駄一疋に、挑燈一ツばかりづゝ結付、馬負にも、一人に一ツづゝ續松もたせ、旗本にて、棹のさきに挑燈を付、火を立、あぐるに付ては、其方請取の小荷駄共に火を立させ、たかき所へおいあげさせよと被ニ仰付、

〔甲陽軍鑑十一上品第三十五〕信玄勝利うたがひあるまじきとありて、七日〇永禄十二年十月に見間瀬へをしよせらるゝ、總手の小荷駄、あとの小田原勢を氣づかひ、總軍左のかたをかね田といふ所迄をしかちにまいれと、小荷駄奉行甘利殿衆に被仰付故、そう田、つま田迄はやめて跡をまち候間に、陸奥守内設樂越前父子、物見にいで、かね田のうしろ谷の上より靜に物見を仕る、〇中略信玄公内藤修理をめし、小荷駄奉行を被仰付、內藤申は、われら上野の郡代に、指置なされ候へば、關東むきの御はたらきにかゝる御さき、ひくに殿がりと有事は弓矢の作法にて候に、小荷駄奉行之儀は迷惑なりと申候、信玄公被仰は、先年北越の輝虎小田原へ發向尋常に仕候へ共、分別うすうして引時敗軍するは、第一に小荷駄を切くづされて敗軍なれば、明日の小荷駄奉行、信玄が仕度と存ずる也、〇中略明日の小荷駄奉行は內藤修理小荷駄奉行也、小幡尾張守のまと云所へ引こし、つく井の城のをきへと被仰付、

〔家忠日記追加十一〕天正十八年二月二日、松平主殿助家忠兵を率して三州深溝の城を發駿府に赴く、此月大神君相州御進發の軍令を下し玉ふ、〇中略

一小荷駄押事、兼而可相觸催候、軍勢に不相交樣に堅可申付、若猥りに軍勢に相交者可成敗事、

〔板坂卜齋記中〕岐阜より赤坂迄の備の內へ、小荷駄不可入と御法度諸勢備之內、間ある處にては小荷駄本道へ出候、備押付次第小荷駄は道の兩脇田へおろす、〇中略十七日〇慶長五年九月午の時に、佐和山の城へ取掛候人數を御覽のため出御候て、御機嫌は殘所なく能被成御座候、〇中略多勢ゆゑ十六日に通る事ならず、十七日小荷駄無際限來候、恐候て扣通り不申候處に、小荷駄馬とも不殘通り候へと、御直に御意、荷付馬三十疋計通り、次ニ野陣小屋道具付候馬三疋來る、此小屋道具付候は誰がぞと御尋被成候、恐候て不申上馬を扣居候に、問候へと頻りに御意、御側衆參候て尋候へば、阿部左馬介此時貳千石小荷駄と申候、其を聞屆ケさせられ、今時の

小荷駄奉行

若き者是程の陣へ、小屋道具沙汰の限と御腹立、昔のものはか樣にはなきにと御腹立、是に恐れて小荷駄通り兼候を御覽じ、通し候へと再三の御意、際限なく小荷駄通り候內に、小屋道具付候馬十三疋、同印にて通候を御覽じ、是は誰ぞと御腹立の上御尋、渡邊忠右衛門石三千小荷駄と申候を被爲聞、兎角の御意はなし、〇中略十六日には御先手六萬計、其次御旗本際限なし、小荷駄とも關ヶ原より佐和山迄參り候、

〔會津陣物語 三〕直江山城守幷上杉諸軍勢引拂長谷堂事附淵川合戰之事

上杉ノ諸軍須川ニ傍テ、東ヲサシテ十町餘引ケル處ニ、政宗精兵八千ヲ左右ニ隨ヘ、眞黑ニ成テゾ追來リケル、上杉ノ小荷駄雜人共、直江ガ前ヲ推シケルガ、是ヲ顧テ色メキワタリ崩ントセシヲミテ、政宗步者ヲバ跡ニサケ、馬武者計ニテ急ニ追詰來リケレバ、上杉ノ軍小荷駄ニ推立ラレ崩ケル、

〔奧羽永慶軍記 三十二〕上ノ山合戰會津勢敗軍事

九月十七日、會津勢ノ先手稻村造酒丞、椎野彌七郎上ノ山城邊ニ向城ヲ構ヘ、諸具ヲ小荷駄ニテ持運ブ、

〔奧羽永慶軍記 十一〕最上東根合戰ノ事

酒田ノ湊ヨリ川舟二百餘艘ヲ催シ、一艘ニ人三十餘人馬三疋ヅヽ取ノセ、小荷駄奉行、兵粮役人ハ別舟ニ乘セ小荷駄五十疋ヲ舟五艘ニ乘セニケル、猶小荷駄不足タリトイヘドモ、陸ニノボラバ、最上ノ馬ヲ奪取ントノ支度也、

〔武家名目抄 職名二十四下〕小荷駄奉行　按、小荷駄とは、何と定れる事なく、くさ〳〵の物を負する駄馬をいへるなれど、行軍の時は兵粮を以て第一の用とするが故に、戰國にて小荷駄といへるは、なべて兵粮を負せたる馬をいへるなり、凡此奉行たる輩は、陣列の最末に列なり、小

荷駄を守りて、食時にいたれば、これを分配する有司なり、されば接戰をむねとする所職にはあらざれども、其進退不便なれば兵粮を奪はるゝことなどある故に、兵法を辨せる功勞の者を以て、此奉行に命ずるならひなり、或は小荷駄押ともよべるは、駄馬の後にありて、其一隊を整へ混亂なさしめざるつかさなればなり、此奉行は戰國の職掌なれば、治平の世には設けざることとなり、

〔甲陽軍鑑十下品第三十二〕謙信はあまがす近江守と云大剛の侍大將雜兵千の備をはる〱次にたて、直江二千の侍大將に小荷駄奉行を申付、〇中略永祿四年辛酉九月十日信州川中嶋合戰とは是也、

〔甲陽軍鑑十一上品第三十五〕さがみ川を越に先衆は當麻、二の手は磯邊、御旗本は新道、跡備はさま、小荷駄奉行甘利殿衆は、米倉丹後、畠加賀兩人下知に付、新道をこして諸手へ小荷駄をくばる、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕甲府の御留守御藏前衆、御曹司衆、御料人衆、御ゑやうだう衆、四衆合百廿八騎、御藏前衆之内にて、五騎は、駿州むきの代官衆、御扶持方萬のために御供也、甘利衆は小荷駄の奉行也、

〔上杉輝虎注進狀〕一輝虎小荷駄奉行中條兵次郎ハ、信玄方致敗軍被追懸候、甲州勢躑崎へ參リ候ヲ見テ、小荷駄崩申候所ヲ、地之百姓一揆共物取ニ出候而、其荷物ヲ奪取候故、中條兵次郎散々ニ合戰仕候ヲ見テ、信玄人數ヲ推返シ合戰ヲ始、味方餘討死候得共、中條切拂堅固ニ罷除候事、

古事類苑

兵事部二十三

軍團

雜載

古事類苑

兵事部二十三

軍團

軍團トハ、兵士ノ團結屯聚スル所ニシテ、每國ニ數所アリ、而シテ團ニハ兵ノ多少ニ從ヒテ、大中小ノ差アリ、皆軍毅、主帳、校尉、旅帥、隊正ノ職アリテ之ヲ統ブ、凡ソ兵士ハ人別ニ自ラ糒鹽及ビ弓矢等ノ戎具ヲ備ヘ、以テ行軍ノ用ニ供ス、或ハ其物ニ由リテハ、一火若シクハ一隊ヨリ出スモノアリ、又兵士ハ分チテ步騎ノ二隊ト爲シ、常ニ武事ヲ演ジ鼓角ヲ習ヒ、倉庫及ビ城隍ヲ修理シ關ヲ守リ、事アレバ征討ニ從ヒ、罪人ヲ逮捕シ、外國ノ使及ビ囚人ヲ護送スル等ノ事ヲ以テ職トス、然ルニ國司及ビ軍毅ノ輩、私ニ之ヲ使役スルコト往々コレアルニ由リ、屢ヽコレヲ禁ジタリ、又兵士ノ番直ハ文武天皇ノ慶雲元年ノ制ニハ、分チテ十番ト爲シ、一番ヲ十日ト爲シヽガ、桓武天皇ノ延曆二十年ニハ畿內ハ左右京職ニ準ジ、二十人ヲ一番ト爲シ、一月ニ二番ト爲シ、一番ヲ十五日ト爲シタリ、而シテ其賦役ノ事ヲ言ヘバ、兵士ヨリ以上大毅マデハ、庸及ビ雜徭ヲ免ゼラレ、特ニ左右京職ハ調ヲモ免ゼラレシガ、桓武天皇ノ延曆元年畿內モ京職ニ準ゼラレ、平城天皇ノ大同四年ニハ、京職ノ兵士ガ徭錢ト稱シテ、錢ヲ輸シテ役ヲ免ルヽコトノアリシヲ、五十文ヲ增シテ八十文トセリ、軍毅ハ部內ノ人ヲ取ルコトニテ、元正天皇ノ靈龜二年ニハ、郡司ノ三等以上ノ親ヲ連任スルコトヲ禁ジ、養老三年ニハ、兵部ノ判補タリシヲ太政官ノ判任ト爲シ、孝謙天皇ノ天平寶字元年ニハ、白丁ヲ軍

毅ニ任用スルコトアルヲ改メテ、六衞府ノ中ヨリ勇健ナル者ヲ選擇シテ之ヲ擬任ス、其後ニハ其國ニ限リテ職田ヲ給セラル、

抑、軍團ノ制ハ早ク廢絶シタレド、德川幕府ノ末ニ、兵士タルノ年限ヲ年齡ニ由リテ定メタルハ、古ノ軍團ノ制ニ似タリ、要スルニ軍團ノ事ハ、將帥篇、兵卒篇、及ビ官位部左右兵衞府篇、左右衞門府篇、大宰府篇等ニ收ムル所ノ兵衞、衞士、防人ト相關係シタレバ、互ニ參看スベシ、

名稱

〔伊呂波字類抄久人倫〕軍團（クンダン）イクサノツカサ　〔同久疊字〕軍團（タンダン）兵官也

〔令義解五軍防〕凡兵士簡點之次、皆令比近團割、〈謂團者、聚也、〉

〔令抄軍防〕軍、軍士也、　軍團〈○中略〉團聚兵之義、

所在

〔唐書百官志四十九上〕十六衞〈○中略〉長史各一人、從六品上、掌判諸曹五府外府稟祿、卒伍軍團之名數、器械車馬之多少、小事得專達、每歲秋贊大將軍考課、

〔唐書兵志五十〕大宗貞觀十年更號統軍爲折衝都尉、別將爲果毅都尉、諸府總曰折衝府、凡天下十道置府、〈○中略〉凡府三等、〈○中略〉士以三百人爲團、

〔令義解五軍防〕凡兵士簡點之次、皆令比近團割、〈中略〉假令軍團在添上高市兩郡者、以葛城人配高市團、以山邊人配添上團之類也、

〔續日本紀二十六稱德〕天平神護元年十月辛未、行幸紀伊國、丙戌、到河內國丹比郡、閏十月辛卯、詔河內、和泉今年之調、皆從原免、〈○中略〉兩國軍毅四人、各進一階、是日、還到因幡宮、

〔東大寺正倉院文書十七〕駿河國天平十年正稅帳

防人部領安倍團少毅從八位上有度部黑背〈○中略〉

從陸奧國送攝津職伴因部領使相摸國餘綾團大毅大初位下丈部小山〈○中略〉

伴因部領大住團〈○相模〉少毅大初位下當麻部國勝〈○中略〉

伴因部領安倍團少毅從八位上有度部黑背〈○下略〉

〔續日本紀二十七 稱德〕天平神護二年七月己卯、近江國志賀團大毅少初位上建部公伊賀麻呂賜姓朝臣、

〔延喜式二十六 主稅〕凡陸奧國七團軍毅主帳卅五人、粮米准太宰府統領、以正稅給之、

〔續日本紀十 聖武〕神龜五年四月丁丑、陸奧國請新置白河軍團、又改丹取軍團爲玉作軍團、並許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官謹奏

諸國軍毅兵士事

陸奧國團六院　大毅六人　小毅六人　兵士六[　　]

團團一院　毅　一人　兵士二百人

院

謹奏

天平十八年十二月十五日

奉勅依奏

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

一分番令守城塞事

兵士六千人 並勳九等已下、白丁已上、　舊數二千人 名取團一千人、玉造團一千人、　今請加四千人 白川團一千人、安積團一千人、行方團一千人、小田團一千人、

右此國、鎭兵之外更點兵士、多則一萬、少則二千、應機隨變、無有定例、伏請更加四千人、通前六千人、分結六番、以旬相代、因循前例、可食私粮、唯勳位者、免夫妻口分租、示別白丁、〇中略

以前奉勅、陸奧國司奏狀如前、具任所請、遂勤兵權、不可簡略、

弘仁六年八月廿三日

〔續日本後紀十三 仁明〕承和十年四月壬戌、陸奧國言、諸團軍毅等款云、兵士年役六十箇日、分結六番、以旬

相代、口食私粮、身直城塞、而道路迢遠、頗疲往還、家居少日、何濟産業、因茲逃散者多、民不安堵、望請更加一千人、與本幷八千人、分結八番、延彼番程、以息弊兵、唯不更置團、周加諸團者、許之、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應給七團軍毅主帳卅五人粮米事

國府廿人　鎭守府十五人

右得陸奧國解偁、件軍毅等不顧私業、晝夜勤戍、邊要之備、晉在伊人、方今健士兵士等全食官粮、結番直任、至于軍□□團□□苦粮食、望請□□□□□□□□□□人粮准太宰府統領、以正稅被宛給、謹請官裁者、正三位行中納言兼民部卿藤原朝臣冬緖宣、奉勅宜正任□□□依請、

元慶（略）〇下

〔續日本紀桓武三十八〕延暦三年十二月乙酉、但馬國氣多團毅、外從六位上川人部廣井、進私物助公用、授外從五位下、

〔出雲風土記〕意宇軍團、卽屬郡家、熊谷軍團、飯石郡家東北廿九里一百八十歩、神門軍團、郡家正東七里、

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平十年正稅帳

部領使（安藝國佐伯團擬少毅權本連音足、將從一人、合二人、往來八日、食稻五束六把、酒六升四合、鹽三合二勺、）

〔東大寺正倉院文書三十五〕周防國天平十年正稅帳

十二月廿日向京（略）〇註部領使（長門國豐浦團五十長凡海部我妹、往來八日、食稻三束二把、酒六升四合、鹽一合六勺、）

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應分番配置長門國軍毅兵士事

豐浦團軍毅二人（一人權任）　下關權軍毅一人　主帳一人　兵士百人

右得彼國解偁、□□□□不論陸海、共經此關、譬猶輻之湊轂、語之從咽、而不置關戍、無呵出入、勘過疎略之責、時有及於國吏、望請依件分配、以備警固、謹請官裁者、中納言兼左近衛大將從三位行陸奧出羽按察使藤原朝臣基經宣、依請、

貞觀十一年九月十七日

〔日本紀略嵯峨〕弘仁四年三月辛未、太宰府言、肥前國司今月四日解偁、基肆團校尉貞弓等、去二月廿九日解偁、新羅一百十人、駕五艘船、著小近島、與土民相戰、○下略

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應減定諸國兵士事

合兵士一萬七千一百人　減八千一百人　定九千人

筑前國四千人　團四　減二千人　定二千人團別五百人

筑後國三千人　團三　減一千五百人　定一千五百人准上

豐前國二千人　團二　減一千人　定一千人准上

豐後國一千六百人　團二　減六百人　定一千人准上

肥前國二千五百人　團三　減一千人　定一千五百人准上

肥後國四千人　團四　減二千人　定二千人准上

右被右大臣宣偁、奉勅兵士之設本備非常、邊戍之要莫大於此、誠須蓄力養銳、奸宄是防、以逸待勞、當彼機急、今聞府國之吏、或非其人、既違公憲擅役私門、名是兵士、實同役夫、身力疲弊、不足爲兵、雖有非常、何能得支、今區寓人寧、中外無事、多置戍兵、徒利貪吏、靜言於此、爲弊良深、宜留其強壯者、徐皆依件減却、其軍毅之數亦准於此、但所定者、國司依格、毎番敎習、自今以後、不得□役非理之事、府國宜□□□□□者□天平勝寶五年十月廿一日格、解却見任、永不選用、

職員
職掌

弘仁四年八月九日

〔令義解一職員〕軍團

大毅一人、掌檢校兵士、充備戎具、（謂、充備兵士之戎具也、）調習弓馬、簡閲陣列、（謂、檢閲軍行之陣列也、）事、少毅二人、掌同大毅、

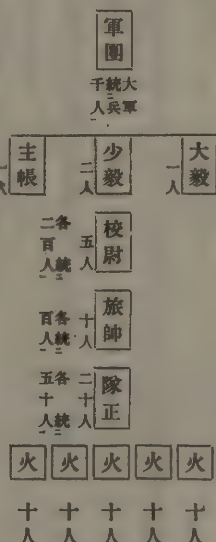
主帳一人、校尉五人、旅帥十人、隊正廿人、

〔唐律疏議十六擅興〕旅帥校尉、減隊正一等、果毅折衝、隨所管校尉多少、通計爲罪、（其主典以上、並同州縣之法、）

疏議曰、依軍防令、每一旅帥管二隊正、每一校尉管二旅帥、既非親監當者、同減隊正一等、

〔制度通十二〕

本朝軍團統轄圖



〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國天平六年計會帳

天平五年十一月　一廿四日進上勝部建島二目盲替事　右、差神門軍團五十長出雲積友麻呂充
部領□□（〇中略）

天平六年四月　一八日進上衞士逃亡并死去出雲積首石弓等參人替事　右附、意宇軍團二百長
出雲臣廣足進上、　一廿日進上衞士勝部臣弟麻呂逃亡替事　右附、神門軍團五十長刑部臣水
刻進上、

七月 一廿三日進上衛士私部大嶋死去替事 右附熊谷軍團百長大私部首足國進上、
〔令義解 軍防五〕凡兵士上番者、向京一年、向防三年、不計行程、〇中略
凡差兵士、充衛士防人者、父子兄弟、不得併遣、（謂祖孫亦不可併遣、雖於兄弟、若祖先異國者、併遣无妨也、）若祖父母父母老疾合侍、
家無兼丁、（謂正丁、即不限親疎也、）不在衛士及防人限、（謂以免軍名充侍也、）
〔唐六典 兵部五〕若父兄子弟不併遣之、若祖父母父母老疾（唐書志疾下有家字）無兼丁、免征行及番上、
〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國天平六年計會帳
二月 一十四日符壹道（應定兵士番狀）以三月廿日到國
〔令義解 軍防五〕凡兵士以上、皆造歷名簿、（謂校尉以下、即主帳亦同、其闕殺者、是外武官、依職員令、別須有名帳也、）二通、並顯征防遠使處所、（謂征者、率師伐罪也、防者、防人也、遠使者、使外蕃、其監使化內、遠處者亦同也、）仍注貧富上中下三等、（謂富為上等、次為中等、貧為下等也、）一通留國、一通每年附朝
集使送兵部、若有差行及上番、國司據簿以次差遣、（謂差遣征討及防援等之類也、）
〔唐律疏議 擅興十六〕疏議曰、出給戎仗兵器、非得公文、而輒出給者、主司徒二年、主司謂當判署者、雖有符
牒合給、未判而出給、謂有符牒到司、仍未行判、即準符牒出給者、杖一百、其於留守所及諸州府差發、
或應用魚符勅書、而不用者、亦徒二年、
〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國天平六年計會帳
十月 一同日（〇廿一日）進上公文貳拾陸卷肆紙（中略）兵士簿目錄一卷、兵士歷名簿四卷、
〔事類本類聚三代格 十八〕太政官符
應差左右京職兵士四百八十人（職別二百卌人、各以廿人為一番、月別役二番、番別十五箇日、）
右被右大臣宣偁、奉勅、往者在外所司、私使兵士、徒施朝憲、遥費黎庶、所以停廢此色、差點健兒、思省勞
煩、□布恩澤、如聞左右兩京、掌殊諸國、駈策兵士、莫非公途、何者行幸則先驅馳道、尋常則衛護宮城、巡
管內而糺非違、按□人而守囚禁、如斯之類、差科處多、代以健兒、何堪濟事、前從停廢、實在恤人、今乏弊

備、豈謂爲國、宜左右兩京、停却健兒、更置兵士、依前件差科、事色宜准舊例、

延暦廿年四月廿七日

〔令義解 五 軍防〕凡置關應守固者、（謂境堺之上、臨時置關應守固、皆是也、）並置配兵士、分番上下、其三關者（謂伊勢鈴鹿、美濃不破、越前愛發等是也、）設鼓吹軍器、國司分當守固、（謂目以上也、言三關者、國司別當守固、其餘差配兵士、）所配兵士之數、依別式、

〔續日本紀 三 文武〕慶雲元年六月丁巳、勅、諸國兵士團別分爲十番、○中略 其有關須守者、隨便斟酌、令足守備、

〔續日本紀 八 元正〕養老二年十一月癸丑、始差畿內兵士、守衞宮城、

〔續日本紀 二十三 淳仁〕天平寶字五年十一月丁酉、以從四位下藤原惠美朝臣朝狩爲東海道節度使、正五位下百濟朝臣足人、從五位上田中朝臣多太麻呂爲副、判官四人、錄事四人、其所管遠江、駿河、伊豆、甲斐、相摸、安房、上總、下總、常陸、上野、武藏、下野等十二國、撿定船一百五十二隻、兵士一萬五千七百人、子弟七十八人、水手七千五百二十人、數內二千四百人肥前國、二百人對馬島、從三位百濟王敬福爲南海道使、從五位上藤原朝臣田麻呂、從五位下小野朝臣石根爲副、判官四人、錄事四人、紀伊、阿波、讃岐、伊豫、土佐、播磨、美作、備前、備中、備後、安藝、周防等十二國、撿定船一百二十一隻、兵士一萬二千五百人、子弟六十二人、水手四千九百二十人、正四位下吉備朝臣眞備爲西海道使、從五位上丹治比眞人土作、佐伯宿禰美濃麻呂爲副、判官四人、錄事四人、筑前、筑後、肥後、豐前、豐後、日向、大隅、薩摩等八國、撿定船一百二十一隻、兵士一萬二千五百人、子弟六十二人、水手四千九百二十人、皆免三年田租、悉赴弓馬、兼調習五行之陣、其所遺兵士者、便役造兵器、

〔東大寺正倉院文書 二十四〕御野國加毛郡半布里大寶貳年戸籍

中政戸務從七位下不破勝族吉麻呂戸口十七○中略

次石依（年廿三兵士、矢作、）

〔令義解 五 軍防〕凡軍團、○中略 倉庫（謂貯積鹽者曰倉也、藏兵器者曰庫也、）損壞須修理者、十月以後聽役兵士、（謂上番兵士、凡諸條稱役兵

任免

士令修理之外、亦不令役兵士也、〇下略

〔令義解五軍防〕凡城隍崩頽者、役兵士修理、謂、隍者城下坑也、役兵士者、役上番之兵士也、若兵士少者聽役隨近人夫、逐閑月修理、謂止爲人夫立文、不爲兵士也、其崩頽過多、交闕守固者、隨即修理、役訖、具錄申太政官、(中略)謂此止據人夫、其兵士、隨上番日多少役也、

〔續日本紀二十一淳仁〕天平寶字二年十二月丙午、徵發坂東騎兵、鎭兵、役夫、及夷俘等、造桃生城小勝柵、五道俱入並就功役、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

禁斷兵士差科雜役事

右奉勅、國司違法、苦役私業、悉棄弓箭、還執鉏鍬、自今以後、若有犯者、解却見任、永不選用、其番上兵士、集國府日、國司次官已上、□□教習□□□□□止節度、兼擊劍弄鎗發弩拋石、

天平勝寶五年十月廿一日

〔日本後紀八桓武〕延曆十八年十一月甲子、勅、〇中略其延曆十五年以還有犯國司以下、宜依法斷、以懲將來、但犯佃田三町以下、及驅使兵士者、特從寛宥、

〔令義解五軍防〕凡蕃使出入、傳送囚徒及軍物、須人防援者、謂防護之意也皆量差所在兵士遞送、

〔日本靈異記中〕常鳥卵煮食以現得惡死報緣第十

和泉國和泉郡下痛脚村、有一中男、姓名未詳也、天年邪見不信因果、常求鳥卵煮食爲業、天平勝寶六年甲午春三月、不知兵士來告中男言、國司召也、見兵士腰負四尺杜、卽副共往、〇下略

〔日本靈異記下〕滅塔階仆寺幢得惡報緣第卅六

正一位藤原朝臣永手者、諸樂宮御宇白壁天皇御時太政大臣也、延曆元年頃、大臣之子、從四位上家依爲父惡夢見而白父言、不知兵士卅餘人來召父尊、〇下略

〔令義解五軍防〕凡軍團大毅小毅、通取部內散位、謂內外六位以下也、勳位、及庶人武藝可稱者宛、其校尉以下、取庶

人便於弓馬者爲之、主帳者、取工於書筭者爲之、（謂兵滿一千人者、主帳二人、以外者一人、）

〔延喜式二十八兵部〕凡軍毅者、國司銓擬器量辨了身材勇健者、言上奏聞、然後補之、無位及白丁各敍一階、其見任少毅若高位者、轉任大毅、其大少領三等已上親不得任同郡軍毅、其勘諸國譜牒之事、先移式部省、待返移然後補之、

凡軍毅其身尫弱不堪武藝者、國司解任、具狀申官、官下知省除帳、

〔續日本紀七元正〕靈龜二年五月己丑、（○原作乙丑、依日本紀略改、）制、諸國軍團大少毅、不得連任郡領三等以上親也、其先已任訖、轉補他團、

〔東大寺正倉院文書三十〕出雲國天平六年計會帳

天平五年八月　一廿一日、軍毅等復任、并擬少毅无位出雲臣福麻呂等合八人狀申送事、

〔續日本紀二十孝謙〕天平寶字元年正月甲寅、（○中略）詔曰、比者、郡領軍毅、任用白丁、由此民習居家求官、未識仕君得祿、移孝之忠漸衰、勸人之道實難、自今已後、宜令所司除有位人以外不得入簡試例、其軍毅者、選有六衞府中器量辨了、身才勇健者擬任之、他色之徒勿使濫訴、自餘諸事、猶如格令、

〔續日本紀考證七〕選有（卜本永正本楓本作有選、金澤本作書選、書有字形近似致譌、當依金澤本爲正、）

〔續日本紀三十二光仁〕寶龜四年八月庚午、諸國郡司燒官物者、主帳已上皆解見任、（○中略）當國軍毅不救火者、亦准郡司解却、

〔類聚三代格十二〕太政官符（○中略）

一軍團之設擬備急事、令郡家焚燒、曾不禁救、自今以後有如此類、當團軍毅主帳悉解見任、

以前事、勅如件、

寶龜四年八月廿九日

〔類聚三代格十七〕太政官符

兵士額數

聽陸奧出羽兩國正員之外擬任郡司軍毅事

右中納言征夷大將軍從三位兼行中衞大將陸奧出羽按察使陸奧守勳二等坂上大宿禰田村麻呂起請偁、郡司之任職員有限、而邊要之事頗異中國、望請擬任幹了勇敢之人、宜爲防守警衞之儲者、右大臣宣、奉勅依請、

大同元年十月十二日

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應加置軍毅事（筑前、筑後、豐前、豐後、肥前）

右得太宰府解偁、被太政官去八月九日符偁、奉勅件國兵士、宜簡其強壯者、每團留五百人、餘皆依數□□其軍□□毅□□□此□□□□□□□□□□□□軍防令云、凡軍團大毅領一千人、少毅副領、理須准兵士數置軍毅一人、而人必有故、職難暫闕、謹撿太政官去寶龜十一年十月廿三日下兵部省符偁、肥前國兵士五百人、軍毅二人、豐後國兵士六百人、軍毅二人者、然則承前之例、或特加置、望請據准前例、每團置大少毅各一人者、被右大臣宣偁、奉勅依請、

弘仁四年十二月□□

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應日向國加軍毅一人事

右得太宰府解偁、國解偁、謹案太政官去寶龜十一年十一月（〇十一月、文作十月、）上廿三日下兵部省符偁、肥前國兵士五百人、豐後國兵士六百人、軍毅各二人者、今當國兵士、見有五百人、所領之數唯此一人、如有身故者、誰備非常、安治之思不可暫忘、□□□加□一員以備不虞□□（以下闕）

弘仁六年八月十三日（〇又見日本後紀）

〔令義解五軍防〕凡軍團、大毅領一千人、少毅副領、（謂凡兵滿一千人者、大毅一人、少毅二人、六百人以上者、大毅一人、少毅一人、五百人以下者、唯置毅一人也、）校

尉二百人、旅帥一百人、隊正五十人、

〔羽倉考〕按ズルニ、大毅少毅ハ、軍團ノ長、所謂外武官ニシテ、兵士ノ一列ニハ非ズ、主帳ハ史職ニテ、是亦兵士ニ非ズ、校尉以下ハ兵士ノ内ニシテ、スナハチ一隊二隊等ノ長ナリ、職員令ニ、五人十人二十人ト云ルハ、校尉旅帥隊正ノ員數ニシテ、軍防令ニ、二百人一百人五十人ト云ルハ、校尉旅帥隊正ノ領スル兵士ノ員數ナリ、抑上ニ云ルガ如ク、令ノ時一國ノ白丁ヲ三分ニシテ、其一ヲ兵士ト爲ル時ハ、一國ノ兵士必シモ千人ニハ限ル可ラズ、然レドモ先千人ヅヽヲ以テ一團ト爲シ、殘リタルヲモ亦一小團ト爲ルナルベシ、此職員令軍防令等ハ、千人ノ團ヲ以テ文ヲ立ツ、夫兵士ハ五人ヲ一伍トシ、五十人ヲ一隊トス、二伍十人ノ中ニテ一人ヲ火長トシ、一火長ニ屬スル所ノ兵士九人ナリ、一隊五十人ノ中ニテ一人ヲ隊正トシ、一隊正ニ屬スル所、火長五人、兵士四十四人ナリ、二隊百人ノ中ニテ一人ヲ旅帥トシ、一旅帥ニ屬スル所ノ隊正二人、火長十人、兵士八十七人ナリ、四隊二百人ノ中ニテ一人ヲ校尉トシ、一校尉ニ屬スル所ノ旅帥二人、隊正四人、火長二十人、兵士百七十三人ナリ、十隊千人ノ上ニ大毅少毅ヲ置、軍毅ニ屬スル所ノ校尉五人、旅帥十人、隊正二十人、火長百人、兵士八百六十五人、合セテ校尉以下千人ナリ、然ウシテ其軍毅ハ郡司ト同ジク、各其國ノ國司ニ屬スル事、令ノ首中尾ニ明ナリ、

〔延喜式〕二十八兵部 凡軍團置毅者、兵士滿千人、大毅一人、少毅二人、六百人以上、大少毅各一人、五百人已下毅一人、其主帳者、大團二人、以外一人、

〔羽倉考〕此定軍防令義解ニ同ジ、按ズルニ兵士ノ員數、令ノ時ハイマダ定マリナク、義解ノ時ハ既ニ定マリアリ、其兵士ノ多少ニ依テ、軍毅ノ數ヲ定ムル事ハ、義解ノ比ノ事ニシテ、令ノ時ノ定ニハ非ズ、唯義解ヲ加フル時ノ定ヲ以テ、令ノ文ノ下ニ附タルノミ、然レバ兵部式ニ此文アルモ、兵士ノ員數定マリタル上ノ軍毅ノ數ノ定ナリ、此文ノ義解ニ同ジキヲ以テ、延喜式ノ

時、今ト同ジトハ見ル可ラズ、

〔享祿本類聚三代格十八〕太政官符

應依舊置兵士事

右得長門國解偁、謹案、去延曆十一年六月七日勅書偁、夫兵士之設、備於非常、傳馬之用、給於行人、而軍毅非理役使、國司恣心乘用、徒致公家之費、還爲奸吏之資、靜言於此、爲弊良深、宜京畿及七道諸國、兵士傳馬、並從停廢、以省勞役、但陸奥出羽佐渡等國及太宰府者、地是邊要、不可無備、所有兵士宜依舊者、撿案內、兵部省去天平十一年五月廿五日符偁、被太政官符偁、奉勅、諸國兵士、皆悉暫停、但三關幷陸奥出羽越後長門、幷太宰管內諸國等兵士依常勿改者、然則此國依舊與太宰府管內接境、勘過上下雜物、常共警虞、無異邊要、亦山陰人稀、差發難集、若有機急、定致闕怠、望請依舊置兵士五百人、以備不虞、非常之儲不可不申、謹請官裁者、右大臣宣、奉勅依請、

延曆廿一年〇月日闕

〔日本後紀二十一嵯峨〕弘仁二年閏十二月辛丑、征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奥出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言、今官軍一擧、寇賊無遺、〇中略兵士之設爲備非常、既無遺寇、何置兵士、但邊國之守、不可卒停、伏望置二千人、其餘解却、

〔三代實錄三十六陽成〕元慶三年六月廿六日乙酉、正五位下守右中辨兼行出羽守藤原朝臣保則飛驛奏言、謹奉去三月五日勅符旨、諸國軍士解陣放却、幷留中國甲胄、及置當國例兵、陸奥鎭守將軍從五位下小野朝臣春風、上野國權大掾從七位上南淵朝臣秋鄉、權史生大初位下上村主佐美、撿非違使從六位下多治眞人雄麻呂、下野國前權少掾從七位上雀部朝臣茂生、權醫師大初位下下毛野朝臣御安等各押領國兵、來從軍毅、今還向訖、留納上野下野兩國甲胄器仗色目數等須追言上、配置當國例兵一千六百五十七人、大毅一人、少毅三人、主帳三人、校尉二十人、旅帥四十人、火長六十人、列士八十

人、〇羽倉考云、常作二八百八十人一、鎭兵六百五十人、〇下略

〔羽倉考一〕令ニ軍毅以下ノ員數ノ定アレドモ、元慶ノ比ニ至リテハ又其定ニ同ジカラズ、今此文ヲ見ルニ、出羽國ノ兵士千人ナリ、令ノ定ニ比スレバ、少毅二人、主帳一人、校尉十五人、旅帥三十人多シ、又火長ハ、令ノ定ニ依レバ百人アルベキヲ、却テ六十人アリ、然レドモ是ハ令ニ所謂隊正ニ當ル歟、然レバ是モ四十人多シ、蓋兵士ノ會長、令ヨリ以後次第ニ增益セルト見エタリ、但此員數延喜兵部式ノ文ニ比シテモ、少毅一人、主帳一人多シ、然レドモ延喜式ニアル事ハ、弘仁貞觀ノ定モアリ、則此兵部式ノ文ハ、天長ノ令義解ニモ出タレバ、元慶ヨリ以前ノ定ニシテ、延喜ノ定ニハ非ズ、

減兵士　停兵士

〔續日本紀八元正〕養老三年十月戊戌、減定京畿及七道諸國軍團、幷大小毅兵士等數有差、但志摩、若狹、淡路三國兵士並停、

〔續日本紀十三聖武〕天平十一年六月癸未、綠停兵士、國府兵庫、點白丁作番令守之、

〔享祿本類聚三代格十八〕勅、隨時宜化、救弊之術已殊、乘機濟民、爲治之方斯在、朕祇膺寶曆、圖守洪基、每念黎蒸、无忘鑒寐、頃年、在外國司、多乖朝憲、頻頒制令、罕能遵行、夫兵士之設、備於非常、而國司軍毅、非理役使、徒致公家之費、還爲奸吏之資、靜言於此、爲弊良深、宜京畿及七道諸國、並從停廢、以省勞役、但陸奧出羽佐渡等國、及太宰府者、地是邊要、不可無備、所有兵士、宜依舊置、諸司品部等戶、本司徵役、特甚平民、遂令逃散不聊其生、如此等之色、其數居多、宜量閑劇、隨事省却、主者施行、

延曆十一年六月七日

敎習

〔令義解五軍防〕凡軍團各置鼓二面、大角二口、小角四口、通用兵士(謂鼓角通用也)分番敎習、

〔續日本紀三文武〕慶雲元年六月丁巳、勅、諸國兵士、團別分爲十番、每番十日、敎習武藝、必使齊整、令條以外、不得雜使、

行試

〔續日本紀 十一 聖武〕天平四年八月壬辰、勅、〇中略 兵士者、每月一試、得上等人賜庸綿二屯、中等一屯、

〔東大寺正倉院文書 三十〕出雲國天平六年計會帳
天平五年九月 一同日〇六日 符壹通 熊〇谷〇團〇兵〇士〇紀打原直忍熊、意宇團兵士蝮部臣稻主、少射馬檜試補定却還狀、以九月十三日到國

待遇

〔續日本紀 八 元正〕養老三年四月乙酉、制、諸大少毅量其任與主政同、自今以後爲判官任、

〔大日本史 兵志 一〕按、判官疑當作官判、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年六月辛未、初令諸國史生、主政、主帳、大少毅把笏焉、

〔續日本紀 三十 稱德〕神護景雲三年九月丁卯、始賜任諸國軍主帳者、爵一級、

〔續日本紀 三 文武〕大寶三年八月甲子、太宰府請、有勳位者作番直軍團、考滿之日、送於式部、一同散位、永預選叙、許之、

〔續日本紀 三 文武〕慶雲元年六月己未、令諸國勳七等以下、身無官位者、聽直軍團、續勞、上經三年、折當兩考、考滿之年送式部、選同散位之例、其身材强幹須堪時務者、國司商量充使之、年限考第一准所任之例、

〔令集解 十七 選敍〕釋云、慶雲三年格、選郡司軍團、皆以八考爲限、其外散位者以十考爲限、分番二考、長上六考、亦同八考之例、身死三考以上者、並以九考爲限、

〔續日本紀 十 聖武〕天平元年八月癸亥、天皇御大極殿、詔曰、〇中略 陸奧鎭守兵、及三關兵士、簡定三等具錄進退如法、臨敵振威、向冒萬死、不顧一生之狀、幷姓名年紀、居貫軍役之年、便差專使上奏、

〔令義解 三 賦役〕凡〇中略 大毅以下、兵士以上、〇中略 並免徭役、

〔令集解 十三 賦役〕釋云、案上條文、輸調之人、皆合輸副物、然不收庸之人、副物亦不合輸也、假令兵士免副物之類是也、

〔延喜式 二十五 主計〕某國司解申預計某年大帳事〇中略

某郡在國東去國府若干里、〇中略

口若干不課　口若干舊　口若干新

口若干男〇中略　口若干大小穀〇中略

口若干半輸〇中略　口若干兵士〇下略

〈續日本紀九聖武〉神龜元年二月甲午、受禪卽位於大極殿、大赦天下、詔曰、〇中略天下兵士減今年調半、京畿悉免之、

〈續日本紀十一聖武〉天平四年八月壬辰、勅、〇中略筑紫兵士課役並免、其白丁者免調輸庸、年限遠近聽勅處分、

〈東大寺正倉院文書三十〉出雲國天平六年計會帳

天平五年十月　一十五日符壹道擬軍毅并軍毅等定考第及擬應徵差加兵士庸狀、以十月廿日到國〇中略

十二月　一六日符壹道應免今點兵士庸事等參條狀、以十二月十二日到國

〈續續修東大寺正倉院文書四十四帙四〉越前國江沼郡山背鄕天平十二年計帳

課口拾人〇中略　見輸玖人小女　半輸肆人兵士一〇中略

戶主江沼臣　忍人戶計帳手實

合今年計帳定見良賤大小口參拾玖人〇中略

課口拾貳人〇中略　見輸玖人　半輸陸人兵士一〇下略

〈續日本紀二十二淳仁〉天平寶字三年三月庚寅、太宰府言、〇中略天平四年八月廿二日有勅、所有兵士全免調庸、其白丁者免調輸庸、當時民息兵強、可謂邊鎭、今管內百姓乏絕者衆、不有優復、無以自贍、不安四也、勅、〇中略優復者、政得其理、民自富強、宜勉所職以副朝委、

〈續日本紀二十三淳仁〉天平寶字五年十一月丁酉、以從四位下藤原惠美朝臣朝狩爲東海道節度使、〇中略

其所管遠江〇中略等十二國、撿定船一百五十二隻、兵士一萬五千七百人、子弟七十八人、水手七千五百二十人、〇中略皆免三年田租、悉赴弓馬、

〔續日本紀 二十四 淳仁〕天平寶字七年正月戊午、詔曰、〇中略役使造宮左右京五畿內、及近江國兵士等、寶字六年田租並免之、

〔續日本紀 三十七 桓武〕延曆元年四月己卯、山背國言、諸國兵免庸輸調、至於左右京亦免其調、今畿內之國、曾無所優、勞逸不同、請同京職、欲免其調、於是勅免畿內兵士之調、

〔令集解 六 職員〕大同四年六月十一日官符云、應加增衞分雇役兵士事、人別可輸衞錢捌拾文、先所定五十文、今加卅文、右得右京職解偁、雜徭之中、兵士尤苦、計帳之日、雖能簡點、至召正身、都不參向、僅輸役料、賂雇便人、冒名之罪、於理難避、加以兵士一年所輸錢壹貫陸百伍拾文、正丁一人、調徭只壹百文錢、彼此懸隔、事乖均平、望請加取衞分、雇役兵士者、右大臣宣、奉勅依請、左京准之、

〔延喜式 二十六 主稅〕凡陸奧國七團軍毅主帳卅五人、粮米准太宰府統領、以正稅給之、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

應給軍毅職田事

大毅四人　小毅八人　主帳四人

右得東山道觀察使正四位下兼行陸奧出羽按察使藤原朝臣緒繼解偁、陸奧國四團軍毅十二人、常直城中、不顧私業、既備機速、曾無徵祿、准其勤勞、理須優濟、今見國內、乘田數多、佃食者少、伏請准郡司將給職田者、右大臣宣、奉勅依請、

大同四年五月十一日〇又見政事要略

〔類聚三代格 十五〕太政官符

應給軍毅職田事

大毅一人田六町　小毅二人田各四町

右得征夷將軍參議從三位左衞門督兼陸奧出羽按察使勳四等文室朝臣綿麿解偁、出羽國司解偁、

糧食戎具

件穀等常直軍團、不顧私業、量其勤勞、實須優恤、望請以按出公田、准陸奧國軍毅給件職田者、使加覆勘、所申有實者、被右大臣宣偁、奉勅、宜依件給、

弘仁五年正月十五日〇又見政事要略

〔延喜式 民部二十二〕凡佐渡國雜太團、給軍毅職田二町、主帳一町、

〔類聚三代格 十五〕太政官符

合二條

一請加射田事

右管內諸國所有射田、每郡一町、兵士選士其數稍多、請更加一町、總置二町、一町以賜步射之上手、一町以賜騎射之勝者、庶以勸武藝、〇中略

以前得太宰府解偁、管內諸國、乘田多數、望請置上件田、賞以勸人者、右大臣宣、奉勅、宜依請、

天長元年三月八日

〔延喜式 兵部二十八〕凡太宰府管內諸國射田、每郡置二町、其一町賜步射之上手、一町賜騎射之超勝、自餘有兵士國、每郡置一町、其田地子交易輕貨、國司簡試上番兵士、不限騎步、人別令射十箭、每日所試勿過廿人、斟量能不、隨狀給之、其能射人及所給物數附朝集使送省、

〔令義解 軍防五〕凡兵士、人別備糒六斗、〔謂、兵士私自備、卽隊正以上亦自備之、若身死、及得替者、還故納新、其鹽亦准此也、〕鹽二升、幷當火供行戎具等、並貯當色庫、〔謂、供行戎具者、下條紺布幕釜等是也、當色庫者、軍團庫也、〕若貯經年久、壞惡不堪、卽還納好者、〔謂、亦令兵士還成也、〕起十一月一日、十二月卅日以前納畢、每番於上番人內取二人守掌、不得雜使、行軍之日、計火出給、

凡兵士、每火紺布幕一口、着裏、銅盂小釜隨得二口、鍪一具、剉碓一具、斧一具、小斧一具、鑿一具、鎌二張、鉗一具、每五十人火鑽一具、熟艾一斤、手鋸一具、每人弓一張、弓弦袋一口、副弦二條、征箭五十隻、胡籙一具、太刀一口、刀子一枚、礪石一枚、藺帽一枚、飯袋一口、水甬一口、鹽甬一口、脛巾一具、鞋一兩、皆令自

軍團馬

備、（謂紺布幕以下、並皆私備也、）不可闕少、行軍之日、自盡將去、若上番年、唯將人別戎具、自外不須、（謂上番年者、向衞防之年也、人別戎具者、弓以下、鞋以上是也、自外不須者、紺幕以下、手鋸以上、上番之年、不須將行也、）

〔日本書紀二十五孝德〕大化二年正月甲子朔、賀正禮畢、卽宣改新之詔、〇中略其四曰、〇中略凡兵者、人身輸刀甲矢幡鼓、

〔貞觀交替式〕明法曹司解　撿兵士備糒鹽幷戎具等事

前國司等、以虛帳遷、撿無其實、如何處分者、謹案軍防令云、凡兵士備糒六斗、鹽二升、幷當火供行戎具等、並貯當色庫、行軍之日、計火出給者、今案令文、兵士簡點之次先須儲備、若前日塡畢、然國司等致有費損、理徵闕損之人、其軍毅終身之任、國司遷代之人、國司遷替、軍毅須塡、若兵士未備者、後人依員徵備、唯國司幷軍毅等、科公事不行之罪、

寶龜四年正月廿三日（〇又見政事要略）

〔東大寺正倉院文書三十七〕紀伊國司解申天平二年收納大稅幷神稅事

軍團糒　天平元年定稻壹伯玖拾壹斛捌斗貳升壹合

〔三代實錄三十九陽成〕元慶五年三月廿六日甲戌、先是出羽國司言、太政官去年六月十六日下國符偁、彼國解偁、〇中略或二城兵士一千人、每人充日糧八合、分給六番、直於國府、〇中略由是調練兵士千人、給長上之糧、配戍一府二城、以備非常、〇下略

〔延喜式二十六主稅〕凡陸奧國兵士間食料米二千八百八十斛、（人別日八合、）割年中所輸租穀內、每年充之、

〔令義解八廐牧〕凡牧馬應堪乘用者、（謂體骨强壯、稍堪乘用者也、）皆付軍團、（謂此名兵馬也、）於當團兵士內、簡家富堪養者充、免其上番、（謂免國內上番、）及雜駈使、〇中略

凡軍團官馬、本主欲於鄕里側近十里內調習聽、（謂本主者、養馬之兵士也、若於十里外以理致死者、雖科違令、不在徵限也、）在家非理死失、（謂、案廐令、因公事死失者、官爲立替、在家死失、卅日內備替、則知非公事者、皆爲在家、若因公事非理死失者、依下條徵備之法也、）六十日內備替、卽身死、家貧、不堪備

雑載

者、謂雖二即身死一而堪レ備仍徴、此唯爲二當條一立レ制、餘篇不レ得三引爲二比類一也、不レ用二此分一、

〔續修東大寺正倉院文書三〕御野國加毛郡半布里大寶貳年戸籍

中政戸秦人多麻戸口卅一〇中略　次阿麻留年卅七兵士、弓中、

古事類苑

兵事部二十四

城郭上 ^欄^ 軍營^[併入]^

古事類苑

兵事部二十四

城郭上 標 軍營 附入

城ハ敵兵ニ備ヘ、防守ニ擬スルモノナリ、古ハキト云ヒシガ、後ニハシロト云ヒ、ジヤウト云フ、往古既ニ稻城、茨城等ノ名アレド、事アルニ臨ミ、稻ヲ積ミ茨ヲ樹テ、城ノ用ヲ爲スモノニテ、眞ニ城ト云フベキモノニアラズ、皇極天皇ノ朝ニ、蘇我蝦夷父子ガ池ヲ穿チ、城ヲ爲リシガ如キハ、稍城ノ形ヲ成セルガ如シ、天智天皇ノ世ニハ、外寇ノ虞アルニ由リ、諸國ニ城ヲ營ミ、文武天皇ノ世ニ、城郭ノ爲ニ法度ヲ設クルニ至リ、其制漸ク備ル、而シテ當時尤モ警戒セシモノハ、蝦夷韓國ニ在シガ爲ニ、奧羽ノ地ニ築キ、筑紫ニ營ミシガ、其後漸ク虞ナキニ至リ漸ク停廢ニ歸セリ、然ルニ武士ノ互ニ相爭フニ至リ、築城ノ事稍興レリ、足利氏ノ季世ニ至リテハ、海内寧キ日ナク、互ニ戒心ヲ懷キシカバ、城ヲ以テ常居ノ處ト爲シ、以テ不虞ニ備ヘシガ、織田豐臣兩氏ニ至リテハ、其制大ニ備リ、德川氏ニ至リテ益整フ、

城ハ郭ヲ以テ成レルモノナリ、郭ハ曲輪ト云フ、外郭ハ內郭ヲ包ム、本丸、二丸、三丸等ノ稱アリ、卽チ本城、支城ナリ、出丸、東丸、西丸ト云フモ、本支ノ城タルニ外ナラズ、內郭、外郭ノ間ニハ堀アリ、敵ヲシテ直ニ本城ニ通ルコトヲ得ザラシム、堀ニハ橋ヲ架シ、以テ城門ニ通ズ、城ノ前面ヲ追手ト云ヒ、後面ヲ搦手ト云フ、追手ハ又大手ノ字ヲ用キル、城門ノ內ニハ馬出、升形、勢溜、馬溜等アリ、櫓ハ又矢倉ノ字ヲ用キル、敵兵ノ動靜ヲ視察シ、又射擊スル爲メニ設ケタ

ル高樓ナリ、狭間ハ、サマト云フ、櫓或ハ屏等ニ設ケタル小窻ニシテ、亦敵兵ヲ射撃スルナリ、天守ハ又殿守、天主等ノ字ヲ用キル、或説ニ往時天主ヲ此ニ祀リシヲ以テ、名ヅケタリト云フ、卽チ櫓ノ類ニシテ、特ニ高大ナルモノナリ、多門ハ松永久秀ノ創意ニ出デ、大和國志貴城ヲ毘沙門堂ノ傍ニ造リシヲ以テ名ヅクト云フ、毘沙門ハ多聞ト譯スルガ故ナリ、而シテ多門ニ作ルハ同音省畫ノ字ヲ用キルナリ、砦ハ取手ト云フ、卽チ外城ナリ、

柵ハ城ノ粗糙ナルモノナリ、古語ニハ城ト同ジクキト云ヒ、後ニ字音ヲ以テサクト云フ、柵ハ孝徳天皇大化三年、越後國渟足柵ヲ造リシヲ以テ始見トス、其後相繼ギテ治柵ノ擧アリ、以テ東北ノ邊境ニ備フ、而シテ後世柵ト稱スルモノハ、單ニ竹木ヲ編ミ、内外ヲ障蔽シタルモノニテ、又矢來ト云フ、事ハ攻守篇柵條ニ載セタリ、

〔伊呂波字類抄志地儀〕城ジヤウ 鮭佐造之

〔琅琊代醉編二十二〕城　卮言云、鯀作城見世本、餘冬序錄云、吳越春秋鯀築城以衞君、造郭以居人、淮南子、鯀作九仞之城、諸侯倍之、禹壞城平地、而海外賓服、四夷納職、博物志云、禹作三城、強者攻弱者守、敵者戰、城郭自禹始也、不知茂先又於何據、然鴻烈解所謂禹壞城平地者恐非、

〔段注説文解字十三下土〕城　以盛民也、言盛者如黍稷之在器中也、从土成、左傳曰、聖王先成民而後致力於神、成亦聲、氏征切十一部

〔類聚名義抄六土〕城　音成 カヒ ミヤコ カヘ ツタ アツチ キツタ サ

○按ズルニ、羅城、皇城、京城、都城等ノ城ノ字ハ、ミヤコノ意ニシテ、城郭ノ義ニアラズ、

〔伊呂波字類抄志疊字〕城柵

〔運歩色葉集志〕城郭　曰城、七里曰郭、自帝釋始也、

〔孟子二公孫丑下〕三里之城、七里之郭、環而攻之而不勝、夫環而攻之、必有得天時者矣、然而不勝者、是天時不如地利也、

〔日本書紀神武三〕己未年二月辛亥、命諸將練士卒、○中略皇師立詰之處、是謂猛田、作城處、號曰城田、

〔東雅地輿三〕城シロ、義不詳、古語にキといひしは、城柵をいひしなり、されば城の字をも、柵の字をも並に讀てキといひ、また城柵の二字を引合てもキと讀けり、古語にキといふは、限の義あるなり、垣墻をカキといひ、關塞をセキといふの類皆然り、さらば城柵をキといひしは、内外を限るの義にやあるべき、日本紀に、神武天皇、八十梟帥と戰ひ給ひし時、皇師作城處を城田といひしと志るされしは、始て城の字聞えし所なり、○下略

〔書言字考節用集乾坤二〕城史記黃帝築城邑造五城、又見紀原

〔倭訓栞前編十一〕しろ　城をよむは白堊より名くる成べし、又領知の意にや、小城は堡障也、

〔古事記傳二十六〕城を志呂と云ことは、古くは見えねども、山背國を延暦十三年に、山城と字を改められし時の詔に、此國山河襟帶、自然作城云々とあるを以見れば、當昔より志呂と云ことももありし故に、城字を用ひられしならむ、

〔三餘叢談初集〕城を古語にキといへり、又シロといへるも後の詞にあらず、日本紀略延暦十三年十一月丁丑詔に、此國山河襟帶、自然作城、因斯形勢可制新號、宜改山背國爲山城國云々とあるをおもふべし、シロはもと一城の處をいふ詞にて、苗代といふも苗うゝる一城の田の義なり、山城といふ國名も、山間一場之地なればなるよし、松屋高田翁の國名考にみゆ、纏向日代宮も檜原の逊なれば、檜城の義なるべし、

〔武家名目抄居所二十一上〕城　按、城はいにしへキといひしを、中頃は音のまゝに讀て、其後シロといふことになりたり、伊呂波字類抄には、城鮭佐造之とのみありて、字鏡集には、城同（ミヤコ、アツチ、カキ、ホリ、キ、シロ、サカヒ、キノク、）と見えたり、書紀を撿するに、武烈天皇紀に詔大伴室屋大連、發信濃國男丁、作城像於水派邑、仍曰城上也としるされたる、堤のことゝ聞ゆ、その所を城上といふ故よしを明さんとて、城像とは書れたる也、天智天皇紀に、於筑紫築大堤貯水、名曰水城と見えた

る、まさしく堤をさして城といへる也、又柵をも城とおなじくキと讀たる所、往々見えたり、かれこれを通はし思ふに、土を築きもし木を構へもして、内外を隔るを、古語にキといひけるなり、垣はかなたこなたのかぎりなる故カキといひ、關はゆきゝをせくが故にセキといひ、稲を藏る所をイナキといひ、馬を牧ふ所をウマキといふの類もて、其然るを知るべし、近代是をシロといふことは其義さだかならず、或説に茵シロ、松シロ、杉シロなどいふシロと同義にて、城郭は兵士を集め置く料の所なるゆゑ、シロといふ也、山城の國の體たる山打圍みて、自然の城郭をなせるが故に、山背を改て山城の字を用られしも、城にシロといふ意のおのづから籠れるが故なりといへり、猶可考、

〔祇園執行日記〕天文三年七月廿日、今日谷ノシロヘヨセ候由申候、

〔日本書紀十九欽明〕五年十一月、聖明王〇百濟王謂之曰、〇中略竊聞新羅安羅兩國之境有大江水、要害之地也、吾欲據此、修繕六城、

〔玉勝間五〕むさしといふわざ〇中略日本紀に、城をさしと訓るところあり、韓語也、

〔書言字考節用集一乾坤〕本城

〔源平盛衰記二十八〕源氏追討使事
抑此城〇燧城ト云ハ、〇中略北陸道第一ノ城郭也、

〔承久軍物語二〕よせては大せいにてみだれ入、じやうの中は、こせいなりければ、ふせぎたゝかふに、りをうしなひ、

〔新田老談記下〕小金井四郎右衛門ハ、敵ヲ思ノ儘ニ麓迄追下シ、人馬ノ谷ヘ落テ、木石ニ當テ死タルヲ見テ、名城ノ徳何レノ時モ是也、新田ノ一族家人ハ一人モ不損、

〔續武家閑談十〕秀吉公北條氏政父子退治の時、權現樣〇徳川家康御出陣、御家人を以北條家所々の城

を拔き給ふ時、〇中略諸將各面々の持口あり、彥右衛門は新城の隱居郭に向ひて是を責、

〔淸正記 一〕秀吉公羽黑の古城御普請被仰付、堀尾茂助を入置給ふ、

〔太平記 十六〕新田左中將被責赤松事

脇屋右衛門佐〇義助是ヲ見給テ、左中將〇新田義貞ニ向テ被申ケルハ、〇中略僅ノ小城一ニ取懸リテソゾロニ日數ヲ送リ候ハヾ、御方ノ軍勢ハ皆兵粮ニ疲、〇下略

〔足利季世記 三四好記〕三好攝州衆追伐ノ事

此勢衆〇淡路衆四國衆等同〇天文十六年二月廿五日、三宅ノ城へ押寄、取卷テ攻ケレバ、城中ハ小勢ニテ、同三月十五日ニ、外城ヲ攻落シ、本城計ニ成ケレバ、〇下略

〔武家名目抄 居所二十二〕本城 按、本城とは、二三の曲輪に對へて、本丸をさしてもいひ、又出城端城にむかへて、根城をさしてもいふなり、

〔播州佐用軍記 下〕秀吉卿姬路へ開陣之事

同〇天正五年十二月二十日ヨリ上月ノ城內外ノ掃除等仰付ラレ、搦手ヨリ城外所々ノ柵鹿垣ナンドヲ補繕、此城ヲ以テ中國押ノ根城トシテ、〇下略

〔籾井家日記 一〕攝州靑野合戰事

明レバ天正三年亥ノ三月、氷上御館宗貞公攝州表へ御進發、總勢八千餘人ナリ、先ヅハ靑野ノ城ヲ乘返サレ、繋ギノ根城ノ御用意ノ由也、

〔關八州古戰錄 七〕信玄西上野仕置附上泉伊勢守小幡泉龍齋事

信玄〇中略本領ナレバトテ、泉龍齋ヲ國峯エ還住ナサシメ、枝城ノ庭屋エハ城代トシテ、〇下略

〔太平記 十六〕小貳與菊池合戰事附宗應藏主事

小貳ガ一族等、俄ニ心替シテ攻ノ城ニ引籠リ、中黑ノ旗ヲ揚テ、〇下略

〔武家名目抄 居所二十二〕詰城　按、詰城とは二三の丸に對へて、本丸をさしていひ、又端城に對へて、根城をさしても云なり、

〔武家名目抄 居所二十二〕外城　按、外城とは本丸にむかへて、外曲輪をさしてもいひ、又根城にむかへて、端城をさしてもいふなり、

〔宗長手記〕大永二年五月、北地の旅行、越前國の志る人につきてかへる山をしらねども、宇津の山をこえ、小夜の中山にいたりて、〇略 掛川泰能亭に逗留、この比普請最中、外城のめぐり六七百間堀をほり、土居をつきあげ、凡本城とおなじ、

〔黒田家譜 一〕姫路の城は小寺の端城にて、孝高その城主たり、

〔太平記 二十二〕畑六郎左衞門事

此三人ノ者共闇ダニナレバ、〇中略 樣々質ヲ替テ敵ノ向城ニ忍入、

〔武家名目抄 居所二十二〕向城　按、楯籠りたる敵城を責んが爲、相むかへて構たる城を向城といふ、又付城といふも同じ事也、

〔甲陽軍鑑 品第四十二 十五〕城取の事

一つけ城、ぢん城、是は大將の事、見せやぐら有、口傳

一侍大將のつけ城、是は少別なり、一ッにしても不苦、

〔武用辨略 二城郭〕附城出城　敵城近ク攻ヨセテ、小城ヲ築ヲ付城ト云ナリ、又城中ヨリ出張シテ小城ヲ築ヲ出城ト云、又敵ノ攻來ヲ防ン爲ニ、内ヨリ城ノ近見ニ小城ヲ築ヲ、取出ト云ナリ、

〔松平記 三〕永祿十二年正月十六日、家康衆懸川城御攻被成候、靑田山に付城をかまへ、小笠原與八郎一黨高天神衆有之、

〔柴田退治記〕勝豐〇柴田 病氣不平而起臥不叶、旦夕在床、此故自身不能出張、與力者大金藤八、山路將

監遣越前境目片岡天神山、拵出城、對修理亮勝家、無二究色立之淵底、

〔見聞雜録 武家名目抄居所二十二所引〕伊豆相模之內ニて、興國寺城は先祖早雲伊勢新九郎時代に、今川より此城を人數を借りて、一分にて攻取、開國の城なり、依之代々番城にして、此頃番頭は北條方にても老功之侍大將伊豆次郎入道、三島監物入道を大將として、物頭八人、〇中略大力之若者共を撰勝て籠る、

〔籾井家日記 十〕遠江守秀尙與籾井越中守敎業問答事

遠江守秀尙公八田ノ城ニ御出アリテ、敎業ニ對談ノコトドモ候、敎業勞ハリ以ノ外ノ次第ニ候ヘドモ、儀式ヲ致シテ巨細ヲ申シテ候、色々候旨ナリ、中ニモ申シ條ハ、〇中略矢繼城ノコト、カネテ要害堅固ナラズ、番手ノ城ニ大勢ヲ入置ベキ工夫ニテ、俄カニ用意候處ニ、〇下略

〔鴉鷺合戰物語〕第四山烏太郞意見　黑白毀讃狀　兩方廻文事

ある烏つと飛行て、程ありて歸り來ていはく、中山には、はや森の木どもをかき城にとつて、鹿垣ゆひて矢庫あげ、〇下略

〔武家名目抄 居所二十一下〕かき城　按、かき城は垣城にや、本文は小柵にとりてなどいふばかりの意と聞ゆ、

〔大友記 上〕元就武略調ザル事

文種二男種實、筑紫左馬頭ハ掛城十一箇所ニ火ヲカケ、毛利元就ヲタノミ藝州へ落行ケリ、

〔松原自休手錄 上〕一西尾ニハ荒川マシマスガ、背義諦家康へ內通シ、酒井雅樂荒川へ引入、西尾ノ城へ押詰急ニ攻ケレバ、牧野新次郞悚へ兼渡城行牛久保、西尾へハ雅樂助入替、從是東城義諦モ繋ノ城ハナシ、駿河ノ無援兵、此次ニ攻落セト從岡崎引卒シテ出ル、城兵多ケレバ、力攻ニ難成、遠攻ニセント下知ス、

〔應仁別記〕相撲守〇山名頼切タル兵五十餘人トゾ聞シ、角テ此城ヲ可レ持由上意成シ處ニ、成眞院申樣、剰ヲ得テ利ヲ失フ理也、當陣ヨリ拘ナラバ紫野今宮五箇所計傳之城ナクテハ叶マジ、タヾサト捨ラレヨト申ケレバ、尤トテ捨ラレケリ、

〔中國治亂記〕尼子晴久是ヲ聞玉ヒ、大ニ怒リ則チ自身大勢ニテ、毛利ガ居城へ發向シテ元就ヲ追罰アルベキト打立玉ヘバ、〇下略

〔大友興廢記十八〕龍造寺隆信戰死事
爰に筑紫上總守廣門、居城より一里くちに里城をかまへ、〇下略

〔安西軍策三〕石州松山城並福屋沒落事
福屋ハ頼切タル松山ノ城ヲバ被レ攻落、矢上ノ城ハ明退ヌ、今ハ家城阿登ノ音明ノ一城ニ成シカバ、如何ハセント案ジ續テ居ケル、

〔松原自休手錄上〕筒針ノ取出ヲバ、小栗ノ一族堅レ之、是ハ矢矯川ノ西六栗ノ郷中ニ夏目次郎左衛門屋敷構城持ケルヲ不レ出タメ也、

〔鈴錄十五城制〕屋敷構ニスル事アリ、是又屋敷ナレドモ城ノ心持ニスル事ナリ、

〔甲陽軍鑑十二品第三十九〕信玄公御一代の間、敵に屋敷城を一ッせめとられたまふことなし、

〔三河物語三〕家康もかいの國をおさめ給ひ而、夫寄大久保七郎右衛門を被レ仰付而、作之郡へ召つかわされ而、御馬は入、七郎右衛門は御うけ申而、〇中略あしたの小屋へゆきければ、早野ざはの城を明、前山之城をやきはらいてのきけるに、其城へうつりて有に、四方一理二理之內に小城屋敷城、共に十二三有、〇中略平尾之屋敷城あらこの屋敷城、

〔顯印大僧正行狀繪詞〕同〇永徳元年十二月十日修法結願シテ御卷數ヲ進ゼラルヽ時、鷲城ノ矢倉カミダテヲハヅシテ、木戶ヲ開テ兩將ニワタス、則チ御方勢入カハル者也、其外祇園新城、岩壺宿城等、悉

ク城ヲ抜テ御方ニ出入ス、

〔梁田文書二武家名目抄居所二十所引足利義氏状〕今般佐竹義重向二于當表一働候處、中務大輔入レ性節々言上感悦之至候、當城兩三度動宿。城。雖レ取懸候、堅固之防戰故無二指儀一、今卯剋令二退散一候云々、

規山子軍歌云、平城ノ町ヲ宿城ト云、山城ノ町ヲ根小屋ト云、

〔大友記下〕石松源五郎立花ノ城ニ參ラルヽ事付戸次道雪御老中ヘ申遣ル口上書之事

親貫顯二不義一、浦部表在々所々揚二火手一、足。城。ヲカマヘ楯籠ノヨシニ候、略〇中自然イサヽカモ御油斷ナサレ、遲々イタシ候ハヾ、カノ惡黨楯籠候足。城。普請ナド仕調、略〇下

〔武用辨略城郭二〕掻。上。　狹地ニ塀屏等モ城ノ如クアレ共、鐘鼓ノ設ナキヲ謂ナリ、城地ヲトリアヘズ堀ナドホリ、土ヲ掻上タル意ナリ、

〔武家名目抄居所二十一下〕掻揚城　按、おろそかに構たる城を掻揚城といふ、又省きて掻揚とのみもいふなり、堅固に築たるにはあらで、唯土をかきあげたる城といふ意にや知らず、

〔十河物語〕天正十一年ニ、讃岐ヲ仙石權兵衛尉拜領セラレ、仙石則淡州ヨリ船ニトリノリ、讃岐ノ引田ニ著船シ、掻。上。グ。ノ。城。ヲコシラヘ入タリ、

〔淸正記一〕天下の普請陣立之時は、行長手に付べし、其外行長の普請仕義は難レ成、私式も似合のか。き。上。城。ども持、手前にも普請繁多之由申越すに依て、攝津守行〇長右之旨秀吉公へ委細に申上しかば、略〇下

〔書言字考節用集乾坤一〕陣。城。（ヂンシロ）

〔鈐錄城制十五〕陣城ト云ハ、謙信流ニテ、山ニ陣ヲ取ヲ云、北條流ニハ、總ジテ陣取ニ土居堀ヲスルヲ云、

〔應仁別記〕サテ山名彈正忠ハ兵庫ヨリ山崎ニ責上、天王山ヲ山城ニ拵テ上下ヲ相拘テ、淀鳥羽八幡ヲ支テ被レ居ケレバ、畠山右衛門佐ノ方ヨリ西岡ノ勝藏寺ヲ陣城ニ相拘、

〔安西軍策三〕元就朝臣洗合被ㇾ築陣城ㇾ事
同〈永祿六〉年十月十日父子〈毛利元就父子〉三人洗合ヘ打入給、此所ノ山頭ニ陣ヲ營構、堀ヲホリ、芝土手高ク築、物見矢倉ヲ構、其勢一萬餘騎ニテ御坐ケリ、

〔陰德太平記七十四〕秋月降參幷殿下薩州仙代川御著陣之事
殿下爰ヨリ又舟ニ乘、同〈天正十五年〉五月四日、千代川ニ著陣アリテ、太平寺ニ本陣ヲ被ㇾ居ケレバ、〈中略〉又大ニ陣城ヲ築ク、其形象上手ノ高サ一丈、其上ニ塀ヲ塗、十間餘ノ陣屋十四五軒造ラセ、內厩ニ御馬三匹、外厩ニ二十匹引立タリ、

〔築城記〕一山城ノ事可ㇾ然相見也、然共水無ㇾ之バ無ㇾ詮候間、努々水の手遠はこしらふべからず、又水の有山をも尾ツヾキをホリ切、水ノ近所ノ大木ヲ切て、其後水の留事在ㇾ之、能々水ヲ試て山を可ㇾ拵也、人足等無躰にして聊爾に取かゝり不ㇾ可ㇾ然、返々出水之事肝要候條分別有べシ、末代人數の命を延事ハ山城ノ德と申也、城守も天下ノ覺ヲ蒙也、日夜辛勞ヲ積テ可ㇾ拵事肝心也、

〔鈴錄十五城制〕山城ハ嶮岨ヲ用ルユヘ、土居堀ヲ不ㇾ用屛バカリニテ濟處多キユヘ、忙シキ時築ニ宜シト云ヘリ、左モアルベシ、又大身ノ城ハ平城ナルベシ、小身ノ城、又ハ堺目ノ城抔山城ヲ用ユト云、山城ニ非ズトモ、海ヲ抱ヘ湖スマナドヲ抱テハ、平城ニテモ小身ノ要害ニモ宜カルベシ、

〔官地論〕諸陣之面々大將御陣大乘寺打寄、思々評議、〈中略〉殊更明日明後日惡日、其上爲ㇾ天一天上ㇾ不ㇾ可ㇾ攻ㇾ山城ㇾ中、

〔房總治亂記〕當城〈上總小濱城〉ハ東南北ノ三方ハ荒海ニテ山城ナレバ切岸ノ高事十七八間、屛風ヲ立タルガ如シ、西一方山ニ續タレドモ、高山ヲ堀切テ通路安カラズ、其間ニ平地小アレドモ、口狹クシテ大勢進退叶ガタク、又舟著ノ使ナシ、城南ニ少砂濱アレドモ、浪高ク巖嶮シテ舟ヲ寄バ碎クベク見エケレバ、〈下略〉

〔松平記四〕城〇野田中の者どもは過半出るを、甲州衆とゞめんとす、そのせり合に、信玄鐵炮にあたり給ふ、山城なれば誰が打けん落矢に打ける、

〔築城記〕一平城は始てこしらへ候時、先縄うちをする也、かならず土居出來て、内せばくなり候、土居の廣さなどよく分別して、なは打にて廣くもせばくも成也、地わりとは云べからず、縄うちと云べき也、

〔鈐録十五城制〕北條流ニ平城ハ普請ニ念ヲ入ザレバ、不叶事ナルユヘ、忙シキ時築ガタシ、

〔太平記二十〕宸筆勅書被下於義貞事

尾張守高經ノ義ヲ守ル心ハ、奪ガタシトイヘドモ、纔ナル平城ニ三百餘騎ニテ楯籠、

〔太平記二十一〕任遺勅被成綸旨事附義助攻落黒丸城事

湊ノ城トテ、北陸道七箇國ノ勢共ガ終ニ攻落サゞリシ城ハ、義助ノ若黨畑六郎左衞門時能ガ纔ニ二十三人ニテ籠タリシ平城ナリ、

〔嘉吉物語〕石見の彈正近宗、石見守の御前に參りて、〇中略天下に弓取おはしといへども、此ものどもは、すぐれたる名人どものあつまりたれば、平城なりとも卒爾にはおつべからずと申て、いろいろの調儀してゐたりける所に、〇下略

〔房総治亂記〕佐倉、東金〇中略久留利以下四十八ヶ所城皆明城ト成テ、城主ハ所々ニ逃走ス、

〔籾井家日記十〕籾井矢織城明退事

一爰ニ籾井越中守教業ハ、矢織ヲ捨城ニ致シ候節、大働キニ手疵アマタ候テ勞ハリ深ク候、

〔江濃記〕道三最後之事

此由父道三〇齋藤義紀父聞テ大ニ驚キ、馳カヘリ貝ヲ吹テ人數ヲ集メ、四方ノ町ノ末ヨリ火ヲカケ、放火シテ稻葉山ノ城ヲハダカ城ニナシ、川ヲ打越シ山方ト云山中ニ引籠リ、父子ノ合戰初マリケ

[illegible]　[illegible]

ル、

〔信長記一ノ下〕美濃國退治事
信長卿○中略城中ノ者共周章騷テ、コハ何者ゾ、敵カ味方カト怪ム程ナルニ片端ヨリ火ヲ懸、卽時ニ裸城ニゾシ給ヒケル、

〔出雲風土記大原郡〕城名樋山、郡家正北一里一百歩、所造天下大神大穴持命爲伐八十神造城、故云城名樋山也、

〔律疏衞禁〕凡越兵庫垣、及筑紫城、徒一年、陸奧越後出羽等柵亦同、○中略若從溝瀆內入出者、與越罪同、謂溝瀆者、通水之渠、從越而未過、減一等、○中略卽兵庫、及城柵等門、應閉忘誤不下鍵、若應開毀管鍵而開者、各杖六十、謂兵庫及城柵等各有禁門、應閉、皆須下鍵、其忘誤不下鍵、若應開毀管鍵、而開各得杖六十、錯下鍵及不由鑰而開者、笞四十、○中略若擅開閉者、各加越罪一等、謂非時擅開閉者卽城主無故開閉者、與越罪同、謂國郡之城主執鑰者、不依法式開閉、與越罪同、○中略
凡緣邊之城戍有外姦內入、謂衆不滿百人者、內姦外出而候望者不覺、徒一年半、主司徒一年、謂出入之路、關於候望者、註云、謂國境緣邊皆有城戍、或遏寇盜、預備不虞、其有外姦內入、謂蕃人爲姦、或作間諜之類、謂衆不滿百人者、此謂小々姦寇抄掠者、若滿百人、自依擅興律、違擬寇賊、被遣有姦出入、合徒一年半、雖非候望者、但是城戍主司不覺、得徒一年、謂蔽內外之阡、幽險之中、候望之人不覺所候、不覺賊來、徒二年、內姦外出者、謂國內人爲姦、而出向化外、或蔽內外姦人出入之路、關於候望者、謂在目所堪見爲關、其有姦人入出、力所不敵者、傳告比近城戍國郡、若不速告、及告而稽留不卽共捕、致失姦寇者、罪亦如之、謂其有姦人入出、所經城戍皆卽捕之、若力所不敵者、卽須傳告比近城戍國郡、令共捕逐、若不速告、及告而稽留、不卽共捕、致失姦寇者、並徒一年、故云罪亦如之、○下略

〔律疏賊盜〕凡盜節刀者、徒三年、○中略筑紫城等鑰、徒一年、國郡倉庫陸奧越後出羽守柵、及三關門鑰亦同、○下略

〔令義解選敍四〕凡在官身死、○註略及解免者、○註略皆則言上、其國司大上國介以上、中國掾以上並闕、及下國守闕者皆馳驛申太政官、若太宰帥及三關國壹岐對馬守者、雖獨闕、猶從馳驛例、

〔令集解選敍十六〕朱云、註云、壹岐對馬守者、雖獨闕猶從馳驛例者、不可名下國、故更立文歟何、貞云、不然、

中國等可入耳者、三關國者、他國者雖有城國不入此例也、

〔令義解五軍防〕凡邊城門、晩開早閉、(謂日出而開爲晩也、日入前閉爲早也、)若有事故須夜開者、設備乃開、若城主有公事(謂城主者、掌城之國司、即三關國、自餘者非也、)須出城撿行者、不得俱出、其管鑰城主自掌、執鑰開閉者、簡謹愼家口重大(謂眷屬累多也)者充之、○中略

凡緣東邊北邊西邊諸郡人居、皆於城堡內安置、其營田之所、唯置莊舍、至農時堪營作者、出就莊田、(謂壯者出就田舍、老少者留在堡內也、)收斂訖勒還、(謂要勒而還於城堡也、)其城堡崩頹者、役當所居戶、隨閑修理、(謂堡者高土以爲障防賊也、非守固之城、故役居戶修理、上條城隍崩頹者、是守固之城、故役兵士修理、彼此不同、仍立兩條也、)

〔大內家壁書〕法泉寺殿御判

安藝國西條鏡城法式條々

一當城衆當番以名代不可勤事　一當城普請每日不可懈怠事　一縱雖爲城衆知人不可入城內事　一嶝兵粮無爲之時不可配當城衆事　一博奕堅固可停止事　以上

右於背此旨之輩者、可致御成敗之由所被仰出也、仍壁書如件、

文明十年六月廿日

〔新編相模國風土記稿二十三足柄下〕小田原城

高座郡高田村民藏文書曰、小曲輪、　十八內村屋舖へ出門、十人板部岡曲輪、十人關役所二皆門、六人同所藏之番、十人鈴木役所之門、以上門々明立、朝ハ六ツ太鼓打而後日之出候見可開之、晩景ハ入會之鐘打果テ傍示可立、此明立之於背法度者、此曲輪之物主可爲重科候、但無據用所有之者、物主中一同申合以一筆出之、付日帳御歸陣之上可掛御目候、相隱自脇妄出入閑居候者可爲罪科事、每日當曲輪之掃除嚴密可致之、竹木カリニモ不可切事、煩以下闕如之所ニ於テハ、縱手代ヲ出候共、又書立之人衆不足候共、氏忠尋申、作意次第可致之事、夜中何之役所ニテモ口口六時致不寢、土

居廻可致仁裏土居堀之裏上候者、芝ヲ踏崩候間、芝付候外之陸地可廻事、鑓弓鐵炮ヲハジメ各得道具、今日廿三悉役所指置、幷具足甲等迄、然與可置之事、番衆中之內於妄者不及用捨假主之事候共、ノリ付ニイタシ氏忠可申定者可有褒美候、若御褒美無之者、御歸馬上大途へ以目安可申上候、如望可被加御褒美事、日中朝之五太鼓ヨリ八太鼓迄三時、其曲輪ヨリ上ゲ一宛可致休息、七ツ太鼓以前悉如着到曲輪へ集、夜中ハ然與可詰事、以上右定所如件、乙亥〇天正三年三月廿二日、六郎殿虎朱印、按ズルニ小曲輪板部岡曲輪等ノ名今詳ナラズ、內村板部岡關鈴木等ハ皆北條氏ノ臣ナリ、

〔武家嚴制錄〕二武家諸法度

一諸國之居城雖爲修補、必可言上、況新儀之搆營堅令停止事、　城過百雉國之害也、峻壘浚隍大亂本也、〇中略

右可相守此旨者也

慶長二十年卯七月日

〔武家嚴制錄〕二武家諸法度

一新規之城郭搆營堅禁止之、居城之隍壘石壁以下敗壞之時、達奉行所可受其旨也、櫓塀門等之分者如先規可修補事、〇中略

右之條々准當家先制之旨、今度潤色而定之畢、堅可相守者也、

寬永十二年六月廿一日　御朱印

〔御當家令條〕十四和田倉御門以下御張紙

覺

一御門番所幷渡矢倉塀等之屋根草を取、土手之草折々刈、其外水やりあしき所は溝をつけ、雨降之時分、水留らざる樣に可被申付事、

一御門へり石之際、又ハ橋詰之土なき所江は土を置、馬の往來不自由無之樣に可被申付事、

一橋之欄干二三ヶ月一度ヅヽ、雨天之節洗を可被申付事、

以上

延寶六年三月日

〔御當家令條十四〕和田倉御門勤仕之覺

一夜中にも冠木御門は明置、本御門は子之刻より卯之刻迄立置、往還之者御門明之可相通、不審之子細於有之者可改之事、

一女之儀、酉之刻より卯之刻迄者、手形を取可相通之、但不審之儀有之ば可相改事、

一御門廻りは、不及沙汰、階級橋廻入念掃除可申付之事、

附、御門脇土橋等塵芥御堀江不可捨事

右之趣可相守之、書面之外者、諸道具等向後不及手形可相通之、但し不審之儀有之者可相改者也、

貞享元年十二月日

〔享保集成絲綸錄十五〕享保六丑年閏七月

内曲輪御門御定書

定

一御門立明之義、卯之刻ニ開之、酉之刻可閉之、不審成者有之者可相改事、

一番代之節御門之扉不殘致明立、改候而請取渡仕候樣ニ可被申付候、若明立不自由ニ候ハヾ、其段御留居中へ可被申達事、〇中略

右條々堅相守べく者也

享保六年閏七月　和泉守　山城守　河內守

司城職

修築　廢毀　移置

〔令義解一職員〕太宰府　帥一人掌(中略)城牧(中略)事、　大國　守一人掌(中略)城牧(中略)事、餘守准レ此、

○按ズルニ、司城職ノ事ハ、官位部國司上篇秋田城介條、織田豐臣二氏職員篇及ビ京都、大坂、駿府、伏見各役人篇ノ城代城番條等ニ詳ナリ、參看スベシ、

〔甲陽軍鑑九下品第二十五〕晴信公山本勘介問答幷信州戸石合戰之事

一天文十四年六月廿四日に、晴信公山本勘介を召て、諸國弓矢の批判をきゝ、給ひて後問給ふ、唐より日本へわたりたる軍書を、見聞たる計にては、人數を賦、備をたて、陣取をとりすき、堺目の城構、よき軍法を定むる事、成がたくおぼえたり、其方ならひうけたる樣子はなきかと仰られければ、勘介承て申上る、我等城を取しく繩ばりは、委相傳申候、關東には太田道觀がかりを專用とは、批判いたし候へ共、過てひさしき事にて候へば、今は是とてもすかと存知たる者無之とあひ見え候て、當時とりたてたる城ども、堀まじき所に堀をほりて、築まじき處に土居をつき、柵の木の場に屏をかけ、蔀の土居、かざしの土居、屏、櫓、階廊下、橋、人馬の不淨かくし、ながしついぢの馬だし、五方、六方、八方正面などゝ申事も存たる者無之候、縱ば一色ばかり能事を仕る事も候、それは度度城をせめ、度々城にこもりて、弓矢功者の剛者は如此仕候はゞ、よく候はんと存候て、一ヶ處計仕りても、さすがにならぬ事なれば、必是肝要と不存、失念いたし重てならぬ物にて候と申上る、

〔武敎全書三城築〕城取繩張之事

一方圓ノ繩張之事　曲尺　分數　一城別郭　別郭一城　陰陽　城陽郭陰　城陰郭陽　形名

前後左右中　追手搦手二三本

一度量數稱勝之事附大中小三段之事

一地形ニ依テ形チヲ制スル事

城取繩張武功之事

一小サク丸ク繩張スベキ事　大ナル城ハ、小勢ヲ以テ籠城ナシ難ク、長ク方ナル城ハ、城内狹ク外廣シ、横矢ヲ用ユルニ德寡キ也、猶可受口傳、

一平城ニ山城ノ繩張、山城ニ平城ノ繩張之事、

一堅固ヲ一方ニ受テ繩張仕樣之事　城ノ後堅固ノ繩ト云是也、末ニ出セリ、

一堅固ヲ前後ニスル心得之事

一平城山城共ニ空地之事

一近クニ高山有テ見ユルニ、繩樣之事、〇中略

堺目城繩張之事

一境目ノ城ハ山城ヲ用ベシ、德多キ事、

一堅固ノ方取樣之事

一川ヲ後ニ當テ城取繩張心得之事

一小サク丸ク繩張前ニ同ジ

附城向城取出繩張之事

一其所其地形ニ隨フ事也、其形必ト不可定事、〇中略

城ノ後堅固ノ城可取樣之事

一敵ノ馬寄ナキ所ハ、本城ノ見ユル樣ニ取リテモ苦シカラズ、附用捨之事、

一渠城堀ホリ樣ノ事、　逢土居心得之事、

一海ヲ受テ取城ハ、遠淺ニシテ潮ノサシ引有ル所ヲ用ル事、

一遠淺ノ所ニ逢柵心得之事〇中略

城築繩張武功秘傳

一境目ノ城、敵ノ攻ルニハ攻惡ク、自然敵ニ攻取ラレタル時、取返スニ手間ヲ取ラザル事、

一小勢籠ル城ニ、大軍籠リテモ狹カラズ、大軍籠リタル城ニ、小勢籠リテモ廣カラザル取様之事、

〇下略

〔鈐録十五城制〕經始　一謙信流ニハ八重繩ト云事アリ、城取ヲスルニ圖ヲ幾度モスル事ナリ、其大將ノ身上ニ隨テ、大中小ノ三段ノ内何レニナリ共定メ、先ヅネゴヤ廻リニナルベキ地ヲ見立、大格ノ地ヲ積ルナリ、大城ナレバネゴヤ廻二里四方、中城ナレバ一里四方、小城ナレバ半里四方ノ地形ヲ繪圖ニスルナリ、是ハ大城ハ本丸ノ内方三町ニテ、外ガワマデ入レテ、一里ナルユヘ、ネゴヤ廻リハ寺社下屋敷ヲ作ル場所ニテ、合テ二里四方ナリ、中城ハ本丸ノ内方二町ニテ、總ガハ合テ十八町四方、ソレヨリ又四方ヘ九町ヅヽヲネゴヤマワリトスルナリ、小城ハ本丸一町半、總ガワ合テ八九町バカリニテ、ネゴヤ廻リ半里四方ナリ、委細ノ町間ハ下ノ矩壘ノ大墨ニアリ、扨右ノ繪圖ヲ土圖ニ移シ、本丸ノ坪矩ヲ定メ普請奉行ニ申付ケ、又繪圖ニ直シ、其繪圖ヲ大砂形ニ直シ、扨二ノ丸ニ城用藏、人質曲輪、城代屋敷、三ノ丸ヨリ士小路、總河外河ニ商賈町寺社山庄マデヲ勘合セ、町割屋敷ノ大槩ヲフマヘ、算者ニ積ラセ、一月モ二月モトクトサゲスミ議定シテ、其上ニテ極圖ヲ分間寸町ニ仕立テ、吉日良辰ヲ選ミ、三日ノ潔齋ヲシテ、本丸ノ四方ニ七五三ノ人足立ヲシテ鍬初ヲスルナリ、七五三ノ人足立ト云ハ、東西南北ニ各七人五人三人ヅヽ、土ヲ七モカウ五モカウ三モカウヅヽ、置キ、其日ハソレバカリニシテ祝トナリ、但シ本丸ノ三台門ヲ先ニ作リ、後ニ城主ノ屋形ヲ營ム事故實ナリト云、三台門ト云ハ、下ノ門關ノ篇ニ見ユ、分間寸町ト云ハ、一間ヲ一分一町ヲ六寸ニ繪圖ヲスル事ナリ、右ノ七五三ノ事ハ、畢竟祝由ノ術ナレバ其家風ニ隨ベシ、總ジテ城普請急ナル時ハ、外ヲ先ニシ、緩ナル時ハ、内ヲ先ニスル事ナリ、

〔海國兵談十〕城制附居館　天之時不ㇾ如地之利ㇳ云て、時日支干旺相風雨など、天の時に於ては、勝

べき理のある時を考て、軍を懸ても、地の固宜キには、勝事不成ト也、然レば城を築クには地形を撰ブ事第一なり、地形勝レて宜キは、天造の普請なれば、別段に人作の普請を不加とも、堅固なるもの也、是地の險を人數の代リに用ル事にて、地形を撰ブの大主意也、地形の事能々會得あるべし、○中略城を築クには山カ水に因べし、山水二ツながら備ルは妙とす、城郭トは內曲輪を城ト云、外曲輪を郭ト云、孟子に三里之城、七里之郭ト云も、內曲輪ト外川トの事也、城ハ以て君を守ル所、郭ハ以て民を守ル所也、○中略城制は日本異國其制各殊也、其制殊なる故籠城の仕方も殊也、○中略日本は郭構麤相なる上に、武士を不殘城下に住居致サする故、商賈も次第に夥ク成て、町屋を造廣ムル故、城下段々廣ク成て、城ハ城、城下ハ城下ト別物に成たり、此故に籠城ト成ば逃亡人夥ク出來して、目も當られぬ騷動を生セシ事、諸軍記に記ス所の如し、○中略國主の居城は、國ノ根本人民の仰て畏服する所なれば、地形は勿論普請も城門及ビ外より見望ム所は廣大美麗に造營して、壯觀を示スべし、是武德を輝て太平を致ス術也、支城並に居館等は、さのみ壯觀を示スニ不及事也、只險に因て暴を防グを主トすべし、○中略平城は四方より敵を受て不宜也、尤普請も繩張を巧に爲ざれば損多シ、但シ天下を帥ル大城は廣平にして輻輳宜ク、四方の參勤運漕等の道路等キ場所を貴ブ也、諸侯以下は山か水かに因て、片面に築クを便利トス、山城も殊の外高山に築ク事勿レ、人馬の懸引等不自由なるもの也、城の繩張に、種々の習傳授等ありト云とも、大趣意は此城高、此池深ト云本文を宗トして、都ての城制あるべし、城制は本丸、二ノ丸、三ノ丸、外川など、、入子鉢の如ク構ル事にもあらず、兎角地形に隨イて三角にも入子にも長クも宜に應ジて築べし、廣平の地に城を取には、まづ少も高キ所を本丸トして、それより二三の丸外川等を構ルなり、

〔東潛夫論覇府上〕本邦城郭樓櫓雉堞木造リニテ牢固ナラズ、大熕ニテ擊バ必ズ敗壞スベシ、宜ク石

モシクハ三和土ニテ築キ、磚ヲ以テ砌成シ、敗席敗帆ノ類ニテ大熕ノ射撃ヲ防グベシ、然ラザレバ大熕盛ニ行レテハ、今ノ城郭ハ守ラレヌナリ、江戸大城ナドノ御城モ、此通リニ造リ玉フベシ、一旦ハ費多ケレド、長ク修理ノ累ヒナカルベシ、

〔日本書紀 二十七 天智〕四年八月、遣達率答㶱春築城於長門國、遣達率憶禮福留、達率四比福夫於筑紫國、築大野及椽二城、　六年十一月、是月築倭國高安城、讚吉國山田郡屋島城、對馬國金田城、　八年八月己酉、天皇登高安嶺、議欲修城、仍恤民疲、止而不作、時人感而歎曰、寔乃仁愛之德、不亦寛乎云々、　十二月、是冬修高安城、收畿內之田税、　九年二月、修高安城、積穀與鹽、又築長門城一、筑紫城二、

〔續日本紀考證 一〕元融按、和銅五年六月紀云、廢河內國高安烽、天智紀謂倭高安城、恐誤、

〔日本書紀 三十 持統〕三年九月己丑、遣直廣參石上朝臣麻呂、直廣肆石川朝臣虫名等於筑紫、給送位記、且監新城、

〔續日本紀 一 文武〕二年五月甲申、令大宰府繕治大野、基肄、鞠智三城、　三年九月丙寅、修理高安城、　十二月甲申、令大宰府修三野、稻積二城、

〔續日本紀 八 元正〕養老三年十二月戊戌、停備後國安那郡茨城、葦田郡常城、

〔帝王編年記 十一 聖武〕天平五年、今年始建出羽國秋田城、

〔職官志 五〕蓋有議未徙、至寶字三四年而徙焉、故延曆二十三年、出羽國奏、秋田置城以來、四十四年、云、見也、但前漏、其置於史、

〔續日本紀 十九 孝謙〕天平勝寶八歲六月甲辰、始築怡土城、令大宰大貳吉備朝臣眞備專當其事焉、

〔續日本紀 二十一 淳仁〕天平寶字二年十月甲子、發陸奧國浮浪人造桃生城、既而復其調庸、使卽占著、又浮宕之徒貫爲柵戶、　十二月丙午、徵發坂東騎兵、鎭兵、役夫、及夷俘等、造桃生城、小勝柵、五道俱入、並就功役、

〔續日本紀二十二淳仁〕天平寶字三年九月己丑、勅造陸奧國桃生城、出羽國雄勝城、所役郡司、軍毅、鎭兵、馬子、合八千一百八十人、從去春月至于秋季、既離鄕土、不顧產業、朕每念玆、情深矜憫、宜免今年所負人身擧稅、　庚寅、割留相模、上總、下總、常陸、上野、武藏、下野等七國所送軍士器仗、以貯雄勝桃生二城、

四年正月丙寅、勅曰、○中略今陸奧國按察使兼鎭守府將軍正五位下藤原惠美朝臣朝獵等、敎導荒夷、馴從皇化、○中略於陸奧國牡鹿郡、跨大河、凌峻嶺、作桃生柵、奪賊肝膽、眷言惟績、理應褒昇、宜擢朝獵特授從四位下、陸奧介兼鎭守副將軍從五位上百濟朝臣足人、出羽守從五位下小野朝臣竹良、出羽介正六位上百濟王三忠並進一階、鎭守軍監正六位上葛井連立足、出羽掾正六位上玉作金弓並授外從五位下、鎭守軍監從六位上大伴宿禰益立不辭艱苦、自有再征之勞、鎭守軍曹從八位上韓袁哲弗難殺身、已有先入之勇、並進三階、自餘從軍國郡司軍毅並進二階、但正六位上別給正稅貳千束、其軍士、蝦夷俘囚有功者、按察使簡定奏聞、

〔古京遺文〕修造多賀城碑

多賀城　去京一千五百里　去蝦夷國界一百廿里　去常陸國界四百十二里　去下野國界二百七十四里　去靺鞨國界三千里

此城、神龜元年歲次甲子、按察使兼鎭守將軍從四位上勳四等大野朝臣東人之所置也、天平寶字六年歲次壬寅、參議東海東山節度使從四位上仁部省卿兼按察使鎭守將軍藤原惠美朝臣朝獵修造也、

天平寶字六年十二月一日

碑在陸奧國宮城郡市川村、卽多賀城廢趾也、多賀柵、始見續日本紀天平九年三月、碑上有西字、其義未詳、續日本紀、東人神龜元年二月授從五位上、二年閏正月授從四位下勳四等、天平三年正月授從四位上、其爲鎭守將軍、見天平元年九月、爲按察使、見九年正月、碑所書官位皆得于置是城之後、其後十一年四

月爲參議、十三年閏三月敍從三位、十四年十一月薨于職、碑不言參議從三位者何也、若以置城之時言之、兵部爲勳四等從四位上、疑朝獦碑記之誤耳、朝獦官銜與續紀所載皆合、但寶字五年十一月丁酉紀曰、爲東海道節度使、不曰東山、然紀載其所管國、有上野下野、則知東山兼在其中也、又據六年十二月紀、八年七月紀、及九月押勝傳、並云從四位下、不載至從四位上、是碑爲自己署名、當以史爲遺漏也、

（續日本紀淳仁二十五）天平寶字八年正月己未、從四位下佐伯宿禰今毛人爲營城監、

（續日本紀稱德二十六）天平神護元年三月辛丑、太宰大貳從四位下佐伯宿禰今毛人爲築怡土城專知官、

（續日本紀稱德二十八）神護景雲元年十月辛卯、勅、見陸奧國所奏、即知伊治城作了、自始至畢、不滿三旬、朕甚嘉焉、夫臨危忘生、忠勇乃見、銜綸遂命、功夫早成、非但築城制外、誠可減戍安邊、若不褒進、何勸後徒、宜加酬賞式慰匪躬、其從四位下田中朝臣多太麻呂授正四位下、正五位下石川朝臣名足、大伴宿禰益立正五位上、從五位下上毛野朝臣稻人、大野朝臣石本從五位上、其外從五位下道島宿禰三山首建斯謀、修成築造、今美其功、特賜從五位上、又外從五位下吉彌侯部眞麻呂徇國爭先、遂令馴服狄徒、如歸進、賜外正五位下、自餘諸軍軍毅已上、及諸國軍士蝦夷俘囚等、臨事有効應敍位者、鎭守將軍並宜隨勞簡定等第奏聞、　十一月乙巳、置陸奧國栗原郡、本是伊治城也、

（續日本紀稱德二十九）神護景雲二年二月癸卯、筑前國怡土城成、　三年二月丙辰、勅、陸奧國桃生伊治二城、營造已畢、厥土沃壤、其毛豐饒、宜令坂東八國、各募部下百姓、如有情好農桑、就彼地利者、則任願移徙、隨便安置、法外優復、令民樂遷、

（續日本紀光仁三十二）寶龜三年十一月辛丑、罷筑紫營大津城監、

（續日本紀光仁三十六）寶龜十一年二月丙午、陸奧國言、去正月廿六日賊入長岡、燒百姓家、官軍追討、彼此相殺、若今不早攻伐、恐來犯不止、請三月中旬發兵討賊、幷造覺鱉城、置兵鎭戍、勅曰、○中略　凡軍機動靜

以便宜隨事、

〔日本紀略(桓武)〕延暦二十一年正月丙寅、遣從三位坂上大宿禰田村麻呂、造陸奧國膽澤城、二十二年二月癸巳、令越後國米三十斛鹽三十斛、送造志波城所、

〔日本後紀(桓武十二)〕延暦廿三年十一月癸巳、出羽國言、秋田城建置以來四十餘年、土地墝埆、不宜五穀、加以孤居北隅、無隣相救、伏望永從停廢、保河邊府者、宜停城爲郡、不論土人浪人、以住彼城者編附焉、

〔日本後紀(嵯峨二十一)〕弘仁二年閏十二月辛丑、征夷將軍參議從三位行大藏卿兼陸奧出羽按察使文室朝臣綿麻呂奏言、(○中略)其志波城近于河濱、屢被水害、須去其處遷立便地、伏望置二千人、暫充守備、遷其城訖、則留千人、永爲鎭戍、自餘悉從解却、(○中略)者並許之、

〔藤原保則傳〕公(○保則)復立秋田城、凡厥壘栅樓塹、皆倍舊制、

〔源平盛衰記二十八〕源氏追討使事

木曾(○義仲)我身ハ越後ノ國府ニ在ナガラ、信濃國住人仁科太郎守弘、加賀國住人林六郎光明、倉光三郎成澄、匹田二郎俊平、子息小太郎俊弘、近江國住人甲賀入道成覺等ヲ大將トシテ燧城ヘ指遣、(○中略)抑此城ト云ハ、南ハ荒乳ノ中山ヲ境テ、虎杖崩能美山、近江ノ湖ノ北ノ端也、鹽津朝妻ノ濱ニ連タリ、北ハ柚尾坂藤勝寺馬淵谷木邊峠ト一也、嶽ハ遠山ノ麓ヨリ、長山遙ニ重テ、越ノ白嶺ニ連タリ、西ハ海路新道水津浦三國ノ湊ヲ境タル所也、海山遠打廻、越路遙ニ見エ渡ル磐石高聳擧テ四方ノ峯ヲ連タレバ、北陸道第一ノ城郭也、

〔源平盛衰記三十六〕一谷城構事

木曾討レヌト聞ケレバ、平家ノ人々ハ讃岐國八島ヲバ漕出シテ攝津國ト播磨トノ境、難波潟一ノ谷ニ籠リケル、去ヌル正月(○元暦元年)ヨリ、爰好キ所也トテ城郭ヲ構ヘタリ、東ハ生田ノ森ヲ城戸口トシ、西ハ一ノ谷ヲ城戸口トス、其中三里ハ須磨、板宿、福原、兵庫、明石、高砂、隙ナクツヾキタリ、北

ハ山ノ管、南ハ海ノ渚、人馬ノ隙アリト見エズ、陸ニハコヽカシコニ堀ヲホリ、サカモ木ヲ引、二重三重ニ櫓ヲカキ、カキダテヲ構ヘタリ、海上ニハ數万艘ノ船ヲ浮ベテ、浦々島々ニ滿々タリ、一ノ谷ト云所ハ、口ハセバクシテ奥廣シ、南ハ巨海漫々トシテ波繁ク、北ハ深山峨々トシテ岸高シ、屏風ヲ立テタルガ如クナレバ、馬モ人モ通ルベキヤウ無シ、誠ニ勇々シキ城郭ナリ、

〔太平記 三〕赤坂城軍事

楠兵衞正成ガ楯籠タル赤坂ノ城ヘゾ向ヒケル、石河河原ヲ打過ギ、城ノ有樣ヲ見遣レバ、俄ニ誘ヘタリト覺テ、ハカ〴〵シク堀ヲモホラズ、僅ニ屏一重塗テ、方一二町ニハ過ギジト覺エタル、其内ニ櫓二三十ガ程掻雙ベタリ、

〔侍所沙汰篇〕一城郭事

大岩門幷宰府構城郭之條、爲九州官軍可得其構云々、且爲領主等之沙汰可致其構云々、

〔北條五代記 九〕三浦介道寸父子滅亡の事

早雲大軍にて小坪、秋屋、長坂、黑石、佐原山を打越、みだれ入、道寸かなはず父子一所に雜兵二千ほどにて、三浦新井の城にたて籠る、此城南西北は入海白波立て岸をあらひ、山高く嚴けんそにして獸もかけりがたし、城の廣さは二十町四方、東一方わづか二十間程陸つゞき、是に堀をほり、門一ッ立おきぬれば、百万騎むかふといふ共力せめには成がたし、たゞ是島城也、

〔新編相模國風土記稿 二十三 足柄下〕小田原城

鎌倉東慶寺大工棟梁金子氏藏文書曰、御構修覆之御用、來ル二十八日〇天正七年五月無風雨之嫌小田原ヘ集リ、廿九日自早天御細工可致之、縱相煩候共、先廿八日ニハ、小田原迄參、是非可得御下知、一日令遲參付而者、御法被相定間、可被處嚴科者也、仍如件、己卯五月廿四日、鎌倉番匠源次三郎、安藤豐前〇登頁奉、虎朱印、

愛甲郡煤谷村民藏文書曰、御構曲輪御座敷幷塀材木、ツガ廿二丁、梁長三間二尺、廣七寸、厚五寸、山造六十六人、人足百卅二人、モミツガ卅二丁、貫下地長二間一尺、方五寸、山造卅三人、人足六十六人、同廿二丁、棟桁二間一尺、方五寸、山造廿二人、人足四十四人、同十丁、スサス角瓦長二間一尺、方五寸、山造十八人、人足四十人、松モミツガ二十三丁、貫下地長二間一尺、方五寸、山造十三人、人足四十六人、同二十五丁、棟桁ウラ木長二間一尺、方五寸、山造二十五人、人足五十人、ツガ十五丁、棟樋猿頭之木二間一尺、方五寸、山造十五人、人足三十人、ツガ二十三丁、長押長二間一尺、方五寸、山造二十三人、人足四十六人、四十丁垂木下地長二間、方六寸、山造四十人、人足八十人、以上二百卅三丁、木數以上二百七十七人、山造、口養四貫七百九文、坂間郷寅歳年貢、秩父前ヨリ可出、以上五百五十四人、人足以上、右來六月晦日ヲ限而、必可爲出來、然者材木之寸方少モ無相違樣、堅可申付候、若於妄之儀奉行人可處嚴科者也、仍如件、天正七年己卯五月廿六日、山奉行板倉代井上代安藤豐前〇其笠奉、虎朱印、

〔北條五代記 十〕小田原籠城の事

此城堅固にかまへ廣大なる事、西は富士と小嶺山つゞきたり、二ッの山の間に三重に堀をほり、小嶺山を城中に入、早川の河をかたどり、南の濱邊へおしまはし石垣をつき、東北は泥田堀をほり築地をつき、〇下略

〔家忠日記追加 十〕天正十五年正月廿一日、駿府の城の經營、松平主殿介家忠是を監すべきの旨、大神君〇德川家康の命を蒙る、　二月五日、駿府の城、二ノ曲輪經營始、家忠是を監す、　十三日、二ノ曲輪經營成る、　四月二十五日、駿府本城の經營成る、

〔勢州四家記〕蒲生飛驒守は、天正拾六年秋、松ヶ島より飯高郡四五百森へ城を移され、松坂と號す

〔翁物語 二〕未信長公御存生ノ時、毛利家退治ノ爲ニ秀吉公ヲ差向玉ヒシ時、備中國松山城ヲ毛利家ノ良臣清水長左衞門ト云シ者籠城シタリシヲ水責ニシテ、終ニ城主筏ニ乘テ出、切腹シテ落

城ス、清水ガ如キ侍今ノ代ニハ珍シカルベシト、上方勢是ヲ譽ザルハ無シ、其時モ城ノ向ノ山ニ陣城ヲ搆ヘ、一夜ノ間ニ所々ニ櫓ヲ上ゲ、白土ニテヌラセ玉フ、其計策後ニ能聞バ、在々ノ家ヲクブシ、所々矢倉陣屋ノ道具ニ用ヒ、戸板ヲ集テ其ヲ播磨杉原ニテ張テ塀ニ用テ白土ト見セ、ナマカベニ其マヽ紙ヲ押付テ白土ノ如ニ用、或又戸板黑塗ニシテ腰板ニ用ユ、人々耳目ヲ驚ス事ノミナリ、

〔梅花無盡藏〕六 靜勝軒銘詩并序〇中略

城中〇江戸之五六井、雖大旱其水無縮、其壘營之爲形、曰子城、曰中城、曰外城、凡三重有二十又五之石門、各掛飛橋、懸崖千万仞、而下臨無地、

〔落穗集後編〕一 御當地御城始之事

一或人問云、御當地御城の義は何の頃如何なる人の繩張を以て、築申されたる事に御座候哉、答云、我等若年の節、さる老人の物語にて承たる義有之候、以前相州鎌倉に兩管領と申て、本姓は上杉にて兩家有之、一方を山内殿と申、一方をば扇ケ谷殿と申候と也、右扇ケ谷殿)家老に太田備中守資清と申者の子、左衞門大夫持資と申たる者、入道して道灌齋と名乘、文武兩道に達し、就中城取繩張鍛錬の聞へ有之、武州河越の城主成しが、鎌倉通用の爲、江戸表に一城を取立べき所存を以、爰彼所と城地を見立、初めは元吉祥寺の臺を城に取立可申とありて、繩張抔をも致し始め候所、或夜靈夢の告に依て、只今の御城に成り候所へ罷越、葉付の竹を剪らせ、二三本立て城形に差廻し、其後在所の者共を呼出し、此竹の榜示より內の村々の名をば何と申ぞと尋候處、百姓共申候は、千代田村、寶田村、祝言村と申三ヶ村にて候と答ければ、道灌聞て國の名は武藏、郡の名は豐島、今城を可取立と思ふ三ヶ村の名も、各吉瑞の名也、此地に城を築候に於ては、末々繁昌疑ひなしとの考を以、城に取立候と也、去るに依て關東御入國以前までは、千代田の城と申觸候と也、

〔東照宮御實紀八〕慶長九年六月六日、近江國彦根に新城築かるゝによて、役夫粮米運漕の事を板倉伊賀守勝重、日下部兵右衛門定好、成瀬吉右衛門正一連署して、菅沼伊賀守定重および三河の代官松平淸藏親家入道(一に親宅に作る)並東意等につたふ、この構造奉行は、犬塚平右衛門忠次、山本新五左衛門重成なり、

〔東照宮御實紀九〕慶長九年七月朔日、井伊右近大夫直勝が近江國佐和山城を彦根にうつさる、これ直勝が父兵部少輔直政が遺意をもて、その臣木俣土佐守勝、去年聞えあげしによりてなり、この城は帝都警衛の要地たるにより、美濃、尾張、飛驒、越前、伊賀、伊勢、若狹七か國の人數をして、石垣を築かしめらる、松平主殿頭忠利、○中略京極若狹守高次等に仰せて、人數を出さしめらる、山城、宮内少輔忠久、佐久間河内守政實、犬塚平右衛門忠次して奉行せしめられ、城中要害規畫はことごとく面論指授し給ふ所とぞ聞えし、

〔家忠日記追加十九〕慶長十一年三月一日、江戶の城經營始、藤堂和泉守高虎繩張をす、諸國の人夫を以て是を築かしむ、

○按ズルニ、江戶城ノ事ハ居處部柳營篇ニ詳ナリ、

〔台德院殿御實紀十二〕慶長十五年閏二月八日、尾州名古屋の城新築をいそぎ給へば、駿府に參覲せし諸大名、みな暇給はりて尾州に赴く、松平筑前守利常、加藤肥後守淸正、○中略稻葉彥六典通等の西國北國のともがら、各人數に家臣をそへ出し、名古屋の地に假舍を設けて群參す、使番佐久間河內守政實、山城宮內少輔忠久、瀧川豐前守忠征、牧助右衛門長勝、村田權右衛門某はその奉行としてまかる、名古屋はそのかみ武衛義統、尾州より遠州に出陣し、今川治部大輔義元と雌雄をあらそひしに、武衛戰負て遂に和睦す、義元は弟左馬助氏豐に武衛の妹をあはせ、名古屋の地にすましむ、(今の二丸の地なりと云ふ)その後織田信秀の時、又これを攻とる、天正十三年、信雄卿尾州を領しけ

追手
搦手

るに、こゝに城を築かんと經營をはじめけれど、砂土深く井水を得ず、上下心悅ばず、中葉にして廢したり、こたびは石壘を築造せらるれば、土地惡さにもかゝはらず、不日に構造をいそがる、これ淸洲の城は地僻にて、東海の樞要とするにたらず、且水害多ければ轉換せらるゝとぞ聞えける、

〔事實文編十四〕故西尾龜山所城主從五位下本多下總守藤原俊次君墓誌　菊池耕齋

君本多氏諱俊次、下總州小篠人也、〇中略龜山隘狹屋宇鮮少、門櫓陴隍虧而不全、不足以備倉卒、乃請命改作、先定城櫓陴隍屋宇館舍之數、區別大小高下往來道路之所由、江河之襟帶山林之要害、塑土爲圖、以紙糊之、待乾劃之、塗以胡粉、敷以五彩、委曲形狀、以奏上焉、觀之以木造者、省費尤多、輕便易擧、大猷公〇德川家光嘉嘆稱能、遂許如圖修築、於是城櫓門館之牢固、石壁陴隍之艱險、屹爲一方之金湯千載之美觀、自計材至手用功、總爲日千百十又餘日而成焉、費皆出乎君、而無取於民、〇下略

〔書言字考節用集一乾坤〕追手（オフテ）（本朝俗謂城壘前面爲追手）　大手（同）　搦手（カラメテ）（本朝俗謂城壘後面爲搦手）

〔武家名目抄居所二十四〕大手　搦手　按、城郭の前面を大手といひ、後面を搦手といふ、大手を追手と書るは、太平記よりまゝ見えたり、追手はオヒテとか、オッテとか讀べきをオフテと讀は穩當にもあらざる上に、大手とは假名もたがひたれど、搦手の字に對て追手と書るにやあらん、抑大手搦手といふ義はいまだ詳ならず、强ていはゞ、城郭の前面は制も嚴かに、構も大なるからに大手といふ、猶第宅の正門を、大門といふの類なり、手は浦手、海手、山の手などいふ手にて、方の轉語なり、又葦手（歌など斜ひに書たるをいふ、葦の葉のなびきたる形に似たれば也、）錦手（瓷器の錦の形を擧て、彩へて燒たるをいふ、）などいふ手は形なり、方と形と義は異なれど、カタのテとなるは一例なり、（カ、タのカは、上の語の韻きに籠りて書かれ、タの同内のテに移りたるなり、）搦手といふ義は、搦は括りといはんがごとく、曲輪の括りの方なる故、搦手といへるに、谷や川士淸が日本紀通證に、神武紀の男軍女軍を、男手の軍女手の軍にて、後世これを大

手搦手といふといひたる、舊說といふべし、

〔築城記〕一追手へ大手共敵ツク時ハ、搦手ヨリ切て出るやうに可㆑拵也、

〔源平盛衰記 十五〕宇治合戰附賴政最期事

平家ノ侍ニ上總助忠淸、此有樣ヲ見テ申ケルハ、橋ハ引タレバ渡難シ、河ハ水早シテ底見エズ、人種ハ盡トモ渡スベシ共覺ズ、追手ノ勢少々ヲ此ニ置テ敵ヲアヒシラヒ、搦手ヲ淀路河内路ヘ廻テ敵ノ前ヲ塞テ戰ハント云ケレバ、○下略

〔源平盛衰記 二十〕八牧夜討事

八十五騎ヲ二手ニ造ル、佐々木兄弟四人○定綱、經高、盛綱、高綱、ハ搦手ニ廻ル、北條○時政、土肥○實平、岡崎○義實、等追手也、兩方ヨリ鬨ヲ造テ寄セタレバ、城ノ內ニモ鬨ヲ合ス、

〔吾妻鏡 一〕治承四年八月廿六日丙午、武藏國畠山次郎重忠、且爲㆑報㆓平家重恩㆒、且爲㆑雪㆓由井浦會稽㆒、欲㆑襲㆓三浦之輩㆒、○中略今日卯剋、此事風㆓聞于三浦㆒之間、一族悉以引㆓籠于當所衣笠城㆒、各張㆑陣、東木戸口○大手次郎義澄、十郎義連、西木戸和田太郎義盛、金田大夫賴次、中陣長江太郎義景、太多和三郎義久等也、

〔源平盛衰記 二十二〕衣笠合戰事

大介○三浦義明ハ、○中略サテ下知シケルコトハ、○中略敵ハ軍ノ法ナレバ、定テ追手搦手二手ニ分テ寄ベシ、追手ノ方ニハ道ヲ造レ、○中略各不覺スナトゾ下知シタル、廿七日○治承四年八月ノ小坪軍ノ後中一日アリテ、廿九日早朝河越又太郎、江戸太郎、畠山莊司次郎等、大將軍トシテ、○中略三千餘騎衣笠城ヘ發向ス、追手ハ河越、搦手ハ畠山、二手ニ分テ推寄ツヽ、鬨ノ音三箇度合テタメラフ處ニ、○下略

〔源平盛衰記 三十三〕源平水島軍事

壽永二年閏十月一日、水島○備中ニテ源氏○木曾義仲平家ト合戰ヲ企ツ、○中略源氏追手ノ大將軍ハ宇

丸郭稱

野彌平四郎行廣、搦手ノ大將軍ハ、足利矢田判官代義清也、

〔源平盛衰記 三十四〕法住寺城郭合戰事

一手ハ今井四郎兼平三百餘騎ニテ、御所ノ東、瓦坂ノ方ヘ搦手ニマハル、〇中略一手ハ木曾義仲四百餘騎ニテ、七條ガ末、北門ノ内、大和大路西門ヘゾ、追手ニトテ向ケル、〇中略木曾時剋ナ廻シソ、火攻ニセヨト下知シケレバ、ヤガテ御所ノ北ノ在家ニ火ヲ懸タリ、〇中略西ニハ大手攻懸ル、北ニハ猛火燃來ル、東ニハ搦手待受タリ、〇中略去トテハ南面ノ門ヲ開テ我先ニ々々ト迷ヒ出ヅ、

〔玉海〕壽永三年〇元暦元年二月八日丁卯、未明人走來云、自式部權少輔範季朝臣許申之、此夜半許、自梶原平三景時許進飛脚申之、皆悉伐取了云々、其後午剋許、定能卿來語合戰子細、一番自九郎許告申、〇搦手也、先落丹波城、次落一谷云々、次加羽冠者〇源範頼申案内、〇大手自濱地寄福原云々、自辰刻至巳刻猶不及一時、無程被責落了、

〔關八州古戰錄 六〕輝虎館林小山陣附佐野祐願寺事

此城ハ東ヲ大手トシ、北ヲ搦手トス、平山城ナレ共、堀ヲ三重ニ穿テ、〇下略

〔信長記 三〕手筒山城并金崎城沒落事

手筒山ノ城墎敵ノ強弱ヲ見計ヒ、諸勢ノ手賦シ玉ヒテ、七重八重ニ取卷シカバ、螺ヲ立サセ、四方追手搦手一度ニ攻上ル

〔書言字考節用集 一乾坤〕本丸ホンマル築城之法、以長方爲不利、以小圓爲要害、故用丸字、

〔武家名目抄 居所二十三〕丸　按、城郭の體たる一樣ならずといへども、おほよそにいはゞ、皆圓なるに出ず、故に丸といひ、又曲輪といふなり、

〔武用辨略 二城郭〕丸　城ハ小圓ヲ善トスルコト、城取ノ習トゾ、此故ニ丸トハ呼ブ也、循環シテ端ナキ謂乎、此ヲ以城門ノ内ヲ廣呼デ、總曲輪ト云、本丸、二ノ丸、或三ノ丸等、方角ニ隨テ、東ノ丸、西ノ丸ナド云、畢竟郭、丸、曲輪共ニ等、

〔書言字考節用集一乾坤〕郭クルハ〇註略　曲輪俗字

〔武家名目抄居所二十一上〕城郭　按、内曰ㇾ城、外曰ㇾ郭と見えたれば、即後代内曲輪、外曲輪といふものなり、されど必しも左かわかちていふにはあらず、おほよそにいへるなり、

〔倭訓栞中編六〕くるわ　廓をよめり、轉廻の義成べし、曲もよめり、郷曲也、よて普通に曲輪とかけり、

〔新編相模國風土記稿二十三足柄下〕小田原城　本丸　東北二方ニ門アリ、西方ニ三重ノ塀樓アリ、主圖合結記ニ、本丸ハ二丸ヨリ、地形七間高シト云、〇中略　二丸　本丸ノ東ニ續ケリ、南北二方ニ門アリ、南ニアルモノハ譙門ナリ、巽隅ニ二重ノ塀樓アリ、主圖合結記ニ、二丸ハ三丸ヨリ地形一間高シトアリ、　三丸　二丸ノ東ニ續ケリ、東方ニ大手口アリテ、譙門ヲ設ク、坤隅ノ一門ヲ欄檻橋口ト云、門外ハ欄檻橋町ナリ　或ハ箱根口トモ云リ、北方ニ一門アリ、幸田門ト云、門外ニ幸田ノ地名アリ、〇中略　乾隅ノ一門ヲ谷ツ口門ト云リ、此門ヲ出レバ谷津村ニ至ル　古ヘ蓮池門ト云ルハ此門ナルベシ、〇中略　城米曲輪　本丸ノ北ニ續ケリ、南ニ一門アリ、本丸ニ達ス、巽ニ木戸門アリ、二丸ニ通ズ、　鷹部屋曲輪　二丸ノ西寄ニツヾケリ、坤隅ニ二重ノ塀樓アリ、　厩曲輪　二丸ノ南ニ續ケリ、西北二方ニ門アリ、東南隅ニ二重ノ塀樓アリ、此郭ノ東門ヲ出テ三丸ニ至ル、已上ノ諸郭ハ、皆四方土居ヲ築廻シ、塀ヲカケ壕塹アリ、　雷曲輪　鷹部屋曲輪ノ西ニツヾキ、地形漸ク高ク三方空塹ヲ廻シ固トス、　鹽焇曲輪　城米曲輪ノ北ニアリ、爰モ地形高ク枯壕ヲ廻シテ要害トス、按ズルニ、板橋村舊[illegible]石屋善左衛門ノ家乘ニ、天正小田原落去ノ後、東照宮城内ヲ歷覽シ給フ時、小田原石モテ發ミ築キシ鹽硝庫ヲ上覽アラセラレ、其工人ヲ召レシカバ、中略ノ趣善左衛門拜謁セシコト見ユ、蓋當時此郭内ニアリシナルベシ、　鍛冶曲輪　雷曲輪ノ西北ニアリ、田圃ナド開ケリ、

〔相州兵亂記四〕松山合戰之事

小田原方ニモ一人當千ノ兵、再オトラジト責シカバ、繩。廻。輪。責破ル、北條左衛門大夫、外ガハ悉火ヲ放テ燒拂フ、

〔鎌倉大草紙〕同〔○康暦四年二月〕十六日、上州武州の白旗一揆は大將の下知を不得、鷲の城の外郭をせめ破打て入むといへども、〔○下略〕

〔奥羽永慶軍記七〕三春須賀川合戰度々の事

二階堂ノ先手須田五百餘人、今泉外曲輪ニ取付鐵砲ヲ打カケ、〔○下略〕

〔奥羽永慶軍記十五〕門澤落城幷常盤合戰事

常盤ノ城モ外曲輪、三ノ曲輪攻トラレ、二ノ丸バカリヤウ〳〵抱タリト、再三飛脚往來ス、

〔松隣夜話中〕山ノ根ノ城落テ引返シ給フ、途中ヨリ先達ヲ侍二人被仰付、前橋城中ニ於テ各役所ヲ割リ別ケ、陣札ヲ令打給フ、太田三樂北城幷後ハ三ノ曲輪、東城地ノ内ハ直江山城、北ノ出丸ニハ川田豐前、柿崎和泉ト各陣札ニ隨ヒテ幕ヲ引、

〔奥羽永慶軍記二十九〕仙臺築城事

伊達政宗諸方ノ敵ヲ討治メ、奥州宮城郡名取川ノ境國分ノ城ヲ築カント、慶長五年繩張シテ普請セラル、〔○中略〕本丸ニ三ノ郭自然山ニシテ、前ニハ大河流レ所々ニ橋ヲカケ、一門等我劣ラジト棟ヲナラベ普請セリ、

〔奥羽永慶軍記一〕朝川合戰ノ事

三方四方ノ口々一度ニ破レケレバ、早町郭モ放火セラレ、本丸計ニ成テケリ、

〔奥羽永慶軍記十二〕土崎湊落城ノ事

去程ニ三方ノ寄手二萬人、〔○中略〕一日ノ内ニ三ケ所ノ要害ヲ攻落シ、湊町郭ニ攻近付、備ヲ張テゾ居タリケル、

〔家忠日記追加六〕天正九年三月廿二日、去年十月ゟ此春に至て、遠三兩國の多勢、高天神の城を圍む、〔○中略〕殘兵猶圍を破て遁れ去んと欲す、本多平八郎忠勝、鳥居彥右衛門元忠是ヲ攻討テ肘金(ホウラカネ)曲

輪に追入、水野總兵衞忠重、其子水野藤十郎勝成父子、肘金曲輪ゟ二の丸に進て攻入、水野が從卒同水次右衞門尉、山本市作先登して死す、的場曲輪の敵夥敷拒て寄手聊猶豫す、

〔北條五代記十〕小田原籠城捨曲輪へ攻入事

愚老相州三浦の住人小田原に籠城す、東はう蘆子川濱手の角矢倉を持口とす、是より一町ばかり上總がまへの外に蘊門寺と名付、一町四はう程すこし高き地形あり、是は昔寺の跡なるによつてかく名付也、是に又堀をほり土手芝手をつけ塀をかけ、城の內より橋を一ッ渡し、是を出曲輪と名付、山角上野守の嫡男四郎左衞門尉、次男左近大夫父子三人の持口の內にあり、然に秀吉公小田原へおし寄るの時節、此出曲輪有て益なしと、塀を破りすてぐる輪と號し、橋をばかけおき、晝は城中より出て土井に鐵砲をかけ置きはなつ、

〔玉露叢五〕慶長二十年〇元和元年五月七日、〇中略申ノ剋城中ヨリ大野修理ガ郎從米村權右衞門ヲ使トシテ差越ス、其口上ノ趣ヲ本多上野介後藤庄三郎ヲ以テ訴ヘ申テ云、〇中略然者秀賴幷ニ母堂其外女中數輩、且亦速水甲斐守父子、拙者父子ハ、山里ノ帶曲輪ノ二間五間ニ倉ニ取籠リ罷在候間、

〔蓑輪軍記下〕蓑輪城安中松井田落城之事

城の大將長野右京進業盛、郭の外を責破られ、本丸に引籠、猶も嚴しく防けり、

〔豐薩軍記五〕稻富與高森伊豫守合戰之事

城中勇氣ヲ顯シ防ギ戰トハ云ヘドモ、多勢ニ無勢、殊ニ要害堅固ナラザリケレバ、追手ノ門ヲ破ラレ、二ノ丸マデ入タリシヲ、浸々トシテ防ギ退ケ、甲ノ丸ニ引籠リヌ

〔豐薩軍記六〕屋山太郎次郎討死幷野邊梢合戰事

城兵〇中略今一度大將ヘ最後ノ暇乞セントテ、詰ノ丸ヘ登ルモアリ、

〔柴田退治記〕秀吉從寅一點相揃諸卒攻入城中、於乙丸夜中之合戰、伏屍者被庇者如泥沙、流血漂楯

秀吉所レ惜英雄今此時不レ所レ用乎、天下弓箭今日所二相究一也、成レ諫勇縣終攻二詰甲丸一、

〔奥羽永慶軍記 十〕千安合戰ノ事

大山勢ハ心バカリハ勇メドモ、八方ヨリ攻入敵ヲ防ギカネ、討ル丶者數ヲシラズ、時ノ間ニ外郭二ノ丸イヒ甲斐ナクモ攻破ラレテ、本丸計ニ成ニケリ、

〔奥羽永慶軍記 十五〕佐竹伊達和睦破事附阿子島高玉落城事

荒井木工丞トイフ者是ヲ聞テ、〇中略我昨日此城へ加勢ニ來ヨリ、一命ヲバ御邊ヱ參ラセテ、尸ヲバ阿子島ニサラサント思ヒ候ゾ、タトヘ外構、三ノ構取ラレタリ共、イマダ二ノ丸、本丸ハ持怺タリ、〇下略

〔奥羽永慶軍記 二十三〕九戸合戰事

抑九戸ノ城トイフハ、〇中略本丸ノ外ニ松館、外館、若狹館トテ三ツ丸ヲ構ヘ、要害ヲ固シタル城ナレバ、タトヘ幾千萬騎ニテ攻ルトモ、輙ク落ベシトハ見エザリケリ、

〔關八州古戰錄 六〕上杉謙信、武州騎西城責事

輝虎大物見ニ出テ高揚〇揚一本作レ掛ノ地ニ立留リ、心閑ニ城中ヲ伺ハレケルニ、本城ト中丸ノ間大沼有シニ移リ、〇下略

〔信長記 一下〕芥川小清水瀧山城開退事

先懸御勢池田城へ押寄、町屋ヲ打破ントセシ處ニ、敵勢打テ出、爰ヲ先途ト防戰、敵味方入亂散々ニ切合撞合ケルガ、終ニ三ノ丸迄押詰、猶息ヲモツカセズ攻ケレバ、旗ヲ卷甲ヲ脱テ降參ヲコフ、

〔松隣夜話 上〕謙信池ノ西端ニ馬ヲ扣ヘ、辨當ヲ取寄セ茶ヲ喫セラル所ヲ、金澤ト云者、出丸ヨリ鐵砲十挺計リ連ネ、三十間程ニテ二繰マデ、ダメツケニ打ケレドモ、〇下略

〔籾井家日記 五〕信長卿丹波家名代使者對面事附從二信長卿一丹波家江攝州荒木退治被二仰出一事

中務殿〇廣澤ツヽシンデ申上ラレ候次第ハ、〇中略此城〇總山ノ義、舊冬〇天正四年スデニ外ノ丸マデ乘取、今五日ノ内ニハ乘返シ申ベキ武略ニ及ブト云ヘドモ、〇下略

〔大友興廢記　二十〕篠原目落城の事附秀吉公御感狀

石見守〇白坂此狀〇河南書を一見し、蟷螂が斧といふ事を知て引かへたる分別尤也と感悅して、白筆の返狀を遣す、其狀曰、〇中略早く城中を片付、貴殿は搦手之丸へ御移尤候、

〔信長公記　十一〕天正六年七月十五日、夜ニ入神吉之城へ、瀧川左近、惟住五郎左衞門、兩手ヨリ東之丸へ乘入、

〔松隣夜話　中〕山ノ根ノ城落テ引返シ給フ、途中ヨリ先達ヲ侍二人仰付ラレ、前橋城中ニ於テ各役所ヲ割リ別ケ、陣札ヲ令打給フ、〇中略城主入道謙忠ハ西ノ丸穴門ノ内一段底キ地ニ陣ヲ打、

〔奧羽永慶軍記　二十〕箭田野藤三郎義正武勇事

寄手ノ大將昭光味方ニ下知シテ、〇中略水攻ノ外ハアル可ラズ、陣々ヨリ足輕人步ヲ出シ水曲輪ヲ取テ水ヲセキ入、番ヲ付置タリ、

〔奧羽永慶軍記　二十九〕横堀一揆合戰幷武太助最期事

寺澤ノ土民ドモ此由ヲ聞テ、サラバ軍ノ用意セヨトイフ儘ニ、横堀太田中トイフ所ニ、隣ヒトヘ近鄕ノ奴原馳集テ千餘人、廻リ七八町ニ雪ヲ掘テ塀トナス、其頃ハ每年ヨリ大雪フリテ、深サ一丈餘リ、田ノ泥土ノ見ユル迄ニ掘テ、廣サ四五丈ニシテ、岸ハ屛風ヲ立タル如ク雪ヲカサネ、高サ二丈計厚サ二尺餘ニシテ郭ニ用フ、雪ノ道ハ只一方ニ拵タリ、妻子老人等一人モナク、遠方ノ親類ヲ賴ミ遣ヘシ、究竟ノ士民共バカリ、弓押張鐵砲ヲ揃ヒ、鎗先ヲ磨キ待居タリ、寄手ノ大將川田三右衞門尉、中村ニ陣取テ、同廿九日彼雪ノ要害ヲ取卷堀越ニ弓鐵砲ヲ打懸ル、サレドモ雪ヲ通サズ、サラバ堀ヲ雪ニテ埋ントスルニ、雪郭ノ狹間ヨリ鐵炮ヲ以テタメシ討ニスルニ、忽味方ノ

足輕人夫五六十人討レタリ、

〔築　記〕一城の內も見えず、又土居も高く家もみえざるを黑構と云也、

一城の口より家もみえ、又土居もさくを振、內の見ゆるをば、透がまへと云也、

〔太閤記　三〕爲信長公弔合戰秀吉上洛之事

池田おもふやう、〇中略川に付て細道有、これより山崎の東總構の外を廻て、惟任が勢に向はんとすれば、〇下略

〔岡本記〕總がまへといふ事は、たとへばこし水などにてはいちはなどを申也、總ぐるわの事也、

〔奧羽永慶軍記　二十三〕政宗大崎葛西一揆退治事

安房守茂庭片倉氣ヲ屈セズ、鐵炮ヲ稠シク打入、新手ヲ以攻ケレバ、其日ノ未ノ剋ニハ總構殘リナク破レテ、本丸計ニ成ニケリ、

〔伊達日記　下〕佐沼近所ノ者共ノアツマリ、町構西館相抱候、一揆ノ城共大崎葛西中ニ多候間、御人數損候モ如何思召サレ、總構ヲ御覽候而仕寄ヲ所々ニ仰付ラレ、〇中略沼ト河トノ間ハ、茂庭石見役所ニ候、其東ハ片倉小十郎役所ニテ候、三日仕寄ヲ仕ラレ候處、四日ノ明方西曲輪ヲ持兼、引マモリ候付而、町構モ破、本丸計ニ罷成、

〔玉露叢　四〕慶長十九年十月十一日、板倉伊賀守ヨリノ飛脚到來ス、注進シテ云ク、大坂表ノ體彌籠城ノ支度ト相見エ申候、其趣ハ〇中略總構ニ壁ヲ付番匠ヲ數百人招ヨセ、櫓井籠ノ支度晝夜怠ラズ、

〔松隣夜話　上〕永祿三年庚申二月上旬、相州北條氏康公、大藤金谷多島九島等ノ耆老ヲ會シ、評定有テ曰、〇中略今度モ三樂謀ヲ致シ、大石小幡白倉等先陣ヲスル風聞ナレバ、定テ大勢タル可、要害ノ用意ヲ增シ、籠城ノ覺悟尤也、持分ノ城餘多ノ內、構淺間成ハ破却シテ、村下雁ノ集入江松山布引

白根山根ナンド、各一將ヲ加ヘテ守護ス可、

〔別所長治記〕神吉ノ城攻

民部ヲ打連レ門ノ內ヘ引入ケルヲ、大勢ノ敵ドモ喚キ叫デ込入々々攻ケル間、遂ニ外構一重打破ラル、

〔信長記 二〕六條合戰事

明レバ正月十〇(永祿二年)二日、マダ明ヤラヌ早朝ヨリ、三好ガ一黨五千餘騎ヒタ〳〵ト寄來ル、城中ノ勢始ハ外構ニテ相防ント、暫シ支テ戰ケルガ、寄手猛勢ニテ込入ケル間、叶難ヤ思ケン、詰ノ城ヘ引取、

〔太閤記 四〕前田又左衞門尉利家末森之城後攻之事

いかゞはせたりけん、三の丸外構の揚簀戶をおろさず引しかば、敵得たりかしこしと引付て來りしを、野崎孫介同與左衞門兄弟、面もふらず引返し鑓を合、(〇下略)

〔奧羽永慶軍記 十三〕相馬抱築山小手森石澤落城ノ事

先陣ノ者共勝ニ乘テ、町構ニ取付、火ヲカケヽレバ、餘煙天ヲカスメタリ、

〔倭名類聚抄 一河海〕塹 四聲字苑云、塹、遶城長水坑也、七贍反、(和名保利木)

〔箋注倭名類聚抄 一水土〕按、保利岐、堀城之義、今俗省呼保利、按、廣韻、塹坑也、繞水也、與此義同、又按說文、塹阬也、卽是字、從水俗字、

〔東雅 三地輿〕城シロ(〇中略) 倭名鈔に、塹の字讀てホリキといひ、四聲字苑を引て、遶水長水坑也と註せしにホリとは穿也、キとは限也、蘇我蝦夷大臣穿池爲城と見えしものにして、卽今の城池なり、

〔伊呂波字類抄 保〕隍(ホリ城池之有水曰池也、無水曰隍)

〔令義解一職員〕兵部省

卿一人、（掌（中略）城隍（中略）事、）

〔令義解五軍防〕凡城隍崩頽者、役兵士修理、（謂隍者城下坑也、役上番之兵士也、）若兵士少者、聽役隨近人夫、逐閑月修理、（謂止爲人夫立文、不爲兵士也、）其崩頽過多、交闕守固者、隨即修理、役訖具錄申太政官、（謂兵士人夫並錄申也、崩須多少、謂不制人出入、）所役人夫、皆不得過十日、（謂此止據人夫、其兵士、隨上番日多少役也、）

〔鈐錄十六城制〕城地　謙信流ニ堀ラバ、大城ハ本丸二十二間半、二三ノ丸ハ二十七間半、總河ハ十九間半ナリ、中城ハ本丸十五間、二三ノ丸ハ二十間、總河ハ十二間半ナリ、小城ハ本丸十二間半、二三ノ丸十七間半、總河九間半ナリ、堀ノ深サ大城ハ三間半、中城ハ二間半、小城ハ二間ナリ、此土ヲ以テ上居數相應ニナル、但シ地ノ高卑ニヨルベシ、總河ノ堀塀ニ、カラ堀ハ片ヤゲンナリ、手前ヲ深クスル狹キ故ナリ、ツマヲリハ横曲輪ニ用キル、其外ハ皆ツマシラズナリ、ツマ折トハ曲輪ノナリニ隨テ堀ル事ナリ、ヿ如此、ツマシラズトハヿ如此スル事ナリ、水戶違ハ不淨ヲ防グ爲ナリ、外曲輪ノ堀ノ內曲輪へ續ク處ヲバ、土居ニテ仕切テ土橋ニスルヲ云フナリ、土橋ニナラヌ處ヲバ、板橋ニシテ下ヲ土居ニテ細ク仕切ル、內ヲ用水ニ用キルナリ、又山城ニハ堅堀ト云フ事アリ、山城ハクルワアサマナルモノナルユヘ、是ヲ用キテ敵ノ勢ヒヲ分ツ、山鹿流ニモ同事ナリ、北條流ニ內堀外堀ト云フ事アリ、內堀トハ山城ナドニ屏ノ內ニ、內虎落ノ替リニ堀ヲホル、腰郭ノ內ニモ堀テ利多シト云ヘリ、外堀ハ城ノ方ノ土居水際ハカウバイニシ、水叩キハ切立タルヨシ、又カラ堀ハ道ニナル徑アリ、又塵取トテ堀向ニ雁木ヲスルヲ云フ、横矢ナキ處ニスベシ、其向ノ屏ニ切戶ヲ拵へ置テ、石火矢ヲ仕カクベシ、敵横矢ナキ處ナルユヘ、埋草ヲ以テ仕寄ルヲ打ヒシグ爲ナリ、又塵防ト云フハ、城ヨリ出ルニ堀へ落ツベキ危キ處ニ、土居ヲスルヲ云フ、高サハ足ノ三里ダケニシテ、上ノハヾ三尺ナリ、又不淨捨ト云フハ、敵ヨリ見エヌ樣ニ入堀ヲ拵へ置テ舟ヲ置クベ

シ、山鹿流ニ堀ハ、古法ハ矢ガヽリ十五間トテ、ソレヨリ廣クハセズ、今ハ不然、但シ小口脇ナド
ノ堀ハ、堀口廣サ十間ヲ上トシ、十五間ヲ中トシ、二十間ヲ下トス、又大將ノ居城ハ、十五間上、二十
間中、二十五間下ト云ヘリ、上中下ト云フハ、繩張アシキ城ニハ廣クモ不苦、繩張ヨキ城ハ堀廣キ
ハ損多シ、堀廣ケレバ外ヨリ見スキ、又横矢モ丈夫ナラヌナリ、堀ノ堀リ様上ヘアガル際ヲ急ニ
ホリ下ヲナダラカニスベシ、渡ルニ先キノ深クナル様ニホルベシ、敵方ヲナダラカニシテ、此方
ヲ急ニスベシ、又堀底ニ見エザル様ニ、竪横ニウネヲ付クベシ、且ツ又堀ニハ水鳥ヲハナチ置ク
ベシ、又ヌマヘツヾキタル堀ハ深ク堀ベカラズ、ヌマノ水淺クナルモノナリ、

〔海國兵談十〕城制附居館　堀に二あり、水堀、乾堀也、水堀ハ水面にて十間より二三十間迄に掘べ
し、深サハ三四丈に掘べし、岸のこふばいハ一丈に四尺の積なるべし、但シ土の性ノ宜キ所ハ、是よ
り急に掘べし、乾堀ハ片藥研に掘也、勿論城の方を深ク掘なり、
都て堀ハ泥の深キを好ム、水深ク泥深キハ猶以て妙とす、

〔手鑑七〕堀幅之事　是ハ大テイ十五間ヲ法トスルナリ、矢玉ノ勢力ヲ積リテノ義也、併小口脇杯
ハ七八間ニモ致シ、馬出シノ兩方小口ノワキ等、五間位エテモ可也、又隅矢倉、矢倉臺等ノ向フハ、
十五六間ヨリ廿間餘ニモ致ス也、有來ノ沼ナドアレバ、其幅廣クトモカヤウノ所ニハ用テ益有
リ、其外廣狹ハ其所其城ノ心持ニヨルベキ事也云々、○中略　堀キリ之事　是ハ城外ニ敵ノ屯ヲ
成シ、砦トナルベキ空地廣キ時ハ、所々ニ捨堀ヲツケ、竪横ニ堀キリヲ成シテ、敵ノ一同ニ咄ト來
リ詰ルコトノナラザルヤウニスルギ也、○中略　堀ノ内道之事　是ハ乾堀ニ用ルギ也、乾堀ニハ
何レノ所也トモ、小口々々ノ順逆、内外ノヨウスヲ考ヘテ、堀ノ内ヲ道ニ用ル心得也、○中略　隍堀
水堀之事　堀ハ所ニ依テ此兩ヨウヲ用ルト云ギ也、隍堀ハ忍ノツキ安キモノナル故、内道ノ順
逆利不利ヲ考辨シテ、自ラ忍ヲ防グノ設アルヨウニシテ可也、水堀ハ水底ノ障子モガリ水鳥等

ノ心得也、矢掛リノコトハ前ニ出ス故、爰ニ略ス、○中略　捨堀之事　是モ上ミノ箇條ニ柵ヲフル心得ト同意ニシテ、城外ノライ地廣キ所ニ用ルギ也、然柵トハ少シ違ヒタルワケハ、城外柵ノ場ヨリ少々遠クトモ用ルギアリ、近ク用ル時ノ心得ハ柵ト同ジ心也、少シ遠ク成ル時ハ、出ヲ防グニ敵ノ足掛リトナリテ、味方ハ急ニ矢玉ヲ用ヒ、防ギノ爲メニナル樣ニ致スギ也、其堀リヨウハ一ツヽキニ設ケズ、所々ニ右云所ノ利不利損益ヲ考辨シテ、キレ〳〵ニ致スギ也、

〔手鑑七〕扇子之繩之事　是ハ水ノ手ノ心得也、堀ニテモ川ニテモ水ノ上ヘ成ル如ク、塀ヲ向フ開キニツキ出シカケテ、下ハ水ヲ通シ、其堀ノ內ヨリ車ニテナリトモ水ヲ汲ムギ也、スグニ塀ヲ水中ヘ出ストキハ、水ニサカラヒテ壞レ安シ、故ニ斜メニ出シテ益アリ、又要メノ櫓ト號シテ、手前ノ角ニ櫓ヲ設ケ、是ヨリ向フノ敵ヲ拂ヒ、下ニテ水ヲ汲ム心得也、斜メニ出シタル塀ニモ、矢窓ヲ明ケテ向ヲ拂フ也、是ヨリ取用テ、山城ノ溪間ニ淸水ノアル時、右ノ如扇ノ繩ヲ用テ水ヲトルコト也、是又左樣ノ淸水アル時ノコト也、ワザト設ケテ扇ノ繩ニ成スニハ非ル也、　水之手事　是ハ定リタル敎ニ非ズ、城制第一ノ掐ヘニシテ、先ヅ定ズシテ叶ハザルギ也、城ノ得失ニヨリテ外ヨリノ用水ヲ設ケ、又淸水井等ノ程ヲシラベ、皆何レニ人數ノ多少ニ引クラベテ、考辨アルコト肝要ノギ也、

〔源平盛衰記二十二〕衣笠合戰事
大介○三浦義明ハ、○中略サテ下知シケルコトハ、○中略追手ノ方ニハ道ヲ造レ、廣サ七八尺ニ過ベカラズ、道廣ケレバ大勢タツバミヲ並テ押寄レバ、城ノ中ニ隙ナクシテ防エズ、馬二匹バカリ通ル程ニ造レ、道ノ片方ハ沼ナレバ、兎角スルニ及バズ、片方ニハ大堀ヲホレ、道ヲバ三重ニ堀切テ、一ノ堀ニハ橋ヲ廣クワタセ、中堀ニハ細橋ヲ渡セ、二ノ堀ニハ逆茂木ヲ引、堀ゴトニ搔楯ヲ搆ヘ、櫓ヲカケ、弓ヨク射者共ハ兜ヲ著ザレ、

〔源平盛衰記四十二〕勝浦合戰附勝磨并親家屋島尋承事

良遠〇櫻間介ハ、大堀ヲホッテ水ヲ滿ヘ、岸ニヒシウヱ、ヤグラカイデ待ウケタリ、

〔吾妻鏡九〕文治五年八月七日甲午、泰衡日來聞二品〇源賴朝發向給事、於阿津賀志山築城壁固要害、國見宿與彼山之中間、俄搆口五丈堀、堰入逢隈河流柵、

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

彼ノ笠置ノ城ト申ハ、〇中略岩ヲ切テ堀トシ、石ヲ疊テ屏トセリ、

〔太平記七〕吉野城軍事

吉野ノ大衆前後ノ敵ヲ防ギ兼テ、或ハ自腹ヲ掻切テ猛火ノ中ヘ走入テ死スルモ有、或ハ向フ敵ニ引組デ指チガヘテトモニ死ルモアリ、思々ニ討死ヲシケル程ニ、大手ノ堀一重ハ死人ニ埋マリテ、平地ニナル、

〔太平記十五〕三井寺合戰并當寺撞鐘事附俵藤太事

栗生篠塚是ヲ聞テ、馬ヨリ飛デ下リ、木戸ヲ引破ラント走寄テ見レバ、屏ノ前ニ深サ二丈餘リノ堀ヲホリテ、兩方ノ岸屏風ヲ立タルガ如クナルニ、橋ノ板ヲバ皆刎迦シテ橋桁計ゾ立タリケル、

〔太平記二十八〕八幡炎上事

此城三方ハ嶮岨ニシテ登ガタケレバ、防ニ其便アリ、西ヘナダレタル尾崎ハ平地ニツヾキタレバ、僅ニ堀切タル乾堀一重ヲ憑テ、春日少將顯信朝臣ノ手ノ者共、五百餘騎ニテ支タリケル、

〔結城戰場物語〕抑かの結城の城と申は、西は大河をかまへ、四方のそうぼり廣くふかければ、大船もうかぶごとくなり、

〔大友興廢記十八〕妙林一城を持事同軍

妙林は鶴崎に在て俄に一城をかまゆる、此尼みづから出て、堀の繩張外がはの二三の丸をみは

からひ、まづ藥研堀にほらせ、ひしをうゑ、柵をふらせ、

〔太閤記 三〕備中國冠城落去幷高松之城水攻之事

爰に高松の城とて名城あり、三方はふかき沼渺茫として、平安の時だも人馬のかよひなかりしなり、況六具さしかため攻らるべきをや、一方は廣き水堀幾重ともなくたゝへて波蕩々たり、

〔東遷基業 六〕尾州長湫合戰の事

秀吉中軍に將として、〇中略樂田羽黑を按行し、小牧山に向て砦を築き、二重に塹を鑿り、これを二重堀といふ、

〔北條五代記 八〕北條氏康智仁勇の德有事付實朝公の事

氏直はめぐり五里の大城を構じ、關八州の民百姓までも籠おき、天下を引請、百餘ケ日せむるといへ共終に落城せず、然所にあつかひ有て小田原沒落す、翌年われ京都へのぼりしに、駿河の府中町はづれに、大なる堀ぶしんあり、是はいかなる事ぞと問ば、するがは中村式部少輔領國なり、去年小田原の城總がまへ有によて落城せず、是目前の鏡なりとて、府中の城に總がまへの堀をほらしめ給ふと云、それより京まで海道の城々みな總がまへの堀ぶしんありつるを見たり、今もつて猶爾か也、

〔會津四家合考 一〕示現寺住持樹芳之事幷開山源翁和尙之事

護法山示現寺住持樹芳東堂ハ、〇中略急ギ領處ノ地下人ヲ集メ、護法山ノ尾崎ナル坂口、僅八九間ガ間ニ、土ヲ高ク築キ上テ通路ヲ塞ギ、又東ノ方ノ畠ヲ山際迄深サ七尺計ニ乾堀ヲ堀通シテ、額ニハ柵ヲ堅ク結ヒ、〇下略

〔難波戰記 三〕城中堀石垣破壞之事

大坂堀石垣破壞ノ奉行松平下總守、本多美濃守、本多豐後守、瀧川豐前守、忠征佐久間河内守、政盛山城

宮内少輔宗秀山本新五左衛門一儀四門ヲ守ル、

諸大名御目見附勳功者賜感狀事

此節修理亮野○大奉行人ニ對シテ、初ノ契約ハ總堀トコソ定ラレシニ、是ハ西南外郭ノ湟ノ事ナルヲ、故ナク二三ノ丸マデ破却シテ、平地トシ玉フゾ謂レナシト制シケレバ、奉行人答ケルハ、兩御所モ總堀ヲ破壞スベシト仰付ラレ候ヘ、但總堀ト云ハ堀有所ハ、皆破却スル事トコソ心得候、總構ノ堀トハ承ラズトテ、數万ノ人夫ヲ掛テ、忽平地トナシケレバ、制スルニ力ナク、追テ家康公ヘ言上スベシトテ默止ケリ、

〔明良洪範二十〕二條ノ御城堀セバシトテ、二間ニ廣ク仰セ付ラレシ時、池田輝政、加藤嘉明兩人堀初メ、猶狹ク候ヘバ、今少シ廣ク仰付ラレ然ルベシト申上シニ、神君家康○德川モハヤ是ニテヨロシク候、其故ハ我等ガ能者多ク持タレバ、此城ハ責ルトモ、シバラクモ動クマジケレバ、其内ニ近邊ノ城々ヨリ後詰スベシ、日數ヲ重ネバ、江戸ヨリモ人數ヲ馳登スベシ、爰ヲ以テ此城ハ堀狹キモヨシ、○下略

〔武用辨略城郭三〕橋○中略　城中廊架橋、或ハ引橋等ノ品アリ、

〔築城記〕一追手の口ハ土橋可然也、自然板ばしなどハ、火を付事アル也、切て出てよき方を土ばしにする也、

一カラメ手ノ口かけ橋もくるしからず、但やう躰によるべし、

〔甲陽軍鑑品第四十二十五〕城取の事

一廊下橋の事、同引橋の事、　一橋の左右廣狹の事○中略　一橋に兩方板の事

〔鈐錄城制十六〕橋　一謙信流ニ、蔀橋ト云ハ、敵ヲ横ニウクル處ヲバ、板ニテシトムナリ、土橋ニハ塵防トテ、土居ニテ欄杆ノ如クスルナリ、廊下橋ハ橋ノ並ブ處、繩違ノ處ニ用ユ、繩違トハ外ヨリ内グ

ルワノ見スクヲ云、上手ノ繩張ニモアル事ナリ、人ノアマリ往來セヌ處ハ、ハネバシヲモ用ユ、本丸ノ橋桁ハ丈夫ニスベシ、北條流ニ、橋升形ト云事アリ、堀ハヾ廣キ處ハ橋ヲ升形ニスル事アリ、廊下橋ニハ折ヲ付ベシ、內ヲバ引ハシニモスト云、山鹿流ニ、長橋トテ五十間モ三十間モアル橋ヲ用ル事アリ、是ハ橋ノ左右横矢宜シク、或ハ兩袖ノ升形ナド有テ、敵遠ニ渉カヌル處ニ用、又筋違橋ト云ハ、左右ニ横矢ナキ處ニハスヂカヘニシテ横矢ヲ取ナリ、

〔手鑑七〕橋之事　引橋ハ土橋ノ所ニ用ルギ也、一ノ門ノ前ニテ二間ヨリ二間半位迄ニ、水貫ヲ掘通シ、夫ヘ常ニハ橋ヲカケテ往來ヲ通ハシ、事ニ臨ンデハ其橋ヲ引キテ敵ノ越來ラントスルヲ防グ爲也、　長橋ハ堀ノ幅一盃ニ橋ヲ掛テ、夫ヲ筋違テ掛ルギ也、是ハ橋ヲ横筋違ヒニカケテ、郭ノ塀ヨリ横矢ヲカクル爲メ也、　廊下橋ハ何レノ所ニ於テモ、橋ノ上ヘヲ矢倉ノ樣ニ屋根ヲ付ケテ、兩脇ヲ圍ミテ、夫レニ矢窻ヲキリテ外トヘノ拂ヒ用ル爲也、　橋ニ板之事　是ハ常ニ往來スル通リノ橋也トモ、事ニ臨ンデハ橋兩方ノ欄干ニ板ヲ打ツケテ、橋ノ往來ノ見エヌヤウニシツラヒ、其板ニ矢窻ヲキリテ、內ヨリノ拂ニモ成スベキ義ナリ、畢竟樓下橋ノ急ニシテ其キミニ用ル爲也、

〔關八州古戰錄十八〕武州岩築落城之事

寄手疼ム事ナク、頻ニ競ヒ進シマヽ、敵方堪兼テ城中エ引入ル、本多平八郎忠政十六歲、淺野左京大夫幸長十五歲、先登シテ大手車橋。ノ上ニ於テ勇戰セラル、

〔播州佐用軍記下〕寄手又仕寄附テ城ヲ攻之事

城ノ大手門ヲ開、結橋。迄マデ、弓鐵炮ノ士噇ト走リ出、〇下略

〔別所長治記〕神吉ノ城攻

二ノ丸ノ引橋。ノ板ヲハネハヅシ、行桁計殘シタル橋詰ニ、〇下略

石垣

〔續武家閑談 八〕城兵二の丸へと引取ける、則附入にせんと渡邊勘兵衞すゝむ、二丸へは水堀ありて十間計のらんかん橋あり

〔見聞雜錄 所引武家名目抄二十九居所〕安部加賀守馬に乘ながら、誰か有、此引。橋。をはね返せ渡して乘込けがするなと下知すれば、猪子才藏曲淵心得たりと云儘に、十人計にてもはね返し難き引橋を、曳やつとはね返し、○下略

〔見聞雜錄 所引武家名目抄軍陣四ノ四〕勝賴公眞田に問せ給ふ、○中略眞田申上るは、其段少も御氣遣被遊まじく候、年中ならしの御軍法は何時にても變改なし、揚貝早々取立と有故、安部加賀守御馬傍にて揚貝いかにも音太に吹出すと、ぶ々堀端より橋升形城の內も押詰たる武田勢太刀打の者共皆々引上る、

〔明良洪範續篇 十三〕或時西ノ丸ヘ御成有シ、三十郎モ御供セシニ、御堀ノ橋ノソリカゲン御心ニ協ハズシテ、今少シソラセヨト仰有、此事承ルト其儘腰ヨリ扇子ヲ出シ開キ持テ、此位ノカウバイニヤト伺ヒ奉ルニ、今少シソリテト上意ユヱ、又一間開キ御目ニ掛ルニ、夫ニテ宜シトノ御事故、其通リ役人ヘモ扇ヲ以テ、指揮セラレシト也、此日則五百石ノ新恩ニ浴シケル、是立身ノ初メナリトゾ、

〔鈐錄 城制十六〕城地 一同流○謙信流石垣カウバイノ矩ニ切込ハギ、打込ハギ、野ヅラ三種アリ、切込ハギト云ハ、タガネヲ以ラスリ合セタルヲ云、曆ノ矩ヲ用ユ、マルキモノヲ十二ニワリタルカウバイナリ、打込ハギトハ、槌ニテカドヲ打ヒシギテ、ツキ合セタルヲ云、是ハ十ワリトテ、マルキモノヲ十ニワリタルカウバイナリ、野ヅラト云ハ、アリナリノ石ニテツキタル石垣ナリ、是ハ八ツワリナリ、是ナリ、兩ヲトシト云ハ、下ハカウバイアリテ、屛下ハ直ニスルヲ云、如此、切込ハ、ギハ四分一、打込ハギハ五分一、野ヅラハナラシトテ上一トヲリバカリヲ兩ヲトシ

ニスルナリ、又ハダカ鉢卷ト云事アリ、堀ナシニ地ヨリ石垣ヲスノヲ、鉢石垣ト云、土居ノ上ニ少シ石垣ヲスルヲ鉢卷ト云、何レモ石垣ヲ低クスルユヘ、右ノカネナラズトモ心得次第ニスベシ、北條流ニ、石形ハ四方ナルガヨシ、丸キハアシヽ、扣ハ長キヲヨシトス、栗石入樣ハ石尻ヨリ長ク入ベシ、總ジテ石垣ハ石ノ品々ニ念ヲ入レ、ムツカシキモノナルユヘ、不入處ニハ無用ニスベシ、門脇ナドノノリノ廣クナラヌ處ニハ、石垣ヲ可用ト云、山鹿流ニハ、石垣ハ高サ三間、內ノ數ハ六間ノ內ニテモ不苦、外法トモニ一間二尺ニスベシト云、愚按ズルニ石垣ハ加藤清正ノ一流アリ、彼家ノ士ニ飯田覺兵衞、三宅角左衞門ヲ兩カクト稱シテ、石垣ノ名人ト云シモノナリ、石垣ヲ築クニハ、幕ヲ張テ一圓ニ外人ニ見セズト云、今ハ町人ノワザトナリ、武士ハ皆其術ヲ不知、清正ノ築ケルハ大坂尾州肥後ノ熊本ナリ、清正ノ石垣ハ石ノ中ニトタンヲ入レテ、石ヲツナグト云ヘリ、彼ノ家ノ遺法今ニ有ルベシ、尋求ムベシ、畢竟ノ處ハ石垣ヲヒトツ起セバ皆崩ルヽモノナリ、石垣ナシノ土居ニ竹ヲ植エタルニシクハナシト云フ、

〔海國兵談十〕城制附居館　石垣に三等あり、野面打缺切合也、野面とは、生レ儘の石にて築クを云、打缺トハ、石ヲ打チカキテ角ナリノ石ニテ築クヲ云フ、〇打缺以下二十三字原無、以二片假字本一補、切合とは空間なき樣に切合セたるを云、野面打缺を粗トシ、切合を精トス、各其場所に隨て、精粗の石垣を用べし、尤大切の所ハ切合にして、其上に石を築ケ事ありト云とも、皆工人の傳ト成て、武士に其事を知たる者無シ、石垣ハ築城第一の工なれば、志ある將士傳授あるべき事也、加藤清正ハ石垣の名人と世に云傳たり思べし、亦石垣のかうばいに三等あり、下繩（サゲナワ）、緩（タルミ）、桿出（ハネダシ）なり、下繩ハ急直にして如此なり、緩ハ如此にして急直ならず、桿出ハ如此石垣の上際に椽の如ク石をはね出シたるを云也、此石垣ハ乘難キもの也ト云リ、朝鮮國の城々に此石垣多シト聞り、

〔明良洪範續篇五〕又石垣ヲ築ニアナフ築ト云仕方アリ、江州ニアナフト云所アリ、其所ニテ古ヘ

ヨリ石ノ五輪ヲ切出シ、其外都テ石切ノ上手多ク有所也、夫故信長公天守ヲ建ラレシ時、同國ノ事故、アナフヨリ石工ヲ多ク呼寄、仰付ラレシヨリ、諸國ニテモ此ヲ用ヒシニ、次第ニ石垣ノ事上手ニ成テ、後ニハ五輪ヲ止テ、石地築ノミヲ業トシケル以來ハ、諸國ヱテモ通名ニナリ、石垣築者ヲアナフト云習ハシケル、

〔豐薩軍記 八〕丹生島合戰事

寄手ノ陣ヨリモ精兵ナル者ヲ擇テ、城ニ向ハセ遠矢ヲ射サセタリケル、此矢海上三町餘ヲ過テ外郭ノ石壁ニ中リ、〇下略

〔關八州古戰錄 三〕上杉景虎武州忍城攻ノ事

凡此城〇忍城、中略、カラ堀ヲ構ヘ、石垣高ク築タレバ、〇下略

〔黑田家譜 五〕井上九郎夫衞門、黑田三左衞門、最笠久右衞門是を見て、城戸脇の石垣際に添ひ、三人膝を折しき鎗を構て待懸ければ、〇下略

〔御日記〕慶長十四年十一月十六日、尾州清須ヲ名古屋ヱ可被引トテ、自駿府普請奉行牧野助右衞門來テ、彼地ヲ地割廣狹繩張スル、來春可有石垣普請ト也、此地ハ去ル天正十三乙酉、織田信雄彼國主タリシ時普請セシガ、砂土ニシテ土居堀崩ケレバ被打置、殊井水出兼ルノ條上下ノ者不好之、今度ハ石垣タルベキユヱ惡クトモ不苦ト也、ソノ上去ル八月、大水清須ヘ夥シク入ケレバ、自然ノ時水攻ニ可輒トテ來年名古屋ヱ可被移ト也、

〔明良洪範 八〕江戸御城ノ石垣ヲ築ク時、櫻田日比谷邊ヲ加藤清正ト淺野長晟ニ命ゼラル、加藤家ニテハ森本儀大夫率行ス、然ルニ此邊一圓沼ナレバ、石垣ノ土臺ヲ堅ムルニ、森本指圖シテ人夫大勢ヲ出シテ、武藏野ノ萱ヲ夥敷刈取ラセ、夫ヲ沼ニ入レ、十歲ヨリ十三四歲迄ノ子供ヲ集メ、其上ニテ遊バスニ、興有ル事ニ思ヒ踊リ狂フ、斯テ日ヲ送ル内ニ、淺野家方ニテハ石垣大方出來シ

ケル、諸人森本ノ指圖ノ埒明ヌヲ皆笑ヒ居ケル、森本ハ諸人ノ笑フニ少シモ搆ズ、能堅マリシヲ見テ、石垣築立ニ掛リシ故、淺野家方ヨリハ餘程後レテ出來シケル、然ルニ或日大雨降ケル、此時淺野家方ニテ築立タル石垣、土臺能堅マラザレバ所々崩レ、再ビ築直シケル、加藤家方ニテ築立シ石垣ハ、土臺能堅マリシ故少シモ崩レズ、是ヲ見テ諸人森本ノ指圖ヲ感ジケル、淺野長晟是ヲ聞テ、森本ヲ招キ其仕方ヲ問フ、森本答テ沼ナド堅ムルニハ、急ニ堅メタラバ全タカラズ、之ニ依テ萱ヲ踏込、童子等ニ踊リ狂ハセ、自然ト堅メシ也ト云、後世ニ至テモ沼田ナド埋ルニハ、此森本ノ工夫ヲ用ルト也、此森本ハ加藤家ニテ中老也、且武勇ノ聞エ有ル良士也、

〔倭訓栞前編十八〕とゐ　城の土居は垣也

〔武家名目抄居所二十八〕土居　按、城郭をキといふは、所詮この土居を築きめぐらし、もしくは柵をぬりて、内外を限り堅固なるをさしていへる名なり、土居を又土手ともいひ、築地ともいふ、芝をふせたるを芝手といふなり、

〔武用辨略二城郭〕土居　城圍ノ土壇ナリ、居臺ナリ、壇ハ土ヲ四方ニ封ジテ高キヲ云、或書ニ曰、長ク連ヲ土手ト云、

〔鈐錄十六城制〕城地　一謙信流土居ハ何レモ扇ノ矩ヲ用ユ、丸キヲ三ニワリタルカウバイナリ、〇圖略是地ノ天性ノクヅレナリナリ、タヾシ沙土ネバ土ニ因テカワリメモアルベシ、土居ニ武者走トテ、屛ウラノ方ニ段ヲ付クル、ガンギ重ネ坂ノ二ヲ用ユ、ガンギトハ、ハコダンノ如クニス、カサネ坂ハ〈＼　如此女坂ノ如ニス、急ナル處ニ用ユベシ、犬走ハ堀向ノ地形ト平ナリ、人一人通ルホドユスルナリ、北條流ニ土ヲタヽキ付テ土居ニスルヲ、タヽキ土居ト云、高三間ニ鋪八間、二間ニ六間ノ土居鋪ナリ、芝ヲカサネテ土居ニスルヲ芝土居ト云、高三尺ニ幅一間ニスルト云ヘリ、土ヲ築ク土積ハ高三間鋪八間、上ニテ二間半ニスル時ハ、堀口十間ノ土ニテ少シアマルナリ、山

鹿ハ深サ五間ノ堀ト云、但シ異土ハ土不入、野土ハ多ク入ナリ、山鹿流高三間、敷八間ト云ハ、外法一間、上ノヒラミ三間、内法四間ナリ、是ニテ外ヨリノリニクキナリ、芝土居ハ外法ハ一間ニ二尺、内法ハ一間ニ八尺ナリ、又土居ノ高下ト云事アリ、本丸ノ土居三間ニ鋪八間ナラバ、馬出ノ土居ハ二間ニ鋪六間ナルベシ、又雁木坂ハ升形ノ内門ナドノ脇、又ハ馬出ナドノ内ニハライ地ナキユヘ用之、外ノ處ニハ引安キ坂ナルユヘアシヽ、合坂トハ二條ノ坂ノ下ニテ出合タルナリ、大ニ忌ム事ナリ、重ナル坂ヲ上トス、皆敵ニ城ヲノラレタル時フセグ便ヲ以テ云フナリ、又坂ノ下口ニ土俵ヲ置テフミダンニスル事是又不宜ナリ、又山城ニ屏下ノ竹木ヲ切拂ト切拂ハザルトニ、各損得アル事ヲ云ヘリ、

〔海國兵談十〕城制附居館　土居ハ堀の土を上て築クべし、且土居の高サハ根張の半分ト知べし、たとへば根張十間ならば、高サ五間ト知べし、　土居江は香附子、麥門冬、荒芝、小笹の類を植べき也、土止の爲也、根方にハ枳を植ルもよし、　土居に鉢卷ト云て、上の方に許石垣を築事あり、土居の大小に隨フ事なれども、大體六七尺内外に築クべし、

〔宗長手記〕掛川泰能亭に逗留、この比普請最中、外城のめぐり六七百間、堀をほり土居をつきあげ、〇下略

〔總見記二〕織田孫十郎逐電事同歸參事
新五郎無念ニ思ヒ、孫平次カヤウニスルモ、我等ノ忠節ヲ、安房守殿御忘レアル故也トイキドヲリ隱謀ヲ企テ、同年〇天文二十三年六月、守山ノ城中塀柵破損シケルヲ、掛直サスルト披露シテ、人數ヲ催シ普請半ユ、土居ノ崩レタル所ヨリ人アマタ引入レ、安房守殿ニ御腹メサセ、岩崎ノ丹羽源六ト引組城ヲ堅固ニ相抱ヘヌ、

〔奥羽永慶軍記七〕高倉合戰田村勢敗軍ノ事

屏

彼高倉ノ城主ハ、二本松ノ一門ニテ、淸和源氏ノ末葉畠山近江守トイフモノナリシガ、元來武略ニ名ヲ得シ兵ニテ、居城ハ纔ノ要害ナレドモ、堀深ク土居高ク、ヤライ鹿垣迄丈夫ニ拵タレバ、容易ニ破ラレズ、弓鐵砲ハ降雨ノ如ク打出ス、田村勢モ攻アグンデ、ソヾロニ時ヲ移シケリ、

〔大友興廢記十八〕久留目合戰の事附道雪逝去

去程に龍造寺の勢先の恥辱を淸めんため、二度目には荒手を入替五段にそなへ、長土手を前にあて障を取、

〔武用辨略二城郭〕屏　屏ハ屛ノ俗字、音平、釣屛鍊屛有、唐韻ニ曰、罘罳ハ屛ナリ、爾雅ノ註ニ、屛ハ小墻ノ門中ニ當ナリ、又門屛ヲ蕭墻ト云、又垣墉共云ナリ、釋名ニ墻ハ障ナリ、內外ヲ屛障スルノ意、又塀ニ作ハ懸シトナリ、

〔築城記〕屏の高さ五尺二寸バカリ、サマノ長さ三尺二寸バカリ、サマノ口ノ廣さぬりたて、七寸バカリ、サマノカドヲ能おろして、矢ノ出よき樣に可拵也、○中略

一大手ノ口ニサシ出候て、半町ばかりに內に塀四五間計付、そとにカヾリを燒也、是をタヽラ塀と云也、又出はりのへいとも云也、此うちにカヾリ燒者居也、

一城の戸を內二間バカリ塀付る事アリ、是ヲ橋ノ塀と云也、又ハ不入事歟、○中略

一ヒラ城ノ塀ハ高さ六尺二寸、サマノたけ三尺五寸ばかりたるべし、

一折塀ハ二間すぐに付て一間可折之、折目にサマ一切て、兩方にサマ二ツ有ベシ、

一塀の力竹二とほりに內に可在之

〔甲陽軍鑑十五品第四十二〕城取の事

一山城屛一二三段の事平城にも此心持あり

〔手鑑七〕屛風折之事　是ハ直グニ長キ所ノ塀ヲバ、土居ニハカマヒナク、塀計リ所々ヲ三折四折

程ヅヽ折ヲツケオクギ也、如此スル時ハ、塀風ヲ請テノ強ミトナリ、第一横矢ヲ用ルニ能キ也、スグノ所ハ横矢少キモノ故、其爲メニナスコト也、尤其折ヤウハ一間計リヅヽニ折リテ、片面ヘ矢窓一ツ宛キル也、左ノ片面ノ窓ヲアゲテキル咋ハ、右ノ片面ノ窓ヲサゲテキルヲ心得トス、尤堀向ヒ山ナラバカウバイ下タヘノ矢掛リヲ、兼テタメシオク事ハ、元ヨリノギ也、又城ニヨリテ土居モ折ヲツクルコト有リ、然ドモ是ハ一折二折迄ノギニテ、多ク折ルコトニ非ズ、先ヅ塀計リ也、石垣ナドハ土居ヨリ多ク折ル事モアル也、

塀之事　是ハツヨク丈夫ナルヲ本意トス、大事ノ所ヘハ柱ノ底深クホリ入、石ヲ塀下ヘ五尺計リモ込入レテ、地貫ヲ通スナリ、是等ノギ迄ニテ丈夫其外ノ敎ナシ、其時ノ工夫ニ任スベシト云ヘリ、〇中略

二重塀之事　是ハ塀ノ柱ヲ中カニシテ、コマヒヲ兩面ヨリ丈夫ニカキツケテ、兩面ヨリ土ヲツケ塗ル也、中カヘハ栗石ヲツムル也、瓦ノカケ抔モヨキト云ヘリ、小石砂等ヲツムルハソンナリ、

〔太平記三〕笠置軍事附陶山小見山夜討事

搦手ニ對スル東ノ出塀ノ口ヲバ、大和河内ノ勢五百騎ニテ固タリ、

〔太平記三〕赤坂城軍事

寄手〇中略城ヲ取卷テゾ責タリケル、〇中略寄手彌氣ニ乘テ、四方ノ屛ニ手ヲ懸、同時ニ上リ越ントシケル處ヲ、本ヨリ屛ヲ二重ニ塗テ、外ノ屛ヲバ切テ落ス樣ニ拵タリケレバ、城ノ中ヨリ四方ノ屛ノ釣繩ヲ一度ニ切テ落シタリケル間、屛ニ取付タル寄手、千餘人壓ニ被打タル樣ニテ、〇下略

〔太平記十七〕山門攻事附日吉神託事

寄手〇細川仁木已ニ堀ノ前マデカヅキ寄セ、埋草ヲ以テ堀ヲウメ、燒草ヲ積デ櫓ヲ落サントシケル時、三百餘箇所ノ櫓土サマ出屛ノ內ヨリ、雨ノ降ル如ク射出シケル矢、更ニ浮矢一ツモ無カリケ

レバ、楯ノハヅレ旗下ニ射臥セラレテ生死ノ境ヲ不知者三千人ニ餘レリ、

〔萬松院殿穴太記〕二月（〇天文十九年）十六日乙亥に又御普請始ありて、ほどなうつくり出せり、誠に百萬騎の勢にて攻候共、一夫いかつて關城に向ひなば容易落難し、（〇中略）尾さきをば三重に堀切て、二重に壁を付て、其間に石を入たり、是は鐵炮の用心也、

〔太閤記〕〔一〕秀吉公初て普請奉行之事

或時淸洲之城郭、塀百間計り崩れしかば、大名小名等に急ぎ掛直し可申旨被仰付しか共、事行はれず、廿日計出來ぬやらで御用心も惡ければ、秀吉千悔し、此節は高壘深塹すべき時也、東は今川義元、武田信玄、北は朝倉義景、齋藤山城守（〇龍興）西は佐々木承禎、淺井備前守（〇長政）等調略を專とし、武勇を專にして、すきまを伺ひ尾張國を望み思ふ事、恰如戰國七雄、寔に棟梁之士を聘招し、介冑之士を用ゐる折ふし、如此延々に掛る事招禍に似たり、危事かなとつぶやきけるを、何とかきゝたりけん、信長公きこしめし、猿めは何を云ぞ、何事ぞと問ひ給へ共、さすが可申上儀にあらざれば、猶豫し給へる處に是非に申候へとて、かひなを取てねぢかゞめ給ふ、有のまゝに申せば、宿老共を譏するに似たり、又申さねば君之仰を背くに似たり、吁口は禍の門なりと世の諺に傳へし事、今おもひあたりたり、唯有のまゝに不申は惡かりなんと思ひ、御城之塀などを、今世間不穩折節如此延々に掛申事にては有まじくや、深堀高壘全身敵國を并せ、平呑天下せんと思召大將の、かかる事や有と、御普請奉行を叱りけると申上ければ、左能ぞ申たりける、武勇之志有者は、此こそ有度物なれ、汝奉行し急ぎ拵可申と被仰付、かくて宿老衆へ參て申けるは、御城之塀、下奉行之油斷にて遲々に及ぶ條、某奉行仕り、早速に出來候やうにと、御諚にておはしましけるぞ、其旨下奉行共に堅く被申付可然候はん由申ければ、唯御邊を賴入條能に計ひ候へと各被申けり、さらば割普請に沙汰し申さんとて、下奉行共と相謀り百間を十組に令割符、面々に充てしかば、翌日出

來し、腕木ごとに松明をも掛置、掃除以下きらよく見えし折節、信長公御鷹野より歸らせ給ふて、御覽じもあへず、御感有て御褒美不淺、其晚に被召出御扶持方加增有けるこそ、終を初に立る徵兆なれと、後にぞ思ひ知られたる、

〔矢島十二頭記上〕一同〇天正十五年三月中旬矢島殿より、瀧澤殿を攻、三の塀まで攻入候處、〇下略

〔續武家閑談九〕上杉景勝河内路より押廻し、〇中略大坂黑門筋鴨野口に押詰る、〇中略城より道を付、入替入替鐵炮打かけ、或は城より二重塀を仕、上下に弓鐵炮を配りて防ぎ守る也、

〔長澤聞書〕塀は二重べい、內に四寸五寸の角を橫に乳通りに重ね、へいのやねより、鐵炮打申樣に、板にて五尺やねにし、忍びがへし大竹にて三尺にも致候、

〔遊藝園隨筆抄〕三枝左兵衛當時監察の一人の話に、御城江戸城を云なりを御塀の扣杭いづれも、九尺又は一間の間に打込有之、夫は事あらむ時、いづれの材木をも用ゐ候て、損所を修理すべきがため也、或る御普請の時、御勘定奉行より右の杭を減じ、二間之內に一本宛にすべしと申遣せしが、前のことを棟梁幕府に仕る大工方の棟梁を云なり共の申出たるに付、減じは止に相成候由、

〔螢の燒藻の記下〕寬政三年五月、御目付になりて〇森山事盛其年のことなりけり、曲淵景露朝臣出羽守、初勝次郎、于時御目付、御作事奉行になりて、西丸吹上御門の升形の塀を修造するに、其頃は定信〇松平越中守朝臣の計ひにて、御城郭といへ共、故なき塀園なんどは廢し捨られ、又は御模樣替とて、昔より板塀なりしをも、此度は損益を考へて、練塀に作りかへて、長き所も直に短くして無害は改め作られて、專ら費用を省かるゝことなりしに、彼吹上御門の升形の塀、俗に高石垣とて、外櫻田御門よりは高くそびえて見ゆる、肝要の塀なり、練塀にすべき由沙汰あるにより、定信朝臣に逢てかゝる事承り候ひぬ、彼所は御郭外より見付第一の所と云、城郭の塀は、元來矢狹間、筒狹間を切候こと、勿論に候得共、御治世の御在城、左迄には不及ゆへか、御外郭の塀、何處にも狹間の事は見當り候はね共、既に筋違淺草の兩御門の升形

には、于今隠し狹間を切て候なり、御内郭とても、たとひ當時御内郭に、狹間切たる所はなく候得共、何故御座城にはさまのなきやらん、實は狹間あるべきなれども、異樣にも見ゆるゆへに、ぬりかくしてもやあるらん、又はいか樣の利害あることやらんと、諸人心あるも心なきも疑ひて罷過候所が御要害にも候はんか、然るを練塀に被仰付候ては、必定狹間は切らざることに決し候はんか、夫を聞傳へ語り傳へ候はゞ、忽國々迄聞え可申候、こゝに於ては御要害の爲、如何候べからんと申たりしに、補佐のされば、よ、織部正（松平、于時御作事奉行、）なんどにも、其事糺したりしに、狹間は切に不及由、非常のこと候はんには、塀の上より弓鐵砲などをも打なし候よし申なり、足下の了簡をよく認て見せられよと有により、思荒增認て重て封事奉りたり、○中略翁が利害宜しかりけるにや、其後彼所の升がた久しく持こたふべき爲なれば、練塀にしてかくし狹間能明けおくべき旨、被仰渡たる由にて、出羽守景露（曲淵、于時作事奉行、）が、度々狹間の寸法を翁に問侍りしが、終に翁が申ししごとく、かくし狹間をうらに切て于今其有樣なり、

職	位階・學位	氏名
編修總裁	從二位男爵	細川潤次郎
編修長	正七位文學博士	佐藤誠實
編修副長	文學博士	松本愛重
編修		廣池千九郎
編修兼校合員		加藤才次郎
編修		山本信哉
編修		村尾節三
編修	正七位	佐伯有義
編修		三浦千畝
校合員		坂倉廣胖
校合員		馬瀬長松
校合員		坂本廣太郎
校合員		田中敏治

編修顧問　正四位文學博士　黒川眞頼

編修顧問　從四位　本居豊穎

編修顧問　從五位文學博士　木村正辭

編修顧問兼校勘　從六位文學博士　井上頼圀

明治三十九年十一月一日印刷
明治三十九年十一月五日發行

神宮司廳

昭和九年八月一日印刷
昭和九年八月五日發行

（普及版古事類苑　全六十冊）

發行者　後藤亮一

發行者　川俣馨一

印刷者　東京市芝區金杉新濱町十二番地　和田助一

發行所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社內
古事類苑刊行會
振替東京三一七〇〇番

發賣所　東京市小石川區竹早町三十二番地
內外書籍株式會社
振替口座東京八九六〇番
電話小石川(85)一〇五四番
三二六九番

單式印刷株式會社印刷

（白石製本所　製本）